平成29年度　教育・研究業績書

奈良学園大学

平成29年度　教育・研究業績書　目次

【人間教育学部】

教授

■ 伊﨑　一夫・・・・・1～31
■ 金山　憲正・・・・・32～48
■ 桑原　祐子・・・・・49～62
■ 小竹　光夫・・・・・63～73
■ 善野　八千子・・・・74～113
■ 西辻　正副※
■ 根岸　章・・・・・・114～121
■ 松田　智子・・・・・122～163
■ 山本　美紀・・・・・164～208

特任教授

■ 渡邉　規矩郎※

准教授

■ 岡野　聡子・・・・・209～244
■ 岡村　季光・・・・・245～265
■ 熊田　岐子・・・・・266～285
■ 竹田　治美・・・・・286～294
■ 土谷　長子※
■ 松井　典夫・・・・・295～336
■ 森　一弘・・・・・・337～346

特任准教授

■ 増井　眞樹・・・・・347～359

講師

■ 阿尾　あすか・・・・360～372
■ 高木　悠哉※
■ 山田　均・・・・・・373～379

特任准講師

■ 瀧明　知惠子・・・・380～408

特任講師

■ 山田　明広・・・・・409～434

助教

■ 太田　雄久・・・・・435～462
■ オチャンテ 村井 ロサ メルセデス
・・・・・463～472
■ 西江　なお子・・・・473～486

助手

■ 大淵 裕美・・・・・487～508

【保健医療学部】

教授

■ 安藤　邑惠※
■ 上本野　唱子※
■ 川野　雅資・・・・・509～543
■ 新谷　奈苗※
■ 中馬　成子・・・・・544～555
■ 辻下　守弘・・・・・556～573
■ 服部　律子・・・・・574～589
■ 東中須　惠子※
■ 守本　とも子・・・・590～623
■ 若林　たけ子※
■ 吉村　雅世・・・・・624～640

特別客員教授

■ 梶間　敦子・・・・・641～643
■ 播金　ヤスミ・・・・644～645

准教授

■ 芝田　ゆかり・・・・646～649
■ 嶋田　理博・・・・・650～658
■ 田中　和奈・・・・・659～682
■ 松浦　純平・・・・・683～723
■ 美甘　祥子・・・・・724～725

講師

■ 大山　末美※
■ 梶村　郁子※
■ 川口　ちづる※
■ 北島　洋子・・・・・726～742
■ 立川　茂樹※

助教

■ 井上　葉子・・・・・743～753
■ 岡　居久代※
■ 丸上　輝剛※

助手

■ 金城　夏樹※
■ 瀬山　由美子※
■ 高橋　寿奈・・・・・754～756
■ 田中　里奈※
■ 田場　真理・・・・・757～758
■ 前田　吉樹・・・・・759～767

（※ 退職の為記載なし）

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　伊﨑　一夫

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
教育学、教科教育学	国語科教育、教育実践学、言語活動、絵本の読み聞かせ、言葉とコミュニケーション

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 (1)相互評価活動による支持的・受容的風土を有する国語教室づくり	昭和 62 年度 ～現在に至る	学習評価において、相互評価活動を学習の中に効果的に組み込むことの必要性を提案している。平成 20 年版学習指導要領の書くこと領域に位置づけられた「いいところ見つけ」の価値については、平成元年版学習指導要領改訂時より主張しており、伝え合い活動、「いいところ見つけ」によって、学習者の表現吟味力の育成、コミュニケーションの活性化による支持的･受容的な人間関係の構築などを自らの学級において実践し、確認してきた。その具体的手立てとしては、付箋紙による評価コメントの交換や、相互評価の観点となる学び方や認識力の活用できる既習事項として蓄積する「くらしの言葉・学びの言葉」等がある。一連の研究成果を活用し、博論「これからのあるべき国語教室に関する実践的研究」をまとめるなど、研究を継続している。 （神戸大学附属住吉小学校・三田市立公立小学校・環太平洋大学）
(2)PISA 型読解力を育む読解指導	平成 10 年度 ～現在に至る	文学教材、説明文教材において「情報の取り出し－解釈－熟考・評価－論述」の PISA 型読解力のプロセスを満たす読解指導の研究を継続的に行ってきた。文学教材においては、気持ちの読み取りに終わらない目的意識を明確にし、テキストの価値を吟味・評価する読み方の指導を中心にし、説明文では、発信を意識した立場から効果的な文章構成や表現技法を確かに学ばせる読解指導を展開している。研究成果については、著作・論文等において公開している。 （三田市立公立小学校・環太平洋大学）
(3)形成的な評価を活用した授業計画の開発	平成 21 年度 ～現在に至る	シラバス作成時に授業の形成的評価を計画に位置付け、それを基に授業の改善を行う。また、それぞれの授業終了時に自由記述形式のアンケートを実施し、その記述内容を整理したものを次回の授業でフィードバックし、自己評価並びに相互評価に活用することを行った。授業改善の有効な方策であると共に、学生とのコミュニケーションツールとしての役割も果たした。環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科・学級経営学科の実践である。

(4)自分の思いや考えを適切なフォーマットで出力させ、言語表現力を育てる系統的指導	平成 21 年度～現在に至る	自分の思いや考えを可視化するためには、一定の分量を伴った文章表現の場が必要となる。国語科に限らず、平成 20 年版学習指導要領の要となる「言語活動の充実」を体感･体得することは、教員養成教育における不可欠の学習である。「教育方法・技術論」「国語科教育法」等の授業では、A4・1 枚(1600 文字程度)の授業ふり返りレポートの作成を必須課題とした。その際、レポート全体の構成の工夫として、適切な小見出しによるまとめ方を強調し、記述内容の整合性・論理性を高める表現指導を行った。環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科・学級経営学科の実践である。
2　作成した教科書、教材		
(1)大学用教科書の編集執筆 移行期からはじめる新しい国語科の授業づくり （総頁数 133P, 責任編集　伊﨑一夫・阿部秀高） （再掲）	平成 21 年 4 月 10 日 日本標準	新学習指導要領実施に伴い，「言語活動の充実」の意味と意義を中心に、格上げされた言語活動例の具体化とその方法について詳細に解説した。自ら行った授業実践例等についても豊富に掲載し，確かな言語力を育成するための授業づくりのポイントと、求められる指導方法の工夫改善について具体的に解説した。 平成 22 年度「国語科教育法」の授業において教科書、平成 22 年度「教育方法・技術論Ａ(初等)」「教育方法・技術論Ｂ(中等)」の授業において参考書として使用。
(2)大学用教科書の編集執筆 子どもと言葉・絵本の世界 （総頁数 65P, 単著） （再掲）	平成 21 年 9 月 1 日 友野印刷	0 歳から就学前、さらに小学校低学年までの子どもの言葉の発達過程の概要(「ことば獲得以前の子ども」「ことばを覚え始める子ども」「ことばの意味がわかり始める子ども」「ことばで対話を深める子ども」「ことばでものを考えはじめる子ども」「考えたことをことばにしていく子ども」)を示し、園生活を中心に小学校入学時までの子どもの言葉に関わるさまざまな事例を用いながら、子どもの生活や遊び、子ども同士の関わりが言葉の発達にどのように影響するのか解説した。また、幼稚園教育要領の領域「言葉」の「ねらい」に示された子どもの言葉を育てるために、言葉が育つ環境と要因、保育者の言葉かけや援助のあり方、絵本・紙芝居などの児童文化財の活用方法などについて具体的な方法を提示した。特に絵本の読み聞かせについて詳述している。 平成 21～22 年度「子どもと言葉」の授業において教科書として使用。
(3)大学用教科書の編集執筆 小学校国語科 学習指導案で授業が変わる! －学習指導案を読む・書く・使いこなす－ （総頁数 135P, 単著） （再掲）	平成 23 年 4 月 10 日 日本標準	国語科の授業づくりの具体化を学習指導案の計画･立案によって行うことを基本方針に、「学習指導案を読み解く」「学習指導案を書ききる」「学習指導案を使いこなす」「教材解釈と授業づくり」「学習指導要領で求められる国語力とそのポイント」を観点として、「言語活動の充実」を担う国語科の役割とその具体化について詳細に解説した。 平成 23～24 年度「国語科教育法」の授業において教科書、平成 23～24 年度「教育方法・技術論Ａ(初等)」「言葉の理解」の授業において参考書として使用。
(4)大学用教科書の編集執筆 次世代の教職入門 （総頁数 279P, 共著） （再掲）	平成 23 年 5 月 20 日 大学教育出版	学級担任の教師は、児童・生徒相互の人間関係を育てる場としての学級の役割を重要なものとして認識し、個や集団に働きかけ、児童・生徒相互の好ましい人間関係を育てるために学級経営を充実させる。その要として学級経営案は作成される。小学校を中心に、幼稚園・保育所、中学校における具体的な学級経営案の事例をもとに、一人の教師として学級経営デザインができるよう解説した。

		（担当:「第 6 章学級経営」pp. 133-155。中田正浩編著） 平成 23 年度「教職入門」の授業において教科書として使用。
(5)大学用教科書の編集執筆 国語実践に学ぶ「基礎・基本習得の技能」 （総頁数 40P,単著） （再掲）	平成 24 年 8 月 21 日 株式会社 ERP 教育 PRO 特集号	平成 20 年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、「言葉の力」の獲得を保障する学習活動について実践的方向を示し、その具体化の手立てと有効性について論じた。学習活動の活性化のためには、単元構想や実際の指導における仕組みや仕掛けの工夫が求められると共に、学習指導要領の指導事項として示されている「言葉の力」の理解と吟味が不可欠であることを強調した。学習指導要領において示された記録、報告、解説、推薦等の言語活動例を取り上げ、それらの意味と意義について、実践事例を挙げながら詳述している。 平成 24 年度「言葉の理解」の授業において教科書として使用。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
(1)環太平洋大学における学生による授業評価の結果	平成 21 年度	学生による授業評価を、担当する講義（「教育方法・技術論Ａ（初等）」「教育方法・技術論Ｂ（中等）」「子どもの表現と発達 A（言葉と表現）」「子どもと言葉」「総合演習」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。 特に「授業の適切な方法による展開」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均 3.8/4.0)を得ており、さらに「子どもと言葉」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均 3.9/4.0)が高かった。
(2)環太平洋大学における学生による授業評価の結果	平成 22 年度	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「教育方法・技術論Ｂ（中等）」「子どもの表現と発達 A（言葉と表現）」「子どもと言葉」「総合演習」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。 特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均 3.8/4.0)を得ており、さらに「子どもと言葉」「国語科教育法」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均 3.9/4.0)が高かった。
(3)環太平洋大学における学生による授業評価の結果	平成 23 年度	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「言葉の理解」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「白板や教育機材の使用」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均 3.7/4.0)を得ている。「国語科教育法」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均 3.9/4.0)が高かった。
(4)環太平洋大学における学生による授業評価の結果	平成 24 年度	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「言葉の理解」「日本語表現」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「白板や教育機材の使用」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価

		(平均 3.8/4.0)を得ており、さらに「国語科教育法」「言葉の理解」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均 3.9/4.0)が高かった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）講演講師、研究会講師、指導助言等		
1) 第 71 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ	平成 20 年 8 月 5 日	5 年生文学教材「大造じいさんとがん」を例に，PISA 型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。併せて，確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
2) 新学習指導要領にもとづく授業づくり ―国語科の授業をどう変えるのか 兵庫県川西市教育委員会主催 平成 20 年度 国語科教育研修会 講演講師	平成 20 年 8 月 22 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA 型読解力」等について説明を行った上で，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が，新国語科に対応した国語教室実現への改善のポイントとなることを指摘し，その具体策の要点について解説した。尚，実践事例として，小学校１年生を対象とした通年の作文指導と 6 年生における教科書教材を活用した作品紹介活動を取り上げた。
3) 新学習指導要領と国語科授業の創造 大阪府箕面市教育委員会主催 平成 20 年度授業カアップ連続講座② （小：国語） 講演講師	平成 20 年 8 月 25 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA 型読解力」等を踏まえ，小学校 1 年生における年間を通した作文指導と 5 年生における教科書教材を活用したＰＯＰ作りと作品の推薦活動を実践事例として取り上げながら，新国語科に対応する国語教室実現に向け，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が工夫改善のポイントとなることを指摘し，具体化の要点について解説した。
4) 新学習指導要領と「言語活動の充実」 鳥取県中部地区小学校教育研究会主催 平成 21 年度教育研修会　講演講師	平成 21 年 6 月 10 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと、その際に求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校６年生における読解指導と、卒業論文を書かせる総合学習とを取りあげた。
5) 第 72 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ	平成 21 年 8 月 4 日	2008 年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA 型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校高学年における「作品紹介活動」を示し、学習指導の工夫改善のポイントと、その際必要不可欠となる指導技術について詳細に解説した。

6）新学習指導要領にもとづく授業づくり ―言語活動の充実が目ざすものー 兵庫県川西市教育委員会主催 平成 21 年度 国語科教育研修会 講演講師	平成 21 年 8 月 26 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
7）新学習指導要領と国語科授業の創造 旭川市教育委員会主催	平成 21 年 11 月 20 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA 型読解力」等を踏まえ，新国語科に対応する国語教室実現に向けての具体的方策を示しながら、具体化の要点と求められる授業技術・方法について詳細に解説した。
8）新学習指導要領と「言語活動の充実」 愛知県北名古屋市小学校教育研究会主催 平成 21 年度教育研修会　講演講師	平成 22 年 2 月 12 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
9）新学習指導要領にもとづく授業づくり －言語活動の充実－	平成 22 年 8 月 5 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「話すこと・聞くこと」領域の年間を通した「スピーチ活動」を取り上げた。
10）第 73 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ	平成 22 年 8 月 10 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計 画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「話すこと・聞くこと」領域の年間を通した「スピーチ活動」を取り上げた。
11）言語活動の充実と年間指導計画への期待 宮崎県小学校教育研究会国語部会主催 第 38 回宮崎県小学校教育研究会 夏期研修会 講演講師	平成 22 年 8 月 23 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、説明文教材「たんぽぽ」「ビーバーの大工事」（２年）、「くらしの中の和と洋」（４年）、「森林のおくりもの」（５年）等を取り上げた。

12)「言語活動の充実」と国語科 年間指導計画への期待	平成22年8月 26日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「読むこと」領域の年間を通した「本の紹介活動」を取り上げた。
13)「言語活動の充実」と 学校・地域・家庭の教育力	平成 22 年 10 月 20 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，各学年の公開授業を取り上げ、それらの授業の成立は、学校・地域・家庭の教育力に支えられていることを強調した。
14) 確かな学力と人間関係をつくりだす力 三田市教育委員会指定研究事業 平成 22 年度三田市立富士小学校 公開研究発表会　講演講師	平成 22 年 11 月 26 日	豊かな人間関係を培うためには確かな言語運用能力が不可欠であることを踏まえ、当該校の３年にわたる研究の有する価値とその成果について言及した。特に共生教育においては、自己をみとめ、他者とコミュニケーションすることが極めて重要であることを強調した。
15) 読売新聞社主催・読売教育賞 第 60 回記念シンポジウム分科会 「国語教育」最優秀賞受賞者・ 実践成果報告	平成23年6月 4日	第 57 回読売教育賞国語教育部門最優秀賞実践「情報活用力としての『書く力』をたかめるー読み書きシートの徹底活用ー」について、実践の概要と特質について報告し、参会者との意見交流を行った。
16) 絵本が語ってくれること ー国語教育とのつながりー	平成23年7月 12日	学生たちが親しんできた絵本を素材に、「同じ絵本でも国によっていろいろな違いがあること」「接続詞などの使い方に着目することによる解釈の深まり」「論理的に思考することの大切さ」「国語教育の役割」等について解説を行った。
17) PISA 型読解力を育む 新しい国語の授業づくり	平成23年7月 21日	「思考力・判断力・表現力」と「論理的に考えること」、PISA 型読解力と「論理的に考えること」、「論理的に考えること」と「つなぐ思考」等の関連について、新学習指導要領の趣旨をふまえ、詳細に解説した。「論理的に考えること」が培われる国語教室の具体像については、小・中学校の実践事例を取り上げた。
18) 第 74 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ	平成23年8月 9日	平成 20 年版学習指導要領国語科の重要実践課題である「思考力・判断力・表現力の育成」に向け、論理的な思考を促し、強化する必要性を示した。具体例として、絵本紹介(小学校１年)における理由を組み立てさせる接続詞の活用事例、「どうぶつの赤ちゃん」(光村１年)における読解のキーワードを用いた表現活動の成果を取り上げた。「言語活動の充実」には、活動だけではなく適切な評価が必要であることを強調した。
19)「言語活動の充実」と「国語科」 平成 23 年度環太平洋大学 教員免許状更新講習　講師	平成23年8月 25日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践化への具体的提案として、平成 23 年本小学校国語科教科書か

		ら、領域ごとに代表的な単元を取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICT による授業改善の可能性にも言及した。
20）思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり 福山市教育委員会指定研究事業 平成 23 年度福山市立東中学校 公開教育研究会　講演講師	平成 23 年 11 月 4 日	論理的思考力を育成するためには、「『WHY』『HOW』を自問すること」「『質問力』を鍛えること」「関係性を理解して解釈すること」「因果関係・脈絡・つながりに着目させること」等が重要であることを解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、数学、理科、社会、英語、技術家庭、音楽等）を多数取り上げた。
21）習得・活用・探求型の授業を創造する 三田市教育委員会指定研究事業 平成 23 年度三田市立本庄小学校 公開研究発表会　講演講師	平成 23 年 12 月 2 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、「習得・活用・探求」活動の意義とその具体化の視点について詳細に解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、算数、社会、音楽、総合学習等）を多数取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICT による授業改善の可能性にも言及した。
22）国語科指導力向上に向けて 奈良市教育センター主催 「国語科教育研修講座」 講演講師	平成 24 年 7 月 27 日	平成 20 年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」は、学習意欲をもって基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育成することに主眼があることを、具体的な実践事例を示しながら解説した。言葉の力を培う国語教室を実現するためには、(1)年間指導計画の構築、(2)相互評価活動の活性化、(3)「言葉の力」のメタ認知の場の設定が重要となることを強調した。
23）第 75 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「『自分の考え』」を表現できる授業づくり」 講師	平成 24 年 8 月 7 日	「たんぽぽ」(東書 2 年)、「たんぽぽのちえ」(光村 2 年)を用いて、形式段落に区切る演習を行い、段落の区切りの理由を明らかにすることが段落相互の関係の理解を深めることを解説した。題名の重要性など、既習の学びを活かして、意図的に学習を組み立てていくことなど、自分の考えを表現するには、基礎的・基本的な学びのステップが必要であり、意図的・目的的な既習の学びの連続性が、明確な「自分の考え」を生み出すことを強調した。
24）「言語活動の充実」と各学校への期待 平成 23 年度環太平洋大学 教員免許状更新講習 講師	平成 24 年 8 月 23 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。各学校が抱える指導時数の不足感をふまえ、実践化への具体的提案として、平成 23 年本小学校国語科教科書から、領域ごとに代表的な単元を取り上げ、特に「①年間指導計画」の重要性を強調した。また、デジタル教科書の活用方法等、ICT による授業改善の可能性にも言及した。
25）第 1 回「ことばの力」育成シンポジウム in 千葉 言葉の力を活用する言語活動と国語科授業づくり －小、中学校との連携を視野に－ 公益財団法人 中央教育研究所、 特定非営利活動法人 日本語検定委員会 主催 報告者並びに パネルディスカッション・パネリスト	平成 24 年 8 月 25 日	報告では、「言葉の力」を活用する国語科授業づくりにおいては、「既習の学びを可視化し活用する言語活動が求められること」「既習の学びの積み重ねと積み上げには年間指導計画が重要であること」を、「たんぽぽ」(東書 2 年)「たんぽぽのちえ」(光村 2 年)の実践事例をもとに提言した。シンポジウムにおいては、「言葉の力」の習得と活用を小学校と中学校とが連携して行う必要があることを強調した。

26）国語授業の改革と学力向上 第４回ＥＲＰフォーラム・イン大阪 対談・聞き手	平成 24 年 12 月 22 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂に伴う、教科書を使いこなし言葉の力を向上させる国語授業の改革に関して行われた対談(梶田叡一・兵庫教育大学名誉教授、小森茂・青山学院大学教授)の聞き手として、(1)「確かな学力」の基幹としての「言葉の力」の育成の中核的な役割を果たす国語科のありよう、(2)＜確かな＞「言葉の力」と＜豊かな＞「言葉の力」を実現する授業革の視座、(3)「読むこと」「書くこと」の連動させる学習指導の工夫改善のポイントを明らかにした。
27）学力向上や子どもたちの言語力の向上のために 「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 奈良市教育委員会主催	平成25年2月22日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、公開授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、教科書に閉じこもりがちな学習を見直し、実の場を活用した学習が有効となること、日常生活に資する言語力を培うためには、いかに広く多様な情報源に向かわせるか、言語環境の整備、多様な言語情報への目配りが大切であることを強調した。
28）第 76 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「既習の学び・記述力を生かす国語科授業づくり（小学校）」講師	平成25年8月6日	「自然のかくし絵」(東書３年)を用いて、段落相互の関係をふまえた筆者の「書き方の工夫」を探る演習を行い、説明文における記述方法の特徴をとらえる学習の必要性について解説した。「書き方の工夫」については、「具体例」「問いと答え」「写真や絵」「説明の順序」「つなぎ言葉」などの学習者に馴染みやすい用語で整理することによって、説明文の読解学習だけではなく、既習の学びを活かして「説明文を書く」活動にも転用できること、さらに「自分の考え」を表現する多様な学習へとつながっていくことを強調した。
29）学力向上や子どもたちの言語力の向上のために 「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 奈良市教育委員会主催	平成26年2月15日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、平成 25 年度に行った研究授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、「習得・活用」の道筋の明確化、目標と評価の一体化に十分配慮することが必要であることを強調した。
30）未来をつむぐ学校茶道－伝統文化への入口－ 第 45 回学校茶道指導者研修会・第 35 回学校茶道担当者講習会 合同研修会 基調講演　講演講師	平成26年7月18日	明治維新後、茶道がいち早く学校教育に取り入れられた歴史や学校茶道の普及・拡大について教育制度の変遷に沿った解説を行った。学校教育の学習内容の一例を取り上げながら、日本の総合文化の代表である茶道の果たす役割や意義について強調した。
31）奈良市教育センター1 年経験者研修講座　講師	平成26年7月22日	奈良市教職２年目を迎えた幼小中高教員 74 名に対して、求められる教職の資質やより良い学級経営のあり方等に関する講義・解説を行った。特に、学級経営の視点として、児童・生徒からの評価、保護者からの評価を積極的に取り入れることの価値や、学級経営と普段の授業実践とが密接に関連していることの重要性を強調した。

32）「言葉の力」を高める言語活動の活性化 兵庫県国語教育連盟 第 57 回夏季国語教育研修大会　講演講師	平成 26 年 8 月 6 日	「言語活動の充実」において「付けたい言葉の力」を明確にすることの重要性について解説した。言語活動の質を高めるためには、前単元までの学びを生かすこと、言語活動における「５つの言語」(相手意識、目的意識、条件・状況意識、表現・理解の方法意識、評価意識)を明確にすること、「付けたい言葉の力」に照らし合わせた目標と評価を設定することなどの重要性を強調した。
33）第 77 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「自分の考えをもって伝え合う授業づくりー『発問研究』と『教材研究』とを中心にー」講師	平成 26 年 8 月 9 日	「スイミー」(光村 1 年)、「名前を見てちょうだい」(東書 2 年)、「一つの花」(光村・東書 4 年)を用いて、作品の構造的理解を支えるワークシート例を示し、作品の特質と主題を捉える演習を行い、物語教材における指導方法の工夫改善の方略について解説した。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、意欲的に考え判断し表現できる「発問研究」と「教材研究」、その実現のための「場面と時間」の確保が必要であることを強調した。
34）「教材研究で授業が変わる」 鳥取県教育センター　平成 26 年度教職員研修【小学校国語】「教材研究で授業が変わる」講師	平成 26 年 8 月 21 日	児童自らが考えを表現できる教材研究のあり方や授業づくりについて、「名前を見てちょうだい」(東書 1 年)、「ごんぎつね」(東書・光村 4 年)等を用いた実践的な演習を行い、「言語活動の充実」につながる基本的な考え方や教材解釈の仕方について具体的に解説した。教材研究や教材解釈においては作品を概念的にとらえないこと、授業づくりにおいては「目あてとふり返り」の重要性やノート指導の工夫が不可欠であることなどを強調した。
35）「ことばの力」を育む授業―設計と評価― 三田市教育委員会指定研究事業 第 19 回　三田市立ゆりのき台小学校　研究発表会　公開研究発表会　講演講師	平成 26 年 11 月 17 日	授業設計におけるポイントを「基本要素」と「発展要素」に整理し、研究発表会当日の公開授業をもとに解説した。「基本要素」として、「「付けたいことばの力」＝言語力の明確化」「学習活動の統一化」「評価規準の具体化」の 3 点を、「発展要素」として、「『具体・抽象』の昇降化」「『習得・活用』のサイクル化」「『個の学び・集団の学び』の往復化」の 3 点を示した。
36）平成 26 年度奈良市教育フォーラム 分科会「小中の学びの系統性をふまえた授業モデル【国語】」講師	平成 27 年 1 月 25 日	奈良市の国語の学力・学習状況調査の分析結果による課題のうち、「相手意識、目的意識の明確にして書くこと」「資料から適切な情報を得て、伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書くこと」の課題解決に焦点を当て、学習指導の工夫改善を図るための方策とその意義について解説した。特に「事実に対する自分の意見を理由や根拠を明確にして考えて書く力」を高める授業の重要性を強調した。
36）第 78 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「『確かな学力』を育成する国語授業づくり（小）ー『発問研究』と『教材研究』とを中心にー」講師	平成 27 年 8 月 1 日	「ごんぎつね」「海のいのち」を用いて、「本時の学習指導案」等の点検・見直しや、指導事項を習得・活用するための「発問研究」と「教材研究」に関する演習を行った。 学校教育法で規定された①学習意欲をもって②基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、この知識・技能を活用して③思考力・判断力・表現力等から構成される「確かな学力」の育成を目ざす日々の国語授業づくりの重要性を強調した。

37）国語科における「アクティブ・ラーニング」の可能性 第 20 回　三田市立ゆりのき台小学校　研究発表会　公開研究発表会　講演講師	平成 27 年 11 月 17 日	新しい時代に必要となる資質・能力の育成のために「何を学ぶか」という知識の質・量の改善だけではなく、「どのように学ぶか」という、学びの質・深まりを重視することが求められており、そこでは「主体的・協働的な言語活動」と「思考の活性化」が不可欠であることを解説した。これからの時代に求められる言語力が「自分の考えを表出する力」であることから、授業内外の多様な言語活動や豊かな読書体験を通して、「自分の考え」を表現できる主体的な学習が重要であることを研究発表会当日の公開授業を例に強調した。
38）学校茶道の可能性―「ことばの力」の活性化― 第 47 回学校茶道指導者研修会・第 37 回学校茶道担当者講習会 合同研修会　基調講演　講演講師	平成 28 年 7 月 27 日	新しい時代に必要となる資質・能力の育成のために「何を学ぶか」という知識の質・量の改善だけではなく、「どのように学ぶか」という、学びの質・深まりを重視することが求められており、そこでは「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現が不可欠であることをふまえ、茶道体験の持つ意義と価値について解説した。特に「ことば」を知らないということはその国の文化を知らないということであり、日本の総合文化の代表である茶道で用いられている『ことば』を子供たちに体験を通して伝達することの重要性を強調した。
39）第 79 回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「『確かな学力』を育成する国語授業づくり（小）－「『アクティブ・ラーニング』の発想を生かす」講師	平成 28 年 7 月 31 日	「アクティブ・ラーニング」（以下ＡＬ）を特定の型として歪曲化せずに、その本質や発想を踏まえた学習方法の工夫を行い授業実践に位置づけることを目的に、「海のいのち」や「ごんぎつね」をもとに、教材研究の重要性を具体的に示した。 ＡＬの発想を生かす授業の質は「言語活動の充実」と連動しており、思考力の深化・拡充を保障するためには、「より深くわかること」「よりうまくできること」「多様な情報を論理的に評価・分析すること」等が不可欠であることを演習によつて明らかにした。ＡＬの本質や発想を踏まえた学習方法の工夫は、「言語活動の充実」や「深い」教材研究なしには実現できないことを強調した。
40）国語科における「確かな学力」の育成と「ことばの力」－アクティブラーニングの発想を生かす－ 第 21 回　三田市立ゆりのき台小学校　研究発表会　公開研究発表会　講演講師	平成 28 年 11 月 17 日	中央教育審議会「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(素案)」をふまえ、学習指導要領改訂の方向性に合致する学校教育のあり方について、「主体的・対話的で深い学び」をキーワードに、「学びの質」と「くらしの質」を高める教育課程編成に関する提言を行った。研究発表会当日の公開授業をもとに、単元構想として「活用場面の意識」「表現効果の意識」「振り返りの強化」「横断的な学び」「個別支援の発想「家庭教育の充実」「読書生活の充実」等を充分に意識することによって「学びとくらし」が融合されることを強調した。
（2）茶道教室講師、学校茶道クラブ顧問等 1）神戸新聞文化センター・茶道教室講師	平成 16 年 4 月～　現在に至る	茶道裏千家より平成 8 年 4 月茶名（宗一）拝受、平成 12 年 2 月準教授、平成 26 年 10 月教授に昇進。平成 16 年 4 月からは、神戸新聞文化センター・茶道教室講師として、男性専科クラス（日曜日、月二回）、初級クラス・中級クラス・上級クラス・幼児クラス（日曜日、月四回）において、指導を行っており、現在に至る。

2）兵庫県三田市立けやき台小学校 茶道クラブ顧問	平成19年4月 ～平成21年3月	特別活動の一領域であるクラブ活動指導の一環となる茶道クラブを設立し、担当した。４年生から６年生の希望者30名による茶道クラブにおいて、顧問として指導に当たった。盆略点前を中心に、亭主ならびに客ぶりの基本的な所作を指導した。クラブ活動の概要については、学校便り等において積極的に紹介した。
5　その他 1）第57回讀賣教育賞「国語教育部門」 最優秀賞	平成20年7月 11日	情報活用力の育成を目的とする年間を通した実践である「情報活用力としての『書く力』を高める―『ブックレポート』を書く活動を中核に―」を評価され，受賞。 主な受賞理由は，「現代社会で求められる情報活用力を着実に身につける国語の年間カリキュラムのモデルとなる優れた実践であること」及び「生徒相互でいい所を見つけ合い，情報伝達のワザを共有する学習プロセスは普遍性を持つこと」等である。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年月日	概　　要
1　資格，免許 (1) 小学校教諭１級免許状 (2) 中学校教諭１級免許状　　理科 (3) 高等学校教諭２級免許状　理科 (4) 小学校教諭専修免許状	 昭和52年3月 昭和52年3月 昭和52年3月 平成20年5月	 昭51小普第1030号　（兵庫県教育委員会） 昭51中1普第1498号　（兵庫県教育委員会） 昭51高2普第1604号　（兵庫県教育委員会） 平成20小専第49号　（兵庫県教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 Ⅰ　財団法人福武教育文化振興財団 平成22年度教育研究助成(個人の部) 絵本を活用した読解指導の工夫に関する研究	 平成 22 年 7 月	 小学校における読解リテラシーとなるPISA型読解力の向上に関する具体化の視座を絵本に求め、その有効性を検証する研究に対して、補助金の助成を得た。（100,000円）
Ⅱ　科学教育費補助金及び学術研究助成基金 (1)　平成22年度科学教育費補助金 基盤研究(C) 地域の教育・文化施設における 絵本の「体感型読書」プログラムの 開発的研究 研究代表者	平成22年4月	絵本の読み聞かせや読書教育に関する国語教育分野における先行研究等の検討をふまえ、「体感型読書」プログラム作成を前提とした協力施設の実態調査と、「体感型読書」プログラムの開発研究に対して、研究代表者として補助金の助成を得た。（研究代表者;伊﨑一夫.研究分担者;山本美紀）（直接経費1,800,000円）
(2)　平成22年度科学教育費補助金 基盤研究(C) 不登校回復期の生徒への 共同学習モデルの開発 研究分担者	平成22年4月	学習意欲と社会的適応とを兼ね備えた不登校回復期の支援モデル開発について、学力の実態と特性に関する分析研究に対して、研究分担者として補助金の助成を得た。(研究代表者; 杉田郁代.研究分担者;伊﨑一夫）（直接経費 500,000円）
(3)　平成23年度科学教育費補助金 基盤研究(B) 学校・文化施設による＜持続可能な 地域文化力＞を育む「連携型プログラム」の開発研究 研究分担者	平成23年4月	学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、両者の協力体制を「連携型プログラム」として結晶させ、〈持続可能な地域文化力〉育成のための施設の有効活用と人材育成の方法論を示す開発研究に対して、研究分担者として補助金の助成を得た。（研究代表者; 山本美紀.研究分担者;伊﨑一夫）(直接経費 2,000,000円）

Ⅲ　委員 (1)「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」 指導法改善研究部会(授業開発国語部会) 指導助言者	平成 24 年度～平成 26 年度	「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」の実施に当たり、生活改善や授業開発、学びの連続のあり方についての視点から、奈良市の子どもの学力向上のための課題解決に関する指導法改善研究部会(授業開発国語部会)における指導助言を継続して行った。平成 20 年度版学習指導要領における「言語活動の充実」をふまえ、小学校・中学校の授業改善の視座を明確にし、提案授業のプラン作成と提案授業実施後の検討会における総括講演では、公開授業の価値付けと今後の課題を明示した。
(2)平成 26 年度奈良市教職員研修運営協議会 委員（座長）	平成 26 年度	平成 26 年度奈良市教職員研修講座の運営や受講者の意識分析データをもとに、奈良市教職員研修の内容や運営に関する検討協議を行った。研修講座体系の明確化、資質能力向上の仕組み強化、校内研修の活性化等に関する課題を整理し、平成 27 年度奈良市教職員研修の改善方向を明確にした。
4　その他 （1）平成 20 年度兵庫県「ゆずりは賞」受賞 （兵庫県教育委員会）	平成 20 年 11 月 14 日	「ゆずりは賞」は，学校教育や社会教育等の分野で多くの人々の模範となるような立派な行為や有益な研究・発明をした個人や団体を表彰しその功績をたたえるものであるが，第 57 回讀賣教育賞「国語教育部門」最優秀賞を受賞した功績に対し表彰された。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） (1)移行期からはじめる新しい国語科の授業づくり（編集責任者）	共著	平成21年4月	日本標準	平成20年版学習指導要領実施に伴い、格上げされた言語活動例の具体化を中心に、確かな国語力を育成するための授業づくりのポイントについて解説したものである。 B5版 総頁数133P 編者:伊﨑一夫・阿部秀高 共著者:伊﨑一夫・阿部秀高、他2名 担当:第1章「新学習指導要領が求める国語力とそのポイント」1～5・7・10・11～15(トータル24P)、第2章2節「新学習指導要領にもとづく国語科授業の具体化に向けて」(トータル12P)、2章3節「授業づくり」4～6・8・9・11・13・17・18・21～24(トータル26P)。単著 内容:自ら行った授業実践例に基づき、確かな言語力を育成するための授業づくりのポイントと、求められる指導方法の工夫改善について具体的に解説した。また本書では、確かで豊かな言語力を育成するためには、学級内外他者との伝え合い・コミュニケーションや自己評価・他者評価の場の設定が不可欠であることを指摘し、獲得した言語力を十分に発揮する活用方法とその重要性について強調した。
(2)子どもと言葉・絵本の世界	単著	平成21年9月	友野印刷	0歳から就学前、さらに小学校低学年までの子どもの言葉の発達過程の概要(「ことば獲得以前の子ども」「ことばを覚え始める子ども」「ことばの意味がわかり始める子ども」「ことばで対話を深める子ども」「ことばでものを考えはじめる子ども」「考えたことをことばにしていく子ども」)を示し、園生活を中心に小学校入学時までの子どもの言葉に関わるさまざまな事例を用いながら、子どもの生活や遊び、子ども同士の関わりが言葉の発達にどのように影響するのか解説した。また、幼稚園教育要領の領域「言葉」の「ねらい」に示された子どもの言葉を育てるために、言葉が育つ環境と要因、保育者の言葉かけや援助のあり方、絵本・紙芝居などの児童文化財の活用方法などについて具体的な方法を提示した。特に絵本の読み聞かせについて詳述している。B5版 総頁数65P
(3)新小学校国語科重点指導事項の実践開発(編集協力委員)	共著	平成22年1月	明治図書	平成20年度版学習指導要領において示された学び手の学力と学習状況についての現状を丁寧にとらえ、様々な学習課題への対応と、確かな言語力育成の視座を提案している。 B5版横 総頁数120P 編者:小森茂 共著者:阿部秀高・岡本恵太・野村美由紀・横山啓子・伊﨑一夫他10名 担当:編集協力委員として、「書くこと」pp.32-33,pp.37-38「読むこと」pp.72-73,「話すこと・聞くこと」pp.88-89。単著 内容:編集協力委員として、平成20年度版学習指導要領を基に「重点指導事項例」に該当する「重点指導事項」を選定整理して、特に典型的な「重点指導事項」の果たすべき役割について、

著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				そのねらいと指導の工夫改善について、具体例を示しながら解説した。
(4)「ことば」で伸ばす子どもの学力	共著	平成22年8月	ぎょうせい	平成20年度版学習指導要領において求められる「言語活動」の特質とその具体化への視座を国語・社会・算数・理科・生活の実践事例を用いて解説している。 B5版 総頁数 201P 編者:小森茂・角屋重樹 共著者:青木信生・新井宏和・伊﨑一夫・石井雅幸・植松仁・大桑雅記・大野恵美・小川幸子・片山守道・角屋重樹・木下博義・小藤強・小森茂・新谷貴晴・菅原一郎・鈴木智裕・忠谷義人・寺本貴啓・中山貴司・成田雅樹・二瓶弘行・原浩一郎・福屋亜希子・森勇介・山田浩美・吉田宗樹・柳地一枝・渡邉弘樹 担当:「お話の目の付けどころを明らかにして、お話紹介カードを書こう」pp.97-101,「『だから』と考えてみよう・『なのに』と考えてみよう」pp.102-106。単著 内容:思考力・判断力・表現力等を育成するためには、国語科をはじめ各教科等の「言語活動の充実」が不可欠であり、国語科の場合には、言葉によって考えたり判断したり、想像したり読み取ったりすることは、具体的には各領域に位置付けられた「言語活動例」で「表現」されることによって可視化される。言語活動の指導と評価のポイントをふまえ、4年生における「読むこと」領域の指導として「ごんぎつね」「一つの花」(光村・東書)を取り上げ、指導方法の工夫改善について具体的に解説した。
(5)教育フォーラム46 〈言葉の力〉を育てる	共著	平成22年8月	金子書房	平成20年度版学習指導要領の中核理念を成す“言葉の力”の育成をふまえ、その確かで豊かな実現に向け、重要な諸理論を多角的に考察し、さまざまな教科における言語力育成に関する実践的提案を行っている。 A5版 総頁数 159P 編者:梶田叡一 共著者:梶田叡一・加藤明・伊﨑一夫・鎌田首治朗・増井眞樹・勝見健史・汐海治美・谷本寛文・中島繁雄・金澤緑・米田豊・浅田匡・松田智子 担当:「論理的記述力を高めるーお気に入りの本を選び「おすすめの文章」を書こうー」pp.25-35 単著 内容:PISA 型読解力を強化するためには論理的記述力が不可欠であり、具体的な根拠に基づき自分の考えを主張する論理的記述力育成の可能性を「読むこと」領域との連携に求め、「読んだ本について、好きなところを紹介する」言語活動を例に、その工夫改善の有効性を論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(6) 豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造Ⅲ 小学校低学年編	共著	平成22年8月	東洋館出版	国語単元学習と密接に関わる新学習指導要領のキーワード「言語活動」について、その理論と実践のポイントについて論じ、単元学習の精神に貫かれた国語教育の実践例を提示している。 A5版 総頁数 239P 編者:日本国語教育学会監修 共著者:倉澤栄吉・大熊徹・坂本喜代子・西村充司・青山由紀・権堂順子・多田和幸・藤田慶三・庭田瑞穂・高島俊幸・稲田八穂・伊﨑一夫・松山清美・大川孝子・中村和弘・蜂須賀美菜・草野剛・大越和孝・寺井正憲・小山恵美子・高野保夫・三浦和尚・桑原隆 担当:「研究－読むことに関して」pp.170-177 単著 内容:具体的な言語活動を通して三領域における言葉の力を効果的に高めてきた単元学習の新学習指導要領における言語力育成の可能性について、具体的な実践例をもとに論じた。考察対象とした実践事例は、小学校低学年における「読むこと」領域に関する言語活動例「読んだ本について，好きなところを紹介すること」を具体化されたものである。単元学習の強みが充分に発揮された実践例を通して、PISA型「読解力」の育成を具現化し、「読書力」の育成を可能にする要件を明らかにした。
(7) 観点別学習状況の評価規準と判定基準［小学校国語］	共著	平成23年4月	図書文化	教科の目標から具体的な評価規準の設定や評価技法の選定に至るまでの「分析・具体化の手順」と期末の評価に至る「統合・要約化の手順」を明示し、明確な根拠に基づく評価について論じたものである。 B5版 総頁数 223P 監修:北尾倫彦 全体編集:山森光陽、鈴木秀幸 国語編者:田中洋一 共著者:大場弥恵、大月ちとせ、池上優子、川上ひより、福山聡恵、米田直紀、細川大輔、香月正登、田村たまえ、宇賀村康子、大江実代子、新井雅晶、松野美幸、伊﨑一夫、他44名 担当:2年:7「読むこと（説明文）：順序に気をつけて読む」pp.94-95 単著、5年:10「伝統・国語（古典）：伝統的な言語文化」pp.168-169 単著 2年:7においては「読んで考えたことを書こう『どうぶつ園のじゅうい』（光村図書）」について、「動物園の獣医の一日の仕事の流れを確かめながら仕事内容やそのわけを読み取り、心が引き付けられたところを自分の経験と結び付け、考えたことを書く」ことをねらいとし、「獣医の仕事とそのわけについて、一日の仕事の流れからまとめる学習場面」と、「一番引き付けられたところを基に感想を書く学習場面」とを取り上げ、具体的な評価規準と判定基準を明示した。いずれの指導場面においても、「自分なりの考えを理由を明確にして書くこと」「交流活動を通して学級内他者の良いところを見つけ伝え合うこと」の重要性を強調した。 5年:10においては、「声に出して楽しもう『論

著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				語』（光村図書）」について、「３つの論語と解説文を手掛かりに、昔の人のものの見方や感じ方を知り、現代人のものの見方や感じ方と比べる」ことをねらいとし、「３つの論語から最も好きなものを選び、その理由を書く学習場面」と、「交流を終えて、新たな気付きを発表する学習場面」とを取り上げ、具体的な評価規準と判定基準を明示した。いずれの指導場面においても、「自分なりの考えを理由を明確にして説明すること」「交流活動を通して深まった解釈や変化した考えを書き加えること」の重要性を強調した。
(8)次世代の教職入門	共著	平成23年5月	大学教育出版	教員の資質向上と研修が求められる社会的な背景を教育基本法等の改正や学習指導要領の改訂と関連付けながら論じたものである。 A5版 総頁数297P 編者:中田正浩 共著者:鎌田首治朗・中田正浩・松田智子　・大野光二・山本正・大石隆夫・中田律子・伊崎一夫・住本克彦・杉田郁代・筒井愛知 担当:「第6章学級経営」pp.133-155 単著 内容:学級担任の教師は、児童・生徒相互の人間関係を育てる場としての学級の役割を重要なものとして認識し、個や集団に働きかけ、児童・生徒相互の好ましい人間関係を育てるために学級経営を充実させる。その要として学級経営案は作成される。小学校を中心に、幼稚園・保育所、中学校における具体的な学級経営案の事例をもとに、一人の教師として学級経営デザインができるよう解説した。
(9) 国語実践に学ぶ「基礎・基本習得の技能」	単著	平成24年8月	株式会社ERP 教育PRO 特集号	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、「言葉の力」の獲得を保障する学習活動について実践的方向を示し、その具体化の手立てと有効性について論じた。学習活動の活性化のためには、単元構想や実際の指導における仕組みや仕掛けの工夫が求められると共に、学習指導要領の指導事項として示されている「言葉の力」の理解と吟味が不可欠であることを強調した。学習指導要領において示された記録、報告、解説、推薦等の言語活動例を取り上げ、それらの意味と意義について、学校図書館の活用を含む実践事例を挙げながら詳述している。 B5版　総頁数40P
(10) 国語授業へのアプローチ･知っておきたい国語教育の〈ことば〉	単著	平成24年10月	株式会社ERP ERPブックレット	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、指導事項に取り上げられている基礎的･基本的な用語を取り上げ、文芸理論、分析批評等の観点をふまえ、その意味や意義を解説した。具体的には、「登場人物」「主題」「視点」「ファンタージ教材」「イメージ化」「音読・朗読・暗唱」「形式段落・意味段落」「事実・意見」「説明・解説」「俳句・短歌」「漢字」「書写(トメ・ハネ・ハライ)」などの用語について、学校図書館の活用を含む具体的な実践事例を示しながら詳述している。物語文教材に関するものを多く取り上げ、詳細な

著書､学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概　　要
				読解に偏りがちな授業の工夫改善への視座を明確にした。 A5 版　総頁数 86P
(11) 教育フォーラム 51 言語活動―『読み』 『書く』の力を中心に	共著	平成 25 年 2 月	金子書房	平成 20 年度版学習指導要領が目指す確かな学力を身につけるためには、＜言葉の力＞が必要不可欠である事をふまえ、言語活動を通して確かな「読み」と「書く」の力を育む理論と実践のあり方を提案している。 A5 版　総頁数 135P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・金澤孝夫・渡部久美子・伊﨑一夫・阿部秀高・加藤明・湯峯裕・井上尚美・鎌田首治朗・高木章・蔵あすか・杉田郁代・オチャンテ-村井-ロサ-メルセデス 担当：「文学教材の論理的読解のために－「主題把握」とテキストの多様な情報を関連付けることを－」pp,48-58 単著 内容：PISA 型読解力は、単なる言語活動ではなく、目的に応じてより積極的で自覚的な態度･姿勢に基づく言語活動を一貫して求めてきた。PISA 型読解力は、情報のインプットからアウトプットまでの一連の論理的思考を要求するため、PISA 型読解力においては「自分の考え」を論述することが不可欠となる。このことは文学教材の読解においても重要である。妥当性のある「自分の考え」を持つことに、テキストの文脈的理解と主題把握は大きく関与する。「『ごんぎつね』のしかけを見つける」実践事例の分析を通して、主題把握と、テキストに埋め込まれている多様な情報を関連付けることによって論理的思考力が強化され、「自分の考え」が創出されることを論証した。
(12) 教育フォーラム 53 文学が育てる言葉の力 文学教材を用いた指導をどうするか	共著	平成 26 年 2 月	金子書房	今までよりさらに高次の「言葉の力」を育成するため、文学作品に惹きつけられる出会いと的確な指導のあり方を提案している。 A5 版　総頁数 148P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・中洌正堯・鎌田首治朗・伊﨑一夫・山下敦子・汐海治美・永田里美・湯峯裕・勝見健史・加藤明・瀧明知惠子・蔵あすか 担当：「テキスト全体の構造的理解を促す文学教材の指導」pp,37-47　単著 内容： 児童生徒に文学の持つ魅力に気づかせ、作品を通して子どもの言葉の世界を深め、より豊かな人間性を高めるためには、物語の構造的理解に関する学習が不可欠であることを、「三年とうげ」（光村 3 年下・平成 23 年本）を例に論証した。さらに文学作品が持つ魅力を深化・拡充するためには、学校図書館を含む読書活動を活性化させ、多様な読書情報に触れることの重要性にも言及した。

著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(13) 教育フォーラム58 主体的能動的な学習アクティブ･ラーニングの精神を生かす	共著	平成27年8月	金子書房	次期学習指導要領のキーワードとして注目を集めているアクティブ・ラーニング（ＡＬ）について、小中学校の教育において、ＡＬをどのようにとらえ、実践していけばよいか、そのあり方を提案している。 A5版　総頁数172P 編者：梶田叡一 共著者：溝上慎一・加藤　明・伊﨑一夫・鎌田首治朗・前田洋一・岸　周吾・芝池宗克・米川雅士・武谷嘉之・松井典夫・瀧明知惠子・井上信子・梶田叡一 担当：「国語科授業におけるアクティブ・ラーニングの可能性－総合的な学習単元の構想(小学校国語科)－」pp.26-35 単著 内容：学習指導要領の全面改訂を求める中教審への諮問（「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」平成26年11月20日）に示された「アクティブ・ラーニング」（課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習、以下ＡＬ）の充実をふまえ、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶＡＬは、初等・中等教育で従来から取り組まれていた「総合的な学習の時間」との類似点について論じた。「言葉の力」を活用する一連の総合的な学習は、ＡＬと類似していることに着目し、国語科におけるＡＬの可能性を指摘した。国語科における総合的な学習単元の一例として、総合的な学習単元「いのちの手帳」（小学校３年生）を提示し、その実践的価値を明らかにした。
(14)シリーズ国語授業づくり「発問」編 考える授業､言語活動の授業における効果的な発問(編著者)	共著	平成 27 年 12 月	東洋館出版	教材研究と授業構想において教師がもっとも綿密に計画を練る必要がある「発問」について、言語活動や読むためのねらいに応じた発問の工夫や、教材文のジャンルに応じた発問、また評価につながる発問などを詳細に解説している。国語授業づくりの基礎・基本シリーズの１冊。 A5判 総頁数120P 編集責任者:寺井正憲 編集者：伊﨑一夫 共著者：伊﨑一夫・細見博友・横田経一郎・羽渕みな子・神谷知子・遠藤陽子 担当：Ⅱ章「『発問』の基礎･基本」pp,20-69　共著 内容：文章のジャンルや言語活動に応じた発問、読む活動と表現活動を効果的につなぐための発問、情報や考えを共有する発問、考えや意見を深化させる発問等、「発問」全体を俯瞰し、具体化するための視座とその展開例について、Ｑ＆Ａ様式で詳述した。単元内の工夫にとどまらず、単元間の効果的な関連のさせ方や学校図書館を含む多様な読書活動の活性化に関する提案も多数行っている。
(15) 自学力をはぐくむ言葉の力 『ひとり勉強』に学ぶ	共著	平成28年3月	株式会社ERP ERP TMシリーズ	確かな「言葉の力」と「学び方」の獲得を目ざす「ひとり勉強」の本質と具体的な進め方について解説している。次期学習指導要領の改訂に向け、「どのように学ぶか」を問い直す観点として示された「アクティブ・ラーニング」を

著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				支える有効な学習方法の工夫改善の一例となる「ひとり勉強」について、自学力獲得の価値とその具体化について提案している。 A5 版　総頁数 90P 共著者：伊﨑一夫・山口昭男 担当：第五章「新しい『教育改革』と『ひとり勉強』」pp,77-89　単著 内容：「ひとり勉強」を要とする国語授業の工夫改善の視座として、「アクティブ・ラーニング」の基盤と「言葉の力」、「言葉の力」と自学力の関連性、「学び方」と読書生活との連動性等について論述した。様々な工夫の見られる「ひとり勉強」の実践事例とその解説をふまえ、思考過程重視の学習観を具現化する「ひとり勉強」の価値とその可能性について言及している。
(16) 教育フォーラム 56 アクティブ･ラーニングとは何か	共著	平成 28 年 8 月	金子書房	教師に指示されたままの受身の授業参加ではなく、「子ども達だけで創る授業」を夢想するのでもない、今ここでの教育目標、授業での〈ねがい〉と〈ねらい〉を、教師も子どもも共通の認識として持ちながら、子どもが、主体的能動的にその場での学びに取り組んでいくための様々な工夫や具体的実践的な提案を行っている。 A5 版　総頁数 148P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・鎌田首治朗・伊﨑一夫・吉田明史・角屋重樹・原田智仁・直山木綿子・菅井啓之・押谷由夫・オチャンテ ロサ 村井 メルセデス・瀧明知惠子・井上信子 担当：「主体的能動的な国語の学びのために－『アクティブ・ラーニング』と思考力の強化－」pp. 23-33 単著 内容：『論点整理』（教育課程企画特別部会・論点整理、平成 27 年 8 月）において示された「三つの柱」と「学び全体を改善する視点」をふまえ、新しい教育改革における資質･能力の育成における「思考の活性化」「創造的思考力の成立」の重要性について論じた。「深い学びの過程」「対話的な学びの過程」「主体的な学びの過程」の実現をめざし、ＡＬの発想やその本質をふまえた学習方法の工夫改善として、言語活動で扱う思考要素と思考操作を明確にする具体的プランを構想し、その有効性を立証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） (1) PISA 型「読解力」の具体化―工夫改善における三つのポイント―【査読あり】	単著	平成20年4月	月刊「国語教育研究」 №432 日本国語教育学会 pp. 60-67	新学習指導要領において強調されている PISA 型「読解力」育成の具体例の一つとして，高学年文学教材（「ヒロシマのうた」東書6年）に関する実践事例を示し，その有効性について論じた。テキストを理解・評価しながら読む力を高めるための方策として，「お話読み解きシート」（①テキストの設定　②主な出来事　③展開　④表現上の特色　⑤感想　の5項目からなるワークシート）、「ブックレポート」（テキストの構造と良さに関する主張を感想と共に自由形式で出力するもの）を取り上げた。「お話読み解きシート」「ブックレポート」のいずれについても、学級内他者による相互評価を繰り返し、その価値の自覚化を強化することが重要であることを強調した。
(2) 要約・説明力をどう育てるかー「要するに…，要するに…」を繰り返し，自分のフィルターを強化するー	単著	平成20年4月	教育科学「国語教育」 №691 明治図書 pp. 48-51	実生活の様々な場面における言語活動の充実を強調する中教審答申(平成 20 年 1 月)において示された要約・説明力に焦点を当て，その手だてに関する具体的な提案を行い，実践的に論じた。6 年生の説明的教材，文学的教材に対する学習者の要約事例を具体例として示し，その価値について分析した。妥当性を有し質の高い要約に到達するためには、学級内他者同士の伝え合い活動である双方向コミュニケーションの場が活性化する必要があることを強調した。
(3) 茶の湯における「もてなし」「気遣い」「思いやり」―茶道クラブで学べること―	単著	平成 20 年 11 月	三田市教育委員会指定 第8回三田市立けやき台小学校・公開教育研究発表会研究紀要 pp. 126-133	茶会の席で人をもてなす際の心構えを説くキーワードである「利休七則」「和敬清寂」「一期一会」の意味と意義について、茶道クラブの取り組みを例に論じた。茶道クラブの体験に対する子どもたちのふり返りや保護者からの感想等から、「もてなし」「気遣い」「思いやり」を抽出し、茶会のしつらえにおける茶花や道具立ての役割を例に、茶席には「もてなし」「気遣い」「思いやり」が具体化されていること、茶道クラブの体験は人と人とが生きていく社会の中での生き方や関係について考える良い機会になることなど、茶道が日常生活や伝統文化を見直す第一歩となることを強調した。
(4)　情報活用力としての「書く力」をたかめるー読み解きシート徹底活用ー 【査読あり】	単著	平成 20 年 12 月	第 57 回読売教育賞受賞者論文集 pp. 5-22	国語力の中核となる言語能力である「書く力」に焦点を当て、目的や意図に応じて情報を吟味し、必要な情報を適切に効果的に分かりやすく表出するための学習指導の工夫改善の一例として「読み解きシート」を提案し、その有効性を実践的に論じた。具体的には、6 年生の文学教材（「風切るつばさ」「ヒロシマのうた」「桃花片」「雪渡り」「海のいのち」）と説明文教材（「イースター島にはなぜ森林がないのか」「マンモス絶滅のなぞ」「言葉の意味を追って」「百年前の未来予測」）を取り上げ、「書く力」を高めるための方策として，「お話読み解きシート」（①テキストの設定　②主な出来事　③展開　④表現上の特色　⑤感想　の5項目からなるワークシート)、「ブックレポート」（テキストの構造と良さに関する主張を感想と共に自由形式で出力するもの）を用いた年間を通した実践の具体と、子どもたちの「書く力」の高まりに関する分析を行っている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「お話読み解きシート」と「ブックレポート」の質的深化は「いいところ見つけ」という相互評価活動によって可能であること、「書く力」の高まりは３学期後半に書かれた卒業論文によって確認できたことを論証している。
(5) 「伝統的な言語文化」高学年の授業づくりへの配慮－年間指導計画に位置付き，と活躍する古典という素材―	単著	平成 20 年 12 月	教育科学「国語教育」№701 明治図書 pp. 60-63	平成 20 年度版学習指導要領において新設された事項「伝統的な言語文化」における配慮事項について，「竹取物語」を例に具体的な提案を行い，実践的に論じた。古文の学習によって，学習者はものの見方や感じ方を広げることや，昔の言葉遣いへの興味関心を高めることができることを明らかにした。指導方法の工夫改善の一例として、教科書の解説文だけではなく、児童図書による鑑賞文を効果的に活用する方法を提案し、その有効性を実証した。
(6) 読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究－絵本の読み聞かせを取り入れた読解指導－	単著	平成22年3月	環太平洋大学研究紀要 第３号 環太平洋大学 pp. 43-50	幼稚園の「ことば」領域と小学校入門期の「読むこと」領域において、PISA 型「読解力」の育成を可能とする学習指導の工夫改善のポイントを「絵本の読み聞かせ」に求め、その有効性について論じた。「(1)絵本の読み聞かせを継続し、多くの情報を与える」「(2)お話の「つながり」をキーワードにすえ、お話相互の共通性に注目させる」「(3)感じたおもしろさの理由を表出させる場を設定する（幼稚園段階では発話、小学校低学年ではワークシート）」ことの３点を充足する学習指導の工夫改善によって、 読解リテラシーの向上が保障されることを、実践によって検証・確認した。絵本の読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げることによって、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその発達における質的変化を論証の対象とした。
(7) これからのあるべき国語教室に関する実践的研究 【査読あり・博士論文】	単著	平成23年3月	兵庫教育大学大学院	平成 20 年度版学習指導要領に対応する国語教室のモデルを提示し、その実現を可能にする要件の有効性を具体的実践に基づき検証したものである。第一章においては、目的的に行われている国語教室に内包される実践的価値を吟味し、国語教室のモデルの枠組みとして、学びの成立を客観性、主体性、社会性の三項からなる「三項性」構造を検証し、「平成 20 年度版学習指導要領・国語科に対応する国語教室実現への工夫改善のポイント」を導出した。第二章においては、工夫改善のポイントに関する詳細な考察を、具体的な事例に基づいて行っている。第三章から第五章においては、「工夫改善のポイント」を満足する年間を通した指導事例について、その内容を詳述し、「工夫改善のポイント」の有効性について検証している。第三章では「書くこと」領域（小学校低学年）、第四章では「話すこと・聞くこと」領域（小学校中学年）、第五章では「読むこと」領域（小学校高学年）を取り上げている。終章となる第６章においては、本論文のの総括と結論を提示し、「これからのあるべき国語教室」の展望を示した。 A4 版　総頁数 230p

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(8)読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(2)－「つなぐ思考」の活性化－	単著	平成23年3月	環太平洋大学研究紀要 第４号 環太平洋大学 pp.65-71	幼稚園の「ことば」領域と小学校入門期の「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「つなぐ思考」に求め、その有効性について論じた。「①絵本の読み聞かせと感想交流を継続する　②「つなぐ思考」を促す接続詞を活用する　③自分の感想を「お気に入り」としてまとめる」ことの３点を充足する学習指導の工夫改善によって、「つなぐ思考」〈論理的思考力〉の向上が保障されることを、実践によって検証・確認した。絵本の読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げることによって、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその発達における質的変化を論証の対象とした。
(9) 論理的思考を強化し、「つなぐ思考」を活性化する単元開発－「どうぶつの赤ちゃん」を例に－ 【査読あり】	単著	平成23年4月	月刊「国語教育研究」 №468 日本国語教育学会 pp.10-15	論理的に思考し、論理的に記述するためには、事象と事象とを関連づけ、そこに必然的な結びつきを見い出す思考、情報を「つなぐ思考」が求められることを示し、その有効性について論じた。論理的思考力の強化による言語生活を高める単元開発の一例として、「どうぶつの赤ちゃん」（光村１年）における図鑑作りを取り上げ、「つなぐ思考」を強化することによって、論理的思考は活性化し、自分の考えを主張できる「表現力」へと結びつくことを明らかにした。図鑑作りという制作活動にとどまることなく、作成された図鑑について相互に評価し、吟味し合うことの重要性を強調した。
(10) 言語活動例と指導事項との結びつきを見極める	単著	平成23年9月	「実践国語研究」 308号 明治図書 PP.19-20	言語活動例を通して論理的思考力を育成するためには、言語活動例と指導事項との結びつきを見極め、教材文のキーワードから単元構想の手がかりを掴み出す必要があることを、具体的な実践事例をもとに論じた。考察対象とした実践事例は、「どうぶつの赤ちゃん」（小学校１年・説明文教材）である。説明文における学びを生かし、「説明する文章を書く」という言語活動を豊かに展開するためには、教材文のキーワードである「自分で」「自分では」に着目した論理的な思考と、論理的な記述が必要であることを明らかにした。論理的な記述の妥当性を高めるためには、学級内他者による相互評価活動の活性化が不可欠であることを強調している。
(11) 板書原論	単著	平成23年11月	「新しい教育」Vol.25 日本標準教育研究所 2011年12月 PP.2-5	板書が「授業の展開に沿って、理解を深め、考え方を強化し、思考を整理するために必要な情報を提供する」ことを、多様な指導事例を示しながら、具体的に論じた。考察対象とした実践事例は、「ごんぎつね」（物語教材）、「動いて、考えて、また動く」（説明文教材）、「短歌と俳句」（伝統的な言語文化と国語の特質）、「施設見学新聞作り」（社会科・総合的な学習）である。教材文の構成を視覚的にとらえること、学習者の考えを価値づけること、学習活動やモデルを的確な提示すること等、言語力獲得における効果的な板書機能の特質を明らかにした。また、電子黒板の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(12) 国語科の課題－「習得」と連動した「言語活動」の構想－	単著	平成 23 年 12 月	「新しい教育」Vol.25 日本標準教育研究所 2011 年 12 月 PP.2-5	平成 20 年度版学習指導要領が求める「言語活動の充実」は「各教科等を貫く重要な改善の視点」であり、そのために各教科の中核に位置付く国語科が重要な役割を担っていることをふまえ、「習得」と連動した「言語活動」のありようについて、具体的に論じた。考察対象として、「スピーチ」「宝物紹介」「感想文」「読解学習」等、小・中学校の指導事例を全般的に取り上げた。「言語活動の充実」においては、考察対象とした「スピーチ」「宝物紹介」「感想文」等の生成にとどまることなく、それらを用いた学級内外他者による相互評価活動が不可欠であることを強調している。
(13) 読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(3)－「さぐる思考」の活性化－	単著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第５号 環太平洋大学 pp.51-60	小学校「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「さぐる思考」に求め、その有効性について論じた。「１テーマ（読者に伝えたいこと）」「２テーマを伝えるためのメインアイデアとこのお話ならではの表現の工夫」の２つの項目によって構成されているワークシートを十分に活用することによって、「さぐる思考」が活性化され、合理的な「自分の考え」が創出されることを、実践によって検証・確認した。「自分の考え」の妥当性と、その質の深化・拡充においては、学級内外他者による相互評価活動が不可欠であることを強調している。
(14) 読書体験の深化・拡充を促す絵本の読み聞かせ(1)－『体感型読書』プログラム「ももたろう」の特徴と効果－	単著	平成 24 年 10 月	環太平洋大学研究紀要 第６号 環太平洋大学 pp.91-98	３年目を迎える「地域の教育・文化における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」（学術振興財団 22 年度科学研究補助金対象研究基盤研究Ｃ）の総括に向け、多岐にわたる実践データの整理・分析を行うための基礎的な視座を明らかにした。具体的には、平成 23 年 2 月 22 日に行った三田市立富士小学校における実践データ（3 年生と 5 年生合計 108 名に実施）をもとに、読書体験という観点からの分析を試みた。プログラム実施後のアンケート調査等によって、「音楽･映像等の情報を加味し多様な表現活動を保障すること」と「聞き手同士の関わりを活性化すること」の有効性を確認している。
(15) 読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(4)－「いいところ見つけ交流活動」の活性化－	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要 第７号	小学校「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「自分の考え」の効果的な表出に求め、その表出を支える相互評価活動である「いいところ見つけ交流活動」の重要性と有効性について論じた。妥当性のある「自分の考え」を持つことに、テキストの文脈的理解と主題把握が大きく関与することと共に、テキストの文脈的理解と主題把握の質的深化のためには相互評価活動が不可欠であることを論証した。具体的には、「『ごんぎつね』のしかけを見つける」実践事例を取り上げている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(16) いま「学び方開き」のときー学びの基礎を手ほどきするー	単著	平成25年4月	「小四教育技術」 平成25年4月号 小学館 PP. 75-80	学級開きの4月が一年間の学び方の基礎を教えるときであることを指摘し、その具体的手法として「朝の会のミニスピーチ」「教科書の仕組みを知る学習」「音読カードの項目の作成」「連絡帳による学習のふり返り」等を提案した。全ての教科学習に共通する学び方として、「話し方」「聞き方」「本読みの仕方」「ノートの使い方」「ふり返りの仕方」などがあり、4 月時期に意図的・計画的に指導する必要があることを強調した。
(17) 前学年までの学びを可視化するー「ことばの力」の一覧表を用いてー	単著	平成25年5月	「実践国語研究」 №318 明治図書 pp. 11-12	国語科の授業開きのポイントを「前学年までの既習のことばの学び」の確認に求め、既習の学びを意図的・計画的に活用していくことの重要性を指摘した。具体的には、4 年生 5 月単元の説明文学習を行うまでに、3 年生までに学習した説明文11 教材を再読し、どのような学習が行われたのかをふり返り「ことばの力・一覧表」を作成する学習活動を提案している。「ことばの力・一覧表」の作成が、身に付けた「ことばの力」の能動的・積極的な活用につながることを強調している。
(18) 小学校国語科教育の課題と克服に向けて―「言葉の力」を育む「ノート指導」と「学習で使う言葉」―	単著	平成26年4月	「教育ＰＲＯ」第 44 巻第8号 日本教育綜合研究所 2014 年 4 月 PP. 16-19	国語科の授業開きのポイントを「前学年までの既習のことばの学び」の確認に求め、既習の学びを意図的・計画的に活用していくことの重要性を指摘した。具体的には、4 年生 5 月単元の説明文学習を行うまでに、3 年生までに学習した説明文11 教材を再読し、どのような学習が行われたのかをふり返り「ことばの力・一覧表」を作成する学習活動を提案している。「ことばの力・一覧表」の作成が、身に付けた「ことばの力」の能動的・積極的な活用につながることを強調している。
(19) 「人間教育」に資する「これからのあるべき国語教室」の成立と展開(1) ―「これからのあるべき国語教室」を支える三つの要件― 【査読有】	単著	平成26年4月	「人間教育学会研究紀要創刊号」 2014 年 4 月 pp. 47-65	これからのあるべき国語教室における成立の要件について、その有効性を具体的実践に基づき検証した。国語教室実現への工夫改善のポイントとして、「①教室カリキュラム(年間指導計画)」「②観点表」「③いいところ見つけ交流活動」の３点を導出し、その有効性を具体的な実践事例に基づき検証した。取り上げた実践事例は、「読むこと」領域の物語文の読解指導（小学校高学年）であり、作品の価値を適切にまとめる「ブックレポート」の継続指導を方策とする言語力獲得の経緯とその結果について考察している。
(20) 伝統や文化に関する教育の可能性(2) ー国語教育のアプローチー【査読有】	単著	平成 26 年 12 月	「人間教育学会研究紀要第２号」 2015 年 12 月 pp. 177-１84	「伝統や文化の教育」の現代的意味・意義について、関係法令の規定等をふまえ論述し、教育実践における教科書教材を活用した言語活動の有効性について指摘した。「伝統や文化の教育」は「人間力」と深く関わっていること、「人間力」は豊かな経験や教養を持つ人間としての魅力であること、「人間力」の基盤に日本の伝統や文化体験が位置付くこと、「人間力」は「伝統や文化の教育」が充実することによって高められること等を強調した。さらに、「伝統や文化の教育」は、５つの基本視点（「(1)学校全体で取り組む」「(2)伝統や文化にかかわる従来の教育実践を生かす」「(3)伝統や文化にかかわる学びをつなげ、深める」「(4)実生活とのかかわりを考える」「(5)体

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				験的な学習と言語活動を関連させる」）によって推進されることを提起した。
(21) 「言葉の力」を高める言語活動の活性化	単著	平成27年3月	「国語兵庫」№94 青雲舎 pp. 6-13	平成 26 年 8 月に行った「兵庫県国語教育連盟第 57 回夏季国語教育研修大会」での講演をもとに、言語力育成に資する単元構想の基本的な考え方について論じた。特に、言語活動の活性化には「前単元までの学び」を積極的に組み込む必要があることを、「三年とうげ」(光村3年)、「ごんぎつね」(光村・東書4年)等における授業実践を取り上げ、具体的・実践的に記述した。
(22) 人間教育に資する「これからのあるべき国語教室」の成立と展開(2)－「アクティブ・ラーニング」と思考力の強化－【査読有】	単著	平成 27 年 12 月	「人間教育学会研究紀要第３号」 2016 年 12 月 pp. 17-24	新しい教育改革における教育課程は、従来の教科の学習を基盤として、それを超えて獲得し得る「資質・能力」を目標とし、その目標をより具体的に体系化し、編成される。このとき「生きる力」の根幹に位置付く思考力獲得の道筋を明確にしておくことが必須であり、どのような思考力を獲得させるかだけではなく、どのようなプロセスによって獲得させるのかを同時に見極めていく必要があることを論じた。思考力を獲得するためには、言語活動で扱う思考要素と思考操作を明確にすることに加えて、その思考操作の方法を効果的に使う場を設定することが重要となることを指摘し、東京書籍『新編新しい国語』27 年度版の教材と思考力の要素とを組み合わせた「三田プラン」を試案として示し、その有効性を立証した。
(23) 「アクティブ・ラーニング」の発想を生かす－「深い学び」を支える「言葉の力」－	単著	平成 28 年 10 月	中研紀要「教科書フォーラム№１７」 2016 年 10 月 pp. 101-103	『論点整理』（教育課程企画特別部会・論点整理、平成 27 年 8 月）において示された「三つの柱」と「学び全体を改善する視点」をふまえ、新しい教育改革における資質･能力の育成における「思考の活性化」「創造的思考力の成立」の重要性について論じ、思考力獲得を保障する学習指導のあり方について提案した。「深い学びの過程」「対話的な学びの過程」「主体的な学びの過程」の実現をめざし、「自分の考え」の一層の重視、ＡＬを支える言語力育成の重要性、読書生活の充実等を強調した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「研究報告書」				
(1)絵本を活用した読解指導の工夫に関する研究	単著	平成23年7月	平成 22 年度教育研究助成成果報告書 財団法人福武教育文化振興財団 pp. 63-64	幼稚園の「ことば」領域と小学校低学年「読むこと」領域において、読解リテラシーとなる PISA 型読解力の向上に関する具体化の視座を絵本の読み聞かせに求め、その有効性を実証した。PISA 型読解力を効果的に育成するために、幼稚園では自分の感じたおもしろさを言葉で伝え合うこと、小学校では自分の読んだ本について好きなところを紹介する、つまり「おすすめの文章」を書くことを中核に据えた取り組みを年間を通し継続的に行い、「文章を深く読んで分析的に理解してその上で論理的に表出する能力」が効果的に育成されることを論じた。読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げ、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその読解リテラシーの発達における質的変化を対象とした。
「講演」				
(1) 新学習指導要領にもとづく授業づくり	―	平成20年8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成20年度 国語科教育研修会 平成 20 年 8 月 22 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA 型読解力」等について説明を行った上で，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が，新国語科に対応した国語教室実現への改善のポイントとなることを指摘し，その具体策の要点について解説した。尚，実践事例として，小学校１年生を対象とした通年の作文指導と６年生における教科書教材を活用した作品紹介活動を取り上げた。
(2) 新学習指導要領と国語科授業の創造	―	平成20年8月	大阪府箕面市教育委員会主催 平成 20 年度授業カアップ連続講座② （小：国語） 平成 20 年 8 月 25 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA 型読解力」等を踏まえ，小学校１年生における年間を通した作文指導と５年生における教科書教材を活用したＰＯＰ作りと作品の推薦活動を実践事例として取り上げながら，新国語科に対応する国語教室実現に向け，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が工夫改善のポイントとなることを指摘し，具体化の要点について解説した。
(3)新学習指導要領と「言語活動の充実」	―	平成21年6月	鳥取県中部地区小学校教育研究会主催 平成 21 年度教育研修会 平成 21 年 6 月 10 日	平成 20 年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと、その際に求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校６年生における読解指導と、卒業論文を書かせる総合学習とを取りあげた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4) 新学習指導要領にもとづく授業づくり	―	平成21年8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成21年度 国語科教育研修会 平成21年8月26日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
(5) 新学習指導要領と国語科授業の創造	―	平成21年11月	旭川市教育委員会主催 国語教育研究大会 平成21年11月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，新国語科に対応する国語教室実現に向けての具体的方策を示しながら、具体化の要点と求められる授業技術・方法について詳細に解説した。
(6) 新学習指導要領と「言語活動の充実」	―	平成22年2月	愛知県北名古屋市小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会 平成22年2月12日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
(7) 新学習指導要領にもとづく授業づくり －言語活動の充実－	―	平成22年8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成22年度 国語科教育研修会 平成22年8月5日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「話すこと・聞くこと」領域の年間を通した「スピーチ活動」を取り上げた。
(8) 言語活動の充実と年間指導計画への期待	―	平成22年8月	宮崎県小学校教育研究会国語部会主催 第38回宮崎県小学校教育研究会 夏期研修会 平成22年8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、説明文教材「たんぽぽ」「ビーバーの大工事」（２年）、「くらしの中の和と洋」（４年）、「森林のおくりもの」（５年）等を取り上げた。
(9) 「言語活動の充実」と学校・地域・家庭の教育力	―	平成22年10月	篠山市教育委員会指定研究事業「学力向上実践推進事業」 平成22年度篠山市立味間小学校公開研究発表会 平成22年10月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，各学年の公開授業を取り上げ、それらの授業の成立は、学校・地域・家庭の教育力に支えられていることを強調した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10) 確かな学力と人間関係をつくりだす力	－	平成 22 年 11 月	三田市教育委員会指定研究事業 平成 22 年度三田市立富士小学校公開研究発表会 平成 22 年 11 月 26 日	豊かな人間関係を培うためには確かな言語運用能力が不可欠であることを踏まえ、当該校の３年にわたる研究の有する価値とその成果について言及した。特に共生教育においては、自己をみとめ、他者とコミュニケーションすることが極めて重要であることを強調した。
(11) PISA 型読解力を育む新しい国語の授業づくり	－	平成23年7月	大阪市教育センター主催「学力向上授業研修会」 平成 23 年 7 月 21 日	「思考力・判断力・表現力」と「論理的に考えること」、PISA 型読解力と「論理的に考えること」、「論理的に考えること」と「つなぐ思考」等の関連について、新学習指導要領の趣旨をふまえ、詳細に解説した。「論理的に考えること」が培われる国語教室の具体像については、小・中学校の実践事例を取り上げた。
(12) 思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり	－	平成 23 年 11 月	福山市教育委員会指定研究事業 平成 23 年度福山市立東中学校公開教育研究会 平成 23 年 11 月 4 日	論理的思考力を育成するためには、「『WHY』『HOW』を自問すること」「『質問力』を鍛えること」「関係性を理解して解釈すること」「因果関係・脈絡・つながりに着目させること」等が重要であることを解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、数学、理科、社会、英語、技術家庭、音楽等）を多数取り上げた。
(13) 習得・活用・探求型の授業を創造する	－	平成 23 年 12 月	三田市教育委員会指定研究事業 平成 23 年度三田市立本庄小学校公開研究発表会 平成 23 年 12 月 2 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、「習得・活用・探求」活動の意義とその具体化の視点について詳細に解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、算数、社会、音楽、総合学習等）を多数取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICT による授業改善の可能性にも言及した。
(14) 国語科指導力向上に向けて	－	平成24年7月	奈良市教育センター主催「国語科教育研修講座」 平成 24 年 7 月 27 日	平成 20 年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」は、学習意欲をもって基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育成することに主眼があることを、具体的な実践事例を示しながら解説した。言葉の力を培う国語教室を実現するためには、(1)年間指導計画の構築、(2)相互評価活動の活性化、(3)「言葉の力」のメタ認知の場の設定が重要となることを強調した。
「ワークショップ講師」 (1)「PISA 型読解力の授業づくり」	－	平成20年8月	第 71 回日本国語教育学会全国大会 平成 20 年 8 月 5 日	5 年生文学教材「大造じいさんとがん」を例に，PISA 型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。併せて，確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
(2)「PISA 型読解力の授業づくり」	－	平成21年8月	第 72 回日本国語教育学会全国大会 平成 21 年 8 月 4 日	2008 年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA 型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校高学年における「作品紹介活動」を示し、学習指導の工夫改善のポイントと、その際必要不可欠となる指導技術について詳細に解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)「PISA 型読解力の授業づくり」	―	平成22年8月	第 73 回日本国語教育学会全国大会 平成 22 年 8 月 10 日	2009 年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA 型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校低学年における「絵本紹介活動」を示し、「論理の接続詞」を活用した絵本紹介の仕方とその意義について詳細に解説した。
(4)「思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり」	―	平成23年8月	第 74 回日本国語教育学会全国大会 平成 23 年 8 月 9 日	平成 20 年版学習指導要領国語科の重要実践課題である「思考力・判断力・表現力の育成」に向け、論理的な思考を促し、強化する必要性を示した。具体例として、絵本紹介(小学校 1 年)における理由を組み立てさせる接続詞の活用事例、「どうぶつの赤ちゃん」(光村 1 年)における読解のキーワードを用いた表現活動の成果を取り上げた。「言語活動の充実」には、活動だけではなく適切な評価が必要であることを強調した。
(5)「『自分の考え』」を表現できる授業づくり」	―	平成24年8月	第 75 回日本国語教育学会全国大会 平成 24 年 8 月 7 日	「たんぽぽ」(東書 2 年)、「たんぽぽのちえ」(光村 2 年)を用いて、形式段落に区切る演習を行い、段落の区切りの理由を明らかにすることが段落相互の関係の理解を深めることを解説した。題名の重要性など、既習の学びを活かして、意図的に学習を組み立てていくことなど、自分の考えを表現するには、基礎的・基本的な学びのステップが必要であり、意図的・目的的な既習の学びの連続性が、明確な「自分の考え」を生み出すことを強調した。
(6)「既習の学び・記述力を生かす国語科授業づくり（小学校）」	―	平成25年8月	第 76 回日本国語教育学会全国大会 平成 25 年 8 月 6 日	「自然のかくし絵」(東書 3 年)を用いて、段落相互の関係をふまえた筆者の「書き方の工夫」を探る演習を行い、説明文における記述方法の特徴をとらえる学習の必要性について解説した。「書き方の工夫」については、「具体例」「問いと答え」「写真や絵」「説明の順序」「つなぎ言葉」などの学習者に馴染みやすい用語で整理することによって、説明文の読解学習だけではなく、既習の学びを活かして「説明文を書く」活動にも転用できること、さらに「自分の考え」を表現する多様な学習へとつながっていくことを強調した。
(7)「自分の考えをもって伝え合う授業づくり ―『発問研究』と『教材研究』とを中心に ―」	―	平成26年8月	第 77 回日本国語教育学会全国大会 平成 26 年 8 月 9 日	「スイミー」(光村 1 年)、「名前を見てちょうだい」(東書 2 年)、「一つの花」(光村・東書 4 年)を用いて、作品の構造的理解を支えるワークシート例を示し、作品の特質と主題を捉える演習を行い、物語教材における指導方法の工夫改善の方略について解説した。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、意欲的に考え判断し表現できる「発問研究」と「教材研究」、その実現のための「場面と時間」の確保が必要であることを強調した。
(8)「『確かな学力』を育成する国語授業づくり（小）―『発問研究』と『教材研究』とを中心に―」	―	平成27年8月	第 78 回日本国語教育学会全国大会 平成 27 年 8 月 1 日	「ごんぎつね」「海のいのち」を用いて、「本時の学習指導案」等の点検・見直しや、指導事項を習得・活用するための「発問研究」と「教材研究」に関する演習を行った。 学校教育法で規定された①学習意欲をもって②基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、この知識・技能を活用して③思考力・判断力・表

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				現力等から構成される「確かな学力」の育成を目ざす日々の国語授業づくりの重要性を強調した。
(9)「『確かな学力』を育成する国語授業づくり（小）－「『アクティブ・ラーニング』の発想を生かすー」	－	平成28年7月	第 79 回日本国語教育学会全国大会 平成 28 年 7 月 31 日	「アクティブ・ラーニング」（以下ＡＬ）を特定の型として歪曲化せずに、その本質や発想を踏まえた学習方法の工夫を行い授業実践に位置づけることを目的に、「海のいのち」や「ごんぎつね」をもとに、教材研究の重要性を具体的に示した。 ＡＬの発想を生かす授業の質は「言語活動の充実」と連動しており、思考力の深化･拡充を保障するためには、「より深くわかること」「よりうまくできること」「多様な情報を論理的に評価・分析すること」等が不可欠であることを演習によつて明らかにした。ＡＬの本質や発想を踏まえた学習方法の工夫は、「言語活動の充実」や「深い」教材研究なしには実現できないことを強調した。
「研修会講師」 (1)「言語活動の充実」と国語科年間指導計画への期待	－	平成22年8月	平成 22 年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成 22 年 8 月 26 日	実践事例として，1 年生への年間を通した作文指導，絵本等の紹介活動を中核とする読書指導などを示しつつ，授業実践における「意味・価値」を解説し，個々の教師が，確かで豊かな国語授業を自らの実践において生み出すための示唆を与えた。
(2)「言語活動の充実」と「国語科」	－	平成23年8月	平成 23 年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成 23 年 8 月 25 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践化への具体的提案として、平成 23 年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICT による授業改善の可能性にも言及した。
(3)「言語活動の充実」と各学校への期待	－	平成24年8月	平成 24 年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成 24 年 8 月 23 日	平成 20 年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。各学校が抱える指導時数の不足感をふまえ、実践化への具体的提案として、平成 23 年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げ、特に「①年間指導計画」の重要性を強調した。また、デジタル教科書の活用方法等、ICT による授業改善の可能性にも言及した。
(4) 学力向上や子どもたちの言語力の向上のために	－	平成25年2月	奈良市教育委員会主催「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 平成 25 年 2 月 22 日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、公開授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、教科書に閉じこ

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				もりがちな学習を見直し、実の場を活用した学習が有効となること、日常生活に資する言語力を培うためには、いかに広く多様な情報源に向かわせるか、言語環境の整備、多様な言語情報への目配りが大切であることを強調した。
「シンポジウム」 (1) シンポジウム分科会「国語教育」最優秀賞受賞者・実践成果報告	－	平成23年6月	読売新聞社主催・読売教育賞第 60 回記念シンポジウム分科会 平成 23 年 6 月 4 日	第 57 回読売教育賞国語教育部門最優秀賞実践「情報活用力としての『書く力』をたかめる－読み書きシートの徹底活用－」について、実践の概要と特質について報告し、参会者との意見交流を行った。
(2) 言葉の力を活用する言語活動と国語科授業づくり －小、中学校との連携を視野に－	－	平成24年8月	公益財団法人 中央教育研究所、特定非営利活動法人 日本語検定委員会主催 第 1 回「ことばの力」育成シンポジウム in 千葉 報告者並びにパネルディスカッション・パネリスト 平成 24 年 8 月 25 日	報告では、「言葉の力」を活用する国語科授業づくりにおいては、「既習の学びを可視化し活用する言語活動が求められること」「既習の学びの積み重ねと積み上げには年間指導計画が重要であること」を、「たんぽぽ」(東書 2 年)「たんぽぽのちえ」(光村 2 年)の実践事例をもとに提言した。シンポジウムにおいては、「言葉の力」の習得と活用を小学校と中学校とが連携して行う必要があることを強調した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　　金山　憲正

研　究　分　野	研究内容のキーワード
算数科教育法	算数科における指導内容に関する研究 問題解決学習の指導過程に関する研究 指導方法に関する研究

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
1．Flash および GIF で作成した自作のアニメーション等の ICT を使用した問題意識の醸成と解決に向けての指導助言のあり方とその実践方法	平成 17 年 4 月 ～ 平成 21 年 3 月	大阪教育大学教育学部小学校教員養成５年課程において「算数科指導法」の授業を担当。自作のアニメーション等の ICT を使って、主体的な解決活動の原動力となる問題意識を醸成することの重要性とそのための場とものをどう設定していくかについて理解させることをねらって講義した。また、GIF 形式でのアニメーションの作成方法と効果的な使用方法についても指導。問題意識を持たせることの重要性を理解し、GIF 形式のアニメーションは全員が作成できるようになった。 （大阪教育大学教育学部非常勤講師としての実践）
2．マルチメディアを使った問題解決場面における見通しを持たせるための適切な助言のあり方と問題解決型の授業の実践方法	平成 19 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月	近畿大学附属小学校と幼稚園の全教員に対して、VIDEO と PowerPoint での吹き出しの動画を主としたマルチメディアを活用して吹き出しの形で提示する方法で、毎月の研修会において「問題解決型の授業を取り入れるねらい」「基本的な学習段階」「課題の吟味と提示の仕方」「見通しの持たせ方」「よりよい解決に向けての集団での話し合いの場の持たせ方」などを教員の習熟度に合わせて解説を積み上げていった。また、同時に行われる公開授業を具体事例として、望ましい授業展開をするための教師の役割についての指導を行った。全教員がパワーポイントでのアニメーションを作成し、指導で効果的に活用できるようになった。 （近畿大学附属小学校での副校長としての実績）
3．ICT を活用して数や図形についてイメージを抱かせ、その基本概念の理解を深めて小学校算数指導のための教材分析が的確に行えるようにすることを狙った実践	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 1 年次生の学生約 120 名に対し、算数・数学教育の教材研究の基盤を育成することをねらった「数の理解」の講義において、ICT を活用した指導を行った。特に、内包量の概念や図形概念、測量や統計などイメージすることが難しい内容や処理が煩雑になる内容についての指導の際には重点的に ICT を活用した講義を行った。グループ活動ではあるが数量や図形の概念形成の指導において効果的な ICT の活用方法を工夫し、模擬実践が行えるようにまでなった。 （奈良学園大学「数の理解」の実践）
4．アクティブラーニングの形態で学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していくことをねらった実践	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科２年次生の学生約 120 名に対し、子供が主体的に問題解決活動を推進していくための授業構成とその指導方法について、学生自身が問題意識を持って取り組み理解することをねらっての「算数科指導法」の授業を実践した。授業の環境整備として「算数科指導法」の特設ホームページを設けそこに事前課題や学生からの質問事項を記載する欄も設けリアルタイムで互いの情報が共有できるようにして授業の充実をめざした。重点教材についての授業を想定し、指導案を作成しての模擬授業の実施とそれに対する評価を行い改善案について学生間で話し合えるようになった。 （奈良学園大学「算数科指導法」の実践）

2　作成した教科書、教材		
1.「領域の内容・習熟の程度に応じた指導の工夫」【再掲】	平成18年4月 ～ 平成21年3月	大阪教育大学教育学部小学校教員養成５年課程の算数科教育法（４年生、５年生 ４０名クラス）において非常勤講師として担当した授業で使用。現時点で達成度、到達度が低くても補充指導によって到達する可能性があるとの立場での指導のあり方を提起したものである。「習熟度別指導における学習の進め方の工夫」「コース設定とコースに応じた学習の展開」「効果的な情報機器の用い方」「保護者への説明」など習熟度別指導に取り組む方法とその際の留意事項についてのまとめを作成し使用した。習熟度別指導と能力別指導の違い、及び習熟度別指導のねらいについての理解を深めるために効果があった。
2.「思考力アップのための算数的活動」【再掲】	平成26年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において1年次生120名を対象にした「数の理解」、2年次生110名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数的活動が重視される背景を学習指導要領とピアジェの心的活動説とを踏まえてどのように指導にあたるべきかを解説し、その具現に際してのポイントを具体的な事例をあげてまとめたものである。特に、「算数科指導法」授業においては具体的事例の中から数事例ずつについて取り上げアクティブラーニング方式で操作的活動についての理解を深めるねらいで効果的に使用し、そのねらいを達成できている。
3.「活用を重視した算数科の授業」【再掲】	平成26年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において1年次生120名を対象にした「数の理解」の授業で使用。ここでは自己効力感、成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善するためにポイントとなる単元間の関連性と発展性を理解させるとともに教材分析の重要性とそれを的確に行うことができる資質を養うことを意図してざして作成したものであり、授業のねらいと対応させ随所で使用した。知識・技能などは活用を通して定着し、定着した知識・技能などから活用できそうなものを見つける学習活動の重要性に気づかせるために効果が上がっている。
4.「学力調査結果を授業改善に生かす取り組み」【再掲】	平成27年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生120名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。指導と評価は一体のものであり、児童の学力向上を確実とするためには的確に児童の実態を把握することが大前提になり、そのための学力調査をいかにおこなえば良いかについてまとめたものである。授業では主に「問題作成の心構え」「観点評価項目の設定」など問題作成に関する留意事項と結果処理の流れや活用法に関する留意事項を理解させる際に使用し、授業のねらい達成に向けて効果に活用できている。
5.「算数嫌いをつくらない授業」【再掲】	平成27年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生120名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数の学習につての児童アンケート結果における「好き」と「嫌い」の理由を分析することから、授業法の問題点を探りより望ましい授業展開を考えさせる授業場面で使用した。また、「好き」「嫌い」を左右する心情面を重視した授業作りとともに、協働学習の土俵となる学級作りやコミュニティ作りの重要性についての理解を図る授業においても使用した。授業を通してコミュニケーション能力を高めていくための環境作りや展開の工夫などに着目して指導案を作成できるようになってきた。

６．思考力・判断力・表現力を育成する算数授業【再掲】	平成27年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生120名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる学習意欲に着目して主体的な活動が保障される授業展開のあり方をまとめたものである。授業では指導内容の系統性を踏まえるとともに発達心理学面も考慮に入れた「～らしさ」の活動の様相を想定した授業展開を心がけることが主体的な解決活動を展開していくことになることに気づかせ、それを意識した模擬授業の指導案作成の際に使用して参考にさせた。本教材を使用することにより、指導内容面と発達心理学的な面との両面から授業を創造していこうとする姿勢が見られるようになっている。
７．思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の参考指導案集 （算数科ホームページ） 奈良学園大学人間教育学部発行	平成27年4月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において２年次生120名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する授業の創造に向けて、様々な授業展開のあり方をまとめたものである。主体的な解決活動の展開を意識した授業指導案作成の際の参考にさせた。 このように指導を受けて作成された指導案は「算数科」専用ホームページに掲載され、いつでもどこからでも参考資料として使用することができ、特に教育実習中の学生に好評だった。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１．近畿大学学長による評価	平成23年3月14日	近畿大学附属小学校副校長として独自の附属小学校の授業観及び授業スタイルの見直し、基礎・基本の学力を育成するための指導をめざした教育改革を行った。また、習熟度別学習指導、チームティーチングによる指導、個に応じた指導のあり方などについての現職教育を行った。その結果、全国学力実態調査においても子どもの学力が著しく伸びたことから他の教育関係者や保護者からも高い評価を得るとともに、人事評価においても「A」評価を受けた。
２．奈良学園大学採用時の学長評価	平成25年8月	12年間の公立学校校長、6年間の近畿大学附属小学校副校長としての学校経営の経験と実績、さらには大阪市教育委員会主任指導主事、大阪市小学校教育研究会算数部部長、11年間にわたる大阪教育大学教育学部で非常勤講師として算数教育の指導に貢献した経験と実績に対して高い評価を受けた。また、教育に対する熱意と向上心に関しても高い評価と信頼を得た。
３．奈良学園大学人間教育学部平成２９年度後期学生による授業評価	平成29年2月	1年次生120名の学生が対象の「数の理解」の講義に対する授業評価アンケートでは、ICTを活用した講義の進め方に対して、「説明が分かりやすかった」92%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」94%、「総合的に見て満足のいくものであった」94%などいずれも90%以上の回答結果で、学生が高い満足度を感じる授業が行われていたと判断できる集計結果を得ている。
４．奈良学園大学人間教育学部平成２９年度後期学生による授業評価	平成29年7月	２年次生に対する前期の「算数科指導法」の講義について実施した学生の授業評価アンケートの結果、ホームページを活用して事前に課題を提示し、それについてアクティブラーニング形式で進めた講義に対して、「この授業に対する受講意欲は高かった」94%、「説明が分かりやすかった」95%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」94%、「総合的に見て満足のいくものであった」93%など90%以上の回答結果となっており、充実感があった授業と判断できる評価を得ている。

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1．近畿大学附属小学校副校長としての実績 ・西日本私学小学校連盟主催の研究大会の会場校として発表 （平成 23 年 5 月　参加者 1100 名）	平成 19 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	近畿大学附属小学校副校長として、また、学力向上と教員の資質向上の責任者として、毎週行われる教員研修会において、教師主導の学習指導から児童主体の学習指導への転換を目指した授業創造のため解説を行った。授業作りの土台となる学級作りについて作成したテキストを使用して講話をし、グループディスカッションを取り入れ教員の資質の向上を図った。また、同キャンパスの附属幼稚園に対し、小学校を見据えた幼児期における数的な概念についても指導した。
2．２００９近畿大学公開講座　における講師 「算数で育てたい力と学校教育」 （対象：保護者及び地域住民　参加者 120 名）	平成 21 年 8 月 28 日	「問題解決型の学習の果たす役割」や「子ども自身が算数を創り出していく学習」について具体例を通して紹介した。今、日本の算数教育が目指す方向と学習指導要領改訂の背景について、そのねらいについて講演した。その中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力の育成の関連にも触れそれぞれの重要性について解説した
3．新算数教育研究会主催・第 34 回セミナー講師 「新学習指導要領における実践上の課題」 （対象：全国の算数担当教員 400 名）	平成 21 年 12 月 25 日	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を算数科に焦点を当てて講演を行った。その中で、思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業を具現する際に重要となる、「見通しを持たせるための指導順序と単元構成の工夫」「表現力を育てるためのノート指導のあり方」について具体的な事例を挙げて解説を加えた。
4．近畿大学附属幼稚園教員対象指導講座の講師 学期に 1 回、年 3 回実施 （対象：幼稚園教員及び保護者）	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	同じキャンパスにある近畿大学附属幼稚園の教員に対して小学校を見据えた幼児期の子どもに数概念や図形概念を育てる算数の基礎的指導のあり方について指導助言を継続的に行った。ゲームや遊びを通して楽しみながら数概念の素地を養ったり図形の構成要素を意識させたりする指導について具体的な例を通した演習形式で研修を行った。また、幼小接続を意識した幼稚園教育の取り組みへの理解と協力を得ることをねらって保護者へも参加を呼びかけた。
5．　２０１０近畿大学公開講座　講師 「算数科で育てなければならない力」 （対象：保護者及び地域住民　参加者 120 名）	平成 22 年 9 月 10 日	主な対象者が地域の一般市民のため、算数科で育てる力と、そのため学校ではどのように具体的な授業が行われているかを、教科書の内容を系統的に取り上げて講演した。また、幼小接続の観点から、幼稚園で学んでおくと小学校入学時の算数の学習に効果がある数概念や図形概念形成のための事例についても紹介した。
6．西日本私学連盟主催平成 23 年度研修会 講師 「ゆるみ教育からの決別－算数科の指導を例に－」 （於：近畿大学附属小学校、参加者約 1100 名）	平成 23 年 5 月 23 日	全体会において講演した。主に、新学習指導要領で目指す学力の育成するためには、教え込みの解説型の授業から脱却し問題解決型の授業へ転換する必要があることを強調した。同時に、問題解決型の授業成立には教師の深い教材研究が必要であるため、使命感を持ち教育活動に取り組む必要性も併せて強調した。
7．奈良学園大学人間教育学部人間教育学科での講義	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	「数の理解」の授業では、数量や図形などの基本的な概念や基礎的な知識に対する理解を深めるとともに、算数のよさを知り、数学的思考力や判断力、表現力を養う授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように、ICT の活用や具体的な事例を交えて授業を進めている。特に、数学的思考力を涵養する力量と算数科の教材を開発する力量を育成することに重点を置いた講義内容である。 「基礎ゼミナールⅠ」の授業では、学生の自己表現力の育成に加えリメディアル教育を分担し、学生個々の習熟度に応じたテキスト作りと、その解説を作成している。

		「算数科指導法」では、アクティブラーニングの形態で、学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していく授業となっている。学習指導案作成の基本や模擬授業を通して問題提示や発問・助言のあり方についての理解を深めることをねらいとしている。
5　その他		
1．第 74 回～第 84 回 算数・数学教育研究発表会での指導での指導	平成 10 年 6 月 ～ 平成 20 年 6 月	大阪数学教育会主催の算数・数学教育研究発表会において、小学校「低・中・高学年分科会」の各分科会のうち１の分科会の指導助言を毎年務める。
2．奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生に対する課外における算数・数学指導	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生に対して、リメディアル的な取り組みが必要な学生に対しては基礎的な数学の理解をねらい課外での指導を行っている。また、希望者には採用試験対策の数学の指導も行っている。
3．大阪市立放出小学校の算数教育充実に向けての実践研究に年間を通しての指導	平成 26 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
4．八尾市立永畑小学校の算数教育充実に向けての実践研究に年間を通しての指導	平成 27 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
5．奈良学園小学校の算数教育充実に向けての指導と助言	平成 27 年 9 月 ～ 現在に至る	奈良学園小学校が現在「メタ認知」に着目した実践研究に対して、望ましい授業の構成の仕方や展開の工夫及び評価の生かし方などについて指導と助言を行い充実した教育活動の創造をめざしている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許		
1）小学校教諭一級普通免許	昭和 46 年 4 月	昭和 46 小一普第１６０号（大阪府教育委員会）
2）中学校教諭一級普通免許（数学）	昭和 46 年 4 月	昭和 46 中一普第１２２８号（大阪府教育委員会）
3）高等学校教諭二級普通免許（数学）	昭和 46 年 4 月	昭和 46 高二普第３２８号（大阪府教育委員会）
4）司書教諭	昭和 46 年 1 月	昭和 46 年 12 月 1 日　第４９９５６号（文部省）
2　特許等 な　　し		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）　近畿大学附属小学校 副校長	平成 19 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	近畿大学附属小学校には、「児童の算数の学力向上を達成させること」と「教員の資質を向上させること」が主たる使命での赴任であった。まず、教員研修の充実と共に研究・教員組織の改革を提起し、大改革を実施した。 具体的な改革の内容は、「高学年への教科担任制の導入」「第 3 学年から第 6 学年までの算数科はチームティーチングでの指導体制の導入」「教員全員が自分の専門教科を定めその教科の研修を深める研究体制の導入」などである。 特に、教え込み教育から脱却し、問題解決型の授業へと質の転換を図ってきた。結果、全国学力状況調査では、国語・算数のＡ・Ｂ問題とも全国平均を 10 ポイント以上上まわった。 教職経験８年未満の教員に対しては、別に「若手研修」と名付けて、「学級経営のあり方」「保護者との対応のあり方」「事故の対処の方法」「学級内で起きたトラブルへの対応法」など、具体的な事例を想定して考えさせるなどの研修を行った。

4　その他		
1）奈良学園大学　ＦＤ委員会　委員長	平成26年4月 ～ 平成28年3月	ＦＤ委員長としてこれまで実施されてきた事業を見直し本学のＦＤに対する取り組みの改善を図った。特に、これまで前期・後期と年２回実施の「学生の授業評価アンケート」事業において、「調査用紙の作成・集計・分析」の外部業者への委託を止め、内部処理をする方針に変更した。その道筋をつくるため、「マークシート用紙の作成」「マークシートの読み取り」「読み取り結果を集計・分析するためのプログラム作成」「集計・分析結果をまとめて図表に表すためのプログラム作成」「各授業担当者への集計結果の通知と自己評価の記入依頼」「全ての集計結果を PDF 形式にまとめてホームページにアップ」の一連の作業を委員長として全て一人で作成・処理している。評価対象は約 130 講義でアンケート用紙枚数は約3000 枚になるが、実施から集計・まとめまでに要する時間は業者委託に比べ半分の期間で処理できているため、本学のホームページへのアップもタイムリーに行っている。 また、教員が互いの授業参観を通して指導力を高めるための「公開授業」事業では、他学部の授業参観も可として学部間における閉鎖性の払拭をめざしている。あと「授業改善シート」「FD 講演会」事業についても改善・充実の方向で実施している。
2）奈良学園大学　教職センター委員	平成26年4月 ～ 平成29年3月	2 年次生が対象となる「介護等体験」に関する取り組みの企画・立案を行っている。また、来年度から始まる「教育実習」関連では、2 年次生を対象に実習受け入れの依頼の手続きについて全体への指導とあわせて個別への指導も行っている。 教員採用に向けて基礎的学力の定着を保障するために設けられている「教師塾」について、その効果的な運用方法について企画・立案と運営に関わっている。
3）奈良学園大学　入試委員会　委員長	平成28年4月 ～ 現在に至る	本学園の AO 入試・公募制推薦入試・一般入試・大学入試センター試験利用入試の各入試に関する入試業務が厳正に執り行われる為の体制の整備と準備に計画的に取り組んでいる。開学からの入試データを分析し今後の望ましい入試業務についての改善案を作成している。また、大学入試センター試験会場としての準備、実施等の運営管理にも取り組んでいる。
4）奈良学園大学　副学長	平成29年4月 ～ 現在に至る	本学園三郷キャンパス長として教職員個々の業務内容を把握・調整し学園運営が円滑にそして効率よく推進できるよう努めている。特に、共通教育委員会・入学試験委員会・広報委員会・ＦＤ委員会・教務委員会に関しては各委員会担当副学長としての任務に携わっている。 また、来年度の人間教育学部の定員増に向けての各種手続きや入試・広報活動のあり方について支障が起きないよう点検と整備に取り組んでいる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所､発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
１.活用力を育てる！算数授業プラン&ワークシート	共著	平成 21 年 4 月	明治図書	低・中・高学年編の３冊で構成され、４つの活用力を育てるワークシートと授業を実践する際に参考となる展開例を提案。 Ｂ５版　全１３６頁（３冊） 編者：金本良道 共著者：一ノ瀬喜子、吉田博、岩崎浩、笠置道宏、赤沢マキ、金山憲正、松岡克典、岸田初美、森洋子、中井美貴子、森本明、野津吉宏、植村徳治、谷口孝臣　　他３０名 本人担当部分：低学年編では第１学年「大きい数」(P42～P45）のうち「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 中学年編では第３学年「重さ」第４学年「分数」(P84～P87）の事例について、また、高学年編では第６学年「立体の体積」(P108～P111）の事例について「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 「大きい数」では、具体物を数えた個数を「何十といくつ」と表したことから類推させて、数の仕組みと表現のよさに気づかせる指導を提案。「重さ」では、長さ、体積、重さの単位のそれぞれに共通する関係や類似性を見いだし、見いだした関係や類似性から新たな単位を予想する活動を取り入れた指導について提案。「分数」では、和が１より大きくなる同分母分数の加法の計算の仕方を図や数直線を用いたり、単位の考えを基にしたりして考える活動を取り入れた「見通しを持ち筋道立てて考える力」を育てる指導について提案。「立体の体積」では図形の面積の求め方で学習した等積変形や倍積変形の考え方を活用して、角柱や円柱の体積を求めたり､ICT を用いて説明したりする活動を取り入れた指導について提案している。
２.「小学算数」 (教師用指導書研究編)	共著	平成 23 年 4 月	日本文教出版	全学年を通した体系に重点を置いて、各領域別の系統的な解説とその数学的背景を明らかにするとともに、新しい指導方法、数学的考え方とその指導､ICT の活用など現在の算数教育における主要な問題点について示す。 Ａ４判　全２８６頁 編者：日本文教出版社編集部 共著者：小山正孝、中原忠男、金山憲正、重松敬一、崎谷真也、狭間節子 本人担当部分：「総論」(P2～P12）を単著 「確かな学力の向上を目指した算数科の学習指導」の章では、算数の学習指導の基本的な考え方として、ブルームの教授理論に基づいて「基礎的・基本的　な知識・技能の習得と活用」「思考力・表現力の育成」について解説している。また、「確かな学力が身につく算数の学習指導」の章も前章同様に「問題解決型学習の意義」「算数の学び方の指導」「表現力の育成」「学習意欲の向上」など新学習指導要領のめざしている学力と育成のための留意点を述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				また、幼児期に経験した概念形成の過程を踏まえて指導に当たることが不可欠な小学校低学年の指導について、幼小の連携を図ることの必要性を強調し、ピアジェの認知発達理論を参考にした幼児期の児童の発達段階に即した指導形態についても解説している。
3.教育フォーラム 50 「やる気」を引き出す・「やる気」を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの「やる気」を引き出し、育てるための方策を、国語・算数・体育・総合的な学習の時間などとの教科の関わり、教材・校内研究の取り組みなどを考察、提案する。大前提となる教師自身の「やる気」についても論じる。 Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、勝見健史、久田孝、錦織彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村哲、瀧明知惠子、浅田匡 本人担当部分：「子どもの〈やる気〉が出る算数授業のために」（P47～P57）を単著 知識及び技能の定着を確かなものにしたり思考力・判断力などの能力を育成したりする際の大前提となる主体的な学習活動は子どもの「やる気」が推進力となって推進されるものである。ブルーム理論で強調される認知領域の目標に情意領域の目標と指導方法の工夫を加え、「やる気」を引き出しそれが推進力となって展開する指導についての理論と方策を具体的な実践事例を通して紹介している。また、幼稚園児の数概念を育てる上での着眼点や留意点について解説を加えている。さらに、「やる気」を育てる上で重要な役割を果たす個が認められる集団づくりのポイントについても紹介している。
4.思考力アップのための算数的活動	単著	平成 25 年 1 月	株式会社ＥＲＰ	算数的活動を重視した学習展開が強調されている背景を学校教育法及び学習指導要領の改訂のねらいとピアジェの心的活動説を踏まえて解説するとともに、算数的活動をどう理解して指導にあたるべきかを明らかにした。主にmanipulationに近いものを指す具体的操作活動をはじめ、マッハが提唱している思考実験にも相当する「内的な活動」の効果的な取り入れ方、さらにはModel-makingの過程の踏ませ方について具体的な教材を取り上げて紹介している。 Ａ５版　全６８頁
5.教育フォーラム 54 各教科の学習を支える言語活動－言葉の力をどう用いるか	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	新しい学習指導要領で強調されている「知的な力」、「確かな学力」を育てていく土台となる「言葉の力」をどう捉え、どう活用することが各教科の学習の充実につながるのかを考察し、その指導のあり方を提案している。 Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、金澤孝夫、阿部秀高、桜本明美、大畑健実、川俣徹、蔵あすか、 本人担当部分：「算数の授業に言語活動を生かす」（P47～P57）を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				思考は、言語を媒介とする自己内の対話によって成立し、他者に向けて表現したり他者の表現内容を受け入れたりする活動を通して整理され、洗練されたり深められたりする。したがって考える力は表現する力を抜きにしては考えられない。数学的な表現様式については、ブルーナの EIS 理論が基盤となって「現実的表現」「操作的表現」「図的表現」「言語的表現」「記号的表現」の五つに分類されることがある。算数科の指導においては「言葉の力」を「言語的表現」のみに限定せず、「現実的表現」から「記号的表現」にいたる全てを「算数のことば」ととらえて指導にあたることの必要性を強調した内容である。
6.人間教育を視点にした教職入門 第 6 章 教員の仕事 第 9 章 教育実習の意義と心得	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	激動する社会、急変する教育界の中で、次世代の社会を担い、自律して問題解決能力を持つ子どもを育てることのできる資質・能力を身につけ、地球的視野から持続可能な社会の発展と構築に貢献する教師の心構え、あり方などについて、人間教育を視点にして述べている。 Ａ５判　全２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩、鎌田首次郎、松田智子、中田律子、金山憲正、瀧明知恵子、長井勘治、太田雄久、 本人担当部分：「小学校教員の仕事」（P110～P120）を単著 「生きる力」を育てることを目指して各学校が掲げている教育目標達成に向けて教師が努力していかなければならないことを、「教科等の指導に関わる仕事」「生活指導の関わる仕事」「校務分掌として位置づけられた仕事」のそれぞれについて解説している。 本人担当部分：「教育実習の意義と心得」（P235～P253）を単著 教育実習は、教師として教壇に立っときの心構えや必要となる指導技術などについて事例を挙げて解説している。また、教育実習での経験は、将来の教師として自己のあり方を厳しく問い、教職に向けての真剣な学びを始める契機となるため、教育実習への参加には、日常の講義に出席する際の心構えとは全く異なる性質の決意が求められることの理解を図ることをねらって説いている。
7．教育フォーラム 57 PISA 型学力を育てる	共著	平成 27 年 2 月	金子書房	近年のような社会環境の変化の激しい時代にあっては、子どもたちは全く新しい事態や問題に次々に直面する。それらを解決する力をどう育てられるか、原理的な面、大学入試に関わる面、各教科の授業改革の面から論じ具体的実践的な提案をしている。 Ａ５判　全１５８頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、立田首治郎慶裕、西辻正副、鎌田首治朗、清水静海、角屋重樹、岩田一彦、渡部久美子、鵜飼洋子、金山憲正、佐藤雄一、松田智子、高木悠哉、井上信子 本人担当部分：「算数Ｂ問題が解ける力を育てる」（P95～P105）を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				活用力が問われるＢ問題を解く力を育てるためには、旧態依然とした指導者中心の教え込み指導から脱却し、子どもが主体的に学習活動に取り組む授業を通して、活用で使う道具となる知識・技能を身につけさせることの重要性について論じている。つまり、どれだけ身についていること以上にどのようにして身についたのかに力点を置いた授業づくりをめざす必要がある。そのための授業法として、ポリアの提唱した問題解決の 4 段階の重要なステップを基本とし、各段階における指導の充実を図ることが思考力、判断力、表現力の育成につながることを算数科の指導を例に挙げて述べている。
８．教育フォーラム 59 対話的な学び	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	「主体的な学習」と密接な関係にある「対話」を教育活動に取り入れることは、教師にとって今後の大きな課題のひとつである。積極的に「対話」を用いることで「深い学び」を得るためにはどうしたらよいか。どのようなことに注意し、どのように授業を展開していけばよいのか。多面的な視点から、具体的かつ実践的な提案をしている。 Ａ５判　全１６９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、後藤沙貴、北俊夫、赤堀博行、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井、、井上信子 本人担当部分：「対話的学びを組み込んだ算数学習のために」（P47～P57）を単著 「対話的な学び」の「対話」が、指示されたから始めるという受け身的な「対話」ではなく、興味や知的な好奇心などの心情面に支えられた問題意識の醸成につながる「対話」やじこの考えを確かめたり深めたりする必要を感じて始める「対話」でなければ、目的としている主体的能動的な学習を重質させることは難しい。そこで求められる指導者の自動理解と教材研究の重要性とその方法を具体的な例を通して説いている。
９．教育フォーラム 60 対話的な学び	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	学習指導要領の総則について議論が展開されている「深い学び」については未だに焦点が拡散している現状である。その「深い学び」は単に「授業の型」や「学習方式」といった一定の教授・学習活動のパターンに関わるものではない。どのようにすれば「深い学び」になり、それを実現できるのかについて、具体的かつ 実践的な事例を通して、基本的なポイントを明確に提案している。 Ａ５判　全１４４頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、古川治、伊崎一夫、金山憲正、大畑健美、菅井啓之、後藤紗貴、石森広美、善野八千子、岡村季光、松井典夫、瀧明知恵子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「算数科における〈深い学び〉とは」（P79～P88）を単著 ここでは、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を個々に分析的にとらえるのではなく「深い学び」が授業改善の究極の目標であるととらえ、「深い学び」を達成させるためには「主体的・対話的な学び」があってはじめて実現するものであるという立場で算数指導について提案している。その際の着眼点として「学習意識」というものに焦点をあてることにより解決活動がより主体的に展開できることを具体的事例で紹介している。
10. 教育フォーラム 61 対話的な学び	共著	平成 30 年 2 月	金子書房	新しい学習指導要領に入れられた「見方・考え方」は、高次な学習の土台として期待される大切な視点の 1 つである。この「見方・考え方」には各教科等における基本かつ重要といえる固有の展開があるはずだが、実際にはどのようにクローズアップし、授業の組み立てに生かすべきかが課題となっている。各教科等の特質を踏まえた教育のあり方を具体的に論じ、「見方・考え方」を生かす授業実践のヒントを提案している。 Ａ５判　全１４８頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、金山憲正、角屋重樹、中村哲、越智貢、大畑昌己、善野八千子、高木悠哉、杉浦健 本人担当部分：「算数科における〈基本的な見方・考え方〉」（P38～P48）を単著 数学的に考える資質・能力の育成をめざす算数科の学習指導の基本的な考え方として「数学的な見方・考え方」が深い学びにつながる授業を創造していく上で重要な役割を果たすという立場で論を進めている。「数学的な見方・考え方」を働かせながら知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して課題を探求したりすることにより充実した授業の展開となること示した実践事例を挙げて提案している。
（学術論文）				
1．確かな学力を育てる言語活動	単著	平成 21 年 2 月	近畿大学附属小学校 平成 19 年度研究紀要 P6 ～ P13	ブルームらによる「教育目標のタキソノミー」に見られる認知的諸能力の基本カテゴリーを参考に平素の授業を振り返り、「自己内対話」とその基盤として不可欠な「言葉の力（言語能力）」育成の重要性を強調している。各教科における言語活動をどうとらえ、授業にどのように生かしていくことが確かな学力を育成することになるのか算数科を例にあげて論じている。また、授業の中での書く力とコミュニケーション能力の育成の必要性についても論じている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.新学習指導要領における実践上の課題 －活用する力を育む場づくり－	単著	平成22年3月	新算数教育研究会 新しい算数教育 No.470	学校教育法 30 条の２に基礎的・基本的な知識・技能を習得し，それを活用して思考力、判断力、判断力を育成する旨のことが明示されている。つまり、思考力、判断力、表現力を育成する重要なポイントとなる「活用」に焦点を当てた授業づくりを心がけることが「生きる力」を育てていく上で不可欠であることを述べ、その指導のあり方を提案している。充実の着眼点として「既習の学習内容を活かす単元構成の工夫」,「算数のおもしろさ,よさに触れさせる指導」,「学習ノートの充実」の 3 点を挙げ、具体的な実践例を通して活用する力を育む場づくりについて論じている。
3.活用を重視した算数科の授業	単著	平成23年5月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.18 P12～P15	DeSeCoによれば、PISA学力調査の「読解力リテラシー」「数学的リテラシー」は、社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」カテゴリーのうち、「言葉、シンボル、テクストを相互作用的に活用する力」に関わると言っている。算数科の学習で習得する知識・技能は、これに関わるキー能力である。この能力を育成するため、自己効力感、成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善し、「習得教育」「活用教育」「探求教育」を統合的にとらえ、習得と探求を活用でつなぐ算数教育のあり方を提案した論文である。
4．ゆるみ教育からの決別	単著	平成24年2月	日本私立小学校連合会 平成23年度 研究集録	改訂された学習指導要領をもとに、学校教育現場が目指さなければならない指導のあり方を算数科に焦点をあてて提言している。学習指導要領の総則及び内容を分析し、総則で各教科の指導に当たり問題解決的な学習の重視が述べられ、特に算数科では算数的活動が内容に明示されていることから、これまでの指導の取り組みが十分でなかった点を指摘すると共に、改善策について論じている。指導内容に算数的活動という指導方法に関することが記述されたのは教師としてその力量が問われているとの危機感を持つ必要があることを訴えている。学習指導要領のねらいを達成するための授業づくりの観点を例示し教材研究への取り組む重要性を述べた論文である。
5.思考力アップのための算数的活動	単著	平成25年4月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.9 P22～P25	本論文は、まず算数的活動の概念規定を行い、学習指導要領に置いて重視されることとなった背景とねらいをこれまでの算数教育の取り組みの歴史から分析している。さらに、子供をある思考状態に自由に引き入れ、狙った陶冶部分を鍛錬する状況を作り上げる際に重要な働きをする「気づく」「気づかせる」に着目したゲシュタルト心理学の考え方も念頭に算数的活動を分析し、各単元における効果的な算数的活動の位置づけを明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.思考力アップのための算数的活動(2)	単著	平成25年5月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.10 P12～P15	学習指導要領において算数的活動は作業的・体験的な活動など身体や具体物を用いる活動に限らないとされている。本論文では、算数的活動のなかでも内的な活動について焦点を当て、マッハ氏や篠原助市氏の「教授原論」で提唱されている思考実験の論を参考に、現在の算数教育において思考実験が重視される背景と意義を分析し、思考実験を伴う学習指導の改善に向けて指導のねらいと留意事項について具体的実践を通して明らかにした。
7.算数嫌いをつくらない授業	単著	平成25年11月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.26 P9～P13	学習についての児童アンケートで算数の授業が「きらい」と答えた児童の理由の分析結果で、授業の進め方に起因していると考えられるものがかなりの割合を占めていた。つまり授業において充実感や達成感を十分に味わえないため「きらい」となる実態が明らかになった。「すき」と「きらい」のそれぞれの割合が多い調査校における授業の実態を対比し、解説型から問題解決型の授業スタイルへの転換を図り、満足度の高い授業を創造する必要性を明らかにした論文である。
8.思考力・判断力・表現力を育成する算数授業	単著	平成26年9月	奈良学園大学研究紀要 第1集 p37～p46	思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる情意面に着目し、主体的な活動が保障される授業展開を追究した。ポリア提唱の問題解決型の授業展開を基本にしながら発達心理学面から低・中・高学年らしい活動の様相を想定し、その発達の段階にふさわしい活動を呼び起こす学習意欲が連続・発展するような単元構成及び１時間の学習活動の構成について具体的な実践事例を通して検証したものである。
9.思考力を養う操作活動	単著	平成26年10月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　特集号 P34～P37	操作を生かした学習活動は、ペスタロッチ、デューイ、ブルーナなどによって古くから重視されている。また、操作をピアジェは一貫した構造的体系をもった心的活動として述べている。本論文では、これらの学説の対比及び算数科の指導内容を分析し、算数指導における操作活動をどう捉えるのかを明らかにした。さらに、具体的な指導場面でどのような操作活動を取り入れることが思考力を育成することになるのかまた、その指導に際しての留意点について具体的な実践を通して検証したものである。
10.生きる力を育てる算数指導 （査読付き）	単著	平成27年4月	人間教育研究協議会紀要「人間教育学研究」第2号 p71～p80	生きる力を育成するために算数教育が担う役割は何かを明確にするとともに、算数教育のねらいで重視されている「思考力・判断力・表現力」を分析し、どのような授業を創造していくことがそれらの力を育てることになるのかの検討を加えた。本論文では、「思考」と「表現」は互恵的な関係であるととらえ、それらが相乗的に作用し合ってよりよいものを作り上げていく授業づくりをめざして、ポリアの提唱している問題解決型の指導過程を取り入れた効果的な指導のあり方について実践事例を通して考察したものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. エクセル関数でのプログラミングとICT	単著	平成27年9月	奈良学園大学研究紀要 第３集 p59～p72	2013 年度実施の国際教員指導環境調査（TALIS）結果において、ICT を用いた指導実践を頻繁に行う教員の割合が全参加国の中で最下位である現状に注目し、本論文では ICT を活用した教育を推進することの必要性と教育効果のあるソフト開発、及びその使用の有用性について述べている。特に、基礎・基本の定着を図る際、習熟度や個別学習で活用することにより大きな効果を発揮するソフトのプログラム作成の手順とその効果的な使用方法を明らかにしている。
12.生きる力の育成と主体的な問題解決活動 （査読付き）	単著	平成 27 年 12 月	日本人間教育学会紀要「人間教育学研究」第３号 p25～35	数学教育現代化の失敗以降、算数数学教育の潮流は大きく問題解決に切り替えられたが、それが形式や表面的な学習指導に留まっていたのは、底流するプラトン的あるいは絶対主義的な数学観の論理的帰結として、コミュニケーション活動の本質が看過されていたからに他ならない。本論文では、コミュニケーションを含め表現力の充実が叫ばれるようになっている背景を分析し、数学的コミュニケーションの育成という視点から授業構成のあり方を提言した。
13.算数科の基礎学力が育つ道筋と授業づくり	単著	平成28年9月	奈良学園大学研究紀要 第５集 p53～p66	算数科で育てるべき学力の中核となるものは数学的な考え方に他ならない。ここでは数学的な考え方を基礎学力と位置づけ、それを育てる授業のあり方を人間性の育成という視点も加えて追求している。基礎学力は子どもの活動の姿として学習の中に現れてはじめて育ったと言えるので基礎学力が育ち、それを活用できるような単元構成や指導者の役割についての提案をしている。さらに、低・中・高学年の発達の段階における子どもの特性を生かした活動の場づくり、および授業づくりのポイントについても提案している。
(その他)				
１．新任教員のためのハンドブック	単著	平成 24 年度	近畿大学	教員の研修課題テキストとして使用するため、学級経営に関する事項、いろいろなケースでの子どもに接する際の留意事項、家庭訪問の留意事項、事故が起こった場合の対処の仕方などをＱ＆Ａ形式でＡ４版７４頁にまとめて全教員に配付し、それを学校の基本方針として共通理解を図り日々の教育実践の充実に向けて取り組む体制作りをした。
「依頼原稿」 1.授業中における事態に対応するには（算数）【シリーズ】	単著	平成21年4月～平成22年3月	日本文教出版	教育情報誌「ROOT」第１巻～第４巻　P19 教育現場で算数の授業中に遭遇する事態にどのように対処すればよいのか、その対処法を具体例で提示。「見通しが持てない子どもにはどのようすればよいか」「早く解決できて時間があまっている子どもにはどうすればよいか」などの内容。特に、経験の浅い教師がこの原稿を参考にして適切に対応することにより一人ひとりの児童が充実した学習活動に取り組んでいけることを願っての提案。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				また、話し合い活動を通して各自が考えた解決方法をよりよいものに練り上げていくための学習集団をどのように育てていけば良いのかについても提案。 さらに、幼児期における学習および生活経験が十分でないことが原因と考えられる第１学年の数概念や図形概念の理解に関する学習内容におけるつまずきに対する予防と補充指導についても例示。
「教材作成」 １.等積変形の説明教具	単独	平成 21 年 12 月	新算数教育研究会	第５学年の単元「図形の面積」の指導において、三角形は底辺と高さが同じであればどのような形の三角形であっても面積も同じであることを理解させるための教具である。子どもにとって高さにあたる頂点が底辺の外に出ている三角形の面積についての理解に抵抗が見られる傾向にある。そのため、少しずつ長さが短くなっていく細い線を何本も積み重ねて三角形を作り、アニメーションでその１本ずつを移動させ底辺も高さも同じ三角形に変形していくことにより、底辺と高さが同じであれば面積も同じであることを理解させるとう情報機器を活用した教具となっている。
２.円の面積の求め方の説明教具	単独	平成 23 年 5 月	西日本地区私学連盟研究大会	第６学年「円の面積」の単元で使用する教具である。円の中心を通る直線で等分し、それを等積変形して平行四辺形や三角形にすることを実際に紙にかいたものを用いて操作させたり示したりすることは困難なことである。そこで、グラフィックソフトを用いて円を 32 等分したり 64 等分したりして作成したおうぎ形をアニメーションで平行四辺形や三角形に等積変形して示すことにより、円の求積公式である半径×半径×円周率の理解を確かなものにすることをねらって作成した
３.計算の習熟を図るプリント作成ソフト	単独	平成 23 年 5 月	西日本地区私学連盟研究大会	第 1 学年から第６学年までの計算領域で扱われる全ての計算について任意に入力した数値を用いて計算問題の式が作成できるソフトである。数範囲は整数・小数・分数の全て、また、演算も単純な四則はもちろんあまりのあるわり算や商を四捨五入で処理する問題や解答も数値の入力で自動作成されるようにしてある。作成にあたってはエクセルの関数を用いているので一般的に何処ででも活用することが可能な自作ソフトである。
４.「活用力」育成のためのデジタル教材	共同	平成 25 年 6 月	株式会社 ｅ教育研究社	第1学年～第６学年の算数の全単元について、学習指導要領に示された「活用力」育成のための指導用メディアミックス型デジタル教材を作成。授業プリントとデジタル教材コンテンツを合わせて利用することにより PISA 型学力を育てることをねらいとした教材である。 教授資料はＢ５判全２６７頁 編者：梶田叡一 共著者：加藤明、金山憲正、中島繁雄、松浦武人

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：第５学年・第６学年の「活用問題」「実践問題」「発展問題」（P118～p267）の 95 教材を単著。各単元に対応したデジタルコンテンツを作成。 活用問題では「読解力」を重視した内容を扱い、ヒントや解き方はオンマウスでポップアップするようにしてあるため、ICT 教育でも活用が図れるよう工夫してある。
「学会発表」				
1.新学習指導要領（算数）における実践上の課題	－	平成 21 年 12 月	新算数教育研究会 第 34 回セミナー （於：箱根・ ホテル小涌園）	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた算数科学習指導の要点を提案。活用を重視する指導では指導内容の関連を明らかにし、既習のどの内容が発展するのかを捉えて単元構成をすることの重要性を各学年の主要教材を取り上げた事例で発表。また、表現力を育成するための「ノート指導」のあり方について実践例を映像機器で示しながら紹介。これらを通し思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた望ましい指導のあり方を発表。
2.算数科における問題解決学習の充実	－	平成 23 年 5 月	第 53 回西日本地区 私学連盟研究大会 （近畿大学附属小学校）	新学習指導要領で育てたいと目指している学力は、教え込みの解説型の授業から脱却しポリアの提唱した問題解決型の授業を基本として展開することによって効果的に育成されることを主張すると共に、問題解決型の授業をするためには児童の実態を的確に把握することと、教師の綿密な教材研究とが大前提になることを強調。 また、幼小連携の観点から小学校における算数学習の充実のために幼児期にどのように数概念や図形概念の理解に関する指導を行えば良いかについても解説。
3.時代のニーズに応えた学校運営	－	平成 24 年 4 月	平成 24 年度近畿大学 附属関係校研究大会 （近畿大学）	組織面については、小学校高学年における 教科担任制、一年担任制、習熟度別学習態勢の導入、及び、各教員への研究教科の割り振りなど、基礎・基本の確実な定着を目指ための学校の取り組むべき方向と方策を提案。 また、小学校教育と幼稚園教育の関連を図り、より充実した小学校教育の創造を目指す幼・小連携の需要性と必要性を強調。 教育内容面では、日々の教育実践において、「問題解決学習の進め方」「学級経営のあり方」「机間指導・ノート指導のあり方」「子どもが主体的に学習へ取り組む授業の創造」など、思考力・判断力・表現力を育てるための教育をどう実践していくべきかを提案。
4．算数的活動を取り入れた指導	－	平成 25 年 10 月	「人間教育研究協議会」 平成 25 年度定例会	思考力を高めるための授業作りに欠かすことのできない算数的活動について、重視される理由・取り入れるために必要となる教材研究・展開の方法などを具体的な実践例と結びつけての発表内容である。 作業的活動・体験的活動・思考的活動の各活動について具体的な教材を例に、活動をさせる目的、効果的に取り入れる方法についての解説に加え、言語活動にあたる「説明する活動」「表現し伝え合う活動」についても同様の解説を加えて発表した。

著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所､発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．教材研究をする際に知っておかなければならない「算数のことば・用語」	－	平成 25 年 12 月	教師力向上研究会（第４回総会）	算数指導に当たって指導者が「算数のことば・用語」をしっかりと理解しておかなければ十分な教材研究をすることができないということを伝えることをねらいに発表。 センテンス型とフレーズ型の式の区別を意識させておく必要性や等分除と包含除のいずれの問題場面で導入することが適切であるのかなど、教材研究と算数の用語の理解は切り離して考えることができないことを強調。
６．算数的活動を取り入れた指導のポイント	－	平成 26 年 2 月	「人間教育研究協議会」フォーラム in 大阪	学習指導要領で算数的活動が重視されている背景とねらいを分析し、算数的活動を取り入れた授業の充実を図る際のポイントについて発表。特に、算数的活動というものが単に作業的活動や体験的活動を意味しているのではなく、思考活動が伴わなければ価値がないことをピアジェの心的活動の論とを関連づけて強調した。また、算数的活動を取り入れると学習効果が発揮される指導場面とその留意事項についても具体的な例を通して発表した。
７．算数の授業で言語活動を充実させる	－	平成 26 年 6 月	教師力向上研究会例会	言語活動を充実させるための目的を明確に捉えた上で実践に取り組まなければ十分な成果が期待できないため、まず教科の目標を実現する手立てとして言語活動を充実させるのであることが大前提になることを強調した。 特に、算数の言葉と言われている式に焦点を当て、「式に表す活動」「式をよむ活動」の具体例を取り上げ、言語活動を充実させるポイントとなる抽象化の過程や一般化の過程の構成について重点を置いた提言と、それを具現するための指導のあり方について発表した。
８．思考力・判断力・表現力を育てる算数指導	－	平成 26 年 8 月	教師力向上研究会サマーセミナー	思考力・判断力・表現力を育てるには問題解決型での指導が望ましい。問題解決型の指導では既習の学習内容と関連づけることが求められる。一方、関連づける既習の学習内容が本時の解決に結びつく内容でない場合は、逆に子どもを混乱させることになる。既習内容どう想起させるのか、また、そのために必要となる手立てを内容の系統性・関連性を明確にする視点から解説した。特に、教材分析の重要性と指導内容の関連を明確にすることの重要性を強調。
９．意識を軸にして展開する算数指導	－	平成 27 年 10 月	日本人間教育学会　第１回総会	ブルーナの操作を生かした学習活動に関する論とピアジェの心的活動の論を基に、即物的対象のイメージ、経験的記憶再生のイメージ、想像のイメージがより抽象的・概念的なイメージへと高まる過程と問題解決の過程との関係を明らかにし、学習者の意志によって主体的な学習活動が展開される授業作りの要点を提言。イメージが連続発展するような単元構成及び授業構成を試みるに際しては、能力心理学で分析されている認識能力と欲望能力の観点から発達段階を考慮した活動の様相を想定しておくことが必要となることも強調。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　桑原　祐子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
言語学	日本語学　日本文学　正倉院文書

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）日本語の文法研究の成果を生かした実践的授業	平成 7 年度～平成 22 年度	摂南大学国際言語文化学部国際言語文化学科非常勤講師として担当した留学生の「日本語」及び「日本語上級作文Ⅰ」の授業。中国語圏の留学生にとって習得の難しい助詞の機能について、文法研究における構文論の研究成果を取り入れ、日本語文の構造には様々な層があることを解説し、身近な文を分析しながら実践的教育を行った。また、日本語の歴史的変化を具体的に示しながら、現代の日本語の実態を分析することも試みた。その結果、日本語の作文能力の向上が見られた。
2）実地見学を取り入れた授業	平成 22 年 11 月	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「詩歌の発生と展開」の授業に於いて、万葉集・正倉院を中心に授業を行った。そこで、東大寺の奈良時代の遺構の実地見学及び正倉院外構の見学を行った。写真では実感できない構造物の大きさや、機構の規模などが実感でき、概ね良好な反応が得られた。
3）所見カードによる問題意識の啓発	平成 22 年度～24 年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「奈良の文学と風土」(平成 22 年～24 年)、「日本の文学」（平成 24 年）では、毎回の授業で２～３の問を提示し、これに答える形で講義をすすめている。授業の最後の 10 分間で、所見カードに、この問に対する答えを記入させ、疑問や質問も主体的に記入させている。これによって、受講生の理解の度合いが認識でき、また受講生理解向上が図れ、問題意識の啓発に資することができた、と認識される。記入された質問・疑問については、翌週の講義で取り上げて解説を加えている。
2　作成した教科書，教材 1）講義用教材「奈良の文学と風土」	平成 22 年度～24 年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した一般教養科目「奈良の文学と風土」において、授業時間内に使用する文学作品・文字資料などを毎回授業で配布している。できる限り、当時の文字の姿や文章の書き方が視覚的に捉えられるように、原本・写本の写真を掲載するように努めている。また、パワーポイントを使用して、古代の文物をできるだけ閲覧できるようにしている。
2）講義用補助教材「日本語コミュニケーション」	平成 23 年度～24 年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した全学共通の導入基礎科目「日本語コミュニケーション」において、毎授業の開始直後に、日本語の知識全般にわたる小テストを行い、日本語の基礎知識の定着を計っている。これによって、毎時間予習をするようになり、一定の教育効果が確認されている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）奈良産業大学学生による授業評価アンケートにおける評価	平成 24 年度	奈良産業大学では、毎年学生による授業アンケートを実施している。平成 24 年度のアンケート結果によると、受講生の満足度に関して、「かなり満足」「やや満足」と答えた学生は、「日本語コミュニケーション」は 68%・「日本の文学」は 89%、「日本語（上級作文）は 93%であり、比較的高い評価を得たものと認識している。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 1) ひょうご震災記念研究機構学術交流センター　ひょうご講座 2009「古代史最前線」　講師　「正倉院文書からみる下級官人の言語生活」	平成 21 年 7 月	ひょうご講座 2009「古代史最前線」での講座を担当した。奈良時代の紙の利用の仕方から意外な文書の事実が分かること、古代の下級官人の人間関係がどのように言葉遣いに反映するかということを講義した。
2)2009 年若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師「正倉院文書の国語学的アプローチ」	平成 21 年 8 月	奈良女子大学古代学学術研究センターと万葉文化館主催による、2009 年若手研究者支援プログラム「正倉院文書を考える」での特別講義。正倉院文書を国語資料として使うときの工具類及び工具の使い方を紹介すると共に、正倉院文書を奈良時代の姿に復原する手続きを講義した。
3) 京都府立国語科研究会（山城支部）研修会　講師「正倉院文書にみる下級官人の国語―石山寺造営関係資料―」	平成 22 年 3 月	現代の日本語の中には和製漢語が数多くある。その中に「早速」という言葉がある。この言葉は正倉院文書の中にしばしば見られる。特に、下級官人達がある特定の場面で専ら使用している。そのことから、新しい言葉が誕生する背景や使用者の言語に対する意識について講義を行った。
4) 朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと萬葉集」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成 22 年 9 月	朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと万葉集」の第 4 回目の講座の講師として講義を行った。奈良正倉院と正倉院文書の紹介を行い、正倉院文書の分析を通して古代の下級官人の勤務の実態について講義を行った。
5) 奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書の世界―古代官人の世界―」	平成 23 年 11 月	正倉院に残された古代官人たちの書いた文書の分析を通して、役所で彼らがどのような仕事をしていたのか、給料はどのくらいだったのか、出勤状況はどのようにして把握されていたのか、ということを解説した。また、借金の証文から役人たちの住居の場所が明らかになることや、下級官人たちの書いた文書がなぜ正倉院に残ったのかということについて解説を行った。
6) 帝塚山大学公開講座「奈良学への招待」講師「正倉院文書と古代日本語」	平成 23 年 11 月	奈良の正倉院には華麗な宝物とともに一万数千点の文書が残されている。これらは、8 世紀の日本語を知るための極めて重要な言語資料である。『万葉集』や『古事記』とは異なった、古代の生の言語生活を知ることができる。古代の官人たちが書いた休暇届や欠勤届を分析しながら、病気の治療・回復をどのように表現していたのかということを講義した。また、彼らが母語である和語と外国語である漢語をどのように意識して使い分けていたのかということも、具体的に紹介した。
7) 奈良県大学連合主催「なら講座」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成 24 年 12 月	古都奈良の秋に開催される正倉院展には、1250 年の時を越えて伝えられた聖武天皇遺愛の宝物や東大寺ゆかりの品々が展示される。これらの特色を解説すると共に、それなの中にあって、思いがけない情報を我々に語ってくれる一大文書群、正倉院文書を紹介し、当時の役人が、どのような場合にどのような言葉を生み出していったかということを、解説した。
8)三郷町文化振興財団主催『カルチャーサロンさんごう』文学・歴史・経済セミナー講師 「正倉院文書と木簡の世界」	平成 25 年 11 月	正倉院正倉（奈良市、国宝）が南倉、中倉、北倉と三室に分かれていること、「東大寺献物帳」（目録）が添えられていたため北倉の品々は、史料的価値が高いことなど、正倉院に関する基礎知識を説明し、東大寺写経所が残した正倉院文書（給料の請求書、欠勤届他）や平城宮跡出土木簡などに書かれた漢文を現代語訳しながら、当時の役人や写経生の仕事内容や仕事ぶりを解説。また、漢字の「怠（おこたる）」を取り上げて当時の人々の生きた言語生活を紹介した。

9) 奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書・木簡からわかる古代日本語」	平成 26 年 10 月	正倉院の宝物と正倉院文書について 1 千年以上も保管された要因とその文化財的価値について説明した。また、正倉院文書は造東大寺司の下に置かれた写経所の残した文書群であることを説明し、そこで仕事をしていた写経生たちの提出した休暇願・欠勤届や同時代の木簡を読み解きながら、古代の人々の言語生活の一端を明らかにし、平仮名がまだなかった時代に、漢字や漢語の用法を借りながら、古代の人々がどのようにして言葉の世界を拓いていったのかということを解説した。
10) 第 5 回奈良学園公開文化講座講師・志賀直哉旧居 「正倉院文書と古代の役人」	平成 28 年 10 月 18 日	第 68 回正倉院展に合わせ、出展が予想される正倉院古文書・正集五 第 1 紙～8 紙を取り上げ、その内容を読み解いた。 天平宝字 5 年 (761) 頃の近江・石山寺の増築をめぐって、造石山寺所や管轄する造東大寺所とのやりとりを解説し、役人が現場の窮状を訴え、米や銭の支給を取り付ける過程を分析した。 また写経所の経師が、3 日に 1 度の飲酒や月に 5 日の休暇などを求める内容を記した待遇改善の草稿も紹介し、その背景の解説を行った。
11) 三宅町歴史学習推進講座　第 1 回「正倉院宝物と正倉院文書」	平成 29 年 6 月 20 日	正倉院宝物の成り立ちとその国際的背景について、具体的な宝物を通して解説を行った。更に、正倉院文書を残した東大寺写経所での、写経生達の勤務実態について、具体的な資料を取りあげて説明を行い、彼らが提出した欠勤届や休暇願いから、当時の病の治療の一端を紹介した。
12) 三宅町歴史学習推進講座　第２回「第 69 回正倉院展から」	平成 29 年 9 月 19 日	第 69 回正倉院展に出陳される宝物 10 点について、その特徴や来歴、東大寺献物帳との照合に関する研究について解説を行った。また正倉院文書と聖語蔵経巻との関係及び写経所文書の最新の研究についても、解説を行った。
13) 三宅町歴史学習推進講座　第３回「正倉院文書と木簡」	平成 29 年 12 月 19 日	第 1 回、第 2 回で取りあげた正倉院文書と同時代資料である木簡の様々な用途について紹介した。更に、平城宮の大極殿が、遷都の 710 年にはできあがっていなかった事が木簡の発見によって明らかになった事について解説を行った。
14) 三宅町歴史学習推進講座　第４回「古代官人の仕事ぶり」	平成 29 年 2 月 20 日	正倉院文書の中に残されている古代造営史料のうち、近江石山寺の造営史料の中から、実務を担当した下級官人である下道主の書いた書類と手紙を取りあげてこれを読み解いた。そして、どのようにして下道主が上位機関を動かしたかということを分析した。
５　その他 1）学位（博士）論文指導実績	平成 24 年 10 月～12 月	愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻に所属する大学院生の博士論文について 3 人の審査員のうちの副査として審査を担当。指導テーマは「古代東アジアにおける漢字文化の研究」である。その内容は、中国・韓国日本の第一次資料を用いて、古代東アジア諸国の異体字研究を通して、漢字がどのように受容・定着したかということを明らかにする研究である。
2）摂南大学における教育実績	昭和 61 年 4 月～平成 22 年 3 月	摂南大学国際言語文化学部国際言語文化学科の非常勤講師（昭和 61 年 4 月から平成 22 年 3 月まで）として以下の科目を担当した。 「国語学」（昭和 61 年～平成 13 年度） 通年の一般教養科目（通年 4 単位）である。日本語の歴史を中心に講義し、音韻と文字がどのように関わるのか、語彙は古代語から近代語にどのように変化するのかということを実例に則して解説した。本講義によって、言語に関する知識を習得させることができた。

		「国語学」の担当については、昭和 62 年 8 月に摂南大学法学部法律学科　兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。同じく平成 4 年 8 月に摂南大学経営情報学部経営環境情報学科兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。 「文学」（平成 8 年～平成 10 年度） 通年の一般教養科目（通年 4 単位）である。日本の古典文学の根幹を成す和歌について講義した。前期は古代から近現代に亘る恋の歌を取り上げ、恋愛観がどのように変わっていくのかということを解説。後期は『万葉集』『古事記』平安朝文学に表れる日本人の自然観・死生観を解説し、言語に託された人間の思想・心情を考えさせた。本講義によって、文学への理解を深めることができた。 「日本語表現Ⅰ」（平成 14 年～平成 21 年度） 「日本語表現Ⅱ」（平成 14 年～平成 21 年度） いずれも半期の一般教養科目（半期 2 単位）である。音声言語と文字言語による日本語表現を分析的に学び、実践を通して日本語の運用能力を伸ばすことを目指す授業を行った。「日本語表現Ⅰ」では、音声言語による表現、特に敬語表現を中心に実践演習をさせた。この実践演習を通して、正しい敬語表現の運用と敬語表現の背後にある日本の文化的背景の理解が可能となった。 「日本語」（平成 1 年～13 年度） 留学生対象の科目（通年 4 単位）である。主に 2 回生以上の学生を対象とした科目である。前期は日本語の基礎的な語彙・文法の能力の向上を目指して自薦演習を行った。後期は、様々な分野の専門的な文章の読解を行い、課題の設定・文章の構成・レポート作成を行った。以上の実践演習によって、大学における専門科目の講義を聴く能力･レポートの作成能力を習得させることができた。 「日本語」の担当につては、平成 4 年 8 月に摂南大学経営情報学部経営環境情報学科兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。 「日本語上級作文Ⅰ」（平成 14 年～平成 21 年度） 「日本語上級作文Ⅱ」（平成 14 年～平成 21 年度） いずれも留学生対象の科目（半期 2 単位）である。主に 2 回生以上の学生を対象とした科目である。「日本語上級作文Ⅰ」では、語彙・文法の知識を深めるため、単文の作成を中心に実践練習を行った。「日本語上級作文Ⅱ」では、専門的な文章の読解を中心に据え、文章構成の型・レポート作成の基本的技術を学び、与えられたテーマにそった文章作成を行った。この実践練習によって、大学における専門科目の講義を聴く能力・レポートの作成能力を習得させることができた。 「日本語上級会話Ⅰ」（平成 14 年～平成 21 年度） 「日本語上級会話Ⅰ」（平成 14 年～平成 21 年度） 　いずれも留学生対象の科目（半期 2 単位）である。主に 2 回生以上の学生を対象とした科目である。「日本語上級会話Ⅰ」では、日常生活の様々な場面を設定し、複数の学生に実践練習をさせ、口頭言語の背後になる日本特有の文化や具体的な表現の諸相を習得させた。「日本語上級会話Ⅱ」では、先ず日本語特有の敬語表現を大系的に学び、次に実際に様々な場面を想定し、具体的な敬語表現の実践練習を行った。合わせて、敬語表現を生み出した日本語話者の感性・思想・人間関係のとらえ方なども学ばせた。本授業によって、基本的な日本語の運用能力の向上をはかることができた。

		「コミュニケーション論」（平成 18 年～21 年度） 薬学部の学生を対象にした一般教養科目。特に薬学専門家として患者や地域社会の人たちと円滑にコミュニケーションを図るための具体的な知識や技術を身につけさせることができた。
3）京都光華女子大学における教育実績	平成 4 年 4 月～平成 24 年 3 月	京都光華女子大学生活学科の非常勤講師（平成 4 年 4 月から平成 24 年 3 月まで）として以下の科目を担当した。 「国語表現」（平成 4 年～平成 17 年度） 「言葉の理解」（平成 18 年～平成 22 年度） 「言葉と表現」（平成 18 年～平成 23 年度） いずれも 1 回生対象の一般教養科目（半期 2 単位）である。「国語表現」は、平成 18 度から名称変更によって、「言葉の理解」（前期 2 単位）・「言葉と表現」（後期 2 単位）となった。 「言葉の理解」（平成 18 年～平成 22 年度） 日本語の特徴を学び、日本語話者の文化的背景を学ぶと共に、実践的な日本語の運用能力を養うことを目指し、基本的な語彙の習得をさせた。更に、正しい敬語表現を身につけるための実践練習を行った。これらの実践練習によって、社会人として適切な日本語の運用能力を習得させることができた。 「言葉と表現」（平成 18 年～平成 23 年度） 日本語の表現のうち、書き言葉の表現技術の向上を目指して実践練習を行った。様々な文章を書く練習を行い、大学におけるレポート作成・小論文作成の能力を身につけることができた。 「文学と人生」（平成 13 年～平成 14 年度） 『万葉集』の中から、特に古代史を彩った様々な人物の歌を取り上げ､歌の背後にある古代史の出来事を解説し、古代の人々の人生を考える授業を行った。言語芸術である文学作品から何が読み取れるのかということを考えさせた。本講義によって、文学を鑑賞する力をつけることができた。
4）奈良産業大学（現奈良学園大学）における教育実績	平成 22 年 4 月～現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科及び奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の専任教員(平成 22 年から現在に至るまで）として以下の科目を担当した。 「日本語コミュニケーションⅠ」（平成 22 年～24 年度） 「日本語コミュニケーションⅡ」（平成 22 年～24 年度） １年次配当の共通教育基礎科目（半期 2 単位）である。「日本語コミュニケーション」Ⅰでは、話し言葉を中心に実践的な日本語の運用能力を習得させることができた。時に敬語の背景にある日本語話者の文化的背景についても理解を深めることができた。「日本語コミュニケーション」Ⅱでは、書き言葉を中心に学習し、レポート作成・小論文作成のための実践的能力を養うことができた。 「奈良の文学と風土」（平成 22 年から現在） 共通教育科目（半期 2 単位）である。万葉集の歌と正倉院文書から明らかになる古代の人々の生きた姿を講義形式で紹介した。できるかぎり現存する文書の写真や木簡の写真を使って、古代言語生活を具体的に学んだ。加えて正倉院に伝世した宝物を通して東西文化の交流を学んだ。本講義を通して、奈良という地域の特性を正しく具体的に理解することができた。

		「詩歌の発生と展開」（平成 22 年～23 年度） 共通教育科目（半期 2 単位）である。日本文学の中で重要な位置を占める詩歌について、万葉集・記紀歌謡・古今和歌集の歌を講義形式で解説した。特に、万葉集では漢字だけで以下に日本語を表現する工夫をしたのかということも学んだ。本講義を通して、平仮名の発生や詩歌に対する知識を養うことができた。 「日本の文学」（平成 24 年～25 年度） 共通教育科目（半期 2 単位）である。古事記・万葉集の韻文を中心に講義形式で行った。古事記を題材として、神話に語られた自然現象、韻文の始まりを語った物語などを紹介し、また、万葉集の歌を通して、人間の心のあり方を、喜びや悲しみをいかにして表現したのかということを学んだ。本講義を通して文学先品を鑑賞する能力を養うことができた。 「日本語　上級作文Ⅰ」（平成 22 年～平成 26 年度） 「日本語　上級作文Ⅱ」（平成 22 年～平成 26 年度） 平成 22 年度は「日本語　文章表現」の名称での講義であったが、23 年度から「日本語　上級作文」に名称変更された。留学生の 2 年次生を対象にした共通教育科目（半期 2 単位）である。「日本語上級作文Ⅰ」では、基礎段階として、単文の作成を中心に実践的授業を行い、基本的な日本語文の作成能力を習得することができた。「日本語　上級作文Ⅱ」では、応用のレベルとして専門的な内容を含む長文の読解を行い、加えてテーマを設定してレポート作成を行った。この実践的授業を通して、レポート作成の知識と技術を身につけることができた。
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）　中学校教諭一種免許状	昭和 54 年 3 月	中学校教諭一種免許　国語 昭和 53 中一種第 880 号（奈良県教育委員会）
2）高等学校教諭専修免許状	昭和 56 年 3 月	高等学校教諭専修免許　国語 昭和 55 高専修 56 号（奈良県教育委員会）
3）文学修士	昭和 56 年 3 月	奈良女子大学 204 号 論文題目「正倉院文書に於ける上代特殊仮名遣」
4）博士（文学）	平成 16 年 12 月	奈良女子大学第 124 号 論文題目「正倉院文書の国語学的研究」
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）奈良女子大学古代学学術研究センター協力研究員	平成 19 年度～ 21 年度	奈良女子大学古代学学術研究センターは、古代日本の中心であった奈良に立地する奈良女子大学の特色を生かし、東アジアという広い視野の中で日本古代の歴史・文学･言語を学際的に研究する拠点として平成 17 年に設置された。このセンターにおいて、平成 19 年～21 年までの間、科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」(研究課題番号 19020396)の研究代表として、研究活動を行った。合わせて、前年度までのＣＯＥ研究員として企画を行った報告集の作成も行った。ＣＯＥ関連授業における博士課程の受講生に対する事前指導を引き続き行った。
・釜山大学主催の日本学講演会の招聘を受け講演。タイトルは「正倉院文書と墨―韓国と日本の交流―」。	平成 21 年 3 月 26 日	正倉院文書から明らかにされる日本古代官人の言語生活に関する講演を行った。正倉院宝物中の新羅関連宝物の紹介と、それにまつわる文字資料の紹介を行い、特に新羅墨の形状にも関わる墨の助数詞「船」と「挺」の実態の調査についての報告を行った。墨の形状を反映していると考えられていた助数詞「船」は、ある特定の人物が使用していた助数詞であったことを報告した。合わせて、物を通じて日韓の交流についても言及した。

・奈良女子大学古代学学術研究センター発行の学術雑誌『古代学』第1号に論文「古代官人の言語生活―病気回復を表す表現―」を執筆。	平成21年3月30日	正倉院文書に多く現れる病気回復表現に着目し、正倉院文書を中心にして、日本律令・日本書紀・続日本紀などの上代文献の病気回復表現を調査した。その調査によって、奈良時代の病気回復表現を分類すると共に、その用法の分析をおこない、日本語を漢字で書き表す場合の創意工夫の実態と病気回復表現の位相を明らかにした。また、平安朝以降にしか見られないといわれていた「おこたる」について、奈良時代の確例を指摘した。
・奈良女子大学研究推進プロジェクト「正倉院文書からみた日本語表記の成立過程に関する研究」の研究分担者。	平成21年4月	上代の文献（万葉集・古事記など）・木簡・正倉院文書を用いて、日本語表記成立過程を明らかにする事を目指した研究プロジェクトである。研究代表は奈良女子大学の奥村悦三教授である。このプロジェクトの主に木簡と正倉院文書を研究分担した。
・奈良女子大学古代学学術研究センター主催の若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師。	平成21年8月5日	特別講義「正倉院文書の国語学的アプローチ」を行った。正倉院文書中の写経生の書状を取り上げ、文書の断簡をどのようにして復原するのかという方法と研究工具の使い方を講義した。合わせて、年紀の記されない書状の年代を明らかにし、書状の書かれた背景を、様々な帳簿類を検討することで明らかにしていく手法を示した。
・学術振興会　科学研究費補助金（基盤研究（ｃ））を申請。課題は「正倉院文書訓読における日本語表記成立過程の研究」。	平成21年11月	平成22年4月に採択された（研究課題番号22520467）。研究代表者。本研究の目的は、正倉院文書に代表される実用の言語生活の中に、後世の日本語表記システム(漢字仮名交じり文)が成立していく契機があることを、具体的な事例に基づいて実証的に解明することである。そのため、正倉院文書の中に散見する下級官人や在野の技術者・非官人に光を当て、彼らの言語生活を明らかにすることである。
・科研基盤研究（ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」（研究課題番号1920396）の報告書3冊を刊行。	平成22年3月30日	3冊は以下の通り。報告書Ⅰ『正倉院文書の訓読と注釈―造石山所寺解移牒符案（一）―』（研究代表者桑原祐子執筆）・報告書Ⅱ『正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状―』（研究分担者黒田洋子執筆）・報告書Ⅲ『正倉院文書からたどる言葉の世界（一）』（連携研究者中川ゆかり執筆）。以上の報告書の企画・編集を行い、報告書Ⅰの執筆を行った。
2)「科研費申請」 　韓国研究財団　土台基礎研究「日本正倉院文書と韓国文字資料の物品名の研究―物品の用度、単位、書体のＤＢ構築」（共同）	平成23年8月	釜山大学日本研究所の研究チームが中心になって申請した研究プログラムである。日本の正倉院文書と韓国古代文字資料に見える物品名の用例を分析し、物品の用度・単位・書体をＤＢに構築し、古代日韓両国の文字文化と言語生活及び生活様式を再解釈できる基礎をつくり、後続研究の土台の提供を目的とする。日本側の一般協同研究員として参加した。
［研究分担］ 3）科学研究費助成事業（基盤研究Ｃ） 「正倉院文書の読解を通した上代文学の表現の生成に関する研究」研究分担 課題番号：26370220　代表：中川ゆかり	平成26年度～28年度	奈良時代の下級官人達が書き表した膨大な文書の集積である正倉院文書を読み解くことによって、当時の官人達の書く文章の実態・人間関係のあり方・信仰の様相を明らかにした。又、『古事記』や『日本書紀』・『風土記』には見えない言葉を発掘し、上代語の知見を広め、さらに、正倉院文書の文章とそれらを比較することによって、それぞれの作品の文章の性格を浮き彫りにし得た。以上の研究に分担者として参加した。

4）科学研究費助成事業（基盤研究Ｂ） 「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明」研究分担 課題番号：15H05151　代表：西一夫	平成 27 年～現在に至る	本研究課題は、現在日本・中国・台湾・イギリス・フランス・ロシア等に散在する敦煌文献、なかでも書儀・尺牘断片を中心に据えた実見調査を通して新たな資料を発掘し、日本への受容や伝搬の実態を把握し、マクロ的に統合することを第１の目的とする。その上で正倉院蔵『杜家立成雑書要略』に焦点を絞り、当該書の注釈作業を通して、わが国における敦煌書儀・六朝尺牘の受容をミクロ的にも研究することで、表記・語法・歴史環境分野のさらなる研究推進をはかるものである。この研究に分担者として参加している
5）科学研究費助成事業（基盤研究Ｃ） 「敦煌書儀による書記言語生活解明のための基礎的研究」研究分担 課題番号：16K02587　代表：楊莉	平成 28 年～現在に至る	本研究の目的は、敦煌文献資料の一つである敦煌書儀について、各々の書儀に注釈を加え、実用生活における書記言語資料としての位置づけを行うことである。そのため、具体的な作業として、日本語による「敦煌書儀注釈」を作成し、研究成果として、それを刊行することを目指している。この研究に研究分担者として参加している。
［共同研究］ 6）人間文化研究機構国立歴史民俗博物館共同研究員産学連携研究「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」研究代表：関沢まゆみ	平成 29 年～現在に至る	日本列島における「清潔」と「洗浄」について、通史的に概観するとともに、歴史資料から、詳細にその実態を問い直すための端緒を拓くことを目的とする。「清潔」をめぐる文化や政策を概観する研究は 2000 年前後までさかんに行われてきたが、それ以降、全体像を大きく見ることを目指しての事例は少ない。本共同研究は、この状況から新たな一歩を進めるため、論点整理を行う。長期的に「清潔」という文化全体を見ることを目指し、その最初の共同研究として、とくに「清潔（感覚）」と「洗浄（行為）」の歴史に注目する。特に、共同研究者として日本古代の「清潔」「洗浄」に関する国語学的分析を行う。
４　その他 1）大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第 14 号「栄原ゼミと私」執筆「再掲」	平成 23 年 5 月	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで 10 年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）『上代写経識語注釈』	共著	平成 27 年 2 月	勉誠出版	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。上代文献を読む会において、平成 18 年 10 月から約 6 年を費やして輪読を行い、編集委員会を設け、さらなる検討を重ね、現存する写経識語の訓読・現代語訳・注釈を施した。さらに写経識語に関する論考４本と索引を加えた。本書は、平成２７年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けた。全 684 頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2)『正倉院文書の歴史学・国語学的研究―解移牒符案を読み解く―』	共著	平成 28 年 6 月	和泉書院	古代の一次資料である正倉院文書を歴史学と・国語国文学のそれぞれの立場から精緻に読み込み、分析検討を行う輪読会を９間に亘って続けてきた。この輪読会に参加した１０名の研究者による研究論集である。その研究内容は、帳簿論、写経論、上代の日本語の語法・語彙の研究、文字表記の研究など、多岐に亘る。特に国語国文学の分野における正倉院文書研究の指針となる論集である。 全 370 頁、pp. 111～156
3)『犬飼隆編『古代の文字文化』（『古代文学と隣接諸学』④）	共著	平成 29 年 7 月	竹林舎	Ⅱ正倉院文書が語る 8 世紀の文字世界の章において「日本語史料としての正倉院文書―「運漕」の場合―」を執筆した。8 世紀の下級官人が仕事を遂行するために書き記した一次資料である正倉院文書を資料として、8 世紀の日本における実務官人の漢字の独自用法について考察を行った。一見して具体的な意義が了解できる視覚情報としての漢字の特性を自由闊達に使用し、「船舶による輸送」を表す漢語「運漕」を、状況に応じて「水陸両方を含む輸送」をも表す言葉としてもしている実態を明らかにした。その用法の背景とその用法がもたらす効用にも言及した。さらに、この独特の用法が 10 世紀の「延喜式」にも見られることも指摘した。 全 557 頁、pp. 221～257
（学術論文） 1)　古代官人の言語生活―病気回復を表す言葉― （査読付）	単著	平成 21 年 3 月	奈良女子大学古代学学術研究センター・奈良女子大学 21 世紀ＣＯＥプログラム 「古代学」第１号 P. 1～P. 12	正倉院文書に多く現れる病気回復表現に着目し、正倉院文書を中心にして、日本律令・日本書紀・続日本紀などの上代文献の病気回復表現を調査した。その調査によって、奈良時代の病気回復表現を分類すると共に、その用法の分析をおこない、日本語を漢字で書き表す場合の創意工夫の実態と病気回復表現の位相を明らかにした。また、平安朝以降にしか見られないといわれていた「おこたる」について、奈良時代の確例を指摘した。
2）上代写経識語注釈（その一）大般若経（長屋王願経・和銅経） （査読付）	単著	平成 22 年 4 月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第 385 号 P. 26～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。特に本稿で取り上げた識語は現存する識語の中で、奈良時代のごく初期の写経経典でありながら、各地に点在する、極めて貴重なものである。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3）写経生の書状―正倉院文書にみる古代官人の実態―	単著	平成 22 年 11 月	奈良産業大学情報学部「情報学フォーラム紀要」 P. 1～P. 8	いつ何のために何を書いたか不明であった写経生の書状について、その紙背文書の分析から書かれた年代を特定し、その時の写経所の状況、写経生等の勤務状況を明らかにし、仕事を依頼するための書状であったことを指摘した。そこには、漢字漢文では表現できない日本語特有の敬意を含んだ言葉が表出することをも合わせて指摘した。
4）正倉院文書の「笑」と「筐」	単著	平成 23 年 6 月	釜山大学校日本研究所 「日本研究」12 輯 P. 7～P. 31	正倉院文書の造営資料や木簡等の一次資料、律令公文・延喜式などの歴史史料、万葉集などの文学資料、及び古辞書に見える「笑」と「筐」の使用実態を調査し、「笑」を、ヤダケを意味する和語「の」とよませる漢字用法は、漢字本来の意義から逸脱する日本的用法（国訓）であることを明らかにし、日本的漢字用法が、どのような人々によってどのような理由で生じるのか、その要因をさぐった。
5）上代写経識語注釈（その九）十輪経（五月一日経） （査読付）	単著	平成 23 年 8 月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第 394 号 P. 33～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第 9 である。特に本稿で取り上げた五月一日経（一切経）は、その写経の過程を知る文書・帳簿が正倉院文書に多量に残存し、経典そのものも大量に残存する世界的にも希有な資料群である。
6）上代写経識語注釈（その十）千手千眼陀羅尼経（玄昉願経） （査読付）	単著	平成 23 年 8 月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第 393 号 P. 36～P. 49	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第 10 である。本稿で取り上げた玄昉願経は、正倉院文書によってその写経の過程を知ることのできる写経経典の一つであり、この識語の分析によって、東大寺創建・国分寺建立にも深く関わる内容であることを指摘した。
7）正倉院文書の「堪」と「勘」―古代下級官人 爪工家麻呂の学習― （査読付）	単著	平成 24 年 9 月	萬葉語文研究会 『萬葉語文研究』第８集 和泉書院 p. 121～p. 147	8 世紀の原本が残る正倉院文書の分析を通じて、当時の下級官人の言語生活を記述した研究である。同一人物の作成した文書・帳簿を写経事業毎に選別し、特定の人物の置かれた状況・仕事内容を明らかにして上で、役人としての基本的な語彙をどのようにして習得したのかということを明らかにした。つまり、外国語で

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ある漢字・漢文を、日本語を母語とする人々がいかにして習得したかということを明らかにすることは、異文化を享受しながら独自の文字システムを構築してきた日本語のあり方を知ることに繋がる。
8)正倉院文書の「早速」―和製漢語のうまれる場面―　（査読付）	単著	平成 25 年 3 月	奈良女子大学文学部国文学会誌「叙説」第 40 号　　p.33～p.57	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対照させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。
9）道豊足の人事―あいまいな表現の背景―（査読付）	単著	平成 25 年 10 月	正倉院文書研究会会誌『正倉院文書研究』13	石山寺造営関係資料の中には、人員の派遣に関する様々な文書や、勤務実態を明らかにする文書・帳簿が多く残存している。本稿では、道豊足の派遣を要請する文書の日付や要請理由、派遣を許諾した文書のあいまいな表現に注目し、文書間の整合性を保つために周到な準備をしていたことを確認した。さらに、道豊足の勤務実態と要請理由との間に生じた矛盾が、許諾文書のあいまいな表現の要因になったということを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。
10)「正倉院文書注釈―造石山寺所解移牒符案（三の１）―」（査読付）	単著	平成 28 年 3 月	奈良女子大学古代学学術研究センター『古代学』第８号 p.42～p.59 頁	二冊の科研報告書『正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（一）―　』『同（二）』の発展的続編である。日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。
11）「写経生・実務担当者の選択――「啓」という書式を選ぶ時―」	単著	平成 29 年 3 月	奈良女子大学古代学学術研究センター『漢字文化の受容―東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式―』報告集、pp66～83	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している８通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔報告書〕 1）正倉院文書訓読による古代言語生活の解明	共著	平成 22 年 3 月	平成 19 年度科学研究費補助金基盤研究Ｃ）（課題番号 1920396）研究成果報告書　（平成 19 年～21 年）	平成 19 年度科学研究費補助金　基盤研究（Ｃ）（課題番号 1920396）の 3 カ年の研究報告書である。以下の 3 冊からなる。 Ⅰ　正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（一）― 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 （執筆　桑原祐子）A4 版 161 頁 Ⅱ　正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状― 正倉院文書中の啓･書状をすべて収録し、写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。啓・書状を内容によって分類し、関連資料の解説も合わせて行った。日本の書状の歴史研究、書道史の研究のための基礎研究となるものである。 （執筆　黒田洋子）A4 版 360 頁 Ⅲ　正倉院文書からたどる言葉の世界 正倉院文書の中から、国語国文学研究の観点から重要である語彙を取り上げ、その語を含む文書の訓読と注釈を行い、注目すべき語の考察を行った。文書の写真・釈文を提示している。更に、正倉院文書と日本古代の文献との比較研究に関わる論考 2 編を収録した。 （執筆　中川ゆかり）A4 版 95 頁 以上の研究は、『日本語の研究』（日本語学会）第 8 巻 3 号の日本語学界の展望において注目された。
2）「正倉院文書訓読による日本語表記成立過程の解明」	共著	平成 26 年 3 月	平成 22 年度～25 年度科学研究費補助金基盤研究（Ｃ）（課題番号 22520467）研究成果報告書 研究代表：桑原祐子	平成 22 年～25 年度科学研究費補助金　基盤研究（Ｃ）（課題番号 22520467）の 4 カ年の研究報告書である。以下の２冊からなる。 Ⅰ　正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（二）― 注釈篇は、日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。論考篇には、これらの資料に関わる４編の論考を収録した。 （執筆　桑原祐子）A4 版 179 頁 Ⅱ　正倉院文書からたどる言葉の世界（二） 正倉院文書の中から、5 通の文書を取りあげ、写真・釈文・訓読文・現代語訳を施し、その文書の背景を解説し、国語国文学研究の観点から注目すべき語の考察を行った。更に、正倉院文書と日本古代

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の文献や漢籍との比較研究に関わる論考2編を収録した。 （執筆　中川ゆかり）A4版142頁
3）「正倉院文書の読解を通した上代文学の表現の生成に関する研究」	共著	平成29年3月	平成26年度～28年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：26370220、代表者：中川ゆかり）研究報告書	『正倉院文書注釈―造石山寺所解移牒符案（三）――』 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 （執筆　桑原祐子）A4版82頁
〔その他〕 栄原ゼミと私	単著	平成23年5月	大阪市立大学日本史学会　『市大日本史』第14号	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで10年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。
〔学会発表〕 1）道豊足の人事―「正倉院文書の訓読と注釈」の作業から	―	平成22年10月	正倉院文書研究会第29会大会 （大阪市立大学）	近江石山寺造営資料における文書・帳簿の分析を通して、古代の下級官人の人事システムと人事の実態のずれを明らかにし、その背景には、律令文書主義の中で文書の整合性を保つための様々な調整が行われたことをも、文書の訂正状況や表現の差異から分析検討を行った。
2）正倉院文書の「早速」―和製漢語の生まれる場面―	―	平成23年12月	国語語彙史研究会第99回大会 （大阪大学）	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対象させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。
3）正倉院文書の「運」と「漕」	―	平成26年11月	奈良女子大学古代学学術研究センター研究会 「正倉院文書研究の新たな試み」	文字を書くことが仕事であった古代の下級官人たちは、本来の漢語用法から逸脱しながらも、実務の現場にふさわしい漢字の使い方をしている。しかし、それは、彼らが漢語本来の用法を認識していなかった結果ではない。漢字の持つ機能を充分に理解したうえでの様々な工夫がそこにはあったと考えられる。そのような実態の一端を「運」と「漕」という言葉を通して明らかにし、日本的な漢字用法が生み出される背景を考えた。現代では「漕」は「コグ」とよまれるが、古代では水運による移動「ハコブ」を表していた。そこで、正倉院文書中の「運」と「漕」に着目し、その運用実態を調査し、加えて、漢字熟語「運漕」について、正倉院

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				文書や延喜式には独自の用法があることを明らかにした。
4)「写経生・実務担当者の選択――「啓」という書式を選ぶ時―」	―	平成 28 年 8 月 22 日	第 12 回若手研究者支援プログラム「漢字文化の受容―東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式―」	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している 8 通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。
5）帙了（筆）暇の実態と表現	―	平成 30 年 3 月 11 日	第 2 回正倉院文書の研究会（大阪市立大学）	東大寺写経所（官営写経所）の教師が提出した 240 通余の請暇解・不参解の中から、仕事の切れ目である「帙了暇」の実態について分析を行った。上帙が提出されたタイミングで提出された請暇解を取りあげ、その実態と表現の分析を行い、彼らが認識していた休暇の許容範囲を明らかにした。加えて、定型からはずれた表現の背後にある表現者の意図を読み解いた。
〔シンポジウム〕 1）正倉院文書と墨―韓国と日本の交流―	単独	平成 21 年 3 月	正倉院文書の文字と文化 （於釜山大学）	正倉院宝物中の新羅関連宝物の紹介と、それにまつわる文字資料の紹介を行い、特に新羅墨の形状にも関わる墨の助数詞「船」と「挺」の実態の調査についての報告を行った。墨の形状を反映していると考えられていた助数詞「船」は、ある特定の人物が使用していた助数詞であったことを報告した。合わせて、物を通じて日韓の交流についても言及した。
〔招待講演〕 1）古代言語資料としての正倉院文書	単独	平成 23 年 3 月	釜山大学日本研究所主催 （於釜山大学）	漢籍に例を見ない漢字熟語が正倉院文書の中には、しばしば見られる。このような漢字熟語について、誰がどのような場面で、誰に向かって使用したかということを分析していくと、使用者の心情や心理が明らかになり、和製漢語が生じる背景を考察することが可能になるということについて報告を行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成３０年3月３１日

氏名　　小 竹 光 夫

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
教科教育学	国語科教育　書写書道教育　教育方法　学習理論と評価 教師教育

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項

事　項	年　月	概　要
1　教育方法の実践例 ・書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫した授業方法の改善	平成２０年度～現在に至る	・兵庫教育大学学校教育学部の学生、兵庫教育大学学校教育研究科の院生を対象とする講義、演習において作成した資料の中で、書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫した。具体的には、ともすれば「書き方の伝授」に陥りがちな書写・書道の学習において、常に対人という意識を盛り込み、「文字を書くことはコミュニケーションの一環として重要な行為である」との視点を中核とした授業方法を提示した。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、講義及び演習において作成した資料の中で、書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫している。特にテキストとなる学習資料には具体的な事例を数多く導入し、「文字を書くことはコミュニケーションの一環として重要な行為である」との視点を重要視している。
・学生の授業に対するコメントへの対応	平成２年度～現在に至る	・大部分の授業科目において、毎時の提出物を課しているが、それに添えられるコメントに総て回答を返すことを試みている。最小学生数５名、最大学生数２３０名、対応によって学生の学習意欲が促進されている。回答字数、平均 60 字。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、授業コメントに対する回答は継続しており、授業評価においても学生たちの支持を受けている。
2　教材・学習資料の作成	平成２年度～現在に至る	・着任以来、兵庫教育大学学校教育学部、兵庫教育大学学校教育研究科の総ての授業科目に関して授業資料（教材等々を含んだサブノート形式）を、毎年度、学習者に適合させながら作成してきた。毎年実施される本学の授業評価においても、毎回、総ての授業科目を対象として実施される授業評価においても、この授業資料に対する評価は高い。兵庫教育大学学校教育研究科の「書写教育論」（現「文字の手書き行為実践研究」）、「書写教育論演習」（現「文字の手書き行為実践研究演習」）での授業資料は、半期で平均１００ページの冊子となる。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、授業資料の改善・工夫は続けており、平成２６年度開設科目「書写・書道入門」においては、総ページ数１０１の大冊となった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価（兵庫教育大学学校教育学部学生、兵庫教育大学学校教育研究科院生、並びに奈良学園大学人間教育学部学生による授業評価）	平成１４年度～現在に至る	・本学のＦＤ推進活動の一環である学生による授業評価においても、各授業科目ともに平均４以上（全体平均３．７程度）の評価を維持している。特に学生側から、改善に関する指摘等はない。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、各授業科目ともに平均４以上（全体平均３．７程度）の評価を維持している。特に学生側から、改善に関する指摘等はない。

４　実務の経験を有する者についての特記事項 公開講座講師 王寺町リーベルカレッジ	平成２６年７月	奈良学園大学と王寺町が連携して行う公開講座の第６回を担当し、「カメラを持ってでかけよう～路傍の語り部との対話」というテーマで、石碑等書的文化財について講話を行った。
免許状更新講習講師 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する国語科授業づくり【兵庫教育大学開催】	平成２１年８月	現代日本語の特質などについて理解を深めるために、古い日本の文化や言語とその歴史的な変遷等との関連について考えながら、国語教育の基礎事項を見つめ直した。具体的には、新しい指導要領の内容で示される「昔の人のものの見方や感じ方」を知り、「語感、言葉の使い方に対する感覚」を磨き、「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違い」や語句・文字の「由来や特質」に関心を持ち、理解を深めるために、どのような指導が可能か、その方策などについて論述し、演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写） 【兵庫教育大学開催】	平成２１年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
芸術科書道の理論と実践 【兵庫教育大学開催】	平成２１年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写） 【兵庫教育大学開催】	平成２１年１２月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写） 【兵庫教育大学開催】	平成２２年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。

芸術科書道の理論と実践 【兵庫教育大学開催】	平成２２年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【兵庫教育大学開催】	平成２３年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
芸術科書道の理論と実践 【兵庫教育大学開催】	平成２３年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【兵庫教育大学開催】	平成２４年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【兵庫教育大学開催】	平成２５年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【奈良学園大学開催】	平成２７年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）【奈良学園大学開催】	平成２８年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。

文字を手書きすることの意義と価値（書写）【奈良学園大学開催】	平成２９年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
兵庫県教育委員会認定講習講師 国語	平成２４年８月	我々は当たり前のように「国語」という言葉を使っており、そして使い慣れてしまっているため、漠然と学習指導を行っているのではないかとの投げかけから始めた。極論すれば、「国語の力」をどう育て、高めていくかについての方策についても、具体的に提示できないのではないかとさえ感じられるとの問題提起をもとに、一体、「国語」とは何か、「ことば」とは何か、「文字」とは何かを考える場を設定した。原点に立ち返って考えることの必要性、検証し確認していく場として位置づけられるよう設定した。
研修会・講習会講師 兵庫県中学校書写教育研究大会	平成１６年１０月～平成２０年１０月	研究大会の助言者として継続的な研修・指導に取り組んだ。また研究大会当日は講師として講演を行った。 大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２０年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
兵庫県中学校書写教育研究大会	平成２０年８月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
第１７回墨華香まちフェスティバルみなぎの書道展	平成２０年９月	審査委員（審査委員長）を務めた。出品点数１万点余りの最終審査と、講評を行った。
兵庫県立高砂南高等学校高大連携事業研修会講師	平成２１年１月	教師教育に関する現職教育の研修会講師。教師としての基本姿勢、授業等に取り組む視点や態度の構築について論述し、理解を深めた。
鳥取県高等学校書道教育研究会総会	平成２１年５月	総会講師として、２１世紀の書道教育の方向性について論述し、現職教員の意見交流に際して助言を行った。
兵庫県上郡町立山野里小学校授業研究会	平成２１年６月	国語科の授業研究会講師・助言者。「スイミー」の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２１年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２１年９月	書写の授業研究会講師・助言者。低学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
第９回兵庫県芸術三科合同研究大会シンポジウム「生きる力を拓く芸術教育」	平成２２年５月	シンポジスト。高等学校のおける芸術教育の在り方と展望について提案し、討論を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年５月	書写の授業研究会講師・助言者。高学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２２年５月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。国語科書写を基盤とした書道学習の展開について実践授業を行った。

たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年５月	書写の授業研究会講師・助言者。中学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年８月	書写の授業研究会講師・助言者。示範授業を行い、以降の授業研究において助言を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２２年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
多可郡書写指導研修	平成２２年８月	多可郡の小・中学校書写担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
明石市立小・養護学校書写教育担当者会研修会	平成２２年１０月	明石市の小学校書写担当者、及び養護学校書写教育担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、示範授業と毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２２年１０月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。地域性を生かした書道学習の展開について実践授業を行った。
播磨西地区小学校書写教育研究大会	平成２２年１０月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２３年２月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。工芸的な分野（墨流し）とのコラボレーションを図った作品の創作について実践授業を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２３年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。の事例を提示し、実践・演習を行った。
明石市立小・養護学校書写教育担当者会研修会	平成２３年１０月	明石市の小学校書写担当者、及び養護学校書写教育担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、示範授業と毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
兵庫教育大学附属中学校　キャリア総合科目「書道」	平成２４年４～１０月	キャリア選択科目の特別講師として務めた。中学校２・３年生の選択履修者に対し、基本的な毛筆の運用、篆刻、染色等々を指導し、発表会へと導いた。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２４年８月	特別講師催短期研修。小・中学校における国語科書写の学習について論述し、具体的な演習とともに理解を深めた。 「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、小学校３年生を対象とした示範授業を行った。授業後、授業研究会の助言者を務めた。
京都市立南浜小学校授業研究会	平成２５年８月	「書くことに喜びを感じる書写の授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。の事例を提示し、実践・演習を行った。
東京都教職員センター　平成２５年度教科等・教育課題研修	平成２５年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―言語活動を重視した授業の特色と改善―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。
奈良学園大学オープンキャンパス体験授業	平成２６年７月	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、体験授業「漂ってみよう～不思議な手書き文字の世界を！」の授業者として示範を行い、具体的実践の方法を提示・公開した。
ビーンズツリー２１・ビーンズ２１合同研修会	平成２６年８月	大阪府下の校長、並びに管理職の合同研修会において、「今、求められている授業改革」というテーマで講演を行い、実践に対する質疑応答に応じた。

東京都教職員センター　平成２６年度教科等・教育課題研修	平成２６年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―書写・書道の指導法研究―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。
第３回三田市小学校国語担当者会並びに三田市教育研究グループ国語部会研修会	平成２６年１０月	三田市立三田小学校神野佳代子教諭の提案授業「サラダを作ってりっちゃんに伝えよう（１年生）」を観察し、事後研究会において言語活動を中心とした授業研究のあり方について助言し、講話を行った。
東京都教職員センター　平成２７年度教科等・教育課題研修	平成２７年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―書写・書道の指導法研究―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。主たるテーマは、以下の通り。 ・「文字を書くことの意義」の理解 ・自己の指導法の検証・改善について ・書写・書道教育におけるＩＣＴ活用の有用性の理解及び演習
２０１５年度 箕面自由学園小学校 公開授業研究会「互いの思考を分かち合う子どもの育成」	平成２８年２月	箕面自由学園小学校 公開授業研究会「互いの思考を分かち合う子どもの育成」の講演会講師。 「思考力・表現力を育む教育の原点」 ～対談「私を導いてくださった恩師の言葉」～ 対談者 梶田叡一（前中央教育審議会副会長・前兵庫教育大学学長・奈良学園大学学長） 小竹光夫（兵庫教育大学名誉教授・奈良学園大学教授） ※コーディネーター 阿部秀高（箕面自由学園小学校長）
２０１６年度　豊中市野畑小学校研修会	平成２８年９月	校内研修会の講師として、「主体的な学びとは」とのテーマで講演し、以降、質疑と協議を行った。「主体的な学びとは」の裏面に隠れているのは、昨今話題となっているアクティブラーニングであるが、それを表面化させるのではなく、教師集団の学びの形や高まりに焦点をあてた研修会とした。
２０１６年度　北播書写書道教育研究会	平成２９年１０月	兵庫県北播地区の研究会講師として、示範授業（小学校６年生対象　「字形を整えて書く～自分で工夫し、発見しながら書いてみよう～）と講演（講演題「豊かな文字の使い手となるために」）を行った。単なる手本を見て筆写する実習授業ではなく、児童自身が発見しながら考え、書き表す道筋を呈示した。
５　その他 兵庫教育大学における 学位（修士）指導実績	平成２年度～平成２４年度	学位論文テーマと指導内容 小学校書写教育１名（副査） 小学校における文字習得に関しての研究であったので、低学年の文字教育について助言・指導を行った。 中学校書写教育１名（副査） 毛筆執筆法に関しての研究であったので、歴史的変遷や意義・価値について助言。指導を行った。 高等学校書道教育１名（主査） 漢字仮名交じりの書に関しての研究であったので、教材の価値や指導法、ならびに論拠とする古典の設定の方法について助言・指導を行った。 作家論（須田剋太・河東碧梧桐）２名（副査） 作品鑑賞の方法や、書道史的価値、さらには他の書家との比較研究の方法について助言・指導を行った。 情報化時代の言語機能３名（副査１、主査２） コンピュータの活用について、情報リテラシーについて助言・指導を行った。さらに、文字の手書き行為と印字・活字文化の捉え方について助言・指導を行った。

		言語事項と「読むこと」「書くこと」「聞くこと」１名（主査） 国語科と近接する部分であるので、言語事項に関する基本的な理解と、各領域との関連について助言・指導を行った。特に各個が独立して存在するのではなく、密接な繋がりの中で機能していくことについて、参考資料等をもとに助言を与えた。

職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項

事 項	年 月	概 要
1　資格、免許	昭和４６年３月	中学校教諭２級普通免許状（国語）
	昭和４６年３月	高等学校教諭２級普通免許状（書道） 15年0単位の申請で高等学校教諭１級普通免許状（書道）
	平成元年４月	法改正による 中学校教諭２種免許状（国語） 高等学校教諭専修免許状（書道）
2　特許		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項		なし
4　その他		なし

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

	著書、学術論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　　要
(著書)					
01	明解　書写教育	共著	平成21.4	全国大学書写書道教育学会編	教員養成における小・中学校書写指導の在り方、実践についてまとめ、編成されたものである。総ページ数１４１ページ。執筆分担を行っている。該当ページは以下の通りである。 Ｂ５版　全１４１頁 共著者　加藤祐司　浦野俊則　鈴木慶子　宮澤正明　久米公　押木秀樹　青山浩之　広瀬裕之　小竹光夫　長野秀章　松本仁志　松本貴子　津村幸恵　杉崎哲子 本人担当部分　pp.12-14 単著 内容　「Ⅱ　書写授業の理論と実践　1-（2）～（3）」主に小学校の実践をまとめて解説した。
02	実技教育・実習ガイドブック	共著	平成25.3	兵庫教育大学　実技教育研究指導センター	小・中学校における実技に関わる教科目について、指導者の実技力・授業力向上の観点から、学習指導の在り方を論じている。特に実技教育に関する教育実習の手引きが皆無に近いことから、本学学校教育センター（教育実習担当）との連携をとりながらまとめ上げている。 Ａ4版　全９２頁 共著者　河邊　昭子　初田隆　永木耕介　松下健二　前芝武史　新山真弓　小竹光夫 本人担当部分　pp.77-91 単著 内容　書写指導のあり方についての手引きとなる内容を執筆した。

	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会発表等の 名称	概　　要
03	見つける　わかる　できる 3Step で変わる 実技教科指導ガイドブック	共著	平成 26.4	明治図書出版株式会社	小・中学校における実技に関わる教科目について、指導者の実技力・授業力向上の観点から、学習指導の具体的方法を提示・提案している。特に実技教育に関する教育実習の手引きが皆無に近く、教員になるという段階から、教員として高まるという分野までを包括した総合的な見地から論述している。 編著　小竹光夫 著者　兵庫教育大学実技教育研究指導センター Ａ5版　全１５１頁 共著者　上原禎弘　河邊昭子　初田隆　筒井茂喜　永木耕介　前芝武史　新山真弓　小竹光夫 本人担当部分　pp. 01-05 単著 pp. 09-10 単著 pp. 13-29 単著 pp. 119-140 単著 pp. 147-149 単著 内容　書写指導のあり方、ならびに教育話法・板書指導について執筆した。
（学術論文）					
01	書写における授業観察の視点 （査読付）	単著	平成 25.3	言語表現研究（兵庫教育大学言語表現学会） 第 29 号 pp. 29-41	いわゆる実技系の書写学習においては、「優れた実技力を持つ指導者が、良き授業者である」との意識が多くの部分で流通している。そのため、実技力向上に偏りがちで、授業研究もなされない状態が続いている。そのような中、効率的な書写を行うための書写力の習得の場である授業を対象として分析と考察を行い、授業観察の視点に関する必須の要件について論じ、提案を行っている。
02	文字を手書きすることの意義と価値 （査読付）	単著	平成 26.4	人間教育学研究（奈良学園大学人間教育学会） 創刊号 pp. 79-88	「書は人なり」という言葉が安易に口にされ、それがまるで手書き文字の価値であるかのように言い伝えられている風潮がある。確かに人間の手によって創出される文字は、さまざまな様相・要素を帯びているが、その磨かれないままの性を個性と位置付けることは、多くの誤解を生じさせる危険性を含んでいる。本論では、その「書は人なり」という文言を起点としながら、文字を手書きするという行為に客観的な妥当性を与えようとしている。
03	伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘　Ⅱ	単著	平成 28.3	奈良学園大学紀要（奈良学園大学） 第４集 pp. 11-21	本論Ⅰにおいても問題提起したことであるが、書写指導は用具・用材の類似によって、書道での学習法がそのままにスライドされることが多い。しかし、それらの多くには理論的な裏付けも希薄な、いわゆる慣習として定着したものがある。本論Ⅱにおいては、それらの中の左手書字の学習者への対応を、「均一平等な環境下での学び」という観点で取り上げ、問題点の提起と解決法について論及している。

	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会発表等の 名称	概　　要
04	一碑百想Ⅱ　―書的文化財の発掘と教材化への試み―	単著	平成28.3	奈良学園大学紀要 （奈良学園大学） 第6集 pp. 1-11	本論「一碑百想」は地域に散在する石碑等の書的文化財の焦点を当て、その発掘と文化財としての価値を明らかにするとともに、高等学校芸術科書道の生徒用教材集として編纂する目的で立ち上げられている。Ⅰにおいては、教材集としての概要と主として広島県所在の石碑群の年表作成を行ったが、本論Ⅱでは研究としての意義づけと、文化財としての価値の判断基準に論及し、研究としての体系を整えることとした。
05	伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘　Ⅲ　―数的優位の方法を反転させ、数的劣位の側の対応とする矛盾について― （査読付）	共著	平成28.12	人間教育学研究（日本人間教育学会） 第4号 pp. 79-88	本論Ⅱでも触れた左手書字における課題について、教育現場で展開される種々の方法・指導言に焦点を当て、その問題点と解決の方法について論述し、その具体を提示した。特に右手書字の指導法を反転するだけで、左手書字への対応とする従来の方法は問題点も多く、根本的な手指の運動特性との関連で考えていかなければならないことを例示し、提案とした。 共著者　小竹光夫，竹中優志 全体に関わっているため担当抽出不可能
06	伝統的書写指導の誤解と問題点の指摘　Ⅳ	単著	平成29.9	奈良学園大学紀要 （奈良学園大学） 第7集 pp. 45-55	本論では、「型」というものが書写する上でどのような機能を発揮しているのかについて考え、その型の持つ形骸的な部分を排除することによって、新しい文字を効率的に書く方法を提示しようとしている。特に「姿勢」については、視認できることが極端な長短、例えば「姿勢が正しくないと良い字が書けない」などという指導にまで至る点を問題視している。
07	日本における文字の未来について （査読付）	共著	平成29.12	人間教育研究（奈良学園大学人間教育学研究会） 第1号（創刊号） pp. 115-132	ゼミの研究グループの共同研究として構築し、「日本の文字文化の未来」について論じている。混迷を極める時代であるがゆえに、なかなか未来を見通すことは難しいが、その将来への予見なくして我々はこれからの言語生活を送っていくことはできまい。特に学部生という未だ研究の緒についた段階の一人ひとりであることから、身の周りの文字についての踏査・収集から始めて、本論の形にまとめ上げた。 共著者　白崎 みなみ，金子 ひかる，桐木千夏 千夏，楠見 遼太郎，小竹 光夫，杉浦 佑奈，田口 太智，大仁 寛明，前田 直哉，山田 雄大
08	ゼミ指導の構築と充実について （査読付）	単著	平成29.12	人間教育研究（奈良学園大学人間教育学研究会） 第1号（創刊号） pp. 1-16	本論では、模索されるゼミナール活動の在り方について論を及ぼし、広範な意味では「学士力の確実な育成」と拡大していこうと考えている。多様化が進むなか、大学に進学してくる学徒たちの興味関心、そして目的感も多岐にわたるのが実状であろう。そのような中、指導者が自身の専門分野に固執し、啓発を行おうとするのでは、学びは硬直化して機能しない。一事例ではあるが、実際の活動の様を提示し、在り方を考える提案としている。

	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会発表等の 名称	概　　要
09	會津八一の歌碑について（西の京）	単著	平成30.3	奈良学園大学紀要（奈良学園大学） 第８集 pp. 41-51	当該の會津八一は越後の人間であり、さらに早稲田大学等で教鞭を執ってはいるが、奈良を愛し、また万葉の自然や文化を広く伝え、紹介した人間である。また書人としても名高い人物ではあるが、その書はいわゆる「書き習った」という習字臭漂うものでなく、八一の人柄や思想が表出した、極めて風格あるものである。犬養孝同様、奈良県内所在の書碑（歌碑）の多さでも知られており、奈良県（大和）の文化・風土を語る上では欠くことのできない人物である。本論は先の「一碑百想」を拡大した研究であり、地域を拡大しながら県内所在歌碑を網羅していこうと考えている。
（その他）					
「研究報告書」					
01	小学校における「ことばの力」の育成	共著	平成21.3	平成20年度　大学院カリキュラム改革プロジェクト研究報告書（兵庫教育大学）	PISA型読解力が問題点として指摘され中、児童・生徒の論理的思考力や想像力の必要性が喫緊の課題となっている。学習指導要領で言う「ことばの力の育成」は、その源ともなるものであるが、それは児童・生徒に対してだけ向けられるものではあるまい。本プロジェクト研究では、実際の教育現場での授業実践実践を対象として、指導者である教師側の言語力育成を主眼として問題提起を行っている。主要には、 ①導入時の指導者側話法 ②題材提示時における指導者側の話法 ③児童への発問の際の話法 ④児童の発言に対する話法 の４項目から考察し、大学院授業科目新設への提案、提言を行っている。 （研究代表者　小竹光夫） （共同研究者）野本立人、伊崎一夫、神野佳代子、名村嘉将、阿部秀高、高田正大
02	教員養成プログラムにおける「創発のメソッド」の構築	共著	平成23.3	科学研究費　挑戦的萌芽研究報告書 プロジェクトコードKA21653101 総ページ数118	急速な情報化の中、国際化・グローバル化という課題も、極めて容易な形で実現可能な時代を迎えている。そのため、いわゆる日本人としての自覚や意識は、鍛えられないままに大海に放り出されようとしているかに見える。卑近な例であるが、「全国学力・学習状況調査」の集計・分析データも「数字」として一人歩きする場合が多く、「活用」や「習得」の部分で問題とされた「自らの思考や行動を論理的に客観視できないという脆弱さ」は指摘されるものの、数字を開示するという論議や短絡的な競争理論への危惧の中に埋没しがちであり、日々の学習指導の在り方という具体性には至っていないのが現状であろう。換言すれば、自らの思考や行動を論理的に客観視できないという脆弱さとは、人間という個体としての行動と知の不整合、遊離でもあると考えられる。以上のような欠落によ

	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会発表等の 名称	概　　要
					って、「国際的な競争の中で勝ち抜いていく力」の必要性が叫ばれる今日において、競争以前の自らの存在や価値を明らかにすることさえ不可能としている。「PISA 型読解力」でさえも国語科における「読解力」と重ねられ、教育現場では混用が生じている場合もある。本研究においては読解リテラシーに偏りがちな「PISA 型読解力」を本来の立場から見直し、数学的・科学的なリテラシーを含めながら再検証していく立場をとる。その上に立って、「児童生徒が社会の中で生き抜いていく過程において、必要とするであろう活用力」の総体を明らかにし、その中から教員養成課程において教師側の資質として扱うべき問題を抽出し、教員養成プログラムの具体的な授業実践の中で変容を測定し、効果を検証して報告書としてまとめた。 （研究代表者　22 年度　梶田叡一 23 年度　小竹光夫） （共同研究者）米田豊、堀江祐爾、濱中裕明
「学校・研究室紀要、教育実践論文」					
01	文字を手書きすることについての…備忘言志録	単著	平成22.1～平成 24.3	書道美術新聞（萱原書房）	情報化時代の到来によって，文字を手書きする分野（書写・書道教育）には，混迷と混乱が起こり始めている。以前のように「実用」というキーワードでは押し切れなくなった文字を手書きすることの必要性を，意義と価値という視点で再構築し，理論と実践を融合させていこうとする目的の下で論述されている。特に対象を書写・書道教育に関わる実践者（教員・社会教育分野での指導者）としているため，平易かつ一般的な用語を用いた論述を進めている。新聞発刊に合わせた月２回の連載で，平均原稿量 400 字詰め原稿用紙×10 枚、連載総計は 48 回である。
「初等・中等教育関係の教科書の編集・執筆」					
01	小学校教科書 『新版　書写』	単著	平成 14 年版 ～現在に至る	教育出版株式会社	編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。
	『書写』				編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。
	『書写』				編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。
	『小学　書写』	編著	平成 14 年版 ～25 年版	教育出版株式会社	編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。平成 14 年版については、毛筆手本教材の揮毫を行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年　3 月 31 日

氏名　善野　八千子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	学校間接続、生活科、教員の力量形成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ・リフレクションカードを活用した学習の定着及びグループディスカッションの実施	平成 20 年 4 月～現在に至る	奈良教育大学兼任講師として担当の「初等教科教育法（生活）」(3 回生)（教職科目、３年次配当、半期、必修 2 単位)、奈良学園大学　教授として担当の「人間教育開発力実践演習Ⅰ Ⅱ」(１～2 回生)（専門科目、１～2 年次配当、通年、選択 1 単位)、において、実践した。 学習定着を目的として、毎時限の最後にリフレクションカードによるフィードバックを実施。毎回、学生が記述したリフレクションカードに、コメント評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなり、学生自身が毎回の自己の学修成果と課題を明確にできた。 グループディスカッションについては、初回は、ペアワークとし、徐々に 5～6 人グループで行った。テーマに応じた協同的な学びの姿が見られ、話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果からも「自分と違う意見や考えによって理解が深まった」等の学生の満足度がきわめて高かった。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」(2 回生)（教職科目、２年次後期配当、半期、必修 2 単位)、「生活の理解」1 年次後期配当、半期、必修 2 単位)、「人間教育実践力開発演習Ⅰ・Ⅱ」(１～2 回生)（専門科目、１～2 年次配当、通年、選択 1 単位)、において実践した。
	平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育学概論」(1 回生)（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、「教育制度論」(専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、「教職実践演習」(専門科目、2 年次配当、半期、必修 1 単位)において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント及び A 評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。承認や賞賛の体験が乏しい学生にとって意欲の高まりが顕著に見られた。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなることから、学生自身が自己の学習成果と課題を明確にすることができた。グループディスカッションについては、少人数から徐々に 5～6 人グループで行った。話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果から「授業満足度は、全クラス 97%以上であった。

・毎回の復習テストを活用した学習の定着の工夫	平成22年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育制度論」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、学習の定着を図るために、毎回の講義導入において復習ミニテストを実施したところ、履修者の相当数において、当該科目の履修の前後を比較すると、復習の習慣化と学習の定着度が向上した。
・予習レポートの活用と授業設計	平成23年4月 ～現在に至る	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育学概論」（1回生）（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、予習習慣の定着のために毎回の予習レポート「子ども情報カード」を実施した。学生は、シラバスに関連した子どもに関するニュース及び自己の考えを記述してくる。毎回の講義の冒頭で発表させることで、学生同士の関心意欲が喚起できる。また、教員は学生の実態を把握し、配慮した授業設計を行うことができる。履修者の相当数において、予習の習慣化と学習課題に対する関心意欲の向上が見られた。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（2回生）（教職科目、２年次後期配当、半期、必修2単位）、「生活の理解」1年次後期配当、半期、必修2単位）において実践した。
2　作成した教科書、教材		
・「学校評価を活かした学校改善の秘策」（再掲）	平成17年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育原理（平成20年3月まで）、教育学概論（平成20年4月から科目名変更）」（専門科目、1年次配当、半期、必修２単位）、において使用。 教員の資質向上のための学校改善の方策について、評価の運用及び実践事例の内容を示した。学生は、毎回の講義で10分間読解し、本時の目標に関わる章について、気づき及び疑問を発表し、教育の現状及びこれからの教育課題について意欲的な対話が可能になった。
・学校力・教師力を高める学校評価（再掲）	平成22年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育制度論」（専門科目、2年次配当、半期、必修２単位）において、使用した。教育制度における全容から、とりわけ学校評価の目的及び信頼構築の有様と実践事例の内容を教育制度の視点から示した。学生は、理解の困難な制度についても、公教育における制度のや現代的課題に関心を深めた。また、具体的な学校現場の事例を通して理解した。
・小学校教科用図書「あたらしいせいかつ」	平成23年4月 ～現在に至る	平成23年度用、平成27年度用小学校生活科　教科用図書　採択された市町村立小学校及び私立小学校の第1学年・第2学年に於いて、使用されている。 また、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、２年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。学生は毎時間の模擬授業の際に活用し、学校現場での実践力強化として指導案作成のプロセスと低学年における児童理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、指導法の課題が明確になった。
・キャリア教育読本「コドモタチへの想い」（再掲）	平成23年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「キャリアデザイン演習」（専門科目、1年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を

		知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。
・幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発（再掲）	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教職実践演習」（専門科目、２年次配当、半期、必修１単位）において、使用した。幼児期から児童期に関わる教員の資質向上のために特に就学前後の課題や生活科の具体的事例について示した。学生は、これからの保育・教育の課題を検討し実践力向上につなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成24年9月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「キャリアデザイン演習Ⅱ」（専門科目、１年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、教育保育現場の実際を知り、就業力向上へもつなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成27年9月～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、２年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、指導法の課題が明確になった。
・教科力　生活	平成28年9月～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活の理解」（教職科目、１年次配当、後期、必修２単位）において、使用。保育者・教員の資質向上のための小学校生活の理論をもとに、歴史や評価の実践例についても提示。学生は、生活科の科目の特性に位置付いたカリキュラム作成と指導理論のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、子ども理解の課題が明確になった。
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
高槻市幼稚園長研修会	平成20年4月25日	信頼される幼稚園づくりのためにについて講演した。
愛知県蟹江町教職員研修会	平成20年5月1日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
奈良県葛城市新庄小学校区教職員研修会	平成20年5月2日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
静岡県管理職研修会（高等学校・特別支援校）	平成20年5月9日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
兵庫県新三田市幼小中教頭研修	平成20年5月15日	「校内研究活性化に向けて教頭・研究主任等の果たす役割」～元気な学校づくりのために～について講演した。
兵庫県高砂市立米田小学校内研修	平成20年5月16日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
静岡県管理職研修会（小・中学校）	平成20年5月20日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。

岐阜授業実践フォーラム	平成20年6月1日	「学力向上と学校評価」～新教育課程をふまえて2008年はこう発信する～について講演した。
芦屋市立山手小学校内研修会	平成20年6月3日	これからの生活科について講演した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会指導助言	平成20年6月6日	評価を通して「実践的社会人」を育む単元を構築するシステムの開発「いっしょにどろだんごをつくろう」を通してについて講演した。
奈良学園幼稚園ＰＴＡ講演会	平成20年6月7日	幼稚園から小学校へ育ちと学びの連続について講演した。
大和郡山市幼稚園長研修会	平成20年6月10日	学校評価を生かした元気な幼稚園づくりについて講演した。
福山市立駅家小学校内研修会	平成20年6月13日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
御殿場市管理職研修会（小・中学校）	平成20年6月20日	これからの学校評価「活力ある学校づくり」のためにについて講演した。
福山市立内海小学校内研修会	平成20年6月24日	よく見・よく聴いて、考え、課題追求する子の育成～未来を拓く　総合的な学習の時間の創造～について講演した。
奈良市30人学級指導改善検討委員会	平成20年6月26日	30人学級指導改善について、講演した。
兵庫県管理職研修会（高等学校）	平成20年7月8日	教育活動の充実・改善をめざした学校評価について講演した。
大阪大学看護局教育委員会合同研修会	平成20年7月11日	指導の充実・改善をめざして「教育原理・教育方法」について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成20年7月15日	元気な学校づくり―学校評価を生かして―について講演した。
大阪大学看護局教育委員会合同研修会	平成20年7月18日	教育評価　成長促進指導の効果的な評価をめざしてについて講演した。
教育フォーラム in 東広島	平成20年7月21日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえてについて講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成20年7月25日	学校評価の必要性と目的～元気な学校づくりをめざして～について講演した。
福井県幼小連携研修会	平成20年7月28日	幼児期から児童期への育ちをつなぐ、豊かな教育の創造について講演した。
大和郡山市幼小連携研修会	平成20年7月29日	幼稚園教育と小学校教育をつなぐ～育ちと学びの連続～について講演した。
教職員対象幼児教育講座	平成20年8月1日	これからの幼児教育と小学校教育 ～脳の発達を促す遊びと学びの連続～について講演した。
奈良市幼小連携講座	平成20年8月4日	生活科の中での幼小連携について講演した。
西春日井地区学校運営研修会	平成20年8月5日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
新潟市生活科研究会	平成20年8月6日	「生活科の授業力」～育ちと学びの連続をふまえて～について講演した。
大淀町教職員研修会	平成20年8月8日	学校評価を活かして学校力・教師力を高める～やってよかった学校評価～について講演した。

御殿場市中堅教員研修会	平成20年8月9日	元気な学校づくり～学校経営の参加から参画へ～について講演した。
御殿場市幼保小中連携研修会	平成20年8月9日	幼児教育と小学校教育をつなぐ～育ちと学びの連続～について講演した。
大和郡山市管理職学校評価研修会	平成20年8月11日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
京都フォーラム	平成20年8月17日	学力向上と学校評価」～新教育課程をふまえて2008年はこう発信する～　について講演した。
京丹後市管理職研修会	平成20年8月21日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
大和郡山市幼稚園教職員研修会	平成20年8月22日	学校評価を活かした元気な幼稚園づくりについて講演した。
伊丹市教職員研修会	平成20年8月25日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
明石市教頭研修会	平成20年8月26日	育ちと学びをつなぐ学校評価について講演した。
御所市教職員学校評価研修会	平成20年8月28日	評価で変わる学校改善への道筋 について講演した。
奈良市教育改革推進フォーラム	平成20年8月29日	幼児教育の改善と充実～30人学級の取組みを通して～について講演した。
奈良市教育改革推進フォーラム	平成20年8月29日	『幼児教育から小学校教育へ学びと育ちの連続』について講演した。
津市香海中学校区学校関係者評価研修会	平成20年9月2日	学校力・教師力を高める学校評価 について講演した。
兵庫県第三者評価訪問	平成20年9月5日	第三者評価者として訪問指導をした。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成20年9月9日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
生駒市教頭研修会	平成20年9月16日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
東通村僻地教育研究会	平成20年9月25日	学校評価のあり方について講演した。
東通村幼小中一貫教育研究会	平成20年9月26日	幼児教育から義務教育へ　学びと育ちの連続について講演した。
津市東橋内中学校区研修会	平成20年9月30日	学校力・教師力を高める学校評価について講演した。
福井市小中学校校長課題別研修会	平成20年10月7日	新学習指導要領対応に向けた学校経営マネジメントと校長の役割について講演した。
福井県私立高等学校第三者評価訪問	平成20年10月9日	第三者評価者として訪問指導をした。
福井県私立高等学校第三者評価訪問	平成20年10月10日	第三者評価者として訪問指導をした。
摂津市味生小学校校内研究授業	平成20年10月14日	伝えあおう　思いを！高めあおう　学びを！～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
文部科学省推進事業広島県福山市立内海小学校教育研究会	平成20年10月17日	探求の力を育む総合的な学習の時間～新学習指導要領をふまえて～ について講演した。

摂津市スクール広場「未来」研修会	平成 20 年 10 月 21 日	子どもにつけたい力と教職員の力量形成～新学習指導要領の改訂をふまえて～について講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成 20 年 10 月 24 日	学校評価における自己評価の進め方～元気の出る学校づくりのために～について講演した。
奈良市 30 人学級指導改善検討委員会	平成 20 年 10 月 28 日	30 人学級指導改善についてについて講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成 20 年 10 月 30 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
東通村幼小中一貫教育小委員会	平成 20 年 11 月 4 日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
楽しい子育て講座	平成 20 年 11 月 8 日	「小学校に行くまでにしたい 10 の親子あそびと会話」について講演した。
御所市学校評価研修会	平成 20 年 11 月 11 日	新学習指導要領対応に向けた学校経営マネジメントと学校評価について講演した。
片桐幼稚園第三者評価訪問	平成 20 年 11 月 27 日	第三者評価者として訪問指導をした。
摂津市味生小学校研究発表会	平成 20 年 11 月 28 日	あたたかい心とことばのあふれる元気な学校づくり ～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
富士市子育てシンポジウム	平成 20 年 11 月 29 日	「みんなで始めよう！ふじの子育て」 について講演した。
和泉市生活科研究会	平成 20 年 12 月 3 日	「生活科の授業力」～育ちと学びの連続をふまえて～について講演した。
兵庫県第三者評価訪問	平成 20 年 12 月 12 日	訪問により第三者評価を実施した。
奈良県保幼小連携講座	平成 20 年 12 月 25 日	幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
岡山県総社市教職員研修会	平成 21 年 1 月 13 日	元気の出る学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
教員免許更新講習会	平成 21 年 1 月 18 日	教職についての省察・教育政策の動向について講演した。
摂津市保幼小連携講座	平成 21 年 1 月 20 日	幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
JS コーポレーション社内研修	平成 21 年 1 月 22 日	これからの学校教育について講演した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会	平成 21 年 1 月 23 日	生活科分科会「かがみをつかってかたちあそびをしよう」授業リフレクションにおいて、指導助言した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会「分科会」におけるこーで	平成 21 年 1 月 23 日	今、必要とされる学校のあり方子どもと教師がともに成長していく単元を構築するシステム「学校・保護者・地域・大学や関係機関などによる知の結集」について講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成 21 年 1 月 27 日	次につながる学校評価のためにについて講演した。
西宮市教頭研修会	平成 21 年 1 月 30 日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。

羽曳野市立丹比小学校シンポジウム	平成21年2月1日	次につながる学校評価のために～学校、保護者、地域の連携・協働を通して～について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成21年2月3日	幼稚園における学校評価のあり方について講演した。
東京都日野市教職員研修会	平成21年2月9日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
兵庫県第三者評価検討委員会	平成21年2月13日	訪問指導し、第三者評価を務めた。
静岡県磐田市立福田小学校内研修会	平成21年2月16日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
伊丹学校評価運営委員会	平成21年2月17日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
子育て支援講座（ｼﾙﾊﾞｰ人材ｾﾝﾀｰ）	平成21年2月18日	子どもの育ちと学びの連続をめざして「小学校に行くまでにしたい子育てあそびと会話」について講演した。
東通村幼小中一貫教育小委員会	平成21年2月23日	認定子ども園：幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
長浜市幼稚園長研修会	平成21年2月24日	学校評価を生かした元気な幼稚園づくり～新幼稚園教育要領を踏まえて～について講演した。
広島県庄原市教職員研修会	平成21年2月26日	学校評価を活かした学校改善～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
2008教育ソリューションフェア	平成21年2月28日	次につながる学校評価とは～学校力・教師力を高めるために～について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成21年3月3日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
文部科学省幼稚園教育の評価改善充実検討委員会	平成21年3月9日	大和郡山市幼稚園における取組報告について講演した。
静岡県総合教育センター主催新任校長研修（小・中）講演（於：静岡県総合教育センター	平成21年5月1日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
芦屋市立幼稚園教育研究会主催　幼稚園園教育研究会総会講演	平成21年5月12日	元気な幼稚園づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会 講演（於：片桐西幼稚園）	平成21年5月14日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
静岡県総合教育センター主催新任教頭研修（小・中）講演（於：静岡県総合教育センター	平成21年5月19日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県公立中学校長会主催　研修大会講演（於：クレイトンベイホテル）	平成21年5月22日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：片桐幼稚園）	平成21年5月26日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会 講演（於：昭和幼稚園）	平成21年5月29日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立「幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：平和幼稚園）	平成21年6月2日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。

大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：矢田幼稚園）	平成21年6月12日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
山梨県教育委員会主催　学校評価シンポジウム講演（於：山梨県総合教育センター）	平成21年6月16日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：郡山西幼稚園）	平成21年6月18日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：治道幼稚園）	平成21年6月19日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山北幼稚園）	平成21年6月22日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリュラム改善研修会講演（於：筒井幼稚園）	平成21年6月25日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
奈良県教育研究所主催　幼稚園経営研修講座講演（於：奈良県教育研究所）	平成21年7月1日	幼稚園における学校評価について講演した。
広島県福山市教育委員会主催　福山市教育支援事業指定校研究事業指導助言（福山市立内海小学校）	平成21年7月2日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
やまぐち総合教育支援センター主催　山口県幼稚園長研修講座講演（於：やまぐち総合教育支援センター）	平成21年7月3日	幼稚園における学校評価について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：矢田南幼稚園）	平成21年7月7日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
島根県浜田市立金城中学校主催　教育講演会講演（於：浜田市立金城中学校）	平成21年7月12日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山南幼稚園）	平成21年7月13日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
奈良県教育委員会主催　奈良県私立学校「学校評価」に関する研修会講演（於：奈良県立教育研修所）	平成21年7月14日	私立学校における学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県総合教育センター主催　広島県教職員マネジメント研修・10年経験者研修講演　（於：広島県総合教育センター）	平成21年7月24日	学校マネジメントと組織づくり～学校評価を活かして～について講演した。
川西市教育委員会主催　教育講演会講演（於：川西市文化会館）	平成21年7月28日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大阪市教育委員会主催　校内生活科研修会講演（於：大阪市立磯路小学校）	平成21年8月3日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
愛知県日進市教育研究会主催　教育諸問題研修会講演（於：日進市民会館）	平成21年8月5日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
福井市教育委員会主催　教職員課題研修会講演（於：福井県立大学）	平成21年8月6日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
平成21年度教員免許更新講習　選択「生活」（於：奈良教育大学）	平成21年8月8日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良県教育研究所主催　10年経験者研修講座講演（於：奈良県教育研究所）	平成21年8月1日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
文部科学省委嘱事業奈良市立六条小学校区保幼小連携委員会主催　保幼小連携研修会講演	平成21年8月18日	学校評価を活かした学校改善について講演した。

堺市教育委員会主催　堺市教育講演会講演（於：堺市消費生活センター）	平成21年8月19日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良市教育委員会主催　第８回教育フォーラム講演（於：奈良市立飛鳥幼稚園）	平成21年8月21日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
御殿場市教育委員会主催　幼保小教職員合同研修会講演（於：御殿場市役所玉穂支所）	平成21年8月22日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
相生市教育委員会主催　学校園経営研修講座（於：相生市立総合福祉会館）	平成21年8月24日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
愛知県丹葉地方小中学校長会主催　学校評価研修会講演（於：犬山市福祉会館）	平成21年8月25日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
明石市教育研究所主催　明石市スーパーバイザー事業講演（於：明石市立高丘東幼稚園）	平成21年9月4日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県海田町立教育委員会主催　授業力向上研修会講演（於：海田町立海田西中学校）	平成21年10月6日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
平成21年度教員免許更新講習　必修「教職についての省察」（於：奈良教育大学）	平成21年10月1日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市教育委員会主催　学校評価担者研修会講師（於：伊丹市総合教育センター）	平成21年10月27日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
三田市教育委員会主催　教育資質向上事業　学校評価に係る研修会講師	平成21年10月3日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　大和郡山市幼小連携合同研修会講演（於：同山市昭和幼稚園）	平成21年11月17日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
摂津市教育委員会主催　摂津市教育課程研究開発委嘱事業研究発表会全体会講演（於：摂津市立味生小学校）	平成21年11月2日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市教育委員会主催　奈良市30人学級指導法改善委員会研究保育指導助言（於：奈良市立富雄北幼稚園）	平成21年11月19日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
岡山県教育委員会主催　園長等運営管理協議会講演（於：岡山県総合教育センター）	平成21年11月27日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市保健福祉部主催　奈良市公私立保育所職員研修会講演	平成21年12月1日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
高知市教育委員会主催　高知市立学校教頭研修会講演（於：アスパルこうち）	平成21年12月4日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　大和郡山市幼稚園長・教頭研修会講演（於：市民交流館）	平成21年12月17日	学校評価を活かした学校改善情報発信の在り方～について講演した。
福井県女性校長・教頭会主催　冬季研修会講演（於：ニューサンピア敦賀）	平成21年12月25日	評価を活かした学校改善～教員評価・学校評価～について講演した。
神奈川県厚木市教育委員会主催　厚木市立飯山小・小鮎小学校合同研修会講演	平成22年1月8日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
西宮市子育て支援センター主催　子育て支援研修会講演（於：西宮市子育て支援センター	平成22年1月15日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良県指導主事会主催　幼稚園における学校評価研修会講演（於：奈良県立教育研究所）	平成22年1月19日	幼稚園における学校評価について講演した。

大和高田市教育委員会主催　教頭研修会講演	平成22年1月22日	学校評価を活かした学校改善～教頭に求められるもの～について講演した。
広島県三次市教育委員会主催　教務主任研修会講演	平成22年1月26日	学校評価を活かした学校改善～ミドルリーダーの役割について講演した。～
兵庫県立芦屋高等学校授業力向上委員会研修会講演（於：県立芦屋高等学校）	平成22年1月29日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県女性校長会主催　学校づくり研修会講演（於：ピュアリティまきび）	平成22年2月8日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
兵庫県市町村指導主事学校評価担当者研修会講演（於：兵庫県立研修所）	平成22年2月17日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市教育委員会主催　奈良市30人学級指導法改善委員会研究保育指導助言（於：古市人権文化センター）	平成22年2月23日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
名古屋市共生の会主催　ミドルリーダー育成研修会講演（於：メルパルク名古屋）	平成22年2月26日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市公立私立幼稚園・小学校合同研究会　（於：スワンホール）	平成22年3月2日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
ERP　大阪フォーラム　（於：大阪国際交流センター）	平成22年5月2日	「ゆとり教育からの脱却」についてコーディネーターをした。
西播磨地区小学校校長会研修会（於：相生市総合福祉会館）	平成22年5月7日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
富士市立富士中学校区三校合同PTA講演会（於：富士市交流プラザ）	平成22年5月8日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三重県公立小中学校女性校長教頭会研修会(於三重県総合文化センター：)	平成22年5月25日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
高知県所長・園長研修会(於：高知県教育センター)	平成22年6月11日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市30人学級指導法検討委員会(於:奈良市庁舎)	平成22年6月14日	30人学級を活かした指導の改善
和歌山県幼稚園保育所合同研修「初任者園長研修会(於：和歌山ビッグ愛)	平成22年6月15日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市幼稚園・小学校連携研修会(於：矢田コミニティ会館)	平成22年8月4日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
幼稚園・保育所と小学校連携促進事業夏季研修会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成22年8月5日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
天理市幼稚園教員研修会(於：天理市役所)	平成22年8月10日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
桜井市幼小中学校教職員研修会(於：桜井市中央公民館)	平成22年8月17日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
倉敷市公立幼稚園教職員研修会(於：くらしき健康福祉プラザ)	平成22年8月20日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市30人学級指導者研修会(於：奈良市庁舎)	平成22年8月23日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
滋賀県守山市幼小中学校教職員研修会(於：守山市民ホール)	平成22年8月27日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。

豊野地区幼稚園長・指導主事研修会(於：池田市合同庁舎)	平成22年8月30日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成22年度PDCA研修Ⅱ(於：秋田県庁舎)	平成22年9月4日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：　ピュアリティまきび)	平成22年9月27日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
教育セミナー山陰2010　課題講演(於：鳥取県社会福祉人材研修センター)	平成22年10月2日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
葛城市立新庄北小学校附属幼稚園　幼小連携研修会(於新庄北小学校附属幼稚園：)	平成22年10月25日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三田市　第2回　幼・小・中学校教頭研修会(於：三田市総合文化センター)	平成22年10月26日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
学校経営品質向上研究会(於：関西生産性本部)	平成22年11月8日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市30人学級指導法検討委員会(於:奈良市庁舎)	平成22年11月9日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
平成22年度　岡山県国公立幼稚園長研修会(於：ピュアリティまきび)	平成22年11月26日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成22年度　岡山県ブロック公立小中学校副校長・教頭研修会(於：ロマン高原かよう総合会館)	平成22年11月30日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三次市主幹・教頭研修会(於：三次市)	平成22年12月14日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
明日香村人権教育研究会「子どもの学力保障」(於：明日香村立明日香幼稚園)	平成23年1月24日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
平成22年度　学力の把握に関する研究指定校事業研究協議会(於：文部科学省)	平成23年1月26日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
磯城郡小学校教育研究会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成23年2月16日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
第3回　奈良市30人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成23年2月17日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
海田町新教育課程研修会(於：広島県安芸郡海田町ひまわりプラザ)	平成23年2月18日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
姫路市異校種連携研修会(於：姫路市立勤労市民会館)	平成23年5月13日	よりよい保幼小連携の進め方 ～子どもの育ちと学びをつなぐ～について講演した。
平成23年度第1回　奈良市30人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成23年6月2日	「30人学級」を活かした指導の改善について講演した。
兵庫県私立小学校学級経営研究会(於：甲南小学校)	平成23年6月3日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級経営について講演した。
第19回岐阜授業実践フォーラム(於：岐阜羽島文化会館	平成23年6月4日	学校づくり部会指導助言
奈良市解放保育研究会(於：奈良市庁舎)	平成23年7月12日	元気な保育園づくりのために ～これからの保育者に求められる資質～について講演した。

平成23年度第２回　奈良市30人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成23年7月26日	「30人学級」を活かした指導の改善について講演した。
岡山県国公立幼稚園教育研究会　備前支部研修会(於：岡山県加賀郡吉備中央町農業振興センター)	平成23年7月29日	元気の出る学校評価 ～マネジメントツールを生かして～について講演した。
福井県鯖江市小中学校学級経営研修講座(於：鯖江市文化の館)	平成23年8月2日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級づくりについて講演した。
八尾市幼保小合同研修会(於：中河内府民センター)	平成23年8月5日	子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼保小連携による教育・保育を通して～について講演した。
兵庫県公立学校女性管理職研修会(於：ウェスティンホテル淡路)	平成23年8月8日	兵庫県公立学校女性管理職を対象に、「学校力・教師力を高める学校づくり」について講演した。
芦屋フォーラム学校づくり部会(於：兵庫県芦屋市立宮川小学校)	平成23年8月12日	育ちと学びをつなぐ学校づくり ～　知・徳・体を育てる　～について講演した。
第３回　滋賀県10年経験者研修会(於：滋賀県総合教育センター)	平成23年8月23日	「園における望ましい連携の在り方」 ～子どもの育ちと学びをつなぐために～について講演した。
愛知県豊川市　授業力向上研修会(於：愛知県豊川市　音羽文化ホール)	平成23年8月25日	これからの教師に求められる資質 ～授業力向上をめざして～について講演した。
兵庫県篠山市　主幹教諭研修会(於：兵庫県篠山市市役所庁舎)	平成23年8月29日	元気な学校づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：ピュアリティまきび)	平成23年9月30日	幼稚園における学校評価～マネジメントツール、コミュニケーションツールとしての活用～について講演した。
西宮市幼年教育研修(於：西宮市子育て総合センター)	平成23年10月25日	幼・保・小連携～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
敦賀フォーラム(於：プラザ萬象　大ホール)	平成23年11月3日	「学校・家庭・地域でつなぐ教育・共育・協育 ～敦賀の誇りと教育力を高める」～として、敦賀市教育委員会主催討論会登壇した。
奈良学園幼稚園園内研修会(於：奈良学園幼稚園)	平成23年11月8日	幼児期と小学校以降の教育 ～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
平成23年度第４回　奈良市30人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成23年11月14日	「30人学級」を活かした指導の改善
幼稚園経営研修講座(於：奈良県立教育研究所)	平成23年11月29日	教育課程編成の工夫と教職員の共通理解 ～育ちと学びをつなぐ園づくりのために～について講演した。
広島県三次市小中学校　校長研修会(於：みよしまちづくりセンター)	平成23年12月6日	育ちと学びをつなぐ学校づくり～マネジメントツールとしての学校評価を活かして～について講演した。
伊賀市教頭会研修(於：伊賀市教育研究センター)	平成23年12月9日	元気の出る学校づくり ～学校評価を活かして～について講演した。
大阪府私立幼稚園連盟　免許更新講習(於：大阪府私学教育文化会館)	平成23年12月21日	幼稚園をめぐる最新事情「幼稚園の信頼構築と改善に生かす学校評価と幼小連携」について講演した。
西宮市幼小連携研修・実践報告会(於：西宮市子育て総合センター)	平成24年1月13日	保幼小連携～実践への提言・助言～について講演した。

奈良文化女子短期大学付属幼稚園教員研修会(於：奈良文化女子短期大学付属幼稚園)	平成24年1月17日	幼稚園の信頼構築と改善に生かす 学校評価について講演した。
八尾市研究指定事業研修会(於：八尾市立東山本幼稚園)	平成24年1月31日	八尾市研究指定校園の教諭・指導主事等を対象に「つたえあい・ひびきあい・まなびあう ～幼小がつながって～」について講演した。
泉北３市１町幼稚園管理職研修(於：忠岡町シビックセンター（忠岡町役場)	平成24年2月7日	泉北３市１町（和泉市・泉大津市・高石市・忠岡町）幼稚園管理職を対象に「元気の出る幼稚園づくり」～幼稚園管理職のマネジメント力と年度末の検証～について講演した。
平成23年度第５回 奈良市30人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成24年2月13日	奈良市内幼稚園・小学校教諭等を対象に「30人学級」を活かした指導の改善について講演した。
猪名川町教頭・副主幹合同研修会(於：兵庫県猪名川町教育委員会室)	平成24年2月16日	猪名川町教頭・副主幹を対象に「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
久米田看護専門学校における特別講義(於：久米田看護専門学校)	平成24年3月1日	看護学生（１・２・３年生）を対象に、「評価を活かして自分を変える～活き活きスキルアップ、シェイプアップ、メイクアップ～」について講演
門真市私立幼稚園・保育園合同研修会(於：門真市仙亭会議室)	平成24年3月1日	門真市私立幼稚園・保育園の理事長・園長等を対象に、幼小連携～育ちと学びをつなぐ学校園づくり～について講演
北葛城郡広陵町幼稚園教員の資質向上にかかる講演の講師(於：北葛城郡広陵町総合福祉会館「さわやかホール」)	平成24年5月2日	北葛城郡幼稚園教育研究会会員を対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造」について講演
敦賀っ子教育審議会にかかる「学び育み委員会」「子どもサポート委員会」合同開催 委員として講話(於：敦賀市立図書館 研修室)	平成24年5月15日	敦賀っ子教育審議会にかかる「子どもサポート委員会」委員を対象に「学びの基礎力」をもとに今後の方向性を提案
桜井市「第２回 子育てセミナー」講師(於：桜井市立中央公民館)	平成24年5月25日	桜井市就学前の幼児とその保護者対象に「第２回子育てセミナー」 において「遊びから学びへ～幼児教育と小学校教育の接続」について講演
平成24年度 西日本私立小学校教員研修会 講師(於：追手門学院小学校)	平成24年5月25日	西日本私立小学校教員を対象として「学級経営分科会」において、「子どもと保護者と教師が育つ学級経営」について講演
兵庫県私立小学校連合会研修会講師 モラル教育の公開授業 指導講演(於：甲南小学校)	平成24年6月1日	兵庫県私立小学校学級経営部会教員を対象として「モラル・マナー・ルールを通して、公開授業指導講演
第20回授業実践フォーラム 教育課題講座の講師(於：岐阜県羽島市文化センター)	平成24年6月2日	初任者から経験者まで全国から参加の学級担任及び管理職等を対象に「学級づくりの諸課題～子どもと保護者と教師が育つ学級経営～」について講演
三田市教育委員会主催 三田市立保幼小・中・連携推進にかかる研修会 講師(於：有馬富士自然学習センター)	平成24年6月19日	三田市内の小・中校長または教頭、保育所長・私立幼稚園長又は教諭 50名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小・中・連携」について講演
第１回宝塚市立小・中・特別支援学校 校長研修会講師(於：宝塚市立教育総合センター)	平成24年6月22日	宝塚市立小・中・特別支援学校 校長等30人を対象に、「人材育成へのマネジメント～ 学校改善へのリーダーシップ ～」について講演
天理市教育委員会主催 天理市内保・幼・小・中の連携推進にかかる研修会 講師(於：天理市教育総合センター)	平成24年6月29日	天理市内保・幼・小・中の校園所長２５名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保・幼・小連携」について講演
特例社団法人日本精神看護技術協会主催 教育方法研修会 講師（於：京都研修センター)	平成24年7月3日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の形

		態」について講義
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成24年7月4日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の方法」について講義
全国幼児教育研究協会 主催　中国地区岡山支部研修会　講師（於：岡山衛生会館　三木記念ホール）	平成24年7月7日	中国地区岡山県の幼稚園長・教諭・保育所長・保育士・大学関係者など300名を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かして～」の講演
鳴門教育大学大学院　特別講義(於：鳴門教育大学)	平成24年7月13日	鳴門教育大学大学院授業科目「学習指導と学習評価」及び学部授業科目「教育評価論」における特別講義
平成24年度奈良市「30人学級」指導者研修会　講師　（於：奈良市庁舎　中央棟6階　正庁）	平成24年7月24日	奈良市立幼稚園・小学校教員を対象に『奈良市小･中学校学力･学習調査の結果から見えてくる「30人学級」での効果的指導法』について講演
福井県丹生郡学校教育研究会主催　丹生郡教育講演会　講師（於：越前陶芸村文化交流会館）	平成24年7月26日	福井県丹生郡内小中学校教職員150名を対象に「育ちと学びをつなぐ学校づくり　授業づくり」について講演した。
第3回門真市一貫教育課程研修会　講師（於：門真市教育センター）	平成24年7月27日	門真市立幼小中学校教員を対象に、「就学前と義務教育の連携を深めるために」について講演した。
敦賀市教育委員会主催　敦賀市ミドルリーダー研修会講師（於：敦賀市立図書館）	平成24年8月7日	敦賀市ミドルリーダー40名を対象に、「教員の質の向上～信頼構築のためのスキルアップ、ブラッシュアップ、メイクアップ～」と題して講演
伊賀市教育センター主催　平成24年度伊賀市教育センター研修講座（於：伊賀市教育センター）	平成24年8月10日	伊賀市小中学校及び幼稚園教員４０名を対象として、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」と題して講演
和歌山県福祉保健部主催　平成24年度幼稚園・保育所関係職員合同研修会　講師　（於：和歌山北コミュニティセンター）	平成24年8月20日	公・私立幼稚園の園長及び教員、公・私立保育所の所長及び保育士、認定子ども園の園長及び職員、公・私立小学校の校長及び教員、各市町村教育委員会指導主事、各市町村保育行政担当者240人対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐために～」講演
社団法人　大阪府私立幼稚園連盟主催　免許更新更新講習講師　（於：大阪私学教育文化会館）	平成24年8月22日	大阪府私立幼稚園教員120名を対象に、免許更新更新【必修】講習を担当。「チーム保育に学校評価を取り入れ、小学校につないでいくために」について講義
名古屋市教育委員会指定校事業において、名古屋市立大高南小学校研修会　講師	平成24年8月27日	名古屋市立大高南小学校教員を対象に、「ポジティブプロパガンダを創り出す学校評価」について講演・演習
岡山県教育委員会主催の園長等運営管理協議会講師（於：ピュアリティまきび）	平成24年9月24日	国公立私立幼稚園長を対象に、「幼稚園における学校評価」について講演
奈良市教育委員会主催の30人学級指導法検討委員会において、指導助言（於：奈良市庁舎）	平成24年10月2日	奈良市幼小教員を対象に、「第2回30人学級指導法検討委員会」に委員長として指導助言
三田市教育委員会主催の校園長会及び教育委員等研修会　講師（於：三田市消防本部会議室）	平成24年10月3日	三田市立幼小中校園長、教育委員、指導主事希望する市内私立幼稚園長または公私立保育所長等50名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼・小・中連携」について、講演
大阪私立幼稚園連盟青年振興部主催の研修会　講師（於：大阪私学教育文化会館）	平成24年10月9日	大阪私立幼稚園青年振興部教職員を対象に「学校評価と幼小連携」について講演

長岡京市教育委員会主催の保幼・小・中連携会議研修会　講師（於：長岡京市立図書館大会議室）	平成 24 年 10 月 26 日	長岡京市内保育園・保育所・幼稚園・小学校の教職員等 70 名を対象に、「発達と学びの連続性を踏まえた幼児期と児童期の接続カリキュラムづくりについて」、講演
岡山県保育協議会主催　保育研究会　講師（於：JA 岡山 7 階ホール）	平成 24 年 10 月 30 日	県内保育所関係者・職員等 240 名を対象に、「元気の出る保育園づくり～保育の質を高める自己評価を活かして～」について講演
八尾市教育委員会主催の研究指定園　園内研修会講師（於：八尾市立東山本幼稚園(研究指定園)	平成 24 年 11 月 5 日	八尾市幼稚園園長・教諭及び小学校校長・教員並びに指導主事を対象に、「園内保育」について指導助言
福井市教育委員会主催の平成 24 年度福井市公立幼稚園保育研究会　講師（於：福井東郷公民館）	平成 24 年 11 月 10 日	福井市内公立幼稚園 40 名小学校教職員及び保育士を対象に、「幼児教育と小学校教育の連携・接続に向けて」について講演
第 7 回全国高等学校保育教育研究大会　講師（於：千里阪急ホテル）	平成 24 年 11 月 16 日	全国高等学校保育コース担当者等 150 名を対象に、「生きる力を培う保育者の育成～育ちと学びをつなぐために～」と題して基調講演
生駒市立教育委員会研究発表会　講師（於：生駒市立壱分幼稚園）	平成 24 年 11 月 20 日	幼稚園教諭参加者 82 名、保育園 3 名、小学校教諭５名（壱分小 1 年担任）中学校教諭,高等学校教諭を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校、中学校、高等学校との交流から～」について記念講演。
日本保育協会主催の大阪支部女性部研修会講師（於：薬業年金会館）	平成 24 年 11 月 26 日	日本保育協会大阪支部の保育士 90 名を対象に、「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐ～」について講演
大阪保育部会北大阪ブロック会主催の年末研修会講師。　（於：ホテル・アゴーラ大阪守口　）	平成 24 年 12 月 3 日	会員園の管理職 80 名を対象に「育ちと学びをつなぐ保小連携」について講演
有田市教育委員会主催の「実効性の高い学校評価・情報提供の充実・改善に向けた取組」にかかる研修会　講師。　（於：有田市橘家）	平成 24 年 12 月 4 日	有田市立小中学校教員等 80 名を対象に「学校改善につながる学校評価にするために」について講演
紀の川市教育委員会主催の「豊かな学びと育ちをつなぐ保幼小合同研修会」講師。（於：紀の川市立安楽川保育所）	平成 25 年 1 月 22 日	紀の川市立保育所、私立幼稚園、紀の川市立小学校　園長・校長・教頭・教職員等　約 70 名を対象に、「遊びから学びへ　育ちをつなぐ生活科」について講演
宝塚市教育委員会主催の「宝塚市立学校教頭研修会」講師（於：宝塚市立教育総合センター）	平成 25 年 1 月 29 日	宝塚市立学校教頭 24 名をを対象に、「学校力改善の秘策～元気の出る学校づくりのために」について講話と演習
奈良市教育委員会主催の平成 24 年度奈良市 30 人学級指導法検討委員会に委員長として出席。（於：奈良市庁舎）	平成 25 年 2 月 8 日	奈良市 30 人学級指導法検討委員を対象に最終報告及び「30 人学級」での期待できる効果についての集計結果検討などについて指導助言をした。
奈良文化女子短期大学幼小接続フォーラムの企画及び総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成 25 年 2 月 24 日	幼小接続フォーラムの参加者（保育士・幼稚園教諭、小学校教諭及び管理職、教育委員会、教育関連企業等 139 名を対象に「幼児教育と小学校以降の育ちと学びをつなぐ」について講演
敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校校内研修会の講師。（於：敦賀南小学校）	平成 25 年 2 月 26 日	敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校教職員 25 名を対象に、「元気の出る学校づくり～家庭・学校・地域をつないで～」について講演
阪南市教頭会主催の小中学校教頭会の講師（於：阪南市商工会館）	平成 25 年 2 月 28 日	阪南市立小中学校の教頭等 16 名を対象に、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
社会福祉法人成光苑主催の 7 ヶ園合同研修会の講師（於：ホテル阪急エキスポパーク）	平成 25 年 3 月 26 日	社会福祉法人成光苑の理事、園長、保育者等 120 名を対象に「幼保小の連携」について講演

大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習会【必修】の講師（於：エル・おおさか（大阪府立労働センター)）	平成25年8月6日	大阪府私立幼稚園免許状更新講習者を対象に免許更新講習【必修】を担当。
京都府教育委員会主催の平成25年度「保育技術専門講座Ⅰ」及び「新規採用者研修『幼稚園教諭２』講座」の講師（於：京都府教育センター）	平成25年8月8日	教諭（幼稚園及び特別支援学校の幼稚部　国立・私立を含む）90名を対象に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」について、講演及び演習。
奈良市教育委員会主催の平成25年度第1回「30人学級」指導者実践交流会の講師（於：奈良市教育センター）	平成25年8月12日	奈良市内幼稚園教諭及び小学校教員等を対象に指導助言及び講演。
安堵町教育委員会主催の夏季職員研修の講師（於：安堵町立中学校会議室）	平成25年8月13日	安堵町中学校小学校教職員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい連携・接続のあり方～」について講演。
丹波市教育委員会主催の丹波市小学校長会研修会の講師（於：丹波市山南住民センター）	平成25年8月27日	丹波市小学校校長25名を対象に「元気の出る学校づくり」について講演。
第2回高校と大学の連携フォーラムin大阪のパネルディスカッション、コーディネータ　（於：内田洋行セミナールール）	平成25年8月31日	大阪府及び奈良県内高等学校関係者、教育関係者120名を対象に「日本の教師を育てる～教育三都物語～」について、パネルディスカッションにおいて、コーディネータ
愛知県教職員組合主催の第63次教育研究愛知研修会記念講演の講師。（於：愛知県産業労働センター（ウインクあいち)）	平成25年10月19日	市町村教育長・愛知県小中学校長役員・PTA代表・教員代表等450名を対象に「子どもたちの健やかな成長をめざして～力と夢を育てる地域ぐるみの学校づくり～」をテーマに記念講演。
鳥取県中部委員会主催の平成25年度鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士等の合同研修会の講師（於：倉吉未来中心センター）	平成25年10月30日	鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士名を対象に、「元気の出る園づくり～園評価を活かして」をテーマに記念講演。
愛知県知多郡武豊町教育委員会主催の教育講演会の講師（於：武豊町立武豊中学校体育館）	平成25年11月22日	武豊町６小中学校教職員を対象に「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成25年11月29日	大阪市私立幼稚園連合会、幼稚園教諭を対象に「幼小連携」をテーマに講演
久米田看護専門学校主催の講師会の講師（於：社会医療法人　生長会　府中病院　セミナーホール）	平成25年11月30日	実習指導者、専任教員、非常勤講師他60名を対象として、「学生・教員・学校が輝く教育評価」をテーマに講演
尾張地区女性役職会主催の研修会の講師（於：名古屋国際会議場）	平成25年12月15日	尾張地区女性役職会研修会参加者450名を対象として、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校研修会の講師（於：堺市立浜寺石津小学校）	平成26年2月7日	日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校教職員を対象に、第三者評価をふまえた総括会として、「未来を切り拓く子どもを育てる―日本初等理科教育研究会堺大会での成果と課題―」と題して講演
東海市立教員研修センターTEC21主催の東海市立教員研修の講師（於：東海市立文化センター）	平成26年2月7日	東海市立小中学校教員60名を対象として、「元気の出る学校づくり」をテーマに講演。
奈良文化女子短期大学第2回幼小接続フォーラムの総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成26年3月2日	保幼小教職員・教育関係者等120名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに総括講演。
鳥取県東部地区幼稚園等の教員及び保育士の合同研修会 講師（於：鳥取県立福祉人材研修センター）	平成26年5月14日	保幼小教職員・教育関係者等200名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会の講師	平成26年6月14日	大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会主催のＰＴＡ総会講演会において、保護者・校長・教頭・教員150名を対象に「高校生活をどう過ごさせるか」をテーマに講演。

人間教育学会「学校間接続分科会」の講師	平成26年8月4日	人間教育学会「学校間接続分科会」において、講演。
三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会の講師（於：愛知県岡崎市民会館　甲山会館）	平成26年8月5日	三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会において、小中教員250名を対象に「力と夢を育てる学校づくり・授業づくり～総合的な学習を通して」をテーマに講演。
阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会の講師（於：阿久比町勤労福祉センター・エスペランス丸山))	平成26年8月6日	阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会「教育講演会」において、小中教職員200名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会の講師（於：ホテルモントレ　ラ・スール）	平成26年8月21日	日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会において、小学校教員80名を対象に「元気の出る学級づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して」をテーマに講演。
豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会の講師（於：アクア文化ホール）	平成26年8月28日	豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会において、公私立小学校、幼稚園、公立・民間保育園、児童発達支援センター、認定こども園、所属長及び教職員180名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい幼保小連携・接続のあり方～」をテーマに講演。
和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会の講師（於：和泉市立北池田小学校）	平成26年8月29日	和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会において、教職員30名を対象に「元気な学校づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して～」をテーマに講演。
寝屋川市教育委員会主催の研修会の講師（於：寝屋川市立北幼稚園）	平成26年9月17日	寝屋川市教育委員会主催の研修会において、小学校教員、公私立幼稚園教諭・保育士100名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前後の接続を中心に～」をテーマに講演。
日本精神看護協会主催の看護実習指導者の資格取得の講師（於：日精看　京都研修センター）	平成26年10月21・22日	看護実習指導者の資格取得を目指すもの80名を対象に、教育方法研修会における講師
神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成26年11月10日	神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会において、公私立幼稚園教諭150名を対象に「元気の出る園づくり～子どもの育ちと学びをつなぐ～」をテーマに講演。
沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成26年11月17日	沖縄県庁主催の平成26年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会において、公立、公私立幼稚園長、教諭・市村教育委員会指導主事、宮古島市教育研究所指導主事を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かした保育改善を通して～」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成26年12月3日	大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会において、私立幼稚園教諭80名を対象に「元気の出る園づくり～どもの育ちと学びをつな～」をテーマに講演。
大東市主催の保幼小研修会の講師（於：大東市民会館）	平成27年1月27日	大東市主催の保幼小研修会において保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、園長、行政等300名対象として、「育ちと学びをつなぐ保幼小連携」をテーマに講演。
第58回大阪府私立幼稚園教育研究大会（免許更新講習）の講師（於：大阪国際会議場（グランキューブ大阪）	平成27年3月26日	大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習において、大阪府私立幼稚園・園長・教職員,近畿地区私立幼稚園教諭 100名を対象に「幼稚園の信頼構築と改善～学校評価と幼小接続・連携をもとに～」について、講義を担当。

大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成27年5月13日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭40名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会の講師（於：羽衣学園中学・高等学校）	平成27年5月16日	羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会において、保護者及び教職員200名を対象に「親として、中・高時代をどう過ごさせるか」をテーマに講演。
近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第9回通常総会における講師（於：大和高田市さざんかホール）	平成27年5月22日	近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第9回通常総会において、福祉事務所長80名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ町づくり・人づくり～子ども・子育て新制度をふまえて」をテーマに講演。
神戸市総合教育センター主催の職務研修講座における講師（於：神戸市総合教育センター）	平成27年6月12日	神戸市総合教育センター主催の職務研修講座において、公立幼稚園主任30名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
日本私学教育研究所主催の平成27年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）の講師（於：大阪ガーデンパレス）	平成27年7月30日	日本私学教育研究所主催の平成27年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）において、小学校教員40名を対象に「子どもに力をつける教員の力量形成～教師力を学校力につなげる～」をテーマに講演。
古座川町保小中一貫教育研修会の講師（於：古座川町中央公民館）	平成27年8月2日	古座川町保小中一貫教育研修会において、保小中教職員・保護者60名を対象に「保幼接続・小中一貫」をテーマに講演。
姫路市教育委員会主催の園長研修の講師（於：姫路市立総合教育センター）	平成27年8月4日	姫路市教育委員会主催の園長研修において、幼稚園長30名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会の講師（於：宝塚市立安倉小学校ランチルーム）	平成27年8月6日	宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会において、市立保育所長・園長・小中学校教職員・学校長60名を対象に、「子どもたちの育ちや学びをつなぐ保幼小連携の在り方」をテーマに講演。
教育セミナー関西2015の講師（於：京都ノートルダム女子大学）	平成27年8月8日	教育セミナー関西2015において、参加者20名を対象に「ワークショップ－子どもたちの育ちや学びをつなぐ」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年8月12日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム①」をテーマに講演
中丹地域保育所（園）・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師（於：綾部市保健福祉センター）	平成27年8月17日	中丹地域保育所（園）・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師
教員免許更新講習の講師（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成27年8月19日	教員免許更新講習として、幼稚園教諭・小学校教諭30名を対象に「これからの生活科～子どもの育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講師として全6時間の講習を担当。
岡山市教職員研修の講師（於：岡山ふれあいセンター）	平成27年8月24日	岡山市教職員研修こども園・保育園・幼稚園（年長担任もしくは連携担当者）、小学校（1年生担任もしくは生活科担当者）250名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ保育，授業づくり～保幼小接続におけるこれからの言語活動～」をテーマに講演。
あま市小中学校教職員会研修会における講師（於：あま市美和文化会館）	平成27年8月25日	あま市小中学校教職員会研修会において、あま市小中学校教職員３５０名を対象に「力と夢を育てる学校づくり～学校間接続と学校評価を活かして」をテーマに講演。

第10回教師力向上研究会における講師（於：箕面自由学園小学校）	平成27年8月29日	第10回教師力向上研究会において、参加者30名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ授業づくり」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年9月8日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム②」をテーマに講演
鳥取県教育委員会事務局鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】の講師（於：鳥取県教育センター）	平成27年9月15日	鳥取県教育委員会事務局　鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】信頼される魅力ある園づくり～園評価を活かして～」において、 鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長の21名を対象として、「信頼される魅力ある園づくりをめざしテーマに講義・演習を担当。受講者園長20名及び聴講（教育委員会幼児教育担当6名）
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年10月21日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム③」をテーマに講演
平成27年度和歌山県那賀地方PTA指導者研修会講演会の講師（於：岩出市民俗資料館	平成27年11月14日	平成27年度和歌山県那賀地方PTA指導者研修会において、保護者及び教員65名を対象として、「親として、中学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年11月25日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム④」をテーマに講演
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年12月9日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム⑤」をテーマに講演
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」①の講師（於：京都研修センター）	平成27年12月16日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者38名を対象に「授業の形態」をテーマとして、講義・演習
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」②の講師（於：京都研修センター）	平成27年12月18日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者38名を対象に「授業の方法」をテーマとして、講義・演習
宝塚市子ども未来部主催の所内研修会の講師（於：宝塚市立安倉中保育所ホール）	平成28年1月13日	宝塚市子ども未来部主催の所内研修会において、所長・職員・保育教諭20名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小接続・連携」をテーマとして、講演。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成28年5月24日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭40名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。
三宅町幼児園園外研修会（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成28年6月1日	三宅町主催の研修会において、27名（町長・健康子ども部部長・職員５名、保護者18名、評議員１名、その他１名）を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。

愛知県一宮市西成東小学校 PTA 講演会（於：一宮市西成東小学校講堂）	平成 28 年 6 月 12 日	愛知県一宮市西成東小学校主催の PTA 講演会において、管理職及び保護者 50 名を対象として、「親として、小学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
ゆめナビ講義ライブ（於：インテックス大阪）	平成 28 年 6 月 18 日	ゆめナビライブにおいて、高校生 80 名を対象として、「保育士も教師も！～育ちと学びをつなぐ教育のスペシャリストになる～」をテーマに講義。全国の大学 250 講義の中で 1 万人参加の高校生アンケートにより「もう一度聴きたい講義」の第一位に選出された。
鳥取県中部教育局園経営研修（於：伯耆しあわせの郷）	平成 28 年 6 月 28 日	鳥取県中部教育局主催の【幼児教育④】園経営研修において、鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長、園経営にかかわる副園（所）長、部長等の５０名を対象として、「園を活性化するための組織マネジメントのあり方 ～信頼される特色ある園づくりをめざして～ 」をテーマに講義・演習。
毎ナビ講義ライブ（於：インテックス大阪）	平成 28 年 7 月 12 日	毎ナビライブにおいて、高校生 80 名を対象として、「保育士も教師も！～育ちと学びをつなぐ教育のスペシャリストになる～」をテーマに講義。全国の大学 250 講座の中、参加 1 万人を超える高校生の投票により、「もう一度聞きたい講義」の第一位に選出された。
精神科認定看護資格取得研修会（於：京都研修センター）	平成 28 年 7 月 22 日	日本精神看護協会主催の精神科認定看護資格取得を目指すもの 86 名対象とした「組織内における活動、教育論Ⅰ」において、「教育に必要な理論・教育プログラムの展開に必要な教育技法」をテーマに講義。
西宮市幼保小第 2 回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成 28 年 7 月 26 日	西宮市立子育て総合センター主催の第 2 回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等 110 名を対象に「生活科を窓口としたッスタートカリキュラムとアプローチカリキュラム」と題して講演。
岸和田市「平成 28 年度　管理職（校長）研修（於：波切りホール）	平成 28 年 8 月 1 日	岸和田市教育委員会主催の「平成 28 年度　管理職（校長）研修」において、市内幼小中学校校長 40 名を対象に「力と夢を育てる元気な学校づくり～学校評価を活かして～」をテーマに講演。
きのくに共育コミュニティ研修会（於：和歌山ビッグ愛）	平成 28 年 8 月 3 日	和歌山県教育庁主催のきのくに共育コミュニティ研修会において、参加者１１００名（学校関係者８０名、社会教育関係者（行政・公民館関係者・コーディネ ーター等３０名）を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～学校・家庭・地域がつながる共育～」をテーマに講演。
福井県平 28 年度組織づくり研修講座（於：嶺南教育事務所）	平成 28 年 9 月 7 日	福井県教育庁主催の平成 28 年度組織づくり研修講座において、福井県嶺南地区小中学校・高等学校教職員 20 名を対象に、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演。
三郷町立幼稚園　新規採用教員研修及び園内研修会（於：三郷町立南畑幼稚園）	平成 28 年 10 月 14 日	三郷町教育委員会主催の「幼稚園新規採用教員研修」及び園内研修において、町教委職員及び園長並びに職員を対象に講演。
大阪府立高等学校第 3 ブロックＰＴＡ協議会研修会（於：大阪府立市岡高等学校）	平成 28 年 11 月 8 日	大阪府立高等学校第 3 ブロックＰＴＡ協議会研修会において、保護者、校長、教員等 55 名を対象に「親子のコミュニケーション」をテーマに、講演。

柏原市「市教研研修会」（於：柏原市立玉手幼稚園）	平成 28 年 11 月 11 日	柏原市教育委員会主催の「柏原市教育研究会幼稚園部会」において、公立私立幼稚園及び小学校教職員 50 名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼小接続カリキュラムのあり方～」について、講演。
日本精神看護協会「教育方法研修会」（於：京都研修センター）	平成 28 年 12 月 21 日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 36 名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習。
和歌山県社会教育関係職員等研修会（第２回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム（於：紀南文化会館小ホール）	平成 29 年１月 16 日	和歌山県生涯教育局主催の「平成 28 年度和歌山県社会教育関係職員等研修会（第 2 回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、社会教育関係職員・家庭教育関係職員・福祉関係職員・学校関係教職員、子育て中の保護者、子育て支援活動をしている方、家庭教育支援チーム員等 100 名を対象としたパネルディスカッション「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉切れ目のない支援のために」をテーマにコーディネータとして担当。
西宮市幼保小第３回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成 29 年１月 20 日	西宮市立子育て総合センター主催の第 3 回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等 88 名を対象に『幼保小接続を考える「とまどいマトリクス」を通して』と題して講演及びワークショップを実施した。
鳥取県「幼保小連携推進研修会」（於：鳥取県福祉人材研修センター）	平成 29 年 2 月 27 日	鳥取県教育委員会主催の「幼保小連携推進研修会」において、幼保・認定子ども園棟等の管理職及び教諭、保育士、保育教諭、小学校、特別支援学校の管理職及び連携担当者、1 年生の担任、市町村教育委員会担当者などの 200 名を対象に幼保小の円滑な接続をめざして ～幼児教育と小学校をつなぐ～をテーマに講演・演習、指導講評を担当
岡山市保育協議会研修（於：岡山市役所 保健福祉局勤労者福祉センター）	平成 29 年 6 月 5 日	岡山市保育協議会主催の研修会において、保育園・こども園の園長・保育士 135 名を対象として、子どもの育ちと学びをつなぐ ～就学前までに育てたい力、つけたい力～ 」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連合会講演（於：）	平成 29 年 6 月 20 日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭 50 名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。合わせて、事務局を通じて、本学の案内と共に、学生の実習の際の受入等についてもお願いした。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議（於：）	平成 29 年 6 月 28 日	奈良県教委が京都大学に委嘱した事業「就学前教育プログラム策定」委員として出席し、2017 年度取り組みを検討した。とりわけ、保育・教育現場への評価規準や指標の示し方の提示など、新たな知見が情報交換された。
大和高田市まち・ひと・しごと創生会議（於：大和高田市役所）	平成 29 年 7 月 4 日	大和高田市主催の大和高田市まち・ひと・しごと創生会議において議長として、協議会を進行。議案の２「地方創生加速化交付金に係る事業の実施結果」及び議案の３「地方創生推進交付金に係る事業の実施状況」について検証。
平成 29 年度第 1 回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 7 月 18 日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成 29 年度第 2 回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 7 月 19 日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。

西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市職員会館）	平成29年7月24日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修」において、幼稚園・保育所・小学校、特別支援教育の教職員100名を対象として、『育った力を学びの力につなぐⅠ「とまどいマトリクス」の活用を通して』①をテーマに講演。
大和高田市人権研究会　市人教　課題別研修会	平成29年7月29日	大和高田市人権教育研究会主催の平成２９年度大和高田市人権教育研究会　課題別研修会において、市人教会員（保幼こ小中高の教職員）120人を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼児期と小学校教育の連携・接続～ 」をテーマに講演。
平成29年度第3回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年7月31日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成29年度保育士の専門性を高める連続研修会（於：TKP心斎橋駅前カンファレンスセンター）	平成29年8月1日	大阪府社会福祉協議会主催の平成29年度保育士の専門性を高める連続研修会において、府内の民間保育園・認定こども園に所属する施設長、リーダー、主任保育士に準ずる者200名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力～ 」をテーマに講演。今後の実習のお願いもした。
平成29年度和歌山県訪問型家庭教育支援事業第１回協議会（於：和歌山県庁）	平成29年8月2日	議長として、協議会を進行した。平成29年度の方向性として、以下の２点に特化して協議した。①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について　②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標を示し、成果の客観性を図るよう指示した。
教員免許更新講習（於：奈良学園大学）	平成29年8月9日	奈良教育大学委嘱の教員免許更新講習を担当した。奈良学園大学「幼小接続室」を会場として、現職教員小学校及び幼稚園教諭38名に対して、生活科及び幼小接続カリキュラムについての理解を深め、認定評価した。
平成29年度第4回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年8月30日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成29年度海南市公民館大会（於：海南市民会館）	平成29年9月3日	海南市教育委員会主催の「海南市公民館大会」において、海南市公民館館長教育関係200名を対象に「未来を拓く学びをつなぐ公民館～ 学校・家庭・地域がつながるためにできること～ 」をテーマに講演。和歌山県における本学の周知活動と共にお礼と次年度以降の実習等のお願いもした。
鳥取県倉吉市「幼保小連携推進研修会」（於：鳥取県立倉吉体育文化会館）	平成29年9月5日	倉吉市教育委員会主催の幼保合同研修会において、倉吉市内保育園・認定こども園の教職員、小学校教職員50名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。鳥取県における本学の周知活動と共に、実習先の校長及び教員の参加もあり、お礼と次年度以降のお願いもした。
沖縄県宮古地区園長等運営管理協議会（於：宮古教育事務所）	平成29年9月11日	沖縄県宮古教育事務所主催の宮古地区園長等運営管理協議会において、宮古管内幼保教職員、小学校教職員・校長120名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。沖縄県における本学の周知活動と共に、お礼と次年度以降の実習等のお願いもした。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議 実地訪問指導（於：田原本町立南幼稚園）	平成29年9月19日	H29奈良県就学前教育調査研究事業に係る、訪問調査へ委員として出席。奈良県教育委員会企画部及び教育委員会幼小担当指導主事、京都大学大学院生、田原本南幼稚園園長、教員に評価について指導

		助言及び今後の評価シート作成に当たってのインタビューを進めた。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議（於：奈良県立教育研究所）	平成29年9月29日	第2回奈良県就学前教育振興研究会へ委員として出席。訪問指導の報告と他の実践に対する分析を行った。
和歌山県訪問型家庭支援事業第2回協議会（於：和歌山県庁）	平成29年10月16日	議長として、協議会を進行した。平成29年度の方向性として、以下の２点に特化して協議した。①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について　②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標から、成果の客観性を確認した。
宇陀市平成29年度宇陀市教育センター研修「幼小連携・接続講座」（於：宇陀市役所）	平成29年11月20日	宇陀市教育委員会主催の「平成29年度宇陀市教育センター研修」幼小連携・接続の講座において、幼稚園・保育所・こども園小学校の教職員40名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続」をテーマに講演。本学の周知活動と共に、実習のお礼と次年度以降のお願いもした。
和歌山県訪問型家庭支援事業第3回協議会（於：和歌山県庁）	平成29年12月4日	議長として、協議会を進行した。平成２９年度各市町の取組成果とシンポジウムの方向性の２点について協議した。 ①事業の成果や効果を図るための成果指標の確認 ②シンポジウムの企画と進行の原案検討
日本精神看護協会主催「教育方法研修会」（於：京都研修所）	平成29年12月13日	日本精神看護協会京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者46名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習を担当した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成29年12月21日	「大阪府私立学校審議会」の委員による平成29年度12月定例会に出席。議事は、8号議案の申請概要を審議した。また、報告事項2点に基づいて意見交換された。
奈良市教職員研修講座（於：奈良市教育センター）	平成29年12月26日	奈良市教育センター主催の平成29年度教職員指導力向上研修講座において、受講者103名（小学校43各担当者、市立こども園12、幼稚園23保育園12、幼児教育アドバイザー等）を対象に「幼児教育と小学校教育の育ちと学び連続性」について、講演。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。
大阪府教育庁主催「第3回地域教育コーディネータ研修」（於：大阪府庁）	平成30年1月24日	大阪府教育庁主催の「第3回地域教育コーディネータ研修」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者200名を対象に「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉～切れ目のない支援のために～」をテーマに講演した。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。
和歌山県訪問型家庭教育支援事業シンポジウム講演及び第4回協議会（於：紀南文化会館）	平成30年1月29日	和歌山県生涯教育局主催の「平成29年度和歌山県社会教育関係職員研究会・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者９０名を対象に「つながろう！家庭・福祉・教育!!ひろげよう！家庭教育支援!!切れ目のない支援に向けて～」をテーマに講演した。また、教育実習のお礼と今後のご指導のお願いの場とした。さらに、「第4回協議会」で座長として、議事進行と総括をした。

西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市立芦之湯会館）	平成30年2月1日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修②」において、・小学校27名、特別支援教育5名、幼稚園32名・保育所46名の教職員105名を対象として、『育った力を学びの力につなぐ「とまどいマトリクス」の活用を通して』Ⅱをテーマに講演及びワークショップを実施した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
奈良県教育委員会主催奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」（於：奈良県社会福祉総合センター大ホール）	平成30年2月19日	奈良県教育委員会主催の奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」において、公私立幼児教育関係教職員及び行政関係者120名を対象として、「奈良県就学前教育プログラムで育む子どもの姿」のパネルディスカッションにおけるコーディネーターを務めた。続いて「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児教育と小学校の連携・接続～」をテーマに講演した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府庁）	平成30年2月28日	第32回大阪府人権施策推進審議会に委員として出席。会長代理に任命された。審議内容は、以下の4点であった。 (1) 会長及び会長代理の選任について、(2) 平成28 (2016) 年度人権施策の状況について、(3) 性的マイノリティの人権問題についての理解増進に向けた取組について、(4) その他について審議した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成30年3月19日	「大阪府私立学校審議会」平成30年度3月定例会を開催し、委員として出席。議事は、21議案の申請概要を審議し、報告事項2点に基づいて意見交換がなされた。
阪急学園教職員研修会（於：阪急学園）	平成30年3月26日	阪急学園教職員研修会において、幼稚園教諭、保育園保育士計８０名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演を実施した。8園の法人は、理事長を中心に強固な研修体制を推進されており、学内の幼保コースへの就職情報としても提供したい。
5　その他 ・奈良市30人学級指導法改善検討委員会	平成20年6月～平成25年3月	奈良市における幼稚園・小学校の委員に対する30人学級指導法改善に関する指導助言及び研究のまとめの監修、並びに夏期研修会の講師を務めた。
・国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定校事業企画委員	平成21年5月～平成22年7月	総合的学習と生活科の関連を中心に、指定校に対して、指導助言をした。
・大阪府私立学校審議会委員	平成22年7月～現在に至る	大阪府内私立学校にかかる審議事項を検討した。
・大阪府子ども施策審議会委員	平成25年6月～平成28年3月	大阪府子ども施策にかかる審議事項を会長代理として検討した。
・大阪府行政評価審議委員	平成26年6月～現在に至る	大阪府教育施策にかかる審議事項を委員として検討した。
・大和高田市ひとまちしごと創生会議委員長	平成27年6月～現在に至る	大和高田市地方創世にかかる意見交換会において委員長として検討した。
・三郷町産官学連携常任委員	平成28年6月～現在に至る	三郷町産官学連携会議において常任委員として検討した。
・三宅町評議員	平成28年6月～平成29年3月まで	三宅町評議員として検討した。

・和歌山県訪問型家庭教育支援事業委員長	平成28年6月 ～現在に至る	文部科学省指定事業「和歌山県家庭教育支援事業」委員として検討した。
・奈良県就学前教育プログラム策定委員	平成28年6月 ～平成30年3月まで	奈良県就学前教育プログラム策定委員として、検討した。
・大阪府人権教育施策推進委員	平成30年2月 ～現在に至る	大阪府人権教育施策推進委員会会長代理として、検討した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)　小学校教諭2級普通免許状	昭和50年3月	大阪府教育委員会　昭４９小２普第１６０１号
(2)　小学校教諭1級普通免許状	平成3年11月	大阪府教育委員会　平３小１普第５０７号
(3)　修士（学術）	平成16年3月	大阪教育大学大学院　第３５０６号 論文題目「学校教育自己診断」を活かした学校改善の研究
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)　堺市立南八下小学校　教頭	平成９年４月 ～平成12年3月	教頭として、校内研究推進及び学校の活性化並びに地域との連携に取り組んだ。教頭会研修委員として「学校のリスクマネジメント」にかかる研究を堺市教頭研修会において発表した。
(2) 堺市立美木多小学校　教頭	平成12年4月 ～平成13年3月	教頭として、生活科・「総合的な学習の時間」にかかる堺市教育委員会指定事業を推進させた。 堺市立美木多中学校区の「公立・私立、保育園・幼稚園・小学校連絡協議会」において、保幼小の研究推進に取り組んだ。上記2点の取組を「地域と学校の特色を生かした実践とその評価」(2001文溪堂) P.18～P.30で論じた。また、教員の実践例P.39～P.46、P.63～P.70、P.79～P.86について、監修指導した。（再掲）
(3)大阪府教育センター　学校経営研究室主任指導主事、企画室主任指導主事	平成13年4月 ～平成17年1月	主任指導主事として、４年間、全国教育研究所連盟、近畿地区教育研究所連盟、大阪府教育研究所連盟、近畿所長会の事務局長として、研究会の企画及び研究推進に努めた。また、大阪府内の新任校長研修会・新任教頭研修会、指導主事研修会等の企画運営及び講師の任にあたった。「大阪府教育センターフォーラム」の企画及び分科会の講師・コーディネーターを担当した。大阪教育大学との連携において、スクールリーダーフォーラムの講師、シンポジスト等を担当した。 研究主担として、３年間、「大阪府学校教育自己診断」の調査研究を推進し、「学校改善への道筋」をまとめた。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １.教員免許更新ガイドブックー基準の講義内容と履修ー	共著	平成 21 年 1 月	明治図書	教員免許更新ガイドブックとして、基準の講義内容及び履修の手引きとなるよう、教員免許更新 30 時間の講義内容を提示した。教員免許更新=講義内容(教職についての省察、子どもの変化についての理解)、 教員免許更新=カリキュラム作成基準(踏まえておくべきこと、カリキュラム作成上の留意点、教員免許更新=試験問題予想(教職についての省察、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項等を提示。 A5 版　全 272 頁 編著：山極隆、千々布敏弥 共著者：　及川芙美子、善野八千子、大竹晋吾、佐藤敬子、嶋崎政男、平山諭、小島宏、陣川桂三、高木展郎、佐藤晴雄、齋藤勉、押谷由夫、本村一宏、牟田尚敏、倉本哲男、山極隆、大野裕己、久米昭宏、元兼正浩、狩野浩二 本人担当部分：第 1 章講義内容　1 節教職についての省察（２）専門職たる教員の役割について、22～32 頁を単著。 専門職として求められることについて理解を深化させ、受講後には個々の教員の実践的指導力の育成が図られる研修効果をめざして論じた。さらに実践的指導力を高めるため、実践の構造化や臨床的な実証研究の構築の必要性を説いた。すべての教員が受講する必修内容としての「教育の最新事情に関する事項」を中心に内容を構成し、主として受講する教員に自ら学ぶ手掛かりをまとめた。
２．キャリア教育読本「コドモタチへの想い」	共著	平成 22 年 11 月	奈良学園キャリア開発センター	就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。幼児教育学を活かせる保育士・幼稚園教諭以外の分野（主にビジネス）について一定の認知・理解を示した。 A5 版　全 119 頁 編者：奈良文化女子短期大学キャリア教育センター 共著者：石田秀朗、善野八千子、益田美保、島野恭子、田平友子、河井佐紀、杉井涼香、遠山健、李初子、加藤優里、松村友紀、廣岡由香里、福田寿美代、羽野麻里子、福本千春 本人担当部分：第 1 章保育者を目指すあなたへ～「子どもの笑顔をつくるスペシャリストになる」とは？　6～9 頁を単著。 保育者を目指すための要件について 2 点について整理した。子どもを理解するための日常的な生活から子どもへの関心を持つ方策、子どもに関連する番組、ニュース、書籍や絵本をとした方法及び実際に、子どもに関わる施設でボランティア活動を通して、観察・体験について述べた。また、笑顔でいるための自己コントロールについて、時間の管理、健康管理、経済管理から説いた。少子化の進行、育児サービスの多様化に伴って生じている幼稚園と保育所の抱える問題、幼稚園と保育所の一元化の動き、「保幼小連携」への取り組みにも言及した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３.子どもの育ちと学びをつなぐ～保幼小連携ＷＧの取組を通して～	共著	平成 23 年 3 月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学が組織する幼小連携 WG の合同研究会の取組について、代表としてまとめた。組織開発の経緯、参加者の振り返りを通して、汎用性のある接続カリキュラム着手の意義及び活用のあり方を示した。 A5 版　全 185 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、荒井恵子、梅田真寿美、南尚美、阪本さゆり、中田章子、熊井祥子、前田嘉余子、大山夏生 本人担当部分：第 1 章 pp. 5-18, 第 3 章 pp. 33-37, 第 6 章 pp. 80-85, 第 7 章 pp. 86-90, 第 8 章 pp. 92-101, 第 9 章 pp. 102-116, 第 11 章 pp. 156-162, 第 13 章 pp. 167-175 を単著。 幼小連携の必要性及び進まない理由について言及し、現状について整理した。また、その解決策としての本学のシンクタンクとしての役割として本研究会を設置した経緯について発信した。育ちと学びをつなぐためには、幼児教育と小学校以降の教育に関わる専門家として互恵性と継続性、発展性の重要性について論じた。幼小接続カリキュラムを作成するための手順とその実際について示した。入学前の 3 週間試案については、３つのカテゴリーと 5 領域を整理して、小学校教員にも理解が進むように示した。さらに、生活科の適応指導及びスタートカリキュラムを視点とした入学後の 4 週間の日案を検討した。
４.幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発～子どもの育ちと学びをつなぐ～	共著	平成 23 年 4 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、その課題を明らかにした。、特に、就学後の生活科を中心とした汎用性のあるカリキュラムを開発。 子どもの育ちと学びの「連続性・一貫性」のためには、どのような組織開発が必要とされ、実現可能か、またいつまでにだれが何をどのようにしていくことが重要化について解説。 A5 版　全 136 頁 共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章必要なことは、「連続性・一貫性」5～17 頁、第 3 章接続カリキュラム作成のための組織開発 31～34 頁、第 5 章～10 章入学後接続カリキュラムの実践 61～128 頁を単著。 現職の教員と保育者をつなぎ、資質向上にも寄与する研究成果をまとめた。具体的なカリキュラム作成の手順として、生活科を中心とした小学校入学後の目標設定や活動内容について汎用性の実際のカリキュラム作成のプロセスについてもフォーマットを提案した。適応指導を中心に入学前の３週間 18 日分の日案を提示し、入学後はじめての７つの課題を検討した。学習自立・生活自立・精神自立の 3 つの自立に分類し、生活科のの自立の基礎をはぐくむ方法と内容に整理した。さらに学校園として接続カリキュラムに取り組むための組織開発についても示した。
５．教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望 教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	日本の学校教育の喫緊の課題である国際教育・グローバル教育は。子どもたちの生活自体は国際色豊かなものとなり、学校や地域でも積極的な取り組みが行われている。しかし、具体的に教育においてどのように国際性をとらえ、育てていけばよいのかは理解が深まっていないのが実情に言及した。 A5 版　全 176 頁 編者：人間教育研究協議会

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者：梶田叡一、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川﨑由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、加藤明、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子 本人担当部分：第９章「幼小接続期における国際教育」81～90 頁をを単著。 幼小接続期における国際教育について、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立のためには何が必要であるかを論じた。学習指導要領改訂では「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」の教育内容の主な改善事項の一つとして「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられたことから、新しい学習指導要領のめざすものの具体例を示した。また、幼小接続期における国際教育の必要性とその体験を経験化する方法を示した。 教育的な願いとねらいをはっきりと持ち、それを実現する活動を準備し、子ども一人ひとりの国際体験・異文化体験を教育的な意味で経験化するために様々な視点から考察、問題提起した。
６.学校管理職の経営課題５　学校をエンパワーメントする評価	共著	平成 23 年 10 月	ぎょうせい	学校評価を経営改善に生かす視点を探った。学校経営のビジョン、カリキュラム経営、組織マネジメントから学校評価に至るまで、学校経営に必要な重要トピックスを詳解。 A5 版　全頁数 194 頁 編者：天笠茂、大脇康弘 共著者大脇康弘、加藤崇英、相澤良明、善野八千子、小島宏、八尾坂修、根津朋美、白井達夫、猪股亮文、京都市教育委員会 本人担当部分：第４章「マネジメントのツールとしての学校評価」56～76 頁を単著。 学校評価のこれまでの経緯を解説し、課題と改善のためのシステムを示した。第三者評価とは何か、また第三者評価を活かして学校のポジティブプロパガンダをいかに創るかをフロチャートで提示した。学校をエンパワーする評価のあり方、マネジメントツールとしての学校評価のうち、自己評価の手法、学校関係者評価、第三者評価を中心に整理した。加えて、学力を育てる学習評価と授業評価及び教師力を育てる教員評価、カリキュラム・アセスメントについて論考した。
７.子どもの育ちと学びをつなぐⅡ～幼小連携WGの取組を通して～	共著	平成 24 年 3 月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学幼小連携WG合同研究会の平成 23 年度の取組をまとめた。幼小接続カリキュラム（就学前）を開発を試みるとともに、入学前の 3 週間を再検討した。 全頁数 185 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、筒井通子、阪本さゆり、南尚美、前田嘉余子、大山夏生、定豊子、田村豊、荒井恵子、角田道代、 本人担当部分：第 1 章「幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義」6-11 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 52-82 頁、を単著。 幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義について、これまで生活科移行期において、カリキュラム作成の経験からの方法論と組織開発につながる発展性を価値づけた。また、指導者が困っている入学直後の状況からでなく、学習者の側からみた就学後の子どものとまどい要因 6 点を提示した。 学びの基礎力とのマトリクス作成により、ワークショップで活用し、幼児教育と小学校教育者による合同の教育課程の理解及び検

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				討の方策についての具体的な道筋を示した。
８．教育フォーラム 50 ＜やる気＞を引き出す･＜やる気＞を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を、教科のかかわり、教材・校内研究、学習塾の取り組みなども参考に考察、提案した。 A5 版　全頁数 179 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、松田智子、金山憲正、善野八千子、勝見健史、久田　孝、錦織　彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村　哲、瀧明知惠子、浅田　匡 本人担当部分：第 9 章「子どもの＜やる気＞をつなぐ幼小接続」34～46 頁を単著。 子どもの＜やる気＞をつなぐこと、育ちと学びをつなぐことの共通の問題から論述した。意欲・モチベーション、＜やる気＞に関するデータ及び諸説を考察・整理した。幼小接続に必要な 3 要素及び脳が＜やる気＞を出してくれる４つの条件などの知見を示した。幼少期の子どもの意欲については、その正体と環境について、幼小接続期における＜やる気＞を引き出す実践事例について、考察した。
９.子どもの育ちと学びをつなぐー幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成ー	共著	平成 24 年 9 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、生活科移行期から取り組んできた経緯を考察した。就学前後を接続する汎用性のあるカリキュラムを改善する視点を明確にした。 A5 版　全 131 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、定豊子、阪本さゆり、南尚美、大山夏生、前田嘉余子、田村豊 本人担当部分：第 1 章幼小接続のためになすべきこと、できること 8-17 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 58-87 頁、第 5 章育った力を学ぶ力へ 88-99 頁を単著。 教員の資質向上にも寄与する実践研究について、考察した。「とまどいマトリクス」を開発し、研修で活用できるように試みた。ワークショップ研修の方法や活用についても示した。また、「一日体験入学の」活動事例について、紹介し今後の発展課題を明示した。
１０.夢と力を育てる新しい学校づくり	共著	平成 25 年 4 月	教育出版	未来に向かう力をつけることのできる学校経営の在り方の提案として、新たな知見と実例をふまえ、未来志向型の学校づくりの提案。 A5 版　全 136 頁 共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章忙しい木こりの物語(1-4 頁)、第 2 章こんな学校が日本の教育を変える(5－14 頁)、第 7 章「一石五鳥プラン」と「仕事のＡＢＣ」（84－106 頁)、第 8 章幼稚園における学校評価(107－116 頁)、第 9 章さらなる外部評価アンケートの改善（117－136 頁)を単著。 教員の資質向上が子どもの学校文化を創る力になることを論考した。学校訪問記や評価を改善に生かした事例等のフィールドリサーチや分析から考察。学校づくりの発信転換の必要性を説き、学校教育関係者、学生等と共に熟考し、行動変容を可能にする知見を示した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
１１．教育フォーラム54『各教科等の学習を支える言語活動』	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	言葉の力を育てるため単元目標構造図や年間指導計画の活用などを考えながら、各教科特有の言語活動について、教師がどのような点に留意した指導を行えばよいのか、具体的な実践を踏まえて考察した。 A5 版　全頁数 140 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、金澤孝夫、櫻本明美、金山憲正、中田正浩、川俣徹、松田智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ村井ロサメルセデス 本人担当部分：第 10 章「幼小接続におけるこれからの言語活動」98～109 頁を単著。 幼小接続期の対話と姿勢について、育ちと学びをつなぐ課題から論述した。
１２．教科力　生活	共著	平成 28 年 2 月	玉川大学出版	学習指導要領平成 20 年に対応。教員の力量形成において重要な生活科の内容構成の理解を目的として、生活科のための実践力の自学自習テキスト。 A5 版　全頁数 182 頁 編者：寺本潔 共著者：寺本潔、綿貫健治、森山賢一、神永典郎、善野八千子、 本人担当部分：第 11 章「スタートカリキュラムの重要性と指導内容」114～124 頁、第 12 章「交流を通した人間関係作りの指導内容」125～135 頁、第 14 章「自己成長に気付かせる内容」146～156 頁、おわりに「生活科創設の内容や最新の教育界の動向」176～182 頁を単著。
１３．教育フォーラム59『対話的な学び-アクティブ・ラーニングの１つのキーポイント-』	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、北俊夫、赤堀博之、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井ロサメルセデス、井上信子 本人担当部分：「幼小接続期の対話的学びの力」91～101 頁を単著。 幼児期から小学校接続の対話的学びの力として、一次的ことばと二次的ことばの接点に立つ教師の役割から考察した。
１４．教育フォーラム60『深い学びのために-アクティブ・ラーニングの目指すもの-』	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峰裕、大畑健美、菅井啓之、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明智恵子、岡村季光、松井典夫 本人担当部分：「幼小接続期の深い学びー地域と未来につなぐ生活科の事例からー」103～113 頁を単著。 幼児期から小学校接続の「深い学びの力」について論考し、生活科事例から考察した。
１５．教育フォーラム61『各学習領域における基本的な見方・考え方ーアクティブ・ラーニングで鍛えられるもの-』	共著	平成 30 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 147 頁 編者：日本人間教育学会

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者：梶田叡一、鎌田首治朗、湯峰裕、金山憲正、角屋重樹、中村哲、越智貢、大畑昌己、善野八千子、高木悠哉、杉浦健、渡邉規矩郎 本人担当部分：「小学校低学年における＜基本的な見方・考え方＞」91～101 頁を単著。 低学年における見方考え方について、生活科を基軸に授業改善に散り組むための考察をした。
（学術論文） １.保幼小連携の課題解決に向けた考察	単著	平成 20 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 39 号 p. 57～p. 68	保育所保育指針及び幼稚園教育要領並びに学習指導要領が告示され、改訂にあたっての幼児教育と小学校教育の接続に関する特色を整理した。また、これからの保幼小連携に求められるものを考察し、課題解決にせまる方策として、幼児教育関係者と小学校教育に関わる両者の教育課程上の連携が重要であることを提言した。その方策として、入学前に位置づける保幼小連携合同授業や学校評価を通した学校園の特色に位置づける組織開発等を提案した。
２.幼稚園における学校評価項目作成の試み	単著	平成 21 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 40 号 p. 83- p. 99	幼稚園における学校評価項目作成を目的とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して「私が親ならこんな幼稚園に通わせたい」ことを記述するアンケート調査を実施し分析した。大項目を分類・整理し、さらに、受益者としての保護者の願いや期待を取り入れて精査した結果、幼稚園における学校評価項目として望ましい 88 の評価項目を提示した。提示した評価目の実施による検証が課題として残され、継続研究の方向性と展望を示した。
３.幼小接続期におけるカリキュラムの開発	単著	平成 22 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 41 号 p. 49- p. 67	幼稚園と小学校両者による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、両者の教職員の連携活動を推進する組織開発のあり方を探った。そして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を通して、構成要素と作成の手だてについて明らかにしつつ、教育課程の理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するために必要な組織のあり方や方向性等の知見を示した。
４.幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅱ	共著	平成 23 年 11 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 42 号 p. 49～p. 67	幼児教育と小学校以降の教育に関わる双方による教育課程の理解を中心にした「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究をまとめた。今回は、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム作成」の中で、とりわけ就学後の就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成し、活用方法を提示した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成した。このことにより、幼小連携を一層推進し、生活科の授業改善につなげる方策を示した。 共著者：善野八千子、前田洋一
５.幼稚園の学校評価における外部アンケート項目作成の試み （査読付）	共著	平成 24 年 7 月	日本学校教育学会「学校教育研究」 NO.27p.93～p.105	幼稚園における保護者の満足度に関する研究を 3 カ年にわたり継続し、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。質問項目の作成を目的とする調査 A、質問項目の精選を目的とする調査 B から、信頼の決定要因を究明した。また、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10 園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。作成された簡便な質問紙は経営状況を弁別しうることを検証した。 本人担当部分：質問項目の作成を目的とする調査 A、質問項目の精選を目的とする調査 B を実施し、信頼の決定要因を検討した。また、対象幼稚園全園を訪問指導し、経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10 園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。 共著者：前田洋一、善野八千子
６.幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～入学後の子どもの戸惑いに着目して～	単著	平成 24 年 11 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 43 号 p.49～p.67	「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究である。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、とりわけ就学直後の課題を「とまどい」の視点から調査した。それらを解決する「生活科」カリキュラム開発または改善の手がかりとなるツールを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善の手立てとして、研修会でも活用できることを示唆した。
７.「人間教育」の典型 ― 幼小連携・接続教育の価値 ― （査読付）	単著	平成 26 年 3 月	日本人間教育学会学会誌 Vol.1 p.67～p.78	教育の連携性と教育の一貫性をふまえ、幼小連携・接続,の価値について述べた。また、これまでの研究の知見から幼小接続期におけるカリキュラム開発の方法について提示した。さらに、幼児期の教育と小学校における,生活科との連続性について論述した生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．人間教育に資する「これからの幼小接続教育」の展開(1) －自己成長への気づきを促す生活科の実現に向けて－（査読付）	単著	平成 27 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol.2 p.93～p.105	「これからの幼小接続の基軸となる生活科教育」の工夫改善となる３つの要件を導出した。さらに,これら３つの要件。生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。これら３つの要件を充足する実践事例「生活科成長単元第 2 学年自分たんけん」の分析による検証を行い,その有効性について解明した。
９．人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方－「とまどいマトリクス」を活用した接続カリキュラムの改善－（査読付）	単著	平成 28 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol.3 p.39～p.50	就学前後の子どものとまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成できることを示唆した。また、それらを活かした「一日体験学習」の実践幼稚園の訪問調査結果から 4 段階の変容を分析した。 とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを幼児教育の実践事例を分析し検証した。
１０.人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方（２）－カリキュラム･マネジメントから考察する「とまどいマトリクス」の活用－（査読付）	単著	平成 29 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol.4 p.43～p.56	就学前後の「子どもの育ちと学びをつなぐ」ためにスタートカリキュラムを作成するために必要なこと、またそのカリキュラム・マネジメントのあり方についてを示唆した。３つの実践小学校に関わった管理職の聴き取り調査結果から 4 段階の変容を分析した。 とまどいマトリクス活用によって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを小学校入門期の教育実践事例を分析し検証した。
１１．生き抜く力を育む人間教育−小学校における教科指導と現代的課題に着目して−（査読付）	共著	平成 29 年 12 月	人間教育学研究 p.43～p.56	生き抜く力を育む人間教育をめざして、「特別の教科道徳」における「夢や希望を育む」指導と「算数科」を軸にした「学力不振による不登校の未然防止」の指導を検討した。指導案例を提示することで、改善の方向性を示した。特別の教科道徳の中で、自己の生き方を考える時間の保障をすることや算数科指導の中に、生徒指導の 3 機能を生かした指導の改善などの視点を明確にした。 共著者：善野八千子・金山昴資重安勝星・内藤翔一・早坂虹穂・松田彩加
（その他） **「研究報告書」** １.幼稚園における学校評価手引き書 （文部科学省委嘱研究）	共著	平成 21 年 3 月	大和郡山市教育委員会	文部科学省委嘱事業（幼児教育の改善・充実調査研究事業平成 20 年度）大和郡山市運営委員長として幼稚園における学校評価手引き書を作成した。実践協力委員に対して全編にわたって指導し、監修にあたった。 A４版　全 56 頁　監修：善野八千子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２.奈良県就学前教育研究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 3 月	京都大学地域連携教育研究推進ユニット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調査事業）A４版　全 175 頁研究代表　高見茂 本人担当部分：1.小学校との連携と親関与「就学前教育振興のために−小学校との連携推進及び家庭教育の支援を促進する取り組みに焦点を当てて−」2〜21 頁を単著。
３.奈良県就学前教育研究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 12 月	京都大学地域連携教育研究推進ユニット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調査事業）A４版　全 159 頁研究代表　高見茂 本人担当部分：3.プログラム実践状況の分析「就学前教育振興のために−参観訪問園及び他１園の実施の現状を踏まえた分析と評価・総体について−」104〜116 頁を単著。
「収録集」 １．関西セミナー関西 2008 人間教育実践交流会　京都フォーラム収録集「新学習指導要領とこれからの学校 〜習得・活用・探究型学力と言語力の育成〜」	共著	平成 20 年 11 月	日本教育新聞社	新学習指導要領とこれからの学校〜習得・活用・探究型学力と言語力の育成〜を大テーマに掲げた各講演収録。「新学習指導要領とこれからの教育」「学校、家庭、地域をつなぐ学校評価」課題別講演等をまとめた。A４版　全 300 頁 共著者：加藤明、金森越哉、浅田匡、甲斐睦朗、天笠茂、梶田叡一、勝見健史、鎌田首治朗、天野拓夫、陸奥田維彦、土田圭子、六車陽一、秋吉博之、三木史子、松田智子、寺田博幸、前田美智代、阿部扶早、飯塚晃三、金岡成晃、古川治、善野八千子、溝口聡、田村壽秀、山口晋、初田幸隆、友野遙子、中村哲、北村昌江、小楠徹、久保弘子、浅野良一、渡邊規五郎、池島徳大、丹波洋子 本人担当部分：「学力向上と学校評価〜新学習指導要領をふまえて〜」144〜165 頁を担当。「学校評価」の講演をもとに、学力向上と学校評価について、新学習指導要領をふまえて述べた。特に、学校評価研究指定校の取組を紹介し、データに基づいた学校改善の検証をフィールドリサーチ事例を示し知見を詳述。
２．平成 25 年度研究・研修収録第 44 号	単著	平成 26 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 25 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「子供の育ちと学びをつなぐ」69〜72 頁を単著。
３．平成 26 年度研究・研修収録第 45 号	単著	平成 27 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 26 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携(2)「子供の育ちと学びをつなぐこれからの言語活動」85〜89 頁を単著。
４．平成 27 年度研究・研修収録第 46 号	単著	平成 28 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 27 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「幼小接続カリキュラムの作成と改善＜とまどいマトリクス＞を活用して」78〜80 頁を単著。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．平成 28 年度研究・研修収録第 47 号	単著	平成 29 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 28 年度研究・研修収録「テーマ研修」として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期の対話的学びの力 35～38 頁を単著。
６・平成 29 年度研究・研修収録第 48 号	単著	平成 30 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 29 年度研究・研修収録「テーマ研修」として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期の「深い学び」21～25 頁を単著。
「書評」 １．深川八郎著『授業改善の評価と方法－授業評価の事例的分析研究－』	単著	平成 21 年 3 月	教育行政研究第 36 号　学会創立記念号（その 3）関西教育行政学会誌	『授業改善の評価と方法』についての書評。授業評価の事例的分析研究について、要約し紹介した。特に、評価後のフィードバックが授業者にも評価者にも明確な形で示される優れた取組や各学校の研究テーマについてリフレクションを深める中で、評価活動における次の課題を共通理解して新たな取り組みの筋道を作ることが重要である点を評価した。 A4 版　全 105 頁 本人担当部分：83～85 頁を単著。
「事典」 １.改訂　実践教育評価事典	共著	平成 22 年 8 月	文溪堂	新学習指導要領と新指導要録を基本据えた教育評価の基礎知識的な用語を解説。 A4 版　全 264 頁 共著者：梶田叡一、加藤明、長谷浩也、吉村希至、土田圭子、石井雅幸、上之園公子、尾崎友美、松田智子、鎌田首治朗、勝見建史、金沢緑、有本昌弘、木下博義、古川治、猿田祐嗣、小倉康、立田慶裕、土田圭子、二瓶弘行、田中博史、松浦拓也、寺本貴啓、善野八千子、角谷重樹、米田豊、北川達夫、小楠徹、内田和寿、林義樹、菅千索、森敏昭、川崎弘 本人担当部分：「学校評価」188－189 頁を単著。 学校評価について、学校評価のガイドラインの改訂から進め方まで解説。
「依頼原稿」 １．元気の出る「学校評価」と校内研修のポイント	単著	平成 20 年 7 月	明治図書学校マネジメント８月号	元気の出る「学校評価」を生かした校内研修のポイントについて、述べた。「学校評価」と新教育課程との関連においては、「特色ある学校づくり」と学校評価について及び学校評価システムの構築と結果公表の方策のプロセス案を提示した。また、「特色ある学校づくり」は、学校評価結果に表れる自校の誇りを強化するプロセスであることについても示した。 本人担当部分：54～55 頁を単著。
２.学校評価に生かす学テ結果の分析･診断のポイント	単著	平成 20 年 8 月	明治図書学校マネジメント９月号	学力テスト結果を活かした教師力の診断・評価について論じた。指標と学力テスト実施され、授業改革が一層求められていることから、「教師力の評価・診断」とは、教師

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				は結果から分析して効果的なアクションプラン作成の評価であるとした。また、子どもの学習意欲を引き出す教師の意欲が「教師力の診断・評価」と考え、結果を生かした改善策や各都道府県で実施されてきた事例も参考に提言。 本人担当部分：44～45 頁を単著。
３.心を育てる学級経営	単著	平成 20 年 11 月	明治図書「学級経営」12 月号	保護者との連携の進め方について、「アットホームなネットワークでフットワークよく」として、提言した。プロセス評価とクイックレスポンスで築く信頼構築について、「保護者が求める教師像」という小学校の保護者対象の調査（2007）結果をもとに論じた。クレーマーをサポーターに変えていくいくための発想と具体的提案を行った。 本人担当部分：8 頁を単著。
４.みんなで始めよう！ふじの子育て講演記録	単著	平成 21 年 1 月	富士市教育委員会	子ども、学校、保護者、地域の教育の当事者が連携している事例及び効果を挙げている事例について紹介した。また、調査結果をもとにふじの子育てに対するアドバイスとして提言した。平成 20 年度教育シンポジウムみんなで始めよう！ふじの子育て開催記録 本人担当部分：21～43 頁を単著。
５.教育ソリューションフェア２００８【分科会１】学校リーダー向けセミナー	単著	平成 21 年 2 月	日本教育新聞社	学校力・教師力を高めることを目的として、次につながる学校評価とは何かについて、論じた。これまでのフィールドリサーチや聞き取り調査から学校評価の結果をフィードバックさせ、信頼構築のツールとして改善に活かそうとしているか、学校評価の実施そのものが目的となっているかの違いを明確にした。 本人担当部分：13～16 頁を単著。
６.東通村における学校評価・保幼小連携	単著	平成 21 年 3 月	教育出版	東通学園における保幼小連携の課題解決に向けて、スタートカリキュラムの編成及び総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かす事例、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導について論じた。また、「東通村保幼園(仮称)」と「東通村小学校」を接続するための提言をまとめた。 本人担当部分：15～19 頁を単著。
７.仕事のＡＢＣ～苗代ってなんですか～	単著	平成 21 年 5 月	明治図書学校マネジメント 6 月号	「教職員意識のギャップ＝ビックリ例」として、新任教師に対する自然体験不足以前の知識不足、教材研究不足についての実態について具体事例をあげた。規範意識以前の社会のマナー・ルール・モラルを「親育て」をも担っていく教師に身につけさせていく必要とともに経験豊富な教員へのエールを送った。 本人担当部分：　12～13 頁を単著。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８.マル得情報をキャッチするアンテナの立て方	単著	平成 21 年 9 月	明治図書学校マネジメント 10 月号	情報の収集・活用・編集・発信の一連の流れについて整理し教師にとって重要な「生きる力」として、「学校評価」に関する関係法令　学校評価に関する学校教育法・学校教育法施行規則の規定　学校評価の推進関する調査研究協力者会議学校評価及び情報提供の実施状況（調査結果）及び学力向上の具体策発信と実行について、7 点に整理して提示した。 本人担当部分：15～16 頁 を単著。
９.学校評議員制度の変革点と現場への影響予測	単著	平成 22 年 1 月	明治図書学校マネジメント２月号	変革点として評議員制度に関連する教育の無償化と「学校理事会」の設置２点を予測して論じた。学校教育の無償化がもたらすもの学校格差を生み出さない学校評価の「学校理事会」の設置についての課題と教育情報の可視化とアーカイブ化の必要性を示した。 本人担当部分：14～16 頁を単著。
１０.子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小連携Ｉ接続カリキュラム作成のポイント	単著	平成 22 年 11 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 40 巻第 43 号	幼稚園教育と小学校「生活科」教育についてを、「遊びから学び」へという視点から検討を加えた。１点目に、発達に即した「育てたい姿」と「内容」を設定すること。２点目に、子どもにとっての環境の変化や違いを知ること。３点目には、子どもにとっての新しい環境の変化や違いを「時間・空間・仲間」で整理することを読み解いた。特に、就学前５歳児２月末から、入学後１年生４月・５月第１週までの「接続期７週間モデル案」のうちの、小学校入学後第１週の生活科スタートカリキュラムの一例から、その重要性を示した。本人担当部分：36～ 38 頁を単著。
１１.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム①	単著	平成 24 年 5 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 11 号	異校種の保育・教育現場をつなぎながら、子どもの育ちをつなぐ研究と実践の往還を実現していく装置としての組織開発について、示唆した。これまで、2009 年から着手した継続研究を整理し、課題と展望を示した。 また、幼児教育と小学校教育をつなぐ「幼小接続カリキュラム（就学前）（就学後）」のカリキュラムを作成するプロセスを示唆。 本人担当部分：32～37 頁を単著。
１２.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム④	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 15 号	新幼稚園教育要領の基本理念である、「生きる力」の基礎をはぐくむことから、幼児教育終了段階で身に付けたい「知・徳・体」、学びの基礎力の基本事項を解説。幼小接続カリキュラム（就学前）の作成にあたり、目標を示した。さらに、生活科につながるカリキュラム作成のための視点を「時間、空間、人間、もの、技能、心情」の 6 項目であると示し、縦軸に、「知・徳・体」、横軸に、「時間、空間、人間、もの、技能、心情」のマトリクスを考案。また、「学校ごっこ」と就学後の子どもの体験と遊びの重要性についてまとめた。 本人担当部分：33～37 頁を単著。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑤	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 16 号	入学前の「一日体験入学から、学校ごっこへ」について、幼児教育と生活科の接続について、考察した。入学前後のとまどい要因は、6 点あることを示した。時間・空間・人間・もののちがいについて、小学校入学時点との相違点について、解説。「より意義のある一日体験入学」の活動について、幼児教育のねらいと小学校生活科のねらいを併記して、目標に対応した活動としての評価を検討した。活動名「もうすぐいちねんせい」、単元名「あたらしい 1 年生をしょうたいしよう」に関連して提示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
１４.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑥	単著	平成 24 年 8 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 17 号	筆者の提案を元に実施した八尾市立東山本幼稚園からの聞き取りと記録を通して実践例を示し考察した。また、学校園の組織として連携を継続するために幼小接続は、管理職の問題意識や役割が非常に大きいことから、保育所から小学校に連携を申し出る手続きは、子どもの入学先や可能な相手校を選択して、主体的に働き掛けていくことの必要性を提言した。公私立の園と小学校の交流限定などの制約実態や子どもの交流の前に、まず教職員の交流から始める方策を示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
１５．生活科における「深い学び」を実現するための理論と授業づくりのポイント	単著	平成 30 年 1 月	学校教育 NO.1205 広島大学付属小学校　学校教育研究会	「深い学び」達成する授業とは、 本人担当部分：14～21 頁を担当。
「学会発表」				
１.「保幼小連携を視座した生活科の授業づくり」	個人	平成 20 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 17 回大会（於:山形大学)	幼児教育と小学校教育に関わる専門性を有する教員の資質は「子どもの育ちの連続」めざした保幼小連携についての理解と実践力であることから、これまでの実践力をつける「総合演習」の探求で得た知見をもとに、「保幼小連携を視座した生活科の授業づくり」ついて示唆した。実践力をつける「総合演習」から保幼小連携を視座した生活科の授業づくりを試行した。また、受講生に変容をもたらしたと思われる授業の特定をし、2 年間の実践を比較分析し、考察した。
２.幼稚園における学校評価項目作成の試み	共同	平成 22 年 6 月	日本教育経営学会第 50 回大会 （於:静岡大学)	幼稚園における学校評価項目作成を目的とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して調査した。項目を分類し、さらに、望ましい 88 の評価項目を提示した。幼稚園満足度と評価項目カテゴリーとの関係を因子分析し、検証した。評価項目作成のアンケート調査研究及び考察した。 本人担当部分：幼稚園における学校評価項目作成を目的とした現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して実施した調査方法について、受益者側から項目を作成する知見を述べ、評価項目作成のアンケート

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				調査結果を考察から得た結果について、詳述した。 共同発表者：善野八千子、前田洋一
３.子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発	個人	平成 22 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 19 回大会 (於:立命館小学校)	幼小による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を試みた。ポスターセッション型実践交流を推進した取り組みの問題点を整理した結果、校区の特性によって異なる取り組みを解決するためのカリキュラム作成の必要性を説いた。その構成要素と作成の手だてについて明らかにし、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するための組織開発を提案した。
４.グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～	個人	平成 22 年 9 月	日本グローバル教育学会第 18 回大会 (於:鳴門教育大学)	シンポジウムにおいて、グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～と題して、１．グローバル社会時代の子どもに育成する資質能力　２．経験知をふまえた理論や具体的提案　３．学校づくりの基軸となる学校評価～教育情報の可視化とアーカイブ化～　４．グローバル社会に時代に対応した学校づくりと教師の力量形成について、提案し示唆した。とりわけ、教師の力量形成における知見として、学校評価の参画者として学校への愛着と誇りを持った教員の育成について提案した。
５.子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発～「幼小接続７週間モデル案（第２次)」作成を通して～	個人	平成 23 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 20 回大会（於:岐阜聖徳大学)	幼小連携にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的とするとして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム幼小接続７週間モデル案（第２次)」作成した。作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について知見を述べた。具体的には、就学後の 18 日案、第１週～5 週までの生活科を基軸とした実践事例を提示した。適応指導のみの考えでない幼児教育の育ちをつなぐための新たなスタートカリキュラムの考えを提案した。
６.子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～「入学後の子どものとまどい」に着目して～	個人	平成 24 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 21 回大会（於:徳島大学)	子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「幼小接続カリキュラム（就学前)」を作成。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、「とまどい」マトリクスを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善手立てとして、幼児教育と小学校教育に関わる教員の混合グループワークショップにおいて、研修会でも活用できることを示唆した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅳ）～「入学後の子どもの戸惑い」を見通した一日体験入学～	個人	平成 25 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 22 回大会（於：神戸大学附属小学校・附属明石小学校）	継続研究の４年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」の作成プロセス及びその一例として「一日体験入学」の活動案を提示した。とりわけ、「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。
８．「子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小中の接続－」	個人	平成 26 年 8 月	人間教育学会「学校間接続分科会」（於：奈良学園大学）	幼・小・中学校にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に接続を推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的に考察し、「汎用性」のある接続期のカリキュラムモデル作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について、新たな知見を述べた。
9．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅴ）～「とまどいマトリクス」を活用した「一日体験入学」の改善	共同	平成 28 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 24 回大会（於：宮城学院女子大学）	継続研究の５年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」を活用した合同研修事例を提示し「一日体験入学」の改善案を考察した。とりわけ、岐阜県山県市立小学校における「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　根岸　章

研　究　分　野	研究内容のキーワード
数学、情報学、経済学	作用素論、量子ウォーク、グラフ理論、垂直軸風車、ジニ係数

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
（1）数学用ソフトウェアを用いた数学教育	平成 19 年 9 月 ～ 現在に至る	奈良産業大学(現奈良学園大学)情報学部の専門科目「情報数学Ⅱ」において、KNOPPIX/Math の CD を配布し、フリーの数式処理ソフトウェア Maxima を用いた数学の学習活動を行った。これによって、関数のグラフをパラメータを使って動的に動かしたりが容易になり、関数の係数の意味を把握した理が容易になるなどの教育効果があった。 平成 22 年度からは、学内のパソコンが CD から起動できなくなり、Windows 版の wxMaxima を利用するように変更した。 平成 25 年度からは新規科目「ゲーム数理」においても、3 次元曲線のパラメータ表示などの視覚化に役立て、平成 26 年度からは、新課程科目「情報数学Ⅱ」でも、他変数関数の微積分の学習で活用するようになった。
（2）達成度別課題学習システムの構築	平成 20 年 4 月 ～ 平成 22 年 3 月	奈良産業大学(現奈良学園大学)情報学部の専門科目「情報数学Ⅰ」において、授業内容を課題として設定し、一つの課題に複数の同種の問題を用意して課題内容未達の学生は、繰り返し課題を行うようなシステムを構築した。学生は学内 LAN から自分の達成状況が分かる。また、成績評価も絡めることによって課題達成への意欲を持たせるようにした。
（3）能力別クラス編成の実践	平成 22 年 4 月 ～ 平成 23 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部 1 年次生に対し 4 月当初に数学についてのプレースメントテストを行い、日本人学生に関しては、多喜正城教授とクラス分けをして専門科目「情報数学Ⅰ」を行った。それによって、学生の状況に応じた授業がしやすくなり、学生のやる気を高める教育効果があった。
（4）「基礎数学」の科目設置	平成 23 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）の全学共通の導入基礎科目「基礎数学Ⅰ」「基礎数学Ⅱ」を設置し、4 月入学時に全学的に数学についてのプレースメントテストを行い「基礎数学Ⅰ」から履修、「基礎数学Ⅱ」から履修、「履修免除」にわけ、それぞれの科目を各学部で複数クラス開講して少人数教育にした。それによって、大部分の学生は数学力の向上が見られるなど教育効果があった。
（5）講義科目「情報数学 I」と演習科目「情報数学演習 I」の同時受講	平成 24 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の平成 23 年度のカリキュラム改革で、主要科目において講義科目と演習科目を併設して同時受講させるようにした。平成 24 年度から 2 年次配当科目として「情報数学Ⅰ」と「情報数学演習Ⅱ」を同時受講させ、両科目を連携させることによって数学的内容の理解とともに計算力をつけさせるように工夫した。

2　作成した教科書，教材 （１）「統計学入門」	平成 19 年 4 月 ～ 平成 24 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）ビジネス学部で兼坦した「統計学入門」（学部共通基礎科目、１年次配当、半期２単位）で使用したテキスト。 記述統計について平均や分散、相関係数などまでを扱う。平成 20 年度からは留学生対応としてルビをふるようにした。なるべく数式を使わずに統計学の概念の理解をさせるように工夫し、それによって、数学が苦手な学生でも統計の基礎的な概念が理解できる教育効果があった。A４全 29 ページである。
（２）「経済統計入門」	平成 19 年 4 月 ～ 平成 24 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）ビジネス学部で兼坦した「経済統計入門」（学部共通基礎科目、１年次配当、半期２単位）で使用したテキスト。 インターネットで入手できる経済統計のデータについて、マクロ経済学の諸概念との関連を強調しながら入手方法や意味を扱う。実際のデータを入手したり、それを加工さるような課題を課すことによって、経済データの分析手法を学ばせる教育効果があった。経済統計のデータの更新や統計調査の名称変更などはプリントで補った。A4 全 28 ページである。
（３）「数学入門 第 2 版」	平成 22 年 3 月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用していた教科書。数の集合の拡張とそれぞれの関係から始め、初等的な方程式の解法や１変数関数の初歩的事項から、微積分、テーラー展開や数値積分までを扱っている。第２版では集合や命題と論理を付録として追加した。 自然数から有理数を導出する考え方と、指数が自然数のベキから小数のベキへの導出を対比させるなどして、いろいろな事項をなるべく関連させながら学習していくように工夫し、それによって、学生に１変数の解析を学習しやすくする教育効果があった。 A５全 146 ページで学術図書出版より発行された。（ISBN978-4-7806-0187-9）
（４）「情報数学Ⅰ」	平成 24 年 4 月 ～ 平成 24 年 9 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅰ」（専門科目、２年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置された「基礎数学Ⅱ」を修得した学生を対象とした科目内容に改めた。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 95 シートである。
（５）「情報数学Ⅱ」	平成 25 年 4 月 ～ 平成 29 年 9 月	良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。2 変数関数の微積分を中心として、変数変換や近似計算も扱っている。Maxima の利用により、微積分の具体的な計算よりその意味を考えることに集中でき、また、2 変数関数のグラフなどが視覚化されわかりやすくなるなどの教育効果があった。A4 判全 28 頁。

（６）「ゲーム数理」	平成 25 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「ゲーム数理」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置されたゲーム制作で現れる数学のうち､CG の変換の基礎となる数学事項に特化した内容を扱っている。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 111 シートである。
（７）「数学の世界」	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学において平成 26 年度から設置された「数学の世界」（共通教育科目、1 年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。幾何、代数、解析の 3 分野を中心に、「数の世界」、「量の世界」、「形の世界」、「計算の世界」、「変化の世界」と題して数学の諸分野の内容を紹介する。整数の集合など簡単な材料を用いることによって、高校までの数学ではでてこない比較的新しい数学の概念や考え方を、興味をもって学習できるように工夫した。全 99 シート。
（８）「日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－」	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用中の教科書。日常生活に近い場面での数学の活用例を中心に、関数、数列、行列の基礎知識と学びながら応用方法も学んでいく。 物体の動きと微分や、金利と数列、人数の変化と行列などを結び付け、学習者の興味を引き出しながら学んでいけるように工夫している。大田靖氏（岡山理科大学総合情報学部准教授）との共著で A５全 169 ページで学術図書出版より発行された（ISBN978-4-7806-0464-1）。根岸の担当分は第 2 部 101 ページである。
（９）「情報数学演習Ⅱ」	平成 27 年 9 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学演習Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、１単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置された情報系で必要とされる数学内容のうち、グラフ理論を扱っている。演習中心に展開しつつ、グラフ理論の基礎用語の説明や、さまざまな定理の証明を実例を交えつつ行い、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 84 シートである。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
（１）学生の授業評価アンケートの結果	平成 27 年度前期	最高点 4.00 で、「数学の世界」の総合的満足度は 2.85 であり、全体平均の 3.29 よりだいぶ低い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均は 2.31～3.92 となり､全体平均と比べ低い項目も高い項目もあった。低かったのは、授業時間外の指導等で、高かったのは、授業中の私語対策などであった。その他の担当科目については受講生が 10 名未満だったため、アンケートの対象外だった。
	平成 27 年度後期	「生活の中の数学」の総合的満足度は 3.33 であり、全体平均の 3.24 より若干高い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均も 3.33～3.56 となり、どの項目も全体平均より高い値となっていた。その他の担当科目については受講生が 10 名未満だったため、アンケートの対象外だった。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）「Excel を用いた成績管理」	平成 20 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2008」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、いくつかの統計関数を使いながら得点を 3 段階評価に変えたり、散布図やヒストグラムを作る方法を講演した。また、観点別の評価を総合の評価に計算するなどの方法を講演した （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 25 名程度）
（2）「Excel を用いた成績管理」	平成 21 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2009」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、いくつかの統計関数を使いながら得点を 3 段階評価に変えたり、散布図やヒストグラムを作る方法を講演した。また、観点別の評価を総合の評価に計算するなどの方法を講演した （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 25 名程度）
（3）「情報処理学とは」	平成 22 年 4 月	私立奈良文化高校で行われた「奈良文化高校分野別ガイダンス」において標記のテーマで講師を務めた。情報処理学という学問分野の概説を行い、合わせて、奈良産業大学情報学部の特徴を述べた。 （聴講者は奈良文化高校の生徒 2 名）
（4）「社会生活の中の数学」	平成 22 年 7 月	奈良県王寺町りーべる王寺において、王寺町と奈良産業大学の主催で行われた「王寺町り～べるカレッジ」において標記のテーマで講師を務めた。社会生活に数学が使われている例として、2 つの具体例を取り上げて解説した。１つは、産業連関分析で、数学的には逆行列の応用となっていること、もう一つはデジカメで使われるパッシブ方式のオートフォーカスの原理で、差分の考え方の応用となっていることを述べた。 （聴講者は地域の高齢者の方を中心に 30 名程度）
（5）「Excel VBA の活用」	平成 22 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2010」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例やFORループを利用したプログラミングについてを講演した。 （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度）
（6）「Excel VBA の活用」	平成 22 年 12 月	奈良産業大学で行われた「2010 年度冬季 教職員のための公開講座」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例やFORループを利用したプログラミングについてを講演した。 （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名弱）
（7）「Excel VBA の活用」	平成 23 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2011」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例やFORループを利用したプログラミングやセルの内容を基にしたセルごとの操作についてを講演した。 （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度）

（8）「情報の数理」	平成 24 年 6 月	奈良県立大和中央高等学校で行われた「進路相談会」で標記のテーマで模擬講義の講師を務めた。情報量とは何かを主題に、対数の定義やその性質を述べ、そこから情報量の定義を与えた。また、ファイルの可逆圧縮と非可逆圧縮の違いを、情報量の観点から述べ、実演を行った。（受講者は大和中央高校の生徒 15 名）
（9）「Excel 関数自由自在」	平成 24 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2012」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、条件によって変化する関数を主題に講演した。IF 関連関数や他の関数との組み合わせ利用、配列数式の利用法補などを扱い、それぞれの違いを講演した。（受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度）
(10)「Word と Excel をリンクした文書作成」	平成 24 年 8 月	三郷町立三郷北小学校で行われた「教員研修会」において標記のテーマで講師を務めた。Word と Excel をリンクした文書作成を主題に、Word のグラフ作成において、Excel とリンクさせない場合とさせた場合の違いや、差し込み印刷の使い方などを講演した。（参加者は三郷北小の教員 20 名程度）
(11)「こども ICT 講座」	平成 29 年 2 月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「こども ICT 講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。（参加者は三郷町の小学 4 年生から 6 年生 16 名）
(12)「子ども ICT 講座」	平成 30 年 2 月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「子ども ICT 講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。（参加者は三郷町の小学 1 年生から 5 年生 14 名）
5　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 高等学校教諭第一種免許（数学）	平成 2 年 3 月 31 日	平成高一め第四三六三号（京都府教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）インターンシップ科目検討ワーキンググループ	平成 23 年 8 月 ～ 平成 27 年 2 月	インターンシップ実習の単位化にあたり、科目の内容、実施方法の検討を行った。その後、平成 25 年度は 2 年次生配当科目「インターンシップⅠ」を、平成 26 年度は 3 年次生配当科目「インターンシップⅡ」を担当した。
（2）情報学部評議員	平成 24 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の評議員を務めた。
（3）情報学部長	平成 27 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の学部長を務めた。

（4）情報センター長	平成 29 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	奈良学園大学情報センター長を務めた。
4　その他 特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 数学入門（第 2 版）	単著	平成 22 年 3 月	学術図書出版社	（再掲のため略）
2 日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－	共著	平成 27 年 3 月	学術図書出版社	（再掲のため略）
（学術論文） 1 ジニ係数の数理的性質と実証研究例	単著	平成 23 年 12 月	奈良産業大学紀要第 27 集 pp.79-94	複数の集団のそれぞれのジニ係数と、それを合わせた全体の集団のジニ係数の関係を考察した。ジニ係数の定義を拡張し、新たな定義に対し必要となる性質を定理として得た。この結果、元の 2 集団の要素数の比率と全体の集団のジニ係数は無関係であることを一般的に示した。また、「国民生活基礎調査」の公開データをもとに、日本の高齢化がジニ係数の増加に与える要因分析を行った。
2 有限グラフ上の量子ウォークについてⅠ：定義と条件	単著	平成 25 年 2 月	奈良産業大学情報学フォーラム紀要第 8 集 pp.99-108	有限グラフ上の量子ウォークについて、まず、グラフに無関係な一般のヒルベルト空間上のユニタリ写像を置き、その中で、グラフと結びつけるうえでのいくつかの仮定の下、グラフの頂点と関係する部分空間の次元を導出した。
3 有限グラフ上の量子ウォークについて II:例と性質	単著	平成 25 年 12 月	奈良産業大学紀要第 30 集 pp.57-63	有限グラフ上の量子ウォークについて、2 部グラフでの解析において、半分の次数の行列を用いれば十分であることを示した。
4 有限グラフ上の量子ウォークについて III：Propagator Set の次元	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集 pp.91-96	有限グラフ上の量子ウォークについて、量子ウォークの Propagator Set の定義を与え、実パラメータの自由度を次元として Propagator Set の次元を与える定理を示した。また、瀬川、鈴木両氏の″Generator of an abstract quantum walk.″における定義と根岸の定義の違いについて考察した。
（その他） 1 奈良産業大学（現奈良学園大学）インターンシップ第 2 期実施報告 :研究ノート	共著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要第 3 集 pp.209-227	平成 24 年度から奈良産業大学で実施された単位化された科目としてのインターンシップについて、その導入の経緯から実習後の教育効果までを記述した研究ノート。山本英司氏（現金沢星稜大学経済学部教授）との共著で、根岸は主にデータの解析とその分析結果の記述を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 奈良産業大学「基礎数学」の報告と分析 :研究ノート	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要第 5 集 pp.197-211	奈良産業大学（現奈良学園大学）で平成 23 年度から平成 27 年度にかけて実施した数学の導入教育について、科目の到達目標の設定段階の状況報告から実施後の学生の成績に基づく分析までをまとめた。
3 解析学における高大連携の私論（その１） :論考	単著	平成 27 年 11 月	教育 PRO 第 45 巻 25 号 p.16-17	数学の高大連携において、解析学に重点を置くことの意味を示し、いくつかの数学用語についての高校と大学での違いを述べた。
4 解析学における高大連携の私論（その２） :論考	単著	平成 27 年 12 月	教育 PRO 第 45 巻 27 号 p.16-17	数学の高大連携において、微分と積分において、高校段階で注意すべき点をいくつか示し、それらが大学でどのような意味を持つかを述べた。
5 Gini 係数の実証研究例について :口頭発表		平成 20 年 9 月	2008 年夏の作用素論シンポジウム　於：アバンセ（佐賀県立女性・生涯学習センター）、佐賀市民活動センター	Gini 係数において、２集団が合併した際の一方の集団の全体の Gini 係数への寄与率を定義し、厚生労働省の「国民生活基礎調査」の昭和 61 年から平成 17 年までのデータをもとに寄与率の計算を行い分析した。
6 Quantum random walks – an introductory overview（論文紹介） （量子ランダムウォーク－入門的概観） :口頭発表		平成 21 年 9 月	2009 年夏の作用素論シンポジウム　於：いわて県民情報交流センター アイーナ（盛岡）	量子ウォークについての J.Kempe 氏の論文紹介を中心に、量子ウォークとは何かについて、特に 1 次元量子ウォークの一つであるアダマールウォークとランダムウォークとの分布の違いについての講演を行った。
7 有限グラフ上の量子ウォークについて :口頭発表		平成 22 年 9 月	2010 年夏の作用素論シンポジウム　於：松本市中央公民館	有限グラフ上での量子ウォークの一般的な定義を与え、いくつかの簡単な例について、漸近挙動の分布の様子の数値計算例を紹介した。
8 辺から見た量子ウォーク :口頭発表		平成 23 年 9 月	2011 年夏の作用素論シンポジウム　於：熊本市国際交流会館	有限グラフ上での量子ウォークを双対グラフ上で考察することによって設定を単純化できることを示した。
9 Some examples of quantum walk on finite graphs. （有限グラフ上の量子ウォークのいくつかの例） :口頭発表		平成 24 年 9 月	2012 年夏の作用素論シンポジウム　於：新潟大学駅南キャンパス　ときめいと	量子ウォークの漸近挙動について、グラフが星形グラフ、直線、サイクルの場合について考察した。
10 有限グラフ上の量子ウォークについて :口頭発表		平成 25 年 9 月	2013 年夏の作用素論シンポジウム　於：広島大学東千田キャンパス	有限グラフ上での量子ウォークについて、ユニタリ性の見地からのより一般的な定義を与えた。また、この考えの応用例として、二部グラフにおける量子ウォークの固有関数についての定理を与えた。
11 トルク差を利用した垂直軸風車について :口頭発表		平成 26 年 9 月	2014 年夏の作用素論シンポジウム　於：セミナー・カルチャーセンター臨湖	垂直軸風車において、羽の両面の形状の違いによるトルク差を利用するアイデアを提唱し、その数値計算例を与えた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
12 垂直軸風車の周速比の計算例 :口頭発表		平成 27 年 9 月	2015 年夏の作用素論シンポジウム　於：福井県フェニックスプラザ	トルク差を利用した垂直軸風車について、周速比の計算例を与えた。
13 量子ウォークの時間発展の次元について :口頭発表		平成 28 年 9 月	2016 年夏の作用素論シンポジウム　於：米子コンベンションセンター BiG SHiP	U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数 n の有限グラフ上の量子ウォークの時間発展となりうる行列の集合の幾何学的次元とその条件を与えた。
14 量子ウォークの Propagator Set の次元について :口頭発表		平成 29 年 7 月	2017 年夏の作用素論シンポジウム 於：伊勢市観光文化会館	量子ウォークの Propagator Set の定義を与え、U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数 n の有限グラフ上の量子ウォークの Propagator Set の幾何学的次元に関する定理を示した。

教　育　研　究　業　績　書

平成３０年3月３１日
氏名　松田　智子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	教育思想と教育史・特別活動の指導・生活科の指導・幼児教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年 月 日	概　要
1　教育方法の実践例 （1）地域の子育て事業への参加体験を通しての地域社会との連携の具体的促進	平成 20 年 9 月～ 平成 21 年 3 月	学生を地域の児童館学童保育へボランティアとして参加させ、地域の子育て支援事業との連携を授業に組み込んだ。これにより放課後の子どもの姿を観察できた。また、地域の祭りや催しへの参加を通し､保護者や地域住民の願いに触れ､「地域に貢献できる大学」について考える契機となった。地域住民からの感謝のが、学生の達成感と満足感を高め、教育職への就労意欲を喚起した。 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の実践である。
(2)学生の相互評価を導入した成績評価の開発	平成 20 年 9 月 ～平成 24 年 3 月	指導者として求められる感性及び表現力を育成するにあたり、学生の相互評価を導入した成績評価を実施した。事前の学生との討議で具体的な評価基準を作成し、他者のスピーチを相互に評価した。その成果及び課題を発表者に返す作業を行うことにより切磋琢磨の気風が醸成され、個々の観察力がさらに細かく具体的となった。表現の工夫では、具体物使用や身体表現が広がる等の効果が出た。 京都光華女子大学短期大学部・環太平洋大学の実践である。
(3)形成的な評価を活用した授業計画の開発	平成 21 年４月 ～現在に至る	シラバス作成時に授業の形成的評価を計画に位置付け、それを基に授業の改善を行う。また、それぞれの授業終了時に３段階の満足度評価（学習者と指導者二者を対象とする）及び自由記述形式のアンケートを実施し、その集計結果を次回の授業でフィードバックして、自己評価に活用する。これにより授業改善のみならず学生とのコミュニケーションツールとしての役割も果たした。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科及び奈良学園大学人間教育学科の実践である。

(4) 生活科の体験を通した気づきを表現する過程で言語力を育てる系統的指導	平成 21 年 9 月 ～26 年 3 月	児童は直接体験を伝え合う中で自分の気付きと友達のそれとを比較し、共通点や相違点を発見する。これは相手意識と目的意識を備えた活動でなければ効果は望めない。そこで生活化の体験と国語科の低学年の「話す・聞く」の能力を系統的に指導する中で子どもの言語力を育てることを紹介した。朝のスピーチを連続的・系統的に取組み気づきの質を高める言語力指導を具体的に提示した。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科及び奈良学園大学人間教育学部の実践である。
(5) 特別活動の学級活動の話し合いを有効に進めるための学級経営の環境的な工夫を発見するため、DVD を通して学校現場を分析する指導	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	担任が学級活動の話し合いを通して良好な人間関係を形成するために、日常的に行っている学級経営を聞き取った。さらに学級の掲示物や、児童生徒の発表の仕方など学級のルールや文化等が特別活動の学級活動の話し合いに与える影響を分籍した。教師の指導力が学級活動のも目標達成に大きな影響を与えることを実証した。奈良学園大学の特別活動の指導法の実践である。
2　作成した教科書，教材 (1)教育フォーラム〔41〕　　共著（金子書房） 新しい学習指導要領 ―カリキュラム改革の理念と課題―【再掲】	平成 20 年 2 月	新学習指導要領の説明を、設置の背景及び各教科の観点から述べ、理解しやすいと評価を得た。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「教育実習の事前事後指導」の補助資料として使用した。
(2) 言語力を育てる授業作り ―新学習指導要領対応―【再掲】 共著（図書文化）	平成 21 年 9 月	今までの学習指導要領の教育の問題点を洗い出し、新たなカリキュラム改革が目指す理念と課題を明確にした。生活科のカリキュラムについての理解が深まったと感想が出た。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科生活科指導法で参考書として使用した。
(3) 教育フォーラム[46]　　共著（金子書房） ―言葉の力を育てる―　【再掲】	平成 22 年 8 月	各教科で新学習指導要領の要請される言語力を育てる方策について述べたものである。具体的であると好評だった。芦屋市幼稚園教育研究会の教育課程の学習会で資料として配布し論議を深めた。
(4) 実践教育評価事典【再掲】 共著（文渓堂）	平成 22 年 8 月	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科のゼミナールで、学習指導要領の歴史を把握する際の教科書として使用した。歴史についての意識が低かったが、興味を持った学生が出てきた。

(5) 不登校生支援ハンドブック【再掲】 （学研エディケーショナル）	平成 22 年 12 月	子どもの不登校の事例を挙げて、それについての取り組みおよびその取り組みへの評価を述べたものである。学校復帰の具体的過程が分かったと好評だった。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「生活の理解」の事例資料として使用した。
(6) 教育フォーラム[46]　共著（金子書房） ―〈こころ〉を育てる―【再掲】	平成 23 年 3 月	個々との教育とは何かを論じ、各教科での心の教育への取り組みの在り方を述べたものである。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「学級経営ゼミナール」資料として活用した。
(7)次世代教職入門【再掲】 共著（大学教育出版）	平成 23 年 5 月	教師としての在り方についてその理念、研修や服務および仕事の内容について述べた。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」で確認のための資料として使用した。
(8) 教育フォーラム[50]　【再掲】 共著（金子書房） ―〈やる気〉を引き出す〈やる気〉を育てる―	平成 24 年 8 月	子どものやる気とは何か、各教科におけるやる気の引き出し方について論じた。やる気のポイントが理解できたと好評だった。環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」の参考書として使用した。
(9) 次世代の教育原理　【再掲】 大学教育出版	平成 24 年 10 月	基本原理と教育思想の歴史等、教育の一般原理について述べた。分かりやすい言葉で書かれていてわかりやすいと好評だった。奈良学園大学人間教育学部の「教育原理」の教科書に使用した。
(10) 子どもと生活―知的好奇心を育む環境づくり―　【再掲】　ふくろう出版	平成 25 年 3 月	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。写真等が多くて好評だった。奈良学園大学人間教育学部「生活の理解」で教科書として使用した。
(11) 人間教育を視点にした「教職入門」 共著（大学教育出版）【再掲】	平成 26 年 12 月	教員の本質は人間の人格の形成てあり、教職に就く者の基本理念を述べた。内容が具体的であり、学生にわかりやすかった。奈良学園大学と環太平洋大学において「教職入門」の教科書として使用した。
(12) 哲学する教育原理（保育出版社）【再掲】	平成 29 年 3 月	どうして教育原理を学ぶのか、現在の教育にどのように結びついているのかに視点を当てて作成した。奈良学園大学の「教育原理」の教科書として使用した。

(13)特別活動の指導法―各教科、道徳、総合的な学習の時間との連携を通して― ERP 出版　　(共著)　【再掲】	平成 30 年 1 月	特別活動では「社会の形成者としての資質・能力」を身に付けるものであり、方法原理としては「なすことによって学ぶ」を原則とすることを論じた。関西福祉大学と奈良学園大学の教育学部での特別活動で教科書として使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)京都光華女子大学短期大学部学生による自己評価委員会アンケート 平成 19 年度後期授業評価アンケート	平成 20 年 2 月	「生活と文化」「学齢児保育」の全体を通して５段階で平均 4.0 以上の評価を受けた。特に授業の進め方の工夫では高い評価を受けた。
(2)京都光華女子大学短期大学部学生のアンケートによる平成 19 年度卒業生 の満足度評価	平成 20 年 3 月	学生の満足度は、授業 74．2%、先生 86．4%、自己の成長度 78．3%、友人関係 96．2%であった。総合満足度は 80.0%と大学の学科の中で一番高い満足度を示した。
(3)京都光華女子大学平成 19 年度大学内自己点検教員評価結果	平成 20 年 6 月	学長及び学部長から、研究・教育・社会貢献・学内運営のすべての領域において「相当である」との評価を受けた。
(4)京都光華女子大学短期大学部学生による自己評価委員会アンケート 平成 20 年度前期アンケート	平成 20 年 8 月	「保育課程総論」の全体を通して 5 段階で平均 4.2 以上の評価を受けた。特に授業の説明の分かりやすさや教材教具の準備では高い評価を受けた。
(5)環太平洋大学次世代教育学部教授として採用においての評価	平成 21 年４月	学校法人創志学園、大橋博理事長から、授業指導の能力のみならず、校長経験や教育委員会で身に着けたマネージメント能力を高く評価され、環太平洋大学の学級経営学科学科長で新規に採用をされた。
(6)環太平洋大学平成 21 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 22 年 3 月	学生による授業評価 12 項目の平均評価は 3.52(満点は４）である。特に専門基礎である「学校と社会」が 3.77 と高い評価であった。
(7)環太平洋大学平成 22 年度前期学生による授業評価アンケート	平成 22 年 9 月	学生による授業評価「生活の理解」満足度 4.00 中の 3.85、「学校学級文化の受容力」満足度 4.00 中の 3.97 であり、高い評価である。
(8) 環太平洋大学教職センター長としての評価	平成 23 年 3 月	学長大橋博より、公立学校の教員採用試験の合格者を倍増するように指示を受け、目標を達成した。大学内に教師を目指す組織である「大志会」を設立し、学生の自学自習の支援システムと教職センターの組織を確立したことが高く評価された。

(9) 環太平洋大学平成 22 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 23 年 3 月	「生活科教育法」3 コマのそれぞれの学生満足度は 4.00 中の 3.76、3.90、3.84 であり高い評価を得ている。「学校と社会」満足度 4.00 中の 3.35 である。
(10) 環太平洋大学平成 23 年度前期学生による授業評価アンケート	平成 23 年 9 月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中の 3.91 と 3.70 である。特に 3.91 という評価では授業方法が適切で興味が持てる授業展開の項目が 4.00 と高い評価であった。
(11) 環太平洋大学平成 23 年度後期学生による授業評価アンケート	平成 24 年 3 月	「生活科教育法」3 コマのそれぞれの学生満足度は 4.00 中の 3.90 であり高い評価を得ている。特に学生は学習指導案の作成に高い評価を付けた。
(12) 環太平洋大学キャリアリアセンター長としての評価	平成 24 年 3 月	学長梶田叡一から地方の私立大学である環太平洋大学が、岡山県及び全国を上回る就職率 96，06%を達成したことを高く評価された。特に、キャリアセンターを学生の進路別に 4 つの室に編成し、キャリア支援のシステムを構築したことを評価された。
(13) 環太平洋大学の学長補佐としての評価	平成 24 年 3 月	学長梶田叡一から理事長と学長と理事との意思疎通を図るパイプ役を務めるように指示され、その役割を果たした。大学の経営方針作成や新設学科設立の企画に参加し、マネージメント力を学長から評価され、新学長の下でも学長宇補佐を続けるように推薦された。
(14) 環太平洋大学平成 24 年度前期、学生による授業アンケート	平成 24 年 9 月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中 3.8 以上であり、具体的な楽興驚異の実践的な事例と結びつけた授業なので、実際的な授業に役立つとの意見が多かった。
(15) 環太平洋大学平成 24 年度後期、学生による授業評価アンケート	平成 25 年 3 月	「生活科教育法」3 コマの学生の最も高い満足度は 4.00 中 3.77 である。具体的な模擬授業や、児童への発問、評価の褒め言葉などが参考になっていた。
(16) 奈良学園大学平成 26 年度前期　学生による授業アンケート	平成 26 年 8 月	特別活動の指導法（中等）において、学生自身が学習指導要領を読み取る力が付いたと述べている。満足度は 4.00 中 3.83 と高いものだった。特に板書の工夫については 3.92 と高得点である。
(17) 奈良学園大学平成 28 年度後期学生による授業アンケート	平成 29 年 3 月	教育原理(中等)において、学生一人一人が教育哲学者を調べて、発表し相互交流する授業を行った。学生の原稿を何度も校正し、そのたび情報収集し自らの学びが深まったと、９０%の学生が教育方法や指導方法について高い評価をした。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)兵庫県芦屋市立山手小学校研究会の総合的な学習の時間の助言者 「日本一の学校給食」 （対象：山手小学校教員 30 名）	平成 20 年 6 月	「日本一の学校給食」の課題を児童が決定する過程の公開授業を参観し、授業後の研究協議会において指導を行った。あわせて総合的な学習における言語活動の位置付けについて方向を例示した。
(2)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会指導助言 「学校評価と日常の保育との関係」 (対象：朝日ヶ丘小学校教員 25 名)	平成 20 年 6 月	朝日ヶ丘幼稚園の教職員を対象に指導した。全クラスの保育参観を行った後の研究会では、それぞれの幼児の発達年齢に応じた内容であるかどうかを踏まえて助言した。また学校評価を園の教育目標と関連付けて実施する必要性を提言した。
(3)兵庫教育文化研究所教育課程編成講座講師 「各学校独自のカリキュラム編成の留意点」 （兵庫県下の教職員約 50 名を対象）	平成 20 年 7 月	カリキュラム編成の講座である。兵庫県の小学校５年生で実施される１週間の自然学校を総合的な学習として位置づける上での留意点として、自然学校における各校のねらいに沿った活動内容や指導方法が必要であることを指導助言した。「体験主義」に陥り「学び」がない体験は経験化されないと強調した。
(4)大阪府生駒市青少年健全育成協議会講師 「地域・保護者との連携への視点」 （大阪府生駒市内の公立小中学校の教職員約 100 名を対象）	平成 20 年 8 月	学校に苦情や要望を述べる保護者が増加した社会的な背景を述べるとともに、学校内部の組織的な弱点を分析と指摘を行った。あわせて、保護者との「共感」とは具体的にどのように振る舞うかにつきロールプレイを活用して提案した。
(5)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会助言者 「環境構成と教師の役割」 （朝日ヶ丘幼稚園教員 10 名を対象）	平成 20 年 10 月	年少と年長クラスの保育の参観と事後協議会において幼稚園教育要領の５領域と現実の保育内容を関連付けて指導助言を行った。幼児教育の「環境を通して行う」意味の再確認と、今日求められている「規範意識の芽生え」について提言を行った。
(6)兵庫県芦屋市立幼稚園教育研修会講師 「新幼稚園教育要領の改訂のポイント」 （芦屋市公立幼稚園の園長と主任・行政担当者の約 20 名を対象）	平成 20 年 10 月	新幼稚園教育要領の改訂のポイントと小学校学習指導要領の関連性について講演した。その中で、教育課程編成上の留意点及び、具体的な編成手順について指導した。
(7)京都市私立幼稚園新規採用教員研修会講師 「幼稚園の教師入門」 （京都府私立幼稚園新規採用教員約 120 名を対象）	平成 20 年 10 月	「教員の使命感と職務遂行能力とは」をテーマに講演をした。教員の成長を日本の伝統文化継承の過程「守・破・離」に例え、現在学ぶべきことを具体的に話した。また、幼稚園教育は生涯学習の入口であり、重要な仕事であることを強調した。

(8)兵庫県芦屋市立山手小学校国語科校内研究会助言者 「国語教育における新しい言語活動」 （山手小学校教員約 26 名を対象）	平成 20 年 11 月	小学校 4 年生国語科文学教材「一つの花」の授業参観と事後の研究協議会で指導を行った。新学習指導要領の重点である言語活動を、国語科の中での具体的な指導について助言した。また、文学作品における視点と読者の関係について教材研究する必要性、さらに、単なる話し合い活動は、児童の論理的な思考を妨げることを指摘した。
(9)兵庫県芦屋市立山手小学校研究会の国語科の指導助言 「国語教育における新しい言語活動」 （山手小学校教員約 26 名を対象）	平成 20 年 11 月	小学校 3 年生の国語科「ズームとアップ」の授業参観と事後研究の指導を行った。論理的に考えを示すのに適切な説明文教材であり、児童の表現を相互評価することにより良い表現を作り上げる授業だが、児童への相互評価の規準や視点を指導なしに妥当な評価は出来ないことを指導した。
(10)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究会の総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習で福祉を取り扱う留意点」 （朝日ヶ丘小学校教員約 30 名を対象）	平成 21 年 2 月	福祉教育で高齢者とのかかわりの授業参観と事後研究を行った。高齢をマイナスにとらえる児童が多いが、ふれあいや探究活動を通して、歳を重ねることの素晴らしさを体感させる取り組みであり、体験を文字化し児童が、自分自身の変化をメタに認知する場面が必要であると指導した。
(11)兵庫県芦屋市立山手小学校全国発表会総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習と環境教育」 （全国大会参加者約100名を対象）	平成 21 年 2 月	芦屋川の環境をテーマに、地域住民や専門家と連携した「環境サミット」の公開授業で、能動的に環境に働きかける姿が参加者より高い評価を受けた。保護者や地域住民、行政関係者等が一体となり児童の当事者意識を高めることができた。総合的な学習と国語科の書く力を連携させ、日常的に言語力を育成する重要性を指導した。
(12)兵庫県河辺郡猪名川町立公立幼稚園長及び校長研修会の講師 「保護者・地域との連携」 （猪名川町管理職及教育委員会職員 60 名を対象）	平成 21 年 2 月	危機管理の視点から保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。またそのような社会的な背景も考察した。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠である。クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。また、組織的に対応し、教訓を継承することの重要性を説明した。
(13)兵庫県芦屋市立公立幼稚園園長及び主任研修会の講師 「言語活動と幼小連携」 （芦屋市園長及主任約 20 名を対象）	平成 21 年 3 月	新学習指導要領の実施に伴い、今後もとめられる言語活動の重視及び体験的な活動と知識理解との関係について論じた。芦屋市の教育課程基底の枠組みについて指導した。また小学校教育との連携のスタートカリキュラムについて説明した。遊びを学びとしてとらえる指導と評価を提案した。

(14) 兵庫県芦屋市公立幼稚園研修会全体講師 「幼稚園教育要領の改定と芦屋の特色」 （芦屋市幼稚園教諭約 100 名を対象）	平成 21 年 3 月	幼稚園教育要領の改訂のポイントと、その内容が小学校・中学校の教育内容にどのように継続しているのかを解説した。芦屋市の地域性を全校学力状況調査の結果と結び付けて説明した。比較的学力の高い地域に求められる「心をたがやす保育」の方向を提示した。
(15) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期における言語活動」 (朝日ヶ丘幼稚園教員約 10 名を対象)	平成 21 年 6 月	5 領域の「言語」に焦点をあて公開保育と事後研究会を行った。豊かな体験を基本とした絵本の読み聞かせを通して、子どもの感性を磨く公開保育であった。体験の言語化を援助する教師の指導について、幼児期から小学校低学年までの幼児児童の発達の特徴と関連付けながら論じた。
(16) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「幼稚園の教育評価と保育内容」 （西山幼稚園教員約10名対象）	平成 21 年 6 月	幼稚園の教育課程の意義と、例年通りの踏襲になりがちである教育課程には、評価が不可欠であることを述べた。さらに教育評価では地域住民や保護者からの声を反映し、次年度へ反映するPDCAサイクルについて論じた。外部評価の有効な活用方法を例示し説明した。道徳的な実践力を身につけるため言語活動を重視した保育の必要を論じた。
(17) 第 17 回授業実践フォーラム生活科部会講師 「新学習指導要領の言語活動と生活科」 （生活科部会参加者約 40 名対象）	平成 21 年 6 月	新学習指導要領において生活科の中で言語活動が取り入れられた。それに伴い一部の実践で「見つける・比べる・たとえる」の「たとえる」ことが強調されすぎ、体験感動・内面の納得を伴わない言葉遊びになる危険性があることを指摘し、「知的な気づき」の重要性を再確認し指導した。
(18) 奈良市立幼稚園教員研修会 「保護者・地域との連携を支える共感」 （生活科部会参加者約 40 名対象）	平成 21 年 8 月	「保護者の要望にこたえるために」をテーマに講演をした。園に苦情や要望を述べる保護者が増加した社会的な背景を述べるとともに、園独特の組織的な弱点と強み分析し、それを活かした保護者対応を指導した。あわせて、幼稚園独特のトラブルを例にして「共感」をロールプレイで提案した。
(19) 兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師「生活科における言語活動」 （兵庫県阪神地区の小学校生活科担当教諭150名を対象）	平成 21 年 8 月	新学習指導要領に基づいて講演を行った。提案された生活科のレポートへの指導助言も行った。生活科の活動や体験が、身近な地域を対象に工夫されているが、目標が明確でないことを助言した。

(20) 兵庫県猪名川町教職員研修会講師 「保護者・地域との連携」 （兵庫県猪名川町の教職員約50名対象）	平成 21 年 8 月	社会的な背景とともに、保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。現在は公的な仕事の従事者に対し厳しい目が向けられることへの自覚を促した。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠であり、クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。
(21) 平成 21 年度免許更新講習会講師 「求められる資質と職務遂行能力」 （岡山県教員40名対象）	平成 21 年 8 月	新教育課程で教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について講義をした。年代別に，教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日，教職10年経験教師はミドルリーダーとして，学校運営に参画が求められている述べた。
(22) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「道徳性の芽生えと幼稚園教育要領」 （芦屋市立幼稚園教諭約 10 名を対象）	平成 21 年 9 月	保育参観と指導助言を行った。新学習指導要領の道徳教育重視の流れを受けて、幼稚園での道徳性の芽生えを図ることの重要性を述べた。集団的な体験活動での葛藤や、その後の話し合い活動など、幼稚園としての活動を提案した。
(23) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会講師　「幼稚園における言語活動と環境構成」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園教諭 10 名を対象）	平成 21 年 10 月	保育参観と指導助言を行った。新学習指導要領の小学校の言語力育成を受けて、幼稚園としてふさわしい学力は何かを提案した。幼稚園でも「話す・聞く」活動を系統的実施する必要性を助言した。
(24) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「保育における話し合い活動の指導」 （芦屋市立西山幼稚園等教諭約 10 名を対象）	平成 21 年 11 月	保育参観と指導助言を行った。話し合い活動を通して思考力を育てる事を目標とした公開保育が実施された。子どもの葛藤場面を保育の中で取り上げ、教師が適切な価値の方向性を示すことの重要性を指摘した。
(25) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「新学習指導要領と授業時間数の増加」 （兵庫県内の教職員約50名を対象）	平成 21 年 11 月	教育課程の編成の基本理念の指導助言をした。新学習指導要領が先行実施されて、授業時数の増加指導内容の増加など、教員にとって研修の必要性が高くなっていることを助言した。教科書と教育課程とを同一視していることはいけないこと、教員が各単元の目標分析をすることを提言した。
(26) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究発表会全体会講師 「言語力を育成する授業の在り方」	平成 22 年 2 月	授業参観と全体講演をした。携帯電話が子どものコミュニケーションを阻害している実態について話した。携帯電話の弊害を乗り越える正しい言語

（全国の教員約450名を対象）		力を育成するための、授業に求められる話し合い活動について、また対話が成立する学級・学校文化の重要性について提案した。
(27) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「絵本の幼稚園教育における役割」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭10名を対象）	平成 22 年 2 月	保育参観と指導助言を行った。絵本読み聞かせや親子絵本の会の実施に取り組んでいることの意味づけを行った。絵本に親しむことで、豊かなイメージを持ち、言葉の感覚を養うことを話した。幼児期に培われた言葉が小学校教育にどのように継続されるかも具体例を挙げて論じた。
(28) 兵庫県神戸市小学校教科等研修会総会における生活科講師 「新学習指導要領と生活科の変更点」 （神戸市の生活科担当者約60名対象）	平成 22 年 3 月	実践発表の分析と講話をした。新学習指導要領の変更点について説明する。算数や理科の指導内容が多くなり、国語が注目を浴び、生活科の影が薄くなっているが、体験に支えられた納得・実感・本音の理解の仕方が重要であることを再度確認した。また、幼稚園と小学校の段差である小１プロブレムを解消するためには、小学校入学時のスタートカリキュラムの重要性について提案した。
(29) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期にふさわしい言葉の指導」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭 10 名を対象）	平成 22 年 5 月	保育参観と指導助言を行った。４・５歳児の「遊びの中で言葉の力を育む」を狙いとした保育参観も行った。５領域は，幼児期に育てたいことを幼児自身の発達の側面から取り上げたものであるのであること。各領域の内容は総合的に指導するものであり，幼児を取り巻く環境を構成する視点でもある。幼児の活動は「言葉」という領域に偏った指導は好ましくないことを例示し指導した。
(30) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「子どもの人間関係を豊かにする指導」 （芦屋市立西山幼稚園等教諭10名対象）	平成 22 年 5 月	芦屋市立西山幼稚園で４・５歳児の保育を参観し指導助言を行った。友達や教師と安定した人間関係が築かれることにより情緒が安定すること。幼児が「友達」を理解する過程やその中で育つ他者を思いやる気持ちについて話した。また，そのための保育者の役割について具体的な保育の場面を例に挙げながら指導した。
(31) 兵庫県芦屋市幼稚園教育課程研修会講師 「幼稚園と小学校のカリキュラムの連続性」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等教諭10名を対象）	平成 22 年 7 月	小学校のような文字指導がなくても，日常生活の中で文字を読み書きできる現状を認識した保育が重要であることを話した。幼児期の小学校形式の一斉指導は課題があると指摘した。幼児期の言葉は知的能力の指標としてとらえがちであるが，日々の豊かな経験に基づく総合的な発達の中で言葉が育つことの重要性を指導した。

(32)兵庫県加古川市教頭研修会講師 「地域・保護者との連携と教頭の役割」 ―信頼される学校園をめざして― （兵庫県加古川市立学校教頭等50名を対象）	平成 22 年 8 月	信頼される学校園づくりには，まず子どものことを第一において，何をどのように解決するべきかを保護者とともに考えることが大切であることを強調した。いわゆる「モンスターピアレント」という呼称が持つ否定的な意味を取りあげて信頼関係を構築するための具体的な方策を助言をした。学校園で明日からでも取り組める電話記録メモの改善、苦情処理シートの迅速な処理のための校内組織体制づくりについて述べた。
(33)奈良市小学校教員夏季研修会講師 「地域・保護者と連携する教師の在り方」 ―保護者と信頼関係を築くために― （奈良市立小学校教諭等30名を対象）	平成 22 年 8 月	奈良市内小学校で起きている具体的事例を取り上げながら，ロールプレーで演習を行い，問題解決への過程を示した。保護者の苦情をや訴えを聞き取り，その裏にある思いや願いを読み取ることの重要性を指導した。学校ができることを明確にして対応することが不可欠であると話した。
(34)兵庫県芦屋市山手小学校校内人権教育研修会講師 「男女平等教育の歴史と学校のジェンダー」 （芦屋市立山手小学校教員２０名を対象）	平成 22 年 8 月	人権教育の男女平等教育に係る授業実践の基本的な理念について指導助言を行った。ジェンダー問題の歴史及び男女平等教育の現状さらに学校教育における課題について話した。特に教育課程を編成にあたり，意図的計画的に位置付け学校の教育活動全体を通してを男女平等教育を推進することや教師自身の研修が重要であることを提案した。
(35) 兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師 「心豊かにたくましく生きる力を育む生活科の実践」 （兵庫県阪神地区生活科担当教諭 200 名を対象）	平成 22 年 8 月	伊丹市と芦屋市の幼稚園と小学校の連携をねらいとした実践の発表があった。両者の連携はともするとイベントになりがちなので，双方の教育課程に位置付け継続的に関わりを持つことを助言した。講演では，小学校低学年における教科横断的・総合的な指導の必要性を強調した。
(36) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「教育課程と総合的な学習の時間」 （兵庫県小学校教員 50 名対象）	平成 22 年 11 月	生活科及び総合的な学習の時間の単元構成について指導助言した。総合的な学習の時間が新学習指導要領で時間数減となるが，それは意義やねらいの後退ではないことを論じた。従来の総合的な学習の時間の問題点である単なる体験活動を乗り越え，課題解決的な学習に高める必要性を説明した。
(37)全国女性校長会近畿地区大会分科会指導助言「学校運営と女性校長の指導性」 分科会テーマ ―新しい時代を拓く学校経営と校長の指導性― 「家庭・地域・学校の連携と，学校運営への協働・参画」 （近畿小中学校の女性校長 50 人を対象）	平成 22 年 11 月	女性校長の数が全国的に減少する中，女性の特性を生かした学校運営の在り方を話した。公的な学校で常識と考えられている様々な習慣が，世の中の動きに合わなくなっていることを自覚する必要を指導した。細やかな配慮などは、女性校長の特質であるかのようなステレオタイプを乗り越え学校経営することを示した。

(38)兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修指導助言 「豊かな人間関係を育てる保育」 （芦屋市立西山幼稚園教諭 10 名対象）	平成 23 年 1 月	４・５歳児クラス保育を参観し指導助言をした。道徳性の芽生えを培うには，幼児が他の人と関わる中でその存在に気づき相手を尊重することが大切であること。また，身近な動植物へ親しむことにより豊かな感情が育つことを話した。信頼感や思いやりは一直線に育つのではなく，葛藤やつまずきを体験を乗り越えて育つことを助言した。
(39)兵庫県芦屋市教育研修所教員研修会講師 「保護者・地域との連携をはかるために」 （兵庫県芦屋市立小学校・幼稚園教諭等 20 名対象）	平成 23 年 2 月	学校園と地域社会・保護者との関係に変化が起きた社会的な背景を，具体例を挙げながら解説した。社会や国民全体の権利意識の高揚や保護者の経験した学校生活などが，大きな要因になっているので，学校の教員の意識改革も不可欠であることを説明した。
(40) 兵庫県芦屋市教育委員会指定研究会講師 「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」 （芦屋市幼稚園教員約 150 人を対象）	平成 23 年 6 月	４歳児と５歳児の自我の発達と，他児とのコミュニケーション力の発達に着目して，遊びの中での子どもの心の葛藤とひきだす保育の意義について話をした。また，児童が葛藤し心を成長させるために保育者の役割と環境構成のあり方が重要性であり、幼児期の道徳性の芽生えを図ると指摘した。
(41) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言「異年齢交流と協同学習①」 （芦屋市立幼稚園教諭 10 名対象）	平成 23 年 6 月	本園は4歳5歳とも単学級の園であるが、その利点を生かして，日常的に異年齢交流を実施している。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用して，5歳児に責任ある行動やおもいやりの心を育むことの意義を論じた。
(42) 岡山県総合教育センター研修講師 「新しい生活科の具体的な授業づくり」 ―児童の気付きを深めたり広げたりするための，支援の在り方― （岡山県内３０人の生活科担当教員対象）	平成 23 年 8 月	児童の気付きとは何かを学習指導要領の解説書を基に説明した。次に具体的な子どものシートを用いて，「気付きを深める声掛け」「気付きを広げる声掛け」を演習として実施した。広げ深める声掛けも。あくまで単元全体や本時の狙いに沿ったものでないと一般的抽象的なものになりることを指摘した。
(43)「あしや教育フェスティバル」生活科部会指導助言 「若い先生でもできる生活科」 （芦屋市生活科担当の教員 20 名を対象）	平成 23 年 8 月	2年生「私の町の素敵をおしえよう」の実践報告の指導助言を行った。若い教師が増え，生活科の狙いや学習スタイルが理解できず、教科書をそのままなぞる授業が増加している。生活科が設置された社会的な背景や理念について話した。教員の若返りが進行する学校現場で，生活科や総合的な学習の時間の指導が困難になる危機を指摘した。

(44)京都中央看護専門学校研修会講師 「主体的に学ぶ学生集団作りについて」 （看護師養成専門学校の教員 50 人を対象）	平成 23 年 9 月	看護学校の授業は基本は40人以下で実施されており，個別の対応に配慮はされている点は評価できる。しかし，授業が講義や実習にしても一方的なものが多くみられる。双方向の授業であっても，教師と学生が1対1で双方向に取り組んでいるにすぎない。学生を集団として学ばせる学習集団の育成が遅れていることを指摘した。
(45) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「新教育課程と総合学習」 （兵庫県小学校教員 40 名対象）	平成 23 年 11 月	兵庫県の各地から総合的な学習の時間のレポートが３０本報告をされた。3年生では兵庫県が自然体験補助金を出しているため，安易な体験あって学びなしになりがちであると指摘した。自然体験だけでなく，振り返る学習とセットで取り組むことが重要であることを指摘した。
(46) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言「異年齢交流と協同学習②」 （芦屋市幼稚園教諭 10 名対象）	平成 23 年 11 月	単学級の利点を生かして，日常的に異年齢交流を実施して，子どもを育てている。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用し，5歳児に責任やおもいやりの心を育むことを狙いとするとともに、子どもの協同学習に焦点を当て子どもの保育にあたるという姿勢を評価した。園の方針の共通理解が重要であることを指導助言した。
(47)兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」 （芦屋市幼稚園教諭 6 名対象）	平成 24 年 1 月	2月の生活発表会の表現活動を行っている保育を参観した。最後は保護者に見せる作品に完成するため，物語の主題とずれた箇所で，子どもの表現を無理に引き出そうとしている教師の意図の誤りを指摘した。幼児の意識の流れに合わず，生活発表会の流れが重視されると困ることを指導した。
(48)兵庫県芦屋市立潮見中学校 総合的な学習の時間の講師 「進路選択ためのキャリア教育」 （芦屋市立潮見中学生 120 名対象）	平成 24 年 2 月	「今の中学校2年生に伝えたいこと」という「生き方」をテーマに講演会を行った。2年生は中学校の中で中だるみに時期であり，進路についてまだしっかりとした意識付けができていない時期である。この時期の生徒に，大学で学ぶには基礎的な学力と，夢を持ち続ける大切さを話した。
(49)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「教育目標を日常の保育に反映させる」 （芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園教諭 6 人を対象）	平成 24 年 5 月	進級や入園間もないクラスで、学級づくりの途中のクラスの保育を参観した。４歳児は園の決まりを身につけ。５歳児は年長としての自覚を育成している時期である。この時期に、園としての教育目標を各保育にどのように反映するかを、具体的な保育を事例に指導した。

(50) 平成 24 年度免許更新講習会講師 「今求められる資質と職務遂行能力」 （小学校教員 40 名対象）	平成 24 年 8 月	新教育課程を実践するうえで教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について講義をした。教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日，ミドルリーダーとして，学校運営に参画することが求められていることを述べた。また、学校としてのチームワークの重要性が今後ますます求められることを指摘した。
(51) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言 「国語科の書くことと生活科の関連」 （芦屋市教員 15 名対象）	平成 24 年 8 月	生活科と国語科と合科的に扱った指導実践例の報告があった。国語科指導で事実を見る目や書く力は育っているが、自分との関係性において植物の成長をとらえる弱さを指摘した。
(52) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育研修会 講師「男女共生教育と教育実践」 （岩園小学校の教員 30 名を対象）	平成 24 年 10 月	男女共生教育について研修会の講師を務めた。男女共生教育の歴史とともに、道徳のみでなく、各教科と連携して、学校教育全体で扱うべきと助言した。国語科の言葉を取り上げ、特に隠れた潜在的なカリキュラムにへの留意を指導した。
(53) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「異年齢交流と協同学習③」 （朝日ヶ丘幼稚園の教員 6 人を対象）	平成 24 年 11 月	異年齢交流での協同遊びと、その後の話し合い活動の参観をした。話し合い活動では、友だちの良い点を取り上げて発言させ、人間関係を気付いていた。さらに、聞くという姿勢を徹底的に指導されていることを評価した。
(54) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 40 名対象）	平成 24 年 11 月	実践発表を取り上げ指導助言を行った。総合的な学習の体験の部分がクローズアップされ、探究の部分が消えていることに対し警鐘をならした。総合も設立から年月を重ね、活動がパターン化している傾向があると指導した。
(55) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育 校内研究会講師 「国語教育で男女共生教育」 （小学校教員 20 名対象）	平成 25 年 1 月	男女共生教育の4年生の授業の事後研修会を行った。国語の男子や女子を形容する形容詞や形容動詞に焦点を当てて、児童がもっているステレオタイプの考え方を、学校教育でどのように指導するかを話した。男女共生教育を巡る隠れたカリキュラムについて、学校の具体例を挙げて説明した。
(56) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 40 名対象）	平成 25 年 11 月	実践発表を取り上げ指導助言を行った。東日本大震災から防災教育が教育課程の中に新たに取り込まれる事例が増えた。総合的な学習や特別活動のので実践が増加したが、各教科とも連携し意識的に教育課程に組み込む必要性を助言した。

(57)神戸市立小学校生活科部会研究会 講師 「生活科でいのちを大切にする教育」 （神戸市幼稚園・小学校の教員 60 人を対象）	平成 26 年 1 月	1 年生の成長単元の授業参観と講話を行った。生活科の成長単元は児童の自尊感情を育み周囲に感謝の気持ちをもたせることがねらいであること。これは命を大切にすることに繋がることをアンケート調査を基に説明をした。子どもの死生観の境目を意識して教育に当たる必要を述べた。
(58)兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会講師① 「心豊かに感じ、共に育ちあう幼児を目指して」 （小槌幼稚園教員 10 名を対象）	平成 26 年 5 月	年長と年少の全クラスの保育参観と指導助言を行った。入園して 1 か月の年少児に年長児が積極的に関わるための環境設定について述べた。
(59) 兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会講師② 「自分らしさを発揮し人と関わる力が育つ援助を考える」教員の在り方 （小槌幼稚園等教員 10 名が対象）	平成 26 年 6 月	1 か月経過後、再度保育参観を行い、幼児の人と関わる力の伸長と、教員の指導の在り方の相関性について述べた。4 歳児 5 歳児全クラス保育参観を行い、具体的な教師の振る舞いや声掛けが、保育に及ぼす影響について分析した。
(60) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言 入学直後の「学校探検」の意味について （芦屋市教員 20 名対象）	平成 26 年 8 月	生活科を通して1年間の幼・小の交流を教育課程に位置付ける際の留意点について話した。近年、幼小の交流と比べ、保育所との連携が進まない現状の解決方策を提案した。生活科のスタートカリキュラムは、幼保ともに対象であることを確認した。
(61) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 50 名対象）	平成 26 年 11 月	兵庫県下各地の実践発表20件に指導助言を行った。生活科や総合学習は地域に根差したテーマを採り上げて、児童生徒が課題解決をするという学びのスタイルは定着したが、生活科は教員の指導による取組の格差、総合学習は学校行事への準備の時間として安易に活用される課題を論じた。
(62) 兵庫県芦屋市保・幼・小合同研修 会講師（1 回目） 芦屋市立精道保育所保育公開助言 （保育所・幼稚園の教員 20 名を対象）	平成 27 年 5 月	保育参観を行った後に、保育内容が小学校にどのようにつながるかについて、保育の具体的な内容を事例にして説明した。保育所と幼稚園の教員合同の研究会は意義があった。
(63) 兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修講師 （幼稚園教諭 10 名対象）	平成 27 年 5 月	保育参観後にそれぞれの保育について助言した。クラス替え間もない時期に学級づくりの方向や、保育案の目標と保育の内容が明確でないと、教員の言葉かけが有効でなくなる等を助言した。
(64) 兵庫県芦屋市幼・保・小連携研修会 講師　２回目 （保育所・幼稚園・小学校の教員 60 名を対象）	平成 27 年 7 月	スタートカリキュラムの必要性を、生活科の教科書の内容を具体的に示し、保育所保育指針と幼稚園教育要領と生活科の学習指導要領を比較した。3 つの目標や活動内容がが、似通っていることを具体的に理解できた。

(65) 兵庫県芦屋市保・幼・小合同研修会 芦屋市立精道幼稚園公開保育助言 （芦屋市保育所・幼稚園・小学校教員 20 名対象）	平成 27 年 9 月	精道幼稚園全クラスが「からだづくり遊び」をテーマに公開保育を行った。保育所や幼稚園の保育の見方について話し合った。小学校の教師には、保育を学び認識することが困難なので、参観の目標と視点について意見交流を行った。
(66) 兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修 指導諸言 （幼稚園教員 10 名対象）	平成 27 年 10 月	豊かな心と人間関係作りを育むことを目標として公開保育を行い、指導助言を行った。特に道徳性の自立の時期を意識して保育することの重要性を論じた。
(67) 兵庫県芦屋市立精道幼稚園園内研修 指導助言 （幼稚園教員 10 名対象）	平成 27 年 10 月	「さかさま運動会」を公開保育で参観した。健かな身体づくりが生活的な自立の基礎となることを、５領域と関連付けながら問題提起をした。
(68) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校生活科研修会指導助言 （小学校教員 10 名対象）	平成 27 年 10 月	体育の4年生ポートボールで共同的に活動し、学習における仲間づくりをする公開授業を参観し指導助言を行った。
(69) 兵庫県芦屋市立打出幼稚園園内研修 指導諸言 （芦屋市幼稚園教員 30 名対象）	平成 27 年 10 月	豊かな心研究グループの指定研究会であった。特に人間関係に焦点を当てて、保育を実施した。教員の声掛けを提案型にして、園児の自主性を促す保育を助言した。
(70) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 50 名対象）	平成 27 年 11 月	総合学習のレポートを基に指導助言を行った。特に総合的な学習が地域再発見の契機になっているが、それ以後の地域づくりに還元されていないことを指摘した。
(71) 兵庫県芦屋市指定研究会講師 「保・幼・小の連携」 （保育所、幼稚園、小学校教員 100 人を対象）	平成 27 年 11 月	スタートカリキュラムの具現化について、公開保育と講演を行った。就学前後のカリキュラムを幼・保側と小学校側でできることを具体的に示し、滑らかな接続を図ることを提案した。
(72) 兵庫県芦屋市立山手小学校 生活科校内研究会指導助言 「自分でできるよ」―家族にっこにこ大作戦― （小学校教員 30 名対象）	平成 27 年 11 月	2年生の家族単元の授業参観後に指導助言をした。成長に係る単元は、家庭事情により児童の活動が影響を受けるため、家庭との連携が不可欠であること、お手伝い等の家庭の活動は継続させ内面化させる手立てが重要であることを助言した。
(73) 兵庫県芦屋市立精道保育所① ―保育所と小学校連携のカリキュラム― 指導助言（保育所職員 30 名対象）	平成 27 年 12 月	5歳児の保育の参観後、文科省が示した連携視点「自己調整力」「表現力・思考力」「伝え合う力」の3点について、子供の育ちの現状を分析し、今後求められる指導を提言した。
(74) 兵庫県芦屋市立精道保育所② ―保育所と小学校連携のカリキュラム― 指導助言 （保育所職員 30 名対象）	平成 28 年 1 月	前回の助言に基づき、保育を改善した結果を検証した。同じ5歳児クラスの参観を行い、「自己調整力」は育成されているが「伝え合う力」が十分でないことを指摘した。指導者側の目標意識の低さや保育環境の見直しを提言した。

(75)「幼児期と児童期の円滑な接続について考える」芦屋市内合同研究会講師 （芦屋市の公立幼稚園・保育所及び私立幼稚園・保育所の教員と保育士 80 人を対象）	平成 28 年 3 月	5歳児保育後期に求められる保育課程について説明した。形ばかりの保育課程でなく、指導者が目標を意識した保育を実施することが重要であると提言した。
(76)「心も体もしなやかでたくましい児童の育成」―接続期カリキュラムを視点に―指導助言 （芦屋市立小槌幼稚園の教諭等 20 人対象）	平成 28 年 5 月	4歳児・5歳児の伝え合うをテーマにした保育参観後、ねらいと発問について助言した。また、心の成長の中で特に自己調整力が、小学校1年生の学校生活への適応に影響を与えることを指導した。
(77)「学校生活につなぐ学びの芽生えを育む」のテーマの指導助言 （芦屋市立精道幼稚園教諭等 20 人対象）	平成 28 年 6 月	4歳児・5歳児の運動遊びの保育参観後、小学校入学後の学習の姿勢や鉛筆等の正しい持ち方が、幼稚園の運動遊びを基礎に育つことを助言した。また、兵庫県阪神地区幼稚園研究会の研究紀要の様式について指導をした。
(78) 芦屋市公立・私立保育所合同研修会講師 「小学校期へのなだらかな成長支援」 （対象者：芦屋市公立・私立保育所教職員約 220 名）	平成 28 年 6 月	乳児期から幼児期までの人間関係の育ちが小学校1年生の精神的な自立にどのようにかかわるかをベネッセの2016年縦断調査の報告を例示しながら説明した。特に入学後直後の学習意欲が年長児の生活習慣や言語力に影響されること、年長児の言語力が年中児の調整力に影響されることを根拠と実践を結び付けながら論じた。
(79)芦屋市立精道保育所市内保育公開研修会指導助言 「接続期の保育所の保育について」 （精道保育所の教職員等 30 名対象）	平成 28 年 6 月	4歳児と5歳児の異年齢交流の保育参観後に指導助言をした。生活の場である保育所は、言語的な面で学習用語を獲得するのが困難な可能性が高いことと、解決の方策を示した。
(80)兵庫教育文化研究所、総合的な学習の時間研修会指導助言 兵庫県教職員約 35 名	平成 28 年 8 月	神戸市中央区を4つのコースに分けてフィールドワークをして情報を収集し、神戸市観光大使として意見交換後、指導助言を行った。
(81)兵庫県芦屋市教育フェスティバル総合学習・生活科指導助言 （兵庫県芦屋市教職員約 20 名対象）	平成 28 年 8 月	2本の生活科と総合的な学習の実践発表後に指導助言をした。地域のだんじりと、国語の言語活動との関係を総合的に扱った発表であった。教員が若返り、総合や生活の意味が受け継がれていないと感じたので、歴史的な経過を指導した。
(82)プール学院大学教職員研修会講師 （プール学院大学教員 30 名対象）	平成 28 年 9 月	文部科学省の課程審査会の新たな書式について解説を行うとともに、平成３０年度の再課程審査の意義について説明を行った。さらに教育学部の教員に求められる資質や能力についても論じた。

(83)芦屋市精道幼稚園市内研修講師 （芦屋市幼稚園教員等 90 名対象）	平成 28 年 11 月	精道幼稚園で4・5歳児の公開保育の後、指導助言を行った。運動遊びの中で子どもが身につける規範意識の芽生えや、思考力や話し合う力の育ちが小学校低学年のどのような能力の基礎になるかを具体的スタートカリキュラムとして論じた。
(84)幼稚園・小学校接続期のカリキュラム作成 （芦屋市立幼稚園教員等 100 名対象）	平成 28 年 11 月	スタートカリキュラムの必要性と新教育要領の方向性を文科省の新たな答申を基に解説をした。小学校で求められる能力を幼稚園の遊びの中で環境を通して具体化する視点についても論じた。小学校教育の模倣と幼稚園教育の違いを確認した。
(85)奈良県三郷町立南畑幼稚園指導助言 （幼稚園教員 6 名対象）	平成 29 年 1 月	3歳児保育を参観し、事後研修会を行った。3歳児の言語の発達と思考力育成に与える影響について、人的及び物的な環境構成について指導助言を行った。園の教育課程についても解説した。
(86)芦屋市精道幼稚園園内研修講師 （幼稚園教員 6 名対象）	平成 29 年 2 月	言語力を育成するための、新たな4・5歳児の遊びの開発の実践例の検証を行った。言語力育成の基盤として幼稚園では集中して聞くことや多様性を認める学級文化が求められることを論じた。
(87) 芦屋市精道幼稚園園内研修講師 （幼稚園教員 6 名対象）	平成 29 年 6 月	「学校生活に繋がる体づくりについて」をテーマに4・5歳児の保育実践例の検証を行った。体幹を鍛えることが学習効果に及ぼす影響を論じた。
(88) 第 56 回学校保健ゼミナール講師 （全国の養護教諭 400 名対象）	平成 29 年 8 月 （東京ニッショーホール）	学校におけるクレーム処理と保護者対応のポイントというテーマで講話した。演習も入れたのが好評であった。養護教諭だけでなく教育行政側の問題点も指摘した。
(89) 芦屋市立伊勢幼稚園園内研修講師 （芦屋市幼稚園教員約 30 名）	平成 29 年 9 月	阪神幼稚園教育研究会の事前研修であった。年長児と年少児がペアになって、体づくり遊びを作り出す保育公開と助言を行った。
(90) 兵庫県国公立幼稚園・こども園教育研究会全大会講師 （兵庫県幼稚園等教員約 300 名対象）	平成 29 年 11 月 芦屋市保健福祉センター	「幼児期の教育を小学校につなげて－資質・能力を育成する教育課程―」というテーマで、須幽学前までに育成したい10の力について論じた。
(91) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」 （兵庫県教員 50 名対象）	平成 29 年 11 月 西宮市立浜脇中学校	新学習指導要領で。総合的な学習の時間で育てる力が「探究」であると示されたので、方向性が鮮明な実践が多かった。学校全体計画が完成しているところが多く、マンネリ化の傾向も見られたが。地域と積極的な連携を促した。

(92) 芦屋市精道幼稚園園内研修講師 （幼稚園教員 6 名対象）	平成 29 年 11 月	4歳児は体づくり遊びを通して、話し合う活動、5歳児は言葉イメージ実践をして、その後の指導助言を行った。
(93) 奈良県公立学校養護教諭研修会 （奈良県養護教諭 100 名対象）	平成 30 年 2 月	保護者のクレームが起きる社会的な背景と、現在の学校業況を分析して述べた。養護教諭の業務の特徴に合わせて、クレーム処理をする際に、学校組織の在り方と養護教諭の役割について述べた。
5　その他		特になし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年 月 日	概　　要
1　資格，免許 (1) 小学校教諭２種免許 (2) 小学校教諭 1 種免許 (3) 小学校教諭専修免許 (4) 修士（教育学）	 昭和 52 年 4 月 平成　5 年 4 月 平成 10 年 3 月 平成 10 年 3 月	 昭 52 め第 2263 号（京都府教育委員会） 平 5 小 1 第 22 号（兵庫県教育委員会） 平 9 小専第 2035 号（大阪府教育委員会） 大阪教育大学　実践教育学専攻　証第 20 号 論文題目：「生活科新生の試みー新たな防災教育を中心にー」
2　特許等		特になし
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1) 国立大学法人兵庫教育大学と株式会社ベネッセコーポレーションとの協同研究総括チーム委員	平成 20 年 10 月～ 平成 22 年 3 月	「活用型学習」の指導方法及び評価方法等の研究を行った。本研究では習得・活用・探求の意味づけを行い、各教科ごとに活用型学習の開発を行った。研究は各教科に分かれて実施されたが、各教科に属することなく、全体を総括する評価や指導についての研究を行った。
(2) 兵庫県芦屋市学力向上推進委員会委員	平成 20 年 11 月 ～平成 22 年 3 月	平成 19・20 年度の全国学力状況調査の結果を受け、市内の学力向上のためのシステムを提案することを目的とする学識経験者、小中の校長、教諭、行政関係者等 10 名により構成された。学力向上には、研究会の充実と小中連携が不可欠であることを提案した。
(3) 兵庫県猪名川町教育委員会「猪名川の教育・点検・評価報告書（平成 19～29 年度対象）」作成協力者	平成 21 年 9 月 ～平成 30 年 3 月	猪名川町教育委員会学校教育の各項目について目標達成度・今後の課題について、外部委員学識経験者として点検評価を行った。特色ある学校づくりを目指し今後の 5 年間にわたる教育基本構想の基盤となるもので、評価報告書は公開されている。

(4)兵庫県猪名川町教育基本計画策定委員	平成 22 年 5 月 ～平成 23 年 3 月	改定教育基本法を受けて兵庫県教育委員会策定の「兵庫教育策定プラン」に基づいて猪名川町独自の今後 10 年間の教育のプランを策定するものである。猪名川町における教育の振興方針と施策の体系を示し，町全体の教育振興を図るための基本計画を策定するものである。委員として学識経験者，保護者，学校関係者 10 名で構成され副委員長を務めた。
(5) 兵庫教育大学ベネッセ教員育成研究奨学生選考委員	平成22年4月～平成 24 年 3 月	ベネッセコーポレーションが兵庫教育大学の教職大学院で学ぶ学生に対して研究助成を行い，その奨学生の選考を行う。毎年当初に計画書を審査し，年度末にその成果を提出発表をする。
(6) 兵庫県立芦屋高等学校の学校評議員及び学校関係者評価委員	平成 21 年 4 月～ 現在 28 年 3 月	兵庫県立芦屋高校の学校評議員及び学校関係者評価委員を 4 年間勤めた。兵庫県立芦屋高等学校の学校行事及び学力向上研究会等に参加し、年度末に学校評価点検を実施し、保護者地域等に公開している。委員は保護者、地域住民、学識経験者、学校関係者など 8 名で構成されている。
(7)三田市教育振興基本計画検討委員会委員	平成23年6月～平成 24 年 9 月	三田市民や保護者・学校関係者・学識経験者を含む 10 名で委員会は構成されている。副委員長として、委員長を補佐し会の運営にあたった。教育基本計画は，三田市の今後 10 年間の教育の方向性を検討する基盤案であり，その作成に尽力した。
(8)兵庫県猪名川町いじめ問題対策審議会 委員長	平成 27 年 9 月～ 現在に至る	猪名川町保護者、学校関係者、学識関係者等 7 人で委員会は構成され、委員長を務める。猪名川町で発生した重大事例について基本的考えや対応等について研修と対応等を審議した。
(9)奈良県三宅町総合教育会議オブザーバー	平成 27 年 10 月～ 現在に至る	三宅町教育振興計画の代わりとして教育大綱を設定する会議に、学識経験者として継続的に参加して有益な意見を述べた。
(10)奈良県広陵町総合計画後期基本計画策定懇話会委員	平成28年5月～平成 29 年 2 月	広陵町の町・人・仕事等についての戦略を町民・行政関係者、学識関係者等 20 人人で委員会は構成され、人口増を図るための町づくりにを論議した。
4　その他 (1) 京都光華女子大学における役職 ・短期大学部こども保育学科広報委員	平成 20 年 4 月～ 平成 21 年 3 月	幼稚園と保育所との連携を図るスタートカリキュラムについて生活科との関連に重点を置いて広報活動を行った。

(2)環太平洋大学における役職 ・次世代教育学部学級経営（教育経営）学科長 平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月 ・教職センター長 平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月 ・キャリアセンター長 平成 23 年 4 月度～平成 25 年 3 月 ・学長補佐 平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月	平成21年4月～25年 3 月	次世代教育学部学級経営（教育経営）学科の学科長を 4 年間勤めた。学科長 2 年目に教職センター長を兼務し，1 期生を卒業させ，約 70%の学生が教育関係への進路を確保した。さらに平成 23 年から 2 年間は，教育経営学科長とキャリアセンター長，学長補佐を兼務した。卒業生の進路は、毎年全国平均を上回り、就職に強い大学としての社会的評価を築いた。学長補佐として事務職員と教員の関係の強化に努め、大学運営の要としての存在だった。
（3）奈良学園大学における役職 ・人間教育学部長 平成 26 年 4 月～現在に至る ・キャリアセンター長 平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月 ・スポーツ振興委員長 平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月	平成 26 年 4 月～ 平成 30 年３月	人間教育学部学部長兼キャリアセンター長として、学部の要を担っている。人間教育学部長として文科省に申請したカリキュラムの適切な実施に尽力し、平成 30 年度からは定員を 30 名増加し、専攻を中等数学と音楽を増加した。教育内容では、特に若手教員の教育力の向上に尽力している。 キャリアセンター長として、キャリア授業の内容の充実を図り、教員と職員の連携を強め、就職率向上に尽力している。第 1 期生の就職状況は、教師、一般企業とも近年ない好成績を挙げた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(1)「言語力」を育てる授業づくり―新学習指導要領対応―	共著	平成 21 年 9 月	図書文化 全 157 頁	学習指導要領の改訂示された言語力の重視の意義と各教科における取組について論じたもの。 Ａ５　版 編者：梶田叡一・甲斐睦朗 共著者：梶田叡一・甲斐睦朗・加藤明・吉川芳則・棚橋尚子・岩田一彦・清水静海・角屋重樹・松田智子・琉田直・高橋美由紀・新富康央 （担当：P, 162～167 生活科の部分を単著） 生活科の言語力育成の部分を担当執筆。生活科においては体験の言語化が重要になる。具体的には保育所幼稚園の年長から小学校の入門期において国語科の「話す・聞く」という領域と連携しながら系統的に、生活科のスピーチを取り組む過程を紹介した。ものごとをたとえたり比較したりして見ることにより，さらにそれらを言語化して表出することにより，気づきの質が高まることを提示した。これらは保育所や幼稚園の 5 歳児後半でも取り組む必要があることを強調した。そして、文字化したものを、仲間と交流することにより、異なった感じ方に触れ、再度自分の気付きを深めることができるという過程も提案した。
(2)　教育フォーラム[46] ―言葉の力を育てる―	共著	平成 22 年 8 月	金子書房 全 146 頁	新学習指導要領に基づき、言語力をどのように育成するかについて各教科からの提案である。 Ａ５版 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・伊崎一夫・鎌田首治朗・増井眞樹・勝見健史・汐海治美・谷本寛文・中島繁雄・米田豊・浅田匡・松田智子・他 13 名） （担当：P, 136～146 幼児期の言葉部分を単著） 「幼児期にふさわしい学力を考える―言語力の育成を通して―」をテーマに言葉を中心にした幼稚園の教育課程について論じた。言語の役割として伝達としての機能と思考力の機能の二つがあること、年長児における合意形成を目指した言語活動の経験が自己をコントロールする力や思考力を身につけることを事例を挙げながら論じた。また幼児期につけたい言葉の力として，その特徴と獲得させたい基本的な語彙を幼児の認識力と関連付けながら述べた。また、幼稚園 4 歳児と 5 歳児の言葉の指導カリキュラムも紹介した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3) 不登校生支援ハンドブック	共著	平成 22 年 12 月	学研エディケーショナル 全 207 頁	不登校生を支援するために書かれた，学校の教師とスクールカウンセラーのための著作である。具体的な事例を挙げ，その対策を述べている。 Ｂ５版 監修：近藤靖弘 共著者：杉村省吾・富永良喜・本多修・小谷一良・大橋節子・勝田麻津子・倉光修・斎藤文夫・内田伸子・新井肇・亀田憲治・松田智子他 9 名） （担当:P, 12～19 第 1 章 1 節　校内連携部分単著） 不登校生に対応する際に，担任教師が個人的に対応するのでなく学校がチームとして対応する必要性を論じた。中学校では教科外の特別活動や総合的な学習を学年単位で行うので、不登校を乗り越えるために，校内の意識を変革する必要を論じた。担任個人の対応から校内チームで不登校生に対応することにより、その数を激変させた具体例を挙げながら分析した。また、生徒と年齢の近い学生ボランティアを教科外の特別活動や総合的な学習の時間に活用する必要性を論じた。
(4) 教育フォーラム[47] ―こころを育てる―	共著	平成 23 年 3 月	金子書房 全 150 頁	心を育てることの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。 A5 版　　監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・渡辺満・松田智子・鎌田首治朗・山本美紀・中村哲・大野光二・高橋真理・江渕弘明・蔵あすか・中家淳悟・増尾慶裕 （担当：P, 38～47 総合的な学習で心を育てる部分を単著） 総合的な学習の時間などの教科外活動で心を育てるための単元構成の基本について述べた。探求課題を設定する際には，教師の指導性とともに児童生徒の中の必然性が必要であることを論じた。教科外活動が心を育む根拠として、その活動形態が協同的な集団学習であることや、体験を通してなすことにより学ぶ学習スタイルを具体例とともに例示した。さらに地域住民のニーズを取り上げて課題とすることが多いため，地域全体の振興に役立ち，地域として子どもの心を育てる契機となると提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5)次世代の教職入門	共著	平成 23 年 5 月	大学教育出版 全 297 頁	教員の資質向上と研修が求められる社会的な背景を教育基本法等の改正や学習指導要領の改訂と関連付けながら論じたものである。 A5 版 編者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗・中田正浩・松田智子　・大野光二・山本正・大石隆夫・中田律子・伊崎一夫・住本克彦・杉田郁代・筒井愛知） （担当：P, 61～102　第 3 章「教員の資質向上と研修」、4 章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研究と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。教員研修については、初任者研修・大学院修学研修・10 年目研修・指導改善研修等について意義と現状について述べた。教員の身分と服務については、地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、具体的な事例を挙げて論述した。将来教員になる者にとって不可欠である、職務上の義務や身分上の義務については、過去の判例を提示しながら教員としての服務の特徴を示した。
(6)　教育フォーラム[48] ―国際教育の展望と課題―	共著	平成 23 年 8 月	金子書房 全 158	子どもに真の国際性を育てるための教育の指針について述べたものである。 A5 版　監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・見上一幸・松田智子・松田公平・鎌田首治朗・前田洋一・川崎由花・古川治・善野八千子・筒井愛知・山本美紀・加藤明） （担当：p 27～p37　日本における多文化の歴史部分を単著） 国際教育の今後の課題として「多文化共生社会と日本語教育」の焦点を当てて論じた。日本の国際的な政治・経済状況を背景として進行している多文化の実情を述べた。次に日本における日本語教育と多文化共生の歴史を，戦後の韓国・朝鮮人への日本語教育から現在のニューカマーと言われる人々への日本語教育の連続性について考察した。多文化共生という快い言葉に隠された両面性について課題を提示した。さらに，日本語教師が現在の日本で果たすべき役割を，その資質と関連付けながら論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)　教育フォーラム 50 号 （やる気）を引き出す （やる気）を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房 全 169 頁	日本の子どもの学習意欲の低さに焦点を当て各教科での取り組みについて述べたものである。 A5 版 監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・松田智子・善野八千子・金山憲正・勝見健史・久田孝・錦織彰・住友克彦・野田健司・中田正浩・前田洋一・中村哲・瀧明千恵子、浅田匡 （担当：ｐ24～33　総合的学習の部分を単著） やる気に関する２つの全国調査をもとに、子どもがやる気を出すときについて分析した。そのための要素として「体験」と「学習課題の質」と「学び方」について述べた。体験については活動で終わることなく探究活動と結びついたものとなること、学習課題については、子どもの必要感と興味関心と結びついていること、学び方では、探究が広がり深まるような言葉かけと指導が必要であること、最後には、体験の振り返りが重要であることを提案した。
(8)次世代の教育原理	共著	平成 24 年 10 月	大学教育出版 全 153 頁	教育の基本原理と教育思想の歴史(西洋と日本)、教育行政と教育課程等一般原理について述べた。 A5 版 編著：中田正浩、松田智子 共著者：中田正浩・松田智子・中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 （担当：ｐ29～44、ｐ119～134　第 3 章日本の教育思想、第 4 章教師の仕事の部分を単著） ３章では、日本の教育思想について古代の「学令」から武士社会になる中世の「足利学校」等・幕藩体制の封建的社会の近世の「藩校」等の多様な教育・さらに近代に至るまでを述べた。特に古代から近世に至るまでの種々の学校制度を社会的背景と関連付けて論じた。さらに江戸時代における庶民への教育の広がりを寺小屋や郷校とともに論じた。近代では学制に伴う復古思想の隆興と大正期の自由主義教育の思想を論じた。敗戦後の教育では、政治的情勢と教育思想が結びつき、教育政策がすすめられたことを述べた。最後に、戦後 70 年経過した今日、子どもの発達の早期化に合わせた、新たな日本の教育制度の必要性を提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				４章では日本の現行の教育制度とそれに付随する教員の仕事の目的や内容について教育基本法等の法令に基づいて論じた。そもそも教育の目的は何であるか、そのための専門的職業人として教師はあり方について述べた。さらに現行の大学等における教員養成の現状や課題を教育職員免許法に基づき論じた。採用後の研修制度について、地方公務員法や教育基本法や教育公務員特例法に基づき述べた。また、最近導入された免許更新制度の狙いについても論じ、現実的な効果と課題を説明した。最後に、これからの義務教育を担う教員にとっての必要とされる資質について、年代別に提案した。
(9) 子どもと生活―知的好奇心を育む環境づくり―	共著	平成 25 年 3 月	ふくろう出版 全 157 頁	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。 A5 版　　編著：岡野総子 共著者：岡野総子、松田智子、吉村啓子、大野純子、筒井愛知、他 6 名 （担当：ｐ12～21）第１章２節「幼稚園・保育所と小学校の連携を踏まえた教育」の部分単著 幼稚園教育は環境を通して行われると言われているが、その真の意味について問い返した。その過程で、幼稚園・保育所の教育と小学校生活科における教育の連続性について問題を提起した。幼児から児童にと環境が大きく変化することにより、子どもに及ぼす影響をかんがみ、小学校入学期の子どものスタートカリキュラムの在り方について論じた。具体例として、生活科の単元「学校探検」を例に挙げ、保・幼・小で共通の授業を作り上げていく事例を紹介した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10)「学校安全」 ―長尾先生と考える 36 のナラティブ―	共著	平成 26 年 6 月	教育出版 全 157 頁	命を守り安全な生活の為に学校は何をできるかを、語り」形で作成したものである。 B5 版 編著：長尾彰夫 共著者：長尾彰夫、松田智子、小林忠三、浜條信彦・松井典夫、若狭孝太郎、神田英幸、砂田信夫、中井尚人、佃繁、伊原正俊、藤田大輔、諏訪清二、他 5 名 担当：（p 100～101）「帰ってきたキャロリン」（p 104～107）「武庫川大橋の向こうは世界が違う」（p 112～117）「この町で生き続ける子どもとともに」の部分単著阪神淡路大震災の当時 1 年生を担任していた筆者の目から、被災地の子どもや教師の生活現状を当事者の立場で述べるとともに、その危機を乗り切るための生活科の授業の特質を生かして取り組んだ「町探検」の実践を述べたものである。東日本大震災から 3 年が経過し、被災地への愛着が、震災復興の要になると論じたものである。
(11) 人間教育を視点にした「教職入門」	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版 全 279 頁	教員の本質は人間を望ましい姿に育てるため心身両面にわたって、意図的計画的に働きかけるという視点に立って教職の基本理念を述べた。 A5 版 編者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗・中田正浩・松田智子　・中田律子・金山憲正・瀧明知恵子・長井勘治・太田雄久・久田隆 （担当：P, 62～101　第 3 章「教員の資質向上と研修」、4 章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研修義務と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。初任者研修・大学院修学研修・10 年目研修・指導改善研修等の目的と現状の課題について述べた。指導改善研修は、各都道府県の実態も参考にした。教員の身分と服務については、学校教育法や地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、日常に起きる具体的な事例を挙げて論述した。教員として不可欠である、職務上の義務や身分上の義務は、過去の判例を提示しながら社会人としての常識を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(12)「看護のための『教育学』」	共著	平成 27 年 12 月	あいり出版 全 158 頁	看護師養成は教員養成と目的は違うが、共通の理念が必要である立場で看護師要請の教育論を論じた本である。 B5 版 編者　守本とも子 共著者：守本とも子、松田智子、虎杖真智子、鎌田首治朗、梶村郁子、松浦純平、中尾友美、武富由美子、山口曜子、新谷奈苗、他 2 名 （担当：ｐ１～ｐ12　第 1 章　「教育原理について」の部分単著） 教育の意義と目的について、西洋と東洋のにおける教育という文言発祥とともに歴史的な視点で論じた。教育の変遷では西洋に焦点を当てて、モンテスキュー・カント・ルソー・ペスタロッチ・デューイ・デユルケム等の教育思想を中心に解説した。また、発達と教育に関してはボウルビィ・ワトソン・シュテルン等の思想を歴史的社会背景とともにに紹介し、教育評価ではブルーナー・ヴィゴツキーの考え方を解説した。最後に看護職を目指す者が教育学を学ぶ意義について述べた。
(13) 教育フォーラム 57「PISA 型学力を育てる」	共著	平成 28 年 2 月	金子書房 全 153 頁	PISA 型学力を中心とした現在の教育改革において重視されている諸課題を教科及び各分野から提示した著作である。 A5 版 監修：梶田叡一 共著者：立田慶裕・西辻正副・鎌田首治朗・清水静海・角谷重樹・岩田一彦・渡部久美子・鵜飼洋子・金山憲正・佐藤雄一・松田智子・高木悠哉・井上信子 (担当：「絵本から見る Death　Education（死への準備教育)」 p 115～ｐ 124) 命の教育は学校教育で行われているが現在の道徳教育だけでは不十分であることを述べ、死をテーマとした Death　Education の必要性を述べた。医療が進み死と向き合う時間が長くなり避けては通れない問題である。死についての時間がない子どものための Death　Education には、絵本という芸術作品は適切な教材であり、デーケンの提唱した Death　Education の基本的な５つの目標に合致する絵本を分析して提案した。Death　Education を扱う絵本は、個々の内面と向き合う絵本が多いことも検証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(14) 哲学する教育原理	共著	平成 29 年 3 月	保育出版社 全 188 頁	どうして教育原理を学ぶのか、教育原理が現在の教育にどのような影響を与えるかを考察した著書 A5 版 編集：伊藤潔志 共著者：川本太郎、相馬伸一、松永幸子, 松田智子、友野清文、杉山直子、渡辺明、歌川光一、竹中烈有馬知江美、田中直美、濱元伸彦、上村崇、中川雅道、伊藤潔、奥田秀巳、北村陽、西脇雅彦、小泉博明、杉浦英樹、木原一彰、松岡敬興 担当：第２章「なぜ、日本の教育思想を学ぶのか」１項「前近代の教育思想」 p 35～ p 39 日本における飛鳥時代の教育思想の始まりから、古代の大宝律令の教育思想へ進み、日本独自のかな文化の発生に触れた。中世の教育では武家の家訓と寺院における世俗教育に触れ、民衆と支配者側の教育の差について論じた。近世の江戸時代では多様な教育の出現とその社会的な背景を権力側からと民衆の側からの要求として論じた。
(15) 特別活動の指導法 ―各教科、道徳、総合的な学習の時間等との連携を通して―	共著	平成 30 年 1 月	ＥＲＰ出版 全 93 頁	平成29年告示の学習指導要領の特別活動で育成したい資質・能力とその具体的な指導ポイントについて、その具体事例を指導案等と同時に示した。 A5 版 共著者：松田智子、新川靖、林真太郎 (担当部分：第 1 章　理論編の pp6～pp33、pp36～pp42 を単著) 特別活動の目標「集団や社会の形成者としての見方・考え方」と「なすことによって学ぶ」という方法原理に基づいて、学級活動（ホームルーム）児童会(生徒会)活動、学校行事、クラブ活動（小のみ）でそれぞれ育てたい資質・能力を具体的に挙げて述べた。さらにその活動で教師として指導における留意する点について論じ、学校の全体計画作成時には、特に各教科、道徳、総合的な学習の時間との関連を視野に入れて、学校全体として取り組む必要性を論じた。さらに評価についても結果だけでなく過程や子どもの良い点に着目することを論じた。最後に地域や家庭との連携があってこそ特別活動は効果があることを述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(学術論文) (1) 公立義務教育学校における保護者対応の現在 ―保護者の要望・抗議・クレームの分析を中心に―	単著	平成 20 年 12 月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要第 46 集 p 167～194	公立の義務教育学校で増加している保護者の要望・抗議・クレームについての社会的な背景を分析した。また、保護者と教員双方のそれらの問題についての認識のずれを、現代社会の様相と関連付けて明らかにした。各学校で起きているその様態をもとに「要望・抗議・クレーム」を整理し分類した。その論点を踏ま、学校組織としての鍋蓋構造の弱点を指摘し、予防策や対応について例示した。また、教師一人一人が保護者と連携するだけでなく、学校組織として日常的に交流できるシステムづくりが必要であることなど、学校の将来的なあり方も具体的に提案した。特に管理職の役割や、行政の役割が今後重要になることを論じた。
(2) 幼稚園教育課程編成の現状と課題（１） ―Ａ市立Ｂ幼稚園の教育課程の現状を通して―	共著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号 (p135～p140)	幼稚園における教育課程の意義、その具体的な活用についてＡ市の教育課程の基底及びＢ幼稚園の教育課程指導計画を分析し報告したものである。Ａ市の教育課程基底が各幼稚園に及ぼす影響を平成 22 年から 23 年にかけてのＢ幼稚園の研究紀要をもとに明らかにした。公立幼稚園では教育課程が文言化されているが、それが日常の保育にどのように効果的に作用しているか、また、教育課程のＰＤＣＡサイクルの実情についても言及した。 （松田智子・土谷長子） 担当部分：Ａ市Ｂ幼稚園に 3 年間継続的に保育観察に入り、教育目標が保育内容にどのように具現化しているか分析した。Ａ市の教育課程の基底の改定に対して指導助言者として参画した。
(3) 特別活動で培う主体的防災行動への一考察	単著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 7 号 (p149～p160)	防災教育の目的と、特別活動の位置づけと役割を明確にし、防災教育への国民の意識の低さを克服するために、初等・中等学校が特別活動の学習を通して獲得する能力について述べた。また、初等・中等の義務教育の特別活動の内容項目や目的と関連付け、防災避難行動のあり方を東日本大震災の中学生の避難行動の具体例を挙げながら論じた。現状の避難訓練の効果と特別活動の改善点とに焦点を当て、防災教育を充実させるため発達段階に応じ、特別活動と各教科を関連させ行う必要があることを論じた。特別活動等を通して地域と日常的に地域住民を巻き込んだ特別活動が地域防災に不可欠であると述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4) 日本語教師論入門 ―中国での実践を通して― ―	共著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要 第 7 号 (p137～p148)	日本語教師の枠組を日本語教師の資質と能力と関連付けながら論じた。日本語教育における教師の役割について論じた。これらについて中国で日本語教師をした経験から、中国における日本語教育事情についてれを挙げながら論じた。中国の担当する学生にアンケート調査を行い、日本語学習者の現状と意識を分析した。さらに現代の中国で日本語教育にかかわる意義について論じた。 （松田公平、松田智子） 担当頁は抽出不可である。事前の学生アンケートの作成とアンケートの結果の分析整理を担当
(5)特別活動で築く 人関関係力 ―防災教育の実践を通して― ―	単著	平成 25 年 4 月	教育 PR0 第 43 巻第 9 号 （P6～P10）	特別活動の特質・特性である「集団活動であること」「なすことによって学ぶ」この２つが、地震大国に住む国民にとって、命を守る中心だと述べた。特別活動の狙いである望ましい人間関係の構築が、学校内にとどまらず地域住民まで広がり、防災行動を下支えすることも述べた。さらに望ましい人間関係を形成する能力を育てる方法とその過程について言及した。最後に、特別活動は体験活動が重視されるためイベント的に終わってしまう危険性があり、活動の後に振り返り、子どもが内省化する必要があることを具体的に例示した。
(6)内面世界の形成を促す人間教育原理への一考察 ―ソクラテスの問答法に焦点を当てて― 【査読有】	単著	平成 26 年 4 月	人間教育学研究　創刊号 奈良学園大学人間教育学部 （ｐ7～ｐ14）	教育の言葉の意味を探るため、世界東西の紀元前の思想家が教育を論じている文献を調査した。人類文化の思想的な夜明けと教育の起源は関係し、教育は「子どもを善くしようとする働きかけ」を意味し、ソフィストという職業集団教師が存在した。特に内面の教育を実践した、ソクラテスの人物像やその「問答法」に視点をあてて論じた。彼の「無知の知」を相手に自覚させる対話は、内面世界に配慮した教育への示唆を含んでいる。彼は青年を教育対象としたが、梶田が提唱する「内面性の人間教育」との関連性も述べた。梶田の人間教育における「自己凝視、自己対話、自己表現」を支える教育の基盤も述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)Death Education による人間教育 ―絵本の分析を通して― 【査読有】	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究　第２号 奈良学園大学人間教育学部 （ｐ59～ｐ70）	今日の死生観が返還した過程を振り返った。命の教育は学校教育で行われている道徳育では不十分であり、死と向かい合う教育が必要なことを述べた。医療が進み死と向き合う時間が長くなり避けては通れない問題である。子どものための Death Education には､絵本という芸術作品は適切な教材であるため、デーケンの提唱した Death Education の基本的な５つの目標に合致する絵本を分析して提案した。それぞれに対応した国内外の絵本を選択し、内容を分析し Death Education にどのように活用できるかを示唆した。
(8) 近世における女子教育史への一考察 ―江戸時代末期の女子教育について―	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 3 号 P125～P134	江戸時代末期に士族のみならず庶民・農民に至るまで教育のすそ野が広がっていった外的及び内的な要因を 3 つ挙げた。士族の女子教育を支える日本独自の女徳（生活技術より徳を上位）が日本の女子学の特徴である。庶民の女子教育を支えるは実学であり、その根本思想は主婦学であった。女子教育が母親教育の枠組みの中ではあるが社会的に認知された意義は大きいと論じた。また農村地域の最下層の女子にまで、文字の読み書きが広がっていたことを資料で明らかにした。幕末期に藩校で女学校成立の動きがあったが、富国強兵のための母親学の色彩が濃かった。寺子屋での女師匠誕生や男女が同室学習を例に挙げ、明治の学制実施の前の男女共通教育の萌芽について論じた。
(9) 貝原益件の教育思想への一考察 ―江戸の子育て法と教育書を通して― 【査読有】	単著	平成 27 年 12 月	「人間教育学研究」第 3 号 人間教育学会 ｐ47～ｐ54	本論は鄭和と秩序の時代であった江戸時代の教育ネットワークおよび益軒の著作である『大和俗訓』及び『和俗童子訓』等に焦点をあて論じた。教育に果たす父母の役割は大きく、益軒は父母こそが教育の心得を学ぶべきとして庶民に分かりやすい仮名書きの教育書を多く発行した。彼の学問の根本は習俗としての儒学であり目的は「善」を行うことであり、仁や礼を大切にした孝の教育である。彼は子どもが邪悪を覚える前に早期に教育すべきと説き、その年齢に応じた教育課程を示し大きな支持を得た。また、親の過保護を厳しく戒めた。このような益軒の思想が江戸時代に受け入れられた社会的な背景も、思想内容とととともに分析した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10) 生活科から小学校社会科への連続性の一考察 ―防災教育と減災教育に視点を当てて―	共著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 5 号 P141～150	日本の国土の環境から災害大国であるリスクがある反面、国民の危機意識は低いことを前提に、防災教育と減災教育の必要性を小学校 6 年間の生活科と社会科の連続性の中で論じた。学習指導要領に防災教育がどのような内容と目標で示されているかに焦点を当てて分析した。さらに指導内容を「自助」「共助」「公助」という防災の枠組みと関連付けて論じた。生活科の目標は自立の基礎を育てることであり、「自助」「公助」との関係が深い。一方社会科の目標は「共助+公助」の公民的資質を育成、災害についての知識獲得意欲を中心に置いている。特に命を守る一次非難に重要な空間的認知の獲得にも社会科の果たす役割は大きい。 共著者：山田均、松田智子 担当部分：総論と生活科の部分単著 p 141～145
(11) 教育行政と教育課程 ―学校経営に視点をおいて―【査読付】	共著	平成 28 年 12 月	日本人間学会学会誌第 4 号 P115～124	教育行政と教育課程をテーマとして，学習指導要領をめぐる論議，教育課程行政の統制手法の変化，教育課程マネジメントの課題，戦略的で柔軟な学校運営と教育課程，教育課程に関する地方教育行政の役割等を学校経営の観点から，論述した。 共著者：松田智子，伊田義信 本人担当部分：(p115～118 を単著）第２項、教育課程行政の課題（教育課程の統制）として専門統制、国民統制、行政統制、市場統制について解説し、第３項では、教育課程行政の統制手法の変化（履修主義から習得主義への転換）インプットからアウトブットへの転換を論じた。第４項では教育課程マネジメントの課題として教育課程と「出口」の学力格差の現状を論じた。
(12) 総合的な学習の時間の探究課題の設定について ―教科横断的・総合的なカリキュラムの歴史的な考察を通して―□	単著	平成 30 年 1 月	奈良学園大学人間教育学部研究紀要 「人間教育」 第 1 巻第 1 号 A４版 p15～p24	総合的な学習の時間の目標は「探究的な見方・考え方」を育てることが目標であると平成 29 年度告示の新学習指導要領で示された。探究の過程で重要なことは、探究するべき課題の価値を教師が明確にして子どもに提示すること、さらに子どもと協働して課題発見の指導をすることである。初めに子どもありき、内容ありきの二者択一に陥ることを避ける必要があることを論じた。これらについて、日本及び世界の教科横断的なカリキュラムの歴史を振り返ることを通して、再認識する必要性を論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(13) 特別活動の体育的行事における「感動」体験についての一考察 ―スポーツ科学と安全教育の視点から―	共著	平成 30 年 2 月	プール学院大学研究紀要 第 58 号 p 395～ p 402	特別活動の体育的行事において、昨今後遺症が残る事故が起きている組体操について論じた。その教育的な効果と学校安全の観点から、どのような演目を教員として選択するべきかを述べた。学校教育の「感動体験」と「学校安全」を両立させるための方策について、教育学部学生のアンケートを分析したて方向性を明示した。 共著者：松田智子、林真太郎 本人担当部分：p395～399、後遺症が残る可能性が高い組体操を、学校行事で中止しない理由を学生アンケートにより確認した。教育的効果と自己の感動体験や地域の伝統等が影響を与えていることが明確になった。自己自身の経験を乗り越えて教育内内容を省察する力を持つ必要を論じた。
(14) 保育内容の意義及び今後の課題と展望 ―奈良県のＡ幼稚園の実践を通して―	共著	平成 30 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部研究紀要 「人間教育」 第 1 巻第 2 号 A４版 P66～p76	保育課程の歴史と保育内容の意味と保育内容の歴史を述べた。その後、具体的な 5 領域の狙いと内容とともに。その全体構造が保育内容にどのように反映しているか、幼児の具体的姿と理論を連携させて論じた。幼稚園や保育園の保育内容は環境を通して 5 領域を横断的・総合的に扱い、一人一人の良さや過程を評価することを指導の留意点と共に示した。さらに、就学前までに育成したい 10 の力と小学校教育とのつながりを提案した。更に、指導案の中で､5 領域のどの力を育んでいるか教師自身が意識的に構想することの重要性を論じた。 共著者：加奥満紀子、松田智子 担当部分：ｐ60～70　保育課程の歴史と保育内容の意味と保育内容の歴史部分を担当。具体的な 5 領域の狙いと内容とともに。その全体構造が保育内容にどのように反映しているか論じた。
(15) 日本の教育行政と教員制度改革への一考察 ―英国における教員制度改革との比較を通して―	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学人間教育学部研究紀要 「人間教育」 第 1 巻第 3 号 A４版 P77～p86	世界的に急速に進行する教育改革と社会的な背景に焦点を当て、日本の教員制度改革を論じた。教師の仕事の特徴をげ、日本の近代学校制度成立と関連付けて分析した。現代教員制度激変の節目になる教員評価制度の実施、教職免許更新制度の導入、教職大学院創設等による教師教育再編の動向を述べ、さらに改革により起因した課題について検討した。日本の教員制度の今後の展開を、イギリスの教員制度改革と比較して論じた。 共著者：松田智子、阿部秀高 担当部分：日本の教育行政の動きと教員制度改革の行政施策をイギリスと比較した部分単著（p80～p86）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「事典」 (1) 実践教育評価事典	共著	平成 22 年 8 月	文渓堂 全 261 頁	教育評価の意味と各教科での評価のあり方と、評価用語の詳しい解説を述べたものである。 Ｂ５版　　監修：梶田叡一・加藤明 共著者：梶田叡一・加藤明・長谷浩也・吉村希至・土田圭子・石井雅幸・上之園公子・尾崎友美・鎌田首治朗・金澤緑・米田豊・角谷重樹・北川達夫・菅千索・勝見健史・松田智子・他 15 名 （担当：P, 126～129・P, 138～139・P, 190～191 教育評価の基礎知識「教育評価史（日本)」「教育評価史（西洋)」「学習指導要領と指導要録」「カリキュラム評価・カリキュラム改善」の用語概略と説明を単著） 日本の教育界に残る心情や印象で教育を語る実践を乗り越えるために本書は執筆された。「結果」を重視した地に足を着けた教育をするために各用語についての基本的な解説を行った日本と西洋の教育史では、それぞれの学習の評価の方法や観点に焦点を当てて、教育評価の歴史を論じた。 学習指導要領と指導要録の項では，社会的な背景と明治以降の日本の教育界動向を関連付け，なぜ学習指導要領が変遷してきたかを述べた。学習評価と指導の改善に視点を当てて論じた。カリキュラムの項は PDCA サイクルの必要性を述べた。
「報告書」 (1) 命の教育のカリキュラムをどのように進めるか ―幼児が友達との交流を深めることを通しての育ち―	共著	平成 22 年 12 月	第 2 回命の教育実践研究会報告集 全 75 頁	幼児が身近な自然とのかかわりを通しての感動や葛藤を伝え合い，共感することを通して，自ら生き物に関わろうとする意欲を育てる取り組みと具体的な指導過程について提案した。動物の飼育活動は，当番活動として幼児に役割分担されがちであるが，あえて自主的な活動と位置付けて，そこで生じる幼児の葛藤を取り上げ，生命を大切にする心を育成する指導の方法について述べた。葛藤場面での教師や友達の声掛けを分析し，日常の保育の中で児童の内面を理解する重要性も論じた。 （担当：ｐ14～ｐ15，ｐ36～37，梶田叡一，渡邉満，古川治，川上一馬，新川靖，津田一司，山口光一，市橋真奈美，松田智子）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(2) 命の教育のカリキュラム化をどのように進めるか ―幼稚園・小学校低学年の命の教育―	共著	平成 24 年 1 月	第 3 回命の教育実践研究会報告集	幼児は身近な環境と自ら関わり，発見を楽しんだり考えたりして，それを自分の生活に取りいれる。実践事例「ツバメの町を探検しよう」では保育案の新しい書式を提案し、ねらい内容と幼児の姿と育てたい力を明確にするように指導した。育てたい力は①人とかかわる力②環境とかかわる力③自己とかかわる力の 3 視点を設けた。そのうえで援助のポイントを考えることを入れた保育案を提案した。小学校低学年生活科では，学習指導要領改訂の趣旨である安全教育の充実に着目し通学路をテーマに「寄り道のすすめ」単元を作成しを生活科の中に取り入れた指導案をを提案した。 （担当：ｐ18～ｐ19，ｐ27～32　　梶田叡一，渡邉満，古川治，，津田一司，山口光一，市橋真奈美，松田智子）全 115 頁
(3) 学びを描き出し伝える―メンタリングの実際と課題―	共著	平成 25 年 2 月	日本教師学学会誌「教師学研究」増刊号	日本教師学学会第 12 回大会シンポジウム報告集。メンタリングに着目し，教師教育・看護教育・学校経営･e ラーニングの立場からシンポジウム形式で発表をしたものの報告である。 担当部分は公立学校の初任者研修における指導教員と初任者との関係をメンタリングの視点から分析することである。現在の主任者研修は、メンターと対象者との関係に利害関係がありそれが課題であること、また期間は初任者研究は 1 年で終了だが、メンタリングの観点からは、3 年ほどの継続が望ましいことを提言した。 担当頁はシンポジウムなので抽出不可（田村由美・松田岳士・河村美穂・石原逸子・松田智子） ｐ25～Ｐ44
(4)いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践 平成 24 年度～26 年度科学研究費補助金研究報告集 （基盤研究(Ｂ)） 科研番号 24330254	共著	平成 27 年 1 月	奈良学園大学 研究代表者 梶田叡一 いのちの教育実践研究会 全 207 頁	生活科と特別活動における防災教育のカリキュラムを提示した。防災教育を定義し、その必要性を日本の地理的な環境面から提起し、その中で義務教育機関が果たす役割を論じた。特に生活科の単元構成と特別活動の人間関係構築力に焦点を当てて、実践事例を示すとともにカリキュラム編成の基本観点を論じた。 (担当：第 4 章第 3 節生活科と特別活動における防災教育ｐ96～107　共著者：梶田叡一、近藤靖弘、渡邉満、古川治、五百住満、松田智子、大谷武彦、住本克彦、杉田育代、三木澄代、松井典夫他 9 名)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5)「豊かに感じ生き生きと生活する幼児をめざして」 ―学校生活につなぐ学びの芽生えをはぐくむ―	共著	平成 28 年 2 月	芦屋市立精道幼稚園 全 53 頁	保育所・幼稚園と小学校の円滑な接続を図る芦屋市教育委員会研究指定園としての報告である。文科省の示した接続の 3 観点「自己調整力」「考える力」「伝え合う力」で年間 3 回の保育参観実施し、特に 5 歳児後期の変容を確認した。幼稚園で意識的に伝え合う力の育成に努めるとともに小学校での学びを支える体幹を鍛えることを意識した保育の報告である。 (担当：p 32～33 単著及び全体の校正及び助言)、共著者：西窪千昌、上埜吉実、内藤純子、中村友光子、松井奈央子、松田智子
(6) 第 56 回学校保健ゼミナール講演集	共著	平成 29 年 11 月	東山書房 「保健教室」 全 170 頁	「学校におけるクレーム処理と保護者対応のポイント」について保護者クレームの社会的な背景を論じた。またクレーム対応の基本的な姿勢と、特に電話対応の問題を指摘した。学校体制として教職員の事案への共通理解と職場の同僚性が重要であること、学校組織としての対応が不可欠であることを論じた。さらに学校以外の専門的な機関と協働関係に意識改革をすることを求め、クレーム対応の今後の展望を述べた。P3～p22 共著者：土井吉晴、村瀬健、三原総子、細谷良太　松田智子
「依頼原稿」 (1) 絵本を通して「死」から「いのちの教育」を考える	単	平成 29 年 8 月	建学社 「心とからだの健康」 8 月号	死の観点から教育を考える意義を絵本の読み聞かせ実践を通して論じた。幼稚園と小学校 1 年生に谷川俊太郎の絵本「しんでくれた」を読み聞かせ児童の反応から、生きることの大切さを考えさせた実践である。植物連鎖の頂点に立つ人間の命をどのように捉えるかを考えさせ、食物を大切にすると言う一般的な食育にならず、生命尊重となるような教材解釈を示した p78－81
(2) 幼稚園・小学校の実践から〈いのち〉の教育を考える	単	平成 30 年 1 月	建学社 「心とからだの健康」 1 月号	幼稚園の「うさぎ当番」を役割でなく、ウサギの生命を尊重する観点で指導する話し合い合意形成する実践を例示した。小学校では児童が自らの命を守るために、校区の帰り道を自主的に楽しみ探検し、子どもの空間認識を養い、非常時等の災害発生時に、安全な場所に一時避難し命を守る実践を例示した。子どもが話し合い意思決定することが重要であることを論じた。P75－78

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「講義・指導助言等資料」 (1) 幼稚園の教職入門	単著	平成 20 年 11 月	京都府私立幼稚園研修会 A4 版　8 頁	京都府私立幼稚園新規採用教員約 120 名を対象に「教員の使命感と職務遂行能力とは」をテーマに、冊子を配布し講演をした。教員の成長を日本の伝統文化継承の過程「守・破・離」に例え、現在学ぶべきことを具体的に話した。また、幼稚園教育は生涯学習の入口であり、重要な仕事であることを強調した。さらに幼稚園の教育課程編成の意義と役割について説明をした。
(2)幼稚園教育要領の改定と芦屋市幼稚園教育の特色	単著	平成 21 年 3 月月	兵庫県芦屋市幼稚園教育研究会 A4 版　8 頁	兵庫県芦屋市公立幼稚園研修会全体講師として資料を配布して、芦屋市幼稚園教諭約 100 名を対象にして、幼稚園教育要領の改訂のポイントと、その内容が小学校・中学校の教育課程にどのように継続しているのか解説した。芦屋市の地域性や幼児教育で育てた力と小学校の全校学力状況調査の結果と結び付けて説明した。「心をたがやす幼稚園教育課程」の方向を提示した。
(3)教員免許更新講習会 講義資料冊子 「今求められる資質と職務遂行能力」 I	単著	平成 21 年 8 月	環太平洋大学教職センター A4 版　10 頁	教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」についてレジメを基に講義を行った。20代から50代までの年代別に，教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割についてレジメを準備してライフスタイルとともに説明した。特に新任教師が増加している今日，教職10年を経過する教師はミドルリーダーとして，学校運営に参画する必要性を教員人口利率のグラフを示して具体的に説明した。
(4) 生活科における言語力育成―幼稚園・保育所とのつながりに視点を置いて―	単著	平成 22 年 8 月	阪神地区小学校生活科教育研究会（伊丹市立産業情報センター） A4　10 頁	レジメを基に、話し言葉が中心の幼稚園から書き言葉が中心の小学校へ進級した祭に起きる小 1 プロプレムについて言語活動に焦点を当て論じた。幼稚園では語を単位とした指導になりがちで、語の質を高めるには活動や体験を通して、その意味や背景を考えさせることが重要であることを述べた。静かに読み聞かせを聞くことを是とする指導の再考を提案した。絵本の読み聞かせ通しイメージと論理的な思考を育む必要性も論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5) 自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児	単著	平成 23 年 6 月	兵庫県芦屋市教育委員会 A4 版　8 頁	兵庫県芦屋市幼稚園教員約150人を対象に、資料を配布して、４歳児と５歳児の自我の発達と，他児とのコミュニケーション力の発達に着目して，遊びの中での子どもの心の葛藤とひきだす意義を話した。児童が葛藤し心を成長させるために保育者の役割と環境構成のあり方が重要性であり、領域人間関係に重点を置いた、幼児期の道徳性の芽生えを図る教育課程の編成の意義とその具体的な方策を論じた。
(6)教員免許更新講習会 講義資料冊子 「今求められる資質と職務遂行能力」Ⅱ	単著	平成 24 年 8 月	環太平洋大学教職センター A4 版　10 頁	レジメで教員の年齢構成を提示しつつ、新教育課程を実践するうえで教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について、教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。また、年代別にどのような力が求められるかを、経営者100人からのアンケート結果として一覧で提示し役割を自覚し、チーム力んの必要を指摘した。
(7)神戸市立小学校生活科部会研究会資料 「生活科でいのちを大切にする教育」	単著	平成 26 年 1 月	神戸市立小学校生活科部会研究会 A4 版　8 頁	レジメに基づき、幼稚園・小学校の教員 60 人を対象に講話を行った。生活科の成長単元は児童の自尊感情を育み周囲に感謝の気持ちをもたせ命を大切にする狙いを説明した。子どもの死生観調査の結果を提示し、死生観の変化の境目を意識して教育に当たる必要を述べた。
(8) 小学校期へのなだらかな成長支援を図る教育課程	単著	平成 28 年 6 月	芦屋市公立・私立保育所合同研修会 パワーポイント 15 枚	芦屋市公立・私立保育所、こども園等の教職員 220 名を対象に、合同研修会講師として資料を基に乳児期から幼児期までの人間関係の育ちが小学校 1 年生の精神的な自立にどのようにかかわるかをベネッセの 2016 年縦断調査の報告を例示しながら説明した。特に入学後直後の学習意欲が年長児の生活習慣や言語力に影響されること、年長児の言語力が年中児の調整力に影響されることを教育課程に反映させる必要を論じた。
(9)幼児期の教育を小学校につなげて ―資質・能力を育成する教育課程(保育課程)―	単著	平成 29 年 11 月	兵庫県公立幼稚園阪神地区教育研究会 パワーポイント18枚	兵庫県公立幼稚園阪神地区教育研究会講師として、資料を基に参加者 300 名を対象に、教育課程編成の趣旨と、それに基づいた各期の目標、そして長期と短期の指導計画の作成方法、本日の保育案と、教育課程の編成が連動しつつ、公開保育がなされてことを説明した。幼稚園卒園までにねらう 10 の力を示し、特に小学校以降の学びに関係が深い「自立心」「協同性」「思考力の芽生え」について詳細に説明した。さらに本日の保育での「主体的・対話的で深い学び」の幼児の姿を論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」 (1)保育士養成教育と卒業時の満足感との関係	ー	平成 20 年 9 月	全国保育士養成協議会第 47 回大会（北海道・函館国際ホテル）	免許・資格取得のための独自教科のみならず「基礎演習」で掃除の仕方や箸育や礼儀作法等を実施している。また伝統文化（歌舞伎・西陣織・正しい日本語）等の授業を行っている。この特徴あるカリキュラムに対する実証的な検証を行った。 担当部分は、学生満足度評価の実施分析である。（吉村啓子・松井裕子・松田智子・土谷長子・智原江美・高橋浩輔・下口美穂・岡野総子)。
(2)「今なぜ命の教育が必要か」パネラーとして提案発表 「飼育活動でいのちを大切にする幼児・児童教育」	ー	平成 22 年 12 月	第 2 回いのちの教育実践交流会（大阪・御堂会館）	幼稚園や小学校特別活動のウサギの飼育を通しての実践例を報告した。多くの学校園では小動物の飼育活動をし、当番活動は特別活動の係活動として、教師が順番に決めていることが多い。本実践は，自主的なウサギ当番と学級活動の話し合い活動を通し「ウサギの世話は命を預かることである」という気付きの経過を述べた。話し合いには教師の指導性が不可欠であることも強調した。 （古川治，松田智子，久保弘子，津田一司，山口光一，渡邉満，市川真奈美）
(3)メンタリングの実際と課題 パネラーとして提案発表 「学校におけるメンタリング機能の実際」	ー	平成 23 年 2 月	日本教師学学会第 12 回大会（兵庫・甲南大学)	メンタリングに着目し，教師教育・看護教育・学校経営・e ラーニングの立場からシンポジウムで発表をした。公立学校の初任者研修における指導教員と初任者との関係をメンタリングの視点から分析した。メンタリングの観点からは、3 年の研修継続が望ましいことを提言した。(田村由美・松田岳士・河村美穂・石原逸子・松田智子)
(4)幼稚園と小学校低学年対象の命を大切にする教育とは パネラーとして提案発表	ー	平成 24 年 1 月	第 3 回いのちの教育実践交流会(兵庫・六甲荘)	命の教育のカリキュラム化について提案した。幼稚園児の命の教育は「小動物の飼育」や「植物の栽培」を通して行われることが多い。これらは，愛着を持つだけでなく，子どもの心を癒すからである。その心の働きが命を大切にする契機となる。一方、生活科では，改訂の趣旨に登場する「安全教育を充実」に着目し、通学路をテーマに取り上げた単元を構成し提言した。担当部分は、幼稚園・小学校低学年の指導部分である。(古川治，松田智子，津田一司，山口光一，三木澄子)

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5) 生活科における命の教育の単元開発	―	平成 24 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 21 回大会（徳島・徳島大学）	東日本大震災の教訓として地域全体での防災教育の大切さが確認された。小学校 1 年生で安全の一部として通学路を教材とするが、扱いは安全な登校を目指すものであり取り扱う時間が少ない。通学路のみの安全と限定するのでなく、地域の避難通路や避難場所も組み入れた単元を構成する必要性を提案した。生活科の教科書で提示されている通学路の危険が、大雨や不審者等に偏っている傾向があり、津波の記述も求めた。抄録 p 209
(6) 領域「環境」における授業研究 ～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	―	平成 24 年 9 月	全国保育士養成協議会第 51 回大会（京都・京都文教大学）	授業に自然や環境に触れ合う体験活動を組み入れ、さらに発展学習として関係する課題を与えた。課題に対するフィードバックを通して学生同士が交流するための時間を毎回確保した。この学習サイクルの繰り返しが、学生の意欲をどのように刺激し授業への参加態度等が変化するかを検証したものである。筆者は学生の授業への参加態度や課題等への取組態度の分析を担当した。 （岡野聡子・松田智子）　抄録 p 268～269
(7) 防災からいのちの教育を考える分科会のコーディネーター	―	平成 25 年 2 月	第 4 回いのちの教育実践交流会（兵庫・六甲荘）	東日本大震災がの際に、児童を 100％救助した教訓について、麻生川氏から提案発表があった。諏訪氏から震災発生時の学校と地域との望ましい関係は、従来の特別活動の退屈な避難訓練では構築できないと助言があった。コーディネーターとして、特別活動の学校行事を核とし、自主的集団避難行動をうながす防災教育のまとめを提言した。 （麻生川敦・諏訪清二・松田智子）（p 32～ p 41）
(8) 生活科と特別活動における防災教育	―	平成 27 年 1 月	いのちの教育実践交流会第 6 回シンポジウム in 兵庫（兵庫・六甲荘）	兵庫県教育委員会が、防災教育がどの教科や領域と結びつき実践されたかを調査した結果、特別活動・生活科・道徳などと関連が深いと分かった。本発表では特別活動と生活科に焦点を当て、目的と内容と学習方法の視点で防災教育との関連を論じた。生活科では単元目標を防災教育と関連させ、実践を紹介した。特別活動では災害時の一時避難活動の重要性と避難集団内の人間関係がその結果を左右することから、集団の良好な人間関係の構築の重要性を確認した。集団活動さえすれば良好な人間関係が育つのでなく、その目的や自主性が重要であることを論じた。報告集 p 96～107

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(9)絵本の分析を通しての Death　Education (死への準備教育)	ー	平成 27 年 2 月	日本教師学学会第 16 回大会(日本女子大学)	死生観の転換期である 5 歳から 7 歳の児童を対象に、Death　Education に有効な絵本を紹介した。日本では医療が進み、子どもが死と向き合う期間が長くなるとともに、災害等で親しい人と死別を体験する機会が増加していることを述べた。さらに病院死が増加し、子どもたちが命を実感を持って受け入れる環境に乏しい。このことが、子どもの健全な死生観の発達に揺らぎを引き起こしている。子どもの発達段階に応じた絵本を分析的に紹介した。抄録 p50～51

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　山本　美紀

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
芸術学（芸術学・音楽学・芸術史･芸術一般） 教育学（教育学・教科教育学）	芸術・文化政策、各教科の教育（音楽）、教材開発、教科外教育 音楽学、

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ・講義・演習授業の効果的連携	平成18年4月 ～平成20年9月	大阪キリスト教短期大学神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽講義」（専門科目、1年次配当、半期、選択 2 単位）において、明治期の日本に赴任した宣教師による初期の音楽教育史および唱歌について講義。さらに同短期大学専攻科神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽演習」（専門科目、2 年次配当、通年、選択 2 単位）と連動させ、教会における音楽活動が今日の音楽教育の原型を提供していることを踏まえ、歌唱指導の模擬授業や指揮法・編曲法をはじめとした音楽教育法の実践演習を行った。その結果、日本における音楽教育の歴史的事項を押えながら、地域の音楽活動拠点となる教会での音楽活動について学生たちにとって応用性の高い講義となった。
・視聴覚教育技術の利用	平成 20 年 10 月～平成 21 年 9 月	関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位）において、グレゴリオ聖歌の原曲と楽譜、またその現代における応用例を、視聴覚教材を用いて講義した。特に、グレゴリオ聖歌は音楽教育として用いられたものでもあるため、各国図書館に保存されている画像を提示の上、旋律線をアップル社のアプリケーションなど最新機器を用いて再現した。その結果、学生たちにはより具体的な理解が促進されたと同時に、教職を希望する学生の受講者も多かったため、音楽教育法の歴史的体験も可能となり、満足度の高い授業となった。
・大学教育と連動した地域への実践教育	平成23年4月 ～平成25年3月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「子育て支援実践演習Ⅰ」（コア科目、2 年次配当、通年、選択 4 単位）、「子育て支援実践演習Ⅱ」（コア科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）において、地域貢献のための実践教育を実施。学生たちの、地域の子育て支援ができる技能や発想力、また企画運営のための即戦力を育成する実践教育を行った。その結果、学生たちのコミュニケーション能力の向上がみられ、地域の評価を高めた。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・講義・演習授業の効果的連携 ・視聴覚教育技術の利用	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として「音楽の理解」（講義）において、音楽の専門用語及び音楽の思考法について徹底した理解の定着を行う。その知識を、「音楽科指導法（教育法）」（演習）での学習指導要領の内容理解につなげ、模擬授業の指導案作成及び実施に際して、具現化できるよう指導を行った。特に、合奏指導に関する模擬授業については、楽譜の編曲指導、楽器の演奏法など、より実践に則したものとなるよう、小学校での大学生によるボランティア指導の様子などの記録ビデオを使用し、学生によりイメージを持ちやすく指導を工夫した。
・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として担当の「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門科目、1・2年次配当、半期、選択2単位）において、特にⅠ・Ⅱを実習必修科目と設定。科目の到達目標を実習で使用できる音楽能力の確保（ピアノ基礎と弾き歌い）と設定し、各自のレベルに応じて完全個別レッスンを実施。　さらに、音楽系科目「音楽の理解」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「表現B（音楽表現）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）と教科内容を連動。学生がスパイラルに多様な音楽的能力をつけられるよう工夫した。その結果、学生の理解と音楽的実力が伸び、実習先からも実習生に高い評価を得た。
・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授	平成23年4月 ～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授、また奈良学園大学人間教育学部専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）、「表現B（音楽表現）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、小学校学習指導要領、幼稚園教育要領を詳説したうえで、いかに具体的教育実践へ落とし込んでいくか、実例を挙げて解説。指導案作成指導とともに、模擬授業を実施し、教育法の実践的活用を具体的に指導した。その際、初等教育で使用する楽器（カスタネット・タンブリン・鈴・ピアニカなど）や小学校で使用するリコーダー等の基本的な奏法も、授業で活用できるよう指導した。その結果、音楽科教育や幼児への音楽表現の指導に対する理解が深まり、実習先からも高い評価を得ると同時に、2 次試験対応能力が向上し、学生の教員採用試験、公務員試験（専門職）合格に貢献した。
・レポートの活用 ・オフィスアワーの活用	平成23年4月 ～現在に至る	リメディアル教育やキャリア教育の一環として環太平洋大学で取り組まれてきた「学習支援講座（国語）」「小論文講座（基礎）（応用）」「基礎ゼミ」、また奈良学園大学人間教育学部での「教職表現力演習Ⅰ、Ⅱ」では、レポートの提出による学生の文章力の向上に貢献してきた。 特に「教職表現力演習Ⅰ」では、教職に必要な基礎的日本語運用能力の向上を、同Ⅱでは教職に必要な文章スキルを基盤とした、社会的文章構成力を培い、各テーマに即した文章作法を指導した。さらにオフィスアワーでは、ディスカッションも取り入れ、個々の問題意識を文章に活かす指導を行った。その結果、学生の段階的な日本語運用能力が向上し、論理的思考力の育成に貢献した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・授業用コミュニケーションシート（大福帳）の活用	平成26年4月 ～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽の理解」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）及び「音楽科指導法」（教職科目、2年次配当、半期必修1単位）において、学生とのコミュニケーションの確保・出席の確認・学習内容の習熟状況の確認のために、「授業用大福帳」を導入。各授業終了時に授業内容についての質問の他、学習方法についての質問を記入させ、次回授業に返すようにしている。中には、大学生活全般についての質問なども含まれる場合もあり、学生の出席状況の把握に努めるだけでなく、生活状況の把握にも役立てることができている。
2　作成した教科書、教材 ・講義用補助教材（視聴覚教材） ・学生配布用ワークシート	平成19年4月 ～平成19年9月 平成20年4月 ～平成20年9月 （隔年開講） 平成20年10月～平成21年3月 平成21年4月 ～9月	大阪キリスト教短期大学神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽講義」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）において、歴史的に希少価値の高い資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。 関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、歴史的に希少価値の高い資料や、フィールドワークで独自に採取した資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。
・『小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる』（再掲）　山本美紀 著　ヨベル社（平成22年12月出版） 【全96ページ＋別冊課題48ページ】	平成23年4月 ～平成24年3月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）のためのテキストである。前半で音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説を行っている。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・『幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記』（再掲）山本美紀／岡田美紀編著　ヨベル社（平成 22 年 10 月出版）【全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】	平成 23 年 4 月～平成 24 年 9 月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現 B（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、幼稚園保育園に関する音楽が関わる学校行事運営において、必須項目について解説した。音楽に関する項目について執筆。 巻末には幼児教育の現場で使用されやすい楽曲の伴奏用楽譜と、小学校の低学年用共通教材の伴奏用楽譜を収録している。基礎的楽典内容などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容担当、山口聖代：編曲担当）
・『新装改訂版　小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に小学校共通教材の編曲された伴奏用楽譜、および図表解説を追加。さらに授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて解説を強化した。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。
・『新装改訂版　幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽表現で紡ぐ歳時記と役立つ楽器』（再掲）山本美紀／岡田美紀編　ヨベル社（平成 25 年 3 月出版）【全 B5 判　全 175 頁＋別冊課題 32 頁】	平成 25 年 4 月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現 B（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で「表現 B（音楽表現）」に使用したことをふまえ、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、現場で用いられやすい基礎的な楽器群について解説を行う。音楽に関する項目について執筆。また別冊には従来の内容に加え、指導案作成用の用紙を添付。授業の復習とともに、実践的な理解ができるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容、筒井はる香：楽器に関する内容、山口聖代：編曲担当）
・『教職表現力ノート』（再掲）西辻正副／山本美紀編著　奈良学園大学（平成 27 年 4 月）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	平成 27 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「教職表現力演習Ⅰ」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキストである。新聞のコラムをはじめとした模範的文章の書きとり、語彙力をきたえるための項目、より深く記事を読み込むための要約演習ページを含む。本教材により、大学生にふさわしい基礎的な日本語運用能力を鍛えると共に、それらを教員の言葉としてつなげる工夫が行われている。編者として関わると共に、音楽に関するミニレクチャーの項目について執筆。人の話を聴いて、必要な情報を獲得していけるよう、実践的学びができるように工夫した。【A4 判　全 142 頁】（山本美紀：2-63，108-109）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・『音楽教育から地域の文化力へーイメージをつむぐ』（再掲）山本美紀編著　株式会社 ERP	平成 27 年 7 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「コミュニティと音楽文化」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキスト、及び音楽科指導法・表現（音楽）の参考資料として作成。幼稚園や小学校での音楽を通した学びが地域の文化とつながり、やがて地域文化力の基盤となっていくための発達に応じた指導法について言及。 学校と地域との交流としてのゆるやかな連携だけでなく、幼児期の遊びや音楽科の授業をより豊かにするための外部連携を取り入れた指導法ついて、保・幼・小各校種別の実践からアプローチしたもの。特に、地域の教育力を学校内で生かしていくことは、子どもたちにとって学びの機会をより豊かにすることにもなる。編者として関わると共に、各校種別の発達段階に応じた連携事例に基づく指導法について執筆。実践的応用力が得られるように工夫した。編著者：山本美紀、著者：伊崎一夫、大久保充代、寺尾正、中村滋延、根岸一美、御園綾菜【A5 判　全 105 ページ】（山本美紀：5-8, 20-33, 51-61, 63-82;表作成, 85-88, 101-103 頁）
・『人間教育としての音楽科教育 ―知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社	平成 27 年 9 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科指導について、人間教育の視点に立った指導法の解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできる「人間教育」としての音楽科指導を示す。 【A4 版全 123 頁＋別冊課題 48 頁】
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・大阪キリスト教短期大学神学部「教会音楽講義」 学科責任者による授業評価 ・大阪キリスト教短期大学専攻科神学専攻「教会音楽演習」 学科責任者による授業評価	平成 19 年 4 月～平成 20 年 3 月（隔年開講） 平成 20 年 4 月 9 月（隔年開講）	山本美紀講師は、平成 18 年 10 月より、神学科において「教会音楽」（半期）を担当し、平成 19 年 4 月からは、専攻科神学専攻において、「教会音楽演習」（通年）をも担当している。聖書の時代から現代に至るまでの教会音楽の歴史に通暁しており、研究に裏打ちされた優れた講義を行っている。またオルガンの奏法や、讃美歌・聖歌の編曲と合唱など、実技指導にも優れた能力を発揮している。授業に対する学生の評価も高いものがある。大学の教育として、高い教育効果があると思われる。
・関西学院大学神学部「キリスト教と音楽」 平成 20 年度秋学期　学生による「授業に関する調査」結果より（５ポイント満点）	平成 20 年 10 月～平成 21 年 3 月	１．出席状況：4.1 ２．授業の学習目標が明確：4.9 ３．シラバスに合致：4.7 ４．話し方が聞き取りやすい：5.0 ５．授業での作業量が適当：4.7 ６．内容理解のための授業方法の工夫があった：4.7 ７．担当者の熱意を感じた：5.0 ８．全体として満足：4.9

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・環太平洋大学次世代教育学部「音楽科教育法」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成23年9月	受講生：154名クラス数：2クラス（2コマ） １．資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.39 ２．毎週の学習目標は明確：3.30 ３．話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.46 ４．質問したり、意見を述べたりする配慮：3.23 ５．授業の進度や説明は適切：3.34 ６．授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.34 ７．教員の授業に対する熱意が感じられた：3.36 ８．この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.29 ９．この授業で有用な知識やスキルを習得できた：3.38 10．この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3.35 11．この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちりと行われていた：3.46 12．この授業はわかりやすかった：3.29 13．総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3.30
・環太平洋大学次世代教育学部「表現B(音楽表現)」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成24年3月	受講生：99名クラス数：2クラス（2コマ） １．資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.21 ２．毎週の学習目標は明確：3.33 ３．話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.30 ４．質問したり、意見を述べたりする配慮：3.27 ５．授業の進度や説明は適切：3.24 ６．授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.18 ７．教員の授業に対する熱意が感じられた：3.39 ８．この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.28 ９．この授業で有用な知識やスキルを習得できた：3.36 10．この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3.43 11．この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちりと行われていた：3.40 12．この授業はわかりやすかった：3.18 13．総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3.18
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成27年3月	講義内容・方法：3.29 総合的満足度：3.44
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成28年3月	講義内容・方法：3.53 総合的満足度：3.83
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成29年3月	講義内容・方法：3.16 総合的満足度：3.29

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
・地域の公的機関等との連携による教育活動 京都フィルハーモニー室内合奏団 プロジェクト会議メンバー	平成22年1月より現在まで	京都フィルハーモニー室内合奏団の「子どものためのコンサートシリーズ」拡充にあたってのプロジェクト会議。ここでの内容が、コンサートに反映されていくものである。企画会議メンバーとして、子どもの発達に応じた、地域の教育機関としてのオーケストラの在り方について、提言する。 第1回：平成22年1月7日 第2回：平成23年3月17日 第3回：平成23年8月5日
・免許更新講習（幼稚園教諭免許）	平成23年8月25日 平成24年8月23日 平成25年8月20日 平成28年8月17日	幼稚園教諭免許更新に関する講習会を実施。わらべ歌を用いた音楽表現活動や、様々な楽器を用いた表現活動、ボディーパーカッションによる音楽表現などについて、即実践可能な講習を行う。音楽的技能だけでなく、身の回りの様々な素材に着目した講習内容であり、満足度の高い授業として受講者の多い科目である。
・平成23年　芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育－新教育課程とその実践－」 （於）芦屋市立宮川小学校 主催：非営利特定団体　人間教育研究協議会 教科部会「音楽」コーディネーター	平成23年8月12日	「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。コーディネーター発表主題：音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる　―広がる教室とこころの育ち ―
・備前市立西鶴山小学校（岡山県教育研究会　音楽部会 研究指定校）スーパーバイザー 研究授業テーマ「音楽科教育と他教科連携」	平成24年4月1日～25年3月31日	岡山県教育研究会音楽部会研究指定校である備前市立西鶴山小学校スーパーバイザーに就任。校内研修・研究授業などにおいて指導助言を行う。「音楽科教育と他教科連携」をテーマに、地域の教育資源としてのアウトリーチの活用と育成、また学校によるコンサートホールや美術館博物館など公共施設の活用について指導助言を行うとともに、施設の学校対応について具体的な提案を行い、両者のコーディネートに携わる。 校内研修会講師：平成24年4月24日、6月 8日、6月29日、平成25年2月27日 研究指導助言：平成24年10月25日、平成25年1月8日（於：環太平洋大学）、 公開研究中間発表会 講師：平成25年2月27日 公開研究大会：平成25年11月6日
・備前市立西鶴山小学校　PTA主催 教育講演会 「希望となる音楽 ―人種差別を超えて」	平成25年1月17日	備前市立西鶴山小学校　PTA主催による講演会であると同時に、6年生・5年生の「道徳」と「音楽」の授業時間に相当するものとして計画された。 児童が日ごろあまり触れる機会のない、他国の人権問題としてアメリカの人種問題をとりあげ、「ゴスペル」と言われるジャンルのうち、人種問題に付随した形で発展してきた「黒人霊歌（ブラック・スピリチュアル）」について講演する。公演では途中に代表的な「ゴスペル」の鑑賞・体験としてのワークショップを取り入れた。地元放送局・新聞社にとりあげられる。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・研究実践授業 「音楽から生まれるダンス―ダンスはどんなふうに生まれるの？」	平成25年2月15日	科学研究費補助金 基盤研究Bによる、研究実践授業。備前市立西鶴山小学校3年生の児童を対象に、来年度の校内コンサートに向けて、作品理解を深めるための事前指導として行う。 ＜内容構成＞ ・レクチャー　物語から音楽へ 『ももたろう』のルーツとも言われているインドの民話『ラーマヤナ』の物語と、それをもとに生まれた弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』を紹介し、子どもたちの身近な物語と、弦楽四重奏曲をつなぐ。 ・ワークショップ　音楽から生まれるダンス 実際に弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』から生まれたダンスを映像で観た後、第3学年音楽科教科書にあるビゼー作曲「アルルの女」より≪鐘≫を鑑賞した後、音楽のイメージからダンスを創作する。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団教職研修会 「メソジストの伝統と讃美」	平成25年6月17日:京都ロイヤルホテル	日本フリーメソジスト教団教職に対しての講義。英国国教会を起源とするメソジスト派の音楽の伝統を、キリスト教における讃美の歴史から説き起こす。現在問題となっているエキュメニカルと讃美歌の課題と、信仰的伝統とのバランスなどについて、伝道の最前線にあるアクチュアルな議論として展開した。 対象：日本フリーメソジスト教団教師
・地域の公的機関等との連携による教育活動 アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこう」（再掲）	平成25年6月20日:社会福祉法人 日本コイノニア福祉会　円町まぶね隣保園 平成25年6月25 日:社会福祉法人　京都地の塩会　光の子保育園	実践研究の一環として、地域の保育園と演奏団体と連携し、ワークショップ型のコンサートを企画した。コンサートでは、日常の園での表現活動を重視し、日頃からなじみある歌をきっかけに、世界と園児とをつなぐ音楽表現の充実を、プロの演奏家の演奏によって実現した。コンサート中には楽器の体験も行い、すべての園児たちがヴァイオリンに触れる機会となった。コンサート後には、演奏会の印象を園児たちに絵で描く時間が設けられ、それぞれが音楽を聴いた思いを絵に描いた。 対象園児：5才児　30名、演奏曲目：国際急行列車、スペインの踊り、金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）
・地域の公的機関等との連携による教育活動 ストリングスストーリー　―がっきで、からだで、おはなししよう！（再掲）	平成25年8月12日：岡山県立美術館ホール	公立小学校（備前市立西鶴山小学校）と地域の文化施設（岡山県立美術館）との連携実践研究として企画した弦楽四重奏コンサート。西鶴山小学校の全生徒と、その保護者や家族を対象としたもの。「喜怒哀楽」をキーワードとしたコンサートでは、小学校音楽科鑑賞教材で既習の作品の他、事前授業で学んだ現代音楽で中村滋延作曲≪ソヴァン・マチャ≫を、映像・ダンスと共に鑑賞した。後のアンケートで、あらかじめ事前授業でコンサート内容を理解した子供たちが、音楽で表現された内容を深く読み取り、積極的な音楽聴取につなげていた。保護者からは、生の弦楽四重奏をコンサートホールで家族で聴く機会が持てたと、好評を得た。 対象児童：西鶴山小学校生と引率教員、保護者 演奏曲目：ワルツィングキャット、天国と地獄、ソヴァン・マチャ 出演者：京都フィルハーモニー室内合奏団、 奥祥子（ダンス）中村滋（映像）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団女性の集い 「メソジストの伝統と讃美」 ①　西部地区 ②　中部地区	①平成 25 年 7 月 5 日：明石上の丸教会 ②平成 25 年 11 月 14 日：桜井聖愛教会	日本フリーメソジスト教団女性のつどいにおいての講演。メソジストの讃美の伝統を、キリスト教における讃美の歴史から解説。ジェンダーやフェミニズム、マイノリティーへの眼差しなど、現代的課題が歌い込まれている讃美歌を中心に紹介。讃美歌の今日的意義について講演を行う。 対象：日本フリーメソジスト教団女性部
・地域の公的機関等との連携による教育活動 三郷町公開セミナー（三郷町村役場） 「地域と大学をつなぐボランティア・ワークの可能性」	平成 26 年 10 月 10 日	本セミナーでは、学校と地域との連携による教育の在り方について、「ボランティア」をキーワードに講演を行った。具体的な事例として、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する地域連携による芸術教育プログラムをとりあげ、ボランティアとは何か、受け入れる際の注意点や、確認すべきこと柄など、実際のケースに応じた内容から、地域との連携による教育的可能性の広がりについて解説した。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 展覧会シンポジウム・パネリスト 『會舘の時代　－中之島に華開いたモダニズムとその後』（東京大学 比較文学比較文化研究室、表象文化論研究室主催） 山本美紀「朝日会館から大阪フェスティバルホールへ　アウセイ・ストローク　－文化装置のデザイナーとしての音楽マネージャー」	平成 27 年 3 月 14 日	1926 年から 1962 年までかけて存在した「大阪朝日会館」とその機関誌『會舘藝術』の、関西のモダニズム運動をけん引した働きについてのシンポジウムと展覧会。その中で、文化施設・機関雑誌として、社会的に果たした教育的役割と啓蒙的役割、またその後の大衆文化との関連性について解説を行う。特に音楽マネージャーと日本人スタッフによって達成された地方公演は、遠征地での児童たちとの関わりを可能とし、洋楽受容をより身近なものとして受け止めることを可能にした点に注目した。
・トーク・イベント 「中之島 3 丁目 時代と建築の響き合い『よみがえる朝日会舘』」主催；朝日ファミリー・ニュース、後援；朝日新聞社、協賛；竹中工務店、関電工、高砂熱学工業、協力；朝日ビルディング	平成 27 年 8 月 28 日	登壇者として参加。関西モダニズム運動の牙城となり、建築としても特徴的な朝日会館そのものに焦点をあてたトーク・イベント。研究会の成果を広く社会に知らせる目的も同時に持っていた。基調講演では特に、朝日会館で行われた子供の教育に関するプログラムについて言及し、地域の教育・文化施設として朝日會舘が果たしていた役割、さらに運営方法について、芸術的内容と共に解説を行った。＜登壇者＞前島志保（東京大学准教授）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、山上揚平（東京芸術大学講師）ほか
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団 信徒伝道者養成講座 ②礼拝と讃美－奏楽者の心得Ⅰ「『讃美の共有』のために」	平成 28 年 7 月 23 日：桜井聖愛教会	日本フリーメソジスト教団信徒伝道者養成のための連続集中講義第 1 回（全 2 回）。 キリスト教における讃美の意味、および信仰共同体としてのメソジストとその讃美の伝統について、音楽史的視点と公共性との観点から解説する。また、今日的課題に応えようとする新しい讃美の動向について紹介した。
・地域の公的機関等との連携による教育活動 日本フリーメソジスト教団 信徒伝道者養成講座 ②礼拝と讃美－奏楽者の心得Ⅱ「『讃美の共有』のために」	平成 28 年 11 月 26 日	日本フリーメソジスト教団信徒伝道者養成のための連続集中講義第 2 回。 9 月 10 日に開催された賛美歌学会第 16 回でのパネルディスカッションで話し合われた内容をふまえ、現代の讃美歌に託された期待と、現代的課題について解説。キリスト教信仰における讃美の伝統と、近代以降の「共に歌うこと」の意味を比較し、現代における讃美と共同体について講義する。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
・地域の公的機関等との連携による教育活動 「斑鳩町三園合同クリスマス会」総合演出及びオペレッタ『クリスマスにはおくりもの』制作・上演 「斑鳩町三園合同クリスマス会」総合演出及びオペレッタ『サンタさんの 12ヶ月』制作・上演	平成 28 年 12 月 22 日 平成 29 年 12 月 21 日	斑鳩町教育課からの要請を受け、斑鳩町立の三園(「斑鳩東幼稚園」「斑鳩幼稚園」「斑鳩西幼稚園」)の幼稚園児と保護者に向けクリスマス会の総合演出を行う(於「いかるがホール(斑鳩町)」。中心演目となったオペレッタ『クリスマスにはおくりもの』は五味太郎氏の絵本を底本に音楽・舞台装置を制作し、参加型の演目とした。

職務上の実績に関する事項		
事項	事項	事項
1　資格、免許		
・中学校教諭 第一種免許	平成 3 年 3 月 31 日	音楽　平二中一第 1740 号 兵庫県教育委員会
・高等学校教諭 第一種免許	平成 3 年 3 月 31 日	音楽　平二高一第 1882 号 兵庫県教育委員会
・中学校教諭 専修免許	平成 10 年 3 月 31 日	音楽　平 9 中専第 2176 号 大阪府教育委員会
・高等学校教諭 専修免許	平成 10 年 3 月 31 日	音楽　平 9 高専第 2223 号 大阪府教育委員会
・修士（芸術）	平成 10 年 3 月 24 日	大阪教育大学　第 2258 号 論文題目：音楽企画－舞台裏の詩学－
・博士（文学）	平成 14 年 9 月 17 日	大阪大学　第 17270 号 論文題目：聖化する音楽祭－グロカリゼーションとしての祝祭研究－
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項		
・国際日本文化研究センター 共同研究員	平成 15 年 6 月～現在に至る	鈴木敏美氏の研究班「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」及び「出版と学芸ジャンルの編成と再編成 －近世から近代へ」等に参加。共同研究員として関連研究会に出席。
・歌詞対訳 ベートーヴェン：交響曲第 9 番　ニ短調　0p125 第 4 楽章「歓喜によせて」＊京都市交響楽団 第 557 回　定期演奏会　パンフレット	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団委嘱：自主第九公演用初の新対訳を作成。ハインリヒ・フォン・シラー作　「歓喜によせて」 平成 24 年～27 年コンサートでも再掲。
・歌詞対訳 京都市交響楽団ニューイヤーコンサート＊京都市交響楽団 第 550 回　定期演奏会　パンフレット	平成 24 年 12 月	京都市交響楽団委嘱：ヨハン・シュトラウス（息子）作　「こうもり」より≪公爵様、あなたのようなお方は≫（アデーレのアリア）新対訳作成
・奈良学園大学　国際交流委員として、2015 年東アジア文化交流研修　実施。 場所：大韓民国　東亜大学校　富民洞キャンパス（釜山）	平成 27 年 11 月 1 日-3 日	学生引率、及び研修会にて学生の発表指導を行う。また、東亜大学校において東アジア文化交流会の実施に立ち会う。
4　その他		
・論文の引用実績（被参照／引用実績） 森山貴仁・川本彩花・野島那津子「メディアによる文化的公共圏の再編成 ―戦後における音楽祭の日米比較を中心に―」京都大学グローバル COE『親密件と公共圏の再編成をめざすアジア拠点』次世代研究 26 GCOE ワーキングペーパー	平成 22 年 9 月	＜被参照／引用文献＞ 山本美紀 論文「戦後の国際日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」（「研究業績等に関する事項」【学術論文】8） 山本美紀 博士学位論文『聖化する音楽祭―グロカリゼーションとしての祝祭研究―』　（「研究業績等に関する事項」【学術論文】6）
・論文の引用実績（被参照／引用実績） 前川 公美夫『明治北海道映画史』	平成 24 年 3 月	＜被参照／引用文献＞ 山本美紀 論文「興行としての宣教」国際日本文化研究センター（「研究業績等に関する事項」【学術論文】9）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1. 小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる	単著	平成 22 年 12 月	ヨベル社	音楽科教育法講義の際に使用されることを想定し、作成。音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説を行う。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについても扱った。さらに、各学年の学習指導要領内容のポイントを、実際の授業における単元（題材）とつなげて解説を行い、指導案作成について解説している。小学校で培う音楽の力と共に、共感する心を育てることに通じる、音楽教育における言語活動の充実についても言及する。【B5 判　全 96 ページ＋別冊課題 48 ページ】。
2. 教育フォーラム 47 ＜こころ＞を育てる	共著	平成 23 年 2 月	金子書房	心を育てることの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じた論文集。 本人担当部分：**「共感する心を育てる音楽科教育ー音楽の力とこころの育ち」**【pp. 60-69：単著】では、これまで音楽が「物語」と「体験」とどのように結び付けられ、何が達成されてきたのか、歴史的に論じる。次に、執筆時点で筆者が研究課題として取り組んでいた「体感型読書」（平成 22 年度科学研究助成対象研究課題）における、音楽を「物語」と「体験」に結びつけるための、初等から小学校音楽科教育までの実践を紹介し、幼稚園から小学校にかけて音楽が連続的に「心を育てる」ことにつながるための指導法について論じたもの。 共著者：梶田叡一、加藤明、渡邉満、松田智子、鎌田首治朗、山本美紀、中村哲、大野光二、高橋真里、江渕弘明、蔵あすか、中家淳悟、増尾慶裕【A5 判　全 157 ページ】
3. 教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	国際教育の意義と、その指導について論じたものである。本人担当部分：**「音楽教育を通じて異文化理解教育をーウィグモア・ホールの教育プログラムに学ぶ」**【pp. 103-116：単著】では、ロンドンにあって地域密着型のホールとして、幼児から生涯教育まで、スパイラルに展開するウィグモア・ホールの芸術教育実践を紹介。地域の文化施設の教育実践の実態とともに、そこと連携していくためのカリキュラム上の工夫を初めとした方法論について論じた。特に、移民の多いロンドンにあって、音楽が様々な文化をつなぐものとして、学校でのグローバル教育・インクルースヴ教育などの一翼を担っていることに注目し、音楽を通しての異文化理解教育について、幼児期における表現教育の持つ可能性について考察した。共著者：梶田叡一、加藤明、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川﨑由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子【A5 判　全 174 ページ】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記	共著	平成 23 年 10 月	ヨベル社	幼稚園教育及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、表現指導について解説したもの。掲載楽曲は幼児教育や保育の現場でよく歌われたり演奏されたりする音楽作品を中心に取り上げた。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この 1 冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での五領域「表現」の既習内容をふまえた教育ができるように配慮されている。また音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行い、1 年間の学校生活や行事に沿った構成となっている。各該当月に使用されることを想定し作成した。さらに、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲を、発達との関連性を意識して内容を解説。指導案作成へとつなげられるようにしている。全体レイアウト、及び音楽に関する項目【pp. 7-9, 12-15, 18-21, 24-27, 30-33, 36-39, 42-45, 48-51, 54-57, 60-63, 66-69, 72-75, 78-81, 84-87, 90-93, 96、別冊課題：全 21 ページ分：単著】について執筆。 共著者：山本美紀　岡田美紀【B5 判　全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】
5. 教育フォーラム 49 特集　確かな学力を育てる確かな授業	共著	平成 24 年 2 月	金子書房	確かな学力を育むということの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。本人担当部分：**「ウィーンにおける音楽科教育にみる光と影　―「夢の街」が夢から醒めるとき―」**【pp. 128-139：単著】ウィーンにおける、地域密着型音楽ホールでの教育プログラムの調査に基づき、劇場や演奏団体が行っている教育プログラムの実例を提示すると共に、分析を行う。本論稿の特徴は、教育プログラムを受け入れ、授業に活用している学校を中心に調査を行ったことである。学校の教師が、どのようにホールや文化施設での教育プログラムを生かし授業に利用しているのか、実態を示すとともに、指導法について解説を行った。また、日本で実際に運用する場合、現時点で障害となっている事柄を整理し、外部の演奏団体や文化施設などといった文化資源を音楽科カリキュラム上で運用するための方法論について論じた。共著者：梶田叡一、加藤明、田中博史、鎌田首治朗、長谷浩也、阿部秀高、金澤孝夫、横須賀薫、高岡信也、古川治、山本美紀、渡邉規矩郎【A5 判　全 150 ページ】
6. 【改訂新版】小学校で培う音楽の力―共感する心を育てる	単著	平成 24 年 4 月	ヨベル社	前刊で実際に音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に編曲された楽譜、および図表解説を追加。さらに授業に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについての解説を強化した。また、各学年の学習指導要領内容のポイントを、実際の音楽教育現場の単元とつなげて解説を行い、指導案作成についてより具体的な解説を行う。指導案作成用の課題プリントを添付。実際に指導案作成→模擬授業実施→ふりかえりが行える内容となっている。【B5 判　全 123 頁＋別冊課題 48】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. ヨベル新書4 メソディストと音楽 － 現代讃美歌の源流と私たちの讃美 －	単著	平成24年6月	ヨベル社	メソディストとは、イギリス産業革命時代、社会の激変によって崩壊するコミュニティに、新しい讃美歌をもって新しいコミュニティ形成に成功した英国国教会の一派である。リーダーとなったジョン・ウェスレーの「讃美の手引き」、及び使用した讃美歌集に注目し、専門的音楽教育を受けていない大衆に対して、どのような音楽指導がとられたのか分析した。その結果、楽譜は旋律想起のきっかけとして機能する一方で、規定された歌唱方法によって連帯感が生まれ、共に歌うことによって歌詞の意味が集団内でより強化されて定着する過程を明らかにした。 ＊明治期に日本において今日に残る多くのミッション系学校の創設に関わったオルチンによる、音楽活動及び音楽教育活動をまとめた「興行としての宣教― G. オルチンによる幻燈伝道をめぐって」を収録。【新書版全 124 頁】
8. 【改訂新版】幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記＜伴奏譜・楽器解説付き＞	共著	平成25年3月	ヨベル社	幼稚園における自発的音楽表現や遊びと、小学校音楽科教育指導とに共通して必要とされる基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、発達に応じた指導法について解説したもの。特に、新版では保育園・幼稚園や小学校での行事に用いられることの多い楽器類について、正しい取扱い説明と指導の際の留意点などを明記した項目を追加。 掲載楽曲は、保育・幼児教育の現場でよく活用される音楽作品を中心に取り上げた。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この 1 冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での五領域「表現」の既習内容をふまえて指導ができるように配慮されている。また音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行い、発達段階に応じて連続して 1 年間の学校生活や行事を発展的に捉え、力を伸ばし学びが達成できるような構成となっている。さらに、幼稚園要領の「表現」について、手遊びや遊びなど具体的に曲を挙げ、発達との関連性を意識して内容を解説。指導案作成へとつなげられるようにしている。全体レイアウト、及び音楽に関する項目を執筆。 【　pp.7-9,12-15,18-21,24-27,30-33,36-39,42-45,48-51,54-57,60-63,66-69,72-75,78-81,84-87,90-93,96、別冊課題 : 全 32 ページ分）: 単著】。 共著者：山本美紀　岡田美紀、筒井はる香 【B5 判　全 175 ページ＋別冊課題 32 ページ】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 絵本がひらく＜体感型読書＞の世界	共著	平成25年3月	ERP 文庫	本書は、学校教育の中や図書館などでこれまで行われてきた従来の「読み聞かせ」による読解力や表現力の育成を一歩進め、幼児や、児童生徒の互いの共感力をスパイラルに育成していくために、「体感型読書」の導入を進める手引書である。本人担当部分：幼稚園での表現遊びに使える音楽と絵本の組み合わせ等、音楽に関する記述。【pp. 20-25、27-48：担当執筆】近代日本の国語科教育（読本）と連携してきた音楽科教育（唱歌）との関連性から、音楽を用いつつ五感を使って読み聞かせをあじわう方法とともに、その実践報告を含んでいる。小学校の国語科教材と音楽科教材「音楽劇」の連携を含め、現場で導入しようとする教師にとっても、参考になるよう構成されているものである。 編著者：伊崎一夫、山本美紀、ライナーノーツ：山口聖代【A5 判　全 62 ページ】
10.『教職表現力ノート』（再掲）西辻正副／山本美紀編著 奈良学園大学（平成 27 年 4 月）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	共著	平成27年4月	奈良学園大学	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「教職表現力演習Ⅰ」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキストである。新聞のコラムをはじめとした模範的文章の書きとり、語彙力をきたえるための項目、より深く記事を読み込むための要約演習ページを含み、さらに担当講師人による講義用のレジュメのページからなる。本教材により、大学生にふさわしい基礎的な日本語運用能力を鍛えると共に、それらを教員の言葉としてつなげる工夫が行われている。 編者として関わると共に、音楽に関するミニレクチャーの項目について執筆。人の話を聴いて、必要な情報を獲得していけるよう、実践的学びができるように工夫した。 編著者：西辻正副、山本美紀、共著者：岡村季光、高木悠哉、岡野聡子、松井典夫【A4 判　全 142 頁】（山本美紀：2-63, 108-109）
11.『音楽教育から地域の文化力へーイメージをつむぐ』（再掲）山本美紀編著　株式会社 ERP	共著	平成27年7月	株式会社 ERP	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「コミュニティと音楽文化」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 1 単位）のためのテキスト、及び「音楽科指導法」「表現（音楽）」の参考資料として作成。幼稚園や小学校での音楽を通した学びが地域の文化とつながり、やげて地域文化力の基盤となっていくための発達に応じた指導法について言及。 学校と地域コミュニティとの交流としてのゆるやかな連携だけでなく、幼児期の遊びや音楽科の授業をより豊かにするための外部連携を取り入れた指導法ついて、保・幼・小各校種別の実践からアプローチしたもの。特に、地域の教育力を学校内で生かしていくことは、子どもたちにとって学びの機会をより豊かにすることにもなる。編者として関わると共に、各校種別の発達段階に応じた連携事例に基づく指導法について執筆。実践的応用力が得られるように工夫した。編著者：山本美紀、著者：伊崎一夫、大久保充代、寺尾正、中村滋延、根岸一美、御園綾菜【A5 判　全 105 ページ】（山本美紀：5-8, 20-33, 51-61, 63-82；表作成, 85-88, 101-103 頁）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.『音楽祭の戦後史』	単著	平成27年8月	白水社	本書は、戦後 70 年を「音楽祭」をキーワードに振り返り、音楽祭における教育的意義とともに、地域における音楽祭を中心とした共同体意識の創生のメカニズムを読み解くものである。さらにそこから、現代社会に出現したバーチャル世界の共同体意識の創生の比較検討を通し、共同体意識と文化創生、教育との関係を現代的課題と共にとらえた。昔からある伝統行事である「祭り」は、自動的に各人にとっての「祭り」になるわけでも、自分たちの「故郷」になるわけでもない。 本書は、グローバル化をはじめ、変化の激しい現代において、場（地域）と不可分なはずの「祭り」の現代的条件を探り、地域とは、共同体とは何か、改めて問うものとなっている。 書評として『日本教育新聞』2015 年 10 月 12 日付、『日経新聞』「短評」2015 年 10 月 18 日付、『北海道新聞』「本の森」2015 年 11 月 8 日付等に取り上げられた。 【A5 版全 250 頁】
13.『人間教育としての音楽科教育 ―知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	単著	平成27年9月	ヨベル社	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科指導について、人間教育の視点に立った指導法の解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできる「人間教育」としての音楽科指導を示す。 【A4 版全 123 頁＋別冊課題 48 頁】
14.『＜戦後＞の音楽文化』	単著	平成28年1月	青弓社 （全 80 頁）	「戦後 70 年」となる年に、戦後の社会がどのような変遷を遂げてきたのか、またその社会の中で音楽文化がどのように息づいているのかを明らかにするために、様々なキーワードで網羅した事典において、項目「音楽祭・フェスティバル」、コラム「音楽ホール」をそれぞれ担当。社会教育的観点から執筆。 編著者：戸ノ下達也 （山本美紀、pp. 228-230，pp. 259-260）
15.『会館芸術 第Ⅱ期戦中編　第 17 巻 1940 年（昭和 15 年）4~6 月』解説	単著	平成29年9月	ゆまに書房 pp. 219-223	大阪フェスティバルホールの前身である大阪朝日会館発刊の機関誌『会館芸術』復刻版の解説を執筆。朝日會舘は、関西のみならず、日本における近代芸術活動の先駆的試みを数多く行い、様々な文化活動の中心的拠点となった劇場であり、後の大阪国際フェスティバルのソフト部分を準備したといえる。 担当年月巻は、日常生活に色濃く戦争の陰が落ちる時期でもあり、海外からの新しい情報の制約が増す中に、日常と芸術活動が「戦争」を介して微妙に絡み合う様相が読み取れる時期である。現代とも共鳴するものであると同時に、芸術文化活動の歴史的展開が、社会そのものを象徴することを如実に示す。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 幼児･初等教育のための音楽表現と指導法－歳時記と学ぶ楽典･子どものうた・鑑賞	共著	平成30年3月	ヨベル （215 頁＋別冊課題 32頁	幼稚園教育及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的な楽典やソルフェージュ知識、弾き歌い、編曲法、表現指導について解説し、その指導法を示したもの。幼小の学びの連続性への配慮から、「童謡」「鑑賞」の項目を設け、「童謡」では日本語としての美しさや価値観を、「鑑賞」では多文化理解につながる指導を、園・学校での歳時記を背景に示す。基礎的な楽典の知識もカバーしており、音楽の要素をふまえた幼児の表現活動への指導法、初等教育段階での指導法を発展的に扱う。音楽に関する学校行事運営において、必須項目についての解説を行うと共に、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲をとりあげ、曲の持つ歴史的背景と共に発達との関連性を意識して内容を解説。全体レイアウト、及び音楽に関する項目執筆。 （pp:7～9,12～15,18～21,24～27,30～33,36～39,42～45,48～51,54～57,60～63,66～69,72～75,78～81,84～87,90～93,96、別冊課題： 全21頁分）編著者：山本美紀　著者：岡田美紀、筒井はる香、山口聖代、中村徹
(学術論文) 1.「群れを導く歌―初期メソディストにおける讃美歌の意味―」(査読有り)	単著	平成22年3月	大阪大学大学院文学研究科 文化表現論　音楽学　『阪大音楽学報』第8号　pp.165-180	英国国教会司祭ジョン・ウェスレー（John Wesley 1703-1791）は、彼を指導者とした信仰復興運動メソディズムMethodismにおいて「歌うメソディスト」と揶揄されるほど、あらゆる機会に歌うことを勧めた。彼は、讃美歌の歌詞とその歌唱方法の指導によって信徒を教育し、一方信徒は、歌うことで信仰を表明するだけでなく、共同体の一致を、実感・実現していたのである。本研究では、讃美歌に反映された道徳心や規範意識を分析し、新たな共同体を形成していく過程において「歌うこと」が果たした役割を明らかにした。
2.「会衆歌と公共性―ウェスレーの宗教体験と初期メソディストの讃美歌を巡って―」	単著	平成22年3月	環太平洋大学『紀要』第3号 pp.79-90	メソディストは、産業革命によって社会構造が激変する中、地方からの労働者を中心に新たな絆で結ばれ、社会現象ともなった信仰復興運動であるメソディズムMethodismを推進したグループである。指導者ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、その讃美には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映され、新しい時代の「公共圏」の創造に大きな役割を果たした。本論ではウェスレーの歌唱指導の理念を、教育的配慮と「公共性」の視点から考察した。初期メソディストの讃美歌の歌詞に注目し、「共に歌うこと」による歌詞内容の理解の強化を明らかにした。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 音楽科教育における他分野教育との連携への考察:音楽と物語― 展覧企画『木を植える人』から体感型読書『スイミー』へ―	単著	平成23年3月	環太平洋大学『紀要』第4号 pp.57-64	本論稿は、「体感型読書」プログラムの構築 に関わる、実践報告及び「体感型読書」構想に至る、これまでの筆者の研究実践「展覧企画」プロジェクトとの関連性を明確にしようとするものである。「体感型読書」とは、「音声言語を主とする従来の語り手に対して、音楽・映像等の情報を付加し多様な表現活動を保障すること」と、「受動的になりがちな聞き手に対して、物語の再創造の保障と聞き手同士の関わりを活性化すること」の両面が成立する双方向の読書活動である。本論考では、実際に小学校で行った音楽科教育内での教育実践をふまえ、物語と音楽、さらにそこから広がる子どもの発達段階に応じた言語活動について論じた。能動的な物語の受け止めを可能にする「体感型読書」プログラムの構築により、音楽科教育と他分野教育との連携から生まれる言語活動の充実の教育効果について述べ、指導方法における課題と今後の展望について示した。
4. The Study for The digital Teaching Materials which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan. ― The Outlook and The Issues ― （Full Paper）（査読あり）「わらべ歌」を音楽教育に用いたデジタル教材に関する研究－展望と課題－	共著	平成23年3月	SITE 2012--Society for Information Tecnology & Teacher Education International Coference 2012In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education p.153	本稿は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての論文である。「わらべうた」とは伝統的な子供の遊び歌であり、非常に少ない音による単純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に導入することにより、教師はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必ずしも要することなく、音楽の授業を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとは言い難い。本人担当部分：「わらべ歌」導入についての実態調査と分析、論文執筆。大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本における全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、幼児から初等教育への連続して子供の力を伸ばすデジタル教材の活用についても提案事例を示し論述した。共著者：山本美紀、寺尾正、竹下裕来【教員教育・情報技術教育国際学会　プロシーディング】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. ウィーンにおける劇場と音楽団体による音楽教育の試み ―課題と展望―	単著	平成24年3月	環太平洋大学『紀要』第5号 pp. 57-64	オーストリアは、EUの中の１つの国となり、通貨も「シリング」を手放して「ユーロ」となったことで、「ウィーンはウィーン」でなくなる危機が訪れている。本論文では、たとえ伝統的に芸術文化が豊かな地であっても、絶えず教育活動や啓もう活動を行っていかなくては、文化水準が維持できないことを、平成 23 年度に行ったフィールドワークの分析から明らかにしたものである。現在、オーストリアでは国立劇場をはじめ、劇場を学校教育に活用した音楽指導の方法が模索されている。特に昔から音楽で有名なオーストリアでは「伝統文化」としての教育課題と、一般的な音楽教育としての課題とが存在している。論文では、両国の劇場との連携による音楽教育の比較を、「伝統音楽」の扱いに注目して分析を行った。伝統の継承と、新しい文化創造の基盤づくりとしての音楽科教育と指導法について論じた。教育が決定的に作用する将来の文化水準から、その持つ意味の重さと共に、持続可能な地域文化育成のための具体的な施策について提案。
6. 学校と社会文化施設との連携を考える―地域連携が『生きる力』へとつながるために ―	単著	平成24年4月3日・10日合併号	雑誌『教育プロ』第42巻第 8 号 通巻 1693 号 pp. 6-10（5000字）	紙面「オピニヨン」に掲載。ここ 10 年ほど学校教育現場では、様々な連携が行われてきた。それぞれの立場で実際に「連携」に携わってきた人々には、「そろそろ振り返り時がきた」との実感がある。本稿では特に、「ゲストティーチャ―」や「出前授業」「アウトリーチ」に着目し、「学校と地域との連携」について最近の３つの事例を通して、芸術科教育の指導法を、今後の「学校と地域連携」の観点から論じた。変化の激しい時代を生き抜いていかなくてはならない子どもたちだからこそ、「生きる」ということに不可欠な「潤い」や「慰め」となる本物の「芸術文化」に触れる機会を、芸術科教育は担保できるのか、また生涯に渡って「能動的な鑑賞体験」ができるように、学校内での教育と地域での教育とをいかにつなげていくか、具体的な事例と共に示めした。
7. 草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観― 『ファウンダリー・コレクション Foundery ollection』より ―	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学『紀要』第6号、pp. 39-45	メソディストの最初期の讃美歌集“The Foundery Tune Book” 実際に使われている音楽の分析を通し、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。再版されることがなかったことから、編集者ジョン・ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされてきたが、楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとした意図が見える。 “The Foundery Tune Book”の分析によって、会衆歌の芸術性と共に、対象を明確化することによる楽譜の役割と公共教育の効果について明らかにした。18 世紀のウェスレーらによる楽譜の検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育との関わりについて考察した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8. 初期メソディストの讃美歌集にみる、会衆歌としての意義とジョン･ウェスレーの音楽教育 ―『ファンダリー・コレクション Foundery Collection』を中心に―（査読有り）	単著	平成25年3月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第13号、pp. 27-45	メソディストは、青山学院大学、関西学院大学の創設理念の基礎をなすキリスト教の一派である。その活動は「ボランティア活動」の始まりともいわれ、信仰に基づく社会福祉的活動を特徴とする。その中には、当時の社会問題となっていた貧困層の子供たちへの公教育もあり、メソディストの創立者ジョン・ウェスレーは彼らを教育するために炭鉱町に学校を作り、現在もその学校はイギリスの名門校として存在する。本稿では特に初期の 3 冊のメソディストの讃美歌集の分析を通し、一般庶民が楽譜を読める力（音楽リテラシー）と、集団での歌唱教育を、学校教育の中でどのように生かしてきたのか、当時の学校教育の資料から分析を行った。
9. 地域の音楽資源の活用によるこどもの表現活動充実への一考察 ―初等教育における音楽体験の場の創造をめぐって―	単著	平成25年3月	環太平洋大学『紀要』第7号、pp. 43-51	こどもの感性と表現に関する領域として設定されている「表現」において、音楽はそれだけで存在するのではない。「表現」は、音楽や図画工作、体で表現すること、演じることなど、対象とする事柄が多様であり、様々な要素の介在によって子供たちの豊かに感じる心を育てる目的がある。本稿では、「表現すること」「感じて受け止めること」の楽しさを幼児期から十分に理解するための方法を、イギリスでの幼児対象から小学校低学年を対象としたワークショップでの実践例の分析を踏まえ、日本の現状との比較考察から論じたものである。特に園での表現領域を充実させるために、外部の専門家によるワークショップやアウトリーチ活動を取り入れ、活用していくか、また、それが後の学校教育にどのように連結されていくのか、具体的に論じた。
10. ≪やすかれ､わがこころよ｣に≪フィンランディア≫が使用される理由－賛美歌における楽曲の意味をめぐって－ [5382 文字]	単著	平成26年2月	日本基督教団出版局『礼拝と音楽』160号通巻162号、pp. 26-29	シベリウス作曲≪交響詩フィンランディア Op26≫からの旋律を伴う≪やすかれ≫は、多くの日本人信徒の愛唱讃美歌の一つである。作曲者のシベリウスは音楽史上では「国民楽派」に分類される作曲家であり、讃美歌に転用された部分には、別の歌詞がついて≪フィンランド頌歌≫と言われ「第2の国家」としてフィンランド国民の愛国の歌になっている。特に、シベリウス作品の「交響詩」には「音詩」という意味があり、旋律に文学的・詩的内容が直接的に表現されていることを示すものである。つまり讃美歌に使用された≪フィンランディア≫は、音楽の含有する意味がかなり限定された旋律なのである。これほどに特別な意味を持つ個性的な旋律が付けられた≪やすかれ≫の原詩の全容は、「主が共にいます平安」というよりもむしろ、苦難に立ち向かう「戦いの歌」である。日本語歌詞を追うだけでは、なかなか思いをはせることが少ないと思われる≪やすかれ≫の「戦いの歌」という側面に、本稿では、翻訳過程で変化していく歌詞内容と、音楽が内包する意味との関係性から論じたもの。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.「人間教育」と音楽の力― 讃美歌に託された神学と教理 ―（査読有り）	単著	平成26年3月	人間教育学学会『人間教育学研究』、創刊号、pp. 39-45	明治初期の音楽教育の導入において、讃美歌を源泉とする「唱歌」はそれぞれが近代国家にふさわしい「新しい日本人」をどのように明治政府が考えていたか、明確に示している。しかし実際の導入に当たっては、「音楽」は「体育」と同様、それまでの日本の教育には含まれない教科でもあり、困難を極めた。明治以降現代にいたるまで、教育現場に携わる人間にとってギリシャ・ローマ時代からの西洋社会における音楽やそれを教育することの持つ意味が十分理解される機会はほとんどなかったと言っていいだろう。しかし、西欧社会においては、時代が変わり、施政者が変わっても、音楽は共同体を疑似体験させ創出させる1つの重要な媒介であり、それにより共同体となった集団を望む方向に向かわせることができることから、重要な教育科目であり続けた。その延長線上に、ジョン・ウェスレーのメソディスト運動の中の讃美歌教育を捉え、教育における普遍的目的を論述したものである。
12. 1890 年代の岡山孤児院における音楽事象と人間教育 －先駆的器楽教育実践の近代音楽史における位置づけを目指して－ （査読有り）	単著	平成27年3月	人間教育学学会『人間教育学研究』第 2 号、pp. 163-172	石井十次は、近代日本において「児童福祉の父」とされる人物である。中でも、岡山孤児院音楽幻燈隊の活動は、巡回公演を通じて日本人に西洋音楽や「音楽隊」を紹介した、画期的な活動であった。本稿では、岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる音楽事象がどのようなものであったのか具体的な内容を検討し、さらに今日の近代音楽史研究の成果、及び岡山孤児院音楽隊をめぐっての先行研究の再検討を行った。その結果、先行研究の定説に反し、音楽隊活動が救世軍の影響を受けたものではないことを明らかにし、当時の日本に於ける一般的な音楽状況を反映した可能性が強いことを指摘した。
13. 教員養成系大学における人材育成の視点から考える音楽科教育と地域連携 －学生の「教員に求められる資質」形成につなげるために－	単著	平成27年3月	奈良学園大学『紀要』第2集、pp. 167-179	平成23年度から25年度にかけて、筆者は「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」を行ってきた。その研究成果を踏まえた上で、現在本学学生によって行われている活動に至る、筆者のこれまでの研究と共に、実際の文化施設におけるボランティアがどのようなものであり、さらにそこでどのような力が必要とされているのか、教員養成系大学の教育課題として提示する。さらには、このような主体的な地域連携を通して、学生の資質能力の向上に資する教育の方向性を示したもの。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14. 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって （査読有り）	単著	平成 27 年 3 月	京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会（アジアと宗教的多元性研究会）『アジア・キリスト教・多元性』第 13 号、pp. 101-125	岡山孤児院やその音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況や、音楽教育の指導と使用した音楽教材について明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を探った。その結果、①キリスト教音楽における 1 ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかもまずは、子どもの情操教育と健康的配慮を目的に始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。
15. 岡山孤児院音楽幻燈隊にみる音楽教育的意義－日本にもたらされた音楽教育の多面性―	単著	平成 27 年 9 月	財団法人 両備槿園記念財団 2015 年度『文化、芸術、教育活動に関する研究論叢』pp. 21-33	本研究は、岡山孤児院で行われた「音楽幻燈隊」に関わる一連の事業及び活動を、教育史的観点から研究したものである。音楽幻燈隊の活動は孤児院の運営資金集めに利用されてきたことから、これまで音楽的内容や、音楽教育に関わる内容に踏み込んだ研究はなかった。研究の結果、孤児院音楽幻燈隊結成の黎明期、石井はルソー『エミール』の教育思想に傾倒し、その実践に努める一方で、音楽隊については軍楽隊をモデルとしていたことが確認された。ただ、音楽隊責任者出会った孤児院職員からは、音楽が子供たちの情操面や規範意識育成を促すことへの期待の言葉もあることから、音楽教育が孤児教育において重要な役割を担っていたことを明らかにした。
16. 山室軍平『平民の福音』および、救世軍所蔵幻燈用ガラススライドにみる近代日本における人間教育と宗教－大衆とキリスト教との出会いを巡る一考察－ （査読有り）	単著	平成 27 年 12 月	日本人間教育学会『人間教育学研究』第 1 号 pp. 65-72	山室軍平（1872;M5-1940;S15）は、近代日本においてキリスト教を同じ平民の立場から当時の一般大衆に伝えようと『平民之福音』を著した、日本救世軍草創期のメンバーである。本稿は大衆伝道に用いられたと考えられる当時の幻燈ガラススライドを、『平民之福音』を踏まえて考察したものである。その結果、山室が、当時の日常生活の不協和の要因を「罪とが」として設定し、その解消にキリスト教を背景とした道徳教育の実践をスタートさせたことが明らかになった。ここに、一般大衆が持っていた道徳観とキリスト教倫理観との接点と共に、大衆にむけての人間教育の視点が確認された。また、幻燈や流行歌が大衆教育の手段として用いられた過程を明らかにし、現代社会における大衆化する教育が持つ課題との共通点を示した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. 初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場ーキリスト教の大衆化と近代日本キリスト教音楽文化をめぐってー （査読あり）	単著	平成 28 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 16 号、pp. 81-108	救世軍の初期軍歌における日本の Tune について、『平民之福音』での山室の方法を踏まえて考察。最初期の 2 つの軍歌集『救世軍軍歌 M29』と『救世軍軍歌 M42』の掲載讃美歌を分析。表を作成し、それぞれの歌の転載元を整理。日本オリジナル Tune を特定した。その結果、救世軍で使用された軍歌集は、岡山孤児院音楽幻燈隊と深い関係性があり、日本名の付いた Tune と、岡山孤児院音楽幻燈隊のレパートリーとが、軍歌を中心に重なっていることを明らかにした。ここから、初期救世軍軍歌集において日本製 Tune として採用された Tune について、1）一般大衆に身近な、娯楽性の強い通俗曲であるということ。2）すでに、音楽隊（楽隊）のレパートリーとして、大衆に受け入れられていた作品であること、を示し、救世軍軍歌が、当時の大衆音楽を取り入れた娯楽性の強い「余興の音楽」を中心としたレパートリーであったことを明らかにした。
18. 初等教育における鍵盤ハーモニカの役割	共著	平成 28 年 9 月	『奈良学園大学紀要』第 5 集、pp. 1-10	鍵盤ハーモニカの学修が初等教育の「器楽の活動」および「表現教材」においてどのような役割を果たしているのか、現行の各社音楽科教科書の分析から明らかにしたもの。 音楽科における鍵盤楽器の位置づけを明らかにした上で、鍵盤楽器の導入としての鍵盤ハーモニカの課題を提示した。 共著者：山本美紀、筒井はる香
19. 大衆娯楽と近代社会における人間教育への一考察－救世軍幻燈上映の日英比較をめぐって－	単著	平成 29 年 3 月	『人間教育学研究』pp. 125-134 日本人間教育学会	本稿は、救世軍が社会教育的に用いた「幻燈」について、世界救世軍歴史資料館 International Heritage Center/ Salvation Army が所蔵する幻燈スライドとその上映を中心に、2015 年に行ったロンドンでの現地調査に基づき、大衆娯楽を用いた社会教育の視点から検討を行った。 これまでの研究で、岡山孤児院幻燈対と救世軍音楽幻燈隊、また『救世軍軍歌』の深い関係性を明らかにしてきたが それにより、当時の社会的ニーズによる規範意識の育成を教育的視点から考察。大衆娯楽を用いた社会包摂の手法について、日英の比較を歴史的変遷の視点から論じたものである。
20. 研究ノート 日英救世軍の初期幻燈上映における「場の記憶」の影響力　－娯楽と社会教化の狭間で―	単著	平成 29 年 3 月	『アジア・キリスト教・多元性』第 15 号 pp. 181－193	山室軍平記念救世軍資料館での資料には、日本宣教の開始以来の英国救世軍（万国救世軍本部）との緊密な関係性がうかがえるものが多い。救世軍国際記念館（歴史資料館 International Heritage Center／The Salvation Army）との連携が完全ではなく、日本救世軍に関する資料については不明な点が多い。そこで、救世軍創設 150 周年の記念の年であった 2015 年の夏、救世軍国際記念館の日本関係資料について、幻燈資料を中心に調査を行った。 本論では、収集した資料の整理と共に、救世軍による初期上映の場所が、元々どういう場所で会ったのかに注目し、上映場所の持つ傾向と活動との影響関係について報告した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(その他) 【研究報告書】 1.「地域の教育･文化施設における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」	共著	平成25年3月	平成 22-23 年度 科学研究費補助金 基盤研究C（課題番号 22531043 5002)	H22年度から24年度に、地域の文化施設や小学校などで実施した「体感型読書」プログラムの実践報告と、プログラム開発に関わる研究報告である。本人担当部分：音楽部分についての解説および、音楽を物語に結び付ける際の教育的効果について考察を執筆。【pp. 18-26、27-50:担当執筆】体感型読書とは、絵本の読み聞かせに音楽やダンスなどを組み合わせ、子どもたちに絵本や芸術を深く体験させる新しい芸術鑑賞方法である。当システムの研究と、芸術鑑賞教育プログラムの構築により、子どもの表現力と感じる力を伸ばし、他者理解力を高め、共感力の育成を目指した。授業や、地域の子どもを対象とした教育実践例を紹介。子どもの音楽表現に「物語性」が与える影響を明らかにした。 共著：伊崎一夫、山本美紀、山口聖代【A5判　全60ページ】
【講演等報告】 1. 2016日本賛美歌学会第16回全国大会パネルディスカッション「賛美歌の共有について思うこと」報告	単著	平成28年9月10日	立教大学　池袋キャンパス 主催：日本賛美歌学会	平成28年9月10日立教大学池袋キャンパスで持たれた賛美歌学会全国大会パネルディスカッションについての報告。 パネラーの所属教派と各派の伝統についての概説、ディスカッションの問題設定と「賛美歌の共有」今日的意味と課題を解説し、パネルで話し合われた内容を報告した。「賛美歌」は、キリスト教各派の信仰における『共同体』意識、体験と切り離せないものであり、その共有は、各派の伝統を尊重する姿勢から意味あるものとなることを、歴史的観点を含め論述した。
【書評】 1.『教会音楽ガイド』【4000字】	単著	平成24年9月	日本賛美歌学会紀要第5号 pp. 46-50	本書は、2010年7月に日本基督教団出版局から刊行された(編者は越川弘英、塚本潤一、水野隆一)。1975年『教会音楽ガイド』以来の教会音楽についての『讃美歌21』に対応する参考書である。35年間の礼拝や讃美の変遷をふまえ、教会における音楽活動を様々な立場で担う信徒や教師にむけ書かれている。書評では、内容をふまえつつ今日の教会がもつ課題を讃美の側面から明らかにすると同時に、讃美を共有することの現代における意義を論じる。また、教会が地域の音楽教育の場として長い歴史の中で担ってきた働きを説き、さらに学校教育における音楽教育の停滞が、教会での音楽活動の低下に直接反映する関係性を示し、教会が地域の音楽教育の場として再び機能する必要性を説く。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 更新伝道会出版委員会編 『チャールズ・ウェスレー讃美歌 30 選』 【7000 字】	単著	平成 26 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 14 号、pp139-148	本書は、2013 年に更新伝道会出版委員会から刊行されたチャールズ・ウェスレーによる讃美歌集である。UMH（合同メソジスト教会讃美歌集）で採用されているチャールズ作詞の 50 曲のうち、「最初はメロディーの美しい、これまで歌われていなかったもの、心に響く詩のものを基準に、そこから少しずつ「教団や他の教派の讃美歌に入れられていないもの（一部を除く）を拾い上げ」加えられていったという 30 曲を選んで編まれたという。本書評では、現代におけるチャールズ・ウェスレーの讃美歌の意義を明らかにするとともに、特に新しい旋律が付けられた作品について、作曲者の紹介や旋律的特徴、また伝統的に重点を置いてきたメソディストの音楽教育の解説を行った。
3. 梶田叡一著『不干斎ハビアンの思想－キリシタンの教えと日本的心性の相克』創元社	単著	平成 26 年 6 月 16 日	日本教育新聞 平成 26 年 6 月 16 日付け 15 面	副題にある「心性」とは、文字通り「心の性（さが・特質）」であると同時に、学問的には、特定の時代の集団的なものの考え方や感じ方を意味し、現代の歴史学や社会学、さらに第二バチカン公会議や著者が意識する「宗教多元主義」において重要な用語である。本書はハビアンの代表的著書の幾つかを、おのおのが書かれた目的に沿って読み解いたものである。 書評では著者による精神的・信仰的位相の分類『習俗』『信』『行』『覚』について注目し、精神性の教育の重要性と今日的意義について述べた。さらに、精神教育における師弟関係の影響について言及し、不干斎ハビアンの教育的環境と共に、彼自身が指導した弟子との関わりに着目して評論した。
【評論・解説】 1. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美　③メソジスト音楽の源流(2)」	単著	平成 20 年 4 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 4 月号 P.2 連載	メソジストの音楽のもう一つの源流、英国国教会の聖歌について解説。国教会の地域に根付いた信徒教育の方法論を分析、聖歌を歌うことの伝統的意義と教育との関係性を明らかにした。
2. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美　④メソジストと讃美の意味」	単著	平成 20 年 5 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 5 月号 P.2 連載	メソジストの伝統における、讃美歌の意味を解説した。特に、メソジストが先導した、社会の構成員としての規範意識や道徳観を讃美歌の歌詞から明らかにし、讃美歌の持つ教育的力と共に、社会が変化していくプロセスについて検証した。
3. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美　⑤会衆と讃美」	単著	平成 20 年 6 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 6 月号 P.2 連載	キリスト教の伝統とメソジストの会衆讃美について比較分析を行う。さらに、ジョン・ウェスレーが信徒たちに行った厳格な歌唱指導について、その課題と目的、指導方法について論じた。
4. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美　⑥讃美とリバイバル」	単著	平成 20 年 8 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 7･8 月合併号 P.2 連載	キリスト教の歴史における、讃美とリバイバル運動との関連性について解説。本稿では、リバイバルを教育目標の再設定と捉え、現代における教育課題の再考と課題達成のための方法論を考察した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑦現代の讃美とメソジストⅠ」	単著	平成20年9月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙9月号 P.2 連載	キリスト教の現代の讃美歌研究の動きと、第2バティカン公会議の影響について解説する。信徒教育としての「讃美」の捉え方の変換点と共に、その影響を受けた、宗教界・社会の大きな流れをとりあげる。
6. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑧現代の讃美とメソジストⅡ」	単著	平成 20 年 10 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 10 月号 P.2 連載	アメリカの合同メソジスト派の新しい讃美歌への取り組みの一つとして「グローバル・ソング Global Song」とその概念と実践について紹介。『Global Song』『Global Hymnody』とは、現在世界各地で展開されている、讃美歌を「自分たちのものとして」とらえようとする、新しい創作や、それに付随した活動の総称であること、また一般的な音楽教育と関連する課題について解説。
7. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑨讃美による希望」	単著	平成 20 年 11 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 11 月号 P.2 連載	「グローバル・ソング Global Song」の考え方の基礎となった、ジョン･ウェスレーの讃美理論を解説。信徒教育の意味を持ったメソディストの讃美歌に確認できる、音楽を通して共有される「集団的記憶」と「希望」について、教育的視点から分析する。
8. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑩グローバル･ソングの可能性」	単著	平成 20 年 12 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 12 月号 P.2 連載	「グローバル・ソング Global Song」の実践とその課題の提示。前稿での議論をふまえ、ウェスレーの歌唱指導の理念と現代の日本の音楽科教育目標との共通点の分析するとともに、『Global Song』の視点を援用しつつ、「自分たちの歌」として歌唱教材が今日の音楽科授業において成立するための基本的条件を明らかにし、具体的な方法論を示した。
9. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑪現代の讃美とメソジストⅢ」	単著	平成21年1月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 1 月号 P.2 連載	カリフォルニアから来日したゴスペル・グループ「ライト&ライフ アウトリーチ・バンド Light and Life Outreach Band」の来日ツアーのリポートおよび、彼らにとっての「アウトリーチ」の意味を解説。アメリカにおける音楽科教育が、教会を中心に広がっている点に注目し、小中学校音楽科教育が生涯教育へとつながり、「生きる力」の基盤を構成する要素となるための条件を分析した。
10. 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑫最終回：讃美の共有」	単著	平成21年3月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 2･3 月合併号 P.2 連載	レクイエムに象徴される、「共同体」の意味について。独りで歌う時にも、他者とのつながりを意識できるためには、その歌を他者と共有した体験が必要である。本稿では、大切な人を失った悲しみを共有するための「レクイエム」の意味について、「会衆歌」の視点から解説。共同体において「歌を共有する」ことの大切さを示し、これからの音楽科教育に求められる、「共同体の共有体験の場」としての音楽科授業の重要性を示唆した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. プログラム解説 京都市交響楽団 第 529 回　定期演奏会　[4500 字]	単著	平成 21 年 10 月	京都市交響楽団 第 529 回　定期演奏会 pp. 5-8	モーツァルト≪交響曲第 36 番ハ長調「リンツ」≫、ブルックナー≪交響曲第 9 番ニ短調≫（ノヴァーク版）についての解説を担当。 プログラムを構成することが、美術館における「企画展」と共通点があることをふまえ、2 人の作曲家が取り上げられた理由を示す。モーツァルトはザルツブルク、ブルックナーはリンツとそれぞれオーストリアの都市を代表する作曲家であり、名前を冠する音楽祭も開催されている。当日演奏された作品を分析しつつその背景ににもふれ、それぞれの都市で、当時 2 人がどのようにコミュニティに受け入れられていたか、また現代のの位置づけについて解説した。
12. プログラム解説 京都市交響楽団 第 536 回　定期演奏会　[4500 字]	単著	平成 22 年 6 月	京都市交響楽団 第 536 回　定期演奏会　パンフレット pp. 5-8	ウェーベルン≪大管弦楽のための 6 つの小品 op. 6≫、ウェーベルン≪管弦楽のための 5 つの小品 op. 10≫、マーラー≪交響曲第 7 番ホ短調「夜の歌」≫ マーラーは世紀末ウィーンを代表する大作曲家であり、多様な楽器を用いた大型の作品を多く書いた。作曲家であったが、生活のために指揮者としても成功していた。対するウェーベルンはマーラーにあこがれ、同じように指揮者として働きながら、シンプルなそぎ落とされた作品を制作した作曲家である。 年齢は差があるものの、世紀末ウィーンと現代をつなぐ音楽の様式の端境期に位置した 2 人の作曲家の生涯を、作品の特徴に焦点をあてて解説を執筆。
13. プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団 173 回定期公演 [4500 字]	単著	平成 22 年 12 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 173 回定期公演 パンフレット pp. 2-3	「京フィルの第九　　―日韓交流！アジアからの発信―」 ベートーヴェン：≪献堂式≫序曲　ハ長調 op. 124 ：交響曲第 9 番　ニ短調 ≪合唱付き≫op. 125 ≪献堂式≫は、「交響曲第 9 番」初演時に同じプログラムにあがっていた作品である。寒い時期に初演され（10 月）、かなり長い演奏会であったが、聴衆は最後までがまんし聴いて、最後に万雷の拍手でベートーヴェンを称えたという。しかしすでにベートーヴェンの耳は聞こえなくなっており、助手に聴衆の方を向かされようやく拍手が「見えた」という。 本解説では、日本で「第九」が初演された坂東にある小学校・中学校が、現在も入学式・卒業式で「歓喜に寄せて」を歌うことを紹介し、すでに日本の地域文化を担い、同郷のアイデンティティーの元になっていることにふれ、「第九」の現代日本における教育的意義に着目した解説を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14. プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団 174回定期公演 [3550字]	単著	平成23年1月	京都フィルハーモニー室内合奏団174回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「ニューイヤーコンサート『アメリカ&ラテンアメリカ』」 H. ヴィラロボス：ブラジル風バッハ第2番 G. ガーシュイン： ラプソディー・イン・ブルー A. コープランド：アパラチアの春 L. アンダーソン：セレナータ ：ゴールデン・イヤーズ ：ブルー・タンゴ ：舞踏会の美女 世界に名高い、いわゆる「ウィーン・フィルによるニューイヤーコンサート」は、ワルツやポルカを中心に、きらびやかな新年の祝祭を演出する。しかし、今回は「アメリカもの」を中心とした、明るく楽しい新年の祝いである。特にアンダーソンは日本で教育を受けた者であれば、小学校や中学校での音楽科鑑賞教材で取り上げられ聴いたことがあるだろう。このような体験は、義務教育期間内の音楽科教育の充実度が問われる機会でもある。イメージをしやすい彼の作品の魅力を中心としつつ、「新世界」アメリカがどのような音楽文化をはぐくんでいったのかを中心に、新しい年への期待を込めて解説。
15. 京都フィルハーモニー室内合奏団 175回定期公演 [3550字]	単著	平成23年3月	京都フィルハーモニー室内合奏団175回定期公演パンフレット pp. 3-5	「古典派への道程 Vol. 12」モーツァルト：　ディヴェルティメント　ニ長調　K. 136　ファゴット協奏曲　変ロ長調 K. 191 ハイドン：交響曲第101番　ニ長調　Hob. Ⅰ：101　≪時計≫ 2人の作曲家は、同時代人であり、生前にも面識があった。彼らの時代は、作曲の依頼主の社会的立場の交代期にあたり、それはオーダーそのものが変わる意味を持っていた。 時代の変わり目に、貴族・市民と依頼主が変わることによる作品に与えた影響と、それでも変わらない彼らの作品の特徴について解説。
16. 京都フィルハーモニー室内合奏団 176回定期公演 [3550字]	単著	平成23年4月	京都フィルハーモニー室内合奏団176回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「ロシア！」 P. チャイコフスキー：弦楽セレナーデ S. プロコフィエフ：古典交響曲 L. ストラヴィンスキー：組曲「プルチネッラ」 この日のコンサートに取り上げられた作曲過3人を結びつけるのは、「ディアギレフ」である。彼はバレエ・リュスを率いて、多くの新しい才能を見出し、後世に残る芸術作品を生み出した。本解説では、ディアギレフが彼らとどのような関わりを持ち、何を見出し生み出していったかと言う視点から、作品それぞれのもつ魅力を解説していった。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. 京都フィルハーモニー室内合奏団177回定期公演 [4500字]	単著	平成23年6月	京都フィルハーモニー室内合奏団177回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「フランス！」 ルーセル：シンフォニエッタ オネゲル：ピアノ小協奏曲 ラヴェル：クープランの墓 ビゼー：アルルの女 　フランス音楽を生んだ「フランス」を、科学立国との共通点として「センス」をキーワードに読み解く。さらに、多少年が前後するものの、同時代人の作曲家として、4人がどのような社会情勢の中で作曲家として自分の仕事を見つめ、進めてきたのか解説を行った。
18. 京都市交響楽団第550回定期演奏会 [4300字]	単著	平成23年9月	京都市交響楽団　第550回　定期演奏会　pp. 7-10	モーツァルト：舞踊音楽「レ・プティ・リアン」K. Anh. 10（299b） シベリウス：ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op. 47 ラフマニノフ：交響的舞曲 op. 45 　作曲家にとって「故郷」とは、音楽ににじみ出る、特別なタームである。モーツァルトは故郷ザルツブルクが息苦しく、シベリウスは故国の独立のため音楽をもって戦った。ラフマニノフは政治の混乱によって亡命せざるを得なかった。 　本公演は指揮者である外山雄三の80歳の祝いも兼ねていたが、彼の選んだ作品のうちラフマニノフのそれは、作曲家が死ぬ間際に、多くのロシア人亡命演奏家がいたフィラデルフィア管弦楽団のために書いた特別の作品である。作曲家自身のオーケストラ団員への感謝の言葉が、そのまま外山の京都市交響楽団メンバーへの感謝の言葉であったと言える。
19. 京都フィルハーモニー室内合奏団178回定期公演 [3700字]	単著	平成23年10月	京都フィルハーモニー室内合奏団178回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「室内オーケストラ名曲選」 モーツァルト： 　弦楽のためのディベルティメント 　ヘ長調　　KV.338 　：ピアノ協奏曲第26番 ニ長調 KV.530 　「戴冠式」 ストラヴィンスキー：管楽のための八重奏曲 ニーノ・ロータ：九重奏曲 　「室内オーケストラ」とは、小編成のオーケストラのことであり、大型編成のオーケストラが出てくる前のヨーロッパではごく普通の合奏形態であった。近代になっても、小回りが利くからこそ、多くの作曲家が特殊な編成で響きを確認してみるなど、実験的な場として用いてきた経緯がある。演奏会では、「室内オーケストラ」という編成を縦糸に、イタリア音楽を横糸にして企画されたものであり、共通項とともに各作品のもつ実験性や特徴を中心に解説を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20. 京都フィルハーモニー室内合奏団179回定期公演 [3000字]	単著	平成23年11月	京都フィルハーモニー室内合奏団179回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「ベートーヴェン！」 ベートーヴェン： ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op. 61 交響曲第5番ハ短調 op. 67「運命」 ベートーヴェンの人生は、幼いころから苦悩に満ちたものだった。子どものころは、子どもに英才教育をほどこしてモーツァルトのようにしたいと思うアルコール依存症の父親からの暴力、青年期には進行型の難聴を患い、中年以降は甥の養育権をめぐる親族の争いと甥の自殺未遂、とどれも現代に通じる、逃れることのできない、家族にまつわる苦悩ばかりである。そのような中で、ベートーヴェンはそれらを正面から受け止め、戦っていくことと並行して作品を生み出していった。ベートーヴェンの生涯とともに、彼にとっては実験的な「協奏曲」ジャンルの解説、それをふまえた「交響曲」の位置づけに焦点をあて解説を行う。
21. 京都フィルハーモニー室内合奏団180回定期公演 [3500字]	単著	平成23年12月	京都フィルハーモニー室内合奏団180回定期公演 パンフレット pp. 2-3	「京フィルの第九」 ベートーヴェン： ≪コリオラン≫序曲ハ短調 op. 62 交響曲第9番 ニ短調 ≪合唱付き≫op. 125 ベートーヴェンは自身の難聴がすでに完治しないことを確信したとき、音楽家としての将来に絶望し、有名な『ハイリゲンシュタットの遺書』を書く。まさに、音楽家としてこれからという32歳の時である。しかしその内容は、「死」からの決別であり、「自分の為すべきことを成し遂げるまでは、決して死なない」という、遺書の形をとった決意表明であった。≪コリオラン≫は遺書を書いた後の作品であり、「傑作の森」と呼ばれる彼の創作の黄金期に書かれたものである。また、交響曲第9番は「為すべきことを為す」のを続けてきたベートーヴェンの晩年の作品であり、ブラームス、マーラーなど、彼に続く多くの作曲家に影響を与え続けてきた。人の人生を支え得る音楽の持つ力を証明する作品として、解説を執筆。
22. 京都市交響楽団第557回定期演奏会 [3600字]	単著	平成23年12月	京都市交響楽団 第550回　定期演奏会　パンフレット パンフレット12-16頁	モーツァルト：フルートとハープのための協奏曲ハ長調 K. 299 ダマーズ：フルート、ハープ、弦楽のためのデュオ・コンチェルタントベートーヴェン：交響曲第9番 ニ短調 ≪合唱付き≫op. 125 EU（欧州連合）のいわゆる連帯の歌は、ベートーヴェン「交響曲第9番」4楽章の合唱「歓喜に寄せて」である。耳が不自由だったベートーヴェンの中では、常に「音楽」と「言葉」が同じ意味を持ってあり、言葉を交わしていたと考えられる。「歓喜の歌」の楽曲構成から、第九でベートーヴェンの内的言語の可能性に基づき、楽曲解説を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23. 京都フィルハーモニー室内合奏団182回定期公演 [3700字]	単著	平成24年3月	京都フィルハーモニー室内合奏団182回定期公演 パンフレット pp. 3-5	「古典派への道程」 ヴィヴァルディ： 弦楽のための協奏曲 ト短調　RV. 157 4つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲 ロ短調　RV. 580 ～≪調和の霊感≫Op. 3より第10番～ ピッコロ協奏曲　ハ長調　RV. 443 モーツァルト: セレナータ・ノットゥルナ　ニ長調　K. 239 ハイドン： 交響曲第45番 嬰ヘ短調 ≪告別≫Hob. Ⅰ-45 3人の作曲家は、日本人が義務教育機関に音楽科の教科書で必ず目にする作曲家たちである。そのため、名前を見ただけでは古い印象がぬぐえない。しかし彼らの作品は、作曲された当時には時代の先端をいく作品であり、現代のコンサートで聴いたとき、むしろ「新しさ」を感じる場合が多い。本解説では、彼らの作品の持つ「新しさ」の要素を、独自性と共に解説し、長く人々に愛される「古典」というジャンルの普遍性について考える機会とした。
24. 京都フィルハーモニー室内合奏団183回定期公演 [3700字]	単著	平成24年4月	京都フィルハーモニー室内合奏団183回定期公演 パンフレット pp. 4-6	「ロマンティシズムあふれた　ヨーロッパ音楽探訪」 E.グリーグ：組曲「ホルベアの時代から」 Op.40 R.G.シュトラウス：クラリネットとファゴットのための二重小協奏曲　ヘ長調 B.B.V.バルトーク：弦楽合奏のためのディベルティメント プログラムの3曲は、いずれも作曲家の危機的状況の直前・直後に生まれた作品である。不思議と、音楽史の過去の時代の様式に則ったスタイルで書かれていることが共通する。 人間は、危機的に状況に陥ると、過去の幸せだった時代を巨大回顧して危機を乗り越えようとするという。作曲家が作品創作当時、どのような危機的状況にあったのか、またどうしてその作品スタイルをとったのかに注目し、解説を行う。
25. 京都フィルハーモニー室内合奏団184回定期公演 [3000字]	単著	平成24年6月24日	京都フィルハーモニー室内合奏団184回定期公演 パンフレット pp. 4-6	「ドイツ・オーストリアの栄光と苦悩」 ハイドン：交響曲第7番 ハ長調「昼」Hob. Ⅰ:7 ワーグナー：ジークフリート牧歌 シュレーカー：室内交響曲 京都フィルハーモニー室内合奏団の創立40周年記念コンサートである。取り上げられた3人の作曲家は、時代と作風の変化の時代に生きた作曲家であった。中でもシュレーカーは、リヒャルト・シュトラウスと拮抗する人気を誇った作曲家であったが、ナチスドイツの台頭により心痛のあまり亡くなってしまった。彼の作品は、あまり演奏されることがなく、作風の理解や解釈が進んでいない。本作品は、彼がウィーン・アカデミーの教授陣の演奏会のために作曲したものである。それぞれの作曲が創作した時代背景、またその必然性について触れながら、「作曲の理解と時間」をテーマに作品解説を執筆した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26. 辻井伸行(ピアノ) 垣内悠希 指揮 京都市交響楽団 [3500 字]	単著	平成 24 年 9 月 20 日	京都市／京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）6-9 頁	ラフマニノフ:ピアノ協奏曲第 2 番　ハ短調 op. 18 チャイコフスキー：交響曲第 4 番　ヘ短調 op. 74 本プログラムと全く同じプログラムで行われたコンサートに、アシュケナージ指揮によるものがある。そのコンサートはアシュケナージが亡命先のイギリスから、初めて祖国に戻った際のコンサートであり、非常に政治的なものであると同時に、アシュケナージの祖国への思いを象徴するコンサートであった。2 つの作品は、そのために選ばれたものである。両作品の持つ、ロシア土着の音楽の魅力と、それを生かしつつ洗練された手法をもって作曲された作品の魅力について解説を行う。
27. 京都フィルハーモニー室内合奏団 185 回定期公演 [3500 字]	単著	平成 24 年 10 月 21 日	京都フィルハーモニー室内合奏団 185 回定期公演パンフレット pp. 3-5	「ドビュッシー生誕 150 年とフランス音楽」C. グノー：小交響曲 D. ミヨー：打楽器と小管弦楽のための協奏曲 C. ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲（シェーンベルク編曲）　管弦楽のための 3 つの交響的素描「海」　（J. ユー編曲）【世界初演】 ドビュッシー生誕 150 周年を記念してのコンサートでは、ドビュッシーの作品を編曲した 2 曲と、ドビュッシーの才能をいち早く認めたグノー、生前のドビュッシーと親交のあったミオーとをとりあげる規格である。特に≪海≫は、楽譜の初版の表紙が葛飾北斎「神奈川沖波裏」の大きな波の絵が用いられた。また、2012 年に歌舞伎の猿之助襲名披露の中で演じられた『黒塚（安達原）』と、バレエ・リュスとの関係を解説。バレエ・リュスはドビュッシーの≪牧神の午後の前奏曲≫作曲のきっかけとなったバレエ団である。日本とフランスが、文化的に深い影響関係にあったことをふまえ、曲目解説を行った。
28. 京都市交響楽団 特別演奏会 「第九コンサート」 [4200 字]	単著	平成 24 年 12 月 27 日･28 日	京都市交響楽団 パンフレット 11-16 頁	ワーグナー 舞台神聖祭典劇「パルジファル」第 1 幕への前奏曲 楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第 1 幕への前奏曲 ベートーヴェン 交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」op. 125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される ワーグナーはベートーヴェンの後継者として自分を位置づけ、ベートーヴェンの生誕 100 周年の祝いに有名な「ベートーヴェン論」を発表した。そして、ワーグナーが自分の音楽作品のために作った「バイロイト祝祭劇場」のこけら落としには、自身の作品とともにこの「第九」を演奏し、「ドイツ音楽芸術の至高」を目に見える形で表そうとしたのである。 「第九」作曲当時のベートーヴェンの状況と、対照的な後世の社会的・政治的な「第九」理解とを比較しつつ、周りの状況がいかにあろうとも変わらぬ、「第九」が表現しようとする「連帯」と「歓喜」について解説。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29. 京都フィルハーモニー室内合奏団 187 回定期公演 [3500 字]	単著	平成 25 年 2 月 22 日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	ヨハン・セバスティアン・バッハ ブランデンブルク協奏曲全曲 BMV1046-1051 バッハの若い時代において、自身のポートフォリオとして作成した協奏曲集の全曲演奏会に向け、バッハ一族の音楽的特徴とともに、17 世紀に活躍した古楽器ついても解説を行う。 現代の音楽教育におけるバッハの意義についても言及した。
30. 京都フィルハーモニー室内合奏団 188 回定期公演 [3500 字]	単著	平成 25 年 4 月 21 日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	武満徹≪ファンタズマ／カントスⅡ≫ ベートーヴェン≪ピアノ協奏曲第 3 番 Op. 37≫ プーランク≪シンフォニエッタ≫ 現代音楽の巨匠 2 人が、映画音楽の作曲経験があったことから、映像と音楽との関係にふれつつ解説を行った。 また、明治時代以降、音楽と映像はしばしば教育の現場で用いられ、子供たちのイメージを膨らませ、教育内容理解の大きな助けとなってきた歴史にも言及した。
31. 京都市交響楽団第 568 回定期演奏会 [4300 字]	単著	平成 25 年 5 月 24 日	京都市交響楽団	ベートーヴェン≪序曲「コリオラン」op.62≫ ブルックナー≪交響曲第 8 番ハ短調≫ ［ノヴァーク版 第 2 稿（1890）］ 鍵盤楽器奏者として出発し、ウィーンで成功した 2 人の作曲家について、作曲家としてのアイデンティティー、また音楽がアイデンティティーを支える「思い出」に大きく影響を与えることを踏まえた解説を行った。
32. 京都フィルハーモニー室内合奏団 189 回定期公演 [3200 字]	単著	平成 25 年 6 月 17 日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット 3-5 頁	P.チャイコフスキー ≪フィレンツェの思い出≫ Op.70 ニ短調 A.E.ヒナステラ≪協奏的変奏曲 Op.23≫ 出身国の音楽的伝統が色濃く反映された作曲家とその作品について、民族共通の音楽性と共に、作曲家の独自性を観点に解説を行う。
33. 京都市交響楽団第 572 回定期演奏会 [4600 字]	単著	平成 25 年 9 月 6 日	京都市交響楽団 パンフレット 7-10 頁	F.メンデルスゾーン序曲≪フィンガルの洞窟≫ ロ短調 Op.26 L.ベートーヴェンピアノ協奏曲第 1 番ハ長調 Op.15 L.ベートーヴェン交響曲第 3 番 変ホ長調 ≪英雄≫ Op.55 新しい時代の影響が作品に色濃く反映された作品を並べたプログラムである。音楽作品が音楽教育や聴衆、技術革新や社会そのものの影響を強く受けつつ、作曲家を通して世に生み出されていることについて、作品に基づき解説する。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34. 京都フィルハーモニー室内合奏団 190 回定期公演 [3200字]	単著	平成25年10月27日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット3-5頁	J.L.F.メンデルスゾーン,B.≪弦楽のための交響曲第9番　ハ長調≫ G.マーラー≪交響曲第1番　ニ長調　「巨人」Op.23　≫ オリンピックが東京で2020年に開かれることが決定されたことを受け、スポーツと音楽との関係について、「祭典」をキーワードに解説。どちらの作曲家もユダヤ系であったことから、宗教的な背景もふまえ、解説を行う。
35. 京都フィルハーモニー室内合奏団 192 回定期公演 [3200字]	単著	平成26年3月16日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット3-5頁	H.I.F.von ビーバー≪バッターリア≫ W.A.モーツァルト≪フルート協奏曲 第1番　ト長調　K.313 (285c)≫ F.J.ハイドン≪交響曲第103番 変ホ長調 Hob.Ⅰ:103「太鼓連打」≫ 3つの作品に共通の、「作品と依頼人との関係性が強い」側面に光をあて、解説を行う。また、ウィーンが自己の伝統として、音楽文化を教育していこうと積極姿勢を示していることにふれ、音楽的伝統と教育、また聴衆と作品との関係性について、解説を行う。
36. 京都フィルハーモニー室内合奏団 194 回定期公演 [3500字]	単著	平成26年6月29日	京都フィルハーモニー室内合奏団 パンフレット3-5頁	ブリッジ　≪アイルランドの旋律 ーロンドンデリーの歌ー≫ ラター≪弦楽のための組曲≫ ブリテン≪フランク・ブリッジの主題による変奏曲≫作品10 コープランド≪劇場のための音楽≫ コープランド以外は、イギリスを活動拠点とした比較的新しい作曲家によって構成された演奏会の解説。「イギリス的」なるものと「アメリカ的なるもの」との差と共に、伝統的な旋律が現代の作曲家によって新たな作品として提示される過程とその意義について言及する。
37. 京都市交響楽団 特別演奏会 「第九コンサート」 [2400字]	単著	平成26年12月27日･28日	京都市交響楽団 パンフレット9-12頁	バーバー≪弦楽のためのアダージョ≫ M.ラヴェル≪亡き王女のためのパヴァーヌ≫ ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される バーバー／ラヴェルの両作品は、現代にも映画に使用されるなど比較的有名な作品である。 今年は「ベルリンの壁」が崩壊して25周年にあたり、その式典で歌われたのがやはり≪歓喜によせて≫であった。「第九」が表現しようとする「連帯」と「歓喜」について、現代の世界状況と合わせて解説。
38. 京都フィルハーモニー室内合奏団 197 回定期公演 [3200字]	単著	平成27年3月14日	京都フィルハーモニー室内合奏団	モーツァルト「フィガロの結婚」より≪序曲≫ ベートーヴェン ピアノ協奏曲第4番 0p.58 交響曲第8番　0p.93 3曲は共に、時代を反映した作品である。 解説では、フランス革命前夜の雰囲気が色濃い「フィガロの結婚」、ナポレオンのヨーロッパ席捲を背景としたベートーヴェンの作品群を、それぞれに関連性アルタ作品との比較によって解説した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39. 弦楽六重奏曲の粋	単著	平成27年4月24日	京都コンサートホールコンサートホールアンサンブルホールムラタパンフレット2-3頁	ブラームス：弦楽六重奏曲第1番変ロ長調 0p. 18 チャイコフスキー：弦楽六重奏曲ニ短調 0p. 70 ≪フィレンツェの思い出≫ ヴァイオリン：ゲオルギ・バブアゼ、梅原ひまり　ヴィオラ：山本由美子、江口純子　チェロ：林裕、上森祥平 19世紀の産物である、弦楽六重奏曲というジャンルの特性を社会的背景から解き明かし、さらにブラームスやチャイコフスキーの創作活動における、各作品の位置づけと現代における意義を解説。
40. 京都フィルハーモニー室内合奏団 199回定期公演「ラヴェル讃」［3200字］	単著	平成27年6月28日	京都コンサートホールコンサートホールアンサンブルホールムラタパンフレット3-5頁	ラヴェル≪クープランの墓≫（管弦楽版）、≪ピアノ協奏曲≫、≪亡き王女のためのパヴァーヌ≫（管弦楽版）、≪マ・メール・ロワ≫（バレエ全曲版 2つの大戦をはさんで作曲家であったラヴェルは、志願して兵隊として働いたこともある人物である。文化が政治に利用されることを徹底的に拒む一方で、友人の死を悼んで作曲し、戦争で右手を失った友人のためには、左手のコンチェルトを作曲した。平和と芸術の関係性について注目した曲目解説。
41. 京都市交響楽団特別演奏会 「第九コンサート」［3500字］	単著	平成27年12月26／27日	京都市交響楽団（京都コンサートホール）	シベリウス ≪交響詩「エン・サガ（伝説）」op.9 ≫12月26日 ≪交響詩「タピオラ」op.112 ≫12月27日 ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op. 125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される 指揮：高関 健　合唱：京響コーラス 独唱：平野雅世（S） 西原綾子(Ms) 小餅谷哲男(T) 桝 貴志(Br) 国民楽派と言われるシベリウスとベートーヴェンの「第九」の共通点は、「祖国」である。時間軸として、シベリウスは過去（ルーツ）を、ベートーヴェンは、未だ実現しない未来（憧れ）を音楽で描いた。宗教的背景をもった民族的・国家的確執が、各地で紛争となって現れている現在と作曲者の時代性に注目した曲目解説。
42. 京都フィルハーモニー室内合奏団 201回定期公演「ニューイヤー」［3200字］	単著	平成28年1月9日	京都コンサートホールコンサート（大ホール）パンフレット5-7頁	メンデルス・ゾーン≪序曲 フィンガルの洞窟 op. 26≫、モーツァルト≪ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K. 364≫、ベートーヴェン≪交響曲第3番変ホ長調「英雄」作品5≫ 指揮：斉藤一郎 ：独奏：松野弘明（vn.） 川本嘉子(va.) ニューイヤーコンサートらしい、ポピュラーな作品が並んだプログラムである。作曲家それぞれの時代が望んだ「英雄像」とはどのようなものであったのか、時代背景を描くと共に、またそれが作品の中でどのような表現と通じるものなのか解説。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
43. 京都市交響楽団第598回定期演奏会 [4200字]	単著	平成28年2月14日	京都市交響楽団 京都コンサートホール コンサート（大ホール）	エルガー ≪弦楽セレナードホ短調 op.20≫ ≪チェロ協奏曲ホ短調 op.85≫（ヴィオラ版） ドヴォルザーク≪交響曲第8番ト長調 op.88≫ 指揮:大友直人 :独奏:今井信子(va.) 両作品に共通する「イギリス」と「ヴィオラ」の2つがキーワード（テーマ）となっているプログラム。エルガーでは、作曲家と演奏家の関係性を、またドヴォルザークでは作曲家と出版社との関係性に着目した解説を執筆。
44. 京都フィルハーモニー室内合奏団 202回定期公演「ラヴェル讃」[3600字]	単著	平成28年3月6日	京都コンサートホール コンサートホールアンサンブルホールムラタ	ヴィヴァルディ≪調和の霊感 作品3-第11番 ニ短調≫、バッハ≪管弦楽組曲第 2 番ロ短調 BWV.1067、モーツァルト≪交響曲第40番 ト短調 K.550≫ 指揮／独奏:有田正広(fl.) バロックから古典派の時代にかけて現れる、調性・教会旋法などはじめとした、豊かで多様な音の力学に注目して曲目解説を行う。
45. 京都市交響楽団特別演奏会 「第九コンサート」[2800字]	単著	平成28年12月27／28日	京都市交響楽団（京都コンサートホール）	W.A.モーツァルト 歌劇「ドンジョバンニ」≪序曲≫K.527, 12月27日 歌劇「魔笛」≪序曲≫K.620, 12月28日 ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録 指揮：ステファン・ブルニエ　合唱：京響コーラス 独唱：横山恵子（S）　手嶋眞佐子(Ms)　高梁淳（T）　伊藤貴之（Br） モーツァルト2つの序曲の背景をふまえ、特色を解説した。彼は、時代の転換期とともに、音楽家の在り方や社会的地位が大きく変わる時代にあった。作品は、民衆が主導権を握り始めた時代を反映する歌劇の序曲である。ベートーヴェンもまた、革命・産業化社会と大きく世界的に変化する時代に合った。作品と社会との関係性において、2人の作曲家を対比し、第九の現代的意味を中心に解説を執筆。
46. 京都市交響楽団 608回定期演奏会 [5000字]	単著	平成29年1月22日	京都市交響楽団（京都コンサートホール）	モーツァルト≪ピアノ協奏曲第25番ハ長調K.503≫ ブルックナー≪交響曲第 0 番ニ短調 WAB.100≫（ノヴァーク版） 指揮：下野 竜也 独奏：パスカル・ロジェ（ピアノ） 時代を異にした地方出身者の作曲家が、それぞれの環境の中で、どのように仕事をし作品を残していったのか。時代の要請と、作品創作との関係性に重点を置き、解説したもの。作品が作曲された時代と無関係ではないこと、過去の作品を現代に再現していくことの意義について明示。また、その理解のために、教育の重要性について言及した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47. 京都市交響楽団特別演奏会「第九コンサート」[5000字]	単著	平成29年12月27/ 28日	京都市交響楽団(京都コンサートホール)	ベートーヴェン:序曲「コリオラン」op.6212月27日 ショスタコーヴィチ:ジャズ組曲第1番12月28日 ベートーヴェン 交響曲第9番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録 指揮:井上道義　合唱:京響コーラス 独唱:菅　英三子(S)　林　美智子(Ms)　笛田　博昭(T)　ジョン・ハオ(Br)
【歌詞新対訳作成】 1. ベートーヴェン:交響曲第9番　ニ短調　0p125　第4楽章「歓喜によせて」	単著	平成23年12月	京都市交響楽団　第557回　定期演奏会　パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ハインリヒ・フォン・シラー作　「歓喜によせて」新対訳作成
2. ヨハン・シュトラウス(息子)喜歌劇「こうもり」より ≪公爵様、あなたのようなお方は≫(アデーレのアリア)	単著	平成24年1月	京都市交響楽団　第551回　ニューイヤーコンサート　パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ヨハン・シュトラウス（息子）作 「こうもり」より ≪公爵様、あなたのようなお方は≫（アデーレのアリア）新対訳作成
【演奏会企画】 1. アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこう in まぶね隣保園」	単独	平成25年6月20日	社会福祉法人　日本コイノニア福祉会　円町まぶね隣保園	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサートを企画。コンサートでは、まぶね隣保園での日常の表現活動や音楽遊びを重視し、まぶね隣保園バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児：2~3才児　30名 演奏曲目：国際急行列車、スペインの踊り 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）
2. アウトリーチ型ワークショップコンサート「せかいりょこう in 光の子保育園」	単独	平成25年6月25日	社会福祉法人　京都地の塩会　光の子保育園	地域の保育園と演奏団体と連携し、プロの演奏家によるワークショップ型のコンサートを企画。光の子保育園での日常の表現活動や音楽遊びを重視し、光の子保育園バージョンでプログラムを組み、楽器体験や音楽を聴いてのお絵かき時間などをとった。 対象園児：5才児　30名 演奏曲目：金婚式、タイスの瞑想曲他 出演者：森本真裕美（京都フィルハーモニー室内合奏団、ヴァイオリニスト）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. ストリングスストーリー　―がっきで、からだで、おはなししよう！	単独	平成25年8月12日	岡山県立美術館ホール	公立小学校（備前市立西鶴山小学校）と地域の文化施設（岡山県立美術館）との連携実践研究として企画した弦楽四重奏コンサート。西鶴山小学校の全生徒と、その保護者や家族を対象としたもの。コンサートでは、「喜怒哀楽」をキーワードに、音楽でそれがどのように表現されているのか、小学校音楽科鑑賞教材で既習の作品の他、事前授業で学んだ現代音楽で中村滋延作曲≪ソヴァン・マチャ≫を、映像・ダンスと共に鑑賞した。後のアンケートで、あらかじめ事前授業でコンサート内容を理解した子供たちが、音楽で表現された内容を深く読み取り、積極的な音楽聴取につなげていたことが明らかであった。さらに、保護者からは、生の弦楽四重奏をコンサートホールで、家族で聴く機会が持てたとの好評を得た。 対象児童：西鶴山小学校生と引率教員、保護者 演奏曲目：ワルツィングキャット、天国と地獄、ソヴァン・マチャ 出演者：京都フィルハーモニー室内合奏団、 奥祥子（ダンス） 映像：中村滋延（九州大学教授）
【演奏活動】 1. 中小企業庁「平成21年度　地域商店街活性化事業」 KOBE ミュージック・ウォーク2010 コンサート出演	共同	平成22年3月	元町商店街 特設ステージ	ＫＯＢＥミュージックウォーク 2010 実行委員会からの招聘を受け、ヴィオラとピアノによる、ライブコンサート（グループ名：Maris Stella）に出演。小学校音楽科歌唱共通教材、および旧鑑賞共通教材から作品を選び構成。好評を得る。 主催：ＫＯＢＥミュージックウォーク 2010 実行委員会 後援：兵庫県／神戸市／(財)神戸国際観光コンベンション協会／(財)神戸市民文化振興財団／(社)神戸港振興協会／神戸商工会議所／神戸新聞社／サンテレビジョン／ラジオ関西 ヴィオラ演奏を担当
【学会発表/シンポジウム／講演】 1.「静かにささやく声」	―	平成21年7月	関西学院大学　神学部チャペル　講演	明治初期に来日した宣教師オルチンの、幻燈伝道活動の裏にあった彼の音楽を媒体とした教育理念を、宣教レポートの記述から明らかにする。彼の幻燈伝道は学校教育においても度々実践され、教材として用いられたものは道徳的な内容のものが多い。キリスト教精神に基づく道徳観を日本の風俗に変換するために用いた彼の手法において、音楽は教育効果をさらに高めるために必要なものであった。音楽教育が単に「音楽」に限られた教育目標を持つものではなく「生きる力」として人間を支えていく力となっていくと想定されていたことを、オルチンの記述から示唆した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.「18 世紀メソディストにおける讃美歌と公共性−個人的体験から共同体の一致体験へ−」	−	平成 21 年 10 月	第 60 回日本音楽学会全国大会　大阪大学	メソディスト運動とは、英国国教会司祭ジョン・ウェスレーJohn Wesley によって 18 世紀末半ばから英国で展開された信仰復興運動である。その特性は、ウェスレーの個人的な信仰的覚醒がその発端となっている点であり、「会衆歌」（共同体の歌）として設定された讃美歌にその影響があることだ。指導者ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、その讃美には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映され、新しい時代の「公共圏」の創造に大きな役割を果たした。本発表ではウェスレーの歌唱指導の理念と、現代の日本の音楽科教育目標との共通点に注目し分析を行った。特に、教育的配慮と「公共性」の視点から、初期メソディストの讃美歌の歌詞に注目し、「共に歌うこと」による歌詞内容の理解の強化を明らかにした。
3. 音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる　― 広がる教室とこころの育ち ―(「再掲」)	−	平成 22 年 8 月	主催：非営利特定団体人間教育研究協議会（於）芦屋市立宮川小学校	第 26 回人間教育実践交流会　2011 年　芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育－新教育課程とその実践－」「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。日本各地で個々に始まりつつある音楽科教育における「出前授業」をはじめとした専門家のアウトリーチ活動の受容状態や、文化団体の教育プログラムについて概観し、分析を行った。本発表は実践成果を共有することにより、子供たちのこころの育ちを、芸術文化をキーワードに支援し実現していくための連携について、問題提起するものである。
4. コンサートホールにおける「教育プログラム」の構造と作品アプローチ－ウィグモア・ホール Wigmore Hall（英国：ロンドン）の教育プログラムを中心に－	−	平成 23 年 11 月	2011 年　日本音楽学会第 62 回　全国大会（於）東京大学	本研究発表は、英国における地域密着型コンサートホールの運営する「教育プログラム」の分析を通して、１つの音楽現場における作品へのアプローチの実態を検証し、作品受容における方向性の広がりと可能性を示そうとするものである。とりあげたウィグモア・ホールの教育プログラムは、人生の全ステージにおいて、多様な関心とレヴェルにあった音楽享受のレディネスを保証する、戦略的な構造となっている。中でも特徴的なのは、地域の幼稚園や小学校で活用できる「デジタル教材」を用意しており、幼児や児童生徒を対象としたコンサートと連携するしくみを構築していることである。そのような努力の結果、同ホールのスクールコンサートは通常のコンサートでは演目にのりにくいレパートリーや難解とされる作品を扱う内容となっている。本発表では、ホール運営における戦略的な構想と扱われる作品の新たな意義づけを通し、幼児期の表現活動、また小学校音楽科教育内での受容の実態にたつ音楽作品へのアプローチの可能性を示すものである。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. The Study for The digital Teaching Materials which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan. ― The Outlook and The Issues― （Full Paper） 「わらべ歌」を音楽教育に用いたデジタル教材に関する研究－展望と課題－	－	平成24年3月	SITE 2012--Society for Information Tecnology & Teacher Education International Coference 2012 In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education （査読あり）	本発表は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての発表である。「わらべうた」とは伝統的な子どもの遊び歌であり、非常に少ない音による単著純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に持つことにより、幼稚園や小学校の教師はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必ずしも要することなく、表現活動や音楽の授業を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとは言い難い。本人担当部分：「わらべ歌」導入についての実態調査と分析、論文執筆。大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本における全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、幼児から初等教育へ連続して子供の力を伸ばすデジタル教材の活用についても提案事例を示し 【教員教育・情報技術教育国際学会　プレゼンテーション】山本美紀／寺尾正／竹下裕来 教員教育・情報技術教育国際学会　＊発表については、単独発表
6.「草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観― 『ファウンダリー・コレクション　Foundery Collection』より―	－	平成24年9月	日本ウェスレー・メソジスト学会　於：日本基督教団銀座教会	ソディストの最初期の讃美歌集“The Foundery Tune Book” 実際に使われている音楽の分析を通し、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。再版されることがなかったことから、編集者ジョン・ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされてきたが、楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとした意図が見える。 “The Foundery Tune Book”の分析によって、会衆歌の芸術性と共に、対象を明確化することによる楽譜の役割と公共教育の効果について明らかにした。18世紀のウェスレーらによる楽譜の検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育との関わりについて考察した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. シンポジウム「地域発、生活発、共同体発、1950 年代以降のキリスト教各派の新しい讃美歌 ― 伝統と信仰の普遍性を越えて ―」コーディネーター	―	平成 24 年 11 月 24 日	日本音楽学会第 63 回全国大会（於）西本願寺聞法会館	18 世紀イギリス産業革命時に起こった「メソディスト運動」は、社会システムの変換が新しい共同体生成の契機となり、そこには必ず新しい共同体の歌が生まれることを示している。そのような共同体の誕生や社会的要請と創作との関係は、普遍である。特に第 2 次世界大戦を受けた第 2 バチカン公会議前後から現代に至る、社会変革に伴う讃美歌をはじめとした教会音楽に認められる変化は、カトリック／プロテスタントにかかわらず、歴史的に激しく大きなものである。讃美歌集の変化の中で特に顕著なものに、「こども讃美歌」の扱いがある。このような教会内外の状況変化から、本パネルでは、教会内外で音楽活動に携わるキリスト教各教派のパネラーによって、1950 年代以降の変遷のそれぞれの音楽的特徴をふまえつつ、地域の音楽教育の場としての教会と讃美歌の果たす役割についてシンポジウムを行った。 コーディネーターおよび、17 世紀～18 世紀イギリスにおける音楽と文化について発表を担当。 コーディネーター：山本美紀 パネリスト：小栗献（関西学院大学礼拝音楽非常勤講師）、長畑俊道（立教小学校音楽科教師）、林祐美子（エリザベト音楽大学教授）、山本有紀（松山東雲女子大学子ども学科教授）
8. 共同発表「教育プログラム」としての作品創作の試み －中村滋延 「悲しみの島」プロジェクトと教科領域への挑戦－	―	平成 24 年 11 月 25 日	日本音楽学会第 63 回全国大会 （於）西本願寺 聞法会館	研究代表を務める「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」（科学研究費補助金（基盤研究 B）における連携型教育プログラムに使用するコンテンツ作成に関する研究発表である。本研究プロジェクトでは、現在、中村滋延作曲弦楽四重奏曲集「悲しみの島」より≪ソヴァン・マチャ≫、同氏作メディアアート、創作舞踊（楳茂都梅弥月氏）をコラボ―レションさせた、保・幼・小および、中・高教育に用いる教材創作に取り組んでいる。本発表では、発達段階に沿ったプログラム開発の創作過程及び、その実践より得た成果から、各校種の連携を視野に入れ、教科の領域を超えて能動的に芸術を受け止めていく力を育む、教育方法の方向性について、考察を担当、発表した。 発表者：山本美紀、中村滋延、根岸一美
9. 初期メソディストの讃美に託されたもの ― 個人的体験から共同体の信仰告白へ ―	―	平成 25 年 9 月 14 日	日本賛美歌学会第 13 回全国大会 （於）青山学院女子短期大学	ウェスレーは会衆のために、最初の讃美歌集『ファンダリーに集う会衆のための旋律付き讃美歌集』“A Collection of Tunes set to Music as they are commonly sung at the Foundery”を出版し、その後約 20 年たって 2 冊目の讃美歌集『讃美歌選集』（1761 年、Select Hyms with Tunes Annext）を出版した。本発表では、まずウェスレー「讃美の心得」‘The Directions for Singing‘を概観後、『ファンダリー・コレクション』と『讃美歌選集』に収められた讃美歌の比較を通し、ウェスレーが会衆讃美に託した教育的機能を考察し、彼の音楽指導法について発表を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. 園・学校とホール・芸術文化団体とによる連携型教育プログラム研究 ― 持続可能な地域文化力をはぐくむために ―	―	平成 25 年 10 月 12 日	日本音楽教育学会第 44 回　全国大会 （於）弘前大学	学校教育課程における音楽科教育は、様々な音楽や音楽活動に触れる重要な入り口となる役割は果たしているが、それぞれの音楽の良さを味わうなために必要な教育方法への言及は少なく、現場に任されている。本発表では、具体的な教育的内容に踏み込むための課題に取り組むべく、①芸術作品聴取への取り組み、②教科領域の越境と可能性、の 2 つの観点から、連携型教育プログラム研究でのこれまでの保・幼・小各校種での成果を分析し、発達段階に即してスパイラルに発展する鑑賞教育の方法を提示した。さらに、教育期間を超えても、自分で芸術作品聴取の可能性を広げ続けるための、主体的鑑賞経験の基盤づくりについて提言を行った。
11. ホール･芸術文化団体と学校とによる「連携型教育プログラム」開発をめぐってードラマが導く音楽芸術体験の深化ー	―	平成 25 年 11 月 2 日	日本音楽学会第 64 回全国大会（於）慶応大学	本発表は、ホールやオーケストラ団体などといった地域既存の文化資源と教育機関との連携による「連携型教育プログラム」の開発をめぐって、「ドラマ」（物語性）が受け手の芸術体験の深化にどのような役割を果たすのか考察するものである。「連携型教育プログラム」が目指すのは、単に子どもたちが「盛り上がる」ことではなく、他の芸術プログラムに対しても、主体的受容姿勢につながる強い動機となる芸術体験の積み重ねを実現することである。「連携型教育プログラム」とは、学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する芸術教育プログラムをさす。今回の発表では子どものための「連携型教育プログラム」開発をめぐり、音楽芸術の様々な入り口について「ドラマ」をキーワードに発表した。
12. 音楽マーケットとしての「日本」の始まり―アウセイ･ストロークのジャパン･プロモートをめぐって―	―	平成 25 年 11 月 24 日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	アウセイ・ストローク（1887-1956）は、雑誌『会館芸術』のスポンサーである朝日新聞社社主村山家をうごかし、フェスティバルホールのこけら落としに「大阪国際フェスティバル」の開催を勧めた「きっかけ」となった人物である。彼が招聘した海外からの演奏家の多くは地方公演も行い、各地の小学校などで交流活動を行い、それがきっかけとなって音楽家を目指し演奏家となった日本時も多い。本発表では、そのような日本の音楽界の将来をにらんで教育的活動も続けたストロークについて、「大阪国際フェスティバル研究」に関わる史料に基づき、音楽教育界に与えた影響を明らかにすると共に、戦後日本の音楽界の土台をつくった音楽マネージャーの仕事について、概観した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 朝日会館から大阪国際フェスティバルへ　－ストロークの残像と影響 －	－	平成26年7月13日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	大阪国際フェスティバルは、かつて日本における音楽祭の代名詞であり、実質的には日本初の国際音楽祭である。本発表では、提唱者であるアウセイ・ストロークが、どのような音楽祭を志向し、スポンサーの朝日新聞社社主村山一族に提示していたのか明らかにし、ストロークの死後、その影響がどの程度まで大阪国際フェスティバルに残っていたか、講演内容から考察した。日本の洋楽受容の基本的イメージを構成した彼の仕事は、日本近代音楽史に重要な足跡を残している。
14. シンポジウム「地域と音楽 －コミュニケーション力を有する相互作用型コンテンツ形成と音楽芸術をめぐって－」	－	平成 26 年 11 月 9 日	日本音楽学会第 65 回全国大会（於）九州大学大橋キャンパス	コーディネーターを務める。パネリストは尾本章（非会員：九州大学）大久保充代（非会員：八尾市文化ホールプリズムホール館長）中村滋延（西日本支部：九州大学教授）このパネル企画のテーマにある、「相互作用」の「相互」とは今回の場合は、「音楽作品」と「環境」を念頭に置いていた。音楽作品とは、作品そのものであるのに対し、環境には演奏会場や地域、演奏者、聴衆、企画者などが含まれる。環境の直接的影響をうけて作品がつくられ、さらに新しいジャンルが成立しつつあるという現代の事情として、それらを全体的なコンテンツとして包括的に分析する視点や方法論が今後必要とされているというのが本パネルの持つ課題意識である。本パネルでは特に、地域の教育と文化の拠点として小学校・中学校に向けての「コンテンツ研究」について意見を交わした。コーディネーター及び2人のパネルからは作品の学校という環境、児童生徒を対象とすることから作品そのものの「有り様」が変化した事例を提示、作曲家の中村氏からは、子供たちの「他者と関わる態度の深化」につながることを目指して「コミュニケーション力のあるコンテンツ」の作った経験から、また、尾本氏には作品を巡る環境である建築と、環境に関わる人材育成について、大学教育の立場から話題提供をいただいた。
15. 岡山孤児院における音楽的事象と教育　―石井十次の「音楽」の用い方―	－	平成 26 年 12 月 12 日	同志社大学人文科学研究所第1研究会近代日本とキリスト教 （於）同志社大学 啓明館　第1合同研究室	岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる音楽教育を、多様な先行研究の検討及び、今日の近代音楽史研究の成果を踏まえながら明らかにした。特に本発表では、岡山孤児院音楽隊を舞台に展開した、近代日本音楽教育史と近代音楽史、及び近代日本宗教史研究のトライアングルな状況が持つ研究課題を明らかにした。 　その結果、これまでの「音楽隊活動は救世軍の影響であった」という定説を覆し、当時のごく一般的な西洋音楽消費とそれほど変わらなかったこと、また、孤児院内の器楽教育が、当初はシグナルとして使用されることが目指され、後にそれが情緒の育成から音楽的内容を含むものへと変化していったことを明らかにした。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって	ー	平成 27 年 3 月	京都大学アジアと宗教的多元性研究会– （於）京都大学 キリスト教学研究室	岡山孤児院と音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況から結成直前の音楽教育、特に器楽教育に関わる内容を明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を明らかにした。その結果①キリスト教音楽における 1 ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかも子どもの手によって始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。さらに今後の研究として、近代日本の音楽文化の大衆化と音楽教育との関わりについて可能性を示した。
17. シンポジウム 「會舘」という文化装置－『會舘藝術』と大阪朝日会館	ー	平成 27 年 3 月 14 日	『会館芸術』研究会主催シンポジウム 東京大学駒場キャンパス	パネリストとして参加。 パネル発表「朝日会館と大阪フェスティバルホール－箱を文化装置化するということ」 1926 年から 1962 年までかけて存在した「大阪朝日会館」とその機関誌『會舘藝術』の、関西のモダニズム運動をけん引した働きについてのシンポジウムと展覧会。その中で、文化施設・機関雑誌として、社会的に果たした教育的役割と啓蒙的役割、またその後の生涯教育との関連性について解説を行う。特に音楽マネージャーと日本人スタッフによって達成された地方公演は、遠征地での児童たちとの関わりを可能とし、洋楽受容をより身近なものとして受け止めることを可能にした点に注目した。 ＜パネリスト＞岡野博（東京大学博士課程）、前島志保（東京大学准教授）、ヘルマン・ゴチェフスキ（東京大学准教授）、高山花子（東京大学博士課程）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、 ＜コメンテーター＞渡辺裕（東京大学教授）
18. トーク・イベント 中之島 3 丁目 時代と建築の響き合い「よみがえる朝日会舘」	ー	平成 27 年 8 月 28 日	アサヒコムホール 主催；朝日ファミリー・ニュース、後援；朝日新聞社、協賛；竹中工務店、関電工、高砂熱学工業、協力；朝日ビルディング	登壇者として参加。 関西モダニズム運動の牙城となり、建築としても特徴的な朝日会館そのものに焦点をあてたトーク・イベント。研究会の成果を広く社会に知らせる目的も同時に持っていた。基調講演では特に、朝日会館で行われた子供の教育に関するプログラムについて言及し、地域の教育・文化施設として朝日會舘が果たしていた役割、また教育内容とその方法論について、その芸術的内容と共に、解説を行った。 ＜登壇者＞前島志保（東京大学准教授）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、山上揚平（東京芸術大学講師）ほか

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19.「音楽と社会」研究会シンポジウム：音楽が生起するとき－出会う《職業人・愛好者・大衆》― 「音楽を媒体とする場の考察から －宗教・教育・音楽祭－」	－	平成28年1月23日	「音楽と社会」研究会 立命館大学衣笠キャンパス創思館	基調講演者として登壇 芸術作品の成立に欠かせない、芸術科や鑑賞者、価値を歴史的に担保・維持する関係性について、特に音楽の実践における人々の関係性に着目して開催されたシンポジウム。 講演では、音楽祭や専門家による教育プログラム等の音楽活動における、音楽家と人々との関係性の歴史的変遷について論じる。 長年、芸術によって社会を有機的に結びつけることを盲目的に信じる考えが合ったが、近年では「芸術の社会を分断する力」を認識し、克服しようとする目的が、欧米諸国における芸術に携わる諸団体の各種「教育プログラム」やアーツカウンシルの取り組みの根底にあり、それが作品そのものにも影響を与えていると考えられる。本講演では、これまでの日本における「アートマネージメント」や「文化政策」の課題を提示した上で、欧米諸国の現状を紹介し、後の議論につなげた。
20. 2016日本賛美歌学会第16回全国大会パネルディスカッション「賛美歌の共有について思うこと」	－	平成28年9月10日	立教大学　池袋キャンパス 主催：日本賛美歌学会	「讃美歌の共有を考える－『共通讃美歌』をきっかけに」司会者／ファシリテーターとして登壇 明治以降現代に至るまで、教派により様々な賛美歌が日本で出版されてきた。そのため、同じ賛美歌であっても訳の違いや、誤訳、あるいは神学上の問題点など、情報の混乱が見られる現代である。さらに、社会的な課題に向き合う海外の賛美歌創作の状況を考えるならば、今日日本において賛美歌そのものだけでなく、賛美歌に関わる様々な情報の共有が至急の課題であることは明らかである。本パネルディスカッションでは、ようやく始まろうとしている賛美歌の共有に関わる現代の課題を提示すると共に、共有することの意義、また意識の共有について扱った。 司会／ファシリテーター：山本美紀　パネリスト：水野隆一（関西学院大学）、宮崎光（立教大学）、宮越俊充（上智大学）ほか
21. 19世紀末から20世紀初頭における英国救世軍の活動と幻燈－社会包摂としての娯楽の機能;救世軍国際記念館（International Heritage Center／The Salvation Army）における調査資料の報告（2015年）を兼ねて	単独	平成28年10月26日	京都大学アジアと宗教的多元性研究会- （於）京都大学 キリスト教学研究室	ロンドンにある救世軍国際記念館（歴史資料館International Heritage Center／The Salvation Army）の日本関係資料及び、救世軍オリジナルの幻燈から見える、救世軍の幻燈の用い方について、生涯教育の視点から論じたもの。 現在日本の山室軍平記念救世軍資料館及び、英国救世軍（万国救世軍本部）の救世軍資料の所蔵状況について、日本宣教の開始以来の英国救世軍（万国救世軍本部）との緊密な関係性がうかがえる資料に関する報告を行った。 特に、両救世軍が積極的に用いたメディアである幻燈について資料収集を行い、当時の”War Cry”等の雑誌資料とを比較し、近代に両国のメディアにおいて日本と世界がどのように描き出されていたのか分析した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22. 誌上の祝祭へのアプローチ ―― 雑誌『會舘藝術』にみる大阪国際フェスティバルを準備した土壌」――	単独	平成29年6月24日	同時代史学会 関西研究会 （於）西宮市大学交流センターセミナー室2	『音楽祭の戦後史』に続く報告ということから、フェスティバルホールの前身である朝日會舘の機関誌『會舘藝術』をもとに、当時の一大メディアである朝日新聞社の福祉事業として出発した朝日會舘運営について報告を行った。 現代もあるフェスティバルホール、および大阪国際フェスティバルの原風景を描き出すことによって、朝日會舘の存在なしには成立しなかったことを明らかにした。藝術活動が一般化していく初期の段階に、具体的な場を背景とした機関誌をはじめ様々なメディアを駆使してその活動を補完し、バーチャルな聴衆（観衆）共同体を形成していくプロセスを明らかにした。
23. 『コドモの本』と朝日會舘 ――現実の場を補完するバーチャルなつながりの構築	単独	平成29年8月3日	東京大学駒場キャンパス8号館319	『コドモの本』は、朝日会館が発行した、子供のための総合文化雑誌である。朝日會舘では、1926年（大正15年）10月のオープン当初より「アサヒ・コドモノの會」（以下「コドモの會」）を初め、『アサヒ（カイカン）・コドモの本』（以下「コドモの本」）「アサヒ・コドモ芸術院」（以下「コドモ・アテネ」という、子供を対象とした大きな規格の枠組みがあった。雑誌は、そのような具体的な場と、読者（子供と保護者）をつなぎ、組織的な発展を実現していった。この組織力は、戦後の「労音」や「うたごえ」に踏襲される組織作りの手段でもある。 本発表は、『コドモの本』に関する第1回目の発表でもあり、現存する資料からの出版の経緯の整理、運営母体である朝日新聞厚生事業団における「子供文化」の位置づけと組織構築の必要性、戦後に続く文化活動への影響等について言及した。
24. 戦前の大型民間ホールとこどもの音楽活動 ―社団法人朝日新聞社会事業団のこども対象企画（1926年 - 1935年）の検討より―	単	平成29年10月22日	日本音楽教育学会 愛知教育大学	1926年（大正15年）10月に大阪中之島にオープンした朝日會舘では、オープン当初以来「アサヒ・コドモノの會」が終戦間際まで開催され、238回を数えた。そこでは、運営母体である社団法人朝日新聞社会事業団のこども対象企画を反映し、様々なジャンルの芸術教育（趣味教育）が、こどもとその保護者に向けて提供されていた。 本発表では、社会事業団がこどもを対象として行っていた事業のうち、3つの事業「コドモの會」『アサヒ・コドモの本』「アサヒ・コドモ・芸術院（アテネ）」に焦点をあて、戦前のホール主導による社会教育としての芸術教育及び、ホールを具体的な場としたこどもの芸術活動とその文化的ネットワークについて考察。民間団体による戦前のこどもを対象とした具体的な場（ホール）をもつ芸術活動／教育と、誌面での仮想的つながりが、こどものための芸術教育活動として果たした機能と役割にを明らかにするとともに、その先駆的展開が現代に与えている影響について提示した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　岡野　聡子

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
幼児教育、キャリア教育、地域福祉	子どもと環境、キャリア教育、子育て支援、地域福祉

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 (1)メールアドレスの使用による学生相談	平成 20 年 4 月～ 平成 23 年 3 月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、保育学生のキャリア支援を担当した。学生のキャリア発達を促すためには、自分の話を親身に聞いてくれる人が必要となる。そのため研究室のメールアドレスを学生に周知し、いつでも質問に応じられる体制を整備した。学生の疑問に対して即時対応が可能であり、そのことによって学生は指導者を身近に感じるだけでなく、研究室に来訪する回数も増え、進路決定に対する意欲が高まった。
(2)学内掲示板を利用した学生の質問への回答	平成 20 年 6 月～ 平成 23 年 3 月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、キャリア支援の一環として、1 年生の 4 月から 2 年生の 3 月まで合計 5 回の進路希望調査を実施した。その中に自由記述欄を設け、進路相談を含め、日常生活の中での悩みや疑問を匿名式で書かせた。回を重ねるごとに自由記述への書き込みが増え、それらの質問に対する回答を 3 日以内に学内の掲示板に貼り出した。掲示板での回答方式により、学生同士の情報共有化を推進しただけでなく、自分の抱えている悩みが他の人も抱えている悩みであったということを知るきっかけとなり、学生内の安堵感を作り出すことができた。
(3)視聴覚教材の活用	平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。保育を専攻する学生は、子どもと接する経験が豊富であるとはいえず、また教科書の記述や講義だけでは、学生は子どもに対するイメージがわきにくいため、ビデオ教材を適宜使用した。映像を通して子どもの実像を実感し、理解を深めるように工夫している。また、ビデオ教材は学生が受身的に観て終わりということになりやすいので、ビデオ視聴前に課題を与え、問題意識を持ってビデオ教材を視聴させるようにしている。なお、その課題に対する解答へは、採点をして返却をしている。それらの過程により、学生の子どもに対するイメージが豊富になり、教育効果が上がっているといえる。
(4)体験学習を取り入れた授業	平成 24 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。授業内において幼稚園や保育所にて実際に活用できる教材研究を体験的に行わせる工夫をした。その結果、学生アンケートにおいても就職後にすぐに使用できるものであると好評を得た。
(5)LINE アプリを活用したキャリア支援の実施	平成 28 年 6 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の講師として、キャリア形成科目（キャリアデザインⅠ・Ⅱ、キャリアディベロップメントⅠ・Ⅱ、キャリアスキルアップⅠ・Ⅱ、インターンシップ）を担当した。奈良学園大学のキャリア教育は、1～3 年まで実施し、就職活動が本格化する 4 年次は、学生と教員の実質的支援がなくなる。そのため、これまでのキャリア教育で培った力が発揮されるよう、LINE アプリを用いてキャリア支援を実施した。任意登録としたが、2017 年 5 月現在で全学生 100 名中、52 名が参加をし、一般企業志望者である 38 名は全て加入し

		ている。なお、LINE アプリを通して、教員と情報交換をすることで、5 月 22 日時点における一般企業就職内定者は、64.1%という成果を上げることができた。
2　作成した教科書、教材 (1)平成 23 年度キャリアデザイン「一般企業就職希望者へのキャリア支援教材」（教材）	平成 24 年 5 月	平成 23 年 9 月 26 日～平成 24 年 1 月 31 日までに講義をした内容を「一般企業就職を目指す学生のための支援教材」としてまとめ、作成した。一般企業就職希望者（3 年生 106 名）を対象として、企業研究の方法やエントリーシート・ＳＰＩ試験対策などの教育課程外にあたるキャリア支援の提供も手厚く行った。キャリア教育の本来的目的である就労意欲の向上を実現するために外部講師の充実も図った。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学キャリアセンター （総頁数）186 ページ （所属）環太平洋大学キャリアセンター、 （使用した科目名）キャリアデザイン
(2)仏教保育行事「まことの保育」 ～学校法人安居院 あぐい幼稚園の実践事例から～ （教材）	平成 24 年 6 月	私立園は、園独自の保育方針や保育カリキュラムを持っている。その中で、保育に仏教思想を取り入れている園は数多くみられる。特に仏教保育を展開している私立園に就職を希望している学生のために、仏教保育とは何か、生活の中での仏教保育の取り入れ方、仏教三大行事（降誕会・成道会・涅槃会）、行事で使用する楽譜集等も含め、一つの冊子としてまとめた。仏教系私立保育園を目指す学生に貸出をし、好評を得ている。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学こども発達学科 （総頁数）37 ページ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）子どもと環境
(3)「キャリアデザイン　サブノート」（教材）	平成 24 年 9 月	本学の後期に開講される「キャリアデザイン」は、４つの分室（教職支援室、幼保施設分室、公務員支援室、企業等就職支援室）に分かれて指導を行っている。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。 そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （作成者）小野憲一、岡野聡子、大野光二、三木澄代、久田孝 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）64 ページ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）キャリアデザイン
(4)『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』 （教科書）（再掲）	平成 25 年 2 月	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 （単著・共著）単著

		（判型）A5 判 （総頁数）71 ページ （出版社）ＥＲＰブックレット （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）子どもと環境
(5)『子どもの生活理解と環境づくり ～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』（教科書）（再掲）	平成 25 年 3 月	2005 年の中央教育審議会答申では、幼児期教育の意義と役割を「学校教育の始まりとして幼児教育をとらえれば、幼児教育は、知識や技能に加え、思考力・判断力・表現力の基礎を育成する役割を担っている」とした。そのことによって、幼児教育のあり方が、学校教育をより意識したものに変化してきていることがわかる。本書では、幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」をを軸として、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 （単著・共著）共著 （判型）A5判 （総頁数）166ページ （出版社）ふくろう出版 （担当頁）pp. 1-12、pp. 134-137、pp. 140-142、pp. 137-140（翻訳担当） （担当部分）第1章第1節、第5章第3節1、2-2・3 第5章第3節2-1の翻訳 （編著者）岡野聡子・筒井愛知 （分担執筆者）松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科 （使用した科目名）子どもと環境
(6)「キャリアデザイン　サブノート ～改訂版～」（教材）	平成 25 年 4 月	前年度に作成したキャリアデザインサブノートに、自己理解や業界研究、社会の理解の開設、就職活動の資料を新たに加えて作成した。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （編集・著者）岡野聡子 （共著者）小野憲一、石渡嶺司、三木澄代、大野光二 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）90 ページ （担当頁）pp. 2-9、pp. 34-45、pp. 51-86 （所属）環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科 （使用した科目名）キャリアデザイン
(7)「教職表現力演習ノート」（教材）	平成 27 年 4 月	前年度に実施した教職表現力演習の授業内容を精査し、教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集・著者）西辻正副、山本美紀 （共著者）岡村季光、岡野聡子、高木悠哉、松井典夫 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂

		（総頁数）152 ページ （担当頁）pp. 114-115 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ
(8)「キャリアデザインⅡ～職業研究ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアデザインⅡでは、職業研究「働くこととは」をテーマとして、さまざまな業界から各分野において活躍している・してきた外部講師を招聘し、仕事に対する考え方や進め方を研究することを授業目的としている。本ワークブックでは、聞いたことをメモにまとめる要約力と、まとめた情報を簡潔に示す構造力を身に付けられるように構成した。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアデザインⅡ
(9)「キャリアディベロップメントⅡ ～職業研究 2 ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアディベロップメントⅡでは、①自己理解の深化、②職業への理解を深める、③インターンシップの 3 部構成としており、1 年次で学んだことを活かす内容となる。本ワークブックのねらいは、課業分析等を通して、仕事内容への理解を深めると同時に、多様な職種の情報を収集し、学生自身が具体的な職業像を獲得できることである。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアディベロップメントⅡ
(10)「2016 年度版 教職表現力演習ノート」（教材）	平成 28 年 4 月	前年度に活用した「教職表現力演習ノート」を精査し、改訂版として教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集）西辻正副、岡村季光 （共著者）岡村季光、岡野聡子、桑原祐子、 高木悠哉、山本美紀 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂 （総頁数）109 ページ (担当頁) pp. 52-53 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ
(11)「キャリアスキルアップⅠ ～就活準備ワークブック①」（教材）	平成 29 年 4 月	キャリアスキルアップⅠでは、3 年生全員が履修をする科目である。1 年後に控えた教員採用試験や一般企業就職活動、公務員採用試験の準備をするにあたり、①就職活動の流れ、②インターンシップの概要、③履歴書の書き方、④ＳＰＩ試験の概要、個人・集団面接、グループディスカッション、集団討議の概要をまとめたものである。学びの積み重ねが可視化できるようにしたワークブックである。 （作成者）岡野聡子 （総頁数）48 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアスキルアップⅠ
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 学科長による評価	平成 20 年 3 月～ 平成 23 年 3 月	こども保育学科共同研究室実習・就職支援室にて、実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援を行った。こうした学生支援だけにとどまらず、研究助手として幼稚園や保育所への実施調査に携わったことや幼稚園現場の実情を講義内で講演したこと、全国保育士養成協議会等にて研究発表を行っていたことで、幼児教育における教育的・研究的な能力を有していると毎年

		評価をされた。
(2)環太平洋大学学長補佐/キャリアセンター長/教育経営学科長による教員評価	平成 24 年 7 月	5 年間の幼稚園教諭の経験を活かして、理論と実践を結びつけ「子どもと環境」の科目を担当していることを評価された。内容としては、授業にて理論と体験的な活動を取り入れて保育指導方法を示す工夫をしていることや、毎回のレポートや課題を学生に課し、それに対する学生へのフィードバック等、実務経験や授業改善への姿勢が、科目を担当するための教育的な能力を有していると評価された。
(3)平成 24 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境 大学名：環太平洋大学	平成 24 年 7 月	「子どもと環境」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。5 点尺度（不必要である（1 点）から必要である（5 点）まで）にて回答を求めた。回答結果は、①教科書の用語の確認:4.028（SD=0.839)、②授業内の本読み:3.676(SD=0.868)、③授業内の配布資料:4.408(SD=0.761)、④映像学習:4.535(SD=0.646)⑤体験活動:4.676(SD=0.708)、⑥室外授業 4.338(SD=0.918)、⑦グループワーク:4.436(SD=0.8)、⑧授業後の発展学習:3.859(SD=0.997)、⑨提出課題のフィードバック:3.944(SD=0.918)であった。体験活動に対する評価が最も高く、また、96%の学生が本講義を受けて自分のためになったと答えた。
(4) 平成 25 年度授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：環太平洋大学	平成 25 年 7 月	FD 活動の一環として、「生活の理解」学生による授業評価アンケートを実施した。履修者数は 209 名、回答者数は 172 名（有効回答率：82.2%）であった。質問紙は 15 項目から成り立ち、①学生自身の取り組みについて、②担当教員や指導方法等について 4 点尺度で実施した。評価結果の平均評定は 3.419 であり、総合的満足度は 3.445 であった。また、教材研究の授業内容を多く取り入れたこともあり、「授業への参加意欲が促されるような工夫がされていましたか」について 3.47 の評価をもらうことができた。
(5) 平成 26 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ 科目名：キャリアデザインⅡ 科目名：生活の理解 大学名：奈良学園大学	平成 26 年 4 月 ～平成 27 年 3 月	平成 26 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・キャリアデザインⅠ：3.37 ・キャリアデザインⅡ：3.43 ・生活の理解：3.65 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(6)平成 27 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：生活の理解（後期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名：キャリアディベロップメントⅠ（前期） 科目名：キャリアディベロップメントⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成 27 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	平成 27 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.68 ・生活の理解：3.06 ・キャリアデザインⅠ：3.51 ・キャリアデザインⅡ：3.44 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.4 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.37 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(7)平成 28 年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名：キャリアディベロップメントⅠ（前期） 科目名：キャリアディベロップメントⅡ（後期） 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成 28 年 4 月～ 平成 29 年 3 月	平成 28 年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4 点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.45 ・キャリアデザインⅠ：3.55 ・キャリアデザインⅡ：3.59 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.46 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.09 ・キャリアスキルアップⅠ：3.55 ・キャリアスキルアップⅡ：2.95

		いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(8)平成 28 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成 28 年 10 月 ～平成 29 年 3 月	平成 28 年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4 点尺度であり、回収率は 90.9%（履修者数：55 人、解答者数：50 人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.36 （全体平均：3.28） ・担当教員の話し方が明瞭かどうか：3.66 （全体平均：3.31） ・学生の理解や反応を見ながら授業していたか： 3.38（全体平均：3.29） ・授業の満足度：3.30（全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方・教育実践力が得られたか： 3.44（全体平均：3.36） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.20 （全体平均：3.27）
(9)平成 29 年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成 29 年 10 月 ～平成 30 年 3 月	平成 29 年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4 点尺度であり、回収率は 88.9%（履修者数：54 人、解答者数：48 人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.35 （全体平均：3.33） ・担当教員は学生が主体的かつ意欲的に学べるような授業づくりを行っていたか：3.38 （全体平均：3.31） ・新しい知識・考え方が得られたか： 3.48（全体平均：3.49） ・教育実践力やそれにつながる力を得られたか： 3.23（全体平均：3.33） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：2.96 （全体平均：3.21） ・授業の満足度：3.27（全体平均：3.38）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)兵庫県芦屋市立西山幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 1 月	兵庫県芦屋市立西山幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「幼児同士の育ち合い学び合いを育む」である。年長 2 クラス・年少 2 クラスの公開保育（劇遊び）を参観した。日常生活の中で取り上げた絵本への興味関心を深めるために、絵本を題材とした劇遊びを保育に取り入れた。幼児の発達に合わせたふさわしい活動を展開するためには、教員がどのような環境構成をする必要があるかについて，教員 8 人を対象に指導助言を行った。
(2)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 5 月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「新学期の保育の指導計画や教師の援助の在り方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。異年齢児の活動において、遊びを工夫して創りだすことや他の幼児の考えにふれ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わえるような援助について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。
(3)亀岡市議会「緑風会」会派視察における講師	平成 24 年 10 月	特定非営利団体岡山市子どもセンターは、岡山市内にある岡山国際児童年記念公園こどもの森の敷地を 2008 年から借りて、「冒険遊び場：おかやまプレーパーク」という子どものための遊びの広場の運営をしている。「おかやまプレーパーク」の運営および取り組みについて、①子どもの遊び場を確保する必要性、②ＮＰＯの取り組みと現状（ボランティアマネジメント）という２つの視点を用いて講演をした。おかやまプレーパークの運営は、市民ボランティアが中心となって活動を行っており、ボランティアマネジメントの重要性を言及した。

(4)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 11 月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の助言指導として携わる。研究テーマは、「2 学期の幼児の発達に合った援助のあり方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。運動会を終え、クラスとしての集団のまとまりがより一層感じられた。日常の保育における集団遊びについて、体験をより確かなものにするために振り返りの時間を設けること、集団遊びをイベントのように取り扱うのではなく、継続的・組織的に行い、積み上げていくことの重要性について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。
(5)岡山市子どもセンター・研究協力者	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	岡山市子どもセンターは、平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月まで、岡山市庭園都市推進課主催のＥＳＤプロジェクトから助成金（年間 200 万円）を獲得し、都市公園での遊び空間の創造をテーマとして、子どもの遊びの広場を展開した。筆者は、研究協力者として、公園を活用してできる遊びを提案したり、保護者アンケートを通して満足度を測定し、報告書にまとめる役割をになった。平成 24 年度は、5 ヶ所でプロジェクトを実施し、平成 25 年度は、6 ヶ所で行った。
(6)岡山市中央中学校・出張講義講師	平成 25 年 3 月	岡山市立岡山中央中学校の 1 年生に対して総合的な学習の時間を用いて、出長講義の講師として携わる。講演テーマは、「将来を考える３つのポイント」である。中学 1 年生は、普通学級 88 名、特別支援学級 10 名を対象として行った。何のために働くのかについて考察した後、20 問表や価値観シートを用いて自己理解を深めた。また、生徒による職業調べから、それらの職業に就くには、具体的にどのような学習をする必要があるかを解説した。最後に、学校卒業後の職業生活におけるライフイベント（結婚、出産、年収、転職等）の平均値をもとに解説した。
(7)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成 26 年 8 月	gid.jp 関西交流会において、「就職に関する「ストレス」を考える～ストレスチェックを通して、自分のストレス耐性を知ろう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では、ストレス耐性チェックを通して、自分が持つストレスを客観視し、ストレス解消法ではなくストレスと上手に付き合う方法の提案をした。また、性同一性障害の方が持つ就職活動・職場の人間関係での悩みについて事例を取り上げ、自己開示を含めたグループワークも実施した。実施場所は、大淀コミュニティセンター（大阪）で行い、受講生は 18 名であった。
(8)特定非営利活動法人男女共同参画ネット尼崎（尼崎市女性・勤労婦人センター）・出張講義講師	平成 27 年 3 月	2015 あまがさき女性フェスティバル記念講演会において、「カナダのコミュニティハウスに学ぶ支えあいのまちづくり」をテーマとし、90 分間の講演を行った。多文化共生の国カナダには、子どもから高齢者まで、さまざまな人々が利用するコミュニティハウスがある。そのコミュニティハウスの成り立ちとそこで実施されているサービスとプログラムについて紹介した。また、カナダのコミュニティハウスから学べることとして、コミュニティオーガニゼーションの概念を「人、もの、こと、ところ」、そして「時間の共有」という具体的内容に置き換えて述べた。社会保障の制度化が進む中で、福祉行政の専門分化が起こる過程についても解説した。実施場所は、尼崎市女性センター・トレピエで行い、受講者は 40 名であった。受講者満足度は 100%であった。2014 年度尼崎市立女性・勤労婦人センター事業報告書：p. 26

(9)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成 27 年 6 月	gid.jp 関西交流会において、「自分自身について知る～自己概念の揺らぎを体験しよう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では Twenty statements test=T.S.T/Who am I 法の心理検査も用いて、自己概念とは何かを解説した。また、「私の価値観を知ろう」をテーマとし、価値観の書かれた 15 枚のカードを、自分が大切にしたいと思う順番に並べてもらい、ペアワークを実施した。価値観カードのワークから、自己概念（自己が持つ自分のイメージ）がいかに揺らぎやすいか体験をしてもらった。実施場所はパシフィックマークス西梅田 14Ｆガクトホール（大阪）で行い、受講生は 20 名であった。
(10)2015 年度奈良学園大学公開講座「王寺町り～べるカレッジ」・出張講義講師	平成 27 年 7 月	奈良学園大学公開講座において、「子どもに求められる職業教育とは―キャリア教育の視点から―」をテーマとし、90 分間の講演を行った。講演では、キャリア教育が生まれた背景を解説し、キャリア教育が開発すべき社会生活を営む上で必要となる能力や態度について述べた。また、小学校から高等学校までのキャリア教育の取り組み事例を紹介し、能力開発を行う上で、最も重視すべき事項として、自己肯定感を育む必要性についても述べた。質疑応答の時間も 20 分程度取り、対話形式で講演を行い、大変好評であった。受講生は 18 名であった。
(11)平成 27 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 28 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（32 名）と保護者（33 名）65 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「ピンホールカメラ作り～小さな穴から見える不思議な世界～」を実施した。ピンホールカメラ作りを通して、光の仕組みについて解説をした。低学年児童には解説は難しかったが、ピンホールカメラを覗くと、映し出される映像が逆転しているということに対し、不思議さと驚きを感じ、その仕組みがどのようになっているのか関心が高まった。実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100％であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。
(12) 登美ヶ丘北中学校区地域教育協議会第 3 回スクールコーディネーター研修・出張講義講師	平成 28 年 9 月	「海外の地域コミュニティにおける活動～カナダ・バンクーバー市ネイバーフッドハウスの事例～～」をテーマとして、2015～2016 年度の科学技術研究費（若手研究Ｂ）の成果報告を兼ねて実施した。参加者は 7 名であり、現在、地域活性化事業を行っている者を対象として行った。カナダにおける移民支援組織の成り立ちやセツルメント運動における生活を包括的に支援する仕組み、ボランティアコーディネートの手法、コミュニティディベロップメントの概念についての解説を行った。多数の質問を受け、日本とカナダの文化的背景の差異はあるものの、地域における福祉活動の統合化には聴講者が共感し、高評価をいただいた。
(13)平成 28 年度三郷町立西部保育園第 3 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 28 年 12 月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「環境を通した教育・保育のあり方を学ぶ～保育の「質」を考える～」をテーマとし、①保育の質、質の高い保育とは、②保育環境評価スケールの使用方法の解説および実践を実施した。昨今、教育経済学の視点から、幼児教育の経済学や学力の経済学という書籍が発刊され、就学前教育の充実が強力な公共投資となりうることに注目が集まっている。幼児教育がもたらす効果（自己統制力、向社会的行動、等）について、海外の調査研究の結果を事例として取り上げ、解説した。また、保育環境評価スケールを実践し、保育環境の見直しや保育活動の振り返りを行った。受講生は 3 名であった。
(14) 平成 28 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 29 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（28 名）と保護者（30 名）58 名を対象として、科学遊び・学びの広場

		プロジェクト「色が変わる、まほうの水で描く世界」を実施した。レモン水（酸性）、せっけん水（弱アルカリ性）、石灰水（アルカリ性）を用意し、紫キャベツで染めた紙（リトマス紙）に模様を描き、化学反応によって紙の色が変わる様子を、酸性・アルカリ性の解説をした。学生主導で実施を行い、実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は100%であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。また、こうしたプロジェクトの実施により、学生の事業運営能力・スキルも格段に上がったと言える。
(15)平成 28 年度三郷町立西部保育園第 4 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマとし、3、4、5 歳児のクラス担任に保育環境評価スケールの結果を提示しながら、担任（保育経験 10 年以上）と副担任（保育経験 1 年）の結果を共有した。結果の共有では、保育経験 10 年以上の保育者は、自身の保育活動について個別具体的に思い出しながら、保育内容の質に関する発言が多くみられた。一方で、保育経験 1 年の新任保育者は、クラス全体を考えると概ね環境が整っていると回答し、全体的に高い評価をつけることがわかった。これらの結果を話し合うことで、10 年以上の保育経験を有する保育者は、新任保育者の視点を学ぶことができ、今後の指導に役立てることができると述べていた。新任保育者は、10 年以上の保育経験を有する保育者の発言を通して、保育の質について、より深く考えることができたと発言をした。園長からは、評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながると述べていた。受講生は 6 名であった。
(16)第 14 回「産学連携のための経営者セミナー」・出張講義講師	平成 29 年 3 月	奈良県大学連合が主催する産学連携のための経営者セミナーにおいて、「学生の主体性を育むキャリア教育の在り方とは」をテーマとして講演を行った。大学生活で身に付けておきたい能力（学士力、社会人基礎力、ジェネリックスキル、21 世紀型スキル）の解説をした後、本学のキャリア教育・キャリア支援を紹介した。また、2 名の学生から、インターンシップ成果報告会の発表もしてもらい、場内からは、学生が堂々と発表する姿勢を大変評価していただいた。受講生は 23 名であった。
(17)広陵町幼稚園保育園職員研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	広陵町幼稚園・保育園職員研修会の講師として、「保育の質を考える～保育環境評価スケールの活用を通して～」をテーマとして講演を行った。保育の質の定義を考えると共に、保育環境評価スケールを用いて、客観的に自身の保育活動を振り返る必要性について述べた。聴講者の中で、保育環境評価スケールの活用をしたことがある者は 1 名（大学時代に実施した）であり、初めて活用した者ばかりであった。新任保育者よりも保育経験が 10 年を超える者は、他園見学や研修の機会を積んできていることもあり、他園と自園を比較して評価を付けることから、自己評価が厳しくなる傾向があると伝えると、納得できると聴講生からの感想があった。また、適宜、客観的な評価指標を用いて保育活動を点検する機会を設けることには意義があるとの感想をいただいた。受講生は、45 名であった。
(18) 平成 29 年度北葛城郡内幼稚園教育研究会（総会）・出張講義講師	平成 29 年 4 月	北葛城郡幼稚園教育研究会の講師として、「保育の質を考える」をテーマとして講演を行った。保育の質を考えるために、幼児期における教育活動が、向社会行動や非認知能力の向上に影響を及ぼすという諸外国の研究結果を事例として取り上げた。 また、幼稚園内の保育・教育環境を評価するためのツールとして、保育環境評価スケールを紹介し、先生方に保育・教育環境のチェックおよび振り返りをしていただいた。聴講生からは、「幼児教育の重要性

		を改めて認識することができ、仕事へのやりがいを更に感じることができた」や「客観的指標を用いて自身の保育・教育を確認したことがなかったので、良い機会となった」と感想をいただいた。受講者は、90 名であった。
(19) 平成 29 年度第 1 回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成 29 年 5 月	第 1 回北葛城郡幼稚園教育研究会の園内研究会講師として、①幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について、②特別な支援を必要とする幼児の状態等に応じた計画的、組織的な指導の在り方についてをテーマとし、指導助言を行った。まず、各園の取り組みについて、実践報告をしていただいた。次に、講話者から、カリキュラム・マネジメントの概念について整理し、特別な支援を要する幼児の実態を把握するためのチェックリスト解説を行った。出席者は、12 名であった。(11 園の参加)
(20) 第 1 回吉野青年会議所事業合同会議・講師	平成 29 年 5 月	第 1 回吉野青年会議所事業合同会議の講師として、「学生を主体とした事業運営方法について～他者理解を深める技法とは～」をテーマとし、講義を行った。吉野青年会議所事業は、吉野広域に住む小学生を対象とした課外活動を実施し、青少年健全育成に取り組んでいる。大学生が主体となって事業を実施するため、事業目的を共有し、事業立案方法を提示した。また、参加者がコミュニケーションを円滑に行えるようにするために、他者理解を深める 2 つのワークショップを開催した。今回は、奈良学園大学の学生 17 名、奈良女子大学の学生 2 名、吉野青年会議所から 5 名が参加をした。
(21) 平成 29 年度三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 29 年 5 月	三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会の講師として、「社会人に求められるコミュニケーションスキルとは」をテーマとして、講義を行った。研修では、第一印象の重要性、気持ちの良い挨拶の方法、身だしなみ、言葉遣いの 4 点を重点指導項目として、実施した。また、3 月まで学生であった新任保育士の方々に、学生と社会人の違いについて考えてもらい、社会人としての自覚を再認識していただいた。受講生からは、「姿勢等、指摘されるまで意識していなかった」や「保護者様の対応に役立てます」といった声をいただいた。受講生は、5 名であった。
(22) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 5 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。ＫＪ法を用い、①子どもの様子、②環境構成、③教師の援助の 3 つの観点から、各クラスの担当教員に本日の保育活動を振り返っていただいた。結果として、自然環境に関する項目の出現が見られなかったため、自然環境における環境構成の再点検と栽培活動に関わる子どもの様子を取り上げる必要性が明らかとなった。また、本園に関する重点項目として、①異年齢児交流、②遊び空間の改善・集中できる遊び作りの工夫、③遊び内容の充実、④教材の確認が取り上げられた。教員からは、「自然環境の項目がないことに対し、当たり前のことで、見過ごしていたと思う」や遊び空間の改善に関する意見があった。今回は、教員 9 名の参加であった。
(23) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 9 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、

		今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(24) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 10 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(25) 平成 29 年度第 2 回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成 29 年 10 月	北葛城郡幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(26) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 11 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(27) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 11 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(28) 平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園長研修会講師	平成 30 年 1 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園にて、広陵町の幼稚園 5 ヶ園の園長先生を対象とし、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの進め方について指導助言を行った。また、園内目標の立て方についてワークショップを実施した。園長 5 名、教員 5 名の参加であった。
(29) 平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 2 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの捉え方」をテーマとし、広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園で実施した 1 年間のカリキュラム・マネ

		ジメントの実践を交えながら、講義をした。講義後、西部保育園のＰＤＣＡサイクルの構築について、参加保育士と園長先生を交え、話し合った。保育士 8 名の参加であった。
(30) 平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 3 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマに指導助言を行った。12 月に実施した保育環境評価スケールの結果をもとに、3~5 歳のクラスの担任と副担任に示し、評価結果の差について、話し合った。評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながる。保育士 6 名の参加であった。
5　その他 (1)NPO 法人ウエルス会報誌 2012 年 夏号 「園庭の芝生化事業の推進と幼少期における身体機能の形成について」	平成 24 年 6 月	教育現場における園庭・校庭の芝生化事業は、1970 年頃から始まり、現在では、研究機関や自治体、ＮＰＯ法人等による芝生化の実践や調査がされている。本会報誌では、調査研究の概要や園庭や校庭の芝生化が子ども達にもたらす 4 つの教育効果（外遊びの増加、情操の安定、芝生の弾力性がスポーツ活動に安全性と多様性をもたらすこと、環境教育の生きた教材として活用できること）を言及した。 （科目担当実績）子どもと環境

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)幼稚園教諭二種免許状取得	平成 11 年 3 月	免許状番号　平 10 幼二め　第 804 号（京都府教育委員会）
(2)プロジェクトワイルドエデュケーター資格取得	平成 18 年 7 月	財団法人公園緑地管理財団：資格番号なし
(3)保育：子育てアドバイザー（初級）	平成 21 年 4 月	特定非営利法人保育：子育てアドバイザー協会： 認定番号　第 10001024 号
(4)修士（都市政策）	平成 23 年 3 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻（都市政策修士 第 730 号）「修士論文題名：現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを めぐって～」
(5)小学校教諭二種免許状取得	平成 23 年 7 月	免許状番号　平二三小二第六号（京都府教育委員会）
(6)生涯学習コーディネーター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 31110009 号
(7)生涯学習 1 級インストラクター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 11110009 号
(8)メンタルケアカウンセラー資格取得	平成 25 年 7 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第 134014563 号
(9)キャリアカウンセラー資格取得	平成 25 年 9 月	日本キャリア教育学会：認定登録第 214 号
(10)メンタルケア心理士資格取得	平成 25 年 10 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第 134014563 号
(11)准ケアストレスカウンセラー資格取得	平成 25 年 11 月	財団法人職業技能振興会：ＪＣ-080018
(12)ガイダンスカウンセラー資格取得	平成 26 年 12 月	スクールカウンセリング推進協議会 認定番号：第 14030010 号
(13)修士（学校教育学）	平成 28 年 3 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻（学校教育学修士 第 8401 号）「修士論文題目：多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―」
2　特許等 特記事項なし		

3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 こども保育学科共同研究室内実習・就職支援室担当	平成 18 年 3 月～ 平成 23 年 3 月 （5 年間）	実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援に携わる。実習支援では、教育実習事前事後指導の教員補助として園内における環境構成の指導や指導案の指導の他、実習園との連携協力を構築して実習後の学生へのフィードバック体制を確立した。就職支援では、京都市内の園を中心として毎年 2 月に 30～40 園を訪問し、保育現場が求める人物像の聞き取り調査を実施した。その調査結果を活かして、就職支援プログラムの構築に役立てた。
(2)特定非営利法人岡山市子どもセンター おかやまプレーパーク運営委員	平成 24 年 3 月～ 現在に至る	特定非営利法人岡山市子どもセンター（岡山市北区久米 348）の事業の一つである「おかやまプレーパーク」の運営委員に着任し、月に 2 度、岡山国際児童年記念公園こどもの森へ出向いて活動を行なっている。『自分の責任で自由に遊ぶ』ということをモットーとし、子どもがのびのびと思いっきり遊べるように敷地内の禁止事項（例えば、木登り禁止等）をなくし、やりたい遊びを実現できる遊び場の確保に力を注いでいる。年間事業計画の見直しや助成金の申請、行政と交渉をする際の助言役を務めている。
(3)特定非営利活動法人ウエルス　理事	平成 24 年 5 月～ 平成 27 年 3 月	特定非営利法人ウエルス（京都府亀岡市）の顧問に着任し、幼稚園や保育所における自然環境としての園庭の芝生緑地化推進活動の助言を行っている。園庭の芝生化により、子ども達の遊び方の変化や外遊びの増加、それに伴う健全な肉体形成等、芝生化によってどのような教育的効果があるか、共同研究を行った。（住所：法人事務所:〒621-0805　京都府亀岡市安町大池 11　日進ビル 101）
(4)陶芸ギャラリー吾子　代表	平成 25 年 10 月 ～現在に至る	京都市東山区泉涌寺地区は、陶芸職人の町として知られているが、職人の高齢化が深刻な問題となっており、その地に根付いた文化が途絶えようとしている。そのため、地域振興の一環として、平成 25 年 10 月よりギャラリーの開催している。展示作品は、陶器に関わらず絵画なども展示している。地域のお祭りがある際には、無料で開放し、音楽会なども行っている。（京都市東山区泉涌寺東林町 17-29）
(5)広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会・ ひと部門　部会長	平成 27 年 7 月～ 平成 28 年 3 月	本審議会は、まち・ひと・しごと創生法に基づく国の長期ビジョン及び総合戦略を勘案し、内閣府地方創生推進室が示す「地方人口ビジョン策定のための手引き」及び「地方版総合戦略策定の手引き」に基づき実施した。また、国の総合戦略が定める 4 つの政策分野（①地方における安定した雇用を創出する、②地方への新しい人の流れをつくる、③若い世代の結婚、出産、子育ての希望をかなえる、④時代に合った地域を創り、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する）に則り、まち部門、ひと部門、しごと部門の作業チームに分け、筆者はひと部門の部会長の任命を受け、総合戦略策定に向けた審議を実施した。
(6)広陵町幼保一体化推進会議　副会長	平成 27 年 8 月～ 平成 28 年 7 月	本会議では、「町立幼稚園・保育園における幼児教育・保育のあり方等について」を主題とし、5 回にわたって審議を行った。審議事項は、①幼稚園・保育園におけるより良い教育・保育の提供、②現在策定中の幼保一体化総合計画に基づいた町立幼稚園・保育園の施設整備の促進、③就学前の子どもたちへの子育て支援の充実であり、それらを答申としてまとめ、報告した。
(7)広陵北幼保連携型認定こども園設計業務公募型 プロポーザル選定委員会　委員	平成 28 年 3 月～ 平成 28 年 6 月	本プロポーザルは、広陵町における幼保の一体化を進めるため、広陵北幼稚園と広陵北保育園を統合し、広陵町で初めての幼保連携型認定こども園の設計業務の委託先を選定するものである。9 社から応募があり、一次審査において 5 社を選定、2 次審査において業務委託先を決定した。平成 30 年 4 月 1 日に開園予定であり、災害時の乳幼児を対象とした福

		祉避難所としての機能も有する施設となる。
(8)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	平成 28 年 7 月～ 平成 29 年 3 月	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業のうち、先行で実施している 8 事業に対して、その実施状況および事業の有効性に関する審議を行った。
(9)出会いウィーク2017実行委員会　委員	平成 28 年 10 月 ～平成 29 年 3 月	本事業は、奈良ＮＰＯセンターが主体となり、奈良県下にて活動を実施するＮＰＯおよびボランティア団体の広報活動の一環として実施したものである。奈良学園大学ボランティアサークルも参加をし、「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」のＰＲを行った。実施日は、平成29年2月18日（土）～19日（日）であり、当日の参加団体は36団体であった。2日間の参加者総数は、800名程度であった。
(10)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	平成 29 年 8 月～ 現在に至る	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業の実施状況および事業の有効性に関する審議を行っている。
4　その他 (1)環太平洋大学キャリアセンター運営委員会　委員	平成 24 年 4 月～ 平成 26 年 3 月	環太平洋大学キャリアセンターは４つの分室（教職支援室・幼保施設分室・公務員就職支援室・企業等就職支援室）に分かれて進路支援をしている。月に 1 度キャリアセンター運営委員会を開催し、各分室との連携を図っている。また、環太平洋大学の場合、体育会に力を入れている学生も多く、4 年生の前期が終わるまで進路決定を引き延ばす学生の姿が見られ、そうした学生に対して、ゼミ担当教員も含めて支援を実施した。
(2)環太平洋大学教職課程委員会　委員	平成 24 年 4 月～ 平成 25 年 3 月	学生の介護等体験実習が円滑に運営できるように、実習の事前事後指導およびオリエンテーション、個別指導に携わる。集団指導では、介護等体験実習を終えた学生を招いてパネルディスカッションを行うと共に、実習簿やお礼状の書き方の指導を担当した。個別指導では、特別支援施設での実習生 8 名、社会福祉法人での実習生 10 名を担当した。
(3)環太平洋大学幼児教育言語力育成研究会　代表	平成 24 年 4 月～ 現在に至る	2008 年に改訂された学習指導要領では、「言語活動の充実」が育成すべき重要項目の第一として取り上げられた。そのことを受け、現場における言語活動の充実を特に幼児を対象として調査することを目的として岡山市立大野幼稚園や岡山市立江西幼稚園の園長先生とともに研究会を立ち上げた。幼稚園の教育現場と大学組織が協同して、幼児期における言語活動の充実に関する調査を実施している。
(4)環太平洋大学ハラスメント委員会　委員	平成 25 年 4 月～ 平成 26 年 3 月	本学では、アカデミック・ハラスメントやジェンダー・ハラスメント、パワーハラスメント等を総合的に取り扱う部としてハラスメント委員を設置している。今年度は、ハラスメントのない教育研究環境づくりの一環として、オープンスペースを利用して学生相談を行うことや、学生が研究室内にいる場合は、ドアを開けておくなど、誤解やトラブルを未然に防ぐ対策をとった。
(5)奈良学園大学キャリアセンター運営委員会　委員	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	奈良産業大学から名称変更された奈良学園大学は、2 学部 2 学科（人間教育学部・保健医療学部）が新設された。それに伴い、大学組織も改変され、平成 26 年 4 月に就職支援課からキャリアセンターへと名称変更および業務内容の変更や統合がなされた。新体制のもと、学生のキャリア形成支援体制の確立にむけた会議を重ねているところである。また、人間教育学部では、教員採用試験支援室として教職センターを設置し、運営を行っている。平成 30 年 4 月から、キャリアセンター副センター長に任命された。

(6)奈良学園大学ボランティアサークル　顧問	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学において、ボランティアサークルの顧問となり、学生指導をしている。平成 27 年度、平成 28 年度に吉野青年会議所とボランティアサークルに所属する大学生と協働で吉野広域において「小学生を対象としたキャンプ事業」を実施した。また、平成 27 年度には、奈良県庁主催の財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」に奈良学園大学ボランティアサークルで応募し、20 万円の採択を受けた。採択のテーマは、「科学遊び・学びの広場プロジェクト」であり、三郷町内の小学生を対象とし、参加者総数は 150 名であった。三郷町教育委員会からも高い評価を受けた。また、第 14 回大和川七夕まつり（平成 29 年度）において燈花会事業を実施し、参加した学生が大和郡山市ロータリークラブから感謝状を授与された。平成 29 年度の部員数は、22 名（4 年生：4 名、3 年生：6 名、2 年生：9 名、1 年生：3 名）であった。平成 30 年度の部員数は、25 名（4 年生：6 名、3 年生 10 名、2 年生：3 名、1 年生 6 名）である。
(7)奈良学園大学サッカー部　顧問	平成 29 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学において、サッカー部の顧問となり、学生支援をしている。平成 29 年度の部員数は、20 名（4 年生：5 名、3 年生：5 名（マネージャー：2 名）、1 年生：10 名（マネージャー：1 名））である。平成 30 年度の部員数は、16 名（4 年生：3 名、（マネージャー：2 名）3 年生：6 名（マネージャー：2 名）、1 年生：3 名）である

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1『次世代の教育原理』	共著	平成24年10月	大学教育出版	2011 年から小学校・中学校・高等学校と順次完全実施される新学習指導要領の意図を汲み取りながら、教職を目指す学生に教育の基礎・基本的な知識と教養を身に付けさせるための入門書である。 A5 判　全 159 ページ 編著者：中田正浩・松田智子 共著者：中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 本人担当部分：第 7 章「キャリア教育とは」(pp.102-117)を単著 本人担当部分の概要： キャリアの語源やキャリア教育が導入された背景などを概観しながら、キャリア教育で育成すべき能力を取り上げ、小学校・中学校・高等学校で取り組むべきキャリア教育の目標と内容について解説した。キャリア教育とは特別な教育活動ではなく、日常の教育活動を通して、子ども達の学ぶ態度や意欲を育てながら、児童・生徒が社会とのつながりを見出していくための教育であることを学生にわかりやすく解説している。
2『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』	単著	平成25年2月	ERP ブックレット	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 A5 判　全 71 ページ
3『子どもの生活理解と環境づくり～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成25年3月	ふくろう出版	幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説した。 A5 判　全 166 ページ 編著者：岡野聡子・筒井愛知 共著者：松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ 本人担当部分： 第 1 章「幼児教育から小学校教育へ」第 1 節「幼児教育と領域「環境」」（pp.1-12）、第 5 章「社会環境とのかかわり」第 3 節「異文化を理解することとは」「1.異文化理解と異文化交流」（pp.135-137）、「2-2）文化の獲得」（p.140-141）、「2-3 持続発展教育の考え方」（pp. 141-143）を単著。
4『保育者・小学校教師のための道しるべ”』	共著	平成29年10月	学文社	本書は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭をめざす短大生、大学生、専門学校生に向けて、就職する前に身に付けてほしい保育者・教師に求められる基礎知識、専門知識、技術をまとめたものである。 B5 判　全 140 ページ 編著者：田中卓也・松村齋・小島千恵子・志濃原亜美・木本有香 共著者：黒田政広・秀真一郎・五十嵐淳子・中田尚美・岡野聡子・岩治まとか・雲津英子・谷原舞・橋爪けい子・光井恵子・今村民子・佐々木由美子 本人担当部分： 第 8 章「保育実習・幼稚園教育実習・小学校教育実習で実力を発揮しよう」(1) 保育実習とはどのような実習なのか（pp.58-60）、(2) 幼稚園教育実習とはどのような実習なのか(pp.60-62)、(6) 実習日誌、指導案とはどのようなものなのか(pp.68-72)を単著。カフェタイム(コラム)②ちょっと知っておきたい保育室の飾り付け（p.23）を単著。
5『MINERUVA はじめて学ぶ保育 12 子育て支援』	共著	平成30年3月	ミネルヴァ書房	本書は、子ども・子育て支援新制度、保育教諭など最新の動向を盛り込みつつ、保育の基本を解説したものである。 B5 判　全 220 ページ 監修：大方美香・名須川知子 編著者：伊藤篤（12 巻担当） 共著者：岡野聡子・大方美香・大西晶子・寺村ゆかの・植木信一・山岡テイ・高畑芳美・吉岡洋子 本人担当部分： 第 1 章　子育て支援の必要性と制度(レッスン 1 子育て支援が求められる社会背景①子育てをめぐる社会環境の変化、②少子化という社会現象、③子育てをめぐる諸課題、レッスン 2 子育て支援に関する制度・施策の展開①わが国における子育て支援の制度・施策の歩み、②少子化の進行と子育て支援)、第 4 章 海外に学ぶ子育て支援

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				（レッスン13北米における子育て支援①多文化主義国家であるカナダ、②カナダにおける子育て家庭支援の展開、③カナダにおける子育ての現状、④子育て家庭支援の取り組みーファミリーリソースセンター、⑤子育て家庭支援の取り組みーネイバーフッドハウス、⑥子育て家庭支援の取り組みーノーバディズパーフェクトプログラム）を単著。
「学術論文」 1　現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みをめぐって～（修士論文）	単著	平成23年3月	大阪市立大学大学院	ブリティッシュ・コロンビア州にあるネイバーフッドハウス協会は、「人々の交流」を目的とし、そこで取り組まれるサービスやプログラムは、個人と個人を結びつける「ハブ」のような役割を担っている。イギリスを発祥とするセツルメント文化を受け継ぐ現在のネイバーフッドハウスの取り組みや、１つの施設において人間のライフサイクルを見越した複合的なサービス展開をしている場作りに着目し、日本の行政サービスとの違いを論じた。 A4判　全48ページ
2　保育士養成校における就職活動の特徴と課題～就職支援の実践から見えるもの～	共著	平成23年12月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要 第49集(pp. 1-6)	保育者を目指して本学に来た者は、目的意識をはっきりと持って入学してくる者が多く、保育職内定率も100%である。しかし、授業や実習指導を受ける中で、保育職への不安が学生の間で広まるため、1年生の4月からキャリア支援プログラムを実践した。その実践から、卒業後の支援（特に早期離職者への対応）にも言及した。 代表者：吉村啓子 共著者：岡野聡子 本人担当部分：1年生の4月から実施したキャリア支援プログラムの企画および実施、評価を担当した。
3　非営利団体における社会サービスの提供に関する一考察～カナダのバンクーバー市におけるゴードンネイバーフッドハウスの取り組み～	単著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号(pp. 31-39)	社会事業の専門分化が進むにつれ、需要と供給をスムーズに行うために子ども・高齢者・障害者といった分野ごとの支援体制が確立されてきた。 本稿で取り上げたカナダのバンクーバーにおけるゴードンネイバーフッドハウスは、専門的な福祉ニーズの提供を事業の主軸にするのではなく、地域に住む人々を結びつける基盤（コミュニティ・ベースド）としての「交流の場」から醸成される相互扶助関係の構築に注目をした事業を展開している。その在り様をミッションステイメント・サービスとプログラム内容・運営資金・ボランティアスタッフの４つの観点から考察した。
4　環太平洋大学におけるキャリア支援体制の確立にむけて（Ⅰ）	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号（pp. 61-68）	大学のキャリア教育をめぐる昨今の動向をみると、就職に至るまでの支援過程の議論が活発であり、「キャリア形成支援」という言葉で表現されている。今後の課題は、キャリアセンターでの支援において、学生一人ひとりのキャリア形成を図ることを意識して支援を行う必要があることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：杉田郁代 本人担当部分：本学キャリアセンターのキャリア支援プログラムの企画および実施を行い、評価をした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成24年12月	環太平洋大学研究紀要第6号（pp.1-8）	言語活動の充実に関する研究は、小学校教育における事例研究が多く、幼児期における研究は管見するあたり少ない。本研究では、幼児期における言語活動とは何かを概観し、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され保育実践として取り組まれているか、岡山市公立幼稚園教諭を対象としてアンケート調査から考察を試みた。第1章では、学校教育において「言語活動の充実」が取り上げられた背景を述べ、言語活動の充実について総評を行った。第3章では、調査結果をまとめ、その分析を行った。調査結果（有効回収率：38.7%）では、伝達力や思考力を意識した保育を行っていると回答した者の割合は6割を超えた。伝達力、思考力を意識した保育実践では、伝達力よりも思考力を意識した保育実践のあり方に戸惑いが見られた。言葉にかかわるカリキュラムを園内で作成しているケースは 32.5%、小学校「国語科」との連携を図っている園が 43.2%であった。「言語活動の充実」は、保育実践として取り組まれてはいるが、園独自でされており、今後は事例研究などを通して、保育の質の均一化も含めた検討も必要となってくることが明らかとなった。第 4 章では、言語活動の充実をめぐる保育現場の戸惑い等の課題も含めて評価を行った。 代表者：岡野聡子 共著者：大野鈴子 本人担当部分：質問紙の作成およびアンケート結果の分析と考察を行った。
6　幼児期における科学的思考を育む環境づくりに関する一考察	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第7号（pp.97-105）	本稿では、5 歳児を対象として、池田・戸北（2004）の科学の基礎的発言の分析手続を用いて、日常生活では出会わないゾウリムシを観察させることによって、幼児期における科学的萌芽および知的好奇心を育む教育環境の整備について検討した。 第1章では、科学的思考の萌芽に関する先行研究を取り上げ、この研究が小学校教育課程の生活科や理科教育の分野で実施されてきたことを述べ、幼児を対象とした科学的思考の萌芽に関する研究の少なさについて言及した。第 2 章では、池田・戸北(2004)や加藤(2007.2008.2009)の科学的思考の萌芽の分析手法を概観し、本稿で扱う分析手法を解説した。第4章では、実践の分析結果を考察し、科学の基礎的な発言へと移行する可能性がある一時的な表現の発言や対象物を身体で表現しようとする姿が目立ったことや、対象者の 1 名のみが科学の基礎的な発言をしたことに対し、対象物が身近でなかったこと、そうした物事に触れる体験が少なかったことに起因するのではないかと考えられた。今後の課題として、幼児の「知的な気付き」の発言を促す環境づくりについて、教師の態度に着目をして検討を要することが明らかとなった。 代表者：筒井愛知 共著者：岡野聡子、平松茂 本人担当部分：分析手法の検討を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　体験活動と授業後の発展学習を重視した保育内容「環境」の授業展開―大学 2 年生前期授業における実践事例から―	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第 7 号（pp. 29-36）	領域「環境」における授業展開では、「身近な環境とかかわる力の育成」を学生に具体的に理解させるため、講義形式の授業だけではなく、体験活動を取り入れている事例も多く見られる。本稿では、体験活動の他に授業後の発展学習課題を学生に与えることによって、領域「環境」への理解や幼児教育に関する学習意欲の向上が見られるかについて、授業評価アンケートや授業後の感想文から分析を行った。 アンケート結果からは、本授業が「役立った」と回答した者は、95.8%であった。体験活動では、実際に自然や素材と触れ合うことで、具体的に授業の趣旨を理解することができたという感想が多くみられた。発展学習では、提出された課題をまとめて授業中に配布をするなど、他者の考えに触れることができるフィードバックについて高く評価していた。授業後の感想からは、「子どもの様子やどのような遊びを取り入れるべきか自分で考えることができた」とあり、子どもの理解に対して一定の学習効果が見られた。学生自身の体験を通して、子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りのあり方を学べた点が大きかったといえる。その一方で、授業後の発展学習の交流（フィードバック）の方法が今後の課題であると思われた。
8　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価に向けて―「聞く力」を量的に捉える試み―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第 8 号（pp. 115-122）	子どもの育ちを可視化し、教育実践が効果的に行われたかを教員が振り返るためには、教育効果の測定と評価が必要である。しかし、幼児教育は、小学校以降の教科の学習と異なり、遊びを通して総合的に学習されるため、「見えない教育」と言われ、その教育効果を量的に測定したものは管見するあたり数が少ない。本調査では、京大ＮＸ5-8 を用いて、内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の測定を試みた。 調査対象者は、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉の教育以外に力を入れているＢ園の園児を対象とした。結果は、課題ごとに素点を出し、換算表に従って偏差値に変換した。言語性という項目を設け、2 要因分散分析を行った結果、Ａ園とＢ園には違いがなく、課題の主効果（$F(3,42)=4.481, p<.01$）のみ有意であった。本調査の取組から、園の取組の違いを結果に反映しにくいなど、測定の難しさが浮き彫りになった。また今後は、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の測定について考える必要がある。 代表者：岡野聡子 共著者：吉村啓子、大野鈴子 本人担当部分：第 1、2、3、5 章部分 第 1 章では、言語活動における教育効果の測定の評価の必要性と測定方法における先行研究を提示した。第 2 章では、調査対象園の概要をまとめ、第 3 章では、調査概要および研究手法、研究分析手法について提示した。第 5 章では、検査結果の提示および今後の課題として、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の量的測定に対して言及した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９　NIE を取り入れた教育実践研究―大学 2 年生を対象とした時事教養Ⅰの授業実践を通して―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第 8 号(pp. 147-154)	学生の基礎学力の向上は、本学にとっても大きな課題であり、この課題解決の一つとして、新聞の利用による教育の導入を平成 25 年 4 月からはじめた。授業は学部単位で行い、420 名が履修をした。授業内容は、山陽新聞社による講義と現在注目されている新聞記事を題材（出生前診断やユニクロ世界同一賃金、アベノミクス等）を使用した講義を実施した。また、講義内に 3 回の試験を行い、講義後には学生アンケートを実施した。試験は、難易度が同程度の試験問題を使用しが。試験結果を分析すると、分散値にそれぞれ有意差は出ていないが、1 回目と 2 回目、2 回目と 3 回目、3 回目と 1 回目の平均点の間に有意差が見られ、点数が上昇していることから、基礎学力（ここでは言語力）と教養が身に付いたということが言えると思われる。また、学生アンケートからは、これまで新聞を読まなかった学生も新聞に関心を持てるようになったことが明らかとなった。 代表者：渡邉規矩郎 共著者：仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、 岡野聡子、正木友則 本人担当部分：第 2 章部分 第 2 章では、日本における NIE の導入の変遷にふれ、どのように大学教育において実践がされてきたか、先行研究を提示した。
１０　都市公園における子どもの遊び場環境づくりの可能性―ＮＰＯと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を通して―	単著	平成26年10月	奈良学園大学研究紀要第 1 号(pp. 11-23)	本稿は、子どもの遊び場環境の変化にふれながら、おかやまプレーパークの積み上げてきた実践と今回のプロジェクトの事業評価・考察を行うことを目的としている。筆者は、2013 年 3 月から NPO 法人岡山市子どもセンターのプレーパーク運営委員となり、都市公園における子どもの遊び場環境作りに携わってきた。2012 年 4 月から NPO 法人岡山市子どもセンターは、岡山市庭園都市推進課と協働して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施する運びとなり、筆者は、プロジェクトに参加をし、2 年間に渡って記録を取りまとめてきた。実践記録を用いて、「遊び場の設定と専門性の有無のマトリクス」を作成し、遊び場の設定と遊びの種類がどのような人員配置によって運営がされていたかを分析した。今回の分析結果として、緑の遊び場（ESD）プロジェクトの目的である「子どもが岡山市における中心市街地の公園の魅力を、遊びを通して発見し、原風景として子どもの記憶にとどめてもらいたいという願い」には来場者アンケートの回答も含め、十分応えられているものの、「公園内との緑とのかかわりを深めるための遊び場づくりを目的とした」では、合計 53 種類の遊びのうち 8 種類の設定であり、15%の実施率であったことが浮き彫りとなった。今後の改善点として取り上げるべき項目が明らかとなった。
１１　キャリア教育とキャリア支援の相互展開による実践と課題について―キャリア教育・キャリア支援における教職員連携の取り組みから― （査読有）	単著	平成26年12月	人間教育学研究第 2 号（pp. 131-138）	大学におけるキャリア教育やキャリア支援は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。 キャリア教育は、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力の育成を目指して、教員主導のもとにカリキュラムの構成・授業の実施がさ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				れてきた。一方のキャリア支援は、従来の就職課で実施してきた就職活動に直結する学生支援を職員が担っている。昨今では、こうしたキャリア教育とキャリア支援を全学的・体系的に見直す動きがある。すなわち、教職員が職務分掌の枠を超えて連携するということである。本稿では、K大学を事例とし、キャリア教育とキャリア支援の連携について、その実態と課題を明らかにすることを目的としている。 まず、K大学が育成する人物像について述べた後、キャリア教育とキャリア支援の全体図を提示し、その実態を俯瞰した。次に、キャリア形成科目において、キャリア支援にあたっている職員のヒアリングで得た情報等をもとに、キャリア形成科目のカリキュラムの見直しおよび改善結果を提示した。そのことで、キャリア教育内で把握できなかった個々の学生のニーズを把握することができ、キャリア支援につなぐ体制を整備することが可能となった。今後の課題は、就職活動準備は 3 年生の後期から本格的にはじまるのだが、学習意欲の低下が見られる 1,2 年生に対し、早期のポジティブ・アクションが 3 年生以降の進路を決める上で重要となると思われる。
１２　子育て支援の多様化に関する一考察―子育て支援施策の揺らぎを越え、「チルドレン・ファースト」の舞台へ―	共著	平成27年3月	幼年児童教育研究第 27 号兵庫教育大学幼年教育コース（pp. 115-126）	本稿では、子育て支援の変遷について国の施策を概観しつつ、その中で、子育て支援の対象者や実施運営主体が多様化していく様子を整理し、子育て支援の今後の課題について検討することを目的としている。「子育て支援」という言葉が行政の諸文書に登場してから 25 年目を迎えるが、その間、子育て支援の実施主体の多様化から、子育て支援が誰によって、どのように実施されているのかが見えにくい状況が生じているという課題があり、本稿において子育て支援の類型化を試みた。類型化では、横軸に支援の実施主体として公的主体、民間主体を取り上げ、縦軸に支援のニーズとして個別的ニーズ、社会的ニーズを取り上げて分類した。その分類に従って、子育て支援の具体的事例を取り上げ、今ある子育て支援の現場が持つ課題について論じた。子育て支援の変遷や事例の考察から、子育て支援は多様な実施主体の活動によって量的拡大をしてきたが、今後は子育て支援の質的保障の検討や点の支援を面の支援へとつなげ、子育て支援のネットワーク体制を確立することが求められると同時に、子どもの最善の利益を考えた「子どもの育ち」における議論の深まりの必要性が明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：佐伯岳春、吉富裕子、馬場陽子 本人担当部分：第 1、2、3-（1）、4 章 第１章では、多様化した子育て支援を類型化し、その事例を提示することによって、今後の子育て支援の課題について考察する必要性について提示し、第 2 章では、日本における子育て支援の変遷を公文書や先行研究を用いて論じた。第 3 章（1）において、子育て支援の類型化を試みた。第 4 章では、子育て支援の量的拡大から質的保障への転換へといかにつなげるべきかを論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３　カナダ・ネイバーフッドハウスにおける世代間交流の研究：フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの事例から	単著	平成27年9月	奈良学園大学研究紀要第3号(pp.9-27)	本稿では、カナダのフロッグホロウネイバーフッドハウスで2011年4月から2014年3月までに取り組まれた世代間交流プロジェクトの実態を明らかにすることを目的としている。 ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って展開され、多世代が集う場が形成されている。本プロジェクトは、若者と高齢者の交流の質に目を向け、異世代間の相互理解を深めるプログラムを3年間に渡って実施したことに意義がある。研究方法は、まず、フロッグホロウネイバーフッドハウスが発行している世代間交流プロジェクトの報告書“*Generation Citizenship Seniors + Youth Toolkit*”とフロッグホロウネイバーフッドハウスのホームページに掲載されている情報を手掛かりとして、世代間交流プロジェクトの概要を把握した後、ユースサービスコーディネーターA氏と運営責任者であるB氏、参加者である高齢者のC氏、若者のD氏に対してインタビュー調査を実施した。 プロジェクトの主要メンバーは、18名の若者（30歳以下）と6名の高齢者（50歳以上）の計24名であった。2011年～2012年度は、主要メンバーを対象として、①コミュニケーションスキルの獲得、②エイジズムへの理解を深める、③アセットマップの作成、④メンターリーダーシップ研修を実施し、2013年度に9つの世代間交流プロジェクトが実施された。主要メンバーをフォーカスグループとして2年間という時間をかけて育成していることは、他の世代間交流プログラムには見られないことである。また、補助金終了後も9つのプロジェクトのうち6つが現在も継続して実施されている。インタビュー結果からは、若者が高齢者との関わりの中で、他者理解を深め、高齢者の持つ生活体験の知に尊敬の念を抱く様子があり、高齢者は、若者と関わりにおいて目の前にいる若者だけとの関係性を構築しようとするのではなく、常に全体に対して配慮や気配りをする姿勢が見られた。
１４　カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ―利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性に着目して―　（査読有）	単著	平成27年12月	日本人間教育学研究第3号（pp.181-197）	本稿では、セツルメント運動を源流とするカナダ・ネイバーフッドハウスを研究対象とし、地域コミュニティにおける住民参画型の施設運営の在り方を考察することを目的としている。研究方法は、参与観察および聞き取り調査である。調査対象施設は、ゴードンネイバーフッドハウスであり、調査日時は、2010年3月1日～3月15日、2010年8月13日～9月11日、調査日時協力者は23名である。調査結果から、23名中、サービス・プログラムを利用し、ボランティア経験を有する者は11名（47.80%）であり、そのうちカナダ出身以外の者は10名（90.9%）であった。利用者からボランティアスタッフへ、ボランティアスタッフから利用者へとなる様子を、事例を通して検討した結果、利用者からボランティアスタッフとして活動を行う過程には、彼らにとって明確な活動動機があったわけではなく、そこでの活動が日常生活の一部として行われていることであり、「手助け」として捉えられていた。そして、ボランティアスタッフから利用者になる過程には、自己のニーズ充足だけでなく、利用者とのかかわりを通して、ボランティア

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				スタッフとしての役割意識から解放される様子があることが示された。ネイバーフッドハウスには、数字として出てこない「手助け」が数多く存在し、また、それが期待されているのであり、活動を支える大きな柱となっているといえる。
１５　多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―（修士論文）	単著	平成28年3月	兵庫教育大学大学院	本研究は、カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として、地域コミュニティを基盤とした日常生活を包括的に支援する体制や、多様な世代が集い合う場に着目し、子育て世代にとって、ネイバーフッドハウスがどのような意義と役割を果たしているかインタビュー調査から検討することを目的としている。調査結果からは、親世代における異世代との関わりは基本的にないと示されたが、親の視点から見た子ども世代における異世代との関わりにおける利点が取り上げられた。また、親世代の利用者が参画者として子育て支援の活動に携わる様子があり、支援を受けているという感覚ではなく、主体的に子育てに関わるという姿勢が見られる。日本の子育て支援の現場においても、利用者自身が子育て支援の活動に参画できるような場や枠組みを作り、利用者―ボランティア―子育て支援員の皆が水平目線でつながり合えるパートナーとしての立ち位置を手に入れることが重要なのではないかと考えられた。
１６　大学におけるキャリア教育の構造と展―本学におけるキャリア形成科目を事例として―（査読有）	単著	平成29年12月	人間教育研究誌創刊号（pp. 17-38）	本稿では、キャリア教育の変遷および大学におけるキャリア教育の構造を概観し、奈良学園大学人間教育学部におけるキャリア形成科目（共通教育科目群）の展開および培う能力について論じることを目的としている。本学の場合、学生の実態から、「基礎的・汎用的能力」の育成を重視し、キャリア形成科目の構造および培う能力指標の提示をした。また、今後の方向性として、専門科目群との連携におけるキャリア教育の授業展開の可能性について論じた。
１７　アサーションスキル獲得のための教材開発―学生が作成した事例を通して―（研究ノート）	単著	平成30年1月	人間教育ジャーナル第1号（pp. 25-44）	本教材は、平成 29 年度奈良学園大学人間教育学部 4 年次後期開講科目「教職実践演習」(必修・2 単位）にて活用したものである。本教材を作成した理由は、2 点ある。1 点目は、新規学卒者の就職率は年々上昇しているが、大卒者の離職率は 5 年続けて 30%を推移しており、若年者の離職理由の上位には「人間関係がよくなかった」が挙げられていることに着目したこと、2 点目は、筆者自身が学生とのかかわりを通して、学生が、自分の気持ちを口頭にて表現することに抵抗を感じていると思うことがある点である。 アサーションスキルの講義を 2 回に分けて実践したが、自分達が考えた事例を読んだ学生から、「私も、アルバイトにて、店長からシフトに入ってと何度も言われ、困った経験がある」等、各々の葛藤する場面に対し、共感する態度が見られた。葛藤場面に対し、どう対応するかを学生達が改めて問うたことにより、①自分の感情への気付きと表現方法、②他者の発言や行動の背景への気付きについて、考えるきっかけになったと思われる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１８　幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの実践研究 1－A公立幼稚園における園内研修を手掛かりとして－（研究ノート）	単著	平成30年3月	奈良学園大学研究紀要第8号(pp.127-141)	本稿は、筆者が平成29年4月から平成30年1月まで、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの適切な運営に向けて」をテーマとし、K町立A幼稚園にて行った園内研修での取り組みの内容とその成果を提示することを目的としている。取り組み内容は、①園の教育目標の明確化、②指導計画書の検討・改善、③保育・教育実践の記録の検討・改善である。全10回の園内研修の実践から、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントを実施する際、何から着手するか、どの項目から進めるかに戸惑いがあるという担任教諭からの意見が多数存在した。そのため、現時点において、カリキュラム・マネジメントに必要となる項目の抽出を試みた。項目数は、12 項目である。また、A 園における PDCA サイクルの思考を確立することは、次年度以降の課題となったが、カリキュラム・マネジメントに取り組むことにより、現場教員の保育実践に対する意欲が高まったという意見があった。
（その他） 「学会発表」 １　保育士養成教育と卒業時の学生満足感との関係	－	平成20年9月	全国保育士養成協議会第 47 回研究大会,研究発表論文集（pp.260－261）（函館国際ホテルロワジールホテル函館）	カリキュラムを工夫し、学生に対する丁寧な教育を実践しているが、その効果については実証的な検証が必要である。教員側の思いだけでなく、学生の客観的な評価を参考にするため、学生満足度調査を実施した。重回帰分析の結果、本学における全ての学科の中で、こども保育学科のカリキュラム内容や教職員の保育職におけるキャリア支援は、学生から高い評価を受けていることが確認された。 代表者：吉村啓子 共同者：松井祐子、松田智子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：カリキュラムの検討および、質問紙表の作成を行った。
２　より良い教育を目指すカリキュラム・マップの作成～ＦＤ活動の一環として～	－	平成21年9月	全国保育士養成協議会第 48 回研究大会,研究発表論文集（pp.222-223）（東北福祉大学）	本学において、養成するべき保育者像に適合した教育が実施できているか検討するため、科目ごとの到達目標とディプロマ・ポリシーの各項目の対応表（カリキュラム・マップ）を作成した。結果からは、保育士資格取得の科目には、幅広い教養を身につけるというディプロマ・ポリシーに沿う必修科目が少ないことが明らかとなった。そのため、教養として位置づけている日本の伝統文化教育なども教育実習事前事後指導で取り入れ、保育を学ぶ者の教養の質を高められるように実践も行った。 代表者：吉村啓子 共同者：中瀬惇、松井祐子、梅岡さと江、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：カリキュラム・マップの作成を担当した。
３　カナダにおけるネイバーフッドハウスの調査から学ぶもの　～日本における「子育て支援」の特徴を通して～	－	平成22年7月	大阪市立大学大学院創造都市研究科教員・院生共同研究シンポジウム（大阪市立大学大学院梅田サテライトキャンパス）	ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市で行われている地域の子育て支援のフィールド調査結果も含め、日本における子育て支援の現状と課題を述べた。ネイバーフッドハウスにおける子育て支援が親の支援をより強化した内容になっており、専門の労働相談員の常駐や雇用プログラムの開催、誰もが共用で利用できるコミュニティキッチンなどの物的サービスの環境がホリスティック（包摂的）に整えられている特徴について言及した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　現場が求める人材像～聞き取り調査をふまえて～	―	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集（pp.174-175）（甲府冨士屋ホテル）	社会に通用する人材を育成するには、学生の就職先が求めている人材像を正確に把握し、それを踏まえた教育内容を構築することが必要である。そのため、保育現場への聞き取り調査および学生アンケート調査を実施した。保育現場が求める人物像の結果では、主体性やコミュニケーション能力を重視するといった語彙が上位に並び、ピアノや絵画制作等の保育技術に関する項目よりも多かった。学生アンケートの結果からは、ピアノや絵画制作といった保育技術の習得に重きを置いていることが確認された。今後もキャリア支援の一貫として、社会人基礎力に示されている「人間性の育成を重視した教育」をより一層行う必要が明らかとなった。 代表者：吉村啓子 共同者：梅岡さと江、辻野孝、松井祐子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：聞き取り調査の実施および分析を担当した。
5　学生の進路決定を支援する～実習・就職支援室の活動報告～	―	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集（pp.176-177）（甲府冨士屋ホテル）	幼稚園・保育士養成施設として、早期のキャリア支援の重要性について言及した。具体的には、保育現場が求める人物像の調査や保育技術の指導、年 3 回の進路調査を踏まえた個人指導などである。2 年間という短い学生生活の中で、就職活動に費やす時間を有効活用するためにも、早期のキャリア支援プログラムの構築は必要であることが確認された。 代表者：岡野聡子、共同者：吉村啓子 本人担当部分：キャリア支援プログラムの構築を担当した。
6　幼児期における言語力育成と保育者の役割	―	平成24年3月	日本教師学学会第13回研究大会,発表要旨集(pp.24-25)（早稲田大学早稲田キャンパス 8 号館）	幼児教育において人的環境としての保育者の役割について提案した。環境に働きかける体験を，保育者がどのように捉え，幼児に言葉がけとして返していくかは保育の中では重要である。特に絵本や遊びを繰り返す中で幼児は多くに力を獲得していく。細切れの知識ではなくそれぞれの繋がりの中で，体験の繋がりや意味に気付いていく。この経験の積み重なりが，幼児自身の自信となり，自分を取り巻く環境政界に対しての信頼となる。そのためには，幼稚園としてどのようなカリキュラムが必要かについて，4 歳児と 5 歳児の具体てきな教育課程を示しながら提案した。 備考：日本教育新聞社の平成 24 年 4 月 16 日付第 12 面にて取り挙げられた。
7　領域「環境」における授業研究～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	―	平成24年9月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会,研究発表論文集（pp.268-269）(京都文教大学・京都文教短期大学)	領域「環境」の授業では、身近な環境とかかわる力の育成を学生自身に具体的に理解させるため、講義形式の授業と体験活動を取り入れている事例が多くみられる。本講義では、体験活動を取り入れつつ、授業内で取り扱った内容への理解を深めるための発展課題を授業後に学生に与えた。授業アンケートから、学生自身が体験を通して子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りを学べた点は大きかったと言える一方で、授業後の発展学習の交流の在り方の工夫が今後の課題として残った。 代表者：岡野聡子 共同者：松田智子 本人担当部分：授業実践を評価し、特に発展

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				課題のあり方を考察した。
８　大学生のキャリア意識とキャリア支援体制の確立に関する研究-環太平洋大学 3 年生を対象としたアンケート調査を踏まえて-	－	平成24年10月	日本キャリア教育学会第 34 回研究大会,研究発表論文集（pp.86-87）（滋賀大学大津キャンパス）	大学時代は、学生から職業社会への移行期にあたり、自分の将来や人生を考え計画できる力を身につけることがキャリア教育の目的となる。本学では、教育課程内外に捕らわれず、教職員が一丸となってキャリア支援体制を確立しようとしている。そこで、学生のキャリア意識に関する実態を把握するとともにキャリア教育の効果測定も含め、「大学生の職業観に関するアンケート調査」を 3 年生のキャリアデザイン履修者 346 名（回収数 264 名、回収率 78.6%）に実施した。調査結果では、職業・仕事に関する情報源において、学校での授業が 84.1%と最も多く、次に先生との会話が 81.5%を占めるなど、就職先の情報源としての役割を教職員が十分に果たしていることがわかった。しかしながら、大学卒業後の進路では就職希望者が 84.5%であるにもかかわらず、将来就きたい職業の具体名の記述を求めると、未回答が 43.2%との結果であった。このことから、大学は就職を考えるための情報は与えているが、各職業の具体的なイメージ形成という点では学生に対して十分な手助けができていないのではないかと考察できる。今後は、各職業の具体像を提示することが重要であることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共同者：小野憲一 本人担当部分：調査結果の分析および考察を担当した。
９　幼児期における言語活動の充実とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	－	平成25年3月	日本教師学学会第14回大会発表要旨集（pp.60-61）（秋田大学手形キャンパス）	幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、また保育実践としてどのように取り組まれているのか、伝達力や思考力の育成に関する具体的な実践事例にも着目をしながら岡山市内の公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を通して考察することを目的としている。岡山市内にある公立幼稚園合計 68 ヶ園の 459 名の教諭（常勤・非常勤問わず）を対象、調査時期は、2012 年 9 月 11 日～9 月 22 日の 12 日間である。質問紙の有効回答数は 178 票、有効回収率は 38.7%であった。 「言葉」にかかわるカリキュムを年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている園や、言葉のカリキュラムを園独自で作成している園もあるなど、幼児期における言語活動の充実は着実に進んでいるともいえる。今後は、幼児教育が学校教育のはじまりとして意識される中で、小学校の教育内容との連携・接続を考えた保育実践のあり方をより一層模索する必要があるだろう。
１０　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅰ）～大学 2 年生時の開講科目「生活の理解」のアンケート調査から～	－	平成25年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第22回全国大会兵庫大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～（p.262）（兵庫県立明石高等学校）	本学では、生活科を学ぶにあたって、教材への理解や生活科の内容を学ぶために「生活の理解」を 2 年生の前期に開講し、生活科の指導法については、3 年生の後期に開講をしている「生活科教育法」を受講することになる。生活科を学び始めたばかりの学生にとって、生活科に対するイメージがどのようなものであり、また、授業を受講する中で、生活科への理解がどの程度深まるかについて、量的・質的調査の両面から明らかにすることを目的としている。 第一回目のアンケート調査では、「生活科」と

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				いう科目を聞いたことがあるかという問いにて、58%が「ある」と答え、42%が「ない」と答えた。また、小学校時代に「生活科」を学んだことがありますかという問いでは、61%が「ある」と答え、12%が「ない」、27%が「忘れた」と回答した。「生活の理解」に対するイメージを自由記述にて回答を求めたところ、「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と 43%の学生が回答しており、生活科のキーワードともいえる「気付き」や「体験活動」といった言葉は現段階において見られなかった。また、学 生の中には「生活」という言葉を聞いて、衣食住をイメージする者も多く、「家庭科との違いは？」と質問をする学生もいた。今後も調査を続け、全 15 回の授業終了後に学生の生活科に対するイメージがどのように変容したか明らかにしたい。
１１　キャリア形成科目における授業改善と評価―「キャリアデザイン」における新たな取り組みの授業実践報告―	－	平成25年10月	日本キャリア教育学会第 35 回研究大会，研究発表論文集（pp. 64-65 ）（名古屋大学東山キャンパス）	本学の 3 年次に開講している「キャリアデザイン」(2 単位・卒業必修科目）では、進路選択に必要な知識を身に付けるためだけでなく、自己理解を深める中で自己表現力を高めることを目的としている。本発表では、平成 24 年度の授業内容本学学生を対象としたキャリア意識調査からキャリア教育における授業の在り方を再検討し、平成 25 年度の授業実践に活かしたことの事例発表を行った。
１２　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価を考える（Ⅰ）―幼児期の「聞く力」を量的に捉える試み―	－	平成26年3月	日本教師学学会第15回大会発表要旨集（pp. 80-81）（環太平洋大学）	幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価について、京大ＮＸ5-8 を用いて内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の内的要素を量的に捉える試みを発表した。今回の調査結果からは、各課題において、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉以外の教育に特に力を入れているＢ園に有意な差を見ることができなかった。今後は、言語活動の充実において、「聞く力」の測定だけでなく、「話す力」、「伝え合う力」の測定方法および評価方法についても検討する必要があると考えている。 代表者：岡野聡子 共同者：吉村啓子 本人担当部分：調査実施、結果の考察を担当した。
１３　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究Ⅱ～岡山型一貫教育の中における岡山市立大野幼稚園の取り組み～	－	平成26年5月	日本保育学会第 67 回（近畿ブロック）発表要旨集 (p. 542) (大阪総合保育大学)	岡山市における言語活動の充実を軸とした幼小中連携教育の実践を取り上げ、その中における岡山市公立幼稚園の言語活動の充実あるいは言葉の教育の保育実践の取り組みにおける考察を発表した。岡山市は、平成 14 年から岡山市地域協働学校施策を始め、その中で家庭・学校園・地域社会の三者協働による教育システムの構築や幼小連携および小中一貫教育を推進してきた。また、岡山型一貫教育と名付けた教育活動は、幼児期からの学びの連続性に着目し、幼小中連携教育の実践を行ってきたことが特徴であると言える。岡山市立大野幼稚園は、平成 23～25 年度まで、『園生活を楽しむための力の育成』を主題とし、副題に大野幼稚園の指導の重点である「言葉のキャッチボール（話す・聞く・伝え合う）を楽しむ幼児をめざして」を掲げ、実践研究に取り組んできた。指導上の工夫では、指導案に「話す・聞く・伝え合う」の項目を設け、教師が日々の教育・保育活動で意識できるよう配慮し

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				た。設定保育の工夫として、降園前の一日の振り返りにおいて、話し方の指導および聞き方の指導、特に話し手の内容を理解して聞いているかを確認しながら聞く力の育成を行っている。また、全教員が研究協議会に参加し、情報共有化に努めている。教師は、日々の教育・保育実践を行う中で、日々の活動が子どもの育ちにどのようにつながっていくかといった「見通しのもてる教育活動」は、教師の教育活動へのやる気や意欲を向上させる意義を含んでいる。「見通しのもてる教育活動」を実践するには、幼小中の教師が集うことのできる研究協議会等を整備することが重要である。
１４　プレーパークと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」の実践報告～岡山市街地の公園を利用した子どもの遊び場づくり～	単独	平成26年9月	こども環境学会合同セミナー研究発表・活動報告梗概集第３号（pp.46-47）（名古屋工業大学）	本発表は、ＮＰＯ法人岡山市子どもセンターと岡山市庭園都市推進課が協働で実施した「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012、2013」の活動内容および事業評価について振り返り、都市公園を利用した子どもの遊び場環境づくりの実践報告を行った。2012 年度は 5 箇所の公園にて子どもの遊び場を設定し、2013 年度は 7 箇所に増設した。「子どもが遊ぶ」という視点から見た各公園が持つ課題を提示し、その課題をどのように解決したか本プロジェクトの実施写真を用いて解説した。本プロジェクトの参加者は、年間 2000 名に上っており、保護者アンケートからは、「今後も是非参加したい・参加したい」と 95.2%が回答している。
１５　多世代間交流を可能とする場作り～カナダにおけるゴードンネイバーフッドハウスの事例を通して～	－	平成26年10月	日本世代間交流学会第５回全国大会要旨集（p.72）（姫路商工会議所）	本発表は、自主企画シンポジウム 1-Aにおける「子育て支援をめぐる世代間交流―高齢者の参加を中心に―」の話題提供者として登壇した。カナダ・バンクーバー市ウエストエンド地区に位置するゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを紹介し、多世代間交流を可能とする場作りについて考察した。ゴードンネイバーフッドハウスでは、子育て支援や高齢者支援、雇用支援等、約 30 種類のサービスやプログラムの大半を一時滞在者の留学生から現地の大学生、そしてウエストエンド地区に住むゴードンネイバーフッドハウスの利用者がボランティアスタッフとなって提供している。一つの施設内に多様なサービス提供の場を配し、ここを訪れる全ての人が「与え与えられる」といった互恵性を醸成する場の可能性について述べた。
１６　奈良学園大学におけるキャリア教育の取り組み（Ⅰ）―大学１年生を対象とした「キャリアデザインⅠ」を通して―	－	平成26年11月	日本キャリア教育学会第 36 回研究大会・研究発表論文集（pp.73-74）（琉球大学）	奈良学園大学は、奈良産業大学から名称変更をし、従来の学部学科を一新する形で人間教育学部と保健医療学部を設置した新設大学である。筆者は、人間教育学部に属し、キャリア形成科目を中心に担当をしている。本発表では、人間教育学部における 1 年次のキャリア教育の授業実践を報告することを目的とした。人間教育学部は「教育の三つのポリシー」を掲げると同時に、人間教育学部が目指す教育者像である「社会の中で一人の人間として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする、柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた教育者」である。これらのポリシーに適う人材育成をするために、１年次では、①自己を知る、②社会を知る、③人生設計の 3 つのユニットに分けて実施した。履修者は 110 人いるため、学部教員に協力をしてもらい、10 グループに分けて活動を行った。グループ学習での学びの成果は、スピーチコンテス

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				トという形で確認をした。 １年次の学びでは、各ユニットを通して、まず自己を振り返る活動と他者を知る活動であったと言える。また、5月に進路希望調査を実施したところ、教師のみを志望している者が 53 名（51.5%）であり、なんとなく教職を志望した学生像が浮き彫りになる結果が見えた。
１７　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望～大学２年生を対象とした「時事教養Ⅰ・Ⅱ」の授業実践～	－	平成26年12月	日本NIE学会第11回仙台大会・発表要集録（p.40）（東北福祉大学）	大学におけるキャリア教育は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すためのプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。環太平洋大学では、1年次から「社会人基礎力の育成」をテーマとしてキャリア教育に取り組んでいる。「時事教養Ⅰ・Ⅱ」は、キャリア教育の充実を目的とし、授業において試験的にＮＩＥを導入することとした。本発表では、その実践内容と成果について報告することを目的としている。ＮＩＥにて取り扱うテーマ設定および内容を構築するに際し、職業観や勤労観にふれられる内容を盛り込んだ。実践の成果では、①新聞活用を通して社会情勢に関心を持て、読書量が増えたこと（学生アンケートから）、②基礎学力の向上（内容確認テストの有意差から）、③意見の質の向上（振り返りシートから）が見られた。 代表者：岡野聡子 共同者：仲田輝康 本人担当部分：授業実践および実践結果の考察を担当した。 備考：本発表内容は、平成 26 年 12 月 24 日の山陽新聞に掲載された。
１８　カナダ・フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの取り組み～ Ｇｅｎｅｒａｔｉｎｇ Ｃｉｔｉｚｅｎｓｈｉｐ Seniors + Youth の実践から～	－	平成27年10月	日本世代間交流学会第６回全国大会（p.51）（追手門大学大阪城スクエア）	現在では、国内外問わず、世代間交流プログラムの開発が多様な形で展開されている。本研究では、カナダのイーストバンクーバー地区に位置するフロッグホロウネイバーフッドハウスで実施された世代間交流プロジェクト（2011.4～2014.3）を対象として、その概要や取り組みを明らかにすることを目的としている。本世代間交流プロジェクトの目的は、①世代間のつながりを創ること、②世代間のつながりを創るためのスキルを向上させること、③コミュニティが抱えるニーズを確認するスキルを養うこと、④コミュニティに変化を与えるプログラムを開発することの 4 点である。ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って提供され、日々、さまざまな人、さまざまな世代が施設を訪問する。その中で、多様な世代がそこで出会い、雑談を交わし合う光景を見かけることができるのだが、今回、施設側が世代間交流プロジェクトを実施するにあたって、「交流の質」に着目した点は大変意義深いものであったと思われる。プロジェクト参加者からは、「私たちは何年間かお互いのことを知っていたけれども、互いの人生について知ることはなかった」との意見もあり、他者理解を深めることができた結果も得られた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１９　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望（2）～大学２年生を対象とした「キャリアディベロップメントⅠ」の授業実践～	－	平成27年12月	日本 NIE 学会第 12 回奈良大会（p. 37）（奈良教育大学）	本発表は、平成 25 年度から実施しているキャリア教育における NIE 活用の授業実践を報告することを目的としている。受講生は奈良学園大学人間教育学部２年生（100 名）を対象としている。本授業は、NIE 実践を通して、社会人としての幅広い教養を身に付け、伝達力、思考力を磨くことを目的として実施した。授業内容は、①メディアリテラシーへの理解、②課題発見（NIE 実践）、③私から発信する現代的課題の３つのユニットから成り立っている。受講前後のアンケート結果では、新聞を読むことによって、どのような能力が高まると思うかでは、受講後は、「課題発見力」が身に付くとの回答が上位に出現した。新聞を読むことを通して、論点を整理することの必要性を学生が感じたという結果を得ることができた。
２０　保育内容「環境」の教授内容におけるシラバス分析の試み～ SPSS Text Analytics for Surveys を活用して～	－	平成29年3月	日本教師学学会第 18 回大会（pp. 54-55）（早稲田大学所沢キャンパス 101 号館）	保育士および幼稚園教諭を養成する大学教育機関を対象として、保育内容「環境」の教授内容の現状を、各大学のシラバスから分析・考察することを目的としている。授業概要やシラバスの内容の問題点や課題を探ることで、現代社会の諸課題に対応した保育者となる者が学ぶべき事項を研究することには意義があると考えられる。まず、7 大学のシラバスを web 上から取得し、その傾向を分析した後、近畿圏内の 47 大学のシラバス分析を SPSS Text Analytics for Surveys を活用して試みた。授業計画の分析結果からは、自然環境に関する項目の頻度が 45%と最も多く、社会環境に関する項目の頻度が 8%と最も少なく出現した。SPSS Text Analytics for Survey を活用したシラバス分析は、これまでの研究において見られず、初めての試みであった。本研究において、活用の有用性についても示すことができたと思われる。
２１　領域「環境」における授業内容の検討―大学における領域「環境」のシラバス分析を通して―	－	平成29年5月	日本保育学会第 70 回大会（川崎医療福祉大学）	本発表では、大学における領域「環境」の授業内容を検討することを目的としている。平成 30 年度の幼稚園教育要領改訂に向けた文部科学省中央教育審議会幼児教育部会が取りまとめた「現行幼稚園教育要領等の成果と課題」を見ると、「(2) 幼児教育において育みたい資質・能力の整理と、小学校の各教科等との接続の在り方」の中で 10 項目（①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量・図形、文字等への関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現）の指導内容が取り上げられている。その中で、領域「環境」と深く関連がある項目は、4 項目（下線部⑤⑥⑦⑧）に及ぶ。この審議内容は、今後の教授内容の在り方を左右するものであると考えられ、領域「環境」の授業内容の一層の充実が求められていると言える。本学の場合、環境構成の視点から園内を見学するという授業では、学生の関心を高めることができ、大きな成果が見られた。改善点としては、栽培・飼育活動を継続的に行う工夫および社会生活との関わりに関する内容の充実が求められると言える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２２　カナダにおける住民参加型地域福祉の推進のための方策とその工夫～”Everything Present in the Seed の資料分析から～	－	平成29年6月	日本地域福祉学会第 31 回大会（p.168）（松山大学）	本発表は、地域福祉活動に従事するスタッフやボランティアスタッフを対象としたリーダーシップトレーニングの指南書として、カナダ・キャピラノ大学が 2013 年に発刊した（1）Everything Present in the Seed Community leadership Training と（2）Facilitator’s GUIDE を概観し、どのような要素や内容が取り上げられているか、考察することを目的としている。研究の手法は、資料分析である。まず、(1) の資料は、13 項目から成り立っており、121 頁である。1～4 章までが地域福祉活動の概要とその必要性、所属している組織がある者はその活動の紹介、インターネットの有効活用について書かれており、5～13 章までは、リーダーシップとは何かやコミュニケーションスキルの獲得、プロジェクトの立案方法やファシリテーション、企画書の書き方といった実践的な内容になっている。(2) の資料は、(1) の資料を活用する者のための副読本となっており、67 頁である。本資料の特徴は、①本資料の読み手・扱い手を「スタッフ」として想定しているだけでなく、英語があまり得意でない移民者が読むことができ、扱える内容になっている点である。リーダーシップトレーニングが幅広い対象者に拓かれ、実践されることは、ボランティア主導で地域福祉活動を実施する上で重要なことだと言える。また、本資料は、各章が 7～9 ページの構成となっており、解説部分が 2～3 ページ、残りが実践的な内容となっているため、必要な場面に応じて必要な部分を提示できる工夫がある。今後は、本資料の利用者の意見を集め、どのような利点・難点があるのか考察したい。
２３　多世代交流の子育て支援をめぐる取り組み～カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として～	－	平成29年10月	日本世代間交流学会合 8 回大会（p.33）（熊本学園大学）	本研究は、セツルメント運動を源流とするカナダＢＣ州バンクーバー市のネイバーフッドハウスを事例として、多世代交流の子育て支援の在り方を考察すると共に、実現に向けた方策について検討することを目的としている。本研究では、Frog Hollow Neighourhood House、Kitslano Neighbourhood House、Gordon Neighbourhood House の 3 団体を調査した。多世代が集える工夫として、Frog Hollow Neighourhood House では、高齢者向けサービス（ヨガや太極拳等の健康増進）や中・高・大学生のボランティアリーダー研修を受講している者を子育て広場（Family Drop in Program）の手伝い・ワークショップ講師として参加をさせながら、子ども・親・若者・高齢者が集う場作りをしていた。Kitslano Neighbourhood House では、定期的に学齢期の子ども・親と高齢者が食事会を持つ場作りがなされていた。Gordon Neighbourhood House では、高齢者向けのランチ提供サービスにて、親子ランチ提供サービスを実施していたのだが、高齢者と子どもの食事のペースや食後に子ども達が走り回る等のことがあり、現在では多世代としての交流活動がなされていなかった。2 団体が多世代交流の子育て支援を現在も実施できている背景には、①それぞれの発達段階に応じた居場所があること、②スタッフの介入があることが示唆された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２４　吉野青年会議所と大学生の協働による小学生を対象としたキャンプ事業の実践報告～地域福祉活動への示唆～	―	平成29年12月	近畿地域福祉学会平成29年度大会（こうべ市民福祉交流センター）	本発表は、一社）吉野青年会議所よしのびと創造委員会と奈良県下の大学生（ボランティアとして参加）が協働し、小学生を対象としたキャンプ事業の実践活動報告をすることを目的としている。一社）吉野青年会議所と大学生は、事業当日までに計 6 回の合同会議を行い、事業目的の共有化や企画案の話し合い・発表を行った。事業実施後の振り返りでは、①社会人と大学生が協働によって得られたメリットや課題、②小学生にとっての本体験活動の意義、③小学生、大学生、社会人の異世代交流がもたらす価値、④地域資源の発掘と活用方法等が取り上げられ、社会人と大学生による事業は、多面的価値を生み出せる可能性が具体的に示唆された。
「研究報告書」 １　幼児期における「言語活動の充実」とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成25年2月	発行：環太平洋大学	幼稚園教育要領改訂（2008）にて取り上げられた「言語活動の充実」が、実際の保育現場においてどのように実施されているのか岡山市内の公立幼稚園に勤務をしている教諭を対象としてアンケート調査を実施した。本報告書では、特に伝達力・思考力を育成するための保育実践について、自由記述からの考察を行った。自由記述では、伝達力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者は 68.4%、思考力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者が 60%であった。また、自由記述による伝達力を意識した保育実践に関する具体的な取り組みへの回答が 146、思考力では 137 であった。その内容からは、思考力への取り組みに対する保育者の戸惑いがみられるものが多くあるという結果であった。 A4 判　全 37 ページ 代表者：岡野聡子 共同者：大野鈴子 本人担当部分：アンケート質問紙票の作成および分析、考察を担当した。
２　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012～岡山市における中心市街地の公園の利活用について～	共著	平成25年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012」	私たちを取り巻く社会環境は、都市化や情報化の進行によって急激な変化を遂げてきた。そうした社会環境の変化は、子どもの育ちにも影響を与えていると言われている。緑の遊び場プロジェクトでは、子どもを中心とした公園の利活用を目的とし、子どものための移動式の遊び場の提供を行った。５つの公園を会場として、約 2000 人が利用した。プロジェクトでは、自然物（木の実や葉っぱ）を用いたコラージュ製作や木工作、公園内に生えている樹木の名前などを当てるクイズや探検マップの製作など、遊びながら公園に親しみをもてる仕組みを提案・実践をした。本プロジェクトは、岡山市庭園都市推進課からＮＰＯ法人岡山子どもセンターが 200 万円の助成金を受け取り、実施した。 A4 判　全 55 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、 絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、 松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、 特定非営利法人岡山市子どもセンター

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　言葉の保育カリキュラム～幼児期における「言語活動の充実」の工夫～	単著	平成25年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成24年度教育研究助成成果報告書	幼稚園と大学が連携をして、幼児期における言語活動の充実を図るため、岡山市にある大野幼稚園と江西幼稚園と環太平洋大学が連携をして、言語活動の充実に関するアンケート調査を実施した。そのアンケート結果をもとに、伝達力・思考力の育成に着目をして、言語活動における指導方法や環境構成等のあり方について報告書としてまとめた。 A4判　全2ページ 本人担当部分：pp.10-11
4　緑の遊び場（ESD）プロジェクト2013～子どもの自由な遊び場を目指して～	共著	平成26年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト2013」	2013年度は、5つの公園から7つの公園に規模を拡大して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施した。また、前年度の活動に加え、大人が集える場作りの工夫も施した。たとえば、七輪カフェを設けたり、机やベンチを設けて、保護者の方や地域の高齢者の方など、多世代が集える場作りである。子どもを中心としたプロジェクトを通して、多様な立場の人々が出会える空間としての都市公園の利活用方法についても報告書の中で紹介をしている。なお、本報告書を用いて、こども環境学会第3回合同セミナー(2014.9)にて活動の発表を行い、奈良学園大学研究紀要（2014.10）では、事業の総合評価も行った。 A4判　全51ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター
5　伝達力・思考力を育む言葉の保育カリキュラムの開発～幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価にむけて～	単著	平成26年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成25年度教育研究助成成果報告書	本研究は、平成24年度の本助成金を利用して得たアンケート調査結果をもとに、幼稚園と大学が連携を取って幼児期の教育現場における言葉の保育カリキュラムの作成の検討および開発をすることをねらいとしている。当初の計画では、言葉の保育カリキュラムの作成まで行う予定であったが、現場での多様な実践の一つ一つが幼児の教育効果を高めているのかについて量的に捉える必要があるため、今回の研究では、伝達力・思考力を育む上でも重要となる「聞く力」についての教育効果測定を試みた。結果として、園の取り組みの違いを結果に反映しにくいことなどから、測定の難しさが浮き彫りになったことを報告書としてまとめた。 A4判　全2ページ 本人担当部分：pp.8-9
6　2015年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と遊ぼう！学ぼう！吉野体験ツアー」	共著	平成28年1月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3町5村）の高齢化率は35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生10名が連携し、吉野広域の小学3年生～6年生を対象としたキャンプイベント実施した。実施日は、平成27年10月31日～11月1日である。小学生の参加者総数は、16名であった。大学生企画では、①アイスブレイク、②吉野スタンプラリービンゴゲーム、③ものづくり、④自由創作の4つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4 判　全 84 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
7　2015 年度　ふしぎ☆いっぱい！小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成28年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」の助成金（20 万円）を取得し、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：しゃぼん玉づくり名人になろう 実施日：平成 27 年 11 月 21 日（土） 参加者数：58 名（子ども 38 名） 第 2 回：くるくるアニメーションづくり 実施日：平成 27 年 12 月 19 日（土） 参加者数：27 名（子ども 12 名） 第 3 回：ピンホールカメラを作ろう 実施日：平成 28 年 1 月 23 日（土） 参加者数：65 名（子ども 33 名） A4 判　全 35 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
8　2016 年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と天川村でキャンプ！はじめましてから広がる吉野の“わ”」	共著	平成28年9月	発行：奈良学園大学	昨年度に引き続き、吉野青年会議所と共に奈良学園大学ボランティアサークルと協働で小学生を対象としたキャンプ事業を実施した。今年度は、奈良教育大学、畿央大学の学生と共に、大学生企画として①アイスブレイク、②フィールドビンゴゲーム、③天体観測、④ものづくりの企画立案・運営を行った。奈良学園大学ボランティアサークルの学生は 19 名が参加し、小学生の参加者総数は 23 名であった。実施日は、平成 28 年 8 月 20 日～21 日である。学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。今年度は、「大学生と社会人とのより良い協働関係を結ぶために」をテーマとして、事業実施後にアンケート調査を実施し、その内容も報告書に含めた。 A4 判　全 90 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
9　2016 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成29年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（26 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：小さな宇宙 ～万華鏡の世界を探検しよう～ 実施日：平成 28 年 11 月 26 日（土） 参加者数：42 名（子ども 25 名） 第 2 回：空気砲を作ろう ～目で見る空気の力～ 実施日：平成 28 年 12 月 17 日（土） 参加者数：62 名（子ども 38 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				第3回：色が変わる、まほうの水で描く世界 実施日：平成29年1月21日（土） 参加者数：58名（子ども28名） A4判　全35ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
１０　2017年度吉野青年会議所事業報告書「ドキドキワクワク川上村で大冒険！～大学生といっしょに自然を学び・あそびつくそう！～」	共著	平成29年11月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3町5村）の高齢化率は35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生22名、他大学生が連携し、吉野広域の小学3年生～6年生を対象としたキャンプイベント実施した。実施日は、平成27年10月14日である。小学生の参加者総数は、30 名であった。大学生企画では、①アイスブレイク午前の部、②自然体験活動（魚つかみ、魚釣り）、③昼食づくり、④アイスブレイク午後の部、⑤ものづくりの4つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4判　全80ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
１１　2017年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（8万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2017年度は、1回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第1回：声コプターをつくろう ～音のふしぎを目で見て体験してみよう～ 実施日：平成30年1月20日（土） 参加者数：49名（子ども28名） A4判　全20ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
１２　三郷町の原風景	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	平成28年度から「三郷町まちづくり講座」に参加をし、本学学生、行政職員、町民の方々と共に三郷町の地域資源について学びを深めた。①龍田古道プロジェクト事業、②信貴山における竹プロジェクト事業、③三郷町民へのインタビュー調査を実施し、その内容を報告書としてまとめた。 A4判　全102ページ 報告書監修・編集：岡野聡子
「その他」 １　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅱ）～大学2年生前期開講科目「生活の理解」受講後アンケート調査から～	－	平成26年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第23回全国大会埼玉大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～(p.216)（埼玉大学教育学部附属小学校）	平成25年度の4月10日の第1回「生活の理解」を開講した際、本科目で何を学ぶのかイメージを問うたところ、43%の学生が「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と答え、家庭科のイメージが強いと回答する学生もいた。全15回の受講を通して、生活の理解に対する学生のイメージがどのように変容し、また前期で得た学びが、どの程度定着しているのかを

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				明らかにするため、質問紙法を用いて追跡調査を実施した。受講半年後の平成 26 年 1 月 21 日の調査結果（有効回答率：65.9%）から、授業で一番印象に残っている内容として、身近なものへの興味関心を高める活動が 47%、自然体験活動に関するものが 39%、その他が 4%、無回答は 14%であった。最も多かった活動内容に関する記述は、グミづくりであり、その印象に残っている理由とて、「美味しくなかった」や「（普段食べているグミに）砂糖がどれだけ入っているのか知った」とあり、自身にとっての予想外や発見が、半年経過した後も記憶に残っていることが示された。また、他科目との関連性では、科目名を取り上げた者が 57%おり、無回答は 37%であった。最も多かった記述は、「子どもと環境」であった。（※学会発表予定であったが、体調不良のため辞退し、発表内容は要旨集に掲載されている）
2　大学のキャリア教育におけるＮＩＥ活用～事例紹介～	単独	平成26年12月	第１回大学ＮＩＥ研究会（キャンパスプラザ京都 6F 第 2 講習室・京都文教大学サテライト教室）	今回の発表では、基礎学力向上の課題を解決すること、キャリア教育を充実させることを目的として設置された時事教養Ⅰ・Ⅱの科目をめぐって、ＮＩＥ活用の在り方や教材の作成方法について述べた。授業実践では、実際に授業で使用した「第８回若者の離職を考える」を取り上げ、教材作成方法や受講生の感想、実施後の教員側の感想について述べた。授業実践を振り返る中で、学生に教材を与え、無理やり読ませ、考えさせ、書かせ、対話することにこだわるよりも、ある程度一方的に知識として教える場面を増やし、考える力の土台作りをするというのも一つの選択肢であると提案した。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　岡 村　季 光

研　究　分　野	研究内容のキーワード
心理学	青年心理学，教育心理学，居場所，対人関係，自己

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1.キャリア教育の実践	平成 16 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて進路指導を継続的に行うため，常勤教員全員がオムニバスに担当する「課題研究」を開講した。授業では，学生の基礎能力向上のため履歴書作成（含.自己ＰＲ，志望動機），業者添削による小論文指導，漢字の学習を主に担当した。１回生後期～２回生前期に至る開講を行い，学生の進路への意識づけを喚起することができた。
2.ｅ－ラーニングを用いたプレゼンテーション発表実践	平成 21 年 10 月～平成 22 年 3 月	帝塚山大学経営情報学部の「教育相談」履修学生を対象に，インターネット教育支援サービス・TIES を用いて当該機関補佐員の協力の下，授業内で学生がプレゼンテーション発表を行っている様子を動画撮影し，履修学生内の範囲で公開した。その結果，自己のプレゼンテーション方法について省察を促すことができ，互いの学習内容を授業外でも参照・共有することができるようになった。
3.障がいへの理解及びＩＴ技能向上への実践	平成 23 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院の学生を対象に障がいへの理解及びＩＴ技能向上を目的として「情報処理法」担当教員と連携し，「精神保健」並びに「保育・教職実践演習」授業内で継続的にＰＣ並びに Word，Web メール，PowerPoint を使用させた。具体的には課題として発達障がいに関する書籍を自らで探して少なくとも３冊以上読み，その内容及びコメントを所定様式の Word で入力し，ファイルを Web メールにて添付し送付するように求めた。さらに同種の書籍を読んだ者同士ペアを組ませ，PowerPoint を作成・発表を求めた。知的障がい児・者施設実習の前後に当該実践を行った結果，学生の障がいに対する理解が進み，さらにＰＣを用いたレポート及びメールの作成スキル，プレゼンテーションスキルが向上した。
4.ピアヘルパー対策講座の担当	平成 23 年 10 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて平成 23 年度後期より３年間ピアヘルパー資格取得志望者の募集並びに対策講座の担当を行い，カウンセリング概論・カウンセリングスキル・青年期の課題とピアヘルパーの留意点について授業を行った。その結果，３年間で志願者 83 名中 66 名の合格者，合格率約 80%の実績を出した。
5.初歩の心理統計学を用いたデータ分析処理の実践	平成 28 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学にて平成 28 年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎)」において，高校の数学Ⅰの知識を利用した初歩の心理統計学を用い，調査や実験を通して取得したデータを分析することで，心理学研究法を学んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。

6.調査及び統計解析に基づく卒業論文の指導	平成 29 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学にて平成 29 年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」において，文献による先行研究の概観，仮説に基づく調査や実験の実施，統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。その結果，平成 29 年度は 4 名の学生が卒業論文を完成し，いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキルの育成を行うことができた。
2　作成した教科書，教材		
1.教育心理学テキスト共同執筆 『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』（再掲）	平成 21 年 10 月～平成 28 年 9 月	『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』を共同執筆した。帝塚山大学で担当する「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用した。
2.発達心理学テキスト共同執筆 『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』（再掲）	平成 23 年 10 月～平成 26 年 3 月	『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』を共同執筆した。奈良保育学院で担当する「保育の心理学Ⅰ」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1.奈良学園大学における授業満足度アンケート結果	平成 29 年度	前期は講義内容・方法に関して全体平均 3.25 に比し当該教員の平均は 3.38～3.41 であり，満足度に関して全体平均 3.38 に比し 3.39～3.55 であった。 前期は講義内容・方法に関して全体平均 3.30 に比し当該教員の平均は 3.35～3.58 であり，満足度に関して全体平均 3.41 に比し 3.38～3.80 であった。
2.帝塚山大学における授業満足度アンケート結果	平成 29 年度	教員の授業運営についての項目（７項目，４件法）は，前期において教員全体の平均 3.40 に比し当該教員の平均は 3.66 であり，７項目全てが教員全体の平均より 0.09～0.39 ポイント上回った。 後期において教員全体の平均 3.38 に比し当該教員の平均は 3.71 であり，７項目全てが教員全体の平均より -0.12～0.67 ポイントの差だった。なお，マイナスであった項目はプロジェクターに関する不具合に起因するもので，後日解決がなされた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1.奈良保育学院における教育相談業務	平成 13 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて学業成績不振者本人及び保護者を呼び出し，学校心理学の見地に基づく学業指導を行った。また，学校不適応を訴える学生の相談業務を随時行い，同時に予防的教育相談業務として遅刻・欠席が目立つ学生等，いわゆる“気になる”学生の把握及び対応を常勤教職員同士で連携を図りながら行っている。
2.奈良女子高等学校への出講	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	学校法人白藤学園の系列である奈良女子高等学校保育コースにて「保育演習」の授業を各学年に週に１時間担当することを拝命した。１・２年生には発達心理学及び教育心理学の基礎的内容を教授し，３年生には教育実習及び福祉を専門とする教員と連携し，各自の専門性に応じた授業の展開を企画・実践している。
3.奈良学園大学における学生支援センターのケース会議に参加	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学で、高校からの環境の激変や発達障害等による学生問題行動事象に対して、医療機関と連携して、学生のカウンセリングを継続的定期的に担当した。また該当学生にかかわる教員全員に対し「学生指導上の配慮の手紙」を発行するなどして、カウンセリング効果を組織的に実効あるものにするよう指導的役割を果たした。また、関係者が集まり該当学生につき論議するケース会議を月に１回の割合で定期的に主催した。

５　その他 1.奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績	平成 12 年 4 月～平成 26 年３月	奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科にて（平成 12 年４月～非常勤講師，平成 13 年４月～平成 26 年３月教育職員として），以下の科目を担当した。 「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（平成 12 年４月～平成 26 年３月。平成 23 年 10 月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。 「教育心理学」（平成 12 年 10 月～平成 26 年３月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「教育心理学」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において教育・保育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育・保育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（平成 13 年４月～平成 26 年３月。平成 23 年４月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修１単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。 「精神保健」（平成 13 年４月～平成 23 年９月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「精神保健」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において子どものメンタルヘルスに関する授業を行い，それによって，学生に発達障がいについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）」（平成 13 年 10 月～平成 26 年３月。平成 24 年 10 月～科目名変更予定） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）（専門科目，２年次配当，半期，必修１単位）においてカウンセリングの理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生にカウンセリング・マインドを育成する教育効果があった。
2.帝塚山大学経営情報学部経営情報学科における教育実績	平成 17 年 10 月～平成 24 年３月まで	帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の非常勤講師として，以下の科目を担当した。 「教育心理学」（平成 17 年 10 月～平成 24 年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。

帝塚山大学経営情報学部経営情報学科における教育実績（続き）		「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（平成 18 年４月～平成 23 年９月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育現場における生徒・進路指導の理論と実際の現場の様子を紹介する授業を行い，それによって，学生に教育における生徒・進路指導のあり方について理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成 18 年 10 月～平成 24 年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリングマインドの必要性について理解させる教育効果があった。
3. 帝塚山大学現代生活学部居住空間デザイン学科における教育実績	平成 22 年 4 月～現在に至る	「教育心理学」（平成 22 年４月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成 22 年 10 月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリングマインドの必要性について理解させる教育効果があった。
4. 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績	平成 26 年 4 月～現在に至る	「教職表現力演習Ⅰ」（平成 26 年４月～平成 29 年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅰ」（専門科目，１年次配当，通年，必修２単位）において，新聞記事や評論文等を参照する，あるいは講話を聴き文章を作成する授業を展開した。それによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力のうち特に「書く力」である「文章表現力」の基礎を身につける教育効果があった。 「教職表現力演習Ⅱ」（平成 27 年４月～平成 29 年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅱ」（専門科目，２年次配当，通年，必修２単位）において，アカデミックな文章を読み，書くためのトレーニングを行った。具体的には，文章の論理性の理解，データの読み方，書籍輪読，内容発表およびディスカッションである。それらの取り組みによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力が養われ，特に「書く力」である「文章表現力」を身につける教育効果があった。

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「教育心理学Ａ（初等）」（平成 27 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学Ａ（初等）」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において，就学前・初等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に就学前・初等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育心理学Ｂ（中等）」（平成 27 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学Ｂ（中等）」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に中等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（平成 28 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（専門科目，３年次配当，通年，選択４単位）において，ライフステージにおいて特に重要視されている青年期を中心とした発達の理論を学習するとともに，青年期の諸側面について心理学の視点から理解を深めるた。また，卒業論文を視野に入れ，パソコン操作技能及び統計の基礎的知識習得にも取り組んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。 「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（平成 28 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，初等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（平成 28 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリング及び心理教育に関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に中等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「保育相談支援」（平成 28 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談支援」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，幼児教育現場における保育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における保育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（平成 29 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，４年次配当，通年，選択４単位）において，卒業論文執筆に向けた先行研究の渉猟及び文献の読解に取り組んだ。その結果，卒業論文執筆に必要な序論構成を組み立てる力を養う教育効果があった。 「卒業研究」（平成 29 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，４年次配当，通年，選択４単位）において，仮説に基づく調査や実験の実施，統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。その結果，平成 29 年度は 4 名の学生が卒業論文を完成し，いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキル育成の教育効果があった。
5. 平成 26 年度奈良学園大学公開講座の登壇	平成 26 年７月 12 日	平成 26 年度奈良学園大学公開講座に登壇し，講演を行った。 本講演の内容は，1)様々な学際領域から「居場所」をどのように捉えられているのか，2)実証的研究から見えてくる「居場所」とは何なのか，3)「居場所」づくりにはどのような視点が重要なのか，の３点であった。
6. 奈良女子大学文学部人間科学科における教育実績	平成 27 年 10 月～平成 28 年３月	「青年心理学特殊研究」（平成 27 年 10 月～平成 28 年３月） 奈良女子大学文学部の「青年心理学特殊研究」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，生涯発達に関する理論を理解し，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について授業を行い，それによって，学生に自らのライフを振り返り展望しながら論理的に思考する教育効果があった。
7. 大和高田市立看護専門学校看護学科における教育実績	平成 28 年４月～現在に至る	「人間の心・精神」（平成 28 年４月～現在に至る） 大和高田市立看護専門学校看護学科の「人間の心・精神」（１年次配当，半期，１単位）において，多岐にわたる心理学の領域，研究及び歴史についての基礎的知識を学んだ。本講義によって，心の働きやシステムについて理解を深め，心理学の歴史や研究における知識を得られる教育効果があった。
8. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成 28 年 10 月３日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
9. 一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成 28 年 11 月 15 日	一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。

10. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	平成 29 年９月５日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
11. 一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成 29 年９月 25 日	一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
12. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成 29 年 10 月３日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
修士（教育学）	平成 13 年３月	奈良教育大学　第 817 号 「修士論文題名：自己及び他者との関係における『居場所』の個人差」
教員免許	平成 13 年３月	中学校教諭専修免許状（社会）取得（学校心理学付記） （平 12 中専修第 20 号，奈良県教育委員会）
学校心理士	平成 16 年 11 月	第 82689 号 （平成 26 年 12 月更新，平成 31 年 12 月まで有効）
２　特許等		（な　し）
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 教務全般の企画・運営	平成 13 年４月～平成 26 年３月	奈良保育学院にて教務係としてカリキュラム・時間割・年間行事の編成，成績管理，入試業務，奨学金業務，紀要編集委員その他関連する事務処理を主任の立場で活動した。
2. 学年担当（担任）	平成 13 年４月～平成 26 年３月，平成 29 年４月～現在に至る	奈良保育学院（平成 13 年４月～平成 26 年３月）及び奈良学園大学（平成 29 年４月～現在に至る）において学年担当（担任）を受け持ち，学生の日常における生活指導，学校心理学の見地に基づく成績不振者への学業指導及び学校不適応を訴える学生及びその保護者の相談等を受け持った。
3. 学生自治会顧問	平成 14 年４月～平成 26 年３月	奈良保育学院学生自治会の顧問として学生主催の新入生歓迎会，学院祭（体育祭・文化祭），送別会等の企画運営を監督した。
4. 進路指導	平成 16 年４月～平成 26 年３月	奈良保育学院の進路担当教員と連携して進路指導の科目（「課題研究」）を立ち上げ，１回生から２回生にかけて継続的に進路活動を行う体制を築いた。

5. 広報・募集活動	平成 20 年 4 月～平成 26 年3月	奈良保育学院の募集活動の一環として業者と連携してパンフレット・ポスター・ホームページ作成にかかわり，他教員と分担して近隣の高等学校へ訪問し広報活動を行った。
6. 広報委員会における活動	平成 26 年 4 月～平成 27 年3月	奈良学園大学にて広報委員会に所属し，委員として大学案内の内容，オープンキャンパスの内容企画，今後の広報活動及び戦略について検討を行った。
7. 教務委員会における活動	平成 26 年 4 月～平成 30 年3月	奈良学園大学にて教務委員会に所属し，委員としてＧＰＡ基準，試験要領の検討，追・再試験に関する取り扱い，入学前他大学等既修得単位の認定，保育士資格取得に関する整備，卒業論文にかかる諸規定の整備について体制を築いた。
4　その他		
1. 平成 24 年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第 51 回研究大会活動	平成 23 年 6 月～平成 24 年9月まで	平成 24 年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第 51 回研究大会委員に任命され，シンポジウム分科会の運営補助に携わった。
2. 関西心理学会事務局及び常任委員会活動	平成 25 年 4 月～現在に至る	関西心理学会事務局及び常任委員に任命され，平成 29 年３月まで学会事務局及び常任委員会の運営に携わった。また，平成 27 年４月より幹事に就任し，平成 29 年３月まで事務局の取りまとめを行った。また，平成 29 年４月より監事に就任し，会計監査に携わっている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 改訂版　教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－	共著	平成 21 年３月	小林出版	教育心理学の基礎的事項を簡潔に解説し，教職を目指す学生の参考書として有益であるように構成されている。改訂版では最近の教育心理学のトピックや教員採用試験などで出題される重要項目を追加した。 Ｂ５判　全 259 頁 編　者：豊田弘司 共著者：稲森涼子・森田健宏・向居　暁・岡村季光・沖林洋平・豊田裕美・豊田弘司（ＡＢＣ順） 本人担当部分：「第２章　児童・生徒の理解（Ⅱ）－知的能力の理解－」のうち「１．知能（intelligence）とは」及び「２．知能検査（intelligence test）とは」（pp. 32-42.）の部分を単著。 知能とは様々な能力の総合体であるという定義のもと，一般知能（ｇ）に関する解釈を中心に古典的知能観，すなわち一般知能（ｇ）を想定したスピアマンの２因子説と想定していないサーストンの多因子説を紹介した。その後，新しい知能観で提唱されている概念の比較検討を行った。また，教育相談等で現在よく用いられているビネー式知能検査（田中・ビネー知能検査Ⅴ）及びウェクスラー式知能検査（ＷＩＳＣ－Ⅲ）の概略を説明し，検査結果の適切な利用方法を述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
2.やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－	共著	平成 23 年３月	ナカニシヤ出版	胎児期から老年期まで生涯発達の段階ごとに，各章で発達のとらえかた，発達心理学の基礎的な内容を解説し，人生の節目に出逢いと別れを繰り返しながら対人関係が成長していく過程が紹介されている。 Ａ５判　全 237 頁 編　者：浜崎隆司・田村隆宏 共著者：荒木美代子・岡村季光・岡本かおり・加藤孝士・澤田友希・田村隆宏・朴　信永・浜崎隆司・丸山（山本）愛子・森田泰介・森野美央・八島美菜子・湯澤美紀（50 音順） 本人担当部分：「第３章第２節　拡がる子どもの世界」（pp. 67-79.）の部分を単著。 第１にことばの発達において，ことばを話し始める前に乳児が他者に意思疎通を図ろうとする具体例，初語が出てからの発語量とことばの理解度の関係，２語文の習得を始めとした文法の習得，文字の読み書きを習得しことばを楽しむ幼児の様子を紹介した。第２に遊びの発達において，乳幼児における遊びの重要性，乳児自身の体を用いた遊び，表象機能の発達に伴う見立て・ふり遊びとその具体例，ひとり遊びから集団遊びへの移行と特徴を紹介した。
3.教育フォーラム第 55 号「実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA 型学力をどう育てるか」	共著	平成 27 年２月	金子書房	実践的な諸課題に向けての解決をどう図っていくのか，そのために必要となる思考力や問題解決力をどのような形で鍛えていくか，実りある着実な学習活動の展開を具体的に提案している。 Ａ５判　全 160 頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊﨑一夫・井上信子・大内善一・岡村季光・梶田叡一・加藤　明・金澤孝夫・鎌田首治朗・蔵あすか・萩原憲二・藤井幸一・藤田英治・宮岸　洋（50 音順） 本人担当部分：「一人ひとりの「居場所」をどうつくるか」（pp. 111-121）の部分を単著。 これまでの先行研究から居場所を「個人性－社会性」「主観性－客観性」の軸で捉えることが可能であることを示した。また，実証的研究の知見から「居場所がない」と感じる者に精神的な安定・安心を感じるような経験を提供すること，居場所感を毎日感じられる経験を積み重ねること，大人や仲間の支えにより成長・自立を図ることが重要であることを示唆した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.教育フォーラム第60号「深い学びのために：アクティブ・ラーニングの目指すもの」	共著	平成29年8月	金子書房	学習指導要領にある「深い学び」は、いまだ焦点が拡散している印象がある。実践的な指導を提案しながら、基本ポイントを押さえ明確にしている。 Ａ５判　全148頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊﨑一夫・石森広美・大畑健実・岡村季光・梶田叡一・鎌田首治朗・金山憲正・後藤紗貴・菅井啓之・善野八千子・瀧明知惠子・古川　治・松井典夫・湯峯　裕（50音順） 本人担当部分:「震災における教員の役割を考える」（pp. 125-134）の部分を執筆。 本稿では避難所と学校の関係，避難所に携わる教員に焦点をあて，考察を行った。具体的には，震災時における避難所で教員は責任感や使命感をもって活動している一方，自らを省みず活動することによる教員自身の心身不調の問題を指摘した。また，熊本地震において被災した学校に勤務する教員と非災害地域の教員を比較した調査を実施した。その結果，熊本の教員が一連の熊本地震に対する長期のストレス状況にあり，エネルギーの枯渇に伴う意欲低下，自らの存在価値を見出せない教員が少なからずいることを指摘した。最後に，提言として，1)学校が平時より地域と連携することの重要性，2)避難所における教員のリーダーシップの発揮と自治組織への移譲，3)教員のメンタルヘルスへの支援を挙げた。
（学術論文） 1.奈良保育学院における領域「表現」の取り組みについて―表現作品発表会の教育的意義―	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 23-32.	奈良保育学院作品発表会当日，舞台上や会場で作品発表する学生と客席で鑑賞する保育園・幼稚園児をそれぞれビデオカメラで撮影し，作品の同じ場面におけるそれぞれの映像を比較することで，両者の反応を観察・検討した。その結果，学生の表現に子どもが動きを合わせるなど，同じ場と空間を共有し，表現されたものに共感している反応が顕著にみられた。 共著者：増原喜代・岡村季光・岩城正幸・谷本一榮 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
2.保育者養成における領域「表現」と人間関係づくりグループワークの関係	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 33-38.	身体表現作品創作と同時期に，カウンセリング・マインド育成の一環として，マイクロカウンセリング演習の一部を用い，人間関係づくりの習得を目的としたコミュニケーションのグループワークを実施し，身体表現作品における表現力との関連を検討した。その結果，身体表現作品創作及び身体表現力とグループワークの理解度評価に正の相関がみられた。本研究は他教科目との有機的関連を検証した点において教育的意義のあるものと言えよう 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―発表の場で学生と鑑賞者は何を共有しているのか―	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 39-43.	本研究では学生と鑑賞する子どもの両側面から，舞台発表の場で両者が共通のイメージを想起しているか否かを検討した。具体的には学生による舞台発表の数日後，保育現場で発表会のことを子どもに想起させ，絵画を描かせた。その結果，学生側が想定していた身体表現が子ども側に印象づけられたことが明らかとなり，舞台発表の場において作品を媒介とした学生－子ども間の意識の共有が示唆された。 共著者：岡村季光・増原喜代・岩城正幸・谷本一榮・坂本　涉 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
4.青年期における『居場所』の射程	単著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 29-38.	本論文では居場所における字義的定義から一般的に居場所がどう捉えられているのかを概観し，「居場所がない」という表現と関連が深いとされる不登校の問題を考察した。さらに居場所研究における実証的研究から，今後居場所を理解するための枠組みと可能性について展望した。具体的には近年注目されている「ひとりで過ごす居場所」や愛着（アタッチメント）との関連が考えられる。
5.保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―鑑賞者の反応に関する検討―	共著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 7-14.	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を３か年度にわたり行った。その結果，1)おおよそ７割の学生が子どもの反応を見ていた，2)反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3)幼稚園・保育園児は素直な反応を出しているのに対し，中学生は自意識を感じ素直な反応が乏しいなど，年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，学生側は発達段階による反応の差異を受け入れていることが伺えた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
6.平成19年度熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待防止における意識に関する調査研究　―就労有無との関係―	共著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 15-22.	第１筆者が平成19年度に熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待に関する保護者の意識調査を実施。第２筆者が保護者の意識傾向について分析した。その結果，1)育児疲れ・孤独感・相談相手の有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。2)就労有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。上述の結果から，社会とのつながりが希薄になっている保護者へのサポートの必要性が示唆された。 共著者：谷口　卓・岡村季光 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.中学校の職場体験が現在の進路決定に及ぼす影響　―保育学生と一般学生の比較から―	単著	平成24年12月	奈良保育学院研究紀要第15号 pp. 65-69.	中学校時のキャリア形成を探索的に研究するため，近年さかんに行われている中学校時における職場体験の有無・内容が現在の進路決定に及ぼした影響を保育を専攻する学生（保育学生）と他を専攻する学生（一般学生）で比較検討した。その結果，現在の専攻を考えた時期は一般学生より保育学生の方が早い傾向にあり，保育学生の方が一般学生と比して，現在考えている進路内容に中学校時の職場体験の影響があると自覚する者が多いことを見いだした。
8.保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―学年間における相互評価に関する検討―	共著	平成24年12月	奈良保育学院研究紀要第15号 pp. 51-55.	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
9.「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成26年９月	奈良学園大学研究紀要第１号 pp. 191-197.	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の安心感を高く評定するものは，ひとりで過ごすことに肯定的な捉え方をしていることが示唆され，ひとりで過ごす感情・評価との関係が明らかになった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
10.保育学生におけるコラージュ作品の形式分析及び作品印象に関する基礎的研究	共著	平成26年12月	奈良保育学院研究紀要第16号 pp. 103-110.	本研究の目的は，コラージュ作品の表現特徴を多方面にわたり分析し，さらに作品印象に関してテキストマイニングを用いて定量的に検討することであった。保育専門学校に所属していた１回生 367 名を対象に検討した結果，先行研究とほぼ合致する結果が得られ，コラージュ療法における表現特徴が，心理臨床のアセスメントに有益な指標をもたらすであろうことが示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
11.コラージュ作品と性格特性の関係：表現特徴とエゴグラムパターンの検討 （査読付）	共著	平成26年12月	人間教育学研究第２号 pp. 157-162.	本研究の目的は，性格特性とコラージュ作品の関連を検討することであり，387 名の専門学校生にエゴグラム（TEGII）及びコラージュ作品制作を実施した。その結果，エゴグラムパターンにより切片数，余白，作品の満足度に違いがみられることが明らかになった。すなわち，1)切片数が多い者は心的エネルギーが高い性格特徴である可能性が，2)余白が多い者は心的エネルギーが低く，依存的で気分・感情の不安定さを伴う性格特徴である可能性が，3)満足度が低い者は自己否定の構えを持っている可能性が，それぞれ示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 青年期後期における新旧の同性友人への安心感と学校適応感の関連	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第３号 pp. 229-233.	本研究の目的は友人関係機能の「安定化機能」に着目し，一緒にいて「安心できる」という本人の主観的感情を手がかりにして友人を想起させ，新旧の同性友人の選択有無と現在の学校適応感との関連を検討することであった。新旧の同性友人の選択有無により群分けを行い，学校適応感との関連を検討した結果，新友人を選択した者が，旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して，現在の学校適応感は高かった。本研究結果は新旧友人関係が学校適応感に影響を及ぼす可能性を示唆するもので，今後の学校適応を考える上で意義のあるものと考えられた。
13.「居場所」（安心できる人）を規定する要因　―成人愛着スタイルによる検討― （査読付）	共著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究第３号 pp. 175-180.	本研究は対人関係の表象として挙げられる愛着スタイルに着目し，安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果，男子において安定型とアンビバレント型が，女子においてアンビバレント型と回避型が予測変数として有意であることが明らかとなった。本研究の結果は，居場所によって愛着スタイルが安心できる程度に及ぼす効果が異なることを示している。それ故，安心できる程度を適応の指標とした場合には，愛着スタイルが適応に及ぼす効果に対して，居場所が調整変数として機能したことが示唆された。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
14.「居場所」（安心できる人）を規定する要因　　―ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討―	共著	平成 28 年 11 月	奈良教育大学紀要第 65 巻１号（人文・社会） pp. 27-34.	本研究は，対人関係の表象として挙げられるアタッチメントのパターンである愛着スタイルに着目し，「居場所」における安心できる程度の評定値，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，安心できる人を規定する要因として，男女ともに“自分ひとり”は“孤独・不安”，“母親”は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。また，“現学校以降の友人”は男子が“親密性の回避”，女子は“見捨てられ不安” がそれぞれ予測変数として有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15. 保育者の子育てに関する一考察　―わが子の子育ての悩みに注目して―	共著	平成 29 年３月	奈良学園大学研究紀要第６号 pp. 115-124.	本研究では，第１に，現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすること，第２に，保育者の子育てに関する悩みと，保育者としてのアイデンティティ形成，パーソナリティ，職務についての認識，職業観との要因との関連について検討した。その結果，各変数は年齢及び保育者歴による影響が考えられたため，両者の要因を統制した偏相関係数を子の有無別で算出し検討した。子のいない者は，子育ての経験のなさが自信のなさにつながっている可能性がある一方，保育者として誇りを持っている者は，他者から認められることが支えになっていることが考えられた。また，子のいる者は，子育て経験が自らの子育て経験が保育者としての誇り等とつながっていることが考えられる一方，保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は，アイデンティティの揺らぎを感じていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・間井谷容代・谷本一榮 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
16. 対人関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響―友人関係及び家族関係による検討―	共著	平成 29 年３月	奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第３号 pp. 83-87.	家族並びに友人への親和欲求が，居場所（安心できる人）評定に及ぼす影響を検討した。その結果，1)男女ともに，“父親”，“母親”及び“きょうだい”と家族との親密性は中程度の正の相関であった。2)男子において，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”と家族との親密性，“父親”“きょうだい”及び“現学校以前の友人”と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。一方，友人との親密性において，男子は“現学校以前の友人”と中程度の正の相関であったのに対し，女子は“現学校以降の友人”と中程度の正の相関であった。3)“父親”，“母親”及び“きょうだい”は男女ともに，家族との親密性が予測変数として有意であった。友人においては，“現学校以前の友人”において，男女ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方，“現学校以降の友人”においては，女子のみ有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. 英語スピーキングに対する不安尺度作成－小学校英語の教科化に向けて－	共著	平成 29 年９月	奈良学園大学研究紀要第７号 pp. 67-74.	大学生を対象とした英語スピーキング不安の尺度作成を行った。教職課程生の英語力でも特に必要とされているのがスピーキング力だと考えられるからである。Horwitzetal(1986)の FLCAS（the Foreign Language Classroom Anxiety Scale）からスピーキング不安に関係する項目を抜粋し、情動的反応などの日本人の特性を踏まえた項目を筆者らが付け加えた。結果として、現在のスピーキング不安では 13 項目が、将来の小学校教員としてのスピーキング不安では 15 項目が、信頼性と妥当性を得た尺度として残された。また、英語スピーキング不安尺度の妥当性を検討する段階において、英語学習者が英語スピーキング時の「情動的反応性」を克服し、英語スピーキングに対する「自信」をつける英語授業の必要性が示唆された。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
18. 学生の外的要因と内的要因に着目する「外国語の理解」「外国語指導法」に関する一考察	共著	平成 30 年３月	奈良学園大学研究紀要第８号 pp. 115-124.	本研究は、小学校に「外国語活動」・「外国語」が導入されることを見据え、学生の外的要因（英語運用力・授業力）だけでなく、内的要因（自尊感情の低さ・他者理解の必要性・情動的反応性の克服）にも着目した研究である。本稿では、熊田・岡村（2017）において示唆された英語スピーキング不安と自尊感情の関連について検討を行った。結果として、対人不安傾向尺度の下位尺度である「情動的反応性」が現在の英語スピーキング不安に有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、将来の英語スピーキング不安得点については「情動的反応性」に加え、「自尊感情」も有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、「自尊感情」と将来の英語スピーキング不安には「情動的反応性」が媒介する間接効果も見出された。上述の事象を克服するために、近藤（2010）の「基本的自尊感情を育む共有体験」に着目すること、大学カリキュラムマネジメントにより他教科と連携することを提案した。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
19.「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討－”自分ひとり”ですごす居場所に注目して－	単著	平成 30 年３月	奈良学園大学研究紀要第８号 pp. 115-124.	本研究の目的は、居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価を測定し、安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することであった。大学生 260 名に調査を行った結果、自分ひとりの居場所を志向する要因は、ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており、さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「学会抄録」				
1.保育士養成校における作品発表とその鑑賞者との関わり	共著	平成 20 年５月	日本保育学会第 61 回大会発表論文集 p.371. （名古屋市立大学）	身体表現作品発表会当日，舞台上や会場で作品発表する「表現する学生」（表現者）と客席で「鑑賞する子ども」（鑑賞者）をそれぞれビデオカメラで撮影し，作品の同じ場面におけるそれぞれの映像を比較することで，両者の反応を観察・検討した。その結果，表現者と鑑賞者が，同じ場と空間を共有し，表現されたものに共感している反応が顕著にみられた。 共同発表者：増原喜代・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
2.保育者養成校における身体表現作品をめぐって―発表の場で学生と鑑賞者は何を共有しているのか―	共著	平成 20 年５月	日本保育学会第 61 回大会発表論文集 p.372. （名古屋市立大学）	学生と鑑賞者の両側面から，舞台発表の場で両者が共通のイメージを想起しているか否かを検討した。その結果，学生側が想定していた身体表現が鑑賞者側に印象づけられたことが明らかとなり，舞台発表の場において作品を媒介とした学生－鑑賞者間の意識の共有が示唆された。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3.Classification of Ibasho “Person who eases your mind” in female undergraduates （女子大学生における「安心できる人」の類型化）	単著	平成 20 年７月	Poster presented at 29th International Congress of Psychology, Berlin, Germany (International ongress Centrum Berlin)	女子大学生らに「安心できる人」の多重選択を数量化３類により検討した結果,“自分ひとり”“家族”“友人・恋人”の３群に分類できることを見いだした。
4.「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成 21 年３月	日本発達心理学会第 20 回大会発表論文集 p.366. （日本女子大学）	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の場合の評定と「孤独・不安」尺度は中程度の負の相関であった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
5.保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―鑑賞者の反応に関する検討―	単著	平成 21 年５月	日本保育学会第 62 回大会発表論文集 p.287. （千葉大学）	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を行った。その結果，1)おおよそ７割の学生が子どもの反応を見ていた，2)反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3)年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，発達段階によりその差異を受け入れていることが伺えた。
6.青年期女子における「居場所」（安心できる人）の選択―家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性との関係から―	単著	平成 22 年３月	日本発達心理学会第 21 回大会発表論文集 p.348. （神戸国際会議場）	青年期女子における安心できる人の評定と家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性の関係を検討した。その結果，自己の否定的変化意識と安心できる人の評定に関連がみられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.「居場所」（安心できる人）の評定と対人態度の検討　―ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルとの関連から―	単著	平成 24 年３月	日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集 p. 655. （名古屋国際会議場）	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果“自分ひとり”の評定と各尺度間に関連が見いだされた。
8. 本学院における表現活動発表会への取り組み（２）－オペレッタ（身体表現作品創作）に注目して－	共著	平成 24 年９月	全国保育士養成協議会第 51回研究大会研究発表論文集 pp. 494-495. （京都文教大学，京都文教短期大学）	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
9. 青年期後期における危機的場面の対人志向 ―成人愛着スタイルとの関連―	単著	平成 24 年 11 月	日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集 p. 610. （琉球大学千原キャンパス）	危機的場面における対人志向評定及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，危機的場面において男女とも“自分ひとり”の評定が低くなったことを見いだし，状況により「安心できる人」が変わる可能性が示唆された。また，“自分ひとり”の評定と「親密性の回避」は弱い正の相関，他者への対人志向評定と「親密性の回避」はいずれも弱い負の相関であった。
10. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定－抑うつに耐える力との関連－	単著	平成 26 年 11 月	日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集 p. 486. （神戸国際会議場）	「居場所」（安心できる人）における危機的場面の安心できる程度の評定と抑うつに耐える力の関連を検討した。その結果，“自分ひとり”の評定を高くつけた者は“孤独に耐える力”が高く，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”の評定を高くつけた者は“不安に向き合う力”が高かった。ひとりの時間を志向しつつ，友人に安心感を持つことで自身の問題を直視し不安に向き合うことが示唆された。
11. 中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の基礎的研究―ひとりで過ごす感情・評価の関係から―	単著	平成 27 年３月	日本発達心理学会第 26 回大会発表論文集 P5-045. （東京大学）	中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，平常時において“自分ひとり”，“子ども”，“孫”といる場面において評定を高くつけた者は，“孤独・不安”において，得点が高かった。また，危機的状況においては“自分ひとり”でいる場面で評定を高くつけた者のみ“孤独・不安”得点が高かった。特に中年期以降においては，“自分ひとり”のみならず，“子ども”“孫”の存在が「居場所」に影響を及ぼす可能性が示唆された。
12.「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討　―「安心できる人」評定，ひとりで過ごす感情・評価及び協同作業認識尺度の関係から―	単著	平成 27 年８月	日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集 p. 683. （朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター））	居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び協同作業認識との関連を検討した。その結果，ひとり感情・評価尺度の“孤絶願望”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”に弱い負の相関関係がみられた。また，安心できる人の評定が全体的に低い者は他者との協同作業への肯定的な認識が低く，他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は協同作業の必要性を低く感じている傾向にあることを見いだした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13.Relationship between Ibasho “Person who eases your mind” and sense of contribution in late adolescence （青年期後期における居場所（「安心できる人」）と貢献感の関係）	単著	平成 28 年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果，安心できる評定の高低により４群に分類できることを見いだした。さらに，安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。
14.The effects of power and grit on satisfaction and apathy in academic settings （影響力，grit 及びアパシーが大学生活に与える影響）	共著	平成 28 年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	本研究は，影響力，grit 及びアパシーが大学生活にどのような影響を与えているのかを検討した。将来展望を明確に持っているか否かで群分けを行い，重回帰分析を行った結果，将来展望を明確に持っている者において影響力，grit 及びアパシーが大学生活に影響を与えていることが明らかとなった。 共同発表者：高木悠哉・赤間健一・岡村季光 本人担当部分：データ分析結果・考察部分を担当
15.「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討―“自分ひとり”の居場所に注目して―	単著	平成 28 年 10 月	日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集 p.451. （サンポートホール高松・かがわ国際会議場）	本研究は，安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することを目的とした。自分ひとりの居場所を志向する要因は，ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており，さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることを明らかにした。
16.居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連	単著	平成 30 年３月	日本発達心理学会第 29 回大会発表論文集 p.655. （東北大学川内北キャンパス）	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果，安心できる評定の高低により３群に分類できることを見いだした。さらに，安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。本研究における「安心できる人」分類において，特に家族に関するクラスター得点差は他と比して顕著であったことから，家族に対する安心できる感覚の差が貢献感の得点差に影響を及ぼしている可能性が考えられた。
「学会発表」 1.居場所と適応に関する研究と教育への貢献：居場所と愛着の関係（会員企画 ラウンドテーブル RT5-1　話題提供）	―	平成 24 年３月	日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集 p.63. （名古屋国際会議場）	本ラウンドテーブルでは，居場所の研究者が個々の課題を出し合い，定義や方法論について練り合うとともに，教育への貢献できる研究への方向性を探る意図で企画された。第３話題提供者は“安心できる人”の選択または評定と心理的距離及び成人アタッチメントスタイルとの関連に関する研究報告を行った。その後，居場所感の要因検討並びに居場所感を感じられる教育のあり方について討議が行われた。 企画：豊田弘司 話題提供者：豊田弘司・石本雄真・岡村季光・則定百合子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定―ひとりで過ごす感情・評価及び関係的自己の可変性との関係から―	―	平成25年11月	関西心理学会第125回大会発表論文集 p.82. （和歌山大学）	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び関係的自己の可変性との関係を検討した。その結果，友人への安心感評定が低いと自己が変化することに対して怖い，嫌だ，うまくできないという思いがやや高まる傾向を見いだした。また，自分への安心感評定が高いと自己が変化することに必要性を感じる等，変化に対して肯定的に捉えていた。
3.「自分ひとりの居場所」を志向する要因の検討―「安心できる人」の評定とひとりで過ごす感情・評価及び満たされない自己との関係から―	―	平成26年11月	関西心理学会第126回大会発表論文集 p.36. （大阪市立大学）	「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって3群に分け，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び満たされない自己との関係を検討した。その結果，“自分ひとり”に安心できる評定を高くつけた者の中にも，他者への評定を比較的低くつけている者は対人関係に苦痛を感じ，対人交渉の逃避をしていることが示唆された。また，自分だけ，または一部の者のみに安心感の評定を高くつけた者は自他共に安心感の評定が高い者と比して日常生活においての目標に喪失感や停滞感を感じていた。 共同発表者：岡村季光・高木悠哉 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
4.心理学を学び，研究し，実践する－ライフステージとキャリアパス－ （シンポジウム話題提供）	―	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p.9. （関西学院大学）	本シンポジウムでは，心理学関連の大学教員として勤めている話題提供者が，これまでにどのようなキャリアパスを経てきたのか，また，自らのライフステージにおいて，どのような歩みがあったのかをそれぞれ発表した。その後，心理学のキャリアパスとライフステージとの兼ね合いについて率直な意見が交わされた。 話題提供者：大竹恵子・岡村季光・杉若弘子・土肥伊都子 指定討論：小椋たみ子・荘厳舜哉
5.「居場所（安心できる人）の評定と他者認識 ―友人との関係の取り方と共同作業認識の関連から―	―	平成27年11月	関西心理学会第127回大会発表論文集 p.42. （関西学院大学）	居場所（安心できる人）の評定，友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群，全体高群，全体低群の3群に分け，安心できる人の評定による群ごとに，友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出した。相関係数の同等性の検定を行った結果，友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられた。Ryan法による多重比較の結果，“協同効用因子”において全体高群よりも全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く，“互恵懸念因子”において全体高群よりも全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.「居場所（安心できる人）の評定と他者認識 ―友人との関係の取り方と共同作業認識の関連から―	―	平成28年11月	関西心理学会第 128 回大会発表論文集 p. 35. （京都大学）	本研究では，居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び他者とのつながりが感じられているか否かを測定するために孤独感を測定し，三者の関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって全体高群，親群，恋人群，他者低群の４群に分け，さらに，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点をもとに，得点の中央値を上回った群を高群，中央値以下を低群に分類した。孤独感尺度得点について，４（居場所）×２（ひとり感情・評価尺度“孤独・不安”得点高群・低群）の分散分析を行った結果，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点低群において，“他者低群”が他の群に比して孤独感得点が高かった。
7. 災害時における教員の職業的役割　―「使命感」と「多忙感」」に着目して―	―	平成 29 年３月	日本教師学学会第 18 回大会発表要旨集 pp. 30-31. （早稲田大学所沢キャンパス）	現代の学校教育に関連する諸課題に対する教育現場への期待や責任の増大に伴い，教員の「多忙化」が指摘されている。その一方で，地震災害時に教師は，「多忙感」の一要因である残業の多寡に関わらず，避難所運営に携わるなどの例がある。そこで本研究では，教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして，教員への意識調査をもとに検討した。その結果，他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し，熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから，一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念された。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
8. 居場所（安心できる人）の評定と 社会不安及び生活満足感の関連	―	平成29年11月	関西心理学会第 129 回大会発表論文集 p. 52. （京都橘大学）	本研究では，居場所（安心できる人）の評定，他者からの否定的な評価による不安及び生活満足感を測定し，三者の関連を検討することを目的とした。各場面における「安心できる人」評定得点を用いて，クラスター分析を行った結果，各評定の高低により４群に分類することができた。さらに，FNE 短縮版得点（社会的不安得点）をもとに，平均値を上回った群を高群，平均値以下を低群に分類し，4（居場所）×2（社会的不安得点高・低）の分散分析を行った結果，社会的不安得点低群において“全体高群”及び“家族高群”が他群に比して全般的生活満足感得点が高かった。特に，家族への安心感と他者への否定的評価への不安のなさが全般的生活満足感の高さにつながったと言え，アタッチメントの影響が示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
「その他」 1.災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第４回　実証的研究からみえる教師の災害時における「使命感」と「多忙感」の関連	－	平成 29 年８月	教育 PRO 第 47 巻第 17 号 通巻 1842 号 pp. 8-9.	教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして，教員への意識調査をもとに検討した。その結果，他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し，熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから，一連の熊本地震への対応の長期のストレス状況にあることが推察された。一方，教員からの聞き取り調査では，教員は自らよりも児童生徒を優先して心のケアに努める利他行動が認められた。
2.災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第８回　ベトナムにおける「保護」の根底にあるもの	－	平成 29 年 10 月	教育 PRO 第 47 巻第 22 号 通巻 1847 号 pp. 8-9.	ベトナムは様々な天災に見舞われているものの，災害の大きさに比して，被害が思いのほか小さい。そこには，災害等非常時における「保護」の主体が関連しているという示唆を得られた。本稿では，その「保護」意識の根底について考察した。その結果，ベトナムにおいては，近年の経済成長における都市化現象が核家族化を進展させたものの，家族を重要視するという観点も根強く残っている一方，知らない人への警戒心は非常に強いことが伺えた。上述の「警戒心の強さ」は「保護」意識の規定因である可能性が示唆された。
3.災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第 12 回　取り戻す日常と薄れゆく震災の記憶 ～防災教育が持つ価値の提言～	－	平成 29 年 12 月	教育 PRO 第 47 巻第 27 号 通巻 1852 号 pp. 6-7.	本稿では，日常を取り戻そうとする「復興のベクトル」と，震災の記憶のうち「想起のベクトル」が減少していくという相反する状況の中で，防災教育が果たす役割について考察を行った。古来から「津波てんでんこ」などの教訓として後世に伝えられてきた事象を検討した結果，防災教育の根幹は，残された「教訓」の活性であることを見出した。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：先行研究収集・考察部分を担当

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　熊田　岐子

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
外国語教育、英米文学	英語教育、異文化理解、映画英語、早期英語教育、児童文学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 「映画英語リスニング・システム」とシャドーイングをブレンドした授業	平成 20 年 4 月～ 平成 21 年 7 月	創価大学ワールドランゲージセンター非常勤講師として担当の「英語 B」(共通科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、都留文科大学外国語教育研究センターの非常勤講師として担当の「英語 Listening Ⅰ・Ⅱ」(2 年次配当、前後期半期、選択 2 単位)、環太平洋大学教職センター講師として担当の「英語Ⅰ（基礎)」(教養科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)にて実施した教育方法である。英語コミュニケーション力の素地となるリスニング力をアップさせるために個々の弱点を集中的に補強する e-learning システム「映画英語リスニング・システム」とシャドーイングを併用した授業を CALL 教室において行った。 （本授業の紹介を映画英語教育学会発行『映画英語教育研究』第 14 号に掲載。またその一年間の運用結果は、外国語教育メディア学会第 49 回全国大会において「シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習」として発表した。さらに、外国語教育メディア学会第 49 回全国大会で発表したものに加筆・修正をして、都留文科大学外国語教育研究センター発行『外国語教育研究』第 4 集（平成 22 年 3 月発行）に掲載。）
工学部 ESP(English for Specific Purposes)の英会話授業	平成 21 年 4 月～ 平成 21 年 7 月	創価大学ワールドランゲージセンター非常勤講師として担当の「English Communication for Engineering」（共通科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）で、工学部で必要な知識を英語で理解することを目指した工学部初年次生用英会話授業を行った。ペア・ワークやグループ討論を行い、英語コミュニケーション能力と共に、プレゼンテーション力を育成。本科目の定期試験として、グループ単位でパワーポイント等を用いた英語プレゼンテーションを課した。授業使用テキストは Garnet Education より発行されている『Starting Skills in English』。また工学部に適した内容の Reading 資料も使用。

幼稚園や小学校での英語指導を視野に入れた、他者を意識する英語コミュニケーション能力開発のための英会話授業	平成 22 年 4 月～平成 22 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科講師として担当の学部共通の教養科目「英会話」(教養科目、1 年次配当、前期、必修 2 単位)において実施（英語レベルの異なる 4 つのクラスを担当)。英語圏からやってきた留学生等を想定し、自己紹介からそれらの友人たちとの会話などの日常的な表現をテーマとして扱った。初級英会話に必要な文法・語彙等を使用しながら、表現したいことを伝える英会話力の育成を図った。対象学生が、幼稚園教諭や小学校教諭の教職課程に在籍する学生がほとんどであるため、将来に必要な能力であることを前提に指導。自分の意見を伝えるだけでなく、相手の文化的背景も学習することで、相手との意思疎通を図る英語コミュニケーション能力の開発を目指した授業となった。授業アンケート結果は 3.65/4.00 であった。
国際理解教育における異文化を身体的に理解する「異文化コミュニケーション論」の授業	平成 22 年 4 月～平成 25 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当する「異文化コミュニケーション論」（専門基礎科目、1 年次、前期、英語教諭免許必修 2 単位）で実施。異なる文化背景を持つ人々が、お互いを尊重するという異文化理解を英語指導者がどのように指導すべきかをテーマとした授業である。非言語的な要素を身体的に理解し、相手がどのような気持ちになるのかを学習する形態である。それにより、言語と非言語を組み合わせる方法を考察。受講生は、中高英語教諭免許志望者に加えて、小学校教諭免許取得希望者・幼稚園教諭免許取得希望者である。
映画シャドーイングを活用したリメディアル英語授業	平成 22 年 9 月～平成 23 年 2 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科講師として担当の学部共通の教養科目「英語Ⅰ（基礎)」(教養科目、1 年次配当、後期、必修 2 単位)において、実施した。リスニング力、リーディング力、語彙力の強化を目的とした、映画と音読を活用する英語授業を行った。学生の英語に対する興味・関心・意欲を養いながら、英語教育学のインプット仮説・アウトプット仮説の理論を用い、英語が特に苦手な学生対象のリメディアル授業を展開した。その結果、英語に自信がついたとの声が多く寄せられている。英語初級者学生が集まるクラスにおける授業アンケート結果は 3.82/4.00 となっている。
「小学校外国語活動の指導法」の授業	平成 22 年 9 月～平成 25 年 2 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当する「小学校外国語活動の指導法」（専門基礎科目、3 年次、後期、選択 2 単位）において実施。外国語活動が全国の小学校で一斉導入されることを受けて開設された科目。第二言語習得論などの理論から模擬授業までの実践を扱っている。本授業の特色としては、小学校の現状を踏まえて、学級担任の主導を目指しながら行う英語指導補助教員とのティームティーチング形態の模擬授業を実施。また、幼稚園でも、英語を集中的に学習する形態が見られることから、幼稚園・小学校・中学校・高等学校での連携から外国語活動の役割について指導している。このような教員間の連携を重視しつつ、児童が英語を好きになる授業案作成を促している。

映画比較に基づいた「英米文学」の授業	平成 23 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当している「英米文学」（専門基礎科目、1 年次、前期、中・高英語免許必修 2 単位）において実施。原典のみを利用する授業では英文が理解できず、学生のレベルからあまりにもかけ離れてしまった場合には、「文学は嫌い」ひいては「英語も嫌い」と考える学生を生み出してしまう可能性さえある。そこで筆者は一年次教職課程科目「英米文学」を担当するにあたり、「原典と映画」、「映画と映画」を比較し、英語力をつけながら文学を味わうことを目的とした授業を行うことにした。さらに、英語教員希望者用授業であるため、その工夫についても言及している。（本授業の紹介を映画英語教育学会第 17 回全国研究大会で口頭発表済み）
認知言語学に基づいた場所・空間を表す前置詞・副詞指導を中心とした「英米文学」の授業	平成 25 年 4 月～ 現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当した「英米文学」（専門基礎科目、1 年次、前期、中・高英語免許必修 2 単位）、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科で講師として担当する「英米文学」（専門科目、2 年次、前期、選択科目 2 単位）において、英語学習として前置詞理解を目的とした授業を行っている。認知言語学では、日常言語の基盤となる空間性の理解には、前置詞が重視されている。英語学習者の前置詞理解を促すために、前置詞の身体的な理解を目指す指導を実施している（本授業は、第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会・日本教科教育学会第 39 回全国大会等で学会発表し、「文学の描写を明示・暗示する映画の教育的応用」や博士論文『空間表現の身体性を重視した英語文学読解指導』において経過報告）。
「学級経営学ゼミナールⅠ・Ⅱ」における英語教育学研究の指導	平成 22 年 4 月～ 平成 26 年 2 月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科で講師として担当した「学級経営学ゼミナールⅠ・Ⅱ」（ゼミナール科目、3・4 年次、通年、各 4 単位）において、早期英語教育・英語科教育に関するゼミを担当した。英語教育理論から実践を取り扱い、課題研究として、ICT を取り入れた英語科授業やオーセンティック教材を取り入れた英語科授業等を指導した。担当学生の「卒業論文」には、『言語材料のデータベース化による英語教育支援の有用性に関する一考察』や『小学校外国語活動への絵本教材の導入』がある。
2　作成した教科書、教材 『ダイ・ハード 4.0　スクリーンプレイシリーズ』（共著） フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 20 年 9 月 17 日	映画『ダイ・シリーズ』の最新作。ニューヨーク市警のマクレーン警部補は、ハッカーを FBI に連行するよう命じられ、サイバー・テロに巻き込まれていく。 本人担当部分：全 176 ページ中 18－175 ページの語句解説、62-85 ページの翻訳、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。コラムでは、登場人物たちが発する彼ら特有の短い言葉にも多くの意味が含まれていること、また、アメリカ以外の人間が使う World Englishes としての様々な英語表現にも触れたことで異文化コミュニケーションスタイルを観察するのに適した英語学習教材となった。

		（平成 21 年 1 月創価大学ワールドランゲージセンターにおいて担当の共通科目「英語Ａ」、平成 23、24 年環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科において担当の「映画とテレビの英語」、「異文化コミュニケーション論」において異文化理解教材として紹介。また、「教育実習事前・事後指導」において異文化理解教材として発展する方法を指導。）
『リトル・ミス・サンシャイン　スクリーンプレイシリーズ』（共著） フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 21 年 6 月 24 日	コンテストに出場するために、カリフォルニアに向け、個性豊かな一家全員でミニバスに乗り込む。容貌に悩む少女の成長を描き、家族の絆を問いかける作品である。 本人担当部分：全 184 ページ中、pp. 104-137 の翻訳・解説、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 語句・文法事項の解説部は、中学生以上の英語学習者が文法事項や文化背景を理解できるように配慮して作成し、コラムは異文化理解を念頭において作成。アメリカの日常英会話が楽しめ、さらに登場人物の言葉の選び方（オフィシャルな場所における丁寧な英語とプライベートで使う俗語など）から、言葉によって、アメリカ人の本音と建前が垣間見られる映画であることを述べた。 （平成 23 年環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科において担当の「映画とテレビの英語」、「異文化コミュニケーション論」において異文化理解教材として紹介。また、「教育実習事前・事後指導」において異文化理解教材として発展する方法を指導。
『ダークナイト　スクリーンプレイシリーズ』（共著） フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 22 年 7 月 14 日	映画『バットマン』シリーズの人気作。ゴッサムシティにジョーカーが現れて、人々を恐怖に陥れていく。 本人担当部分：全 252 ページ中、pp. 61-151 の翻訳・解説。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。アメリカが作り出したヒーローの姿を知ることから、学習者がアメリカ文化を学べる内容となった。 （平成 22 年、23 年、24 年度環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科において担当の「映画とテレビの英語」において紹介。英語の文化圏の人々が小さなころに読んだコミックにおいて表現されている善悪に関する価値観などに触れた。）
文部科学省検定済み教科書　高等学校外国語科用（共同） 『Screenplay English Expression Ⅰ』 フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 24 年 3 月 1 日　文部科学省検定済み	学習指導要領の移行に伴って発行される平成 25 年度以降の高等学校外国語科用教科書。映画を使用して、異文化理解と英語表現習得を目的とした教科書であり、学習の動機付けになる多面的な教科書に仕上がっている。本教科書の「著作関係者」として奥付に記載。
『例文で自然に身につく！頻出準英単語 2000+ web アプリ付』（共著） 国際語学社 （再掲）	平成 26 年 10 月 25 日	例文で自然から自然に身につくように作られた Web アプリ付き英語学習書。 本人担当部分：英語コーパスを利用して、英検 2 級を目安に頻出単語 2000 語を選出。本書に登場する他の単語を利用しながら例文 300 程度を作成。（岡崎弘信編著者、共著者：岡崎弘信、武田亜希子、福田衣里、川端泰湖、熊田岐子、他 2 名）

3　教育上の能力に関する大学等の評価 創価大学「英語A」授業アンケート結果	平成 21 年 3 月	創価大学において授業アンケート結果が公開されているが、学生の満足度は平成 20 年度後期 4. 35/5.00 であった。
都留文科大学「英語 Listening I」授業アンケート結果	平成 21 年 9 月	シャドーイング教材と映画 e-learning を併用した授業の平成 21 年度前期授業アンケートの最終項目「総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったか」は 4.88/5.00 であった。
環太平洋大学における 2010 年度前期担当科目の授業アンケート結果	平成 22 年 9 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 1 年次必修科目「英会話」3.65/4.00 2 年次必修科目「英語Ⅱ」3.48/4.00 1 年次「異文化コミュニケーション論」 3.56/4.00
環太平洋大学における 2010 年度後期担当科目の授業アンケート結果	平成 23 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英語Ⅰ」3.82/4.00 「映画とテレビの英語」3.75/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.50/4.00 「国際交流実習Ⅰ（基礎)」3.40/4.00
環太平洋大学における 2011 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 23 年 7 月 平成 24 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」3.47/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.57/4.00 「英米文学史」3.75/4.00
環太平洋大学における 2012 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 24 年 7 月 平成 25 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」2.86/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.24/4.00 「英米文学史」3.50/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.33/4.00 「映画とテレビの英語」3.90/4.00
環太平洋大学における 2013 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 25 年 7 月 平成 26 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」3.67, 3.71/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.32/4.00 「英米文学史」3.44/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.63/4.00 「映画とテレビの英語」3.64/4.00
奈良学園大学における 2014 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 26 年 8 月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ⅠA」3.35/4.00 「英会話ⅠB」3.32/4.00
奈良学園大学における 2014 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 27 年 2 月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ⅡA」3.34/4.00 「英会話ⅡB」3.15/4.00 「英会話ⅡC」3.28/4.00

奈良学園大学における2015年度担当科目の授業アンケート結果	平成27年8月 平成28年2月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ⅠA」3.53/4.00 「英会話ⅠB」3.39/4.00 「英会話ⅠC」3.00/4.00 「英米文学」3.85/4.00 「英会話ⅡA」3.34/4.00 「英会話ⅡB」3.40/4.00 「英会話ⅡC」3.21/4.00
4　実務の経験を有する者についての特記事項 教育講演会講師　「映画やテレビを活用した英語学習法」	平成23年 10月27日	吉備中央町立吉川小学校において行われたおかやま教育週間の取り組みとしての教育講演会に講師として招待された。対象は、地域の中学生、保護者、地域住民、小・中学校の教員。映画やテレビを利用して、ある場面を異文化理解教材とし、英語学習教材とする方法を紹介。
小学校職員研修会講師「外国語活動の指導法」	平成23年 10月28日	岡山市立操明小学校における職員研修に講師として依頼された。外国語活動の指導法に関しての職員研修講師を行ったﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを取り入れつつ、目的のある授業づくりをする方法を紹介した。
5　その他 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科（平成24年4月に学科名称変更：教育経営学科）における教育実績	平成21年9月～ 平成26年3月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科（平成24年4月に学科名称変更：教育経営学科）における講師（平成21年9月～平成22年3月まで教職センター講師、平成22年4月～平成26年3月まで学級経営学科（教育経営学科）講師）として、以下の科目を担当した。 「小学校外国語活動の指導法」（コア科目、3年次配当、後期、選択2単位）を平成22年4月～平成26年2月まで担当した。外国語活動が導入された小学校の現状を踏まえた上で、これからの小学校教員として必要とされる英語力、英語教材研究力・教材開発力、コミュニケーション力、授業力などの実践力を養うことを目的とし、教育現場で活躍する人材育成を図った。 「異文化コミュニケーション論」（専門基礎科目、1年次配当、前期、選択2単位）を平成22年4月～平成25年7月まで担当した。この授業では、日本および英語圏諸国に焦点を当て、コミュニケーションのとり方の相違を言語面・非言語面・価値観などの点から考察した。また、誤解や摩擦を回避し、円滑にコミュニケーションを行うための方法を探った。 「英語Ⅰ（基礎）」（教養科目、1年次配当、後期、必修2単位）を平成21年9月～平成23年2月まで担当した。本授業では評価の高いシャドーイング教材を用い、リスニングとスピーキングの基本的なスキルに焦点を当て、学生の英語運用能力を高められた。 「英語Ⅱ（応用）」（教養科目、2年次配当、前期、必修2単位）を平成22年4月～平成22年8月まで担当した。本授業では、このような映画の教材としての可能性をフルに活用し、主に長文読解力、語彙力、リスニング力、会話力を形成した。

		「英会話」（教養科目、1 年次配当、前期、必修 2 単位）を平成 22 年 4 月～平成 22 年 8 月まで担当した。日常の生活をはじめとして、学校、職場、旅行などさまざまな場面で英語を利用できるよう、多様な場面を想定し、自分の意思を相手に伝えるようになった。 「映画とテレビの英語」（コア科目、2 年次配当、後期、選択 2 単位）を平成 21 年 9 月～平成 26 年 2 月まで担当した。映画やテレビという映像を使い、最終的には、ニュース等の台本を作り、英語プレゼンテーションする力を養った。 「英米文学」（専門基礎科目、1 年次配当、前期、選択 2 単位）を平成 23 年 4 月～平成 25 年 7 月まで担当した。文学と映画の比較や劇活動を行い、文学の英語に慣れ親しみ、英語力向上も成し遂げた。 「英米文学史」（専門基礎科目、1 年次配当、後期、選択 2 単位）を平成 23 年 9 月～平成 26 年 2 月まで担当した。植民地時代から独立革命、南北戦争、第一次世界大戦を経た 20 世紀初頭の文学作品までを取り上げた。また、日本の初等・中等教育で紹介される作品も扱うことで、原典ではどのように表現されているかを考察した。 「国際交流実習Ⅰ（基礎）」（インターンシップ科目、1～4 年次配当、後期、選択 1 単位）を平成 21 年 9 月～平成 23 年 2 月まで担当した。ニュージーランドへの短期留学の準備科目であり、英語課題のこなし方や、英会話授業を中心に進め、短期留学の準備が行えた。 「国際交流実習Ⅱ（応用）」（インターンシップ科目、1～4 年次配当、集中、選択 1 単位）を平成 21 年 9 月～平成 23 年 2 月まで担当した。海外研修期間中にニュージーランドの文化・歴史・教育等の分野の授業を聴講し、1）講義の内容について自分で整理ができる。2）講義の内容について自分の意見を表現できる。3）様々な国籍の人と討論を行いながら良好な関係を構築することができる。以上３点の到達目標を成し遂げた。 「学級経営学ゼミナールⅠ（基礎）」（ゼミナール科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）を平成 22 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。中学校・高等学校の英語科教育、小学校外国語活動の研究の基礎を主に行い、受講生各自の研究を指導した。各自の研究がスムーズに進められた。 「学級経営学ゼミナールⅡ（応用）」（ゼミナール科目、4 年次配当、通年、選択 4 単位）を平成 22 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。中学校・高等学校の英語科教育、小学校外国語活動の研究を発展させ、受講生各自の研究を指導した。卒業研究まで発展させられる者も出てきた。 「卒業研究」（ゼミナール科目、4 年次配当、通年、選択 4 単位）を平成 22 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。卒業研究には、『言語材料のデータベース化による英語教育支援の有用性に関する一考察』や『小学校外国語活動への絵本教材の導入』がある。

		「教育実習事前・事後指導（英語）（複数教員担当）」（教育実習科目、3 年次配当、通年、選択 1 単位）を平成 23 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。事前指導では実習生に求められることを確認し、各自が教育実習に向けて十分な準備ができるようにし、事後指導では、教育実習での体験を交換し、検討した。有意義な実習となったようである。 「教育実習Ⅰ（中学校・高等学校）（複数教員担当）」「教育実習Ⅱ（中学校）（複数教員担当）」（教育実習科目、選択 2 単位）を平成 23 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。教育実習指導等を行い、教育実習日誌の回収・確認等を主に行った 「教職実践演習（中学校・高校）（複数教員担当）」（インターンシップ科目、4 年次配当、後期、選択 2 単位）平成 25 年 9 月から平成 26 年 2 月まで担当した。教育実習での各自の課題を整理し、課題克服のための指導を各自・グループ単位で行った。各自の課題を克服できるという教育効果をあげた。 「基礎ゼミナールⅠ」（ゼミナール科目、1 年次配当、通年、必修 2 単位）を平成 24 年 4 月～平成 25 年 2 月まで担当した。初年次教育として、新聞を読んでまとめること、レポートの書き方等を身につけてもらうことが出来た。 「基礎ゼミナールⅡ」（ゼミナール科目、2 年次配当、通年、必修 2 単位）を平成 23 年 4 月～平成 24 年 2 月まで、平成 25 年 4 月～平成 26 年 2 月まで担当した。「基礎ゼミナールⅠ」の発展である。新聞記事の見つけ方やインターネットの検索方法、レポート書き等が着実に身についていた。
奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育業績	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科講師として、以下の科目を担当している。 「英会話Ⅰ」（共通教育科目、1～4 年次配当、前期、必修 1 単位）を平成 26 年 4 月より担当している。日常の生活をはじめとして、学校生活や友人との会話などで英語を利用できるよう、会話に必要な文法・語彙にも焦点を当てられるように工夫しながらの授業である。自分の意思を正しく相手に伝える力を習得できている。 「英会話Ⅱ」（共通教育科目、1～4 年次配当、後期、必修 1 単位）を平成 26 年 9 月より担当している。「英会話Ⅰ」で学習した文法・語彙を発展させながら、日常的な場面における会話から身近なトピックに関する発表までを取り扱っている。英語発表力も向上している。 「英米文学」（専門科目、2 年次配当、前期、選択 2 単位）を平成 27 年 4 月より担当している。英米に住む人々が幼いころから触れてきた英米文学を学ぶことで、その文化の言語、歴史、文化的な特性についての基礎的な知識を身につけ、自国文化への気づきが与えられる授業となっている。

		「小学校外国語活動の指導法」（専門科目、2 年次配当、後期、選択 2 単位）を平成 27 年 4 月より担当している。学習指導要領の学習を基礎とし、英語の音声や基本的な表現等，指導に必要な知識や技能を身につける。また、英語を通じて日本や外国の言語や文化に関心を持ち，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う活動を編成し指導する技術を習得できている。 「教育実習事前事後指導（小)」（専門科目、3 年次配当、通年、必修 1 単位）を平成 28 年 4 月より複数教員で担当している。事前指導では、実習に臨むにあたり必要な知識とスキルを身に付けることを、事後指導では、実習で身に付けた知識やスキルをさらに教育実践に通用するものへと変容させることを目標としている。 「教育実習Ⅰ（小)」「教育実習Ⅱ（小)」（専門科目、3 年次配当、前期、必修各 2 単位）を平成 28 年 4 月より複数教員で担当している。実習校において、一人の教師として、具体的且つ実践的な経験をし、小学校での教育活動についての基本的な事柄についての理解を深めることを目標としている。 「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎)」（専門科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）を平成 28 年 4 月から担当している。英語教育・英語内容学を主に取り扱い、オーセンティック教材等の使用法や小学校外国語活動について研究をゼミ全体・受講生各自で進めている。 「人間教育学ゼミナールⅡ（応用)」（専門科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）を平成 29 年 9 月から担当している。「ゼミナールⅠ」の応用編として，英語教育について指導している。 「卒業研究」（専門科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）平成 29 年 9 月から担当している。卒業論文完成に向けた研究・論文指導を行っている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 修士（英文学）	平成 15 年 3 月 19 日	創価大学　修第 24 号 論文題目「*The Scarlet Letter*：The Pursuit of “Some Sweet Moral Blossom”」
中学校教諭専修免許状　外国語（英語） （平 15 中専第 10306 号）	平成 15 年 3 月 31 日	東京都教育委員会
高等学校教諭専修免許状　外国語（英語） （平 15 高専第 10337 号）	平成 15 年 3 月 31 日	東京都教育委員会

J-SHINE 小学校英語準認定指導者資格	平成 22 年 6 月	NPO 法人 J-SHINE において認定される小学校英語指導者資格。平成 22 年 6 月に指導者資格を取得。本資格は、外国語活動の一斉導入に備えて作られたものあり、地域人材の育成・確保を目的としている。現在、文部科学省認定の英語指導者資格がなく、本資格に類似した資格はない。
博士（教育学）	平成 28 年 3 月 3 日	広島大学　甲第 6864 号 論文題目「空間表現の身体性を重視した英語文学読解指導」
2　特許等 国内特許取得 特許権者	平成 25 年 9 月	「多読・速読学習システム、多読・速読学習装置、多読・速読学習プログラム」、特願 2008-074778、特許公開 2009-229780、特許第 5369463 号（新田晴彦・木戸和彦・熊田岐子、他 2 名）
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ［競争的資金］ 複数の音声を比較検討することでリスニングの問題点を探る研究用ソフトウエアの開発	平成 25 年 4 月～ 平成 27 年 3 月	［研究分担者］ 外国語教育メディア学会関東支部の公募研究資金。日本人英語学習者のリスニングの弱点は、ボトムアップ処理の decoding にある。ただし日本人側の decoding 能力が不足しているというより、むしろ英語母語話者側の発音にこそ問題があるのではないかというスタンスである。同じ語彙、句、節などでどれほど音が異なり、どれほどのバリエーションが存在するのか。それを調べるツールとしてのソフトウエアの開発を行った。（研究代表者：新田晴彦、研究分担者：熊田岐子）
4　その他 環太平洋大学の姉妹校、ニュージーランドにある「International Pacific College」への短期研修の引率	平成 22 年 2 月 14 日から 3 週間帯同	International Pacific College への留学関係とその準備授業「国際交流実習Ⅰ」を担当。さらに短期留学する学生を 3 週間 IPC へ引率・帯同した。ニュージーランドでは、学生の授業参観やアクティビティの参加、また環太平洋大学との連携についての打ち合わせを現地で行った。
外国語（英語）活動に係るフィールドワーク 岡山市立江西小学校	平成 22 年 9 月 14 日～12 月	フィールドワークとして、5,6 年生の授業研究、および担任とのティームティーチングで 3 年生の英語活動の支援を行った。また、ゼミ生を引率したり、「小学校外国語活動の指導論」のための資料作りを行った。実状として、就学前から英語を習っている児童もおり、その中で外国語活動で英語に初めて触れた児童への指導法が、今後の検討事項として挙げられる。
文部科学省認定 平成 24 年度教員免許更新講習の授業担当	平成 24 年 8 月 22 日	環太平洋大学における教員免許更新講習（中高英語教諭対象）において、「今、求められる英語教育（２）　オーセンティックな素材の活用法」を 2 コマ担当。中学・高等学校の教科書で基本的な英語知識を習得しながら、使える英語へとつないでいく方法として、オーセンティックな素材を用いた授業づくりの提案と指導のポイントについて紹介。
文部科学省認定 平成 25 年度教員免許更新講習の授業担当	平成 25 年 8 月 21 日	環太平洋大学における教員免許更新講習（中高英語教諭対象）において、「今、求められる英語教育（２）　認知言語学による文法のイメージ形成指導」を 2 コマ担当。中学・高等学校の教科書で認知言語学における前置詞イメージや文法イ

		メージを利用しながら、使える英語へとつないでいく授業づくりの提案と指導のポイントについて紹介。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 『ダイ・ハード 4.0 スクリーンプレイシリーズ』	共著	平成 20 年 9 月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題：DIE HARD 4.0 監督：Len Wiseman 判型・総頁数：A5 版、176 ページ 　映画『ダイ・シリーズ』の最新作。ニューヨーク市警のマクレーン警部補は、ハッカーを FBI に連行するよう命じられ、サイバー・テロに巻き込まれていく。 本人担当部分：全 176 ページ中 18－175 ページの語句解説、62-85 ページの翻訳、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 　中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。コラムでは、登場人物たちが発する彼ら特有の短い言葉にも多くの意味が含まれていること、また、アメリカ以外の人間が使う World Englishes としての様々な英語表現にも触れたことで異文化コミュニケーションスタイルを観察するのに適した英語学習教材となった。 （岡崎弘信監修、翻訳・解説：岡崎弘信・橋本信一・馬場亜希江・熊田岐子）
2 『リトル・ミス・サンシャイン　スクリーンプレイシリーズ』	共著	平成 21 年 6 月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題：LITTLE MISS SUNSHINE 監督：Jonathan Dayton 　　Valerie Faris 判型・総頁数： A5 版、184 ページ 　コンテストに出場するために、カリフォルニアに向け、個性豊かな一家全員でミニバスに乗り込む。容貌に悩む少女の成長を描き、家族の絆を問いかける作品である。 本人担当部分：全 184 ページ中、pp. 104-137 の翻訳・解説、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 　語句・文法事項の解説部は、中学生以上の英語学習者が文法事項や文化背景を理解できるように配慮して作成し、コラムは異文化理解を念頭において作成。アメリカの日常英会話が楽しめ、さらに登場人物の言葉の選び方（オフィシャルな場所における丁寧な英語とプライベートで使う俗語など）から、言葉によって、アメリカ人の本音と建前が垣間見られる映画であることを述べた。 （岡崎弘信監修、翻訳・解説：大月敦子・岡崎弘信・川端泰湖・熊田岐子・長島敏子・橋本信一）
3 『ダークナイト　スリーンプレイシリーズ』	共著	平成 22 年 7 月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題： THE DARK KNIGHT 監督： Christopher Nolan 判型・総頁数：四六変形、 252 ページ 　共訳者映画『バットマン』シリーズの人気作。ゴッサムシティにジョーカーが現れ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				て、人々を恐怖に陥れていく。 本人担当部分：全 252 ページ中、pp. 61-151 の翻訳・解説。 　中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。アメリカが作り出したヒーローの姿を知ることから、学習者がアメリカ文化を学べる内容となった。 （角山照彦監修、翻訳・解説：角山照彦・藤本幸伸・熊田岐子）
4 『例文で自然に身につく！頻出準英単語 2000+　web アプリ付』	共著	平成 26 年 10 月	国際語学社	例文で自然から自然に身につくように作られた Web アプリ付き英語学習書。 本人担当部分：英語コーパスを利用して、英検 2 級を目安に頻出単語 2000 語を選出。本書に登場する他の単語を利用しながら例文 300 程度を作成。（岡崎弘信編著者、共著者：岡崎弘信、武田亜希子、福田衣里、川端泰湖、熊田岐子、他 2 名）
5 『言葉で広がる知性と感性の世界―英語・英語教育の新地平を探る―』	共著	平成 28 年 5 月	渓水社	判型・総頁数：B5、328 ページ 本書の掲載論文については、編者等によって査読されている。 　英語教育の方法を考える際には、学習者にとって英語教育内容がどのようなものかという観点が必須であるがゆえに、英語教育方法は、英語教育内容学抜きには考えられない。本書は、英語教育内容学の論文を集めた著書である。 　本人担当部分：「空間表現に基づく身体を通した文学的な読み（pp. 57-67）」。前置詞・副詞という空間表現の学習に焦点を当て、文学教材を使用し、その読みの向上と関連付けて、学習の変容を考察した。（柳瀬陽介・西原貴之編者、共著者：中尾佳行、石原知英、小野章、菊池繁夫、熊田岐子、地村彰之、西原貴之、能登原祥之、柳瀬陽介、山西博之、他 17 名）
（学術論文） 1 初年次教育で英米文学を読むための工夫	単著	平成 21 年 3 月	『外国語教育研究』第 3 集 都留文科大学外国語教育センター，pp. 21-31	英米文学を大学の初年次生の授業で扱うのは困難である。しかし教養から考えると文学を読んでほしいというのが教員側の願いであろう。そこで内容検討に加えて英文レベル（語彙レベルとリーダビリティ）を測定することにより、例として初年次生でも読める英米文学を探せることを具体的方法と作品を提示しつつ述べた。
2 ホーソーン児童向け作品『ワンダー・ブック』の対象年齢―「黄金に変える手」を中心に―	単著	平成 21 年 3 月	『英語英文学研究』第 64 集 創価大学英文学会，pp. 97-109	作品の序文で「子どもの理解を得るために、調子を下げなければならないと常に考えているわけではなかった」と述べながら、ホーソーンは一般読者向けよりも簡易な文章を用いたことを英文レベルの検証から論じた。同時に小さな子どもには少々難しい文体であることもわかってきている。枠物語で聴き手とされる子どもたちには就学前と見受けられる子どもおり、小学校への準備も設定に含めて、物語の聴き手である子どもたちの描写と会話を分析し

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				た。本稿では、小さな子どもでも想像力を発揮し、物語を楽しんでくれるというホーソーンの期待が感じられると結んだ。
3 『ワンダー・ブック』において子どもの年齢が設定された物語―年少向け「不思議な水差し」と年長向け「キマイラ」―	単著	平成21年9月	『英語英文学研究』第65集創価大学英文学会, pp. 175-187	ホーソーン児童向け作品『ワンダー・ブック』の年少の子どもたちに語られた「不思議な水差し」（“The Miraculous Pitcher”）と年長の子どもたちに語られた「キマイラ」（“The Chimæra”）を比較し、その子どもの年齢に従って、物語の内容と英文レベルに差があるのかを分析した。本稿で扱った年少の子どもたちには、会話や描写から就学前児童も含まれると言える。彼らの好奇心と無邪気さは、物語理解を助けている。対して、年長の子どもたちは、大人びており、これから女性としてどのような物語を繰り広げるのか期待させる面がある。今回検証した子どもの発達段階と実態に加えて、19世紀当時の子どもが受けた教育（幼稚園と小学校を対象）についても検討が必要である。
4 シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習	単著	平成22年3月	『外国語教育研究』第4集都留文科大学外国語教育研究センター, pp. 13-21	平成21年8月外国語教育メディア学会全国大会での Poster Presentation に加筆・修正を施した論文。昨今の教育界では、日本人学習者の英語コミュニケーション力の向上が大きな課題となっているが、コミュニケーションをとるためには相手の言葉を理解しなくてはいけない。そこで平成20年度にシャドーイング・マネージャーが付属された『スクリーンプレイで学ぶ映画英語シャドーイング』を使用した音読練習、および e-learning「映画英語リスニング・システム」を使用する授業を行い、かなりの成果をあげることに成功した。本稿ではこの英語授業の手順と一年間の運用結果、その改善点を考察している。
5 英米文学作品を大学の英語授業に取り入れるために	単著	平成22年3月	『英語英文学研究』第66集創価大学英文学会, pp. 97-106	平成21年5月第一回北東アジア言語教育学会で行った Poster Presentation を発展させた論文。内容や英文に対する感覚だけで教材を選択するのではなく、英文レベルを実際に測定し、その数値から昨今の大学生のレベルに合ったものを選んでいく方法を提案した（英文レベルはリーダビリティ面、および v8an を利用した語彙面から計測）。一般読者向け作品から児童文学作品まで英文レベルを測定し、難解な英文を書くと言われている作家の作品でも、現在の大学生や初級英語学習者の英語力に見合ったものを英語教育現場に導入できる可能性を示唆。また、よく知られている児童文学の英文レベルと内容分析から、幼児や児童が受けてきた教育が表面化したと言える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 ホーソーンの児童文学に見る理想的なコミュニティ	単著	平成 23 年 9 月	『英語英文学研究』第 69 集 創価大学英文学会，pp. 67-77	『少年少女のためのワンダー・ブック』は、古典神話に基づいたゴシック的な要素を含む児童文学であり、現在も児童文学研究者が彼の作品に注目し続けている。また、作品の発行部数からも、19 世紀後半におけるボストン教育委員会からの推薦教科書リストに名を連ねているところからしても、この作品を再考する意味はあると考えられる。児童文学として注目され続けているこの作品を、本稿では、第一に作品の歴史的背景、第二に共同体形成という社会的観点から大人にとっての『ワンダー・ブック』の意義を考究した。
7 大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討	共著	平成 24 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 5 号，pp. 69-77	近年大学生の学術能力が低下していることは大きな問題となっている。特にリテラシーは学術能力の基礎であるため、その低下が懸念されている。そこで、大学教育において、試験的に「協働型読書プログラム」を作成し、2 年次の大学生対象に実施した。結果として、読書量に関しては効果があった。したがって、初年次教育において、本プログラムを運用することはさらに効果的であると予測できるのである。 調査の実施、データの提供、英語での要約作成を担当。 (高木悠哉、松岡律、熊田岐子、住本克彦、筒井愛知)
8 外国語活動における「異文化間コミュニケーション能力」の養成 ―童話を教材として―	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号，pp. 99-106	国際理解教育の流れに応じて、幼稚園や小学校で異文化交流などが行われるようになった。現在では、外国語活動も教育課程の取り組みの一つとして周知されたと言える。国際理解教育の中心である異文化理解は、第二言語習得におけるコミュニケーション能力の伸長に必要な資質として、もしくは異文化理解分野の基礎理論として議論されてきた。本稿では Byram (1997) の「異文化間コミュニケーション能力 (ICC)」を中心に据え、 異文化を理解する「能力」とは何なのか、 小学校の教育課程においてどのように育成できるのかを日本の国際理解教育の視点から再考。本稿では、教材として童話の使用を挙げているが、幼稚園において英語絵本の使用などが見られることからも、英語教育の連携において適した提案だと考える。
9 文学の描写を明示・暗示する映画の教育的応用（査読付き）	単著	平成 26 年 3 月	映画英語教育研究第 19 号，pp. 137-152	映画は異文化理解教材でもあるが、文学を題材とした映画は、指導法によっては読解指導を効果的にするものである。本稿では、テクストを前置詞・副詞という空間表現に着眼して児童文学を読み進め，劇活動を行った後，文学の描写を明示し，暗示しさえする映画の特徴を生かした読解指導の効果を計測した。授業毎時に提出されたポートフォリオには，文学的な読みが深まっていく一方で，映画に関する記述が減少していく様子が現れていた。これは，文学

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				と映画の違いや，映画を通じて文学への振りかえりを行っているためであることがグラウンディッドセオリーを行った結果として示された。本稿は，児童文学と映画を結びつけ，認知言語学を仲介として，文学を教育へ取り入れる提案と実証の一歩になったと考えている。
１０ 英語文学読解指導の遅延テストにみる空間表現身体化の定着（査読付き）	単著	平成 27 年 12 月	『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部(文化教育開発関連領域)』 第 64 号, pp. 131-138	これまで、本研究では、認知言語学を援用した英語読解指導として、１）教師によるスキーマ提示を含んだ空間表現を中心とする文法指導・日本語訳の口頭説明、２）グループ単位での劇発表、３）映画視聴、４）学習ポートフォリオの記載を基本とした指導を検証してきた。本指導から一定期間を置いて、前置詞・副詞の抽象的なスキーマは維持されているかを統制群と比較しながら、検証している。結果として、本指導を受けた実験群は統制群と比べると、指導のターゲットワードのスキーマ図を多く描き、ターゲットワードについて深い理解度を示した。さらに言えば、各空間表現の意味拡張として、心理的な意味合いを空間表現から読み取る協力者も出ていた。したがって、本指導は、指導効果の持続を示した。
１１ 空間表現の身体性を重視した英語文学読解指導（博士論文）	単著	平成 28 年 3 月	広島大学大学院教育学研究科	英語教育における文学教材の減少を立証・指摘し、認知言語学を援用した文学教材を使用した読解指導を、文学構造理論・認知言語学・身体論から理論組みして提案した 本研究の独自性は以下3点にまとめられる。（１）劇活動、映画視聴により、文学テクストの活字を学習者が身体を通して実感する方法を示した。（２）文学を使用した読解指導で、認知言語学を使用した指導法は未だ開発途上であるが、前置詞に基づく空間表現について、一つの実践例を示した。（３）認知言語学分野において、空間表現についての研究は進められているが、その指導に有効な言語資源として、文学教材が活用できることを示した。 本論文で扱った身体的理解は、小学校外国語活動にも活用できる指導だと考える。（A4 版、全 122 ページ）
１２ 英語スピーキングに対する不安尺度作成 ―小学校英語の教科化に向けて―	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集, pp. 67-74	小学校英語の教科化に向けて、小学校教職課程生を対象とした英語スピーキング不安の尺度作成を行った。先行研究によれば、スピーキングが外国語学習において学習者の不安を最も生む要因なのである。また、「聞く」「書く」「読む」の指導にも連携する能力である。英語学習者が英語スピーキング時の「情動的反応性」を克服し、英語スピーキングに対する「自信」をつけ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				る英語授業（指導法の授業を含む）の必要性が示唆された。執筆者：熊田岐子・岡村季光（本人執筆部分：pp:67～69, pp:71・73 は共同研究により抽出不可）
１３ 学生の外的要因と内的要因に着目する「外国語の理解」「外国語科指導法」に関する一考察	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要第 8 集, pp. 33-40	外国語コアカリキュラムは英語運用力・授業力に焦点が絞られている。しかし，熊田・岡村（2017）によると教職課程生の自尊心の欠如が表れている。英語運用力・授業力という外的要因に加えて，自尊感情・他者理解という内的要因の養成の必要性を主張した。執筆者：熊田岐子・岡村季光（本人執筆部分：pp，33-35, pp. 37 後半-38）
（その他） [学会発表等] １ 「映画英語リスニング・システム」と映画シャドーイングをブレンドした授業	－	平成 20 年 6 月	映画英語教育学会　第 14 回全国研究大会（創価大学） （発表要旨：『映画英語教育研究』第 14 号　映画英語教育学会，pp. 79-80，平成 21 年 3 月）	英語の授業をしていると、英語文法は理解できていて英文を読むことはできるのに、「英語を思うように聞き取れない」という学生たちの声をよく耳にする。この問題を解決していくために開発された「映画英語リスニング・システム」を授業に取り入れた。さらにシャドーイングを併用することによって、学習効果をあげるという内容の授業を紹介。発表内容、発表、本発表要旨の主担当である。（熊田岐子・岡崎弘信）
２ 初年次教育で英米文学を読むための工夫	－	平成 21 年 2 月	都留文科大学外国語教育研究センター合同研修会 （都留文科大学）	平成 21 年 3 月『都留文科大学外国語教育研究』に掲載した同タイトルの論文内容を報告。英米文学を大学の初年次生の授業で扱うのは困難である。しかし教養から考えると文学を読んでほしいというのが教員側の願いであろう。そこで内容検討に加えて英文レベルを測定することにより、初年次生でも読める英米文学も探せることを述べた。
３ 英米文学作品を大学の英語授業に取り入れるために	－	平成 21 年 5 月	第一回北東アジア言語教育学会（新潟県立大学） （発表要旨：Poster Session p. 5　Web 公開）	ポスターセッション枠で発表。内容や英文に対する感覚だけで教材を選択するのではなく、英文レベルを実際に測定し、その数値から学習者のレベルに合ったものを選んでいく方法を提案した。一般読者向け作品から児童文学作品まで英文レベルを測定し、難解な英文を書くと言われている作家の作品でも、現在の大学生の英語力に見合ったものを英語教育現場に授業教材として選べる可能性があることを述べた。
４ シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習	－	平成 21 年 8 月	外国語教育メディア学会第 49 回全国研究大会発表（流通科学大学） （発表要旨：『外国語教育メディア学会　第 49 回全国研究大会発表要項集』，	外国語教育メディア学会第 49 回全国研究大会発表（流通科学大学）において単独で行ったポスター発表である。昨今の教育界では、日本人学習者の英語コミュニケーション力の向上が大きな課題となっているが、コミュニケーションをとるためには相手の言葉を理解しなくてはいけない。そ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
			pp. 306-307、平成 21 年 8 月）	こでシャドーイング・マネージャーが付属された『スクリーンプレイで学ぶ映画英語シャドーイング』を使用した音読練習、および e-learning「映画英語リスニング・システム」を使用する授業を行い、かなりの成果をあげることに成功した。本発表ではこの英語授業の手順と一年間の運用結果を報告。
5 映画比較に基づいた「英米文学」の授業	－	平成 23 年 8 月	映画英語教育学会第 17 回全国研究大会（名古屋学院大学） （発表要旨：『映画英語教育学会 2011 年第 17 回大会要項』，p. 20）	原典のみを利用する授業では英文が理解できず、学生のレベルからあまりにもかけ離れてしまった場合には、「文学は嫌い」ひいては「英語も嫌い」と考える学生を生み出してしまう可能性さえある。そこで筆者は一年次教職課程の必修科目「英米文学」を担当するにあたり、「原典と映画」、「映画と映画」を比較し、英語力をつけながら文学を味わうことを目的とした授業の実践報告と成果報告。さらに、英語教員希望者用授業であるため、その工夫についても言及している。
6 文学テクストのイメージ形成を目的とした映画の活用	－	平成 25 年 8 月	映画英語教育学会第 19 回全国研究大会（相模女子大学） （発表要旨：『映画英語教育学会 2014 年第 19 回大会要項』，p. 25）	本発表では、文学テクストを原作とした映画を活用する指導を提示する。文学テクストは、読者が文章のみでイメージできるよう、繊細な言語表現に溢れており、英語授業で扱うべき要素を多分に含んでいる。しかし、英語学習者が文学テクストを読む際に、どのような舞台が背景として描かれ、登場人物は何を見て、どのように動くのかという登場人物の物理的空間認知や身体動作を具体的にイメージするのは決して容易ではない。一方、映画は、文学テクストのすべての場面ではないにしろ、描写を明示することに長けており、物理的空間や登場人物の身体動作の具現化が得意である。また、映画は、登場人物の心情を非言語的な要素（表情やジェスチャー、距離など）によって伝えようと工夫されており、この点も活用すれば、映画の長所を生かした指導となる。この指導を３カ月（週１度）続け、英語学習者（大学生）が得た気づきの変容から、映画がもたらす効果を検証する。この結果から、文学テクストを教材とする英語授業において、映画をどのように活用できるかを考察した。
7 空間表現の身体的理解による英語文学読解指導	－	平成 25 年 8 月	第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会（北星学園大学） （発表要旨：『第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会発表予稿集』，全国英語教育学会，pp. 468-469.）	文学は、言語的・内容的特徴から、英語授業で用いる価値があるものの、実際に使用するには難しい。しかし、前置詞・副詞という空間表現（at, on など）に着目すれば、文学のイメージを獲得する読解指導となる。文学の談話空間は、現実世界と同様に立体的であり、談話が入る「容器（container）」のようなものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				そのため、文学では、物語舞台や登場人物の身体動作などの描写に必要な空間表現が、文学ならではの言語表現で包まれている。本発表では、音読しながら、空間表現に着目して登場人物の身体動作を演じることにより、文学を体感する読解指導を提示する。本指導を英語学習者（大学生）に実施した結果、空間表現を通して、文学がよく読めるようになったという成果が得られている。また、文学を通して、空間表現の背景にある日常言語の概念体系を身体的に理解できる。本発表では、本指導の効果を検証した。
８ 空間表現の身体化による文学的な読みの深まり	－	平成 25 年 11 月	日本教科教育学会第 39 回全国大会（岡山大学） （発表要旨：『日本教科教育学会全国大会論文集』，pp. 130-131）	本研究の目的は、空間表現に備わる身体性に着目し、文学教材を使って英語学習者が空間表現を知識だけでなく、身体を動かして習熟する読解指導の効果を検証することである。特に、読解指導の効果として、登場人物の心理や社会的関係という文学的な読みの気づきの伸びを調査する。調査協力者 44 名（大学生）に対して、空間表現の身体化による読解指導を約３カ月間に渡って実施した。空間表現の身体化のために、読解指導には、登場人物の動作などを身体を動かして演じ、文学を音読する劇活動を取り入れた。読解指導の結果、調査協力者の文学的な読みが深まっていく様子が示された。
９ 英語文学劇活動における協同学習の効果	－	平成 27 年 3 月	日本教師学学会第 16 回大会（日本女子大学） （発表要旨：『日本教師学学会第 16 回大会』, pp. 94-95）	英語文学は，英語授業では取り扱いにくいという認識が一般的である。しかし，指導法さえ工夫すれば英語文学の特徴を生かして，英語授業に取り入れることができる。本発表では，英語文学読解指導に含んだ劇活動がどのような効果をもたらしたのかを協同学習の観点から検討する。結果として，協同学習が学習ループをもたらし，クラス全体がまた一つの協同学習グループとなったことにより，読解指導効果が強められた点を報告した。
１０ 複数の音声を比較検討することでリスニングの問題点を探る研究用ソフトウエアの開発	－	平成 27 年 11 月	外国語教育メディア学会関東支部研究大会 （早稲田大学） （発表要旨：『外国語教育メディア学会（LET）関東支部第 135 回（2015 年秋季）研究大会発表要項』, pp. 18-19）	平成 25 年 4 月～平成 27 年 3 月に支給された公募研究の成果発表である。単語や句に色々な発音があり、そのバリエーションが広いとすると、母語話者のように圧倒的な会話の経験量でもなければバリエーションのすべてに反応できない。同じ語彙、句、節などでどれほど音が異なり、どれほどのバリエーションが存在するのか。それを調べるツールとしてのソフトウエアの開発を行った。音声の検索ソフト部分が本発表の対象である。（新田晴彦・熊田岐子）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１ 空間表現の身体性を重視した読みの再検討	－	平成 28 年 8 月	全国英語教育学会第 42 回埼玉研究大会（獨協大学）（発表要旨：『全国英語教育学会第４２回埼玉研究大会発表予稿集』, pp. 562-563）	英語教育に見られる文学減少を踏まえて，本研究では，認知言語学における空間表現（at や on などの場所・空間を示す前置詞・副詞）の働きを重視する。空間表現は，英語母語話者の概念体系の本質となる空間関係が表出したものである。さらに，空間表現に備わる身体性を重視することにより，英語学習者にとって有用な知識を体得できると考える。本発表では，空間表現の身体性を重視した読解指導を実施し，登場人物の動作・位置から登場人物の心情・社会的関係を考察する文学的な読みに関する詳細な検討を行った。
１２ 小学校英語（新設「外国語活動」「外国語科」）における指導法に関する－考察－言葉の身体性に着目して－	－	平成 29 年 2 月	日本人間教育学会第 2 回大会（奈良学園大学）（発表要旨：『日本人間教育学会第 2 回大会研究発表要旨集』 pp. 30-31	小学校英語（3・4 年「外国語活動（35 時間）」、5・6 年「外国語科（70 時間）」）は、平成 28 年 12 月 21 日の答申において、その充実化が求められた。このような状況を踏まえて、本発表では、これからの小学校英語指導法について考察した。言葉の持つ身体性に着目し、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」という 5 領域を重点化する小学校英語において、表面的な英語スキルの向上を伸長させるだけではなく、同時に、児童の情感を活性化させて英語学習できるよう配慮すべきだ主張。児童の情感を伴う指導を行うことが、英語スキルの向上に繋がるからである。
［教科書］ １ 文部科学省検定済み教科書　高等学校外国語科用『Screenplay English Expression Ⅰ』	共同	平成 24 年 3 月 1 日文部科学省検定済み	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	学習指導要領の移行に伴って発行される平成 25 年度以降の高等学校外国語科用教科書。映画を使用して、異文化理解と英語表現習得を目的とした教科書であり、学習の動機付けになる多面的な教科書に仕上がっている。本教科書の「著作関係者」として奥付に記載。
［講演等］ １ 教育講演会講師　「映画やテレビを活用した英語学習法」	－	平成 23 年 10 月	岡山県吉備中央町立吉川小学校	吉備中央町立吉川小学校において行われたおかやま教育週間の取り組みとしての教育講演会に講師として招待された。対象は、地域の中学生、保護者、地域住民、小・中学校の教員。映画やテレビを利用して、ある場面を異文化理解教材とし、英語学習教材とする方法を紹介。
２ 小学校職員研修会講師「外国語活動の指導法」	－	平成 23 年 10 月	岡山県岡山市立操明小学校	岡山市立操明小学校における職員研修に講師として依頼された。外国語活動の指導法に関しての職員研修講師を行った。ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを取り入れつつ、目的のある授業づくりをする方法を紹介した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 日本教科教育学会第39回全国大会第３２分科会座長	－	平成25年11月	日本教科教育学会第39回全国大会（岡山大学）	第３２分科会その他の部門において，座長を務めた。分科会の口頭発表は，「理科授業研究の実態に関する考察（１）」，「高校生の英文和訳プロセスに関する事例研究」，「小学校国語科教員養成に関するコア・カリキュラムの開発研究」，「積雪寒冷地域における体力向上を目的とした授業プログラムの有効性の検討」であった。
4 日本教師学学会第17回大会自由研究発表分科会Ｅ司会進行役	－	平成28年3月	日本教師学学会第17回大会（奈良学園大学）	分科会Ｅ「教師の専門性とインクルーシブ教育（外国人・特別支援）」において、共同で司会進行役を務めた。口頭発表には、「小中一貫校における教師のニューカマーの子ども対応に関するアクションリサーチ」、「外国人留学生と日本人学生の混在型授業における教師への期待感に関する質的分析」、「公立学校における不登校・中退における生徒指導の課題－外国人児童生徒の挫折体験からの考察－」等であった。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　竹田　治美

研　究　分　野	研究内容のキーワード
比較言語学・外国語教育・多文化教育・翻訳学	中国古代口語史・　マイノリティーの学校教育・家庭教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）留学生科目における教材の開発	平成 18 年度～現在に至る	実用性を重視し、旅行・商談・学習・生活などのニーズを応じ、基礎編と応用編に分けて、徹底的に役に立つ指導することを工夫した。単に言葉を直訳するではなく、言語の背後にある生活習慣、地域性、国民性と言語の関連性とつなぎ、価値観の違いを理解するうえで、授業内容や教材などを考えた。また、留学生の日本語科目（語彙・文法）において、生活言語と学習言語を平行線形式で考え、独自に教材を開発した。その結果、日本語能力試験の合格率が向上を目指し、大きな成果がみられた。本学の留学生のみならず現在でも駿台観光外語専門学校の教材として使用されている。
2）遠隔技術の利用	平成 20 年度～現在に至る	授業以外、学外の語学学習にも重視し、インターネットのチャット利用を試み、随時質問を受け、学習の指導、作文や小論文の添削など行い、また、生活、進路などにも相談にも応じている。
3）日本語・中国語スピーチ活動による課外教育	平成 21 年度～現在に至る	留学生の日本語及び中国語のスピーチコンテストの審査委員として継続的に活動するほか、出場学生に対する課外指導や、指導教員向け・実務家のセミナー活動を積極的に続けている。実用的なスピーチ教育を通じて、指導学生が学外大会等で受賞したなどの学外に誇る成果を残している。
4）中国語科目にアクティブラーニングの導入及び夏季短期語学研修の取り組み	平成 25 年度～現在に至る	学生の国際的な視野、多様な思考力・分析力、問題発見能力、コミュニケーション能力、学んだ知識の応用力等を育成するために、アクティブラーニングを積極的に展開している。
5）参加型学習の機会の充実	平成 27 年度～現在に至る	ゼミ演習だけでなく、学生の主体的参加を促すために、学生による調査にもとづくプレゼンテーションや、ワークショップ方式によるアイスブレーキング、グループ・ディスカッションと発表を積極的に導入している。
6）企業との座談会・研修	平成 28 年度～現在に至る	夏休み期間、大和工業株式会社をはじめ、大手企業への座談会と研修を行い、直接企業の管理職や新入社員からアドバイスを受け、学生も積極的に質問し、就職活動に役に立てている。
2　作成した教科書，教材 「教材開発」 1）「日本語表現―文法編」 （奈良学園大学日本語科目専用）	平成 18 年度～現在に至る	日本学習者のニーズに応じて、日本語能力試験 N2、N１を目指す学習者が効率よく自習できるよう工夫した。機能語を意味によって分類して構成を考え、できるだけ簡単明瞭に文法的性格を解説しようと試みた。五十音図順で文法に関する事項を２５０セクションに細分し、例文で分かりやすく解説する。また、留学生が苦手な部分の社会・政治、経済を練習問題にし、一石二鳥を狙う。 B5 判 52 頁

2)「日本語表現―作文・小論文編」 （奈良学園大学日本語科目専用）	平成 21 年度～現在に至る	新しい作文の練習法で文章の構築力をつける練習帳である。留学生不得意な受け身、副助詞、接続詞で表現力をアップする練習帳である。 A4 判 35 頁
3)「コンピューター用語辞典（留学生用）」 情報学部向井教授と共同作成	平成 22 年度～現在に至る	留学生が最も理解しにくい情報学に関する専門用語を中国語に翻訳し、専門科目の授業内容の理解度を向上させることができた。（簡体字と繁体字二種類を作成）
4)『漢字ドリル３０００』 （奈良学園大学日本語科目専用）	平成 26 年度～現在に至る	日本能力試験 N1 を目指す留学生のために、漢字を音読みと訓読みをグループ別に構成し、効率的に習得できることを目指した。また過去数年間の能力試験１級に出題された漢字、語彙問題を徹底的に分析し、その他、漢字圏の留学生にとって落とし穴である同形語の用例を加えた。
5)『中国語楽しい会話』（奈良学園大学　中国語会話科目専用	平成 26 年度～現在に至る	本学の中国語会話科目は半期科目のみあり、市販の通年用教材が殆ど適用しないため、本学の学生の学力に合わせた教材を作成した。言語のみならず、習慣、文化など総合的な要素を入れて、効率的な教材の開発を試みた。修正して出版の予定。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）奈良産業大学情報学部　学生による評価	平成 18 年度～25 年度	学生より評価12項目においてすべて平均評価を上回り、3.8 以上を維持してきた。高い出席率を維持していて、大半の学生の受講意欲が高く、「理解しやすい、熱意を感じる」と学生から評価を受けた。課外活動やクラブ活動、ボランティア活動、地域活動など学生と共に参加した。学習のみならず生活指導なども行い、学生から高い評価を受けた。特に留学生に対して、携帯電話の番号、メールアドレス、チャット ID を公開し、学習のみならず、生活、進路どの相談を２４時間体制で受ける。留学生から信頼を得ている。
2）非常勤講師としての教育評価	平成 25 年度～現在に至る	奈良女子大学、関西大学の中国語学科の科目においても「中国語検定試験」、中国語スピーチコンテストなどの指導をし、優秀な成績をおさめることができて、学生、大学からも好評を受けた。20 年度から奈良県日本語スピーチ、全日本中国語スピーチコンテスト奈良県審査員を務めた。指導した学生が平成 25 年中国国家観光局の中国文化言語クイズ大会 18 賞のうち 14 賞を獲得した。
3）奈良学園大学人間教育学部・保健医療学部　学生による評価	平成 26 年度～現在に至る	学生の学習意欲が高くて、出席率も良好である。講義について継続して全学の平均値を上回り、学生から高い評価を得た。また、インターネットなどを利用して随時学生の質問などを受け、指導ができるよう工夫した。毎年の夏季語学研修も短時間で定員がうまる状態になる。また、留学先からも好評を受けている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）地域市民講座 （財）奈良県経済クラブ　中国語講座	平成 15 年度～現在に至る	地域の経済連合会主催の語学講座の講師を務めた。また、奈良産業大学と社会人向けの「奈良駅前大学」という地域連携事業の講師を務めた。コンサートや料理教室などを主催し、本学の学生、留学生との交流を活発にさせた。本講座は 2018 年に 15 周年を迎える。毎年、語学研修、コンサート、特色のあるイベントなど開催し、地域から「民間大使」と評価され、多大な評価を受ける。28 年度から東京オリンピックのボランティアガイドの育成を取り込む。 された。

		・平成 25 年 8 月中国大使館から感謝状と表彰。 ・平成 28 年 10 月 10 日「奈良新聞」に「日中民間文化の広場」報道された。 ・平成 28 年 10 月 10 日「奈良新聞」に「日中の架け橋として」報道された。 ・平成 29 年 2 月 22 日「奈良新聞」に「民間大使」報道された。 ・平成 28 年 11 月 10 日「奈良テレビ」に報道された。
2）医療業界向け外国人看護師国家試験受験教育	平成 20 年度～現在に至る	経済連携協定（ＥＰＡ）による外国人の看護師や介護福祉士を受け入れの日本語教育を主導、全国の総合病院に優秀な外国人看護師を送った。Ｎ１試験及び国家試験の合格率２割の中、指導学生の合格者は９割にのぼる。関東地域の病院会、関西地域総合病院の顧問をしている。
3）奈良県人権教育研究会講師 （奈良県下教職員約 50 人） 「多言語・多文化社会を目指して」	平成 21 年 10 月	日本の学校における外国籍の児童生徒を事例にして、彼からの日常生活及び学校生活においての問題点を取り上げて、学校現場からどのように対応したらいいかと検討する。また、日本人学生が他者と異文化との出会いによって、相互理解をすることを新しい共生の視点から検討した。
4）長安の日本人－阿倍仲麻呂と漢詩－ 「奈良産業大学公開講座」	平成 22 年 5 月	日本の歴史上、アジアとの関係構築に一生を捧げたわが国最古の留学生として、奈良から中国・長安に旅立ったことで遣唐使阿倍仲麻呂の異郷での生涯を紹介した。
5）奈良市人権教育研究会講師 （奈良市公立学校教職員約 30 人） 「外国人生徒のライフスタイルからみる学校教育」	平成 22 年 7 月	奈良市の公立学校における中国籍の児童生徒の学校教育・家庭教育の問題点について検討し、彼らは日本の学校でどのような適応を遂げていくのか、彼らのアイデンティティはどのように構築されていく中の母語教育の重要性を説明した。
6）奈良県人権フォーラム文化活動交流会講師 「アジアの小学校と日本の小学校」 （奈良県大和郡山市　小学生教員約 30 人）	平成 23 年 4 月～9 月	月一度計 6 回、小学生と教員に「アジアの小学校」をテーマに、ネーティブスピーカーを招き、文化、言語、絵本、教科書、楽器、ゲームなどからアジアの小学校を紹介した。
7）奈良県外国人教育研究会講師 「多文化時代における外国人家庭教育」	平成 24 年 8 月	学校教育現場における外国人児童生徒の教育問題の背景にある家庭教育について検討し合った。
8）東大阪市教育センター研究会　講演 （公立学校教職員約 50 人） 「中国の子どもたちと家庭教育―異文化の視点から」	平成 25 年 6 月	中国の幼・小・中・高・大の教育の全体像を紹介した上、現在中国の家庭教育や地域教育の差を紹介した。また、中国人と日本人の価値観や文化の差異の視点から現在の日本の学校教育における外国人児童・生徒に対する対応を考察する。
9）大阪市教育センター研究会講師 （大阪市立教職 30 人） 「多言語・多文化社会へのまなざし」	平成 26 年 6 月	追跡調査した外国籍の児童生徒を事例にして、彼からの日常生活及び学校生活においての問題点を取り上げて、日本人学生が他者と異文化との出会いによって、相互理解をすることを新しい共生の視点から論じた。
10）奈良 SGG クラブ（善意通訳ガイド協会）講師 「阿倍仲麻呂―唐での足跡」	平成 29 年 2 月	奈良遷都 1300 年記念行事の一環として、阿倍仲麻呂と遣唐使の歴史的な背景、唐の社会などを紹介し、史的視点から阿倍仲麻呂の高級官吏としての生活と半生を検証した。2017 年 2 月 22 日「奈良新聞」に掲載された。
５　その他 ・地域保健医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国吉林省長春医学高等専科学校との交流	平成 24 年 4 月	長春の総合医療機関、医科大学と国際交流協定などを締結し、看護師養成の国際交流活動を実施した。

・地域保健医療の国際交流の企画及び実施 公益財団法人奈良県理学療法士協会と中国東北師範大学人文学院リハビリション学院との交流	平成 25 年 4 月	日本の理学療法と最新の知識や技術を中国の大学で紹介し、中国の「鍼灸」治療法を見学した。
・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国東北師範大学人文学院看護学院との交流	平成 26 年 11 月	医療の学術交流と国際看護実習、 研修の受け入れを企画し、実行を行った。
・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国東北師範大学人文学院リハビリション学院との学術交流	平成 28 年 4 月	最新の医療機器と日本の医療臨床の事例を紹介し、 回復期の先端リハビリテーション科学最先端の研究と臨床を紹介した。
・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と南京衛生学校との交流	平成 28 年 4 月	日本の医療技術の高度化・国際化の強化をめざすための国際医療交流と看護学の国際化の交流を行い、看護留学生の育成の協定を締結した。
・地域介護医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と中国東北師範大学人文学院看護学院との交流	平成 28 年 10 月	看護の質の向上と国際的に通用する 医療人の育成のため、豊かな国際感覚を身につけ広い視野から保健医療福祉について考えられるというテーマで、中国の看護学生を招聘し、国際看護師の養成を考える。
・地域医療の国際交流の企画及び実施 社会医療法人高清会高井病院と南京医科大学付属病院との交流	平成 29 年 11 月	放射能治療の学術交流、中国の大学病院を視察研修し、日中の臨床について議論を行った。日本における粒子線がん治療施設が 19 ヵ所、うち重粒子線 6 ヵ所、陽子線 14 ヵ所、高井病院の陽子線センターを紹介した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1)高等学校教諭一級普通免許（音楽）（中国で取得）	平成 4 年 9 月	内 920068 号　（内モンゴル自治区教育庁）
2)日本語能力試験 1 級合格	平成 11 年 2 月	400 点満点のうち 399 点取得 1000 点満点のうち 972 点取得、平成 12 年までの最高点数記録であった。
3)J.TEST 実用日本語検定	平成 12 年 11 月	奈良教育大学大学院　（奈良教育大学第 957 号） 論文題目　中国帰国児童･生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索―ライフ･ヒストリー―からの考察―
4）修士（教育学）	平成 15 年 3 月	奈良女子大学大学院　（奈良女子大学博課第 393 号）
5）博士（文学）	平成 20 年 9 月	博士論文題目　宋代語録における副詞研究
6)NAFL 日本語教師養成プログラム LD	平成 20 年 12 月	株式会社アルクの主催する通信講座にて、420 時間相当する日本語教師養成講座を受け、最終試験を受けて終了。（20 科目取得平均点 96 点）
2　特許等		特になし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 奈良産業大学及び奈良学園大学　学内委員会 1）国際交流センター運営委員	平成 21 年度～ 29 年度	留学生の生活、学習の支援・指導、留学生の引率、留学生行事、特別聴講生、短期留学生の指導、日本人学生の語学研修、海外協定校に関する業務全般を担当。また、国際交流事業の企画、提案など、「国際交流センター記録」の編集などを担当留学生科目の担当の提案など。
2）入学試験委員会・編入学実施小委員	平成 21 年度～ 29 年度	大学の入学試験に関する業務全般。

3）全学共通・教養教育推進会委員	平成 22 年度～ 23 年度	留学生及び特別聴講生の日本語科目などを適切に履修することができるよう提案する。またクラス編成、協定校との調整などの全般業務である。
4）紀要編集委員	平成 22 年度～ 23 年度	奈良産業大学紀要第 27 号の編集など。
5）学生支援センター運営委員 6）学生委員会委員	平成 23 年度～ 24 年度	学生の生活、学習の支援、指導、大学行事の協力及び企画、実施を行う。
7）地域連携推進委員	平成 25 年度～ 26 年度	大学が持っている物的・人的資源を社会に提供する企画・実施などを行う業務全般。
8）自己点検・評価委員	平成 27 年度～ 29 年度	大学自己点検評価の業務などに携わる。
4　その他 1）企業の顧問	平成 14 年度～現在に至る	社団法人奈良県経済倶楽部の会員企業の顧問、主に中国に関する業務に携わる。
2）日中民間文化・経済交流	平成 19 年度～ 24 年度	民主党日中交流協議機構・大長城計画訪中団　日中国交回復３５周年の記念事業（民主党訪中団）を実施することに合意し、日中至誠基金による長城計画と合同した形での「（日中）交流協議機構・大長城計画訪中団」が結成され、議員団と一般参加者からなる大長城計画が実施され、通訳として同行。
3）特別研究員	平成 23 年度～ 24 年度 平成 22 年度～ 28 年度	中国教育部国家教育行政学院　特別（協力）研究員 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター　非常勤　協力研究員
4）医療関係の相談役及び顧問	平成 24 年度～現在に至る	社会医療法人高清会高井病院、東京都病院会の相談役及び顧問、主に医療の国際交流、外国人看護師、外国人介護士の受け入れ業務及び国際医療人材育成の企画を行った。
5）日本語スピーチコンテスト審査員	平成 25 年 12 月	公益財団法人 AFS 日本協会・奈良県高等学校国際教育協議研究会主催の奈良県留学生・研修生の日本語による体験発表会」の審査員を務めた。
6）『中国語学辞典』編集員	平成 26 年度～現在に至る	日本中国語学会辞典編纂委員会『中国語学辞典』編集員
7）日本語スピーチコンテスト審査員	平成 27 年度～ 28 年度	奈良市日中友好協会日本語スピーチコンテスト審査員
8）中国語スピーチコンテスト審査員	平成 29 年 10 月	第 35 回全日本中国語スピーチコンテスト奈良県大会審査員

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）『台風雑記』 「翻訳著書」	共著	平成 22 年 3 月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所出版	百年前、台湾植民統治時代に当時の官僚である佐倉孫三氏が漢文で記録した『台風雑記』を翻訳した。また、『台風雑記』と著者について紹介し、被植民者の思いと本書の意義についての論文の翻訳を担当した。担当部分「植民者による植民地の風俗記録」 A6 判（全 220 頁）（12 頁-30 頁を担当）、その他、原稿全体の編集など。 三尾裕子監修　台湾の自然と文化研究会　編訳 木村自、李春子、山田仁史、王厳隈、福浦厚子、林美杏　竹田治美
2）『宋代語録における副詞研究』	単著	平成 24 年 12 月	白帝社	本書は、著者のこれまでの中古・近古副詞や文法についての研究と、博士論文「宋代語録における副詞研究」をまとめたものである。 近年、中古・近古の文法や語彙、音韻の研究において個別の語彙について分析及び考察する研究があるものの、史的研究はきわめて少ない。本書は、史的な角度から宋代の言語状況を概観し、宋代語録の定義、起源、形成について論じ、総計 436 副詞の個々の使用状況、特徴、性質について考察を加え、宋代語録における副詞の特徴を明らかにした。 宋学語録における副詞の研究は、これまでの宋学語録研究が閑却してきた部分に着目し、近古語彙史の基礎研究を補完するものとして、学術的な意義は大きい。A6 判（全 298 頁）
（学術論文） 1）宋代語録における副詞の研究（博士学位論文）	単著	平成 20 年 8 月	奈良女子大学大学院	宋代における五つの宋学語録 175 巻を対象として、副詞を 6 つに分類し、435 種類副詞の特徴や諸性格について考察を行った。更に、音節構造からみた宋代副詞を検証し、その変遷と諸性格を明らかにした。 （400 字詰原稿用紙　1020 頁）
2）宋学語録についての一考察	単著	平成 21 年 3 月	天理大学中国文化研究第 25 号　pp.47-76	宋学の代表的な語録を中心に、宋学語録の定義、起源、形成及び盛行の原因、さらに現存版本などについて考察するものである。
3）音節構造からみた宋代副詞（査読付き）	単著	平成 21 年 3 月	白帝社 中国語研究第 51 号 pp.76-91	大部の書である宋学の五つの語録をテキストとして、副詞を中心にその特徴や諸性格に着目し音節について考察した。テキストとして宋学の語録合計 175 巻、総文字数は約 2,720,000 字であり、副詞は述べ 435 種類にのぼる。 2010 年　NO.62 日本中国学会報「歴史的文法分野」に取り上げられ、高く評価を受けた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）日本語学習における諸問題	単著	平成 22 年 9 月	奈良産業大学紀要 25 集 pp. 73－77	留学生の日本語学習の習得課程における諸問題を分析し中級レベルの学習者における共通の問題として、文法・助詞・動詞などの混同、誤用などの問題点を考察し、教室における日本語指導を通して、講義中や作文、レポートなどの誤用例を収集し、これらの問題に焦点を絞って、分析・考察を行う。
5）宋代語録における語気副詞について	単著	平成 23 年 9 月	奈良産業大学紀要 26 集 pp. 35-43	宋学語録を焦点に合わせ、語気副詞を考察した。語気副詞は数が多く、複音節化が顕著され、宋代の語気副詞は既に副詞の機能のみを担うものが多いということが分かる。一部の語気副詞は宋代以後も強い生命力を持って、現代漢語に定着し、口語表現として頻用されている。
6）日本語コースカリキュラムと指導について	共著	平成 24 年 9 月	奈良産業大学紀要 28 集 pp. 161-166	短期留学生が急速に増加している中、日本語短期研修を実施する際、教材の選択・使用、クラス編成、プログラム計画、教員配置などのあり方について、本学の夏季短期を事例として考察し望ましいコースカリキュラムの作成と指導のあり方について模索する。 （原稿の構成や問題意識の提起、講義の担当など全体にかかわったため分割不可能） 共著者：竹田治美・廣田直俊・加納巧
7）外国人児童･生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索―学校の多文化教育に向けて―	単著	平成 24 年 9 月	奈良産業大学紀要 28 集 pp. 129-139	2003 年から 10 年間にわたり、外国人児童・生徒の日本語学習や母語環境、学校生活などについて調査した。子どもたちの学校生活と家庭環境に焦点をあて、その背景､実態から見えてくるものを考察し、学校における日本語学習と日本語カリキュラムの位置付けを指摘する。そして､問題解決のために日本の学校､地域､社会が改善すべき点を具体的に提言する。
8）第二言語としての日本語習得について ―人称代名詞の認識と運用をめぐって―	単著	平成 25 年 2 月	奈良産業大学情報フォーラム第８集 pp. 89-98	第二言語習得（second language acquisition/SLA）研究に基づきながら、留学生の日本語習得における人称代名詞の認識と運用について検討したものである。第二言語としての日本語の人称代名詞を通して第二言語習得研究の中、特に教室における指導がどのように学習者に影響を与えるかについて考察し、より効果的な指導方法を探っていく
9）『祖堂集』における程度副詞について	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学紀要集 1 集 pp. 57－63	現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがそのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていったかに考察する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10）『祖堂集』における接尾辞に関する一考察	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要集 3集 pp. 83－88	『祖堂集』における副詞の接尾辞に焦点を合わせて分析し、その使用状況、機能、変遷に考察を加える。
11）『多文化時代における外国人家庭教育観の変容について』	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要集 5集 pp. 91－99	外国人児童・生徒の家族を含めた生活実態を考察することによって彼らの価値観の認識と変化してきた家庭の側面を分析し、子供たちと保護者の意識と家庭教育がそのように変容してきたのかを明らかした。また、彼らの成長と人格形成にどのような影響をもたらしたのか、複雑に絡み合った問題の起因を整理し、多様な対応が認められる学校現場に一助したい。
12）中国の古代謡諺に関する一考察　―『古謡諺』小考―	単著	平成 30 年 1 月	奈良学園大学学術機関リポジトリ	清の杜文瀾が編纂した『古謡諺』百巻、三千三百余首の謡と八百六十余首の諺を輯録した謡諺集であり、民芸文化研究の第一次資料である。謡諺の性質により歴史の変遷、言葉の位相には階層・年齢・性別・地域などの差異がみられ、古代中国政治社会の深層を知ることができる貴重な資料である。本研究は、『古謡諺』の諸相を通して童謡の歴史的な変遷や発展について考察を試みたい。
13）世紀転換期におけるマイノリティーの言語教育と文化伝承に関する研究 －中国北方地域の無文字少数民族を中心に－	単著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要集 8集 pp. 61-69	民族言語と伝統文化が消滅の危機に追われている人口の少ない、文字を持たない民族、エヴェンキ族の学校教育、家庭教育と母語教育の全体像をフィールド調査する同時に社会的・文化的背景とともに考察し、少人口民族の母語喪失の実態を通して、彼らが社会と経済、価値観が大きく変動していく中国社会においてどのような適応を遂げていくのか、その文化の伝達、アイデンティティーはどのように構築していくのかを明らかにすることにある。
（その他） 「研究報告書」 1）日本の大学における職業教育と大学生の職業意識 （中国語　査読付き）	単著	平成 23 年 8 月	中国教育科学「十一五」計画　教育部重点研究課題 職業教育と企業文化との結合研究と実験（研究課題番号：GJA104009） 中期研究成果論文集 中華職業教育出版社 pp. 367 - 372	中国教育部職業技術教育センター研究所からの要請で日本の大学におけるキャリア教育及び大学生の就職意識について考察、具体的なデータを挙げ分析した。また、その背景にある歴史的な原因、社会要素などについて明らかにした。海外から投稿論文の中、唯一入選されたものであり、高く評価された。
学会発表 1）日本の大学における職業教育について	単独	平成 23 年 8 月	中国職業教育学会	日本の大学におけるキャリア教育及び大学生の就職意識について考察、具体的なデータを挙げ分析した。また、その背景にある歴史的な原因、社会要素などについて分析した。さらにインターンシップ制度と実施及び現状と課題を考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2）近世漢語における副詞の音節変遷について	単独	平成 24 年 9 月	北京大学　古代漢語研究会	副詞は、最も複雑の品詞であり、数が多く、多様性を持っているのが特徴である。本発表は音節の角度から、中古・近世漢語の音節変遷について考察し、その機能と性質及び個々の使用状態を分析した。副詞の分節化の多重性からその意味と統語的な機能と構造と関連させ、系統性を試みる。
3）『祖堂集』における程度副詞について	単独	平成 25 年 10 月	日本中国学会第 65 回大会	現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがそのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていったかに考察する。
4）日本における古代漢語研究について（学会講演）	単独	平成 25 年 11 月	第 2 回漢語副詞研究学術検討会（重慶師範大学にて）	日本における古代漢語の研究状況を（語彙・文法・音韻などについて）紹介・報告した。
5）明清俗曲における俗語について	単独	平成 29 年 11 月	北京大学　古代漢語研究会	明清の俗曲集の『霓裳続譜』における口語と復音節俗語の機能、性質などについて考察し、その背景にある歴史要素、社会要素などを明らかにした。

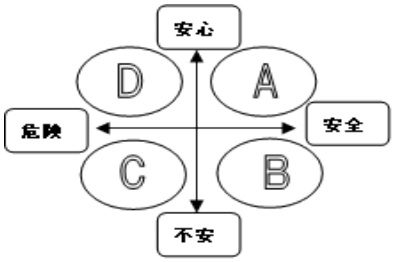
教　育　研　究　業　績　書

平成３０年3月３１日

氏名　松井　典夫

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	教師教育・教科教育（図画工作科）・学校安全（安全・防災教育）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 ・「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌　第3巻1号p62-66　松井）を用いた安全教育	平成２１年度～現在に至る	 安全教育で目指すべきところは、「安全で安心」であるＡのカテゴリーである。しかし、このカテゴリーに児童の状態がいれば、安全教育の役割が達成されたかと言えばそうではない。知識や技能が備わっていない状態であるなら、真の安全・安心とは言えないだろう。たとえば、防犯ブザーの例で言うと、防犯ブザーの学習をする前なら、Ａの位置（「防犯ブザーは持っていれば安全で安心だ」）にいた児童も多数いるだろう。「防犯ブザーはいざという時に、不審者を撃退することができる。それを持っていれば安心だ」と感じている状態である。しかし、学習を進めるうちに、実は持っているだけでは安全とは言えないことに気付き始める。児童は「安全を守るものだけど、それだけではだめだ。自分にはいざという時に使うことができない」というＢの状態や、あるいは、「まったく安全とは言えない。頼るのはこわい」というＣの状態へと移行し始める。このように、これまで何の疑問を持たずに「安全」だと過信し、「安心」しきっていた状態のＡの位置では、児童の生涯にわたる「安全」「安心」とは言えない。まずは「真実」を知ることが、安全教育の大きな役割のひとつと言えるだろう。しかし、この学習をした時点で、児童はＢやＣの位置にとどまらず、ベクトルは再び、真の意味でのＡに向かい始めているのである。児童の中では、「この学習をしたから自分の考え方が変わった」あるいは、「防犯ブザーの使い方をしっかり学んだから、いざというときに自分がどのような心理状態になるかわかった」というように、「安全・安心」を真に見つめることができるようになるのである。その状態や児童の変容を客観的に測るマトリクスとして、「安全安心様相図」を考案した。
・「児童の安全意識尺度（Safety Awareness Scale of Children　“ＳＡＳＣ”）」の開発	平成２７年８月～現在に至る	前掲の「安全安心様相図」を用いて安全教育に関する授業を行うことによる、一定の効果を実証することができたのは確かである。しかしながら、安全安心様相図のポイントを数値化することができず、客観性に足りない。そこで、容易に数値化することができ、なおかつ児童自身にポイントさせることができ、授業の事前、事後調査が可能な「尺度」に着目し、作成したものが「児童の安全意識尺度（Safety

		Awareness Scale of Children “ＳＡＳＣ”)」である。ＳＡＳＣを、協力校に事前に送付し、安全授業を実施する１週間前に、事前調査を実施してもらう。調査にあたっては、授業を実施する低・中・高学年のそれぞれのクラスで実施した。また、性別とイニシャルを記入してもらい、事前、事後調査で個別にその変容を見て取ることができるようにした。
・「図工科指導法」の講義における模擬授業過程の可視化	平成２６年４月～現在に至る	大学における「図工科指導法」の授業において、指導案を作成し、模擬授業を行う際、学生同士が児童役となって行う場合が多い。その際に、児童役の学生個々が児童役に没頭し、授業全体の流れや発問内容を把握、吟味することが困難である。また、授業者が自分自身の表情、発問のタイミングなどを即時評価することができるという意味でも、iPad で授業を撮影し、模擬授業後の協議会で動画を用いながら振り返り、自己、他者評価に活用している。
・図画工作科における小学校時代の実態調査	平成２６年４月～現在に至る	担当する「美術の理解」（１回生必修）及び「図工科指導法」（２回生必修）においては、第１回目の授業時に、１．図画工作科の授偉業は好きだったか。２．図画工作科の授業は楽しかったか。３．小学校時の図画工作科の授業でもっとも印象に残っている授業は。という項目でアンケート調査を行い、授業改善に役立てている。
・地震災害被災地の小学校における教育実践演習	平成２９年１０月	平成２９年４月に発生した熊本地震では、多くの学校も被災し、また避難所となった。避難所となった学校に訪問し、登校時の安全指導ボランティアや、授業補助の演習を行うことを目的として、奈良学園大学の教職志望の学生１０名を引率し、熊本県益城町立広安西小学校を訪れ、実践的演習を行った。
２　作成した教科書、教材 ・安全教育実践指導略案集(再掲) ・安全教育実践考察集(再掲)	平成２２年２月	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生の参考資料として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成２１年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成２１年度に実践した安全教育の授業（防犯・生活安全・地震災害・交通安全・火災・水難災害）の指導略案を作成し、それぞれの授業後に考察した内容を記録した考察集を作成し、平成２１年度の大阪教育大学附属池田小学校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。安全教育に対する必要性の実感は、メディアを賑わす事件や事故、災害の後は教育現場において高まる観があるが、どのような実践をすればよいかわからないというのが、教育現場で聞かれる多くの声である。その一助にと作成したものである。
・「美術の理解」授業プレゼンテーション及びワークシート	平成２６年４月～現在に至る	理解」においては、芸術分野の内容理解、美術教育の概観の内容理解を行うために、テキストを使用するのではなく、その理論に伴った実際の児童の姿や授業の内容について、具体的に想起しながら学ぶことができるように、プレゼンテーションを作成して授業を行っている。また、その内容を復習しながら習熟していくことができるように、ワークシートに記入させ、１５回の講義後にワークシートを綴じ、テキストとして使用することができるようにしている。
・教職表現力演習ノート	平成２７年４月	奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。ワークシートとしても即時に記入しながら利用することができる構成になっている。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 ・大阪教育大学附属池田小学校　学校教育診断	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年４回にわたって、児童対象と保護者対象に分けて、学校教育診断を実施している。およそ３０項目の質問事項に対して、マークシート式で回答し、その他の要望等を記述式で回答する。結果はホームページにおいて公開され、授業参観時に全保護者が閲覧できるように冊子化もされる。その結果において、児童、保護者ともに、毎年度高い評価を得ている。
・大阪教育大学附属池田小学校　個人評価	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度４月に個人目標を設定し、3月に管理職面談を経て個人評価を受ける。この結果は給与に反映される。 この個人評価において、毎年度高得点を得て、高い評価を得ている。
・奈良学園大学における学生の授業評価	平成２７年度	人間教育実践力開発演習では、教師として求められる、教育現場の現代的課題への対応力として、学校安全マップの意義や授業構成に関する授業を行ったことで、教員としての将来への展望と、教員の資質能力に関して具体的に学ぶことができたと高評価を得て、以後毎年、学校安全マップの授業に取り組んでいる。
・奈良学園大学における学生の授業評価	平成２８年度	教育実習事前事後指導では、学校運営、学級経営、教室掲示とうについての講義を担当した。そこでは求められる教師の姿や学校の組織としての姿、組織力に関して具体的に学ぶことができたと、高評価を得た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ・大阪教育大学教育実習生指導	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度９月に基本実習生およそ５０名、１１月に併修実習生およそ５０名を受け入れ、指導に当たっている。 平成１７年度から２０年度においては図画工作科主任として、特に美術科の学生を受け入れ、授業実践、指導案作成、生活指導等の指導に当たった。また、平成２２年度、２３年度においては学校安全主任として、全教育実習生を対象とした安全講話を行うとともに、将来、教師になったときのための経験として、不審者対応訓練の見学、参加を指導した。 また、平成２５年度においては、教生指導部長として、全教育実習生の指導、相談に当たってきた。
・名古屋市立井上小学校：安全研修講師	平成２１年８月	名古屋市教育委員会主催による、安全担当者の夏期研修の講師を、名古屋市警察とともに務めた。当校教員が不審者対応訓練を行い、その訓練を参観した後、名古屋市警察とともに不審者対応訓練の指導助言を行った。訓練は、よくない部分での同僚性が強く出てしまったものであり、その点についての助言も行った。
・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成２１年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者を対象に、講演を行った。ここでは主に、不審者対応訓練による教職員の安全意識の向上と、「お金のかからない」安全対策、例えば机上整理による可視性の向上や、スリッパではなく靴を履くことによる、安全意識の向上について提案した。

・豊中市立南桜塚小学校：夏期研修会講師	平成２１年８月	豊中市立南桜塚小学校の教員夏期研修会。当校の教職員は、それまで教職員対象の不審者対応訓練を行ったことがなかった。そこで訓練の方法や手順をコーディネートし、その後、「学校安全に必要なもの～安全管理と安全教育～」というタイトルで、不審者対応訓練の指導助言、及び講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の様子をビデオ視聴することによって、参考になるようにした。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会南部大会講師	平成２２年８月	京都府教育委員会主催の、安全指導者研修会で、「学校安全と安全教育」というタイトルで、学校安全管理と、安全教育に関する講演を行った。ここでは主に、教職員の安全意識を向上させることが、学校安全につながるという内容で話した。京都府下南部の教員約１００名が参加した。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会北部大会講師	平成２２年８月	上記、南部大会の３日後に、北部大会において、同様の講演を行った。京都府下北部の教職員役１００名が参加した。
・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者研修を対象に、講演を行った。守口市教育委員会の依頼で、前年度に引き続き開催された研修会である。前年度の内容に加え、大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件の概要を伝え、そこから教訓として学んでほしい内容、特に ID カードの役割について強調する内容とした。
・豊中市立南桜塚小学校区：夏期研修会講師	平成２２年８月	豊中市立南桜塚小学校区の教員夏期研修会において、「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、講演を行った。前年度は当校のみの教員研修会だったが、前年の講演内容から、中学校区の小学校と中学校も参加することとなり、三小学校・一中学校の教員を対象に行った。小中学校の教員が混在することもあり、特に東日本大震災における「釜石の奇跡」を資料として取り上げ、小中学校の連携の大切さを紹介した。
・羽曳野市立古市南小学校：夏期研修講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、羽曳野市立古市南小学校夏期研修会において、講演を行った。安全管理においては、教職員の安全意識の向上と、ID カードの大切さや意味について話し、安全教育については、大阪教育大学附属池田小学校で実践している授業について紹介した。
・日本損保協会：防災ダック座談会パネリスト	平成２２年１０月	日本損保協会主催の防災ダック座談会において、神戸市消防局安全担当者、京都大学教授とともにパネリストを務め、安全管理と安全教育に関する座談会を行った。発表では安全教育の授業内容、特に安全マップの授業について紹介した。聴衆は、現職教師、警察、消防関係、一般市民であった。
・大阪教育大学附属池田中学校：安全研修講師	平成２２年１２月	同じキャンパス内にありながら、附属池田中学校では、教職員対象の不審者対応訓練が行われていなかった。そのことを憂慮した当時の教務主任に相談を受け、講師として赴いた。不審者対応訓練の意義と方法を提案し、実際に訓練を行い、事後講評を行った。

・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２３年５月	「学校安全と安全教育」というタイトルで、９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校で行っている、教職員対象不審者対応訓練の映像を資料として使用し、訓練による二次的な効果としての、教職員の安全意識の向上について話した。本研修には、宮崎県下の安全担当教職員役２００名が参加した。また、本講演には関西テレビが同行取材を行い、後日、一部が放映された。
・豊中市立第５中学校：安全研修講師	平成２３年８月	豊中市立第５中学校において、不審者対応訓練のコーディネート、及び講演「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」を行った。当校は、教職員による不審者対応訓練は初めてであったため、最初は同僚性が弊害となり、戸惑う様子が見られたが、講演後、「今まで安全のことを考えてこなかった自分が恥ずかしい」という言葉が聞かれた。
・守口市立梶中学校区：安全研修講師	平成２３年８月	夏期休業中に行われた教職員の研修会で、守口市立梶中学校区の梶中学校、梶小学校、藤田小学校、３校の教職員全員が参加した研修会で、講師を務め、９０分の講演を行った。「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」というタイトルで行い、附属池田小学校事件や阪神・淡路大震災を題材に、教訓から学ぶことの必要性を説いた。
・竜王町教育委員会：教職員夏期研修会講師	平成２３年８月	滋賀県の竜王町教育委員会が主催する、教職員夏期研修会において、安全研修の講師を務めた。竜王町の教職員、約５０名が集まった。「学校安全と安全教育」というタイトルで講演を行い、火災・地震災害・交通安全・水難災害・防犯の各カテゴリーにおける安全教育の実践例を紹介し、安全教育が及ぼす児童への影響について話した。
・守口市教育委員会：安全指導者講習会講師	平成２３年８月	守口市教育委員会主催の安全指導者研修会の講師は、平成２１年度から続く、３年目になる。年度ごとに各校の安全担当者が変わっており、毎年研修会を開くことの必要性を実感した研修会でもあった。本研修会では、例年、大阪教育大学附属池田小学校の教職員対象不審者対応訓練のビデオを題材として使用し、訓練の必要性と２次的な効果（教職員の安全意識の向上）について述べるようにしている。
・竜王町教育委員会：竜王町校長教頭会講師	平成２３年８月	本研修会は、竜王町の校長、教頭会であるため、学校安全にかかわる際の管理職の役割について内容を構成した。「学校安全のリーダー性について～管理職の役割～」というタイトルで講演を行った。従って、これまで講演した内容を管理職向けに再構成し、不審者対応時の管理職の役割や、ID カードを徹底することの必要性、教職員の安全意識を向上させていくことの必要性と方法について提案した。
・豊中市立桜塚小学校区：３校合同研修会講師	平成２３年８月	例年、豊中市立南桜塚小学校で開催している夏期研修会を拡大し、同校区の豊中市立第３中学校、桜塚小学校、南桜塚小学校の３校合同で開かれた研修会で、およそ１００名が参加した。「子供たちの命を守るために必要なこと～学校安全設備と安全教育～」と題し、お金がかからないで、見落としている学校安全についてと、安全教育に関しては、東日本大震災を題材に話し、マンネリ化しない避難訓練について話した。

・大阪教育大学附属池田中学校：校内研修会講師	平成２３年１２月	平成２２年度に引き続き、２年目の研修会である。初年度は初めての不審者対応訓練であり、戸惑いがちな様子がみられたが、２度目とあって、教職員の安全意識が飛躍的に向上し、積極的に研修会に参加している様子が伺えた。訓練後、訓練の振り返りを指導助言した。当校はまた、今回の訓練の様子をビデオ撮影し、後に校内研修で振り返りを行った。
・大阪教育大学メンタルサポートセンター：講演	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田小学校事件後に、児童のメンタルケアを目的として設置された、大阪教育大学メンタルサポートセンターが開催した学校安全フォーラムにおいて、大阪教育大学附属池田小学校の「安全科」に関する紹介と、安全教育の実践内容の紹介、学校安全に関する講演を行った。全国から約２００名の参加者があった。
・豊中市教育委員会：管理職研修会講師	平成２４年２月	豊中市教育委員会が主催する管理職研修会で、平成２４年度においては学校安全に関する研修会を計画され、実施されたものである。管理職が対象ということで、これまでの講演内容を管理職対象のものに再構成した。また、主催者側の要望もあり、ワークショップも取り入れた。ワークショップでは、不審者対応時にどのように教職員を動かすか、どのようなリーダーシップを発揮いするかという内容で行った。
・岬町立岬中学校：夏期研修会講師	平成２４年５月	岬中学校における本研修会は、強く記憶に残るものであった。まず教職員の安全意識が非常に高く、それは安全担当者の熱心な姿勢からくるものであると推察された。当日実際に行われた不審者対応訓練では、防火扉を有効に使い、教職員同士で声を掛け合いながら不審者の居場所を限定していくという、大変工夫されたものであった。一人の教員の熱意やリーダーシップがうまく作用している様子が伺えた。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２４年５月	平成２３年度に引き続き、２年目の宮崎県での講演となった。前年度は、内容については講演者に一任されたが、当年度の講演は、地震災害についてのもという要請があった。東日本大震災をうけてのものと思われる。「釜石の奇跡に学ぶ～避難訓練についての再考～」と題し、休み時間に避難訓練をすることなどの重要性について話した。
・大阪教育大学：「学校安全の日」事業講師	平成２４年６月	大阪教育大学柏原キャンパスにおいて、学部生、及び大学院生、２００名を対象に、「安全な学校を作る教師になるために」というタイトルで講演を行った。将来、教師になったときの、子供たちを守る方法と意味について話した。この講演は、朝日、読売、毎日新聞の取材を受け、後日各紙に掲載された。
・守口市教育委員会：幼稚園長研修会講師	平成２４年７月	守口市の幼稚園長を対象に、「子どもたちの命を守るために」というタイトルで９０分の講演を行った。ここでは、交通安全を題材として取り上げ、幼稚園から小学校に上がった時の交通事故の増加に関する資料を示し、幼稚園児に対する安全教育の必要性と方法について話した。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２４年１２月	守口市立八雲中学校において、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業として、東日本大震災を教材とする授業を行った。またその後、教職員を対象に、「子どもたちの命を守るということ」と題し、９０分の講演を行った。ここでは、授業の振り返りも含めて、「釜石の奇跡」について紹介し、教訓から学ぶべき内容

		について話した。
・岡山県備前市立三石小学校：ＰＴＡ人権教育小中合同研修会講師	平成２５年６月	備前市立三石小学校において、午前の人権教育参観で第４学年において、「溺れかけた兄妹」という、作家の自伝的作品を題材にした安全教育（水難災害）の授業を行い、午後からＰＴＡ人権教育小中合同研修会で、「命を大切にする教育」と題し、安全教育と学校安全に関して、教員・保護者を対象に９０分の講演を行った。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	当校での安全研修講師は、５年続けてのものである。豊中市立南桜塚小学校の安全研修会において、当校の不審者対応訓練のコーディネート、及び指導助言を行うとともに、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。当校では、3年間の安全研修で教職員の安全意識も向上し、全員が ID カードを着けるようになったという、校長先生からのお話があった。
・茨木市立穂積小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	茨木市立穂積小学校の安全研修会において、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の紹介と、「安全科」の授業実践を紹介し、具体的な安全対策について述べた。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２５年１２月	守口市立八雲中学校において、前年度に引き続き、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業を行った。当日は、全校生徒による地震災害の避難訓練も行われ、見学をした。授業内容は、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」であり、いじめを題材とした授業を行った。授業後、教職員を対象に、いじめに関する講演を９０分行った。
・守口市教育研究会　生活・総合部会：指導助言	平成２５年１２月	守口市教育研究会生活・総合部会において、当研究会の担当者による地震災害の安全教育の授業を参観し、その指導助言を行うとともに、「これからの学校安全と安全教育」と題し、６０分の講演を行った。ここでは、担当者の授業実践の内容を絡め、教科教育と安全教育の類似点と相違点について話し，児童にとって有効な安全教育の必要性について話した。
・寝屋川市立堀溝小学校：安全研修講師	平成２６年６月	寝屋川市立堀溝小学校において、５，６年生を対象に、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」と題して安全教育に関する授業を行い、児童下校後に、教職員対象に、『「有効な」安全教育とは　～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」を例に～』と題し、９０分の講演を行った。ここでは、本当に児童にとって「安全で安心な学校」とは何かについて話し、いじめについての取り組みの必要性と方法について話した。
・岬町立淡輪小学校：安全研修講師	平成２６年８月	本研修会は、平成２４年５月に行われた、岬町立岬中学校の研修会に参加していた、淡輪小学校の安全担当者の依頼によるものであった。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで、１２０分の講演を行った。特に大阪教育大学附属池田小学校事件の詳細を話し、そこから教訓として学ぶべき事柄を話した。

・豊中市立南桜塚小学校：安全研修講師	平成２６年８月	平成２１年度から続く、南桜塚小学校の６年目の研修会講師である。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで９０分の講演を行った。特に、学級崩壊やいじめといった、教育の現代的課題について話した。当校では、学校安全については過去５年間話していたため、安全に対する意識は向上し、取り組みを強化している様子であった。そこで一度立ち止まって考えたとき、子供たちにとっての「安全で安心な学校」とは、まずいじめなどがない学校であることを考えていくことを進めた。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修講師	平成２６年８月	平成２１年度から続く、南桜塚小学校の６年目の研修会講師である。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで９０分の講演を行った。特に、学級崩壊やいじめといった、教育の現代的課題について話した。当校では、学校安全については過去５年間話していたため、安全に対する意識は向上し、取り組みを強化している様子であった。そこで一度立ち止まって考えたとき、子供たちにとっての「安全で安心な学校」とは、まずいじめなどがない学校であることを考えていくことを進めた。
・寝屋川市立第７中学校区「いのちの教育」研修会：講師	平成２６年８月	寝屋川市の第７中学校校区である、第７中学校、南小学校、堀溝小学校の３校合同で開催された、「いのちの教育」研修会で、１２０分の講演を行った。「いのちの教育としての安全教育～“Smile School“の提案～」と題し、大阪教育大学附属池田小学校において実践した研究授業「Smile School～『いじめと命』未来に向けて考えよう～」の実践内容と、授業実践時の児童の反応を中心として、いじめについて子供たちが向き合う方法について話した。
・三郷町ひまわりセミナー：講師	平成２６年１１月	現在勤務する奈良学園大学人間教育学部がある、奈良県生駒郡三郷町における、一般向けのセミナーで９０分の講演を行った。当日は、三郷町の町長、教育長、地域の小学校校長、市民ボランティア団体、一般の町民等、様々な人が参加した。「子供たちの命を守る「安全・安心」～町と大人の役割～」と題し、事件や事故、災害の実例を挙げながら、どのようにして子供たちの命を守るのかという、地域の大人の役割について話した。
・豊中市立豊南小学校：初任者研修指導助言	平成２６年１１月	豊中市立豊南小学校の初任者教員の、校内研究授業（国語・算数）の研究授業を参観し、授業後に指導助言を行った。当該教員は２年生を担任しており、特に、発達的課題を持った児童がいる学級における、一斉授業のあり方、方法について指導助言を行った。
・豊中市立豊南小学校校内安全研修：講師	平成２６年１２月	当校ではこれまで、校内の安全研修を行ったことがなく、研修のあり方、不審者対応訓練について、教職員の安全意識の向上についての講演依頼によって行った。当校教員約３０名に９０分の講演を行った。大阪教育大学附属池田小学校事件の教訓を例に挙げ、児童の安全を守るために学校、教職員が取り組んでいくべき内容について話した。
・豊中市立豊南小学校　安全教育授業	平成２７年５月	当校において、安全教育の模範授業を実施し、研究調査を合わせて行った。授業内容は、「知らない人とであったら」というタイトルで、防犯に関する授業を低、中、高学年で行った。「いかのおすし」という安全標語について、考える授業を行った。

・王寺町リーベルカレッジ：講演	平成２７年８月	奈良学園大学社会連携センターと王寺町の共同による取り組み、王寺町リーベルカレッジにおいて、地域住民や子を持つ保護者を対象に、「子どもの安全を考える　～大人と地域の役割～」と題した講演を行った。神戸市小１女児の連れ去り事件などを例に挙げ、地域の大人の目の大切さについて話した。
・全国地域安全運動　泉大津・忠岡安全大会：講演	平成２７年１０月	忠岡町シビックセンターにおいて、泉大津・忠岡町の合同安全研修会で講演を行った。地域住民が２００名ほど集まり、「子どもの安全を考える　～大人と地域の役割～」として、2004 年の奈良小１女児殺害事件や、この年の夏に発生した奈良県香芝市の小６女児監禁事件を例に挙げ、「３つの死角」（場・地域住民・学校教育）について提案した。
・２０１５　なら講座：講演	平成２７年１２月	例年開催されているなら講座での講演。奈良県立医科大学で行われ、地域住民を対象に、「地域防犯の視点から」と題して講演を行った。地域の登下校見守り隊などのボランティア活動は高齢者頼みになっている実態を提示し、行政と地域が協同し、見守りなどの活動を活性化する必要性を提案した。
・大阪市立堀江小学校　卒業記念講演	平成２８年２月	大阪市立堀江小学校の６年生１００名を対象に、「命の学び　～中学校へ！新たな希望～」と題し、９０分の授業講演を行った。３つの題目を設定し、「連れ去りについて」「いじめと命について」「避難訓練について」話した。
・豊中市立豊南小学校教員安全研修会：講師	平成２８年５月	毎年行っている、豊中市立豊南小学校の安全研修の講師に赴いた。今回は教員が実際に不審者対応訓練を行い、それを見学して指導講評を行うというものだった。その中でも、教師という職業的性格から、責任感を強く持って有事に対応しようとするが、教師の命も大切な命であるということを強調した。
・授業力&学級づくり研究会：発表	平成２８年６月	平成２８年４月に、主に大阪府の小学校教員を中心とした「授業力&学級づくり研究会」を立ち上げた。会の運営に携わっているが、ここでは「ネームプレートを用いた非言語コミュニケーションの価値」と題して、授業の中で使うネームプレートの活用方法とその効果について発表した。５０名の参加者で行った。
・奈良学園小学校：安全教育授業	平成２８年６月	奈良学園小学校の全児童を対象に、安全教育の授業を２日間に分けて行った。小学校１．２年生を対象に行った「あんしんしてとうげこう」では、集団で登校することによる防犯上の利点について理解できる授業を行った。３，４年生を対象に行った「ここは安全？危険？」では、安全マップの前段階ともいえる、防犯の視点形成の授業を行った。５，６年生を対象に行った「命の学び」では、国立教育政策研究所の「いじめ実態調査」の資料をもとに、いじめに関する授業を行った。
・奈良学園登美ヶ丘（幼・小・中・高）：教職員安全研修　講演	平成２８年６月	奈良学園登美ヶ丘キャンパスの幼稚園から高等学校までの全教員対象の研修会で、９０分間の講演を行った。タイトルは「学校安全の意識」とし、前職であった大阪教育大学附属池田小学校における事件の教訓をもとに、教職員の不審者対応訓練の方法や意義、また、安全教育などについて話した。

・教職員自主研修事業　大学・専修学校等オープン講座　講演	平成２８年７月	「事件・事故・災害の教訓から考えるこれからの学校安全と安全教育」と題し、９０分間の講演を行った。とくに連れ去り事件に焦点を置き、安全教育を実践する際の視点の置き方について話した。また、年代別防犯の方法について、幼・小学校低学年、小学校中学年、そして小学校高学年・中学生と、年代別にわけて提案した。
・免許更新講習　講師	平成２８年８月	保・幼稚園教諭を対象とする免許更新講習で、90分の講義を担当した。「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える」というテーマで行い、「表現領域（美術）」を担当した。図画工作科教室において、保育内容を充実させる授業内容をグループで考案し、ポスターセッションを行って実践例を共有する活動を行った。
・三郷町立小学校２校合同研修会　講師	平成２８年８月	三郷町立三郷小学校と三郷北小学校が合同で行う、合同不審者侵入対策訓練において、訓練実施後の講評と講演を行った。講演では、事件の教訓に基づいた学校安全対策について、校門のセキュリティーやIDカードの意味について、具体的に必要な学校安全対策について話した。
・日野町立西大路小学校　安全研修会講師	平成２８年８月	日野町立西大路小学校における不審者対応訓練の指導講評をおこない、その後講演を行った。訓練は地元警察官が不審者役となり、臨場感あふれる訓練だった。講演では「事件の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」と題し、教員が意識すべき３つの「死角」（場の死角、地元住民の死角、学校教育の死角）について話した。
・大阪府立枚方高等学校　模擬授業	平成２８年１０月	高校２年生の、教職に関心をもつ学生およそ３０名に、「子どものいのちと教師の役割」と題して５０分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
・甲賀市立大原小学校安全研修講師	平成２９年１月	甲賀市立大原小学校の教員安全研修会において、「防災教育をどうすすめるか」のタイトルで講演をおこなった。これまでの安全教育の想定やセオリーを見直し、児童生徒や地域の実態に応じた防災教育の必要性について話した。とくに避難訓練のありかたと有効性について話題にした。
・奈良県立大宇陀高等学校　模擬授業	平成２９年２月	高校２年生の、教職に関心をもつ学生を対象に、「子どものいのちと教師の役割」と題して５０分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
・熊本県益城町立広安西小学校　PTA対象　講演	平成２９年４月	熊本地震が発生した平成28年4月14日（前震）の前日である4月13日の放課後に、甚大な被害を被った益城町の小学校ＰＴＡを対象に、「子どもの命を守る大人の役割」と題した講演を行った。

・熊本県益城町立広安西小学校　防災教育授業	平成２９年４月	平成 28 年 4 月 14 日（前震）に発生した熊本地震からちょうど 1 年のこの日（平成 29 年 4 月 14 日）、甚大な被害を被った益城町の小学校で、児童対象に防犯・防災教育の授業実践を行った。低学年対象では、自分たちを守ってくれているものや人について改めて認識し、安心感を生む授業を行った。中学年には東日本大震災における「釜石の奇跡」を題材に、避難訓練の有用性に関する授業を行った。高学年避難訓練の有用性に関する授業を行った。高学年対象としては、阪神淡路大震災における被災者の数から、命の尊さに結びつけて考える授業を行った。
奈良県立西の京高等学校　キャリア教育　講師	平成２９年５月	教職を志す高校生約 30 名を対象に、「子どもの命と教師の役割」と題して講義を行った。過去に発生した略取・誘拐事件を題材に、アクティブ・ラーニングの授業スタイルで、個人の思考から対話の中での思考の深化、表出を意識した授業を行った。
奈良学園小学校：安全教育　講師	平成２９年６月	奈良学園小学校の全児童を対象に、安全教育の授業を２日間に分けて行った。小学校１年生を対象に行った「あんしんしてとうげこう」では、集団で登校することによる防犯上の利点について理解できる授業を行った。３年生を対象に行った「こんなときどうする？」では、安全マップの前段階ともいえる、防犯の視点形成の授業を行った。５年生を対象に行った「いのちを守る判断」では、国立教育政策研究所の「いじめ実態調査」の資料をもとに、いじめに関する授業を行った。
・高槻市立郡家小学校：学校安全研修　講師	平成２９年７月	「事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、当小学校の教職員夏期研修会で話した。 学校で発生した児童が被害に遭う事件を教訓に、学校安全の方法について話し、またそれらを教材にした安全教育の授業題材や授業方法、教授法について話した。
・大阪市　資質向上研究会　講師	平成２９年７月	「事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、大阪市の教員、管理職で構成される資質向上研究会で 3 時間の講演を行った。 学校で発生した児童が被害に遭う事件を教訓に、学校安全の方法、管理職の役割について話し、またそれらを教材にした安全教育の授業題材や授業方法、教授法について話した。
・教員免許更新講習　講師	平成２９年８月	「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える　－幼児期における造形表現活動の意義と役割―」 保育、幼稚園教諭の教員免許更新講習の講師として、40名を対象に講義を行った。保育内容の5領域と「表現」領域の関連性について講義を行い、その後、アクティブ・ラーニングとして、グループで造形活動実践の計画、ポスター作成、ポスターセッションを行った。
・三郷町立小学校 2 校合同研修会　講師	平成２９年８月	本年度は三郷北小学校において、合同不審者対応訓練が行われ、その指導助言に赴いた。 訓練は、安全担当者により周到に準備されたものだった。訓練後、学校安全における「教師の役割」について話した。

・生駒地区小中学校管理職・事務職員研修会　講師	平成２９年９月	「学校での事故・災害など、緊急事態に対する対応と予防」について、生駒地区の小中学校の管理職と事務職員に講演した。これまでの学校での事故や災害を例に挙げ、発生したとき、あるいは予防方法について、教師の役割、管理職の役割について話した。
・第67次兵庫県教育研究集会（ひょうご教育フェスティバル）　指導助言	平成２９年１１月	西宮市で開催された本研究会で、「生きる力を育む教育」分科会の指導助言に行った。当分科会では、主に震災に関連した発表が多くあり、震災関連教育については、今後、児童生徒の生きる力としての「レジリエンス」の重要性について話した。
５　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 （1）小学校教諭一種免許状 　　平８小一第２３７８号	平成９年３月	大阪府教育委員会
2　特許等 　特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 大阪教育大学附属池田小学校教諭 ・図画工作科主任 ・第５学年主任 ・第６学年主任 ・第４学年主任 ・第２学年主任 ・学校安全主任 ・学校安全主任 ・図画工作科主任	 平成１７年度 ～平成２１年度 平成２０年度 平成２１年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２５年度	 大阪教育大学附属池田小学校における、主たる校務分掌を記した。着任後すぐに、５年間図画工作科主任になり、教科論を記した。また、その後４年間学年主任の業務においては、新任指導も含め、円滑な学年経営に努め、成果を残してきた。学校安全主任は、当該校の要とも言える。その任に就き、学校安全の推進、保持、発信、また、安全教育の推進と、責務を果たしてきた。
4　その他 「研究助成」 1．下中科学研究助成(研究代表者) 「ＡＥＤを使用した小学生における『命の教育』の有効性に関する実証的研究」	 平成２０年４月１日～平成２１年３月３１日	 本研究は、ＡＥＤ（自動体外式除細動器）を用いた授業実践が、児童に命の大切さを実感させるために有効であることを検証しようとするものである。日本においては慶應義塾一貫校においてＢＬＳ教育が実施されているのみである。ただし、慶應義塾においてもＡＥＤを使用した実践はまだされておらず、日本においては先行事例が見当たらない。そこで本研究においては、ＢＬＳのスキルを学ぶ中で児童にＡＥＤを体験させ、バイスタンダーとしての意識を育みながら、そこに、実体のない『命』というものの大切さを実感させることを目的とする。
2．下中科学研究助成（研究代表者） 『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究』	平成２２年４月１日～平成２３年３月３１日	安全意識調査を行ったとき、安全学習を実施したクラスの児童と実施していないクラスの児童では、回答結果に差異が生じる様相が見られた。この差異は、感覚的には感じてはいても、実証的に研究された事例はない。本研究においては、１年生から６年生までの児童の安全学習履歴と安全意識、けがや事故の状況を調査することにより、その差異を明らかにすることによって、安全教育の必要性と価値に実証性を持たせることを目的とした研究。
3．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『児童の発達段階に応じた安全教育プログラムの開発に関する実証的研究』 （研究課題番号２２９０８００５）	平成２５年４月１日～平成２６年３月３１日	安全教育における、発達段階についての研究はまだ未開発である。しかし、発達段階を考慮しなければ、真に効果的な安全教育はなされない。本研究では、公立小学校の協力校等で授業実践を行い、そのデータをもとに、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムを作成することを目的とする。
4．日本教育弘済会教育論文　奨励賞受賞 『安全教育のレリバンスに関する研究』	平成２５年３月	大阪教育弘済会の教育論文に応募したところ、個人部門で上部団体の主催する日本教育弘済会の教育賞に推薦され、奨励賞を受賞した。 １つの授業を低、中、高学年で実施し、安全教育と児童の発達段階の妥当性を検証した論文である。

５．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『安全教育のレリバンスに関する実証的研究』 （研究課題番号２６９０８０４０）	平成２６年４月１日～平成２７年３月３１日	これまでの安全教育の現状と課題として、小学校６か年というスパンにおける、児童の学齢の差異を考慮した安全教育プログラムの開発がされてこず、避難訓練や「いかのおすし」に代表される標語的用語などによる安全指導内容が見直されてこなかった。また、日常の山積する課題対応に追われる多くの公立学校において、年間で実施可能で、かつ有効な安全教育プログラムの開発がされてこなかった。ことが考えられる。これらのことから、安全教育内容の有効性の検証と開発・児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・年間で実施する安全教育プログラムの開発が、緊急の課題と言える。これらを、『安全教育のレリバンス(妥当性)』と総称し、授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育の発展と頒布に寄与しようとするものである。
６．ＪＲ西日本あんしん財団研究助成（研究代表者） 「児童の発達段階を考慮した『有効な』安全教育プログラムの構築に関する実証的研究」	平成２７年４月１日～平成２８年３月３１日	これまでの研究として、「安全教育の有効性とレリバンスに関する実証的研究～大阪教育大学附属池田小学校『安全科』の実践から～」として、防犯概念・防犯スキル・自然災害・交通安全の各カテゴリにおける、児童の学齢と安全教育内容のレリバンス(妥当性)について研究を進めてきた。その中で、申請者が考案した「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌（第３巻第１号）P62-66 2010　松井)を用いて実践、検証した結果、学年に応じた有効な安全教育内容が明らかになってきた。しかし、その研究の中で新たな課題が見えてきた。そこで本研究においては、安全教育内容の有効性の検証と開発・複数小学校を対象にした児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・児童、教職員、学校に応じた安全教育プログラムの開発を行う。これらを授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育カリキュラムの開発と頒布に寄与しようとするものである
7．科学研究費補助金　基盤研究Ｃ（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『小学生の学年に応じた安全教育プログラムの開発』 （研究課題番号１６ｋ０４７９１の研究代表者として、研究分担者１名体制で研究を率いている）	平成２８年度～現在に至る	本研究は、小学校６ヵ年というスパンにおける小学生の学年を考慮し、低・中・高学年それぞれにおいて、その学年に妥当で有効な安全教育プログラムを開発することを目的とするものである。これまでの安全教育は、全学年同時に行う避難訓練や、「いかのおすし」に代表される標語的用語が中心であり、果たしてその安全教育内容が、小学生の、その学年に妥当であり有効なものなのかという検証はされてこなかった。そこで本研究では、これまでの事件や災害で失われた幼い命が残した教訓を生かした教材開発を行い、その妥当性と有効性を調査、検証し、全国の学校において実施可能な、有効で汎用性の高い安全教育プログラムを開発する。本研究は、安全で安心な社会の構築の一助となることはもとより、児童の命を守るための研究である。
「海外視察」		
・台湾：花蓮実験学校視察	平成２１年３月	大阪教育大学附属池田小学校との姉妹校提携の締結に訪れ、朝礼の様子、図画工作科と音楽科の授業視察を行った。
・台湾：台中教育大学教育国際シンポジウム	平成２４年１１月	台中教育大学において開催された教育国際シンポジウムに参加し、台中教育大学、及び屏東教育大学を視察した。

・カンボジア：メコン大学	平成２６年２月	奈良学園大学人間教育学部生および看護医療学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・カンボジア：メコン大学	平成２７年３月	平成２６年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・カンボジア：メコン大学	平成２８年３月	平成２７年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・ベトナム　ダナン市	平成２８年８月	ベトナムにおける洪水災害に関して、ダナン市教育訓練局、ダナン市立小学校、ダナン師範大学、防災リスク管理局を訪問、視察した。
・カンボジア：メコン大学	平成２９年２月	平成２８年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
「教員採用試験対策」 ｎａｒａｇａｋｕ　ＧＴの結成と代表	平成２８年２月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の取り組みとして、２０１８年度の教員採用試験対策グループを構成し、日々、試験対策、面接対策に取り組んでいる。また、採用試験対策のみならず、息の長い教員を育てるという目的を持って取り組んでいる。 平成 30 年度教員採用試験においては、奈良学園大学 1 期生において、21 名の最終合格者を出した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.『いのちの教育』	共著	平成２１年１０月	東洋館出版	平成１３年６月８日に発生した児童殺傷事件。それ以来、安全教育と道徳を中心として、児童の安全と安心のために取り組んできた８年間の教育・授業実践を２６例載せた。教育関係者がすぐにでも実践できるように、指導計画や板書例を掲載し、授業による児童の変容についても、具体的に記述した。 Ｂ５判　全１２４頁 編者：大阪教育大学附属池田小学校 共著者：藤田大輔・佐々木靖・浅田正志・井上伸一・岩井伸夫・岩井陽介・江原悦子・小原愛子・垣内幸太・鎌田菜絵・岸本卓也・坂下剛・佐藤学・田中毅・竹本和也・辻匡美・冨田有香・長野純子・中村晶子・西江なお子・西村恭美・能川正人・土師尚美・林美恵子・孕石泰孝・平田葵・升村誠志・松井典夫・松浦恵・松原梨沙・薬師寺美江・矢藤学・柳井友裕・山崎聡・龍神美和 本人担当部分：「いのちをつなぐ機器ＡＥＤ」(１１５頁－１１８頁)を単著 本教材は，ここ数年で普及率が大幅に上昇しているＡＥＤ（Automated External Defibrillator)[自動体外式除細動器]についての知識理解を深め，また，生命と常に向き合う職業を持つ人の話を聞き、交流することによって，豊かな人間的感性と生命に対するリアルな認識を身につけていくきっかけとするものである。児童にＡＥＤの使用認可に至るまでの人々の努力について考えさせ,また,実際にＡＥＤを体験することによって、ハードがあるから安心なのではなく,使用する(命を助けようとする）ことの勇気について考えることによって，実体のない「いのち」の尊さに実感を持たせることがねらいである。 「命のバイスタンダー」 (１１９頁－１２２頁)を単著 命を大切にしなければならないということは，誰しも分かっていることである。しかし，命というものには実態がないだけに，実感を持つことは難しい。子どもたちにとっては尚更である。そこで本教材では、一次救命処置のスキルを学び、もしも傷病者が自分の目の前にいたとき、「何かできるだろう」と思う自分から、「何もできないけど、自分にできることをさがして行動したい」と思える自分に変容させることをねらいとした。怖いと思う自分。何もできない無力な自分。でも、できる限りのことはしたいと考える自分。そのような自分を自己認識することが、実感を伴った命の大切さの実感へと結びつくと考えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．学校安全　３６のナラティブ	共著	平成２６年３月	教育出版	子供たちの命を守り、安全で安心できる生活のために、学校は何ができ、また、何をすべきかという命題のもとに、学校安全に関わる著者陣が原稿を寄せてできた本。この安全・安心に関する問いかけに対しては、すでに多くの解説書や教材集、マニュアル本等が刊行されている。しかしそれらは、ともすれば上からの押し付けのような論が多い。そこで本書では、各著者が「私はこう考えている」「私はこんな体験をした」という、お話風の「語り（ナラティブ）」として編集された。 Ｂ５版　全１５７頁 編者：長尾彰夫 共著者：小林忠三・浜條信彦・松井典夫・若狭孝太郎・神田英幸・前馬晋策・丸山涼子・植木美佳・砂田信夫・中井尚人・佃繁・松田智子・伊原正俊・藤田大輔・諏訪清二・村川雅弘・立田慶裕 本人担当部分 「スリッパとＩＤカード」（pp14-15）を単著 概要 校内に配備された多数の防犯ブザー，赤外線システム，玄関の二重扉，可視性を重視した透明度の高い校舎。それらはお金がかかるものである。しかし，「お金がかからない学校安全」は，見落としていることがたくさんある。そこで本項では、スリッパや ID カードの重要性、他にも，職員室の机上（可視性・校内安全に対する雰囲気），教室の机の物かけ（いざという時の弊害），教室の窓側のロッカーの上（可視性・安全性），放送の使用方法（緊急時の連絡が可能か），安全マニュアルの見直し（実現可能性・教職員の安全意識），教職員の訓練の実施（子どもたちの安全・教職員の安全意識）などを紹介し、見落としがちな学校安全の重要性について書いた。 「安全な公園は危険な公園？」（pp18-19）を単著 概要 危険予知力と危険回避力は，矛盾することもあるということについて、入り口が一つの公園と、入り口が二つある公園の安全性比較から書いた。「危ないな」と感じると同時に，子どもは自分の身を守る方法も考える。例えば，路上駐車の車があり，まわりに人がいないとき，「車の陰から人が出てきたら」や「車に連れ込まれたら」と考えるのが危険予知であり，その車から離れて歩いたり，とっさに道を変えるのが危険回避である。ここに矛盾はないが、公園の例の場合，「逃げる」という意識（危険回避）が優先してしまうのである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「わるい人とはどんな人？」（pp25－27）を単著 概要 　こんな人が悪い人だという答えは，どこにもなく。こんな人を見たら，すぐに逃げましょうと教えることも，するべきではない。既成の概念を崩し，正解がないことを知り，それでも行動しなければならないことを知り，今，教室で頭を振り絞って考えておくことが大切なのである。その思考と体験の蓄積が，「最も適切な行動」を生み出す礎になると考える。「知らない人にはついていかないようにしましょう」と，指導することは，果たして子どもたちの安全を保障する教えなのだろうか。「この行動が安全だ」と教えるだけでは，逆に不安全な結果を招く可能性もある。ただ対処する方法を教えるだけでは，安全を生み出す力に結びつかないばかりか，その方法は，果たして正解だと，断言できるものではない。既成の概念や教えを正しいと思い込むことの怖さを書いた。 「いかのおすしとおはしも」（pp48－49）を単著 概要 「いかのいすし」や「おはしも」に代表される、安全標語は、どれも大切なことだが，その一方で、どれも子どもたちは，当たり前に「知っていること」である。そして、「いかのおすしを指導したから安全だ」「いかのおすしを思い出せば安全だ」「いざというときには，いかのおすしが役に立つ」という考えを持つ。しかし大切なのは，「ついていかない」という指導ではなく，「知らない人ってどんな人」かを学習し，思考し，判断材料を蓄積することである。「大声を出す」と指導するのではなく，大声を出すことの難しさを体験，実感させることである。「何かあったらすぐ知らせる」と言葉を覚えさせるのではなく，どのタイミングで，どこに，どんな方法で知らせるのか，考え，体験することである。安易に「言葉」だけで指導するのは，逆に「不安全」を生み出す可能性があるということについて書いた。 「休み時間に地震が起きたらどうしよう」（pp54－57）を単著 概要 多くの学校園での避難訓練は，「2 時間目の授業中」という想定で行われる。実施時期にしても同様で，1 月に避難訓練をしていると，「今年は 7 月にやってみよう」とはなかなかならない学校現場の現状がある。そこでここでは，休み時間に地震が起こることを想定した学習と，実際の休み時間の避難訓練の取り

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				組みについて紹介した。児童に予め、休み時間に遊ぶ場所と、もしもそこで地震が発生したら、どのように避難するかを想定させ、避難訓練で検証する授業を紹介した。児童はその時、予め想定した行動とは違う行動をした児童がいた。それが正解かどうかは結果しか物語らないが、とっさに判断をする体験の積み重ねの重要性を書いた。 「いろいろな不審者対応訓練」(pp62－65) を単著 概要 これまで，いろいろな学校で不審者対応訓練の講師を務めてきたが、その中で,「この学校は素晴らしい！」と思えたのは，数少ない。それだけに，校内で行う不審者対応訓練は難しく，また，その難しさに気づいていない学校が多いように感じられる。本項では、小中４校での訓練の様子と実態を紹介し、そこから、不審者対応訓練の困難性と必要性について述べた。 「火災現場に戻らない､は正解か」(pp74－77) を単著 概要 　火災現場に「戻らない」というのは，命を守る上で大切なことである。しかし，絶対に戻ってはいけないのだろうか。本人の判断で戻り，大切な命を救った人もいる。ここでは，災害現場での葛藤と判断を体験する授業について書いた。安全指導は，セオリーを教え込みがちである。そのセオリーが現場で，いざという時に大いに知識として役立つことだろう。しかし安全学習は，その時，その場に応じて知識や体験を活用し,「最も適切な判断をすることができる力」を育むことである。その力は，単なる知識ではなく，様々な場面で臨機応変に対応することができ，子どもたちの，生涯にわたる安全・安心を保障していくものであるということを、火災現場での葛藤を考えさせる授業を例にして書いた。 「命のバイスタンダーの授業から」（pp82－87）を単著 概要 「命は大切」なことは，誰もが言い，誰もがわかっていることである。しかし，実体のない命に対して、それは本当に実感できるものではなく、子供たちにとってはなおさらである。そこで子どもたちに，命に触れることの怖さ，命に対する畏れを感じさせることによって,「命の大切さ」の実感を育むことを目的とした,『命のバイスタンダー』の授業を考案し，実践した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「溺れかけた兄妹を教材にして」（pp108－111）を単著 概要 有島武郎の自伝的短編『溺れかけた兄妹』を題材にした、水難災害の授業を紹介することから、助けたいという「道徳的心情」と，二次災害の恐れとの狭間に生じた葛藤、そこから学ぶものについて述べた。児童の授業の中での言葉に、「その時になってみないとわからない。」という言葉があった。この言葉は，授業の中で判断し，自分の立場を明らかにすることができず，その場しのぎの言葉のように聞こえる。しかし，波の高さ，周りの状況，大切な人を助けたいという，その場の切迫した状況。それらが相互作用し，判断するのだという臨場感を子どもたちが感じていたからこその言葉であったように感じられ、子どもたちは，安全な行動と，命を守りたいという心情の間の葛藤を「実体験」したのであり、そこに安全教育で大切な、実体験からくる学びの大切さについて書いた。
３．教育フォーラム５６ 「アクティブ・ラーニングとは何か」	共著	平成２７年８月	金子書房	本書は、アクティブ・ラーニングのために必要な、課題意識の喚起のさせ方、多様な発想・アプローチへの目の開かせ方、粘り強い課題取り組みへの支援、課題解決の結論の検討や再吟味の促しといった、さまざまな働きかけ、指導の実際を具体的に提示したものである。 Ａ５判　全１６９ページ 共著者（執筆順）：溝上慎一、加藤明、伊崎一夫、鎌田首治朗、前田洋一、岸周吾、芝池宗克、米川雅士、武谷嘉之、松井典夫、瀧明知恵子、井上信子、梶田叡一 本人担当部分：「児童にとって『有効な』安全教育プログラムに関する一考察」（pp.１０５－１１４）を単著 概要 安全教育の課題として、何よりも児童の発達段階を考慮した、体系的な安全教育がされてこなかった。発達段階を考慮し、最も「有効」な安全教育カリキュラムを構築することが、これからの安全教育にとって必要不可欠である。そこで本稿においては、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面における妥当性）を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築する研究成果について記述した。
４．どうすれば子どもたちのいのちは守れるのか －事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育	単著	平成２９年２月	ミネルヴァ書房	本書は，著者が、大阪教育大学附属池田小学校において、同僚とともに実践してきた不審者対応訓練や ID カード等による学校安全対策，様々な「いのちの教育」の授業の事例などを通じて，これまで当たり前とされてきた「安全」についての考え方や方法を根本的に見直し，これからの学校安全と安全教育のあり方をさぐることを目的とした書である。そ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の中で、学校の安全を担う教師の役割、職責、使命感、資質能力について記述した。 Ａ５判　全２１６ページ
５．教育フォーラム　６０ 「深い学びのために－アクティブ・ラーニングの目指すもの」	共著	平成２９年８月	金子書房	アクティブ･ラーニングの中で提唱される「深い学び」については、一定の教授・学習活動のパターンに関わるものではない。本書では、どのようにすれば「深い学び」になり、実現できるのかを、具体的、かつ実践的な提案で記している。 Ａ５判　全１４５ページ 共著者（執筆順）：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峯裕、大畑健美、菅井啓之、後藤紗貴、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明知恵子、岡村季光、松井典夫 本人担当部分：「震災における教師の役割を考える」（pp.１２５－１３４）を共著（岡村季光、松井典夫） 本稿は、近年における地震活動の活発化から、避難所としての学校の役割に注目した。また、その中で教員の活動について、教員における多忙感、内的統制感と諸変数の関係について実証的に論及した。また、そこから、学校が平時から地域とのコミュニティーを強固にしておくことの有効について述べた。
６．教師のための教育法規・教育行政入門	共著	平成３０年１月	ミネルヴァ書房	本書は教職入門、教職概論、教職行政論、教員採用試験対策のテキストを目的として著述された。初学者にむけて学校教育のしくみを法的に理解できるよう、事例などをまじえ具体的に解説している。また、巻末に「主な教育法規」を収録した。 Ａ５判　全２１０ページ 共著者：古川治、五百住満、八木眞由美、今西幸蔵、松井典夫、藤本裕人、藤田敏和、冨江英俊、中村豊、岡邑衛 本人担当部分：「教育職員免許法」（pp.１４－１５）を単著 概要 学校の教員になり、学校で授業を行うには、教員免許状が必要である。教員免許状を取得するには、教職課程のある大学等で、必要な科目及び単位を修得し、各都道府県教育委員会に教員免許状の授与申請を行うことが必要である。本稿では、教員免許状の種別と効力、教員免許制度における原則や欠格事由について述べた。 本人担当部分：「校務分掌」（pp.３８－３９） 概要 学校はひとつの組織体である。校務とは、その組織体としての学校が、教育目標を達成するために、学校全体で行うべき業務全体のことであり、組織的、効率的、かつ調和的に行われなければならないものである。本稿では、校務と教員の勤務実態について、OECD 国際教

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				員指導環境調査（TALIS2013）に基づいて記述するとともに、校長の責任と権限について記述した。 本人担当部分：「校長と教諭の職務」（pp.４０－４１）を単著 概要 一般的に「教員」「教職員」「教師」と様々な呼称があるが、「教師」という用語だけは法令用語ではない。そして、「教職員」と呼称する場合は教員と事務職員、学校医等も含めている。また、本稿で取り扱う「教諭」とは、教職員の中の「職種」あるいは職階の呼称である。本稿では、教職員の職種とその職務内容の概略、それらを示す根拠となる条文を挙げるとともに、校長と教諭の職務について、過去の判例を挙げながら記述した。 本人担当部分：「司書教諭の職務」（pp.４２－４３）を単著 概要 平成 9 年の学校図書館法の一部改正により、「学校図書館の専門的職務を掌らせるため」（学校図書館法第 5 条の１）、12 学級以上の学校には司書教諭を置くことが義務付けられた。本稿では、学校司書と司書教諭の役割や職務について記述し、また、これからの学校図書館の果たす役割について、アクティブ・ラーニングと関連付けて記述した。 本人担当部分：「教員免許の更新制」（pp.１０８－１０９）を単著 概要 これまでは、教員免許状に効力の期限はなく、いったん免許を得れば恒久的にそれを保持することができた。しかし、平成 19 年の改正教育職員免許法の成立により、平成 21 年 4 月 1 日から、教員免許更新制が導入され、教員は免許更新講習を受講しなければ、教員免許を保持することはできないこととなった。本稿では、教員免許更新制度の意義と、その講習について述べた。 本人担当部分：「学校保健・安全と法規」（pp.１５２－１５３）を単著 概要 本稿は第 6 章「学校保健・安全と法規」の扉文となる稿である。まず近年の学校教育を取り巻く学校保健・安全に関する諸問題について概観し、学校保健・安全に関する学校教育の方向性について、世界保健機関（WHO）のオタワ憲章や、過去の事件や交通事故を例に挙げて述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「学校保健安全法」（pp.１５４－１５５）を単著 概要 学校保健安全法（以下、同法）は、学校保健法が改正され、平成21年4月1日から施行された。本稿では、改正された点について、「学校保健」と「学校安全」について分類して解説し、学校保健については「学校保健計画の策定」と、「学校環境衛生基準」について、また学校安全については「学校安全計画」について解説した。 本人担当部分：「安全点検と安全教育」（pp.１５６－１５７）を単著 概要 本稿ではまず、学校安全における現状と課題として、学校でのけが、登下校中の交通事故と略取・誘拐事件、そして災害については南海トラフ地震等への備えについて解説した。そして安全点検の方法について述べ、安全教育による児童生徒の危険予知や危機回避力の育成について解説した。 本人担当部分：「災害安全・防災教育」（pp.１５８－１５９）を単著 概要 本稿では、まず近年の災害に関する現状について、阪神淡路大震災（平成7年）、新潟中越（平成16年）、中越沖地震（平成19年）と甚大な被害をもたらした震災を例に挙げ、平成23年に発生した東日本大震災については、津波や福島第1原子力発電所事故など、様々な災害をもたらし、また、学校管理下において発生した地震であることから、改めて多くの課題を認識することとなった経緯について解説した。その対策として、文部科学省の資料「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」に基づいて、防災マニュアルの作成について解説した。 本人担当部分：「養護教諭の職務」（pp.１６０－１６１）を単著 概要 近年、様々に移り変わる社会状況等の変化に伴い、児童生徒等の健康に関する諸問題について、様々な課題が生じている。学校保健については、ストレスによる心身の不調などメンタルヘルスに関する課題や、アレルギー疾患を抱える子どもへの対応に当たって、学校において子どもの状況を日々把握し、的確な対応を図ることが求められている。その上で重要な役割を担う養護教諭の職務への期待や具体的な内容について解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「学校事故と国家賠償法」（pp.１６２－１６３）を単著 　概要 一般的に学校事故とは、「学校の管理下における児童生徒等の災害」（独立行政法人日本スポーツ振興センター法第 15 号第 1 項第七号）のことを指す。学校事故は、基本的には安全管理を徹底し、安全教育を実践していくことによって、未然に防止されることが望まれるが、それでも学校現場においては、不測の事態が発生し、事故が起こる場合が考えられる。本稿では、学校事故と損害賠償について、民法と国家賠償法の両面から解説した。 本人担当部分：「食育基本法」（pp.１６４－１６５）を単著 　概要 食育基本法は、平成 17 年 7 月に施行された。本法の成立背景には、我が国における飽食の時代ともいえる時代背景から、「食」を大切にする心情や態度の欠如が危ぶまれていること、また、偏食や不規則な食生活、肥満や生活習慣病（がん、糖尿病、脳卒中など）の増加などがあげられる。本稿では、本法の体系を整理して解説し、また、食育推進基本計画についても開設した。 本人担当部分：「学校給食法」（pp.１６６－１６７）を単著 　概要 学校給食とは、同法第 3 条第 1 項、第 2 項において、義務教育諸学校（小学校、中学校、義務教育学校、中等教育学校の前期日程、特別支援学校の小、中学部）において、その児童生徒に対し実施される給食をいうと規定されている。本稿では、学校給食の意義と役割について解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
１.『変幻自在のミラーワールド　～１枚のアルミ板から～』	単著	平成２１年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ６６－６９	平成２０年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。アルミ板は、切ったり曲げたりする材質による特性や、鏡のように何かを映す特徴など、多彩な可能性を秘めた材料である。主となる材料を限定し、その特徴を生かして発想・構想する試みは、創造表現の能力やデザインの能力を高めるのに有効である。
２.『命のバイスタンダー　～私が本当にできること～』	単著	平成２１年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ３５－３８	平成２０年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の学習指導案。 前年度の公開授業では、命の重さの実感を高める教材として、消防署の協力により入手できた、実際のＡＥＤのボイスレコーダーを使用した。非常に効果的な教材だったが、公立小学校等で授業をすることを考えたとき、汎用性が低い。そこで本実践では、同様の場面で画像を用いた授業を行い、その効果を検証した。
３.『ＢＬＳ教育と命の実感の融合の可能性Ⅲ～「命のバイスタンダー」の授業方法の変遷と命の実感を育む効果の検証～』	単著	平成２１年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 「とごころ」 ｐｐ９３－９８	ＢＬＳ(Basic　Life　Support)教育に携わって３年目であり、その軌跡を記述したもの。紐解くと、汎用的な BLS 教育カリキュラムを模索し続けた結果、BLS 教育の内容が年々シンプルになった。このことは、BLS のスキル学習を行うだけでも、命の大切さの実感へと近づける有効な手立てであることを示している。本稿では、過去の指導内容を比較検討し、そこから児童の変容を読み取り、より汎用性のある教育方法を記述した。
４.『Self Defense　～震災の教訓から～』	単著	平成２２年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ４６－４９	研究協議会における公開授業の学習指導案。安全教育においては、命の大切さの実感の醸成と、実感を伴う体験活動が肝要である。本実践では、阪神淡路大震災の教訓を教材に、起振体験をもとに、6434 という死者数を、１枚の画像から考えさせ、その悲しみの実感をもとに、安全な行動に対する実践力へと結びつけた。
５.『安全科の授業における児童の「安全・安心」の様相の変容に関する研究』 (査読付)	共著	平成２２年３月	日本セーフティプロモーション学会誌 第3巻1号 ｐｐ６２－６６	本論文では、児童の安全・安心に対する意識の変容を客観的に調査する『安全安心様相図』を発表した。「命のバイスタンダー」の実践において、児童の変容を『安全安心様相図』を用いて継続的に調査し、安全教育が及ぼす児童への影響、効果を明らかにした。 著者／松井典夫・淺田正志・佐々木靖・藤田大輔 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６.「安全科とInternational Safe School」	単著	平成２２年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」ｐｐ１２－１７	大阪教育大学附属池田小学校研究誌「とごころ」の発刊にあたって、巻頭言を書いたものである。文部科学省教育課程特例校としての「安全科」の発足経緯と、教科としての安全科の意味、また、日本で初めてだったＷＨＯ International Safe School の認証の経緯とその意味を記述した。
７.『命の避難訓練』	単著	平成２３年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ３５－３６	本学習指導案では、「命の重さ、尊さに対する実感を伴った避難訓練こそ、児童にとって必要な避難訓練である。命の避難訓練は、訓練事前の、災害に対する学習の深まりがあってこそ成立する」諏旨を書いた。実態調査では、児童の中で「火災」と「避難訓練」が結びついていないという結果を示し、そこから、スモークマシンによる煙体験による指導方法を提案した。
８．命の大切さの実感を育む「安全科」の授業『命の避難訓練』	単著	平成２３年６月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」pp24－27	本実践報告は、マンネリ化しがちな避難訓練について、本当に「命を守る避難訓練」になっているかを再考・提案する授業実践についての報告である。授業後の協議会で、児童が火災の中でも大切な命を助けに戻りたいと発言したことについて、「安全指導としては、戻ってはいけないと教えるべきだ」という意見が出されたことを例に、「安全指導」と「安全学習」の相違について述べた。
９.『安全教育と防犯①学校安全の現状と課題「災害はひとごと」という意識を超えて』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」№.１１８０　平成２３年１０月１０日号ｐｐ１８－１９日本教育新聞社	「学校は安全な場所ですか」 この問いに対して、学校関係者はどのような答えを出すだろう。さらに「あなたの学校は安全ですか」という問いに対してならどうだろう。その問いに対して、私が代りに答えを出させてもらうなら、こう答える。 「あなたの学校は、たまたま昨日今日が無事に終わっただけで、明日もしも学校に入って事を起こそうとする人間がいたら、容易に入り、多くの犠牲者を生むでしょう。あなたの学校は、子どもたちの命を守ることができないのです。それが今の現実です」と。８人の子どもの命を失った、私たち大阪教育大学附属池田小学校の、悔恨と痛恨から生み出されてきた学校安全の取り組みに、１人でも多くの人が耳を傾け、安全で安心な学校生活と、人を傷つけない、傷つけられない子どもたちが育つことを願い、稿を起こした。
１０.『安全教育と防犯②　学校安全管理と教職員の安全意識』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」№.１１８１　平成２３年１０月１７日号ｐｐ２４－２５日本教育新聞社	お金がかからない安全管理は多くある。それらの安全管理は、学校に「見えない防壁」を作る。しかし、一般的に、多くの学校園には見えない壁はなく、侵入は容易であり、事を起こし、逃げることも容易である。私は講師等で訪れる学校では、必ず「壁」を見る。「壁」とは、校門のガードであり、校舎の周囲であり、教職員集団の意識であり、管理職のリーダーシップである。ＩＤカードも見るし、履物も見る。スリッパで教職にあたる

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				と自体が、プロ意識に欠けることであり、端から子どもたちの命を守るのだという意識が欠けていると言わざるを得ない。教職員全員が、明日からスリッパをやめて、いざという時に動くことができる履物に変えることは、お金のかからない大切な安全管理である。
１１.『安全教育と防犯③　不審者対応訓練について　～「訓練」の失敗から次の課題を見出す～』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」№.１１８２　平成２３年１０月２４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	大阪教育大学附属池田小学校では、年間５回の教職員対象不審者対応訓練を行っている。この５回という回数に、多くの人は驚く。しかし、私たちにとっては決して多くはないと感じている。それは、何度やっても失敗し、課題を見出すからである。 平成２２年度の当校の安全研修会で、「公開不審者対応訓練」を実施した。私たちは、安全の取り組みを発信する責務を強く自覚しながらも、訓練を公開することに躊躇を覚えたまま数年を過ごした。躊躇を覚えた理由は、参会者の安全を確保する自信が持てなかったからである。それほどまでに、私たちの訓練は激しい。そしてついに昨年度の２月。公開不審者対応訓練を実施することができた。私は、コーディネートする立場だったので、客観的に参会者の表情や様子を見ていた。その表情や雰囲気で、私は公開訓練の成功を確信した。誰もがその圧倒的な緊迫感と迫力に、自身の学校園で取り組んできた訓練との違いを実感している様子だった。そして、それぞれが各地の学校に帰り、公開訓練のことを伝え、取り組んでもらえることを、私たちは願い、期待できる公開訓練となった。
１２.『有効な安全教育とは何か？　～体験と実感で子ども自身の判断を育む～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」№.１１８３　平成２３年１１月７日号 ｐｐ２４－ｐ２５ 日本教育新聞社	安全教育とは、命の教育である。誰もが、「命は大切なものだ」と潜在的にはわかっている。しかし、命にはその実体がないだけに、実感することは容易ではない。その大切さに対する実感は，大人はもちろん、ましてや児童が容易に持ち得るものではない。したがって、実体のない命に対する実感は、家庭はもちろんのこと、教育活動の中で育んでいくべきものである。しかし、有効にプログラムされた安全教育を実践している学校は、どれほどあるだろう。１年生で警察を呼んで行う交通安全教室と、年間数回の避難訓練で良しとしてはいないだろうか。それで、児童が自らの命を守り、自他の生命を尊重する心情、実践力を育むことができるだろうか。それでも安全教育に取り組むことができないのは、「時間がない」「何をしていいのかわからない」「国語や算数と違い、やらなくてもだれにも文句は言われない」からである。 大阪教育大学附属池田小学校では、「安全科」を設置し、全学年で年間３５時間の安全教育を実施している。その一例を紹介した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３.『安全教育と防犯⑤　これからの学校安全に向けて　～安全に「絶対」はなく不断の努力が必要～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」№.１１８４　平成２３年１１月１４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	今現在、すべての学校園が「安全管理マニュアル」を作成し、校内に携えているはずである。それは、義務化されたために書いたもので、実践的ではないものも多い。しかし大切なことは、「改訂を続けること」である。一度作って安心してしまってはいないだろうか。少なくとも年に一度、できれば不定期に改訂し、より実践的、現実的なマニュアルにしていくことが必要である。そして大切なことは、私たち教育者は、学校安全の既存する考えや概念を問い続け、研究し続け、前に進み続けなければならないということである。安全指導上、「良し」とされてきたことが、実際の場面で本当に児童の生命を守る術となっているのか。立ち止まり、目を逸らしていては、大切な児童の命を、失ってしまう可能性を、多くの事件、事故、災害が教えてくれているはずである
１４.「自己変容の認識と非言語コミュニケーションツールとしてのネームプレートの活用」	単著	平成２３年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ４８－４９	安全科の授業において、その客観的効果を測定するために、「安全安心様相図」（H22 松井）を考案した。授業の中で、安全安心様相図にネームプレートを置かせ、その変容を読み取り、安全教育の効果について測定することが目的だったが、ネームプレートを置く行為そのものが、児童の自己変容を認識させる有効な手立てだということがわかってきた。
１５.『釜石の奇跡に学ぶ』	単著	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田地区合同研究協議会研究紀要 ｐｐ３５－３６	平成２３年度研究協議会で行った、公開授業指導案。小中高合同研究会で、安全科の授業を中学生に行うことにより、小中高連携をはかる目的で行った。実際に釜石市を訪れて教材研究を行い、「釜石の奇跡」を題材とした。日頃の避難訓練が自分たちの命を救ったというインタビューをもとに、「有効な避難訓練とは何か」を考えさせる授業を行った。
１６.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」２０１３．№.３．巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１７.『美術における「鑑賞教育」のあり方～小学校図画工作に焦点を当てて～』	単著	平成２５年２月	週刊「教育ＰＲＯ」№.１７１６　平成２５年２月５日号 ｐｐ６－１０	「美術鑑賞」という言葉から、どのような様子を想像するだろう。「鑑賞教育」とは何か。多くの学校の美術教室には、世界の有名絵画がポストカードになった、鑑賞カードがある。カードを鑑賞し、著名な芸術家の名前と作品を一致させることが鑑賞教育ではない。本稿では、小学校図画工作科における鑑賞教育のあり方について再考し、提案した。児童が新たな課題や素材に出会った時、そこから何を生み出そうとしているかという、「個の認識」の萌芽が見られる。それはまだ、イメージが具象化していない段階であり、自由闊達なものである。そして造形表現活動を始めた時、そのイメージは次第に具象化し、題材の具現化が始まる。この時、「個の認識」はいったん完結したように感じられるが、それは自己中心的なものであり、高次の自己認識とは言い難い。そこで鑑賞活動を取り入れる。例えば、個々の作品をグループで鑑賞し、意見を交流し合う。その時、思いの他、自らのイメージが伝わらない、あるいは具象化されていないことに気付く。鑑賞活動による他者評価は、妥協したり、曖昧だった認識を強化したり、高めたりするのである。
１８．人間教育と美術の力－美術体験と学校教育－ Human education and The dynamic of Art －Art experience and education at schools－　　（査読付）	単著	平成２６年４月	人間教育学会誌「人間教育学研究」創刊号ｐｐ８９－９５	図画工作・美術教育において、学習指導要領などに随所に現れる「自由」「創造的」「個性的」「喜び」という用語から教科としての特性と課題が見える。それらの用語は，図画工作・美術の他教科にはない特性を表すと同時に，捉えようによると教科としての「ゆるみ」に繋がりかねない。そこで本稿では、図画工作・美術教育の課題を歴史的背景から紐解くと同時に、図画工作・美術科が持つ教科としての特性を、鑑賞教育を中心とした特徴的な実践から論じた。
１９．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅰ ～ＩＣＴを活用した絵画教育の可能性～ Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education -Possibility of Painting Education Using ICT-	単著	平成２６年９月	奈良学園大学研究紀要第１集 ｐｐ１０９－１１５	戦後の美術教育史の中で、絵画教育が敬遠され、衰退してきた感は否めない。その理由として、絵画教育は、「上手」「下手」と２局的に、即時的に、そして結果的に評価されるため、授業者にとっても児童にとっても、それぞれの理由で積極的に取り組む関心・意欲・態度を逸してきたのだと考えられる。 そこで本稿では、新たな絵画教育の方法として、ＩＣＴ機器を活用した動画による鑑賞活動を取り入れた授業実践を紹介し、その授業の方法から、新たな絵画教育の方法や、美術教育の価値について論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２０．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅱ ―　小中連携教育の意義と課題　― Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education ― Significance and Problems of elementary and junior high education cooperation ― （査読付き）	単著	平成２６年１２月	人間教育学会誌 「人間教育学研究」 第２号 ｐｐ１２１－１２９	小学校と中学校の義務教育期における教育の役割は、人間教育の観点での土台を築くものである。その重要性から、学校教育活動は小学校と中学校の連携を念頭に置き、共に理解し、共に手を携えた教育を実践する試みが多くなされている。 本稿においては、大阪教育大学附属池田地区合同研究会における具体的な取り組みから、小中連携の課題と意義について考察した。 小中連携の意義とは、その実践を行った小学生の、中学校以降の学力、生活の様子、いじめの実態などの経年観察が必要であり、また、小中連携を行った学年とそうでない学年の比較研究、そして小中連携教育の方法面での効果の実証研究が必要であり、多岐にわたる。今後においては、協力校との連携を進め、小中連携教育の研究をさらに進めなければならない。
２１．学校安全・安全教育	単著	平成２７年１月	平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金（基盤研究(Ｂ)課題番号 24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 「いのちの教育 カリキュラムモデルの開発と実践」 ＰＰ７７－９５	本稿は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について述べた。
２２.「これからの学校安全について考える」～第１回　事件の教訓から学校安全の実態を見る～	単著	平成２７年８月	『教育プロ』第45巻 第17号 通巻1786号、ERP、pp.26-27	警察庁のまとめによると、子供の連れ去り（略取・誘拐）事件のうち、発生時間帯として最も多かったのが、午後４時から午後６時の時間帯とされている。この時間帯は、言わば下校時間帯にあたる。奈良小１女児殺害事件以降、この時間帯は「魔の時間帯」とされ、子供たちの安全を守ろうと、地域住民による見守り隊など、児童の下校を見守る大人の姿が多く見られるようになった。しかし、13歳未満が被害に遭った略取・誘拐事件に関して、2004年の奈良の事件以降の10年間を見ると、2004年の141件以降減少し、2008年には63件まで減少した。しかし、2014年は100件を超す発生件数を数えている。地域住民が努力しても、なぜ犯罪は減らないのか。事件の教訓を視点に学校安全の実態について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２３.「これからの学校安全について考える」～第２回　子どもの命を守る『有効な』安全教育とは～	単著	平成２７年８月	『教育プロ』第45巻第18号　通巻1787号、ERP、pp.26-27	例えば、児童が何者かに連れ去られそうになったとき、大声を出した（いかの「お」すし）結果、その大声を最悪の方法で犯人が止めようとする場面を想像する。だが、「大声を出す」と教えたのは、現在の学校での安全教育の王道なのである。その教えを頑なに守ろうとした結果、不安全を招く可能性があることを認識しなければならない。ここでは、岡山県での安全教育実践を例に挙げ、安全標語に頼らない、「有効な」安全教育について述べた。
２４.「これからの学校安全について考える」～第３回　学校安全と教訓～	単著	平成２７年９月	『教育プロ』第45巻 第20号 通巻1789号、ERP、pp.26-27	本連載のタイトルにある「これからの」という言葉の裏側には、「これまでの」という言葉がある。2001年6月に発生し、まさに世間を震撼させた大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件では、「学校安全神話の崩壊」と言われた。しかし、学校がなぜ安全だと思い込まれていたのだろう。その思い込みが、８名の児童の大切な命を失う結果となったのである。今もなお、学校安全に対する思い込みはないだろうか。その思い込みが、今目の前にいる大切な子供の命を失うことにはならないだろうか。本連載では、「これまでの」学校安全に対する思い込みを検証し、考え直し、認識を改めていく必要性を述べてきた。最終回となる本稿では、学校安全を支える教訓について述べた。
２５．児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究　－「児童の安全意識尺度（SASC)」の開発に関する基礎的研究－ A study on the development of safety education program in consideration of the developmental stage of the children -Basic research on the development of “Safety Awareness Scale of Children (SASC)”-（査読付き）	単著	平成２７年１２月	人間教育学会 「人間教育学研究」 第３号 ｐｐ９７－１０６	本研究においては、より汎用性の高い安全教育プログラムの開発を念頭に、児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究における、「児童の安全意識尺度（SASC)」の開発に関する基礎的研究を行うことを目的とした。そこで、「児童の安全意識尺度(SASC)」の開発に関する基礎的研究として、公立小学校の協力校に赴き、SACSを用いた事前調査、安全教育の授業、事後調査という流れで調査を進めた。安全教育の授業においては、低・中・高学年、それぞれで同一授業を行った。調査結果を質問内容に着目した考察と、授業時の児童の様子に着目した考察を行った。その結果、本研究で取り上げた実践例である「知らない人にはついていってはいけません」という教えを題材とした安全教育内容は、低学年が最もその妥当性が高いと見なすことが可能となった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２６.「教育実習の課題と展望」第１回　教育実習の意義～その必要性と質～	単著	平成２７年１２月	『教育プロ』第 45 巻第 28 号　通巻 1797 号、ERP、pp. 14-15	教師たちは今、「いじめ」「学級崩壊」「不登校」「家庭との連携」「学力保障」「子どもの安全」など、それらの問題と常に向き合い、対処、対応し、解決していかなければならない。学習面・メンタル面・人間関係面などで特別のケアや支援を必要とする子どもの増加や、増大する保護者の要望・クレームへの対応など、学校・教職員が対応すべき問題や課題は多様化し増大している。したがって、教員の資質・能力はより高いものが要求されていると言えるのである。大切なことは、「では、この流れゆく社会の中で求められる教師像に対応する資質・能力を、教員養成系大学や学校現場で、どのように育むのか」という現実的に必要な視点である。本稿ではその中でも特に、教員になる上で必修である教育実習について、そのあり方や価値、抱える課題について論考し、教育実習のこれからの展望を捉えていくことを目的として記述した。
２７.「教育実習の課題と展望」第２回　教育実習の実態～実施する大学と受け入れる学校～	単著	平成２８年１月	『教育プロ』第 46 巻第１号　通巻 1798 号、ERP、pp. 26-27	教員養成系大学の附属学校園と、一般の公立学校とでは、教育実習生を受け入れる際の意識に差があるのは当然と言える。さらに言えば、国立大学の附属学校が、熱心に教育実習生の指導に当たることは当然であり、附属学校園の存在意義であり、重要な責務である。その一方で、公立諸学校の教育実習生の受け入れについては、様々な点で課題がある。まず公立学校は、そもそも教育実習を受け入れる前提での体制が整えられていない。また、いわゆる母校実習については、“大学側の対応や評価の客観性の確保等の点で課題も指摘されることから、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である”（前掲答申）とあるように、公立学校にとっては、いつ何時、どのような、どこの学生を受け入れるのかという点において、不確定なのである。本稿では、受け入れる学校側の実態について記述した。
２８.「教育実習の課題と展望」第３回　教育実習の役割～教職の道標～	単著	平成２８年１月	『教育プロ』第 46 巻第２号　通巻 1799 号、ERP、pp. 24-25	教育実習の前、大学における 3 回生になるまでのカリキュラムの中で、介護等体験や、大学のカリキュラムによっては学校支援ボランティアなど、教育という社会の一部に経験はあっても、そこにある「子どもたちに対する責任」の荷重はさほど大きくはない。しかし、教育実習ではおよそ１ヵ月の期間、教師たちとほぼ同じ時間、子どもたちと接している。けんかをしている子どもたちの対応に迫られる場面もあれば、学級全体を指導する場面にも出会う。その中で、おのずと「子どもたちに対する責任」の荷重は大きくなる。教育実習生は「学生」でありながら「先生」であるという、重層的立場（Student Teacher）を持つことになる。本連載の第 3 回目にあたる本稿では、教育実習生そのものに焦点をあて、教育実習現場での実際の学びと、その学びの有用性や効果について論考した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２９.「教育実習の課題と展望」第４回　これからの教育実習～質と夢の保証～	単著	平成２８年２月	『教育プロ』第 46 巻第 4 号　通巻 1801 号、ERP、pp. 16-17	平成２７年１月に文部科学省から発信された「高大接続改革実行プラン」は、センター試験の廃止や記述式試験の導入などがセンセーショナルにクローズアップされた。したがって一般的に私たちは、大学入試改革に意識が向きがちだが、高大接続改革とは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三者一体的改革であるという捉え方をするべきである。それは、高校での「学力の 3 要素」の育成と、それを受けた大学教育の質的変換、そして、高大の接続を担う大学入試制度が三位一体となった改革である。そこには、「新しい時代にふさわしい」学力や人材を育成するというビジョンが土台となっている。この構造を、教員養成に関わる一連の過程の中に求めるという視点で記述した。
３０．学校安全の課題と展望に関する一論考～教訓と教材と教師について～	単著	平成２８年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」ｐｐ５６－６０	平成２７年７月に、奈良県香芝市で小学校６年の女児が誘拐された事件は世間を震撼させた。幸いにも女児の命は無事だったが、同じように突然の魔物に連れ去られ、無事ではなかった命を私たちは思い出す。2004 年の奈良小１女児殺害事件や 2014 年に発生した神戸女児遺体遺棄事件、2015 年の和歌山小５殺害事件など、これらの連れ去り事件では、未来のある小学生の児童が命を失うという、最悪の結末を迎えている。この、幼い大切な命を救うことはできなかったのか。防犯に関して、具体的な事件を想起しながら、教訓と教材と教師、という３つの視点で記述した。
３１.「これからの教員養成における質的転換」　第１回　教師の資質能力の変化と転換	単著	平成２８年８月	『教育プロ』第 46 巻 第 18 号　通巻 1815 号、ERP ｐｐ１２－１３	社会の進歩や変化にともない教育の世界にその時流は確かに訪れてはいる。しかし、その一方で、教育そのものを担う教師の存在（意義）や資質能力、また、それらの礎となる教員養成の変化と進歩に大きな胎動は見られない。そこで本稿では、社会の変化や進歩に対応する教員養成の質的転換について、教師の資質能力、教育実習、教員としての進路選択をキーワードにして論考した。
３２.「これからの教員養成における質的転換」 第２回　教員の「多忙感」と教職の実像	単著	平成２８年９月	『教育プロ』第 46 巻 第 20 号　通巻 1817 号、ERP ｐｐ１４－１５	次期学習指導要領案の特色と学校教育の役割について論じた。小学校の英語教育の強化、授業時数の増加、またプログラミング教育の導入など、その改定は急速に進む。一方で、今後の教員採用者数は、少子化と退職者数の頭打ちから、減少する傾向は否めない。このことから推測されるのは教員の「多忙感」の増大である。教員の「多忙感」に注目し、今後求められる教員の資質や「学校行事精選と授業時数確保」についても論考した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３３.「これからの教員養成における質的転換」第３回　揺るぎない「教職の体幹」とは	単著	平成２８年９月	『教育プロ』第46巻 第21 号　通巻 1818 号、ERP ｐｐ１６－１７	文部科学省の答申における「教員の資質能力」は時代や社会の要請に応じて、その資質能力や教師像が変容しつつ、揺れ動いている。本稿では日本の歴史的な学校制度の変換や教員養成の歴史的変換に視点を当て、教員の資質能力や今後の教職キャリアについて整理した。さらに時代のニーズは変化しても、教師に求められる「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」についても論じた。
３４.「これからの教員養成における質的転換」第４回　「教職の体幹」を育成するカリキュラムデザイン	単著	平成２８年１０月	『教育プロ』第46巻 第22 号　通巻 1819 号、ERP ｐｐ１６－１７	教員の資質能力について言及し、揺るぎない「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」について論じた。教育への使命感や子どもへの情熱など、その教師は何を身に着け、それをどのように学んだかという点が大切である。それは先天的なものや外見ではなく、後天的に養成されたものである。「児童や生徒に好かれる資質」を後天的に養成するカリキュラムデザインについて論考した。
３５．いのちの教育 －教師の視点をいかにもつかー 第１回「研究会の成立過程とこれまでの歩み」	単著	平成２８年１０月	『教育プロ』第46巻 第23 号　通巻 1820 号、ERP ｐｐ１６－１７	1995 年に発生した阪神・淡路大震災、神戸連続児童殺傷事件（1997 年）、2004 年には、長崎県で小6女子児童による同級生殺害事件が発生するなど、子どもたちのいのちへの感覚、あるいは死生観というものに対する、当たり前で疑いようもなかったものへのある種の懐疑と、それに伴う教育の再構成の必要性が高まるなか、このような背景から、2009 年、「いのちの教育実践研究会」が発足した。本稿では、研究会の成立過程と「いのちの教育」の必要性について述べた。
３６．想像力と創造性を結合する美術教育の可能性 Possibility of education to combine the creativity and imagination （査読付き）	単著	平成２８年１２月	日本人間教育学会「人間教育学研究」第４号 ｐｐ５７－６３	国際競争を展開する教育政策は、科学技術と国民道徳の教育に傾斜していく中で、さらに学校教育費は恒常的な削減を繰り返し、芸術教科の授業時数は大幅に削減されていく。次の学習指導要領の改訂に関する答申では、特別の教科としての道徳の設置、英語教育の充実のための授業時数の増加、プログラミング学習の推進などが盛り込まれ、ますます芸術領域の存在場所が狭まっていく感は否めない。本稿では、その現実の中、アートの教育的意義を再発見、再確認することの急務を感じつつ、近現代のアート教育の実践を検証しながら美術教育が喚起する教育の可能性に接近することを目的とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３７.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第１回　震災をめぐる教師の「使命感」と「多忙感」への着目	単著	平成２９年６月	『教育 PRO』第 47 巻第 14 号　通巻 1839 号、ERP、pp. ２８－２９	災害時はまさしく、自己のコントロール（統制）が効かない特殊な状況下といえる。本研究では、災害時において、教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、災害時における教師の“ノブレス・オブリージュ”の実態を明らかにすることを目的とした。
３８.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第２回　「災害支援者」としての教師の役割	単著	平成２９年７月	『教育 PRO』第 47 巻第 15 号　通巻 1840 号、ERP、pp. ６－７	「災害対策基本法」は、東日本大震災後、2 回の改正を繰り返した。2013 年 6 月の改正における「被災者保護対策の改善」で、「緊急避難場所」と「避難所」が明確に区別されることとなった。避難所となった学校において、教師たちは「役割分担が決められていない」状況の中、「災害時に救援する職業」として、目の前の災害に救援する役割を担うことになる。災害時の救援対策訓練を受けた「職業的災害救援者」ではなく、教師としての「使命感」で救援に従事する教師の実態について述べた。
３９『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第３回　災害時における教師の職業的有能性	単著	平成２９年７月	『教育 PRO』第 47 巻第 16 号　通巻 1841 号、ERP、pp. １０－１１	本稿は、熊本地震で主体的に避難所を運営した一人の教師をモデルに、教師の災害時における職能について論考した。教師の使命感からくる災害時の職業的有能性を、明確な災害支援対策として位置づけ、分担し、だからこそ教師は災害支援者なのであるという認識を明確にしていくことは、今後における災害時の有効な避難所運営の模索においても、あるいは教師の、災害時における職業的役割の明確化においても、必要となる。
４０『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第５回　避難訓練に対する被災地からのメッセージ	単著	平成２９年８月	『教育 PRO』第 47 巻第 18 号　通巻 1843 号、ERP、pp. １０－１１	熊本市内の南部に位置する熊本市立小学校で、管理職に取材を行った結果、被災地における子どもの様子や学校運営上の実情から、避難訓練の在り方に対する重要な示唆を得ることができた。避難訓練の在りようについて再考し、再確認することの必要性を示唆する、まさしく被災地からの大切なメッセージについて論述した。
４１.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第６回　福島県の「今」が伝える、地域における学校の価値	単著	平成２９年９月	『教育 PRO』第 47 巻第 20 号　通巻 1845 号、ERP、pp. ８－９	2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、地震による津波災害という、2 次的な災害によって大きな被害を被った。その中、地震動と津波による 3 次的災害が発生した。それが福島第一原子力発電所事故である。本稿では、原発事故から 6 年半経った福島県において、避難指示が解除されて再開した学校に着目し、学校が地域に果たす役割について記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４２.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第７回　子どもたちのいのちを守るのは「だれ」なのか	単著	平成２９年９月	『教育 PRO』第 47 巻第 21 号　通巻 1846 号、ERP、pp.１２－１３	災害に関して、その被災地域を世界に目を向けたとき、被災者数などその被害の大きさに関心が向けられるが、それらはどのように教訓とされ、発信されてきたのか。そこから見えてくるものの価値は大きい。本稿では、ベトナム社会主義共和国において、災害や事件などに対して、子どもを「保護」する親の姿勢を、日本の近年の実態と比較した。
４３.「事件の教訓から学ぶ教師と学校安全　－池田小学校事件からの発信を視点として－」	単著	平成２９年１０月	特別課題研究「震災・学校危機と教師教育」研究報告集 「震災・学校危機の教訓から学ぶ　－希望ある未来のための理論化にむけて－」 日本教師教育学会 pp.１２７－１３４	児童が生命を脅かされ、あるいは失う事件、事故、事案は後を絶たない。そこで、過去の事件や災害の教訓は生かされているのかという問いが生じる。またそこに付随して、教訓とは何か、教訓を生かす方法とは何か、教訓を生かすのはだれかという問いについて議論を重ね、体系的に整理し、児童の命に結びつき生かされる教訓にしていくことが急がれる。そこで本稿では、今一度、池田小学校事件に立ち戻り、事件が残した教訓と、その後、附池小が発信した学校安全の取り組みを視点として、とくに教師が、それら教訓をどのように学校安全に生かしていくのかについて論考した。
４４.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第９回　教訓を生かした避難所開設・運営に	単著	平成２９年１０月	『教育 PRO』第 47 巻第 23 号　通巻 1848 号、ERP、pp.８－９	災害時における避難所を運営する主体に目を向けたとき、「避難所運営ガイドライン」には、教員、あるいは教職員が割当てられている役割は見当たらない。現実には、学校が避難所となる場合、そこを開錠して避難所を開設し、初動段階で被災者を受け入れ、運営を進めるのは教師であることが予想される。本稿では、避難所開設、運営時における教師の役割について述べた。
４５.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第１０回　災害に関する教師へのインタビューから見えてきた課題	単著	平成２９年１１月	『教育 PRO』第 47 巻第 24 号　通巻 1849 号、ERP、pp.８－９	本研究では各小中学校の管理職を対象としてインタビューを行ってきた。それらは非構造化インタビューであり、明確な問いに対して明確な回答を求めてきたのではなく、筆者らが震災のことを、そしてそこに関わる教師たちの内面的なものを知りたかったというのが率直なところである。本稿では、その後に実施した半構造化インタビューの結果を考察し、災害に関連して、教員にかかっている過重なストレスについて検討した。
４６.事件 ・事故・災害時における学校対応と児童の安全・安心に関する研究 A Study of school`s response to incidents ,accidents , disasters , and safety and security of children. （査読付き）	共著	平成２９年１２月	奈良学園大学人間教育学研究会 「人間教育研究」 第１号（創刊号） PP.55－71	これまで、児童生徒が被害に遭った事件・事故・災害において、その犯罪機会や動機、あるいは自己の発生原因や災害による被災状況については多く語られ、研究されてきた。本研究では、それら事件・事故・災害において、学校はどのように対応し、その対応は適切だったのかについて、過去の事例研究をもとに論考した。 著者／松井典夫・古田浩大・竹中遙一郎・中本将馬・池上紗耶・森高千晶・戸川理夏 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４７.被災地小学校での絵画によるケアの実践 －熊本地震復興アートプロジェクトの児童と教師たち－ Practice of care by painting at elementary school in disaster area －Kumamoto earthquake reconstruction art project and children and teachers -	単著	平成３０年３月	奈良学園大学紀要 第８集 PP.87-95	本研究は、災害時における学校、教師、児童生徒に関連して２つの課題を見出した。一つは、災害時における「教師」を主体として見たとき、その多忙感を超えた使命感で避難所を運営する教師の姿は当たり前なのではなく、教師は学校教育の推進に関わる者であり、それは被災者や避難所のものではなく、教師は学校、そして子どもたちのものであるという認識の必要性である。もう１点は、防災教育のありかたとして、それは次に来たる災害への準備、対応のための教育という意義は認められるものの、その視点を災害後の心のケアに着目した教育に置き、その方法を構築していく必要性があるということである。 　これら課題の着眼から、本研究では熊本地震において、学校再開直後に実践された復興アートプロジェクトに注目した。そして、「心の復興」を目的とする教育活動の有効性を、児童、教師、教材の３つの視点から検証することを目的とした。
（その他） 「教材の作成」				
１.「教育指導案・考察集の作成」 １．安全教育実践指導略案集 ２．安全教育実践考察集	単著	平成２２年２月	大阪教育大学附属池田小学校	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生を対象として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成２１年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成２１年度に実践した安全教育の授業の指導略案を作成し、授業後の考察集を作成し、平成２１年度の当該校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。
２．教職表現力演習ノート	共著	平成２７年４月	奈良学園大学	西辻正副・山本美紀編 岡村季光・岡野聡子・高木悠哉・松井典夫著 　奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。
「学会発表(抄録)」				
１.『小学校におけるＡＥＤを用いた『命の教育』の有効性に関する実証的研究』	－	平成２０年９月	日本安全教育学会 第１０回記念大会 （於　玉川大学）	本実践では、児童にＡＥＤの使用認可に至るまでの人々の努力について考えさせ，また，実際にＡＥＤを体験することによって、ハードがあるから安心なのではなく，使用する（命を助けようとする）ことの勇気について考えることによって，実体のない「いのち」の尊さに実感を持たせることを目的とした。実践を通して、初等教育段階でＢＬＳ教育を行うことの可能性を見出すことができた。それは、児童が持つ純粋な感性である。児童は例えマネキンに対してであっても、救命処置を自らが行うこと意味の大きさを実感したのである。その中でこそ、自分ならどんなことができるのかという、実感を伴った思考が生まれるのである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２.『児童の直感に基づいた危険予知・回避能力を育む安全学習の在り方～児童の実態と犯罪機会論の比較から～』	－	平成２１年９月	日本安全教育学会第１１回大会（於　東京学芸大学）	安全マップの学習は、マップを作ることが目的ではない。真の目的は、児童の危険回避能力・危険予知能力を育み、自ら犯罪機会を避けることができる力を育成することにある。学習のとしては、立正大学の小宮理論をもとに、「入りやすく、見えにくい」という視点を確立することによって、危険予知・回避力を育むことを目標としてきた。しかし、学習を進め、児童の実態を観察するうちに、「入りやすく、見えにくい」という言葉では測りきれない、児童の危険に対する感覚が明らかになってきた。そこで、児童の実態に則した安全マップの学習を構築すべく、研究を進め、発表した。
３.『安全科の授業における児童の変容に関する研究』	－	平成２１年１１月	日本セーフティプロモーション学会第３回学術大会　(P69)	本研究は、ＡＥＤ（Automated External Defibrillator）[自動体外式除細動器]を含めたＢＬＳ（Basic Life Support）に関するスキル学習を通して知識理解を深めることによって，豊かな人間的感性と命に対する実感を育むことを目的としている。　事前アンケートでは、児童は、もし目の前に傷病者がいたらという質問に対し、990%の児童が、何らかの方法で傷病者を助けると答えた。しかし、BLS のスキルを習得した結果、「助ける」と答える児童は激減した。このことは、児童が「助けたい」という思いを持ちながらも、命に関わることの恐れを実感したことに他ならない。初めて、児童は自分が本当にできることを実感を持って考える。
４.『安全教育カリキュラムの構築に関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～』	－	平成２２年９月	日本安全教育学会第 11 回宮城大会（於　宮城教育大学）	平成 13 年児童殺傷事件を契機として始めた安全教育は、防犯のカテゴリーに特化した安全教育だった。しかし、子どもたちの目の前にある危険を考えたとき、安全教育を交通安全や災害安全教育を抜きにして語ることはできない。そこで防犯、生活安全、交通安全、災害安全、命の大切さを実感する授業、の 5 カテゴリーを安全科において実践している。しかし、カリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対する適時性（知識・技能・行動・情緒面において）を抜きにしては語れない。そこで、本研究においては、本校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対する適時性を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築について発表した。
５．安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究	－	平成２２年１０月	日本教育大学協会研究集会（於　島根県サンラポーむらくも）	本発表は、日本教育大学協会が主催したものであり、第３分科会「附属学校の改革と実践の動向」で「安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究」として発表したものである。特に、安全教育の有効性について、「安全安心様相図」を用いた授業実践と、児童の変容について発表し、安全教育の有効性の実証について発表した。交通安全学習については、学習前は「安全安心様相図」では、多くの児童が図の中心付近に多くポイントしていたが、授業後は「不安・危険」の

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				カテゴリーに多くポイントした。このことにより、授業による児童の変容が明らかになったという内容を発表した。他に、水難災害、命を実感する授業の実践についても、授業前と後の、児童の変容を視覚的に見ることができる内容で発表した。
６．児童の発達段階における安全教育の有効性に関する実証的研究	－	平成２３年１１月	日本セーフティープロモーション学会　第５回学術大会（於　大阪教育大学）	本研究においては、一つの実践を低・中・高学年で行い、その相違を明らかにし、発達段階ごとの安全教育カリキュラムの作成につなげることを目的としたものである。防犯ブザーの使用方法に関する授業を題材とした。防犯ブザーは、すべての児童が通学リュックに装着している。しかし、防犯ブザーに対する意識、使用に対する構えなど、低・中・高学年では大きな相違が見られると予想される。そこで、「安全安心様相図」を用いて実態を調査するとともに、同授業を３学年で行い、児童の授業時における記述などをもとに調査を行った。考察として、学年が上がるにつれて、リスクマネジメントに対する自我が発育する。しかし、それは実態を伴わない場合が多い。低学年では自尊感情を育み、中学年では実践的な、そして高学年では自己意識の再構築をねらいとする授業構成が肝要であると述べた。
７．安全教育のレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	－	平成２４年７月	日本カリキュラム学会第２３回大会（於　中部大学）	本研究では、「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会 2011 松井）を用いて、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の授業実践による児童の変容を客観的に実証することにより、安全教育内容と児童の発達段階の妥当性を検証しようとしたものである。これまで安全教育においては、児童の発達段階を考慮した学習内容が検討され、研究されてこなかった。したがって、避難訓練をはじめ、交通安全学習など、どの学年に適しており、どの学年で行うのが妥当であるという検討がされてこなかったため、「有効な」安全教育であったかという疑問が生じる。本研究で、安全教育と児童の発達段階の妥当性を実証することにより、有効な安全教育プログラムを作成していくことを目標とした。
８．安全教育のレリバンスに関する研究	－	平成２４年１０月	日本安全教育学会第１３回大阪大会（於　大阪教育大学）	中央教育審議会学校安全部会において、「防災科」あるいは「安全科」として、安全教育を教科化する方針が打ち出された。これまではひとつの「視点」であった安全教育を、体系的に学ぶことができるようにという発想であり、東日本大震災による災害から、教育が一歩前に進もうとする顕れといえる。しかし、安全教育で最も大切なのは、「重要性の認識」もさることながら、「効果的な学習をすること」にあると考える。これまでの安全教育は、安全だと信じ、考えてきたことを疑ってこなかった。例えば児童に当たり前のごとく「安

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				全指導」として教えてきた、「揺れたら机の下に身を隠す」ことや、「いかのおすし」「おはしも」をはじめとする言葉などにおいても、一層吟味し、指導方法、内容を考え直さなければならない。そこで本研究においては、「効果的な安全教育」であるために、安全教育のレリバンスに着目した。今後、教科化するにおいても、また、安全教育を推進していく上でも、そのカリキュラムの構築において、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証した。
９．安全教育カリキュラムのレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	－	平成２４年１１月	第６回アジア地域セーフコミュニティ会議	大阪教育大学附属池田小学校では、平成 21 年度より、文部科学省の教育課程特例校に認定され、「安全科」を設置した。安全教育のカリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築の礎とすることを目的とした。「安全安心様相図」を用いた調査から、低高学年に比して、中学年が著しく違う様相を示した。このことは、発達段階的には防犯ブザーに依存（信頼）する段階でありながら、ブザーが実際には鳴らなかったり、鳴らすタイミングに迷う自分と改めて向き合ったことによる一時的なショックがあると考えられる。また、低高学年においては類似した様相を示したが、記述内容を見ると、高学年における防犯ブザーに対する依存心（信頼度）の低さが伺えた。これらのことから、同授業を年代別で実施した結果、年代による相違が明らかとなった。
１０．学校安全と防災教育といのちの教育	－	平成２７年１月	いのちの教育実践交流会　第６回シンポジウムｉｎ兵庫	本研究発表は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものに基づいて発表したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について、実践結果を交えながら発表した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１．災害時における教員の職業的役割 ～「使命感」と「多忙感」に着目して～	－	平成２９年３月	日本教師学学会第１８回大会（於、早稲田大学所沢キャンパス）	本研究では、特殊な状況下、とくに災害時においては、その「使命感」は「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そこで、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、非災害地域の教員との比較調査を通して検証し、教員固有の職業的役割を明確にすることを目的とした。調査の結果、他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し、熊本群の教員にそれらがみられないことから、一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念され、早急の対応が求められることがわかった。
１２.「事件の教訓から学ぶ教師と学校安全－池田小学校事件からの発信を視点として－」	－	平成２９年９月	日本教師教育学会 第２７回奈良大会 （於、奈良教育大学）	児童が生命を脅かされ、あるいは失う事件、事故、事案は後を絶たない。そこで、過去の事件や災害の教訓は生かされているのかという問いが生じる。またそこに付随して、教訓とは何か、教訓を生かす方法とは何か、教訓を生かすのはだれかという問いについて議論を重ね、体系的に整理し、児童の命に結びつき生かされる教訓にしていくことが急がれる。そこで本稿では、今一度、池田小学校事件に立ち戻り、事件が残した教訓と、その後、附池小が発信した学校安全の取り組みを視点として、とくに教師が、それら教訓をどのように学校安全に生かしていくのかについて発表した。
１３．災害時における教員の職業的役割	－	平成２９年９月	日本安全教育学会 第 18 回岡山大会（於、岡山大学津島キャンパス）	教員の「多忙化」が指摘される中、災害という統制できない状況のとき、その「多忙」の多寡にかかわらず、教員が避難所運営に主体的に、あるいはリーダーシップを発揮して携わるなどの例がある。 本研究では、教員の「使命感」と「多忙感」に着目し、その関連性について、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして、教員への意識調査をもとに検討した。
１４．被災地におけるアートプロジェクトが児童・教師に及ぼした影響について On the Influences of Art Projects in Disaster Areas on Children and Teachers	－	平成３０年３月	日本教師学学会 第１９回大会 （於、甲南大学平生記念セミナーハウス）	1995 年に発生した阪神・淡路大震災以降、被災者の心のケアの重要性が広く認識されるようになった。学校教育においては被災した児童生徒のためのストレス対処法や、災害後の心の傷を予防するためのストレスマネジメント教育の必要性が指摘されており、新たな防災教育が求められている。本研究は、熊本地震において被災し、避難所となった小学校において実践されたアートプロジェクトの報告から、防災教育の新たな方向性を見出そうとすることを目的とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「年鑑」 1.『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究-第６学年「命のバイスタンダー」の実践から-』	単著	平成２２年７月	財団法人下中記念財団 2010 年報　pp14-17	平成１９年度、２１年度における下中科学研究助成金の取得により、その研究成果を下中科学記念財団年報に寄稿したもの。 安全教育の効果や実効性は、これまでは授業者の実感による主観的なものでしかなかった。それを『安全安心様相図』を用いて客観的に児童の変容を測定し、分析した結果を発表した。
「リーフレット」 1.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　森　一弘

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
体育科教育の実践に関する実務 総合的な学習の指導法に関する実務	体育科指導法・自主的な学び・総合的な学習

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ○アクションリサーチを活用した授業の改善 ・単元における課題の持たせ方 ・子どもの聞き合う場づくり ・子どもと子どもの関係性 ・子どもと教師の関係性 ・子どもの理解度と授業の有効性	平成 16 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	○授業をビデオで撮影し，子どもの実態をもとに授業改善の方策を探る。教師の授業における出場として，発問・切り返し・課題の再設定などに対して，子どもたちが実際にどのような姿をしめしたのか分析するとともに個と個の関係，個と教材との関係，個と集団との関係，個と教師の関係，集団と教師の関係など協働的な学びをもとに，授業の改善を明らかにしてきた。 （神戸大学附属住吉小学校）
○社会性を育む体育の授業づくり ・チームプレイが重要だという認識の持たせ方 ・チームが勝つための自分の役割に気付かす	平成 16 年 4 月～平成 24 年 7 月	○フラッグフットボールを教材にして，子どもたちの社会性を育む授業デザインを行う。「わかる・できる」を一体的に扱い，ゲームに勝つための，自分の役割を意識し，作戦を進めていくことを通して，相手への思いやり，ゲーム進行でのルールの順守，マナーの向上が見られた。（神戸大学附属住吉小学校）
○フラッグフットボールの教育的価値について授業実践からの検討	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	○フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。（奈良学園小学校）
2　作成した教科書、教材 ハードル走のポイント	平成 20 年 10 月	○ハードル走のワークシート～リズムよく走るためのポイントを探る～4 ページ（教材） ハードル走の動きのモデルを示し，そのモデルのように動作する点のポイントを示した。児童はポイントを見ながら主体的に取り組めるように作成した （神戸大学附属住吉小学校の体育授業で指導資料として児童に配布して使用）
総合学習「普天間問題を考える」	平成 22 年 5 月	○普天間基地を考えるための沖縄の歴史をまとめた冊子 15 ページ（教材） 沖縄が本土によって，とられた政策を知ることで，沖縄の人々の思いを感じ，戦後になってもアメリカ軍の多くの施設が沖縄に駐留する現実を知らせる資料を作成した。 （神戸大学附属住吉小学校の総合的な学習の時間に参考資料として使用）
フラッグフットボール指導テキスト（再掲）	平成 22 年 7 月	○日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ（教科書） 高橋建夫先生が監修した，学校体育で活用できるフラッグフットボール練習方法などを示した。 オフェンス時の作戦づくりをしていくために，

		2 対 1，4 対 3，5 対 3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。（神戸大学附属住吉小学校の体育の指導参考資料として使用）
3　教育上の能力に関する大学等の評価 勤務評定 ・神戸大学附属住吉小学校の校長からの評価	平成 16 年度から平成 25 年度	副教頭として校務全般を取り仕切り，学校のかなめとして，各教員らの信頼も厚く，また，PTA との関係を密にして保護者からの信頼も厚いものがある。なくてはならない人材として高い評価を得ている。
・芦屋市立山手小学校の校長からの評価	平成 26 年度から現在に至る	研究主任・6 年学年主任として学校全体の教育課程の編成、授業実践、若手教員の指導などの業務に精通し学校運営の一翼を担っていたという評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ○教育実習生に対する指導	平成 4 年 4 月から現在まで	○これまで毎年教育実習生を受け入れて、担任や管理職の立場で行った講話内容 ・学校運営，児童理解，生徒指導と学習指導 ・単元の作り方と 1 時間の授業の作り方 ・学習評価の考え方の実際の評価の仕方 ・体育の授業の作り方 ・担任と養護教諭・カンセラーの連携 ・特別活動　等
○ＮＫＨ　教育テレビ 「スポーツ教室」 フラッグフットボール　基礎編・発展編の 構成及び指導出演	平成 21 年度 平成 22 年度	○ＮＨＫ教育テレビ「スポーツ教室」の番組で，フラッグボールを取り上げ，その番組の構成・演出及び指導者として出演した。ここでは，フラッグフットボールの楽しみ方に力点を置き，実際の小学校体育授業で活かしていける内容構成にした。どの子どもも楽しめるための動きや作戦を中心に番組を構成した。
5　その他		なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 教員免許	昭和 57 年 3 月 31 日 昭和 57 年 3 月 31 日	小学校教諭1級普通免許状 昭56小普第5892号　（埼玉県教育委員会） 中学校教諭 2 級普通免許状（社会） 昭 56 中普第 5629 号　　（埼玉県教育委員会）
2　特許等 特になし		

3　実務の経験を有する者について特記事項 ○授業づくりセミナー講師	平成 21 年 8 月	○神戸大学附属住吉小学校が主催した「授業づくりセミナー」において授業を公開し，その後のセミナーにて講演を行った。具体的には，小学校 2 年生を対象にした鬼遊びの授業を公開した。この中では，指導要領の改定時期と重なっていたため，改定の趣旨について解説し，改定後の内容に沿った授業づくりのポイントを示した。 ・既習内容や体験を基に，課題を明らかにさせる。 ・新しい内容を知り，これまでにしたことがない動きや作戦の考え方などを見つける。 ・子どもが運営するゲーム大会を開催する。
○全国附属学校養護教諭部会でのメンタルヘルスについての発表	平成 21 年 8 月	○絆を大切にする子どもの育成を目指して子どものケア体制の充実～という題目で，日々の学校で起こる子どもたちの抱える諸問題を解決するために，「心のケア委員会」を立ち上げた。この委員会が機能するために，教育相談担当者・カウンセラー・メンタルフレンド・養護教諭・管理職の連絡体制，相談体制，指示体制などを具体的な事例をもとに発表した。
4　その他 「社会貢献」		
兵庫県教育員会委託事業	平成 20 年度	運動プログラム DVD 作成 体力アップにための動きづくりを創作し，児童に動きを指導し，その動きを収録して兵庫県全小学校に DVD にして配布した。
芦屋市教育委員会 「社会科副読本作成アドバイザー」	平成 21 年度	芦屋市社会科部会作成の社会科副読本のアドバザーとして企画・編集・校正に取り組む。指導内容として，3・4 年生の社会科の指導内容を押さえ内容にするとともに，芦屋市の特色を取り入れるようにアドバイスを行った。
全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会講師	平成 24 年 8 月	大学体育連合会の研修会にて大学教員へ「フラッグフットボール」の実技講習を行った。大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。この研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。
「指導助言関係」		
・芦屋市立朝日ヶ丘小学校講師	平成 16 年度～22 年度	校内授業研究会での指導助言 及び研究発表会時の指導助言
・川西市立清和台小学校講師	平成 18.19 年度	校内授業研究会での指導助言
・三田市立武庫小学校講師	平成 21.22 年度	校内授業研究会での指導助言 及び研究発表会講師
・三田市教育委員会主催研修会講師	平成 21.22 年度	研究主任対象の「学校研究の進め方」講師 校内授業研究会での指導助言

・川西市市立久代小学校指導助言	平成 23．24 年度	校内授業研究会での指導助言
・芦屋市教育文化センター講師	平成 27 年 5 月	若手教員が今やるべきこと「授業実践を通して」講演
・芦屋市山手小学校研究会講師	平成 27 年 8 月	授業研究の進め方「学び合いのある活動について」講演
・西日本私学連盟体育部会実技研修講師	平成 28 年 5 月	「フラッグフットボール授業の進め方」実技研修において、小学校高学年におけるゴール型ボールゲームの考え方及びフラッグフットボールの授業展開の仕方　講師
・奈良県三宅町立三宅小学校運動能力向上のための指導講師	平成 28 年 5 月	小学生 1 年生から 6 年生を対象に、投動作の指導を実施しボール投げの技能向上を目指した指導を行った
・奈良県三宅町立三宅小学校ボール運動授業実技講習指導	平成 28 年 8 月	フラッグフットボールを中心にボールゲームの授業構想について２日間に渡り実践指導を行った。
・尼崎市立大島小学校講師	平成 28 年 8 月	学級づくりのポイントを示し、子供が主人公の学校づくりの必要性を指導した。
・芦屋市教育文化センター講師	平成 28 年 8 月	2 年次から 5 年次までの若手教員を対象に、学級づくり・授業づくりを指導した。
・奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 29 年 2 月	三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価した。
・奈良県三宅町健康づくり推進協議会座長	平成 29 年 3 月	三宅町における健康増進計画・食育推進計画を審議し、計画書を作成した。
・芦屋市授業研究担当者会講師	平成 29 年 5 月	芦屋市の小中学校授業研究担当者会において、授業研究の進め方として、どの年代の教員も積極的に研究に取り組む手立てを指導した。
・奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 30 年 2 月	三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1 国際社会に生きてはたらく資質・能力の育成 ～授業づくりにおける活用型の具現化～	共著	平成 21 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2008 P6～P20	授業構想のなかで活用型の授業とはどのような単元作りであり，1 時間の授業であるのかを提案した紀要である。 この紀要の基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容として活用型の授業デザインの中で，子どもが活動することで，教科の指導内容が明確であることが必須条件であり，評価規準・評価基準を明らかにすることが必要であることを指摘した。 ～授業づくりにおける活用型の具現化～ 子どもたちの思考の深まりを支援したり，新しい教科の知を得るために支援したりする具体策は何かを研究対象にした 1 年目の取り組みである。活用とは，子どもたちに，これまでの知識を用いて，課題解決に向かわせ，その中で，より有効は考え方やより利便性の高い考え方などを見つけさせることであると設定し，授業実践を通し，教科の内容のつながりを精査し，課題を設定し，子どもが活動する具体策を明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：高橋正，福原雅生，藤本雅司，森一弘（他 24 名）
2 グローバル社会を生きる「社会の更新」を実現していく子どもの育成 ～「活用」を視点にした授業づくり～	共著	平成 22 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2009 P6～P22	授業を通して子どもが新しい知識を生み出したり取り入れたりすることを知の更新とし，更新していくための有効な手立てについて提案した紀要である。この基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，活用型授業には，内容面で知の更新が必要であり，内容の深化として「新たな知」が授業展開に位置づけられることが必要であるといものである。 ～「活用」を視点にした授業づくり～ 単元目標に向けた一時間として本時までの知を，各教科等の視点からとらえ直して，活用できる形にする。活用できる形にするとは，前時までの学びをもとにして，本時の課題解決をしていく際に，どのような視点を持てばよいのかを明確にするということである。また，「新たな知」を生み出させるために個々の考えをつなぎ合わせることも必要であるということを明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：高橋正，福原雅生，小林秀平，森一弘（他 19 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 グローバル社会に生きるひびき合う学びを創造する子ども ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～	共著	平成 23 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2010 P6～P16	授業の中で，友だちとの関係性を核にして互いに納得し，新しい知識や技能を身につけていくことを提案した紀要である。 この紀要の基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，授業において他者との交流による活動を内容面の違い，同意，視点の違いなどから授業を構想する必要性を明らかにすることである。 ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～ 相互作用の質の向上のためには，教科等の知をどのような活動を通して子どもに出合わせるのか，その場面や支援の具体について教材研究をしておく必要がある。一つは，多様な見方や考え方を表出する場において，何が他者と違うのか明確に言語化させることが必要である。二つ目は，新たな知を創出する場において，自己の変容を言語化して自覚化を図る必要性があることを明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，神山真一，森一弘（他 19 名）
4「共創」を実現していく子ども ～相互作用の質に着目して～	共著	平成 24 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2011	授業の中で，友だちとの関係性を核にしその関係性をつないでいくための方策を提案した紀要である。 この紀要の研究基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，授業化の視点を具体として授業の中に位置づける時，課題の認識では，比較や資料からの読み取りなど諸能力の必要性を指摘し，修正していかせた。 ～相互作用の質に着目して～ 互いの思いや考え尊重しながら影響を与えあう相互作用を生むために，「援助の授受」に着目し，相互作用の質を規定する要素として位置づけた。授業において「援助の授受」を伴う相互作用を通して新たな価値を生むために，問題解決の過程に二つの「授業化の視点」を設定し，その有効性を明らかにした。 授業化の視点１：葛藤を顕在化し，共通の課題を認識させる。 授業化の視点 2：各自の理解深度のプロセスや理解の結果をもとに思考を深化させる。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，佐古賢一，森一弘，（その他 16 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5「協働社会」を実現していく子ども ～つながりが生まれる場をデザインする～	共著	平成 25 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2012 掲載　p6～p18	「協働社会」を実現していくために，協働的な学びの中で，互いの観方や考え方を調整しながら，よりよい問題解決の道筋を探り解決を図る子どもとおいた。具体的に授業を構想する手立を示した。その内容は「聴きたくなる状況を生む」「相互了解を生む」「自分の考えの見つめ直しを生む」という 3 つの瀬点を設け授業構想を考え，実践をし結果から検証していくようにというものである。 ～つながりが生まれる場をデザインする～ 3 つの視点を持って実践した結果，次のようなことが明らかになった。 対象に対する自分の考えを明確にし，他者と考えとの共通点や相違点に気付かせ，解決を図る手立てが必要である。 互いが納得できる見方や考え方について表現させる手立てが必要である。 自分見方や考え方の変容の過程をふりかえり，学習内容に対する理解を深めたり，意味づけを豊かにしたりする手立てが必要である。 このような 3 つのことが明らかになった。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，小河内直樹， 森一弘，（その他 13 名）
6 新しい体育授業の創造をめざして ～ライフスキルの育成を視野に入れた体育学習～	単著	平成 25 年 3 月	教育 PRO　3 月号 株式会社 ERP 掲載　p6～p9	「成就性」「承認性」「親和性」の三つの要素をおき、体育授業を実践していくことは、子どもが運動好きになることでもある。「精一杯動いた楽しさ」「できるようになった喜び」「仲間と協力できたよさの実感」「新しい発見」がある授業である。この結果として、身体的エフィカシ―が高まり，セルフエスティームの獲得がみられるという主張を行った。
7 人間教育を支えるもの～自尊感情に焦点を当てる体育科の授業構想～	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 第 2 号「人間教育学」の可能性−理論の展開と実践− p89～p100	体育科の授業構想において次の 3 点がポイントとなることを明らかにした。①この多様性を授業に関わる全員が受け入れる。②仲間との関わりで生成される思考や技能を表現する。③仲間との関わりの中で差異を明らかにし認め合う。このポイントを授業に位置付けることで、体育科の特性としての資質も高めることができる可能性がある。〇自由に操れる体・身体的エフィカシー、〇精神的・肉体的な粘り強さ、ストレス対処スキル、〇批判的思考、社会性、コミュニケーション、自律心などの資質を高めることができ、この資質が生涯スポーツへつながっていく大事な要素であることを示した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8 共に学びを創り会う子どもをめざして ～言葉を生かし知識や技能を更新する～	単著	平成 27 年 2 月	芦屋市立山手小学校 研究紀要 2014 掲載　p33～p39 掲載 p120～p126	授業研究基礎編 授業研究において最も大事にしたことは，各研究同人の主体的な取り組みである。研究同人である教師一人ひとりは，授業の質を高めることを目指し，授業研究に取り組んできた。授業の質について秋田は，『一人ひとりの子どもが授業中どれだけ「安心・安定（well-being）しているか」という居場所感と，学びの対象に対してどれだけ深くまたより長く「没頭・夢中(involvement)関わり考えることができるか」』という集中の 2 点を挙げている。この 2 点を踏まえ，子どもたちが教師との信頼関係，仲間に受け入れられているという受容感，よくわからない，迷ったり，困ったりしていることを自己開示できる安心感，自分の考えや言葉に共感しそれを豊かにすることから生まれる一体感を授業の中でみていくという主張を行った。 授業実践編 生き物の 3 つの特徴である、 ◇「外の世界とつながり」事例 1 ◇「一つの個体としてつながり」事例 2 ◇「長い時間の中で過去の生き物たちとつながり」事例 3 をなぜ筆者は、この順で示し、特徴として挙げたのかということを考える時間である。（批判的思考の活用）この特徴をこの順で示した理由は、目に見える身近なつながりから目には見えないつながりを挙げ、つながりがだんだんと長くなっていき、事例 3 のつながりは永遠につながっていくという時間的空間の深まりを意味している。このような筆者の工夫を共同的な学びで発見させ、読みの楽しさを実感させることを明らかにした。 共著者：中村整七、西尾節子、森一弘 （その他 32 名）
9 フラッグフットボールにおける戦術アプローチによる簡易化されたゲームの有効性と課題	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要 掲載 p135～p141	フラッグフットボールは、アメリカンフットボールを簡易化したゲームである。簡易化された要素は、タックルの危険性を回避するために腰につけたフラッグをとることで、身体接触を禁止した。また、人数は５人対５人とした。用具であるボールは、小さく柔らかいものとしている。指導要領に示されている簡易化する要素を取り入れながら、授業を展開している。この中で、戦術アプローチの考えを持ち込み、アントナンバーのゲームであったり、パスに限定した動きをさせたりするが、これらの学習では、子どもたちの作戦をつくりだすという思考・判断させる活動が弱化させていることを指摘し、イーブンナンバーでのゲーム、ボールをゴールに運び込む手立てを提案した。
10 新聞を活用した総合的な学習の時間–アクティブ・ラーニングを意識した授業–	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究 第 3 号「人間教育学」の視座–新しい「教育改革」への提言– p107～p114	新聞を活用し、子供たちが自らの興味関心にもとづき、課題を設定し、課題を解決するために情報を集め、課題解決のための方策を考え、まとめていく授業実践を提言した。この中で、新聞活用のポイントとして、「琴線に触れる言葉を探させる」「これからの自分の生き方について示唆している記事を探させる」という２点が重要であることを明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11 経験による「教師の成長」について考察する	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座　実践教育学論集 2015 −現代の教育問題を考える 20− p58～p61	「教える」という営みは、子どもたちの活動と結果として起こる事柄の詳細な関連を見いだし、反省していく熟慮的な「経験」だととらえることができないだろうか。ここでいう「経験」は、常に他者や自分自身の未来に開かれ、また新しいものを絶えず受け入れていこうとする。このような「経験」の繰り返しが、教師の成長を確かなものにし「教える」プロとして変容をもたらせてくれる。日々の授業の中で一人ひとりの子どもや個々の教材と向き合い熟慮する。また、日々、教師は自分の行動をふりかえり、反省的に教材内容の本質や子どもの思いに気づいていくことを、教員志望の学生に指導する必要性を提言した。
12 修士論文 小学校体育におけるフラッグフットボールゲームの授業実践研究−イーブンナンバーゲームの有効性−	単著	平成 29 年 1 月	大阪教育大学大学院教育研究科	本研究の目的は、フラッグフットボールゲームを公式ルールである 5 人対 5 人（クラスの人数によっては、4 人対 4 人）のイーブンナンバーゲームで実施しても戦術学習が成り立つことを明らかにすることであった。結果として、ゲームパフォーマンスが向上する。以上のことから、フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。
13 新しい視点から見た教職入門	単著	平成 30 年 3 月	大学教育出版 第 4 章　教員のメンタルヘルス p89～p105 第 5 章　教育実習・教育実習事前事後指導・教職実践演習 p251～p265	教員のメンタルエルスに関する現状と課題を明らかにし、予防的取り組みについて述べた。 教育実習の意義及び実習に関わる組織の役割、実習のための具体を示した。また、有意義な実習になるための必要な条件について述べた。 共著者：中田正浩、住本克彦、森一弘、長井勘治、その他 6 名
（その他） 1 芦屋市立朝日ヶ丘小学校指導助言時の冊子	単著	平成 16 年度～22 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 4ページ	＊全員の先生方の授業を参加しての感想および助言を文章にまとめ配布した。 ・教室の空間：たおやかな空間を 静かな空間を 整理整頓された空間を 教師が最大の言語環境である ・活動重ありきで内容なしの授業にはしない工夫 ・子どもとの関係づくり：つなぐ，もどす，きく 子どもを体に入れる 子どもと面を作る ・同僚性の発揮 ・私のいい授業の創造 ・指示命令のない学校づくり ・縦割り集団の意義
2 兵庫県教育委員会 委託事業 「運動プログラム」 DVD 作成	共著	平成 20 年度	兵庫県教育委員会	体力アップにための動きづくりを創作し，児童に動きを指導し，その動きを収録して兵庫県全小学校に DVD にして配布した。具体的な子どもの姿がわかり好評だった。 編者：兵庫県教育委員会 共著者：平川和文，國土将平，森一弘（他 10 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 三田市教育委員会主催研修会講演時の冊子	単著	平成 21.22 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 2ページ 2ページ	研究の進め方 ＊研究の進め方～研究テーマの設定の仕方～ ・児童の実態，教育界の課題，教師の思いを織り交ぜてテーマを設定 ・学級を開くという意味 ・授業化の視点を創り出す ・同僚性の発揮が必要 ＊学習評価の在り方 ・絶対評価と相対評価の違い ・評価規準と評価基準 ・単元目標と本時目標の関係と自己評価の指導
4 芦屋市教育委員会 「社会科副読本作成アドバイザー」	共著	平成 21 年度	芦屋市教育委員会	芦屋市社会科部会作成の社会科副読本のアドバザーとして企画・編集・校正に取り組む。指導内容として，3・4 年生の社会科の指導内容を押さえ内容にするとともに，芦屋市の特色を教材化し，問題解決型の副読本づくりをサポートした。 編者：芦屋市教育委員会、 共著者：伊田義信，金川秀人，俵原正仁， 森一弘（他 9 名）
5 フラッグフットボール指導テキスト	共著	平成 22 年 7 月	日本フラッグフットボール協会	指導者テキストづくりへの助言 日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ（教科書） 高橋建夫先生が監修した，学校体育で活用できる練習方法などを示した。オフェンス時の作戦づくりをしていくために，2 対 1，4 対 3，5 対 3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。 共著者名：高橋建夫，森一弘，（その他 5 名）
6 川西市市立久代小学校指導助言時の冊子	単著	平成 23．24 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 2ページ	体育授業の進め方　サッカーゲームの単元構想 ・ドリルゲーム，タスクゲームの位置づけ方 ・スペースの利用 ・課題の持たせ方⇔振り返りの活用 ・思考力の育成をめざして
7 全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会「大学体育 100 号」	単著	平成 24 年 12 月	全国大学体育連合 掲載　p55～p57	大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。 フラッグフットボールの研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　増井　眞樹

研　究　分　野	研究内容のキーワード
道徳教育 心の教育	道徳教育の指導法，コミュニケーション活動， 教育相談，学級経営

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ○生徒指導にむけた心の教育研究	平成19年4月 ～平成25年2月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，生徒指導に係る心の教育の研究では，心の仕組みやクリティカルシンキングについて取り組み，人間は先入観や決めつけに影響されて行動することを再認識し，それ以降の生徒指導の根幹をなすものとなった。そのことが，生徒理解を一層深めることとなり，それに基づいた青少年健全育成協議会運営において評価を得ることができた。また，市内中学校の生徒指導担当者への指導・助言を行ってきた。環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2年次配当，半期，選択2単位）では，実際に具体物を示し，思い込みや潜入観でものを見ることが多いことを体験させた。この研究の講義を通して，学生は，これまで無意識に過ごしてきたことを意識的にみることができ，意欲的に授業に臨むようになり，ものの見方考え方が深まった。
○児童生徒にかかる教育相談の実践研究	平成19年4月 ～平成25年2月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，教育相談の実践研究を行い，予防・開発的プログラムとして，SSTやアサーション，ストレスマネジメントの実践を芦屋市内の小・中学校で行った結果，児童生徒の人間関係が和やかになったり自尊感情が高まっていったりする結果を得ることができた。その成果を踏まえて，環太平洋大学次世代教育学部「教育相談の理解」（専門科目，3年次配当，半期，選択2単位）において，学生に実際に，SSTやアサーション，ストレスマネジメントスキルを体験させ，意義・方法を理解させるとともに，学生自身の生き方を考えさせたり，より良い生き方に気づかせたりした。また，兵庫教育大学大学院サテライトや適応教室，市立教育文化センターにおいて，児童・生徒及び大学生，中・高等学校教員，中学生の保護者の教育相談を担当した。
○中学校の不登校生徒の教育相談研究	平成19年4月 ～平成25年2月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，教育相談の実践研究を行い，精神分析的理論および自己理論の理解を深め，その他のカウンセリング理論を含めた折衷理論の立場で実践を行ってきた。来談者（不登校生）中心の方針で，生徒の心を開いていった。兵庫県立神出学園において，不登校生の指導にあたり，その後は，芦屋市内の適応教室及び民間のフリースクールにおいて，教育相談に携わってきた。
○心の教育及び教育相談の実践	平成21年4月 ～平成22年	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，中学校における生徒指導に係る心の教育及び教育相談の傾聴，共感の手法を中心とした実践研究を行い，芦屋市内の適応教室及び民間のフ

		リースクールにおいて中学校の不登校生徒の教育相談に携わってきた。
○参加型の道徳の授業方法	平成21年4月～平成24年9月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，公立小・中学校の初任者の学級において，役割演技やエンカウンターの手法を取り入れた授業を展開し，児童・生徒が主体的に他者の気持ちを考え，自分の生き方に活かそうとする成果が得られた。これを踏まえ，平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，模擬授業として実施したところ，学生が参加型の授業の効果を実感し，学生アンケートの結果からも好評を得ている。
○中学校におけるいじめ，不登校の問題解決研究	平成21年4月～平成25年3月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，討議活動を中心とする道徳を研究。「意見交換をしながら相互理解を深め，自己の変容を図る」活動，「話し合いによって，道徳的な判断力を高める」活動についての実践研究を行った。実習中学校において，「ディベート」，「モラルジレンマ」授業，「討議活動（ディスクルス）」へ展開した道徳の授業を実践。資料「だれが拾うの」「わたしのせいじゃない」の実践では，無関心や他人のせいにする行動から「いじめ」がおきる，これから考えていきたいという意見が出された。自分の考えを明らかにすることで，考えを深めることができた生徒が見られた。
○話し合い活動を通した学級づくり	平成21年4月～平成25年3月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，ハーバーマスの「コミュニケーション理論」を研究，児童生徒に対応する「話し合い活動の約束」を検討。公立小・中学校の機能しづらくなった学級において実践したところ，効果が現れ，学級を回復させることができた。とりわけ，中学校におけるいじめや不登校の問題解決のための学級づくりに資することができた。環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2年次配当，半期，選択 2 単位）「教育相談の理解」（専門科目，3年次配当，半期，選択 2 単位）では，内容の指導は勿論のこと，指導においても，「話し合い活動」を取り入れ，話型や「話し合い活動のマニュアル」を示し，学生の意見交流の機会を多く設定した。その結果，現在の児童・生徒を取り巻く教育課題について自分の考えを述べる学生が増加している。個性的な考えや考え抜かれた考えを次の授業で紹介した。
○研究発表会の導入	平成23年9月～平成 24 年11月	環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2年次配当，半期，選択2単位）では，コミュニケーション力を高めるために，毎時間「話し合い活動」を導入し，意見を述べる機会を設定し，自分の考えを確立するように進めてきた。更に自分の考えを全体（約100人の学生）に対してアッピールするために，発表会を導入した。授業中に各人の課題を明らかにし，解決方法を探るため，提示した資料などに意欲的に質問する学生が見られた。また，授業後に，グループで発表会の準備を進め，途中経過の資料を持って相談に来る学生も見られた。発表の方法は，パワーポイントによる説明の他，クイズ形式や紙芝居等，小・中・高等学校の現場を意識した方法も見られた。
○班活動・授業コメントの導入	平成23年9月～平成 24 年11月	環太平洋大学次世代教育学部「教育相談の理解」（専門科目，3年次配当，半期，選択2単位）では，班編成し，小・中学校の現場の即戦力を視野に入れ，カウンセリングの手法やエンカウンターの実践の演習を行うために，毎時間実施した。班編成している

		ことで，迅速に活動を展開することができる上，100人を超える受講生であるが，班の課題も明らかになり個別指導も可能になった。最初は，活動に消極的であった班も他の班の影響を受け，活動できるようになりつつある。更に，毎時間終了前に授業コメントを書かせることで，活動の意義の確認が可能になった。
○主体的に取り組み道徳の時間の実践指導	平成26年4月～	芦屋市内山手小学校，浜風小学校及び門真市立古川橋小学校における「道徳の時間の指導方法」の校内研修において，児童が主体的に取り組める授業方法について指導助言。 この授業で何をするのか「めあて」を明らかにする。テーマ発問を試みる。 話し合いのルールを児童の合意によって決めさせる。理由を必ず付して発言させる。 他の人の意見を聞きながら，テーマについての自分の考えを明らかにさせる。 問題解決学習の再考として，道徳の時間の指導方法を見直す。
2　作成した教科書、教材 ○話し合い活動の約束	平成20年4月～7月	ハーバーマスのコミュニケーション理論に基づき，意見には必ず理由を付す，理由が正当であれば，その意見に賛成するという考え方を中心にした「話し合い活動の約束」を作成。初任者研修会において，小・中学校の道徳の時間の指導案作成および話し合い活動についての指導を行った。小・中学校現場でも，初任者の学級で活用し，平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，その実践例を示した。
○道徳読み物資料「ストライプ」	平成21年6月	絵本「ストライプ」を道徳授業用資料に編集。児童・生徒の心に響く場面の絵を拡大し，全校朝会の講話に活用。平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）においては，価値の設定，場面の選択など，自作資料作成の資料として示した。
○兵庫県道徳副読本「こころはばたく」「心きらめく」「心ときめく」「心かがやく」	平成21年8月～平成23年3月	道徳担当代表校長として，兵庫版道徳教育副読本作成検討委員の任に就き，「兵庫についてどのように伝え，心豊かな子どもを育むか」という課題に沿って，小・中学生用資料作成検討の仕事に携わってきた。平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）においては，道徳教育の資料として活用することの大切さを説諭し，本資料活用を奨励する授業を行ってきた。
○現代教育課題「不登校・いじめ」講座ワークブック	平成28年3月	現代教育課題「不登校・いじめ」の講座を学生が主体的に取り組めるように，授業の進行についての参考例を記載している。１～15回の授業毎に，学生が本誌を基に，司会者が中心になってテーマを決め，グループ毎の話し合い，全体での交流を図り，課題が明らかにすることができるようになっている。節目で，自分の考えをまとめたり，自己評価をしたりすることができる。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ○環太平洋大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成23年9月～平成24年2月	環太平洋大学において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると，本人が担当の「学級経営実践問題」「教育相談の理解」の評価では，4段階評価で4，3を合わせると，9割を占めている。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 ○道徳指導案の指導	平成 16 年～平成 23 年	朝日ヶ丘小学校・山手小学校では，夏休みに道徳の時間の授業研究，指導案の検討を行い，9 月の参観日は道徳の時間を公開していた。朝日ヶ丘小学校教頭時代から山手小学校校長を終えるまで，毎年，各学級の道徳の時間の指導案の指導を行った。
○若手教職員の会で講話，指導助言	平成 17 年 4 月～平成 23 年 3 月	校長 1 年目より，兵庫県教育委員会からの事業に応募し，助成金を受けて，毎月 1 回，若手教職員の研修会を開催し，学級開きから，教室経営，学級経営，授業研究，児童理解，保護者対応等について，講話し，若手教職員の資質向上に尽力した。連絡帳への返事の書き方，保護者から苦情が入った時の家庭訪問の仕方など具体的に細かく指導を行った。また，話し合い活動を中心とした道徳の時間の指導方法の研修も進めた。学級崩壊などの問題の発生が抑えられた。
○地域青少年の非行等問題行動に対する指助言	平成 19 年 5 月～現在に至る	中学校校区の校長並びに保護司として，少年院への訪問・面談を行うとともに，毎月 2 回，保護観察中の少年の指導にあたっている。作文指導や話し合いを続け，再犯防止に努めるとともに自分の生き方を考えさせ，新たな進路に向けて歩ませることができている。また，保護者とも面談し，対象者本人の今後の生活について指導助言している。
○芦屋市教科等研究会　道徳部会の開催	平成 20 年 5 月～平成 23 年 3 月	芦屋市教科等研究会　道徳部会長として，新学習指導要領における道徳教育の全体計画及び年間指導計画作成について，各学校の担当者へ指導を行い，本市の道徳教育振興に尽力した。
○市内幼稚園保護者対象に講話	平成 21 年 11 月	小学校入学を控えた園児の保護者対象に小学校に向けて，「保護者の心構え，家庭で育てる心」について講話を行った。①様々な友達がいる。違いを認め合えることが大切。②困っている子どもには，そっと手を貸す子どもに育てたい。③子どもは親の姿を手本としている。親がまず，おおらかに他の子どもと接することを実践したい。④自分の子どもに困り感が見られる時は，堂々としていたい。親の不安に対して子どもは敏感である。等の内容であった。
○市内中学校の道徳の時間の指導助言	平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月	芦屋市学校支援相談員として，市内中学校の道徳の授業の指導案作成指導及び授業後の指導助言を行う。
○甲南女子大学人間科学部総合子ども学科学生対象に講義	平成 23 年 11 月	「これからの道徳教育」と題して，甲南女子大学人間科学部総合子ども学科 3･4 年生の学生を対象に①現在の道徳の時間の指導の課題，②現在の子どもを取り巻く諸問題に対応した道徳教育の在り方について講義を行った。特に，資料分析の重要性とメールを通したいじめの問題に触れた。
○芦屋市人権相談員	平成 23 年 4 月～現在に至る	人権擁護委員として，常設人権相談所及びと癖す人権相談所において，年間 6 回相談業務を行っている。
○キワニスクラブにおいて，地域における道徳教育の講話及びイベントの審査員	平成 23 年 11 月	ライオンズクラブと同じく，世界的に活動している奉仕団体の芦屋支部の会員を対象に，地域における道徳教育（地域社会の中で一般の人が子どもたちを育てる意義）のテーマで講話を行った。人と人をつなぎ，地域の子どもを心豊かに育てるという視点の内容であった。その後，当クラブは，人と人をつなぎ，弱者を支援する企画を募集し助成するイベントを開催。当イベントの審査員として，参加。高校生大学生の 3 組が受賞された。

○芦屋市立朝日ヶ丘小学校「人権教室」授業者	平成 24 年 1 月	第 4 学年対象 人権啓発資料 DVD「プレゼント」 「いじめ」はダメと言える勇気
○芦屋市立精道小学校「人権教室」授業者	平成 25 年 1 月	第 4 学年対象 人権啓発資料 DVD「プレゼント」 傍観者もいじめと同じ
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 25 年 6 月	第 3 学年「やくそくげんまん」 人権教育の視点から
○芦屋市民生委員推薦会開催	平成 25 年 4 月 ～現在に至る	委員長として年間 3 回，民生委員の推薦業務遂行
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 25 年 10 月	第 1 学年「じろうのひとこと」 道徳の時間の展開の工夫
○芦屋市立潮見小学校「人権教室」授業者	平成 26 年 1 月	第 4 学年対象 人権啓発資料 DVD「プレゼント」 傍観者もいじめと同じ
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 26 年 6 月	第 4 学年「なくしたかぎ」 道徳の時間の展開の工夫
○芦屋市立浜風小学校道徳教育研修会	平成 26 年 8 月	第 1～６学年の 9 月の参観授業に向けた指導 第 1 学年「およげない　りす」 第 2 学年「ぶらんこ」 第 3 学年「言葉のまほう」 第 4 学年「わたしたちのリレー」 第 5 学年「手品師」 第 6 学年「もうこんな思いはいやだ」 テーマ発問を考えた指導（全体指導と学年別指導）
○芦屋市立浜風小学校道徳授業研修会の講師	平成 26 年 10 月	第 1 学年「はしの上のおおかみ」 第 3 学年「窓ガラスの魚」 第 5 学年「最後の贈り物」の授業参観・事後研究会 テーマ発問を考えた指導
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成 26 年 10 月	第 1 学年「どうしたの？」友達を大切にするって・・ テーマ発問を考えた指導
○門真市立古川橋小学校道徳研修会の講師	平成 26 年 11 月	道徳の授業方法について ・人権教育について ・問題解決的学習 ・テーマ発問について
○門真市立古川橋小学校道徳授業研究会の講師	平成 27 年 1 月	第 1 学年「ともだちほしいな　おおかみくん」 の授業参観・事後研究会，授業方法講話
○芦屋市立潮見小学校「人権教室」授業者	平成 27 年 1 月	第 4 学年対象 人権啓発資料 DVD「プレゼント」 みんな仲良くするにはどうするのか
○芦屋市立浜風小学校道徳教育全体計画作成検討講師	平成 27 年 4 月	研究発表会に向けた全体計画作成方針
○芦屋市立浜風小学校全校授業研究会事前研究会の講師	平成 27 年 6 月	第 3 学年　研究授業「オオムラサキのたん生」の展開，発問について
○芦屋市立浜風小学校全校授業研究会の講師	平成 27 年 6 月	「教科化に向けた道徳の授業づくり」
○芦屋市立朝日ヶ丘小学校授業研究会の講師	平成 27 年 6 月	第 6 学年　外国語活動「I can swim～できることを紹介しよう～」 児童理解及び支援の在り方

○芦屋市立浜風小学校授業研究会講師	平成27年7月	授業参観のための授業展開について
○芦屋市教育委員会経験者研修会講師	平成27年8月	教科化に向けた道徳の授業づくり 「考える・議論する道徳教育」
○芦屋市立浜風小学校夏季道徳授業研修会講師	平成27年8月	平成27年度兵庫県教育委員会指定「道徳教育実践研究事業」研究発表会に向けて指導案検討及び道徳授業についての指導助言
○芦屋市立潮見小学校夏季研修会講師	平成27年8月	指導案作成における留意点 評価・教科書・問題解決的学習
○芦屋市立浜風小学校道徳授業指導講師	平成27年9月	参観及び展開について指導助言
○芦屋市立潮見小学校道徳授業全校研究会講師	平成27年9月	事後研究会指導助言
○芦屋市立浜風小学校研究発表会事前研修会講師	平成27年 10月	研究発表会に向けた指導助言
○芦屋市立山手小学校人権教育研究会講師	平成27年 10月	授業参観及び事後研究会における指導助言 第6学年「わたしらしく生きる」
○平成27年度兵庫県教育委員会指定「道徳教育実践研究事業」研究発表会講師	平成27年 10月	授業参観及び浜風小学校の取組講評 これからの道徳の授業づくり
○法務局人権教室授業者	平成28年1月	芦屋市立潮見小学校第4学年「プレゼント」
○平成27年度芦屋市教育委員会「学力向上研究支援プラン」指定教育研究発表会　講師	平成28年2月	芦屋市立朝日ヶ丘小学校 社会科の授業参観及び指導助言
○一般社団法人兵庫教育会講師	平成28年8月	「子どもたちの道徳性―規範意識をどう育てるか」 指導助言及び講話
○芦屋市立浜風小学校道徳教育研修会講師	平成28年8月	「道徳教育の今後にむけて」講話及び演習
○芦屋市立潮見小学校道徳授業研究会講師	平成28年8月	「道徳の授業づくり―資料分析と発問について」 講話及び個別指導
○兵庫県「道徳の授業スキルアップ支援プログラム」　講演講師	平成28年8月	芦屋市立山手小学校において，演題「『道徳の教科化』意義と変更点について」講演
○平成28年度　芦屋市打出教育文化センター　夏季研修講座講師	平成28年8月	芦屋市立学校園関係教職員を対象にテーマ「道徳の教科化に向けて」として，話し合い活動の指導方法及び留意点について参加型で講話及び演習
○道徳授業研究会事前研究会講師	平成28年9月	浜風小学校道徳授業公開にむけた指導案検討について指導助言
○道徳全校授業研究会講師	平成28年10月	授業参観及び事後研究会における指導助言 第5学年「うばわれた自由」
○法務局人権教室授業者	平成29年1月	芦屋市立精道小学校第4学年対象
○兵庫県「道徳の授業スキルアップ支援プログラム」　講演講師	平成29年6月	芦屋市立潮見中学校において，授業参観後指導助言並びにテーマ「道徳科の授業づくりと評価について」として講話
○法務局　人権教室講師	平成29年7月	兵庫県立芦屋国際中等教育学校において「スマホ・ケータイ安全教室」をNTTと共催
○平成29年度　芦屋市打出教育文化センター　夏季研修講座講師	平成29年8月	芦屋市立学校園関係教職員を対象にテーマ「道徳の教科化と評価について」講話及び模擬授業と演習
○芦屋市立山手中学校道徳教育研修会講師	平成29年8月	芦屋市立山手中学校において，平成31年度から実施の道徳科の評価について講話，演習

○芦屋市立浜風小学校道徳教育研修会講師	平成29年8月	テーマ「子どもをつなぐ道徳の授業展開」で講話
○芦屋市立潮見小学校道徳授業研究会講師	平成29年8月	第1学年　「はしの上のおおかみ」 第2学年　「およげないりすさん」 第3学年　「だいこんとにんじん」 第4学年　「心の信号機」 第5学年　「こんなこと，あんなこと」 第6学年　「命のビザ」 の指導案検討，指導助言。 評価の記述例について講話
○芦屋市　道徳教育研修会	平成30年1月	「特別の教科　道徳」の評価方法
○芦屋市立宮川小学校道徳教育研修会	平成30年2月	「特別の教科　道徳」の年間指導計画・評価
	平成30年3月	実際の評価方法について
5　その他 「研究発表」 ○人間教育研究協議会フォーラムにて発表	平成26年8月	「これからの知育・徳育はどうあるべきか？」というテーマで実践交流会において，「今，もとめられる道徳教育」をテーマに「話し合い活動」を中心として，子どもが主体的に取り組む道徳の授業づくりを発表。
○大阪道徳教育セミナーにおいて発表	平成 27 年 10 月	テーマ「『考える道徳』『議論する道徳』にむけて」として，授業を貫くテーマを問う「テーマ発問」を取り入れた授業展開。とくに，授業の最初に児童生徒がこの時間に何をするのか目的意識をもって授業に臨めるような展開を提案。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 小学校教諭一級普通免許状	昭和48年3月	昭四七小一普第 944 号（兵庫県教育委員会）
中学校教諭二級普通免許状　国語	昭和48年3月	昭四七中二普第 1001 号（兵庫県教育委員会）
修士（教育実践学）	平成22年3月	兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻 修第 7044 号 「小学校における道徳性育成のための心の教育総合プラン―『話し合い活動』を通した道徳の授業づくりを核にして」
小学校教諭専修免許状　平二二小専修第１８号	平成22年7月15日	兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 ○伝統・文化体験事業の実施	平成 18 年～現在に至る	朝日ヶ丘小学校校長として，文部科学省・兵庫県による「伝統・文化体験事業」を受け，助成金で茶道具を揃え，茶道クラブを設立した。また，第 6 学年の総合的な学習の一環として，茶道・作法を位置付け，校区内の茶道家元の茶室で所作を体験させ，道徳の時間の深化・統合を進め，「相手を敬う心」の育成に努めた。茶道クラブは，現在も継続され，月 1 回の指導に出向いている。
○地域における道徳教育の推進	平成 19 年～現在に至る	山手中学校区における道徳教育の推進充実のために，地域の行事（夏祭り，もちつき大会等）に児童を多数参加させるとともに，問題行動に係る中学校

		生徒の演奏活動を祭りのステージ部門に参加させたり，会場準備や片づけの手伝いをさせたりして，青少年健全育成に努めた。行事に参加の市長や市会議員から高い評価を得た。その後も各行事に参加協力し，地域の青少年の育成に尽力している。
○授業研究発表会開催	平成21年2月	山手小学校校長として,「自ら考え，学び合い，創り出す子の育成―対話力を育てる授業の創造―」を研究テーマに授業研究発表会を開催。兵庫県下から300人の参加者があった。
○阪神地区道徳教育研究協議会研究大会開催	平成21年10月	山手小学校校長として，自校にて，阪神地区研究大会の会長として大会を開催。阪神間の小・中学校より400人を超える参加者があった。近隣の大学生の参加・事後研究も行った。また，県下の道徳教育研究校からの視察や講師派遣の依頼もあった。
○授業研究発表会開催	平成22年12月	山手小学校校長として,芦屋市基礎学力向上研究指定を受け，授業研究発表会を開催。兵庫県下から300人を超える参加者があった。
4　その他 な　し		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所､発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　心の教育プラン集	共著	平成22年3月	兵庫教育大学　教職大学院　学校教育研究科教育実践高度化専攻心の教育実践コース	生徒指導上の諸課題に対応できるように教育プログラムの開発を目的に作られたプラン集である。 A4判　全151頁 編者　渡邉満 共著者名　長谷部義郎，藤井謙介，増井眞樹，渡辺かおる，泉健一郎，枝川拓矢，垣内志織，佐々木千佳，重近世都子，谷川理恵，西川恵輔，畑本有貴子，益本光章，松永美恵， 本人担当部分　道徳性育成のための心の教育総合プランー「話し合い活動」を通した道徳の授業づくりを核にしてー　(P23～33)を単著 ① 話し合い活動で深まる道徳の時間コールバーグの道徳的規準を活用し，ジレンマ資料を活用 ② 特別活動における児童生徒が育つ話し合い活動 学級会活動の方法をマニュアルを示して指導 ③ 根拠を示す計画案で児童生徒が育つ児童会活動 児童が主体的に考え抜いた計画案作成 ④ 総合的な学習の時間 児童生徒の興味関心を高めるキャリア教育

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　＜言葉の力＞を育てる	共著	平成 22 年 8 月	株式会社金子書房	学習指導要領の中で強調されている「言葉の力」を育てることについての論文集。判型 A5 判　全 159 頁 編者　梶田叡一，人間教育研究協議会 共著者名　梶田叡一，加藤明，伊崎一夫，鎌田首治朗，増井眞樹，勝見健史，汐海治美，谷本寛文，中島繁雄，金沢緑，米田豊，浅田匡，松田智子 本人担当部分　「『理由』を考えさせ，よりよい人間関係を構築する話し合い活動」(P47～57) を単著 「『理由』を考えさせた話し合い活動を実現し，よりよい人間関係を構築する学級づくりの実践」とハーバーマスのコミュニケーション理論①無矛盾性・首尾一貫性②誠実性・正当性③強制・抑圧・不平等から守られる。つまり，討議に参加するということは，誠実であること，自らの発話を正当化すること，矛盾したことは言わないこと，他の参加者を排除しないことという考え方に加えて，以下の話型を活用することで，より良い人間関係を構築することができる。 ①私は～です。理由は～だからです。」 ②「私は賛成です。理由は～だからです。」 ③「私は反対です。理由は～だからです。」 ④「私は賛成ですが，理由は違います。～だからです。」⑤「私は反対ですが，理由は違います。～だからです。」 ⑤　私も賛成で，つけたしです。～だからです。」⑦「私も反対で，つけたしです。～だからです。」
3　新しい道徳教育のために	共著	平成 25 年 8 月	株式会社金子書房	道徳の教科化が課題とされる中で，「人格の完成」を目指す教育の中核にあるべき徳育を考える論文集。判型　A5 判　全 149 頁 編者　梶田叡一，人間教育研究協議会 共著者名　梶田叡一，渡邉規矩郎，押谷由夫加藤明，鎌田首治朗，増井眞樹，新川靖，小楠徹，阿部秀高，渡邉満，蔵あすか，オチャンテ村井ロサ　メルセデス 本人担当部分　「今，もとめられる道徳教育」(P69～79) を単著 主体的に取り組む道徳の時間をめざし，初任者に多く見受けられる学級が機能しない状況，1 日の生活に道徳の内容項目を整合させた学級経営計画及び授業の展開方法 ① めあて「みんなが納得できる考えをつくる」を確認する。 ② 葛藤場面を設定して，話し合いの論点を明確にする。 ③ コの字型の机の配列にするなど，みんなの考えや意見を聞きやすくする。 ④ 意見表明カードを置き，自分の考えと比べながら，意見を聞かせる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				⑤　理由を付して意見を述べさせる。 ⑥　考えの変容も含めて記録させる。
（学術論文） 1　小学校における道徳性育成のための心の教育総合プラン－「話し合い活動」を通した道徳の授業づくりを」核にして（修士論文）『査読付』	単著	平成 22 年 3 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻	本論文の「学級経営」においては，特別支援の必要な児童生徒への対応を含めた学級づくりの実践研究。支援の必要な児童生徒への対応とともに，学級全体にルールが確立している。「心のしくみがわかるプログラム」では，クリティカルシンキングから身の回りの思い込みに気づき，合理的に物を見ようとする態度や違いを良さと考える姿勢の育成に関する実践研究。「よりよい人間関係の構築」においては，エンカウンターの手法やアサーティブな対応の活動を通してよりよい学級づくりの実践研究。（A４判　86 頁）
2　子どもの心に向き合う道徳の授業づくり	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号（P147～152）	道徳の時間の授業は，実施されるようになったが，児童生徒の心にせまる授業は難しい。なんとしてもこの価値を伝えたい，考えさせたいという指導者の思いが弱いようだ。そこで，筆者は，資料選択，価値内容の提示方法，道徳的価値判断基準の検討，話し合い活動の方法について，検討したものである。
3　ユニバーサルデザインを取り入れた学級経営	単著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 7 号（P185～190）	発達障害の児童に対する指導は，他の児童にも通用するのではないかという仮説を立て，ユニバーサルデザインという視点で，学級経営の実践問題を解決していった報告。 ＡＤＨＤと診断された児童の様子とその対応の実際，指導者の考え方の変革，ユニバーサルデザインでどの児童も活動しやすくなった。
4　主体的に取り組む道徳の時間―「人権教室」の実践から―	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第１集（P199～205）	人権擁護委員として，公立小学校で実施している「人権教室」はややもすれば児童は受け身のまま過ごしてしまう。児童が主体的に取り組める方法を探る。 ①　授業のめあてを明確にする。 ②　わかりやすい発問にする。繰り返さない。 ③　児童にとって「聞く」以外の活動の場を設定する。 ④　考えるための資料や言葉を用意しておく。 ⑤　「ふりかえり」を行い，気付いたこと，理解したこと，考えたことを意識させる。 その上で，児童がわかっていることを発問しないということの必要性を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　学校における道徳教育と人権教育	単著	平成 27 年 3 月	「人間教育学研究」第 2 号（p115～p120）	道徳の教科化を控え，学校では新しい道徳教育の模索を始めている。これまでの学校における道徳教育を見直す時，人権教育の経緯を整理する必要がある。 ① 学習指導要領が示す道徳教育と「人権教育啓発に関する基本計画」と「人権教育の指導方法等の在り方について〔第 3 次とりまとめ〕」が示す人権教育 ② 道徳教育・人権教育の歴史的経緯から見えること ③ 道徳の時間における道徳教育と人権教育の指導方法の比較 今後の道徳教育の指導については，人権教育の経緯を踏まえ，課題解決学習的方法やテーマ発問などを考慮したものが必要である。
6　「特別の教科　道徳」をどのように実践するか。	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集（p135～142）	社会学の手法に着目し,「考える」とは「議論する」とは，どうすることなのか，中学校における指導の具体例を示した。「主体的・対話的で深い学び」を目指した「考える」「議論する」ということに関して，現状を踏まえ，これまでの指導の課題を明確にし，課題解決に向けた方策を求めた。多面的・多角的に「考える」「議論する」ことは「哲学」や「倫理学」,「社会学」においては基本的なことがらであるので,「教育社会学」（大淵裕美）の EXERCISE（ワークシート）を用いて考え方を学ばせ，議論（話し合い）の方法をハーバーマスのコミュニケーション行為理論に基づいた渡邉の指導法を用いることで,「主体的・対話的で深い学び」を目指した「考える道徳」「議論する道徳」に近づくのではないかと考えた。ワークシートや発問を工夫することによって,「考える」や「議論する」を道徳の授業の中に明確に位置付ける指導方法を提案したものである
7　主体的対話的で深い学びが期待できる「考える道徳」	単著	平成 30 年 1月	奈良学園大学ジャーナル	平成 29 年 3 月 31 日に小中学校の新学習指導要領改正の通知が出され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の趣旨が示された。平成 30 年度から教科になる道徳科についても敷衍されている。本稿では、まず、答申はじめ道徳教育・道徳科の目標に基づき、道徳科における「主体的・対話的で深い学び」の意義を考察する。次に、改訂の道徳科の目標には、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」と示されており、小学校高学年には「よりよく生きる喜び」という内容項目が新しく加えられたことから、内容項目「よりよく生きる喜び」に注目し、その道徳的価値を児童の言葉で表現してみる。最後に、教材「青の洞門」を通して「主体的・対話的で深い学び」が期待できる「考える道徳」の実践を提案する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　道徳科の評価方法の工夫―道徳科の目標に基づく評価―	単著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要第 8 集（p143～148）	平成 30 年度から始まる道徳科の評価について、「指導と評価の一体化」の趣旨に基づき、道徳科の目標の達成に向けての具現化が重要であろう。評価方法については、種々挙げられるが、児童生徒個人内の成長の過程を重視する個人内評価は、他者評価を介した自己評価が重要な役割を担うのではないかと考える。児童生徒が主体的に道徳性を養うためには、他者からの評価を受け止め、改めて自分自身を見つめる作業が欠かせないのではないだろうか。そのための振り返りシートを作成し、授業毎の振り返りと学期毎のおおくくりの振り返りを提案する。更に、平成 30 年度からの実施のむけた「道徳科の評価」の手順を示す。
（その他） 1　生徒指導の手引「問題行動の芽を小学校で見つけよう」	単著	平成 21 年 8 月	芦屋市立山手小学校	校内研修会用資料として作成。中学校で問題を起こした生徒の小学校の時の様子とその時の教師の対応を振り返り，中学校での問題行動を防ぐために，小学校でできることはなかったのか検証したもの。 小学校教師の児童への対応の甘さが問題行動の芽を育てたのではないかという意見や中学校における生徒理解が不十分ではないかという意見が出された。 A4 判　4 頁
2　伝統・文化体験事業の実施	―	平成 18 年～現在に至る	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	朝日ヶ丘小学校校長として，文部科学省・兵庫県による「伝統・文化体験事業」を受け，助成金で茶道具を揃え，茶道クラブを設立した。また，第 6 学年の総合的な学習の一環として，茶道・作法を位置付け，校区内の茶道家元の茶室で所作を体験させ，道徳の時間の深化・統合を進め，「相手を敬う心」の育成に努めた。茶道クラブは，現在も継続され，月 1 回の指導に出向いている。
3　授業研究発表会	―	平成 21 年 2 月	芦屋市教育委員会 芦屋市立山手小学校	山手小学校長として，「自ら考え，学び合い，創り出す子の育成―対話力を育てる授業の創造―」を研究テーマに授業研究発表会を開催。合わせて，芦屋市教育委員会の「基礎学力向上」の指定を受け，国語・算数を中心に全学級の授業公開を行った。兵庫県下から 300 人を超える参加者があった。
4　阪神地区道徳教育研究協議会研究大会開催	―	平成 21 年 10 月	兵庫県教育委員会 芦屋市教育委員会	山手小学校校長時，阪神地区道徳教育研究協議会会長として，本校にて，研究大会を開催。全学級の授業公開を行い，阪神間の小・中学校より 400 人を超える参加者があった。近隣の大学生の参加・事後研究も行った。また，県下の道徳教育研究校からの視察や講師派遣の依頼もあった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５　授業研究発表会開催	―	平成 22 年 12 月	芦屋市教育委員会 芦屋市立山手小学校	山手小学校校長として，芦屋市教育委員会の「基礎学力向上」の指定を受け，国語・算数・道徳を中心に授業研究発表会を開催。兵庫県下から 300 人を超える参加者があった。
６　人間教育実践交流会　フォーラム　in 大阪	―	平成 25 年 8 月	人間教育研究協議会	人間教育研究協議会が「これからの知育・徳育はどうあるべきか？」というテーマで実践交流会を行った。道徳分科会において，「今，もとめられる道徳教育」を発表。
７　人間教育実践交流会　フォーラム　in 奈良	―	平成 26 年 8 月	人間教育研究協議会	人間教育研究協議会が「言葉の力と学力向上～各教科の学習を支える言語活動～」というテーマで実践交流会を行い，道徳分科会のコーディネーター及び「道徳の学習を支える言語活動」として「話し合い活動」について発表。
８　奈良学園大学　公開シンポジウム「食と教育」	―	平成 26 年 11 月	奈良学園大学	食育推進基本計画の策定により食育は推進されているが，目標値の達成までは程遠い現状である。教育・健康・文化の視点から次世代を担う子どもの食育に焦点を当てたシンポジウム。教育の面から，学校給食をはじめとする食育について述べる。
９「考える道徳・議論する道徳―教科化にむけて」	―	平成 27 年 10 月	兵庫県教育委員会指定「道徳教育実践研究事業」研究発表会	芦屋市立浜風小学校において，「考える道徳」「議論する道徳」を踏まえて，今後展開されていく道徳の授業づくりについて述べた。特に，児童生徒にとって，授業テーマを明らかにして展開することで児童生徒の主体的な授業づくりの提案をおこなった。
１０　「子どもたちの道徳性―規範意識をどう育てるか」	―	平成 28 年 8 月	一般社団法人兵庫教育会	阪神間の教職員を対象に，①道徳の授業の充実とともに，日頃の道徳教育の徹底を図る。②取組を全校一斉に実施する。③道徳の授業公開を推進し，保護者・地域へ啓発する。④・保護者との連携を図る。などを中心に提案を行った。
１１　「特別の教科道徳」の評価方法について	―	平成 29 年 8 月	兵庫県教育委員会「道徳の授業スキルアップ支援プログラム」	全国の道徳教育の先進校の実践を通じて，授業中のワークシートから学期毎のふりかえりシートを精査し，児童生徒自身が自分の成長を認識し，児童生徒への応援メッセージになるような記述による評価方法の提案を行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　阿尾　あすか

研　究　分　野	研究内容のキーワード
中世文学および和歌文学の研究	中世文学、和歌、比較文学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）パワーポイントによる画像の表示や映像を取り入れた講義	平成 25 年 4 月 1 日～現在	摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」を、奈良学園大学の講師として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」を担当し、両講義において、作成プリントやパワーポイントを用いて、学生が古典文学の世界をイメージできるようにつとめた。また、古典文学に関わる映画やドラマ、演劇などの DVD を説明紹介し、その一部を鑑賞するなどして、学生が古典文学の世界を具体的にイメージできるようにつとめた。学生からの授業アンケートからも「DVD を見たりして分かりやすかった」との感想を得られた。
2）講義終わりでの小テストや振り返りカードの記入による学生の理解度の把握	平成 25 年 4 月 1 日～現在	摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」を、奈良学園大学の助教・講師として「文学」「国文学入門」等国文学関連の講義を担当した。摂南大学では講義終わりに、その単元について小テストを行い、学生の理解度を確認した。場合によっては次週講義で再度その項目について補足説明を行った。また、奈良学園大学での講義では、講義の終わりに毎回振り返りカードを配付し、学生にその日の講義内容や自分の学びについての振り返りを書かせた。振り返りの内容は翌週の講義には必ず反映させ、補足説明を行ったり、そこから発展した問題を取り上げて新たな講義展開を行ったりなどし、学生の理解度が深まるように努めた
3）講義中の調べ学習や、グループワーク、発表など学生の参加を取り入れた講義	平成 26 年 4 月 1 日～現在	奈良学園大学の助教・専任講師として「基礎ゼミナール」の初年次教育や「文学」「国文学入門」等国文学関連の講義を担当した。講義の時間を大きく三分割にして、学生が自分で調べ取り組むワークの時間を設けた。ワークの時間ではスマートフォンなどを用いて調べたり話し合ったりしてプリントに書き込ませた。また、ワーク後、その内容について全員の前で発表させたり、翌週の講義で紹介するなどして、ほかの学生とも意見を共有できるようにした。このような取り組みによって学生の授業への積極的な参加を促すことができ、授業内容についての理解度も深まった。
4）意見交流・グループ発表など、学生のチームワーク、コミュニケーション力、発言力を高める講義	平成 26 年 4 月 1 日～現在	奈良学園大学の助教・専任講師として「人間教育実践力開発演習」の演習や、「基礎ゼミナール」の初年次教育、「国文学入門」「国文学Ⅰ」等国文学関連の教育を担当し、グループワークやペアワーク、意見交流などの活動を行った。これによって学生間のコミュニケーション力や発言力、授業態度が向上した。
5）ボランティア実習のコーディネートなど学生の実践的な活動を取り入れた講義	平成 26 年 4 月 1 日～現在	奈良学園大学の助教・専任講師として「人間教育実践力開発演習」の演習を担当し、教職志望の学生を学校支援ボランティアなどの学校園へのボランティア活動に派遣するコーディネートを行った。実際に教育委員会や学校園との交渉も行い、学生と受け入れ側双方の要望などを聴取し、実習中の見回りや事前事後の派遣学生の指導も行った。また学生の授業参観などのコーディネート、学生の引率および指導も行った。

6）補助プリント、講義プリントの作成	平成 25 年 4 月 1 日～現在	摂南大学・京都大学の非常勤講師、奈良学園大学の助教・講師として国文学関連の講義を行ったが、講義レジュメを穴埋め式とし、学生が講義の内容を聴きながら重要な空欄を埋めるようにした。また、奈良学園大学の助教・講師として行った国文学関連および初年次教育の講義では、学生の実情に合わせたワークシートを作成し、学生が自分の考えを書き込みながら、講義での学びを深めていけるように努めた。
2　作成した教科書，教材 1）伏見院	平成 25 年 4 月 1 日～現在	京都大学文学部での講義「東洋文化系ゼミナールⅡ」、奈良学園大学での講義「国文学入門」において、副次テキストとして使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）授業評価アンケート	平成 27 年 7 月～現在	奈良学園大学の助教・講師として、「文学」「国文学入門」「国文学Ⅰ」「国文学Ⅱ」の授業科目で授業評価アンケートを実施しているが、着任時の平成 27 年度は全体平均程度であったものの、その後の授業改善の努力により平成 28 年度以降はほぼ全科目で全体平均を上回る 3.5 以上の総合満足度である。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）日本学術振興会特別研究員（RPD)「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容―京極派歌人伏見院を中心に」	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	平成 24 年 4 月から平成 25 年 3 月の期間は信州大学教育学部に、平成 25 年 4 月から平成 26 年 3 月までの期間は京都大学大学院文学研究科に所属して、日本学術振興会特別研究員（RPD)としての研究活動を行った。この間の業績は、査読付論文が一本、注釈が四本、辞典の項目執筆が一冊（共著）である。
2）韓国学中央研究院「2012 年度グローバル時代韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト、「高麗時代の公共性」における共同研究	平成 24 年 8 月～平成 25 年 11 月	韓国学中央研究院の採択研究プロジェクトにおいて、日本側の共同研究者として参画している。韓国で行われる学術会議に参加、発表を行い、報告書に論文を提出する。この間の業績は、研究発表および討議が二回である。平成 27 年 10 月刊行の報告書にも、論文を二本掲載した。
3）市民大学等の講義講師 ・桜井市第三期市民大学講義講師 ・桜井市第四期市民大学講義講師 ・三宅町成人大学学習推進講座第２講座講師 ・平城東公民館記念講演講師	平成 27 年 7 月 28 日・8 月 18 日・9 月 8 日／平成 28 年 9 月 19 日・10 月 17 日／平成 28 年 7 月 16 日／平成 28 年 11 月 11 日	桜井市教育委員会主催の第三・四期市民大学の講師として、「桜井の観光名所」「和歌の中の桜井を楽しむ」をテーマに講義した。また、三宅町の成人大学学習推進講座で「大和の観光名所」と題して、三宅町と文学の関わりについて講義した。奈良市の平城東公民館の記念講演の講師として、「『大和名所図会』における名所の成立」をテーマに講義した。
4）大学公開講座講師 ・平成 26 年度り～べるカレッジ公開講座講師 ・奈良学園大学公開文化講座講師	平成 26 年 9 月 20 日／平成 28 年 9 月 17 日	大学・王寺町共催の公開講座「り～べるカレッジ」で、「大和の観光名所―古典文学との関わりから」と題して講演した。また、奈良学園大学の公開講座で、「『大和名所図会』における名所の成立」と題した講演を行った。
5）科学研究費補助金基盤研究（B）「中世近世国文学における中国文学受容の研究―和漢聯句と抄物を中心として―」	平成 24 年 4 月～平成 29 年 3 月（平成 27 年 4 月より参加）	京都大学大学院文学研究科の大谷雅夫教授を中心とする研究課題において、研究分担者として参加している。本研究課題では和漢聯句の紹介と翻刻および内容の検討に参加し、『慶長・元和 和漢聯句作品集成』の翻刻作業を分担した。

6）科学研究費補助金若手研究（B）「鎌倉時代後期の宮廷における王朝文化継承と新文化創出の再検討―伏見院の宮廷を中心に」	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	研究代表者として科学研究費補助金を獲得。平成 24 年度～平成 26 年度に行った、日本学術振興会特別研究員（RPD）の研究課題の研究内容を深化かつ継続するものである。この間の業績は、査読付論文が二本、著書が一本（共著）、学会発表が一本である。
7）科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ」	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	奈良学園大学人間教育学部山本美紀教授を研究代表者とする課題において、研究分担者として参加している。研究分担者として、当時の史料のデータベース化および目録化に協力した。
8）科学研究費基盤研究（C）「中世における漢故事のパラフレーズ」	平成 28 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日	南山大学森田貴之准教授を研究代表者とする課題において、研究分担者として参加している。当該の研究課題の成果として、平成 30 年秋期刊行の論集に論文を一本発表予定である。
5　その他 1）摂南大学での古典文学史の講義	平成 25 年 4 月 1 日～平成 25 年 9 月 30 日	摂南大学経営学部の非常勤講師として、「古典文学から学ぶ」の講義を担当した。学部二回生を対象とし、物語文学を中心とする、古代から平安時代までの古典文学史について講義した。イラストやパワーポイントを多用して、学生の古典文学への興味関心を引き出すこと、古典文学への知識を身につけさせることを目標とし、実際に受講した学生からは「古典文学についての興味がわいた」などの声が寄せられ、目標を達成することができた。
2）京都大学での和歌史の講義	平成 25 年 10 月 1 日～平成 26 年 3 月 31 日	京都大学文学部の非常勤講師として、リレー講義「東洋文化系ゼミナール」を担当した。学部全体を対象とし、古典文学史、特に勅撰和歌集史について講義した。勅撰和歌集の成立と性格、それに関わる研究を把握し、卒業論文の作成に向けて問題設定ができるように講義を行った。受講学生からのレポートも、勅撰和歌集の個々の性格を理解した上で問題設定を行うことができており効果があった。
3）奈良学園大学での文学の講義	平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る	奈良学園大学の助教・専任講師として、国文学関連の講義を担当した。講義中には、学生にグループワークや発表をさせることで受身ではなく主体的に学習に取り組み、知識を身に付ける効果があった。
4）奈良学園大学での人間教育実践力開発演習の講義	平成 26 年 4 月 1 日～現在に至る	奈良学園大学の助教・専任講師として、授業参観、学校園ボランティア実習の事前事後指導を担当し、学校園の教育目的を理解し、主体的に行動できる学生を育成することに効果があった。
5）奈良学園大学での初年次教育の講義	平成 27 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学の助教・専任講師として、初年次教育を担当し、アカデミックスキル・ステディスキル、プレゼンテーション力やコミュニケーション力を身につけさせるのに効果があった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）高等学校教員免許（国語Ⅰ種）	平成 12 年 3 月	平 11 高一種第 511 号
2）修士（文学）	平成 14 年 3 月	京都大学第 3427 号、論文題目「嵐と鐘―「風雅和歌集」を中心として―」
3）博士（文学）	平成 20 年 3 月	京都大学第 445 号、論文題目「風雅和歌集の歌風と展開」
2　特許等 なし		

3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）　研究プロジェクトでの事務および報告書の編集作成	平成 20 年 7 月～平成 22 年 6 月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの研究会の事務及び報告書の編集作成に携わった。
2）科学研究費補助金若手研究（B）「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禅文化の流入」	平成 21 年 4 月～平成 22 年 9 月・平成 23 年 11 月～平成 24 年 3 月	国文学研究資料館において、機関研究員在籍時の平成 21 年 4 月から平成 22 年 6 月までの期間および特定研究員在籍時の平成 22 年 7 月から平成 24 年 3 月までの期間、科学研究費補助金若手研究（B)に採用され、中世和歌とくに京極派和歌の表現に関する研究を行った。途中中断しているのは出産育児によって一年間研究を中止したためである。この間の研究業績は著書が三冊（うち二冊は共著）、報告書が二冊（いずれも共著）、注釈が二本（いずれも共著）、図録が二冊（いずれも共著）である。
3）資料展示の企画参加および展示作業	平成 21 年 11 月～平成 23 年 12 月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの特別展示「物語の生成と受容」（平成 21 年 11 月 9 日～11 月 23 日）の企画に参加、展示にかかわった。また、特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」（平成 23 年 10 月 8 日～12 月 4 日）の企画に参加、展示資料の調査、選定に関わった。同館企画連携部の機関研究員としては、初学者向けの展示「和書のさまざま」（平成 22 年 4 月 15 日～6 月 18 日）の展示作業を担当した。
4　その他 1）科学研究費補助金若手研究（B）	平成 21 年 4 月～平成 22 年 9 月・平成 23 年 11 月～平成 24 年 3 月	「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禅文化の流入」（21720084）代表阿尾あすか
2）日本学術振興会特別研究員奨励費（RPD)	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月 30 日	「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容―京極派歌人伏見院を中心に」（人文学・40200）
3）韓国学中央研究院「2012 年度グローバル時代　韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト	平成 24 年 8 月～平成 25 年 11 月	「高麗時代の公共性の研究」１年目：鎌倉時代後期の宮廷文化と公共性、2 年目：天皇の記録を通してみた中世的公共性
4）科学研究費補助金基盤研究（B）：分担	平成 27 年 4 月～平成 29 年 3 月	「中世近世国文学における中国文学受容の研究―和漢聯句と抄物を中心として―」（24320048）代表大谷雅夫
5）科学研究補助金若手研究（B)	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	「鎌倉時代後期の宮廷における王朝文化継承と新文化創出の再検討―伏見院の宮廷を中心に」（15k16691）代表阿尾あすか
6）科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：分担	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	「宗教系団体等が所蔵する幻燈史料の記録化と分析による道徳観成立へのアプローチ」（15k13194）代表山本美紀
7）科学研究費基盤研究（C）	平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月	「中世における漢故事のパラフレーズ」（16K02379）代表森田貴之

8）学術雑誌の学界時評における評価	平成 26 年 5 月	『リポート笠間』56 号（平成 26 年 5 月・笠間書院）の学界時評「和歌」の項目において、論文「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」（『京都大学国文学論叢』30 号）が「古筆資料の博捜と考証から新たな見解が提示されている」研究として紹介・評価されている。
9）過去に所属した国文学研究資料館でのプロジェクトの代表責任者の評価	平成 23 年 5 月 20 日	同館の「平安文学における場面生成研究プロジェクト」及び「陽明文庫展示研究プロジェクト」に機関研究員として従事し、主に研究や、研究成果報告書の編集作業及び研究会の運営の補助などを行っていた。前者のプロジェクトでは平安物語文学という申請者の専門外の分野を中心とする活動であったものの、中近世和歌に関する広範な知識を生かし、後世における平安物語文学享受について様々に研究提起してプロジェクトに貢献するところが大きかった。企画展示室にも勤務し、展示作業にも関わっていた。アルバイト学生などの協力者との関係も良好であり、業務と両立して自分の研究も行っていた。 今は古典研究者が減少する傾向にあるので、次代に向けて古典文化を担っていく者が積極的に求められる。今後さらに優秀な研究者として成長していく人物であるので、是非申請をお願いしたい。
10）日本学術振興会特別研究員（DC2）の受入研究者の評価	平成 23 年 5 月 21 日	専門的知識・技量については、京極派和歌はもちろん中世韻文学に関してもその知識は広範に及ぶ。また、前の勤務先において、平安王朝物語に関わったプロジェクトに参加していたこともあり、物語文学に関する知識も豊富である。表現研究だけではなく、資料研究も手堅く押さえられているところが、研究者としての強みである。
11）日本学術振興会特別研究員（RPD）の平成 25 年度受入研究者の評価	平成 26 年 4 月 18 日	研究員は近年、京極派歌壇の指導的存在であり、皇統である持明院統の領袖でもあった伏見院の歌人像を再構築するという大きなテーマに精力的に取り組んでいるが、当該年度において発表した論文、「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」は、伏見院の歌人としての実像を知るための大きな手がかりとなるものである。同詠草については、近年その存在が発見され、いまだその性格が明らかとなってはいなかった。研究員は合点や丸印といった符号の付いた和歌について詳細な分析を行うことで、同詠草の実体を明らかにすることに成功した。同詠草の性格が判明することで、伏見院の歌風形成の過程がより明確なものになることが予想される。また、韓国の研究者との共同研究において、文学の立場から中世日本社会の「家」が公共的存在であることを提起しているが、これも中世の天皇家および歌の家と密接に関わる問題であり、持明院統皇統の性格を考える上で大変重要な研究と思われる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 『中世近世和歌文芸論集』龍谷叢書 15	共著	平成 20 年 9 月	思文閣出版	関西の研究者を中心とした、中世近世和歌に関する論文集。 A5 判、401 頁 編者：日下幸男 共著者：安井重雄・阿尾あすか・長谷川千尋・長谷川薫・大谷俊太・岡本聡・藤本孝一・海野圭介・小高道子・日下幸男・西田正宏・神作研一・盛田帝子・久保田啓一・中川豊・加藤弓枝・万波寿子 本人担当部分「風雅和歌集における烏―京極派的歌材をめぐる一考察」（p24-49） 「風雅和歌集における烏―京極派的歌材をめぐる一考察」を単著 『風雅和歌集』では烏を題材とした歌が他の勅撰集と比べ突出して多く入集している。烏は和歌や王朝文学の世界では雅的な物とみなされなかったが、漢詩文の世界では詩的世界を形成しうる題材として深く浸透している。『風雅和歌集』の烏の歌も漢詩文から表現を摂取することで抒情性を持って詠むことが可能となった。一方で、漢詩摂取と共に、『万葉集』や王朝文学の要素を和歌に取り入れており、漢詩的題材の烏を和歌的素材へと変質させる工夫を行っている。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2『伏見院』	単著	平成 23 年 6 月	笠間書院	中世の京極派和歌の庇護者であり、代表歌人でもある伏見院の和歌三十七首の解釈を通じて、院の和歌表現の特徴と和歌思想について論じた。伏見院の和歌は、王朝古典文学や漢詩文を積極的に摂取した表現、独自の思想に基づいた繊細な自然描写が特徴である。京極派和歌は、法相宗の唯識思想を基としているが、院の場合はそこに神道的な思想が加わる。伏見院には強烈な正統意識と隠遁願望があり、院の思想や歌風もこうした内面に由来すると思われる。 A６判・全 113 頁
3『鳥獣虫魚の文学史　虫の巻』日本古典の自然観３	共著	平成 24 年 1 月	三弥井書店	鳥獣虫魚のうち、虫を取り上げ、虫が日本古典文学においてどのように描かれてきたかを様々な視点から論じ、そこから日本人の自然観をあぶりだすことを目的とした論文集。 A5 判、373 頁 編者：鈴木健一 共著者：鈴木健一、田中仁、室田知香、大井田晴彦、西山秀人、坪井陽子、横田隆志、植木朝子、高柳祐子、山本啓介、横山太郎、天野総一、阿尾あすか、有賀夏紀、金子俊之、牧藍子、牧野悟資、井上泰至、小財陽平、吉丸雄哉、佐藤至子 本人担当部分：「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざまで」（p214-229） 「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざまで」を単著
4 『中世詩歌の本質と連関』中世文学と隣接諸学６	共著	平成 24 年 1 月	竹林舎	中世和歌における諸問題を扱った論文集。 A5 判、全 597 頁 編者：錦仁 共著者：阿尾あすか、赤木俊介、植木朝子、錺武彦、加藤孝男、久保木秀夫、小林一彦、小山順子、志立正知、鈴木元、寺島恒世、内藤まりこ、中村文、中村成里、錦仁、久野俊彦、平田英夫、平林香織、堀川貴司、松本麻子、松本郁代、丸山陽子、安井重雄、山田尚子、吉野朋美 本人担当部分：「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」（p511-535） 「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」を単著 鎌倉時代後期、歌の家である御子左家は京極、二条の二家に分裂し、双方が正統性を主張した。京極為兼と二条為世の歌論を検討すると、為兼は詠歌態度についての庭訓を、為世は歌を詠む実践面での庭訓をそれぞれ継承している。歌学歌論の宗教的傾向を深化させたのが京極派、「道」の伝授を庶幾してゆくのが二条派であり、両者は中世文化を形成する表裏一体と捉えうる。
5 『高麗時代の公共性１』	共著	平成 28 年 6 月	韓国学中央研究院出版部	韓国学中央研究院のプロジェクト「高麗時代の公共性」についての研究をまとめた報告書。 全 207 頁 編者：李禧柱 共著者：李禧柱，申福龍，李南姫，丁善溶，尹大植，魯炳浩，永原慶子，阿尾あすか 「日本宮廷文学の公共性ー「勅撰和歌集」という公共事業」（韓国語による翻訳）pp. 191-pp. 207 勅撰和歌集 21 代集の撰集作業を公共事業として捉えた時、それは日本の政治とどのような影響関係にあったのかを概説的に論じた。通史的に見た場合、勅撰和歌集には二つの大きなタームポイントがあった。それは撰集作業が国家事業として意識された『新古今和歌集』、武家の政権が京都に移った時に編纂された『新千載和歌集』である。中世からの勅撰和歌集事業は、武家と天皇家との共同政権のバランスの上に成り立っており、そのバランスが大きく武家に傾いた時に破綻を迎えることを指摘した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6『高麗時代の公共性２』	共著	平成 28 年 6 月	韓国学中央研究院出版部	韓国学中央研究院のプロジェクト「高麗時代の公共性」についての研究をまとめた報告書。 全 226 頁 編者：李禧柱 共著者：李禧柱，申福龍，李南姫，丁善溶，尹大植，魯炳浩，永原慶子，阿尾あすか 「「家」という日本の中世的公共性について一「歌の家」を中心に一」（韓国語による翻訳）pp. 203-pp. 226 「公共性」という言葉の定義に立ち戻った時、日本の中世の社会は「家」の結合体で成り立っており、「家」そのものが公共性を帯びたものであったといえる。本論ではその見解に立って、中世の歌の「家」の継承のシステムについて概説した。
7『日記で読む日本史１ 日本人にとって日記とは何か』	共著	平成 28 年年 7 月	臨川書店	歴史や文学における日本の日記文化について論じた論文集。 四六判・全 276 頁 編者：倉本一宏 倉本一宏、松薗斉、石田俊、佐野真由子、奈良岡聰智、久富木原玲、カレル・フィアラ、井上章一、富田隆、阿尾あすか 「日記と和歌―『中務内侍日記』を例に」（pp201－230） 中世の女流日記『中務内侍日記』について取り上げ、同日記に果たす和歌の役割について論じた。同日記における和歌は、作者のつかえた伏見院の侍臣、女房達が、天皇に仕える者の集団としての精神的紐帯を確かめるツールとして機能している。結果的には私的、文芸的な記事とされる箇所においても、和歌は常に天皇を称揚するためにあり、これまで分裂的と評価されてきた同日記だが、和歌から読み解くと常に伏見天皇称揚ということで一貫している。
8『慶長・元和和漢聯句作品集成』	共著	平成 30 年 2 月	臨川書店	和漢聯句の翻刻 A５判・全 316 頁 著者：京都大学和漢聯句研究会。阿尾あすか・大谷雅夫・大山和哉・金光桂子・川﨑美穏・河村瑛子・小林雄一・小山順子・竹島一希・中村健史・野澤真樹・長谷川千尋・楊昆鵬 慶長・元和年間に催行された和漢聯句作品のうち、すでに存在が確認されているもの 74 点の翻刻を共同で行った。
（学術論文） 1 東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―（査読付）	単著	平成 25 年 9 月	『京都大学国文学論叢』（京都大学）30 号 p37－54	東京国立博物館蔵「伏見院詠草」は近年伏見院自筆の歌稿と紹介された資料であるが、永仁の勅撰の際の撰集資料とされる「松木切」の一部と推定されたものの、その和歌表現や資料の性格については不明であった。合点・丸印の付いた和歌の表現を中心に検討を行ったところ、永仁期から京極派歌風確立以前の嘉元期以前までの詠草をまとめたものであり、合点・丸印のない継紙に関しては嘉元期以後のものであることが判明した。同詠草は「松木切」以後も、様々な段階でまとめられた伏見院の歌集の草稿の一部が切り継ぎされたものと考えられる。
2 日本文化における教養教育としての「古典文学」利用―『大和名所図会』での名所規定を例として―（査読付）	単著	平成 26 年 12 月	『人間教育学研究』（人間教育学会）2 号 ,pp（一）～（一三）	近世の名所記『大和名所図会』は、先行する名所記『広大和名勝志』を加筆修正する形で著されているが、古典文学に関わる名所の引用等においては独自の選択が見られる。筆写の秋里籬島は物語よりも和歌を優先的に引用しており、読者が現地に赴いて詠行ないし吟行することを想定して同書を編集していることが窺われる。同書からは当時の文人層の基礎教養が和歌にあったことが窺われる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 日本文学における母性観―今後の教育に資する一考察―	単著	平成 27 年 12 月	『人間教育学研究』（人間教育学会）3 号 pp.（一）～pp.（一五）	平安時代から近現代までの文学において、母性がどのように描かれているかを概観し、各時代での母性観を考察した。現代日本にも根強く見られる抱擁的・自己犠牲的な母親の愛情が、望ましい母性として描かれるのは、明治・大正時代に完成した良妻賢母思想以降である。近代以前は親として子どもを扶養し安定した愛情を与えていれば問題ないものとされていた。家族形態も多様化した昨今、母性の在り方を考える上で近代以前の日本の母性観には示唆すべき点が多いと考えられる。
4 伏見院の和歌題と漢文学（査読付）	単著	平成 29 年 4 月	『国語国文』（京都大学）86 巻 4 号 pp. 204-215	漢詩句から摂取したと思われる和歌題で詠まれた伏見院の和歌の検討を通して、伏見院とその時代の文芸における漢文学摂取の様相について明らかにした。典拠となった漢詩文の内容まで取って詠む場合、内容は全く含まず題のみ取る場合など様々な詠まれ方をしており、当時、漢詩句が和歌の修練の場で盛んに用いられ宮廷文化に深く浸透したものであったことを指摘した。
（その他） 「報告書」 1『平成 20 年度研究成果報告書　物語の生成と受容④』	共著	平成 21 年 3 月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成 20 年度の研究成果をまとめた報告書。 A5 判、全 294 頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：高橋由記、江戸英雄、萩野敦子、阿尾あすか、森田直美、中村康夫 本人担当部分「正徹の『源氏物語』摂取について」(p238-263) 「正徹の『源氏物語』摂取について」を単著 室町時代の歌僧、正徹は、心酔していた藤原定家が『源氏物語』を摂取して歌境を開拓したことに影響を受け、自身も源氏摂取歌を多く残している。しかしながら、物語世界の延長上にある王朝文化の中に生きた定家と、室町の地下歌人である正徹とでは摂取の仕方が異なる。定家は他の王朝物語や和歌も受容して複合重層的な物語的世界を和歌に作りだすが、正徹の場合は摂取した物語場面の世界そのものを和歌で表そうとし、連歌に近い詠歌方法となっている。
2『平成 20 年度研究成果報告書　源氏物語歌寄せ』	共著	平成 21 年 3 月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成 20 年度研究成果報告書の付録。江戸時代の歌学書『源氏物語歌寄せ』の翻刻と解題。 A5 判、全 219 頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：平安文学における場面生成研究プロジェクト、阿尾あすか 本人担当部分：「『源氏物語歌寄せ』解題」（p298-218） 「『源氏物語歌寄せ』解題」を単著 『源氏物語歌寄せ』の資料の性格については明らかにされてこなかった。本書は、『源氏作例秘訣』の祖本、それも編集の途上にあったものを借り出して写し、編者の使い勝手のよいように独自の改訂を加えたものであったことが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3『平成 21 年度研究成果報告書　物語の生成と受容⑤』	共著	平成 22 年 2 月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成 21 年度の研究成果をまとめた報告書。付録として平成 21 年 11 月に国文学研究資料館特別展示資料の調査報告と資料解説を付ける。 A5 判、全 235 頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：「一滴集」（p181-183）、「源氏物語わかくさ」（p184-185）、「詠源氏物語和歌」（p186-189）、「源氏物語歌寄せ」（p190-193） 平成 21 年 11 月に国文学研究資料館特別展示で展示した、同館所蔵本についての調査報告及び資料解説。各資料の資料的性格と書誌的事項について執筆した。
4『陽明文庫王朝和歌集影』	共著	平成 24 年 1 月	勉誠出版	平成 23 年の国文学研究資料館の特別展示「近衛家陽明文庫王朝和歌文化一千年の伝承」の図録をもとに索引を付すなどして編集し、単行本化したもの。国文学研究資料館特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（平成 21 年～平成 23 年度　代表者・中村康夫）の研究成果報告書でもある。 A4 判、全 252 頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤祥子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懐紙（賦花迎文翰賓）」、「和歌懐紙（見花・折花）」、「和歌懐紙（梅近聞鶯）」、「広沢切（伏見院御集断簡）」、「和歌巻」、「和歌懐紙（侍行幸聚楽第）」、「詠草（立待月・渡月・月前松・寄月旅）」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懐紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った
「実践記録」 1 教職をめざす大学生への「俳句の授業」	単著	平成 30 年 3 月	『語り合う文学教育』第 16 号 p91-103	大学での国文学関連の講義のうち、俳句に関する授業実践の記録。俳句は様々な解釈が許される短詩形の文芸である。句会で合評し、相手の作品の内容を想像することで、互いに尊重しながら楽しむ空気が生まれた。手頃に創作でき楽しむことができる俳句は言語活動の一環だけでなく、学級経営にも生かせる活動なのではないか。
「注釈」 1『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月記（二）―訓読と注釈	共著	平成 23 年 3 月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）6 号 p175-222	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月十一日～三十日条の本文について、宮内庁書陵部のコロタイプ複製を底本として、翻刻、訓読、注釈を加えたものである。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：二月十七日条 十七日条の翻刻、訓読、注釈を担当した。同日条では宮中行事についての注釈を主に加えたが、鎌倉後期の政治情勢を踏まえて記述した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記―訓読と注釈	共著	平成 24 年 3 月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）7 号 p241-304	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：三月二十二日条 観音院の仏事、観音院灌頂についての記事を中心に訓読・注釈を行った。
3『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記―訓読と注釈	共著	平成 25 年 3 月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）8 号 p245-313	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：四月十二日条、二十一日条、二十二日「衆議判」の項、二十八日条 二条為基や京極為子の略伝、和歌に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
4『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（一）―訓読と注釈	共著	平成 26 年 3 月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）9 号 p 261－305	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：五月十五日条 月蝕および月蝕に対応する宮廷行事に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
5『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（二）―訓読と注釈	共著	平成 27 年 3 月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）10 号 p 145 －193	共著者：阿尾あすか、小橋慧子、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当分：五月二十九日条 花園院の日常生活に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
6『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年六月記―訓読と注釈	共著	平成 28 年 3 月	『京都大学国文学論叢』（京都大学）35 号 p 113－146	編集：花園天皇日記研究会　共著者：坂口太郎、中村健史、阿尾あすか、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌、三角健、水嶋彩乃、田村亨 pp. 113-pp. 145　本人担当箇所：六月四日・五日条 京極為兼に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
「翻刻」 1「源氏物語歌寄せ翻刻」	共著	平成 21 年 3 月	『平成 20 年度研究成果報告書　源氏物語歌寄せ』（国文学研究資料館）p1-197	国文学研究資料館蔵『源氏物語歌寄せ』の翻刻。 共著者：阿尾あすか、岩城賢太郎、江戸英雄、小川陽子、金光桂子、高橋由記、中川照将、中村康夫、萩野敦子、森田直美、横井孝、横溝博 本人担当部分：p1-26
2「『蒙求和歌』第三類本本文〈二〉―恋部から述懐部まで―」	共著	平成 25 年 3 月	『京都大学国文学論叢』（京都大学国文学研究室）28 号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：81～90 『蒙求和歌』恋部前半、「班女辞輦」から「宋女愈謹」までの翻刻を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3「『蒙求和歌』第三類本本文〈三〉―哀傷部から雑部まで―」	共著	平成 26 年 3 月	『京都大学国文学論叢』(京都大学国文学研究室) 29 号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：151～160 『蒙求和歌』、「墨子悲糸」から「史魚黜殯」までの翻刻を行った。
4『蒙求和歌』片仮名本(第二類本)第二種本 本文	共著	平成 28 年 9 月	京都大学國文學論叢（京都大学国文学研究室）34 号	共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、南谷静香、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：p107-113
「図録」「目録」「辞典」 1『特別展示「物語の生成と受容」』	共著	平成 21 年 11 月	国文学研究資料館	平成 21 年 11 月 9 日～23 日の期間、国文学研究資料館で開催した特別展示の解説図録。 A4 判、全 49 頁 編者：国文学研究資料館「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：p33-36 22「一滴集」、23「源氏物語わかくさ」、24「詠源氏物語和歌」、25「源氏物語歌寄せ」の解説。
2『図録展示　近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承』	共著	平成 23 年 11 月	国文学研究資料館	平成 23 年 10 月 8 日～12 月 4 日に国文学研究資料館で行われた特別展示の図録。同館の特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（平成 21 年～平成 23 年度　代表者・中村康夫）の研究成果報告書でもある。陽明文庫に伝わる歌合及び和歌に関する資料を中心に展示を行った。 A4 判、全 257 頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤祥子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懐紙（賦花迎文翰賓）」、「和歌懐紙（見花・折花）」、「和歌懐紙（梅近聞鶯）」、「広沢切（伏見院御集断簡）」、「和歌巻」、「和歌懐紙（侍行幸聚楽第）」、「詠草（立待月・渡月・月前松・寄月旅）」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懐紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った。
3『和歌文学大辞典』	共著	ウエブ版：平成 25 年 4 月 書籍版：平成 26 年 12 月	株式会社古典ライブラリー	共著者：青木賜鶴子・青木太朗ほか 本人担当部分：或所紅葉歌合・摂津守有綱歌合・賭弓歌合・未詳歌合（年次不詳）・後伏見天皇・家親・清雅・経親・家雅・三十番歌合・金玉歌合・歌合（乾元二年五月四日）・正応三年九月十三夜歌会歌・正応二年三月和歌御会・北山御幸和歌・正中三年禁庭御会和歌・為兼卿和歌抄・京極家・伏見院三十首・公蔭・法守法親王・盛親・定宗・一万首作者・山王七社法楽和歌・貞和百首・木綿襷・永仁勅撰議・伏見院宸記・理・風雅・京極派 B5 版、全 1352 頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4 三室戸寺蔵文学関係資料目録	共著	平成 27 年 3 月	和泉書院	三室戸寺での歌書・物語等の文芸資料の調査結果をもとにした解題目録。 共著者：大谷俊太、小山順子、長谷川千尋、豊田恵子、舟見一哉、阿尾あすか、森本晋、龍池玲奈 本人担当部分： p6-7,13-14,17,22-23,27,35,50,55,90,93,100,106-109,117-121 A4 版、全 222 頁
「討議」 1「王朝物語と歌ことばの変奏　正徹の『源氏物語』摂取について」	共著	平成 21 年 3 月	国文学研究資料館『平成 20 年度研究成果報告書　物語の生成と受容④』p264-281	平成 20 年 10 月 25 日に行われた国文学研究資料館「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの第九回研究会での研究報告に関する共同討議の記録。 参加者：阿尾あすか、岩城賢太郎、小川陽子、金光桂子、高橋由記、中川照将、中村康夫、萩野敦子、松岡智之、森田直美、横井孝、横溝博、江戸英雄（司会）
「学会発表」 1 東京国立博物館蔵『伏見院詠草』の和歌表現について―合点・丸印の意味するもの―	単独	平成 20 年 12 月	和歌文学会例会（於東京大学）	東京国立博物館蔵『伏見院詠草』の歌頭に付く添削記号を検討すると添削基準が各継紙によって一定ではなく、これらの歌は京極派風表現模索期の歌と推定できる。典型的な京極派風表現の歌を書き連ねているにも関わらず添削の行われていない継紙もあるが、伏見院にとって不遇期の嘉元期のものと推定される。大覚寺統派に政権が移って自派の勅撰集撰進の可能性が薄れたため、途中から添削も行われなくなったものと考えられる。
2 日本宮廷文学の公共性―「勅撰和歌集」という公共事業	単独	平成 24 年 11 月	韓日国際学術会議―高麗時代の公共性―（於韓国ソウル・アサン政策研究院）	政治的な視点で見ると、勅撰和歌集は天皇の公共事業として捉えられる。勅撰和歌集の編纂事業は、天皇の治世と安定と繁栄を予祝、または記念する国家事業であり、特に中世においては和歌によって王権の正統性と権威を補完し、誇示するものであった。そこには武家の有り方が深く関わっており、足利幕府が京都に幕府を置いたことにより変容することとなった。勅撰和歌集の編纂事業は天皇家が権能の一部を幕府に与えながらも、政治と文化双方において権威権力を持つことによって成立したのである。
3「家」という日本の中世的公共性について―「歌の家」を中心に―	単独	平成 25 年 8 月	韓日国際学術会議―高麗時代の公共性―（於高麗大学）	「公共性」という言葉は様々な定義で用いることができ、時代によっては示す内容が異なってくる。当該発表では日本の中世独自の「公共性」の一つに、「家」があることを論じた。和歌の「家」の継承の正統性をめぐって争った二条家と京極家の様相に注目すると、細部の文学表現までもが「家」の継承の正統性の証左となったことが窺える。現代では「私」の領域にある表現や芸術活動が、中世日本では「公共」のものであったことがわかる。
4 ことばから広がる和歌の学習　―ことば遊びと結び付けた和歌教育の提案―	単独	平成 28 年 8 月	奈良県国語教育研究協議会第 312 例会（於いかるがホール）	中学校国語教育における和歌についての授業での、和歌の技巧の教授法について、教職を目指す大学生への授業実践を通して考察した。
5「音読」再考（講演）	単独	平成 28 年 9 月	語り合う文学教育の会（於奈良教育大学附属小学校）	国語科教育において音読は重視されてはいるものの、一方で目的が教師によって多様化しており、音読によって何を身につけるのか、学習の目標があいまいである。本講演では日本語の音の韻律やリズムに重点を置く、音読に特化した授業の提案を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 教員志望学生に向けての古典文学教育授業実践	単独	平成 29 年 3 月	機構内連携共同研究「青少年に向けた古典籍インターフェースの開発」・「初中等学校における古典教育」研究会（於日本女子大学百年館）	教員志望の学生であっても古典に苦手意識を持つ者は多い。教員を志す学生たちが、学校現場でどのように古典文学を小中学生たちに教えていくのか、ワークを中心とした講義を実際に学生に体験させることで、授業方法を提示していくことも有効な手段と思われる。本発表では、和歌の授業実践を通して、文字やことばへの興味から和歌へとひき付けてゆくことが、もっとも効果的であることを明らかにした。古典文学に興味を持てないでいる学生の多くは、古典が難解な言葉で書かれた高尚な文芸であって、自分とはつながりのないものと感じることから学習意欲を喪失させるようである。そうした苦手意識を取り除き、古典へ興味関心を持たせる一方法として、ことば遊びと和歌を結び付けた学習は有効ではなかろうか。
7 感動と技巧―国語での俳句教育についての一提言～（講演）	単独	平成 29 年 7 月	語り合う文学教育の会（於奈良教育大学附属小学校	小学校国語科では俳句は伝統的な言語文化の要項に含まれ、小学校三年生では俳句に親しむこと、小学校五年生で創作することが学習内容に含まれている。俳句は座の文学であり、もとは複数人で作る、世界にも類を見ない文芸形態である。句会では互いの句を尊重し、その詠もうとした真意をくみ取ろうとする。俳句で自分の思いを伝えることも大事ではあるが、何よりも他者の作った句とその思いを受け止めようとするところに句会の良さがある。本講演では、大学での講義の実践報告を通じて、俳句、特に句会を学級づくりに利用することを提案した。
8 伏見院の和歌における強調の句表現について	単独	平成 29 年 12 月	和歌文学会関西例会（於大阪市立大学）	伏見院の和歌には、「これ」や「それ」など指示詞で強い句切れを起こしながら、あとに続く叙述部分を受ける用法のものが散見する。『万葉集』や和漢混交文には、漢文訓読からの影響で強調表現としての「それ」の用例が見られ、伏見院も『万葉集』を通して摂取したと考えられる。また、強調の意で用いられる指示詞「これ」の句表現は、伏見院の場合、「～は（ぞ）これ、…」という話型で用いられるが、これも院政期以降に増加する漢文訓読調の表現である。和歌においては、新古今歌人に用例が散見し、伏見院はこの時代の実験的な表現を通して摂取したと考えられる。漢文訓読調の強調表現は、声調の強さを好んだ伏見院の個人的な志向によって摂取されたと考えられる。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　山　田　　均

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	社会科教育法・教科社会・地域と学校との連携

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 (1) 目標と指導と評価を一体化する授業づくりの実践	平成 24 年 4 月～平成 29 年 3 月	学校評価において、授業づくりについての評価を特に力を入れて実践した。各教員の授業を参観しその後面談指導し、再度授業について検討会を行うなど校内授業研究を活化させた。 （王寺南小学校現職教育の取組としての実践） 学校評価において、授業づくりについての評価を特に力を入れて実践した。各教員の授業を参観しその後面談指導し、再度授業について検討会を行うなど校内授業研究を活性化させた。 （王寺南小学校現職教育の取組としての実践）
2　作成した教科書，教材 (1)「学校を地域に開く　情報発信と施設開放」 （奈良県小・中学校長会）	平成 24 年 3 月	地域に向けた情報発信や学校施設の開放、学校支援ボランティアの導入など開かれた学校づくりが進んでいるが継続する条件を述べた。奈良学園大学人間教育学部の「特別活動の指導法」のゲストティチャーとしての授業で活用した。
(2)「小学社会 6 年上」文部科学省検定済教科書小学社会科用（日本文教出版）	平成 26 年 4 月	平成 27 年度版小学社会科教科用図書　著作者 池野範男、的場正美、安野功　他 32 名 Ｂ５版　全８冊
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学人間教育学部でゲストティチャーとして「特別活動の指導法」指導の際の学生の授業アンケート	平成 28 年 7 月	特別活動（初等）で学校行事に焦点をあて、目標と内容と指導する際の留意点等を話した。学校の行事 1 年間を視覚的に提示した。学生の満足度は 85%。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)教育実習生指導と学校ボランティアの大学生指導	昭和 59 年 6 月～平成 29 年 3 月	奈良県黒滝村立黒滝東小学校・奈良県吉野郡大淀町立大淀北野小学校・奈良県北葛城郡王寺町立王寺南小学校・奈良県磯城郡田原本町立田原本小学校田原本町立田原本小学校で毎年教育実習生を指導した。特に社会科の指導を例にとり指導案や児童理解の視点等を指導した。その後は、管理職としての立場から統括的に指導を行った。
(2) 奈良県小学校社会科研究大会 3 年生分科会指導助言 テーマ 「社会的な見方･考え方を深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」 大会会場：奈良県田原本町立田原本小学校	平成 25 年 11 月	「古くから続く地域の祭り」を題材に、祭りに込められている人々の願いや祭りを保存する人々の思いの理解を重視し、児童自身の祭りへの参加について考えさせる実践報告について、人々の営みや願いについて、具体的な事実認識をした上で、共感的に理解することは地域の一員としての意識を育てることにつながるということなどについて助言した。
(3)全国小学校社会科研究協議会研究大会 5 年生分科会指導助言 テーマ 「社会的な見方･考え方を深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」 第 3 会場：奈良県南風原町立翔南小学校	平成 27 年 2 月	「工業の発達と私たちのくらし」を題材に、教材の在り方「ねりあい（児童一人一人の見方･考え方を交流し合う場面での話し合い）」を重視した実践について、社会的な事象について確かな根拠に基づき自分なりの考えを持つことが、社会参画の基礎となる力であることなどについて助言した。

(4)近畿小学校長協議会研究大会滋賀大会 分科会指導助言 テーマ 「新しい時代を主体的に生きる子どもを育む教育環境・教育条件」 会場：大津プリンスホテル	平成 27 年 11 月	第６分科会「教育環境・教育条件」指導助言 学校支援ボランティアの活用を図りながら、校舎の修繕や掃除などを通じ児童が安心して勉学に励める教育環境の実現を図ったという発表について、学校と地域がウイン･ウインの関係になるように校長が心がけることの重要性や地域に開かれた学校にするために情報発信、施設開放、地域の人材活用の三点がポイントなること等について助言した。
(5)近畿小学校社会科教育研究協議会大阪大会 ３学年課題研究分科会指導助言 テーマ 「社会に参画する力の形成を図る」 大会会場：大阪市立聖和小学校	平成 27 年 11 月	「昔のくらし」を題材に、道具のうつりかわりの背景には、よりよい暮らしの実現を願う人々の思いあり、そして、人々の願いが現在の暮らしに結びついているということを理解することを重視した実践発表であった。社会参画の基礎として、小学校では、社会的事象についての知識の習得、世の中全体で考えなければならないことの存在に気付くこと、そして、学習した社会的事象について関心を持ち続けることが重要であることを助言した。
(6) 奈良県小学校社会科研究大会 3 年生分科会指導助言 テーマ 「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」	平成 28 年 11 月	「くらしの変化」を題材に、道具のうつりかわりの背景には、よりよい暮らしの実現を願う人々の思いあり、そして、人々の願いが現在の暮らしに結びついているということを理解することを重視した実践発表であった。社会参画の基礎として、小学校では、社会的事象についての知識の習得、学習したことを基に自分自身の考えをもつことその考えを話し合い、より深め合う重要性を助言した。
(7) 大和郡山市立片桐小学校授業研究会 校内研修指導助言 テーマ 「生き生きと自ら学ぶ子どもの育成　～自分の思いを表現し，伝え合い，ひろげる力をつける～」	平成 29 年 7 月	「発表する」場面となると苦手意識から十分に話し合い活動に参加できないという児童の実態をふまえ「生き生きと自ら学ぶ子どもの育成～自分の思いを表現し，伝え合い，ひろげる力をつける～」という研究主題の下「国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて，児童の言語活動を充実すること。」という共通認識で授業実践に取り組んでいる学校に対して、次期学習指導要領の趣旨をふまえ、「主体的・対話的で深い学び」「何ができるようになるか」の明確化等の視点から助言した。
(8) 奈良市富雄第三小中学校第 55 回全国小学校社会科研究協議会研究大会会場校としての授業公開並びに授業研究会提案 授業構想、指導案作成、研究発表等に関する指導 テーマ 「豊かな心をもち、生き生きと学び合う児童･生徒の育成　－聴き合い　つながり合い　学び合う授業の創造－」	平成 29 年 7 月、8 月	学校の研究主題である「豊かな心をもち、生き生きと学び合う児童･生徒の育成　　－聴き合い　つながり合い　学び合う授業の創造－」の実現に向けて、指導案の立案、授業構想の検討、研究紀要の作成、研究発表等にかかわり指導、助言を行った。
(9)第 55 回全国小学校社会科研究協議会研究大会 学年別授業研究会(3 年生部会)並びに課題別研究会(3 年生部会)指導助言 テーマ 「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習　－人の営みに学び、ねり合う学習を通して－」	平成 29 年 10 月	「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習　－人の営みに学び、ねり合う学習を通して－」の大会の研究テーマに基づき、社会の形成に参画する力を養うために必要なこととして、社会を支えている人との出会い、そしてその人の営みに対しての共感的な理解が重要であることとその営みが自分自身の生活と大きなかかわりがあることへの気付きを生み出すための学習、とりわけ、対話的な学びにもつながる字十つに依拠した考えを基に話し合いを深めるねり合いの重要性について指導した。

(10)王寺町立王寺北小学校授業研究会 校内研修指導助言 テーマ 「アクティブラーニング」	平成 29 年 11 月	次期学習指導要領でも提案されている「主体的、対話的で深い学び」いわゆるアクティブラーニングについて学習指導要領に示されている改訂のポイントや内容を中心に、アクティブラーニングについて一定の学習方法を取り入れることが実現の十分条件ではないということについて理解を図るよう指導した。特に、主体的な学習、対話的な学習は児童主体の学習が前提であり、これまで以上に教材研究や児童理解を深めることが必要であることを説明した。
(11)生駒市家庭教育講座講師 テーマ 「子ども成長と環境　－想像してみよう　子どもたちが大人になるころの世の中－」	平成 29 年 11 月	少子高齢化の急速な進展や人生 100 年時代の到来、ＡＩの進歩などにより、子どもたちが迎えるであろう未来は私たち大人が経験したこともない、想像を遥かに超える社会になっていると未来予測を研究している学者たちが提唱している。そのような未来予測を踏まえ、いったいどのような力を子どもたちに身に付けさせればよいのか。次期学習指導要領では未来予測を視野に入れた改訂がなされている。そのような予想される未来社会や文部科学省が考える子どもたちへの教育の方向性、そしてそれらを踏まえた家庭での教育について様々な数値を元に考えていこうという提起を行った。
５　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 ・中学校教諭一級普通免許(社会) ・高等学校教諭二級普通免許(社会) ・学芸員資格 ・小学校教諭二級普通免許 ・小学校教諭一種免許	 昭和 55 年 3 月 昭和 55 年 3 月 昭和 55 年 3 月 昭和 56 年 3 月 平成 6 年 6 月	 昭 54 中 1 普め第 4405 号　京都府教育委員会 昭 54 高 2 普め第 4519 号　京都府教育委員会 同博第 94 号　同志社大学 昭 55 小 2 普第 397 号　奈良県教育委員会 平 6 小 1 種第 47 号　奈良県教育委員会
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 奈良県小学校教科等研究会社会科部会 昭和 62 年度　専門委員 平成 5 年度～11 年度　３年生部会部長 平成 23 年度～28 年度　理事・指導部	昭和 62 年 4 月～平成 29 年 3 月	昭和 23 年 6 月に設置された「奈良県作業単元基底設定委員会」を母体とし、昭和 30 年に「奈良県社会科教育研究協議会」を設立した。その後、奈良県では各教科等の研究団体を一つに統合して運営することとしたため、「奈良県小学校教科等研究会社会科部会」となり、奈良県の小学校社会科指導の牽引車としての役割を担った。
(2) 公益社団法人日本教育会会員 平成 25、26 年度　奈良県支部評議員 平成 27 年度　　奈良県支部理事	昭和 62 年 4 月～平成 29 年 3 月	日本の文化と伝統を重んじ、かつ、時代の要請に応ずる教育の確立を目指し、教育関係団体並びに広く教育に関心をもつ者の協力の下に教育の調査研究活動及びその普及活動等を行卯ことを通して、我が国の教育の正常にして健全な発展に寄与することを目的とした公益社団法人。
(3) 奈良県北方領土問題教育者会議副委員長	平成 23 年 4 月～平成 29 年 3 月	これからの我が国を担う児童生徒が、我が国の領土について正しく理解することが重要であるという観点に立ち、北方領土教育の充実・強化を図るため独立行政法人北方領土問題対策協会内に平成 15 年から設置された組織。

(4) 奈良県王寺町子ども・子育て会議委員	平成 25 年 3 月～平成 27 年 3 月	王寺町が安心して子どもを産み育てることができる町づくりを進めるために策定する「王寺町子ども・子育て支援事業計画」に対する諮問を受け、その目的や内容等について検討、答申を行うことを目的(座長　小西藤司白鳳短期大学教授)
(5) 公益法人奈良県学校給食会評議員	平成 26 年 4 月～平成 28 年 6 月	学校給食に対し、学校給食用物資の安定供給及び学校給食の普及充実に関する事業並びに学校給食を通じた食育の支援を行うことを目的した公益法人。
(6) 奈良県王寺町教育ビジョン策定懇話会委員	平成 26 年 9 月～平成 27 年 12 月	今後 10 年間にわたる王寺町の教育振興計画策定するための機関（座長　吉田明史奈良学園大学奈良文化女子短期大学部学長）
(7) 奈良県子どもの貧困対策会議委員	平成 27 年 4 月～平成 29 年 3 月	貧困状態にある子どもの支援の在り方についての検討行うために設置された会議（座長　神原文子神戸学院大学教授）
(8) 奈良県人権教育研究会副会長	平成 27 年 5 月～平成 28 年 5 月	部落問題をわが国の人権問題の重要な課題として捉え、その解決を図る取組を通して、人権尊重の精神を涵養する教育研究推進を目的とした研究団体
(9) 奈良県放課後児童対策推進委員会委員長職務代理者	平成 27 年 10 月～平成 29 年 3 月	放課後児童クラブと放課後子ども教室の一体的な運営について検討し、放課後の児童対策の推進を図ることを目的として設置された委員会（委員長　岡田龍樹天理大学教授）
(10) 奈良県いじめ防止基本方針検討協議会委員	平成 28 年 2 月～平成 29 年 3 月	奈良県いじめ防止基本方針策定のための委員会（座長森田洋司大阪市立大学名誉教授）
(11) 奈良県社会教育委員	平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月	社会教育法に基づいて設置され、県教育委員会の諮問に応じ、社会教育に関して意見を述べる社会教育委員会議の委員
(12) 奈良県ＮＩＥ推進協議会副会長	平成 28 年 6 月～平成 29 年 6 月	奈良県内の新聞界と教育界が協力し、新聞を活用する社会科を中心とした各教科の学習を普及させることにより、児童･生徒の学習意欲を高め、情報活用能力を啓発することなどを目的とした協議会(会長　小柳和喜雄奈良教育大学教職大学院教授)
(13) 奈良県ユニセフ協会評議員	平成 28 年 5 月～平成 29 年 5 月	子どもたちの命と健康を守るために活動しているユニセフの日本ユニセフ協会と協力協定を締結し奈良県におけるユニセフ活動の推進を図ることを目的とした協会（会長　甘利治夫奈良新聞社代表取締役）
(14) 次世代教員養成プログラム策定委員会委員	平成 28 年 10 月～平成 29 年 3 月	奈良県の教員を志望する学生・生徒に、奈良県教育を担う資質・能力を育成することを目的として、次世代教員養成プログラムの内容について協議することを目的とした委員会。会長等は置かず、奈良教育大学（副学長、事務局長等）奈良県教育委員会事務局（教育次長、政策推進室課長補佐等）奈良県小学校長会会長をメンバーとしている

（15）奈良県公立小学校長会本部委員 平成 25，26 年度会計 平成 27 年度　副会長 平成 28 年度　会長	平成 25 年 5 月～平成 29 年 5 月	小学校教育の充実と発展を目的に、奈良県公立小学校長により組織された団体。研究大会や定例の役員会な度を通じて小学校経営についての資質の向上を図り、県教育委員会との協議を通し手今日的な教育課題の強雨を図るなど野活動を行っている。また、近畿各府県の校長会とは近畿小学校長会協議会で，全国の校長会とは全国連合小学校長会に加盟し連携を図っている。
（16）王寺町いじめ対策調査委員会委員	平成 29 年 4 月～現在に至る	いじめ防止対策推進法に規定に基づき、いじめの防止等のための対策に関する調査研究、いじめ防止対策事業の実効性の検証、重大事態にかかる事実関係を明確にするための調査及び未然防止のために必要な措置についての提言等を行う委員会。
（17）奈良県教育振興会理事	平成 29 年 4 月～現在に至る	青少年問題に対する県民の関心と理解を深め、青少年健全育成のための正しい世論の形成につとめることや人間形成における家庭の役割を再認識し、家庭教育のいっそうの改善・充実・振興をはかること、青少年教育に関する保護者並びに教職員の研修活動に協力し、その援助につとめることなどを目的に 1980 年(昭和５５年)４月に設立された教育団体。事務局を奈良県総合庁舎内に置く。
（18）公益財団法人日本教育公務員弘済会奈良支部監査	平成 29 年 4 月～現在に至る	将来社会に貢献し得る有為の人材を育成するため、奈良県在住の子のうち、優秀な学徒に対し奨学金を貸与、教育一般、特に有益な研究に対する助成及び教育関係者の福祉向上をはかり、もって奈良県における人材の養成並びに社会教育文化の向上発展に寄与することを目的とする公益財団法人
（19）王寺町義務教育学校推進委員会　副委員長	平成 29 年 5 月～現在に至る	平成 34 年度開校予定の町立義務教育学校の教育課程、校舎建築、その他学校運営全般について、町、町教育委員会からの諮問を受け，それに対して協議し、検討を加えて、提言等を行う委員会。
４　その他 特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1「学校を地域に開く　情報発信と施設開放」	単著	平成 28 年 9 月	平成 23 年度奈良県小・中学校長会研究紀要	作成・編集：奈良県小学校校長会・中学校校長会 地域に向けた情報発信や学校施設の開放、学校支援ボランティアの導入など開かれた学校づくりが進んでいるが継続するには、学校と地域の双方にとってウィン・ウィンの関係が必要である。子どもの成長を願って協力し、地域に信頼され愛される学校を目指し以下のことを提案した。 （担当 p46～p48）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 生活科と社会科の連携への一考察 －防災教育を視点に－	共著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀要　第 5 集	日本の国土は災害大国でるというリスクを述べるとともに、反面、居住する人々の危機意識は低いことを内閣府の調査を基に論じた。特に防災教育の目的と義務教育の防災教育に果たす役割について述べた。生活科から社会科への学習指導要領の連続性と「自助・共助・公助」の考えを位置づけ、現在の教科書を分析した。生活科の学習は「自助」中心に「共助」を学ぶことであり、社会科では、「共助+公助」の公民的資質として災害についての知識獲得意欲を中心に据えている。また、命を守る一時避難に有効な空間的認知の獲得に社会科は貢献していることを論じた。 共著者：松田智子、山田均 担当：論文後半の社会科と防災教育との関連の部分 （p146～p150）単著
3 社会科指導における地域の教材化	単著	平成 28 年 12 月	日本人間教育学会	社会科は戦後の民主主義教育の中核をなすものとして設立された。その目的は青少年に社会生活を理解させ、青少年がより良い社会を創造する能力と意欲を持つことである。この目的を達成するためには、地域を学ぶことを大切にしなければならない。現在、次期学習指導要領の検討において「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が重視されている。それは未来の創り手となるために必要な資質・能力の育成ということが重視されているからである。そこで小学校社会科教育において社会的事象を自分ごととして捉え、具体的に観察・調査を行うことが可能であり、背後の人の営みや願いが見える地域教材を活用することが極めて重要であると考える。そして、改めて子供たちに未来の創り手となるための資質・能力を育てる上で、地域を取り上げることの有効性について考察した。（p75～p83）
4 生活者としての基礎的な能力の育成をめざす生活科	共著	平成 29 年 11 月	日本人間教育学会大会第 3 回　研究発表要旨集	1989 年（平成元年）に生活科が誕生して間もなく 30 年を迎える。生活科設置は、小学校教育において、低学年児童がより主体的に学習に取り組み、その活動の過程で友達や地域の人々、自然の事物などと対話し、自分の生活について考えるとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付け、自立への基礎を養っていくことにその意義がある。これはまさに、今次の学習指導要領改訂の趣旨である「主体的・対話的で深い学び」が位置付いていると言える。そこで、「主体的・対話的で深い学び」を成立させる要因として教師の支援に着目し、「学習内容を構造的にとらえる力」と「教材を開発する力」に視点を当てて具体的な実践を基に考察した。　共著者：中道奈都美、山田均（p14～p15）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5「方向と現状の共通理解が学校を強くする」	単著	平成 29 年 3 月	別冊教職研修　教育開発研究所	いじめ・不登校などの課題や特別支援教育の充実への対応、貧困問題への対応など、学校の抱える課題が複雑化・多様化し、学校に求められる役割が拡大している。また、中教審からは「校長のリーダーシップの下、カリキュラム、日々の教育活動、学校の資源が一体的にマネジメントされ、教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして能力を発揮し、子供たちに必要な資質・能力を確実に身に付けさせることができる学校」いわゆる「チーム学校」の推進が答申されている。これまでから「鍋蓋型」と言われる学校組織のありようを改善し、校長のリーダーシップと情報等の教職員間の双方向的な共有し、組織文化としての同僚性等を重視する協働化による学校組織マネジメント図るため、学校通信の活用を通した取組について報告した。（p60～p61）
6 社会科教育における見方・考え方とは　ー見方・考え方を育てる社会科から見方・考え方を働かせる社会科へー	単著	平成 30 年 2 月	奈良学園大学紀要 第 8 集	平成 29 年 3 月告示の学習指導要領に示された「見方・考え方」の捉えの変容が社会科教育に関係する者に与えたインパクトは大きいものがある。平成 29 年 10 月に開催された全国社会科教育学会第 66 回研究大会では「『見方・考え方』論で社会科は変わるのか？」というシンポジウムが開催され、社会的な見方・考え方は社会科の教科としてのあり方を見直すものとなり得るのか議論している。そこで、社会科教育は「見方・考え方」の捉えとともに変容していくのか、考察した。（p109～p117）
7「これからの社会科教育～資質・能力を全面に～」	単著	平成 30 年 3 月	やまと　（奈良県教育振興会）	平成 29 年 3 月に告示された次期小学校学習指導要領の社会科について、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る上でポイントなる点や改訂された主な内容について考察した。（p8～p11）
（その他） 特記事項なし				

教 育 研 究 業 績 書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　瀧明　知惠子

研　究　分　野	研 究 内 容 の キーワード
教育学	音楽科教育、声楽、学校教育、教員養成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)教科音楽において主体性・創造力を育むグループ発表	平成 25 年 4 月～7 月	幼・保採用試験の課題曲であった数曲を練習し、現場で即、生かせるよう「振付をつけた歌の発表」を課題とした。5 人グループで振付を創作し主体的に練習を進め「発表の審査」も課題の一つにした。工夫点や改善点など、活発ない意見交流を促すしことで互いに高めあい、教師の指導助言にもしっかり耳を傾けた。今後の創作活動に活かせる活動となった。武庫川女子大学の実践
2)教科音楽において授業内容の定着を図る取り組み	平成 25 年 4 月～7 月	楽典の知識理解が全体的に低い状況が見られたため、毎時間始めの 10 分、反復練習を取り入れるとともに、基本事項を精選し、繰り返し教えることで、まとめのテストでは 60%未満の点数は 0.5%の学生にとどまった。集中して学ぶ姿勢が実力をつけることにつながった。 武庫川女子大学文学部教育学科「教科音楽」
3）教科音楽において自己評価を生かした授業づくり	平成 25 年 4 月～7 月	授業の最後毎回自己評価を記載させている。「授業内容・力が発揮できたところ・できなかったところを文章表記・最後にＡ～Ｅの評価」自分自身の取り組みを確認させ、授業への意欲付となっている。どの学生も熱心に書き、次回のより良い授業づくりに生かしている。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」での実践。
4）音楽科指導法において、アウトリーチを活用した授業づくり	平成 25 年 9 月～26 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において、限られた授業時間の中で、音楽授業をより充実させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを学生に考えさせる。地域のホール・専門家・学校がつながりあうことで、音楽科教育はより豊かになる。そこで、実際、地域の邦楽活動家に、授業参加を依頼し、アウトリーチを活用した授業の実践を行う。学生にアウトリーチを活用した授業づくりについて学ばせる。
5）グループワークによるピアノ技能の向上	平成 26 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「器楽演習Ⅰ」において 30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスンにグループレッスンの時間も取り入れる。特に初見演奏の際に、グループで行うことにより、比較的早く曲の全体が体得できる。また、階名読みは宿題にするが、読み辛い生徒はグループの教えあいにより、比較的速くできるようになる。仲間意識が高まるとともに、ピアノの技能も初心者の学生にスムーズに身につけさせることができた。

6) パターン化した歌唱法の修得と発達段階に応じた指導法の開発	平成 26 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「器楽演習Ⅲ」において 30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた教育内容と指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスン・連弾・合唱のオムニバス形式での授業において、合唱を受け持つ。呼吸法、発声法をパターン化し、毎回繰り返すことにより、少しずつ音域・音量等の力をつけさせる。パターンの応用を各校種学年に応じて考えさせ、指導者となったときの備えとさせた。合唱では 2 重唱、3 重唱、独唱にも挑戦させ、個性特性を発揮させるとともに技能を伸長する。
7) アクティブラーニングを活用した指導案づくり・授業力の向上	平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において 4～5 名のグループ分けを行い、模擬授業の指導案作成・討議・実践準備を行わせ各グループに、模擬授業を実施させる。特に導入部に視点を当て、いかに興味関心を持たせる授業づくりをするかを考えさせる。協力しあうことで、指導案・授業力の向上を図ることができた。
8) 発表会形式小テストの積み上げによるピアノの技能向上	平成 27 年 4 月～平成 27 年 7 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」において、集団で高め合う時間とグループレッスン・個人の実技を高める時間を設定し、意欲を喚起する。初めてピアノに取り組む学生が約 80%だったが、どの学生にもバイエル 90～100 番の技能をつけるために、3 回の発表会形式による実技テストを行い、全員 103 番を弾けるようになった。
9) グループワークと集団での学びにおける発表と評価、及び福祉施設での音楽活動体験	平成 27 年 9 月～平成 28 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」において、集団で高め合う時間と個人の実技を高める時間を設定し、修得したことを仲間に教えたり、発表したり、批評し合うことによって技能（ピアノ演奏や弾き歌い）の修得の深化が見られた。成果発表を、地域の福祉施設にて、音楽ボラティアとして実施する。大変喜んでいただき自信をつけ、意欲を喚起することにつながった。
10) アクティブラーニングを活用した器楽アンサンブルの創作・発表・評価で実践力の育み	平成 28 年 4 月～7 月	武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」においてアクティブラーニングを活用し、器楽アンサンブルの創作・楽譜作成と発表を行わせる。使用する楽器演奏の仕方から調べさせ、幼児・園児が楽しめるアンサンブルの楽譜を作成し、発表までを協力し行う。互いの発表を評価し意見交流の中で、言語活動を活発に行わせ、お互いが切磋琢磨しながら、より良い教材研究づくり、指導法の力をつけることができた。
11) 成果発表を 3 段階設け、人前での演奏力をつけ、福祉施設での音楽活動 の実践。	平成 28 年 9 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」において、集団で発声・歌唱法を学び、個人・グループで伴奏法や弾き歌いを学ぶ。その成果発表を 3 回の小テストとして実施するとともに、福祉施設での音楽活動体験を行う。人前での実技発表で力をつけ、お年寄りに喜んでいただくことで、大変励みになっている。社会貢献につながる活動である。
12) 器楽演習における基本的技能の演習から、人前での演奏力をつけ、演奏できる喜びと共に、周りの人に楽しんでもらえる喜びを体感させる実践。	平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月	器楽演習Ⅰにおいては集団で高め合う時間と個人の実技を高める時間を設定し意欲を喚起し、ほぼ全員 103 番を弾けるようになった。器楽演習Ⅱではｱﾙｸﾞﾐｭｰ、弾き歌いの上達を目指し、まとめの活動として福祉施設・地域のつどいでの音楽活動を行う。取り組みの様子は奈良新聞に掲載される。
2　作成した教科書、教材 1) 若い教師に伝えたいこと[再掲] ～範を示せる教師であれ～週刊教育ＰＲＯ	平成 24 年 3 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として教育実習生や新任教員へ教育活動の核となる教科経営、学級経営について要点をまとめた資料。後の武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」において活用する。

2）新任教師に伝えたいこと[再掲] ～生徒指導の心得～週刊教育ＰＲＯ	平成 24 年 6 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、教師の心構え、生徒指導の在り方についてまとめた資料。校長として教育実習生や新任教員の指導に活用した。
3）新学習指導要領における音楽科教育 ～音楽教育に献身してきて思うこと～　教育フォーラム 50 号[再掲]	平成 24 年 8 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、新学習指導要領における音楽科教育のあり方、可能性（歌唱・器楽指導等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の武庫川女子大学文学部教育学科「教科音楽」の中で活用する。
4）新学習指導要領における、音楽科授業への提案[再掲] ―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む　　週刊教育ＰＲＯ	平成 24 年 9 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として新学習指導要領における音楽科教育の可能性（歌唱・ピアノ伴奏法・弾き歌い等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」、武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
5)音楽科を核とした合唱活動の広がり週刊教育ＰＲＯ[再掲]	平成 24 年 10 月	西宮市立浜甲子園中学校の校長として、学校における合唱活動をいかに広げ、充実させるか（歌唱・ピアノ伴奏等）についてまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。後の武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
6)「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営　～小規模校の特色を生かして～」週 刊教育ＰＲＯ[再掲]	平成 25 年 1 月	武庫川女子大学文学部教育学科において、学校教育のあり方について、音楽教育の年間計画・指導案のたて方、生活・学習 規律の指導の仕方、音楽行事への準備の仕方・注意点などについてまとめた資料。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、後の奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅰ」の中で活用する。また、教育実習生指導においても活用する。
7)「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著[再掲]	平成 25 年 3 月	武庫川女子大学文学部教育学科において、音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著執筆する。 生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、学年全体で活動できる「合唱劇の取り組み」についても積極的に授業に取り入れていく。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏法、様々な器楽演奏指導等、新教育課程における指導法を創意工夫する。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。
8)「初等科音楽基本の内容と指導法～ここがポイント～」単著　［再掲］	平成 27 年 5 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「初等科音楽基本の内容と指導法～ここがポイント～」を単著執筆する。保育士、幼稚園・小学校教諭が音楽指導する際に必要な基礎基本内容と指導法をまとめる。「小学校学習指導要領音楽編」、「幼稚園教育要領・保育所保育指針　表現」について解説する。また、各学年、年齢に応じた指導内容や、発達段階に応じた歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞の指導法などを実践例を示しながらまとめる。資料には楽典の基本事項をわかりやすく示す。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ」、武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、の中で活用する。

9)「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ　～歌唱活動に注目して～」単著　[再掲] 教育フォーラム 56 号[再掲]	平成 27 年 8 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～歌唱活動に注目して～」を執筆する。「イタリアの歌唱活動をはじめとする音楽科教育に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法を示す。また、音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、音楽科教育を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）を紹介する。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ（鍵盤楽器)」の中で活用する。
10)「初等科・中等科音楽教育基礎と指導法～歌唱・合唱の系統性に視点をおいて～」単著　[再掲]	平成 28 年 4 月	これまでの教育活動を見直し、「キー・コンピテンシー」や「21 世紀型スキル」などを視野にいれ、初等科・中等科音楽科教育の目標・内容について基本をおさえ、指導・支援にあたれるよう示している。指導計画の作成の仕方・評価を生かした授業づくりについて実例を示して述べている。指導法については、発達特性の基本的な考え方、発達段階に対応した指導・支援方法のポイントについて述べ、特に歌唱（民謡や日本の伝統的な歌唱法を含む）を中心として、理論的な意味付けを明確にし、共通教材について留意し具体的な実践の展開に結びつけていくよう述べている。 B5 判
11)「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察　～中学校における実践から～[再掲]	平成 28 年 5 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察　～中学校における実践から～」を執筆する。「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』の結果分析から導き出した５つの視点を紹介する。それらを中学校における「いのち」に関わる授業実践において活用した様子を報告する。実践研究からを活かし作成した、中学校における「いのちの教育」のカリキュラムを示す。学生に「いのちの教育」の大切さを学びとらせる。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「教職入門 B（中等)」の中で活用する。
12)「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～創造性・主体性の育みを視点として～」(共著)[再掲]	平成 28 年 8 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ～創造性・主体性の育みを視点として～」次世代に生きる子供たちには「創造性をめぐって」や「コミュニケーションと ICT」を重点課題とした教育が望まれている。創造性や個性・特性を重視しているイタリアにおける、ICT を活用し、様々な教科（英語・国語・体育・道徳など）と音楽を融合させた授業や、総合的な表現力の向上を目指す音楽科を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）、地域の音楽文化やアウトリーチを取り入れた授業などに示唆を導き出す。より良い授業の創造に活かしていく。武庫川女子大学文学部教育学科「音楽科指導法」の中で活用する。奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「器楽演習Ⅱ（鍵盤楽器)」の中で活用する。
３ 教育上の能力に関する大学等の評価		
1)武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として採用される際の、文学学部長及び学科長の評価。	平成 25 年 4 月～現在に至る	武庫川女子大学文学部教育学科の非常勤講師として、「教育音楽」「初等音楽科指導法」において教鞭をとる。採用に対し声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。
2)奈良学園大学の講師（音楽科教育）として、器楽演習Ⅰ・Ⅱ、器楽・歌唱法担当者として採用される際の、学部長の評価。	平成 26 年 4 月	奈良学園大学人間教育学部の講師として、「器楽演習Ⅰ・Ⅱ」「器楽・合唱法」において教鞭をとる。採用に対し、長らくの中学校現場の経験、声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。

3) 武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として、初等音楽科指導法・器楽演習Ⅰ・Ⅱの担当者としての学生の評価	平成 27 年 2 月	学生アンケートより、初等音楽科指導法では「声の大きさ、話し方、板書は適切か・・・強くそう思う 96%」意見として、「経験談を話してくださり、私もがんばろうと思った」、器楽演習Ⅰ・Ⅱでは「私語を少なくするよう適切な指導・・・90%」、意見として、「毎回できなかったことを何度も指導していただき、家でも頑張れた」などの評価を得た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)西宮市立音楽連盟副会長として研究授業について指導助言と実技指導を行う。	平成19年度～平成24年度	西宮市立西宮浜中学校教頭・西宮市立浜甲子園中学校教頭、西宮市立浜甲子園中学校校長として、年 2 回研究授業を参観し、研究協議において指導助言を行うとともに、新教育課程における音楽科のあり方について、発声法・パートリーダーの育成等について指導助言を行う。 西宮市立浜脇中学校　合唱指導「涙を超えて」 西宮市立上ヶ原中学校　合唱指導「マイバラード」観点別評価の研究会も行う。 西宮市立平木中学校　鑑賞指導「運命」（新任教員研究授業） 西宮市立瓦木中学校　器楽指導（アルトリコーダー） 西宮市立真砂中学校　鑑賞指導「ジャズ演奏」 西宮市立鳴尾中学校　合唱指導「夢の世界を」他
2) 兵庫県教育委員会より新学習指導要領（音楽科）伝達講師に任命され、文部科学省の伝達講習会を受け、県下各地の講師を務めた。	平成20年8月	西宮市立浜甲子園中学校教頭として文部科学省の伝達講習会においては、新指導要領の特色となる所など、注意して聴き取る。音楽科改訂の要点として．内容の構成の改善、「共通事項」の新設、歌唱教材の提示、我が国の伝統的な歌唱の充実、和楽器の指導、創作の指導内容の焦点化・明確化、鑑賞領域の改善が挙げられるが、質問時間を有効に活用し、疑問点、もう少し聞きたいところなど積極的に質問した。阪神音楽科研究会では阪神間の中学校音楽教諭 50 名近くが熱心な態度で聞き入った。できる限り、例など示しながら、また、 その趣旨を明確にしながら伝達し、質疑応答の時間を設け、その後、Q&A の資料も作成した。西宮市でも実施し、より理解が深められたのではないかと思う。その後も、若い教員のために勉強会を続け、音楽科における新指導要領にそった授業実施に貢献することができた。
3）西宮市立中学校校長会において、市内の教育実習の担当として教職の基礎についてまとめ、各校の実習が円滑に行われるよう貢献する。	平成22年度～平成24年度	西宮市立浜甲子園中学校校長として市内の教育実習が円滑に行われるよう貢献すると共に、教育実習生が充実した実習生活が送れるよう、現任校において教育方針・活動についてや教職の心がまえについて指導する。最終日は成果と課題について報告を受け、今後の指導助言を行う。
4)西宮市人権教育研究会において講師を務める。	平成22年11月	西宮市立浜甲子園中学校校長として西宮市立高須中学校・１～３年研究授業、西宮市人権教育研究協議会にて指導助言を行う。
5)西宮市人権教育研究会において講師を務める。	平成23年10月	西宮市立浜甲子園中学校校長として、西宮市立鳴尾南中学校・１～３年研究授業、西宮市人権教育研究協議会にて指導助言を行う。
6）大阪府教職員自主研修支援事業 大学オープン講座（夏季講座）の講師を務める。	平成26年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、講演テーマ＜心を育む歌唱・合唱指導　～歌声ひびく学級づくり～＞講演内容は①音楽行事と学級指導　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイス　③心と歌声を合わせ美しい音楽表現を目指す学級づくり、を行う。

7) 王寺町主催＜り～べるカレッジ＞における講師を務める	平成26年10月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、講演テーマ＜日本の心の歌　～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞　内容は①日本の心の歌　「童謡・唱歌」の歴史、作詞者・作曲者についてや、曲の内容などの講話　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイスを行う。
8) 平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 における「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」授業実践・研究協議での講師を務める。	平成26年10月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、「いのちの教育」において、「心についてのアンケート」を実施するとともに、兵庫県道徳副読本「心かがやく」より『語りかける目』の実践研究など、授業研究の指導案作成・研究授業における指導助言を行う。
9)三宅町教育委員会社会教育部より以来を受け涯学習推進講座において講師を務める	平成27年5月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、歌い継ぐ日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～」をテーマに、講演と独唱「朧月夜」他。出席者への歌唱指導、指揮を行う。約 60 名の参加者があった。
10)音楽研究授業、研究協議において講師を務める。	平成27年6月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、奈良学園小学校４年生の音楽研究授業参観、研究主題のメタ認知を視点とした研究協議、また、アウトリーチを活用した「和の音楽」に関わる研究協議を行う。
11) 大阪府教職員自主研修支援事業 大学オープン講座（夏季講座）の講師を務める	平成27年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、「心を育む歌唱・合唱指導そのⅡ　～歌声ひびく学級づくり～」をテーマに①呼吸法や発声法、発達段階に応じた歌声づくり、②心と歌声を合わせ美しい音楽表現、③合唱指揮法の基本についてなど。
12) イタリア（ローマ）での音楽科教育研究会における音楽活動	平成27年9月	音楽科教育研究交流を行っている Scuola Primaria“Ermenegildo Pistelli”ピステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学）の小学２年生・4 年生の研究授業において、日本の心の歌である童謡・唱歌・わらべうたを紹介する。パワーポイントでのプレゼンテーションを行い、歌を披露するとともに、遊び方を教え、ローマ字での日本の歌を、共に歌うことができた。日本の心の歌の良さを伝え、日伊の親善に貢献する。
13)合唱コンクールに向けたプレ発表会及び小中交流会における指導・講評を行う。)、	平成27年10月	西宮市立大社中学校において、全校合唱コンクールに向けたプレ発表会が苦楽園小学校 6 年生を招き行われる。中学生 3 年 300 名の学年合唱、7 クラスの学級合唱が行われ、小学生は熱心に聴きいった。学年・学級合唱における発声・発音・曲の仕上げ方などの指導を行う。音楽科教諭・校長への中学校における音楽科教育について聴き取り調査を行う。
14)和の音楽鑑賞会及び体験学習における講師を務める。	平成28年1月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、奈良学園小学校５年生 3 クラスを対象に、和の音楽伝承グループによるアウトリーチを活用した音楽鑑賞会及び体験学習におけるコーディネータを務める。子どもたちは大変興味深く鑑賞し、お箏、尺八の体験に意欲的に取り組んでいた。
15)三郷町教育委員会生涯学習課より依頼を受け、文化協会・老人連合会共催の講座において講師を務める。	平成28年2月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、歌い継ぐ日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～」をテーマに、講演と独唱。童謡・唱歌・わらべうたの歴史や特徴などパワーポイントでのプレゼンテーションを行うとともに「荒城の月」など独唱、出席者への呼吸法・発声法の指導、指揮を行う。多くの参加者が熱心に受講し、地域と世代をつなぐ取り組みとなった。事後アンケートで「日本の心の歌を沢山の人々と共に後々に伝えていくことの大切さを教えられた」など 100 名以上の方に好意的な意見をいただく。（参加者 165 名）

16）Musical Live Performance ～Koto & Shakuhachi with Japanese spirits “wa” songs for you～ 奈良県より依頼を受け、外国人向け和のコンサート企画・出演	平成28年6月	奈良県より依頼を受け、外国人向け「和のコンサート」実施（奈良ビジターセンター)。伝統楽器である箏・尺八の合奏グループとともに、「日本の心の歌」「春の海」等の演奏を披露。プログラム執筆、アンケートによるまとめ執筆、
17)三宅町市民講座において、童謡・唱歌指導および講演	平成28年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、ヴォイストレーニングの概要説明とともに指導を行う。また、童謡唱歌に纏わる話を行いながら、独唱の披露、歌唱指導を行う。参加者 20 名
18)王寺町主催＜り～べるカレッジ＞における講師を務める	平成28年7月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科　講師として、講演テーマ＜日本の心の歌　～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞　内容は①日本の心の歌　「童謡・唱歌」の歴史、作詞者・作曲者についてや、曲の内容などの講話　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイスを行う。奈良学園大学人間教育学部学生 5 名も参加し、学生と歌おうのコーナーでは地域の方々と交互に歌い合うなど共に歌い合いを楽しんだ。地域交流、世代交流の場ともなった。地域参加者約 70 名
19）イタリア（ローマ）での音楽科教育研究交流会における講師	平成28年9月	音楽科教育研究交流を行っているScuola Primaria“Ermenegildo Pistelli”ピステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学）の小学２年生・４年生の研究授業において、日本の心の歌である童謡・唱歌・わらべうたについて、プレゼンテーションを行う。また、「オペラプロジェクト」を活用した授業の参観、研究協議において助言を行う。
20)マルティーニ（ボローニャ）音楽院にて視察及び、日本の音楽専門教育の特色についいて提言。	平成28年9月	マルティーニ音楽院の音楽活動における施設・設備の視察を置こうとともに、イタリアにおける音楽専門教育（年数・内容等)、音楽科教員養成の在り方について聞き取り、日本の音楽専門教育の特色についいて提言し研究交流。
21）イタリア（ボローニャ）での音楽科教育研究会において提言	平成28年9月	ボローニャ大学において、日本の学校音楽科カリキュラムについて発表、音楽科教員養成、学校外教育との連携の在り方の研究交流。
22) 奈良学園大学志賀直哉旧居セミナーにて、レクチュアーコンサートの実施	平成29年4月	「日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうた～」をテーマに、一般的に「童謡」と言われている「童謡・唱歌・わらべうた」の成り立ち、創られた背景や目的、その特徴など、パワーポイントを活用し講演を行うとともに、数曲を披露。
23) 奈良学園大学公開講座＜り～べるカレッジ＞における特別企画「和＆輪コンサート」の企画・運営・出演	平成29年5月	「和＆輪コンサート」の企画を行う中で、地域のこどもから、学生、ミドル世代、シニア世代が会場で共に、日本の心の歌や、伝統楽器である箏・尺八の音楽を楽しみ合えるコンサート創りを目指す。自らも「からたちの花」など披露。350 名の参加があり盛況に実施。 奈良新聞に掲載される。
24)奈良学園大学・王寺町共催公開講座＜り～べるカレッジ＞において講演	平成29年7月	「音楽を活かしたまちづくり」～創造都市の視点から～についてパワーポイントを活用した講演と共に、「我は海の子」など披露。　65 名参加
25)イタリア（ローマ）での音楽科教育研究交流会における講師	平成29年9月	ピステリ校にて授業実践（3 年・5 年）とともに、「日本の心の歌」の紹介。音楽科教育研究交流会において、日本の「童謡・唱歌・わらべうた」について提言、学年の成長に応じた発声法、学校音楽科カリキュラムについて研究交流。

26)セントチェチュリア音楽院及び、プライナー音楽院の視察、及び初等教育における発声法における提言。	平成29年9月	セントチェチュリア音楽院及び、プライナー音楽院においてベルカント発声法とドイツ式発声法について研究交流。
27)ウイーン少年合唱団の視察、及び初等教育における指導法についての研究交流。	平成29年9月	ウイーン少年合唱団の施設・設備について視察、及び学年の成長に応じた発声法、指導法について研究交流。
5　その他 特になし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 1)中学校教諭一級免普通許状音楽	昭和50年3月	昭四九中一普第九六三号 （兵庫県教育委員会）
2)高等学校教諭一級普通免許音楽	昭和50年3月	昭四九高二普九九五号 （兵庫県教育委員会）
3)修士（学校教育学）	平成7年 3月	兵庫教育大学大学院　修第 3264 号　題名「中学校音楽科選択履修拡大に関する一考察」
4)中学校教諭専修免許状音楽	平成8年 3月	平七中専第一五六号 （兵庫県教育委員会）
5)高等学校教諭専修免許状音楽	平成8年 3月	平七中専第二五三号 （兵庫県教育委員会）
6)養護学校教諭二級免許状	平成8年 3月	平七中専第二五三号 （兵庫県教育委員会）
2　特許等 ・特になし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 1)西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し、西宮の音楽教育の充実・発展に尽力する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	西宮市内の音楽教育活動のより充実発展を目指す。
2)西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「くすの木コンサート」の運営に貢献する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	西宮市立中学校卒業生の音楽活動発表の場である「くすの木コンサート」の充実に力を入れ、西宮市出身の若い音楽家の活動の場を広げる。
3) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内音楽祭」の運営に貢献する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	1 年に 1 回行われる「西宮市内音楽祭」（各学校吹奏楽・合唱発表）の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。
4) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内合唱祭」の運営に貢献する。	平成 14 年度～ 平成 24 年度	1 年に 1 回行われる「西宮市内合唱祭」の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。
5)兵庫県教員採用試験（音楽）試験官として任命され、7 年間にわたって、実技試験内容や評価の在り方について研究を深める。	平成 15 年度～ 平成 21 年度	7 年間、小学校教員採用試験の実技試験（歌唱と器楽とピアノ演奏）の試験官を務めた。その間、実技試験内容の歌唱曲の選曲を拍子感や音域、詩の内容、曲想の面から検討し見直した。また、発声指導の時間をとり、短時間で声の調子を整えさせるよう、発声内容や注意点の内容について工夫した。「新曲」の作成においては、基本的な単純拍子・複合拍子でメロディーは 1 段目で難易度を低くし、2 段目は臨時記号を入れるなど難易度を上げ

		るよう配慮した。また基本的なリズムパターンを何カ所かに入れることとし、しかも曲としてまとまりのある曲となるよう、3･4 名で 20 曲程度作成した。評価項目、評価基準については、毎年検討会をもち、意見交流しながら共通理解を深めた。後半の 3 年間は音楽実技試験官のまとめ役をし、実技試験がスムーズに実施されるよう尽力した。
6) 西宮市中学生主張大会審査委員として会の充実に貢献する。	平成 20 年 8 月～平成 21 年 8 月	教頭会副会長として、審査員を務める。
7)西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表 20 名を引率し、中国を友好訪問し、音楽科授業の参観交流授業を行う。	平成 22 年 12 月	第 23 回団長を務める。尖閣諸島問題で日中関係が微妙な年であったが、礼を持って交流し、友好親善の目的を果たす。音楽授業を参観し、音楽科における日中合同音楽授業を行い交流を深める。
8)西宮市栄養教員・栄養職員研究会会長として研究紀要の発行に尽力する。	平成 23 年 3 月	西宮市の栄養教員・栄養職員研究会において、研究のまとめの発行に尽力する。
9)兵庫県西宮市音楽教科書採択委員として尽力する。	平成 23 年 7･8 月	西宮市教育委員会より音楽教科書採択委員会の委員長を命ぜられ、採択委員会を開き、採択結果を西宮市教育委員会に報告する。
10)西宮市校園長会の会長として幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため尽力する。	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	会長として、幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため、校園長との連絡調整・とりまとめを行う。特に音楽科教育の連携に力を入れる。
11)西宮市中学校家庭科教育研究会会長として総会の充実に尽力する。	平成 24 年 5 月	西宮市の家庭科教育・食育において、充実発展を目指し、会の活性化を図る。
12)西宮市栄養教員・栄養職員研究会会長として総会の充実に尽力する。	平成 24 年 5 月	西宮市の栄養教員・栄養職員研究会において、充実発展を目指し、会の活性化を図る。
13)文部科学省共催、独立行政人教員研修センターにおける学校評価指導者養成研修会において発表、学校評価指導者養成研修修了証書を授与される。	平成 24 年 7 月	現任校における学校評価の取り組み、及び成果と課題について発表すると共に、他府県の取り組みや、文科省の講演より多くのことを学び、学校経営に生かす。
4　その他 1)科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」を行う。	平成 24 年度～平成 26 年度	研究協力者として、「いのちの教育カリキュラムモデルの開発事例」を実践研究し、＜いのちの教育部会研究報告書＞に「西宮市立山口中学校における実践」「中学校の年間カリキュラム」「音楽科教育における成就感・自尊感情の育み」を執筆する。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1) 特集＜やる気＞を引き出し、育てる （教育フォーラム50号）	共著	平成 24年8月	金子書房 人間教育研究協議会	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を考察し、教師自身の＜やる気＞についても論じる。B５判　全　179頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、松田智子、浅田　匠、中村　哲、善野八千子、金山憲正、勝見健史、久田　孝、瀧明知惠子、ほか5名 担当部分 「新学習指導要領における音楽科教育 ～音楽教育に献身してきて思うこと～」を単著 中学校教育における音楽科の果たす役割を強く実感している。生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数にとどまった。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、新しい課題についても積極的に授業に取り入れていく必要がある。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏、和楽器を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における指導法を創意工夫すると共に、地域の音楽文化を生かし、小・中学校の9年間の連続した取り組みも意識し、新教育課程における年間計画を創意工夫していかねばと考える。 p. 146～155
2)「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営～確かな学力・情操豊かな人間性を育む～」	単著	平成 26年1月	株式会社ＥＲＰ	新学習指導要領全面実施の中、梶田叡一氏による『やる気』をいかに喚起するか、より良い学習環境をいかにつくっていくか」を課題とした学校運営について述べる。まず、学校教育目標を見直し、第１章では確かな学力の定着のために、生活・学習規律の醸成を踏まえた心の居場所となる学級づくりと学びがいのある授業づくりについて、第２章では情操豊かな人間性を育むため、音楽活動を核とした、仲間とともに築き上げる行事への取り組み、音楽教育の在り方、また参画と共同の取り組みについて、さらに第3章では学校評価を生かした活気あふれる学校づくりについて述べ、課題解決の方策に迫る。　　全72頁　A5判
3) 特集＜文字が育てる言葉の力＞文学教材を用いた指導をどうするか （教育フォーラム53号）	共著	平成 26年2月	金子書房 人間教育研究協議会	＜文字が育てる言葉の力＞において、言葉の力を育てるための方策を考察し、各教科領域における文学教材を用いた指導をどうするかについて論じる。B５判　全　147頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、鎌田首治朗、伊崎一夫、勝見健史、山下敦子、汐見治美、永田里美、湯峰　裕、瀧明知惠子、ほか2名 担当部分 「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む　～合唱劇の取り組みから～」を単著 これまで筆者が実践してきた「合唱組曲・合唱劇」の取り組み過程を述べている。合唱を中心とするが、独唱、重唱の場面を取りいれるなど、生徒の個性・特性を発揮させ、より豊かな表現を目指す取り組みである。伴奏はピアノで作曲されているものが多いが、生徒に演奏しやすく編曲したり、朗読のバックのピアノ演奏

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				を加えたり、ピアノだけでなく、生徒が取り組みたい楽器の楽譜をつくるなど創意工夫を重ねてきた実践を具体的に示している。音楽には共に演奏することで連帯感を持たせる力がある。孤独感を抱きやすい思春期の中学生には、前向きに生きるエネルギーになるこの連帯感が必要である。生徒が心揺さぶられるような一体感を感じる授業を成立させるためには他教科や学校行事と連携しながら計画的に行っていくことが大事であることを力説している。 p. 146～155
4)「人間教育を視点にした教職入門」	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	「人間教育を視点にした教職入門」においては「次世代の教職入門」を変化する教育情勢に対応し、新しく人編集し直す。人間教育を視点とし、理論編、実践編から教職の道を説く。 Ｂ５判　全　279 頁 編集代表　中田　正浩 中田　正浩、鎌田首治朗、松田智子、金山憲正、長井勘治、　中田律子、太田雄久、久田　孝、瀧明知惠子、担当部分 第 5 章第 3 節＜中学校教員の仕事＞ 思春期の真只中にある生徒たちが自ら課題を克服できるよう、見守り、自信を持たせ、希望を持って学校生活が送れるよう、中学校教員として為すべき仕事内容について述べる。学習指導要領の主な内容、学校教育目標の成り立ちについて、学習規律の醸成を大切にした学びがいのある授業づくりについて、中学校教員の 1 日についてなど、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。p. 120～129 第 6 章第 3 節＜中学校の学級経営＞ 社会的問題ともなっている「いじめ」「不登校」など多くの課題を抱える中学校現場で、生徒たちが安心して心豊かに学校生活を送ることができるよう、生活の基盤である学級集団づくりについて述べる。 学級の意義について、心が通い合い、お互いに高め合い、支え合う学級づくりについて、学校目標と学年・学級目標の関わりについて、望ましい集団活動を通して生き方の自覚をふかめさせる特別活動について、3 年間を見通し、成長に応じた学級活動年間計画をたてる必要性、協力しあって創りあげる体育行事、音楽行事の大切さなど述べる。p. 160～170 第 7 章第 2 節＜中学校の生徒指導＞ 物質的豊かさの中で育つ生徒たちは、忍耐力、自主性、自立性が弱くなるなどの状況が見られる。生徒一人一人の可能性を開き、主体的に判断・行動し、積極的に自己をいかしていけるよう生徒指導を充実させていくことが大事である。生徒指導の目標について、生徒のおかれている現況について、生徒理解の大切さについて、生徒たちが心豊かに学校生活が送れるよう開発的な生徒指導の具体的活動について、生徒の主体性を生かす生徒会活動について、スクールカウンセラーと連携した教育相談についてなどから、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。p. 190～199

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5)「保育士,幼稚園・小学校教諭のための初等科音楽基礎基本と指導法～ここがポイント！～　」発達段階に応じた指導を目指して	単著	平成 27 年 5 月	株式会社ＥＲＰ	初等科音楽基本内容と指導法について、重要なポイントを押さえながら述べる。特に発達段階に応じた歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞指導法について、具体的な例をあげながら示す。音楽指導のためのピアノ・歌唱・弾き歌いの実技上達法についても述べ、資料として楽典の基本事項も示している。音楽教諭として 20 数年、管理職として 10 年あまり経験し、その間に多くの保育士・幼稚園・小学校・中学校教諭の授業実践の指導助言を行ったり、音楽を苦手と感じている方々の相談に応じたり、より良い音楽活動づくりを考え合ったりしてきた。その実践を生かした理論書である。 Ｂ５判　全　 86 頁
6)特集＜アクティブラーニングとは何か＞（教育フォーラム 56 号)	共著	平成 27 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	＜アクティブラーニングとは何か＞において、実践的な課題解決力を育成するために、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、各教科領域におけるアクティブラーニングをどう組み入れていくかなど考察し実りある学習活動の展開を 提案する。 Ｂ５判　全　 147 頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、鎌田首治朗、伊崎一夫、前田洋一、溝上慎一、岸　周吾、芝池宗勝、米川雅士、武谷嘉之、瀧明知惠子、ほか 3 名 担当部分・特別寄稿 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ　～歌唱活動に注目して～」を単著 歴史的に西欧の音楽文化の中心であったイタリアと日本の学校音楽科教育の歌唱活動を中心とした比較を通して、日本の音楽教育への示唆を導き出すことを課題とした。イタリアの歌唱活動をはじめとする音楽科教育に学び、発達段階に応じ、正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法の開発を進める。また、音楽科教育の活動を広げ、総合的な表現力の向上のために、音楽科教育を核とした合唱劇のプロジェクト（総合表現活動）開発を行いたいと考える。 p. 120～130
7)「中等科音楽教育基礎と指導法～歌唱・合唱の系統性に視点をおいて～」	単著	平成 28 年 4 月	株式会社ＥＲＰ	これまでの教育活動を見直し、「キー・コンピテンシー」や「21 世紀型スキル」などを視野にいれ、音楽科教育の目標・内容について基本をおさえ、育成すべき資質や能力を具体化し指導・支援にあたれるよう示している。初等科・中等科音楽基礎基本内容（「表現」（歌唱・器楽・音楽づくり）、 「鑑賞」）をコンパクトにまとめ、指導計画の在り方、作成の仕方などについて、実例を示すとともに、評価を生かした授業づくりについて述べている。指導法については、発達特性の基本的な考え方、発達段階に対応した指導の・支援方法のポイントについて述べています。特に歌唱を中心として、理論的な意味付けを明確にし、共通教材について留意し具体的な実践の展開に結びつけていくよう述べている。 Ｂ５判　全　 86 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8) 特集＜主体的能動的な学習 ―アクティブラーニングの精神を生かす＞ 教育フォーラム （58 号）	単著	平成 28 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	＜主体的能動的な学習　―アクティブラーニングの精神を生かす―＞において、実践的な課題解決力を育成するために、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、各教科領域におけるアクティブラーニングの精神をどのように生かして いくのかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 Ｂ５判　全　155 頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、鎌田首治朗、伊崎一夫、吉田明史、角屋重樹、原田智仁、菅井啓之、押谷由夫、井上信子、瀧明知惠子、ほか１名 担当部分・特別寄稿　単著　p.137～p.148 「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」 次世代に生きる子供たちには「創造性をめぐって」や「コミュニケーションと ICT」を重点課題とした教育が望まれている。具体的には、「21 世紀型能力」や、「キー・コンピテンシー」の視点から、育成すべき資質や能力を音楽科教育でどのように育んでいくのか、明確にしていく時期である。「創造性・主体性」の育成を視点として音楽のカリキュラムと授業実践について日本とイタリアの国際比較を行い、示唆を得たいと考えた。イタリアの目指す教育の方向性の移り変わりを概観し、カリキュラム指針でのねらい、内容を考察する。創造性や主体性を育んできたイタリアの音楽科教育の特色を探るため、イタリアの児童・生徒・保護者等に向けた音楽科教育に関する意識調査（アンケート）及び聴き取り調査を試み分析結果を示す。また、ピステッリ国立学校における音楽科授業の現況を紹介する。イタリアのカリキュラムとの比較研究を進め明らかになったことは、①領域についての相違点、②共通教材についての扱い方、③総括目標での位置付けなどについてである。
9) 「オペラプロジェクト」に見るイタリアの学校外教育 ～ボローニャ大学との研究交流から～	単著	平成 29 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会	「深い学びのために」―アクティブラーニングの目指すもの―＞学習指導要領の総則について議論が展開されているが、「深い学び」についてはいまだ焦点が拡散している。はどのようにすれば「深い学び」になり、実現できるのか。具体的かつ実践的な授業を行い、基本ポイントを明確に押さえていく必要がある。 Ｂ５判　全　144 頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、鎌田首治朗、伊崎一夫、古川 治、 湯峰 裕、大畑健実、菅井啓之、金山憲正、 善野八千子、瀧明知惠子、ほか３名 担当部分・特別寄稿　　単著　p. 114～124 「オペラプロジェクト」に見るイタリアの学校外教育 ～ボローニャ大学との研究交流から～ イタリア公教育は学校外の教育機会が豊富である。地域の音楽文化と一体化させた取り組みを行っているのである。ボローニャ市では、音楽教育を振興しており、「音楽を身近に感じ味わうこと」を学校教育・社会教育の共通のねらいとしており、子どもたちに本物のオペラに触れる機会を提供している。子どもたちは、音楽専門家に学び、オペラ歌手とともに歌い、ステージ体験も行う。地域の専門機関・学校・保護者が連携し

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				てより良い教育を行うことを目指す場でもあるのだ。学習指導要領の改訂に向けて「創造性」が重要視されるなど、教育改革の準備が進められている。音楽は一生の友であり、生涯学習につながっていくものである。イタリアの学校外教育との連携にも示唆を得ながら実践研究を進めていく。
（学術論文等） 1) 浜甲子園中学校学校経営方針及び学校評価のまとめ	単著	平成 23 年 12 月	西宮市立浜甲子園中学校 研究紀要 p.1～3 p.98～104	「学校経営方針」「学校評価のまとめ」 平成 22 年度、浜甲子園中学校研究のまとめ。 学校評価（教職員・生徒・保護者・地域）を実施し、学校評価委員を含む地域連携協議会にてその結果について様々な意見をいただく。また、第三者評価として古川治甲南大学教授に学校関係者評価委員会に入っていただき、ご意見もいただ いた。その成果と課題をまとめ論ずる。次年度の学校運営に生かしていくべく本校の強みを明らかにし、改善点を具体的にあげ次年度の方向性を論ずる。 全 105 頁
2)「若い教師に伝えたいこと～範を示せる教師であれ～	単著	平成 24 年 3 月	週刊教育ＰＲＯ 3.20・27 株式会社日本教育総合研究所 p.16～17	音楽教育や演奏活動を通して、体験し学び取ったことなど、教育活動の一端を若い教師に伝えた。まず、教育活動の核となる教科経営、学級経営について述べる。生徒の学力を向上させ、豊かな人間性を身につけさせるために、教師は身近な大人として常に範を示せる存在でありたい。地域社会の中で愛され信頼される教師であるために、常に自己研鑽に励み、自己を磨く努力をすることを提案した。
3)　～家庭･地域と連携して進める兵庫の道徳教育～ 「兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」	単著	平成 24 年 5 月	刊「兵庫教育」5 月号 道徳教育の推進 兵庫県教育委員会発行 p. 18～21	兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」 兵庫県教育委員会は、道徳教育副読本を作成している。本校は副読本の効果的な活用を図る授業づくり、学校・家庭・地域が一体となって進める道徳教育の実践研究指定校となった。全教師の共通理解のもと推進し、教材研究を深める。道徳教育を学校が中心的な役割を果たし計画的に推進し、三者で深めていくこと、副読本を活用し３学年の成長を見通した道徳教育年間計画の整備を行っていくことなど述べている。
4)新任教師に伝えたいこと[再掲] ～生徒指導の心得～	単著	平成 24 年 6 月	週刊教育ＰＲＯ 株式会社日本教育総合研究所　週刊教育ＰＲＯ6.19 監修者　梶田叡一 p. 24～25	いじめ、暴力行為等の児童生徒の問題行動等については、依然として教育上の大きな課題となっている。何かが起こってからでなく、開発的な生徒指導を目指しておちついた学習環境のもと心豊かに学校生活が送れるよう①～⑨について心がけて欲しい。
5)「新学習指導要領における、音楽科授業への提案―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」	単著	平成 24 年 9 月	週刊教育ＰＲＯ 9.18 株式会社日本教育総合研究所 p. 12～13	「新学習指導要領における、音楽科授業への提案―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」 新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数は確保している。しかしながら、中学校では個人選択授業が無くなり、総合的な学習の時間は小・中学校とも減少し、実質的には音楽教育の場は減少していると言える。限られた授業時数の中で授業を見直し、伝統音楽など授業に取り入れていく必要がある。地域の小・中学校の９年間の連続した取り組みも意識し、歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における年間計画について提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6)「音楽科を核とした合唱活動の広がり」	単著	平成 24 年 10 月	週刊教育ＰＲＯ10.16 株式会社日本教育総合研究所 p. 22～23	音楽科の活動を広げ、深め、歌声の響く学校を目指すために限られた時間の中で、基本は授業で指導し、音楽的行事を成功させ、生徒たちに成就感や達成感を味わわせることの重要性を論じた。多くの感動体験を通して生徒たちの音楽に対する感性がより育まれ、心をより強くより豊かに育てる。そのため大きな声で生き生きと歌うための発声法、歌唱法、合唱づくり、音楽をより豊かにするピアノ伴奏法、編曲についてなどその手順や配慮せねばならないことについて、具体的に論じた。
7)「活気あふれる学校運営～小規模校の特色を生かして～」	単著	平成 25 年 1 月	週刊教育ＰＲＯ12.13 株式会社日本教育総合研究所 p.20～23	「活気あふれる学校運営 ～小規模校の特色を生かして～」 浜甲子園中学校において活気あふれる学校を目指し取り組んできた成果のまとめを紹介する。生徒の主体性を生かす生徒会活動、トライやる・ウイークの取り組み、総合的な学習の時間における、特色ある活動としてマリン体験、開かれた学 校への取り組みとして緑化サポート（環境づくり）・音楽科における授業サポート（和楽器等支援）における取り組みを紹介する中で、確かな学力をつけ、豊かな情操を育む教育活動の在り方を論ずる。
8)特集＜やる気＞を引き出し、育てる（教育フォーラム 54 号）	単著	平成 26 年 8 月	金子書房 人間教育研究協議会 p. 128～130	＜各教科等の学習を支える言語活動＞において、各教科領域全体で言葉の力を育てるための方策を考察し、子どもに新の「賢さ」を育てるために教師にできること・すべきことを提案する。 全　138 頁 編集代表　梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法人人間教育研究協議会活動だより第 29 回　2014 年度人間教育実践交流会　in 奈良「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の内容説明とともに、今年度の活動について紹介する。
9)音楽科教育におけるｱｳﾄﾘｰﾁに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～	単著	平成 26 年 8 月	学校音楽教育研究 発表要旨集録 P. 90　資料 4 p	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチ（洋楽器演奏者、和楽器奏者、声楽家、アンサンブル等）を活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。
10)「School music education in Japan and Italy」日本から見たイタリアの学校音楽教育～イタリアでの実地音楽育調査から～	単著	平成 26 年 9 月	Scuola Primaria “Ermenegildo Pistelli” ピステッリ小学校（幼小・中学校の一体型学) 全 7 p	在イタリア日本大使館一等書記官西池万葉氏の紹介を受け、イタリアの初等科音楽教育研究会に出席する。実地音楽教育調査から、第 1 に義務教育における音楽教育のカリキュラムの比較、第 2 に義務教育における音楽授業の実践研究、第 3 に音楽科を核としたプロジェクトの立案についてなどまとめ、在イタリア日本大使館とピステッリ小学校へ報告する。日本においてもイタリアにおいても、より豊かな音楽教育活動が実施できるよう、研究を深めていく。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11)音楽科教育の有益性における一考察～歌唱・合唱活動を通して～	共著	平成 27 年 1 月	奈良学園大学人間教育学部 p. 47～55	学校だからこそ得られる音楽を通した感動体験は、生涯にわたって「生きる力」の育成を図ることにつながっていくものと考える。学校教育における音楽科教育の歴史から、音楽科教育に託されたものや、その有益性について示すとともに、どのように活性化させていくのか考察する。発達段階に応じた発声法・歌唱法、パート練習の仕方、パートリーダーの育成、合唱指揮法、ピアノ伴奏法など、理論とともに具体的に述べ、活動手順を示す。
12)特集＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞ （教育フォーラム 55 号）	単著	平成 27 年 3 月	金子書房 人間教育研究協議会 p. 147～149	＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞　において PISA 型学力をどう育てるかにおいて、実践的な課題解決をどう図っていくか、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、アクティブラーニングをどう組み入れていくかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 Ｂ５判　全　157 頁 編集代表　梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法 人間教育研究協議会活動報告とまとめ 第 29 回 2014 年度人間教育実践交流会　in 奈良　「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の発表内容をはじめ、1 年間の活動のまとめを記載する。
13)「人間教育を支える音楽科教育～」	単著	平成 27 年 3 月	奈良学園大学人間教育学会誌 全　10 頁	本論文では、人間教育を支えるものとしての学校教育における音楽科教育の意義・果たすものについて論じる。その際、豊かな表現を工夫し、総合的な表現活動へと発展させた「合唱劇」の実践を通して考察する。歌唱・合唱の指導、ピアノを始め器楽伴奏の指導についてもふれる。今後の課題を探るとともに人間形成に大きく関わる音楽科教育が、学校教育の中で、より活性化していくための方策を考察する。
14)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～」	単著	平成 27 年 3 月	武庫川女子大学紀要 p. 25～30	現行の学習指導要領において、音楽科の授業時数は確保しているが、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。音楽科教育をより豊かにし、心の育みが行っていけるよう地域の音楽文化（大学音楽学部・和楽器グループなど）とのつながりを考察する。
15)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察	単著	平成 27 年 3 月	学校音楽教育研究 日本音楽教育実践学会紀要 p. 18～21	音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、一人ひとりの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものと考える。音楽科教育の活性化のために、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。そのことにより生徒たちの歌唱や器楽の表現力をより高めることとなる。音楽科教育をより豊かにするため、音楽の専門家や和楽器の演奏団体、地域の大学などとのつながりを考察する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16)「中学校教育における音楽科教育活動に関する一考察」～地域の音楽文化との連携から～	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌 全　10 頁	中学校における音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討する。担当教諭が児童生徒を指導支援するという授業に、ゲストティーチャーが第 3 者として入り、授業を展開する。アウトリーチを導入することにより、学校では新たな学びのスタイルが生まれる。地域のホールや専門家など音楽文化と学校の連携の在り方を考察するとともに、アウトリーチを組み入れた授業案を創作し、提案する。
17)「アートが根付くイタリアの音楽科教育研究調査を通して」	単著	平成 27 年 11 月	指導と評価　2015.12 図書文化 p.4～5	＜だんわしつ＞執筆。　機会を得て、２度目になるイタリア（ローマ）の学校音楽教育を実地調査することができた。多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出したい。具体的には歌唱活動に注目した学校音楽科カリキュラムに注目し、日本で根付いてきたカリキュラムを、文化遺産の抱負なイタリアの教育から検討することで、より良い授業を創造する機会としていきたいと考える。
18)「イタリアの道徳教育と学習者の評価」～イタリアの学校教育実地調査から～	単著	平成 27 年 12 月	指導と評価　2015.12 図書文化 p.22～24	＜特集＞　道徳教育と評価 いよいよ学習指導要領改訂の準備が始まっている。道徳の教科化、評価方法のあり方については、議論の集中するところである。カトリックの総本山バチカン市国があるイタリアでは、宗教が学校の授業の中に組み込まれ、長く培われた伝統と習慣で気付きあげられた生活が現在も営まれている。しかし、以前から宗教とは別に道徳「憲法とシチズンシップ」（道徳）が教科として導入されている。学習者の評価は、10 段階であり、「行動面」は文章で評価される。イタリアの学校教育について研究を深め、教育改革の準備に向けて示唆を導き出すことは意義あることと考える。
19)「学校教育における音楽科教育活性化に関する一考察」 ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	単著	平成 27 年 12 月	武庫川女子大学紀要 全　8 頁	音楽科教育の活性化について、これまでの長年にわたる学校現場の実践の一つである総合的な表現活動へ発展させた合唱劇の実践から考察する。人間の根源的な活動である音楽活動は学校生活を豊かで潤いのあるものとするとともに、情操豊かな生徒を育む土壌ともなっていることが、その後の生徒・教師・地域や保護者の感想や意見から読み取ることができた。関わった教師たちは、生徒が変化していく様子を目の当たりにしている。音楽科の時間を核として、学活行事や総合的な学習の時間において、音楽活動を発展させていけるよう考察する。
20)「人間教育」の根源である「いのちの教育」に関する一考察　～中学校における実践から～（査読有り）	単著	平成 28 年 5 月	人間教育学会研究紀要 p.133～p.144	本研究では、「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』の結果分析から導き出した５つの視点が、どのような教育実践で確かめられるのかを検証しようと試みた。中学校において「いのち」に関わる授業実践の前後にアンケート調査を行い、比較調査では、「『本当に 人のいのちは大切なんだ！』と心の底から感じたことがありますか」とのクロス集計において考察した。その結果、アンケートのクロス集計や、指導にあたった教師、生徒の感想や意見から、多くの生徒の心の動きを確認し、ポジティブな効果を捉えることができた。また、これらの取り組みを活かし作成した、中学校に

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				おける「いのちの教育」の年間カリキュラムを紹介する。
21)人間教育の普遍的要素を成す音楽科教育における一考察　～　中学校音楽科を核とした総合的な表現活動の視点から　～	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌	音楽家教育は人間の成長や発達において、欠くことのできないものである。教育課程においては音楽科の学習は,豊かな心の醸成を担うものとして位置づけられている。本研究では長年にわたる合唱・合唱劇の取り組みにおいて、音楽を核とし、教科の学びだけでは得られない豊かな学びがあり,総合的な力の向上を生徒自身が実感し,その後の学校生活に変化を与えていることを確認した。クラスの団結力が高まり、これまでより発言しやすい雰囲気となったり、教え合いが活発になるなど、授業の活性化が、各教師の感想や意見から明らかになった。音楽活動は学校の生活全体を豊かで潤いのあるものとするとともに,情操豊かな生徒を育む土壌ともなっていることが、実証されたといえる。学校教育全体計画の一環として意図的に計画的に対応することも大切であり,このような活動が音楽活動の内容充実を図る要因となりうるものである。
22)人間教育の普遍的要素を成す音楽科教育における一考察　～　中学校音楽科を核とした総合的な表現活動の視点から　～	単著	平成 28 年 12 月	人間教育学会研究紀要	学校生活の中で心の豊かさや情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく必要性を論じる。音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、生徒たちの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものである。音楽科教育の活性化について、まず、現在の生徒を取り巻く状況を把握し、学習指導要領における音楽科教育の歴史を確認する。そのことにより、音楽科教育に託されたことや、意義について理解し、総合的な表現活動である合唱劇の実践から音楽教育の活性化を考察する。
23)中学校における「いのちの教育」と音楽科教育による一考察 ―　成就感・自尊感情を育む歌唱・合唱活動を通して　―	単著	29 年 3 月	武庫川女子大学院教育学研究論集	各教科が道徳教育との関連を考慮し、学校教育として、生徒らに他者との関係づくりや集団性を育成することの必要性が言われている。中学校教育における音楽科授業では、音楽力を高めるとともに、他者や学級での協力や団結する力を培っている。そういった中で、生徒たちの成就感や自尊心も育くまれていく。他者との関係性を重視する指導は、音楽の感性的な面と結びつき人間性育成や社会性育成を目的とする道徳教育とともに、「いのちの教育」において、音楽科授業の果たす役割は大きい。 生徒たちにとって、思ったことを自己の外に表出できることは大事なことである。心を合わせて歌うことで、大きな感動を生むといった感動体験を少しづつ積み上げていくことによって、「命の大切さ」を確かに生徒たちの心に刻み込むことができるのである。限られた時間の中で、学習を深めていくために道徳や総合的な学習の時間、各教科などを連携させて、年間を見通した計画的組織的な取り組みを考察し、年間カリキュラムの流れに沿って行われるよう、教育計画を提案する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24)イタリアの音楽科教育におけるカリキュラムと実践における一考察～　歌唱指導の系統性に視点をおいて～	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学会誌	本論文において、イタリアの音楽科教育における歌唱指導の系統性に視点をおいて、カリキュラム内容と授業実践に焦点をあて、研究を進め、次のことが明らかになった。カリキュラムにおいて、日本では総括目標は音楽的側面からの目標が設定されているが、イタリアでは音楽を「人間教育の基礎であり普遍的要素を成す」と明確に示しており、協力性や社会性を促進させ、創造性と共有能力の発揮など人間教育の基盤となることを示している。そして、表現や鑑賞のみならず、社会、人間、生活における音楽を包括的な視野で思考することが要求されているなどである。示唆としては、イタリアの音楽科の理念にみられる。協力性や社会性を促進させ、創造的な人材育成に貢献する教科が明確に示されている点、音楽の基礎的能力の在り方や、学習活動への展開も明示し「生活と音楽との関わり」が重視されていることである。様々な学校でカリキュラムがいかに実践されたかを捉えて、初めてそのカリキュラムの成否は検証されるのである。学校現場で、どのように計画され、実行されているのか今後の研究につなげていく。
25)イタリアの音楽科教育における一考察～小・中学校における歌唱指導の視点から～	単著	平成 29 年 12 月	奈良学園大学人間教育学会誌	多くの文化遺産に包まれているイタリアの学校音楽科教育について研究を深め、日本の音楽科教育への示唆を導き出す。歌唱面では小・中学校ともに、注意深く「聴く」ことに力を入れ、良い声づくりとともに音感をつけようとしている。また、外部の専門家が入ったり、地域に出て（音楽ホールなど）学習するシステムが定着している。そうした中で子どもたちの主体性や創造性が育まれているのである。
（その他報告書） 1)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発事例」	単著	平成 27 年 1 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 p.60～69	「いのちの教育部会」では、幼・小・中・高等学校の成長に応じたカリキュラムを作成し（中学校を担当する)、各時期のねらいを設定した。「いのち」に関わる教育活動の大切さを検証するとともに、どのようなプロセスをたどって生徒が「いのち」の大切さを実感するのか、公立中学校において「いのちの教育」を実践研究する。その際、取り組みの前後にアンケートを実施し、分析・考察する。（研究協力者）
2)「西宮市立山口中学校における実践」	単著	平成 27 年 1 月	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」＜いのちの教育部会研究報告書＞ p.17～26	共著者・眞鍋美穂 公立中学校における「いのちの教育」の実践研究について報告する。2013 年実施の「心のアンケート」(児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ）におけるクロス集計結果内容を反映させた実践「ホメホメシャワー」について、道徳における兵庫県道徳副読本「心かがやく」より『語りかける目』の実践について、「『ありがとう』と言われる一日をすごそう」についてなど。（研究協力者）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3)「中学校における『いのちの大切さ』を実感させる実践研究の考察と課題」	単著	平成27年2月	平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」＜いのちの教育部会研究報告書＞ p.41～43	「いのちの教育」の実践研究について、取り組み前後に「心のアンケート」実施し比較調査を行う。 そのクロス集計において、いくつかの項目で、生徒の心の動きがみられた。今後、学校全体で共通理解し進めていくことが大切である。 限られた時間の中で、学習を深めていくために道徳や総合的な学習の時間、各教科など連携させて、年間を見通した計画的組織的な取り組みが必要である。(研究協力者)
4)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発～音楽科教育における成就感・自尊感情の育み～」	単著	平成27年3月	平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 p. 119～132	「いのち」に関わる教育をより深めていくために、音楽科における「いのちの教育」の可能性について考察する。音楽科で取り組んできた「合唱活動」において表現活動の基盤となる合唱は、音楽を苦手とする生徒にとっても、仲間とともにその美しさを共有できる場である。伴奏には様々な楽器演奏を加え、さらに豊かな表現を創りあげることができる。仲間と協力して活動する大切さを学びとり、連帯感が育まれ、より意欲的な生活態度につながっている。今後、教育現場への提案・実践研究を進め、より具体性のある教材を発信していきたいと考える。
5)「音楽を通した街づくり」	単著	平成29年11月	奈良学園大学	和文化教育学会全国大会にて、コーディネーターとして提言「音楽を通した街づくり」 資料「和&輪コンサート」実施とまとめの執筆
（その他） 「学会等発表等」 1)課題「新しい時代を創造する豊かな心と確かな学力を育む学校運営」	―	平成21年8月	阪神地区女性学校運営研修会 伊丹シティーホテル	幼・小・中学校、教育委員会において、各学校園が運営上の諸問題について、どのように改善するか交流する。 テーマ 「学校・家庭・地域社会の力強い連携のもと生徒の自立を支援する」をテーマに、新しい教育課程づくりについて述べる。①確かな学力を基盤とした生きる力を育成する新教育課程の創意工夫　②家庭・地域社会と連携を深め、豊かな教育環境づくりについて、など特色ある教育課程づくりについて述べる。 阪神地区女性学校運営研修会
2) 人間教育実践交流会　西宮フォーラム発表 新教育課程における音楽科授業への提案　―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む―	―	平成23年8月	人間教育研究協議会 兵庫県私立百合学園小学校	新教育課程における音楽科授業への提案として、小学校からは「生き生きした歌声を」、中学校からは「合唱活動を通して豊かな心を育む」、大学では「デジタルコンテンツの授業への活用」など、ことばの力を生かした音楽表現力の育成について考察する A４判　　P. 68～69

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3) 音楽を通した感動体験から豊かな心を育む ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	―	平成 25 年 8 月	第 18 回日本音楽教育実践学会　発表要旨集録 お茶の水女子大学	音楽科を核とした合唱劇の取り組みについて、発声・合唱・独唱・ピアノ伴奏を含め、感動的な取り組みの流れと共に、豊かな心の育成の関わりについて論じる。学校教育において音楽科教育活動は、いじめ、不登校、暴力行為等、問題を抱える生徒たちの心をなごませている。心の豊かさや、情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく大切さを論じる。 A 4 判　　P. 84　資料 4 頁
4) 人間教育実践交流会　大阪ミニフォーラム発表 「学級指導と音楽行事」	―	平成 26 年 2 月	人間教育研究協議会 内田洋行大阪オフィス	ミニフォーラムのテーマ「言葉の力と学力向上」を受け音楽部会では「学級指導と音楽行事」をサブテーマとする。音楽科教育を支えるものとして言葉の力があり、歌詞の読み取りなど言葉の力を育みながら、学級での合唱づくりや行事への取り組みについて発表するとともに、意見交流を行う。 資料 4 頁
5) 音楽を通した感動体験から豊かな心を育む ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	―	平成 26 年 3 月	日本学校音楽教育研究	個性や創造性を発揮することが求められつつある中で、生徒一人ひとりの多様な能力の伸長を目指すという観点からの対応を図り、心の豊かさや情緒の豊かさと言った視点での教育活動を進めていかねばと考える。音楽科を核とした合唱劇の取り組みから音楽科教育の充実発展を考察する。 A 4 判　　P. 117～118
6)奈良フォーラム発表　テーマ ＜言葉の力と学力向上＞～音楽科の学習を支える言語活動～	―	平成 26 年 8 月	人間教育研究協議会 奈良学園大学	限られた授業時間の中で、音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを行っていきたいと考える。学校と地域の音楽文化とのつながりを考察する。 A4判　P. 45　資料　4頁
7) 音楽科教育におけるｱｳﾄﾘｰﾁに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～	―	平成 26 年 8 月	第 19 回日本音楽教育実践学会 熊本大学	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。
8)「日本における初等科音楽教育」	―	平成 26 年 8 月	Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli" ピステッリ小学校（幼・小・中学校の一体型学）	イタリアの初等科音楽教諭音楽授業研究会にて発表。日本での初等科音楽教育について、基本内容と指導法について、発達段階に応じた歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞指導法について、具体的な例をあげながら示す。指導のためのピアノ、歌唱、弾き歌いの上達法、楽典の基本事項も資料として示している。イタリアの初等科音楽教育についての発表を受け交流を深める。 A4　4 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9)「小・中・高等学校意識調査結果を踏まえた『いのちの教育』のカリキュラムモデル開発への取り組み」	―	平成 26 年 11 月	岡山心理学会第 62 回大会にて発表 岡山心理学会大会論文集	平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」 「2013 年『いのち』に関わる意識調査『こころに関するアンケート』」を実施し、クロス集計の結果分析する中から、５つの「いのちの大切さ」を実感させる視点を導き出した。これらの視点を生かして、小・中・高等学校における発達段階に応じた「『いのちの大切さ」を実感させる教育カリキュラム」を作成した。一連の取り組みについて発表する
10) 主体性・創造性を育む音楽科教育活性化における研究	―	平成 28 年 3 月	教師学会にて発表 奈良学園大学	次期学習指導要領の改訂に向けて準備が進められている。人が人となるための基礎としての音楽をはじめとした芸術教育が、独立した必修教科であり続けた意義を再確認し、音楽科改善の視点から、さらなる充実をめざさねばと考える。これまで取り組んできた合唱活動や総合的な表現活動である合唱劇の実践から音楽教育の活性化を考察するとともに、アクティブラーニングを活用した取り組みとして発展させ、主体性・創造性を育む教育活動を考察する。 資料　A4　4 頁
11)学校教育における音楽文化伝承に関する一考察 ～地域の伝承家とのつながりから～	―	平成 28 年 10 月	日本音楽教育学会 （横浜国立大学）	学習指導要領に「伝統・文化の尊重」が明記されたことにより、和楽器の必修が言われ、教育環境の整備や指導者の研修など、行政において、組織的に取り組まれてきたが､現状としては､「どう指導したら良いのか」という現場の声が未だにある｡「楽しみ、親しめる和楽器」「邦楽への関心」を高めることに、授業のねらいを置き、教育内容が広がっていくようなカリキュラムづくりについて、授業実践から考察し、発表する。 資料　A4　4 頁
12)まほろばからの伝統文化教育の発信 コーディネーター・提言	―	平成 28 年 11 月	和文化教育学会全国大会 奈良学園大学	「まほろばからの伝統文化教育」をテーマに、各地から興味深い提案を受け、研究協議を行う。 コーディネーターとともに提案「歌い継ぐ日本の心の歌」の活動紹介 資料「和&輪コンサート」実施とまとめの執筆）
13)日本人間教育学会「新学習指導要領と人間教育の理念―人格の完成を目指す―」音楽部会のコーディネーター・提言	―	平成 29 年 2 月	奈良学園大学	新学習指導要領における音楽科教育～言葉の力を活かした音楽表現力の育成～をテーマに「音楽教育におけるアクティブラーニング」､「地域創生―音楽を通した街づくり」等、発表を受け研究協議を行う。 「音楽を通した街づくりー「和&輪コンサート」の実施とまとめの執筆　資料 A4　10 頁
14)音楽科教育活性化における研究	―	平成 30 年 2 月	教師学会にて発表 奈良学園大学	日本音楽教育学会全国大会発表「学校教育における音楽文化伝承に関する一考察～地域の伝承家とのつながりから～」　資料 A4　8 頁
「合唱指導及び審査員、等」 1) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールの審査にあたる。	単独	平成 20 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、子どもの発達段階に応じた声変わりの時期における適切な指導と無理のない発声についてについて講評する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 21 年 9 月	京都こども文化会館 小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノをはじめとする、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。「ビリーブ」等、合唱指導指揮・ピアノ伴奏の指導を行う。
3) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクール、審査にあたる	単独	平成 21 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
4)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 22 年 7 月	京都こども文化会館 小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「心の瞳」など。
5) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたる。	単独	平成 22 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
6) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 22 年 11 月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに講評を行う。審査にあたり、ピアノ伴奏や、発声、ハーモニーのバランス等を考慮し審査、講評する。
7) 西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表 20 名を引率し、表敬訪問の際、合唱を指揮	単独	平成 22 年 12 月	中国紹興市 元培中学校	中国友好訪問において表敬訪問の際、合唱曲「時の旅人」「茉莉花」（中国語）の指揮を行い、合唱を披露し絶賛される。また音楽授業を参観するとともに、音楽科における日中合同授業を行い交流を深める。
8)「初秋のコンサート」	共同	平成 23 年 9 月	京都　レスパス・エラン	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画する。「コスモス」等、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
9) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて校長として指導するとともに審査にあたる。	単独	平成 23 年 10 月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
10) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 23 年 11 月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11) 「初秋のコンサート」	共同	平成 24 年 9 月	京都　レスパス・エラン	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱において、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「マイ　バラード」等。
12) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査を行う。	単独	平成 24 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
13) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成 24 年 11 月	鳴尾文化ホール	実行委員長を務め会の充実のため音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。市内音楽教諭が実技指導を通して学び合う場でもあり、終了後、各校への指導助言を行う。
14) 「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 25 年 9 月	京都市立国際交流会館	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱・合唱を披露するコンサートを企画運営する。幼児から大人までの年代層の出演者によるコンサートである。「この道」等、独唱するとともに、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
15) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び講評を行う。	単独	平成 25 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
16) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び全体に講評を行う。	単独	平成 26 年 10 月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。
17) 「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成 26 年 10 月	京都市立国際交流会館	ソロ・アンサンブル・ヴァイオリン・ピアノによる、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。出演者による合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「ビリーブ」等。
18) アウトリーチを生かした授業展開・コンサートづくりについて指導助言を行う。	単独	平成 27 年 2 月	宝塚市立末広小学校	宝塚市立末広小学校におけるアウトリーチを活用した音楽研究授業及び、まとめのコンサート・研究協議が行われる。アウトリーチを生かした授業・コンサートづくりについて指導助言を行う。
19) 筑紫鶯美会主催、三郷町教育委員会・文化協会後援の箏曲演奏会「初夏の香り」に出演する。	単独	平成 27 年 5 月	三郷町文化センター文化ホール（定員 540 名）	筑紫鶯美会代表の篠原歌鶯先生主催の演奏会に出演し、お琴、ヴァイオリン、ピアノの演奏をバックに「ふるさと」等、独唱するとともに会場の歌唱指導指揮を行う。満席になり、盛況に行われた。（観客 530 名）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20)「初秋のコンサート」	共同	平成 27 年 9 月	京都市立国際交流会館	1 部ではヴァイオリン・ピアノの発表会、2 部は指導者の演奏会を実施する。ピアノ伴奏の指導、出演者による合唱指導指揮、独唱「エーデルワイス」等、披露する。（観客 100 名）
21）合唱コンクールに向けた「プレ発表会」	共同	平成 27 年 10 月	西宮市立大社中学校	合唱コンクールに向けた「プレ発表会」において、3 学年学年合唱、クラス合唱（7 クラス）への指導助言を行う。地域の小学校が参観し、小中合同の合唱の実施、小学校から感想意見の発表、中学生から小学生へのアドバイスなど、小中合同での合唱指導の場となった。
22)「プチコンサート」	共同	平成 28 年 3 月	京都　レスパス・エラン（定員 60 名）	ヴァイオリン・ピアノの発表会及び、指導者の演奏会を実施する。ピアノ伴奏の指導、出演者にる合唱指導指揮、独唱「この道」、重唱「逢えてよかったね」等、披露する。（観客 60 名）
23)「和＆輪コンサート～歌い継ぐ、心の歌～」の企画・実施	共同	平成 28 年 5 月	王寺地域交流センターリーベルホール（定員 330 名）	大学と地域をつなぐ特別企画コンサートにおいて、童謡や唱歌、叙情歌に託された「日本の伝統文化、美しい景観や思いやりの心」を味わい、美しい箏曲の音色を楽しみ、和の音楽文化のすそ野を広げていくとともに、地域の世代を越えた人たちが交流し触れ合う場とすることを目的とした特別企画コンサート。全体の司会進行を行うとよもに、独唱「この道」、重唱「さくらさくら」「荒城の月」など、箏アンサンブル、ヴァイオリンの演奏とともに披露する。（観客 330 名）
24) 西宮市立瓦木中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	単独	平成 28 年 10 月	公江記念会館（定員 1500 名）	西宮市立瓦木中学校（全 26 クラス）合唱コンクールにおいて審査にあたり、講評を行う。（観客 1200 名）
25) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	単独	平成 28 年 10 月	鳴尾文化ホール（定員 600 名）	西宮市立浜甲子園中学校（全 9 クラス）合唱コンクールにおいて審査にあたり、講評を行う。（観客 550 名）
26) 西宮市立上ヶ原中学校合唱コンクールにおいて審査委員長・講評	単独	平成 28 年 11 月	西宮市アミティーホール（定員 1000 名）	西宮市立上ヶ原中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び講評を行う。（全 19 クラス）（観客 900 名）
27) 奈良県立 3 つの高校と連携したコンサートづくりに向けた提言、指導・指揮。	単独	平成 30 年 2 月	奈良県立郡山高校合唱部 奈良北高等学校合唱部 生駒高等学校合唱部	日本の心の歌である童謡・唱歌の味わい、において、地域の人々に楽しんでいただくコンサートづくりの提言と共に、出演高校等と会場との合同歌唱に向けて指導・指揮を行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他・音楽活動・社会貢献活動）				
1)樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平成 10 年度～平成 20 年度	フェニックスホール（平成 10 年～20 年）	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。企画・運営を行う。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾、バイオリンアンサンブル他、演奏役員として音楽監督を務めた。毎回 200 人程度の観客がおとずれる。
2)鳴教会研修会（武庫川女子大学卒業生教諭の会）及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 20 年 12 月	武庫川女子大付属高校音楽ホール・芸術館	鳴教会総会及び研修会において、武庫川中・高等部の「合唱部づくり」の講和と演奏、会員交流を行うとともに、親睦を図るため、歌唱指導指揮を行い、友に歌い合う。教員 50 名が集う。
3)歌い継ぐ　～日本の心の歌　～音楽活動を行う	共同	平成 21 年 3 月	介護老人福祉施設 夢御殿山	「花の会」において歌・ピアノ・歌唱指導を担当し、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。
4)西宮市女性学校運営研修会にて歌唱指揮を行う	共同	平成 21 年 7 月	芦屋モノリス	教育長・教育委員会を交えた西宮市女性学校運営研修会にて、研修を深めるとともに、歌唱指揮を行う。
5) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 21 年 7 月	介護老人福祉施設 シルバーコースト	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「浜辺の歌」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
6) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 21 年 12 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」瀧明知恵子（お話・歌・ピアノと担当）、フルート・琴奏者とともに介護老人福祉施設にて音楽演奏を行うとともに童謡唱歌「ペチカ」等を会場と共に歌う。独唱するとともに、歌の指導指揮を行う。
7)鳴教会研修会及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 21 年 12 月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「子どもたちの環境」の講話を受け、会員交流を行うとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。教員 40 名が集う。
8) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 22 年 7 月	介護老人福祉施設 夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
9)樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平成 22 年 12 月	兵庫県芸術文化劇場小ホール（平成 22 年～26 年）	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300 人の観客がおとずれる。
10) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 23 年 1 月	介護老人福祉施設 花やしき	花の会　瀧明知恵子（歌・ピアノを担当）、フルート・琴奏者とともに、介護老人福祉施設にて音楽演奏を行う。「冬景色」等、唱歌を会場と共に歌う。会場の歌のピアノ伴奏や琴・フルートとのアンサンブルなど行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 23 年 1 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。「雪の降る街を」等、独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
12)鳴教会研修会に及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 23 年 3 月	武庫川女子大付属高校 視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「体験の言葉化」の講和を受け、会員交流を行うとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。教員 40 名が集う。
13) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 23 年 7 月	介護老人福祉施設夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「花かげ」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
14) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 24 年 8 月	宝塚市福祉協議会 仁川デイサービスセンター	「花の会」フルート・琴奏者とともに、音楽演奏会を行う。歌唱を担当し、「茶摘み」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。歌の指導指揮も行う。
15)第 63 回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において「国歌斉唱」の伴奏を務める。	単独	平成 24 年 10 月	大阪国際会議場	大阪で行われた第 63 回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において、「国歌斉唱」の伴奏を務め、全国から参集した中学校長の歌声が会場中に響き渡った。
16) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 24 年 12 月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「ふるさと」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。 独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
17)鳴教会研修会に及び総会において歌唱指導指揮を行う。	共同	平成 25 年 3 月	武庫川女子大付属高校 視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「心身の健康」についての講和を受け、意見交流。副会長として学校教育における音楽をはじめとする情操教育の大切さを語るとともに、歌唱指導指揮を行い、共に歌い合う。
18) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成 25 年 7 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」　瀧明知恵子（歌・ピアノを担当)、フルート・琴奏者とともに、介護老人福祉施設にて音楽演奏を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。
19)敬老会コンサートに出場する	共同	平成 25 年 9 月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設での敬老会コンサートに出場する。講和を行うとともに、童謡唱歌「浜辺の歌」等を会場の指導指揮を行い、会場と共に歌う。
20) 音楽活動 ＜日本の心の歌 ～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平成 26 年 6 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」として、音楽演奏を行うとともに童謡唱歌「朧月夜」等を会場と共に歌う。会場の指導指揮も行う。
21) 敬老会コンサートに出場する	共同	平成 26 年 9 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」として、敬老会コンサートに出場する。講話・演奏（フルート・琴）とともに歌唱指導を行う。童謡唱歌「もみじ」等を会場と共に歌う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22) 樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平 26 年 12 月	兵庫県芸術文化劇場小ホール	武庫川女子大学音楽学部後援 2 年に 1 回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300 人の観客がおとずれる。
23)音楽活動 ＜日本の心の歌 ～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平 成　27 年 3 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	童謡・唱歌・わらべうたの講話・演奏「さくらさくら」・歌唱指導を行う。（他、声楽家 1 名） 講和・歌唱・ピアノを担当する。
24)樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）創立 50 周年記念コンサートに出演する。	共同	平 成　27 年 4 月	ホテル甲子園ノボテル甲陽の間	樂朋会創立 50 周年記念コンサートではピアノ独奏､連弾、独唱、重唱、コーラスの演奏。　「花」等、重唱を行う。 参加者 120 名
25）音楽活動 ＜日本の心の歌を歌い継ぐ～＞	共同	平 成　27 年 8 月	王寺ディサービスセンター	唱歌・叙情歌の講話・独唱「朧月夜」他。ピアノ伴奏・歌唱指導を行う。学生の演奏も披露し喜んでいただく。
26）音楽活動 ＜日本の心の歌を歌い継ぐ～＞	共同	平 成　27 年 9 月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	依頼を受け、フルート奏者と共に敬老会コンサートに出場する。講和を行うとともに、独唱「夏の思い出」「浜辺の歌」等、ピアノ伴奏、会場の歌唱指導・指揮を行う。
27）音楽活動 ＜日本の心の歌を歌い継ぐ～＞	共同	平 成　27 年 11 月	三郷デイサービス	奈良学園大学学生とともに、わらべうた・唱歌・童謡の歌唱「虫の声」他。歌唱及び歌唱指導を行う。学生の演奏を披露し喜んでいただく。
28) 音楽活動 ・社会貢献活動 ＜日本の心の歌 を歌い継ぐ～＞	共同	平 成　28 年 8 月	王寺ディサービスセンター	奈良学園大学学生をとともに、音楽活動を行う。わらべうた・唱歌・童謡の歌唱「虫の声」他。歌唱及び歌唱指導を行う。学生の演奏も披露し喜んでいただく。
29）＜奈良学園大学から音楽の贈り物＞（社会貢献活動）	共同	平 成　28 年 9 月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生を引率し、音楽活動を行う。わらべうた・唱歌・童謡の箏演奏、歌唱及び歌唱指導を行う。「我は海の子」等。
30）＜奈良学園大学から音楽の贈り物＞（社会貢献活動）	共同	平 成　29 年 1 月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生をとともに、音楽活動を行う。童謡・唱歌・わらべうたの講話・独唱「荒城の月」他。ピアノ伴奏・歌唱指導を行う。学生の振り付けや様々な楽器を入れるなど楽しんでいただく。
31）信貴山寅祭りコンサートでの講話と演奏	共同	平 成　29 年 2 月	信貴山朝護孫子寺	信貴山寅祭りコンサートに依頼を受け出演。「箏・尺八演奏と日本の心の歌」和楽器と歌唱のコラボレーションを披露する。「冬景色」「雪の降る街を」等
32) 音楽活動 ・社会貢献活動	共同	平 成　30 年 1 月	三郷やわらぎデイサービス	奈良学園大学学生を引率し、音楽活動を行う。童謡・唱歌・ピアノ演奏を披露し、学生の振り付けを入れるなど、共に歌い合い楽しんでいただく。

33）音楽活動 ・社会貢献活動	共同	平成 30 年 1 月	リーベルホール	王寺町歌声サロンに依頼を受けて＜奈良学園大学から音楽の贈り物・歌と箏とピアノ演奏＞　学生の日頃の練習の成果を披露するとともに、共に歌い合う
34）信貴山寅祭りコンサートに出演	共同	平成 30 年 2 月	信貴山朝護孫子寺	「箏・尺八演奏と日本の心の歌」和楽器と歌唱のコラボレーションを行う。筑紫鶯美会篠原歌鶯さんはじめ、まほろば会（尺八）と共に演奏する。

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日
氏名　山田　明広

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
哲学、文学、文化人類学	漢文学、中国哲学、中国文学、文化人類学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 （1）問題解決能力を養わせるための授業の実践	平成20年4月1日～平成 20 年 9 月 20 日・平成 22 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成20年4月～平成23年9月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）のうち初年度（平成20年4月～平成20年9月）担当分において、また、関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成22年4月～平成24年3月に担当した「中国学演習」（専門教育科目、３年次配当、通年、必修２単位）において、先に基礎的な知識を講義し、その上で大まかなテーマを与えて受講生に順番に発表させ、そして、全体で討論させることにより、受講生に自ら問題を発見して考え、調査し、解決するという能力を養わせた。
（2）画像・映像資料を活用した分かりやすい授業の実践	平成20年4月1日～平成 24 年 3 月 31 日・平成 26 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 20 年 4 月～平成 23 年 9 月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月に担当した「中国学演習」（専門教育科目、３年次配当、通年、必修２単位）、平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、本人が現地で撮影した写真および映像を用いて中国・台湾の宗教事象を中心とする諸文化を解説することにより、学生が授業内容について理解しやすくなっているとともに、興味を持つようになった。
（3）リアクションペーパー使用による授業改善の工夫	平成26年4月1日～平成 30 年 3 月 31 日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「中国文学史Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科

		教員免許取得のための科目）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、適宜リアクションペーパーを使用して受講生から授業に対する感想・要望・質問を聞き、授業改善に生かした。また、寄せられた質問については、後の授業にて可能な限り回答するなど、学生との意思疎通を図った。
（４）効果的な漢文教育法の実践	平成26年4月1日～平成 30 年 3 月 31 日	花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成30年3月20日にかけて担当した「漢文学Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「漢文学Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として平成28年4月～平成28年8月にかけて、また、同大学同学部同学科の特任講師として平成29年4月～平成29年8月にかけて担当した「漢文学入門」（専門科目、２年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）、および同大学同学部同学科の特任講師として平成28年9月～平成29年3月にかけて担当した「漢文学Ⅰ」（専門科目、２年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、漢文法および漢文句法を受講生に一通り網羅的に解説し演習問題を解かせて理解・定着させた上で漢文の文章読解を行わせることにより、受講生が比較的正確で安定的に漢文を読解することが可能となった。
（５）パワーポイントの効果的活用による分かりやすい授業の実践	平成26年11月27日・平成27年11月30日・平成28年4月～平成30年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）のうち「台湾の道教式死者救済儀礼」についての講義において、平成 28 年 9 月～現在にかけて担当している「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）の全講義において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）の全講義において、パワーポイントで作成したスライドを全面的に活用することにより、学生にとって視覚的に見やすくまた理解しやすい授業を実践している。その結果、奈良県立医科大学の講義において実施したリアクションペーパーにおいては、見やすく分かりやすいといった類の意見が多数寄せられた。
２　作成した教科書，教材 （１）オリジナルプリント教材の作成	平成20年4月1日～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 20 年 4 月～平成 23 年 9 月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月にかけて担当した「中国学講義 a」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「中国学講義 b」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月に担当した「アジア文化研究 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジア文化研究 2」（専門教育科目、２年次以降配当、

		秋学期、選択２単位）、平成 23 年 4 月～現在にかけて担当している「中国思想文化論 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「中国思想文化論 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 24 年 4 月～平成 25 年 9 月に担当した「漢字・漢文論１」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「中国文学史Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、毎時間、事前に要点をまとめたオリジナルのプリントを作成し、そのプリントを使用して講義することで、学生の理解に資している。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 （１）近畿大学経済学部国際経済学科平成24年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 25 年 3 月	「中国語コミュニケーション 2」および「基礎中国語Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目においても「授業内容に満足」ないし「ほぼ満足」と答えた学生が８割以上を占めていたほか、学生から「説明が丁寧で分かりやすい」などといったコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（２）関西大学文学部総合人文学科平成26年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 26 年 9 月	「中国思想文化論 1」および「現代アジアと日本 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において評価平均が 4.0（満点 5.0）以上であった。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、「中国思想文化論 1」では評価平均が 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では評価平均が 4.1 となり、いずれも全学の平均である 4.0 を超えることができた。
（３）関西大学文学部総合人文学科平成26年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 3 月	「中国思想文化論 2」および「現代アジアと日本 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目についての評価平均が「中国思想文化論 2」では 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では 4.2 となり、いずれの科目においても全学の平均 4.0 を超えることができた。
（４）関西大学文学部総合人文学科平成27年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 9 月	「中国思想文化論 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、多くの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるもの

		であった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
（5）関西大学文学部総合人文学科平成27年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国思想文化論 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
（6）近畿大学法学部平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語総合 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「この教員の授業を 10 点法で評価して下さい」という項目についての平均値が 8.6 となり、全科目平均の 8.3 を超えることができた。また、「とても分かりやすかった」や「説明が丁寧であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（7）花園大学文学部日本文学科平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「漢文学Ⅱ」および「中国文学史Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「先生の授業に対する取り組みに熱意や情熱を感じられますか」という項目については、前者が 4.0（満点 5.0）、後者が 4.28 といずれも比較的高い評価が得られた。
（8）奈良県立医科大学医学部看護学科平成27年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に満足できる授業であった」という項目についての平均値が 4.57（満点 5.0）となり、全体平均 4.1 を大きく超えるなど、高い評価が得られた。
（9）奈良教育大学平成28年度前期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「中国語」および「漢文学特論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、両科目ともほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。また「わかりやすい授業であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
(10) 奈良県立医科大学医学部看護学科平成28年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「アジア文化論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「授業を受けることでテーマについてより興味・関心を持てた」および「総合的に満足できる授業であった」という項目の平均値がともに 4.0 近くなるなど比較的高い評価が得られた。
(11) 奈良学園大学平成29年度における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「漢文学入門」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において当該科目の平均値が全体の平均値を超えることができた。特に、「授業に対する熱意や意欲」および「有効な時間の使い方」の項目について、4 段階中 3.6 という高い評価が得られ、全体平均を大きく上回った。そして、その結果、総合評価でも 4 段階中 3.5 という全体平均を大きく上回る高評価が得られた。
(12)関西学院大学社会学部平成 29 年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「中国語Ⅰ」および「中国語Ⅲ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および学部平

		均を超えていた。特に、「あなたは、全体としてこの授業に満足していますか」という項目については、前者が 4.6、後者が 4.9（いずれも満点 5.0）といずれもかなり高い評価が得られた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 〔社会人対象の講演〕 （1）台湾の道教の現状と道教儀礼について	平成27年9月11日	大阪日中友好協会の支援の下で設立された「くらしの智恵：道教に親しむ会」の第3回会合において、当会の要請により一般向けに行った講演。まず、中国道教の歴史について触れることで道教とはいかなる宗教か紹介した後、台湾では現在いかなる道教信仰が行われているか儀礼を中心に説明した。
〔展覧会の解説の翻訳〕 （1）「道教信仰文化特展」の解説の日本語訳	平成28年11月5日～平成29年2月19日	台湾台南市鄭成功文物館で行われた「道教信仰文化特展」における李豊楙教授による中国語の解説文を日本語に翻訳した。
5　その他 〔科目担当実績〕 （1）関西大学における中国思想史に関する講義	平成20年4月1日～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成20年4月～平成22年3月に「中国学講義a,b」を、平成22年4月～平成23年3月に「アジア文化研究1,2」を、平成23年4月～現在にかけて「中国思想文化論1,2」を担当し、中国思想史に関する講義を行っている。いずれの科目においても、先秦から明代までの中国思想・宗教について儒教・仏教・道教の三教を基軸に通史的に講義しているが、思想・宗教のみならずその背景にある社会的文化的事象についても説明するなどして、受講生が理解しやすくなるよう工夫している。
（2）関西大学における現代の東アジアの宗教文化に関する講義	平成20年4月1日～平成23年9月20日・平成26年4月1日～平成30年3月20日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成20年4月～平成23年9月に「東洋比較文化論」（春学期のみ開講科目）を、平成26年4月～平成28年3月に「現代アジアと日本1,2」を、平成28年4月～平成30年3月に「アジアの伝統文化と現代Ⅰ,Ⅱ」を担当し、主として現代の東アジアの宗教文化に関する講義を行った。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いたり講義のテーマに関わる映画を見せたりして、受講生の興味を喚起できるよう工夫した。授業において行うリアクションペーパーには、画像・映像資料が用いられていて分かりやすいとの反響が多数見られた。
（3）近畿大学における初級中国語に関する講義	平成21年4月1日～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として専門科目「基礎中国語Ⅰ,Ⅱ」（平成21年4月～平成）を、経営学部・法学部・理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として外国語科目「中国語総合1,2」（経営学部：平成22年4月～平成23年3月、法学部：平成24年4月～現在、理工学部：平成28年4月～現在）を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。

（４）関西大学における中国学専修3年次生に対する演習科目	平成22年4月1日～平成24年9月20日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成22年4月～平成24年3月に「中国学演習」（通年）を、平成24年4月～平成24年9月に「中国学専修ゼミ3」（春学期のみ担当）を担当し、中国学専修3年次の学生に対して卒論執筆に必要な情報・知識を教えるとともに、必要な能力を養わせた。文献検索の仕方、辞書の引き方、中国思想・宗教に関する基礎知識を講義して卒論執筆に必要な知識を身に付けさせ、その後、漢文読解を行って卒論執筆に必要な文献読解力を養わせ、最後に論文の書き方について講義してから受講生の関心あるテーマについて発表させ、全体で討論させることで問題意識を喚起させた。
（５）近畿大学における中級中国語に関する講義	平成22年4月1日～平成28年3月31日	近畿大学生物理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成22年4月～平成23年3月に「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」を、理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成24年3月に「中国語総合3,4」を、文芸学部基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成28年3月に「中国語総合C,D」を担当し、2年次以上の学生に対して中級中国語を講義した。生物理工学部には中国語会話に関する授業がないため、「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」では聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするといった授業を行ったが、他の学部には別に「中国語コミュニケーション」という中国語会話に関する授業が存在するため、「中国語総合3,4」および「中国語総合C,D」では、読む・書くといった能力の向上に焦点を絞り、教科書と演習問題を中心とした授業を行った。
（６）近畿大学における中国語会話に関する講義	平成23年4月1日～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として外国語科目「中国語コミュニケーション1,2」を担当し、中国語会話に関する講義を行った。中国語の基本文法の確認を行ってから、その文法事項を会話の上でどのように用いるか講義するなど、種々の表現が可能となるような授業を行っている。また、教科書のみならずリスニング教材を用いるなど、「話す」だけでなく「聞く」という方面の能力も身に付くよう工夫した。
（７）関西大学における漢字論・漢文講読に関する講義	平成24年4月1日～平成26年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成24年4月～平成26年3月に「漢字・漢文論1,2」を担当した。本科目では、最初に、漢文を構成する漢字の歴史や変遷について講義して後、漢文の作品の講読を行った。訓点付きの漢文の読解から始めて次第に訓点のない漢文の読解へと移行するなど、無理なく高度な漢文の読解ができるよう工夫した。
（８）奈良県立医科大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年3月31日	奈良県立医科大学医学部看護学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。

（9）奈良教育大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年9月30日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（１０）花園大学における漢文学に関する講義	平成26年4月1日～平成30年3月20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として、平成26年4月～現在にかけて「漢文学Ⅰ，Ⅱ」を、平成26年9月～平成27年3月に「漢文学基礎」（後期のみ開講科目）を担当し、漢文読解に関する講義を行った。前者においては､漢文法･語法を網羅的に解説して後、訓点付きの漢文の作品の講読を行った。後者においては、訓点付きの漢文の作品の読解から開始し、次第に訓点のない漢文の作品の読解へと移っていくなど、読解中心の授業を行った。
（１１）花園大学における中国文学史に関する講義	平成26年4月1日～平成30年3月20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として「中国文学史Ⅰ，Ⅱ」を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から明代までの中国文学の歴史について、毎回テーマを定めできる限り作品にも触れつつ通史的に概観した。毎回、ただテーマについて説明を行うだけではなく、その背後にある歴史的・社会的・文化的事象についても触れ、その作品や事象が起こった原因と結果についても考えていくよう工夫した。
（１２）奈良学園大学における漢文学に関する講義	平成28年4月1日～現在に至る	平成28年4月～8月までは奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として、平成28年9月～平成30年3月にかけては奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特任講師として、前期に「漢文学入門」および「漢文学Ⅱ」を、後期には「漢文学Ⅰ」および「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」を担当した。前期の「漢文学入門」においては、訓点付きの漢文を独力で読むための基礎学力を養生することを目標として、漢文の基礎事項・文法を講義し、「漢文学Ⅱ」においては、「漢文学Ⅰ」から一歩進めて抽象的・思想的内容を含んだ文章でも主体的に読み進めることができることを目標に、難易度の高い散文作品をその背景なども説明しつつ読解した。後期の「漢文学Ⅰ」においては、比較的平易な訓点付きの漢文の作品の講読し、「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」においては、「漢文学Ⅱ」よりもさらに進めて、返り点のない文章の読解を試みた。いずれの科目も教員免許取得のための科目であるため、いかに漢文を教えるべきかといった漢文教育という視点からの講義も行った。
（１３）奈良県立医科大学におけるアジアの文化に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月20日	奈良県立医科大学医学部教養教育部門非常勤講師として「アジア文化論」（リレー講義、前期のみ開講）を担当し、本人は中華文化圏の諸文化について講義している。中華文化圏の地理と言語・飲食・年中行事・祭祀・喪葬のそれぞれをテーマとする５回に渡る授業を３クラスにおいて講義している。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いるなど受講生が少しでも興味を持てるよう工夫した。

（１４）奈良教育大学における中国文学史に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月30日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「漢文学特講」（集中講義）を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から現代までの中国文学および芸能の歴史について、可能な限り作品にも触れつつ通史的に概観したが、特に中国の芸能の歴史については、画像・映像資料を用いるなどして、受講生にとって分かりやすく興味を持ちやすい授業となるよう工夫した。
（１５）奈良学園大学における教職者として必要な表現力に関する講義	平成28年9月20日～現在に至る	平成28年9月～平成30年3月にかけて奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特任講師として、「教職表現力演習Ⅰ」および「教職表現力演習Ⅱ」を担当した。「教職表現力演習Ⅰ」は主として1年生を対象とした、「教職表現力演習Ⅱ」は主として2年生を対象とした科目で、いずれも、教職者としてふさわしい「文章表現力」を身につけることに主眼をおく。テキストのみならず、毎回小テストを行うなど、現代日本語の知識と運用能力の向上を目指すべく工夫した授業を行っている。
（１６）関西学院大学における初級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅰ，Ⅱ」を担当し、主に中国語未習の大学1年生に対して初歩的な中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで１つのクラス授業を担当し、1週間に各１コマずつ、合計２コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。
（１７）関西学院大学における中級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅲ,Ⅳ」を担当し、すでに1年間中国語を学んだことのある２年次以上の学生に対して、中級中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで１つのクラス授業を担当し、1週間に各１コマずつ、合計２コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 （１）博士（文学）	平成20年3月31日	関西大学文博第110号、論文題目「道教斎儀の研究」
２　特許等 なし。		

3　実務の経験を有する者についての特記事項 〔共同研究実績〕 （1）京都大学人文科学研究所「三教交渉の研究（Ⅱ）」共同研究班に参加	平成17年4月～ 平成22年3月	京都大学人文科学研究所において麥谷邦夫教授（現・名誉教授）を班長として平成 17 年 4 月～平成 22 年 3 月の 5 年間に渡って運営された「三教交渉の研究（Ⅱ）」共同研究班に班員として加わった。本研究班は、上記「三教交渉の研究」共同研究班の後を承けたものであり、本人は主として定期的に開かれた研究会に参加して陳垣『道家金石略』に収められている唐以前の金石資料の会読を行った。
（2）文部科学省学術フロンティア推進拠点・関西大学アジア文化交流研究センターにおける共同研究プロジェクトに参画	平成18年4月～ 平成22年3月	平成17年4月に文部科学省学術フロンティア推進拠点として設置された関西大学アジア文化交流研究センターの「東アジアにおける文化情報の発信と受容」をテーマとする5年間の共同研究プロジェクトに、平成18年4月～平成20年3月にはリサーチアシスタントとして、平成20年4月～平成22年3月にはポスト・ドクトラル・フェローとして参画した。思想・儀礼研究班に所属し、台湾の道教儀礼を中心に宗教儀礼の研究に従事するとともに、センターの事務作業や研究会・シンポジウムの運営にも携わった。本研究プロジェクトに関わる研究業績として、共著書4冊、論文4本、学会発表4回、翻訳1本がある。
（3）関西大学グローバＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」（ICIS）の「ICIS『朱子語類』研究会」に参加	平成19年12月～ 平成21年3月	関西大学グローバＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」（ICIS）の進める書院・教育研究の一環として組織された「ICIS『朱子語類』研究会」に参加し、主として『朱子語類』巻89・礼六・喪の訳注の作成に従事するとともに、定期的に開催された研究会に参加し、各メンバーが作成した訳注の検討を行った。本研究課題に関わる研究業績として、研究報告書1冊（共著）がある。
（4）文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査」に参加	平成20年4月～ 平成22年3月	関西大学・二階堂善弘教授を研究代表者として平成17年4月～平成22年3月にかけて行われた文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査」（研究課題番号 17083038）に平成19年4月より研究協力書として参加し、主として台湾の道教儀礼についての調査・研究を行った。本研究課題に関わる研究業績として、学会発表1回がある。
（5）文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」に参加	平成21年4月～ 平成25年3月	関西大学・吾妻重二教授を研究代表者として平成21年4月～平成25年3月にかけて行われた文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」に研究協力書として参加し、主として『朱子語類』巻89・礼六・喪の訳注の作成に従事するとともに、定期的に開催された研究会に参加し、各メンバーが作成した訳注の検討を行った。本研究課題に関わる研究業績として、研究報告書3冊（いずれも共著）がある。
（6）関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に参加	平成22年4月～ 平成23年3月	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に非常勤研究員として参加し、主として台湾の道教儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、共著1冊、論文1本がある。

（7）慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に参加	平成23年4月～平成26年3月	慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・野村伸一教授を研究代表者として進められた高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に研究協力者として参画し、主として中国および台湾の道教・民間信仰の調査・研究に従事するとともに、不定期的に開催された研究会に参加し、日本・中国・韓国の基層文化に関する研究報告を聞き、討論した。本研究課題に関わる研究業績として､共著１冊がある。
（8）関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に参加	平成23年4月～平成25年3月	関西大学・二階堂善弘教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に非常勤研究員として参加し、主として中華文化圏と日本の喪葬儀礼の比較研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、論文１本がある。
（9）関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に参加	平成25年4月～平成28年8月、平成29年4月～現在に至る	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に平成 25 年 4 月～平成 28 年 8 月にかけては非常勤研究員として、平成 29 年 4 月～は客員研究員として参加し、主として中華文化圏の道教の死者救済儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行っている。
４　その他 〔論文の引用実績〕 （1）『唐前道教儀式史綱』が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」を引用。	平成20年12月	呂鵬志『唐前道教儀式史綱』（中華書局、2008年）、223頁の注１において、塗炭斎法に関する参考文献として学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」が引用されている。また、292頁において、「参考文獻」のうちの「近人論著」の一つとして同論文が再度引用されている。
（2）「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成22年6月	**姜守誠**「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」（南華大學宗教學研究所『世界宗教學刊』第15期、2010年）、172頁において、「参考文獻」の一つとして博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。
（3）「淡水靈寶道壇的功德儀式：以混玄壇為核心的探討」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成23年年9月	蕭進銘「淡水靈寶道壇的功德儀式：以混玄壇為核心的探討」（財團法人施合鄭民俗文化基金會『民俗曲藝』173号、2011年）、239頁～240頁の本文および注16において、博士論文「道教斎儀の研究」が引用され、本人の台湾南部霊宝派抜度儀式に関する研究について、日本の数名の先学の研究を引き継いでいるが、功德儀礼中の専門的テーマについてより深く検討していると評されている。
（4）「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成24年12月	謝世維「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」（中央研究院歷史語言研究所『中央研究院歷史語言研究所集刊』第83本第４期、2012年）、741頁の本文において、本人の現代の道教式功德儀礼に関する研究は台南地域と高雄・屏東地域の儀礼の次第を比較することで異なる道壇による功德儀礼の相違を考察したものであると紹介され、同注12で博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。

（5）「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」を引用。	平成25年5月	李豊楙「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」（李豊楙、廖肇亨編『沉淪、懺悔與救度：中國文化的懺悔書寫論集』、中央研究院文哲所、2013年）、81頁の本文において、塗炭斎が次第に衰退した原因はすべてその自虐的行為に帰せられていると述べられており、同頁注16において、そのことを明確に述べた文献として、学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」が引用されている。
（6）「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」が「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」を引用。	平成26年12月	張超然「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」（謝世維主編『經典道教與地方宗教』、政大出版社、2014年）、132頁の注１において、台湾の道教儀礼に関する研究の中でも異なる時代の文献を比較することで儀礼の変遷をたどった研究の一つとして、**学術論文「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」が**引用されている。
（7）「産難の予防、禳除と抜度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」が「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」を引用。	平成 27 年 3 月	謝聡輝著、山田明広訳「産難の予防、禳除と抜度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」（野村伸一編著『東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―』、風響社、2015年）、355 頁注 28 において、台湾道教の異常死者救済に関する参考文献として、学術論文「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」が引用されている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.東アジアの儀礼と宗教	共著	2008年 平成20年8月	雄松堂出版	2007年7月20日～21日に関西大学アジア文化交流研究センターで開催された国際シンポジウム「東アジアの儀礼と宗教」の報告論文集。 （A5判・全425頁） 編者　吾妻重二・二階堂善弘 共著者　李豊楙・三浦國雄・大形徹・黄進興・山田明広・ほか9名 本人担当部分　第4部「台湾道教に見られる合符童子科儀の成立に関する一考察」(383頁～404頁) 現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。
2.東亞文化交流與經典詮釋	共著	2008年 平成20年12月	臺大出版中心	2007年10月26日～27日に台湾大学にて台湾大学人文社会高等研究院「東亞經典與文化」研究計画と関西大学アジア文化交流研究センター共催により執り行われた「東亞文化交流與經典詮釋」国際学術研討会の報告論文集。 （A5判・全650頁） 編者　徐興慶 共著者　黄俊傑・松浦章・甘懐真・山田明広・藤田高夫・ほか14名 本人担当部分　壹、文化交流篇「臺灣道教儀式文書之差異——臺南與高屏地區的比較」(257頁～294頁 現在の台湾道教の功徳儀礼においては、昔の行政文書を模倣し漢文体により記された儀礼文書が多数使用されるが、本人が台湾で現地調査を行い収集した台南地域の儀礼文書と高雄・屏東地域の儀礼文書それぞれを読解し、種類、数量、内容、使用方法などといった観点から相互に比較することにより、隣り合う二地域の道教の功徳儀礼の儀礼文書にはいかなる共通点や相違点が見られ、それらは何を意味するのか考察した。中国語により著す。
3.東アジア文化交流と經典詮釋	共著	2009年 平成21年3月	関西大学アジア文化交流研究センター	2007年10月26日～27日に台湾大学にて台湾大学人文社会高等研究院「東亞經典與文化」研究計画と関西大学アジア文化交流研究センター共催により執り行われた「東亞文化交流與經典詮釋」国際学術研討会の報告論文集。上記5『東亞文化交流與經典詮釋』の日本語版。 （A5判・全511頁） 編者　関西大学アジア文化交流研究センター 共著者　松浦章・黄俊傑・藤田高夫・甘懐真・山田明広・ほか14名

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分　第 1 篇文化交流篇「台湾の道教儀礼文書の地域的差異―台南地域と高雄・屏東地域で使用される功徳儀礼文書の比較―」（113 頁～148 頁） 　上記 2『東亞文化交流與經典詮釋』において本人が担当した部分「臺灣道教儀式文書之差異――臺南與高屏地區的比較」の日本語版。
4.道教と共生思想	共著	2009 年 平成21年10月	大河書房	2008 年 12 月 17 日～19 日に東洋大学にて開催された「第三回日米道教研究会議」の報告論文集。 （A5 判・全 404 頁） 編者　田中文雄・テリークリーマン 共著者　山田利明・テリークリーマン・山田明広・森由利亜・丸山宏・ほか 19 名 本人担当部分　十三「台湾正一道紅頭道士の午朝科儀」（249 頁～272 頁） 　現在の台湾の正一道紅頭道士が行う儀礼のうち、高位の神々に謁見して表疏文を上奏し祈願するという意義を持つ朝科、中でも最も複雑とされる午朝科儀について、まず、本人が現地調査を行い収集した漢文体による文字資料と画像・映像資料とを読解・分析することで、その儀礼構造や内容、使用される儀礼文書の内容を詳細に解明した。そして、その上で、紅頭道士の行う他の朝科とも相互に比較し午朝科儀特有の特色を洗い出すことで、午朝科儀が最も複雑とされる理由についても考察した。
5.東アジアにおける文化情報の発信と受容	共著	2010年 平成22年2月	雄松堂出版	2005 年 4 月～2010 年 3 月の 5 年間に渡り「東アジアにおける文化情報の発信と受容」をテーマに研究活動を行ってきた関西大学アジア文化交流研究センターの研究成果報告論文集。 （A5 判・全 544 頁） 編者　松浦章 共著者　藤田高夫・沈国威・三浦國雄・山田明広・徐興慶・ほか 16 名 本人担当部分　思想・儀礼研究班「台湾道教の異常死者救済儀礼について―台湾南部地域を中心として―」（331 頁～362 頁） 　台湾南部地域において見られる道教の異常死者救済儀礼について、いかなる場合にいかなる特殊な儀礼が行われるのか紹介したもの。まず、台湾における正常死と異常死の定義を述べ、それから、台湾道教では亡魂がいかなる異常死を遂げた場合に道士はいかなる特殊な儀礼を行うべきだと考えられているか紹介、その後、道教の異常死者救済儀礼それぞれの儀礼構造や内容、功能について分析し、最後に、これらの作業を通して、人々はなぜこのような特殊な儀礼を必要とするのか考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.次世代国際学術フォーラム第２集・文化交渉による変容の諸相	共著	2010年 平成22年3月	関西大学文化交渉学教育研究拠点	2009年12月12日～13日に関西大学にて関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）主催で挙行された「第 2 回次世代国際学術フォーラム」の報告論文集。 （A5判・全357頁） 編者　篠原啓方・井上光幸・黄蘊・氷野善寛・孫青 共著者　ジョセフ・ボスコー・山田明広・井黒忍・川端泰幸・崔元硯・ほか13名 本人担当部分　セッション１「台湾の道教儀礼に見られる「水」」（53頁～74頁） 現在の台湾の道教儀礼の中から実際に「水」を使用する「敕水禁壇」などといった科儀や「噀水」などといった動作を抽出し、それらはいかなる目的の下、いかにして行われるのか紹介するとともに、それらにおいて「水」はいかなる意義を持ち、またいかに作用して儀礼の効能が発生しているのか、本人が台湾にて現地調査を行い収集した漢文体による文字資料や『道蔵』等道教関連文献に収められた儀礼関連の漢文資料などを読解することにより考察した。
7.日本古代中世の仏教と東アジア	共著	2014年 平成26年3月	関西大学出版部 全345頁	関西大学東西学術研究所の日本仏教研究班の研究成果報告論文集。東アジアにおける仏教史の総合的な様相を提示する書。 （A5判・全345頁） 編者　原田正俊 共著者　原田正俊・西本昌弘・長谷洋一・山田明広・上川通夫・ほか6名 本人担当部分　第二部第四章「現代台湾の鬼月における無縁死者救済儀礼について―道教の普度法会と仏教の盂蘭盆会の比較―」(207頁～240頁) 台湾の鬼月において無縁仏救済のために行われる「普度法会」および「盂蘭盆会」という祭祀・儀礼について、まず、現地調査により得た事例を用いてその現状を紹介し、その上で、仏教儀礼および道教儀礼関連の漢文資料を読解することを通じて、「中元」、「盂蘭盆」、「施餓鬼」（放焔口）という関連する事項の原義を示し、さらに、これらの事項の歴史的変遷を追うことで、「普度法会」および「盂蘭盆会」の成立と展開を明らかにした。
8.台湾道教における斎儀―その源流と展開―	単著	2015年 平成27年2月	大河書房	漢文文献の読解と現地調査を有機的に組み合わせた研究方法を用いて、過去の道教儀礼と現在の台湾の道教儀礼の両方について分析することにより、道教の斎儀が現在に至るまでにいかに変容したのか、また反対に今なお古い斎儀の伝統がどれほど保存されているのか示そうとした書。三部七章より成る。本書を著すことにより、現在台湾で見られる道教儀礼の中には、歴史的意味での斎儀と現在的意味での斎儀の両方が並存しているということを明らかにした。 （A5判・全260頁） 平成26年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成図書（交付額1,100,000円）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―	共著	2015年 平成 27 年 3 月	風響社	慶應義塾大学東アジア研究所の研究プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容」(2011 年度～2012 年度）の研究報告論文集。 （A5 判・全 750 頁） 編者　野村伸一 共著者　野村伸一・葉明生・謝聡輝・山田明広・鈴木正崇・ほか 7 名 本人担当部分　第二部第四章「福建泉州地域の寺廟・宗祠調査報告：王爺および観音信仰を中心に」(359 頁～393 頁）を藤野陽平と共著 2011 年 12 月 27 日～2012 年 1 月 2 日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などを現地調査し見聞したものについて報告するとともに現地で見られた王爺信仰と観音信仰の特徴について考察したもの。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多くの廟において断絶してしまっていることを指摘した。本人は報告部分のおよそ 7 割（担当部分抽出不可能）および考察部分の全般（384 頁～390 頁）を担当した。 本人担当部分　第二部第五章第六節 6「鹿港天后宮における普度法会次第」（435 頁～445 頁） 2013 年 8 月 21 日（旧暦 7 月 15 日）に台湾彰化県の鹿港天后宮において施宣熹道長率いる保真壇により実施された道教の普度法会（無縁死者救済儀礼）の調査報告。本人が行った現地調査およびこれまでの先行研究に依拠しつつ主に法会の次第について解説した。また、本法会が一方で死者救済儀礼であるとともに、一方で生者救済儀礼でもあるということを示した。
（学術論文） 1.台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝	単著	2009 年 平成 21 年 3 月	アジア文化交流研究（関西大学アジア文化交流研究センター）第 4 号、397 頁～415 頁	四霊獣の一つである「玄武」をその源流とし、道教や民間信仰において重要な位置を占め、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝について、現在の台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するのか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その意義や効果を指摘するとともに、さらにその結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した。
2.台湾道教に見られる二種類の午朝科儀―儀礼構造の比較を中心として―	単著	2010 年 平成 22 年 2 月	アジア文化交流研究（関西大学アジア文化交流研究センター）第 5 号、355 頁～369 頁	台湾道教で見られる紅頭道士の午朝科儀と烏頭道士の午朝科儀という二種類の午朝科儀について、まず、儀礼構造を中心に相互に比較することで両者の間の共通性と差異性を明らかにし、続いて、道教儀礼関連の漢文文献所載の関連のある儀礼と比較することによって、紅頭道士と烏頭道士はいずれも正一系の道士であるに関わらずなぜこれら二種類の異なる朝科が存在するのかという問題について考察し、併せて両儀礼の成立過程について一仮説を示した論文。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討 （査読付）	単著	2010年 平成22年12月	成大歷史學報（台湾・国立成功大学歴史学系）第39号、177頁～207頁	現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。
4.台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―	単著	2011年 平成23年4月	東西学術研究所紀要（関西大学東西学術研究所）第44輯、109頁～119頁	現在、台湾の高雄・屏東地域と台南地域において見られる道教の縊死者に関する儀礼、すなわち抽楹放索科儀と絞台放索科儀の台湾における地域的差異について考察した論文。本人がそれぞれの地域において現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いてそれぞれの儀礼の儀礼構造や内容、目的、意義などを詳細に描写し、さらに、両者を相互に比較して、両者の間にはいかなる相違性や共通性が見られ、それらはいかなる意味を有するのか検討した。
5.台湾道教の水死者救済儀礼とその文書	単著	2012年 平成24年4月	東西学術研究所紀要（関西大学東西学術研究所）第45輯、253頁～277頁	台湾道教の水死者救済儀礼である転水藏科儀について、まず、本人が台南地域と高雄・屏東地域で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いて各地域の転水藏科儀の構造や内容、目的、意義を解明してから両者を比較し、さらに、使用される文書についても、いかなるものが存在し、いかなる効能を有するか、地域ごとに考察してから相互に比較することで、転水藏科儀とその文書はいかなるものであり、それらにはいかなる地域差が見られるか考察した。
6.道教血湖儀礼の初步的考察―台湾南部地区を例として― （査読付）	単著	2014年 平成26年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第35号、113頁～137頁	道教において女性が難産死した場合に行われる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源および歴史的変遷を道教儀礼関連の漢文文献を読解することによって検討し、その後、台湾で現地調査を行って収集した台湾南部地域の道教血湖儀礼に関する画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いて、その儀礼構成や内容など具体的様相を明らかにするとともに、さらに、地域的差異、通常死の場合に行われる功徳儀礼との間の差異、歴史的位置づけなどを考察した論文。
7.台湾道教の異常死者救済儀礼	単著	2015年 平成27年8月	アジア遊学（勉誠出版）第187号「怪異を媒介するもの」、249頁～258頁	台湾道教で、縊死、溺死、難産死などの異常と認められる死因により人が亡くなった場合に行われる「抽楹放索」、「転水藏」、「血湖」などといった特殊な儀礼について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。最初に、通常死の場合に行われる死者救済儀礼はいかなるものか検討した後、異常死者救済儀礼のうち「抽楹放索」、「転水藏」を取り上げ、その実施法を具体的に描写することで、その意義や効能について考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8.台湾鹿港地域の道教式功徳儀礼について（査読付）	単著	2016年 平成28年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第37号、297頁～317頁	本人が2013年9月6日に台湾彰化県鹿港鎮にて道教式功徳儀礼を調査したその報告論文。まず、調査した功徳儀礼の基本データおよび儀礼のプログラムを提示し、その後、提示したプログラムの順に従って功徳儀礼を構成する各科儀についてその実施方法や効果、意義、使用された文書などを叙述し、最後に、ここまでの考察および本人のこれまでの経験を踏まえて台湾中部地域の道教式功徳儀礼の特徴であると言えそうなことを提示した。
9.道教実践者としての李白―李白の詩を通しての考察―	単著	2016年 平成28年3月	奈良教育大学 国文 研究と教育（奈良教育大学国文学会）第39号、19頁～31頁	盛唐の詩の大家・李白が道教信者としていかなる道教的実践を行い、それは彼の漢詩の中ではどのように表現されているのか、李白の漢詩を分析することにより考察した論文。まず、李白の事績について述べ、それから、李白の漢詩の分析を通じて李白が授籙、煉丹服餌、存思といった道教的実践を行っていたことを提示し、最後に、これまでの考察を踏まえて、李白が天宝三年に長安の宮廷から放逐されたという挫折経験は、彼の道教信仰の上で、また詩作および人生の上で、大きなターニングポイントとなる出来事であったと結論付けた。
10.大学での漢文教育における問題点（１）―学生側の問題点：何が学生の漢文読解の妨げになっているか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第46巻10号、14頁～15頁	大学の授業で学生が漢文学を学習するに当たって、何が学生の理解の妨げになっているか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。考察の対象を訓点付きの漢文を読解する場合のみに絞り、その場合、書き下し文から現代語へと翻訳するのが学生にとって最も困難であるとし、その上で、その原因は①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三点にあるとして、各点について詳細に論じた。
11.大学での漢文教育における問題点（２）―教員側の問題点：いかにして学生に漢文読解力を身に付けさせるべきか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第46巻11号、14頁～15頁	学生が漢文学を学習するに当たって困難を覚える原因として①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三要素が考えられるとした上で、教員はこれらの問題を解決して学生に漢文読解力を身に付けさせるために授業ではどのように取り組むべきか、また、学生に漢文に興味を持たせ継続的に学習させるにはどうすべきか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。
12. 台湾道教打城科儀についての初歩的考察	単著	2017年 平成29年9月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）、第7集、97～109頁	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 〔国際会議等発表〕 1.臺灣道教儀式中的玄天上帝	—	2008 年 平成20年10月	2008宗教藝術國際學術研討會 （於台湾・国立屏東教育大学）	道教の中でも北極四聖の一人として高位の神に位置づけられ、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝が、台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した中国語による研究発表。事前審査あり。発表持ち時間約20分。
2.台湾正一道紅頭道士の午朝科儀	—	2008 年 平成20年12月	第3回日米道教研究会議「道教と共生思想」 （於東洋大学）	台湾の中北部に分布する正一派の道士が祈安醮などにおいて行う四種の朝科の中でも最も複雑とされる午朝科儀に関して、儀礼中に使用される文書、儀礼の構造や内容、および他の朝科との相違を本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いて考察した研究発表。会議論文は日本語によって作成したが、他に中国語のサマリーを提出して中国語により報告を行った。発表持ち時間約20分、討論約30分。
3.臺灣道教齋儀文書之分析——臺南地區齋儀文書與高雄·屏東地區齋儀文書之比較	—	2008 年 平成20年12月	道教經典與儀式國際研討會 （於台湾・国立政治大学）	台湾道教の死者救済儀礼である功徳儀礼で使用され、昔の行政文書を模倣し漢文体により記された儀礼文書について、台南地域の功徳儀礼の事例において使用されたものと高雄・屏東地域の功徳儀礼の事例において使用されたものとをその内容の読解などを通して相互に比較することにより、両地域間にはいかなる共通点や相違点が見られ、それは何を意味するのか考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分、討論約30分。
4.臺灣道教的救濟異常死者之儀	—	2009 年 平成 21 年 5 月	台北大龍峒保安宮2009年「台灣道教與民間信仰神譜」國際學術會議 （於台湾・台北大龍峒保安宮）	人が溺死や難産死、縊死といった特殊な死因により死去した場合に亡魂を地獄から救済するために行われる道教式の特殊な儀礼について、その種類や実施方法、儀礼を行うに至る条件、儀礼の目的などを台南地域と高雄・屏東地域に分類して考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分、コメンテーターよるコメント約10分、討論約20分。
5.臺灣道教合符童子科儀之成立的初步探討	—	2009 年 平成21年11月	宗教傳播與宗教衝突：第二屆東亞歷史變遷國際學術研討會 （於台湾・国立成功大学）	現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。発表持ち時間約 20 分、コメント約 10 分、討論約 20 分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.台湾の道教儀礼に見られる「水」と龍神信仰	―	2009年 平成21年12月	関西大学ICIS第2回次世代国際学術フォーラム「文化交渉による変容の諸相―自然信仰、エスニック要素と宗教実践、言語概念と言語教育を手がかりに―」 （於関西大学）	台湾の道教儀礼において見られる「噀水」や「敕水禁壇」などといったその名前に「水」を含み、また実際に「水」を使用する科儀や動作について、それらはいかなる目的の下、いかにして行われるのか紹介するとともに、それらにおいて「水」はいかなる意義を持ち、またいかに作用して儀礼の効能が発生しているのか分析することにより、台湾の道教儀礼と「水」との関わりについて考察した研究発表。発表持ち時間約25分。討論約15分。
7.玄天上帝在臺灣道教儀式中的特徵	―	2010年 平成22年4月	An International Sympo- sium: Divinity and Society: The Cult of Zhenwu in Imperial and Mordern China（中國歷史社會中的真武崇祀國際學述研討會） （於アメリカ・ラトガース大学）	道教の中でも高位の神に位置づけられ、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝が、台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約20分。討論約30分。
8.臺灣道教血湖儀式之初步探討	―	2011年 平成23年6月	第7届国際道教学術研討会 （於中国・湖南省衡山神龍寿岳国際大酒店）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、現在の台湾ではそれがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづいて述べ、さらに、通常死の場合に行われる功徳儀礼と比べるといかなる差異が見られるのか、また、歴史的にはどのように位置づけられるか考察した研究発表。発表時間 10分。討論なし。
9.台湾道教の難産死者救済儀礼とその地域的差異―台湾道教の伝承系統考察の手がかりとして―	―	2011年 平成23年9月	渋沢栄一記念財団寄付・次世代国際フォーラム「世界の中の東アジア―多元文化交渉の諸相」 （於関西大学）	台湾において行われる道教の異常死者救済儀礼のうち、難産死の場合に行われる「血湖」と呼ばれる功徳について、それがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域との間の地域的差異という観点から検討し、さらに、なぜこのような異常死者救済儀礼を特別に行わなければならないのか考察した研究発表。発表時間15分、討論時間10分。
10.道教血湖儀礼の現状について―台湾南部地域の血湖の功徳を例として―	―	2013年 平成24年5月	東アジア文化交渉学会第5回年次大会「描かれる新しい世界：東アジアの歴史・文化と未来」 （於香港城市大学）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源について道教儀礼関連の漢文文献を用いて検討した後、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづき、台湾南部地域の道教血湖儀礼を例として、その具体的様相、地域的差異、通常死の場合に行われる儀礼との間の差異などについて考察した研究発表。発表時間15分、討論時間10分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.道教血湖科儀的初步探討―以臺灣南部地區爲例―	―	2013年 平成24年7月	經典道教與地方宗教國際研討會 （於台湾・国立政治大学）	台湾道教において主として女性が難産死した場合に行われる血湖功徳について考察した中国語による研究発表。まず、道教儀礼関連の漢文文献を用いて難産死者が堕ちるとされる血湖地獄とはいかなるものか確認し、その後、現在の台湾で行われている「血湖功徳」について、本人が台湾南部地域で現地調査を行い得た漢文体のよる文字資料および画像・映像資料にもとづきつつその実施方法や一般の功徳儀礼との差異、使用される文書などについて検討した。発表時間20分、討論時間30分
12.台灣道教的救濟異常死者的儀式――以台南地區的對縊死者及溺水死者的儀式為主	―	2016年 平成28年7月	中国人民大学-羅格斯大学首届国際道教文化前沿論壇 （於中国・湖南省陽光大酒店）	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した中国語による研究発表。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。発表時間20分、討論時間10分。
13. 福建晉江地區的王爺信仰之初步探討	―	2017年 平成29年10月	2017臺灣王爺信仰文化國際學術研討會 （於台湾文化部文化資產局文化資產保存研究中心）	2011年12月27日～2012年1月2日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などについて現地調査を行ったが、その際に調査したもののうち王爺廟および王爺信仰に関するものを抽出し考察を加えることで、当該地域の王爺信仰の特徴を描き出そうとした中国語による研究発表。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多くの廟において断絶してしまっていることを指摘した。発表時間20分、討論時間20分。
〔国内学会発表〕				
1.台湾における異常死者救済儀礼について	―	2008年 平成20年12月	関西大学CSAC第12回研究集会「華南沿海地域における信仰の諸相」 （於関西大学）	最初に台湾において異常死とはいかなるものを指すのか検討し、続いて、異常死の中でも溺死や難産死、縊死といった死因により人が死去した場合に道士によって行われる転水藏、転血藏、絞台放索などといった特殊な儀礼について、その種類や実施方法、儀礼を行うに至る条件、儀礼の目的などを紹介し、さらに、人々はなぜ異常死の場合にこのような特殊な儀礼を行うのか考察した研究発表。発表時間約40分。
2.台湾道教の異常死者救済儀礼で使用される文書について	―	2011年 平成23年3月	日本中国学会第1回若手シンポジウム「中国学の新局面」 （於東京大学）	台湾道教の中でも功徳儀礼が比較的盛んに行われている台湾南部地域の道教を主たる考察の対象として、まず、当該地域において異常死が発生した場合に行われる功徳儀礼や科目にはいかなるものが存在するか列挙し、その上でその際に使用される特殊な儀礼文書にはいかなるものがあり、その内容はいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域の地域差にも留意しつつ考察した研究発表。事前審査あり。発表時間20分。討論時間10分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.道教では縊死者をいかにして救済するのか―台湾南部地域を例として―	―	2014年 平成26年3月	東アジア恠異学会第90回例会 （於園田学園女子大学）	台湾道教の異常死者救済儀礼のうち、人が縊死した場合に行われる特殊な儀礼について考察した研究発表。台南地域の縊死者救済儀礼である「抽楹放索」と高雄・屏東地域の縊死者救済儀礼である「絞台放索」を取り上げ、両者を相互に比較して両者の間に見られる相違について検討することで、「絞台放索」には死者を地獄から救済するという効能があるが、「抽楹放索」にはそのような効能はなくむしろ、縊死の原因である悪煞を祓うことに重点が置かれているという見解を示した。発表時間 60 分、討論時間 60 分。
4.伝統や文化に関する教育から国際理解へ―漢字・漢文教育を例として―	―	2017年 平成29年2月	日本人間教育学会第2回大会 （於奈良学園大学）	教育によって、日本人の中華文化圏の人々に対する理解を増進させるべきことを主張した研究発表。まず、伝統や文化に関する教育と国際理解教育の現状および相互の関係性について振り返り、その上で、中華文化圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏の人々に対する理解が足りないため、彼らに対する対応に不適切な点があるといった問題点を指摘した。そして、旧字体や漢文といった伝統や文化に関する教育に力を入れることで、中華文化圏の人々に対する理解増大につながるのではないかと提言した。発表時間 20 分、討論時間 10 分。
5.台湾道教打城科儀についての初歩的考察	―	2017年 平成29年7月	関西大学東西学術研究所第8回研究例会 （於関西大学）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した研究発表。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。発表時間20分、討論時間10分。
6.伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ―国語科・社会科を中心に―	―	2017年 平成29年9月	第25回日本グローバル教育学会全国研究大会 （於国際医療福祉大学・小田原キャンパス）	学校教育の場で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究発表。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。発表時間 20 分、討論 10 分。
7.道教の血湖地獄とその救済儀礼	―	2017年 平成29年12月	東アジア恠異学会第114回定例研究会 （於園田学園女子大学）	道教の数ある地獄の中でも、主としてお産により亡くなった女性の亡魂が囚禁されると考えられている「血湖」とその救済儀礼について考察した研究発表。まず、道教の血湖地獄がいかなるものであるのか、仏教の血盆地獄と比較しつつ概観し、その後、主として現在の台湾で行われているものを例として、そこから救済するための儀礼はいかなるものであり、通常死の場合の儀礼とはいかなる違いが見られるのか、また地域によりいかなる違いが見られるのかといったことについて考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔翻訳〕 1. 巡狩―儀礼実践のデモンストレーション―	単訳	2008 年 平成 20 年 8 月	東アジアの儀礼と宗教（雄松堂出版）、3 頁～63 頁	原著者　李豐楙 原題　「巡狩：一種禮儀實践的宣示儀式」 台湾中央研究院中国文哲研究所研究員・李豊楙氏が、2007 年 7 月 20～21 日の両日に渡って関西大学にて行われた国際シンポジウム「東アジアの儀礼と宗教」の基調講演において報告を行うために著した中国語の論文「巡狩：一種禮儀實践的宣示儀式」を日本語に翻訳したもの。台湾で盛んに行われている王醮において行われる代天巡狩の儀礼および王府内での儀礼について、その根底には儒教が存在していることを念頭に置きつつ総合的に考察されている。
2. 転経―古霊宝派の宣教方法―	共訳	2009 年 平成21年10月	道教と共生思想（大河書房）、76 頁～86 頁	原著者　Stephan R. Bokenkamp 原題　“Turning the Scriptures”: A　Lingbao Proselytizing Technique アリゾナ州立大学教授 Stephan R. Boken-kamp 氏が著した英語の論文を日本語に翻訳し、訳者注を付したもの。これまで多種多様に研究され、道教研究において極めて重要な古霊宝経について、従来までの論に疑問を投げかけ、新ためて如何なる宗教集団が如何なる目的のもと作成するとともに、如何にしてそれを使用していたのかが考察されている。 共著者　酒井規史・山田明広 本人担当部分　前半部分およびその注（76 頁～81 頁、84 頁～86 頁）
3. 中国北方農村における民間宗教の復興とその策略	単訳	2010 年 平成 22 年 9 月	東アジアの思想と宗教（丸善出版）、293 頁～318 頁	原著者　范丽珠 原題　「中国北方乡村民间宗教的复兴及其策略」 復旦大学教授・范麗珠氏が、関西大学の渋沢栄一記念財団寄付講座「日中関係と東アジア」の一環として 2009 年 11 月 26 日に講演を行うために著した中国語による論文「中国北方乡村民间宗教的复兴及其策略」を日本語に翻訳したもの。共産党政権の下、迷信・俗信が禁止されている中国において、近年、民間宗教がどのような方法を用いて復興しつつあるのか社会学的視点から論じられている。
4. 書院―近世中国における教育の中心	共訳	2011 年 平成23年10月	泊園記念会創立50周年記念論文集（関西大学出版部）、53 頁～71 頁	原著者　李弘祺 原題　「書院：近世中國教育的中心」 台湾国立交通大学教授・李弘祺氏が 2010 年 10 月 23 日に行われた平成二十二年度（第 50 回）泊園記念講座国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」において基調報告を行うために著した中国語による論文「書院：近世中國教育的中心」を日本語に翻訳したもの。 共著者　山田明広・吾妻重二 本人担当部分　全文の下訳を分担したため抽出不可能
5. 異議の意義―東アジアの反理学思潮を論ず―	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、236 頁～288 頁	原著者　楊儒賓 原題　「異議的意義――論東亞的反理學思潮」 台湾国立精華大学教授・楊儒賓氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において基調報告を行うために著した中国語の論文「異議的意義――論東亞的反理學思潮」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。荻生徂徠・丁若鏞・阮元などといった東アジアの反理学を主張する儒者の観点およびその理念について考察されている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.朝鮮・丁若鏞と日本古学派	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心)、379 頁～414 頁	原著者　蔡振豐 原題　「朝鮮丁若鏞與日本古學派」 国立台湾大学教授・蔡振豊氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において報告を行うために著した中国語の論文「朝鮮丁若鏞與日本古學派」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朝鮮実学の集大成者・丁若鏞の著作を通じて、朝鮮の学者が日本との長年に渡る儒学交流の後、日本古学に対していかなる評価を下したのか考察されている。
7.佐久間象山と張之洞	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心)、415 頁～446 頁	原著者　張崑將 原題　「佐久間象山與張之洞」 国立台湾師範大学教授・張崑將氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において報告を行うために著した中国語の論文「佐久間象山與張之洞」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。日本幕末の朱子学者・佐久間象山の思想と中国清末の政治家・張之洞の思想を比較することにより、中国と日本との間の西洋の学問を受け入れるに当たっての認知の差異について考察されている。
8.朱熹『白鹿洞書院掲示』の日本における流伝およびその影響	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心)、518 頁～536 頁	原著者　張品端 原題　「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」 国福建省武夷学院・中国社会科学院哲学研究所宋明理学研究センター秘書長・張品端氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」においてポスターセッションを行うために著した中国語の論文「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朱子が再建し経営した白鹿洞書院の精神を記した『白鹿洞書院掲示』がいかに日本に流伝し、そして影響したかといったことが考察されている。
9.産難の予防、禳除と抜度―台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として―	単訳	2015 年 平成 27 年 3 月	東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―(風響社)、299 頁～357 頁	原著者　謝聰輝 原題　「產難的預防、禳除與拔度：以南臺灣與泉州地區所見道教科法為主」 台湾師範大学教授・謝聰輝氏が著した中国語の論文を日本語に翻訳し、漢文文献や漢文体による儀礼書からの引用文については書き下し文に改めたもの。中国や台湾に伝わる女性の難産予防に関わる種々の儀礼やまじない、宗教医療について、主として文献を用いて詳細に分析するとともに、併せて、現今なお実施されている「血湖」と呼ばれる難産関連の道教儀礼について、台湾南部と泉州地区における現地調査を踏まえて仔細に論じている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10.現代上海道教の宮観および道士についての簡単な紹介	単訳	2015年 平成27年6月	東方宗教（日本道教学会）第125号、127頁～132頁	原著者　姚树良 原題　「当代上海道教宫观、道士现状简介」 2014年11月8日に開催された日本道教学会第65回大会において、上海市道教教会副会長・姚樹良氏により行われた中国語による講演の原稿を日本語に翻訳したもの。最初に文化大革命以降の中国道教の状況について紹介するとともに、中国道教の教派について説明し、その上で、上海の道教の現況について、宮観、儀礼、道士の養成方法、宮観と民衆とのかかわり、布教などといった側面から紹介されている。
〔研究報告〕				
1.『朱子語類』礼関係部分訳注１	共著	2009年 平成21年3月	東アジア文化交渉研究（関西大学文化交渉学教育研究拠点)別冊第5号	関西大学グローバルＣＯＥ「文化交渉学教育研究拠点」の研究成果報告。南宋『朱子語類』の礼関係部分（巻84～91、礼一～礼八）の訳注を刊行したもの。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　吾妻重二 共著者　吾妻重二・城山陽宣・井澤耕一・山田明広・ほか4名 本人担当部分　巻89・礼六・喪、第1条～第6条（95頁～101頁）
2.『朱子語類』礼関係部分訳注２	共著	2013年 平成25年5月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究代表者・吾妻重二）	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号21242001）の平成21年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか4名 本人担当部分　巻89・礼六・喪、第7条（96頁～100頁）
3.『朱子語類』礼関係部分訳注３	共著	2011年 平成23年1月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号21242001）の平成22年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか6名 本人担当部分　巻89・礼六・喪、第8条～第9条（89頁～92頁）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.『朱子語類』礼関係部分訳注４	共著	2012 年 平成 24 年 1 月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号 21242001）の平成 23 年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986 年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか 6 名 本人担当部分　巻 89・礼六・喪、第 10 条～第 19 条（77 頁～85 頁）
5.台湾道教の縊死者および溺死者救済儀礼に関する二、三の考察―台南地域を例として―	単著	2016 年 平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第 5 集、213 頁～219 頁	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した研究報告。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。
6.伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ―国語科・社会科を中心に―	単著	2018 年 平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第 8 集、149 頁～154 頁	学校教育の場で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究報告。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。
〔書評〕 1.志賀市子著『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』	単著	2013 年 平成 25 年 5 月	東方宗教（日本道教学会） 第 121 号、93 頁～99 頁	茨城キリスト教大学教授・志賀市子氏の著書『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』（風響社、2012 年）に対する書評。中国東南部、特に広東省東部沿海の潮汕および海陸豊地域における無縁死者の埋葬と祭祀を主な研究対象とし、その諸相および歴史的変遷を明らかすることを目的として書した本書について、その内容を簡単に紹介した上で、その研究方法および内容について評し、さらに問題点を指摘した。
〔辞書〕 1.岩波世界人名事典	共著	2013 年 平成25年12月	岩波書店 全 3586 頁	全世界の国・地域について、神話・伝説上の人物から現存者までを網羅した総合的な人名辞典。 編者　岩波書店辞典編集部 共著者　山田明広・吾妻重二・二階堂善弘・酒井規史・三浦國雄他 550 名 本人担当部分　中国の道教および民間信仰の神・神仙に関する項目のうち以下の 11 項目。 安期生（145 頁）、王爺（484 頁）、玉皇大帝（734 頁）、元始天尊（924 頁）、黄初平（950 頁）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〔辞書〕 1.岩波世界人名事典	共著	2013 年 平成25年12月	岩波書店 全 3586 頁	全世界の国・地域について、神話・伝説上の人物から現存者までを網羅した総合的な人名辞典。 編者　岩波書店辞典編集部 共著者　山田明広・吾妻重二・二階堂善弘・酒井規史・三浦國雄他 550 名 本人担当部分　中国の道教および民間信仰の神・神仙に関する項目のうち以下の 11 項目。 安期生（145 頁）、王爺（484 頁）、玉皇大帝（734 頁）、元始天尊（924 頁）、黄初平（950 頁）、三官大帝（1117 頁）、三山国王（1118 頁）、三茅真君（1126 頁）、東華帝君（1839 頁）、保生大帝（2641 頁）、媽祖（2743 頁）
〔解説・総説・雑記等〕 1.屏東の林徳勝道長との出会いと交流―台湾道教のあり方を学ぶ―	単著	2014 年 平成 26 年 9 月	日本台湾学会ニューズレター（日本台湾学会）第 26 号、13 頁～14 頁	日本台湾学会のニューズレターにおける特集「記憶の中の台湾―思い出の場所、思い出の人―」に寄せた文章。本人が台湾留学中に知り合い、道教儀礼を調査させていただいたほか多くの資料を提供していただくなど非常にお世話になった台湾屏東県在住の道士・林徳勝道長との出会いとこれまでの交流、および林道長の道教儀礼や信仰に対する態度についてエッセー形式で紹介するという内容のもの。

教　育　研　究　業　績　書

平成３０年3月３１日

氏名　太田　雄久

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	教育方法(理科)・教科教育（理科）・学級経営

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 （１）小学校理科レポート作成による科学的な思考力・表現力の育成	平成20年4月～平成26年3月	小学校理科の学習指導要領改訂の改善の具体的事項で示されている「児童の科学的な見方や考え方が一層深まるように，観察・実験の結果を整理し考察し表現する学習活動」の充実として，子どもに各単元の終末でのレポート作成に取り組ませた。その結果，観察・実験の結果をグラフに整理したり，予想や仮説と関連づけて考察したりしたことを言語活動として表現する必要性を子どもに理解させることができるとともに，日々の授業での言語活動も充実することができ，相互に影響を与えつつ科学的な思考力や表現力を育成することができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
（２）「Ａエネルギー・粒子」領域における見えないものを見えるようにする理科の教材開発	平成25年4月～平成26年3月	「Ａエネルギー・粒子」領域における見えないものをする可視化する教材開発を３年生理科の単元で行った。具体的には，「磁石の性質」の単元において，見えない磁石の力の働き方を可視化するために，棒磁石を同極同士長く連結したものと異極同士を長く連結したものを作った。それらにつく鉄でできた物のつき方の違いから，子どもは同極同士および異極同士近づけたときの磁石の力の働き方の違いをとらえることができた。また，「同極同士を近づけると退け合い，異極同士を近づけると引き合う」という現象について，子どもは見えない磁石の力の働き方に触れながら，自分なりの表現で説明することができるようになった。これらの姿は，３年生の「エネルギー」についての見方や考え方が育っていると評価できるものである。また，小学校３年生での「エネルギー」についての評価規準として，提案性のあるものとなった。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
（３）汎用測定装置「ＳＰＡＲＫ」を用いた小学校理科の授業開発	平成23年4月～平成24年3月	大阪教育大学のイノベーション人材育成に向けたカリキュラムや教材・教授方法の開発とその実証を先導的に教育研究に取り組む「科学教育プロジェクト（通称)」において，小学校理科の目標の重点として挙げられている「児童が観察，実験などの結果を整理し，考察，表現する活動を行い，学びを生活とのかかわりの中で見直し，自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図る活動」を具体化した授業開発として，５年生「電磁石のはたらき」の単元で，汎用測定装置を使った授業開発を行った。その結果，電流の強さやコイルの巻き数の変化などによる電磁

		石のもつ磁力の変化を定量的に認識し，電磁石の磁力の強さを変化させる条件を理解させた。 （大阪教育大学付属天王寺小学校での実践）
（4）子どもの感性を働かせ科学的な見方や考え方を育む理科の授業指導方法開発	平成25年4月～平成26年3月	理科の目標にある「科学的な見方や考え方」を育むために，３年生理科の授業で，子どもの感性を働かせるような授業開発を，年間を通じて行った。例えば，３年生はじめの「植物の体のつくり」の単元では，子どもの観察の視点（視線の向き，数，色，変化など）の意味付け，価値付けを指導者が行うことで，自然の事物・現象を見る際の視点を増やした。その結果，子どもの植物の観察の視点が増え，観察の質が向上した。また，以降の単元においても，初期事象の出会いや観察・実験の際に多様な気付きが生まれるようになり，子どもが主体的な問題解決を通して，科学的な見方や考え方を身に付けることができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
２　作成した教科書，教材 （1）4年“水の温度とかさ教材”にＰＩＳＡ型プラスのヒント（再掲）明治図書株式会社	平成20年8月	４年生「ものの温度とかさの変化」の単元授業実践をもとに，本単元におけるＰＩＳＡ型科学的リテラシーの育成を目指した授業改善案を提案した。具体的な提案として，仮説設定時におけるイメージ思考の導入，実験データのグラフ化や表への整理，考察したことの生活場面への転用の３つを行った。仮説設定時におけるイメージ思考の導入として，熱エネルギーに目が向くような初期事象の設定と，熱エネルギーの様子を図で表現させて可視化させる２つの手立てを行ったこと，実験データのグラフ化，表の整理では，単位時間あたりの水などの温度変化を折れ線グラフに表させたり，それぞれの時間の水などの様子を時系列で表にまとめさせたりしたこと，生活場面の転用としては，理科で使う棒温度計や空調設備の吹き出し口の向きなどについて，レポートの作成をさせたことを論じた。 （大阪府下小学校教員研修で使用）
（2）天王寺教育ノート　第１３１号（再掲） 大阪教育大学教育後援会	平成 21 年 12 月	「アサガオの観察～アサガオを好きにさせることで気付きの質を高める～」をテーマに生活科と理科の連続性について述べた。 理科での科学的な見方や考え方の育成のために，生活科で気付きの質を高める必要性を述べた。科学的な見方や考え方の基礎を養う授業実践についてレポートを行った。気付きの質を高めるためには対象との関わりを密にすること，観察カードの気付きを指導者が適切に意味付けたり価値付けたりした上で児童にフィードバックすることが重要であるということを論じた。 （兵庫県伊丹市立有岡小学校教員研修で使用）
（3）教育実習生パンフレット 大阪教育大学附属小学校理科部	平成24年4月	教育実習生の理科の授業づくりと指導の能力の向上を目的として作成した。具体的な内容は，理科室および理科準備室の環境整備，安全と危機管理，教材開発の仕方，板書の方法，教材や実験器具の特性，理科の目標，子どもの学習活動と指導者の支援，学習指導案の書き方などを述べた。さらに理科の授業づくり指導に関わる内容について，具体例や写真を多用し，教育実習生にとってわかりやすく理解できるように述べた。 Ａ４版　8 ページ （平成 24 年度，25 年度大阪教育大学附属天王寺小学校の実習生指導で使用）

3　教育上の能力に関する大学等の評価 （1）大阪教育大学非常勤講師としての学生による授業評価アンケート結果	平成24年9月	大阪教育大学非常勤講師として学生による授業アンケートによると，本人が担当の「初等理科授業研究」は，総合評価で３．８点（４点満点中）高い評価を得ている。特に具体的な話で分かりやすい点で，学生の満足度が高い。また，授業の準備や工夫した教材の提示なども学生から好評であった。
	平成25年9月	前年度に引き続き大阪教育大学非常勤講師としての学生アンケート評価は総合評価で３．９点（４点満点中）であり，学生の出席率の高さ，教員の例示の分かりやすさ，学生の内容の理解度の３つの項目で特に高い評価を得た。
（2）大阪教育大学附属天王寺小学校の副校長からの評価	平成26年2月	理科部では，科学教育プロジェクトの中心として大阪教育大学との連携を密にし，プロジェクト推進に寄与した。また，理科教育部の中心として新学習指導要領に基づいた研究を進めることにも貢献した。さらに，理科主任として，研究会議の場でも積極的に提案し，意欲的に新たな教材を開発し，研究推進に貢献した。学校および学年運営では，第３学年主任を務め，ミドルリーダーの役割を果たした。学年担任団をまとめ，児童への指導や保護者との連携を充実させ，学校を組織として機能させた。教育実習部では，教育実習主任を補佐し，教育基本実習，第２部４回生実習，１日教育実習，教育実習オリエンテーションなどの実習関連業務を滞りなく運営した。
（3）科研費獲得のための研究補助	平成26年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校教諭として，平成25年度科研費（奨励研究）に応募した。（研究協力者は，大阪教育大学科学教育センター特任准教授　仲矢史雄氏である。）テーマは「現場教員による一貫指導と授業収録システムによる教育実習生指導方法の開発」である。科研費としては不採用であったが，大阪教育大学の学内選考会より，科研費獲得に向けて継続的に研究を進める価値があるテーマであるとの評価を受けた。科研費獲得の研究補助（平成２６年度）として１０万円の研究補助費を獲得した。
（4）奈良学園大学人間教育学部採用に当たっての学長からの評価	平成26年7月	大阪教育大学附属天王寺小学校で理科教育を８年間担当し教育方法技術も豊かである。また大阪府下の小学校教員への指導歴も多く，理科が苦手な教員へ実験等の指導にも優れている。また，附属小学校で多くの教育実習生の指導経験もあり，本大学の教育実習指導にも力を発揮できると期待する。さらに，非常勤講師として大阪教育大学で理科教育において学生指導を担当した経験もあり，すでに非常勤であるが大学教員としての授業の経験がある。附属では担任や学年主任の経験もあり，学生指導においてもその経験を発揮できると考える。奈良学園大学の今後を支える若手研究者として期待できる。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）大阪教育大学の教育実習生指導担当	平成20年4月 ～平成26年3月 毎年9月 （昼間部）	毎年，大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，大阪教育大学教育学部の昼間部の学生を９月の１ヶ月間を指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。大阪教育大学附属天王寺小学校は毎年度１００名程度の教育実習生を受け入れている。指導の内容は以下の通りである。 ・理科の授業づくりおよび指導案作成の指導（理科

		専科時） ・音楽科，図画工作科を除く，小学校全科および領域の授業づくりおよび指導案作成の指導，実習記録の仕方などの実習事務に関わる指導，学級経営などの学級担任としての心構えについての指導（学級担任時） ・教育実習生としての心構え，子どもとの関わり方，災害時などの教員の役割，守秘義務等学校教員としての規律などについての指導（教育実習部担当時）
	平成20年4月～平成26年3月 毎年11月（夜間部）	大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，毎年，大阪教育大学教育学部の夜間部の学生約 40名を11月に２週間指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。指導の内容は以下の通りである。夜間部の学生はすでに小学校 2種や他校種等の免許を取得している学生が多いので，一定の教職に対する知識を備えている。そのため特に以下の点について指導した。 ・指導案作成における観点別評価の規準の設定と実際の評価の方法について（理科専科時） ・学級づくりにおいて，特別に支援を要する児童への関わり方や，そのために組織として対応する必要性について（学級担任時） ・保護者や地域と連携し，児童を育てるための，教師としての心得や，保護者の苦情などを学級や学校づくりに生かす方法について（教育実習部担当時）
（２）大阪府下の小学校教員の指導力向上のための研修の指導助言	平成21年８月【1回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「観察・実験のアイデア！高学年理科」，の内容で指導し具体的な実験の指導ポイントは好評であった。「予備実験の重要性に対する意識の向上」「理科に対する苦手意識の低下」に焦点を当てた指導を行った。指導の結果，理科授業に対する苦手意識がなくなったという受講者が多数であった。 （対象者：大阪府下小学校教諭２０名）
	平成22年８月【2回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，昨年度に引き続き実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「はじめての理科指導！安心安全理科実験基礎講座（初級編）」「理科実験基礎講座（中級編）」の指導を行った。理科教育の苦手な教員が多い中，安全面に視点を置いた研修は歓迎された。観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方，理科室および理科準備室の環境整備，教科書に載っていない効果的な実験方法，科学クラブで楽しめるネタなど，観察・実験の充実を目的としている。 （対象者：大阪府下小学校教諭２０名）
	平成23年８月【3回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，連続講座3回目を実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「初心者向け　観察・実験基礎講座」「子どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」の指導を行った。「初心者向け　観察・実験基礎講座」は，安全面に視点を置いた研修である。具体的には，観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方，理科室および理科準備室の環境整備，教科書に載っていない効果的な実験方法を指導し，参加教員の理科授業での観察・実験の充実を目的としている。「子

		どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」は，子どもの目の付け所に着目した理科の授業づくりの研修である。具体的には，理科の内容で，子どもがつい注目するところを分析すること及び教材の特質を分析することの重要性を，授業実践を例にしながら指導した。研修参加者にとって，明日からの授業にとって有意義な研修となった。 （対象者：大阪府下小学校教諭２０名）
	平成24年8月 【4回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，連続講座4回目を実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「科学的な見方や考え方を深める授業づくり」をテーマに研究を行った。子どもの自然の事物・現象に対する見方や考え方を科学的なものに変容させるための授業づくりの考え方や授業実践例を紹介することで，理科の授業力向上を目的としている。「子どもが主体的な問題解決を行う理科の授業づくりには，児童分析と教材分析が必要不可欠であることを実感したこと」「単元および本時の授業後の子どもの姿を設定したうえで授業づくりを行うことの重要性」を論じた。結果，深い教材分析と的確な児童理解の重要性を受講生は理解することができた。 （対象者：大阪府下小学校教員約２０名）
（3）大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」実地講師としての授業を担当	平成23年4月～平成24年3月 【１年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして，授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。具体的には，６年生の「水溶液の性質」の授業実践例を，子どもの具体のノート記録を例に挙げながら，具体的な教材分析の仕方やノートの評価の仕方についても触れながら紹介した。６年生「もののもえ方」の単元で，見えない空気の流れに子どもが注目する導入時のアイデアを紹介した。具体例を多く取り入れたため，理科の授業に対する見方が変わった学生が多かった （受講者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成24年4月～平成25年3月 【2年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして指導した。まず高学年児童の発達段階と学習の特徴を説明した。さらに，授業づくり，児童分析，教材分析，及び目標と評価の観点についての講義を行った。授業実践の紹介とともに，模範授業も行った。具体的には，６年生の「もののもえ方」の授業実践例について，子どもの具体のノート記録を例に挙げながら，教材分析の仕方やノートを評価する方法や視点について紹介した。５年生「メダカのたんじょう」の単元では，子どもが「メダカを観察したい。」という願いをもつ導入時の授業を紹介した。授業実践例や模範授業を多く取り入れ，子どものノート記録も多数紹介したため，教育実習前の学生にとり，小学校現場での理科の授業や子どもの反応やその評価についてのイメージを持つことができ，有益な講義となった。 （受講者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）

	平成25年4月～平成26年3月【3年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして，授業づくり，児童分析，教材分析及び評価の観点とその手立てについての講義を行った。高学年児童の発達と学習傾向について説明した。さらに授業実践の紹介，模擬授業(単元はメダカ，豆電球)を行った。「知っているのにメダカが描けない」，「リード線付きソケットがなくなっただけで，豆電球に明かりをつけることができない」この事実に気付かせたりする事例を紹介した。学生からは，「従来のメダカの見方が変わった。」「教材として豆電球の教育的な価値が分かった。」といった声が聞かれた。これにより深く幅の広い教材分析や事前の予備実験の重要性を十分に理解した学生が多数であった。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成26年4月～平成27年3月【4年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，リード線付きソケットを使わずに豆電球に明かりを付けることから，「見えない部分も含めて一続きの回路になっている」ことを理解させること，実践事例の紹介では，子どもの目線を動かすような課題設定や支援によって子どもの学びは深まることを指導した。学生からは，「目線が変わるだけで，ものの見方が変わることがわかった。」「自分たちが活動することで，学びがこれほど違うのかと驚きました。」などといった感想を得た。これらから，児童理解と教材分析をもとにした授業づくりの重要性を理解した学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成27年4月～平成28年3月【5年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，ゴムの働きの学習における子どもの目線の変化を根拠に，児童分析と評価の方法について言及した。学生からは，「教師の教材研究や児童理解がどれほど重要かを再確認できた。」「子どもに新しい視点を，教師がいかに与えるかが大切だと思った。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成28年4月～平成29年3月【6年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し，その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また，数名の子どもの観察記録の変容から，観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは，

		「子どもの記録の何を評価するかで，子どもの記録のかきぶりがこれほど変わるのかと驚いた。」「つい，何も指導をせずに観察記録をかきなさいと伝えてしまいがちになるが，教師の指導によって子どもの学びがこれほど深まるのかと感心した。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成29年4月～平成30年3月 【7年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し，その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また，数名の子どもの観察記録の変容から，観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは，「体験授業を通して自分の記録の書きぶりが変わったことから，子どもの記録のかきぶりも変わることに納得した。」「どの単元でも指導者の綿密な指導計画や準備があるからこそ，子どもの学びにつながることを理解した。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
（4）伊丹市立有岡小学校での指導講師	平成24年4月～平成25年3月 【1年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」という研究テーマのもとで，理科，生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。計画的継続的に年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。当時の有岡小学校の教員は「言語活動＝話し合い活動もしくはワークシートへの記録」と言語活動を間違って認識している傾向が強かったが，「体験活動の充実がなければ言語活動の充実はあり得ないこと」「言語活動は単元や本時の授業の目標ではなく，思考のツールである」ことを指導した。体験活動と言語活動の双方向的な学習効果について指導し，授業での言語活動が，価値ある体験活動に裏付けられたもの変わっていった。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成25年4月～平成26年3月 【2年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～体験活動を通した問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」理科，生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。年間７回（提案授業の指導講評３回，年度初めの研究の方向性についての指導１回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，伊丹市教育委員会指定の研究発表会での指導講評１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである体験活動の充実の必要性，授業後の具体の子どもの姿（発言，ノート記録など）を具体化してからその姿に変容させるための手立てを考えることの２点である。指導の結果として，「子どもの思考を働かせるきっかけとなる体験活動の充実を意識した授

		業提案が大幅に増えたこと」「形式的な言語活動が授業場面で減少したこと」「単元や本時の授業の目標を具体化して授業案を立てられる教員が増えたこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成26年4月～平成27年3月 【3年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～自分の考えを持つための問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は，「子ども一人一人の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっていること」「その決まっている目線をずらすことで，子どもの問題意識は生まれること」「思考の多様な表現方法の意味付けや価値付けを指導者が的確に行うことで，子どもの学習に対する意欲はさらに高まり，子どもが主体的な問題解決に取り組むことができるようになること」の３点である。指導の結果として，「児童の実態を詳細に記録した学習指導案が多くなったこと」「授業時の子どもの姿やノート記録をもとにした討議を行うことが定着したこと」「子どもの意見や疑問をもとに授業を進める場面が研究授業において多く見られるようになったこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成27年4月～平成28年3月 【4年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は「子どもに伝え合い深め合わせるためには，『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の２点である。指導の結果として，「『ホンネの問題意識』を持たせるような事象の出会わせ方の工夫が多数見られたこと」「その工夫により子どもが自然と自らの伝え合うことができるようになったこと」が挙げられる。 （対象者：丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成28年4月～平成29年3月 【5年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究発表会での指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導は，「子どもに伝え合い深め合わせるためには，『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」「その意味付けや価値付けを板書などでどのように可視化するかということ」「伝え合い深め合えるツールの活用法」の４点である。指導の成果として，年度末の研究発表会で，板書やホワイトボードを思考の可視化のためのツールとして活用した生活科の授業，「ホンネの問題意識」を誘発する理科の授業，各グループの実験データを根拠に深め合う理科の授業を公開することができたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）

	平成29年4月 ～平成30年3月 【6年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評５回）の指導を行った。今年度の指導は,「子どもが主体的に伝え合い深め合えるような環境構成の仕方」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の２点である。指導の成果として，内容の系統性をふまえた「学習マップ」を作成できたことや、発達段階や学習内容に応じたグループ学習を実践できたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
（５）大阪府下の小学校教員の自由研究指導力向上のための研修の指導助言	平成25年6月 【1年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科と自由研究を別物と考えるのではなく，日々の理科の授業を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことができるようにすることである。研修の結果として,「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながることを参会者が実感したこと」が挙げられる。 （対象者：大阪府下小学校教員約３０名）
	平成26年6月 【2年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科の授業内容を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことを論じた。研修後「子どもの素朴な見方や考え方の分析の重要性」「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながること」の２つを参会者が実感した。 （対象者：大阪府下小学校教員約３０名）
（６）大阪教育大学ＣＳＴ養成プログラム 実地講師	平成25年8月 【1回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，中学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科に関わる知識だけでなく，具体の子どもの姿をイメージできるようになったと好評であった。 （対象者:ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）
	平成26年3月 【2回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，高学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科内容に対する深い理解のみならず，学習者の姿をイメージし教え込みではない理科の授業の魅力を感じることができたりした学生が大勢であった。 （対象者:ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）

（7）大阪教育大学教育学部「教職入門」実地講師	平成26年7月	大阪教育大学教育学部「教職入門」において，「理科を教える教師としての資質」をテーマとして，理科教師として学ぶこと，教育実習生を指導して感じたことを話した。さらに理科の目標内容とそのための授業づくりおよび実践事例についての講義を行った。特に，授業づくりおよび実践例では，小学校理科で取り扱う教材を学生一人一人に使用させ模擬授業を体験させた。その体験をもとに，実際の授業での子どもの様子を写真で紹介したり，ノート記録をもとに評価基準や評価方法を紹介したりした。指導の結果，「現場経験のある先生の授業は参考になる」「もっと実際の授業を受けて学びたい」「子どもの思考を姿やノート記録から教師が的確に見取り評価することがどれだけ重要かを実感した」などの声が多数挙がった。 （受講者：大阪教育大学１回生約６０名）
（8）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 事前研修	平成26年8月	和泉市立国府小学校教諭として，独立行政法人教員研修センター主催の平成２６年度教育課題研修指導者海外派遣プログラム事前研修に参加した。研修派遣先は，フィンランドである。派遣団の研究テーマは「ＰＩＳＡ型学力の育成について」である。その中でも「科学的リテラシーを育成するための理科授業のデザイン」の研修を進める班に所属することとなった。本事前研修では，フィンランドの教育システムや現在の課題のみならず，日本の教育システムと比較しつつ視察するべき理科教育の項目をまとめた。さらに，研修報告書のまとめ方などの講義を受けた。
（9）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 海外研修参加 （独立行政法人教員研修センター主催）	平成 26 年 10 月	平成２６年１０月１４～２５日の間，和泉市立国府小学校教諭として，「ＰＩＳＡ型学力の育成について」をテーマに，フィンランドでの海外研修に参加した。現地での主な研修先は，国家教育局，ユバスキュラ大学附属学校園，ヘルシンキ大学附属学校園および教員養成実習校など，計１２カ所の機関および学校園である。研修先では，主に理科の授業見学と授業担当教員へのインタビューを行った。本研修で明らかになったことは，日本の学習指導要領は世界でも誇れるすばらしい物であること，フィンランドでのＩＣＴ活用の授業のレベルが高いこと，ＩＣＴに頼りすぎて本来授業で大切にすべき教材分析や板書，支援が十分に行われていないことなどが明らかになった。
(10) 伊丹市立有岡小学校初任者研修講師	平成27年9月	伊丹市立有岡小学校において，「理科室の環境整備と授業づくりの基本」というテーマで，平成 27 年度に採用された初任者に対して，理科室の環境整備，安全面の指導，授業づくりについて指導した。特に，安全面の指導では，中村重太の「自作 hazards drawing による児童・生徒の加熱実験操作に関する安全意識調査」で使用された図を用いて，安全指導が必要な部分を指摘させた。また，授業づくりの基本では，リード線付きのソケットを使用せずに豆電球に明かりを付ける活動から，絶縁体の価値，リード線付きソケットの構造と豆電球の構造の関連性について講義した。結果，「指導者として見えていないものへの安全意識も持つことが大切であることがわかった」「指導者が教材について深く理解することが子どもを引きつける授業に繋がることがわかった」などの感想を得られた。 （対象者：伊丹市立有岡小学校新任教員４名）

(11)「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期)」検証のための幼稚園公開保育の指導講師	平成28年2月	伊丹市立こうのいけ幼稚園において行われた「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期)」アプローチカリキュラムに基づいた公開保育及び研究討議における指導講話を行った。指導の内容としては,「子どもの多様な気付きを誘発したり，思いや願いに向けて子どもがすぐに働きかけたりすることができる環境構成の重要性」「子どもの行動や発言他者とつなげる支援の重要性」の２点である。これらを公開保育で見られた具体的な事例を根拠として述べた。指導の結果として,「生活科の学びは保育園や幼稚園のそれと繋がっており，保育から学んでいかなければならないと実感した小学校教員が増えたこと」「小学校での学びを見据えた保育が必要であると考えた保育園や幼稚園の教員が多数見られた」ことが挙げられる。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
(12) 八尾市立八尾小学校での指導講師	平成28年4月～平成29年3月【1年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間５回（夏季研修での指導講話１回，研究授業の事前指導及び事後指導を３回，年度末の研究の成果と課題についての指導講話１回）の指導を，理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである課題設定の重要性，課題設定のための教師の教材分析と内容の系統性の分析の２点である。指導の結果として,「教材の特性や内容の系統性を踏まえた課題設定を授業のきっかけとして提示する授業が増加したこと」「展開部分での子どもへの形成的評価の必要性に気付く教員が出てきたこと」が挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）
	平成29年4月～平成30年3月【2年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間７回（年度初めの指導講話１回，各学年の研究授業の指導講話６回）の指導を，理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては，子どもの思考をつなぎ拡げる指導者の役割、子どもの思考が表出するノートやワークシートの活用法の２点である。指導の結果として,「内容ではなく学び方を教える重要性」や「ノート記録の形成的評価やそれを考察部分で活用することの重要性」に気付く教員が出てきたことが挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）
(13) 第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会分科会指導講師	平成 28 年 11 月	堺市立浜寺石津小学校で行われた，第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会の代４学年分科会において，研究授業３本と実践報告２本の指導講評を行った。指導の内容としては，季節による動植物のくらしでは，季節ごとの気温や日照時間の変化と動植物のくらしを関連付ける指導の在り方について述べた。また，空気や温度変化など目に見えないものを扱う単元では，それらをイメージ図等で可視化しながら学習を進めていくことの重要性について述べた。参会者からは，グラフ化やサーモグラフィ画像など，可視化することの効果を感じられる実践発表や指導であったので，大変勉強になった。」「地域ごとによる夏の気温の上がり方の違いもあり，大阪府内と他の地域での学習のさせ方の違いを知ることができ，今後の指導の参考になった。」などという意見が多数挙がった。 （対象者　第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会 第４学年分科会 参会者 約４０名）

(14) 公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会講師	平成29年1月 【1年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第４回公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会において，「次期学習指導要領に向けた就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について」という演題で講演を行った。講演の内容として，伊丹市立有岡小学校で行われた生活科の授業をビデオで流し，対象授業を根拠として，子どもの学びの環境構成のあり方について講義をした。また，参会者にもグループ討議を行ってもらい，所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから，保幼小の３校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。講演の成果として,「幼稚園や保育園の保育の実態を踏まえた生活科の授業づくりの重要性を実感した。」「小学校への接続や生活科と保育の系統性について改めて考えるいい機会となった。」という保育士や幼小教員の振り返りから，保幼小の接続期において，それぞれの校園での連携の重要性について気付いた保育士や教員が多数いたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
	平成30年2月 【2年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第５回公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会において，「就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿～」という演題で講演を行った。講演の内容として，伊丹市立有岡小学校で行われた理科や生活科の授業実践から小学校教育での環境構成の有効性を論じると共に、保幼小の教育を滑らかに接続するために必要な条件や取り組みについて講義をした。また，参会者にもグループ討議を行ってもらい，所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから，保幼小の３校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。「時間の無い中でも幼保の保育について学んで行かねばならないと感じた。」「幼稚園で行っている環境構成が小学校でも効果的であることを知って、さらに充実した実践を行っていこうと思うことができた。」という保育士や幼小教員の振り返りから，参会した保育士や教員によって学びのある会になったことが伺える。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
(15) 伊丹市立有岡小学校研究発表会講演講師	平成29年2月	伊丹市教育委員会指定 平成28年度伊丹市立有岡小学校研究発表会において,「次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業～有岡小学校の授業研究と「アクティブ・ラーニング」の視点から～」という演題で講演を行った。講演の内容として，平成28年12月の中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の内容と登壇者の過去の授業実践を根拠に，次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業像，およびその授業に必要な教師の指導の在り方について言及した。参会者のアンケートから「次期学習指導要領で求められる授業の具体が分かった。」「新学習指導要領が実施する前から授業の改善に取り組む必要性を十分に感じた。」といったアンケートの内容から，参会者の次期学習指導要領改訂に向けての学びが充実していたことが明らかとなった。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教職員，伊丹市内の学校教職員，伊丹市外の学校教職員，約２００名）

(16) 伊丹市立ありおか幼稚園園内研究会指導講師	平成29年3月	「育ちと学びをなめらかにつなげる幼小接続～自然科学の分野に視点をあてて，遊びの中で学びを深めていくための環境構成を探る～」という研究テーマのもとで指導を行った。指導の内容としては，「保育の学びと生活科・理科の学びの関連」「生活科・理科の環境構成から見る保育の環境構成の意義」の２点である。指導の結果として，「保育と小学校教育の関連に気付いた教員が出てきたこと」「教員が現在行っている保育実践の意味や価値に気付けたこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立ありおか幼稚園教員６名）
5　その他 （1）大阪教育大学教育学部における非常勤講師としての教育実績 「初等理科授業研究」担当	平成24年4月～平成25年3月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，小学校学習指導要領解説理科編の目標および内容についての講義，学習指導案の書き方についての講義，理科の教材研究と授業づくりの講義および実践事例の紹介，学生による模擬授業の指導案検討および授業討議会の実施とその指導を行い，それによって，教育実習を控えた学生に学習指導案の書き方，理科の授業づくり（児童分析，教材分析も含む）および授業分析の仕方を理解させる教育効果があった。
	平成25年4月～平成26年3月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，理科の教材研究と授業づくりの講義および実習，学生による模擬授業の実施及び授業討議会での指導を行った。具体的には，授業で使用する教材を実際に作り，それを使った模擬授業をさせることで，教材の課題，板書や発問，支援などの課題を討議によって明らかにさせた。このような講義を通して，学生は教材分析の重要性や子どもに合った支援を行うことの重要性を理解することができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （1）小学校教諭１種免許状 （2）中学校教諭１種免許状家庭 （3）高等学校教諭１種免許状家庭 （4）小学校教諭専修免許状	 平成14年3月 平成14年3月 平成14年3月 平成29年3月	 平１３小１第２３６７号（大阪府教育委員会） 平１３中１第２４７４号（大阪府教育委員会） 平１３高１第２６３３号（大阪府教育委員会） 平２８小専第１３号（大阪府教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 （1）大阪教育大学　科学教育プロジェクト実施委員	平成23年4月～平成24年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として，理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備，二次元バーコードによる理科のノートデータの集積等に携わった。具体的には，理科室および理科準備室の充実や環境整備として，授業収録システムの導入，超音波洗浄機，大型乾燥機（実験器具用）の導入に携わった。また，子ども一人一人の二次元バーコードを作成し，それを専用スキャナーで読み取ることで，子ども全員の全てのノートデータを専用サーバーに蓄積することができた。

	平成24年4月 ～平成25年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として，理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備に携わった。実験器具の充実では，高さ１．５ｍのアクリルパイプを１０本用意し，食塩の結晶１粒がどのように水に溶けるかを観察できるようにしたり，重い石と軽い砂の沈み具合の違いや地層のでき方を観察できるようにしたりした。環境整備としては，理科室への書画カメラ，スマートボードの導入およびその管理，子ども用いすの新調などに携わった。
（2）大阪教育大学附属天王寺小学校　理科主任	平成24年4月 ～平成25年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として，理科教材の開発を行った。また授業でイメージを使った思考の場を取り入れて子どもの思考の可視化を図り，それをもとにした教師の支援や形成的評価を充実させることで，子どもの科学的な見方や考え方を育む授業研究および実践に取り組んだ。その結果，理科部全体で，単元の学習を通して育みたい子どもの見方や考え方を設定した上での授業計画や実践を行うことができるようになり，授業時の板書や支援が子どもの実態に即したものが増えた。子どもの理科学習に対する興味・関心を高めたり，科学的な思考・表現を深めたりすることができた。理科主任として低学年生活科の気づきと3年生からの理科の科学的思考や知識理解の接続についてまとめることに貢献した。
	平成25年4月 ～平成26年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として，理科部の若手教員の育成に取り組んだ。具体的には，週１回の教科論に関わる文献の輪読会の開催，月１回の若手教員が行う授業見学とその事後指導を，年間を通じて行った。その結果，若手教員の文献を読む力がつくとともに，主任と部員が同じ方向性を持って日々の授業研究および実践を行うことができるようになった。学年の異なる理科担当者同士で学習指導要領を学び，目標や内容の系統性を確認し合った。さらには，本年度の研究発表会では，「いい提案授業であった。」「こんな理科の授業を見せてもらえるなら来年もぜひ来たい。」といった高い評価を受けた。
（3）大阪教育大学附属天王寺小学校 第３学年主任	平成25年4月 ～平成26年3月	学年の主任として，学年全員に「規律」「素直」「努力」の３つのキーワードを示して，学年全体経営，授業改善および生活指導にも取り組んだ。定期的に学年教材研究日を設ける等，教師としての資質を高める指導を行った。その結果，学年全体の子どもは落ち着いて授業を受けられるようになるとともに，保護者からの学校および学年教員団への信頼も大きくなった。
4　その他 特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １．天王寺教育ノート第１２７号	共著	平成 20 年 9 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科等で，課題となることは何か，学校現場でどのような実践が求められているのかを各教科で具体的に述べた。 Ｂ５版　全６４頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，服部敬一，西川秀智，木戸安子，石川隆之，片山雅夫，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，森元貴子，多田和彦，吉門妙子，康貴利，西川理嘉，他６名 本人担当部分 「これまでの観察・実験を見直す～４年『水の温度とかさ』の実践から～」（p３４－ｐ３７）を単著 理科で「生きる力」を育むために，特に充実した観察・実験が重要であることを論じた。生きてはたらく科学的な知識を身に付けさせることに重点をおいて授業改善を行ったことをレポートした。明らかになったことは，水の体積変化と温度変化を同時に見とることにより，４年生の問題解決の目標である「関係付ける」という思考を子どもが身につけやすいことである。また学習によって得た知識を生活化・社会化する重要性である。
２．天王寺教育ノート第１２８号	共著	平成 20 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領のもと教科等で，課題となることは何か，求められる実践について様々な視点から述べた。 Ｂ５判　全６６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，日髙敬造，藤倉憲一，山手隆文，石川隆之，太田雄久，多田和彦，今岡誠司，康貴利，風間寛，河野敬重，西川理嘉，青木志織，加藤徹也，他４名 本人担当部分 「つうしん『子どもの気付き』（p６４－ｐ６５）部分を単著 生活科のワークシートやあのねちょうの，子どもの言葉をもとに，子どもの気付きを意味付け価値付ける方法を紹介した。また，保護者が子どもの書いたワークシートやあのねちょうから，子どもの考えに共感したり，そのがんばりを評価したりすることが，子どもの観察力を養うことにつながることを述べた。
３．天王寺教育ノート第１３０号	共著	平成 21 年 9 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領を理解するために，現行の教育課程を振り返り，成果と課題をまとめたもの。 Ｂ５判　全７２頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，山手隆文，石川隆之，太田雄久，鈴木武司，康貴利，多田和彦，小林佐知子，森元貴子，川上康之，吉門妙子，風間寛，椿井大輔，西川理嘉，中野貴之，他２名 本人担当部分 「変わるものと変わらないもの」（p６－ｐ９）部分を単著

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				平成２０年の学習指導要領改訂に伴い，新旧学習指導要領の理科の目標および内容についての分析を行い，理科での不易と流行についての考察を行った。具体的には，これまで大切にされてきた基礎・基本の充実はもちろんのこと，科学的な思考力・表現力と実感を伴った理解に重点を置いて授業づくりを行うことの必要性を述べた。
４．天王寺教育ノート第１３１号	共著	平成 21 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	新学習指導要領を理解するために，現行の教育課程を振り返り，成果と課題をまとめた。 Ｂ５判　全６６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，片山雅夫，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，康貴利，川上康之，清水大，多田和彦，川端真由子，髙井大輔，河野敬重，中野貴之，他５名 本人担当部分 「アサガオの観察～アサガオを好きにさせることで気付きの質を高める～」（ｐ４６－ｐ４９）部分を単著 理科での科学的な見方や考え方の育成のために，生活科の栽培活動の気付きの質を高める必要性を述べた。気付きの質を高めるためには対象との関わりを密にすること（栽培場所や一人一鉢など），観察カードの気付きを指導者が適切に意味付けたり価値付けたりすることが重要であるということを論じた。さらに生活科の気づきと理科の接続についても述べた。
５．天王寺教育ノート第１３３号	共著	平成 22 年 6 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２２年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である Ｂ５判　全８４頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，山手隆文，石川隆之，片山雅夫，森保，太田雄久，鈴木武司，清水大，多田和彦，小林佐知子，森元貴子，髙井大輔，吉門妙子，風間寛，他８名 本人担当部分 ５年理科「電磁石のはたらき」（ｐ４４－ｐ４７）を単著 「電磁石のはたらき」の授業についての実践の振り返りとして分析と考察を行った。本授業で明らかになったことは，問題解決でのきっかけにあたる，自然の事物・現象への働きかけから仮説設定までのイメージ思考の充実が重要であること。観察・実験を通して行われる考察時に，イメージの価値付けや意味付けにつながるということである。
６．天王寺教育ノート第１３５号	共著	平成 23 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科の特性をふまえつつ，子どもの発想や教材の本質にせまるための「板書・ノート指導」をまとめたもの。 Ｂ５判　全６６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，石川隆之，森保，太田雄久，清水大，小林佐知子，森元貴子，吉門妙子，川上康之，髙井大輔，三浦聡子，山本岳大，那賀典仁，栂井大輔

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分 「科学的な見方や考え方を養う授業～６年『てこの規則性』より～」（p３６－p４１）を単著 本研究の目的は,「科学的」の根拠である「実証生」「再現性」「客観性」を子どもが意識するような授業を実践することで，子どもの科学的な見方や考え方を育む効果的な指導手立てを明らかにすることである。明らかになったことは，手ごたえという個人差の大きい感覚をあらわすために，重さという客観的な数値を用いることの有効性を子どもに感じさせることである。
７．天王寺教育ノート第１３６号	共著	平成 23 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２３年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 Ｂ５判　全８７頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，八木義仁，山手隆文，藤倉憲一，稲葉正治，森保，太田雄久，鈴木武司，多田和彦，小林佐知子，髙井大輔，森元貴子，康貴利，吉門妙子，他８名 本人担当部分 ６年「発電と電気の利用」（p３２－p３５）の部分単著 平成２３年２月に行われた大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての実践報告および分析，考察を行った。本授業で明らかになったことは，子どもが主体的な問題解決に取り組むためには，子どもが「何とかして知りたい。」「絶対にこの課題の答えを知りたい。」というような気持ちをもつために，導入時の指導者の課題設定や発問が重要であると言うことである。
８．天王寺教育ノート第１３７号	共著	平成 23 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	学習指導要領完全実施による，子どもの変容とどのように変えようとしているのかを各教科等で述べた。 Ｂ５判　全８１頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：早草寛，山田良則，服部敬一，三島公徳，八木義仁，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，多田和彦，康貴利，森元貴子，風間寛，竹上由希子，栗生義紀，他 13 名 本人担当部分 「子どもが変わる，子どもを変える『科学的な表現力に着目して』」（p１４－p１５）の部分を単著 新学習指導要領で，理科で子どもをどのように変えるのか，また子どもの変容の過程を，授業実践を通して分析および考察を行った。評価の観点である「表現」が「科学的思考・表現」になったことで，子どもの思考を表現活動によって可視化することが授業で多く取り入れられるようになったこと，また子どもが思考の可視化によって，自分と他者の考えの比較を容易に行えるようになったことを述べた。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９．天王寺教育ノート第１３９号	共著	平成 24 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２４年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である。 Ｂ５判　全７８頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：上東章，前田三男，八木義仁，大仲政憲，石川聡子，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，多田和彦，松山雅子，髙井大輔，森元貴子，手取義宏，吉門妙子，柳本朋子，竹上由希子，石川聡子，小島律子，他１８名 本人担当部分 「創造性を育成する理科の授業　５年『ものとけ方』の部分（ｐ２６，p３１－ｐ３２）を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析，考察を行った。明らかになったことは，授業で子どもにイメージ図をかかせる活動を取り入れることで，子どもの感性の働きを指導者が適切に見取ることができるようになったことである。イメージ図の教育的効果を明らかにした。
１０.天王寺教育ノート第１４０号	共著	平成 24 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から，言語活動の充実について述べた。 Ｂ５判　全８１頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，吉門妙子，森元貴子，川上康之，栗生義紀，松浦宏，木下清司，竹上由希子，三浦聡子，他 11 名 本人担当部分 「言語活動の充実『体験活動の充実が言語活動の充実につながる』」（p１０－ｐ１１）の部分を単著 理科で行われている言語活動のとらえ方とその充実の指導方法にいて，授業実践をもとに述べた，具体的には，言語活動とは子どもの思考が可視化されたものであること，言語活動は子どもの思考が働いてこそ行われること，子どもの思考を働かせるためには体験活動の充実が必須であることを述べた。
１１.天王寺教育ノート第１４１号	共著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から，言語活動の充実について述べた。 Ｂ５判　全６８頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，安井義和，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，牧郁子，小林佐知子，吉門妙子，森元貴子，川上康之，椹井大輔，髙井大輔，栗生義紀，三浦聡子，竹上由希子，他９名 本人担当部分 「教材・教具の話『豆電球』」（p２６-ｐ２７）の部分を単著 ３年生等で取り扱う豆電球についての教材分析および授業実践例を紹介した。具体的には，なぜ３年生の電気の学習では豆電球を取り扱うのかということを，小学校理科の内容の系統性を具体的に示して述べた。そして豆電球

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の内側の導線のつながりを理解させることは小学校理科で電気の学習を進める導入段階としては重要であることを論じた。
１２.天王寺教育ノート第１４２号	共著	平成 25 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２４年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 Ｂ５判　全７６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：萩原武士，大仲政憲，石川聡子，田中建司，山手隆文，森保，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，栗生義紀，松山雅子，手取義宏，柳本朋子，竹上由希子，三浦聡子，小島律子，佐藤賢司，入口豊，金光靖樹，山本岳大，他９名 本人担当部分 「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業３年『ものと重さ』」（ｐ１８－ｐ２０）部分を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析，考察を行った。明らかになったことは，体験活動を充実させることで子どもが言語活動の必要性を感じることである。子どもの素朴概念と授業の目標をもとに体験活動も言語活動も「何を」「どのように」の２つの視点を明らかにして設定することが大切であると述べた。体験に支えられた言語活動の重要性を論じた。
１３.天王寺教育ノート第１４３号	共著	平成 25 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	思考力・表現力判断力の育成には，何を大切にし，どのように取り組むかを，各教科・領域の視点で述べた。 Ｂ５判　全６７頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：矢谷健一，山手隆文，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，竹上由希子，井上由香里，田村真由子，山本岳大，吉森久展，栫井大輔，浜田美和，武智康文，角田浩太郎，清水貴之，他７名 本人担当部分 「思考力・表現力・判断力の育成とその評価『観察での思考力・表現力の育成とその評価』」（ｐ８－ｐ９）の部分を単著 理科での思考力・表現力の育成について，観察という授業場面に焦点をあてて考察した。明らかになったことは，体験活動の充実と言語活動での指導者の目標に合わせた適切な意味付け，価値付けが思考力・表現力の育成につながるとことを論じた。
１４.科学的な見方や考え方を育む理科授業	単著	平成 26 年 12 月	株式会社ＥＲＰ	小学校理科の目標である「科学的な見方や考え方を育む」ための理科授業づくりについて述べた。具体的な授業づくりの視点として，「児童理解」「教材分析」「単元目標の具体化」の３つをキーワードとして取り上げた。「児童理解」については，子どもの先行経験と内容の系統性をもとに，子どもが「知っていること」「知っているつもりになっていること」「全く知らないこと」の分析を行う「診断的評価」の重要性を述べた。「教材分析」は，教材がもつ単元目標に迫ることのできることのできる

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				特質や価値を分析する目を養うことを述べた。さらに指導計画のなかに「形成的評価」をいかし，児童のつまずきを発見しそれを指導の改善に活かすことを主張した。「目標の具体化」については，「統合的な評価」を行うために目標達成に至った子どもの発言やノート記録を具体化することを述べた。３つのキーワードをもとにした小学校３年生「電気の通り道」，５年生「天気の変化」など６年生までの授業実践例を述べた。 Ａ５判　全５５頁
１５.人間教育を視点にした教職入門	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	人間教育に視点を当てて，教師を目指す学生に教育学の第一歩として，教育の目的や内容や学校組織について論じたものである。 Ｂ５判　２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩，鎌田首治朗，松田智子，中田律子，金山憲正，瀧明知恵子，長居勘治， 本人担当部分（１０頁） 第６章第２節「小学校の学級経営」（p.１７２～p.１８０）の部分を単著 小学校は６歳から１２歳までと，担当する児童の成長及び発達の幅が広い。その発達に応じた特徴を把握し，段階に応じた学級指導について，１年から６年まで具体的に述べた。また，小学校学級担任の一日の仕事とその経営ポイントについて具体的に述べた。さらに，学校教育目標から学級教育目標を立てる手立てについて説明し，そのモデルとし６年生の例を示した。最後に PDCA サイクルで実践する学級経営の評価の重要性を論じた 本人担当部分（１０頁） 第７章第１節「小学校の生徒指導」（ｐ．２１２～ｐ．２２２）部分を単著 小学校という児童の発達年齢上，生徒指導は保護者及び地域の人々との連携なくしては，達成できない。また思春期の早期発達により，小学校高学年への対応は思春期初期の独特のプライドや自尊感情を傷つけないようにしつつも，毅然とした対応する必要性を述べた。小学校低学年・中学年・高学年の生徒指導のポイントを述べた。生徒指導の体罰・不登校・いじめなどが小学校でどのように解決するか方策を示唆した。また小１プロブレムや中１ギャップへ等への対応には接続する幼稚園・中学校との連携が，重要であることも述べた。
１６.シリーズ新時代の学びを創る５ 　理科　指導の理論と実践	共著	平成 29 年 8 月	あいり出版	新学習指導要領で求められる理科の指導や授業の在り方について，大学生や現役教員に向けて，理論と実践から論じたものである。 Ａ５判　２９８頁 編者：石川聡子 共著者：石川聡子，秋吉博之，畦浩二，平田豊城，太田雄久，仲矢史雄，川上雅之他１４名 本人担当部分（１０頁） 第９章「小学校の実践事例」第２節「３年生『ゴムの働き』」（ｐ．１６４～ｐ．１７２）の部分を単著 ３年生「ゴムの働き」の実践事例をもとに，

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				新学習指導要領で求められる理科の授業づくりの在り方について言及した。具体的には，これまでの小学校理科教育で求められる不易の部分にあたる児童理解，教材研究などは，これまで通り大切にすべきであることを述べた。それと同時に，子どもが学ぶ内容以上に，学習に使うツールや環境構成など，子どもの学び方をどのように構造化するかという流行にあたる部分についても事例を通して述べた。
(学術論文) １．ＰＩＳＡ型科学的リテラシーから見た授業改善案～４年生「ものの温度とかさの変化」の実践から～	単著	平成 20 年 4 月	日本初等理科教育研究会編 『初等理科教育第５２７号』 ｐ６４～ｐ６５	４年生「ものの温度とかさの変化」の単元授業実践をもとに，本単元におけるＰＩＳＡ型科学的リテラシーの育成を目指した授業改善案を提案した。具体的な提案として，仮説設定時に「ものの温まり方とその温度」の実験結果にすいて児童へのイメージ思考の導入を行った。さらに実験データのグラフ化や表への整理など情報を分類や分析させる。さらにそれらを考察したことを生活場面へ転用する力を養成することにより，子どもが自らの学びを納得し，理科教育の意義や有用感を実感することができることを具体的な授業展開とともに論じた。
２．４年“水の温度とかさ教材”にＰＩＳＡ型プラスのヒント	単著	平成 20 年 8 月	明治図書出版株式会社 『楽しい理科授業第５０４号』 ｐ４０～ｐ４１	４年生「ものの温度とかさの変化」の単元授業実践をもとに，本単元におけるＰＩＳＡ型科学的リテラシー育成のための教材提案をした。具体的には，ガラス管と棒温度計，もしくはガラス管とデジタル温度計をさしたゴム栓を提案した。提案の内容として，ものの体積変化と温度変化を同時に見させることで，水が持つ熱エネルギーの変化によって体積変化が起こっていることについて，児童が実感を伴って理解できることの重要性を述べた。これは理科教育を実生活との関連を一層深めることに繋がるっている。
３.子どもの気付きの質を高める授業～自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を通して～	単著	平成 21 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３０巻』 ｐ１０３～ｐ１０６	学習活動の中で指導者が子どもの気付きを捉えるとともに的確な評価を行うことで，気付きの質を高めることを明らかにした。授業の構想段階において，活動から生まれる子どもの一面的な気付きと，次の活動や他の生活経験にもつながる多面的な気付きを設定する。そして，活動の中で，「比べる」「試す」「繰り返す」場を設定したり，気付きを表現したりする場を増やすことで，気付きの質が高まる（子どもの気付きが多面的になる）ことを提案した。本研究で明らかになったことは，指導者が気付きを表現する場を増やし，その気付きを目標に沿って適切に意味づけたり価値づけたりすることで，子どもは活動に没頭し，気付きの質がたかまることである。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.創造性を育成する理科の授業	単著	平成 24 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３３巻』 ｐ８１～ｐ８４	子どもの素朴な見方や考え方を「創造性が育成された姿」に変容させるために，イメージ図などを使って自分の考えを表現する場，新しい科学概念を転用する場を設定する授業を提案した。「診断的評価」により児童の分析を行い，教師の教材分析その２つのズレをもと予想や仮説を立て，問題解決毎に子ども自身に結果を省察させた。そして，問題解決で明らかになったことが，生活化社会化され，別の現象を解釈する際にも有効であることに気付かせ子どもの見方や考え方を妥当性の高いものに変容することを明らかにした。本論を通して，子どもがイメージ図を使って自分の思考を可視化する言語活動を設定することで，指導者が的確な形成的評価が行えることを論じた。
５.子どもの科学的な見方や考え方を育む授業	単著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３４巻』 ｐ７１～ｐ７６	授業において，子どもの経験が再構成されたり，子どもの感性が働いたりするような，挑戦的もしくは発見的な課題の設定について述べた。さらにそのために必要な体験活動と言語活動の充実という手立てを論じた。具体的には子ども自身に自分の立てた予想や仮説と結果を考察させ比べさせ，問題解決についての省察を行わせるとともに，他の児童の考え方にも触れさせることで，新たな気付きに導くことができる実践を述べた。適切な児童分析と教材分析をもとに行った挑戦的もしくは発見的な課題の設定により，子どもの問題意識は生まれること，それにより子どもの感性は問題解決に向けて適切に働くようになることを明らかにした。また適切な感性が働くことで，子どもが体験活動をもとに進んで考察や省察に取り組むようになることも述べた。
６.多面的に観察させることで,子どもの科学的な見方や考え方を育む	単著	平成 26 年 10 月	株式会社ＥＲＰ ｐ２４～ｐ２７	理科学習においては，子どものこれまでの先行経験によって，子どもの自然の事物・現象についての見方は一面的になる傾向が強い。そのためには単元導入前に「診断的評価」を行う必要がある。この子どもの見方は無意識的なものであるため，一面的な見方を変容するには，指導者の指導および支援が必要になる。また，その変容や指導の成果を確認するために，指導の全体計画に「形成的評価」を適宜設定しなければいけない。３年生の「植物の体のつくり」「昆虫の体のつくり」での子どもの観察記録の変容を例に挙げ，このような変容に至った指導者の指導や支援及び目標と評価について述べた。さらには，観察記録の変容を指導者が的確に価値付けたり意味付けたりすることで子どもにフィールドバックするなど,「指導と評価の一体化」を図ることにより，子どもの観察する視点を多面的・科学的なものに変容させることができることを述べた。さらに，評価を教師の指導改善に役立てる重要性についても論じた。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７．理科教育における人間教育とは	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 （人間教育学学会第２号） ｐ８３～ｐ９０	人間教育とは，子ども一人ひとりが個性的で主体的な存在として成長していくことを援助する教育である。この教育のための授業づくりの視点として，子どもの内面世界に注目し，授業実践を行うことである。理科教育で求められることは①主体的な問題解決を重視することである。特に小学校では子どもの発達段階を考慮して身近な自然現象を対象とし子どもが自ら問題を発見し，見通しをもった観察・実験などを通して心を動かしながら問題解決の能力を育てることである。②言語力を重視することである。観察やレポートを作成する際に，視点を明確にして事象の差異や共通点を捉えて報告することは，人間としての基本的思考力育成となる。さらに比較や分類あるいは関連付けて思考すると言った「生きる力」の基本となる考え方を理科教育は育てる。③自然体験・科学体験の充実である。子どものこれらの体験不足が，人間としての成長に少なからず影響を与えている。体験を通し科学的知識の定着を図るだけでなく，学習を基に自己の日常生活を振り返り，生活に活用することができれば学習の意義は深まる。上記の視点で，理科という教科を学ぶ意義と人間教育について，具体的な単元をあげながら目標や内容，そして評価について実践事例をもとにして論じた。具体的には，６年生「水溶液の性質」で「粒子の結合の変化」をとらえさせるために，単元を通して自分の考えを図化して学習を進めさせた。考察の際に，図と比べさせ考察させることで，目には見えない「粒子の結合の変化」とらえることができるようにした。３年生「ゴムの働き」では，ゴムの伸びによって変化するゴムが持つエネルギーをとらえさせるため，決められた場所に車を止めるゲームを設定し，ゴムの伸びと車の進む距離の関係をドットシールでグラフ用紙に記録させた。完成した１次関数のグラフから「ゴムの伸びと車の進む距離にはきまりがある」ことに気付かせた。
８.子どもの目の付けどころをもとにした小学校理科の授業づくりに関する一考察	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要 第３集 ｐ１６９～ｐ１７６	見る人が自然の事物・現象の何を見るかによって，その捉え方は変わる。また，同じ部分を異なる向きから見るかによっても，そのとらえ方は変わる。小学校理科の学習において，子どもの目の付け所を変えるような手立てを行うことは，自然の事物・現象を理解させたり見方を深めたりすることに非常に有効であると考えられる。このような想定の下で，小学３年生の「植物育ちとつくり」の実践事例をもとにして小学校理科の授業において子どもの目の付け所を変える手立てを行った。その手立てが子どもの自然の事物・現象の理解の深まりや見方の変容に効果的であったかを，子どものノート記録を根拠として論じた。授業実践を通して，指導者が観察の仕方を綿密に根気強く指導し続ける必要があると同時に，子どもの観察記録をもとに，その目の付け所を的確に意味付けたり価値付けたりする必要があることが明らかになった。また，こ

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				のような指導を継続的に行うことで，子どもは自身の学び方のよさに気付くとともに，達成感を感じ，理科の学習に対しての自信を持つようになることが明らかになった。
９．小学校理科教材「メダカ」の価値とその学習で獲得させたい「生命」についての見方や概念	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究 （人間教育学学会第３号） ｐ１１５～ｐ１２１	前の指導要領の改訂によって，小学校理科の内容のうち，「動物の誕生」が選択から必修に変更された。その前の改訂時に選択になったのにもかかわらず，すぐに必修に戻されたことは，本内容には子どもに「生命」についての見方や考え方を養うための価値があると考えられる。このような考えのもとで，過去の教科書と現行の教科書の記述を分析することによって，「動物の誕生」の内容が持つ教育的な価値について論じた。教科書の分析から，子どもに獲得させたい「生命」についての見方や考え方は，メダカの雌雄によるひれの形の違いの持つ意味を理解し，受精卵の育ちを観察し，さらにはメダカを継続的に何世代にもわたって飼育するという体験を通して獲得される「生命の連続性」とであることが明らかとなった。また，「動物の誕生」の内容が持つ価値は，雌雄のひれの形の違いや受精卵の育ちという内容そのものが「生命の連続性」を意味していることであることが明らかとなった。
１０.子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果―小学校第５学年「電流の働き」の学習より―	単著	平成 29 年 3 月	平成 28 年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻 修士論文　全３３頁	これまでの日本の理科教育では，子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として，日置（2005）が論じている，我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて，自然に働きかけて，そこから得られた情報と自らの経験をもとにして，自分の考えをつくっていくこと」であること，「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので，理科の基盤には，子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの２点を挙げることができる。また，平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても，育てたい子どもの姿として，子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから，小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想，実践することで，その効果を検証した。子どもの感性を育む授業を構想する前に，授業実践を行う子どものこれまでの自然体験と遊びの経験について，質問紙による調査を行った。その結果，授業実践を行う単元「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では，50%以上の子どもが「わりと経験がある」「かなり経験がある」ということが明らかとなった。一方で，「全く経験が無い」「あまり経験がない」子どもが，それぞれ 3.2%，9.7%いることも明らかとなった。質問紙調査の結果を受け，これまでの遊びの経験の差を埋めるために，導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定した。そして，その後の一連の問題解決において，森本（2013）

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により，指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うという授業を構想し，実践した。授業プロトコルの分析から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで，子どもは問題解決への見通しを持つことができるようになったり，実感を伴った理解へ至ることができるようになったりすることが明らかとなった。 この結果から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることで，子どもが「実感を伴った理解」に至るととともに，このような指導を繰り返し行うことで子どもの感性を育むことができるという知見が得られた。
１１．理科の見方・考え方を働かせる小学校理科の授業づくりの一考察	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 7 集 ｐ１５～ｐ２２	平成 29 年 3 月に，新しい『小学校学習指導要領』が，同年 6 月に新しい『小学校学習指導要領解説理科編』が文部科学省より公示された。今回の改訂により，理科の目標が大きく変化した。これまで養う対象であった「見方や考え方」が，働かせる対象である「見方・考え方」となり，実際の授業実践に少なからず影響を与えるものと思われる。そこで，本稿では，現行の指導要領下で実践された授業を，新しい指導要領の考え方で分析し直し，新しい指導要領下での小学校理科の授業づくりについて分析を行った。その結果，これまでの実践の全てを変える必要はなく，子どもが「理科の見方・考え方」を働かせられるような教材や状況を，どのように作るかが重要であることが示唆された。
（学会発表） １.創造性を育成する理科の授業	－	平成 23 年 3 月	第１回村山理科教育セミナー （アウィーナ大阪）	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし，大阪市，堺市，大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育研究会である。「創造性を育成する理科の授業」をテーマに，授業づくりの考え方およびそれに基づいた実践発表を行った。内容は，課題解決の過程において，よりよく科学的な思考力を発揮させることで，子どもの素朴概念をより妥当性の高い科学概念へと変容させることである。それを６年生の「水溶液の性質」の単元で行った実践をもとに述べた。発表では，子どもの感性を働かせる場の設定の工夫，仮説設定時や考察時でのイメージ図などを使って自分の考えを表現させる場の設定の２つの手立てについて，実践をもとに述べた。 Ａ４，５ページ分の資料添付。
２.附属学校における科学教育研究実践の効果とその評価	－	平成 23 年 8 月	日本理科教育学会第６１回全国大会 （於：島根大学）	ＰＩＳＡ２００６調査に採択されたアンケートをもとに，小学校４年生から高等学校２年生までの，科学に対する認識や興味関心を分析するとともに，附属学校の科学教育の取り組みがどのような影響をおよぼしているかを明らかにすることを目的とした研究である。明らかになったことは，学年が進むにつれて科学に対する認識や興味関心は低下するこ

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				と，高等学校のＳＳＨカリキュラムによって高校生の科学への関心が高い傾向にあることである。 本人担当部分：小学校でのアンケート実施と分析補助 共同発表者：仲矢史雄，炭谷優穂，太田雄久，粟生義紀，小髙大輔，片桐昌直，畦浩二 発表抄録：ｐ．４４１
3. 子どもの感性を働かせる理科の授業	－	平成 24 年 6 月	「ＮＥＷ　ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ　ＥＸＰＯ」（大阪マーチャンダイズマート）	新しい理科教育の考え方と独自の授業実践事例」をテーマに開催された。子どもが主体的な問題解決の中で，感性を適切に働かせることで，子どもの科学的な見方や考え方を育むための授業実践を発表した。 実践は，３年生の「風やゴムのはたらき」と６年生の「ものの燃え方」の単元を取り上げた。発表での重点は，見えない風やゴムの持つエネルギー，燃えたときの空気の成分の変化に子どもの目が向くような事象との出会わせ方，見えないものについての子どもの思考の可視化の方法，その思考の意味付けや価値付けの３つである。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者　村山哲哉
４.汎用測定装置を用いた小学校理科の授業開発	－	平成 24 年 8 月	日本理科教育学会第６２回全国大会（於：鹿児島大学）	汎用測定装置を取り入れた小学校理科の授業が，科学的リテラシーの高い人材育成と実感を伴った理解につながるかを明らかにすることを目的とした。明らかになったことは，汎用測定装置は子どもの目には見えないエネルギーの働き 方を数値の変化という視点で理解させることには有効であること，一方で，汎用測定装置を強調しすぎると小学校理科で大切な目の前の現象を観察したり関わったりすることに対して希薄になることである。 発表抄録：p. ２９６
5. 子どもの目のつけどころを意識した理科の授業	－	平成 25 年 6 月	「ＮＥＷ　ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ　ＥＸＰＯ」（大阪マーチャンダイズマート）	「小学校の理科教育に求められること」をテーマに開催された。個々の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっており，その目線をずらすことで，問題意識は生まれることについて授業実践をもとに述べた。実践例は，３年生「植物の体のつくり」である。発表では，チューリップの絵を描かせたときに，ほとんどの子どもは横向きに書くことを例に挙げ，観察する子どもの視線の向きを植物の上から，葉の裏側から，土の中へと変える手立てが，植物の体のつくりやその工夫についての実感を伴って理解につながることを述べた。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者　村山哲哉
６.子どもの思考力を育成する理科の授業～子どもの目のつけ所を意識して～	－	平成 25 年 8 月	第３回村山理科教育セミナー（大阪市立苗代小学校）	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし，大阪市，堺市，大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育の研究会である。発表内容は子どもの生活経験や学習経験の違いによって，子ども一人一人の自然の事物・現象への見方や感じ方が異なること。仮設設定や考察時に，この違いを指

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				導者が適切に意味づけたり価値づけたりしながら対話的に授業を進めることで，科学的な思考力を育成するという考え方のもとで実践した具体例を述べた。 Ａ４，６ページ分の資料添付。
７.理科教育と命の教育	－	平成 26 年 8 月	第 1 回人間教育学会 （奈良学園大学）	理科の「Ｂ生命」の内容を学習することを通して，小学校道徳の目標の解説にある「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることを目的として実践した。実践した単元は，５年生「植物の発芽と成長」ある。明らかになったことは，理科の授業を通して「自然を愛する心情を育てる」こと，「実感を伴った理解を図る」ことができれば，「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることができ，理科と道徳教育連携を図る授業の一案としての提案である。Ａ４，４ページ分の資料添付。
８．理科教育と和文化	－	平成 26 年 11 月	第 11 回　和文化教育学会 （東京都武蔵村山市）	天気の言い伝えである観天望気を，５年生「天気の変化」の単元で詳しく学習することを通して，天気を決定づける要因について実感を伴って理解させることを目的として実践した内容を発表した。具体的な内容としては，単元の終末に，教科書で紹介されている観天望気を調べる活動を設定し，観天望気を成立させる要因を探る活動，さらには，オリジナル観天望気を作り，その信頼性を調べる活動を設定した。そして，その活動を設定することで，子どもの天気の変化についての見方や考え方を科学的なものにしようとした授業実践の一案として提案した。 Ａ４，４ページ分の資料添付。
９.子どもの視点の分析をもとにした小学校理科の授業開発とその実践	－	平成 28 年 3 月	日本教師学学会第 17 回大会 （奈良学園大学）	小学校理科授業において，この視点を動かすことで，子どもは「ホンネの問題意識」を持つことができ，主体的に問題解決の活動に取り組むようになると考え，授業実践を行った。実践の分析から，子どもの視点を動かす手立てを行うことは，子どもが実感を伴って理解すること，科学的な見方や考え方に変容することにつながることが明らかとなった。 Ａ４，４ページ分の資料添付。
１０.子どもの感性を育む支援のあり方～子どもの自然体験や遊びの経験をふまえて～	－	平成 28 年 8 月	日本理科教育学会第 66 回全国大会 （信州大学）	子どもの自然体験や遊びの経験の違いにより，子どもの自然に対する感じ方や目の付け所に違いが出るという前提のもと，子ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりして，子どもの感性を育もうとする授業を実践して，その効果を検証した。授業実践を通した検証から，ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりすることで，子どもの感性が育むことにつながるという知見が得られた。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，栗生義紀 発表抄録：p. ２５６

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１.子どもの感性を活用した小学校理科授業の実践とその効果～小学校第５学年「電流の働き」の学習より～	－	平成 28 年 11 月	平成 28 年度日本理科教育学会近畿支部大会大阪大会 （大阪教育大学）	文部科学省（2011）は，感性に関する指導を行う際に「豊かな表現，より論理的で的確な表現を通して互いに交流する」ことに留意することを示している。そこで，対話的な学びの場で指導者が子どもの感性を指導に活用する授業を構想，実践し，その効果を検証した。授業実践による検証から，指導者が子どもの感性を活用することで，子どもは「実感を伴った理解」へ至ることが明らかとなった。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，栗生義紀 発表抄録：p.３７
１２.子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果～小学校第５学年「電流の働き」の学習より～	－	平成 29 年 8 月	日本理科教育学会第 67 回全国大会 （福岡教育大学）	これまでの日本の理科教育では，子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として，日置（2005）が論じている，我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて，自然に働きかけて，そこから得られた情報と自らの経験をもとにして，自分の考えをつくっていくこと」であること，「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので，理科の基盤には，子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの２点を挙げることができる。また，平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても，育てたい子どもの姿として，子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから，小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想，実践することで，その効果を検証した。授業実践の検証から，森本（2013）による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により，指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで，子どもの感性を育てることができるという知見が得られた。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，栗生義紀 発表抄録：p.３８５

教　育　研　究　業　績　書

平成　30 年　3 月　31 日

氏名　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
社会心理学・社会学	異文化理解、多文化共生、日系南米人、生徒指導

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1、学生に伝わりやすいように実例を挙げての説明	平成23年10月	三重大学の非常勤講師の共通教育・総合教育科目「ことばと文化」講義で実践した。 ニューカマーの子どもたちの言語習得問題や、学校生活での実態について学んだ。学生がどのような職業、場面であっても、外国人労働者が抱える問題があることと、外国にルーツを持つ子どもたちの実態を伝えることが出来た。
2、ニューカマーの課題が、異文化理解の根底であることを身近に感じられるように工夫した	平成23年4月	愛知淑徳大学 非常勤講師で基幹科目（全学必修科目）「違いを共に生きる」での実践である。日本の多文化化社会の現状を知り、母国とは異なる日本の社会で生活しているニューカマーの人たちが抱えているさまざまな問題と、異国で生活するストレスを理解させる。講義を通して、受講生が文化や言葉の違いを越え、相手を受け入れ、互いに尊敬し合える者となるきっかけになることが出来た。
2　作成した教科書、教材 1、どこでもだれでも日本語指導『日本語指導の基礎』DVD	平成22年8月	日本語指導の発想に基づく、外国人児童生徒への日本語による教科学習についての模擬授業の協力者として作成した。日本の義務教育現場で、教員が研修用に活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1、伊賀市立友生小学校非常勤講師における学校長の評価	平成22年3月	学校長より、国際理解教育活動、外国人児童生徒の日本語指導と保護者の相談にあたって、学力の向上・学校と家庭の連携を深めたとの評価を受けた。
2、奈良県立法隆寺国際高等学校非常勤講師における学校長の評価	平成22年3月	奈良県立法隆寺国際高等学校校長より、外国籍児童生徒への熱心なサポートとロールモデルを果たしていることにあたっての評価を受けた。
3、愛知淑徳大学 非常勤講師における基幹科目運営委員会委員長の評価	平成23年4月	基幹科目運営委員会委員長より、学生にとって文化や言葉の違いを超え、相手を受け入れ、互いに尊敬し合える者となる、大変学び深い講義であったとの評価を受けた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1、ESD授業デザインプロジェクト公開研究会　in 名古屋　日本国際理解教育学会「ESDと学校教育」実践研修会	平成21年10月	小学校外国語活動における ESD・国際理解教育の視点をさぐる「実践から学ぶ国際理解教育･ＥＳＤの可能性」というセッションにおいて、日本で育った「在留外国人」としての生活や現在小学校で行っている授業などについて述べた。

2、首都大学東京国際交流　「日本の多言語コミュニティとの交流」講演会・ディスカッション	平成24年10月	外国人児童生徒巡回相談員として、かつて自身も外国人児童だったという経験を活かした支援活動についての講演をした。日本での外国人子女の教育に対して、指導の基本的な姿勢についての示唆を与えた。
5　その他 〈教育実績〉 1、愛知淑徳大学 非常勤講師　基幹科目（全学必修科目）「違いを共に生きる」講義	平成23年4月	基幹科目（全学必修科目）「違いを共に生きる」講義では、日本の多文化化社会の現状を知り、母国とは異なった環境の日本社会で生活しているニューカマーの人たちが抱えているさまざまな問題と、異国で生活するストレスを理解させる。講義を通して、受講生が文化や言葉の違いを超え、相手を受け入れ、互いに尊敬し合える者となるきっかけになった。
2、三重大学の非常勤講師　共通教育・総合教育科目「ことばと文化」講義	平成23年10月	共通教育・総合教育科目「ことばと文化」講義では、ニューカマーの子どもたちの言語習得問題や、学校生活での実態について学んだ。学生に、どのような職業、場面にあっても、外国人労働者が抱える問題があることと、外国にルーツを持つ子どもたちの実態を伝えた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 1、日本心理学会認定心理士認定証	平成17年4月	大学で心理学に関する標準的な基礎知識と基礎技術を修得していることを認定するものである。 人修第 224 号
2、修士（人文科学）	平成19年3月	修士（人文科学)、論文題目：「日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマ」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 1、NPO 伊賀の伝丸	平成19年4月～ 平成23年3月	様々な世代を対象に基礎的な会話を中心とした少人数による講座。 スペイン語圏へと長期出張する会社員への基礎的な会話と南米の文化についての講座。基礎的な会話を身に付けながら、文化を理解し、積極的に交流を深めようとするのをサポートした。 スペイン語・ポルトガル語翻訳・通訳、スペイン語講座担当していた。
2、伊賀市部室・伊賀市国際交流協会	平成19年4月～ 平成23年3月	毎月の伊賀市のスペイン語版情報紙作成した。日本語を母語としない市民に配布され、日常的な生活や文化の交流に役立つと評価を受けていた。
3、三重県教育委員会小中学校教育課　外国人児童生徒巡回相談員	平成23年4月～ 平成28年3月	三重県内の公立小・中学校を訪問し、外国にルーツを持つ子どもたちへの教科などの教育支援及び日本語指導を行った。また、学校の多文化交流を深めるためには国際理解授業も企画し、互いの違いを受け入れ、多様な考え方を持つ子どもたちの育成を行う。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1、『教育フォーラム51　いま求められる言語活動　読む力・書く力を重視して』	共著	平成25年2月	金子書房	学習指導要領が目指す学力を身につけるためには言葉の力が必要である。読む・書く力を3つの水準からとらえて理解する理論をはじめ、言語技術を中心とした教育実践などを紹介。 A5判 全166頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、金澤孝夫、渡部久美子、伊崎一夫、阿部秀高、加藤明、湯峯裕、井上尚美、鎌田首治朗、高木章、蔵あすか、杉田郁代、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分「不況後の日系南米の子どもたちの現状　親を取り巻く環境から学校生活まで」pp.145-155を単著 本稿では小・中・高校のそれぞれの段階で、ニューカマーの子どもたちが抱えている諸問題について、筆者の修士論文のデータ、そして関わった子どもたちの体験から、公立学校または高等学校に通う外国人子どもたちの学校生活と現状について述べている。入国管理法が改正されてから、22年経った今、不況を乗り越え、日本に留まった彼らを取り巻く問題、課題を再び考察し、現在の彼らの私生活について検討している。
2、『教育フォーラム52　新しい道徳教育のために　徳性をどう育てるか』	共著	平成25年8月	金子書房	人々の価値観が多様化している今でも、真の共生社会を実現していきたいという点においては、誰もが一致できるのではないだろうか。道徳教育をどうするかという長年の課題に対し、人としての高次の在り方を道徳的価値として示し、さまざまな学びに基本的な方向づけを与える考察と実践を紹介する。 A5判 全152頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、渡邉規矩郎、押谷由夫、加藤　明、新川靖、小楠　徹、増井眞樹、 阿部秀高、鎌田首治朗、渡邉　満、蔵あすか、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分「不況後にペルーに帰国した日系の子どもたちの現状」pp. 127-136を単著 本稿では、日本の教育を受けて、リーマンショックの不況後にペルーへ帰国した子どもたち彼らの現状を知ると共に、日本の学校とは異なった学校生活への適応の問題について、ペルーのリマ市で最も日系人の子どもたちを受けいれているラ・ビクトリア日系人学校の訪問を通して、帰国している子どもたちの適応状況について検討する。筆者は2008年、ペルーの日系人学校調査で、ラ・ビクトリア日系人学校に調査訪問したことある（オチャンテ2009　pp. 39～43.）が、製造業不況の前だったため、今とは異なっている点があると思われ、5年前と比較しながら、現状を紹介していくこととする。また本稿では、日本の学校とペルーの学校で勉強したことある彼らのそうした体験を通して、日本に留まっている子どもたちの支援にヒントとなるものは何なのか考えることとする。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.『教育フォーラム 54 各教科等の学習を支える言語活動　言葉の力をどう用いるか』	共著	平成26年8月	金子書房	言葉の力を育てるためには、国語はもちろん、他の教科でも積極的な言語活動が必要となる。単元目標構造図や年間指導計画の活用などを考えながら、国語・算数・社会・理科・生活科・総合的な学習の時間などに特有の言語活動について、教師がどのような点に留意した指導を行えばよいのか、具体的な実践を踏まえて考察する。子どもに真の「賢さ」を育てるため、教師にできること・すべきことの提案。 A5 判 全 140 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、加藤　明、金澤孝夫、阿部秀高、阿部秀高、櫻本明美、金山憲正、中田正浩、川俣　徹、松田智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　「ニューカマーの子どもたちの義務教育後の進路選択と将来の展望」　pp. 118-126 を単著 　本稿ではそうしたこどもたち進路選択や高校入試の際に直面する問題を検討し、彼らの高校進学に対する思いと将来の展望に焦点を当てる。また進学先の選択の際、高校中途退学に繋がる要因が隠されていないかを分析する。 またこの研究を通して、進路指導をする際や高校への進学後どのようなサポートをしていけばよいかのヒントとなるものは何なのか考えることとする。
4.『教育フォーラム 58 主体的能動的な学習　アクティブ・ラーニングの精神を生かす』	共著	平成28年8月	金子書房	今、アクティブ・ラーニングの誤った解釈や実践が横行している感を免れない。教師に指示されたままの受身の授業参加ではなく、「子ども達だけで創る授業」を夢想するのでもない、今ここでの教育目標、授業での〈ねがい〉と〈ねらい〉を、教師も子どもも共通の認識として持ちながら、子どもが、主体的能動的にその場での学びに取り組んでいくためにはどうしたらよいか。様々な工夫、具体的実践的な提案をする。 A5 判 全 148 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、鎌田首治朗、伊﨑一夫、吉田明史、角屋重樹、原田智仁、直山木綿子、菅井啓之、押谷由夫、瀧明知惠子、井上信子、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分「日本の算数教材と絵本をペルーの学校に贈り続けて：現地の子どもたちの変化と学校の生徒指導への効果」pp.100-109 を単著 　筆者は 15 年間「大阪ラテンアメリカの会」“CALO”（カロ）という NGO（市民活動・非政府組織）グループにかかわり、日本の算数ドリルをスペイン語に訳して、現地で印刷して、年間 3 千冊以上、20 年以上に渡って 9 万人以上のペルーの子ども達に日本の教材、算数ドリルを配布している。また、算数ドリルの配布にあわせて 2001 年から、使われなくなった中古絵本にスペイン語の翻訳文を貼り付けて表紙にビニールカバーをつけ、ペルーのリマ市にある、生活困難地域の子ども達に配布している。筆者は現地の学校を定期的に訪問しながら、支援する側と受ける側の思いを観察してきた。本稿ではその成果と課題を挙げ、また算数ドリルや絵本を使って現地の学校で行われている生徒指導や、日本に対するイメージについて考察していく。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5、『教育フォーラム 59 対話的な学び　アクティブラーニングの 1 つのキーポイント』	共著	平成29年2月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには。実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をする。 A5 判 全 169 頁 編者　梶田叡一 共著者名　梶田叡一、湯峯　裕、鎌田首治朗、伊﨑一夫、金山憲正、菅井啓之・後藤紗貴、北　俊夫、赤堀博行、善野八千子、牧田秀昭、五百住満・中村　豊、石森広美、井上信子 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分 「モザンビークの子ども達は今」pp. 136-146 を単著 本稿では、筆者が 2016 年 9 月 1 日から、9 月 15 日までの 2 週間に渡ってモザンビークで孤児院、幼稚園と小学校を視察した結果を述べるとともに、行く機会のあまりないアフリカ大陸の教育システム、子どもたちの今を筆者の体験を通して報告することとする。
（学術論文） 1、「ニューカマーの子どもたちが抱えている諸問題～学校生活のストレスから親の解雇まで～」	単著	平成21年3月	『日系ブラジル人・ペルー人の現在』三重大学人文学部多文化共存研究センター pp. 31-45	ここでは、学校生活で様々な問題を抱えているニューカマーの子どもたちについて検討した。小／中／高校別で個々に異なる諸問題や悩みについて、また現在問題になっている不況の影響について考えた。ニューカマーの子どもたちの教育問題を考えるには、親の抱えている問題や悩みも考えなければならない。そのため経済危機で職や住む場所を失っている外国人労働者問題を取り上げ、子どもたちに及ぼしている影響について筆者が関わったニューカマーの事例を基に取り上げた。
2、ロールモデルと協働　ニューカマーの生徒への教育支援	共著	平成21年6月	日本国際理解教育学会第 13 分科会第 19 回研究大会　研究発表抄録 pp. 143-144	ロールモデルとなる外国籍教員の存在は、ニューカマーの生徒にとってどのような意味を持つのか。また、高等学校において日本人教員と外国籍教員との協働は、どのような意味を持つかについて、奈良県立法隆寺国際高等学校での調査を実施。 共著者名　森川与志夫、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　　論文一部執筆
3、「ニューカマー」の生徒と「ロールモデル」の存在	共著	平成21年8月	第 30 回全国在日外国人教育研究集会広島大会資料集 pp. 58-61	高等学校に通うニューカマーの児童・生徒にかかわる教育課題と実態、そして彼らの教育支援においては、同じような経歴とマイノリティとしての体験を持つ「ロールモデル」の存在の重要性について論じた。 共著者名　森川与志夫、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス、 担当部分　論文一部執筆
4、「日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマ」	単著	平成22年5月	東北アジア文化学会第 20 次国際学術大会　第6分科　地域・社会 資料集 pp. 182-188	日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマについて、9 人の対象者の進路選択を調査分析した結果を発表した。日系南米青少年が直面してきた問題には共通性が見られ、親は不安定な立場にあり、子どもたちはその影響を受けるが、親はそんな状況でも子どもたちを進学へと励まし動機付けている。また学力の問題、経済的な面から来るジレンマや問題等が挙げられる。大学生の就職活動への不安、アイデンティティについての悩み、そして将来への希望を明るくかたっていることについても分析している。彼らは過去を振り返り、様々な経験を前向きに捉え、将来も向上を目指して努力し続けている。 担当部分　論文執筆

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5、「外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦 － NPO 法人 Mixed Roots x ユース x ネット★ こんぺいとうの実践報告－」	共著	平成26年2月	ボランティア学研究 Vol.14 pp.45-56	共著者名　渡辺 マルセロ、オチャンテ 村井 ロサ メルセデス、オチャンテ 村井 カルロス、小島 祥美 2014 担当部分　　論文一部執筆 本論は 、外国にルーツをもつ若者が設立した NPO の活動実践から後輩を応援することの意義を考察しながら、同じ境遇で育った先輩が後輩を応援する仕組みづくりのあり方を提案する。未だ外国人が置かれた教育環境が改善されず進学や進路で悩む外国人高校生が多い現状において、後輩との対話の場や難を乗り越える数々のヒントを先輩として提供している。
6、「公立の小-中学校の不登校-不適応における生徒指導の課題－外国人児童生徒の困難な体験からの考察－」	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第 5 集 pp.27-35	外国のルーツを持つ子どもたち、いわゆる移民の第二世代が日本の公立の小・中学校に通い、その数が年々増える傾向にある。乳幼児で来日している場合や、日本生まれの子ども達が多いが、各家庭では、親の話している言語や文化の下で育っていくため、日本の公立学校に通うことになると適応の問題や言葉の問題が現れる。公立学校に通い、問題なく学校生活を送り、高校や大学へと進学しているケースが徐々に増えているが、未だに学校においてなんらかの困難を体験している者は少なくない。本稿ではそうしたケースを考察しながら、不登校や、不適応に繋がる要因を調べ、その原因を分析する。また他の研究で関わった成功の事例と照らし合わせ、生徒指導の課題について考える。 A4 判　229 ページ　担当部分　論文執筆
7、「高等学校中途退学の現状と生徒指導の課題―外国人児童生徒における体験からの考察―」	単著	平成29年3月	人間教育学研究第 4 号 pp.171-177	本稿では、高校へ進学できたにも関わらず、中途退学などのドロップアウトをしたケースを扱いながら、 退学に 繋がる要因は何であるか、またドロップアウトに至った原因は何であるかをインタビューやフィールドワークを通して分析する。またドロップアウトを防ぐための必要な支援やサポート、学校で行われる生徒指導の在り方と課題について考えることとする。 A4 判　177 ページ　担当部分　論文執筆
8、「カトリック教会における多言語・多文化環境の実態　－三重県伊賀市の事例－」	共著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第 7 集 pp.167-177	日本のカトリック教会にニューカマーがやってきてからどのように変化したのかを論じる。ニューカマーの増加が教会での信者数へ影響し始めたのは 90 年代である。その後、外国人集住都市と呼ばれる地域の教会では主にブラジル人、ペルー人、フィリピン人などのカトリックコミュニティ（共同体）が誕生し、数十年の歴史を持っているものも多い。ニューカマーの増加によって多民族化した教会ではミサなどの行事が多言語で行われるなど様々な対応と支援が行われている。本論文で対象にした伊賀市カトリック教会はこれまで多文化共生を課題に発展したケースであり、成功例でもある。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9、「多文化共生保育の実践に関する一考察」	共著	平成30年3月	奈良学園大学紀要第８集 pp.21-31	本研究は、オールドカマーを対象とした保育実践に着目しながら、エスニシティの多様化が進む保育現場における保育者のあり方の一端を検討するものである。具体的には、先駆的な取り組みを行っている大阪府Ａ保育園での実践を取り扱う。特色ある地域における保育園において、どのような保育を実践するか、また保育を行う上で職員間に保育理念や保育の目標を共有するためにどのような取り組みが行われているのかを検討した。その結果、次の２点が明らかとなった。ひとつは、文化摩擦や保育者自身のアイデンティティに踏み込んだ園内研修の重要性である。このような園内研修の実施は、多様なエスニシティやアイデンティティをもつ保護者への支援にも有効であることが示唆された。もうひとつは、保育者間での意見の相違や対立などを踏まえた「聴きあう」経験の重要性である。この経験は、保育者にとってコミュニケーション能力の醸成に一定程度寄与する可能性が示された。
＜教会での活動＞ 1、失業者支援への取り組み　～上野教会からの事例～	共著	平成 21 年 11月	京都教区時報　2009　年 11　月　号 No.384	リーマンショック後の経済危機で失業した外国人労働者等への上野カトリック教会の支援の取り組みを報告。 責任者　村上透磨 担当部分　執筆・データ収集　p.4
2、XXVI Jornada Mundial de la Juventud Madrid 2011 Arraigadosy edificados en Cristo, Firmes en la Fe (Col 2,7)	共著	平成24年9月	Alégrate María Boletín Católico No.6　2012	2011 年 8 月に行われた、第 24 回　世界青年の日マドリッド大会、「キリストに根を下ろして造り上げられ、信仰をしっかり守りなさい」（コロサイ 2,7）の報告である。 責任者　Fabiana Reartes 担当部分　執筆　pp.9-10
（その他） ＜依頼原稿＞ 1.ペルー人の子どもの教育―基礎的な日本語力習得と早い階段の進路指導―	単著	平成29年4月	Migrants Network　移住者と連帯する全国ネットワーク・情報誌 191 号 （38 頁）	特集「定住外国人への日本語教育の課題」 当事者と研究者である筆者の立場から、外国人児童生徒の基礎的な日本語力習得と早い段階の進路指導の意義について挙げている。外国人児童生徒の進学率が約９０％である三重県伊賀市の取り組みとして、15 年前から行われている「進路ガイダンス」では、小学校高学年から保護者と子どもの参加を求め、早い段階から、高校進学のための必要な準備、心得、進学のメリット等の情報を提供し、進路指導を行った。このことから進学に対する意識が高くなり、肯定的なものとして捉えている。進学する若者が増えると、彼らもロールモデルという役割を果たしている。A4 判
2.「日系4世」そして、「移民第1.5世代」として生きて	単著	平成30年2月	言葉が結ぶ人と社会「にほんごぷらっと」	コラム「時代のことば」では、「日系４世」そして「移民第 1.5 世代」としての筆者の体験や学校現場で関わった外国にルーツを持つ子どもたちの現状を踏まえながら、彼ら/彼女らにとって、高等学校に入学し、卒業することのメリット、そのための必要な支援などについて挙げている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〈研究報告書〉 1、『地域のグローバル化に即応した学生の養成－「チャンス事業」の概要と成果－』	共著	平成21年3月	平成２１年度三重大学教育 GP プログラム成果 報告書、2009年	2009 年 2 月 5 日、三重大学人文学部で行われた、平成 20 年度三重大学教育 GP「チャンス事業」検討会　外国人児童生徒との学習体験から感じた報告のまとめ。 A4 判 全 112 頁 共著者：江成幸、林朝子、別府直苗、森正人、オチャンテ　ロサ 担当部分　執筆　１．学習支援ボランティアを体験した学生、２．母語を話すスタッフの重要性、３．安心感を与える学習支援教室、４．拠点校方式について、５．経済的不況と外国人児童生徒への影響、６．まとめ　pp.65-72
〈学会発表〉 1、「日系南米社会における宗教の実態とコミュニティ形成への影響－三重県伊賀市の調査を元に」	共同	平成25年2月	国際ボランティア学会第 14 回大会分科会②（名古屋市、愛知淑徳大学　）	部会Ｃにおいて、三重県伊賀市での宗教団体やコミュニティへの調査を元にしながら、日系南米社会における宗教の実態とコミュニティ形成への影響についての発表。 共同者名オチャンテ　カルロス、　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　共同で発表
2、「日本におけるエスニック集団のコミュニティ形成と宗教の関係性 ― 三重県伊賀市に住む日系南米人の事例―」	共同	平成25年6月30日	日本移民学会 第 23 回年次大会Ｃ会場（武蔵大学 江古田キャンパス内）	国際性の強い町である三重県伊賀市での調査をもとにしながら、エスニック集団のコミュニティ形成と宗教の関係性 について発表する。伊賀市におけるブラジル人コミュニティとペルー人コミュニティの実態を調べ、それぞれのコミュニティの実態に宗教がどのように関わっているか。コミュニティの団結力問題に宗教がどのように影響をしているのか発表する。これによってキリスト系エスニック集団の特性・異質を理解すると共に、多文化共生の一助になればと考える。 共同者名オチャンテ　カルロス、　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　共同で発表
3、「義務教育終了後の進路選択をめぐる教育課題 ―外国人児童・生徒の体験からの考察―」	個人	平成26年3月8日	日本教師学学会第 15 回自由研究発表　＜分科会Ｄ＞　会場：中講義室６（環太平洋大学 第１キャンパス PHILOSOPHIA 内）	本発表では、彼らが進路選択という人生の岐路に立つとき、どのような問題に直面するのか、中学校卒業後の進路に向けた進路指導の体験から彼らが抱えている悩みや葛藤について考え、進路選択にどのような要因が影響しているのかなどの、進路をめぐる教育課題を考察する。さらに、小学校の進路指導についても言及する。 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス
4、「ニューカマーの子どもたちの進路選択と将来の展望 －ブラジル・ペルーにルーツを持つ子どもたちの事例調査からー」	個人	平成26年6月7日	異文化間教育学会 第 35 回大会個人発表第⑪会場（京都市、同志社女子大学　今出川キャンパス内）	本発表では、ニューカマーの子どもたちの進路選択の際に直面する問題、彼らの進路選択にどのような要因が影響するのか、小中学校での進路指導・高校への進学後どのようなサポートをしていけば良いかについて考察している。 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5、「ニューカマーの子どもたちのアイデンティティ形成時における宗教の影響について －三重県伊賀市に住むニューカマーの事例－」	共同	平成26年6月8日	異文化間教育学会第 35 回大会共同発表　第④会場　(京都市、同志社女子大学　今出川キャンパス内)	共同者名オチャンテ　カルロス、　オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス 担当部分　共同で発表 本発表ではブラジル人とペルー人のルーツを持つ子どもたちのアイデンティティ形成に宗教がどのような影響を与えるかを扱う。アイデンティティ形成には母国文化としての宗教（特にキリスト教）が要素として欠かせないと思われる。本発表では三重県伊賀市に住むブラジル人やペルー人を対象に、アンケート調査と聞き取り調査の結果を明らかにする。彼らのアイデンティティ形成の特徴や過程を考察しながら、日本におけるエスニック集団の異文化理解に貢献したい。
6、「公立学校における不登校・中退における生徒指導の課題 －外国人児童生徒の挫折体験からの考察－」	個人	平成28年3月5日	日本教師学学会第 17 回自由研究発表① ＜分科会E＞ 会場：5215 教室　(奈良学園大学三郷キャンパス内)	本発表ではいくつかの事例を挙げながら、不登校や高校中途退学に繋がる要因は何なのかを調べ、退学に至った原因、影響を検討する。彼らの家庭や学校での生活環境などの要因を探って、今後の生徒指導の課題やどのような配慮やサポートが必要になってくるのか考えていく。 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス
7、「ニューカマーの子どもたちの不登校・不適応―求められる支援と生徒指導－」	個人	平成29年2月11日	日本人間教育学会第 2 回大会　個人発表　第3会場　(奈良学園大学三郷キャンパス内)	現在 223 万人以上の外国人が日本に在留している。それに伴って学齢期の子どもたちも増え、文化の違いによる不適応の問題や、言葉の壁からくる様々な問題を抱えながら公立学校に通っている。高校に進学をし、その後大学等に進むなど成功している例も少しずつ増えているものの、不就学になっているケース、また学校を休みがちになったり、不登校や退学を体験している子どもたちも少なくない。 本稿では、そうした不適応、不登校を体験している若者にインタビューをし、不登校、不適応に繋がる要因は何であるか、また不登校や不適応に至った原因、影響について考えることとする。
8、「ニューカマーの若者たちの高等学校中途退学－求められる支援と生徒指導－」	個人	平成29年3月5日	日本教師学学会第 18 回自由研究発表②　＜分科会 H＞ 会場：(早稲田大学 所沢キャンパス内)	本発表では、 高校へ進学できたにも関わらず、中途退学などのドロップアウトをしたケースを扱いながら、それに至った原因や要因は何であるかを検討する。またドロップアウトを防ぐために必要な支援やサポート、学校で行われる生徒指導の在り方と課題について考えることとする。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〈講演〉 1、「当事者として考える外国人児童生徒への支援とは何か」	単独	平成29年1月	平成２８年度在日外国人児童生徒に関する指導についての教育講演会（奈良県立教育研究所大講座室）	日本の多文化化社会の現状や公立学校に通う外国人児童生徒の学校生活の様子、文化や宗教観、家庭環境等の違いから生じる課題、必要とされる配慮や支援の在り方などについて、具体例を示しながら講演を行った。奈良県立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校の教職員、約 180 名の参加者があった。
2、「外国人児童生徒をとりまく諸課題－学校生活と家庭環境に着目して－」	単独	平成29年5月	平成 28 年度在日外国人児童生徒に関する指導についての教育講演会（三郷町立三郷小学校）	三郷町人権教育研究会に置いて、外国人児童生徒をとりまく諸課題－学校生活と家庭環境に着目して－というテーマの講演会を行った。
3、「当事者として考えるニューカマーの子どもたちの現状と課題－第二世代の進路と将来像の実態－」	単独	平成29年11月	「外国人集住年会議津会議２０１７」 会場：津センターパレス5階　津市センターパレスホール	５年間三重県内の外国人児童生徒巡回相談員として現場で働いた経験や大学で行った研究を基に、外国人児童生徒の現状と課題について講演を行った。 　デカセギの子どもとして日本で教育を受けることや、ニューカマーの若者たちの高等学校進学の実態と高等学校中途退学につながる要因など、実体験を交えて意見を述べた。
〈セミナー発表〉 1、平和研究セミナーでの報告	共同	平成21年3月	2009 年平和セミナー（名古屋市「ウィルあいち」セミナールーム６）	「日系南米青少年の進路選択をめぐるジレンマ」について発表。 共同者名　児玉克哉、竹峰誠一郎、佐藤史郎、根本雅也、オチャンテ　カルロス、オチャンテ　ロサ、等 担当部分　発表
2、多文化共生理解講演会　第 2 部パネルディスカッション	共同	平成27年6月28日	多文化共生理解講演会（三重県伊賀市　ハイトピア伊賀５Ｆ多目的大研修室）	「違いを楽しみ、力に変える～多文化共生のまちづくり～」をテーマにしたパネルディスカッションを行った。 共同者名　船見和秀氏、オチャンテ　ロサ、等 担当部分　発表
3、「外国につながる子どもへの日本語・学習支援を考える研修会」　第１部	単独	平成30年2月24日	兵庫県国際交流協会主催 （国際健康開発センター３階　会議室１）	「当事者として考えるニューカマーの高校進学後の現状と課題」というテーマの研修会を行った。 さまざまな言語文化を背景に持つ子どもたちは、高校進学というハードルを越えた後、どのような支援を必要としているのか。子どもたちが将来への展望を持って学校生活を送ることができるように現状を知り、支援のあり方を考えた。 担当部分　第１部での講師

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　西江なお子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	家庭科教育、食育、授業づくりの方法技術

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 (1)児童の授業後の振り返りを、フィードバックさせることで形成的な評価を活用する実践	平成 16 年 4 月 ～21 年 3 月	全ての授業後に児童の振り返りを、次時の初めに学級全体にフィードバックさせ、個々の学びの内容の違いと共通点を認識させ、どのような学び方が重要であるかを、児童に自覚さえる取り組みを行った。授業の知識量としての差は、他のクラスと比べて顕著には現れなかったが、児童の学習に対する意欲が高まり、クラスへの所属意識までも高まりを見せた。 （大阪府池田市立石橋南小学校での実践）
(2)高光源特殊ライトを用いた快適な住まいの指導法の実践	平成 23 年 2 月	特別活動と総合的な学習の授業として、日常の清掃活動への取り組みの問題点を振り返らせ、清掃の意義を実感させるための手段として、「見える化」をはかって授業を行った。一見汚れがないと思われる場所を、高光源特殊ライトを用いて照らし、拭いきれていないごみや汚れを見せ、自分たちの清掃態度を根底から考えさせる実践研究である。この活動により、清掃の必要性を実感した児童はその後の清掃活動への取り組みが大きく変容すると同時に、家庭での実践へとつながった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
(3)節電の効果とその意義を、実感を伴った理解へと導く「見える化」を図る実践	平成 25 年 2 月	家庭科と総合的な学習の実践である。東日本大震災後、節電という言葉を聞くが、継続するのは難しい。節電の意義を理解し実践する児童を育てることは重要である。そこで、課題を見出し、節電の方策を考え、自分にできることをする力を養う授業を行った。労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。児童は校内の無駄な電気の消灯などに積極的になった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
(4)住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる指導法の実践	平成 26 年 2 月	家庭科の実践である。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。そしてそれが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆しどうすれば見えない汚れを取り除き、

		気持ちの良い環境づくりが実現するかを考えさせた。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも同じような報告を保護者から受け、家庭での実践に繋がった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
(5)生活実践力向上を目指した小学校家庭科指導法の実践	平成 26 年 5 月～平成 27 年 3 月	小学校第５、６学年生を対象に、児童・教員の最も関心の低い分野である清掃学習において、本授業モデルによる実践を通して生活実践力がいかに高まるかを検証・考察した。その際、授業モデルの有効性を検証する目的で診断的評価・総括的評価を行い、児童の意識、態度の変容を調査した。また、家庭科の教科目標に対する評価も行った。教科の目標に対する評価においては４観点全てにおいて４段階評価の上位４、３が 85%以上を占め、概ね達成している結果となった。授業のまとめとして授業対象学年以外の児童に清掃の必要性のプレゼンを 5・6 年生が行い、学校全体で清掃の取り組みが活発となり活動が定着し成果を得ることができた。 （池田市立石橋南小学校の実践）
(6)大学生の衣食住の知識・技能の向上を目指した講義の実践	平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月	大学生を対象に、衣食住の知識・技能のレディネステストを行い、実態を把握した。結果、個人差が大きく小学生からの家庭科の学びが定着していない学生が多く見られた。この実態を受け、毎時に知識・技能の小テストを行い、課題解決に向けての具体的な対策を考えさせた。学びの定着と実践の日常化を図るために、家庭科新聞の作成及び家庭での取り組みシートを継続的に書かせることで、学生自身に知識・技能の定着の成果を実感させることが出来、結果として成績が上昇する学生が増加し、ある一定の成果をえることが出来た。 （奈良学園人間教育学部「衣食住の理解」での実践）
(7)大学における学生主体とした指導法の実践発表	平成 29 年 7 月	大学における学生主体の講義の在り方についての実践発表を、本学教員行った。使用教材・教具の選定、グループ活動方法、学修ノートの記録の取らせ方、また 90 分の時間配分や課題の出し方など、学生が積極的に講義に参加し、学修するための様々な手立てを具体的に発表した。学生たちを能動的に講義に参加させる方法であり、取り入れてみたいという教員の声を聞くことが出来、ある一定の成果を得ることが出来た。 （奈良学園大学人間教育学部「衣食住の理解」「家庭科指導法」での実践）
２　作成した教科書・教材 (1)学級通信の役割と留意点 （大阪教育大学池田附属小学校家庭科部会発行）	平成 21 年 4 月	学級通信を出す意義と、掲載する内容について述べた。児童の状況を知らせるだけでなく、学習の狙いや学級担任の方針を保護者等に伝え、地域や家庭と連携して児童を育成する懸け橋となる、教育的な効果を狙うものであることを記載した。そして読み手の視点や挿絵の効果的な使用方法とか、技術的な面についても示唆した。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に学級運営について指導する際に使用し、具体的であると好評であった。

		A４判　８頁
(2)教育実習生指導のてびき （大阪教育大学附属池田小学校発行） 【再掲】	平成 22 年 4 月	大阪教育大学の学生向けに教育実習時に必要な教員としての資質能力や授業づくりのポイント、指導案の書き方などを家庭科の視点から具体的に示した。特に家庭科の指導案作成の際に注意すべき点として、家庭科で求められている児童に育ませたい力とは何かを具体的事象を交えて提示するとともに、児童の実態把握の仕方や体験活動の効果的な取り入れ方、児童の興味・関心の向上を図り学習意欲を喚起する手立ての在り方を解説した。大阪教育大学の学生からは、指導案の書き方は元より実習への心構えとして把握しておくべき重要点が網羅されており、活用しやすいと好評を得ている。
(3)小学生夏休みの家庭学習用教材編集 （文溪堂） 【再掲】	平成 22 年 4 月	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまずきやすい内容を吟味し、問題作成し教材会社文渓堂に提示した。小学校１年～6 年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。全国の小学校で、使用されて使いやすいと好評を得ている。 A４判　26 頁
(4)消費者教育のてびき （大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行）	平成 22 年 5 月	消費者教育の授業を、生活科・社会科・家庭科の視点から分析し、それぞれの特徴と学校現場で実際に行われている学習内容を記載した。各教科間で学習内容が重複する部分や児童につけたい力を整理することにより、発達段階に応じた消費者教育の在り方を具体的に示した。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科における消費者教育について指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A４判　８頁
(5)家庭科で行う清掃のてびき （大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行）	平成 23 年 6 月	家庭科の清掃の授業において、児童自らが清掃の意義や具体的な清掃方法について学び考え、意見交流を行った概要をまとめた。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科で行う清掃学習の意義を指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A４判　２頁
(6)家庭科指導法における指導案作成の手引き （奈良学園大学　人間教育学部発行）	平成 28 年 11 月	家庭科指導法の受講生を対象に、家庭科指導案作成における重要点を明確に提示した。題材設定の理由や指導上の留意点の書き方などを、実際の指導案を示し具体性を重視した。学生からは、指導案の書き方が明確になり、重要点が示されているため書き漏れや書き損じを防ぐことができ好評であった。 A４判　２頁
(7)衣食住の理解における技能向上のための手引き （奈良学園大学　人間教育学部発行）	平成 29 年 6 月	衣食住の理解の受講生を対象に、技能向上を目的としてその重要点を明確に提示した。ミシンの操作方法、安全な扱い方、児童への適切な指導法といった小学校教員として必要な技能を、基礎から応用までを詳細に記し、安心して児童に指導できるようにまとめた。児童 への指導ポイントが分かりやすいと好評であった。 A４判　２頁

3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学学長からの「家庭科教育法」「衣食住の理解」を担当する非常勤講師として採用時の評価	平成 25 年 4 月	該当教員は、大阪教育大学池田附属小学校に家庭科主任として 4 年間勤務し、毎年全国発表会を行い具体的な教材開発や指導方法などを熟知している。また、毎年多くの家庭科教師を志望する大学生を実習生として受け入れ、大学生に対しての指導の経験も豊かである。実践だけでなく研究紀要や、現職教員対象の「教員免許更新」の教科書を作成するなど、研究に対する意欲も高い。学会での活動も開始し、豊かな実践だけでなく、理論面でも大学教員としての資格を備えていると判断する。
(2)奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 27 年 8 月	授業改善のために設定した 5 項目と自由記述による学生アンケートを行った。家庭科に対する体験不足の学生が多いためか、授業内容を実生活に活用できる項目の満足度は 4 点満点中 3.8 であった。
(3)奈良学園大学「家庭科指導法」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 29 年 3 月	授業改善のために設定した 5 項目と自由記述による学生アンケートを行った。第１回目の講義においては家庭科に対する興味関心が低い傾向が事前調査で分かったが、学生が能動的に講義に参加し学びが深まるよう、アクティブ・ラーニングを取り入れ、小学校現場で即活用できる力を身に付けさせた。講義の満足度は全教員のうち最上位を占め、学生に深い学びを保証することが出来た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)池田市立石橋南小学校食育担当	平成 19、20 年度	池田市立石橋南小学校食育担当として、学校代表として食育カリキュラム作成を行った。また食育の在り方について教職員の共通理解を図るとともに、池田市内の食育のパイロット校の役割を果たした。
(2)大阪教育大学附属池田小学校における学年主任としての学年教員指導と調整	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	5 年間学年主任として、管理職や他学年との連絡調整を綿密に行い、児童の教育に尽力した。年間学習カリキュラムを作成し、学年の目標到達に向けて各教員と話し合いを密に行い、児童の教育にあたった。また、各学級の児童の実態把握に努め、個別対応を要する児童についての会議を定期的に行い、学年全体で情報を共有し児童の指導を行い、安定した学年経営が実現し、保護者からの高い評価も得た。
(3)大阪教育大学附属池田小学校における家庭科主任として教育実習生の指導	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	平成 21 年から家庭科の主任を 4 年以上担当し、毎年教育実習生を、年 2 回受け入れ、家庭科教員希望者を 8 人程度実習指導した。実習指導の内容は、家庭科の学習指導要領に基づく教材内容の解釈、年間指導計画の立案、学習指導案の作成、効果的な実技指導の方法、安全な実習のための留意点、高学年児童の理解等におよんだ。さらに実際の授業をさせて、課題を指摘して、再挑戦させることで、実践力をつけさせた。
(4)近畿附属小学校連合会家庭科支部役員としての教育研究	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	役員として家庭科教育に関しての成果と課題を毎年分析し、他の附属校との意見交流を図る中で、PDCA サイクルを積極的に行い、研究会の成功に尽力した。

(5)大阪府家庭科教育研究会家庭科部会役員としての教育研究	平成 21 年 4 月 ～現在に至る	平成 21 年から家庭科部会役員として、毎年実施される研究会の開催に向けて会長の指示のもと連絡調整を綿密に行い、教員の希望アンケートを集約し講師の選出など研究会の成功へと尽力した。
(6)大阪府家庭科研究会役員	平成 21 年 4 月 ～現在に至る	役員として研究会開催に向けて関係機関と研究目的について検討し、会の成功に尽力した。また、日ごろの家庭科学習の取り組みを他市と情報交換する会を行い、池田市の家庭科教育の発展に尽力している。
(7)池田市家庭科教科書採択委員	平成 26 年度	池田市教育委員会からの委嘱により、平成 27 年度からの使用となる家庭科教科書採択委員として、教科書の採択を行った。各社の教科書の特徴を分析し、特に児童の実態を鑑みて採択することができた。
(8)池田市家庭科研究協議会指導助言者	平成 27 年度	池田市家庭科研究協議会指導助言者として、池田市の家庭科教育担当者に授業づくりのポイントや教材について助言した。特に 27 年 10 月に大阪府家庭科教育研究会において池田市から授業代表者を選出し授業提案した際は、消費者教育の授業の在り方について助言し、池田市の家庭科教育の発展に尽力した。
5　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1．免許・資格 (1)小学校教諭一種免許 (2)幼稚園教諭一種免許 (3)食育インストラクター2 級 (4)応急手当普及員 (5)小学校教諭専修免許	 平成 7 年 3 月 平成 7 年 3 月 平成 22 年 9 月 平成 22 年 8 月 平成 28 年 3 月	 平 6 小一第 794 号（兵庫県教育委員会） 平 6 幼一第 368 号（兵庫県教育委員会） DP-0900856 第　F4056006 平 28 小専第 16 号（大阪府教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)「食育研修会及び公開授業」研修会の指導助言 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市栄養士・調理師・教職員 15 人	平成 20 年 8 月	平成 18 年度に作成した食育カリキュラムに基づき栄養士と担任が共同で、公開授業を行った。授業内容は栄養の 3 要素を具体的な給食の献立の中で、確認するものだった。何気なく食べている給食を、食育の観点で意識化させる必要性を助言した。
(2)協同出版教員採用試験対策講座講師【1 回目】 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 21 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。特に教育基本法に述べられている、教職の意義や、それにふさわしい教員の姿について、実際の面接場面を想定して指導を行った。具体的な指導だと好評だった。
(3)「今求められている食育」 ＰＴＡ主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：大阪教育大学附属池田小学校 対象；保護者、教職員 150 人	平成 22 年 6 月	大阪教育大学附属池田小学校の児童の食の実態調査結果をもとに、今求められている食育についての概要を全校保護者に向け講演を行った。レジメを用意し話した。講演会後のアンケートでは、児童の好き嫌いが減ったと

		感想が出て、児童の食生活の改善を図ることが出来た。
(4)協同出版教員採用試験対策講座講師 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 22 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。模擬授業やロールプレーに対応できるように、学校現場で起きている実際の事例や、模擬授業における授業規律の必要性なども指導した。模擬授業の指導は、具体的だと好評だった。
(5)大阪府池田市教育委員会主催 ふくまる教志塾　講師 会場：池田市教育センター 対象：教員採用試験受験希望者	平成 24 年 7 月	池田市教育委員会主催の平成25年度教員採用試験突破を目指す大学生等を対象の講習講師を行った。採用試験に向けての学習法はじめ、家庭科など各教科授業づくりのポイント、保護者・児童への対応の仕方などを講義した。講習後のアンケートには、実際の小学校教員の生の声の影響は大きく、教職に対しての職務遂行能力の理解を促した。
(6)家庭科教育学会関西支部役員としての貢献	平成 24 年 8 月	日本家庭科教育学会第43回近畿地区会　大会を役員として成功させた。さらに西江本人も、実践・研究発表デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を提示した。
(7)大阪府豊能地区家庭科新任教員研修講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：平成 24 年度豊能地区新規採用教員	平成 24 年 8 月	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。レジメを用い、家庭科の目的や、生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明をした。また、45分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行った。発問・板書・ノート指導・教材選定などを例示した。研修後のアンケートでは、教師の目線はじめ、言葉かけ、授業の組み立て方など参考にする要素が多いと評価を得た。
(8)「食卓を囲むことから始まる食育」 ＰＴＡ主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市立石橋南小学校保護者 20 人	平成 26 年 10 月	孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をすることの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向けにレジメを用意し行った。そして、今求められている食育についての概要を伝え、食を通しての人間形成について話をした。講演会後のアンケートでは、家族と食卓を囲むことの重要さに気付いたと感想が出て、保護者の食への関心を高めることができ一定の成果を生むことができた。
(9)池田市家庭科研究会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 5 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、小学生対象の消費者教育をどのように進めていく必要があるのかを講師として指導助言を行った。具体的な指導だと好評だった。
(10)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 6 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。消費者教育についての資料なども多種用意し、具体的な指導だと好評だった。

(11)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 7 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。
(12)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 8 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成の最終調整を行うと共に､7 月に行われた授業のビデオ視聴による授業検討を行った。
(13)奈良学園大学オープンキャンパス模擬授業 会場：奈良学園大学 対象：オープンキャンパス参加高校生・保護者 30 名	平成 28 年 8 月 21 日	大学の講義を体験するオープンキャンパスにおいて、高校生・保護者を対象に節電を考える家庭科教育を行った。実感を伴った理解を図るため体験活動を取り入れた講義は、大学の講義に興味・関心を持つ一助となったとの感想が聞かれた。
(14)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：豊中市立東丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名 ・三宅町食育指導	平成 28 年 10 月	大阪府家庭科研究会大会において､5 月から行われてきた授業検討をもとに授業実践を行った教員の指導助言を行った。
(15)食育講座 会場：三宅町立三宅小学校 対象：三宅町立三宅小学校保護者・教員 25 名	平成 28 年 12 月	「小学生の体力向上に向けた食事のあり方」と題して、小学生に必要な栄養素を中心に、その適切な摂取方法や調理例を挙げ、保護者が家庭で行える食事のあり方について指導助言を行った。調理例や好き嫌いのある児童への対処の仕方など、無理なく行える食育として参会者に好評であった。
4　その他 特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所､発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1．「とごころ」創刊号	共著	平成 23 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判　全89頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、能川正人、原田朋哉、垣内幸太、西村恭美、土師尚美、西江なお子、坂下剛　他 7 名 本人担当部分:「実感を伴った理解へとつないでいくための手立て」(p58～62)を単著 小学校理科教育を例に挙げ、実感を伴った理解へと児童を導く授業法の研究をまとめた。 １．自然に親しませる。 ２．言語活動を充実させる。 ３．実験観察の仕方を工夫する。 ４．機器を活用する。 以上、児童に真の学びの場を用意し、実感を伴った理解へと導くための授業の在り方を研究実践として提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.「とごころ」第3号	共著	平成24年2月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5版　63頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：佐々木靖、岩井陽介、垣内幸太、坂下剛、小林秀訓、升村誠志、井上伸一、樋口万太郎、荒川真一、西江なお子、　他9名 本人担当部分:「家庭科における言語活動」の実践（p44～45）を単著 家庭科における体験的な活動を通して言語活動を充実させる授業法の研究をまとめた。 １．児童の実態把握。 ２．グループワークでの学習。 ３．異学年交流。 ４．振り返り活動。 以上、体験的な活動を学習に効果的に組み込むことを通して、言語活動の充実が図れていくことを教育実践として提案した。
3.「とごころ」第4号	共著	平成24年10月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5判　全63頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、佐々木靖、加藤いつき、西江なお子、平野憲、津田一司、西田まなみ、孕石泰孝、井上伸一　他7名 本人担当部分:『「家でもやってみたい」と思える授業づくりを目指して』（p50～53）を単著 家庭科での学びがその場だけではなく、家庭での実践へとつながるための授業法の研究をまとめた。 １．学ぶ楽しさを感じる授業展開の工夫。 ２．児童の実態に適した教材選択の必要性。 ３．意識化するためのアプローチとしての「見える化」の提案。 ４．客観的思考での課題に迫る授業のアプローチ法。 ５．データ分析による事実把握。 ６．学びを家庭実践へと生かす方法。 以上、学びが児童の意識に根を強くおろし、家庭での実践へと継続していく研究実践として提案した。また、家庭科教育が児童の自立の過程における役割についても論じた。
4.「教師も子どもも“楽しい”と思える授業づくり教職実践演習テキスト」	共著	平成25年3月	大阪教育大学	大阪教育大学における家庭科教育法の授業における教職実践演習に使用するテキストとして、執筆されたものである。 A5判　全52頁 編者：大本久美子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者：瀧野聡平、川口綾、昫那啓子、西江なお子 本人担当部分： １.「授業づくり・子どもとのかかわりのヒント」高学年児童との関わり方はじめ、家庭科授業の組み立て方の工夫や板書計画、教材研究方法、教室環境整備のポイントなど、教師を目指す学生の指針となるよう項目だてし、理論と実践をまとめた。 ２.「魅力的な家庭科の授業例」実際の教材を２つ提示して、学校で家庭科の授業で使いやすいようにポイントを述べた。 ①「かしこい消費者になろう　～家族の一員として、わたしにできること～」と題し、買い手と売り手の双方を経験しながら消費者としてのあるべき姿を学ぶ授業展開を述べた。 ②「快適な住まい方　～今の私にできること～」と題し、自分のまわりの環境に興味・関心を持ち、そこから課題を見つけ、快適という概念を自分なりに模索しよりよい環境を作り出すにはどうすればよいか考え、実行するという住環境を考える住環境について学ぶ授業展開を論じた。（ｐ18～24、ｐ40～45）を単著
５.「家庭科におけるアクティブ･ラーニングへの試み」	単著	平成 27 年 12 月	株式会社 EPR 教育プロ 第 45 巻　第 27 号 通巻 1796 号	最新の教育情報や斬新な実践等をまとめ、教育関係者並びに児童・生徒の保護者を対象に広く告知するために執筆されたものである。 本人担当部分:「家庭科におけるアクティブ・ラーニング」（ｐ18～19）を単著 ①清掃意識の実態把握。 ②見える化の体験による概念砕き。 ③言語活動による意識化と共有化。 ④メタ認知を行う。 ⑤学びを深化する。 以上、小学校家庭科教育において住まいの授業をアクティブ・ラーニングの方法で行うことにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立て、研究実践として提案した。
６.３年目教師　勝負の学級づくり　－マンネリの毎日を脱却する極め付きの指導技術 56－	共著	平成 29 年 9 月	明治図書　授業力＆学級づくり研究会	小学校３年目までの教員を対象に、学級経営や授業づくりの基礎・基本を明確に解説した。 Ａ５判　全 126 頁 共著者：垣内幸太、樋口万太郎、日野英之、小林秀訓、西江なお子、他 20 名 本人担当部分： １.「給食準備・後片付け」と題し、低学年でも安全で早く準備ができるよそい方や、おかわりの仕方について明確な数値で児童に指導することの重要性を解説した。 ２.「給食指導の裏にある３つのねらい」では、安全・衛生面、社会性の構

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				築、食文化への関心向上の 3 点の重要事項について解説した。 給食を単に昼食として捉えるのではなく、食育という指導の一つとしての位置づけについて述べ、教員の食への意識向上について論じた。（p 20～23）を単著
（学術論文等） 1.消費者教育における効果的な授業方法に関する研究	単著	平成 22 年 8 月	大阪教育大学附属池田小学校教育振興会　第 16 号 p83～86	食の安全が問われる現状を踏まえ、食品表示を見て商品を購入することの意義と必要性を考え、実践力へとつなげていく教材研究と授業法の検証の研究のまとめである。教材は、広告を考え、売り手側の心理に迫り、宣伝広告と食品表示の違いを知ることから、商品の本質を知ることの意義を考えさせる。そして、家族の一員として自分に出来ることを考え、実践へとつないでいく。成果として、売り手の立場で商品を見ることにより、商品をより深く観察することが出来ると同時に、今までの自身の商品選択の視点に気付き、これからの自分を意識することが出来るようになったことである。本研究を通して、児童が家庭で家族の安心・安全を守るために食材選定のポイントを提案したり、実際に買い物場面で学びを生かした発言をしたりしたという保護者の報告を受け、一定の成果を得ることが出来た。この実践を本著により、消費者教育における効果的な授業方法に関する研究として発信した。
2．快適な住まい方 ～今の私にできること～	単著	平成 24 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校 研究紀要 p101,102	まわりを取り巻く環境に興味・関心を抱き、課題点を見出し、改善するための方策を考え、自分に出来ることをみつけ実践する力を養うことをねらいとした授業実践と理論の記録である。授業では「快適」の定義を児童個々にイメージさせ定義づけし、めざす快適像を確立させる。そしてそれにむかうためにどのようなアプローチを踏めば実現可能となるのかを検証させ、実践へとつないだ。この学びを生かして冬場の教室内における空気の循環を効率よく行うよう窓の開け方を工夫したり、臭いや色彩といったものに着目してより快適な環境づくりに励み、家庭でも実践したことを保護者から報告を受けた。住生活における「快適」の定義を理解し、その環境を創造するための研究である。
3.私は我が家の節電大臣 ～今の私にできること～	単著	平成 24 年 11 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～53	節電という言葉をメディア等で目にするものの、何をどれだけ行えばよいかが分からないままでは、継続した節電は難しい。しかし、節電は現在の日本の重要課題と言っても過言ではなく、その意義を知り意識して取り組むことが出来る児童を育てることが必要である。そこで、節電の今ある課題を

著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				見出し、節電に繋がる様々な方策を考え、自分にできることを見つけ、実践する力を養うことをねらいとして授業を実践したまとめである。 労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。この学びから児童は校内の待機電力を省き、無駄な電気の消灯などに積極的に取り組むとともに、家庭でも実践を続け、一定の成果を得ることができた。
４.私は我が家のコーディネーター　～｢見える化｣をめざした家庭科の授業～	単著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～51	「汚れが見えていない＝清潔」という既成概念を覆し、清掃の在り方を見直し、清掃の意義を考え実践につないでいく授業の理論と実践のまとめである。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。それが人体に与える影響を考え､｢きれいなはず」という意識を覆し、見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現する方策を考えさえる授業記録である。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも掃除機での掃除のみならず、拭き掃除も取り入れたという報告を保護者から受け、学びが家庭での実践に繋がり一定の成果を得ることができた。 住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる適切な指導法の研究を発信した。
５.ビブリオバトル～読んで聞いて話して～	単著	平成 27 年 2 月	池田市立石橋南小学校研究紀要 p19～20	国語科でビブリオバトルというゲームの要素を持つ書評を行い、読む力・話す力・聞く力を身につけさせる指導法の在り方を研究した。初めは本の概要を説明する際、下書きをして読む練習を重ねていた児童も、回を重ねるうちに原稿を読むことなく与えられた時間内で、要点をつかみ聞き手に分かりやすく話すことができるようになった。また、聞く側も何を質問すればよいのか視点を絞りながらメモを取ることができるまでの力をつけることができた。この活動を通して聞く力と話す力、読む力を育てることができ、他の様々な場面でもその力を活用することができるようになり、成果を得ることができた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6．内面に働きかける小学校家庭科教育 ―意味ある体験活動を通して― 【査読付き】	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学会 人間教育学研究 第 3 号 p123～132	体験活動を積極的に取り入れることにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立てて、家庭科教育の授業実践を行ったまとめである。 実践１：品質表示に注目する意義を体験活動を通して児童に意味づけし、家庭生活で実践することにより主体的な生活者の育成を目的として行った。 実践２：身近な活動であるにも関わらず、児童の興味・関心が低く積極的な取り組みが継続されにくい清掃活動の学習において、快適な環境とはどのようなものかを実感させ、家庭での実践へとつないでいくことを目的として行った。 見える化の活動や、消費者と売り手の両者の視点を経験させ、実感を伴った理解へと導く活動など、いずれも体験活動を通して児童の概念砕きを行った結果、児童の学習意欲の喚起につながり、自ら調査・分析したり、新たな課題を見つけそれを解決する方法を模索したりするなど、まさに学びの過程である「感覚→思考→実践」を一連の学習の中で行い、学びを深化させていくことができる、適切な指導法の研究を発信した。
7.他社との出会いによる自己変成	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座　実践教育学論集 2015 ―現代の教育問題を考える 20― 特集:◇私を変容に導いた受苦的「経験」 p42～45	自分自身を変容へと導いた受苦的経験を高橋橋勝の理論に基づいてメタモルフォーゼする過程とその要因について分析した。本分析をもとに、教員の在り方について考察した。
8.生活実践力の育成を目指した小学校家庭科モデル開発に関する研究　―実感を伴った理解へと導く体験活動を通して―	単著	平成 28 年 12 月	奈良学園大学研究紀要 第 4 号 p133～139	小学校家庭科教育における課題の一つとして、学習した知識や技術などが実生活で十分に活かされていないことが挙げられる。そこで、学びを生活の中で継続して実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能を「生活実践力」と定義づけ、授業での学びを生活実践力に結び付けていくモデル開発を行い、体験活動による動機づけの教育的な効果について論じた。
9.「生活実践力の育成による人間教育　―家庭科授業モデルの構築―」 【査読付き】	単著	平成 28 年 12 月	人間教育学会 人間教育学研究 第 4 号 p107～114	小学校家庭科において、生活実践力を図るうえで重要な要素である体験、交流、評価についてそれぞれ検証し、その意義をまとめると共に、それら三つの往還による生活実践力向上を図る授業モデルを開発し、その有効性を検証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０．「生活実践力を高める小学校家庭科のプログラム開発　―「体験・交流・評価」の往還を手がかりにして―」（修士論文）	単著	平成 29 年 2 月	大阪教育大学大学院　実践教学校教育専攻 修士論文	「実践力を高める小学校家庭科教育のモデル開発　～家庭での実習を組み込んだ『ふり返り活動』の実践を手掛かりにして～」という研究テーマに沿って、家庭科教育の課題の一つである「実践力」を育成するための手立てを実践研究したまとめである。清掃学習に振り返り活動と家庭での学習を移動計画に組み込むことにより、継続した実践が行われた結果を分析し、実践力を高める授業モデルを開発、提案する。 Ａ４判　142 頁
１１.「家庭科における可視化を通した実践力育成に関する一考察」	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第６号 ｐ83～89	小学校家庭科において、可視化を授業に取り入れることにより実践力向上を図ることができるという仮説を立て、実践研究を行い、その成果と課題をまとめた。サーモグラフィーで体内の熱分布を、ルームランナーで電気を可視化し、節電の意義と必然性を実感を伴って理解させ、節電について考えさせた。本実践を通して節電が児童の生活で日常化する成果が見られ、可視化の有効性を検証することが出来た。
(その他) 「依頼原稿等」 １.小学生夏休みの家庭学習用教材編集	単著	平成 22 年 4 月～平成 24 年 4 月	(株)文溪堂	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまづきやすい内容を吟味し、問題作成し教材作成会社文渓堂に提示した。小学校 1 年～6 年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。執筆者は池田附属小学校の各教科の教師である。西江は教材全体の構成と、各教科等のバランスを調整校正を担当した。 Ａ４判　p14～18
２.保護者対象教育講演会資料冊子 「今求められている食育」	単著	平成 22 年 6 月	大阪教育大学池田附属小学校 PTA 主催	大阪教育大学池田附属小学校 PTA を対象に、孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をすることの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向け行った際の資料であり、今求められている食育についてアンケート結果を盛り込みながらまとめた。 Ａ４判　６頁
３.大阪府豊能地区新規採用家庭科教員研修会　資料冊子	単著	平成 24 年 8 月	豊能地区教育委員会 大阪教育大学附属池田小学校家庭科教育部会	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。その際、家庭科教育の目的や生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明を行う際の小冊子を作成し、それをもとに講義を行った。また、45 分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行い、発問・板書・ノート指導・教材選定の仕方などを例示した。 Ａ４判　６頁

著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.「第八回シンポジウム 『アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるか』」	単著	平成 29 年 2 月	株式会社 EPR 教育プロ 第 47 巻　第 4 号 通巻 1829 号	平成 29 年 1 月 22 日開催の「いのちの教育研究会　第 8 回シンポジウム」におけるリポートを執筆した。アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるかをテーマに、基調提案・講演が行われ、それを受けて「子どもが命の大切さを実感するには」をテーマとして、グループ討議を行われたが、そこでの参会者の声やアンケート結果をもとに、いのちの教育についてまとめた。P8～9
「学会発表等」 1．デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を考えた　授業実践	―	平成 24 年 8 月	平成 24 年度日本家庭科教育学会第 43 回近畿地区会　実践･研究発表抄録（p 4） (大阪府、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科大阪サテライト)	類似品が数多く並ぶ中、商品に記載されている多種多様な情報を見極め、必要とする商品を購入する力は、食品の安全がとりざたされている昨今、児童にとっても必要不可欠な力である。食品表示は食品の重要な情報であり、これを見て購入する習慣をつけることは、自分や家族の健康を守る上で大切なことである。本題材は、意識的に商品を見る姿勢を児童に芽生えさせ情報を取捨選択する力をつけさせることを目的として行い、この実践と支える理論を学会で発表した。 A 4 判　p 4
2．生活実践力の向上を図る小学校家庭科教育のプログラム	―	平成 29 年 3 月	日本教師学学会 第 18 回大会 実践研究発表	小学校家庭科教育の課題として、学習内容が定着しておらず実生活で活かされていないことが挙げられる。そこで、実践力を体験活動・評価活動・交流活動の往還によって育成することが出来るという仮説を立て、実践モデルを開発し､その成果と課題を発表した。 A 4 判　p8
3．小学校家庭科における生活実践力育成の授業モデル構想	―	平成 29 年 8 月	日本家庭科教育学会近畿地区会 研究発表	小学校家庭科における課題の一つとして学習した知識や技術などが実生活で十分生かされていないことを文部科学省は指摘している。この現状を受け、児童の生活実践力の育成を図る授業モデルを構想し、研究実践を行い成果と課題を発表した。 A 4 判　p9

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　大淵　裕美

研　究　分　野	研究内容のキーワード
社会学・ジェンダー・ 生活科学	教育社会学、家族社会学、ジェンダー、 家族関係学、生活経営学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
（1）　授業時間外における学習を促進する取り組み：e-mail での対応（天理看護学院助産学科「助産研究」科目）	平成20年12月～平成26年3月	助産学科は、各種実習に加えて年間 10 例の分娩介助が義務付けられており、授業の開講時期も 4～7 月、8 月、12 月と不定期開講であった。その為、授業時間外でもメールで随時進捗状況の報告や中間論文の提出を実施したり、相談に応じるなど、実習の合間でも効率よく論文を執筆できるよう工夫を行った。
（2）　ワークショップ形式講義の導入 （大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科「日本文化理解」科目・2 年次後期開講）	平成23年10月～平成24年3月	体験を通した異文化理解や日本文化の理解を促すため、全 15 回の講義のうち 3 回（2 回は講師を招く）、ワークショップ形式の講義を行った。具体的には、心理学のシミュレーションを活用した異文化体験ゲーム「移民シミュレーションゲーム」の実施、日本の前衛芸術・舞踏の専門家である田中誠司氏を招いた「舞踏ワークショップ」、さらに元営業職の会社員で外国人観光客を意識した café を経営する中西弘之氏を招いた「日本の企業文化と名刺交換ワークショップ」を実施した。「移民シュミレーションゲーム」を実施した際には、受講者は仮想の状況でありながらも、異文化と接触した時のカルチャーショックや仲間意識を体験した。また、「舞踏ワークショップ」では、「まっすぐ歩く」というワークを通じて、一つ一つの物事に対して心身を最大限集中させて取り組む重要性を学修した。最後に、「名刺交換ワークショップ」では、名刺をツールとして、多角的に他者との会話の可能性を切り開く視点を得た。これらを通じて、学生たちに、生身の身体を持つ自分自身が文化を媒体するメディアであることを発見するように促した。
（3）　外部講師による特別講義の実施 （四天王寺大学社会学部社会学科「家族関係論」科目・2 年次後期開講）	平成25年9 月～平成27年3月	社会学部社会学科 2 年後期配当選択必修科目。現代日本社会における家族関係をめぐる様々な事象の考察を通して、物事に対する多様な見方・考え方（複眼的思考法）の習得を目指した。その際に、特別講師を招いた講義を実施し、学生たちに実感を伴う理解を促すよう工夫した。平成 25 年度は 2 名の特別講師をお招きした。「家族と離れて暮らす子どもたち――児童養護施設」をテーマに、群馬県前橋市の児童養護施設「地行園」施設長・須田昭司氏に特別講義を行っていただいた。また、「出産と身体」をテーマに、マタニティヨーガ講師・真鍋りょうこ氏をお招きし、講義とヨーガ体験を行っていただいた。平成 26 年度は、「育児期女性の起業経験」をテーマに、奈良のママが仕事をつくる会（愛称：ナラマーシカ）代表・井上京子氏をお招きし、ご自身の起業体験をお話いただくとともに、商品開発ワークショップを実施した。いずれの特別講義においても、学生から好評を得るとともに、多様な社会現象を理解する一助となった。

（4） フィールドワークに基づくプレゼンテーションの実施（関西大学社会学部社会学科メディア専攻「基礎演習」科目・2年次前期開講）	平成26年4月～平成26年9月	関西大学社会学メディア専攻には、新聞やテレビ、広告等に関心があるのみならず、これらメディア関連企業への就職を希望する学生が多く在籍している。しかしながら、受講者の大半は、大学と自宅とアルバイトといった自分たちの身近な空間で生活をしている。そこで、メディア関連企業等で必要とされる取材力や観察力の涵養を目指すべく、関西大学前の商店街と大阪市内の商店街（天神橋筋商店街、松屋町商店街、福島商店街、道具屋筋商店街）へのフィールドワークを実施し、比較検討する課題を出した。商店街のどのような側面に焦点を当てて調査するかについては、各グループの自由意思に任せた。最終講義では、フィールドワークの結果に基づいたプレゼンテーションを実施した。その結果、学生たちは、音楽や看板といったメディア利用の相違、インターネットにおける商店街のイメージ戦略と実際の相違、店舗の相違等に着目しながら、各商店街の特性を分析していた。このフィールドワークを通じて、学生たちは、人々の生業の相違について学修するとともに、情報収集能力、課題発見能力、情報発信能力の一端を習得した。
（5） 臨地講義の実施 （帝塚山大学文学部文化創造学科「現代日本の文化と社会」科目・1年次前期開講）	平成26年4月～平成26年9月	「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル―ブライダル企業に伺う奈良の魅力発掘・発信法―」というテーマで、奈良市内にあるブライダル企業・アトリエステディ株式会社にて臨地講義を実施した。アトリエステディは、ビジュアルイメージを多用した会社のブランディングや、ブライダルを通じた地域おこしを行っている。文化創造学科の教育目標と親和性が高いと判断し、初年次教育、キャリア教育もかねた講義を依頼した。講義は、3部構成で実施した。Ⅰ部は、「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル―ブライダル企業に伺う奈良の魅力発掘・発信法―」と題して、アトリエステディの谷口裕純専務より自社での特徴的な取り組みについて講話いただいた。Ⅱ部は、「専務と話そう！―さまざまな壁を飛び越えながら文化を創る戦略を探る―」。学生による専務へのインタビューを実施した。Ⅲ部は、「アトリエステディ×文化創造学科＝ファッションショー―文化が創られる瞬間を体験する―」と題して、ブライダル企業の演出によるファッションショーを体験した。本講義に際して、事前・事後授業を行うと共に、専任教員2名と協力しながら、学生が多角的に学修できるよう最大限の工夫を行った。
（6）コメントシートの作成と利用 （四天王寺大学社会学部社会学科「家族関係論」、関西学院大学社会学部社会学科「臨床社会特論A」科目、神戸松蔭女子学院大学全学共通科目（教養系列）「女性とメディア」科目、大阪教育大学教員養成課程「家族関係学Ⅱ」科目、群馬大学社会情報学部情報行動学科「比較文化論」科目、関西学院大学全学科目（基盤・学際科目）「人権からみたジェンダーB」科目）	平成26年9月～平成28年9月	受講者とのコミュニケーションを重視した講義を行うために、独自に作成した「コメントシート」を活用している。コメントシートは15回分の欄が設けられており、毎回講義開始前に資料とともに配布し、講義終了後に回収している。全学生のコメントに毎回必ず目を通し、疑問や感想についての対応を直接コメントシートに書き込んでいる。また、コメントを踏まえ、学生の理解が不十分だと判断した内容については、翌週の講義の一部ないし全体を使って必ず補足説明を行うなど、受講者の理解度を確認しながら講義を進める工夫をしている。
（7）ワークシートを用いたアクティブラーニングの実施（群馬大学社会情報学部情報行動学科「総合文化論」科目）	平成29年1月	教育政策や学習指導要領の変遷、学習塾や予備校などの学校教育と学校外教育の関係、学力低下に関する学説等を学修した。さらに、ワークシートやグループワーク等のアクティブラーニングを導入し、討議できるような発問を考え、社会学的な「問い」「仮説」「根拠」を導出する実践を行うなど、教育課題解決に資する複眼的思考力の醸成を目指した。

2　作成した教科書，教材 （1）『教育社会学』（単著・(株) ERP）	平成29年3月7日	教育社会学とはなにか、教育社会学の考え方と学習方法、学校の社会的機能、学校教育をめぐる現代的課題、教育と家族、教育調査の方法論等を概説した。本書では、部活動問題や子どもの貧困などの教育課題をわかりやすく紹介している。本書を活用することで、受講学生は、学校教育にとどまらず、社会と教育の関係や、学校教育に影響を与える社会的状況等について、理解を深めることが可能となった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 （1）　研究指導者としての評価（天理看護学院）	平成20年12月～平成26年3月	天理看護学院助産学科では、受講者が「助産研究」科目でまとめた研究内容を卒業後に奈良県母性衛生学会等で発表してきた。私が在職期間に指導した学生の大半が、毎年学会発表を可能とした。とりわけ平成24～26年度は、雇用先の助産学科専任教員の推薦により、指導者という立場で卒業生の学会報告に名前を連ねた。雇用先の天理看護学院および教員より、研究指導者としての能力を認めていただいたことを示している。
（2）学科の方針に沿った臨地講義実施に対する学長・専任教員からの評価（帝塚山大学）	平成26年4月～平成26年9月	帝塚山大学文学部の新設学科である文化創造学科で担当した「現代日本の文化と社会」では、「奈良×仕事×文化創造＝ブライダル―ブライダル企業に伺う奈良の魅力発掘・発信法―」というテーマで、奈良市内にあるブライダル企業・アトリエステディ株式会社にて臨地講義を実施した。臨地講義に際して、①事前・事後授業の実施のみならず、②専任教員の牟田口章人先生、河口充勇先生との複数回にわたる打ち合わせや学生の担当箇所の検討、③臨地講義先のアトリエステディ様との 4 回以上にわたる綿密な打ち合わせと準備実施し、学生が多角的に学修できるような工夫を行った。さらに、当日の講義には、帝塚山大学学長・岩井洋先生がご参加くださった。岩井学長より、本臨地講義が「文化創造学科のコンセプトを具現化するもの」であると評価を頂いた。さらに、講義の様子が文化創造学科の HP や Facebook ページ「帝塚山大学学長のココロ」等にて紹介された。このことは、学科のコンセプトを的確につかむ能力や、地域の方々や専任教員の方々と連携した学外講義を実施する能力があることを示している。
（3）学生による授業評価の結果（関西学院大学社会学部社会学科「臨床社会特論 A」科目・1年次前期開講）	平成27年4月～平成27年9月	社会学部 1 年前期配当科目。本講義では、健康や病気、身体など、私たちにとってあたりまえで根本的な問題について、社会学、ジェンダー論の知見を用いて相対化してみると、どのように見えるのかを検討した。受講生の特徴として、社会学部の 1 年生～4 年生だけでなく、心理学、文学、法律学、経済学、社会福祉学といった他学部の 1 年生～4 年生が受講するという状況であった。そのため、社会学を知らない学生や 1 年生に基準を置くとともに、コメントシートを活用して学生の理解度を確認しながら丁寧な授業実施を心がけた。その結果、学生による「授業に関する調査」において、平均よりも高い評価を得た。特に、「担当者が学生の理解度を確認しながらこの授業を進める工夫をしていた」や「全体としてこの授業に満足している」という項目では、5 段階中「4.6」と評価された。このことは、講義科目であっても学生とのコミュニケーションをとりながらきめ細かく対応する能力を有していることを示している。

（4）奈良学園大学人間教育学部採用にあたっての学長評価	平成28年3月	奈良学園大学には教育社会学の科目がないため、社会問題と教育課題を関連付けて考える場が少ないので、教育社会学的な視点に学生の視野を広げる役割を期待して採用された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）「ケア・支援をめぐる現状と可能性―養護・保育・介護の視点から―」	平成25年9月	本企画は、二部構成で実施した。まず、第一部では、児童養護施設の施設長・須田昭司氏より、「家族と離れて暮らす子どもたちの未来」という題で基調講演をいただいた。第二部では、「ケア・支援の可能性～保育・介護・養護の視点を踏まえて～」と題して、2 名の学内教員からの話題提供と、須田氏を交えたパネルディスカッションを実施した。ケア労働や地域との交流について議論をした後、「保育・介護・養護について一般市民ができること」についての暫定的回答をいただいた。本企画は、奈良女子大学ポストドクター・キャリア開発事業との共催であった。登壇者：須田昭司・久木元美琴・井口高志・大淵裕美 （セミナー企画・司会・コーディネーターを担当） 『奈良女子大学大学院人間文化研究科「キャリア開発のための院生自主企画」採択プログラム（奈良女子大学)』
（2）「「命」のつながりを考える」	平成26年3月	出産という次世代を産み育てる営みを通して、生きること、家族とのつながり、医療現場との関わりなどについて検討する機会を設けた。具体的には、映画監督・河瀬直美氏ご自身の出産経験を映像化したドキュメンタリー映画『垂乳女』の上映会の後に、河瀬氏を交えながら、助産師・出産経験者・研究者によるクロストークを行った。 登壇者：河瀬直美・左古かず子・芝田和美・真鍋りょうこ・大淵裕美（企画協力ならびに司会・コーディネーターを担当） 『河瀬直美監督作品「垂乳女」上映会＆クロストーク』（奈良女子大学）
（3）「住民と共に取り組む健康づくり―聞き取り調査事業第１報―」	平成26年6月	吉野町の保健師による健康事業が、住民の健康活動に与えた影響の解明を目指した。具体的には、吉野町で活動する 3 つの団体へのヒアリングを実施し、保健事業が住民に与えた効果を分析し「吉野町モデル」を析出した。この作業を通じて、吉野町における「健康を核とした地域づくり」の方向性を示した。 『平成 26 年度吉野町第 1 回健康づくり推進協議会会議』（吉野町保健センター）
（4）「健康増進計画策定事業取組の現状と課題～住民が主役の健康づくりとは～」	平成27年2月	平成 26 年度の吉野町健康増進計画策定事業の実績と、次年度への展望を報告した。具体的には、平成 26 年度の調査を通じて、住民が主役となる「健康を核とした地域づくり」活動が一定程度なされていたことが確認された。それを踏まえ、次年度以降では、「住民主役型」地域づくりや、生活習慣病・介護予防の両側面において切れ目のない持続可能な「新・吉野モデル」の展開可能性を示した。 『平成 26 年度吉野町第 2 回健康づくり推進協議会会議』（吉野町保健センター）
（5）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅠ」におけるアドバイザーとしての学生支援	平成28年4 月～現在に至る	高校から大学へのギャップで困惑する学生の退学防止のため、学生懇談を年 3 回行うとともに、リメディアル教育の参加を促進し、学力面や生活面での学生の支援を行っている。

（6）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「人間教育実践力開発演習」における学生の学校支援ボランティア参加事業サポート	平成28年4月～現在に至る	文部科学省が推進している学校ボランティアを奈良学園大学人間教育学部では全学年で実施している。各市町教育委員会への教育的意義の説明や、受け入れ学校の調整等のサポートを行い、全体統括をしている。
（7）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における特別支援を必要とする学生のアドバイザーとしての支援	平成28年4月～現在に至る	聴覚障害2級の学生が人間教育学部に入学し、障害者差別解消法に基づき文部科学省が出した指導指針に基づき大学での特別支援学生責任者として関係機関との連携調整及び支援体制の構築に尽力している。
（8）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特別聴講生（留学生）の課題研究指導	平成29年6月～現在に至る	蘇州科技学院（中国・江蘇省）からの特別聴講生2名の課題研究指導を担当している。特別聴講生は、それぞれ日本国内における文化比較研究、日本女性の人生観に関する研究に取り組んでいる。留学生の日本語力に合わせながら、月3回程度のゼミ活動を通じてきめ細かい指導を行っている。
5　その他 （1）天理看護学院助産学科における教育実績	平成20年12月～平成26年3月	天理看護学院助産学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「助産研究」（平成20年12月～平成26年3月） 天理看護学院助産学科の「助産研究」（専門科目、1年次配当、通年、必修2単位）において、助産研究の理論及び実践、研究論文の執筆に関する内容の授業を行った。その結果、学生に助産師として必要とされる課題発見能力、文献収集、調査能力、論文執筆のための文章力等の技能を修得させる教育効果があった。
（2）大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科における教育実績	平成21年10月～平成24年3月	大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「生活文化論」（平成21年10月～平成23年3月） 大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科の「生活文化論」（専門科目、1年次配当、半期、選択必修2単位）において、衣食住やマンガ、女性用品等の現代の生活文化に関する内容の授業を行った。その結果、学生に日常生活の中に含まれる歴史性や文化的価値等のあり方について理解を促す教育効果があった。 「日本文化理解」（平成21年10月～平成24年3月） 大阪樟蔭女子大学学芸学部ライフプランニング学科の「日本文化理解」（専門科目、2年次配当、半期、選択必修2単位）において、茶道をはじめとする伝統文化、年中行事、通過儀礼などの伝統的な日本文化や、舞踏、マンガやアニメなどの現代日本文化の特徴を紹介する授業を行った。その結果、学生に、日本文化の基礎的知識の修得や文化を多面的にとらえる力の醸成という教育効果があった。
（3）四天王寺大学人文社会学部社会学科における教育実績	平成25年9月～平成27年3月	四天王寺大学人文社会学部社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「家族関係論」（平成25年9月～平成27年3月） 四天王寺大学人文社会学部社会学科の「家族関係論」（専門科目、2年次配当、半期、選択必修2単位）において、家族に関する基本的な研究を紹介し、ペット、墓、結婚・出産・離婚、学校外教育、家族と離れてくらす人、LGBTなど、現代における家族に関する様々な課題を検討する授業を行った。その結果、学生に対して、自らの常識に囚われず家族関係の多様性について柔軟にとらえる思考法や、家族に関する社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。

（4）帝塚山大学文学部文化創造学科における教育実績	平成26年4 月～平成 26 年 9 月	帝塚山大学文学部文化創造学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「現代日本の文化と社会」（平成 25 年 9 月～平成 27 年 3 月） 帝塚山大学文学部文化創造学科の「現代日本の文化と社会」（専門科目、1 年次配当、半期、選択必修 2 単位）において、「お客様社会」「文化財の遺産化」「心の教育」「ペットは家族か」「ブライダルを通じた新たな奈良文化の創造」などを事例に、現代日本をめぐる文化的・社会的現象に関する授業を実施した。その結果、学生に対して、身近な事例を通じた複眼的思考力や物事を多面的・多角的にとらえる力を育成するという教育効果があった。
（5）関西大学社会学部社会学科における教育実績	平成26年4 月～平成 26 年 9 月	関西大学社会学部社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「基礎演習」（平成 26 年 4 月～平成 26 年 9 月） 関西大学社会学部社会学科の「基礎演習」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）において、文献講読を通じたメディア論・社会学に関する基礎知識の修得と実践（フィールドワークの実施、プレゼンテーション、レポートの作成）を行った。その結果、学生に対してアカデミックスキルの修得と社会人基礎力の醸成という教育効果があった。
（6）京都文教大学総合社会学部総合社会学科における教育実績	平成26年4 月～平成 28 年 3 月	京都文教大学総合社会学部総合社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「量的調査法」（平成 26 年 4 月～平成 27 年 9 月） 京都文教大学総合社会学部総合社会学科の「量的調査法」（社会調査士資格科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位、社会調査士 E 科目）において、社会学のデータ分析に用いられる多変量解析について、基本的な考え方および主要な分析方法に関する授業を実施した。その結果、学生に統計解析に関する知識と技能を修得させる教育効果があった。 「総合社会学実習ＡⅠ」（平成 27 年 4 月～平成 27 年 9 月） 京都文教大学総合社会学部総合社会学科の「総合社会学実習ＡⅠ」（社会調査士資格科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位、社会調査士 G 科目）において、社会調査の企画から報告書作成にまでの量的調査の全過程を実習を通じて体験的に学修した。特に本科目では、「総合社会学実習 AⅡ」の前段階として、問題意識の明確化や仮説構築の作業を行うとともに、既存研究の質問項目を参照しながら、調査票作成までを中心に実施した。その結果、社会調査データの扱いについての知識と方法、技術を身につけ、質問紙調査を計画・実行する力を修得させる教育効果があった。 「総合社会学実習AⅡ」（平成 27 年 10 月～平成 28 年 3 月） 京都文教大学総合社会学部総合社会学科の「総合社会学実習ＡⅠ」（社会調査士資格科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位、社会調査士 G 科目）において、社会調査の企画から報告書作成にまでの量的調査の全過程を実習を通じて体験的に学修した。特に本科目では、「総合社会学実習ＡⅠ」に引き続き、調査の実施、データ作成および分析を行い、考察を深め、最終的に報告書を作成した。その結果、社会調査データの扱いについての知識と方法、技術を身につけ、質問紙調査を実行し報告書にまとめる力を修得させる教育効果があった。

（７）関西学院大学社会学部社会学科における教育実績	平成27年4 月～平成 28 年 3 月	関西学院大学社会学部社会学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「臨床社会特論 A」（平成 27 年 4 月～平成 27 年 9 月） 関西学院大学社会学部社会学科の「臨床社会特論 A」（専門科目、1 年次配当、半期、選択必修 2 単位）において、医療、教育、家族などの事例を中心に、社会学、ジェンダー学に関する知識やものの見方に関する授業を行った。その結果、学生に対して、自らの常識に囚われず社会現象をとらえる柔軟な思考法や、医療・教育・家族に関する社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
（８）神戸松蔭女子学院大学全学共通科目（教養系列）における教育実績	平成27年9 月～平成 28 年 3 月	神戸松蔭女子学院大学全学共通科目（教養系列）の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「女性とメディア」（平成 27 年 9 月～平成 28 年 3 月） 神戸松蔭女子学院大学全学共通科目（教養系列）の「女性とメディア」（共通教育科目、1 年次配当、半期、選択必修 2 単位）において、女性とメディアに関する基本的な研究を紹介しながら、報道番組、ディズニーアニメ、スーパーヒーロー番組、家族、LGBT などを事例に、女性とメディアに関する諸課題を検討する授業を行った。その結果、学生に対して、メディアの情報を鵜呑みにするのではなく、様々な角度からメディアのメッセージをとらえる柔軟な思考法や、メディアとジェンダーをめぐる課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
（９）関西学院大学全学科目（基盤・学際科目）における教育実績	平成27年9 月～現在に至る	関西学院大学全学科目（基盤・学際科目）の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「人権から見たジェンダーB」（平成 27 年 9 月～現在） 関西学院大学全学科目（基盤・学際科目）の「人権から見たジェンダーB」（共通教養科目、1 年次配当、半期、選択必修 2 単位）において、ジェンダーの基本的知識及び、教育やアニメに描かれる男性性と人権問題に関する授業を行った。その結果、学生に対して、自らの行動や振る舞いに潜む人権侵害の可能性や、ジェンダーをめぐる社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。
（１０）大阪教育大学教育学部教員養成課程における教育実績	平成28年4 月～平成 28 年 9 月	大阪教育大学教育学部教員養成課程の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「家族関係学」（平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月） 大阪教育大学教育学部教員養成課程の「家族関係学」（専門科目、3 年次配当、半期、選択必修 2 単位）において、家族に関する基本的な研究を紹介し、ペット、墓、結婚・出産・離婚、家族と離れてくらす人、LGBT など、現代における家族に関する様々な課題を検討し、家庭科教員としてどのように教育していくかを考察する授業を行った。その結果、学生に対して、将来家庭科教員として必要とされる家族関係の多様性について柔軟にとらえる思考法や、家族に関する社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。

（１１）群馬大学社会情報学部情報行動学科における教育実績	平成28年4 月～現在に至る	群馬大学社会情報学部情報行動学科の非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「比較文化論」（平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月） 群馬大学社会情報学部情報行動学科の「比較文化論」（専門科目、2 年次配当、半期、選択必修 2 単位）において、性と生殖（リプロダクション）やジェンダーを手がかりに、社会学の視点から文化比較を行う授業を実施した。具体的には、障害者と中絶、生殖補助医療のグローバル化、出産形態の多様性などを扱った。その結果、学生に対して、日本社会における現象を相対化し柔軟にとらえる思考法や、リプロダクションをめぐるグローバルな社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。 「総合文化論」（平成 28 年 10 月～現在） 群馬大学社会情報学部情報行動学科の「総合文化論」（専門科目、3 年次配当、半期、選択必修 2 単位）において、教育をめぐる現代の文化現象（学校外教育と階層、見えないカリキュラム、家庭教育、いじめ、体罰、教師文化）に着目した授業を実施した。その結果、学生に対して、自らの常識に囚われず教育のあり方について柔軟にとらえる思考法や、教育と文化をめぐる社会的課題と向き合い解決に向けて思考する力を育てる教育効果があった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 修士（文学）	平成17年3月 24 日	奈良女子大学　修第 784 号 「日本バレエ界の構造と担い手」
博士（社会科学）	平成25年9月 30 日	奈良女子大学　博課第 539 号 「妊婦の社会学―現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の「食事実践」―」
専門社会調査士	平成25年10 月 1 日	社会調査に関する問題点や妥当性の指摘、調査企画能力、運営管理能力、報告書執筆等の実践能力の獲得を示す資格である。
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）奈良女子大学女性研究者支援事業本部・教育研究支援員	平成23年2 月～平成 24 年 9 月	社会心理学を専門とする、奈良女子大学生活環境学部安藤香織准教授の下で、教育・研究の支援を行った。研究面では、先生の専門とする環境配慮行動の国際比較調査の研究支援、教科書作成のための作業支援、学会発表等の支援を行った。教育面では、授業の準備、学部生の卒業研究へのアドバイスを担った。支援業務の成果として、平成 23 年度には、国内学会・国際学会での共同報告の機会を得た。

（2）関西学院大学社会学部・研究支援者	平成24年5 月～平成 25 年3月	関西大学社会学部村田泰子准教授の下で、研究支援を行った。村田先生とは妊産婦と食という共通の問題関心を共有していたため、本支援制度の申請段階で、支援者兼共同研究者として従事する契約をした。具体的には、論文執筆に必要な文献・資料の収集や要約、図表の作成等に従事した。その結果、村田先生は 2 本の学術論文を公表された。村田先生の論文執筆作業の支援を通して、支援者である私自身も、論理構成力のみならず、説得的な文献・データの用い方を学修する機会となった。その成果として、2 本の論文掲載が可能となった。
（3）研究協力者	平成25年4 月～平成 28 年3月	科学研究費補助金基盤研究（C）「過疎と災害に resilient な妊産婦支援ネットワーク構築のための基盤研究」(平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月:研究代表者・田間泰子）に研究協力者として従事している。具体的には、奈良県吉野郡十津川村への共同調査の企画・調整・実施や、奈良県生駒市で実施する「妊産婦のための災害セミナー」に際して、奈良県助産師会との調整やスタッフとして参加した。
（4）滋賀大学環境総合研究センター・リサーチアシスタント	平成25年7 月～平成 25 年9月	滋賀大学環境総合研究センターによる「統合的湖沼流域管理においてハートウェア（心・水文化・記憶）が果たす機能の研究」(文部科学省特別教育研究経費）の一環として実施された、環境 NPO への質問紙調査の作成とデータ入力の補助業務を担った。
（5）奈良女子大学大学院人間文化研究科・博士研究員	平成25年10 月～平成 28 年3月	博士論文で行った研究を展開しながら､｢現代日本における食を通じた妊婦と胎児の健康管理に関する社会学的研究」という研究課題に従事してきた。在籍期間中、9 本の口頭発表と 6 本の学術論文を発表した。
（6）滋賀大学環境総合研究センター・プロジェクト研究員	平成25年10 月～平成 27 年3月	リサーチアシスタントで従事した業務の継続として、「統合的湖沼流域管理においてハートウェア（心・水文化・記憶）が果たす機能の研究」(文部科学省特別教育研究経費）の一環として実施されている、環境 NPO への質問紙調査の作成、データ入力、分析、報告書執筆業務を担当した。
（7）平成 26 年度吉野町健康増進計画策定に伴う基礎事業アドバイザー	平成26年4 月～平成 27 年3月	奈良県吉野郡吉野町において、健康増進計画策定に伴うアドバイザー業務に従事した。具体的には、吉野町町民の健康行動の実態と課題を把握するために、統括アドバイザーの奈良県立大学看護学部入江安子准教授と協力しながら、健康推進団体へのヒアリングや健康教室の開催への支援や助言を行った。この間、吉野町健康推進協議会で 2 回講演を行うとともに、本事業に関連する共著論文を発表した。

（８）奈良女子大学研究推進プロジェクト「大学広報の研究――ニーズ把握からコンテンツ構築・発信まで」統括事務局	平成26年7 月～平成 27 年 3 月	奈良女子大学研究院人文科学系小川伸彦教授が研究代表を務める、奈良女子大学研究推進プロジェクト「大学広報の研究」の統括事務局を担当。本プロジェクトは、全学横断的に実績のあるメンバーを集め、大学広報研究という領域を包括的に深化させ、その成果を検証しつつ還元すべく、奈良女子大学の広報実践との連携の可能性を探ることを目的とする取り組みである。具体的には、広報実績とニーズの研究、コンテンツ構築方法論と応用実践、社会連携型コンテンツ構築を通じた大学ブランディングの検討、入試広報の研究に取り組む。私は、本プロジェクトの統括事務局の一員として、議事録の作成や、運営・経理業務を担当するとともに、メンバーとして大学グッズ開発にも従事した。本プロジェクトの成果として、プロジェクトメンバーによる共同論文を発表するとともに、学生・教職員・生協職員ともに新たな大学グッズ（包装紙・ビニール製手提げ袋・クリアファイル・学章最中等）を開発した。
（９）はっぴぃ明日流 妊産婦の為の防災を考えよう」	平成26年12 月	妊産婦のための防災について、ワークショップを行った。具体的には、「新潟中越沖地震」で被災した妊婦の声や日本助産師会等が発行する防災マニュアルを紹介しながら、居住地域の特性を踏まえた平時からできる備え等について検討した。 『はっぴぃ明日（あーす）の会』(Women’s Future Center)
（１０）社会に活かす 子育て経験者の力～ママの仕事、ママがつくり出す！」	平成27年2 月	奈良のママが仕事をつくる会＜愛称:ナラマーシカ＞」代表・井上京子氏を講師に招き、子育て経験者の力を社会に活かすための起業体験談や商品開発ワークショップを行った。(企画協力ならびに当日の司会・コーディネーターを担当) 『奈良女子大学ポストドクター・キャリア開発事業ワークスタイルセミナー』(奈良女子大学)
（１１）奈良女子大学文学部・研究員	平成27年5 月～平成 28 年 3 月	科学研究費補助金基盤研究（B)「社会学のディシプリン再生はいかにして可能か――デュルケーム社会学を事例として」(平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月 : 研究代表者・中島道男）の推進事務局を担当。具体的な業務としては、毎月 1 回科研メンバー向けに配信するメールマガジン「部内報」の編集・配信作業や、共同研究者・連携研究者の旅費等に関する経理・事務作業に従事した。
４　その他 （１）奈良学園大学人権教育研究推進委員会　委員	平成28年4 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学にて人権教育研究推進委員会に所属し、委員として奈良県大学人権教育研究協議会の運営等に携わった。
（２）奈良学園大学学生支援センター運営委員会・学生委員会　委員	平成28年4月～現在	奈良学園大学にて学生支援センター運営委員会・学生委員会に所属し、委員として、聴覚障害学生への支援整備、学生生活の実態調査、保護者懇談会の運営などについて活動している。

「研究助成」 （1）「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ――現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」（研究代表者）	平成 21 年 4 月～平成 22 年 8 月	現代日本社会における妊娠・授乳期の女性たちは、何を嗜好品ととらえどのような意味を付与しているのか。嗜好品摂取に関する悩みと楽しみとはいかなるものかについて、近畿圏在住の妊婦・出産経験者へのインタビュー調査を通じて明らかにした。 『研究奨励事業（研究助成）』嗜好品文化研究会
（2）「助産師のライフコース・キャリアに関する社会学的研究――奈良県・福井県の事例を手がかりに――」（研究代表者）	平成 21 年 6 月～平成 22 年 3 月	福井県と奈良県に在住する開業助産師たちにインタビュー調査を実施し、彼女たちのライフコース・キャリアの一端を明らかにした。 『平成 21 年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学
（3）「妊娠・出産期の食生活への認識と実践に関する社会学的研究――近畿圏都市部・農村部におけるインタビュー調査に基づく男女間・世代間比較を中心に――」（研究代表者）	平成 23 年 4 月～平成 24 年 2 月	「医療機関への距離と受診機会の多寡という地理的制約が、妊娠期における食の規制をどの程度左右しているのか」という仮説を検証するために、近畿圏都市部・農村部在住の妊婦や出産経験者にインタビュー調査を実施した。 『笹川科学研究助成』日本科学協会
（4）「医療過疎地における妊娠・出産期家族の生活戦略に関する社会学的研究―奈良県農山村地域における食生活の認識と実践を中心に―」（研究代表者）	平成 24 年 6 月～平成 25 年 3 月	「地域的制約の中での食事管理の困難さ」に焦点を当て、奈良県の農山村地域を対象に、医療機関への距離という地理的制約が、食の規制をどの程度左右するのか、という問いの解明を目指した。 『平成 24 年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学
（5）「妊娠期女性をめぐる食を通じた健康管理と＜母＞の変容に関する社会学的研究―母子健康手帳・母子健康手帳副読本における栄養の記述の変遷に注目して―」（研究代表者）	平成 25 年 6 月～平成 26 年 3 月	国家がいかに妊娠期の女性たちに対して、「理想の＜母＞像」を提示してきたのかについて、主に栄養に関する記述の変遷に着目して検討した。具体的には、財団法人母性衛生研究会が発行する『母子健康手帳副読本』や、『母子健康手帳』を収集・分析した。 『平成 25 年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学
（6）「食を通じた妊婦の健康管理の科学化に関する社会学的研究―「妊産婦のための食生活指針」策定過程に着目して―」（研究代表者）	平成 27 年 6 月～平成 28 年 3 月	2000 年代以降における国家による妊婦の健康管理政策の形成過程に着目して検討する。具体的には、平成 18 年に発表され母子健康手帳にも反映された「妊産婦のための食生活指針」の策定過程に着目して、医師、助産師、栄養士などの専門家たちが、それぞれの専門領域を踏まえながらどのように妊婦へのメッセージを策定しようとしたのか、また国における他の政策（「食育」をめぐる政策）とどのように関連しながら形成されたのかを明らかにした。 『平成 27 年度若手女性研究者支援経費』奈良女子大学
（7）「女性の健康における社会的決定要因とライフスタイルに関する研究」（研究分担者）	平成 28 年 7 月～平成 29 年 3 月	研究分担者として、「困難な状況下でも良好なライフスタイルを実践する女性たちの発掘と問題解決法の解明に関する探索的検討」という研究テーマで、シングルマザーを対象にインタビュー調査を実施した（研究代表者：女子栄養大学・林芙美）。 厚生労働省：平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金（女性の健康の包括的支援政策研究事業）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １．『ポピュラーＴＶ』	共著	平成 21 年 3 月	風塵社	概要：メディア論と地域社会学・観光社会学との接合を試みた。具体的には、テレビドラマ『鹿男あをによし』を事例に、テレビ・インターネット・DVD という三つのメディアを分析するとともに、ロケ地である奈良県内のフィールドワークと、番組制作に関わった地域の民間団体・住民等へのインタビュー調査を実施した。これらを通じて、テレビドラマが地域社会にどのように受容され地域資源として展開されたのかを検討した。 判・全頁：B6・331 ページ 共著者：平井智尚・大淵裕美・藤田真文・島岡哉・小林義寛・小林直毅 本人担当部分：「『鹿男あをによし』と娘と共に歩んだ二〇〇八年――テレビドラマ『鹿男あをによし』に関するネット・DVD・奈良をめぐる一考察」（単著）pp.79～146.
２．『教育社会学』	単著	平成 29 年 3 月	（株）ERP	概要：教育社会学とはなにか、教育社会学の考え方と学習方法をはじめ、学校の社会的機能（知識伝達、ジェンダー、隠れたカリキュラム)、子どもをめぐる現代的課題（いじめ、不登校、教育格差)、教育と家族について解説した。さらに教育社会学の研究の方法論について概説した。最後に、教育社会学の視点が学校現場の具体的な課題を分析する上でどのように活用できるかについて展望した。 判・全頁：A5・80 ページ
（学術論文） １．「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ――現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」	単著	平成 23 年 4 月	嗜好品文化研究会・『平成 21 - 22 年度嗜好品文化研究会研究奨励事業報告書』pp.1-20.	妊娠中の「望ましい飲食物」という規範が、女性たちの情動にどのような影響を与えるかについて分析をした。具体的には、「自分は好きだが、胎児のためには良くない」という認知的不協和をどのように解決しているかを実証的に検証した。その結果、女性たちは、「自分たちが意識的・自発的に欲するもの」を摂取する場合に、罪悪感と満足感という両義的な情動を抱えることが明らかになった。加えて、逸脱的な摂取行動に対する罪悪感の解決方法として、飲食物の意味づけや摂取行動を柔軟に変化させていることが示唆された。
２．「出産の医療化論再考――『妊婦中心の健診』と助産師教育・卒後研修にみる女性の抵抗の限界――」（査読付）	単著	平成 25 年 2 月	社会学研究会・『ソシオロジ』 57(3) pp.73-89.	ヘルシズム論および教育制度分析の視点から、助産師の再生産システムの検討を通して、従来の出産の医療化論を再考することを目指した。特に、助産師の教育内容の高度化や国家試験作成メカニズムと助産師による妊婦健診の増加との相関関係を分析した。その結果、助産師による妊婦健診は、正常な経過をたどる女性にとって「脱医療化」ではなく「医療化」を徹底する作用があると指摘した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．「妊娠期女性の食事実践に関する研究―『パーフェクト妊婦』と情報収集―」（査読付）	単著	平成 25 年 3 月	奈良女子大学社会学研究会・『奈良女子大学社会学論集』20, pp. 83-101.	教育社会学の知見である「パーフェクトマザー論」を、妊娠期女性に当てはめて検討するために「パーフェクト妊婦」という概念を創出した。本概念を用いながら、妊娠期女性の食事を通じた胎児の養育責任の様相を、行動の判断となる情報収集や活用に着目して検討した。その結果、二つの知見がえられた。女性たちは、参照可能な情報を最大限収集しているだけでなく、自分にとって信頼できるという質を重視した情報収集を行っていた。また、高学歴女性であっても、収集した情報は胎児への自己犠牲のみならず、自分のニーズの根拠としても用いられる可能性が示唆された。女性たちは、各自の可能な範囲で「パーフェクト」な実践を行っていた。
４．「妊婦の社会学――現代日本における健康の制度化と妊娠期女性の『食事実践』」（博士論文）	単著	平成 25 年 9 月	奈良女子大学	現代社会において妊娠という営みが、どのように位置づけられ、意味づけられているかの解明を目指した。特に、教育社会学の知見である「パーフェクトマザー論」を、妊娠期女性に当てはめて検討するために「パーフェクト妊婦」概念を創出し、妊婦の「食事実践」のあり方に焦点を当てた。複数の質的調査法を用いて調査研究を行なった結果、次の知見が示された。まず、胎児の養育責任の「個人化」の条件や仕組みと、「社会化」の可能性である。次に、妊婦という近代社会の個人概念から捨象されてきた存在の社会的位置づけや意味づけの重要性である。最後に、妊婦を中心に位置づけた人間社会の再構成を目指す理論的・実証的研究の可能性である。 判・全頁：A4・232 ページ
５．「奈良県山村における出産の施設化の様相――1960 年代～1980 年代に着目して――」	単著	平成 26 年 8 月	滋賀大学環境総合研究センター・『研究年報』11(1)pp. 89-97.	出産の施設化が地域によってどのように異なって進行するのかを、奈良県宇陀郡及び宇陀郡 A 村を対象に検討した。その結果、以下の三点が明らかになった。第一に、宇陀郡全体の出産の施設化は「病院出産型」施設化であることが示された。第二に、宇陀郡内においても施設化過程に地域差が見られた。具体的には、町部は「病院出産型」施設化であるのに対し、村部では「診療所出産型」施設化であった。第三には、A 村では、診療所と村内の有床助産所が出産の施設化をけん引していた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６．「調理実践にみる妊娠期女性の経験と意識の変容 ―ある初産婦の食事日記とインタビューを事例として―」（査読付）	単著	平成 26 年 11 月	日本女性学研究会・『女性学年報』 35, pp. 1-26.	妊娠期の女性が、調理を通じてどのように胎児への配慮と家族への配慮を実践しているのか、についての解明を目指した。具体的には、パーフェクト志向の高い初産婦１名に実施した日記調査とインタビュー調査に基づきながら、彼女が直面した調理をめぐる困難とそれに伴う家族のサポートの変化、当人の認識の変容について検討した。その結果、（１）妊娠期においては、自分の身体を通じた胎児への配慮と、夫をはじめとする眼前の他者への配慮の両立が、妊婦の悩みの要素になるという点や、（２）妊娠期において望ましいとされる食生活の実現には、妊婦自身のみならず家族も、調理に関する知識の幅や技術の習得程度が重要な要素となる点が明らかになった。
７．「インターネットコンテンツによる大学広報―奈良県内諸大学を事例とした比較分析―」	共著	平成 26 年 12 月	奈良女子大学文学部・『奈良女子大学研究教育年報』 11, pp. 9-33.	奈良県内諸大学におけるインターネットコンテンツによる情報発信の現状の検証を通して、諸大学の参考となる知見の提示と奈良女子大学が学ぶべき点の解明を目指した論考。担当節では、大学が地域社会からいかにイメージを得ながらブランディングを行っているかについて、地域連携とイメージ的側面としてのキャッチコピーや図像の活用に着目して検討した。その結果、奈良女子大学の特徴として、以下の点が明らかとなった。まず、地域連携に関する情報発信については、社会連携センターが独自のウェブサイトを通して積極的に行っていることが明らかとなった。次に地域イメージの活用については、「奈良」という地域性を活かしたキャッチコピーと、大学独自の資源である記念館（国重要文化財）イメージを融合した図像が用いられていた。地域性と大学独自のブランドを組み合わせた情報発信の可能性について指摘した。 共著者：小川伸彦、藤野千代、磯部敦、井口高志、吉田信也、松永光代、大淵裕美、宮路淳子 本人担当部分：「８．奈良と大学―地域連携とイメージ活用―」（単著）pp. 25-28.（論文執筆）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8.「地域診断における GIS の活用」	共著	平成 27 年 3 月	奈良県立医科大学医学部看護学科・『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』 11, pp. 3-13.	奈良県吉野町保健センターでの地域診断で試みた GIS 分析例を紹介し、今後の GIS の活用方法について解説した。その結果、GIS は地域の健康情報を可視化し、住民と協働できる地域診断づくりにつながることが分った。留意点としては、GIS を用いて地域における地理的分布を解釈するには、人口分布との関連で捉える必要がある。また、GIS の活用により空間的従属性を視覚化することが出来るので、行政の区分けである小地域の分類だけではなく、隣接性(近接性)も考慮した地域の区分けの必要性、及び空間演算ツールの活用が挙げられた。 共著者：入江安子、南由貴代、上浦千明、山下延代、下迫由美、谷口莱那、大淵裕美（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）
9.「女性の食生活をめぐる規定要因――子どもの存在・社会的要因の効果――」（査読付）	単著	平成 27 年 10 月	平成 27 年 10 月 奈良女子大学家政学会・『家政学研究』 62(1), pp. 1-11.	子どもの存在が女性の食生活を規定する要因となりうるのかについて、女性の社会的要因を考慮しながら検証した。NHK 放送文化研究所が 2009 年に実施した「健康に関する世論調査」の個票データのうち、20～49 歳の女性 663 名を分析対象としてロジスティック回帰分析を行った結果、次の点が明らかになった。まず、子どもの存在は、多様な女性の食生活の中でも 1 日 3 食摂取するという食生活のリズムと、原産国や生産地に配慮するという食の安全性というごく限られた局面に影響していた。それに対して、社会的要因は女性の食生活の多方面に作用していた。以上より、女性の食生活改善には、社会的要因を考慮したアプローチが有効である可能性が示された。
10.「妊婦にとって〈嗜好品〉とは何か」（査読付）	単著	平成 28 年 3 月	嗜好品文化研究会・『嗜好品文化研究』 1, pp. 93-101.	妊娠を契機に、「胎児にとって良くない」という理由から禁忌に分類される飲食物に対して、女性がどのように認識や行動を変化させるのかを検討した。その結果、妊婦にとっての＜嗜好品＞とは、妊娠前に常用していたもので、妊娠後は禁忌の対象となるにもかかわらず、親近と疎遠の間をゆらぎながらも当該期間中に断続的に摂取し続ける飲食物であり、胎児にとっては良くないという点で罪悪感を覚えつつも、自分の楽しみや気分転換のために摂取するものであることが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.「食を通じた妊婦と胎児の健康管理に関する歴史的変容－母子健康手帳における栄養の記述を中心に－」	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学・『奈良学園大学紀要』 5, pp. 13-25.	公的メディアのひとつである母子健康手帳に着目し、国家による食と栄養を通じた妊婦と胎児の健康管理の変遷を検討した。その結果、以下の点が明らかとなった。第一に、国家が示す栄養を通じた望ましい妊婦像が、時代とともに高度化していた。第二に、記述内容の科学化は、妊婦間における理解の格差を引き起こす可能性がある。第三に、呼称の女性化は、栄養と女性の結びつきを強化するジェンダー化作用のみならず、妊婦や胎児の健康状態に影響する諸要因の複雑性や社会的責任を隠蔽し、妊婦の自己責任へと矮小化する作用がある。
12.「なぜ学校に行く気がしないのか―『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査・2012』の分析」	単著	平成 29 年 3 月	奈良女子大学社会学教育研究会・『奈良女子大学社会学教育研究論集』1, pp. 7-16.	中等教育を受ける生徒の登校回避意識が何によって規定されているのかを、「中学生・高校生の生活と意識調査 2012」を用いて検討した。その結果、中等教育においては、中学生よりも高校生の方が有意に登校回避意識が高いことが明らかとなった。また、学校回避意識には学校環境要因を含めた複数の要因が影響していることが確認された。特に、子どもにとっては、学級や家庭という複数の人々によって構成される場の安定性の程度によって、登校回避意識が左右されることが示唆された。このような要因を考慮した、教育現場における生徒対応や、家庭における保護者の関りの重要性を指摘した。
13.「困難な状況下でも良好なライフスタイルを実践する女性たちの発掘と問題解決法の解明に関する探索的検討」	単著	平成 29 年 3 月	『厚生労働科学研究費補助金 女性の健康の包括的支援政策研究事業 女性の健康における社会的決定要因とライフスタイルに関する研究 平成 28 年度　総括・分担研究報告書』 , pp. 95-105.	困難な状況下でも主体的な健康づくりを実践する者（ポジデビ）の行動特性の解明を行った。 具体的には、身体的・精神的な主観的健康感が良好なシングルマザー15 名を対象にインタビュー調査を実施した。その結果、ポジデビ共通の特徴として、心身の健康を維持する行動、サポートネットワークの保持、経済的資源の確保が明らかになった。さらに、先鋭的なポジデビの特徴として、自らの力で問題解決する志向性、徹底的な情報収集に基づく意思決定、経済的資源の確保や節約法に関する知識・方法を保持し、暮らしを豊かにする行動の習慣化、確立されたライフスタイルと他者への発信が析出された。本研究を通じて、社会資源を生活資源に活用する行動特性が見られることが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14.「「保育者・教員養成機関と『特別支援教育』―特別なニーズを持つ幼児・児童・生徒・学生のアクティブ・ラーニングを軸に」(査読付)	共著	平成 30 年 2 月	淑徳短期大学部・『淑徳大学短期大学部研究紀要』58, pp. 43-55.	幼児教育から大学教育までの各教育段階における特別支援教育を概観し、特別なニーズを持つ幼児・児童・生徒・学生のアクティブ・ラーニングの現状と課題を中心に考察した。その結果、当事者の視点を考慮した授業実践が全ての教育段階で求められることが明らかになった。加えて、学級経営、個別支援、専門家の育成、地域の専門機関との連携など総合的など支援が課題であることも指摘した。さらに、特別支援教育の方針を理解し普及を推進するにあたっての、これからの保育者および教員養成機関における課題を示唆した。 著者：打浪文子、大淵裕美 執筆担当：2-2「義務教育課程（初等・前期中等教育)における特別支援教育」、2-3「後期中等教育（高等学校）における特別支援教育」、2-4「高等教育（大学等）における特別支援教育」
15.「多文化共生保育の実践に関する一考察―大阪府A保育園における先駆的事例から」	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学・『奈良学園大学紀要』 8, pp. 21-31.	オールドカマーを対象とした保育実践に着目しながら、エスニシティの多様化が進む保育現場における保育者のあり方の一端を検討した。その結果、次の２点が明らかとなった。ひとつは、文化摩擦や保育者自身のアイデンティティに踏み込んだ園内研修の重要性である。このような園内研修の実施は、多様なエスニシティやアイデンティティをもつ保護者への支援にも有効であることが示唆された。もうひとつは、保育者間での意見の相違や対立などを踏まえた「聴きあう」経験の重要性である。この経験は、保育者にとってコミュニケーション能力の醸成に一定程度寄与する可能性が示された。 著者：大淵裕美、オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス、土谷長子、高木悠哉 執筆担当：共同執筆のため執筆箇所抽出不可
（その他） 1.「地域社会におけるテレビドラマの受容と利用過程――『鹿男あをによし』の事例から――」	―	平成 21 年 5 月	『第 60 回関西社会学会』(京都大学)	地域に生きる人々の日常性に軸足を置き、ミクロな視点から地域活性化につながるプロセスの検討を試みた。具体的には、ドラマ『鹿男あをによし』を事例として、地域住民をはじめどのように活用され、地域資源となったのかを検証した。
2.「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ――現代日本の出産・育児に関する文化社会学的研究」	―	平成 22 年 5 月	『第８回嗜好品文化フォーラム』(メルパルク京都)	現代日本社会における妊娠・授乳期の女性たちは、何を嗜好品ととらえどのような意味を付与しているのか。嗜好品摂取に関する悩みと楽しみとはいかなるものかについて考察した。
3.「妊婦・授乳婦における嗜好品摂取の悩みと楽しみ―『悪の魅惑論』を手がかりとした嗜好品概念の再検討―」	―	平成 22 年 12 月	『2010 年度奈良女子大学社会学研究会秋の例会』(奈良女子大学)	妊婦・授乳婦たちの食生活に注目して女性たちの逸脱的な摂取行動や欲望がどのようなメカニズムによって生じるのかを、「悪の魅惑論」を手がかりに検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.「妊娠と食事をめぐる悩み・楽しみ――ある初産婦の妊娠日記とインタビューを事例に――」	―	平成 23 年 7 月	『現代風俗研究会 2011 年度第 4 回例会』（徳正寺）	妊娠期の女性たちは、世相によって変化する食物規制や推奨にもまれながらどのような食生活を送っているのかについて、ある初産婦の妊娠日記とインタビューを手がかりに検討した。
5.「妊婦・授乳期女性の食生活に見る乳児・胎児への配慮と欲望との葛藤――近畿圏でのインタビュー調査を手がかりに――」	―	平成 23 年 9 月	『日本家族社会学会第 21 回大会』(甲南大学)	妊娠期・授乳期の女性たちの食生活の実践を明らかにする。女性たちは妊娠・授乳をきっかけにどのようなコンテクストに置かれるのか。相互交渉の過程の中で、社会規範はいかに立ち現れるのか。女性の欲望が先鋭化した摂取状態である「過剰摂取」はなぜ発生するのか。これらの点について詳細に検討した。
6.「中国・日本における環境配慮行動の規定因の予備的分析：他者の実行度認知に着目して」	―	平成 23 年 9 月	『日本社会心理学会第 52 回大会』(名古屋大学)	他者の実行度認知が環境配慮行動に及ぼす影響を、日本と中国との規定因の比較を通じて検討した。その結果、環境配慮行動の実行度については、日中間では大きな差は見られなかった。 報告者：安藤香織・大淵裕美・磯部香
7.‘Determinants of Pro-Environmental Behaviors in China and Japan -The Role of Estimation of Others’ Behaviors’ （日中における環境配慮行動の規程要因―他者の実行度認知に着目して）	―	平成 23 年 12 月	“The Second International Conference of Indigenous and Cultural Psychology” (University of Udayana, Indonesia)	他者の実行度認知の中でも、友人の実行度認知と地域住民の実行度認知が、環境配慮行動に及ぼす影響について、日本と中国との規定因の比較を通じて検討した。その結果、環境配慮行動の実行度については、日中ともに、友人の+E21 実行度認知の方が強い影響がみられることが明らかとなった。 報告者：ANDO Kaori・OHBUCHI Yumi
8.‘Practice of Eating Strategies among Pregnant Women: Accommodation and Resistance to Medical Knowledge （妊娠期女性の食事戦略に関する実践―医療知への順応と適応に着目して）	―	平成 24 年 2 月	“ANU Japanese Studies Graduate Summer School” (Australian National University, Australia).	妊娠期の女性たちがどのように医学的アドバイスに順応し、抵抗しているのかを、専門知―素人知の概念を用いながら、食生活の実践に注目して検討した。
9.「青年期における性教育方法の検討」	―	平成 24 年 7 月	『第 27 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	ピアカウンセリングに代表される、主体的な参加を可能とする性教育方法の実施度や有効性を、質問紙調査を通じて検討した。その結果、主体的な参加型性教育方法は取り入れられていないことが明らかになった。主体的に参加できる性教育方法導入（ピアやグループワーク）にあたり、個人の経験や羞恥心などを十分考慮した上で、方法を決定することの重要性が示唆された。 報告者：田中智子・新谷祐美・西上紫萌・中村喜代美・大淵裕美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10.「A 市・B 幼稚園における幼児期の性教育について―保護者の対応に関する実態調査―」	―	平成 24 年 7 月	『第 27 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	幼児期の性教育に関する実態調査を、幼稚園の保護者を対象に質問紙法を用いて行った。家庭での性教育の実際を知り、幼児期の性教育の改善点や助産師が出来る援助の方向性を明らかにすることを目指した。 報告者：友田果那・川口恵理・仲谷依世・中村喜代美・大淵裕美
11.「妊娠期の母親から見た夫のサポートと求める内容の把握」	―	平成 24 年 7 月	『第 27 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	妊娠期の母親からみた夫のサポートの現状と母親の求める育児に注目し、実態調査を行った。助産学の立場から、早期から夫の育児参加行動を促進することが、どのように母親の良好な妊娠経過につながるのかについて模索した。 報告者：志賀加奈子・染川真美・神田菜々子・中村喜代美・大淵裕美
12.「妊娠・出産研究における食のアプローチの意義」	―	平成 24 年 7 月	『第 14 回奈良女子大学社会学研究会』（奈良女子大学）	妊娠・出産に関する研究群のうち、主に家族社会学における研究の到達点と課題を整理したうえで、食という視点からアプローチする意義について検討した。
13.「出産の医療化論再考―『妊婦中心の健診』と助産師国家試験作成プロセスにみる女性の抵抗の限界―」	―	平成 24 年 9 月	『日本家族社会学会第 22 回大会』（お茶の水女子大学）	ヘルシズム論および教育制度分析の視点から、助産師の再生産システムの検討を通して、従来の出産の医療化論を再考することを目指した。特に、助産師の教育内容の高度化や国家試験作成プロセスを分析した。その結果、助産師による妊婦健診は、正常な経過をたどる女性にとって「脱医療化」ではなく「医療化」を徹底する作用があると指摘した。
14.「妊娠期女性の食事戦略――ある初産婦の食事日記を手がかりに――」	―	平成 24 年 10 月	『第 32 回家族関係学セミナー』（岡山大学）	妊娠期の女性に見られる「食事戦略」を、ある初産婦の食事日記とインタビューデータをもとに検討した。具体的には、妊娠中の食事選択や料理行動に影響を与えた「塩分制限」と「絶対安静」の二つの困難に着目し、彼女が置かれた状況のなかで、どのような戦略をとったのかを考察した。
15.「妊娠期女性の食事実践に関する研究 ―『パーフェクト妊婦』と情報収集―」	―	平成 25 年 2 月	『2012 年度第 3 回生活経営学部会・関西地区会』（同志社大学）	妊娠期における女性たちの食事実践について、行動の判断となる情報収集や活用に着目しながら、女性たちによる胎児の養育責任の様相を、「パーフェクト妊婦」という概念を用いて明らかにした。
16.「出産経験と食事実践に関する検討―『NHK 健康に関する世論調査』の二次分析を手がかりに―」	―	平成 25 年 6 月	『2012 年度第 4 回生活経営部会・関西地区会』（武庫川女子大学）	出産経験の有無が女性の食事実践にどのような影響を与えるのかについて、「健康に関する世論調査」の二次分析を通じて検討した。
17.「出産の医療化論再考」	―	平成 25 年 7 月	『第 15 回奈良女子大学社会学研究会大会』（奈良女子大学）	2013 年 2 月に『ソシオロジ』に掲載された論文の合評会を行った。具体的には論文の概要について説明した後、コメンテーター2 名との質疑の後、フロアからの質問に回答した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18.「妊婦健康診査の満足度に関する現状と課題―実施者・施設・環境に注目して―」	―	平成 25 年 7 月	『第 28 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	妊婦健診の内容、方法、実施者の違いが妊婦たちの満足度に与える影響と、満足度を高めるために必要な内容を明らかにするために文献研究を行った。 報告者：田中佐世・野井歩・村田ちか子・大淵裕美
19.「子どもを亡くした親・家族への支援―向き合い・寄り添える看護を目指して―」	―	平成 25 年 7 月	『第 28 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	死産を経験した産婦や家族への支援の現状と課題を明らかにするために、文献検討を行った。その作業を通じて、今後必要とされる支援の可能性を示した。 報告者：南和弥・石原慶子・渡辺ひろみ・大淵裕美
20.「医療過疎と少子化のエスノグラフィ―奈良県南部を事例に―」	―	平成 25 年 9 月	『第 20 回関西若手ルーラル研究会』（キャンパスプラザ京都）	『第 20 回関西若手ルーラル研究会』（キャンパスプラザ京都）少子化と医療過疎が進む農山村地域に住む妊婦たちの経験を検討した。具体的には、奈良県の東部・南部の県境にある宇陀郡御杖村、吉野郡野迫川村、吉野郡上北山村に在住する女性たちを取り上げる。村内出身者、都市部から村に移住した者、村から都市に移住した者の３つのタイプに分け、それぞれの経験の特徴を抽出する。その作業を通して、空間的制約と食事実践を通した妊婦の実践についての知見の析出を試みた。
21.「妊婦をめぐる食を通じた健康管理と＜母＞の変容―母子健康手帳における栄養の記述の変遷を中心に―」	―	平成 25 年 10 月	『第 33 回家族関係学部会セミナー』（奈良大学）	国家による妊婦の管理の歴史的変遷について検討した。具体的には、母子健康手帳における栄養に関する記述の変化と栄養行政の変遷の分析を通して、食を通した胎児への配慮がどのように強化されていくのかを明らかにした。その作業を通じて、国家が示す理想的な食事を行う妊婦像＝＜母＞のイメージがどのように変化してきたのかについて考察した。
22.「戦時下における身体を通じた少国民の形成―島田豊・児童舞踊・愛国行進曲―」	―	平成 25 年 12 月	『2013 年度奈良女子大学社会学研究会例会』（奈良女子大学）	戦時下（日支事変前後）における子どもの国民化の一側面を明らかにする。具体的には、大正中期より勃興し、昭和初期から終戦にかけて発展をとげた児童舞踊に着目する。特に、「児童舞踊」を公称したとされる島田豊（1900-1984）に焦点を当てながら、「愛国行進曲」「少国民愛国歌」を事例に検討する。以上を通して、「非常時」に備えた子どもの身体の形成が、メディアによる児童舞踊の産業化とともになされた点を指摘した。
23.「若年層男女における食の安全性配慮に関する規定要因―「健康に関する世論調査 2009」の分析―」	―	平成 26 年 1 月	『2014 年第 2 回生活経営学部会関西地区会』（武庫川女子大学）	20～30 代の若年層は、出産・育児などの次世代の育成を担う世代である。この世代層が、主体的な生活者となるためには、どのような点に考慮して支援していけばよいのだろうか。本報告では、その前段階として、若年層における食品の安全性に配慮した行動にどのような要因が影響しているのかを量的手法を用いて検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24. ‘Influence of Childcare Experience on Women’s Dietary Habits: Analysis of Public Opinion Poll on Health’ （女性の食生活への育児経験の影響―「健康に関する世論調査の分析）	―	平成 26 年 7 月	“XVIII ISA World Congress of Sociology”（パシフィコ横浜）	出産経験の有無が女性の食事実践にどのような影響を与えるのかについて、NHK「健康に関する世論調査」の二次分析を通じて検討した。その結果、「三食抜かずに食べる」という食事回数のみが出産経験の有無によって有意な差が見られた。
25. ”Acquisition of Ballet Technique: Collective Teaching in the Ballet Studio and Social Control （バレエ技術の習得―バレエ教室での集団指導と社会的コントロールを中心に）	―	平成 26 年 7 月	“XVIII ISA World Congress of Sociology”（パシフィコ横浜）	日本のバレエ教室を事例として、集団学習の際に生じる、他者に向けられた指導を、生徒たちはどのようなきっかけやプロセスを通して、自分の技術の向上へと結びつけていくのかについて検討した。その結果、集団でバレエを学習する生徒たちは、他の生徒に対する教師の指導を過大に理解するだけでなく、他者の身体の変化を観察して分析するという知覚や思考と、自らの身体の動作を結びつける訓練を繰りかえしながら、技を獲得していることが示唆された。
26.「助産師が行う性教育のあり方～思春期におけるピアエデュケーションでの助産師の介入」	―	平成 26 年 7 月	『第 29 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	思春期の性教育の実態や方法に関する文献検討を行った結果を報告した。具体的には、近年効果的な教育方法と言われているピアエデュケーションに着目しながら、助産師が行う性教育の有効性や意義について検討した。 報告者：秋月志保・岩本理沙・野口玲菜・梶間敦子・大淵裕美
27.「出生前診断を受検する妊婦と家族へのケア―文献検索による研究―」	―	平成 26 年 7 月	『第 29 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	出生前診断を受ける妊婦や家族の意思決定を支える支援の現状と課題を明らかにするために、文献レビューを行った。その作業を通じて、今後の支援の方向性を検討した。 報告者：飯塚望水・奥田恵美・小崎美智代・梶間敦子・大淵裕美
28.「外国人の日本での出産における問題点とその関わり」	―	平成 26 年 7 月	『第 29 回奈良県母性衛生学会』（奈良県医師会館）	在日外国人女性の妊娠・出産・育児に対するニーズや心理、外国人に対する母子保健、その他の医療制度や医療者側のケアの必要性に関する文献検討を行った。在日外国人女性が抱える課題を明らかにし、今後のケアやかかわりに活かす視点の析出を試みた。 報告者：谷口侑子・桑原萌・吉本有里・梶間敦子・大淵裕美
29.「現代日本における妊娠期女性の調理実践と意識の変容」	―	平成 27 年 2 月	『フィールドネット・ラウンジ企画「フィード(feed)×フィールド(field)：食べさせる／られる行為から社会関係を読み解く」』（東京外国語大学）	妊娠期女性の調理に注目し、家族との相互作用の結果が食卓のメニューにどのように現れるのかを検討し、その作業を通して、食べさせる／食べられる行為と社会関係との関連について考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
「書評論文」				
1.「食制研究の手引書としての「三度の食事」」	単著	平成 24 年 3 月	奈良女子大学民俗学研究会『柳田國男を読む―女性研究者による柳田再読―』pp. 17-20.	柳田國男『村と学童』に所収されている「三度の食事」に関する書評論文。「三度の食事」を柳田の食制研究のエッセンスとしてとらえ、稲作労働と民俗語彙に注目して紹介した。さらに、後続の研究者からの評価についても指摘した。
「その他論文」				
1.「教育社会学といじめ経験―『考え、議論する道徳』に生かす可能性」	単著	平成 29 年 2 月	（株）ERP『教育 PRO』47(3), pp. 20-21.	「いじめ」の要因について、「家庭格差論」について紹介するとともに、教育社会学で行われている教育調査の手法である、徹底的な議論による自らの仮説の構築と、アンケートやインタビュー調査に基づく実証的な検証方法について概説した。教育社会学の視点や方法の導入は、新学習指導要領の「考え、議論する道徳」に寄与する可能性を指摘した。
2.「教育社会学の教育実践に関する一考察―『高校生の中途退学』を手がかりに」	単著	平成 29 年 3 月	奈良女子大学社会学教育研究会『奈良女子大学社会学教育研究論集』1, pp. 1-6.	高校生の中途退学を事例とした、教育社会学の教育実践について論じた。具体的には、高校生の中途退学に関する実態や学校教育内在的要因仮説、社会階層仮説等を概観し、主体的な学習を行うためのアクティブラーニング型授業の提案を行った。その作業を通じて、高等教育における教員養成課程での学生指導の重要性を示すと共に、中等教育における社会学教育の可能性も展望した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　30 年　3 月　31 日

氏名　川野　雅資

研究分野	研究内容のキーワード
精神看護学	看護カウンセリングの会話分析

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ロールプレイングを用いた授業の実践	平成20年4月～平成25年3月	東京慈恵会医科大学医学部看護学科で精神看護学教育にロールプレイングをもちいたコミュニケーション技術教育を行った。後に、模擬患者をライフプラニングセンターに依頼し、模擬患者によるコミュニケーション技術教育に発展させた。
2　作成した教科書，教材 精神看護学Ⅰ　　精神保健学　第5版	平成22年2月	「精神保健」を現在の視点でとらえ，今の社会状況に即した内容に変更した。「看護師のメンタルヘルス」，「地域精神保健活動」，「リエゾン精神看護」の内容を充実させ，新しく「倫理」の章を設けた。精神保健の基本的な考え方と，その具体的な活用を解説し，さらに臨床・社会の場での各々のメンタルヘルスを事例を入れて解説。看護師国家試験出題基準の項目を網羅している。全300頁 編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資 共著者：揚野裕紀子、天谷真奈美、雨宮洋子、荒木田美香子、宇佐美しおり、奥山則子、勝山せつよ、川野雅資、小泉典章、近藤浩子、立花良之、田中隆志、橋本佳美、早川圭子、堀川直史、前田日登美、松本功、武藤隆、山本麻美、山元直樹、吉川領一、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 156-137　心理・社会的反応
精神看護学Ⅱ　精神臨床看護学　第5版	平成22年2月	精神医療の実際を目に見える様に表現し、最新の内容を網羅し、国家試験の出題基準に対応できるように企画した。第Ⅱ章でし、精神を病む人の理解と対応として入院から退院までの患者と家族の状態と看護を詳説した。全446頁。 編集：川野雅資 共著者：アリマ美乃里、石川幸代、石川純子、一ノ山隆司、宇都宮智、大谷恵、岡崎祐士、小口万里、小熊朝子、小澤浩、河岸光子、川野雅資、岸珠江、葛岡千郁子、国生拓子、鈴木啓子、関井愛紀子、田島治、中島香澄、滑川さやか、長谷川麻紀子、八田勘司、古谷圭吾、堀川直史、牧岡あずさ、明神一浩、森千鶴、藪下祐一郎、山根美智子 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 3-11　精神臨床看護の考え方 pp. 13-48　精神を病む人の理解と対応　共著:宇都宮智、川岸光子、岸珠江、滑川さやか、古谷圭吾、藪下祐一郎 pp. 65-70 人間関係論 pp. 86-95　日常生活援助 pp. 103-107 ロールプレイング pp. 108-111　面接 pp. 112-115 カウンセリング pp. 137-156　精神看護の看護過程　共著　石川幸代、石川純子 pp. 278285　症状アセスメントとケアプラン　幻覚、妄想の患者と看護 pp286-288　せん妄の患者の看護 pp401-403　〈事例〉幻覚・妄想の急性期 pp. 406-407　〈事例〉興奮状態の急性期 pp. 421-425　精神看護学の今後の展望

事項	年月日	概　　要
精神看護学Ⅰ　　精神保健学　第6版	平成27年3月	精神看護学の考え方を明確にし、新たにメンタルウェルネスを重要な視点に置いて、心が病むことから生きる力が湧くことを重視して企画した。更に、精神保健医療福祉の法制度に関して内容を豊かにした。全332頁 編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資：秋山剛、揚野裕紀子、荒木田美香子、安藤満代、大澤栄実、大塚耕太郎、大野美香、景山隆之、梶井文子、上別府圭子、川野雅資、久保恭子、栗原佳代子、小泉典章、後藤雅博、近藤浩子、清水徹男、鈴木幸子、曽谷貴子、竹島正浩、中筋美子、野中英雄、橋本理恵子、服部希恵、半場有希子、藤田潔、前野有佳里、松本功、武藤隆、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp.1-3　序　精神看護学の考え方 pp70-75　第2章　リエゾン精神看護　2.病気と心理社会的反応 pp.126-130 看護職員の精神の健康
精神看護学Ⅱ　精神臨床保健学 第6版	平成27年3月	国家試験の動向を配慮し、看護過程の内容を縮小して、最新のリカバリ志向を重視した書籍に企画した。全378頁 編集：川野雅資 共著者：石川幸代、一ノ山隆司、伊藤桂子、宇都宮智、大西恵、岡崎祐士、小熊朝子、河岸光子、川野雅資、岸珠江、木田ゆかり、近藤浩子、下里誠二、鈴木啓子、関井愛紀子、夛喜多恵子、田島治、土屋朋子、富田元、鳥山美鈴、永井翔、中島香澄、中島篤正、滑川さやか、萩典子、藤沢希美、古谷圭吾、堀川直史、松枝美智子、森千鶴、柳田崇姉、藪下祐一郎 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp1-8　序章　精神臨床看護の考え方 pp.9-19　第1章　精神看護援助の基本と技術　患者―看護師関係 pp.31-43　セルフケアの援助 pp.44-53　精神看護の看護過程 pp.54-60　生きる強さと力 pp.106-108 第2章　精神疾患の理解と治療、精神科作業療法 pp.171-183　第4章　入院から社会生活の継続までの看護 pp.203-222　急性期から回復期、慢性期の看護 pp.224-232 第5章　症状アセスメントとケアプラン 幻覚、妄想の患者と看護 pp232-235　せん妄の患者の看護 pp251-257　引きこもり状態の患者の看護 pp.258-267　操作をする患者の看護 pp.353-358　精神看護学の今後の展望
3　教育上の能力に関する大学等の評価 東京慈恵会医科大学大学院	平成20年8月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて東京慈恵会医科大学大学院医学研究科看護学専攻（修士課程）の教授として判定可 担当科目：「コンサルテーション論」「国際医療論」「地域連携保健学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「地域連携保健学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」M可判定 「看護学特別研究Ⅰ・Ⅱ」M○合判定

事項	年月日	概　　要
山陽学園大学	平成24年9月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて山陽学園大学大学院看護学研究科精神看護学CNSコースの教授として判定可 担当科目：「看護理論」「コンサルテーション論」「国際医療論」「精神看護学特論Ⅰ」「精神看護学特論Ⅱ」「精神看護学特論Ⅲ」「精神看護学特論Ⅳ」「精神看護学特論Ⅴ」「精神看護学特論Ⅵ」「精神看護学演習Ⅰ」「精神看護学演習Ⅱ」「精神看護学演習Ⅲ」「精神看護学演習Ⅳ」「精神看護学実習」M可判定 「課題研究」M○合判定
奈良学園大学	平成29年2月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて奈良学園大学保健医療学部看護学科の教授として判定可 担当科目：「精神看護学概論」「精神看護学援助論」「卒業研究Ⅱ」「精神看護学実習」「統合看護学実習」
奈良学園大学大学院（平成30年4月開設）	成29年4-5月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において奈良学園大学大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）専任教授　「国際医療特論」「看護倫理特論」「精神看護学特論Ⅰ（歴史・法制度）」「精神看護学特論Ⅱ（精神・身体状態の評価）」「精神看護学特論Ⅲ（精神科治療技法）」「精神看護学演習Ⅰ（精神科治療技法）」「精神看護学実習　アセスメント」「看護研究特論」「コンサルテーション論」「看護理論特論」「精神看護学特論Ⅳ（精神看護理論、援助技法）」「地域移行支援精神看護学特論」「急性期精神看護学特論」「精神看護学演習Ⅱ（精神看護理論、援助技法）」「精神看護専門看護師役割実習」「直接ケア実習」「上級直接ケア実習」はM可，「課題研究」「特別研究」はM○合の資格有りと判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター　看護研究　指導	平成18年6月から現在	臨床看護師の看護研究指導、看護研究発表会参加。年間6回
2)東京都立大塚病院　看護部 看護科　基礎コースレベルⅡ「コミュニケーション」4時間講師	平成22年から現在	臨床看護師の対人関係技術をロールプレイングで学習する。年間2回、3時間
3)一般社団法人　上尾中央医科グループ協議会キャリアサポートセンター　認定看護管理者(ファーストレベル)　講師	平成23年7月から現在	人材育成論、15時間、科目レポート責任者
4)東京都福祉保健財団公益財団法人　認定看護管理者(ファーストレベル) 運営委員会　委員長、　講師	平成24年6月から現在	運営委員長として、議事の運営にあたる。講義は、看護サービス提供論9時間とディベート演習6時間、科目レポート責任者
5)独立行政法人　国立病院機構　神奈川病院　看護研究　指導	平成24年6月から現在	臨床看護師の看護研究指導、看護研究発表会参加。年間4回
6)東京女子医科大学　女性医療人キャリア形成センター　認定看護管理者(ファーストレベル)教育委員会　委員長、講師	平成27年5月から現在	教育委員会委員長として、議事の運営にあたる。講義、看護サービス提供論　9時間、ディベート演習　6時間

事項	年月日	概　　要
5　その他		
1)東京慈恵会医科大学大学院　修士論文指導	平成23年3月	指導論文題目『思春期青年期精神障碍者の隊員支援における看護師の判断―地域連携の視点から―』
	平成24年3月	指導論文題目『子どもを児童思春期精神科病院に入院させた母の体験』
	平成25年3月	指導論文題目『精神疾患を有する性同一性障害患者の精神科病棟入院体験の語り』
	平成25年3月	指導論文題目『ひきこもり支援者が語る地域連携の現状』
	平成26年3月	指導論文題目『精神科デイケア利用者におけるデイケアの意味』

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）看護師	昭和51年5月12日	厚生省　2090号
2）日本欧州共通サイコセラピー資格認定	平成17年12月1日	日本サイコセラピー学会　066号
2　特許等 該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 看護学実践 -Science of Nursing- 在宅看護論	共著	平成20年 4月	PILAR PRESS	カリキュラム改正に伴い在宅看護論という新たな領域を地域看護学とは別の視点で作成することを意図し、在宅看護論の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全347頁 監修：川野雅資 編集：伊藤千代子 共著者：明石悦子、伊藤千代子、黒田淳子、小林文子、山口直美 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
地域連携精神看護学研究実践　英・米・日　3カ国の地域精神看護	共著	平成20年12月	第1 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	英国・米国ならびに日本における関係者の考え方、手法の事例発表の中から、この分野に携わる関係者の質の向上に資する実践例を紹介し、地域が精神障害者と共に成長しあう社会を形成する方法を明する。 編　著：川野雅資 共著者：川野雅資、長岡和、一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、上野栄一、Michael Galbrraith, Joann Hopkins, Mindy reynolds, Ramona Chinn, Michael coffey, Ben Hannigan, 前川早苗、岩佐貴史、栗田弘二、中村友喜、濱幸伸、原田雅典、薬師寺正美、明神一浩、吉田通子、青柳繁子、宍倉正子、町田正信、萩典子、高村光幸、横山和仁、牧岡あずさ、揚野裕紀子、日下知子、曽谷貴子、清塚厚子、久保田文雄、古澤圭、関井愛紀子、石川幸代 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。下記を単独で執筆した。 pp.2-3　序文 pp.6-8　実践からみた地域連携精神看護学 pp.17-26　地域連携精神看護学の実際 pp.97-103　精神科病院における長期入院患者対する退院支援の取り組み
エビデンスに基づく精神看護看護ケア関連図	共著	平成20年12月	中央法規出版	精神科看護の臨床で出会う代表的な15の症状と9の疾患のケア、4の治療についてエビデンスに基づいて関連図を作成した。定義と具体的な症状、成り立ち、心理社会的反応、診断・検査、治療、看護の観察ポイント、治療段階に基づいた看護ケアを詳解する。全243頁 編集：川野雅資 共著者：浅沼瞳、石川幸代、石川康博、一ノ山隆司、伊藤圭子、猪俣健一、上野栄一、宇都宮智、大迫哲也、大迫允江、川野雅資、北野進、小西奈美、下里誠二、高岡裕美、高橋寛光、高間さとみ、瀧口宗宏、田中留伊、土谷朋子、福山なおみ、藤森里実、舟崎起代子、松本賢哉、明神一浩、村上満、森千鶴、山田洋 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp.2-3 はじめに pp.10-15　妄想 pp.16-25　幻覚 pp.42-49　強迫 pp.162-167　パニック障害 pp.115　自傷行為 pp.115　自我防衛機制 pp.119　機能の全体的評価尺度 pp.235　退院支援 pp.236　地域連携・継続ケア

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
現代看護の探求者たちー人の思想ー	共著	平成21年10月	日本看護協会出版会	ジーン・ワトソン博士から直接学んだこと、コロラド大学看護学部を訪問してその資料から学んだこと、これまでの翻訳とワトソン先生の講演の通訳を通して学んだことをライフヒストリーと学問の視点からまとめた。全296頁 共著者：小林冨美栄、樋口康子、小玉香津子、高橋絹子、荒井蝶子、兼松百合子、千野静香、稲田八重子、池田明子、藤枝知子、小野寺杜紀、舟島なをみ、松木光子、井上智子、川野雅資 本人担当部分：pp.251-281ジーン・ワトソンJean Watson-21世紀の看護論-
地域連携精神看護学研究実践　英・米・日　3カ国の地域精神看護	共著	平成21年12月	世論時報社	英国・米国ならびに日本における関係者の考え方、手法の事例発表の中から、この分野携わる関係者の質の向上に資する実践例を紹介し、地域が精神障害者と共に成長しあう社会を形成する方法を明する。全159頁 編　著：川野雅資 共著者：川野雅資、長岡和、一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、上野栄一、Michael Galbrraith, Joann Hoppkins, Mindy reynolds, Ramona Chinn, Michael coffey, Ben Hannigan, 前川早苗、岩佐貴史、栗田弘二、中村友喜、濱幸伸、原田雅典、薬師寺正美、明神一浩、吉田通子、青柳繁子、宍倉正子、町田正信、萩典子、高村光幸、横山和仁、牧岡あずさ、揚野裕紀子、日下知子、曽谷貴子、清塚厚子、久保田文雄、古澤圭、関井愛紀子、石川幸代 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp.2-3　序文 pp.6-8　実践からみた地域連携精神看護学 pp.17-26　地域連携精神看護学の実際 pp.97-103　精神科病院における長期入院患者対する退院支援の取り組み
精神看護学Ⅰ　　精神保健学第5版	共著	平成22年 2月	ヌーヴェルヒロカワ	「精神保健」を現在の視点でとらえ，今の社会状況に即した内容に変更した。「看護師のメンタルヘルス」，「地域精神保健活動」，「リエゾン精神看護」の内容を充実させ，新しく「倫理」の章を設けた。精神保健の基本的な考え方と，その具体的な活用を解説し，さらに臨床・社会の場での各々のメンタルヘルスを事例を入れて解説。看護師国家試験出題基準の項目を網羅している。全300頁 編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資 共著者：揚野裕紀子、天谷真奈美、雨宮洋子、荒木田美香子、宇佐美しおり、奥山則子、勝山せつよ、川野雅資、小泉典章、近藤浩子、立花良之、田中隆志、橋本佳美、早川圭子、堀川直史、前田日登美、松本功、武藤隆、山本麻美、山元直樹、吉川領一、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp.156-137　心理・社会的反応
新看護観察のキーポイントシリーズ精神科Ⅱ	共著	平成23年 4月	中央法規出版	上記と同様の編集方針基づき、看護観察に重点を置き、最新の知見から構成を改変した新版。全277頁 編　集：川野雅資 共著者：朝倉真奈美、内野博子、浦川加代子、大迫哲也、大沢美幸、大谷恵、鬼塚愛彦、川野雅資、楠本重信、小瀬古隆、斎藤百合枝、鈴木和代、関井愛紀子、関根理絵、立花睦子、玉城久江、辻脇邦彦、土谷朋子、塘祐樹、豊田美穂子、東和弘、人見加津子、福田浩美、堀切晶子、前川早苗、松枝美智子、松本文彦、森千鶴、若浦さおり 本人担当部分 pp.ⅱ-ⅲ　編集者序文 pp.7-13　急性期 pp.75-85　摂食障害 pp.264-268　インフォームド・コンセント

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
精神看護学Ⅱ　精神臨床看護学　第5版	共著	平成22年 2月	ヌーヴェルヒロカワ	第5版の改訂に伴い、精神医療の変遷に伴う看護の実際を目に見えるように表現し、最新の内容を網羅すること、国家試験の出題基準を意識し、試験で出題された問題の解答が役立つように項目の再編と内容の刷新をはかった。全446頁 編集：川野雅資 共著者：アリマ美乃里、石川幸代、石川純子、一ノ山隆司、宇都宮智、大谷恵、岡崎祐士、小口万里、小熊朝子、小澤浩、河岸光子、川野雅資、岸珠江、葛岡千都子、国生拓子、鈴木啓子、関井愛紀子、田島治、中島香澄、滑川さやか、八田勘司、藤田由美、古谷圭吾、堀川直史、牧岡あずさ、明神一浩、森千鶴、藪下祐一郎、山根美智子 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp3-12　精神臨床看護学　精神看護の考え方 pp. 13-48　精神を病む人の理解と対応 pp. 65-70　精神看護に用いる理論、人間関係論 pp. 85-95　日常生活援助 pp. 103-115　活用する技法 pp. 137-156　精神看護の看護過程 pp. 278-285　幻覚、妄想の患者と看護 pp. 286-289　せん妄の患者の看護 pp. 401-404　事例　幻覚・妄想の急性期 pp. 421-426　精神看護学の今後の展望
新看護観察のキーポイントシリーズ精神科Ⅰ	共著	平成23年 4月	中央法規出版	観察のための具体的な方法、観察したことが何を意味するのか、どの程度の危険を予測できるか、そしてどう対応すべきかといったナースにとっての実践上の問題解決方法を掲載した。初学者がイメージつきやすいように、実際の場面の写真とイラストを多用した。全347頁 編集：川野雅資 共著者：相原則章、朝倉真奈美、阿部貴子、一ノ山隆司、猪野美晴、今中和恵、岩崎三津子、浦川加代子、大須賀美紀、大谷恵、大場信子、小笠原寿枝、鬼塚愛彦、蔭山正子、川野雅資、岸珠江、北島謙吾、倉田みゆき、小瀬古隆、櫻井尚子、鈴木啓子、鈴木利枝、田口敦子、土田幸子、徳永勲、中川志穂、中村富美、中山千代子、西川恵子、平井元子、藤野ヤヨイ、前川早苗、真玉珠美、村上有加利、村松仁、望月由香、藪下祐一郎、山田巧、山田光子 下記内容を記述した。pp. ⅱ-ⅲ　編集者序文、pp. 35-42　精神面、pp. 140-148　拒食、pp. 149-155　拒薬、pp. 296-306　訪問看護
看護実践研究・学会発表ポイントQ＆A　上巻 研究テーマの選択から学会発表へ	共著	平成24年 5月	日本看護協会出版会	看護研究を始めて行い始めて学会発表をする看護職者が理解しやすいように執筆した。全72頁 編集：日本看護協会 著者：洪愛子、荒木暁子、根岸准子、梶井文子、佐藤みつ子、川野雅資、渋谷美香、眞弓浩子、向田明子、橋目智子、小川有貴、佐藤智恵 序章　利益相反について Q10利益相反とはなんですか?(pp. 24-25) 第2章　演題の採択が決まるまで Q21査読者はどんなところを見ているのですか?(pp. 41-43)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護実践研究・学会発表ポイントＱ＆Ａ　下巻 研究テーマの選択から学会発表へ	共著	平成24年 5月	日本看護協会出版会	始めて発表した看護研究を論文に記述する看護職者が理解しやすいように執筆した。全68頁 編集：日本看護協会 著者：洪愛子、荒木暁子、根岸准子、河野あゆみ、国府浩子、小寺栄子、中村美鈴、水戸優子、渋谷美香、梶井文子、佐藤みつ子、川野雅資、渋谷美香、眞弓浩子、向田明子、橋目智子、佐藤智恵 序章　論文を書き始める前に Q1自分の書いた論文は、他の人の看護実践に役立つのでしょうか?(pp. 2-3) Q2査読者はどんなところをみているのですか?(pp. 4-5) Q3過去の優秀論文はどこがよかったのですか?(pp. 6-8)
『精神症状のアセスメントとケアプラン―32の症状とエビデンス集』	共著	平成24年11月	メヂカルフレンド社	エビデンスに基づく精神看護のケアが重要視されている。本書は、「精神障害者のクリニカルケア　症状の特徴とケアプラン」の著書をエビデンスを元に看護が展開できるように企画して新たに作成した。全366頁 編　集：川野雅資 共著者：川野雅資、横井志保、杉原正美、佐々木章倫、高橋寛光、山本祐子、島崎みゆき、児野愛未、大柄昭子、樋田香織、熊地美枝、佐々木愛、斎藤香菜香、北野進、大嶺靖子、畑由美子、緑川綾、篠木由美、煤賀隆宏、塩月玲奈、荒川好美、新澤安江、竹花令子、柳田崇姉、石川博康、西田多美子、馬場華奈巳、岩切真砂子、高木明子、安田妙子、片山典子、拓殖三昌、佐藤雅美、一ノ山隆司、安永薫梨、松枝美智子、鈴木啓子、吉野淳一、曽谷貴子、揚野裕紀子、宮野香里、伊礼優、浅井初、平上久美子、坂田志保路 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 ［序論」(pp. 1-5) 「幻覚」 (pp. 6-13) 「うつ」(pp. 58-66) 「身体化」(pp. 165-171)
コンサルテーションを学ぶ	単著	平成25年 1月	クオリティケア	本書は、コンサルテーションの大切な機能は、コンサルティの人間的な潜在能力を促進し、一人ひとりのコンサルティ個々の中に自己回復の能力を醸成することであることに主眼を置き、その内容を9章に構成して、コンサルテーションの開拓者であるカプランとリピットとリピットの原著を読み込み、又、筆者の実線体験をもとに執筆した。全50頁
精神看護学Ⅰ　　精神保健学 第6版	共著	平成27年 3月	ヌーヴェルヒロカワ	精神看護学の考え方を明確にし、新たにメンタルウェルネスを重要な視点に置いて、心が病むことから生きる力が湧くことを重視して企画した。更に、精神保健医療福祉の法制度に関して内容を豊かにした。全332頁 編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資 共著者：秋山剛、揚野裕紀子、荒木田美香子、安藤満代、大澤栄実、大塚耕太郎、大野美香、景山隆之、梶井文子、上別府圭子、川野雅資、久保恭子、栗原佳代子、小泉典章、後藤雅博、近藤浩子、清水徹男、鈴木幸子、曽谷貴子、竹島正浩、中筋美子、野中英雄、橋本理恵子、服部希恵、半場有希子、藤田潔、前野有佳里、松本功、武藤隆、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 1-3　序　精神看護学の考え方 pp70-75　第2章　リエゾン精神看護　2.病気と心理社会的反応 pp. 126-130 看護職員の精神の健康

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
精神看護学Ⅱ　精神臨床看護学　第6版	共著	平成27年 3月	ヌーヴェルヒロカワ	国家試験の動向を配慮し、看護過程の内容を縮小して、最新のリカバリ志向を重視した書籍に企画した。 全378頁 編集：川野雅資 共著者：石川幸代、一ノ山隆司、伊藤桂子、宇都宮智、大西恵、岡崎祐士、小熊朝子、河岸光子、川野雅資、岸珠江、木田ゆかり、近藤浩子、下里誠二、鈴木啓子、関井愛紀子、夛喜多恵子、田島治、土屋朋子、富田元、鳥山美鈴、永井翔、中島香澄、中島篤正、滑川さやか、萩典子、藤沢希美、古谷圭吾、堀川直史、松枝美智子、森千鶴、柳田崇姉、藪下祐一郎 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp1-8　序章　精神臨床看護の考え方 pp. 9-19　第1章　精神看護援助の基本と技術　患者―看護師関係 pp. 31-43　セルフケアの援助 pp. 44-53　精神看護の看護過程 pp. 54-60　生きる強さと力 pp. 106-108 第2章　精神疾患の理解と治療、精神科作業療法 pp. 171-183　第4章　入院から社会生活の継続までの看護 pp. 203-222　急性期から回復期、慢性期の看護 pp. 224-232 第5章　症状アセスメントとケアプラン 幻覚、妄想の患者と看護 pp232-235　せん妄の患者の看護 pp251-257　引きこもり状態の患者の看護 pp. 258-267　操作をする患者の看護 pp. 353-358　精神看護学の今後の展望
看護学実践-Science of Nursing-看護研究	共著	平成27年 3月	PILAR PRESS	全102頁 監修：川野雅資 共著者：安藤満代、一ノ山隆司、伊藤桂子、辻川真弓 看護学生のように看護研究の初学者からある程度看護研究に精通した看護師が参考になるように企画した。 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 P8-10　看護研究の開始 pp. 34-36　フォーカスグループインタビュー pp. 38-40　会話分析 pp. 40-44　介入研究 pp. 50-55　調査の実施 pp. 97-98　研究の倫理的配慮　利益相反
知る・活かす看護管理学	共著	平成27年 5月	PILAR PRESS	看護管理学の基本が学習できる教科書を企画した。全181頁 監修：川野雅資、網野寛子 編集：黒田美喜子 共著者：賀沢弥貴、菊池睦、小坂智恵子、高澤喜代美、田代麻里江、吉田愛子、細野百合子、前田久代、山佐瞳、山田聡子 本人担当部分：本書の企画、文章の校正を行った

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護学実践 -Science of Nursing- 精神看護学	共著	平成28年 2月	PILAR PRESS	本シリーズは、元来コンパクトな教科書を意図していたが、網羅すべき内容が多くなり、充分な内容を記述することに企画方針を変更した。精神看護学の内容は、DSM-5を元に技術することにした。全259頁 監修・編集：川野雅資 共著者：間雅子、揚野裕紀子、宇都宮智、川野雅資、岸清次、北野進、坂田志保路、高橋寛光、高間さとみ、多喜田恵子、塘祐樹、萩典子、佐々木郁子、服部朝代、平松悦子、本間寿博、前川早苗、松枝美智子、松下年子、宮崎初、宮野香理、緑川綾、安永薫梨 担当部分：本書の企画、文章の校正を行った。下記を単独で執筆した。 pp.10-32　これからの精神看護学 pp.45-47　ヒューマニスティックナーシング pp.48-50　ヒューマンケアリング pp.50-59　看護過程 pp.63-67　看護カウンセリング pp.118-120 退院を困難にしている要因
コンサルテーションを学ぶ　改訂版	単著	平成29年2月	クオリティケア	本書は、平成25年の初版を改訂したものである。初版のコンサルテーションの大切な機能は、コンサルティの人間的な潜在能力を促進し、一人ひとりのコンサルティ個々の中に自己回復の能力を醸成することであることに主眼を置き、その内容を9章に構成して、コンサルテーションの開拓者であるカプランとリピットとリピットの原著を読み込み、又、筆者の実線体験をもとに執筆した。と言う視点に、この4年間に実施したコンサルテーションの内容を追記し、初版の表現不足を補った。全50頁
精神看護キーワード	共著	平成29年5月	日本看護協会出版会	精神看護領域で称する用語を多職種専門家が正確に理解し、共通言語となるために頻出用語の解説をエビデンスに基づいて記述することを企画した。用語の抽出を行い、編者の選出・依頼をした。すべての文章の校正を行った。又、「女性管理職のメンタルヘルス」を除き下記を単独で執筆した。全239頁 pp.14-15 EE(感情表出)，pp.32-33カウンセリング，pp.48-49共感，pp.84-85コンサルテーション，pp.96-97自殺，pp.112-113女性管理職のメンタルヘルス，pp.116-116身体表現性障害，pp.122-123スーパービジョン，pp.144-145性同一性障害，pp.148-149せん妄，pp.158-159地域移行機能強化病棟，pp.178-179トラウマインフォームドケア，pp.182-183人間関係論 (日本看護協会出版会) 総編集：川野雅資 編　集：安藤満代、下里誠二、萩典子、森千鶴 共著者：安藤愛、安藤満代、池田智、石川博康、伊藤桂子、大熊恵子、大平肇子、、川野雅資、木戸芳史、熊本勝治、下里誠二、菅原裕美、瀬戸屋希、高橋寛光、高橋理沙、多喜田恵子、田中留伊、谷多江子、中村裕美、萩典子、八谷美絵、益子友恵、松枝美智子、松本敦子、水野正延、宮崎初、森千鶴、山本智之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
うつ病患者への職場復帰へのサイコセラピー（査読付）	共著	平成20年12月	日本サイコセラピー学会 雑誌9巻1号 pp. 103-106	共著者：川野雅資、片山典子 30代半ばのメランコリー親和型うつ病男性に、精神科医の薬物療法に併用して、サイコセラピーを実施した。本人担当分：サイコセラピーの実施、資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
幻聴のある患者に対する心理教育的アプローチの方法（査読付）	共著	平成21年3月	富山大学看護学会誌 8巻2号 pp. 33-40	共著者：明神 一浩、一ノ山 隆司、上野 栄一 、舟崎 起代子、川野 雅資 本研究は、幻聴のある患者に対して、心理教育的アプローチの介入が幻聴に苛む患者の自己対処能力の獲得によって、幻聴の軽減にどのように影響したかについて、その効果を検証する目的で研究を行った。本人担当分：データの分析・考察・文章の校閲を行った。
幻聴に苛む患者の自己対処行動を支えるための心理教育的アプローチ（査読付）	共著	平成21年 3月	共創福祉 4(1)1－10.	一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、牧野かおる、明神一浩、上野栄一、川野雅資　本人担当分：ダータの分析・考察・文章の校閲を行った。本研究は、統合失調の患者が幻聴で苦しんでいることを心理教育の手法を用いて対処行動を獲得した経過を分析した。
地域で生活する精神障がい者を支える家族の思い（査読付）	共著	平成22年 1月	日本看護学会論文集 精神看護40号 pp. 143-145	共著者：一ノ山 隆司、村上 満、舟崎 起代子、川野雅資　地域で生活する精神障害者の家族273名にアンケートを行い、「日頃から気になっていること」について自由記載してもらい、その内容を質的帰納的に分析した。本人担当分：データの分析・考察・文章の校閲を行った。
精神臨床看護師が捉える急性期看護における患者の暴力行為の予見要因（査読付）	共著	平成22年 7月	日本看護研究学会 雑誌33巻3号, pp. 146	明神一浩、 一ノ山隆司、 村上満、 舟崎起代子、 上野栄一、 川野雅資　本人担当分：資料の分析・考察・文章の校閲を行った。精神科の臨床看護師が患者の暴力行為を予期する時の視点を調査から明らかにした。
うつ病からの回復に当事者の力を発揮するサイコセラピーの考察（査読付）	共著	平成23年12月	日本サイコセラピー学会 雑誌12(1), pp. 69-76	共著者：川野雅資、 片山典子、 石川純子　本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。サイコセラピーを受けているうつ病の患者がサイコセラピーの影響と共に自己の力を発揮して回復していくプロセスを分析した。
精神障害者が農村地域で暮らす生活に関する語りの分析（査読付）	共著	平成23年 9月	山陽看護学研究会 山陽看護学研究会誌 Vol. 2　No. 1　2012 （pp. 13）	揚野裕紀子、川野雅資、曽谷貴子、福川京子、中田涼子　本人担当分：研究の企画、資料の分析・考察・文章の執筆を行った。0県の農村地域に暮らす精神障害者にインタビューを行い、生活する上で感じていることを明らかにし、かごの役割を明確にした。
会長講演　「精神科早期介入と連携の実際と課題」（査読付）	単著	平成24年 2月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第3巻 pp. 1-2	事例に基づいた地域の立場からみた早期治療における連携の実際の報告、課題の明確化と今後の方策提案。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
タイ王国の地域連携精神看護－タイにおける精神保健福祉と農村部の現状報告（査読付）	共著	平成24年 2月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第3巻 pp. 39-46	共著者：揚野裕紀子、中田涼子、片山典子、川野雅資、櫻井尚子、塩月玲奈、朝倉真奈美　　退院後の患者は全員が働いていると言うタイにおける、精神科病院、医療機関、医療従事者、精神障がい者の生活を支える制度、法律、予算、農村部に暮らす精神障がい者の生活から、地域精神医療の実際を学ぶことを目的に視察を実施。精神保健福祉と農村部の現状を報告した。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメント退院準備用紙の作成から活用まで（査読付）	共著	平成24年 2月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第3巻 pp. 47－53	共著者：寺田祐治、一ノ山隆司、舟崎起代子、上野栄一、川野雅資 患者と看護師が共同で作成した退院準備用紙を活用し、統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメントの維持・促進を支える援助過程で、患者の自己および自己を取り巻く現実に関する認識が改善されたかを明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題（査読付）	共著	平成24年 2月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第3巻 pp. 82－87	共著者：松浦純平、一ノ山隆司、上野栄一、京谷和哉、植木健康、川野雅資 自記式無記名質問紙調査を用いて、A県内に本拠地があるがん患者会員が考えるサロンに対する認識および現状を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
長期入院患者の退院支援に関する看護師の意識調査－看護師へのインタビュー分析からの課題－（査読付）	共著	平成24年 2月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第3巻 pp. 94－100	明神一浩、前川哲弥、森下憂一、一ノ山隆司、上野栄一、川野雅資 精神科看護歴が10年以上ある看護師にインタビューを実施し、質的帰納的記述研究を行い、長期入院患者の退院支援において看護師が抱える課題を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
会長講演「グローバルに学んで、グローカルに展開する」（査読付）	単著	平成24年 7月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第2巻 pp. 1-4	地域連携を推進するには、海外の状況も見ながらグローバルな視点を持つのと同様にその地域の特性を把握するグローカルな視点が重要であることを解説する。
神奈川県における児童、青年精神医療の連携で看護師の役割を考える（査読付）	共著	平成24年 7月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第2巻 pp. 71-77	編　者：川野雅資　編集協力者：片山典子 著　者：佐々木郁子、川野雅資、山根美智子、久保恭子、アリマ美乃里、佐藤和子、鈴木実、田崎千恵子、土谷朋子、寺島和子、萩典子、一ノ山隆司、村上満 神奈川県における児童、青年期精神医療の実態と、連携形成に関する調査を行い、現状を明確にした。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
ストレングスモデルに基づく職業訓練を受けた精神障害者の心理面と必要とされる支援（査読付）	共著	平成24年 9月	聖マリア学院大学紀要3, pp. 55-62	著者：安藤満代、川野雅資　本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。職業訓練を受けた精神障害者の心理的側面でリジリエンスに影響する支援者の役割を調査から明らかにした。
看護が研究する意味	単著	平成24年12月	山陽看護学研究会誌 2(1), pp. 4-9	看護において、感謝が研究することの意味を真理の探索以上のものがあることを概説した。
カウンセリングの治療的意味に関する研究　統合失調症患者のカウンセリングにおける治療関係と認知の変容への働きかけ（査読付）	共著	平成25年 2月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第1巻 pp. 22-31	伊藤佳子、川野雅資 カウンセリングの場面を録音・録画し、クライアントの非合理的信念の変容は、セラピストのどのような介入によって促進されているのかを明らかにし、継続するカウンセリングの中でセラピストとクライアントの間にはどのような相互作用があるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失聴症患者の会話分析－妄想に対する治療的かかわりに焦点を当てて－第1報　会話レベルによる分析（査読付）	共著	平成25年 2月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第1巻 pp. 32-39	揚野裕紀子、曽谷貴子、日下知子、川野雅資 研究は、専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、「会話レベル」を用いて分析を行い、精神障がいをもつ患者にとって、どのようなカウンセリング技法が有効であるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者の会話分析－妄想に対応する治療的かかわりに焦点を当てて－第2報　対人間圧力とフレーム対応による分析（査読付）	共著	平成25年 2月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第1巻 pp. 40-45	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、ジェームズ・F・T・ブーゲンダール：「サイコセラピストの意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』と問題の焦点化を目指す『フレーム（構図）の対応』を用いて分析・解釈を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接の場面の分析－スピリチュアリティに焦点をあてて－（査読付）	共著	平成25年 2月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第1巻 pp. 46-56	安藤満代、川野雅資 精神看護の専門教育を受けた看護師が行っている看護面接において、どのようなスピリチュアリティ向上に関する内容があるのかを明らかにするために、村田のスピリチュアル・カウンセリングシートを用いて分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術（査読付）	共著	平成25年 2月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第1巻 pp. 57-68	片山典子、一ノ山隆司、川野雅資 専門教育を受けた看護師と慢性統合失調症のクライアントの間におこる会話場面を、環境要因も含めて分析を行い、看護師が用いているカウンセリング技術を明らかにした。　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
精神障害者が地域で生活するためのソーシャルキャピタルと支援（査読付）	共著	平成25年 4月	インターナショナル Nursing Care Research	著者：安藤満代、川野雅資、廣瀬真也 統合失調症の患者が地域で生活していくための阻害要因と促進要因が何かを探索するために5名の患者にインタビュー調査を行った結果をまとめた。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。
精神看護学実習を通した精神障害者に対する対人違和感とイメージの肯定的変化（査読付）	共著	平成25年 4月	インターナショナル Nursing Care Research, 12, pp.115-124.	安藤満代、川野雅資 学生のスティグマが患者と触れることで減少することが予想された。その結果、患者への対人違和感が肯定的に変化していた。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。
職業訓練を受けた精神障害者の自己効力感、自尊感情と首尾一貫性（査読付）	共著	平成25年 4月	インターナショナル Nursing Care Research 12 pp.75-83	著者：安藤満代、川野雅資 精神障害者でありながら職業訓練校で訓練を受けている方の自己効力感、自尊感情とSOCの関連について調べ、正の相関があることを示した。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。
アルコール依存症の回復を促進するために設立したグループ「酒害者回復クラブ」の取り組みから見た今後のアルコール依存症者地域支援の検討（査読付）	共著	平成25年10月	アディクション看護 10(1) pp.73-74	伊藤佳子、川野雅資 、大谷一義 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
『うつ病を体験した人のサイコセラピー―心理社会的な職場復帰プロセスの視点から―』（査読付）	共著	平成25年12月	日本サイコセラピー学会 学会誌第14巻1号 pp.107 - 113	片山典子、川野雅資 本研究では、「職場復帰リハビリテーション」を受けた事例を通し、心理社会的な職場復帰のプロセスを記述することを目的とした。分析の結果、うつ病により長期休業した労働者A氏の心理社会的な職場復帰プロセスとして、【違和感を気づきながらも社会人として頑張る】【休職の焦りと安堵に浸る】【治療の苦痛と期待】【職場復帰に向けて模索する】【現実と直面する】【病気体験の意味づけをする】【現実の中で再適応する】という7つのカテゴリと、27のサブカテゴリが抽出された。 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
身体表現性障害のクライアントに対する初回サイコセラピーの手法に関する検討（査読付）	共著	平成25年12月	日本サイコセラピー学会 学会誌第14巻1号 pp.114 - 120	川野雅資、緑川綾、佐々木章倫 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
講会長演 ディスコース研究から見えてくるもの	単著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第2巻 pp.1-3	妄想に支配されているクライアントへのサイコセラピー、気分障害（うつ病）のクライアントが徐々に仕事復帰する段階のカウンセリングについてRIASを用いて、セラピストのカウンセリング技術の考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
うつ病および統合失調症患者と看護師の会話のRIASによる分析（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 25-32	野呂幾久子　川野雅資 3つの実際のカウンセリング場面の会話をRIASで分析し、その結果からコミュニケーションの特徴について考察することを試みた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
テキストマイニングによるカンセラーとクライエントの会話の特徴（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 33-49	上野栄一、川野雅資 カウンセリングの場面についてカウンセラーとクライアントの会話内容をテキストマイニングを用いて分析し、会話の特徴を明らかにするとともに、クライアントとカウンセラーの会話をテキストマイニングで分析することの妥当性の検証を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
カウンセリングにおけるコミュニケーション技術の構造と手法　　気分障害患者の認知バイアスへの介入場面の分析（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 50-59	伊藤桂子、川野雅資 看護師と気分障害をもつクライアントとの会話を分析し、看護師が用いるコミュニケーション技術の構造と手法の考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のあるクライエントとの看護面接場面の会話分析 ―『対人間圧力』の典型的反応レベル32スキルを用いた分析―（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻pp. 60-67	曽谷貴子、日下知子　揚野裕紀子、 川野雅資 専門教育を受けた看護師が、妄想のあるクライアントとの面接場面において、意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』の典型的な反応レベル32スキルを、どのように用いて会話を行っているのか、会話分析を行い『対人間圧力』として影響の度合いと会話パターンを明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケア（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 68-73	安藤満代、川野雅資 統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリング場面をスクリプト表記し、村田のスピリチュアリティ・カンファレンス・サマリーシートを部分的に利用し分析を行い、看護カウンセリングにおけるスピリチュアルアケについて検討を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術―ジェファンソンの記号システムによる検証―（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 74-84	片山典子、川野雅資 地域で生活している妄想のある統合失調症者と看護師の対話場面を、ジェファンソンの記号システムに基づきデータとし、会話分析から統合失調症者の妄想に対して看護師が用いているカウンセリング技術を抽出した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
ひきこもり青年との看護面接場面の分析―行動療法的アプローチに焦点を当てて―（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 85-93	柳田崇姉、川野雅資 ひきこもりの青年と専門教育を受けた看護師の看護面接場面の会話分析を行い、看護師がどのような行動療法的アプローチ技術を用いているのかを明らかにし、自尊感情の回復援助に効果的なケアについて考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析―ユーマニスティック看護論を用いて―（査読付）	共著	平成26年 1月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 94-101	佐々木郁子、川野雅資 ヒューマニスティック看護論の概念図化し、著書より「人間」「看護」「看護師」キーワードとして、センテンスを抜き出し、カテゴリに分類し、統合失調症患者との看護面接場面でクライアントが看護師に自分の否定的な気持ちを率直に伝えていた場面を抜き出し、分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
米国コロラド州デンバーにおける精神看護学の研修報告 ： ジーン・ワトソン博士の特別セミナー（査読付）	共著	平成26年 3月	山陽看護学研究会誌 4(1) pp. 24-29	川野雅資、揚野裕紀子、井田裕子、緑川綾、植木健康、佐々木章倫 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
農村地域で暮らす統合失調症患者への支援の検討 : 地域生活継続の促進要因と阻害要因の視点から（査読付）	共著	平成27年10月	新潟大学保健学雑誌 12(1) pp. 1-9, 20	関井愛紀子、飯田亘、五十嵐正徳、川野雅資 本人担当部分：研究の企画、データ分析・考察・文章の執筆の校閲を行った。N県の農村地域に暮らす精神障害者にインタビューを行い、生活を継続していく要因と困難になる要因に分けて分析した。
会長講演 妄想状態にある統合失調症患者に対する熟練看護師の対話技法の一考察	単著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 1-4	熟練看護師と妄想のある統合失調症患者との面接6場面の会話内容を、ボランニーの記述から全体を量的に整理するとともに、ある特定の妄想場面について、話題、発話の回数、話題の始まり方、コミュニケーションのレベルについて分析を行った。
精神看護面接における看護師の発話機能、技法、意図の関係ー統合失調症患者の面接を対象としたパイロット研究ー（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 13-26	野呂幾久子、川野雅資、伊藤桂子、片山典子、佐々木郁子 熟練した精神看護師と統合失調症患者との面接場面を、RIASを用いて、看護師の会話の意図、技法、発話機能の関係について考察を行い、効果的な精神看護面接の会話構造を明らかにした。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリングの手法と構造（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 27-38	伊藤佳子、川野雅資 カウンセラーと気分障害患者との会話を分析し、気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリング技法の手法と構造を明確化した。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
妄想のある慢性期統合失調症患者への看護カウンセリング技術ー「言いかえ」における自己修復・他者修復の関連ー（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 39-46	片山典子、川野雅資 地域で生活している妄想のある慢性統合失調症者と専門教育を受けた看護師の対話場面をデータとして会話分析を行い、看護師が用いるカウンセリング技術を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析ヒューマニスティックナーシングを用いてー看護師と患者の「間」についての一考察ー（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 47-56	佐々木郁子、川野雅資 看護面接場面における「間」の存在について、人間的看護論を用いて会話分析し、人間的看護論の実践について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者とうつ病患者の看護面における会話分析の比較ー看護師の対人間圧力32スキルの活用比較ー（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 57-66	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 妄想のある統合失調症患者とうつ病の回復期にある患者との看護面接における会話を比較し、対人間圧力32スキルの活用状況の特徴を明らかにした。　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
うつ病患者の看護面接場面の会話分析ークライアントの反応からみたセラピストの技法の活用ー（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 67-76	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 看護カウンセリングにおけるクライアントの会話パターンの特徴を把握し、セラピストのコミュニケーション技法の活用について考察を行った。
気分障害をもつ患者と看護師との会話分析ーロイ適応看護モデルを用いてー（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 77-86	安藤満代、川野雅資、日高艶子 気分障害（うつ病）をもったクライアントとの看護カウンセリングの中で、ロイ適応看護モデルに基づいてどのようなケアが行われているのか分析・考察を行った。本人担当部分：データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニグを用いたセラピストとクライアントの会話分析（査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第3巻 pp. 87-94	松浦純平、川野雅資 統合失調症患者のクライアントとカウンセリング時のセラピストの発語内容についてテキストマイニグを用いて分析し、高度実践看護技術の構造化につなげる基礎研究の一助として、カウンセリング時の特徴を明らかにすることに主眼に置いた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
わが国の地域在住統合失調症者における自己管理の概念構造に関する文献学的研究（査読付）	共著	平成28年 3月	梅花女子大学看護保健学部紀要	山元恵子、藪脇健司、川野雅資 統合失調症者が地域で生活することを可能とする自己管理の概念構造を明確にした結果，6つの要素「病名告知を受け，症状悪化の兆候を自分で察知し，治療に参加する」，「治療と疾病・服薬・心理教育を受け，主体的に服薬を継続する」，「これからの生き方を明らかにするために自分らしさを保持する」，「自分らしい生活をするために，自らを統制し，周囲の環境に適応する 」，「互恵的な関係を保つために，ストレス・悲観的な感情に対処する」，「生活の枠組みを作り，自信をもって生活することで自分の価値を実感する」が抽出できた。本人担当部分：研究の企画の助言、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
70　Response and results to ethical problems by psychiatric nurses in Japan(日本の精神科看護の倫理的葛藤に対する反応と結果)（査読付）	共著	平成28年4月	Archives of Psychiatric Nursing(30)2016 527-530	Michiyo Ando, Masashi Kawano （130名の日本人の精神看護師に自由回答の調査を行い、質的研究方法で分析した。その結果「行動しないし変化しない」「誤りを指摘して傷つく」などの7つのカテゴリが抽出された。） 本人担当部分:研究計画の共同作成、調査対象の抽出、依頼、論文の校正。
会長講演 「会話のもとになるもの」	単著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻 pp.1-2	
うつ病患者のカウンセリング一回復期と増悪期の比較一（査読付）	共著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻 pp.13-20	野呂幾久子、川野雅資 うつ病患者のカウンセリング2場面のRIASを分析を行った。看護師のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「患者教育」が多いこと。患者のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「社会情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「接続語」が多いこと、「社会的会話」および「信頼関係の発話」が少ないことが明らかになった。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
ロイ看護適応モデルを用いた自殺念慮を呈する患者と看護師との会話分析（査読付）	共著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻 pp.21-28	安藤満代、川野雅資 本人担当部分：うつ病の増悪気にあるクライアントが自殺を考えている場面でのカウンセラーの会話をシスター・カリスタ・ロイの帝王理論で分析した。研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
自殺に傾いたクライアントへの支援ークライアントとセラピストの相互関係の中で行われる自殺予防の関わりー（査読付）	共著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻 pp.29-42	伊藤桂子、川野雅資 カウンセラーと自殺に傾いたクライアントとの会話を分析し、カウンセリングの相互作用の中で行われる自殺予防の手法について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
うつ状態の悪化期にある患者との看護面接場面の会話分析ーうつ状態の回復期と悪化期の対人間圧力32スキルの活用比較ー（査読付）	共著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第4巻 pp.43-50	曽谷貴子、日下知子、川野雅資 うつ状態の悪化時にある患者との看護面接場面を会話分析することにより、症状の悪化時にどのようにコミュニケーション技術を活用し、看護面接を行っているのかを分析・考察した。また、先行研究のうつ病の回復期の看護面接での対人間圧力32スキルとの比較を行い病状に違いによるコミュニケーション技術の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングによるうつ病の患者とカウンセラーとの会話分析（査読付）	共著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第4巻 pp.51-66	上野栄一、川野雅資 うつ病患者とカウンセラーの両者の会話の特徴を明らかにすることを目的とし、会話の中で出現する沈黙に注目し、カウンセラーとクライアントのコミュニケーションの特徴をテキストマイニングソフトStudio®を用いて、単語頻度解釈、係り受け頻度解釈、共起分析し、考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析（査読付）	共著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第4巻 pp.67-74	松浦純平、川野雅資 カウンセリングを定期的に受けているうつ病患者と看護師との会話内容から逐語録を作成し、計量テキスト分析ソフトKH Coderを用いて、記述統計、階層的クラスター解析、共起関係ネットワーク分類、多次元尺度法を実施。熟練セラピストとうつ病患者とのカウンセリング場面の会話分析から、セラピストのカウンセリングにおける特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
看護学生の精神科患者への関わりに関する研究ー模擬患者を用いたシュミレーションのディスコース分析（査読付）	共著	平成28年 5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第4巻 pp.75-89	山元恵子、伊藤桂子、村上茂、川野雅資 看護学生と統合失調症模擬患者との対話場面で、両者間で何が起こっているのかを文脈の中で分析し、学生の内面的な変化を促すための効果的な学生指導のあり方を検証した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
Relationships among moral distress, sense of coherence, and job satisfaction of Japanese psychiatric nurses.(日本における精神看護師の倫理的葛藤と職業満足度の関連)（査読付）	共著	平成28年8月	Nursing Ethics ページなし	Michiyo Ando ,Masashi Kawano 精神科勤務の看護師を対象として、倫理的悩み、首尾一貫感覚、職業満足度との関連について調べ、職業満足度には倫理的悩みと首尾一貫感覚の下位尺度が強く影響していることが示された。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
Association between moral Distress and job satisfaction of Japanese psychiatric nurses(日本の精神科看護師の倫理的葛藤と職業満足度の関連)（査読付）	共著	平成28年	Asian/Pacific Island Nursing Journal Volume 1, Issue 2 (2016) 55-60	Michiyo Ando ,Masashi Kawano 上記の論文の2次的分析として、倫理的悩みと職業満足度の下位尺度との関連について相関分析によって明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
会長講演 臨床精神看護学研究会	単著	平成29年11月	第2回臨床精神看護学研究会誌	p.1 Evidence Based PracticeとPractice Based Evisenceを比較しながら、臨床の知を実践のモデルにする意義を述べた。
長期入院患者のアパートへの退院支援	単著	平成29年11月	第2回臨床精神看護学研究会誌	p.29-30 アパートを建築し、大家さんと病院との橋渡しをして長期入院患者4名の退院を支援した実践を報告した。そこで必要なのは、丁寧なアセスメントと患者の状態に合わせた入院中からの支援であった。
長期入院患者の退院後の食事会を通した支援	共著	平成29年11月	第2回臨床精神看護学研究会誌	p.31-33 共同研究者:柳田崇姉、川野雅資、伊藤桂子 長期入院患者4名が退院した後に毎月1回大家さんと病院スタッフ、ボランティアが集まって食事会をすることで支援を続けた。次第に温泉旅行、クルージング、ホテルのレストランでの食事会などを取り入れて支援した実践を報告した。支えることとささえられることが成り立つ関係が重要であることが分かった。本人担当部分:研究計画の立案、プログラムの実施、評価、文章の校閲
A2病棟における心理教育の工夫と効果会長講演 臨床精神看護学研究会	共著	平成29年11月	第2回臨床精神看護学研究会（兵庫）	p.60-64 共同研究者:知念史子、大西恵、川野雅資、谷村美夏、濱岡景子、山本賢一、前田綾奈 入院中の長期入院患者に対して心理教育を実践した。これまでの体験から、プログラムを隔週で行い、スタッフの力量を高めることを隔週で取り入れる、という工夫を行い、その効果を検討した。本人担当部分:研究計画の立案、プログラムの実施、評価、文章の校閲
TIC研修における看護師等への意識調査ー看護実践の土台となるものー (査読付)	共著	平成29年11月	第2回臨床精神看護学研究会誌	p.85-95 共同研究者:山元恵子、徳永薫、山之内優子、川野雅資 TICの研修に参加した対象者に任意でアンケートを配布し、その結果を質的統合法で分析した。その結果、全人的かかわり、わかる説明、神対応、患者視点のケア、強制しないケア、TIC理念の浸透という6要素が抽出れた。この事を報告した。本人担当部分:研究計画の助言、データ収集、文章の校閲

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
集中治療室におけるケアリングエレメントの探求 –	共著	平成21年1月	臨床看護 35(7) pp. 1097-1108	患者・看護師の捉える「ケア」「こころ」からケアリングをみつけるという視点から執筆を行った。田中綾子、川野雅資
精神臨床看護検討レポート（case11）	共著	平成21年2月	臨床看護 36巻3号 pp. 370-373	共著者：掛川葉子、佐々木喜代、伊藤英明、川野雅資 精神科訪問看護の現状と課題を、精神科訪問看護を利用する患者と家族を対象に実施したアンケート調査から検討した。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
児童・思春期精神医療を支える地域ネットワークを考える	共著	平成21年 6月	小児看護 32(9) pp. 1239-1242	特集 児童・思春期精神看護の臨床実践・荻典子、佐々木郁子、川野雅資 本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
精神臨床看護検討レポート(case 4)	共著	平成22年 3月	臨床看護 35巻5号 pp. 811-815	共著者：一ノ山隆司、舟崎起代子、川野雅資患者の安寧は看護師の言葉だけではない」ことの経験知--自己の癒し体験をケアに生かすケアリングを検討した。本人担当分：資の分析・考察・文章の執筆を行った。
精神臨床看護検討レポート(case 6)	共著	平成22年 4月	臨床看護 35巻9号 pp. 1394-1399	共著者：千英樹、一ノ山隆司、川野雅資　　統合失調症患者の誰にも表現することのできない心の叫びに対する援助;大声で叫べる空間を提供することの検討をした。本人担当分：資の分析・考察・文章の執筆を行った。
イギリスにおける地域精神医療の最新動向	共著	平成22年5月	インターナショナルナーシング・レビュー 日本看護協会出版会 34(5) pp. 102-107	共著者：川野雅資、片山典子　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。英国における地域精神医療の実際を見聞して、様々な対象と状態に応じたチームの活動の実際を紹介する。
精神臨床看護検討レポート(case 15)	共著	平成22年 8月	臨床看護 36巻10号 pp. 1350-1355	共著者：渡辺富美子、一ノ山隆司、川野雅資著しい視力・聴力低下をともなった高齢のアルコール精神病患者への看護の検討。　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
地域精神保健のための教育と訓練（特集 地域精神科医療に取り組む）	単著	平成22年 9月	精神科 17(3) pp. 291-294	地域精神保健を推進するために必要な連携を狩る看護師の教育と訓練の手法を解説する。
世界へ飛ぶ精神科看護師 イギリスの「地域精神科看護師」とは	共著	平成23年 5月	精神看護 14(6), pp. 55-58,	共著者：川野雅資、片山典子　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。英国研修で学んだ地域精神看護師の教育内容と、活動の実際を紹介する。
ハワイ州における地域精神看護	共著	平成23年11月	月刊ナーシング 32(10)，pp. 101-103,	共著者：川野雅資、緑川綾　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。ハワイ州の精神科病院・病棟であるクイーンズメディカルセンター、カヒモハラの精神看護の実際を報告する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
ロールプレイングを用いたコミュニケーション教育（特集 コミュニケーション力を育む ： 実習前に教員としてできること）	共著	平成24年9月	看護教育 53(10), pp.844-849	共著者：川野雅資、石川純子　本人担当分：教育方法の開発、実施を行い、データの分析・考察・文章の執筆を行った。学生のコミュニケーション技術向上のためにロールプレイングを用いた教育を行った結果をまとめた。教室内学習として演習で身に付けられる技術に関して検討を加えた。
書評　『看護学生のためのクリティカルシンキングと書き方－基本的な考え方と活用』	単著	平成24年10月	看護実践の科学 39(5)pp.84	監訳者の神郡博先生の依頼を受け、看護師の職業的3つの技能「クリティカルシンキング、振り返ること、書くことを高める充実した内容の書籍とした。
欧米での精神看護研修(01)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級実践看護師)(その1)Mr. Charles St. Louis	単著	平成26年5月	看護実践の科学 39(11) pp.74-77	ハワイ州の精神看護の領域でCNSおよびAPRN(上級実践看護師)として活躍している、 Charles St. Louis （チャールズ・セントルイスさん）の看護実践とThe Queen's Medical Centerの児童・思春期病棟の看護を報告した。
欧米での精神看護研修(02)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級実践看護師)(その2)Ms. Connie Mitchell	単著	平成26年10月	看護実践の科学 39(12) pp.70-74	ハワイ州のホームレスの人のシェルターThe Institute for Family Enrichment (TIFFE)で施設長をしている精神科専門看護師、Ms.Connie Mitchell （コニー・ミッチェルさん）の看護実践とTIFFEの取り組み、コニーさんが行っているホームレスの人の診断と治療計画アセスメント (ASAM PPC Dimensions:American Society of Addiction Medicine, Patient Placement Criteriaを紹介した。
欧米での精神看護研修(03)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級実践看護師)(その3)Joseph Giovannoni	単著	平成26年11月	看護実践の科学 39(13) pp.56-59	開業看護師として性犯罪者の治療を行いながら、ジーンワトソン博士と共に世界中のヒューマン・ケアリングの講演に取り組んでいるJoseph Giovannoni （ジョセフ・ジオバノーさん）博士の看護実践を紹介した。
精神科臨床評価マニュアル[2016年版]	単著	平成26年12月	アークメディア 全631頁	依頼されて「ケアとアウトカム」（pp.585-596）について記述した。著者：「臨床精神医学」編集委員会 医療の質を評価する必要性と意義について論説し、有効な評価尺度して、筆者が翻訳したPerception of Careを紹介し、併せて、HCIとPSIを紹介した。これらの評価尺度の使用方法と限界を解説した。
欧米での精神看護研修(04)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級実践看護師)(その4)Mr. Wailua Brandman	単著	平成27年1月	看護実践の科学 40(1) pp.56-60	ハワイ州の精神看護の領域でナースプラクティショナーとして活躍しているMr. Wailua Brandman （ワイルワ・ブランドマンさん）が、実践以外にどのようなことを行っているのか、精神科でどのような実践を行っているのか、実践していることの治療的背景、技法、信念にはどのようなものがあるのかについて紹介した。
欧米での精神看護研修(05)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級実践看護師)(その5)Mr. Michael Palazzo	単著	平成27年1月	看護実践の科学 40(2) pp.68-72	ハワイ州の精神看護の領域でCNSおよびAPRN(上級実践看護師)として活躍している、Mr. Michael Palazzo （マイケル・パラゾさん）の開業看護師としての実践、米国の保険支払い制度、今後の精神看護についての考えを報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
欧米での精神看護研修(06)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級実践看護師)(その6)Ms. Christine	単著	平成27年2月	看護実践の科学 40(3) pp.66-71	非営利団体の精神科病院　Kahi Mohara Behavioral Healthで取り組まれている治療プログラム（急性期児童プログラム・レジデンス型児童治療プログラム・急性期成人治療プログラム・思春期部分入院プログラム・摂食障害サービス・ECTサービス・Ropesプログラム）、同病院でCNSおよびAPRNとして人材開発コーデネーターとして活躍している、Ms. Christine Mathuura（クリスティーン・マツウラさん）の人材開発教育実践について報告した。
欧米での精神看護研修(07)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級 実践看護師)(その7)Mary Jane Amundson	単著	平成27年3月	看護実践の科学 40(4) pp.44-47	子ども、家族、地域に対して訓練、教育、相談、治療を行い、個人、家族、地域の質の向上及び専門家の育成に力を注いでいる「The Institute for Family Enrichment（TIFFE)」のプログラム、同施設の設立、運営に携わってきたハワイ大学看護学部・精神看護学教授　Mary Jane Amundson（メアリー・ジェーン・アマンソン）博士看護実践について報告した。
欧米での精神看護研修(08)英国の精神看護 ：実践と研究 Mr. Michael Coffey	単著	平成27年4月	看護実践の科学 40(5)pp.44-48	ウェールズの精神看護について、臨床の場と教育に焦点を当てて報告した。　Swansea University准教授　Michael Coffey博士が共同責任者として携わる大学院終了後の認定プログラム　Approved Mental Health Professional（AMHP）の教育内容、非合意入院の判断方法の変化とAMHP導入の背景、精神科医およびGP(家庭医）とAMHPとの連携についてまとめた。
寄り添う看護 ： 看護師の対話力	単著	平成27年5月	看護実践の科学 40(5)pp62-74	寄り添う看護とは、患者様と家族の気持ちに寄り添い、さらに必要なケアを実践することである。寄り添う看護と添えていない看護の違いについて、入院患者様が体験した具体例の幾つかを紹介した。
欧米での精神看護研修(09)英国の精神看護 ：実践と研究(その2)DPP (DProf) Program	単著	平成27年5月	看護実践の科学 40(6) pp.54-59	英国Swansea UniversityのDoctor of Professional Practice(DPP,専門実践者博士；通称Dprof)課程の内容とMichael Coffey（マイケル・コフィ）博士が受け持つ博士課程の大学院生について紹介した。
欧米での精神看護研修(10)英国の精神看護 ：Michael Coffey博士を招聘して(その1)	単著	平成27年6月	看護実践の科学 40(8) pp.70-74	2015年に日本に招聘した Michael Coffey（マイケル・コフィ）博士の3つの特別講演（有馬高原病院・東京女子医科大学看護職キャリア支援センター・第4回日本地域連携精神看護研究会）の要点を紹介した。（英国の精神看護，英国の地域精神看護師，ケアコーデネーション，研究からみた地域精神保健チーム活動，研究からみた認定精神保健専門職）
欧米での精神看護研修(11)英国の精神看護 ：Michael Coffey博士を招聘して(その2)	単著	平成27年7月	看護実践の科学 40(9) pp.56-60	前号に引き続き、2015年に日本に招聘した Michael Coffey（マイケル・コフィ）博士の特別講演（有馬高原病院）の要点を紹介した。
43　修(12)コロラド州での精神看護 Michael E. Galbraith博士	単著	平成27年8月	看護実践の科学 40(10) pp.40-44	筆者が10年以上交流を続けている、コロラド大学のMichael E. Galbraith博士から伺った、コロラド州の精神看護について紹介した。（コロラド州の精神医療に係る人材，対人関係と現代の精神看護，ホームレス，地域でのフォローアップ）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
欧米での精神看護研修(13)ヒューマンケアリング：Dr. Jean Watson	単著	平成27年9月	看護実践の科学 40(11)pp.58-61	コロラド大学Jean Watson（ジーン・ワトソン）博士に伺った、精神看護とヒューマンケアリングのお話をワトソン博士が話された言葉で紹介した。（ヒューマンケリング，個人的体験とヒューマンケアリング，エクササイズ）
欧米での精神看護研修(14)高齢者サービスを提供するカハラ・ヌイを訪ねて	単著	平成27年10月	看護実践の科学 40(12)pp.36-40	ハワイのKahala（カハラ）にある、Hi'olani Care Center in Kahala Nui（ヒオラニアケアセンター；通称、カハラヌイ）で提供されている3つのサービス（Assisting Living ；手助け付住居，Memory Support;認知の支援，Comprehensive Nursing;包括的看護）について報告した。
Understanding the Mind of Mentally Handicapped Persons about Returning from Hospital to the Community　(精神障がい者が病院から地域へ移行する思いの理解)	共著	平成27年11月	インターナショナル nursing care research 14(1) pp.81-88	共著者:安藤満代、川野雅資、谷多江子　本人担当部分:研究の計画、研究方法の検討、論文の記述と監修を行った。研究内容は、精神障がい者が病院から地域へ移行することを看護師が支援するために、1）患者が大切にしていること、2）地域への移行が意味すること、3）今後の希望、について明らかにすることであった。13名の精神障がい者が質問に対して回答した。「大切なこと」は，【病気のコントロールと健康維持】，【人間関係を良好に保つこと】，【自分を認めてくれる人の存在】，【生活を上手くしていくための技術】，【人生を楽しむこと】，【自己の成長】であった。「病院から地域に移行することの意味」として【仕事をすること】，【自宅に戻って生活をすること】，【病院生活の継続】，【地域への移行の障害】，【居住地に関係なし】であった。さらに「今後の希望」は、【病気の治癒と健康維持】，【社会参加と就労】，【他者の負担の軽減】，【人生を楽しむこと】，【他者からの評価】であった。地域への移行を促進するためには、看護師が、患者が大切にしていること、移行への思い、今後の希望を理解し、患者のもっている強さを支援することが有効な一つの方法と考えられる。
欧米での精神看護研修(15)カヒ・モハラで行なう軍人のPTSD治療のCPT	単著	平成27年12月	看護実践の科学 40(13) pp.46-52	ハワイの精神科病院　Kahi Mohara Behavioral Healthで取り組まれている治療方法の1つであるCPT（認知処理方法）について紹介した。
欧米での精神看護研修(16)Trauma Informed Care(トラウマ・インフォームド・ケア)	単著	平成28年1月	看護実践の科学 41(1)pp.52-59	Sutter Health Kahi Moharaで取り組まれているrauma Informed Care(トラウマ・インフォームド・ケア）について報告した。
イギリスの入院精神看護を訪ねて	共著	平成28年1月	看護 67（1）pp99-103	川野雅資、佐々木愛、川野良子　　地域精神看護の「先駆的地域」と言われるイギリスでの精神看護研修・視察を、入院精神看護に焦点を当て、精神看護において重要なファクターとなる「喫煙」の事情を加え報告した。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
欧米での精神看護研修(最終回)欧米の精神看護研修での学び	単著	平成28年2月	看護実践の科学 41(2)pp.71-76	海外研修での学びの最終回として、海外から学ぶことの利点について総説した。ポイントは、分かりやすい、気づきやすい、臨床に応用できる、自分の研究のヒントになる、模倣したくなる、取り入れたくなる、ことをまとめた。何回同じことを聴いても、その都度理解できることが異なるので、新鮮であった、という気づきを報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
カウンセラーの視点	単著	平成28年2月	看護実践の科学 41(4) pp. 6-12	精神保健上の課題や困難を抱える児童思春期の子どもたち（クライアント）が、どのようなことを体験しているのか、何を感じているのか、どのように考え、知覚しているのかについて、看護カウンセリングの経験から紹介し、成長発達の視点から検討した。また、現在わが国にある児童思春期のサービス提供に係る機能と活動についてふれた。
トラウマインフォームドケアとは何か?	単著	平成29年2月	精神科看護 44通巻293号 2,2017 pp.004-016	トラウマインフォームドケアの定義、海外の文献、トラウマインフォームドケアが生じた背景、トラウマインフォームドケアと非トラウマインフォームドケアの対比を、これまでの研修、講演、文献検索から理解した事をまとめた。
トラウマインフォームドケア	単著	平成29年6月	精神科看護 44通巻297号6.2017 pp025-032	トラウマインフォームドケアの定義、3つのE、4つのR、6つの原理について、例示して詳説した。
トラウマインフォームドケア	単著	平成29年7月	精神科看護 44通巻298号7.2017 pp041-050	トラウマインフォームドケアの10のガイダンスについて記述し、海外のトラウマインフォームドケアに係る研究報告を紹介した。
トラウマインフォームドケア	単著	平成29年8月	精神科看護 44通巻299号8.2017 pp048-051	トラウマ体験をすることで、被る侵入症状、陰性気分、解離症状、回避症状、覚醒症状、そして社会面の影響について詳述した。
トラウマインフォームドケア	単著	平成29年9月	精神科看護 44通巻300号9.2017 pp042-047	トラウマインフォームドケアとトラウマインフォームドでないケア(Non-TIC)の具体例を提示し、トラウマインフォームドケアに必要な感性を醸成する区題的な方法とその反応を記述した。
（その他②）－研究報告書				
精神看護における癒しとケアリング効果の有効性に関する研究	―	平成20年11月	第28回日本看護科学学会学術集会講演集 （福岡）	明神一浩、一ノ山隆司、上野栄一、 川野雅資 本人担当分：ケアリングの定義を提示し、癒しとの関係性に関する考察・文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Japanese Concept ofAmae 日本の概念「甘え」	―	平成21年 8月	The First East West Nursing Conference, Honolulu	甘え理論の看護婦－患者関係への応用。
精神障がい者を支える家族の負担	―	平成21年11月	第29回日本看護科学学会学術集会講演集 (福岡)	一ノ山隆司、舟崎起代子、明神一浩、 上野栄一、川野雅資.pp.501 本人担当分：共同研究者として家族が抱える負担感の分析・考察・文章の執筆を行った。
会長講演「グローバルに学んで、グローカルに展開する」	―	平成21年11月	第2回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	会長として、地域連携に重要なグローバルな視点と同時に地域の特性を把握したグローカルな視点の重要性を論じた。
神奈川県における児童、青年精神医療の連携で看護師の役割を考える	―	平成21年12月	第2回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	編　者：川野雅資　編集協力者：片山典子 著　者：佐々木郁子、川野雅資、山根美智子、久保恭子、アリマ美乃里、佐藤和子、鈴木実、田崎千恵子、土谷朋子、寺島和子、萩典子、一ノ山隆司、村上満 神奈川県における児童、青年期精神医療の実態と、連携形成に関する調査を行い、現状を明確にした。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
就労支援としての職業能力開発校での訓練を受けた精神障がい者の心理面と必要とされる支援	―	平成21年12月	第30回日本看護科学学会学術集会講演集 (東京)	安藤満代、長尾秀美、川野雅資.pp.280、能力開発校を利用する精神障がい者に調査をして、必要とされる支援を明らかにした。本人担当分：共同研究者としてデータ分析結果の検討、考察・文章の検討を行った。
精神科看護師のケアリング実践に関する研究(第2報)　個人の内的過程に焦点をあ	―	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会講演集 (東京)	石川純子、川野雅資、pp.549、東京.本人担当分：精神科で働く看護師にインタビューを行い、その看護師の生育過程の中から、現在どのようなケアリングの要素が生まれたのかについて分析した。共同研究者としてデータの分析・考察・文章の検討を行った。
会長講演　「精神科早期介入と連携の実際と課題」	―	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	事例に基づいた地域の立場からみた早期治療における連携の実際の報告、課題の明確化と今後の方策提案。
タイ王国の地域連携精神看護－タイにおける精神保健福祉と農村部の現状報告	―	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	共著者：揚野裕紀子、中田涼子、片山典子、川野雅資、櫻井尚子、塩月玲奈、朝倉真奈美　　退院後の患者は全員が働いていると言うタイにおける、精神科病院、医療機関、医療従事者、精神障がい者の生活を支える制度、法律、予算、農村部に暮らす精神障がい者の生活から、地域精神医療の実際を学ぶことを目的に視察を実施。精神保健福祉と農村部の現状を報告した。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメント退院準備用紙の作成から活用まで	―	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	共著者：寺田祐治、一ノ山隆司、舟崎起代子、上野栄一、川野雅資　患者と看護師が共同で作成した退院準備用紙を活用し、統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメントの維持・促進を支える援助過程で、患者の自己および自己を取り巻く現実に関する認識が改善されたかを明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題	―	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	共著者：松浦純平、一ノ山隆司、上野栄一、京谷和哉、植木健康、川野雅資 自記式無記名質問紙調査を用いて、A県内に本拠地があるがん患者会員が考えるサロンに対する認識および現状を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
長期入院患者の退院支援に関する看護師の意識調査－看護師へのインタビュー分析からの課題－	―	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	明神一浩、前川哲弥、森下憂一、一ノ山隆司、上野栄一、川野雅資 精神科看護歴が10年以上ある看護師にインタービューを実施し、質的帰納的記述研究を行い、長期入院患者の退院支援において看護師が抱える課題を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
カウンセリングの治療的意味に関する研究　統合失調症患者のカウンセリングにおける治療関係と認知の変容への働きかけ	―	平成22年12月	第1回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	伊藤佳子、川野雅資 カウンセリングの場面を録音・録画し、クライアントの非合理的信念の変容は、セラピストのどのような介入によって促進されているのかを明らかにし、継続するカウンセリングの中でセラピストとクライアントの間にはどのような相互作用があるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失聴症患者の会話分析－妄想に対する治療的かかわりに焦点を当てて－第1報　会話レベルによる分析	―	平成24年 3月	第1回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	揚野裕紀子、曽谷貴子、日下知子、川野雅資 研究は、専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、「会話レベル」を用いて分析を行い、精神障がいをもつ患者にとって、どのようなカウンセリング技法が有効であるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者の会話分析－妄想に対応する治療的かかわりに焦点を当てて－第2報　対人間圧力とフレーム対応による分析	―	平成24年 3月	第1回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学（東京）	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、ジェームズ・F・T・ブーゲンダール：「サイコセラピストの意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』と問題の焦点化を目指す『フレーム（構図）の対応』を用いて分析・解釈を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
統合失調症患者との看護面接の場面の分析 ースピリチュアリティに焦点をあててー	―	平成24年 3月	第1回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	安藤満代、川野雅資 精神看護の専門教育を受けた看護師が行っている看護面接において、どのようなスピリチュアリティ向上に関する内容があるのかを明らかにするために、村田のスピリチュアル・カウンセリングシートを用いて分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術	―	平成24年 3月	第1回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	片山典子、一ノ山隆司、川野雅資 専門教育を受けた看護師と慢性統合失調症のクライアントの間におこる会話場面を、環境要因も含めて分析を行い、看護師が用いているカウンセリング技術を明らかにした。　　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
看護の視点から見た性同一性障害の文献検討	―	平成24年 3月	第38回日本看護研究学会学術集会 （宜野湾）	佐々木愛、川野雅資　性同一性障害の人が入院時に体験する様々な感情に関する文献を調査した。本人担当分：研究計画の助言、データ分析、考察の助言、文章の校閲を行った。
夫婦の語りからみたうつ病による休職から職場復帰までの支えとなった事柄	―	平成24年7月	第44回日本看護学会 精神看護学術集会 （群馬）	塩月玲奈、川野雅資　うつ病患者の夫婦療法を実践した記録か、発症から社会復帰までの経過を分析した。本人担当分：研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の校閲を行った。
講会長演 ディスコース研究から見えてくるもの	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	妄想に支配されているクライアントへのサイコセラピー、気分障害（うつ病）のクライアントが徐々に仕事復帰する段階のセラピストのカウンセリング技術の考察を行った。
うつ病および統合失調症患者と看護師の会話のRIASによる分析	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	野呂幾久子　川野雅資　　3つの実際のカウンセリング場面の会話をRIASで分析し、その結果からコミュニケーションの特徴について考察することを試みた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
テキストマイニングによるカンセラーとクライエントの会話の特徴	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	上野栄一、川野雅資　　カウンセリングの場面についてカウンセラーとクライアントの会話内容をテキストマイニングを用いて分析し、会話の特徴を明らかにするとともに、クライアントとカウンセラーの会話をテキストマイニングで分析することの妥当性の検証を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
カウンセリングにおけるコミュニケーション技術の構造と手法　　気分障害患者の認知バイアスへの介入場面の分析	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	伊藤桂子、川野雅資　　看護師と気分障害をもつクライアントとの会話を分析し、看護師が用いるコミュニケーション技術の構造と手法の考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
妄想のあるクライエントとの看護面接場面の会話分析 ―『対人間圧力』の典型的反応レベル32スキルを用いた分析―	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	クライアントとの面接場面において、意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』の典型的な反応レベル32スキルを、どのように用いて会話を行っているのか、会話分析を行い『対人間圧力』として影響の度合いと会話パターンを明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケア	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	安藤満代、川野雅資 統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリング場面をスクリプト表記し、村田のスピリチュアリティ・カンファレンス・サマリーシートを部分的に利用し分析を行い、看護カウンセリングにおけるスピリチュアルアケについて検討を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術―ジェファンソンの記号システムによる検証―	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	片山典子、川野雅資 地域で生活している妄想のある統合失調症者と看護師の対話場面を、ジェファンソンの記号システムに基づきデータとし、会話分析から統合失調症者の妄想に対して看護師が用いているカウンセリング技術を抽出した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ひきこもり青年との看護面接場面の分析―行動療法的アプローチに焦点を当てて―	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	柳田崇姉、川野雅資　　ひきこもりの青年と専門教育を受けた看護師の看護面接場面の会話分析を行い、看護師がどのような行動療法的アプローチ技術を用いているのかを明らかにし、自尊感情の回復援助に効果的なケアについて考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析―ユーマニスティック看護論を用いて―	―	平成25年 9月	第2回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	佐々木郁子、川野雅資 ヒューマニスティック看護論の概念図化し、著書より「人間」「看護」「看護師」キーワードとして、センテンスを抜き出し、カテゴリに分類し、統合失調症患者との看護面接場面でクライアントが看護師に自分の否定的な気持ちを率直に伝えていた場面を抜き出し、分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ひきこもり支援者が語る地域連携の現状に関する研究	―	平成25年 9月	第33回日本看護科学学会学術集会 （大阪）	柳田崇姉、川野雅資　pp.645　ひきこもりの若者を支援する人々へのインタビュー調査を行った。本人担当分：研究計画の助言、データ分析、考察の助言、文章の校閲を行った。
ロイ看護適応モデルに基づいたがん患者のスピリチュアリティのアセスメント	―	平成25年12月	第40回日本看護研究学会 （奈良）	安藤満代、川野雅資、日高艶子　本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。がん患者が体験するスピリチュアリティについて、シスター・カリスタ・ロイの適応モデルを用いて分析した結果、どのように適応していくのかを明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
会長講演　妄想状態にある統合失調症患者に対する熟練看護師の対話技法の一考察	―	平成26年 8月	第3回精神看護ディスコース研究会福井大学（福井）	熟練看護師と妄想のある統合失調症患者との面接6場面の会話内容を、ボランニーの記述から全体を量的に整理するとともに、ある特定の妄想場面について、話題、発話の回数、話題の始まり方、コミュニケーションのレベルについて分析を行った。
精神看護面接における看護師の発話機能、技法、意図の関係ー統合失調症患者の面接を対象としたパイロット研究ー	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	野呂幾久子、川野雅資、伊藤桂子、片山典子、佐々木郁子　熟練した精神看護師と統合失調症患者との面接場面を、RIASを用いて、看護師の会話の意図、技法、発話機能の関係について考察を行い、効果的な精神看護面接の会話構造を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリングの手法と構造	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 （福井） 福井大学	伊藤佳子、川野雅資 カウンセラーと気分障害患者との会話を分析し、気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリング技法の手法と構造を明確化した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症患者への看護カウンセリング技術ー「言いかえ」における自己修復・他者修復の関連ー	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	片山典子、川野雅資　地域で生活している妄想のある慢性統合失調症者と専門教育を受けた看護師の対話場面をデータとして会話分析を行い、看護師が用いるカウンセリング技術を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析ヒューマニスティックナーシングを用いてー看護師と患者の「間」についての一考察ー	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	佐々木郁子、川野雅資 看護面接場面における「間」の存在について、人間的看護論を用いて会話分析し、人間的看護論の実践について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者とうつ病患者の看護面における会話分析の比較ー看護師の対人間圧力32スキルの活用比較ー	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 妄想のある統合失調症患者とうつ病の回復期にある患者との看護面接における会話を比較し、対人間圧力32スキルの活用状況の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
うつ病患者の看護面接場面の会話分析ークライアントの反応からみたセラピストの技法の活用ー	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 看護カウンセリングにおけるクライアントの会話パターンの特徴を把握し、セラピストのコミュニケーション技法の活用について考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
気分障害をもつ患者と看護師との会話分析ーロイ適応看護モデルを用いてー	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	安藤満代、川野雅資、日高艶子 気分障害（うつ病）をもったクライアントとの看護カウンセリングの中で、ロイ適応看護モデルに基づいてどのようなケアが行われているのか分析・考察を行った。本人担当部分：データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニグを用いたセラピストとクライアントの会話分析	―	平成26年12月	第3回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	松浦純平、川野雅資 統合失調症患者のクライアントとカウンセリング時のセラピストの発語内容についてテキストマイニグを用いて分析し、高度実践看護技術の構造化につなげる基礎研究の一助として、カウンセリング時の特徴を明らかにすることに主眼に置いた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
精神看護学における会話分析の手法と活用	―	平成26年12月	第25回日本精神保健看護学会学術集会 （つくば）	伊藤桂子、片山典子、川野雅資、野呂幾久子、上野栄一　精神看護学領域における会話分析に関するこれまでの知見をまとめた。本人担当分：研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。
精神科看護師の倫理的悩みと職業満足度、SOCおよび精神健康度との関連	―	平成27年 6月	第35回日本看護科学学会学術集会 広島国際会議場	安藤満代、川野雅資 精神科看護師の倫理的悩みと職業満足度、SOCおよび精神健康度との関連を調査した。本人担当分：共同研究者として研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。
会長講演 「会話のもとになるもの」	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	会話を形成しているのは、その会話をするときの意図であり、意図を実現化するコミュニケーション技術である。更に、意図のもとになる人間性が肝要であることを論じる。
うつ病患者のカウンセリングー回復期と増悪期の比較ー	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	野呂幾久子、川野雅資 うつ病患者のカウンセリング2場面のRIASを分析を行った。看護師のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「患者教育」が多いこと。患者のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「社会情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「接続語」が多いこと、「社会的会話」および「信頼関係の発話」が少ないことが明らかになった。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
ロイ看護適応モデルを用いた自殺念慮を呈する患者と看護師との会話分析	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	安藤満代、川野雅資　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。うつ病の増悪期にある患者へのカウンセリングをロイの適応モデルで分析した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
自殺に傾いたクライアントへの支援ークライアントとセラピストの相互関係の中で行われる自殺予防の関わりー	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	伊藤桂子、川野雅資 カウンセラーと自殺に傾いたクライアントとの会話を分析し、カウンセリングの相互作用の中で行われる自殺予防の手法について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
うつ状態の悪化期にある患者との看護面接場面の会話分析ーうつ状態の回復期と悪化期の対人間圧力32スキルの活用比較ー	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	曽谷貴子、日下知子、川野雅資 うつ状態の悪化時にある患者との看護面接場面を会話分析することにより、症状の悪化時にどのようにコミュニケーション技術を活用し、看護面接を行っているのかを分析・考察した。また、先行研究のうつ病の回復期の看護面接での対人間圧力32スキルとの比較を行い病状に違いによるコミュニケーション技術の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングによるうつ病の患者とカウンセラーとの会話分析	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	上野栄一、川野雅資 うつ病患者とカウンセラーの両者の会話の特徴を明らかにすることを目的とし、会話の中で出現する沈黙に注目し、カウンセラーとクライアントのコミュニケーションの特徴をテキストマイニングソフトStudio®を用いて、単語頻度解釈、係り受け頻度解釈、共起分析し、考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	松浦純平、川野雅資 カウンセリングを定期的に受けているうつ病患者と看護師との会話内容から逐語録を作成し、計量テキスト分析ソフトKH Coderを用いて、記述統計、階層的クラスター解析、共起関係ネットワーク分類、多次元尺度法を実施。熟練セラピストとうつ病患者とのカウンセリング場面の会話分析から、セラピストのカウンセリングにおける特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
看護学生の精神科患者への関わりに関する研究ー模擬患者を用いたシュミレーションのディスコース分析	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	山元恵子、伊藤桂子、村上茂、川野雅資 看護学生と統合失調症模擬患者との対話場面で、両者間で何が起こっているのかを文脈の中で分析し、学生の内面的な変化を促すための効果的な学生指導のあり方を検証した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
How psychiatric nurses behave when they confronted ethical problems （精神科看護師が倫理的問題に直面したときの対処）	―	平成27年12月	International Behavioral Health Conference (Hong Kong)	Michiyo Ando ,Masashi Kawano 精神科看護師が倫理的な問題に直面したときに、どのように自分自身をコントロールするかを調査研究で明らかにした。本人担当分：共同研究者として研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
蘇った記憶（妄想）のあるクライアントへの支援	—	平成28年1月	第8回日本「性とこころ」関連問題学会学術集会 （東京）	伊藤桂子、川野雅資 統合失調症患者がカウンセリング場面で語る性に係る発言を分析した。本人担当分：研究を計画し、データ収集を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
認知症を知ろう	—	平成28年5月	第1回臨床精神看護学研究会（兵庫）	北島文子、藤井ショーン、小宮智子、高浜佑、長島愛、彦坂予友子、川野雅資　有馬高原病院で取り組まれている認知症の家族教室の活動内容を認知症の家族の心理を用いて考察した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
いかに歩くか　　–精神科作業療法での治療としての“歩く習慣”定着への取り組み–	—	平成28年5月	第1回臨床精神看護学研究会（兵庫）	長島愛、山口裕子、越智健義、川野雅資 先行研究で推奨された歩行「歩行の健康増進には1日8000歩以上、中等度強度以上の歩行を20分以上」の精神科臨床応用についての臨床感、経過、定着のための工夫について考察した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
心理教育リーダー・コリーダーを体験して気づいたこと	—	平成28年5月	第1回臨床精神看護学研究会（兵庫）	濱岡景子、山本賢一、谷村美夏、鳥羽法子、川野雅資、大西恵　心理教育に係るスタッフの問題点・課題克服を目的としたリーダー・コリーダー体験の結果の分析・考察を行った。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
不本意な入院をした患者の移送に関する体験と思い–A氏の語りから–	—	平成28年5月	第4回日本地域連携精神看護学研究会 横浜市大 （横浜市）	佐々木愛、石川純子、川野雅資 不本意な入院をした患者にインタビューで体験を語って頂き、その体験を質的に分析し、今後の課題を検討した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
討論会「拡大する地域連携」	—	平成27年5月	第4回日本地域連携精神看護学研究会 横浜市大 （横浜市）	報告者が取り組んだ地域移行支援プログラムと多職種連携について考察し、地域定着に不可欠な第三者（回復者とともに生活を分かち合うボランティア・慈悲団体）の必要性を明らかにした。
青年期統合失調症患者の臨界期における訪問ケア実践	—	平成27年12月	第36回日本看護科学学会学術集会（東京国際フォーラム、東京）	片山典子、荒木田美香子、川野雅資 訪問看護を実施した体験がある看護職者に、臨界期にある統合失調症の青年期の対象に実施した看護とその根拠を調査した。その中から、訪問看護師が必要とする看護技術の要素を抽出した。本人担当部分：研究モデルの検討、調査協力者の推薦、結果の分析、考察。
会長講演 臨床精神看護学研究会	—	平成28年6月	第１回臨床精神看護学研究会（兵庫）	「暗黙知と形式知」「知の三分類」「フロネシス（実践的知恵）を継承する場」についての会長講演をまとめた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Examination of Self-management construct validity of Structure for Community-dwelling People with Schizophrenia in Japan 日本における待機で暮らす精神障害者の自己管理能力	—	平成29年3月	Asian American Pacific Islander Nurses Association's th Annual Conferece (Honolulu)	Keiko Yamamoto, Masashi Kawano　我が国のディケアを利用している地域で暮らす163名の統合失調症患者に調査した結果、治療、治療継続がもとにあり、そのうえで自己の質、環境があり、そしてしこ調整力が生まれて信頼感が増すことが明らかになった。本人担当部分：調査協力のディケアの開拓。データの考察。
A pilot study of developing of spirituality scale for mentally handicapped persons in community dwelling　精神障害者のスピリチュアリティを測定する尺度の開発に関するパイロット研究	—	平成29年3月	The 3rd Internationa Society of Caring and Peace Conference in Kurume(Fukuoka,Japan)	P.128. Michiyo Ando, Masashi, Kawano, Eiichi Ueno 24項目の精神障害者のスピリチュアリティを測定する尺度を開発し、ディケア利用者を対象として80名の調査を行い、因子分析を行った。本人担当部分:研究計画の立案、調査対象者の依頼、調査の実施、データ分析の考察。論文の校閲を行った。
会長講演 臨床精神看護学研究会	—	平成29年5月	第2回臨床精神看護学研究会（兵庫）	Evidence Based PracticeとPractice Based Evisenceを比較しながら、臨床の知を実践のモデルにする意義を述べた。
長期入院患者のアパートへの退院支援	—	平成29年5月	第2回臨床精神看護学研究会（兵庫）	アパートを建築し、大家さんと病院との橋渡しをして長期入院患者4名の退院を支援した実践を報告した。そこで必要なのは、丁寧なアセスメントと患者の状態に合わせた入院中からの支援であった。
長期入院患者の退院後の食事会を通した支援	—	平成29年5月	第2回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者:柳田崇姉、川野雅資、伊藤桂子　長期入院患者4名が退院した後に毎月1回大家さんと病院スタッフ、ボランティアが集まって食事会をすることで支援を続けた。次第に温泉旅行、クルージング、ホテルのレストランでの食事会などを取り入れて支援した実践を報告した。支えることとささえられることが成り立つ関係が重要であることが分かった。
A2病棟における心理教育の工夫と効果会長講演 臨床精神看護学研究会	—	平成29年5月	第2回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者:藤原史子、大西恵、川野雅資、谷村美夏、濱岡景子、山本賢一、前田綾奈　入院中の長期入院患者に対して心理教育を実践した。これまでの体験から、プログラムを隔週で行い、スタッフの力量を高めることを隔週で取り入れる、という工夫を行い、その効果を検討した。
TIC研修における看護師等への意識調査ー看護実践の土台となるものー	—	平成29年5月	第2回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者:山元恵子、徳永薫、山之内優子、川野雅資　TICの研修に参加した対象者に任意でアンケートを配布し、その結果を質的統合法で分析した。その結果、全人的かかわり、わかる説明、神対応、患者視点のケア、強制しないケア、TIC理念の浸透という6要素が抽出れた。この事を報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他⑤）-編及び監修				
慢性期看護 ： 緩和・ターミナルケア ： 成人看護学	共著	平成20年 4月	日本放射線技師会出版会	緩和・ターミナルケアに焦点を当てた成人看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全382頁 監修：川野雅資 編集：伊藤まゆみ　共著者：伊藤まゆみ、入江慎治、井原緑、秋月百合、高橋正子、高宮有介、下條奈己、黒子幸一、中村英子、村瀬麻樹子、近藤ふさえ、小竹久実子、塚本友栄、佐藤満、佐田浩行、吉田正子、平野真澄、縄田修一、荒添美紀、山室八潮、岩崎和代、鳥原真紀子、菊池麻由美 本人担当部分：本書の企画、文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 看護管理学	共著	平成20年 8月	PILAR PRESS	看護看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全180頁 監修：川野雅資 編集：平井さよ子 共著者：平井さよ子、賀沢弥貴、飯島佐知子、山田聡子 本人担当部分：本書を新たな視点で企画し、編者に依頼し最終的な文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 小児看護学	共著	平成22年 8月	PILAR PRESS	小児看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全336頁 監修：川野雅資 編集：中村伸枝 共著者：荒木暁子、出野慶子、遠藤数江、小川純子、金丸友、白畑範子、中村伸枝 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
家族看護学（看護学実践-Science of Nursing-）	共著	平成22年11月	PILAR PRESS	家族看護学という新しい学問領域に添うように、そして家族看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全280頁 監修：川野雅資 編集：櫻井しのぶ 共著者：安藤直美、大石ふみ子、大倉美佳、加藤欣子、金岡緑、間裕美子、間文彦、櫻井しのぶ、佐藤敏子、庄村雅子、杉浦絹子、近森栄子、茅野裕美、中西唯公、乗松貞子、旗持智恵子、三村博美、森田惠子、丸山明美、薬師神裕子、横尾京子、横内光子、吉田和枝 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
老年看護学（看護学実践-Science of Nursing-）	共著	平成22年12月	PILAR PRESS	老年看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全284頁 監修：川野雅資 編集：守本とも子 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 地域看護学	共著	平成24年 4月	PILAR PRESS	地域看護学の最新の知見をもとに編集するよう、編者に依頼し、最終原稿の監修を行った。全251頁 監修：川野雅資 編集：豊島泰子 著者：豊島泰子、石井栄子、彌永和美、山下智香、山崎律子、後藤由紀、畑中純子、山村江美子、今村桃子、新堂愉香子、佐藤博美、福本美津子、多田羅紀子、西地令子、鈴木みちえ、伊藤薫、井上清美、鷲尾昌一、寺文文恵、小川正子

教 育 研 究 業 績 書

平成　　30　年　3　月　31　日

氏名　　中馬　成子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
看護学	基礎看護学, 臨床看護学（慢性期）

教育上の能力に関する事項

事項	年　月　日	概　　要
1　教育方法の実践例 宝塚大学 1）基礎看護学Ⅰ（概論）講義の工夫	平成24年4月～平成26年3月	24年度から、ナイチンゲールの「看護覚え書き」とヘンダーソンの「看護の基本的となるもの」をグループで読み合わせ、要約を発表する機会をつくった。読むこと、要約することが苦手とする学生像から、看護の本質を捉えることを目的にアカデミックスキルズも体得できるように演習とした。学生の評価では、看護について考えを深めたことやグループによる学びもあり、有意義な講義・演習と評価できた。 25年度からは、実習中の言動や倫理的な態度が十分ではない学生もいたことから、上記のグループワークに加え、実習中の身だしなみおよび言動、実習生の倫理的ジレンマの場面を取り上げた事例を使い、グループワークと成果発表会を行った。実習態度に関する発表では、看護学生としてのあるべき態度について共通理解ができた。倫理的問題については、事前に倫理の原則を講義したこともあり、原則を踏まえた考察と行うべき態度が発表できていた。1年次とはいえ、これらのテーマの必要性を十分認識し、グループワークを行えていたことから、学習テーマ、学習方法として適切であったと評価できた。
2）基礎看護学Ⅵ（看護過程）演習の工夫	平成26年4月～平成27年3月	西南女学院大学において成人看護学で看護過程を教授した経験がある。その経験を生かし、2年次生への理解を深められるように教授内容を考案した。事例展開で用いる病態を骨折という比較的理解しやすい病態を用いた。また、問題点を日常生活に焦点化し、病態の理解よりも看護過程の思考過程を踏めることを重要視した。看護過程の各ステップを丁寧に教授し、学生の反応を見ながら次のステップへと進めている。特にアセスメントすることの理解が最も困難であることから、個人課題、グループワーク、模範解答の提示など繰り返し教授する中で理解を深めるように工夫した。アセスメントのグループワークの発表では、予想以上の成果がみられた。しかし、グループメンバー全員で取り組んだグループとそうではないグループもあり、個人の能力が問われるが、仲間評価を行い、グループワークの効果を高めることもねらいとしている。そこで、学生の危機感と個人の看護過程展開能力を高めるために、期末試験の中での事例展開を計画している。
2　作成した教科書、教材 なし		

事項	年　月　日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
西南女学院大学 宝塚大学看護学部 1）学生による授業評価		
	平成25年7月	基礎看護学Ⅰ（概論）　4.2、全科目平均4.0
	平成25年7月	基礎看護学実習Ⅰ（対象理解）担当学生（17名）による総合評価：大変良い14名、良い3名、やや悪い0、悪い0
	平成26年2月	基礎看護学実習Ⅱ（看護過程）全学生（116名）による総合評価　大変良い73名、良い40名、やや悪い1名、悪い2名
	平成26年2月	成人看護学Ⅲ（慢性期・終末期援助論）3.9、全科目平均3.8
4　実務家教員についての特記事項		
関西看護医療大学 1）セミナー講師	平成19年5月	兵庫県淡路市の住民を対象に、生活習慣を見直し、再構築することを目的に、５回シリーズの健康教育セミナーを開催した。成人看護学、老年看護学を専門とする教員３名で担当した。生活習慣に関する講義および自宅で行える運動を組み入れた。
宝塚大学 2）講演	平成21年11月～12月	兵庫県川西市立病院（兵庫県川西市）看護部からの依頼により看護スタッフを対象に、「看護診断の学びのための中範囲理論」というテーマで講演を行った。臨床で適切な看護診断を確定するには、基盤となる中範囲理論の理解が必要と考え３回シリーズで中範囲理論と看護診断の関係を中心に講義した。
3）講演	平成26年11月、12月	関西電力病院（大阪府大阪市）看護部からの依頼により看護スタッフを対象に、「看護過程と看護記録」というテーマで2回にわたり講演を行った。看護過程の一般的な考え方に加え、看護記録との関連および看護記録の法的な側面から講演した。
5　その他 なし		

事項	年　月　日	概　　要
職務上の実績に関する事項	年　月　日	概　　要
1　資格，免許		
看護婦免許証	昭和56年5月	（第412077号）
修士（経営学）	平成13年3月	九州産業大学経営学部経営学科博士前期課程 第001130号
修士（看護学）	平成19年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科博士前期課程　第13号
博士（看護学）	平成27年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科博士後期課程 甲第1590号　看第23号
2 特許等 なし		
3　実務家教員についての特記事項		
宝塚大学看護学部看護学科学科長	平成23年4月～平成26年3月	宝塚大学看護学部看護学科学科長として、学部長を補佐し学科の運営に携わった。
宝塚大学看護学部看護学科研究倫理委員会副委員長	平成24年4月～平成26年3月	宝塚大学看護学部看護学科看護学科の研究倫理に関して、副委員長とした携わった。
宝塚大学看護学部看護学科教務委員長	平成26年4月～平成27年3月	宝塚大学看護学部看護学科看護学科の教務に関する業務に委員長として携わった。
奈良学園大学保健医療学部看護学科教務部会長	平成28年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の教務に関する業務に委員長として携わった。
4　競争的研究資金獲得		
科学研究費助成金	平成29年度～平成31年度	研究課題「父親への育児支援情報を多角的に発信するサービスシステムの普及に関する研究」基盤C 研究代表者：宝塚大学看護学部 上山直美、分担者 田中祐子、子安恵子、松尾博哉、堀陽子、中馬成子、丸上輝剛
奈良学園大学共同研究費	平成29年4月～平成30年3月	研究課題「グループワークを主とした看護過程演習に電子カルテを導入することによる教育効果およびグループワークと社会人基礎力との関係」研究代表者 中馬成子、共同研究者　北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子
5　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1．2018年要点がわかる出題傾向がみえる基礎看護学（看護師国家試験対策）	共著	平成29年11月	ピラールプレス社	看護師国家試験科目の「基礎看護学」について、過去問を読み解くための要点について説明している。受験生が過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援を目的としている。 監修：守本とも子 編著：中馬成子 共著：北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子、澤田京子、平野加代子
（学術論文） 1.Q市における在宅高齢糖尿病者のセルフケア（査読付き）	共著	平成21年2月	関西看護医療大学紀要，1号，pp．3-14	本研究は，Q市の在宅高齢糖尿病者のセルフケアを明らかにすることを目的とした。２型糖尿病のQ市内の病院に通院している65～74歳までの前期高齢者を対象に，半構成的面接を行い質的帰納的に分析した。その結果，糖尿病とその治療に対するとらえ方や考え方として【病気とは別物に思える糖尿病】【糖尿病はきちんとしていなかった自分を証明する病気】【インスリン注射は回避したいマイナスイメージの治療】【糖尿病の脅威の知覚は身近な人から】，糖尿病の療養行動として【自分で決めた血糖値の目標に向かうために専門家に頼らない自己流の努力】【外来受診・入院・糖尿病教室はひそかな自己点検・自己評価の膳】【ボーダーライン提示の希望】，療養行動の思いとして【心構えの背後には罪悪感】，療養行動と思いに影響するものとして【季節・地域特性が影響するカロリーオーバー】【気持ちと受診行動のサポート】のカテゴリーを抽出した。地域における多様な特性を踏まえた場において，在宅高齢糖尿病者の療養に対する看護介入の必要性が示唆された。 共著者：森田智子，神谷千鶴，中馬成子，魚里明子，小平京子，神山幸枝（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
2.糖尿病看護学領域における看護診断の検討，京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要（査読付）	共著	平成21年3月	京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要，５巻，pp．71-74.	糖尿病看護学領域における看護診断を明確にしていく第１弾として，糖尿病看護領域に従事している看護師らを対象に臨床現場で糖尿病患者に適用している診断ラベルを調査した。その結果，NANDA-I看護診断の診断ラベルから17項目と，修正もしくは独自の診断ラベルとして６項目が抽出された。これら23個の診断ラベルが表す問題状況は，糖尿病看護領域特有の看護診断の候補として挙げられることとなった。今後は，糖尿病看護領域特有の看護診断として確定していく上でも，診断ラベルが示す状態の確認をはじめ，診断ラベルと判断指標となる症状等との照合やその表記の妥当性について検討していく必要がある。 共著者：本田育美，奥津文子，小平京子，笠岡和子，神谷千鶴，中馬成子，江川隆子（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.2型糖尿病患者のインスリン療法に対する心理的行動的反応の変遷（査読付）	共著	平成23年12月	日本看護研究学会雑誌，第34巻，第5号，59-69.	2型糖尿病患者のインスリン療法に対する心理的行動的反応を明らかにするために、インスリン療法を1年以上継続していえる20名を対象とした。インタビュー内容から質的帰納的に分析した。その結果、インスリン療法の告知時は、【インスリン療法に対し否定的感情】をもっていたが、その後【インスリン療法の知識による認識の変化】がもたらされ、【インスリン療法の開始を決意】し、インスリン自己注射を実施し体験する過程を経て、【インスリン自己注射に対する安心感を獲得】しており、【インスリン療法を維持する意志と行動】という肯定的な態度へと変遷していた。治療開始時の心理的行動的問題を焦点化したうえで、早期から正しい知識と安心感が得られる情報を提供し、肯定的認識と行動をとるための援助が重要であることが示唆された。 共著者：中馬成子，土居洋子（主たる研究遂行者）
4.標準化死亡比の高い地域における2型糖尿病患者の療養行動の実態-療養行動の継続の看護支援に向けて-（査読付き）	単著	平成24年3月	大阪府立大学看護学部紀要，第18巻，第1号，97-106.	糖尿病の標準化死亡比の高い地域の治療中断の経験を有する2型糖尿病患者の療養行動の実態を調査した。10名に半構成的面接を行い質的帰納的に分析した。療養行動を左右する病状の認識は【目標値と現在の血糖値を比較して病状を理解している】【病状はわからない】【合併症は怖いから回避したい】【合併症は自分のこととして考えられない】病気の管理に関する理解は【食事療法が基本である】【自己管理により病状が改善する】【生活に生かせるほど理解していない】が抽出された。実践している療養行動は【食事内容･量を変更した】【運動療法を継続している】など，実践できていない療養行動は【適切な食事量を継続できない】【教育後すぐには療法行動がとれない】などが抽出された。医療・生活環境を考え，患者が生活の中で療養行動を継続するためのセルフレギュレーションへの支援が必要であると示唆された。
5.2型糖尿病患者の療養行動の継続を促すセルフレギュレーションに基づく介入効果（博士論文）	単著	平成27年3月	大阪府立大学大学院看護学研究科	都市部と異なりへき地では糖尿病の専門職が少なく，必要な療養指導が実施されていない現実がある。今回，へき地の一つである農漁村地域における2型糖尿病患者を対象に，その療養行動を明らかにし，自立をうながすと考えられるセルフレギュレーション（以下，SR）に基づく支援プログラムを作成し患者に用い，統計解析しその効果を明らかにした.その結果，糖尿病に関する知識と自己管理下位尺度（フットケア，規則正しい生活）について介入後の変化量に有意差がみられた.摂取カロリーも介入群の方が減少傾向にあった.SR過程（目標設定，療養行動のｾﾙﾌﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞ，療養行動についての自己判断，療養行動の結果の自己反応）を達成した患者は，19名中14名であった.達成できなかった5名の患者の理由は，農作業や介護ストレス，友人等の地域の付き合いなどの環境的要因により適切な療養行動がとれず，否定的な自己反応を示していた.地域とのつながりが強い農漁村地域では，療養行動と地域との付き合いや家業・介護との折り合いをつけるための支援の強化が重要であることが示唆された. A4 全87頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 1．看護学生のドメスティック・バイオレンスの捉え方ーリプロダクティブ・ヘルス／ライツを踏まえてー	ー	平成21年8月	第1回日中韓看護学会，北京	ジェンダーの視点の導入と学生の生き方や生きる力の形成の一助となることをねらいとして、看護学生に対して性の現状と問題を踏まえたドメスティック・バイオレンスに対しての講義を組み入れている。看護大大学生92人対象の講義内で視聴したドメスティック・バイオレンス教材の感想を自由記載させたものを分析した。その結果、13のカテゴリーが抽出された。①『DVに対する支援・対策』②『加害者におけるDVの要因』③『DVの実態に対する思い』④『被害者におけるDV被害の要因』⑤『加害者によるDV行為への思い』⑥『DVに対する疑問』⑦『DV防止の願望』⑧『被害者の苦痛』⑨『DVの性質・構造・要素』⑩『被害者にとってほしい行動』、⑪『愛することの意味』⑫『被害者の立場に立った思い・考え』⑬『被害者の気持ちの理解』が抽出された。これらの結果から、学生はドメスティック・バイオレンスの本質を捉えながら、被害者である女性を支援し、保護することを考え、暴力に対して非難する立場をとっていた。そして、人を愛することの意味を考え、女性の権利について、被害者および加害者の立場に立って客観的に思考していた。 共同発表者：上山直美，中馬成子，小出水寿英、内山和美
2．Discontinued Consulting Behavior of Patients with Type-2-Diabetes Mellitus in an area having Less-Number of Health Service Facilities （糖尿病専門職の少ない地域における2型糖尿病患者の療養行動の中断について）	ー	平成21年	The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science，p.141.	**Purpose:**To clarify discontinued consulting behavior of type-2 diabetes patients living in sn area having less-number of health service facilites. **Method**:Data were obtained from 10type-2 diabetes patients by using a structured or semi-structured interview. **Results:**1) Reasons why discontinued consulting a doctor were ; (1) work or community activity was more prioritized,(2) not able to pay for consulting,etc 2) In terms of difficulty in consulting a doctor regularly, the following responses were obtained ; no problem because of being able to reserve the consulting day,etc.3) What patients perceived about diabetes were; I don't understand well, complications never happen to me, complications are dreadful, etc.4）Major Problems with Self-Care Behavior Following Diabetes Education (1)Inability to acquire accurate knowledge　(2)Unable to implement proper self-care behavior despite having knowledge of that behavior (3)Implementation of incorrect self-care behavior. **Conclusion**: It is important to provide diabetes knowledge according to what patients perceived about diabetes, what makes them feel fear, and how they handle their inconvenience for consulting. Nariko　Chuman

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本研究の目的は糖尿病専門職の少ない農漁村地域における2型糖尿病患者の療養行動を明らかにし、主体的な療養行動の継続を目指したセルフレギュレーション（以下、SR）に基づく支援プログラムを作成すること、支援プログラムの実践によりその効果を明らかにすることである。1.対象：成人期以降の2型糖尿病患者 2.研究デザイン：準実験研究 3. 調査内容と尺度 (1）患者特性：基本属性、療養状況など (2)自己管理状況：糖尿病の知識（糖尿病治療手引きより作成）、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、生理学的データ（BMI、HbA1c）(3)自己効力感：慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度 (4)SR過程：SR評価基準 5)データ収集方法：介入前、介入3か月後に質問紙調査を行い、面談や電話による介入時にSR状況を聴取した。両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識（p=0.001)、糖尿病自己管理下位項目（フットケア等）（p=0.048）が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった(p=0.080)。糖尿病専門職の少ない農漁村地域において、患者自身が療養行動をコントロールする過程を支援するSRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理するための実践的知識の獲得を促進し、行動変容とその継続へ肯定的な反応をもたらしており、その有効性が確認できた。
3. 農漁村地域におけるセルフレギュレーションに基づく介入後悔ーセルフレギュレーションの未達成要因の分析から -	ー	平成27年8月	第10回日本ルーラル・ナーシング学会 口演発表	2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション（SR）に基づく支援プログラムを実践し、SR過程が達成できなかった要因を明らかにすることを目的に成人期以降の2型糖尿病患者5名を対象とした。BanduraのSR過程をもとに評価基準を作成し対象者の発言と照合し質的に分析した。面接回数は計７回であった。各過程の発言は目標の進度については、友人と会っている時は過食する、忙しくて目標を守れない、我慢の反動で過食する、など。規則性は、農繁期は忙しいから間食しないが農閑期は過食する、ボランティア・親の介護・農作業で忙しい、など。療養行動を実践する価値については、間食が悪いのはわかっているが止められない、友人にダイエットをしていると話すと笑われるから断れない、など。行動の原因帰属については、友人といると断れない、農作業や孫の世話で忙しい、仕事が忙しい、など。自己反応については、計画はするものの行動が伴わないから困る、実行できたりできなかったりと落ち着かない、実行しなくてはと思いながらできなかった、などであった。3世代家族における女性は、近隣の人々との付き合い、農作業や介護の負担などから自己管理の優先度が低くなり自己管理の帰属を自分と考えることには困難が伴い、生活上の価値を自身の療養行動よりも人間関係の維持に置いていた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.2型糖尿病に対するセルフレギュレーションに基づく介入効果－糖尿病専門職の少ない地域における3か月間の面談結果の分析―	―	平成27年9月	第20回日本糖尿病看護・教育学会 口演発表	2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、SR過程が達成できた要因を明らかにすることを目的に成人期以降の2型糖尿病患者14名を対象とした。BanduraのSR過程をもとに評価基準を作成し対象者の発言と照合し質的に分析した。面接回数は計７回であった。各過程でも発言は、食事はカロリーを減らす調理法に変えた、食事量を抑えた、野菜を増やした、など。運動は遠回りして歩数を増やした、足の調子により歩行時間を変えた、正月休みも歩いたなど。自己判断の過程は、歩行により血糖値が下がり、運動により体重が落ち、友人から体重減少を賞賛された、歩数の増加に達成感をもち、目標に向けた実施が励みになり、生活習慣が問題だから自分で努力する、など。最終の自己反応は、療養行動を継続する、元の生活に戻らないようにする、療養行動に自信がついた、などであり、最終の過程では、療養行動を変えたことで体重が減量し、HbA1c値も改善したので今後も努力する、といった肯定的反応を示す発言が多かった。SRの過程を支援することにより、SRのセルフモニタリングの段階で自分の行動を振り返り、行動を継続し、体重とHbA1c値の改善がみられた者が多かった。その結果、目標に向けた行動の価値を見出し、療養行動を自分のこととして考え始めた。そこで認知変容が生じ、行動変容を引き起こしたと考えられた。
5.2型糖尿病に対するセルフレギュレーションに基づく介入効果－専門職の少ない地域における自己管理－	―	平成27年12月	第35回日本看護科学学会 口演発表	本研究の目的は、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実践し、その効果を明らかにすることであった。データは介入前、介入3か月後に糖尿病の知識（糖尿病治療手引きより作成）、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、自己効力感、慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度を用いて調査した。生理学的データは診療録、目標実行度はセルフモニタリングノートから収集した。対象者の概要は、介入群19名（年齢59.8±6.1歳）、対照群10名（年齢64.3±3.9歳）であった。介入前の両群間には年齢(p=0.048)を除き有意差はなかった。支援プログラムの効果として、両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識（p=0.001)、糖尿病自己管理下位項目（足の観察と清潔を保つ、規則正しい生活）（p=0.048）が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった(p=0.080)。SRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理に関する実践的知識の獲得を促進していた。その結果、食事摂取量を減らし、足の清潔と生活を整え、糖尿病の自己管理の基本的な療養行動に影響していた。合併症を防止し、患者のQOLを維持するための教育的支援の質を担保する教育方法が示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. Intervention effect based on self-regulation to promote the continuation of self-care behavior of patients with type-2 diabetes mellitus （２型糖尿病患者の療養行動の継続を促すセルフレギュレーションに基づく介入効果）	―	平成28年3月	19th EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) (Poster)	The purpose of this study was to clarify the self-care behaviors offered to type 2 diabetes patients in rural areas with an insufficient number of diabetes specialists, to create a support program based on self-regulation that aimed at continuing self-care behaviors, and to clarify the effect by implementing the support program. 1. Subjects: Adult patients with type 2 diabetes. 2. Study Design: Quasi-experimental design 3. Data Collection Methods and Outcome Measures 1) Patient Characteristics: medical treatment situation, etc. 2) self-care：Self-care knowledge of diabetes, Brief-type self-administered diet history questionnaire, Scale of diabetes self-care behaviors, Cognitive behavioral self-monitoring scale, and physiological data (BMI, HbA1c) 3) self-efficacy Questionnaire was answered before intervention and 3 months after intervention. The difference of change regarding self-care in both groups before and after intervention showed that the knowledge (p=0.001), Diabetes self-care behaviors subscale(foot care) (p=0.048) of the intervention group increased significantly, and the calorie intake showed a tendency to decrease (p=0.080). This programs supported the process of controlling self-care behaviors by patients themselves in rural areas with an insufficient number of diabetes specialists are significant in acquiring and managing concrete knowledge for patients in order to understand the condition of the disease and to identify the problems in their daily lives. Nariko Chuman 本研究の目的は糖尿病専門職の少ない農漁村地域における2型糖尿病患者の療養行動を明らかにし、主体的な療養行動の継続を目指したセルフレギュレーション（以下、SR）に基づく支援プログラムを作成すること、支援プログラムの実践によりその効果を明らかにすることである。1.対象：成人期以降の2型糖尿病患者 2.研究デザイン：準実験研究 3. 調査内容と尺度 (1)患者特性：基本属性、療養状況など (2)自己管理状況：糖尿病の知識（糖尿病治療手引きより作成）、簡易的自記式食事歴法質問表、歩行数、目標達成度、糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、生理学的データ（BMI、HbA1c）(3)自己効力感：慢性疾患患者の健康行動に関するセルフエフィカシー尺度 (4)SR過程：SR評価基準 5)データ収集方法：介入前、介入3か月後に質問紙調査を行い、面談や電話による介入時にSR状況を聴取した。両群の自己管理に関する介入前と終了後の変化量は、介入群の知識（p=0.001）、糖尿病自己管理下位項目（フットケア等）（p=0.048）が有意に高まり、摂取カロリーは減少傾向にあった(p=0.080)。糖尿病専門職の少ない農漁村地域において、患者自身が療養行動をコントロールする過程を支援するSRを基盤にした支援プログラムは、自分の病状や療養行動の問題点を評価するための一般的な知識や生活管理するための実践的知識の獲得を促進し、行動変容とその継続へ肯定的な反応をもたらしており、その有効性が確認できた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.Changes in Eating Behavior of patients with Type 2 Diabetes Mellitus – Comparison based on Degree of Achievement of Self-Regulation in Rural areas- 農漁村地域における食事行動の変容－セルフレギュレーション過程の達成別による比較－	単著	平成29年11月	The 5th International Nursing　Reserch Conference (第5回世界看護科学学会)	**Objectives**: This study was conducted for the purpose of implementing a support program based on self-regulation (SR) targeted at type 2 diabetes patients residing in rural areas, and to identify differences in eating behavior between those patients who were able to successfully achieve SR and those who were not. **Methods:** 1) Subjects: Nineteen type 2 diabetes patients of adult　2) Intervention: A support program based on SR was developed and the program was used to provide intervention through SR over the course of 3 months. 3) Analysis: Analysis consisted of a questionnaire survey (consisting of a self-administered nutrition survey) and interviews relating to SR. **Results:** Fourteen of the patients were able to have successfully achieved SR (achieved group ; AG) while 5 patients were not (unachieved group ; NAG).　Patients of the NAG were observed to have eating habits exhibiting higher levels of energy intake (1,765 vs 2,300Kcal), sweets intake (50 vs 87g) and fruit intake (65 vs 151g) than in the AG prior to intervention.　Energy intake (1,765 vs 1,714Kcal) in the NAG following intervention was nearly the same as that of the AG prior to intervention, while sweets (49 vs 63g) and fruit intake (96 vs 97g) levels exceeded those of the AG prior to intervention. **Conclusion:** The findings of this study indicated the difficulty in encouraging diabetes patients with a tendency towards overeating to change their eating behavior.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				【目的】農漁村地域に在住する2型糖尿病患者に対し、セルフレギュレーション(SR)に基づく支援プログラムを実施し、SR過程が達成できた者と達成できなかった者の食事行動に関する相違点を明らかにする。【方法】 1）対象：成人期以降の2型糖尿病患者19名。 2)介入方法：SRに基づく支援プログラムを作成し、3か月間にわたりSRに働きかける介入を行った. 3)分析：アンケート調査（自記式栄養調査，糖尿病自己管理行動尺度、認知行動的セルフモニタリング尺度、自己効力感尺度），生理学的データ（BMI、HbA1c値），SRに関するインタビューを基に分析した. 【結果】 SR過程が達成できた者は14名（達成群），達成できなかった者は5名（未達成群）であった. 介入前の未達成群の摂取エネルギー量，菓子類，果物の摂取は達成群より多く摂る習慣がみられた. 未達成群の介入後の摂取エネルギー量は，達成群の介入前とほぼ変わらず，菓子類，果物類は達成群の介入前を上回っていた，両群において，介入前のベースラインおよび介入前後の変化量の有意差はなかった. 農漁村地域では近隣との密着性が高く，付き合いを優先し，会食の誘いがあれば断れない傾向にあった. 【考察】 過食する傾向にある糖尿病患者の食事行動を変容させることの困難さが示された.
8. Development and Utilization of an Electronic Chart Training System for Nursing Process Education 看護過程演習における教育用電子カルテ導入による効果と有用性	共著	平成29年11月	The 5th International Nursing　Reserch Conference（第5回世界看護科学学会）	**Objectives**: The present study aimed to develop the electronic chart training system to foster students' intellectual abilities during nursing process exercises.**Methods**: We eveloped the electronic chart training system using Excel VBA, a programming language that is used to develop software.**Results:** The electronic chart training system developed in the present study was found to be highly effective, and it slightly surpassed the effectiveness of the actual electronic chart system used in hospitals. Additionally, the new system covered almost all functions of the electronic chart system that is used currently.**Conclusion:** It is apparent that, during nursing education, students' thinking skills improved by using the new electronic chart training system. We sincerely hope that this system will be used widely in nursing colleges. Terutaka Marukami ，Yumiko Seyama ，Nariko Chuman

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				目的:本研究は、看護過程演習中に学生の看護過程展開能力を育成するための教育用の電子カルテのシステムを開発することを目的とした。方法:ソフトウェアを開発するためのプログラミング言語であるExcel VBAを用いて本システムを開発した。本システムは、現在使用されている電子カルテシステムのほとんどすべての機能をカバーしている。結論:看護教育では、新しい電子カルテシステムを作成し、学生の演習で活用できた。 共著者:丸上輝剛、瀬山由美子、中馬成子
9.看護過程演習における社会人基礎力の変化と学習効果	共著	平成30年3月	第28回日本医学看護学教育学会学術集会	【目的】演習用電子カルテを活用した看護課程演習におけるグループワークの活用による社会人基礎力の変化と看護過程の教育効果を明らかにする 【方法】対象：看護系大学2 年次配当科目の看護過程演習受講生79 名。調査方法：無記名自記式質問紙調査。看護過程演習全15 回のうち看護過程の情報収集終了時 (第1 回調査)と全講義終了時(第2 回調査)に調査した。調査内容：社会人基礎力尺度（北島ら，2011)36 項目、主体的な学修態度尺度9 項目(畑野，2014)、自作の電子カルテ操作の理解10 項目、自作の看護過程の理解24項目(情報収集12 項目、分析～看護計画12 項目)。分析方法：SPSS Ver.25 を用い記述統計量、Wilcoxon 符号付順位検定、Spearman の相関係数を算出した。 【結果】第1 回の回収25 名、回収率31.6%、第2 回の回収20 名、回収率25.3%、そのうち連結不可能匿名化により第1 回と第2 回の照合が可能であった12 名を分析対象とした。社会人基礎力は第1 回(中央値135.5)と第2 回(中央値154.0)の間に有意差があることが示された。また社会人基礎力と看護過程の理解の相関係数は第1 回0.82、第2 回0.87 を示し有意な正の相関を認めた。 【考察】看護過程演習の前後比較において社会人基礎力が伸長されることが明らかとなった。また、社会人基礎力を伸長させることにより看護過程の理解も促進されることが推察された。 共著者：北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子、中馬成子

教　育　研　究　業　績　書

平成　30 年　3 月 31日

氏名　辻下　守弘

研究分野	研究内容のキーワード
外科系臨床医学	理学療法学、運動器リハビリテーション学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 学生による授業評価	平成21年9月	甲南女子大学において、全教員を対象に授業科目ごとに学生による授業評価を行った。 質問内容「あなたはこの授業を受講して総合的に満足していますか?」 [理学療法概論]　5点満点で4.3点 [内部障害系運動療法学]　5点満点で4.8点 [脳血管障害理学療法学]　5点満点で4.3点 [理学療法行動科学]　5点満点で4.1点
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 奈良学園大学社会連携センター長	平成28年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学社会連携センター長として、大学と地域社会との連携をスムーズにするためのコーディネーターとしての役割を果たした。具体的には、大学が立地する市町村との連携事業である公開講座の企画運営、大学シーズと地域ニーズとのマッチング、産官学連携による共同研究の推進と実施などに関して実施責任者としての活動を行った。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格、免許 (1)　理学療法士免許（厚生労働省）	昭和60年5月	国家資格免許である理学療法士免許を取得(第13729号)
(2)　認定健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成13年 4月24日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格を取得　(第246号)
(3)　専門健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成18年 2月2日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格の習得から5年間が経過し、昇格審査に合格して専門健康心理士資格を取得　(第246号)
(4)　専門理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成18年 2月2日	公益社団法人日本理学療法士協会から脳卒中(第3-102号)、運動器(第3-562号) 、内部障害理学療法(第4-323号)の3分野に対する専門理学療法士の資格を取得
(5)　認定理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成18年 2月2日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経(第2-481号)、運動器(第7-79号)、代謝(第13-25号)の3領域に対する認定理学療法士の資格を取得
(6) 専門理学療法士資格更新（日本理学療法士協会）	平成29年 4月1日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経(2017S-02-000033) と運動器 (2017S-03-000043) の2分野に対する専門理学療法士資格を更新認定を取得

事項	年月日	概　　要
2　特許等 (1)　特許申請中 「リハビリテーション用用具」	平成12年3月	本発明は、身体の動作機能を正常に発揮し得ない障害者や高齢者等に当該機能の回復と発現を容易にならしめるためのリハビリテーションに用いられる器具およびその利用プログラムに関するものである。この発明用具は、リハビリテーション医療や健康増進の場面において、音楽を利用した運動療法に使用する目的で開発された。内容としては、複数本の棒を結合させ枠を形成した構造物と片端に固着用部を持つ可撓性アームを備えた複数個の楽器からなり、該楽器を前記構造物の任意の位置、方向に取付けてなるリハビリテーション用用具である。 出願番号　特願2000-114436
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)　平成16年度福山市運動普及推進事業調査研究および「健康ふくやま21」さわやか運動教室事業への参加	平成16年4月 ～ 現在に至る	福山市では、「健康ふくやま21」の具体的活動として、福山市民の運動習慣を増進することを目的とした運動普及推進事業を展開している。平成16年度からは、「さわやか運動教室」を福山市内の小学校区単位で開催している。事業内容としては、小学校体育館を使用して、運動の必要性についての啓発と具体的な運動方法としてウォーキングの基本と実技指導を行っている。また、各小学校区から10名の希望者を集め、より具体的な運動習慣の形成とそれによる効果を検証する疫学研究も同時進行させている。福山市内の成人では、その77%が運動不足を感じており、本事業によりその割合を50%までに抑えることを目標にしている。事前にアンケート調査を実施し、その結果に基づいて健康心理学の知識と各種技法を用いた介入により、目標を効果的に達成するよう取り組んでいる。
(2)　厚生労働省理学療法士・作業療法士国家試験委員会委員としての活動	平成18年4月 ～ 平成27年4月	厚生労働省の理学療法士作業療法士国家試験委員会の委員として国家試験作成に従事した。
(3)　重度認知症高齢者の感情反応と行動を手がかりにした基本的生活支援技術の開発	平成18年度 ～ 平成20年度 科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究B）	重度認知症高齢者の基本的な日常生活支援技術の開発を行い、その教育・研修プログラム開発により重度認知症高齢者のQOLの向上を図ることが研究の目的である。研究の結果、①認知症高齢者へのケア場面のビデオテープ分析から固有の感情反応・行動のレベルの存在を明らかにし、その尺度を用いてケアの質が測定可能である。②重度認知症高齢者に対する小集団回想法の有効性を明らかにした。③手織りプログラムの生活活性化に与える効果を明らかにした。④重度認知症高齢者とのコミュニケーションの具体的方法を明らかにした。以上の成果からコミュニケーションの糸口を探索する方法、重度認知症高齢者のサインを読解する方法等の具体的な援助技術研修プログラムを作成し、研修を実施し、概ね良好との評価を得た。 研究代表者：臼井キミカ 共同研究者：上西洋子、辻下守弘、佐瀬美恵子、白井みどり、佐々木八千代、兼田美代、津村智恵子、後藤由美子、山本美輪、山本裕子、川井太加子、鷹居樹八子、柴田幸子 担当部分：主に③の手織りプログラムの生活活性化に与える効果について、近赤外線分光法による脳イメージングを用いた高齢者の脳機能に及ぼす影響に関する研究を担当した。

事項	年月日	概　　要
(4)　性差と加齢を考慮した労働者の睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの開発	平成24年度 ～ 平成26年度 科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究C）	本研究の目的は、労働者の睡眠の質における性差と加齢の影響を明確にし、性別と加齢に応じた睡眠の質改善のプログラムを開発することである。研究対象者は中規模事業場で働く35歳以上の男女であった。研究期間中の健康診断時期に調査を実施した。1年目の調査結果では、男性の睡眠の質には運動習慣、女性の睡眠の質には教育歴や喫煙状況が関連していた。2年目には、23項目の睡眠チェックリストを作成した。3年目には、睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの効果評価を行った結果、介入群において3項目に改善が認められた。今後は産業保健スタッフが睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する必要がある。 研究代表者：廣川空美 共同研究者：藤井保人、谷口敏代、辻下守弘 担当部分：男女の睡眠の質に関する睡眠チェックリストの作成と睡眠改善指導ビデオの作成および運動習慣が睡眠に及ぼす影響に関する研究を担当した。
(5)　介護老人保健施設でのパソコンを用いた介護職員指導に関する研究－行動分析学の枠組みによる移乗介助指導－	平成26年度 ～ 平成28年度 科学研究費補助金研究成果中間報告書（挑戦的萌芽研究）	介護老人保健施設において良質なサービスを提供することは入所高齢者の生活の質を高めるだけでなく、早期の在宅復帰を促す重要な事項である。本研究では、パソコンを用いたeラーニングシステムを構築し、職場や家庭で場所を選ばずに介護職員の移乗介助指導を可能とすることとその効果について検証することである。1年目では、介護老人施設おける介護指導の実態を調査し、移乗介助指導において職員間の達成度が異なることを明らかにした。現在2年目の研究では、この結果に基づき行動分析学の枠組みを用いたeラーニング教材の作成を行っており、現場における検証を準備している。3年目ではこのシステムの効果を検証する。 研究代表者：小林和彦 共同研究者：辻下守弘 担当部分：介護老人保健施設での介護状況を調査するとともに移乗介助指導におけるeラーニングシステムの開発を担当した。3年目では、開発したシステムの検証も担当する予定である。
4　その他 (1)　京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程の博士論文審査委員	平成27年12月 ～ 現在に至る	京都市立美術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程において、美術作品をリハビリテーション医療に活かす研究を博士論文の課題としている学生に対して、リハビリテーション医療に携わる研究者として博士論文の審査を行っている。平成28年2月には第1回の博士論文報告会があり、発表論文への試問を実施し、博士論文審査委員会において論文への評価と今後の課題について報告を行った。

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 腰痛の理学療法	共著	平成20年5月	三輪書店	近年、医療のみならず産業面にも多大な経済負担を与え、また高齢社会到来でますます増加傾向中の腰痛は、国の財政や産業基盤をも脅かす問題となっている。このような現状を踏まえ、本書ではいまだ解決策が見出されたとはいえない「腰痛」について、その最前線で活躍する研究者および臨床家が近年明らかになった知見を中心に科学的根拠に基づいて解説した。 （編者：伊藤俊一、鶴見隆正　分担執筆者：関口美穂、内田賢一、白土修、矢吹省司、辻下守弘、甲田宗嗣、岡崎大資、他18名） 担当部分：第3章第7節「労働従事者における腰痛とその指導」 労働従事者に生じる職業性腰痛を定義し、その実態ついて職業別、作業姿勢別に整理した。職業性腰痛の発症リスク因子をこれまで報告されている文献をレビューしながらまとめた。リスク因子は身体・人間工学的因子と心理・社会的因子に分け、自験例も含めて解説を行った。特に、心理・社会的因子についてはタイプA行動という行動特性や日常苛立ち事というストレス源が腰痛発症リスク因子として重要なことを指摘した。さらに、職業性腰痛に対する理学療法として応用行動分析学と行動指向型段階的活動プログラムを紹介した。 （pp. 168～178、単著） 担当部分：第4章第4節「慢性腰痛に対する認知行動療法」腰痛における痛みの認知と痛みの行動について解説し、認知行動療法の重要性と意義について論述した。また、認知行動療法の基礎理論である応用行動分析学に基づいて慢性腰痛患者の腰痛発症メカニズムを解明した。さらに、慢性腰痛に対する認知行動療法を導入する上での評価と技法について詳細に解説し、その実際については症例を供覧した。 （pp. 234～244、共著）
筋電図バイオフィードバック療法	共著	平成22年6月	金芳堂	リハビリテーション医療における筋電図バイオフィードバック療法について基礎から臨床までを解説した。本全体の編集を担当した。 （監修：エリック・ペパー、編者：辻下守弘、中川　朋　分担執筆者：エリック・ペパー、中川　朋、甲田宗嗣、平山秀和、工藤弘行、井川英明、鳥谷部太、辻下守弘、他10名） 担当部分：第1章「バイオフィードバックとは何か」 バイオフィードバック療法の歴史からリハビリテーション医療における位置づけを解説した上で、筋電図バイオフィードバック療法の応用例や普及の状況、そしてリハビリテーション医療に導入する利点などを解説した。 （pp. 1～4、単著）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
バイオフィードバック入門	単著	平成23年12月	秀和システム	腰痛、頭痛などの痛み、失禁・便秘から老い、ADD、うつなどといったきわめて広い範囲の病を、薬を使わずに自己コントロールでなおす「バイオフィードバック」治療法について解説した。バイオフィードバックとは、心拍計などの医療器具を使って心拍数、血圧、呼吸数、皮膚温、筋緊張、脳波などをモニタリングし、病状や症状を初期段階で発見し、呼吸法や瞑想など適切な対応をする治療法である。本書では、バイオフィードバックの理論とその実践を基礎から解説し、頭痛や腰痛、排泄トラブル、パニック障害、うつ状態、さらには集中力向上やメンタルトレーニングの方法などを解説しています。
医療福祉学の道標	共著	平成24年3月	金芳堂	本書は、「健康と病気」という問題に社会科学の側面からアプローチした。健康は医学だけでは守ることができないため、学際科学的，統合的，総合的視野から，「医療福祉学」という新しい学問が必要となることを言及した。 (編者：星野政明、高内克彦、土田耕司　分担執筆者：秋山智久、天野博之、安藤詳子、石村由利子、辻下守弘、他43名) 担当部分：第8章B「身体障害者への医療福祉の実践と課題」 身体障害者の定義と法的根拠、その実態などを概説した上で、身体障害者および身体障害児に対する医療福祉サービスの現状と課題について論説した。 (pp.100～104、単著)
日常生活活動学・生活環境学	共著	平成24年9月	医学書院	本書は、「日常生活活動学」と「生活環境学」の二部構成である。「日常生活活動学」は、総論でADLの歴史、概念、評価などの基本事項を解説し、各論で疾患別の評価方法とADL指導を具体的に提示し、「生活環境学」では、概念や法的諸制度、住宅改修や生活支援機器について解説した。 (編者：鶴見隆正、隆島研吾　分担執筆者：秋若山佐一、林　克郎、辻下守弘、他25名) 担当部分：第1章第4節「ADLの運動学的分析」 運動学の基本事項を整理した上で、日常生活動作を運動学的に分析するための基礎を詳細に解説した。また、起き上がりや立ち上がりなどの動作に対する運動学的分析を具体例も上げながら論述した。 (pp.36～51、単著)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
脳卒中理学療法の理論と技術	共著	平成25年6月	メジカルビュー社	本書は、臨床の場で用いられる実践的な理学療法と、その基礎となる解剖学・生理学の知識をはじめ、病態生理の知識、理学療法評価の技術、運動処方および生活指導のための理論的背景と技術を解説した。 （編者：原　寛美、吉尾雅春　分担執筆者：渡辺雅彦、中村　元、辻下守弘、他22名） 担当部分：第Ⅴ章「理論と理学療法」の中の「バイオフィードバック療法」を担当した。 バイオフィードバック理論の基礎となる学習理論を解説した上で、バイオフィードバックが使う各種モダリティーや国内の代表的な機器について紹介した。また、脳卒中片麻痺患者に対するバイオフィードバックとニューロフィードバックについても論述した。 （pp. 445～456、単著）
生活支援の基礎理論	共著	平成27年4月	光生館	本書は、地域での生活を支援する介護福祉士として必要な基礎知識を，保健，心理，栄養，居住環境，家族支援などの関連分野から体系的に学習できるように解説している。 （編者：上之園佳子、谷口敏代、鈴木聖子、分担執筆者：本名靖、太田貞司、土室修、辻下守弘、他16名） 担当部分：第５章「介護福祉の基礎となる心理学」の中の「学習」を担当した。 学習の定義と介護福祉領域で必要となる重要事項を解説した上で、認知心理学的な考え方と行動分析学的な考え方に分けて各理論を具体例を入れながら解説した。 （pp. 98～102、単著）
痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は、看護現場で求められる痛みのケアについて、哲学・倫理学的理解と痛みの理論からはじまり、痛みの治療と看護ケアについて解説した上で、看護実践事例について検討されている。 （編者：守本とも子　分担執筆者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、辻下守弘、他15名） 担当部分：第Ⅱ部「痛みの理論」第５章「痛みの行動科学的理解」を担当した。 看護現場における痛みの生物医学的アプローチの問題点を指摘した上で、慢性的な痛みを行動科学的にアプローチすることの重要性について解説している。また、痛みの社会的強化により出現する痛み行動に対する理解と看護現場での具体的なケアの方法論について提案している。 （pp. 34～41、単著）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
疼痛を有する対象者の包括的理学療法 ［筆頭論文］ （査読付）	共著	平成20年2月	理学療法ジャーナル第42巻 平成20年2月 pp. 113～121	疼痛を有する対象に対して身体的アプローチだけでなく心理・社会的アプローチも含めた包括的理学療法を行うことの意義を論述した。まず、慢性痛の多面的理解について解説し、疼痛とパーソナル・コントロール、痛み行動と随伴性といった鍵概念を解説した上で、理学療法士が果たす役割を論述した。この中では特に応用行動分析学を用いた慢性疼痛のアプローチを紹介した。また、応用行動分析学に基づいた包括的理学療法の方法論を解説した上で、具体的なアプローチについては事例を供覧しながら説明を加えた。(9頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、鶴見隆正、川村博文) 担当部分：症例への介入および論文の構成と論文の大部分の執筆を担当した。
運動行動変容段階および運動態度が女性の更年期症状に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成20年3月	甲南女子大学研究紀要第1号 平成20年3月 pp. 53～60	閉経前後女性事務員335名(平均年齢51.0±8.2歳)に対してアンケート調査を行い、運動行動変容段階(運動段階)および運動態度が更年期障害に及ぼす影響を検討した。年齢、体格、月経状態、更年期症状、運動段階、運動態度、うつ傾向の調査結果より、運動段階と運動態度が良好であれば更年期症状は軽症であり、運動の習慣化は更年期症状の発症を抑制する可能性が示唆された。また、閉経前ではうつ傾向が、閉経後では運動態度が更年期症状を強めることが判明し、多重ロジスティック回帰分析でも更年期症状を発症させる有意なリスク要因として運動態度の不良とうつ傾向ありが挙げられた。更年期症状の発症と重症化の予防には、運動段階を維持期にステップアップさせる介入や、うつ傾向の緩和と運動態度の改善を促すアプローチが必要と考えられた。(8頁) (分担執筆者：永田昌美、青田絵里、辻下守弘) 担当部分：調査票の作成と配布及び回収とデータの多変量解析を担当した。
高コレステロール血症の運動療法の効果とその阻害因子に関する検討 （査読付）	共著	平成20年3月	理学療法の臨床と研究第17号 平成20年3月 pp. 25～28	空腹時血清総コレステロール値が200mg/dl以上の運動習慣のない中年者40例を対象として、運動強度90%AT、運動頻度を週2回で、3ヵ月間、有酸素運動、柔軟性運動、筋力運動を組み合わせた運動を実施し、高コレステロール血症に対する運動療法の効果を検証した。また同時に、運動療法の阻害因子についても検討した。血清総コレステロール値は、初診時に比較して3ヵ月後には有意な減少が認められた。運動療法の阻害因子としては、高血糖のみに有意な関連性が認められた。以上の結果により、高コレステロール血症に対する運動療法の有効性が認められたが、高血糖を合併している場合は運動療法の効果を得がたい可能性が考えられた。(4頁) (分担執筆者：仁田靖彦、辻下守弘、藤村宜史、沼田義弘、丸橋暉) 担当部分：運動負荷試験の実施と統計処理及び論文執筆の一部を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
理学療法を取り巻く「認知」の最前線	単著	平成20年10月	理学療法ジャーナル 第42巻第9号 平成20年10月 pp. 791～798 （査読あり）	脳科学が進歩し、理学療法士も「認知」という言葉をよく使うようになったが、「認知」という言葉の定義があいまいなまま使われていることも多くなっている。本論文では、認知とは何かを理学療法学の立場から定義した上で、認知領域、認知障害、認知症、認知リハビリテーション、認知療法と認知行動療法、そして認知運動療法などリハビリテーション領域で認知とつく用語を論説した。最後には、理学療法学において認知および認知的アプローチが抱える課題や方向性について論述した。(8頁)
骨関節疾患の理学療法とバイオメカニク日常生活動作、応用動作を中心に	共著	平成20年11月	理学療法ジャーナル 第42巻第9号 平成20年10月 pp. 821～827 （査読あり）	本研究の目的は、バイオメカニクス研究に基づいて骨関節疾患に対する理学療法を検討することである。日常生活動作や応用動作におけるバイオメカニクスについて、2例の健常者を対象として炊事動作中の膝関節角度をホルター電気角度計を持ちて測定した。その結果、2例であっても動作中の膝関節角度は異なり、動作のバイオメカニクスには個人差のあることがわかった。また、高齢者を対象として、椅子からの立ち上がり動作を三次元動作解析装置で分析した結果、転倒経験によって身体重心の移動に有意な違いのあることを明らかにした。(7頁) (分担執筆者：甲田宗嗣、辻下守弘、川村博文、鶴見隆正、新小田幸一、山田直樹) 担当部分：高齢者を対象とした三次元動作解析装置での解析を担当した。
理学療法士のための行動分析学入門	単著	平成20年12月	理学療法兵庫 第14号 平成20年12月 pp. 1～7	本論文では、理学療法士に必要な行動分析学の知識と技法について論述した。まず、行動分析学の理論について、スキナーが提唱した随伴性という考え方を中心に解説し、理学療法における応用可能性を言及した。さらに、臨床場面で遭遇する様々な問題を呈した患者に対する具体的な行動分析学的アプローチの有効性について、事例報告を通して検証した。最後に、行動分析学に基づく人間観についてエコロジカルな視点から論述した。(7頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
座位作業を主体とした女性従事員の職業性腰痛と心理・社会的要因および生活習慣との関連性について （査読付）	共著	平成21年3月	甲南女子大学研究紀要 （看護学・リハビリテーション学編） 第2号 平成21年3月 pp.89～97	本研究の目的は、座位作業を主体とする女性従事員の職業性腰痛と生活習慣および心理・社会的なストレスとの関連を明らかにすることである。対象は、某公共遊技場にて座位作業を主体とした労務に従事する女性1326名であり、最終的には1324名(採択率99.8%)のデータを分析に用いた。多変量解析の結果、オッズ比が有意であった項目は、BMIの「肥満体重」がオッズ比1.43、頸肩腕症状の「陽性」がオッズ比6.46、日常苛立ち事の「陽性」がオッズ比1.63、そして不健康な生活習慣の「(1)不規則な生活」がオッズ比1.51、「(5)飲酒習慣」がオッズ比1.34であり、これらの項目が腰痛と有意に関連していることがわかった。(9頁) （分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、 田辺暁人） 担当部分：調査票の作成から統計処理と論文作成の全般を担当した。
特別養護老人ホーム入所者における車いす座位の問題点に関する検討 （査読付）	共著	平成21年3月	甲南女子大学研究紀要 （看護学・リハビリテーション学編） 第2号 平成21年3月 pp.99～106	高齢者が長時間快適に座るために必要な車いすの機能を検討する目的で、車いす座位に問題のある特別養護老人ホーム入所者と30代女性を対象に、車いす着座中の座面および背もたれの圧力分布測定を行った。高齢者では座面において坐骨と仙尾骨に高圧力部が観察され、背もたれにおいては接触面積が狭く、胸椎、肩甲骨、腰椎、骨盤のいずれかに限局して高圧力部が観察され、高齢者特有の円背、骨盤後傾が圧力分布に大きく影響していることが分かった。これらの結果から、高齢者の車いすを検討する際には、座面における圧力分布を均等にすること、および背もたれの接触面積を広くして体幹をサポートすることに配慮する必要性が示唆された。(8頁) （分担執筆者：永田昌美、辻下守弘、 甲田宗嗣、 吉田正樹） 担当部分：高齢者の背部座圧分布の計測とデータ処理、論文作成の一部を担当した。
リハビリテーション医療現場におけるBFの応用可能性について （査読付）	単著	平成21年10月	バイオフィードバック研究 第36巻第2号 平成21年10月 pp.173～177	リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック療法の意義や位置づけを論じた上で、バイオフィードバック療法の使用実態について検討した。また、一般的に使われている筋電図バイオフィードバック療法の神経疾患や整形外科疾患に対する適用と問題点、そして最近注目されている平衡機能障害に対するバイオフィードバック療法の方法論と効果について検討した。最後に、センサーとアンプの技術革新により可能となったマルチチャンネルバイオフィードバック療法についての可能性を論じた。(5頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
モチベーションを高める行動分析学的アプローチについて	単著	平成21年12月	理学療法兵庫 第15号 平成21年12月 pp.18～24	本論文では、理学療法士の臨床において避けることのできない患者のモチベーションに関して考察した。まず、行動分析学の立場から理学療法臨床におけるモチベーションの機能を検討した上で、患者のモチベーションを高めるため具体的な行動分析学的アプローチを提示し、実際に介入した事例の分析を通して、行動分析学的アプローチの有効性についても論述した。最後に、理学療法臨床における行動分析学的アプローチは、エコロジカル（生態学的）アプローチつまり環境調整による行動変容介入であることに言及して、今後の理学療法臨床への応用可能性を考察した。(7頁)
女性公共遊技場従事員の腰痛発症における心理・社会的要因および生活習慣に関する縦断的研究 （査読付）	共著	平成22年3月	甲南女子大学研究紀要 （看護学・リハビリテーション学編） 第4号 平成22年3月 pp.59～67	本研究は、女性従事員の腰痛発症における心理社会的要因および生活習慣に関する縦断研究である。対象は、某公共遊技場に勤務する女性従事員を対象として、1997年（n=1326名、以下基本調査）と2001年（n=910名、以下追跡調査）に腰痛と頸肩痛および生活習慣に関する質問紙調査を実施した。研究の結果、頸肩痛の粗オッズ比が1.94（95%CI 1.24-3.04）、調整オッズ比が1.82（95%CI 1.21-3.83）、日常いらだち事の粗オッズ比が2.39（95%CI 1.22-4.67）、調整オッズ比が2.13（95%CI 1.13-4.32）、コーヒー等の摂取習慣の粗オッズ比が0.59（95%CI 0.36-0.94）、調整オッズ比が0.64（95%CI 0.42-0.96）であった。以上の結果から頸肩腕痛や日常いらだち事の存在およびコーヒー等の摂取習慣が腰痛発症のリスク要因となることがわかった。(9頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣) 担当部分：調査票の作成から統計処理および論文作成の全般を担当した。
Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （夜間在宅における健常老年者の生活満足度と交感神経バランスとの関連性） （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 pp.1068-1072	本研究の目的は、老年者における夜間在宅での生活満足度が交感神経バランスと関連するかを検討することであった。健常老年者39名を対象として、アクティブトレーサーにより72時間の心拍変動と身体活動量を計測した。測定の結果、生活満足度と交感神経バランスとの間には-0.47の有意な相関関係を認めた。(5頁) (分担執筆者：吉野公三、守本とも子、板垣孝弘、池谷茂隆、永田昌美、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Effects of a hardness discrimination task in failed back surgery syndrome with severe low back pain and disturbed body image: case study （身体像の認知課題作業が背部の術後症候群による重度な腰痛症に対する影響：事例研究） （査読付）	共著	平成24年10月	Journal of Novel Physiotherapies 2012 Open Access	本研究では背部の術後に重度な腰痛を発症した20歳の女性に対して認知課題による疼痛緩和のアプローチを行った。初期の疼痛はNRSで10と最大の痛みを訴えていた。また、身体像の認知に障害を持っていた。介入として1日20分、週6日の認知課題のトレーニングを4週間にわたり行ったところ、痛みがNRSで5と半分に緩和され、歩行や日常生活動作能力も改善していた。(6頁) (分担執筆者：西上智彦、奥埜裕之、中野英樹、大村裕、清水ミッシェルアイズマン、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：症例の理学的評価と訓練および論文の結果部分を担当した。
運動器疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り通所リハビリテーション利用者の心理・社会的側面に着目して （査読付）	共著	平成26年4月	理学療法 第31巻第4号 平成26年4月 pp.376～382	1.運動器疾患を有する高齢者の生活機能の改善には、高齢者の身体活動の開始と継続に関する要因を理解する必要があり、心理・社会的要因が大きく関連している。2.どのような治療を選択するにしても、高齢者個々の心理・社会的要因を認識し、オーダーメイドの治療を実施することが必要である。3.高齢者の心理・社会的要因を認識するための第一歩は、対象者とのコミュニケーションである。単なるコミュニケーション技法を用いるのではなく、対象者を支えている信念や認識に触れる関わり方がオーダーメイドの治療を実施できた。(7頁) (分担執筆者：大門恭平、米田大人、辻下守弘、川村博文) 担当部分：高齢者の運動機能に関する要因の分析と論文の一部執筆を担当した。
Central neural mechanisms of interindividual difference in discomfort during sensorimotor incongruence in healthy volunteers: an experimental study （健康対象者における感覚運動不一致による不快感が個人差に関する中枢神経メカニズムについて：実験的研究） （査読付）	共著	平成26年10月	Rheumatology 2014 Open Access	本研究の目的は、感覚運動認知の不一致に関する個人差に関して、その中枢神経メカニズムを明らかにすることである。対象は、18名の健常若年女性であり、感覚運動認知の不一致課題を独自に作成し、その認知課題中における脳波を分析し、脳内メカニズムをLORETA法によって解析した。その結果、不一致の個人差は前部帯状回および後部帯状回の活動状況の違いと一致していることがわかった。　(8頁) (分担執筆者：分担執筆者：西上智彦、中野英樹、大住道弘、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
バイオフィードバックの発展に向けての日本バイオフィードバック学会企画委員会からのアンケート結果報告 （査読付）	共著	平成26年10月	バイオフィードバック研究 第41巻第2号 平成26年10月 pp.95～102	2012年の第40回学術総合においてアンケート調査を実施した。学術総会に参加した25人の学会員から回答を得た。その結果、1.医学・工学・心理学の研究面の連携に関して学会の存在意義を認める回答が多かった。2.学会に望むことについては、次世代を担う若い研究者・学生が積極的に参加できる環境づくりを指摘する意見が目立った。3.会員以外には、バイオフィードバックについて正しく分かりやすく理解してもらう情報提供の必要性を訴える意見が多かった。以上の結果に基づいて今後学会の方向性に関する提案を行った。(8頁) (分担執筆者：中尾睦宏、大須賀美恵子、廣田昭久、佐久間春夫、志和資朗、竹林直紀、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の作成からデータ整理と統計分析および考察の一部の執筆を担当した。
高齢者に対する視覚誘導性到達課題を用いた音楽運動療法の開発とその効果に関する研[筆頭論文] （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究 第3号 平成27年3月 pp.27～32	本研究では、視覚誘導性到達運動課題を用いた音楽運動療法を開発することとこれが高齢者のバランス能力に及ぼす影響を明らかにすることであった。対象は70歳以上の健常高齢者16名であり、実施群8名と対照群8名の2群に割り付けた。評価は機能的バランス尺度（BBS)、TUG、FRTおよび静的重心動揺計と動的姿勢制御検査とした。5回の練習後、BBS、FRTそして動的姿勢制御検査の有意な改善を認めた。(6頁) (分担執筆者：辻下守弘、川村博文、永田昌美、前田吉樹) 担当部分：研究全般を実施し論文全体の執筆を担当した。
Kinectセンサーを使った仮想環境が高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年4月	バイオフィードバック研究 第42巻第1号 平成27年4月 pp.57～62	Microsoft社により開発されたKinectセンサーを使った風船割りゲーム「キネリハシステム」を使って高齢者にゲームを定期的に行ってもらい、仮想環境が高齢者の運動機能にどのように影響を及ぼすかを検討した。デイケアに週2回以上通う高齢者23名に対しキネリハシステムを週2回以上4週間実施した。この前後に(1)10m歩行(2)TUG(3)5StepTestを測定し4週間完遂した者について結果を比較した。その結果、継続してゲームを行い施行期間の最後まで継続してやり遂げ(1)～(3)を測定できた者は7名だった。ゲーム後の結果が(2)と(3)において有意に向上していた($p<0.05$)。(6頁) (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
介助者による介助の経時的変化に基づいた介助評価方法の検討－認知症を有する高齢障者への介護職員による移乗介助場面の行動論的分析－ （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学 第30巻第6号 平成27年12月 pp. 933-937	車椅子からベッドへの移乗課題を用い、介助を基準に被介助者の遂行レベルを査定する評価法の妥当性を行動論の視点から検討した。対象は施設介護職員および入所中の認知症を有する高齢障害者とした。介助者の4段階の介助系列をもとに6段階の遂行レベルを設定し、各単位行動が遂行されたときの介助を遂行機会ごとに図示し、介助の経時的変化を被介助者の遂行レベルの推移の視点から分析した。その結果、被介助者による遂行過程は単位行動ごとに異なった遂行レベルを推移しており，従来ADL評価法とは視点の異なる情報が得られた。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：症例の評価と介入指導および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
生体センシング技術を使った仮想現実によるゲームが高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学 第30巻第6号 平成27年10月 pp. 811-815	生体センシング技術を使ったゲームを高齢者に行わせ仮想現実を利用したゲームが高齢者の運動機能にどう影響を及ぼすかを予備的調査した。高齢者23名に対しゲームシステムを週2回以上4週間実施した。4週間実施前後の①10m歩行②TUG③5StepTestの3つのパフォーマンステストの結果及びゲームの測定機能を利用したゲームに対する平均反応速度とゲームの成功率について比較した。その結果、②と③及び平均反応速度・成功率に於いて施行後が施行前に比べ有意に向上していた。またゲーム完遂者に運動習慣があるものが有意に多かった。 (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の一部の執筆を担当した。
中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究 （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 平成28年3月 pp. 1-10	本研究では、パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員335名を対象として、肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに、その身体的、心理的、社会的な要因との関連性について検討した。症状なし群、肩こり単独群、腰痛単独群、そして両者重複群という4群間において各要因を比較したところ、分散分析により有意な主効果を認めたのは、年齢、運動態度、食行動、K6、そしてクッパーマン指数であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、肩こりと腰痛の両者重複と関連する要因は、低いBMI、高いK6スコア、そして高いクッパーマン指数であった。 (分担執筆者：辻下 守弘、永田 昌美、芝 寿実子、前田 吉樹、川村 博文、小貫 睦巳) 担当部分：データ収集から統計処理および論文執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
心身のストレスおよび作業量からみた体圧移動で座面が変化するERチェアの健常成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果から （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 平成28年3月 pp. 19-28	本研究は、高齢者用に開発したERチェアと通常の椅子を比較し、対象者の心身のストレスにどのような影響をもたらすかを検証することとした。被験者は、参加条件を満たした健常成人女性6名と高齢者8名の計14名である。研究デザインはクロスオーバー・デザインとし、被験者にはERチェアと通常の椅子の2種類の椅子に座った際に５つの課題を課した。分析の結果、主観的疲労感の全身倦怠感において、被験者全体の操作実施前後の平均値はERチェアが減少したが、通常の椅子は増加し、平均値の差の比較で統計的に有意な差が認められた(p=.04)。また、唾液アミラーゼ量において、高齢者の操作実施前後の平均値はERチェアがやや減少し、通常の椅子が増加して統計的に有意な差が認められたが(p=.04)、交互作用が認められた。 (分担執筆者：丸尾 智実、兼田 美代、臼井キミカ、辻下 守弘、速水 裕子) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の執筆を担当した。
骨盤臓器脱術後の便失禁症状に骨盤底筋の筋電図バイオフィードバック療法が奏効した症例 （査読付）	共著	平成28年4月	バイオフィードバック研究 第43巻第1号 平成28年4月 pp. 19-26	今回、骨盤底筋の選択的筋収縮が困難であった便失禁を有する症例に対して、骨盤底筋の筋放電を確認しながら筋収縮を確認し、筋収縮を調整する筋電図バイオフィードバック療法が症状の改善に有効であったので報告した。症例は、膀胱瘤により骨盤臓器脱術を受けた70歳の女性である。骨盤臓器脱の症状は手術により改善したが、運動時にガス程度の便失禁が4～5回以上認められた。評価および介入は、Thought Technology社製のMyotrac3を用い、骨盤底筋と腹筋を分離して筋収縮させることを目的として実施した。10セッション実施の結果、持続的収縮においては8セッションから骨盤底筋のみを収縮させることが可能となった。運動時の失禁頻度は6セッション時から減少した。 (分担執筆者：松谷 綾子、青田 絵里、西上智彦、辻下 守弘、服部 耕治、木村 俊夫) 担当部分：症例の評価と治療および論文の症例報告と考察の一部の執筆を担当した。
行動分析学の枠組みを用いたコンピューターシミュレーション教材による介護老人保健施設介護職員への介助-高齢障害者に対するベッドから車椅子への移乗介助指導効果の- （査読付）	共著	平成28年8月	行動療法研究 第42巻第2号 平成28年8月 pp. 201-213	本研究においては、行動分析学の視点から理論および介助の方法論を解説したパソコン上で作動する教材を開発し、介護職員3名に自己学習とセルフチェックを行ってもらい、介護老人保健施設入所者に対するベッドから車椅子への移乗介助技能への効果を、単一事例実験計画法を用いて検証した。その結果、3名とも適切な介助の頻度が増加(平均46.2%)し、彼らが日頃介助している入所者も、より少ない介助で移乗が行えるようになった。また、移乗介助指導の効果が同じ入所者の脱衣介助に反映されることも確認された。さらに、指導プログラムの内容や意義に関しても比較的良好な受け入れや評価が得られた。以上から、従来の指導方法によるデメリットを補完する役割を果たすことができ、本教材が介護職員指導における効果的な方法論として位置づけられる可能性が示唆された。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
疼痛に対する物理療法・運動療法	共著	平成28年8月	The Japan Journal of Rehabilitation Medicine 第53巻第8号 平成28年8月 pp.604-609	本論文では、疼痛に対する治療としての物理療法、運動療法について、有効性に関わる理論的な裏付けから臨床のエビデンスを交えて検討した。その結果、急性痛と慢性痛とでは、対応が異なり、急性痛には過度な不活動を避け、原因となる組織損傷の治療を下級的早期に進めることと、可能な限り疼痛を抑制し長期化を阻止することが重要であることが分かった。また、慢性痛では、感覚面に着目する以外に、情動面や認知面などの多面的、複合的な側面での特性の認識理解が不可欠であり、ADLやQOL向上を目的として、TENSなどの物理療法、運動療法、学際的集学的治療を導入することが重要であることがわかった。 (分担執筆者：川村博文、西上智彦、伊藤健一、大矢暢久、辻下守弘) 担当部分：文献収集と整理および論文の慢性疼痛に関する部分の執筆を担当した。
インタラクティブ・メトロノーム法の紹介とリハビリテーションへの応用可能性	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要 第5集 平成28年9月 pp.1-9	本論文では、運動・認知機能のリハビリテーションに欠けていた脳内時計と時間情報処理能力を高めるというコンセプトを導入した新しいトレーニング方法であるインタラクティブ・メトロノーム法（Interactive Metronome®：以下IMと略す）について、その歴史、原理と方法、トレーニングの手順、そして科学的根拠を概説した上で、リハビリテーションへの応用可能性について解説した。IMの利点は、リズム音に手と足の動きを同調させてタイミングをとるといった非常にシンプルなトレーニングであり、2歳程度の幼児から高齢者まで適用範囲が広く、生体への侵襲も全くないため、従来のリハビリテーションへ併用して使用可能なことである　ただし、現在の問題点は、科学的根拠を裏付けるIMの臨床研究が国際的にも不足していることやIMシステムが日本における医療機器の薬事承認を得てないことであった。
バーチャルリアリティ（VR）技術を用いた高齢者のリハビリテーションに関する文献的研究	単著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.75-81	コンピュータサイエンスの発展によってバーチャルリアリティ（VirtualReality：VR）技術が身近になった。一方で、わが国は急速なスピードで超高齢社会が進行し、要介護状態の高齢者が急増する中で、高齢者のリハビリテ-ションが注目されている。そこで、本論文では、VRの定義と特徴を解説した上で、主にWiiとKinectセンサーを用いた高齢者リハビリテーションへの応用に関する国内外の現状と課題を文献的に考察した。その結果、WiiとKinectセンサーを用いたトレーニングが高齢者の心身機能に及ぼす影響を明らかにした良質の無作為化比較対照試験（RCT）は少ないものの、高齢者の機能的なバランス能力を改善させる効果のあることが多くの論文で示唆されていた。VRを用いた高齢者のリハビリテーションには課題もあるが、より没入感の強いヘッドマウントディスプレイが普及することで、今後は高齢者リハビリテーションへの応用可能性が拡大すると考えられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
タイ王国の周産期ーチェンマイ大学看護学部の視察を通してー	共著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.179-185	タイ王国北部にあるチェンマイ大学を視察し、タイ王国における周産期看護の現状についての現状把握を行った。共働きの家庭が多いタイ王国では、仕事を持つ母親たちの多くが授乳のための環境が整っていないために母乳で育児を行うことは困難であり、母乳育児率の低下が問題視されていた。こういった社会的背景から、母乳育児の重要性についての啓発活動と環境を改善するための王室によるプロジェクトが発足し、企業の事業所内の授乳コーナー設置や無料での母乳輸送サービスの提供などが現在では行われていた。日本においても母乳育児の利点については知られてはいるが、タイ王国のようなサービスの整備までには至っていない状況なため、タイ王国の周産期看護についての現状を把握することは、日本の周産期看護の質改善のための示唆を得ることにつながると考えられた。 （分担執筆者:田中和奈、守本とも子、辻下守弘） 担当部分：現地での調査および論文のインタビュー解析に関する部分の執筆を担当した。
リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック―脳卒中片麻痺に対する応用可能性について	単著	平成29年9月	バイオフィードバック研究 第44巻第2号 pp.70-75	本研究の目的は、各種の生体情報を音や光などの人間にわかりやすい情報へ変換し、その情報に基づいて自己の状態を調整するバイオフィードバック（以下BF）に対するリハビリテーション医療（以下リハ医療）への応用可能性を検討することであった。リハ医療の特徴は、一般的な医療が手術や投薬など医療者に依存した受動的治療であるのに対して、残存機能の回復や健常機能への代償など患者自身による能動的治療が主体となることであり、患者の学習過程への介入が重要なアプローチとなる。本論文では、その効果的な介入方法としてのBFに関して、その治療メカニズムについて学習理論を用いた解説を行った。また、脳卒中片麻痺に対す表面筋電図BFについて、コンパクトなBF機器であるMyoTracの操作方法と治療手続きとその効果および臨床応用上の課題について論説した。最後に、EEG（脳波計）やHEG（近赤外線方式脳血流計）を用いたニューロフィードバックトレーニングが脳卒中だけでなく他の神経系障害および運動器障害へのリハビリテーションに応用されていく可能性を検証し、多様なモダリティを使ったBFがリハ医療に応用されていく必要性について論説した。
Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint（手関節部の疼痛に対する頸部と対側手関節および両者の同一皮膚分節知覚帯への経皮的膚電気刺激が疼痛軽減に及ぼす影響の比較）（査読付）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science Vol.29 No.11　pp.1996-1999	本研究の目的は、手関節部の疼痛に対する対側同一皮膚分節知覚帯への経皮的電気刺激(Transcutaneous Electrical Nerve Stimulation:以下TENS)が疼痛緩和にどのような影響を及ぼすかを検討することであった。対象は15名の健康な成人女性（21.9±0.3歳[21-22歳]）であった。実験手続きは、まず30秒間の安静後に左手関節背側部へ47℃で60秒間の温熱刺激にて疼痛を生じさせ、その後に頸部（N）と対側手関節部（CW）および両者（CWN）へのTENS（周波数:15Hz・波長:200μs）を実施した。その結果、TENSを行わない対照群を含んだ4条件の分散分析では視覚的アナログ尺度（VAS）の違いに有意な主効果を認めたが、N条件、CW条件、CWN条件間には有意差を認めなかった。本研究の結果、疼痛部位と同一の皮膚分節知覚帯へのTENSには有意な効果があるものの、TENS部位間での有意差は認められなかった。 （分担執筆者：川村博文、西上智彦、山本綾子、辻下守弘、伊藤健一、大矢暢久、高木峰子） 担当部分：被験者への疼痛評価とTENSの実施および統計処理と論文の結果に関する部分の執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）				
手織りプログラムへの参加が認知機能の活性化に与える影響 ［口頭発表］	—	平成22年1月	第14回日本在宅ケア学会学術集会（東京） p. 94	Sシルバー人材センターに登録中の58歳から77歳の女性で、手織り機を用いて作品を作成するプログラム参加者43人を対象に、週1回1クール3ヶ月間のコースを2回実施した結果、事象関連電位P300と近赤外線分光法を用いた脳イメージングによる測定で、前頭前野の左側部が有意に活性化していることが明らかとなった。 （共同研究者：臼井キミカ、中川知音、丸山麻衣、佐瀬美恵子、兼田美代、辻下守弘、山口道弘、佐々木八千代、白井みどり、上西洋子、津村智恵子） 担当部分：事象関連電位P300と近赤外線分光法による脳イメージング測定を担当した。
膝蓋大腿関節機能不全に対する筋電図バイオフィードバック療法の一経験 ［口頭発表］	—	平成25年4月	第41回日本バイオフィードバック学会学術集会（神奈川） バイオフィードバック研究第40巻第1号2013年 p. 88	交通事故により膝蓋腱損傷を受傷し，再建術後に膝蓋大腿骨腎機能不全となった症例に対して筋電図バイオフィードバック療法（以下BF と略す）を実施し、歩行障害の改善に著効を認めたので、その実施方法と経過について報告した。退院時には、不安定性や疹痛もなく、階段昇降やスクワット動作も問題なくスムーズ に可能となっていた。 （共同研究者：辻下守弘、西上智彦、笹田朋香、 山本昇吾、孫 康基、梶原沙央里、田辺暁人） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
高齢者に対するキネクトセンサーを用いたインタラクティブ・リハビリテーションの効果 ［口頭発表］	—	平成26年4月	第42回日本バイオフィードバック学会学術集会（東京） バイオフィードバック研究第41巻第1号2014年 p. 50	本研究の目的は、高齢者を 対象としてキネリハを用いた運動トレーニングを実施し、全身の機能的身体運動能力やバランス能力に及ぼす 影響および認知脳機能に対する効果について検討することであった。対象は、認知症や中枢神経系疾患のないことが確認された健常高齢者3名であった。キネリハの所要時間は休息も入れて約15分とし，週3回の頻度で2週間継続した。キネリハの結果3名ともにFRTはリーチ距離が改善し、TUGは所要時間が短縮していた。ファイブ・コグテストは手先の運動スピードと注意分割機能が3名とも向上していた。 （共同研究者：辻下守弘、川村博文、西上智彦、松谷綾子、井上悦治） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
認知症患者に対するインタラクティブ・メトロノームの症例報告 ［口頭発表］	―	平成27年3月	第1回認知症の早期発見、予防・治療研究会（東京） 抄録集 p. 14	本研究では、認知機能の改善を目的としたIMトレーニングが、高齢者の認知症に対しても同様の効果が期待できると考え応用を試みたので報告する。対象は、IMトレーニングを3ヶ月間継続できた認知症高齢者2名とし、認知症の評価には、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）とIMの専用ソフトに内蔵されているミリ秒単位でタイミング誤差を測定する評価ツールを使用した。IMは、1セッション約20分とし、提示される1分間54のテンポに対して正確にタイミングを合わせて両手、左右片手といった3種類のリズム運動を週3回、3ヶ月間実施した。被験者2名は、IMに対する意欲が3か月間維持され、トレーニング開始時に比較して、タイミング誤差が大幅に短縮し、それに伴ってHDS-Rの改善も認められた。IMは、認知症の認知機能の改善にも効果が期待できる。
タイミング誤差のフィードバックトレーニングが時間認知に及ぼす影響 ［口頭発表］	―	平成27年4月	第43回日本バイオフィードバック学会学術集会（つくば） バイオフィードバック研究第42巻第1号2015年 p. 85-86	本研究では、注意欠陥多動性障害（ADHD）と認 知症といった代表的な認知機能障害に対してタイミング誤差のフィードバックトレーニングを継続的に実施する機会を得た。対象は、ADHDの中学生1名とアルッハイマー型認知症の高齢者1名であった。トレーニングには、インタラクティブ・メトロノー ム法（IM）を用いた。IMは、1セッション約30分とし、提示されるテンポに対して正確にタイミングを合わせてリズム運動を行う課題を8週間で合計56セッション実施した。その結果、ADHDではセッション中期以降でタイミング誤差が小さくなり、認知症ではセッション中期で急激にタイミング誤差が小さくなっていた。 （共同研究者：辻下守弘、西上智彦、松谷綾子、青田絵里） 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　服部　律子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学(生涯発達看護学)	母性・女性看護、助産学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
大学院 (1)　双方向授業	平成15年10月 ～ 平成21年3月	名古屋市立大学大学院看護学研究科「性・生殖看護学演習」（大学院博士前期課程1年次配当、半期、2単位）は文献のクリティークによる研究疑問の設定を行う科目である。学生が興味をもったテーマ、なかでも周産期を中心とした女性の健康に関するテーマを担当し、双方向的授業を試みた。学生が興味をもっているテーマや疑問を抱いている内容を出してもらい、それに関する国内外の文献を紹介しクリティークを行う。社会人学生がほとんどであるので、時にはe-mailを活用しながら演習を進めている。双方向的に進めることにより、研究疑問の設定や研究方法の検討の過程において、学生の興味や疑問が明確になり、それを発展させたり解決できるよう工夫した。
大学院(助産学の科目)・看護学部・看護短期大学部・専門学校 (2)　ロールプレイの活用	平成8年4月～ 平成27年7月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻講義・演習科目「助産診断・技術学Ⅱ」（半期、必修科目、3単位、専攻科生15人クラス）、名古屋市立大学看護学部演習科目「助産診断・技術学Ⅰ」（４年次配当、半期、選択科目、2単位、助産選択科目履修生8人クラス）ならびに「助産診断・技術学Ⅱ(4年次配当、半期、選択科目、3単位、助産選択科目履修生8人クラス)、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程(助産師国家試験受験資格取得コース)講義・演習「助産実践演習Ⅰ」（１年次配当、半期、必修科目、2単位、コース選択学生11名、2単位）、愛知県医師会立名古屋助産師学院講義・演習科目「助産診断・技術学Ⅰ」（通年、必修科目、1単位、助産学生20～22名）ならびに「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単位、助産学生20～22名）、椙山女学園大学看護学部演習科目「母子支援看護論演習Ⅱ(母性)」（半期、必修科目、1単位）において実践してきた。 これらの科目の中でも、学生が特に苦手とする観察技術や保健指導技術の教育において、ロールプレイを取り入れた。学生は妊産婦役と看護師・助産師役に分かれ、提示された場面設定・条件を基に診察や保健指導を展開し、終了後全体でディスカッションする。 このことにより、看護者としての行動を客観的に観察するだけでなく、妊産婦の気持ちを理解することができるようになり、講義で学習した技術を自らの行動レベルで理解できるようになり、少ない実習場面でその技術を習得できるようになった。さらに、実習への移行をスムースにした。

事項	年月日	概　　要
(3)　課題による学習内容の統合	平成8年4月～ 平成27年７月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻「助産診断・技術学Ⅱ」（半期、必修科目、3単位）名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」（4年次配当、半期、選択科目、3単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）「助産診断技術特論Ⅰ」（1年次配当、半期、必修科目、2単位）、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単位）、椙山女学園大学看護学部講義・演習科目「母子支援看護学概論」（半期、必修、2単位）「母子支援看護論Ⅱ(母性)」（半期、必修、1単位）「母子支援看護論演習Ⅱ(母性)」（半期、必修、1単位）において実施してきた。 これらの科目は、産科学の講義内容を基に助産診断と助産技術または看護診断と看護技術について学習する科目である。学生は母体の生理的変化や胎児の発育などと、妊産婦に現れる症状や身体的変化、そして助産診断内容を理解する過程において、それらを統合して理解することに困難を生じる。そこで、妊娠や分娩の時期毎に、講義・演習終了後に時期にそってそれらを一覧表にまとめる課題を課し、誤りや不足している点などについて指導し、追加・修正を行った後再提出させる。このことにより、学生自身が理解不十分な点が認識できるようになり、関連する複数の科目の学習内容を統合させて助産診断と助産実践に活用できる知識として整理できるようになった。学生は実習中にも返却された課題を携帯し、実習に活用すると共に、さらに実習で学習した内容を追加しており、このことから、課題による学習効果はあったものと考えられる。また、この課題を通して教員側でも学生個々の理解が不十分な点を把握することができ、実習においてその点を重点的に指導することができるようになった。
(4)　シラバスの活用	平成11年4月～ 平成25年3月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻「助産診断技術学Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」（全て半期、必修科目、計８単位）、名古屋市立大学看護学部専門科目「周産期看護学」（３年次配当、半期、必修科目、２単位）「助産診断・技術学Ⅱ」（４年次配当、前半期、選択科目３単位）、「助産管理」（４年次配当、半期、選択科目、１単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）の担当のすべての必修科目、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産学概論」（通年、必修科目、1単位）、「助産診断・技術学Ⅰ」（通年、必修科目、１単位）、「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、２単に）において実施した。 統一した様式で作成されているシラバスに加え、単元毎に到達目標を提示したシラバスを独自に作成し、学生に提示し、これらに沿って授業を進めている。授業では単元毎の到達目標を提示する以前に比べ、各単元終了時に学生が質問するようになり、学習内容の整理を試験直前まで持ち越さないよう努力する学生が増えた。

事項	年月日	概　　要
(5)　総合演習の導入	平成15年4月～ 平成25年3月	名古屋市立大学看護学部専門科目「助産診断・技術学Ⅱ」（4年次配当、半期、選択科目、3単位）、名古屋市立大学大学院看護学研究科博士前期課程（助産師国家試験受験資格取得コース）「助産実践演習Ⅰ」（1年次配当、半期、必修科目、2単位）、愛知県医師会立名古屋助産師学院「助産診断・技術学Ⅱ」（通年、必修科目、2単位）において、妊娠期や分娩期の助産過程の総合的な演習を実施している。事例を提示し、その所見から助産診断を行い、助産方針・計画を決定し、それに基づく保健指導や分娩介助技術の実践までを演習し、最後に助産診断や助産計画の妥当性を検討する。この一連の演習を3事例程度繰り返す。総合演習を導入したことによって、学習内容を統合し、助産実践に活用できる形へと整理できるようになった。また、総合演習は課題による学習内容の統合の段階では学生の取り組みにかなりの差が生じること、整理した知識を助産診断の過程でどう使用するのかについて十分に理解できない学生がみられるが、学内でシミュレーションすることにより、ある一定のレベルまで到達させることができるようになった。このことにより、実習における助産診断がスムースにできるようになったことや、助産診断や計画の立案の段階で知識が整理できるようになったこと、そして事例に応じた保健指導や分娩介助技術について考えられるようになるなどの効果を上げている。
(6)　産後の母子の看護過程学習におけるアクティブラーニングの導入	平成25年4月～ 平成28年3月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1単位）において、産後の母子の看護過程の授業でアクティブラーニングを導入している。臨床場面で経験する状況に沿って事例を提示し、看護過程の段階ごとにグループワークと発表、解説等を相互に繰り返しながら展開している。このことにより、学生たちからは実践的思考と看護過程の展開の流れが理解できるようになったと評価が得られている。
(7)　周産期の看護過程学習におけるロールプレイ形式での演習の導入	平成26年4月～ 平成27年7月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1単位）において、実践的な技術の習得を目的に、ロールプレイ形式での実践的な技術の演習を導入している。 設定に基づいて教員が妊婦・褥婦を演じ、学生は看護師として臨床場面に即した観察を行う。このことにより、学生はコミュニケーション技術とフィジカルアセスメント技術を統合させ、看護行為としての観察技術が学習できるようになったと評価を得ている。
(8)　クリッカーの活用	平成26年4月～ 平成28年2月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）において、授業内でクリッカーを活用し、学生の意見をきいたり、授業への導入の小テストを行った。
(9)　母性看護技術演習における反転授業の導入	平成27年4月～ 平成27年7月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」（３年次配当、半期、必修科目、1単位）において、母性看護技術部分を反転授業で実施した。事前にＶＴＲで事前学習した技術を、授業では“声掛け”やその時に観察すべきこと、留意点などと統合して「看護行為」として組み立てることができ、学生は、実習場面でも一連の行為としてスムーズに実施できるようになった。

事項	年月日	概　　要
(10)　観察に基づく理論の学習の試み	平成27年9月～ 平成30年2月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）において、母性看護学の基本となる理論の理解を促すため、日常生活場面で母子の観察結果をグループで理論に基づいて分析しながら理論の理解と看護場面への理論の活用方法の理解を促す取り組みを行った。実際に自分が観察してきた具体的な場面と理論が結びつくことにより理解が深まっていた。
(11)　ジグソー法やペアワーク、グループワークの導入	平成29年9月～ 平成30年2月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）の各回の授業において、学生たちの能動的な学習を促し、学習内容の理解を深めたり、多様な考えに触れ多角的な理解を促すことを目的として、ジグソー法やシンク・ペア・シェア、ペアワークやグループワーク等アクティブラーニングの手法を取り入れた。 学生たちは次第にいろいろな学生ともワークに取り組みディスカッションできるようになり、私語もほとんどなく積極的に学習に取り組むようになっていった。
(12)　課題評価へのルーブリックの導入	平成29年9月～ 平成30年2月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）の課題評価にルーブリックを導入した。作成したルーブリックを課題提示時から学生と共有することにより、学生自身が取り組むべき課題を具体的に理解すると共に、求められている水準も理解できたことで低い評価のレポートが減少した
２　作成した教科書，教材		
(1)　インターネット上で利用できる復習用教材の作成	平成24年4月～ 平成25年3月	愛知県医師会立名古屋助産師学院において、基礎助産学系科目と助産診断・技術学系科目とを統合し、周産期の助産診断について段階的に復習ができる教材を作成した。モジュール学習の考え方を基本に、周産期の助産診断を導き出すための知識の整理、アセスメントの統合を段階的に行える教材を作成し、インターネット上で利用できるようにした。在学生はいつでも、どこからでもアクセスして学習できるため、試験のための復習だけでなく、実習中にも閲覧して診断プロセスを復習できるようになり、繰り返しの学習が可能となった。
(2)　母性看護技術のＶＴＲ	平成27年4月～ 平成27年7月	反転授業用に、授業内容に沿った技術のＶＴＲを作成した。要点はキャプチャーを入れるなど、授業と連動する内容とした。学生からは「眠くならない」「実習前の復習にも使え思い出しやすい」などの評価を得た。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
(1)　学生による授業評価	平成25年7月 平成27年7月	平成25年度に椙山女学園大学で実施された授業アンケートでは、看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」ABCDクラス、EFGHクラスにおいて、総合的にみて満足であった学生は、「その通りである」が86.5～77.1%「どちらかと言えばそのとおりである」20.8～13.5%という結果であった。授業の理解のしやすさは「その通り」が73.1～77.1%、「どちらかといえばその通り」が22.9～26.9%となっていた。平成27年の授業評価でもほぼ同様の結果で、満足度の高い授業と評価された。

事項	年月日	概　　要
(2)　授業の教員の相互評価	平成27年12月	椙山女学園大学での教員の授業相互評価において授業デザインの明確さとグループワークのファシリテートで学生の主体的取り組みと学びが整理されていると評価された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
特記すべき事項なし		
5　その他		
(1)　博士論文・修士論文指導	平成15年10月 ～平成21年3月	副指導教員として博士論文・修士論文の指導を行った。 〔博士論文〕 「母乳保育をする女性の自己効力感尺度開発に関する研究」 〔修士論文〕 「会陰切開がバースライツに及ぼす影響」 「母親の出産に立ち会った子どもの体験と助産ケア」 「家庭での性教育における親役割達成に向けた看護支援」 「母子相互作用の発達に関する研究」 「産後の精神状態と育児に関する縦断的研究」

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
(1)　看護師免許	昭和63年6月15日	登録番号第642045号（添付1）
(2)　助産師免許	平成元年4月28日	登録番号第91302号　（添付2）
2　特許等		
該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1)　思春期の健康教育講師等	平成5年4月～ 平成29年2月	神戸山手女子高等学校（6年間）、神戸市立本庄中学校（3年間）、愛知県立小坂井高等学校（3年間）、ノートルダム女学院中学校（13年間）、北名古屋市立師勝中学校（2年間）、奈良県葛城市立北新庄小学校などにおいて、男女のからだのしくみや妊娠・出産のしくみ、性行動と性感染症など、性と生殖に関する内容を中心に、思春期の健康教育の講師を務めている。また、平成22年度より、栃木県における思春期ピアカウンセラー養成に携わっている。平成25年度からは椙山女学園大学において、主になって思春期ピアカウンセラー養成と活動支援を行っている
(2)　病院での看護研究指導	平成12年1月～ 現在に至る	愛知県厚生連海南病院（15年間）及び稲沢厚生病院(8年間)において、院内看護研修の一環として行われている看護研究の研修会（クリニカルラダー・レベル2並びに3）の講師を務めクリニカルラダー看護研究指導を行うと共に、院内で実施されている看護研究の指導を行っている。

事項	年月日	概　　要
(3)　女性やセクシュアリティへの健康支援活動	平成24年4月～ 現在に至る	平成24年度から週末に愛知県助産師会女性の健康なんでも相談、思春期電話相談の相談員としての活動を行っている。平成28年1月からはSANE（性暴力被害者支援看護師）の認定を取得し、名古屋第二赤十字病院性暴力救援センターで被害者支援の臨床活動に携わっている。
4　その他		
(1)　県看護協会における理事・委員会活動	平成24年4月～ 平成30年6月	平成24年度から愛知県看護協会において教育委員、平成26年度からは教育委員長、平成28年6月から教育委員長・理事として、主に県内の看護職を対象とした教育計画の立案、研修会の企画・運営を行った。 理事としては県看護協会の運営に参画し、主に、クリニカルラダーに沿った卒後教育の整備に携わった。

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 周産期ナーシング改訂第2版	共著	平成23年3月	ヌーヴェルヒロカワ	「ハイリスク妊娠」の章を担当し、妊娠中に起こりやすい異常の病態と看護の基本を解説し、事例を示して看護につい説明した。B5版全428頁本人担当部分：総頁数428頁中32頁を担当（パートⅢ－Ⅳ章）村本淳子,高橋真理編集,石原昌,今田葉子,大関信子,大森智美,上澤悦子,岸田佐智,崎山貴代,塩野悦子,島袋香子,清水清美,常磐洋子,鳥越郁代,服部律子,永山くに子,野澤美江子,春名めぐみ,福井トシ子,古田祐子,村本淳子, 和智志げみ
2.主体的な生き方を支えるピア・カウンセリング実践マニュアル改訂新版	共著	平成27年4月	小学館	「ピア活動の有効性」の章を担当し、先行研究と筆者らの研究結果を踏まえて、中高生とピアカウンセラー自身へのピア活動の有効性について解説した。 B5版全143頁 本人担当部分：総頁数143頁中19頁を担当(4-1,4-2) 高村寿子編集, 高村寿子,江角伸吾,堀内成子,前田ひとみ,渡辺純一,安達久美子,沼尾歩,小川正美,岩間薫,遠藤明希,高田昌代,川崎由紀子,井戸修一,堀井千華子,渡辺恵美子,船橋悠希,渡邉至,篠澤倪子,佐々木明子,池田悦子,服部律子
3.セクシュアリティがわかる本	共著	平成27年7月	一般社団法人日本家族計画協会	避妊法、性感染症、ネゴシエーション、トピックス(月経痛、マスターベーション、性的犯罪、レイプ、リベンジポルノ、カレシ・カノジョより友達？)を担当し、解説した。 B5版全57頁 本人担当部分：総頁数57頁中26頁を担当(５章～７章) 高村寿子編著、安達久美子、服部律子
4.看護教育実践シリーズ３　授業方法の基礎	共著	平成29年7月	医学書院	看護学教育において、１回の授業をどう組み立てるかやアクティブラーニングを導入した授業の方法などについて解説した本である。第11章「授業時間外の学習を促す」を共著し、授業時間外の学習の重要性や課題の出し方などについて解説した。 A5版全184頁 本人担当部分：総頁数143頁中12頁（11章）を共著者と共に担当 中井俊樹・小林忠資編、中井俊樹、小林忠資、清水栄子、内藤佐知子、根岸千悠、根本淳子、服部律子、森千鶴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5.看護教育実践シリーズ2 授業設計と教育評価	共著	平成30年3月	医学書院	看護教育における授業設計から、評価、授業の改善方法までを解説した本である。全体に編者として関わり、10章「評価基準を可視化する」を担当して執筆した。担当部分では、評価基準を可視化し学生と共有することの必要性やルーブリックなどの評価指標の作成について解説した。 A5版全184頁 本人担当部分：編集・総ページ数184頁中13頁（10章） 中井俊樹・服部律子編、中井俊樹、服部律子、岡田聡志、加地真弥、小林忠資、嶋﨑和代、高植幸子、中島英博、肥田武
（学術論文）				
1．足浴が分娩第1期の経過にもたらす効果 （査読付き論文）	共著	平成19年12月	愛知母性衛生学会誌第25巻	分娩期の助産ケアとして日常的に実施されている足浴について、その効果と安全性を検証することを目的に、正常な経過の産婦60名を、無作為に足浴群と非足浴群に分け、陣痛の変化、胎児心拍数の変化、産婦の体温の上昇等についてデータを収集し分析した。結果、足浴により陣痛持続時間の短い産婦では持続時間が平均持続時間程度に延長することが明らかとなり、分娩の正常な経過を維持するために効果があることが示唆され、足浴を実施しても胎児心拍数の変化や産婦の体温の上昇は認められず、安全なケアであることも示唆された。 論文掲載：pp55～P59 本人担当部分：研究計画の立案、結果の分析とまとめを行った。 共同執筆者：武田亜子,水本安由美,船木智子,中嶋(服部)律子
2．大学生男女の親になることへの意識 （査読付き論文）	単著	平成20年6月	思春期学26巻2号	近い将来親になる可能性のある大学生男女が親になることをどのように捉えているのかを明らかにするため、人文社会学系学部の学生153名を対象に自由記述式と文章完成法による質問紙調査を実施し、88名から回答を得た。KJ法で分析した結果、親になるということは「家庭をつくる」や「子どもの養育」といった機能があり、子育てへの自覚と責任感を持ち、人間的に成長している、精神的ゆとりと強さを備えている、子育ての協力者や環境が整っているなどの親になるための要件が必要で、親になることの意味・価値と親になることへの回避感情を相対的に評価しながら子どもをつくるということについて考えていることが明らかとなった。また、現代青年の個人化志向などの強まりから、子どもをもつことへの不安感や親になることによって生じる制限や制約、負担を考え親になることに対して負担感を抱いていることが示唆された。 pp261～267

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3．親準備性尺度作成のための因子抽出の試み（査読付き論文）	単著	平成20年12月	思春期学26巻4号	現代の青年自身が親になることについてどのように意識しているかという観点から親準備性を捉え、「親準備性尺度」の因子の抽出を試みた。大学生の親になることへの意識を明らかにした先行研究で得られたカテゴリーを基に、4段階のリッカート尺度を作成し、大学生男女802名を対象に調査を実施し、491の有効回答を得た。因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、第1因子[子どもの養育](α=.89)、第2因子[親になることの意義](α=.89)、第3因子[親になることへの負担感・不安感](α=.84)、第4因子[親になるための要件](α=.80)、第5因子[世代の継承](α=.70)の5つの下位尺度が抽出された。 pp428～432
4．青年期の親準備性－子育て経験者との比較－（査読付き論文）	共著	平成21年3月	名古屋市立大学看護学部紀要8巻	子育て経験者との違いから、近い将来親になる可能性のある青年期男女の親になることへの意識の特徴を明らかにすることを目的に調査を実施した。結果、子育てを経験している男女にくらべ、青年では子育てへのイメージから親になることへの意識が形成されているために、親になることの意義よりも、子どもの養育や親になることへの要件への意識が高く、親になることへの負担感や不安感を抱いているという特徴が明らかになった。また、アイデンティティの基礎となる基本的信頼や自律性が十分に確立されていない男女では子育てへの負担感や不安感が強くなることが示唆された。 論文掲載：pp9～15 本人担当部分：研究全体を主になって行った。 共同執筆者：中嶋(服部)律子，後藤宗理
5.青年期における親準備性の形成（博士論文）	単著	平成21年3月	名古屋市立大学大学院	青年期に親準備性の形成について、その関連要因や、変容について明らかにした。またその過程において、親準備性尺度を開発した。青年の親準備性は、親にの役割に関する認識だけでなく、親になることへの意義や、親になることへの負担感と不安感、さらに、親になる要件や世代の継承といった要因によって構成されていることが明らかになった。親になることへの負担感・不安感には基本的信頼が関連していることや、家庭の形成や子育てイメージの形成には被養育体験が関連していることが明らかとなった。 総頁数：136頁
6．大学生男女が親になることについて考えるきっかけ	共著	平成21年3月	椙山女学園大学看護学研究1巻	青年期男女がどのようなことをきっかけに親になることについて考えているかについて明らかにし、親準備性を促す支援のあり方について検討するため、半構造化面接を行い、質的帰納的に分析した。その結果、「親子モデルの観察による子育てイメージの形成」、「子どもとの接触によって引き出された子どもへの好感情」、「子どもや子育ての学習」、「親からの影響」、「親密な異性との家庭形成の空想」、「就職活動をきっかけとしたライフデザインの模索」のカテゴリーが抽出された。 論文掲載：pp97～105 本人担当部分：研究の計画、データ収集等研究全体を主になって行った。 共同執筆者：服部律子，後藤宗理，中嶋文子，大久保摩里子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7. 愛知県助産師会による電話相談事業10年間のまとめ （査読付き論文）	共著	平成23年12月	愛知母性衛生学会誌第29号	愛知県助産師会が実施している女性の健康に関する電話相談事業について、過去10年間の相談内容と相談者の傾向とその推移について分析した。電話相談では精神的問題や思春期の悩みの相談が多く、次いで妊娠中の各種症状、母乳、育児、月経に関することとなっていた。妊娠や育児に関する相談では出産年齢の高齢化に伴い相談者の年齢も高くなっていた。また、少数ではあるが虐待に関する相談も認められ、他機関とどのように連携するかが今後の課題であることが明らかとなった。 論文掲載：pp37～44 本人担当部分：研究計画を立案し、分析とまとめを主になって行った。 共同執筆者：石川真奈美，服部律子，若山正代，岩田勝子
8. 小規模病院、有床診療所に勤務する助産師の学習ニーズ （査読付き論文）	共著	平成25年1月	愛知母性衛生学会誌第30号	わが国の出産の約半数を担う小規模病院および有床診療所で勤務する助産師の学習ニーズの特徴を明らかにするため、愛知県内の分娩を取り扱っている小規模病院および有床診療所で勤務する助産師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、これらの施設で勤務する助産師の約７割が学習希望を有しており、助産実践の中で困ったり不安を感じた経験のある助産師のほうがその割合が有意に高かった。学習ニーズはステップアップへの欲求から生じており、スキルアップと知識のブラッシュアップのニーズがあることが明らかとなった。 論文掲載：pp72～77 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，石川真奈美，若山正代，鈴木明日香
9. 分娩を取り扱う小規模病院、有床診療所に勤務する看護師の学習ニーズ （査読付き論文）	共著	平成26年1月	愛知母性衛生学会誌第31号	分娩を取り扱う小規模病院や有床診療所では助産師よりも看護師の勤務者数のほうが多く、看護師が周産期の様々なケアに携わっている現状を踏まえ、これらの施設に勤務する看護師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、調査対象者の約半数が学習希望を有しており、仕事の中で困難感や不安感を抱いた経験のある者のほうが希望する割合が多かった。これは、「仕事上不足している知識の補充」や、「知識や技術の発展」「自己実現への欲求」からくるものであることが明らかとなった。 論文掲載：pp52～60 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，中嶋文子，奥川ゆかり，水信真美子，石川真奈美，鈴木明日香，若山正代

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10.青年期女子のライフデザインと親準備性	共著	平成27年3月	椙山女学園大学看護学研究7巻	女性を対象としたライフデザイン教育のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的に、Ａ大学１年生510人を対象に青年期女子のライフデザインや親準備性について明らかにした。結果、約６割の学生は将来の職業を決めて１年次から準備をしており、約８割の者が将来結婚を、約７割の者が出産を考えており、その予定平均年齢はそれぞれ、26.3歳、27.7歳であった。また離職のタイミングとしては第２子出産時が最多であった。 論文掲載：pp41～49 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，後藤宗理
（その他） ―報告書― 1.より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究	共著	平成28年3月	公益社団法人日本助産師会 平成27年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て産後ケアの実態について調査し、今後のあり方について提言した。 論文掲載：pp59～90 本人担当部分：「有床助産所ならびに病院・診療所で行っている産後ケアならびに産後ケア事業に係わる実地調査」を分担研究し、その結果を主になってまとめた。 共著者：島田真理恵,佐藤香,安達久美子,稲田千晴,服部律子,葛西圭子,相良有紀,市川香織,國分真佐代
2.本学看護学部におけるクリッカー導入の評価	共著	平成28年3月	椙山女学園大学看護学研究8巻	アクティブラーニングの一貫として新たに導入したクリッカーの効果について、学生の質問紙調査とグループインタビューの結果から分析した。その結果クリッカーの使用による「ライブ感」が学生の授業への積極的参加を促している、他学生との類似点や相違点を見出したことが学習への動機づけとなっているという効果が明らかとなった。 論文掲載：pp47～55本人担当部分：評価の計画、データ収集、分析、まとめの全般を主になって実施した。共著者：服部律子,和田貴子,佐原弘子,竹井留美,又吉忍,後藤宗理
3.健やか親子21(第2次)を推進するための思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方についての調査研究	共著	平成29年3月	厚生労働省平成28年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て、思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方について提言し、研究結果に基づき保健指導媒体として「Asolescence わからないことがここにある」を作成した。 本人担当部分：研究計画、調査用紙の作成、４校におけるデータ収集、考察を共に担当し、「性の自己受容(多様性)・gender identiyuに対する保健指導」について文献レビューを行った(pp127-129に掲載)。保健指導媒体では、「からだの性、こころの性　～これって変？～(p18)を執筆した。 共著者：永光信一郎、安達久美子、石井隆大、内山有子、岡明、岡永真由美、葛西圭子、片岡弥恵子、川名敬、熊谷智子、小林順子、小柳憲司、齋藤伸治、鴇田夏子、永山美千子、二宮啓子、野々山未希子、服部律子、松岡美智子、松嵜くみ子、三牧正和、村上佳津美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
―講演―				
1.母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと	―	平成28年5月	第2回母と子のメンタルヘルスフォーラム(於名古屋市)	青年期の親準備性形成に関する研究成果と、前年度に取り組んだ「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」の結果から、そして現代の若者の特徴などから、親となる人々の特性を理解し、妊娠中から子育て期までを包括したケアのあり方にについて概観し発表した。
2.母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと	―	平成28年10月	第57回日本母性衛生学会総会・学術集会教育講演（於東京）	平成27年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」成果を基に、産後の母親の特徴を解説するとともに、親準備性研究の成果に基づいて妊娠前から子育て期までの継続的で包括した支援の必要性について講演した。
3.子育て支援と社会資源の活用	―	平成28年11月	平成28年度奈良県アウトリーチ型子育て支援モデル事業子育て支援者研修会	親準備性研究や産後ケアのあり方に関する研究での結果を踏まえ、子育て支援の対象の特性について解説し、子育て支援者に求められる姿勢などについて講演した。
4.妊娠期からの包括支援に向けて～対象を理解する～	―	平成29年8月	平成29年度第1回養育支援訪問事業推進研修会	青年期の親準備性研究や産後ケアのあり方に関する研究の結果から、妊婦やそのパートナーの心理的特性や子育て環境について解説し、妊娠期からの包括支援のための対象理解のあり方について講演した。
5.虐待予防～妊娠期からの取り組みについて～	―	平成30年2月	平成29年度葛城地区保健衛生担当課長会保健師部会全体研修会	子ども虐待防止に向け、妊娠期からのリスクの早期発見や予防のための寄り添いや支援のあり方について講演した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
―学会発表―				
１．家庭での性教育における親役割達成に向けた看護支援	―	平成20年3月	第22回日本助産学会学術集会(於神戸市)	親と子どもの性教育に関する認識を明らかにし、家庭での性教育に対して親が果たすべき役割とそのための看護支援を探究することを目的に、中学１年から3年までの男女とその親224組に対する質問紙調査と、その中から面接調査に同意の得られた親子10組に対する半構造化面接を行った。質問紙調査では、子どもは性教育を学校で受けることを望んでいるが、親は学校だけでは不十分であり家庭でも性教育が必要と考えていることや、親は家庭での性教育の必要性を認識しているものの、半数の親は性教育に自信がないことなどが明らかとなった。面接調査から性教育で親が果たすべき役割の認識に関して46のカテゴリーが抽出され、親自身が親としての役割を達成するためには学校と親との間の情報伝達等、調整役が必要であることが示唆された。本人担当部分：分析･まとめの指導を行った。 共同発表者：小倉由紀子,北川眞理子,中嶋(服部)律子
2. Experienceofchildrenpresentatbirthofyoungersibling,andmidwiferycare（きょうだいを主産する母親の出産に立ち会った子どもの体験と助産ケア）	―	平成20年6月	InternationalConfederationofMidwives28thTriennialCongress(於連合王国･グラスゴー)	母親の出産に立ち会った子どもの体験を明らかにするため、参加観察法により調査を行った。その結果、感情のゆらぎを引き起こす体験、生・性への豊かな感情をはぐくむ体験、出産への参加から思いやりを高める体験、自我を脅かすストレスフルな体験、親密な他者の存在を実感する体験、母子の関係性をゆるがされる体験、新たなきょうだい関係を構築する体験という７つのカテゴリーが抽出された。 本人担当部分：研究計画、データの分析とまとめについて指導した。 共同発表者： NOHATA(KURAMOTO)Naoko,KITAGAWAMariko,NAKAJIMA(HATTORI) Ritsuko
3．親準備性尺度作成の試み	―	平成20年8月	第27回日本思春期学会学術集会(於千葉市)	現代青年の親になることへの意識やその発達に影響を及ぼす要因を検討するための第1段階として、親準備性尺度の作成を試みた。大学生男女を対象とした自由記述式と文章完成法によって得られた内容から4段階のリッカート尺度を作成し、大学生男女に質問紙調査を実施した。因子分析の結果、「子どもの養育」「親になることの意義」「親になることへの負担感･不安感」「親になるための要件」「世代の継承」の5因子(43項目)が抽出された。今後、基準関連妥当性の検討が必要である。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4．青年期の親準備性−子育て経験者との比較−	−	平成20年9月	日本ヒューマン・ケア心理学会第10回大会(於京都市)	子育て経験者と比較することにより、青年期の親準備性の特徴を明らかにすることを目的に、18歳から25歳までの大学生や社会人684名と保育所や小学校に通う子どもをもつ男女923名を対象に親準備性尺度とアイデンティティ尺度からなる質問紙調査を実施した。結果、子育て中の親のほうが「親になることの意義」が高かった一方、青年では「親になることへの負担感・不安感」や「親になる要件」、「子どもの養育」、「世代の継承」が有意に高かった。親になることをイメージしている段階の青年では親としての機能や親になる要件に対する意識が高い一方、負担感や不安感も強く、親になることへの意義が感じられないでいることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、中心になって研究を実施した。共同発表者：中嶋(服部)律子，後藤宗理
5．青年期の親準備性とその関連要因	−	平成22年11月	第51回日本母性衛生学会学術集会(於金沢市)	青年期の親準備性とそれに関連する要因を明らかにすることを目的に青年期の男女867名を対象に質問紙調査を実施し、519名から回答を得た。その結果、青年期の親準備性には、基本的信頼や自律性などアイデンティティ確立の基礎となる部分と、親との信頼感、家庭への満足度、子どもへの関心や好感情、子どもと接した経験が影響していることが明らかとなった。 本人担当部分：研究全体に関わり、中心になって研究を実施した。共同発表者：服部律子，後藤宗理，石川真奈美，西富代
6.思春期ピアカウンセラー養成の現状と課題	—	平成25年8月	第32回日本思春期学会学術集会 （於和歌山市）	日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会認定プログラムを用いた過去6年間の思春期ピアカウンセラー養成数の推移や受講者の受講後の感想等から実態を分析した。その結果、若者気質の変化により友人に相談できなくなっていることなどから思春期ピアカウンセラーへのニーズは高まっているものの、同じ若者気質の変化により自らが思春期ピアカウンセラーになろうという若者は減少しているという課題が存在していることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、特にデータの分析とまとめを主になって行った。 共同発表者：服部律子，高村寿子，石田登喜子，渡辺純一
7.助産所・病院・診療所で行われている産後ケアの実態	—	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会総会 （於大阪市）	わが国における産後ケアのあり方を検討するための基礎資料として、助産所、病院、診療所計9施設において、インタビュー調査を行った。結果、母親が育児技術を獲得し、自信をもって家庭生活へのスタートが切れるよう支援することが求められていた。また、産後ケア施設を提供するためには経済面、感染対策と癒しの空間の確保など施設面での課題があることが明らかとなった。 共同発表者：市川香織，服部律子，國分真佐代，稲田千晴，相良有紀，島田真理恵

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8.Baseline survey with the purpose of developing adolescent peer activities related to reconstruction support in the wake of the Great East Japan Earthquake: For developing peer activities designed to support the ability to lead active lives in affected areas	共著	2017.8	The 21st International Epidemiological Association（大宮市）	南相馬市における中学生へのピアサポートの実施に向けた中学生対象のベースライン調査の結果を報告した。将来の夢をもっていない群はもっている群に比べて自尊感情が低く、自分自身の心身への関心が低いことが明らかとなり、自尊感情を高める取り組みであるピアサポート活動の必要性が示唆された。 共同研究者：Hattori R, Takamura H, Nakamura Y
9.Prevalence and prediction of suicide ideation in Japanese adolescents: result from a population-based questionnaire survey	共著	2017.1	American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (Washington DC, USA)	全国の各地方に在住する中高生を対象に心身の健康状態について調査した結果から、希死念慮を抱く割合と自殺率を中心に精神健康状態に焦点をあてて報告した。 共同研究者:Nagamitsu S, Mimaki M, Koyanagi K, Tokita N, Kobayashi Y, Hattori R, Yamashita Y, Yamagata Z, Igarashi T
10.健やか親子21（第2次）：思春期の保健課題の克服―中高生２万人のアンケート調査から -	共著	2017.8	日本思春期学会第36回学術集会	全国の各地方に在住する中高生を対象に健やか親子21(第2次)に盛り込まれている思春期の保健課題を中心に調査した結果の概要を報告した。 共同研究者：永光信一郎、三牧正和、服部律子、小柳憲司、鴇田夏子、小林順子、五十嵐隆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
―その他―				
1．看護・介護・福祉の百科事典	共著	平成20年4月	朝倉書店	看護、介護、福祉に関する基本的事項を広く集めた事典である。この中で、母性看護学の褥婦への支援について解説した。 A5版全633頁本人担当部分：総頁数633頁中3頁を担当（第1編－3-6） 糸川嘉則総編集,交野好子,成清美治,西尾祐吾編集,著者139名。 母性看護学の著者；遠藤俊子,伊藤幸子,森谷美智子,岩谷澄香,黒田緑,中嶋(服部)律子,関島英子,島袋香子
2.外来通院糖尿病患者の治療行動に影響を及ぼす要因	共著	平成25年11月	へるす出版 月刊「臨床看護」	外来で通院治療を受けている、研究への協力に同意の得られた糖尿病患者19人に対して半構造化面接を実施し、保健行動理論に基づいて質的に分析した。結果、治療行動には病気の悪化への危機感や治療行動による効果の自覚、知識が影響していることが明らかとなった。また、糖尿病患者は治療行動の必要性の認識と同時に逃避欲求も抱いて逃避するための理由を探していることが明らかとなった。今後は、自己効力感にも着目し、今回明らかとなった要因との関連性を明らかにする必要がある。 論文掲載：pp1941～1947（「投稿」の中の１編） 本人担当部分：専門としている健康行動の観点から、研究の各プロセスと論文執筆について指導を行い、専門とする保健行動の観点から結果の分析、考察を共に行った。 共同執筆者：吉田和恵、服部律子、伏屋小夜子、牧田久仁子
3.新・青年心理学ハンドブック	共著	平成26年1月	福村出版	青年心理学に関する事項を広く解説したハンドブックである。この中で、トピック「青年期の親準備性」を担当した。 B5変形(27cm)版全714頁 本人担当部分：総頁数714頁中1頁(Topic32)を担当。 後藤宗理,二宮克美,高木秀明,大野久,白井利明,平石賢二,佐藤有耕,若松養亮編著,ほか114名著。Topic32服部律子。
4.周産期のメンタルヘルスの動向と助産師に求められるかかわり	単著	平成29年4月	医学書院 「助産雑誌」	周産期のメンタルヘルスケアについて、施策の動向、筆者が取り組んできた今までの研究から明らかとなった親になる人々の特性、若者研究の成果などを踏まえて、対象の理解を中心に助産師に求められる関わりについて概説した。 論文掲載：pp262～267（特集　「周産期のメンタルヘルスのために助産師ができること、すべきこと」の中の１編）
文部科学省科学研究費およびその他の研究助成				
1．青年期女子の親準備性とキャリアデザイン、ライフデザインの関連性	―	平成25年6月	椙山女学園大学学園研究費助成(B)	妊娠に伴い身体的変化を来す女性を対象とした、妊孕性や家庭形性、妊娠・出産・子育てと仕事の両立なども含めた女性ならではのライフデザイン、キャリアデザインへの支援のあり方を検討するため、青年期女子に対する女子大学生510人を対象に、親準備性と現在描いているライフデザインについて実態について研究した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　守本とも子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	在宅脳卒中患者，在宅酸素療法患者，介護者，QOL

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
視聴覚教材のための資料作成	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部人間福祉研究科の非常勤講師として視聴覚教材のための資料を作成した。具体的には人体解剖・人体機能，疾病や加齢について，難解な用語の解説や重要事項のまとめなどを資料として作成し，各授業ごとに資料の配布を行った。
2　作成した教科書，教材		
―教科書―		
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第14版第6刷　（再掲）	平成20年4月 医学書院 全348頁	第5部第1章A「生活環境を整える」　P.64-P.74 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第5部第1章C「衣服を用いる」P.121-P.127 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第1刷（再掲）	平成21年2月 医学書院 全495頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32 本章では生活環境を整えるための技術の習得を通して，病床環境を多角的にとらえ，患者の安全・安楽への配慮を具体的な行為として実践できる力を養う。同時に，患者の病床環境に対していつも自然に目配りができ，安全や安楽を阻害する因子を早期に発見し，即座に対応できる感性を養う。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192 本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
国際看護への学際的アプローチ（再掲）	平成21年3月 日本放射線技師会出版社 全211頁	第1章「異文化理解のための看護理論」P.7-P.18 世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し，看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。 単著

事項	年月日	概　　要
新・QOLを高める専門看護，介護を考える （再掲）	平成21年3月 中央法規出版(株) 全204頁	第2章　「高齢者の痛みへのアプローチ」P.61-P.80 　第1節「高齢者の痛みについて」高齢者の痛みの特徴を述べた。 　第2節「痛みの特定」痛みの特定方法につい主訴，動作，疾患との関連について述べた。 　第3節「痛みのアセスメントスケール」痛みの質と強さのアセスメントについて著者らが作成したVASスケールを紹介した。 　第4節「痛みの治療とケアプラン」非薬物，薬物的介入と痛み治療薬の主要なタイプ，ケアプランについて述べた。 　第5節「倫理的責任」痛みの治療におけるガイドラインと倫理的課題について述べた。 単著 第3章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」P.81-P.94 　第1節「嚥下障害とは」嚥下の生理，嚥下障害のタイプと原因，観察のポイントとチームアプローチについて述べた。 　第2節「嚥下療法の工夫と技術」食物形態の改善，嚥下方法，筋肉強化訓練，緊急時の対処について述べた。第3節「スタッフの役割」嚥下・食事評価スケールを紹介した。 単著 第5章「QOLを高める日常生活動作への援助」P.113-P.123 　第1節「認知症高齢者の入浴テクニック」入浴中の不穏を低下させるプロトコールと安全策について述べた。 第6章「認知症高齢者への安全テクニック」P169-P.177を 　1節「認知症高齢者について」認知症についての概要と特徴について述べた。 　第2節「認知症高齢者の行動特性と対策」認知症高齢者の特徴的な行動とそれに対する対処方法を述べた。 単著 第7章「QOLを高める高齢者の遊び療法」P179-P.201 　第1節「遊び療法とボランテイア活動」ボランテイアの集め方，活動の説明について述べた。 　第2節「遊びマニュアルの使い方」レクレーション遊具のつくり方と使い方及び遊具を紹介する際の注意点について述べた。 単著
介護の基本・コミュニケーション技術 （再掲）	平成22年9月 黎明書房 全202頁	本書は介護の考え方について理解するとともに，介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ，介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とする。 編者：守本とも子，星野政明
生活支援技術・介護過程（再掲）	平成22年6月 黎明書房 全219頁	第10章「終末期の介護」P.159-P.168 　終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探る。 単著 編者：守本とも子，星野政明（編著）

事項	年月日	概　　要
老年看護学 Geriatric Nursing （再掲）	平成22年12月 PILAR　PRESS 全288頁	第2章　2. 高齢者の理解　「加齢と老化」P.2，P.57-P.65を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。 単著 編著：守本とも子
医療福祉学の道標（再掲）	平成23年1月 金芳堂 全200頁	第2章 C 生活の変化と保健･医療･福祉の統合 P.23-P.26を単著。 　生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第13章 A 少子高齢社会での医療福祉　P.163-P.165を単著。 　今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ　P.170-P.172を単著。 　介護福祉から医療介護福祉へのパラダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し，今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉　P.184-P.185を単著。 　情報化社会における医療福祉について，特に医療福祉とIT（Information Technology）との関連で述べた。今後，医療福祉のどの分野においてITがどのように活用されていくのか，その意義について考察した。
子ども家庭のウェルビーイング（再掲）	平成23年3月 金芳堂 全128頁	第1章 A「少子化の進行と家庭・地域の変容」P.1-P.5 第3章 B「子ども家庭福祉の実施体制」P.39-P.41 　現代社会における子どものウェルビーイングを追及するため，子供を取り巻く社会福祉的問題や今日的課題を明らかにするとともに，子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説する。 単著
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第15版第8刷 （再掲）	平成24年2月 医学書院 全495頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32 　本章では外部環境を病床環境に限定し，「病床環境の調整」と「ベットメーキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には，病床の温度と湿度。光と音，病室の色彩，空気の清浄性とにおい，人的環境の調整のほか，ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192 　本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
介護実習入門（再掲）	平成24年3月 黎明書房 全128頁	本書において対象者への実際的な福祉的援助の方法を学び，専門職としての基盤を構築することが可能であると考える。 編集：守本とも子，星野政明

事項	年月日	概　　要
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第16版 （再掲）	平成25年2月 医学書院 全508頁	第1章　A「環境調整技術」P.9-P.21 本章では療養生活の環境を構成する要素を理解し，病室・病床のアセスメントと調整について学ぶ。また，ベット周囲と病床の環境整備，ベットネーキング，リネン交換の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第6章　B「清潔・衣生活援助」P.192-P.200 衣類を用いることの生理的・社会的・心理的意義を理解する。また，衣生活に関するニーズのアセスメントや援助の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得（再掲）	平成26年10月 すぴか書房 全140頁	第3章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72 本章では，せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく，とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって，せん妄の知識は必須だと言える。 単著 第4章「せん妄が起きてしまったら」P73-86 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく，さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し，症状への適切な対応を学ぶ。 単著 編者：守本とも子
これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために（再掲）	平成26年11月 ピラールプレス 全163頁	第3節「国際協力機関の取り組み」P22-28 国際協力のいくつかの方法について知り，世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。 単著 監著：守本とも子
看護職をめざす人の社会保障と社会福祉（再掲）	平成27年4月 みらい 全211頁	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また，すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 編者：守本とも子

事項	年月日	概　　要
シリーズ　看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き1 看護のための『教育学』（再掲）	平成27年12月 あいり出版 全151頁	第2章　3「教授理論」P22-25 第2章　4「現代の教授理論」P25-28 教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に，教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第2章 3），主要な教授理論について説明する（第2章 4）。 単著 第2章　5「人格」P28-P29 教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく，全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 単著 第2章　6「教育心理学と患者指導」P29 本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが，教育心理学がどのように患者指導に有用か，例をあげて考える。 単著 編者：守本とも子
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第17版 （再掲）	平成29年1月 医学書院 全520頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.10-P.24 本章では外部環境を病床環境に限定し，「病床環境の調整」と「ベットメーキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には，病床の温度と湿度。光と音，病室の色彩，空気の清浄性とにおい，人的環境の調整のほか，ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者：守本とも子，吉村雅世 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.153-P.211 本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，吉村雅世
痛みのケア 第1版 （再掲）	平成29年3月 ピラールプレス 全180頁	第9章　「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」　P.36－P.49 慢性的な高齢者の痛みについて，痛みと動作について説明し，痛みに関する観察の力を養う。そして高齢者の痛みの主訴の特徴を述べ，痛みの原因となる疾患または治療について述べる。また，痛みのアセスメントツールを紹介し看護者が利用できる一般的な痛みのアセスメントスケールを学ぶ。代表的な痛みのツールはVisual Analogue Scales (VAS)である。さらに本書では痛みの有無に焦点をしぼるpain VASを紹介し，看護ケアの実践として痛みの治療とケアプランについて述べる。 単著 編者：守本とも子

事項	年月日	概　　要
―事典―		
介護福祉学事典（再掲）	平成26年10月 ミネルヴァ書房 全829頁	「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ，障害児に関する介護，福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また，障害児に対する介護について，近現代史から，ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し，障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき，活動することができるための展望と課題について考察した。 P546-547 分担執筆
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
―海外研修学生引率―		
タイ　チェンマイ市 チェンマイ大学看護学部　学術交流	平成20年8月	奈良県立医科大学医学部看護学科　海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー: Elderly in Thailand, Health status of children in Thailand, Health care service and health promotion of children in Thailand　他 スタディビジット：Elderly club at Faculty on nursing, Day care center FON CMU, Pediatric Units, Pediatric Intensive Care Unit, Nursery, and Well baby clinic at university hospital, Traditional Thai Massage Center　他
―講演―		
(財)健康管理・開発センター　講演会 講師	平成21年2月24日	(財)健康管理・開発センター主催の講演会で講師を務め，「たばこの害について」と題した講演を行った。 会場：住之江競艇場（大阪市住之江区）
日本保健医療行動科学会　講師	平成24年6月	日本保健医療行動科学会主催の講習会において，「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」についての講義を行った。 会場：じゅうろくプラザ（岐阜県岐阜市）
奈良学園大学　公開講座 講師	平成26年6月28日	奈良学園大学　公開講座で講師を務め，「高齢者のうつ」と題した講演を90分行った。 対象：地域住民60名 会場：りーべる王寺西友（奈良県北葛城郡王寺町）
日本サーモロジー学会　第33回大会　講師	平成28年5月	日本サーモロジー学会　第33回大会で講師を務め，「がん看護と体温」について招待講演を行った。 対象：200名 会場：奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス（奈良県奈良市）
―講習会―		
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成20年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：3時間

事項	年月日	概　　要
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成21年9月8日	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成22年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成23年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成24年6月13日 ～7月11日	社団法人岐阜県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護理論」の講義および演習指導を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第1棟5階（岐阜県岐阜市） 時間：15時間（講義），15時間（演習指導）
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成24年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成25年8月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成26年8月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間

事項	年月日	概　　要
―教員養成講座講師―		
大阪府看護協会 　大阪府看護教員養成講習会　講師	平成22年4月～平成22年7月	大阪府看護協会主催の大阪府看護教員養成講習会において，「看護論演習」の講義を行った。 受講生：79人 時間：30時間 大阪府看護協会桃谷センター（大阪市天王寺区）
社団法人岐阜県看護協会 　岐阜県看護教員養成講習会　講師	平成23年6月13日～7月27日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県看護教員養成講習会において，「看護論」「看護論演習」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 時間：15時間（講義），15時間（演習指導） 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第1棟5階（岐阜県岐阜市）
社団法人岐阜県看護協会 　岐阜県専任教員養成講習会　講師	平成25年5月20日～6月4日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県専任教員養成講習会において，「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：19人 時間：18時間 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい福寿会館第1棟5階（岐阜県岐阜市）
社団法人奈良県看護協会 　奈良県専任教員養成講習会　講師	平成25年7月29日 平成25年12月4日～12月12日	社団法人奈良県看護協会主催の奈良県専任教員養成講習会において，「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 時間：14時間 会場：奈良県看護研修センター，奈良県看護協会ホームナーシングセンター（奈良県橿原市）

事項	年月日	概　　要
5　その他		
―担当教科―		
「老年看護学概論」の担当	平成16年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学概論」を担当した。「老年看護学概論」は必修科目で2単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は「加齢に伴う変化」と老年期の人々のQOLの向上をめざす理論と技術についてである。
「老年看護学援助論」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学援助論」を担当した。「老年看護学援助論」は必修科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は老年期にある人の健康の増進，疾病の予防といった看護実践の理論と技術についてである。
「社会福祉学」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「社会福祉学」を担当した。「社会福祉学」は必修科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し，それに対する社会福祉制度と最近の政策動向についてである。
「国際看護論」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は選択科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は学際的視点から世界で展開する看護活動について理解を深め，実際に外国での看護教育・看護活動の演習を通して，新しい看護の視点と可能性を探る。
「看護研究概論」の担当	平成18年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護研究概論」を担当した。「看護研究概論」は必修科目で1単位（2時間×7回）の半期科目である。講義内容は看護研究を進めていく上での基礎的能力を育成するとともに研究的態度および看護観及び研究の意義，研究課題の立て方，研究方法，研究結果のまとめ方，考察，発表の方法についてである。
「看護学特論」の担当	平成18年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護学特論」を担当した。「看護学特論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は国内外における看護研究の動向と課題及び国内外で関心のある看護問題や課題についての研究計画書を作成する方法についてである。
「介護概論」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護概論」を担当した。「介護概論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，介護の主たる対象となる高齢者を理解しながら，介護の目的，方法，専門職としての役割を学ぶ，また，それらを基に実践と自己研鑽を積むことのできる専門性を育てることを目的とする。
「介護技術」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護技術」を担当した。「介護技術」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，障害や疾病あるいは加齢により，他の人の支援を必要とする対象者のQOLを高める介護上の援助技術について，その考え方および身体的状況に応じたよりよい介護技術を学ぶ。授業は講義と演習であり，全体の1/2は体験的学習で構成する。

事項	年月日	概　　要
「からだのしくみと生活」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「からだのしくみと生活」を担当した。「からだのしくみと生活」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，対象の自立支援にむけて必要なこころとからだの基礎的な知識を学び，適切な介護の実践ができる能力を養うことを目的とする。
「加齢と障害の理解」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「加齢と障害の理解」を担当した。「加齢と障害の理解」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，人間の成長と発達における心理や身体機能の変化を学び，それらが日常生活に与える影響について理解することを目的とする。
「看護学原論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学原論」を担当した。「看護学原論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，看護学における主要概念を理解し，看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために，看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また，自己の看護観を形成し，発展させる能力を養うことを目的とする。
「国際看護論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，国際社会の動向を知り，グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化，資源，環境など，多角的な視点について考え，異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
「ターミナル看護」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナル看護」を担当した。「ターミナル看護」はは必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，ターミナルケアの意味を理解し，看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また，ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
「看護理論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，看護の見方・考え方の基礎として，様々な看護理論が現れてきた社会背景を知り，看護理論を学ぶ。代表的な理論家の理論が看護実践の根拠になることや，その活用方法を知る。さらに，理論を研究に活用するための方法について理解する。
「チーム医療論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義は3学科の教員で行う。チーム医療における協調性，責任感，コミュニケーション能力の向上は必須である。また専門分野以外の学習も「学際性」を伸ばすために必要である。3学科共通の科目を持ち学科の壁を越えて本科目を履修することにより医療現場において必要とされる資質を習得することを目的とする。
「看護学概論」の担当	平成25年4月～ 平成25年9月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学概論」を担当した。「看護学概論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，看護学における主要概念を理解し，看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために，看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また，自己の看護観を形成し，発展させる能力を養うことを目的とする。

事項	年月日	概　　要
「保健医療学概論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「保健医療学概論」を担当した。「保健医療学概論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は，全人的ケアに主眼をおいた保健医療学について，その背景や基本的な考え方，諸外国及び日本における現状と実践例，クオリティ・オブ･ライフ（QOL）の視点を含む医療と看護の原点などについて幅広く学び，その後の主体的な学習の礎とする。
	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は，代表的な理論家の理論がどのような医療環境や社会背景のもとに構築されてきたかを知る。また，それらの理論が看護実践の根拠となることを理解し，看護過程の展開に有効に活用する方法を学ぶ。
「チーム医療論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は，チーム医療の重要性，看護領域におけるチーム医療の変遷について学ぶ。そして現在のチーム医療のなかでの看護師の位置づけおよび看護師が果たす役割について理解する。また，チーム医療における看護の在り方および今後の課題について考察する。
「成人看護学概論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「成人看護学概論」を担当した。「成人看護学概論」は必修科目で2単位30時間の半期科目である。講義内容は，人間の成長発達課題における成人期の特質について，身体的・精神的・社会的側面から理解する。また，成人期にある人々の様々な健康障害の原因や要因を学び，健康の回復，あるいは健康の保持増進に向けての看護援助の方法について学ぶ。
「社会福祉」の担当	平成26年6月～ 平成26年9月	大和高田市立看護専門学校の学生を対象に「社会福祉」を担当した。「社会福祉」は必修科目で１単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し，それに対する社会福祉制度と最近の政策動向について学ぶ。
「ターミナルケア論」の担当	平成26年10月～ 平成27年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナルケア論」を担当した。「ターミナルケア論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，ターミナルケアの意味を理解し，看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また，ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
「国際看護論」の担当	平成26年10月～ 平成27年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は，国際社会の動向を知り，グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化，資源，環境など，多角的な視点について考え，異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
―実習指導―		
老年看護学実習	平成18年10月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の3年次学生を対象に「老年看護学実習指導」（指導人数95人，指導期間10週）を担当した。指導内容は老年期にある人の看護，主に高齢者施設における老年看護の視点とその方法を実践的に学び，老年看護の役割・機能を理解させる。
総合実習	平成19年5月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の4年次学生を対象に「総合実習指導」（指導人数11人，指導期間10週）を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）幼稚園教諭2級普通免許	昭和53年3月31日	昭52幼2普第3230号
2）保母資格	昭和53年3月21日	第保755
3）看護婦免許	昭和61年5月14日	第568532号
4）養護学校教諭1級普通免許	昭和63年9月25日	昭63養学1普め第10号
5）看護教員資格	平成3年11月29日	第946号 平成3年度厚生省認定による看護教員養成講習会
6）修士（学術）	平成9年3月25日	大阪教育大学第2090号
7）博士（社会福祉学）	平成15年10月15日	関西学院大学（甲社第十四号）
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		
岐阜医療科学大学 研究倫理審査委員長	平成22年4月～ 平成24年9月	岐阜医療科学大学保健科学部看護護学科，放射線技術学科，臨床検査技師学科合同の研究倫理審査委員会において研究倫理審査委員長を務めた。
奈良学園大学 国際交流センター長	平成29年3月～ 平成30年3月	大学の委員会組織において、国際交流センター長に就任し、友好協定締結校から特別聴講留学生を受け入れるため、協定校との交流を行った。また短期留学生の海外研修に取り組んだ。看護学生のマハサラカム大学への研修に向けての調整に取り組んだ。

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第1刷	共著	平成21年2月	医学書院	本書は看護技術の教科書として最新の方法を紹介している。単なる手順の方法ではなく看護職者が最も重要と考える「臨床判断」の過程を含めて解説し，卒業までのすべての領域実習で手引書として活用できる内容としている。 B5判，全495頁 共著者：守本とも子，藤崎　郁，任和子，有田清子，井川順子，石賀奈津子，岡本啓子，尾崎章子，小林優子，茂野香おる，竹林直紀(他10名) 本人担当部分： 第2部　第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部　第5章 C「病床での衣生活の援助」 P.185-P.192を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
国際看護への学際的アプローチ	共著	平成21年3月	日本放射線技師会出版社	本書は世界でトピックとなっている健康課題とその背景について，国際保健医療活動の実例を紹介し，今後の国際的な活動に必要な知識や思考を深める機会を提供することを目的とした。 B5判，全211頁 監修：守本とも子 編者：堀内美由紀 共著者：守本とも子，中園直樹，宮本和子，伊達卓二，馬場雄司，川端眞人，中谷香，堀内美由紀，田瀬和夫，岡崎悦子，正楽藍，瀧尻明子 本人担当部分:（部分執筆） 第1章「異文化理解のための看護理論」P.7-P.18を単著。 世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し，看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
新・QOLを高める専門看護，介護を考える	共著	平成21年3月	中央法規出版(株)	本書は高齢者への理解を深めるため，加齢が及ぼす身体的・心理的変化を学び，加齢が高齢者にどのような影響を及ぼすのか，また，結果としてどのような障害が起こってくるのかを理解する。そして高齢者のQOLを高める日常生活援助について学ぶ。 B5判，全204頁 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編者：守本とも子，星野政明 本人担当部分：(部分執筆) 第2章　「高齢者の痛みへのアプローチ」P.61-P.80を単著。 第1節「高齢者の痛みについて」高齢者の痛みの特徴を述べた。第2節「痛みの特定」痛みの特定方法について主訴，動作，疾患との関連について述べた。第3節「痛みのアセスメントスケール」痛みの質と強さのアセスメントについて著者らが作成したVASスケールを紹介した。第4節「痛みの治療とケアプラン」非薬物，薬物的介入と痛み治療薬の主要なタイプ，ケアプランについて述べた。第5節「倫理的責任」痛みの治療におけるガイドラインと倫理的課題について述べた。 第3章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」P.81-P.94を単著。 第1節「嚥下障害とは」嚥下の生理，嚥下障害のタイプと原因，観察のポイントとチームアプローチについて述べた。第2節「嚥下療法の工夫と技術」食物形態の改善，嚥下方法，筋肉強化訓練，緊急時の対処について述べた。第3節「スタッフの役割」嚥下・食事評価スケールを紹介した。 第5章「QOLを高める日常生活動作への援助」P.113-P.123を単著。 第1節「認知症高齢者の入浴テクニック」入浴中の不穏を低下させるプロトコールと安全策について述べた。 第6章「認知症高齢者への安全テクニック」P169-P.177を単著。 第1節「認知症高齢者について」認知症についての概要と特徴について述べた。第2節「認知症高齢者の行動特性と対策」認知症高齢者の特徴的な行動とそれに対する対処方法を述べた。 第7章「QOLを高める高齢者の遊び療法」P179-P.201を単著。 第1節「遊び療法とボランテイア活動」ボランテイアの集め方，活動の説明について述べた。第2節「遊びマニュアルの使い方」レクレーション遊具のつくり方と使い方及び遊具を紹介する際の注意点について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
介護の基本・コミュニケーション技術	共著	平成22年9月	黎明書房	本書は介護の考え方について理解するとともに，介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ，介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とした。 A5判，全202頁 編著：守本とも子，星野政明 共著者：三浦辰哉，原田理恵，溝上五十鈴，土田耕司，羽柴香恵，河野喬，新谷奈苗，吉村雅世，西薗貞子，西元康世，甲田宗嗣，上本野唱子，石﨑利恵，川合百合子 本人担当部分：編集
生活支援技術・介護過程	共著	平成22年6月	黎明書房	専門職としての基盤を構築することを目的とした。心身の状況に応じた介護を実践するための生活支援の方法とそれらを展開していくための一連の過程として「介護過程の展開」について具体的な内容を盛り込んだ。 A5判，全219頁 編著：守本とも子，星野政明 本人担当部分: 第10章「終末期の介護」P.159-P.168を単著。 終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探った。
老年看護学 Geriatric Nursing	共著	平成22年12月	ピラールプレス	本書は高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた「老年看護学」（監修:川野雅資，編集：守本とも子,2007年）の改訂版である。国家試験対策のテキストとしても活用されてきた旧版の内容をさらに掘り下げ，高齢者の疾病構造の変容，健康に関連した高齢者のニーズの多様性などを考慮して，老年看護の実践に向けて，看護学生の必携のテキストとなっている。 A5版　全285頁 監修：川野雅資 編者：守本とも子 共著者：今村美幸，上平悦子，岡崎大資，岡本啓子，奥百合子，川口ちづる，甲田宗嗣，新川泰弘，新谷奈苗，土田耕司，富永尭史，舩瀬孝子，三宅美恵子，溝上五十鈴，守本とも子，山形力生，吉村雅世 本人担当部分：編著 第2章　2．高齢者の理解　「加齢と老化」P.2，P.57-P.65を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
医療福祉学の道標	共著	平成23年1月	金芳堂	本書は社会福祉学の視点から現代医療の課題を探求，解決していこうとすると同時に医療というフィールドにおける社会福祉的視点の意義への接近を試みた。医療の分野における社会福祉的なものとは何か，という課題に迫ろうとしている。①クライエントの心身の健康，②クライエントの住む時代と社会の状況，③クライエント個人（家族）の生活実態と生活背景と地域の状況，④医療と福祉の援助専門職の理論と技術，⑤医療と福祉の援助専門職の価値観，⑥援助専門職の連携について，の道標を明示することを目的としている。 B5判，全200頁 監修：日野原重明，西三郎，前原澄子，秋山智久 編集：星野政明，高内克彦，土田 耕司 共著者：守本とも子，天野博之，安藤詳子，石村由利子，伊藤健次，伊藤孝治，井上眞人，石﨑利彦，牛津信忠，大山朝子（他32名） 本人担当部分: 第2章 C 生活の変化と保健･医療･福祉の統合 P.23-P.26を単著。 生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第13章 A 少子高齢社会での医療福祉 P.163-P.165を単著。 今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ P.170-P.172を単著。 介護福祉から医療介護福祉へのパラダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し，今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉 P.184-P.185を単著。 情報化社会における医療福祉について，特に医療福祉とIT（Information Technology）との関連で述べた。今後，医療福祉のどの分野においてITがどのように活用されていくのか，その意義について考察した。
子ども家庭のウェルビーイング	共著	平成23年3月	金芳堂	近年，子どもの成長，発達を阻害する社会的因子や子どもへの虐待問題など，多くの課題が明らかになっている。子どものウェルビーイングを目ざした子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説している。 B5判，全128頁 編集代表：星野政明 編集：真鍋顕久，三友雅夫 共著者：守本とも子，荒木照子，伊藤博美，大熊信成，大谷恵，大塚弘子，河合由嘉，川添公仁，木村由美，嶋田芳男 （他19名） 本人担当部分: 第1章 A 少子化の進行と家庭・地域の変容 P.1-P.5を単著。 少子化の現状と家庭・地域の変容について概説した。また，現代社会における家庭・地域で生活する子どもの生活課題と対策について考察した。 第3章 B 子ども家庭福祉の実施体制 P.39-P.41を単著。 子ども家庭福祉について，どのような目的でどのような施策が実施されているのか，その現状について述べるとともに，今後の課題についても考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第8刷	共著	平成24年2月	医学書院	本書は「第1部　看護技術総論」「第2部　16領域の看護技術」の2部構成としている。第1部では看護技術の4つの基本原則とその優先順位について説明を行い，第2部では看護技術を16の領域に分けて説明している。改定にあたっては，それぞれの技術についてできるだけ，最新の方法を紹介し，その根拠を示すように心がけている。 B5判，全495頁 本人担当部分： 第2部　第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第2部　第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
介護実習入門	共著	平成24年1月	黎明書房	本書は介護の現状について述べ，介護の倫理，介護の原則についてわかりやすく説明している。また，介護施設の概要と入所者の特徴について述べている。次にそれらの知識を踏まえ，介護実習前の基礎知識として，まず，介護実習の意義と目的について述べ，介護を専門職とする人のための姿勢，そしてコミュニケーションの基本とコミュニケーションの実際について知識と技術が同時に学ぶことができるように工夫されている。 最後に介護過程について事例をもとにわかりやすく解説し，介護に必要な援助技術について述べている。 A5判，全128頁 編集：守本とも子，星野政明 共著者：横井賀津志，川口ちづる，真辺一範，土田耕司，奥百合子，辻下守弘，守本幸次，大山末美，新谷奈苗，真辺一範，岡崎大資，甲田宗嗣，山形力生，長島万弓，石井和 本人担当部分：編集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第16版	共著	平成25年1月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5判，全528頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，岡本啓子，尾崎章子，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，田村富美子，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，守本とも子，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第1章 A 「環境調整技術」P.9-P.21を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第6章 B 「清潔・衣生活援助」P.192-P.200を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得	共著	平成26年10月	すぴか書房	本書のテーマは「高齢者の」せん妄である。治療者の視点ではなく生活援助者の視点で，「安心をとどける」ためにどうすべきかを述べた。 A5判　全140頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，野中浩幸，酒井千知，奥百合子，川口ちづる，大谷須美子，川田美和，鎗内希美子，大西恵，横嶋清美，山田ゆきこ，亀山紀代美 本人担当部分： 第3章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72を単著。 本章では，せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく，とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって，せん妄の知識は必須だと言える。 第4章「せん妄が起きてしまったら」P73-86を単著。 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく，さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し，症状への適切な対応を学ぶ。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために	共著	平成26年11月	ピラールプレス	本書では，発展途上国の現状，リプロダクティブヘルスと母子保健のほか，我が国に滞在する外国人への看護についても取り上げている。また，学生が将来勤務地として希望するであろう発展途上国，および先進国への就業のほか，欧米諸国への就職についても紹介している。 B4判　全163頁 監著：守本とも子 編著：田中和奈 共著者：城戸口友香，高嶋愛里，高橋里沙，田中和奈，長谷川恵介，溝尾朗，守本とも子，龍現寺素子 本人担当部分： 第3節「国際協力機関の取り組み」P22-28を単著。 国際協力のいくつかの方法について知り，世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。
看護職をめざす人の社会保障と社会福祉	共著	平成27年4月	みらい	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また，すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 B4判　全211頁 編者：守本とも子 共著者：虎杖真智子，井上深雪，小澤香，鍵本由起子，黒野伸子，新谷奈苗，鈴木久美子，高林新，玉井純子，土屋昭雄，富永堯史，松浦信，真鍋顕久，三宅美恵子，村山くみ，森田隆夫，守本幸次，山口佳子 本人担当部分：編集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
シリーズ　看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き1 看護のための『教育学』	共著	平成27年12月	あいり出版	本書では看護専門職者が患者への健康面での教育指導を実践するにあたって，学ぶべき教育原理・教育心理学を踏まえた患者教育指導のノウハウを読者に伝え，日常の看護実践のスキルアップに繋げていきたい。 B4判　全151頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，松田智子，虎杖真智子，鎌田首治朗，松浦純平，中尾友美，武富由美子，山口曜子，佐々木千恵，新谷奈苗，東中須恵子，岡本響子 本人担当部分： 第2章　3「教授理論」P22-25を単著。 第2章　4「現代の教授理論」P25-28を単著。 教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に，教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第2章3），主要な教授理論について説明する（第2章4）。 第2章　5「人格」P28-P29を単著。 教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく，全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 第2章　6「教育心理学と患者指導」P29を単著。 本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが，教育心理学がどのように患者指導に有用か，例をあげて考える。
系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第17版	共著	平成29年1月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5判，全520頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，今井宏美，尾崎章子，後藤奈津美，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，辻守栄，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，守本とも子，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第1章 A 「環境調整技術」P.10-P.24を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，吉村雅世 第6章 B 「清潔・衣生活援助」P.153-P.211を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，吉村雅世

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部5章～８章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5判　全180頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，　立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分： 「第9章　高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」P36－P49を単著 慢性的な高齢者の痛みについて，痛みと動作について説明し，痛みに関する観察の力を養う。そして高齢者の痛みの主訴の特徴を述べ，痛みの原因となる疾患または治療について述べる。また，痛みのアセスメントツールを紹介し看護者が利用できる一般的な痛みのアセスメントスケールを学ぶ。代表的な痛みのツールはVisual Analogue Scales (VAS)である。さらに本書では痛みの有無に焦点をしぼるpain VASを紹介し，看護ケアの実践として痛みの治療とケアプランについて述べる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
Factors Relating to Life Satisfaction and Subjective Healthy Feelings in Respiratory Patients During Home Oxygen Therapy （在宅酸素療法中の呼吸不全患者における主観的健康感と生活満足度の関連因子） （査読付）	共著	平成21年3月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare 日本医療福祉情報行動科学学会誌 vo.1 No.1 March 2010 P.5-P.12	在宅酸素療法中の呼吸不全患者（32名）を対象に面接とBaseline Dyspnea Index(BDI), Geriatric Depression Scale (GDS), Modified Barthel Index (MBI) などの質問紙票調査を行い，主観的健康感と生活満足度に有意相関を持つ項目を探索した。主観的健康感は自信，呼吸困難感，疲労感と有意相関を示し，生活満足度は収入，呼吸困難感，日常抱える課題と有意相関を示した。GDS平均値は7.6と高値を示し鬱傾向にあった。以上より主観的健康感の低下は自信喪失とうつ状態を惹起し，呼吸困難は主観的健康感と生活満足度の両者に影響することが示唆された。症状軽減が在宅酸素療法患者の健康関連QOLを向上させると考えられた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子，下内章人，馬場隆明
精神学的障害者の気分アセスメント～ヴィスアルアナローグ気分スケールの日本語版の妥当性～ （査読付）	共著	平成21年5月	日本福祉工学会誌 11(1) P.42-P.48	本研究の目的はヴィスアルアナローグ気分スケールの日本語版(VAMS)の妥当性を調べることにある。 VAMスケールは，脳卒中，アルツハイマーあるいは外傷脳などの神経学的障害をもつ患者の気分を調べるために開発された。典型的な心の健康と気分を測定するスケールは被験者の言語能力を基礎にしている。しかし，これらの検査は神経学的障害者にはしばしば不適切である。したがって，VAMスケールはこの母集団の気分を評価するために開発されたものであり，被験者の認識能力および/あるいは発言能力に依存しているスケールよりも，いくつかの点において有利である。 VAM スケールの妥当性は高齢者の二つの母集団を対象に調査された。 対象は1.ある民間の精神病院から抽出した重症あるいは軽症の鬱病と診断された高齢者（37人）と，2.地域のレクレーションセンターから抽出した精神病の既往歴のない高齢者（74人）であった。 担当部分：統計解析と考察をおこなった。 共著者:守本とも子，Andrea S. Schreiner，早川浩，馬場孝明
部屋の住み心地に及ぼす物理的・感覚的因子の組み合わせ解析 ―ファジィニュートラルネットワークによる住居環境解析― （査読付）	共著	平成21年6月	日本感性工学会論文誌 Vol.9 No.1 P.97-P.102	本研究により，住居環境，すなわち住居に関する物理的因子(室内環境や室内空間)や感覚的因子(部屋から受ける情感)が住む人の満足感に深く関連していることが明確となった。今回FNN解析により選択された項目から，住居環境を工夫して整えること(例えば，新しいカーテンを取り入れて部屋の色彩を変える，寝室用のフロアライトやテーブルライトの購入により夜間照明を変え，くつろげる雰囲気を作るなど)が，住む人のQOLを高めるために重要な要因であることを示唆していると考えられる。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:牛田泰徳，加藤竜司，守本とも子，本多裕之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Restraint Plus Water-immersion Stress (RWIS)-induced Stomach Ulsers in Mice are Depressed by a Conditioning Heat Treatment （あらかじめの温熱環境曝露による水浸拘束誘発マウス胃潰傷の抑制） （査読付）	共著	平成21年9月	Japanese Journal of Hyperthermic Oncology 日本ハイパーサーミア学会誌 Vol.25, NO.3. September,2009 P81-P87	温熱耐性として，あらかじめの温熱処理が重篤な温熱誘導生物影響を抑制することはよく知られている。本論文において，われわれはあらかじめの温熱処理が水浸拘束ストレス(RWIS)による胃壁の損傷を抑制するかどうかを確かめた。RWISによる胃潰瘍は42%発生したのに対して，あらかじめ37℃で温熱処理をすると9%に抑制された。さらに，胃におけるRWIS誘導アポトーシス頻度は13%であったのに対して，あらかじめ温熱処理をすると8%に抑制された。温熱ショックタンパク質(HSP)誘導剤のゲラニルゲラニルアセトン(GGA)も胃潰瘍の発生を抑制したことから，あらかじめの温熱によるHSPがアポトーシス誘導の抑制を介してRWISによる胃壁の損傷を抑制していることが示唆された。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括を行った。 共著者:Rikio Yamagata, Akihisa Takahashi, Xiaoming Su, Tomoko Morimoto, Takeo Ohnishi
Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care （介護用“動物の縫いぐるみ”の効用） （査読付）	共著	平成22年9月	Proceedings of 6th International Conference of Health Behavioral Science 日本保健医療行動科学会第6回国際会議論文集 P.260-P.262	本研究は高齢者の癒しとQOLの向上のための温かい介護用縫いぐるみを考案し，認知症高齢者が実際に縫いぐるみを使用した後，どのような変化が見られたかをコーエンマンスフィールド（CMAI）スケールを使用して検討した。縫いぐるみを使用する前後1週間の観察をもとに比較検討した。変化の見られた行動は，同じことを繰り返し質問する，机を何度も叩く，といった行動が有意に減少した。高齢者が温かい縫いぐるみを身近におくことは高齢者の癒しに効果をもたらすことが示唆された。 本人担当部分：データーの解析，研究の総括を行った。 共著者：Tomoko Morimoto, Nanae Shintani
Discussion of emergency notification device for elderly people （高齢者のための緊急通報機器の検討） （査読付）	共著	平成22年11月	Ergonomics for All ： Celebrating PPCOE’S 20years of excellence ーLin&Chen(eds) P.495-P.501	高齢者の緊急時の不安を軽減し安心して暮らせる社会を実現すべく，各市町村では家庭用緊急通報機器の貸与による支援をおこなっており，これにより高齢者の不安解消と安全確保，QOL向上を目指している。しかしながらますます需要の拡大が予測されているにも関わらず実際は低い普及率である。本研究ではH市に居住する在宅高齢者を対象に聞き取り調査をおこない，緊急通報機器の使用状況を明らかにし，高齢者にとって活用しやすい機器の開発や，運用方法の改善につなげることを目的とした。その結果，緊急通報機器の使い方の理解や緊急通報機器の形状について改善すべき点が明確になった。 本人担当部分：調査および結果の考察を行った。 共著者:Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Kazuko Horiguchi, Tomoko Morimoto

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
A questionnaire to determine Nursing and Child care students` Understanding of welfare equipment （看護と保育を学ぶ学生の福祉用具の認識についての認識） （査読付）	共著	平成22年11月	Ergonomics for All：Celebrating PPCOE'S 20years of excellence－Lin&Chen(eds) P.529-P.532	子どもと大人の主要な福祉用具への認識について，看護と保育を学ぶ学生間の比較を目的に調査を行った。その結果，認識の違いはカリキュラム等の教育の内容によって影響を受けていることが考えられた。また，因子分析の結果により，双方とも「遊び」が重要なキーワードであることが考えられた。 本人担当部分：研究の企画および結果の考察をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto, Shoko Kamimotono, Nanae Shintani
Study of quality of life (QOL) in home oxygen therapy patients and related factors of actual life situation （在宅酸素療法患者の生活実態とQOLの関係） （査読付）	共著	平成23年10月	East Asian Ergonomics Federation Symposium 2011 (EAEFS 2011) Ergonomics In Asia:Development, Opportunities, and Challenges P.295-P.300	在宅酸素療法は種々の在宅医療の中で最も普及し，その効果は単に患者の生命予後を延長するばかりでなく，人間的な生活とQuality of Life (QOL) を保証するものとして高く評価されている。しかし反面，社会的・精神的・身体的煩わしさのため，社会活動が制限され，閉じこもりがちとなることで抑うつ症状となり，急性増悪を招くという報告もある。そこで生活実態とQOLとの関係をより深め明らかにするため，患者のQOLに影響を及ぼす生活実態の関連要因を検討することを本研究の目的とした。結果，「患者活力」と「患者心の健康」が「肺理学療法理解度」に有意に関連していた。肺理学療法の理解度が高い者は，認知能力も高く自己管理ができており，これが自分の疾患を前向きに受けとめ，活力を維持することにつながっていると考えられ，自己管理能力を身につけるための患者教育を繰り返し行ない，普及させていくことの必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共著者：Nanae Shintani, Tomoko Morimoto
医療系大学におけるチーム医療の実際―医療のパラダイムシフトに向けて― （査読付）	単著	平成24年6月	日本保健医療行動科学会雑誌 Vol.28 No.1 2013 P.2-P.6	チーム医療教育は岐阜医療科学大学の建学の精神である「人間性」「学際性」「国際性」の向上を目的とし，本学の特色を活かした独自のプログラムである。 チーム医療に最も必要とされる資質を担保し，現在の医療現場で通用する”医療人”となることを目標とした教育の充実について考察した。
Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （健常高齢男性の夜間における交感神経バランスと生活満足度との関連） （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 2012 P.1068-P.1072	夜間自宅で起床中の健常高齢男性39名の心拍変動（RR間隔）と身体加速度を計測した。 身体加速度の低い時間についてのみ，心拍変動データの高周波帯域パワーの規格値（値が高いほど副交感神経優位）を算出した。その値と質問紙より点数化した生活満足度との間に統計的有意な負の相関を確認した。この結果より，生活満足度の高い健常高齢男性ほど，夜間自宅で起床安静時に交感神経系優位にあることが示唆された。 本人担当部分：データー解析と論文の構成を担当した。 共著者：Kohzoh Yoshino, 守本とも子, Takahiro Itagaki, shigetaka Iketani, Masami Nagata, Morihiro Thujishita

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
The Factors that Inhibit the Health Behaviors of Adulthood Women （成人女性の保健行動を抑制する因子について） （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究　第3号 2015　P.1-P.8	本研究では，初発の乳がん患者で，手術療法の後に化学療法の2回目を終了した以降の患者から，仕事を継続している患者を対象とし，「仕事を継続してく上での困難」について個別に半構造的インタビューを行った。 この結果，7つのカテゴリー，「治療の副作用からくる身体的苦痛」「仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ」「再発への不安から仕事をセーブする」「職場の配慮不足」「受診のしにくさ」「治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安」「病名告知により同僚に気を遣われる辛さ」で構成されていた。 本人の担当：研究の総括を行った。 共著者：新谷奈苗，小池恵理子，守本とも子
身体拘束一時的中断に関する看護師のアセスメントの視点についての考察 （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究　第3号 2015　P.13-P.19	本研究の目的は，精神科病棟で身体拘束中患者のケアに携わる看護師が，日常生活援助場面において，拘束一時中断が可能かどうかのアセスメントをどのような視点で行っているかを明らかにすることである。 その結果，≪疎通が図れる≫≪約束が出来る≫≪興奮・大声がない≫≪暴力がない≫≪緊張がない≫≪穏やかである≫≪食事が食べられる≫≪夜間睡眠がとれる≫≪自傷がない（うつ状態の患者）≫の9つのカテゴリーが見出された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者:上山千恵子，守本とも子
認知症高齢者を介護する娘介護者の体験 ―介護生活の中で体験する困難と，介護生活の支えとなるもの―	共著	平成28年10月	奈良学園大学紀要第5集 p. 67-79	在宅認知症高齢者の介護者（娘）が体験する困難と，介護者の介護生活での支えとなっている要因について明らかにした。調査対象は在宅娘介護者15名で半構成的面接調査をおこなった。その結果，介護者が体験する困難として「親の現状を受け止める難しさ」「役割の両立から生じる困難」　「自分がやらなければ」「介護協力者との間に生じるずれ」などの7カテゴリーが，生活の支えとなっているものとして「変わっていく親を共有できる存在」「介護を分担してくれる家族」「介護効果の実感」などの4つのカテゴリーが抽出された。このような娘介護者特有の状況を理解したうえでの支援が重要であることが示唆された。 本人担当部分：調査と研究の総括をおこなった。 共著者:上山千恵子，田場真理，守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Influence of Job Stressor on Coping Behavior （仕事ストレッサーが対処行動に与える影響） （査読付）	共著	平成29年2月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare 医療福祉情報行動科学研究 Vol 4. 2017 p. 51-60.	食品製造業者に勤務する従業員168人を対象とし，仕事ストレッサー因子が対処行動にどのように結びついているかを検証した。重回帰分析の結果，計画的対処行動と要求度，裁量度，技能活用に有意な関連性があり，自己管理能力が高く，目標達成まで自分なりに計画を立て行動する傾向にある者が計画的対処を採用する傾向にあることがわかった。また，積極的協力依頼行動と，サポート・技能活との間に有意な関連性があり，周囲とコミュニケーションが良好でサポーティブな状況が背景にあり，また課題を整理し他者に伝えられる知識や技術のある者が，積極的協力依頼を採用する傾向にあることがわかった。計画的対処，積極的協力依頼といったポジティブな対処を実行するためには，本人の知識や技術を活用できる仕事に就かせることや，普段からのサポーティブな組織作りが大事であると考えられる。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。。 共著者: Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Tomoko Morimoto
（その他 ）				
―事典―				
介護福祉学事典	共著	平成26年10月	ミネルヴァ書房	本書は「介護福祉学」の構築のためのエビデンスを確立することを主たる目的としている。隣接領域の学問を学びつつ介護福祉学特有の学問体系を構築することが重要である。 「介護福祉学事典」は介護の社会的ニーズに対して，専門的な知識を持って対応できる人材の育成とサービスの向上に寄与するため，教育の根拠となる「介護福祉学」に関する知識・技術の共通理解のツールとして活用できる内容とした。 B5判　全829頁 共・編者：日本介護福祉学会事典編纂委員会 本人担当部分：P546-547を単著。 「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ，障害児に関する介護，福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また，障害児に対する介護について，近現代史から，ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し，障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき，活動することができるための展望と課題について考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
―研究報告書―				
「健常高齢男性の住居内QOLと自立神経活動との関連性」	共著	平成21年3月	平成21年度住居医学共同研究成果報告集 奈良県立医科大学　住居医学大和ハウス寄付講座 P.115-P.116	本研究の目的は，健常高齢男性の暮らし・部屋全般や各住居内環境因子に対する主観的評価度と生活の自立神経活動との間の関連性を明らかにすることである。研究結果より，「くらし・部屋」全般に関する項目の中では生活に満足している被験者ほど，HFnuの値が低い傾向が確認された。「住居内環境因子」に関する項目と心拍変動指数との間には統計的有意な相関を示す組み合わせはなかった。これらの結果から，生活に満足している健常高齢男性ほど，夜間20:00時から20:50までの在宅・覚醒・低運動時に交感神経系有意（精神的にアクティブな状態）にある傾向が示唆された。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：守本とも子，吉村雅世，吉野公三，上平悦子，三毛美恵子，板垣孝寛， 池谷茂隆，永田昌美，辻下守弘
「乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発」	共著	平成26年3月	文部科学省学術振興会 文部科学省科学研究費助成金（基盤研究C）研究成果報告書 （平成23年～平成25年） A4判，全27頁	本研究では，乳がんを患い外来で化学療法を受けているものの就労を継続している者を対象として，対象者の抱えている苦悩や課題をインタビューにより明らかにした。またその結果をもとに，患者支援の関係機関が集まり，援助のあり方についての検討を行った。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：新谷奈苗，守本とも子，立川茂樹，岩永誠，堀口和子，中村百合子，小池恵理子，永岡裕康，新谷昌也
―総説―				
アルツハイマー病患者家族介護者へのサポートグループを用いた対処技術指導について	共著	平成20年9月	看護実践の科学 看護の科学社 VOL.33 NO.10 P.72-P.80	対処技術を指導する上でのサポートグループ利用法に注目し，支援グループを指導する看護師のグループセラピーの方法について述べる。特に支援グループを始める前のグループセラピー理論とその技術の必要性を述べる。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:アンドレア・S・シュナイザー，佐伯あゆみ，守本とも子
地域で生きるデンマークの高齢者住居	単著	平成22年5月	大阪保険医雑誌 大阪府保険医協会 第38巻522号 P.30-P.35	北欧諸国のなかでも「高齢者住居」について独自な発展を遂げ，1987年に施設建設を凍結するという政策転換に踏み切ったデンマークの高齢者住居と日本の画期的な高齢者共生住宅の事例を取り上げ，新しいステージに突入した日本の今後の高齢者住居の在り方を検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	平成28年3月	ばんび NPO法人奈良県腎友会 2016年　春号　No.87 P.3-P.12	終末期医療についての関心の高まりとともに終末期腎不全医療のありかたについての議論も高まりをみせている。透析患者の終末期の意思決定を支える医療・ケアは転換期を迎え，今まさにその実現に向けて大きく動きはじめている。しかし，透析患者は生きるため，命を繋ぐために透析を選択しているのであって，終末期のことを主体的に考えることは，健康な人がそれについて考えるほど容易なものではない。 そこで，平成27年8月下旬～9月下旬にかけて奈良県腎友会事務所の協力を得て，会員の皆様を対象に「終末期透析についての意識と実態調査」を実施し，その結果をまとめた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子，田場真理
地域で生活する高齢者の災害時非難状況に関する文献検討	共著	平成29年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.4 P.19-P.25	世界各地で自然災害が増加している。高齢者人口の割合が世界で比較的高い国々での自然災害が増加しているという現状がある。このような状況にありながら近年,わが国の高齢化は加速しており,高齢者人口の割合は世界で最も高い。東日本大震災では死者うち60歳以上の比率はおよそ6割であった。そこで,2006年から2016年までの文献を検討することで,高齢者の防災の実態を分析し,今後の課題を明らかにすることを目的とした。その結果,現在,国などの関係機関が防災対策に多く取り組んでおり,高齢者の防災意識も高い一方で,実際の防災行動が十分に取れていないといった結果が得られた。災害が続発する中,早急に防災行動が迅速かつ適切に行えるための対策を検討する必要があることが示唆された。 共著：丸上 輝剛，新谷 奈苗，守本 とも子. 本人担当部分：研究の総括をおこなった。
―国際会議発表―				
Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care （介護用ぬいぐるみの効果）	－	平成22年9月	6th International Conference of Health Befavioral Science Sustainable Health Promotion:Dialogue on Well-being & Human Security in Environmental Health (Kuala Lumpur, Malaysia)	本研究の目的は，施設入居高齢者の癒しとQOLの向上を考慮した「温かい介護用縫いぐるみ」の効用を検討することである。コーエンマンスフィールド（CMAI）調査票をもとに縫いぐるみ使用前・後の高齢者の行動の変化を比較した。結果として「同じことを繰り返し言う（質問する）」に有意な差がみられた。 担当部分：研究の総括を行った。(P.86) 共同発表者:守本とも子，新谷奈苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Study about quality of life(QOL) of home oxygen therapy patient and related facters of actual life situation （在宅酸素療法患者のＱＯＬと生活実態との関連について）	－	平成23年10月	Proceeding of the 2nd East Asian Ergonomics Federration Symposium (EAEFS 2011)National Tsing Hua University, Hslnchu Taiwan, 4-8 October 2001　P.48	在宅酸素療法患者の生活実態とQOLの関連を明らかにするために，患者のQOLに関連する生活実態の要因を検討した。その結果，患者の活力や心の健康に肺理学療法の理解度が高いことが明らかになった。肺理学療法の理解度が高い患者は認知能力も高く，自己管理ができており，疾患があっても前向きな生活を送っていることが明らかになった。自己管理能力を身につけるためにも理学療法などを積極的に行う患者教育の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究データーの解析，総括を行った。 共著者：Nanae　Shintani，Tomoko Morimoto
Difficulty in continuing job for breast cancer patients getting chemotherapy （化学療法後の乳がん患者が仕事を続ける上での困難）	－	平成24年3月	30th Congress of the International Commission on Occupational Health (ICOH　2012),Cancun center (Mexico)	乳がんの治療は化学療法を含むことから，副作用による身体的苦痛を伴う。しかし外来通院で治療を受けながら仕事をこなしている患者が多いことから，通院により化学療法を受けている乳がん患者の仕事と治療を継続していく上での困難を明らかにすることを研究の目的とする。 A県内のがん拠点病院で乳がんと診断され，化学療法を受けている患者で仕事を継続している患者6名を対象とし，「仕事を継続していく上での困難」について半構造的インタビューを行った。結果から７つのカテゴリが抽出された。カテゴリは【治療の副作用からくる身体的苦痛】【仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ】【再発への不安から仕事をセーブする】【職場の配慮不足】【病院のシステム上の不便】【治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安】【病名告知により同僚に気を遣われる辛さ】で構成されていた。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：Nanae Shintani，Tomoko Morimoto

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Remote Fitness System Advantages with Exercise Classes for Community-dwelling Older People (地域在住高齢者の運動教室に遠隔フィットネスシステムを使用する利点)	―	平成29年4月	32nd International Conference of Alzheimer's Disease International, Kyoto, Japan	自宅で生活する地域在住高齢者を対象とした運動教室に遠隔フィットネスシステムを用いることの可能性を明らかにすることを本研究の目的とした． 奈良県内の特別養護老人ホーム1施設に遠隔フィットネスシステムを設置し，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室を週1回30分間自宅で生活する65歳以上の地域高齢者10名に対して1ヶ月間開催した．その結果，対象者の属性は女性9名，男性1名．平均年齢は81.5歳（SD=5.8）であった． 分析の結果，遠隔フィットネスシステムを使用した運動に参加して悪かったことについての訴えはなく，利点についての意見のみであった． 遠隔フィットネスシステムの利点として，32コード，8サブカテゴリー，4カテゴリーが抽出された．地域高齢者は運動内容を覚えていることができないため，自宅にて一人で運動を行うのは難しいと感じていたが，遠隔フィットネスシステムを使用すれば運動指導者の動きを実際に見ることができ，指導者からの指示をその場で受けながら運動を行えるため，真剣に運動に取り組むことができ，効果的な運動の実施につながっていると感じていたことが明らかとなった．これらのことから，遠隔フィットネスシステムを使用すれば，認知症など記憶障害がある高齢者に対しても効果的な運動指導が行える可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画書の立案と調査結果の分析をおこなった． 共同研究者：田中和奈，吉村雅世，吉村昌子，東中須恵子，守本とも子
―国内学会発表―				
住居における快適性評価スケールの開発	－	平成20年11月	日本福祉工学会第12回学術講演会講演論文集 山梨大学（甲府市）	本研究では，住居環境要因と心理的・身体的QOLの関係性を分析するための基礎資料として住居の快適性評価スケールを作成した。その結果，3因子が抽出され，第1因子は“空間”，第2因子は“光”，第3因子は“情緒”と解釈された。また信頼性の検討のため，クローンバックのα係数を算出したところ，各下位尺度とともに0.78以上の内部一貫性がみられた。(P.89-P.90) 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：守本とも子，青山美智代，浅見恵梨子，上平悦子，岡本啓子，勝井伸子，三毛美恵子，吉村雅世，星野政明
看護・保育学生の福祉用具に対する認識の検討	－	平成20年11月	日本福祉工学会第12回学術講演会講演論文集 山梨大学（甲府市）	福祉用具に対する認識状況を知るため，保育学生（専門課程110名，短大生110名），看護学生（大学3年次80名）に対し，質問紙調査により福祉用具，離乳食，調理された食品及び遊び道具について高齢者，小児どちらに使用する認識が高いかについて検討した。看護と保育専門課程の学生は類似の傾向を示し，ほとんどの項目において高齢者が使用するという認識が高かった。保育短大生においては遊びに関して子どものものと認識していた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：上本野昌子，守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
在宅酸素療法患者と介護者のQOL ～ 国民標準値との比較～	－	平成21年3月	日本医療福祉情報行動科学会 第４回大会抄録集 （兵庫県　甲南女子大学）	患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために，SF-36v2 質問紙をもちいて，患者と介護者のQOL を把握し，性，年代それぞれの国民標準値と比較した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.15) 共同発表者:新谷奈苗，守本とも子
脳血管障害患者の心理適応面の数量化について ～障害受容スケールの作成と臨床的応用～	－	平成21年3月	日本医療福祉情報行動科学会 第４回大会抄録集 （神戸市）	医療者の経験などによらない客観性の高い，簡便な評価法の検討が必要と考え，脳血管障害患者について障害受容スケールによる数量化の可能性と臨床的応用について述べた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.16) 共同発表者:山形力生，　櫻井秀雄，守本とも子
QOL of home oxygen therapy patients and caregivers comparison with standard value （標準値を用いた在宅酸素療法患者と介護者のQOLの比較）	－	平成21年8月	第13回日韓健康教育シンポジウム 兼　第57回日本教育医学会大会抄録集 （ソウル市）	本研究では，患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために，SF-36V2質問紙をもちいて，患者と介護者のQQLを把握し，性別，各年代それぞれのQ-100得点標準値と比較し検討した。 対象者は40歳以上で広島県T市の訪問看護ステーションとH市の総合病院に通院している在宅酸素療法患者とその介護者30組であり，訪問による面接調査を実施した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.77) 共同発表者:新谷奈苗，守本とも子
あらかじめの温熱刺激によるストレス防御効果について	－	平成23年3月	日本医療福祉情報行動科学会第6回大会抄録集 （岐阜市）	精神的ストレスの一種として，マウス個体に対する水浸拘束ストレスによる胃潰瘍発生モデルを用い，あらかじめの温熱刺激がその後のストレス暴露への防御効果を示すことを検討した。免疫染色法の解析結果で，あらかじめの温熱処理群では8.2%のアポトーシスの減少がみられた。(P.11) 本人担当部分：結果の分析をおこなった。 共同発表者:山形力生，高橋昭久，守本とも子，大西武雄
地域における福祉講演「QOLを高める高齢者の生き方」（１）―「ストレスに関する学びの検討を中心に―」	－	平成23年6月	日本保険医療行動科学会第26回学術大会抄録集 （大阪府高槻市）	本研究の目的はQOLを高める高齢者の生き方をテーマとした地域住民のために企画した福祉講演への参加による地域住民の学びの成果を検討した。福祉講演での学びを今後の生活の中で具体的に活用していこうと考えているとともに，福祉講演会に参加したことが今後の生きる糧になっていたことが推測された。 本人担当部分：福祉講演会の講師であり，講演後のアンケートの分析を行った。 共同発表者：新川泰弘，守本とも子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
在宅酸素療法患者のQOLに影響を与える介護者の支援方策の検討	－	平成24年3月	日本医療福祉情報行動科学会第7回大会抄録集（大阪市　メルパルク大阪）	不可逆的に進行する肺病変がある慢性呼吸不全患者の在宅療養生活を維持するためには，気道感染の予防や日常生活活動の適切な制限といった患者自身の自己管理に加え，それを支える介護者の役割が重要である。本研究では，患者のQOLに影響を及ぼす介護者への支援方策を検討することを目的とした。(P.12) 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：新谷奈苗，守本とも子
看護師国家試験の出題基準に沿った講義内容の検討	－	平成24年6月	日本保健医療行動科学会第27回　抄録集（岐阜市）	本研究では，看護師国家試験出題基準に沿った小項目に対する講義の有無を明らかにし，教授内容の過不足や効果的な教授について検討することを目的とした。(P.78) 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：渡邊美幸，奥百合子，小平由美子，箕浦文枝，守本とも子
高齢者を対象とする調査研究の評価について －介護老人福祉施設でアクティビティケアとして遠隔フィットネスシステムを用いる研究から－	－	平成29年6月	日本保健医療行動科学会雑誌　（千葉県鴨川市）	本研究の目的は特別養護老人ホームに入所する高齢者に対し遠隔地フィットネスシステムを用いた運動療法の実施から，要介護高齢者を対象とする調査研究の方法について示唆を得ることである．対象は介護老人福祉施設入所の高齢者９名(女性1名、男性8名)．調査期間は平成28年5月～6月．平均年齢86.6歳，要介護度1～４(平均2.4）であった。フィットネス運動は1回30分，週に1回火曜日の13:00～13:30の時間で計4回実施した．実施の初回と終了後、健康感と生活の満足感をVASスケールで評価した．終了後グループフォーカスインタビューにより感想を聴取した．インタビュー内容の分析を行い，VASスケールは統計的処理を行った．その結果、実施前後で健康感が数値的に低下していた。このことは「思うように動かない身体を実感する」ことになり健康感に影響するものであったと考えられる．高齢者の感想からは，ただ運動するだけでなく個別な対応を受けることを心地よく感じていると考えられた。介護に関わる職員の言動は効果があったと判断できるものであった． 本人担当部分：研究計画の策定と分析をおこなった。（P.67） 共同発表者：吉村雅世、田中和奈、守本とも子、東中須恵子、吉村昌子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
―シンポジウム―				
第23回日本保健医療行動科学会学術大会	－	平成20年6月	主催：日本保健医療行動科学会事務局 山梨県甲府市 山梨学院大学	一般演題発表　座長
第56回教育医学会学術大会	－	平成20年8月	主催：教育医学会 大阪府柏原市 大阪教育大学	一般演題発表　座長
第25回　日本保健医療行動科学会学術大会	－	平成22年6月	主催：日本保健医療行動科学会 群馬県前橋市　前橋プラザ元気21	一般演題発表　座長
第41回日本看護学会　老年看護　学術集会	－	平成22年9月	主催：日本看護学会 奈良県奈良市 なら100年会館　大ホール	演題：「高齢者のQOLを追及する―今果たすべき看護の役割」 コーディネーター
6th International Conference of Health Befavioral Science（第6回国際保健医療行動科学会議）	－	平成22年9月	主催：International Conference of Health Befavioral Science マレーシア クアラルンプール	演題:"Religious Hypnosis" ファシリテーター
第26回　日本保健医療行動科学会　学術大会	－	平成23年6月	主催：日本保健医療行動科学会 大阪府高槻市 大阪医科大学看護学部	基調講演：「災害とリスクコミュニケーション」座長 ポスター発表　座長
第27回　日本保健医療行動科学会　学術大会	－	平成24年6月	主催：日本保健医療行動科学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	基調講演：「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」 講師
第9回　日本フットケア学会　岐阜セミナー	－	平成24年9月	主催：日本フットケア学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	一般講演：「フットケアのための足の解剖とケアそして歩行」 座長
日本サーモロジー学会第33回大会	－	平成28年5月	主催：日本サーモロジー学会 奈良県奈良市 奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス	招待講演：「がん看護と体温」 講師

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
―マスコミ―				
新聞	－	平成20年8月	奈良新聞社 ならリビング	高齢者の住まいに関する記事。これから必要なのは，生きる主体として高齢者を考えることであり，自分の人生は自分でデザインすることが大切である。
	－	平成20年9月	毎日新聞	介護用縫いぐるみの効用についての研究結果に関する記事。認知症高齢者に遊び療法の必要性を述べた。
文部省科学研究費およびその他の研究助成金				
大和ハウス「住居医学」研究奨励金	－	平成20年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,300千円 研究代表者：守本とも子
大和ハウス「住居医学」研究奨励金	－	平成21年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,500千円 研究代表者：守本とも子
文部科学省科学研究費補助金　基盤研究C	－	平成23年～ 平成25年	文部科学省	研究題名：乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発 研究助成金：4,200千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
文部科学省科学研究費補助金　基盤研究C	－	平成26年～ 平成28年	文部科学省	研究題名：乳がん患者の就労を支える Job recovery path の開発 研究助成金：4,550千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
奈良学園大学保健医療学部共同研究費	－	平成28年	奈良学園大学	研究題名：看護学生と進める健康づくり支援キャラバン隊ー奈良県内過疎地域を対象にー【2015年度継続課題】 研究助成金：500千円 研究代表者：東中須惠子 分担者：守本とも子
奈良学園大学保健医療学部共同研究費	－	平成28年	奈良学園大学	研究題名：照度アップ窓のブライトケアの可能性の研究ー認知症高齢者の睡眠支援ー 研究助成金：400千円 研究代表者：吉村雅世 分担者：守本とも子

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　吉村　雅世

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	高齢者、老年看護学、QOL、物語、人間行動科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ―講義― 1）奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」(援助論)		奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」(援助論)　(2年次生80名、通年2単位60時間）で講義内容と進行計画及び評価方法等を示すことで、学生に授業の概要を周知すると共に、予習・復習できる内容を示すことで学習効果を高めることを目的とした。
⑰「昭和を生きた高齢者」をテーマにグループワーク、スライドで成果発表の活用。	平成17年4月 ～平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間中、4～6時間）において下記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用した。 ①シラバスの活用 ②プロジェクターを用いたスライドの活用 ③教科書以外に講義用資料を作成し活用 ④「出席表」によるミニレポートの活用 ⑥講義用教科書の作成と授業への活用一部執筆（再掲） ⑦グループワークと発表を活用 ⑧課題レポートの活用 ⑨高齢者体験の活用　市販の高齢者・障害者体験装具の活用、学生と共にOHPシートを用いて高齢者眼鏡を作成し、体験学習で活用する。 ⑩視聴覚教材の活用 ⑪ビデオ・DVD映像の活字化 資料作成、活用 ⑬ナラティブアプローチの視点を取り入れたグループワーク
	平成22年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間）において上記①～⑬を工夫･活用した。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「看護学概論」（2年次生100名、後期30単位）で上記①～⑬を工夫･活用している。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」（3年次生100名、前期60単位）で上記①～⑬に下記5項目を追加し、工夫･活用している。 ⑤事例による看護過程のペーパーシュミレーションの活用 ⑫アクティビティケアの企画・実践を演習として実施する。 ⑭福祉パーク体験見学の活用 ⑮アセスメントツーツの冊子の作成・活用 ⑯看護の実際をリアリティにシュミレーションするための事例の工夫・活用
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科選択科目「看護概論」（3年次生100名、後期15単位）で上記①～⑬を工夫･活用している。
⑱デジタル教科書の活用	平成24年12月 ～平成23年3月	ナーシンググラフィカ全34冊の電子教科書を活用している。特に「高齢者の健康と障害」「高齢者看護の実践」を講義中では、図表や映像をスライドとして活用している。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」「老年臨床看護実習」で活用している。

事項	年月日	概　　要
2）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学概論」(2年次　後期　80名) 「老年看護学援助論」(3年次　前期　80名)	平成27年10月 ～現在に至る 平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科「老年看護学概論」(2年次後期　80名)「老年看護学援助論」(3年次　前期　80名)では授業計画を作成し、授業計画に沿って15回の講義を行っている。前述の①～⑤、⑦～⑫、⑯～⑱は一部変更し継続した。②での毎回スライドは16枚とし、ファイルしやすいように工夫した。④の毎回の小レポートでは、必要時フィードバックし共有している。学生が誤った理解している場合の対応、学生の質問に答える機会にもなっている。授業初日の小レポートには「高齢者のイメージを色で示すことを促す」。毎年ではあるが灰色、茶色、オレンジが多い。これは介護学生も、放射線科の学生も同じ傾向にある。 ⑥作成に関わった教科書は使用せず、ナーシンググラフィカシリーズ(メディカ出版) と看護学講座(医学書院) をデジタル版と伴に活用した。⑨高齢者体験装具は部分的装着型の「老いたろう」からスーツタイプに変更した。高齢者体験めがねの材料を透明クリアホルダと黄色セロファンに変更した。⑭福祉パーク見学は地域的に活用困難となり、その代わり学内演習に組み込み継続している。⑮アセスメントツールは規模を縮小して活用している。⑱では⑥と重複するが医学書院のデジタル版を併用し活用している。
⑲　動画の作成　ipadで活用 ・高齢者体験の方法 ・呼吸器検査の看護	平成27年10月 ～現在に至る	⑲動画　ipadで学生が視聴できる動画を作成した。訳10分　高齢者体験用装具の装着、歩行や階段昇降、見え方、巧緻作業の困難等を順を追って経験できるように工夫した。学生は個々にipadから実際の映像で予習をして、演習に望むことを期待している。
⑳認知症サポーター養成講座　1コマを使い認知症とケアの理解を深める。認知症サポーターとして認知症患者と関わる動機付けも期待している。	平成28年4月 ～現在に至る	⑳授業の中で大学の所在地の地域包括支援センターに依頼し、学生を対象に認知症サポーター口座を開催した。既習の認知症ケアの認知症サポーターではあるが認知症患者と関わる動機付けが期待した。学生はサポーターという役割に興味を持っていた。
―実習― 公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」	平成17年4月 ～平成23年3月	公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」（3年生次後期、2単位90時間　必修）１グループ8名　5グループ計80名担当1週間の介護老人福祉施設、1週間の介護老人保健施設の計2週間の実習を計画した。 ①学生の実習中は共に病棟で過ごし、常時指導できる体制をとることを目的に行った。 ②看護過程を展開ができることを目的に、実習方法は１人の患者を受持つ方法を用いた。 ③学生が実習に望む際に可能な限り不安や心配を取り除き、実習目標を理解し、実習行動が取れることを意図して作成した。実習要項は、実習の目的、到達すべき目標、具体的な実習方法、注意事項を内容とし「要項を読めば口頭説明は付不要」というスタンスで作成した。 ④学生が実習目標を達成できる方法と手順として、項目を吟味して実習記録用紙を作成した。 ⑤学生の実習目標を達成できる環境を作ることを目的に実習計画ワークシートは作成した。 ⑥1日をまとめ、明日の計画を立案する機会を設ける環境として、毎日、カンファレンスを実施した。 ⑦実習に際しての技術確認、基本的看護技術の確認のためバイタルサイン測定の技術チェック、必要な観察事項の事前学習を行った。実習が始まるまでにチェックをして実習に望んだ。 ⑧実習初日は、学生が病棟で受け入れられる存在であることを感じることを期待して、病棟で学生を出迎えるようにした。 ⑨実習指導の個別面接の方法としてナラティヴ・アプローチを活用した。 ①～⑨に以下の2つ⑩⑪を加えた。

事項	年月日	概　　要
介護老人保健施設でアクティビティケアを実習項目とした。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑩アクティビティケアは、高齢者の健康を守る、QOLを高める、認知症高齢者へのアプローチ、といった高齢者支援の方法を学習することを目的に実習方法に加えた。 方法は、学生は実習グループで受け持ち高齢者を含む入所者の集団にレクリエーションを実施することを企画し実践することとした。目的、目標、方法、注意点をまとめた企画書を作成する事から始め、準備し、施設のスタッフの協力を仰ぎながら実施した。看護過程の展開でも、アクティビティケアを積極的に取り入れ、高齢者とのコミュニケーションや人間関係の醸成につなげ、施設における高齢者看護の能力を修得していると評価できた。実施後の反省会で、目標とした利用者の活発な参加や、自発的行動、積極性や笑顔が見られた、できないと思っていた人があんなに体を動かせることがわかった、といった意見が上がり、実施したケアの効果を実感することで、学びにつながったと評価できる。
高齢者のアセスメントツールの冊子制作と活用。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑪アセスメントツールは、「―講義―」の項で述べたとおり領域責任者と共同開発した。学内の演習で使用し、実習では生活機能のアセスメントのための道具として用いた。 学生の実習に対する授業評価は全体で平均3.5（5点満点）であった。教員の自己評価としては、疾患と加齢による身体機能の低下の両方から生活機能をアセスメントすることに活用できていると評価している。
６）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護学実習」3年生次後期4単位180時間1グループ5名10グループ計50名担当、4週間の実習期間を「介護老人保健施設2週間」「病院2週間」と計4週間の実習を行っている。 ①毎日、実習開始～終了時間を実習指導の時間とした。学生が必要とするときに必要な指導を行う。 ②看護過程の展開を中心に看護を実践する ③実習マニュアル（要項）の作成、活用 ④実習記録用紙の作成、活用 ⑤実習計画ワークシートの作成、活用 ⑥実習において毎日カンファレンスをおこなう ⑦実習前にバイタルサインの測定についての技術チェックを行う ⑧実習施設における学生の出迎え ⑨実習指導に際し、ナラティヴ・アプローチを活用 ⑩介護老人保健施設でアクティビティケアを実習項目とした。 ⑪高齢者のアセスメントツールの冊子制作と活用。 ⑫看護過程の展開で、データベースを身体の系統的分類（循環器、呼吸器等）から、ゴードンの11項目の分類を活用した。	平成23年4月 ～平成26年3月	⑫老年看護の学習の視点として生活機能のアセスメントに注目することがもとめられている。従来の系統的アセスメントでは学生に生活や心理面のアセスメントにとまどいが見られていた。そこで、ゴードンの11項目を用いて、身体・心理・社会の3側面から高齢者を捉える方法に変更した。学内演習で事例を用いて十分ペーパーシュミレーションを行い、実習で活用している。「病院実習」「施設施設」とも同じ方法で看護過程の展開を実践できるように工夫した。
７）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技実習Ⅱ」 2年次前期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。　平成28年度は学生4名を担当し、実習指導、実習環境調整、評価等を行った
８）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技実習Ⅰ」 1年次後期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。
９）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学概論」 2年次　前期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、食事の援助、通常の食事の援助、経管栄養を受ける患者の援助、輸液を受ける患者の援助の講義を実施し演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。

事項	年月日	概　　要
１０）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習」 2年次　後期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、排泄の援助を担当し、排泄の援助 導尿　浣腸　摘便の講義を実施し、演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。
１１）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学実習Ⅱ」病院実習 3年次　後期　80名	平成28年9月 ～現在に至る	医療機関における臨地実習を計画した。 全５施設で１クール４グループが実習を行う。 全体の統括　各教員の指導　実習調整、全学生の単位認定に関わる。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。
１２）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学実習Ⅰ」 介護老人保健視閲　デイケア等 3年次　後期　80名	平成28年9月 ～現在に至る	介護老人保健施設における臨地実習を計画した。６施設で１クール６～２グループが実習を行う。 全体の統括　各教員の指導　実習調整を主なぎゅむとするが、学生を担当し実習指導も行う。　28年度は2施設で計25名の学生を担当し実際に指導し評価単位認定に関わった。残りの学生も含む全体の単位認定に関わった。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。
２　作成した教科書・教材		
１）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習要項（実習の手引き）編集総括	平成23年4月 ～平成26年3月	4年間のすべての実習における、実習マニュアルとして作成した。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習委員会委員長として編集を行った。
２）事例教材	平成17年4月 ～平成23年3月	加齢に起因する疾患と看護、成人期から抱える慢性病と加齢が及ぼす生活機能の障害と看護等が学習できる事例を考案した。 ① 脳梗塞に罹患し介護老人保健施設に入所する高齢者 ② パーキンソン病を抱える高齢者の看護 ③ 慢性閉塞性呼吸器疾患を抱える高齢者の看護 ④ 生活者としての高齢女性の転倒・骨折救急搬送、周手術期、回復期、慢性期、在宅復帰までの健康障害のレベルを追った看護 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成し、現在に至る。毎年見直しながら、学生の特性に応じて修正して使用している。
３）老年看護学アセスメント・ツールとしてのマニュアル教材（冊子）	平成17年4月 ～平成23年3月	高齢者の身体・精神機能を評価するツールとしてアセスメントマニュアルを共同で作成した。高齢者の感覚機能、栄養状態、認知状態、日常生活機能を評価する方法として、既存の尺度を用いた冊子である。奈良県立医科医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成した。
	平成23年4月 ～平成26年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」において、高齢者を総合的に評価する視点から改正した。
４）授業毎に授業内容のポイントをまとめたスライドの教材を作成し授業に活用した。（パワーポイントを用いる）	平成16年4月 ～平成26年3月	担当する講義の要点をスライドにまとめ講義の教材とした。制度の変更や新しい視点、知見等、変更しながら作成し、活用している。 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護概論」「老年看護学援助論」で作成し、活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護概論」「老年臨床看護」において、作成し活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科・臨床検査学科「看護概論」において、作成し活用した。 関西学院大学社会学部社会福祉学科「介護概論」において活用した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」において作成し活用した。

事項	年月日	概　　要
５）「生活支援技術・介護過程」教科書、一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	介護福祉士養成を目的にした教科書であるが、老年看護では介護施設も看護の場である。老年看護として看護学生が学ぶ内容になるように工夫した。 「介護者の倫理」の執筆を担当した。高齢者ケアに携わる職種の倫理としてまとめたもので、看護職にもあてはまるものである。特に、個人情報、電子情報、実習学生の守秘義務など、近年の社会情勢を考慮した内容を工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」で使用した。
６）「介護の基本　コミュニケーション技術」教科書　一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	「睡眠と援助」の執筆を担当した。看護学生も学ぶ内容になるように工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」で使用した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 実習要綱の作成	平成26年5月 ～現在に至る	開学申請時に作成した実習要綱を再確認した。新たに追加が必要な内容を挿入した。 （例）気象警報発令時の対応区域、個人情報保護について
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」2年次　前期　80名 排泄の援助　演習計画書の作成 演習評価表の作成　模擬便の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画書は　便器・尿器の取り扱い方　寝たままでの便・尿器の介助、寝たままでのオムツ交換　モデルを用いた導尿（男女）、モデル人形による浣腸・摘便、からなる。 よりリアリティな演習になるよう、模擬便を作成しオムツ交換の演習を計画した。絵具、洗濯用化学のり、ケイ砂によるスライムを模擬便として作成した。
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」 2年次　前期　80名 食事の援助　演習計画書の作成　演習評価表の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画は　形態の違う食物の摂取と介助、食事摂取を支援する自助具・介助具の実際、モデル人形を用いた経管栄養法からなる。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 ＤＶＤ学習資料の作成	平成27年9月 ～現在に至る	身体の加齢変化を説明するＤＶＤのナレーションを筆記し活字としてＡ４用紙にＤＶＤ資料を作成した。全６ページ。文章中、特に学んでほしい単語には白地で隠し、学生が映像を見ながら記入できるように工夫した。学生は全部埋めることが出いていないことがわかり、次回の授業初めに正解を口頭で説明した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 呼吸機能の変化　体験	平成27年9月 ～現在に至る	スパイロメーターを用い、肺活量、１秒量から肺年齢を測定した。全員は体験できなかったが、一部の学生が実施できた。時間的制約で全員が体験できない現状から、後にＤＶＤ作成に至った。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 見え方の変化体験グッズ作成	平成27年9月 ～現在に至る	透明でない曇りのあるクリアフォルダーを高齢者の眼球の水晶体に見立て、白内障の体験とした。　クリアフォルダーに、黄色セロハンをはさみ、水晶体が変性した高齢者の見え方を体験できるようにした。クリアフォルダーは学生各１枚を配布した。黄色のセロファンは、10×3センチほどにカットしたものを学生に配布した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義資料作成 １講義スライド16枚　A3用紙	平成27年9月 ～現在に至る	講義資料は1コマスライド16枚とし、Ａ３用紙に裏表で印刷するようにし、半分に折るとA4冊子としてファイルできるよう工夫した。高齢者の加齢変化では、スライド中の重要語句を白字で書くし、学生と一緒に回答しながら、進めた。国家試験の老年看護領域で問われやすい問題であることを印象付けたかった。 中間期授業評価で、スライド、資料で見にくいという意見はなかった。「スライドに対応する教科書のページを入れてほしい」といった希望など、学習上必要と思われる希望には掻痒に努めた。

事項	年月日	概　　要
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作　高齢者体験	平成28年3月 ～現在に至る	学内演習用に、高齢者体験についての動画を制作し、授業に活用している。動画は奈良学園大学のipadを使った学習支援の一環のなかで、専用のアプリを用いて閲覧できる。シナリオ作成、撮影監督　編集に関わった。・村雅世、田中和奈
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作 呼吸器検査の看護	平成28年3月 ～現在に至る	高齢者の呼吸器系のアセスメントとして、呼吸器検査を受ける高齢者の看護の動画を作成した。シナリオ作成、撮影監督　編集に関わった。・村雅世、田中和奈
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅰ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅱ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論　　授業教材 ①授業スライド ②ＤＶＤ資料 ③高齢者の視覚体験用具	平成28年10月 ～現在に至る	①授業資料のスライド資料　平成28年度版で、今年度発表の人口動態の統計をもとに作成した。②27年度のものに今年度の統計を補足した。③クリヤホルダーと黄色のセロファンを用い、授業の中で学生各自が水晶体の混濁と色覚の異常が体験できることを狙った。クリヤホルダーは3種類の透明度になるようにした。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 授業教材　グループワーク資料	平成29年1月 ～現在に至る	グループワークの成果として学生が作成したスライドを発表用資料として冊子を作製した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 １）学生の授業評価アンケート結果	平成20年3月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科　「老年看護学援助論」「老年看護学実習」　で授業評価を行った。 平成20年の「結果は、援助論平均４．０(5段階評価）、実習は３．９であった。評価の高かった項目は「シラバスに沿った内容」「授業への取り組み」であり、低かった項目は「レポート課題が多い」という結果であった。
	平成24年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科　「老年看護学概論」「老年臨床看護」「老年看護学実習」学生評価を行った。
	平成24年3月	「老年看護学概論」の評価は平均４．０であった。良かった点では教材がわかりやすかったといったコメントがあった。改善点ではマイクを使っているが聞き取りにくかったと言ったコメントがあった。 「老年臨床看護」の評価は平均４０．１５であった。良かった点と改善点では資料が見やすかった。もっとパワーポイントを使ってほしいと言ったコメントがあった。 老年看護学実習では平均４．２５であった。丁寧に教えてもらった、もう少し関わってほしかったといったコメントがあった。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科　「看護学概論」の学生評価を行った。平均４．７７であった。
大学業務評価	平成24年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価　前年度と比べ評価に変化はなかった。

事項	年月日	概　　要
大学業務評価	平成25年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価　前年度と比べ評価に変化はなかった。
・学生の授業評価アンケート結果	平成27年10月	奈良学園大学保健医療学部　「老年看護学概論」　授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には結果と改善するところを伝えた。改善の必要なところ　スライドに対応する教科書のページを追加する
・学生の授業評価アンケート結果	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部　「老年看護学概論」　学生評価　授業終了時 資料、内容　シラバスとの整合性など　特に意見はなかった。
・学生の授業評価アンケート結果	平成28年10月	奈良学園大学保健医療学部　「老年看護学概論」　授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には次の授業で、評価の結果と改善するところを伝えた。　改善の必要な項目では、資料についてで、資料の内容に教科書の該当ページを追加した。
4．実務の経験を有する者についての特記事項		
1）高校生に対する講義「看護学」	平成26年10月	奈良文化女子高等学校学校見学におけるミニ講義　高齢者の身体的加齢について
	平成28年8月	オープンキャンパスミニ講義　2回　高齢者の身体的加齢について
2）研修会講師	平成19年 ～平成22年	奈良県看護協会臨地実習指導者講習会講師 「老年看護学実習」
	平成22年5月	平成22年度高取町地域法活支援センター研修会講師　「高齢者ケアとナラティヴアプローチ」
	平成24年3月	平成24年「養成期間と医療機関の連携」事業研修会　講師 「実習指導に望むこと」
	平成24年9月	平成24年中濃地区特別養護老人ホーム看護職能研修会　講師 「高齢者体験から理解する高齢者」
	平成25年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成26年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成27年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成28年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。

事項	年月日	概　　要
3）会員企画シンポジウム　講師	平成25年8月	第10回日本質的心理学会　一般企画シンポジウム「今あらためて質を問う」にて、話題を提供した。テーマは「高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」ことー」である。 コーディネーター：森岡正芳 質的データを量的データに変換し分析する傾向にある質的研究をについて、現場の質をもう一度考え直そうとするを趣旨で企画された。心理学、社会福祉学、教育学の立場から話題提供される中で、看護学の立場から現場を質感豊かに描き出すかていを紹介した。平成24年3月の博士論文（奈良女子大学）の一部を加筆修正した。
4）フェスタ出典 けいはんな体感フェア2016 「来て・見て・感じて学研都市のテクノロジー」　-光の不思議や生命の神秘・・・等最先端の研究内容を体験してみよう！-	平成28年11月20日	フェスタに出展者として参加した。　テーマ：「年を取ると見え方聞こえ方動きはどうなるの」　高齢者体験をメインに体感イベントとした。約300名の一般の参加者（子供から成人まで）の入場があり、約50名ほどが高齢者体験に参加した。　場所　グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル
5）研究会　講師　シーズ紹介講演 超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会	平成28年12月1日	超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会　テーマ：高齢者看護・介護とアクティビティケア　-- 高齢者の気分転換活動の不足に対するケアや付き合い方- 高齢者ケアの現状と活性化の支援の必要性を老年看護学教育の中から経験したことを踏まえ講演とした。
5　その他		
1）公立学校法人奈良県立医科大学医学部後看護学科における教育実践	平成17年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科講師として「老年看護学援助論」（専門科目、2年次配当通年、必修2単位）において、老年看護の実践論について授業を行った。これにより、学生は老年看護の方法について理解を深め、臨地実習に大いに活用して、老年看護の学びを得ていた。「老年看護学実習」（3年次配当通年　必修2単位）において実習指導を行った。「卒業研究」（4年通年配当）において研究計画書作成、論文作成の指導をおこなった、これにより、学生は実習で経験したを出来事を理論的に説明し、今後の可能性・課題を見出していた。「看護研究特論」（3年次前期）において、研究計画書作成につて指導した。
2）岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科における教育実績	平成23年4月 ～平成26年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科教授として「老年看護学概論」（2年次後期、2単位　専門必修）、「老年臨床看護（演習）」（3年次前期、2単位　専門必修）、「老年看護学実習」（3年次後期、4単位専門必修）、「卒業研究」（4年次通年、2単位専門必修）、「アカデミック技法」（1年次前期2単位一般必修）において授業、演習、実習をおこなった。保健科学部放射線学科、臨床検査学科の「看護概論」（3年次後期、2単位　専門選択）において授業を行った。
3）岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科実習調整の実績	平成23年4月 ～平成26年3月	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
4）関西学院大学人間福祉学部おける教育実績	平成24年4月 ～平成24年9月	関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（1～4年次春期　選択2単位）、「介護技術」（1～4年次春期　選択2単位）において社会福祉士国家試験内容に基づき介護の目的論、対象論、実践論について授業を行った。文学部、法学部の学生も若干選択していた。学生それぞれが学ぶ目的を持ち、様々な感想を持って学習を深めていた。
5）奈良学園大学保健医療学部看護学科における実習調整の実績	平成26年4月 ～現在に至る	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
6）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成26年７月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「早期体験演習」（1年次、1単位　専門必修）複数の実習場所をラウンドし、実習の進行を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を行った。
7）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年2月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅰ（1年次、後期　2単位　専門必修）複数の実習場所をラウンドし、学生や教員を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を担当した。

事項	年月日	概　　要
８）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～平成27年7月 （前期）	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「基礎看護技術演習Ⅱ」（2年次、2単位専門必修）
９）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科教授として以下の科目の企画・実施に関わった。「基礎看護技術演習Ⅱ」「基礎看護技術演習Ⅲ」「基礎看護実習Ⅰ」「早期体験演習」
１０）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「老年看護学概論」（2年次　後期　2単位　専門必修）「老年看護学援助論」年次、2単位専門必修）
１１）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の演習を行った。「老年看護学援助論」3年次、2単位　専門必修）3名の教員と共同した。
１２）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅱ（2年次、前期　　2単位　専門必修）　学生1グループを担当し、実習指導を行った。
１３）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「老年看護学実習Ⅰ（施設）」（3年生　後期　2単位）「老年看護学実習Ⅱ（病院）」3年生後期　2単位　専門必修）実習の企画、臨地調整、学生オリエンテーション、実習指導を行った。領域教員の実習指導能力の向上に関わった

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格、免許		
1）看護師免許	昭和55年4月	第389473号
2）修士（看護学）	平成15年3月	国立学校法人香川医科大学大学院医学系研究科看護学専攻了 修士（看護学）（香修第十九号） 修士論文題目：ナラティブを看護ケアに導入した老年患者の語りの構造と変化の研究
3）博士（学術）	平成24年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程 社会生活環境学専攻　人間行動科学講座 博士（学術）（博課第501号） 博士論文題目：看護における「聴き取り」の生態ーナラティヴ・アプローチの可能性と限界
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
学会誌の編集 日本保健医療行動科学会　学会誌 　拡大編集委員	平成24年6月 ～平成25年12月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、依頼論文の原稿の編集を行った。2013Vo128　№1～№2　　執筆者の意向を確認しながら、原稿に図表を配置し、雑誌用の原稿を作り上げた。

事項	年月日	概　　要
学会誌の査読 日本保健医療行動科学会　学会誌 拡大編集委員	平成25年11月 ～平成28年6月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、論文査読を行った。雑誌は年2回発行され1刊に2編ほど査読を行った。投稿論文を担当し、学会誌の質を保証できる研究論文になるように査読を行った。研究方法の整合性や論文としての論旨に疑問がある場合には掲載不可の判定もやむなしの場合もあった。通常の査読者は２名であり他の査読者と査読の判定が大きく異なることはなかった。2014～2017年前期まで年2冊　計7冊にの雑誌の査読を行った。
研究会への参加・運営 臨床看護実践ナラティヴ研究会	平成26年10月 ～現在に至る	臨床看護実践ナラティヴ研究会メンバーとして、臨床看護の場において、ナラティヴ・アプローチを実践することの意味、実際の実践について、研究・勉強会を行っている。自己の研究の報告、メンバーの研究についての意見交換、海外の研究者の論文についての意見交換を行っている。月1回の定期的な研究会である。輪番で話題を提供し討議する。ブルーナの意味論、ベイトソンの学習理論、リクールの物語と時間などを担当した。 成果の一部は　商業雑誌の特集に組み込まれた。「『病の語り』　会話の産物と現実　看護実践と社会構成主義」：Ｎ：ナラティヴとケア. 第7号. 看護実践におけるナラティヴ. 紙野雪香　野村直樹編. 参照
研究助成金の獲得	平成28年4月	平成28年度　奈良学園大学保健医療学部看護学科研究助成制度において以下のタイトルで助成金を獲得した「照度アップ窓のブライトケアの可能性の研究―認知症高齢者の睡眠支援―」
学会誌の査読編集 日本保健医療行動科学会　　理事 学会誌　編集委員　　査読と編集	平成28年７月 ～現在に至る	日本保健医療行動科学会　理事、編集委員に就任し、学会雑誌の編集を行っている。
４　その他 ―学内委員会活動―		
奈良県立医科大学医学部看護学科 実習部会委員	平成20年4月 ～平成23年3月	実習に関して関わった。各論実習の実習配置表の作成、学生のグループ分け、統合実習の計画、その他、メンバーで実習に関する問題対応の情報交換、協議していった。
岐阜医療科学大学保健科学部看護学科	平成23年4月 ～平成27年3月	1年生から4年生までの実習を統括する。 実習施設からの相談の窓口となり対応する。
実習部会長 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 領域実習ワーキング長	平成23年4月 ～平成27年3月	各論実習の統括を行う。特に、実習病院・施設への実習依頼や計画配置の相談等、領域をとりまとめて実習施設との窓口となる。
岐阜医療科学大学保健科学部	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究の倫理審査にあたる。
岐阜医療科学大学保健科学部	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究活動を支援する。学内で定める研究推進費について審査を行う。教員の学内研究発表や講演等を企画・運営する。
岐阜医療科学大学保健科学部 生涯教育委員会副委員長	平成23年4月 ～平成27年3月	委員会活動として、年6回ほど地域のイベントで地域住民に健康教育を実施している。 シンポジウムやセミナー等を同窓会と協力して企画・運営し卒業生を対象に研究発表の場を設ける活動をしている(25年度から)

事項	年月日	概　　要
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 実習部会長	平成26年4月 ～現在に至る	実習全体の統括　　年間の実習計画の枠組み　企画　各実習施設への依頼　実習協議会の企画・開催　など　月１回定例会議を主催し、実習に関する協議を行う。基礎実習　領域実習　統合実習　課程選択実習に関する報告をまとめ調整する。実習場での感染症対策や事故などの危機管理等も行う。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 領域実習ワーキング長	平成26年4月 ～現在に至る	3年生領域実習に関する、企画調整　　月１回定例会議を企画し討議を行う。成人　老年など各領域実習からの報告をまとめ、協議し実習部会に上申する。
奈良学園大学における教員組織活動 学生生活委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	奈良学園全体の、学生生活に関する協議を行っている。主に学生の奨学金　表彰等について協議した。
奈良学園大学における教員組織活動 学生支援センター委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	学生の健康診断、学校祭について協議した。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 学生生活ワーキングメンバー	平成26年4月 ～平成27年3月	学生生活について協議した。学生の健康管理を担当した。
奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画担当	平静26年9月 ～平成27年3月	４月に行われる１年生宿泊研修を企画し実施した。
奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画責任者	平成27年4月 ～現在に至る	４月に行われる１年生宿泊研修を企画し実施した。企画実行の責任者として運営していった。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 教務ワーキングメンバー	平成27年4月～現在に至る	主に実習での単位修得や実習履修の要件について担当している。

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.　基礎看護技術Ⅱ基礎看護学〔3〕 系統看護学講座専門分野Ⅰ	共著	平成18年6年 第14版 平成21年2月 第15版 平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版　全490頁 編集：藤崎郁、任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、・村雅世（執筆者全21名） 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術　第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32　第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。病床での衣生活援助では点滴を行っ
3.　看護学実践science of nursing「老年看護学」	共著	平成19年4月 平成22年12月改訂	黎明書房	奈良県立医科大学医学部看護学科授業科目「老年看護学概論」、同「援助論」、岐阜医療科学大学「老年臨床看護」で教授する内容を、資料を含め1冊にまとめたものである。内容は看護師国家試験出題基準に対応させた。 A5版　全285頁 監修:川野雅資 編集:守本とも子 執筆者：新谷奈苗　田中麻里、谷村友子、中丸弘子　新川泰弘、・村雅世　他10名 本人担当部分：以下の章の執筆を担当した。 Chapter3：高齢者の健康生活への看護援助　ⅰ．高齢者の健康　P.60-P.65 Chapter4：主な疾患と看護　ⅴ．内分泌系の疾患　P.144-P.153　ⅶ．泌尿器系の疾患　P.168-P.175　ⅷ．感覚器系の疾患　P.177-P.193 各系統において高齢者に多い疾患を取り上げ、病態、検査、治療、看護を示した。改訂版ではChapter４を担当した。
4.　介護福祉士養成シリーズ2「生活支援技術・介護過程」	共著	平成22年6月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全219頁 編著:守本とも子、星野政明 執筆者：川口ちづる、山形力生、今村美幸、大崎大資、横井加津志、高畑進一、新谷奈苗、三毛美恵子、石崎利恵、山田多賀子、・村雅世、木村洋子、その他5名 本人担当部分：以下を担当した。 第9章　「高齢者の睡眠の援助」P.151-P.157 自立を促す睡眠の必要性、爽快な目覚めの援助、自立を促す睡眠の介助の実際、について執筆した。日常生活のリズムを整える基本的方法や不眠の際の援助の方法が理解できることを意図して具体的な方法を示した。看護の基礎技術「睡眠の援助」を基本にしている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.　介護福祉士養成シリーズ1「介護の基本コミュニケーション技術」	共著	平成22年9月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全202頁 編著：守本とも子、星野政明 執筆者：三浦辰哉、原田理恵、溝上五十鈴、土田耕司、羽柴香恵、河野蕾、新谷奈苗、・村雅世、その他7名 本人担当部分：以下の章を担当した。 第8章「介護従事者の倫理」P.118-P.124 国家資格を持つ者の責任と責務の視点から信用失墜行為の禁止、守秘義務、人権擁護の重要性、及び実践の内容を具体的に示していった。看護の概論となる看護師の倫理を基本としている。
6.系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学３	共著	平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版　全490頁 編集：藤崎郁　任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、・村雅世（執筆者全20名） 改定の為、内容の見直し文言の変更を行った。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32 第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。 病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、モデル人形を用いて写真撮影し文章を作成した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 　基礎看護学３	共著	平成29年2月 第17版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 大幅な改定が行われた。写真・図票の充実と動画の追加が大きな改定内容。 A4版　全505頁 編集：任和子 執筆者：守本とも子、・村雅世（執筆者全21名） 16版を改正した。内容の洗練化、イラストを写真に変更、動画を追加等の改正を行った。ページ数も増えた。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32　第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 今回の改定では、ページ数が増えたこと、今までのイラストを写真、あるいは動画として追加した。 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。第17版では、新たにイラストを映像に変更、動画を制作した） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。新たに、療養にふさわしくない病室環境の写真を追加し、療養にふさわしい環境調整の根拠を強化した。 病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、イラストから実写の写真に変更し、文章も見直した。動画も追加した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
6.　看護者のための“聴き取り”技能の開発に向けて ―対話場面の意味生成過程と看護者の自己内対話による物語化― （査読付）	単著	平成21年3月	日本保健医療行動学会年報 Vol.25 P.218-P.234	78歳女性患者へのナラティヴ・インタビューの場面を「聴き手」であるインタビューアー（筆者）の自己内対話として描き出し、聴き取りの場面を可視化した。自己内対話では、高齢者の特徴とも言える聴き取りつらさ（話し語尾が途切れる、同じ話しを繰り返す、代名詞が多い）のなかで、意味を作り出しながら聴き取っていることを明らかにした。この時の看護師の姿勢に「物語化」があると推察し、高齢者看護において日常看護の対話をナラティヴ・アプローチとして検討することの可能性を示唆した。
7.　看護場面の4つの対話における「聴き取り」の特徴―「物語化」を実践する看護師― （査読付）	共著	平成22年6月	公立学校法人 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 Vol.7 P32-44	高齢者の看護において看護師が「物語化」を実践していることを明らかにすることを目的に、実際の看護の場における「聴き取り」の実際を聴取し、可視化した「聴き取り」の特徴を検討した。 76歳と78歳の高齢女性に対する看護場面で、患者と看護師がどのような思いで相手の言葉を受け取り会話をしていたかを、双方へのナラティヴ・インタビューから聴収し、高齢者と対話する看護師の「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、「質問の意味を持つ言葉による対応」が聞き取りの特徴にあることを示唆した。看護師は経験年齢の異なる4名の看護師とした。 本人担当部分：研究計画、データまとめ、論文作成を担当した。 共著者：・村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博
8.　看護における「聴き取り」の生態 ―ナラティヴ・アプローチの可能性と限界― （博士論文）	単著	平成23年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学専攻行動科学講座	高齢者看護において、発語に特徴を持つ高齢者の話を聴き取る技能として「物語化」に注目した。従来から言われる「傾聴」の技能が看護の場では「物語化」であると考え、高齢者看護における「聴き取り技能」としてナラティヴ・アプローチの可能性を論じた。 76歳女性、78歳女性、67歳男性の3名の高齢者との看護において看護者がどのように患者の言葉を受けとめ、対話を行っているか、また、患者もどのように看護師の言葉を受けとめ対話を継続しているかを双方へのナラティヴ・インタビューから可視化した。患者の気持ちが表出されている場面では、看護師は語尾が途切れる、言葉を繰り返す、代名詞で省略するといった加齢が及ぼす発語の特徴に対し、相手の視点から意味を作り出し「物語化」を実践する傾向があった。この時の看護師は「相づち」や「うなずき」といった対応をしていた。しかし、高齢患者の思いを横に置き、健康回復をめざす看護師の視点から対応することもあった。このことは、看護師は「老いの物語」や「病の物語」を聴き取り、高齢者の多様性や個別性を理解しようとするが、対応は看護師の視点からされる傾向があると考えられた。経験年数の長いベテラン看護師にその傾向があった。高齢患者と対話する看護師の「聴き取り」は1つの「ナラティヴ・アプローチ」といえるが、必ずしも「傾聴」といえないことに、高齢者看護において「ナラティヴ・アプローチ」を活用することの限界があるとした。 A4判　全131頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと（査読付）	単著	平成25年12月	質的心理学フォーラム，2013 Vol.5 P24-31	平成25年9月に開催された、第10回質的心理学会シンポジウム「今あらためて質を問う」の内容が加筆修正され特集として編集されたもの。前23の博士論文研究を一部、加筆した論文である。ここでは、「特集　現場の質感をどう記述するか」という大きなテーマのもと、言葉と思考が相互に絡み合い新しい物語が生成される会話の場面から、看護師の「聴く」ことを分析するために、会話場面を質感豊かに描き出す過程を紹介した。看護の質的研究でも、看護場面を質感豊かに記述し可視化し分析することの必要性を述べた。
10.病院実習における高齢者に対する個別アクティビティケアの効果に関する看護学生への調査	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要　　第8号75-85	高齢者介護の場である施設で実施されることが多いアクティビティケアを、医療が行われている病院で看護師が実施することの可能性を明らかにしようとした。今回は、対象を看護学生とし、実習におけるケアをアクティビティの視点から調査研究した。講義科目講義、実習指導と実習後のデータ収集、論文作成を分担して行った。藤吉恵美、和田裕子、・村雅世
11. 通所サービスを利用している要介護高齢者の健康づくりのための対処行動	共著	平成26年3月	岐阜医療科学大学紀要　　第9号33-39	通所サービスを受ける高齢者の健康観を調査した。介護を受ける高齢者であっても骨折や転倒予防が健康に対する認識であった。研究計画書の作成、データ収集を担当した。藤吉恵美、和田裕子、田中和奈良、・村雅世
12.「病の語り」会話の産物と現実　-看護実践と社会構成主義-　（査読付）	単著	平成28年1月	N：ナラティヴとケア第7号47-53	「看護実践におけるナラティヴ」というタイトルの特集の中の「進化、これからどうしていきたいか」をテーマにした章の中で看護実践と社会構成主義について論じたものである。実際の看護場面の患者との会話を例に挙げることで看護の場は社会構成主義の実践で場であることを論じた。
13.「病の語り」会話の産物と現実　-看護実践と社会構成主義-　（査読付）	単著	平成28年1月	N：ナラティヴとケア第7号47-53	「看護実践におけるナラティヴ」というタイトルの特集の中の「進化、これからどうしていきたいか」をテーマにした章の中で看護実践と社会構成主義について論じたものである。実際の看護場面の患者との会話を例に挙げることで看護の場は社会構成主義の実践で場であることを論じた。
その他				
―国内発表―				
2.　看護場面の対話における高齢患者の認知・情動の変容過程の研究―物語の時系列分析から描き出す聞き手の姿勢―	―	平成21年3月	日本看護研究学会第22回　近畿・北陸地方会学術集会	高齢患者の病の語りがネガティヴなものからポジティブなものに変わる時の聞き手の対応を自己内対話として記述し認知・情動の変容に働きかける「聞く姿勢」を検討した。 その結果、聞き手は自己の持ついくつかの立場の1つから患者の言葉に意味を作り出していた。看護者の立場より患者の生活を知らない無知の姿勢に効果があると考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.　物語生成のプロセスから検討する「視点」の聴き取り技能としての可能性―高齢患者と看護者の対話の継起的分析から―	―	平成22年4月	第5回保健医療福祉情報行動科学会大会	5名の高齢者患者に対するナラティヴ・アプローチにおいて、患者の心情が変化したと判断した場面における、聴き手の姿勢を聴き手の自己内対話から可視化し、分析した。話を発展させよう炉するリフレクシブクエスチョンの有効性を示唆した。
4.　高齢者の話を聴き取る技能の研究―物語生成の継起的分析から検討する聴き手の視点―	―	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	80歳の女性へのインタビューからインタビューアーの「聴き取り」について検討した。聞き手は高齢者の何度も繰り返される話の中から、「これ」「その」あの」といった代名詞をの意味を推測したり、「で・・・」といった止まった言葉の先を推測したり、聞き手の視点を移動させて聴きながら物語を共同生成している実態を明らかにした。
5.　認知症高齢者の思い出の語りを「聞くこと」の看護としての研究～事例から考える関係性を築くための質問～	―	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	グループホームで暮らすお年寄りに対して昔の思い出をテーマに、グループフォーカスによる「聴き取り」を実施した。語られた内容から、自己の対応を分析し、関係性を築く為の質問の有効性を考察した、学部生の卒業研究である。 本人担当部分：担当として指導した。 共同発表者：東仁美、・村雅世
6.　日常看護の会話の中で実践される「傾聴」の研究―経験と聴き取りの特徴―	―	平成23年6月	第26回保健医療行動科学会	看護の対象は高齢者が多く、高齢者と会話する機会が多く「傾聴」を必要とする機会も多くなっている。看護師は日常看護の会話の中でどのようには「傾聴」を行っているか、看護師経験の違いから検討した。博士論文研究の一部である。 経験年数の2年未満と4年以上の看護師各2名が、76歳と78歳の女性患者の看護を実践する中で「傾聴」していると判断できる部分を取り出し、そのときの思いを看護師・患者から聴取し「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、経験年数の多い看護師ほど医療的な専門職としての視点で聴き取り、経験年数の浅い看護師ほど、医療的な視点でなく生活者の視点で聴き取る傾向があった。経験の少ない看護師のほうが、看護師としての力量は未熟であるが患者の気持ちに働きかける「傾聴」に近い聴き取りを実践していると考えた。 本人担当部分：研究計画書の段階からすべてに担当した。データ収集。分析を共同で行った。 共同発表者：・村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博

教　育　研　究　業　績　書

平成30年3月31日

氏名　梶間　敦子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
助産学	地域・いのち・性・生

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
助産学科　助産学概論 助産の歴史の授業方法	平成20年～26 年	学生と共に奈良県内外在住の助産師（70歳代、80歳代）にインタビューをし、今日の助産師に求められることは何かを考察する授業展開を行った
助産学科　地域母子保健 母親参加型の授業展開	平成20年～26年	子育て中の母親の協力を得て、ディスカッション、ワークショップをし、サービスを受ける側の女性と家族の理解に勤める。助産師としてのモチベーションを高める授業の工夫
助産学科　地域母子保健 国際看護の授業方法	平成20年～26年	在日外国人への助産ケアの配慮について、まず海外での出産経験者を招いて、体験談を聞いたり、お産・子育て用品の紹介等を通して、異文化における出産・育児について理解を深める授業を行った。徐々に在日外国人女性の協力も得ることができた。
助産診断・技術学 外国人研修生との交流授業	平成21年	ケニアからの研修生とともに、現在日本では使用しない教材を使用しての診断技術の指導、異文化における助産に必要な技・態度についてのディスカッションを取り入れた
プリセプターシップを導入した、基礎実習の指導	平成21年～26年	助産基礎実習にプリセプターシップを導入。指導者、学生が共に学びながら、以降の実習でのコミュニケーションの向上にもつながった。
2　作成した教科書，教材		
手作り教材　性教育用教材の作成	平成20年～26年	性教育、マザークラス用教材、乳幼児用衣類、未熟児用衣類等の作成。学生だけでなく、地域の女性の協力を得ながら作成。子どもたちや受講者の方々が興味を示し、手作りのぬくもりから、大切に扱う心を養うことにもつながっている。
助産学実習実習記録用紙の作成	平成21年～26年	従来の記録用紙を評価し改善を加える。効率よい実習ができるよう、授業内容を復習を兼ねた、スタンダードプランを示すようにした。
性教育教材の作成	平成28年～29年	人形、パネルシアター、ペープサートなど、主婦や子どもたちの発想を取り入れて、共に作成。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
個人情報保護法に基づく「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルの作成	平成20年～26年	個人情報保護法について研修会等で学習および情報収集、委員会で作成したガイダンスをもとに、実習で活用する「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルを作成、使用。
実習中における学生の針刺し・血液暴露事故対処規定の素案作成	平成20年～26年	学生が実習中に針刺し事故および血液による暴露事故に遭遇した場合の対処法について、実習病院、校医に相談しマニュアルの素案作成、危機管理検討会で検討し活用.

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1)准看護師	昭和45年4月1日	第2025号（奈良県）
2)看護師	昭和51年5月19日	第296880号
3)助産師	昭和52年5月16日	第74567号
4)受胎調節実地指導員（大阪府認定）	昭和51年3月10日	第885号
5)保育音楽検定2級	昭和48年9月26日	音検証10696号
6)保育技能検定2級	昭和50年3月18日	保検証302345号

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
産む・育てる・伝える －昔のお産・異文化のお産に学ぶー	共著	2009.1	風響社	出産をとりまく社会の変化
出産の民俗学・文化人類学	共著	2014.5	勉誠出版	助産師として40年の雑感
（学術論文）				
先輩助産師から受け継ぐ、助産師の技・心～T市における支援～	共著	2008.7	第23回 奈良県母性衛生学会	戦後から、現在も活躍中の助産師からの聞き取りを通しての学び
看護学生の清潔に対する 意識調査,第二報	共著	2008.11	平成20年度 奈良県看護研究学会	看護教育は、若者の清潔感に影響を与えているか
分娩介助技術教育のプロセスの検討	共著	2009.3	第23回 日本助産学会（東京）	助産学科開設後3年間の分娩介助教育のプロセスについて考察、報告
妻の妊娠・出産を経験した父親の思い －意識変化の要因－	共著	2009.5	第65回 日本助産師学会（奈良）	妻の妊娠・出産時の夫の姿勢が、父性にどの様な影響を与えているかの調査
先輩助産師と学ぶフリースタイル分娩	共著	2009.7	第24回 奈良県母性衛生学会（奈良）	先輩助産師と助産学生が共に学ぶことでの効果
助産基礎実習におけるプリセプターシップ導入の効果　第1報	共著	2010.3	第24回日本助産学会（つくば）	実習指導にプリセプターシップを導入しての、学生・指導者の学び
出生後の父性意識形成における助産師のかかわり －父親自身のニーズの把握－	共著	2010.7.1	第25回　奈良県母性衛生学会 (奈良）	助産師のかかわりが、父性意識向上に、どのように影響するか
在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察 -N県内外国人市民にむけての国際協力-	単著	2011.1	吉備国際大学大学院連合国際協力研究科　修士論文	在日外国人14名（12か国）の女性より聞き取り調査をし、支援における課題の明確化
里帰り分娩を経験した母親の育児不安について－産後１ヶ月健診後－	共著	2011.7	第26回 奈良県母性衛生会 （奈良）	里帰りすることも、産後の生活にもたらす問題が多い。
ケニア共和国母子保健の現状報告第一報 -マタニティセンターを視察して-	共著	2012.5.1	第26回 日本助産学会学術集会 （札幌）	マタニティーセンターと、村での生活を視察し、ケニアの母子保健の現状把握

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
ケニア共和国母子保健の現状報告第二報 -出産準備教育のプレゼンテーションを実施して-	共著	2012.5.1	第26回 日本助産学会学術集会 （札幌）	ケニアの医療スタッフへ、出産準備教育の紹介
在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察 -A県での聞き取り調査より-	単著	2012.7.14	第27回 奈良県母性衛生会 （奈良）	在日外国人の出産・育児の困難さとサポートの重要性
国際助産を身近に学ぶ授業の工夫 －海外で出産した日本人の体験談から学ぶ-	単著	2013.5.2	第27回 日本助産学会学術集会 （石川）	国際看護を、身近かなことと捕える授業の工夫を紹介
助産師が行う性教育のあり方 ～思春期におけるピアエディケーションでの助産師の介入～	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会 （奈良）	ピアエデュケーション有効性について検討
出生前診断を受検する妊婦と家族へのケア －文献検索による研究－	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会 （奈良）	出生前診断を受ける妊婦と家族の意思決定について文献レビュー
外国人の日本での出産における問題点とその関わり	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会 （奈良）	日本で出産する外国人女性の不安や問題点を明確にし、今後の関わりに活かす
奈良県助産師活動の90年（中間報告）	共著	2015.7	第30回 奈良県母性衛生学会 （奈良）	助産師会90年の歴史を聞き取り調査、先輩助産師の心と技を次代に伝えたい

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　播金　ヤスミ

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
基礎看護学、母性看護学	

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
看護師	昭和53年 5 月 23日	第344379号
助産師	昭和 54年12月20日	第77915号
日本周産期・新生児医学会 新生児蘇生法「専門コース」（Aコース） 修了	平成27年11月1日	認定番号A-15 42181
2　特許等		
なし		
3実務の経験を有する者についての特記事項		
4その他		

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称 （学術論文）	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
1. 1看護系の大学及び専門学校で用いられている基礎看護学実習評価表の内容分析による構成概念の抽出とルーブリック形式の評価表の作成	単著	平成25年3月	畿央大学　修士論文	
2. 看護学生の載石位体験前後の産婦人科診察台に対するイメージと差恥心の変化	共著	平成27年	畿央大学紀要　第12巻、第1号、P15-30	仲居由美子、小笠原知枝、播金ヤスミ、他
3.基礎看護学実習評価項目の内容分析によるパフォーマンス評価のためのルーブリックの作成	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究　第5巻　2018年2月	播金ヤスミ、小笠原知枝、中居由美子、河合まゆみ、、小林由里、對中百合、新井祐恵、大田容子、伊藤明子
（学会発表）				
看護職員離職経験者の離職要因に関する実態調査ー離職時の状況と現在の心境からみた働き続けるための職場環境ー		平成25年	第42回日本看護学会論文集（看護管理）P187-190	飯尾美和、土井理久實、田岡眞由美、播金ヤスミ、他
Image of gynecological examination in young women.（若い女性の産婦人科診察台イメージ）		平成25年	WANS（世界看護科学学会）ポスター発表	YumikoNakai, Jong･SeongMoon, YasumiHarikane他
学生カンファレンスの現状と今後の指導課題		平成26年	第45四日本看護学会（看護教育）学術集会、P37　ポスター発表	城使紀子、播金ヤスミ、丸野由美
基礎看護学実習評価項目の内容分析による実習評価の構成概念		平成26年	第24回日本看護学教育学会学術集会（口演）	播金ヤスミ、小林由里、中居由美子、他
新人看護師のクリテイカルシンキング能カと情報活用能力の関連性とその特徴		平成26年	第24回日本看護学教育学会学術集会（口演）	小林由里、河合まゆみ、播金ヤスミ、他
看護専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関する要因		平成27年	第25回日本看護学教育学会学術集会（口演）	河合まゆみ、小笠原知枝、中居由美子、播金ヤスミ他

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　芝田　ゆかり

研　究　分　野	研究内容のキーワード
公衆衛生看護学, 地域看護学	保健・医療・福祉の連携, 健康教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)　看護学生のための初年次教育の教育方法作成	平成 24 年 12 月 ～26 年 4 月	飯田女子短期大学看護学科の教授就任前から看護学生のための初年次教育の教育方法を「キャリアデザイン」として新講義を作成した. 具体的には, 就任前本学科は留年する過年度生が多いため, 看護師になるための動機づけを先駆けて行い, 「聴く」「読む」「調べる」「書く」 ための教育方法を新たに作成・実施した.
2)　地域基盤型ボランティア教育方法の作成	平成27年4月～ 28 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科准教授として, 地域基盤型ヘルスボランティア教育方法を作成した. 具体的には多世代交流を目的とした利他的行動の体験型学習であり, 岐阜県瑞穂市地域包括支援センター・介護予防サポーターと連携し, 地域基盤型のボランティア教育を作成・実施した.
2　作成した教科書, 教材 1)　2018 年要点がわかる出題傾向がみえる小児看護学（看護師国家試験対策）	平成 29 年 11 月	「看護師国家試験出題基準（平成 30 年版）」 準拠. 中項目別にみた要点と過去問題集を作成した. 第 97 回～第 106 回看護師国家試験問題収録. 共著：守本とも子（監修） 芝田ゆかり, 田場真理, 瀬山由美子（編著）
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格, 免許 1) 外国語(ﾌﾗﾝｽ語)中学校教諭 1 級教諭普通免許 2) 外国語(ﾌﾗﾝｽ語)高等学校教諭 2 級教諭普通免許 3) 養護学校教諭 1 級普通免許 4) 国語科中学校教諭 1 種普通免許 5) 国語科高等学校教諭 1 種普通免許 6) 看護婦免許 7) 保健婦免許 8) 養護教諭 2 種免許 9) 第 1 種衛生管理者免許 10) 介護支援専門員 11) 精神保健福祉士免許 12) 健康運動実践指導者 13) 文部科学省による大学設置審議会の教員組織審査において, 朝日大学保健医療学部看護学科専任准教授：適格と認定	昭和 57 年 3 月 平成元年 3 月 平成 3 年 3 月 平成 9 年 4 月 平成 11 年 5 月 平成 11 年 10 月 平成 11 年 10 月 平成 12 年 2 月 平成 15 年 6 月 平成 15 年 10 月 平成 25 年 8 月	科目名：「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護活動論Ⅰ」「公衆衛生看護活動論Ⅱ」「公衆衛生看護活動論Ⅲ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究演習Ⅰ」「看護研究演習Ⅱ」「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」 担当可と判定

14) 学位授与機構・文部科学省「大学設置審議会教員審査」において,飯田女子短期大学専攻科養護教育専攻 兼担教授：適格と認定	平成 25 年 12 月	科目名：「看護学特論」担当可と認定
15) 文部科学省による AC 教員審査において,奈良学園大学保健医療学部看護学科専任准教授：適格と認定	平成 29 年 2 月	科目名：「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」「公衆衛生看護方法論Ⅰ」「公衆衛生看護方法論Ⅱ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究Ⅱ」「公衆衛生看護診断演習」「在宅看護学実習」「基礎看護学実習Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」「統合実習」担当可と判定
16) 文部科学省による大学院設置の教員組織審査において,奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授：適格と認定	平成 29 年 8 月	科目名：「在宅看護学特論Ⅰ（在宅看護学）」担当可と判定
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他 1)東大阪市まちづくり助成金	平成 21～22 年	東大阪大学,東大阪短期大学　研究共同分担
2)2015(平成 27)年度教育改革推進事業助成金	平成 27～28 年	朝日大学 2015 年度教育改革推進事業　研究代表者

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1　市町村合併後の集団健康教育（運動）プログラムの評価―総合型地域スポーツクラブにアウトソーシングした事例の検討―	単著	平成 21 年 12 月	東大阪大学教育研究紀要第 7 号;25-30	市町村合併前後の集団健康教育（運動）プログラム評価への示唆を得ることを目的に,総合型地域スポーツクラブにアウトソーシングした事例を検討した.その結果,集団健康教育の実施において「運動の機会や時間がない者や参加者の性別・年齢に応じたアプローチとその評価システムが必要であることが示唆された.
2　総合型地域スポーツクラブを活用した運動啓発事業の評価	単著	平成 22 年 3 月	日本福祉大学大学院社会福祉学研究科「社会福祉学研究」，第 5 号，55－63	中高年者の運動不足といった課題から経年・長期的に継続した運動啓発事業を実施するために,総合型地域スポーツクラブを活用した事業の多面的な評価を検証した.その結果運動啓発事業の評価において,参加実人数を用いて評価を行うことで,実施回数が増えても,男性や運動を継続する実参加人数が増えるとは限らないことが明らかになった.
3「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度」における学生の自己評価 ： 実習形態の違いによる到達度の比較	共著	平成 26 年 3 月	大阪市立大学看護学雑誌,（10）1-10	行政 3 週間実習(行政実習),行政 1 週間と産業 2 週間の計 3 週間実習(産業実習),行政 1 週間と学校 2 週間の計 3 週間実習(学校実習)という実習形態で学生の到達度に違いがあるか否かを検討した. 2012-2013 年度に地域看護学実習を履修した計 124 名に調査票を配布,104 名(回収率: 83.9%) から回答を得た.調査は「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」(厚生労働省,2010) の項目を用いた.実習という臨地の特性により経験しにくい項目については,実習運営のさらなる工夫が必要であることを考察した. 担当分:調査，統計解析 著者：林知里,横山美江,藤村一美,村井智郁子,**芝田ゆかり**

4　看護基礎教育における保健師教育	単著	平成 27 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科紀要, (1) 44-52	看護基礎教育における保健師教育について, ①学士課程（大学 4 年間）の看護基礎教育における保健師教育の変遷, ②朝日大学保健医療学部看護学科の保健師教育の考え方, ③今日の社会に求められる保健師の役割を概観した.
5　2015 年度教育改革推進事業：介護予防プロジェクト報告ー地域と大学が連携した地域基盤型のボランティア教育システムー	共著	平成 29 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科紀要, (3) 59-66 2015 年度教育改革推進事業助成金報告書	現在の日本における看護学教育において，介護予防における地域包括システムを目指した地域基盤型のボランティア教育の取り組みは少ない．そこで我々は，2015 年度教育改革推進事業：介護予防体操作成プロジェクトに取り組み，本事業の目的達成を目指した．地域連携協定を結ぶ A 市をはじめ，A 市社会福祉協議会・A 市地域包括支援センター・みずほ生き活きサポーター等関係機関の協力のもと，「介護予防体操作成プロジェクト：地域と大学が協働したボランティア教育システム」を実施した内容を報告した. 本人担当部分：研究代表者･統計解析, 結果, 考察, 総括 著者：**芝田ゆかり**, 高橋直美, 名和めぐみ, 北端恵子
（学会発表） 1　学生による「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」の自己評価－行政保健実習・学校保健実習・産業保健実習による比較・検討－	共著	平成 25 年 1 月	第 1 回日本公衆衛生看護学会（首都大学東京）, 2013. 1. 14-15, 第 1 回日本公衆衛生看護学会講演集, 第 1 号,75	2012 年度 4 年制大学の保健師課程学生への調査から, 保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度を明らかにし, 行政・学校・産業実習による自己評価の比較・検討を行った. 担当分:調査, 統計解析, 結果 著者：藤村一美, **芝田ゆかり**, 横山美江
2　Effect of Caregiver's Smile for Comfortable in Older Adult with Alzheiheimer's Disease	共同発表	平成 27 年 10 月	The 10th International Association of Gerontology and Geriatrics-Asia/Oceania 2015 Congress 19-22 October 2015 Chiang Mai,Thailand	In patients with advanced Alzheimer's disease, showing various expressions, such as "surprise face" photo "smile", "crying", see how it feels this person? " I heard. Then see the surprise face"so not recognize the"angry　face", "smile"could recognize most people. Slow dementia, and the ability to feel from people's facial expressions. But smile, that capability to read or see someone happy, or happier not learned unabated to the end. This time, evaluate effects caregiver’s smile in a saliva test for older Alzheiheimer diseases objective. 本人担当部分抽出不可能 共著：大塚静香, 濱畑章子, **芝田ゆかり**, 小松美砂

3　児童・生徒等における う蝕有病状況の年齢特性比較―学校保健統計調査結果からの検証―	単著	平成 27 年 1 月	第 3 回日本公衆衛生看護学会(神戸)第 1 回日本公衆衛生看護学会講集,P205	学校保健統計調査結果を用いてう蝕有病状況について,経年的に年齢特性の傾向を明らかにした.
4　Collaboration between University and Community Volunteers in a Nursing-Care Prevention Exercise Project	共同発表	平成 28 年 6 月	The 3rd Korea-Japan Joint Conference on Community Health Nursing (KJJCCHN) July 1-3, 2016Busan, South Korea 2015 年度教育改革推進事業助成金	This study develops an education program with community participation as part of a new project that utilizes a regional partnership between the university and community volunteers through intergenerational exchange and allows volunteers to participate with residents and government officials. The subjects were nine students who applied to participate in the nursing-care prevention exercise project and were recruited from the 87 students in the university's two-year nursing program. The subjects were studied for six months (June-December 2015). In Workshop and two gatherings of elderly people who live in the community, it was content analysis of Reflection and impressions of the student. By content analysis, we were able to extract the concept of individual and collective. 本人担当部分：研究の総括,統計解析, 結果,考察 共著：**芝田ゆかり**,北端惠子,高橋直美
5　地域と大学が連携した地域基盤型のボランティア教育プログラムの展開ー2015 年度教育改革推進事業：介護予防体操作成プロジェクトー	共著	平成 28 年 8 月	日本地域看護学会第 19 回学術集会(栃木)講演集, (19)111 2015 年度教育改革推進事業助成金	本研究の目的は,住民や行政等関係者と共にボランティアとして参加する機会を利用した世代間交流を通して,地域と大学との地域連携協定を活用した介護予防体操作成プロジェクトへ参加する地域基盤型のボランティア教育プログラムを展開することである.学生は①高齢者やボランティア・関係機関の専門職とコミュニケーションを持ち,世代間交流を図り,他者を理解することの必要性を学び,②介護予防体操を作成・披露することでの達成感や喜び等を得たことを報告した.また地域の人々からも今後の学生ボランティア活動の継続希望の声が聞かれ,大学としての地域貢献への一歩となり,地域基盤型のボランティア教育プログラムを展開することができた. 本人担当部分：研究の総括,統計解析, 結果,考察 共著：**芝田ゆかり**,北端惠子,名和めぐみ,高橋直美
6　介護予防体操作成ボランティアの活動が学生に与えたもの-高齢者との関わりで学んだ人権擁護について-	共同発表	平成 29 年 5 月	日本看護倫理学会第 10 回年次大会（大分）2017.	介護予防体操作成のボランティア活動を通して,学生が人権や人権擁護について学んだと考えられることを報告した. 本人担当部分：統計解析, 結果,考察 共著：北端惠子,**芝田ゆかり**,高橋直美

教　育　研　究　業　績　書

平成30年3月31日

氏名　　嶋田　理博

研究分野	研究内容のキーワード
天文学、科学教育	光学赤外線天文学、恒星物理学、自然科学教育（理科、地学、情報）

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）		
2　作成した教科書，教材		
1）		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）		
5　その他		
1）少年宇宙教室「太陽をさぐる」講師	平成20年8月23日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 平成20年度 地域活動支援企画No.20183 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。過去の太陽黒点数の変化から、太陽黒点が11年周期で変化していることを紹介し、現在、そして参加者の誕生年には太陽がどのような状態にあったかを考察してもらった。また、過去の太陽表面のスケッチや撮像写真を公開データベースから取得し、参加者や家族の生まれた頃の太陽がどのような状況であったかを印刷した簡単な冊子を制作してもらった。
2）奈良県公共図書館・大学図書館 横断検索システムの制作と管理・運営	平成20年9月 ～現在	本学情報学部 中尾准教授（当時）とともに、ゼミ学生を指導し、奈良県内の公共図書館・大学図書館を串刺しにして検索するシステムを開発・公開した。当時、公共図書館だけの横断検索や大学図書館だけの横断検索は例があったが、両方を横断する検索はほとんど例がなく、先駆的であった。また、GoogleMapsと連携し、図書館の所在が地図上に示されるのも特徴である。 http://www.nara-su.ac.jp/~rihaku/library/search.html
3）少年宇宙教室「星の光のふしぎ」講師	平成20年10月18日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 平成20年度 地域活動支援企画 No.20183 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。レプリカグレーティングと紙箱を使い、簡易分光器の製作を指導した。製作した分光器を通して、身近にある様々な光源を観察し、光源によってスペクトルが違うこと、太陽（青空）のスペクトルには吸収線が見えることに気づいてもらい、分光観測によって、対象の物理状態を知ることが出来ることを解説した。

4）教職員のための公開講座2008「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成20年12月25日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
5）奈良県高等学校体育連盟テニス専門部ウェブサイトの制作と管理・運用	平成20年12月 ～現在	平成21年に奈良県で高校総体（「近畿まほろば総体」、テニス競技開催地は奈良県）が開催されるにあたり、奈良県高体連テニス部から、テニス競技のウェブサイトを開設したいとの要請を受けた。ゼミ学生を指導し、サーバレンタル契約やドメイン名取得から始め、ウェブサイトをゼロから構築した。現在も更新業務を行い、維持・管理中である。 http://hsaf.nara-tennis.org/
6）教職員のための公開講座2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成21年8月5日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
7）少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する木星とその衛星」講師	平成21年10月24日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成21年度 地域活動支援企画No.21120 世界天文年2009公認イベント No. 2900601 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「世界天文年2009」の公認イベントの1つとして、400年前にガリレオ・ガリレイが天体観測に用いたのと同口径の口径4cmの望遠鏡の製作を指導した。あいにく曇天だったため、天体は観測できず、ポインティング、ピント合わせなど望遠鏡の操作法を練習した。あわせて、ガリレオが発見した木星の４大衛星の運行について、模型を用いて解説した。
8）少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する夜空の星々」講師	平成21年11月28日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成21年度 地域活動支援企画No.21120 世界天文年2009公認イベント No. 2900602 後援：三郷町教育委員会 「世界天文年2009」の公認イベントの1つとして、10月に開催した「少年宇宙教室」に引き続き、参加者が製作した望遠鏡を用いて、月、木星とその衛星の観測を行った。あわせて、望遠鏡の結像の仕組みを数十cmサイズのフレネルレンズを使った模型を使って解説した。また、星座早見盤も製作した。
9）教職員のための公開講座2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成21年12月25日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。

１０）教職員のための公開講座2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成22年8月4日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
１１）少年宇宙教室「探査機『あかつき』でさぐる宇宙」講師	平成22年8月21日	主催：奈良産業大学、後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学教室を開催した。金星探査機「あかつき」の打ち上げに関連し、地球とは全く異なる金星の物理状態・気象状態、そして金星探査機「あかつき」のミッションと期待される観測成果について紹介した。また、金星がなぜ満ち欠けして見えるかを理解するために、太陽・地球・金星とそれらの位置関係を再現する模型の製作を指導し、地球の位置から見た金星が満ち欠けし、大きさも変化することを解説した。
１２）教職員のための公開講座2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成22年12月27日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
１３）奈良学園登美ヶ丘小中高　天体観望会　講師、講演「星の一生と星雲・星団」	平成23年3月12日	主催：奈良学園登美ヶ丘小中高 　奈良市、生駒市、木津川市、精華町在住の小学生と保護者対象の公開講座において、天体観望会に先立って講演を行った。当日参加者が望遠鏡で観望する星雲・星団は星の生死と関係があり、それらを観測することによって星が誕生してから最期を迎えるまでの物理が分かることを紹介した。
１４）少年宇宙教室「太陽を回る星々」全３回 実施主担当者	平成23年8月7日 平成23年8月20日 平成23年10月16日	独立行政法人 科学技術振興機構 科学コミュニケーション連携推進事業 平成23年度　機関活動支援 企画No.2300217 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「太陽を回る星々」をテーマに、 　・太陽系の８惑星 　・海王星以遠の小天体 　・太陽系外の惑星 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全３回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。
１５）少年宇宙教室「300年ぶりの天文ショー 金環日食を見よう」講師	平成24年5月19日	主催：奈良産業大学 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。奈良県下では282年ぶりに見られる平成24年5月21日の金環日食について、日食の起こる原理や観測方法を解説し、日食観測用のサングラスを製作した。あわせて、近年活発になりつつある太陽活動のダイナミズムを、太陽観測衛星「ひので」や「SDO」の画像を交えて紹介した。当日の活動は奈良新聞5月20日版にて取り上げられた。

１６）王寺町りーべるカレッジ「宇宙の誕生と加速膨張」講演	平成24年9月1日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 　人類が歴史上どのように星や銀河までの距離を測り、宇宙の大きさを測ってきたのか、について紹介し、宇宙膨張が発見された経緯や当時の宇宙観への影響について解説した。また、2011年にノーベル物理学賞を受賞した宇宙の加速膨張の発見とその意義について論じた。
１７）王寺町りーべるカレッジ「もう一つの地球を探す」講演	平成24年9月15日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 　1995年に初めて発見されて以降、現在、700個以上の太陽系外惑星が発見されている。これら太陽系外惑星を発見する観測手段を解説するとともに、見つかった太陽系外惑星の特徴や、地球に似た惑星が存在する可能性について論じた。
１８）教職員のための公開講座2010「プレゼンテーションツールPrezi講座」講師	平成24年12月25日	主催：奈良産業大学、後援：奈良県教育委員会 　PowerPointのような紙芝居的なプレゼンではなく、キャンバス上に二次元的に配置された素材の間を移動・ズーミングしてプレゼンするツールとして脚光を浴びているPreziの講習を行った。Preziのアカウント取得方法を始め、基本的な活用から、グループワークへの応用までを実習を交えて解説した。
１９）少年宇宙教室「宇宙を調べるモノづくり」実施主担当者および講師	平成25年8月10日 平成25年8月31日 平成25年10月12日	主催：奈良産業大学 情報学部 後援：三郷町教育委員会 助成：独立行政法人 科学技術振興機構（平成25年度 科学技術コミュニケーション推進事業：企画No.250068） 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「宇宙を調べるモノづくり」をテーマに、 ・惑星探査車 ・ロケット ・天体望遠鏡 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全３回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。また第３回の望遠鏡をテーマに取り上げた回では、講師を務めた。
２０）少年宇宙教室「レンズのふしぎと望遠鏡」	平成26年11月29日	主催：奈良学園大学 社会連携センター 地域の児童の宇宙や科学への関心を高めるため、工作や観測などの体験を通じて楽しく学べる科学教室を開催した。 レンズが結ぶ２種類の像、実像と虚像の仕組みと、その２つを組み合わせた望遠鏡の原理について解説し。参加者に、市販の紙筒とプラスチックレンズを組み合わせた望遠鏡を製作してもらい、ピント合わせ等の操作練習した後、屋外で月のクレーターを観測した。

２１）「けいはんな科学フェスティバル2015」出展 ～けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～	平成27年2月7日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：(公財)関西文化学術研究都市推進機構、京都大学(COC事業)、奈良教育大学 「けいはんな科学フェスティバル2015」の中で、１ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、ナトリウムランプ、LEDなど様々な光源によるスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は，様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なることを解説した。さらに、望遠鏡で撮影した恒星や銀河のスペクトルの写真を展示し，遠く離れた天体でも、スペクトルを観測することにより，天体に含まれている元素の量や，温度や密度などの物理状態、運動状態を知ることが出来ることを解説した。
２２）けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～」実施主担当者および講師	平成27年10月31日 平成27年11月7日 平成27年12月5日 平成27年12月19日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生向けの天文教室を開催し、分光観測をテーマとして取り上げた。分光観測は、太陽をはじめ、天体に含まれている元素の量や、物理状態、運動状態を知ることが出来る手段である。参加者は、分光観測に必要な光の性質や分光器の原理について学び、レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を製作し、太陽の分光観測を行った。観測結果から太陽の元素組成を調べ、天文学者がどのように天体からの情報を引き出しているのかを、体験を通じて学習した。光を分光することによって、手に取れない遠くの天体でもその物理状態を知ることが出来ること、そして、その情報を活用して宇宙の成り立ちについて知ることが出来ることを、工作と実験・観察を通して体験した。
２３）「けいはんな科学フェスティバル2016」出展	平成28年2月6日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、奈良教育大学、(公財)関西文化学術研究都市推進機構 「けいはんな科学フェスティバル2016」の中で、１ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、LEDなど家庭にある光源、水素、ヘリウム、ネオン、水銀の各放電管のスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は，様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なること、水素やヘリウムのスペクトルが天文学の研究とどのような関係にあるかを解説した。
２４）けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成28年9月10日 平成28年10月8日 平成28年11月5日 平成28年12月10日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作を指導し、その望遠鏡を用いて、月、土星から、明るい星雲・星団までを対象とした観測指導を行った。
２５）けいはんなサイエンスプログラム in KICK「太陽の光を調べよう」講師	平成29年1月8日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク グレーティングシートと工作用紙を使った簡易分光器の製作を指導した。また、それを用いた、白熱電球や蛍光灯、LEDなど家庭にある光源、水素やヘリウムなど各種元素の放電管スペクトルの観察を行った。発光する物質によってスペクトルのパターンが異なることを学び、分光が天文学の研究でどのように使われているかを解説した。

２６）けいはんな科学フェスティバル2017「けいはんな子ども天文クラブ2016年活動報告」「太陽・月を観測しよう」出展	平成29年2月4日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構、奈良教育大学、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル2017」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ2016年活動報告」「太陽・月を観測しよう」の２ブースの展示・体験コーナーを担当した。前者では上記２５）の活動成果を報告した。後者では、Ｈαナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面プロミネンス、プラージュの観測、通常の天体望遠鏡を用いた月表面のクレーターの観測を行なった。
２７）けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～手作り望遠鏡で星を見よう～」実施主担当者および講師	平成29年8月26日 平成29年8月30日 平成29年9月2日 平成29年10月7日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。天体望遠鏡の組立工作を指導し、その望遠鏡を用いて、月、土星や二重星を対象とした観測指導を行った。
２８）けいはんな科学体験プログラム「けいはんな子ども天文クラブ～流れ星を観測しよう～」実施主担当者および講師	平成29年12月12日 平成29年12月13日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 地域の小学生とその保護者を対象とした天文教室を開催した。12月14日に極大を迎えるふたご座流星群の眼視による観望、および、電波によるエコー観測を行った。
２９）けいはんな科学フェスティバル2017「けいはんな子ども天文クラブ2016年活動報告」「太陽・月を観測しよう」出展	平成30年2月3日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：精華町、（公財）関西文化学術研究都市推進機構、奈良教育大学、けいはんな科学共育デザインラボ、京都府立大学 「けいはんな科学フェスティバル2018」の中で、「けいはんな子ども天文クラブ2017年活動報告」「太陽を観測しよう」の２ブースの展示・体験コーナーを担当した。前者では上記２７）２８）の活動成果を報告した。後者では、Ｈαナローバンドフィルタを備えた太陽観測望遠鏡を用いた太陽表面プロミネンス、プラージュの観望を行なった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　資格，免許		
１）修士（理学）	平成3年3月	京都大学 第3900号 論文題目「Ｂ型主系列星の線輻射圧と質量放出現象」
２　特許等		
１）		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）		
４　その他		
１）けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク　サイエンス・サポーター	平成26年9月～現在	けいはんな学研都市で実施する科学イベントや科学体験プログラムについて企画・参加・支援している。（宇宙分野担当）
２）けいはんな科学共育デザインラボ　会員	平成29年4月～現在	けいはんな地域の子どもたちの科学に対する興味・関心・意欲を高め、科学的探究心の育成に重点をおいた教育プログラムの開発・運営及び科学イベントの企画・運営を行っている。（宇宙分野担当）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1）				
（学術論文）				
1）The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 70.	エアシャワーサイズ時系列のカオス解析において、カオス性に寄与する宇宙線を選別し、その到来方向の分布を求めた。その結果、Crab, Mrk421, Cyg-Xなど、特定の活動銀河が高エネルギーガンマ線宇宙線源である可能性を示すことができた。 共著：S.Ohara, T.Konishi, A.Mukai, M.Shimada, A.Iyono, H.Matsumoto, I.Yamamoto, N.Takahashi, T.Nakatsuka, K.Okei, S.Tsuji, N.Ochi
2）Searching for cosmic ray nuclei above the KNEE energies through the Gerasimova-Zatsepin effect with the LAAS experiments	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 170.	Gerasimova-Zatsepin効果による原子核宇宙線の崩壊過程を考慮して、大広域エアシャワーデータを解析し、Knee領域以上の宇宙線について考察した。 共著：A.Iyono, H.Matsumoto, K.Okei, S.Tsuji, S.Ohara, N.Ochi, T.Konishi, N.Takahashi, I.Yamamoto, T.Nakatsuka, A.Mukai, M.Shimada
3）情報学部プロジェクト演習における「フィジカルコンピューティング」教育の実践	単著	平成25年2月	情報学フォーラム紀要（奈良産業大学），8，131-140.	2009年度から2012年度の４年間、情報学部「ラジコン製作プロジェクト」において、「フィジカルコンピューティング」教育を実践した。教材としてSun SPOTまたはArduinoを主に用い、合計７つのシステムを製作し、各年度の学園祭に出展した。自らハードウェアとソフトウェアの設計を行い、部品の選定・購入から始めてシステムを完成させる体験は、学生にとって有意義な学修であったと考える。
4）太陽系外惑星発見と情報学	単著	平成25年2月	情報学フォーラム紀要（奈良産業大学），8，159-164.	1995年に初めて発見されて以降、700個以上発見されている太陽系外の惑星について、それらを発見する観測手段や、見つかった惑星の特徴、地球に似た星が存在する可能性について論じた。これらの成果には、ＣＣＤなどの受光素子の技術革新による性能向上や、コンピュータによる自動観測、画像の自動解析など、情報技術の進展による寄与が大きい。
5）奈良県 公共図書館・大学図書館横断検索システムの構築	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要，29，69-75.	平成20年度、奈良県図書館協会大学・専門図書館部会の依頼を受け、奈良県内の公共図書館および大学・研究所図書館の蔵書を検索できるシステムを開発し、インターネット上に公開した。従来の検索システムと異なり、地図上で図書館の位置が確認できることと、専門図書館を含めた大学図書館と公共図書館を一括して検索できるのが特徴である。 共著：嶋田理博、中尾泰士

６）地域における地学教育の実践と課題	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要，29，185-191.	現在、地域に根差した理科教育として、サイエンスカフェや実験教室が各地で実施されている。本学でも地元住民向けの公開講座や小学生を対象とした科学教室を実施し、学外においても積極的に理科教育の振興に取り組んできた。こうした取り組みへの参加者は常に一定数を見込むことができるが、その多くはもともと科学に興味・関心を抱いていたリピーターであり、理科に関心をもたない住民の目を向けさせる工夫が必要である。 共著：向井厚志・嶋田理博
７）少年宇宙教室　−宇宙を調べるモノづくり−	共著	平成26年9月	奈良学園大学紀要，1，173-179.	平成25年度に奈良産業大学（現・奈良学園大学）情報学部が主催した公開講座「少年宇宙教室 ～宇宙を調べるモノづくり～」の報告である。宇宙を探査・観測する機器・装置をテーマに、計３回の講座を開催し、参加者数は小学生児童とその保護者を中心に153名を数えた。参加者の感想はおおむね好評で、地域における科学コミュニケーション活動に一定の役割を果たせたと考える。 共著：嶋田理博・向井厚志・中尾泰士
８）グループ方式によるアンケート分析演習の実践と課題	共著	平成27年12月	神戸山手短期大学紀要，58，41-56	2015年度前期に開講された「アンケート演習(1)」はアンケート分析を主目的とした必修科目であった。授業を終えて、本科目の教育方法や成果を検討すると同時に、本科目で採用されたグループ方式によるアンケートの計画・実施・分析・発表の利点と問題点を考察した。 共著：渡辺卓也、飯田一郎、本多佐知子、嶋田理博
（その他）				
「学会発表」				
１）プロジェクト型演習を通じたアプリケーション開発の学習	共同	平成20年12月	平成20年度　情報教育研究集会 （於福岡県北九州市）	共同発表者：嶋田理博、中尾泰士、向井厚志 情報学部のプロジェクト型演習「ITシステム構築プロジェクト」において、平成19年度に行った、ウェブサーバとRDBMSの構築、それらを連携させた掲示板、ストリートビューシステム、教室使用状況表示システムの制作について報告した。
２）小学生を対象とした天文教育活動「少年宇宙教室」の報告	共同	平成21年9月	日本天文学会 2009年秋季年会 （於山口大学）	共同発表者：中尾泰士、嶋田理博、向井厚志 地域の小学生を主たる対象とした地球・宇宙分野の体験型講座「少年宇宙教室 ～ロケット・太陽・スペクトル～」を企画し、科学技術振興機構の「平成20年度　地域科学技術理解増進活動推進事業　地域活動支援」の支援活動の1つとして採択された。参加した子供達とその保護者に対して行ったアンケートなどをもとに、われわれの活動について報告した。
３）小学生向け体験型天文教室「少年宇宙教室」の報告２：「宇宙を調べる」	共同	平成22年9月	日本天文学会 2010年秋季年会 （於金沢大学）	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2009 年度には科学技術振興機構の支援を得て開催した体験型講座「少年宇宙教室」について報告した。「宇宙を調べる」をテーマとした全４回の講座は、望遠鏡の製作とそれを使っての月・木星の観測を行い、観測の楽しさや宇宙に対する興味を感じてもらえるなど、参加者の満足度の高いものだったと考える

４）小学生向け科学教室『少年宇宙教室』の活動	共同	平成22年11月	第54回 宇宙科学技術連合講演会 （於静岡県静岡市）	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2008年度から地域の小学生を対象として開催している科学教室「少年宇宙教室」について報告した。子ども達が楽しみながら学べるよう、講義ではなく、工作や実験などの体験を中心とした内容は、科学や宇宙に関心のある参加者に対してはもちろん、初参加の子供や、関心のなかった保護者に対しても興味を引き出すことに成功していると言える。
５）The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共同	平成23年8月	Proceedings of 32nd International Cosmic Ray Conference, Vol.1 ,70-71. （at Beijing, China）	共同発表者：大原荘司、小西健陽、向井厚志、嶋田理博、伊代野淳、松本宏樹、山本勲、高橋信介、中塚隆郎、桶井一秀、辻修平 越智信彰 宇宙線時系列データについて、観測粒子密度分布より一次宇宙線エネルギーを算出し、エネルギー時系列データ約５万イベントのカオス解析を行った。エネルギー範囲に対応するカオスの出現頻度の解析から、5.0×10^15～7.5×10^15eVの範囲のエネルギーをもった一次宇宙線が、300イベント連続する時系列データのカオス性の出現にもっとも寄与していることが見出された。
６）看護教育IT化の一考察：教える側教わる側の思いとサービスデザイン	共同	平成27年7月	情報処理学会　第47回ユビキタスコンピューティングシステム・第2回高齢社会デザイン合同研究発表会 （於 立命館大学 大阪いばらきキャンパス）	共同発表者：笹嶋宗彦、高岡良行、嶋田理博、吉岡隆之 看護教育における教材の電子化においては、単純に教科書を電子書籍や補助教材で置き換えるのではなく、教える側と教わる側の双方の要望に応える形で教材とサービスをデザインすることが重要である。筆者らは看護知識と技術を教育するためのタブレット型ツールを新設の看護学科に導入し、設立準備期間を含めて約2年間運用してきた。本発表では、その過程で得られた知見を報告した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　田中和奈

研究分野	研究内容のキーワード
老年看護学	認知症，高齢者，疼痛管理，緩和ケア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）演習の効果的な活用	平成22年4月1日～現在に至る	老年看護学援助論（3年次，前期，必修）の授業として食演習では，食形態および体位による嚥下状態の変化について学生に実際の体験を通して嚥下状態に影響を与える因子の理解をしてもらう内容にしたところ，学生アンケートの結果も学生の満足度が高かった．また，移動援助技術の演習の授業では，学生に看護師役と患者役のロールプレイをしてもらい，麻痺患者の歩行介助および車いす移送の体験をする授業を行った．その結果，具体的に体験することで患者の恐怖感や不安感を体験することができたというフィードバックが演習後の学生のレポートに書かれていた．
	平成29年4月1日～現在に至る	国際保健医療看護論および国際保健医療看護演習では，諸外国の医療に関連する事例を提示し，学生が看護師として海外に派遣された場合，どのように対応していくのかについて検討し，発表する機会を設けた．その結果，学生からの講義・演習に対する感想には，諸外国の医療問題についての事例を検討することで，学びが深まったなどの意見が書かれていた．
2）実習の効果的な活用	平成22年5月1日～平成29年2月28日	看護学科の専門科目「老年看護学実習」では，学生・教員・指導者が参加してのカンファレンスを毎日行い，学生が実習中に感じる困難の解決や実習中の課題に目が向けられるように調整を行った．
3）予習レポートによる事前知識の確認	平成22年5月1日～平成29年2月28日	看護学科の専門科目「老年看護学実習」では事前学習レポートを実習前に提出をさせ，実習時の学習目標についても記載を行わせた．その結果，学生がどのようなことを実習中に学びたいのかということが事前に把握ができ，学生が自己学習目標が達成できるように指導を行った．また，実習前に予習が不十分な学生に対して事前に指導を行うことで，患者の病態把握に学生が戸惑いを感じないように支援することができた．
4）グループワークの活用	平成25年4月1日～平成29年2月28日	老年看護学援助論では，患者事例を授業資料として提示し，学生間でグループワークを行い，発表を行ってもらった．また，「老年看護学実習」では，高齢者入居施設での実習時には，アクティビティケアを各グループで企画を行い，入居者の方を対象にケアの提供を実施できるようにグループメンバー間で協力して行えるように調整を行った．その結果，学生間で意見交換をすることで，一人では思いつくことができないような様々な援助方法を学生が考えることができており，学習効果が上がったと考えられる．
	平成29年4月1日～平成30年5月31日	国際保健医療看護論および国際保健医療看護演習では，諸外国の保健政策について個人で考えた後にグループに分かれてのグループワークと発表を行った．その結果，自分の意見や考えをまとめてからグループワークをすることで，意見交換が活発に行うことができ，他学生の意見について違った視点についても学ぶことができる良い機会となったという意見が授業後の感想に多く記載されていた．

事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材		
1）老年看護学演習冊子作成	平成22年4月1日～ 平成25年3月31日	中部大学生命健康科学部保健看護学科の「老年看護学演習」で行う移動援助技術，排泄介助（おむつ交換），食事援助技術，看護過程事例演習に関する冊子を作成し，毎年改訂を行った．
2）老年看護学実習の手引き作成	平成22年6月1日～ 現在に至る	中部大学生命健康科学部保健看護学科の専門科目「老年看護学実習」の手引きを作成．毎年内容を検討し，追加事項の確認を行い，追加・修正など改訂を実施した． また，岐阜医療科学大学保健科学部看護学科においても老年看護学実習要項を作成し，毎年改定を行った． 平成27年6月現在，奈良学園大学保健医療学部看護学科の老年看護学実習実習要項の作成を行っている．
3）老年看護学実習記録の作成	平成22年6月1日～ 現在に至る	中部大学生命健康科学部保健看護学科の実習講師として専門科目「老年看護学実習」の老年看護学実習記録用紙を作成．毎年内容を検討し，追加事項の確認を行い，記録用紙改訂を実施した． 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科においても老年看護学実習の記録用紙を作成し，毎年改定を行った． 平成27年4月現在，奈良学園大学保健医療学部看護学科の老年看護学実習記録用紙の作成を行っている．
4）老年看護学演習講義用補助教材	平成22年4月～ 平成25年3月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の専門科目「老年看護学演習」で行う移動援助技術，食事援助技術，看護過程事例演習の講義資料として講義内容の要点が理解できるようにアウトラインを毎回作成し，その資料を授業で配布した．
5）老年臨床看護講義用補助教材	平成25年4月1日～ 平成27年3月31日	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の講師として専門科目である「老年臨床看護」の授業資料として，講義内容の要点については学生自身が記載できるようにパワーポイントのスライドとは別に配布資料用としてプリントを作成して配布した．
6）演習レポートの作成	平成25年4月1日～ 平成29年3月31日	専門科目である「老年看護学援助論」では，グループワークとして学生間で話し合い，レポートを作成させているため，グループワークの演習レポート用の患者事例を毎回作成し，学生が患者事例について分析が行えるように配布した．
7）老年看護学概論講義用補助教材	平成25年4月1日～ 平成27年3月31日	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の講師として専門科目である「老年看護額概論」の授業資料として，講義内容の要点について学生自身が記載できるように配布資料を作成して配布を行った．
8）老年看護学概論講義用補助教材	平成27年4月1日～平成28年3月31日	奈良学園大学保健医療学部の専門科目である「老年看護学概論」の授業資料として，講義内容の要点について学生自身が記載できるように配布資料の作成を行った．
9）統合看護学実習実習要項および実習記録用紙の作成	平成29年1月～4月	「統合看護学実習」の実習要項および実習記録用紙の作成を行った．
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）岐阜医療科学大学	平成25年4月1日～平成27年3月31日	上半期・下半期ともに講師としての職務および個人の到達目標は達成しているとの評価であった．

事項	年月日	概　　要
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）（研修会）在宅地域ケア研究センター訪問看護師向け研修「在宅エンドオブライフケア基本レベル研修会」運営委員	平成20年11月29日	在宅地域ケア研究センター主催の研修会のエンドオブライフケアの実践例に関するグループワークの運営を担当した.
2）（講演会） いのちのアレグリア，埼玉県立大学，越谷市	平成23年3月	日本における在宅死数は欧米などの諸外国と比べて少ない傾向にある．こういった日本の在宅死の現状および今後の課題について，諸外国との比較を行った．また，日本における在宅死の事例紹介や英国のホスピスケアおよび家族支援の現状から死をどのようにとらえ，受け入れるべきかというテーマで埼玉県立大学看護学部の学生を対象に講演を実施した.
3）（研修会） 介護保険施設における看護職の包括的ストレスマネジメント研修会,愛知県立大学長久手キャンパス	平成24年1月	愛知県立大学看護学科老年看護学の百瀬由美子教授が科学研究費の助成を受けて実施した研究の一部として,介護保険施設に勤務する看護職を対象に,看護職のストレスを軽減することを目的に,看護職から学習したいと要望のあった認知症高齢者のための疼痛管理に関する講義を行った.
4）（研修会） Dementia Care in Japan,　英国国立病院Royal Free Hospital医師研修会	平成24年11月	英国国立病院の大学教授および医師対象の研修会講師として招かれ，日本の認知症ケアについての講義を行った．講義内容に関するアンケート結果は，最高評価をつけていた医師が過半数を占めていた.
5）（研修会） 三重県看護職海外看護研修事前研修会，英国における医療と看護，三重県津市吉田山会館	平成28年2月	三重県看護職の英国における海外研修の研修生第1期生に対する事前研修会として，英国の医療と看護に関する講義を行った.
6）（研修会） 三重県看護職海外看護研修事前研修会，英国における医療と看護，三重県津市吉田山会館	平成28年７月	三重県看護職の英国における海外研修の研修生第2期生に対する事前研修会として，英国の医療と看護に関する講義を行った.
5　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）准看護師免許	平成4年3月	准看護師免許　登録番号第14123
2）看護師免許	平成6年6月	看護師免許　登録番号第851090
3）英国看護師免許	平成１８年３月	英国看護師免許　Registered Nurse 登録番号06C4020
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）（国内調査研究） 認知症高齢者グループホームにおける看護師による終末期ケアの課題と改善方法の検討	平成20年4月～平成21年3月	平成20年度科学研究費補助金若手スタートアップ（研究課題番号：20890211）の助成を受けて，認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを目的とし，看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った.

事項	年月日	概　　要
2）（国内調査研究） 高齢者入居施設における疼痛評価ツール開発	平成22年9月～ 平成23年3月	日本における高齢者を対象にした疼痛評価ツールの開発は現在までにほとんど行われていない現状にある．本研究は，高齢者入居施設に勤務する看護師が使用する，認知機能障害が軽度の高齢者のための疼痛評価ツールの開発を行い，疼痛評価ツール試用による入居者の疼痛管理に関する看護職の認識変化の検討を目的とし疼痛評価ツールの導入調査を中部大学特別研究費Ａ（採択課題番号22ⅡM10A）の助成を受けて実施した．
3）（国内調査研究） 高齢者入居施設における疼痛教育プログラムの開発	平成26年4月～ 平成30年3月	平成26年度より科学研究費基盤Ｃ研究（課題番号：26463475）の助成を受けて，高齢者入居施設に勤務する看護職を対象とした疼痛教育プログラムの開発を研究代表者として行った．
4）（国内調査研究） 介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査事業	平成26年4月～平成27年3月	公益社団法人全国老人保健施設協会が実施した調査において，調査研究事業班の班員として疼痛管理に関する調査項目の主担当者として調査活動を行った．
5）（国内調査研究） 認知症の人と家族とともに創る認知症ケア対応力向上教育プログラムの開発	平成27年4月～現在に至る	百瀬由美子教授が平成27年度より科学研究費基盤B研究（課題番号：15H05097）の助成を受けて実施する介護老人保健施設における調査について，研究分担者として担当している．
6）（海外調査研究） 軽度認知症高齢者のための疼痛評価ツールの海外における汎用性の検討	平成23年度～ 平成25年度	平成23年度より科学研究費基盤Ｃ研究（課題番号：23593479）の助成を受けて，研究代表者として軽度認知症高齢者のために開発した疼痛評価ツールの海外における汎用性検討調査を英国，マレーシアの2カ国において行った．共同研究者　百瀬由美子，研究協力者　溝尾朗
7）平成20年神奈川県大井松田町地域福祉計画・松田町社協活動計画策定部会策定部員	平成20年5月～ 平成21年3月	介護保険策定部会の部員として，大井松田町の介護福祉政策について老年看護の専門家として助言を行った．
8）岐阜社会保険病院院内看護研究外部講師	平成25年4月～平成26年3月	岐阜社会保険病院（現在の可児とうのう病院）の看護職を対象に，院内看護研究の研究指導を行った．
9）東海記念病院院内看護研究外部講師	平成25年4月～ 平成28年3月	愛知県春日井市にある東海記念病院の看護職を対象とした事例研究の外部講師として指導を行っている．
１０）三重県国際交流財団海外私費留学奨学生選考委員	平成25年4月～ 平成27年3月	三重県津市にある三重県国際交流財団が毎年行っている海外私費留学奨学生の選考委員として奨学生の選考業務を行った．
１１）公益社会法人全国老人保健施設協会　介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査研究事業班班員	平成26年4月～ 平成27年3月	平成26年度に実施した介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査の班員として疼痛管理に関する調査項目の作成を担当した．
１２）三重県健康福祉部医療対策局　看護分野における国際連携推進ワーキンググループ委員	平成27年2月～ 現在に至る	三重県が実施する看護分野における国際連携推進のワーキンググループ委員として，英国における連携候補先大学との連携内容の検討，連携協定に向けた調整，研修生を対象とした事前研修会講師を担当している．
１３）高の原中央病院院内看護研究外部講師	平成28年4月～ 平成30年3月	高の原中央病院の看護職を対象とした看護研究の外部講師として指導を行っている．

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 在宅エンド・オブ・ライフケア（終末期ケア）	共著	平成20年12月	株式会社イニシア A4判全189頁	人生の最期をどのように迎えるかということは個々人・家族にとって,また国としても関心が高まり,近年,終末期にある患者が,「より良い死」を迎えるためにどのような援助ができるかについての研究が医療・福祉・介護の分野で行われるようになってきた. 本人担当部分は，第1章と第10章を担当した. 第1章　エンド・オブ・ライフケアの理念と国内外の動向 　第１章では，米国，カナダ，オーストラリア，日本の４カ国における終末期ケアの歴史と動向について紹介し，今後の終末期ケアの質を高めるための課題について考察した.(pp.6-10) 　第10章　施設・グループホームにおけるエンド・オブ・ライフケア 　日本における居宅サービス事業所数の移り変わり，看取りの場所の推移について述べ，在宅で看取りを行うことを中心に考えた専門家と利用者家族にとってのケアプログラムであるエンド・オブ・ライフケアプログラムの使用方法について事例を交えて紹介している.エンド・オブ・ライフ・ケアプログラムはプログラムの手順に沿ってケアを行えば,サービス評価を確認しながら一定水準のケアの質向上が図られることを目的として作成されており，グループホームでのエンド・オブ・ライフケアの利用例と在宅・施設・グループホームにおけるペインマネジメントの留意点を考察した.(pp.129-136) 著者名　島内節，薬袋淳子，野村美香，中谷久恵，和田洋子，土地邦彦，辻彼南雄，田中和奈他6名
2 多職種で支える在宅高齢者終末期ケア	共著	平成25年12月	株式会社三恵社 B5判　全52頁	平成24～26年度厚生労働科学研究費補助金長寿科学総合研究事業の補助金を受けて行われた「高齢者在宅医療に関する多職種協働の阻害要因を克服する教育システムの構築に関する研究」の教育テキストの作成を行った. 本人担当部分は第13章と第19章. 13．苦痛のアセスメントと緩和ケア，pp.20-21. 19.グリーフケア，pp.30-31. 著者名　百瀬由美子，藤野あゆみ，天木伸子，平木尚美，田中和奈他3名
3．これからの国際看護学-国境を越えた看護実践のために-	共著	平成26年11月	株式会社ピラールプレス B5判　全163頁	現代の社会では，国際的な規模における交流が盛んになってきている．本書では，開発途上国の現状や宣せ印刻における看護の現状についてなどの解説を行っている． 本人担当部分は，第1章，第1節，第2節．第2章第1節，第2節．第4章第1節，第2節．第6章第1節，第2節．第8章第1節，第2節，第3節．第9章第1節．第10章第1節. 第1章　国際看護の概念と国際保健 　第1章では，国際看護の概念および国際保健の歴史的背景について紹介し，国際看護の臨床場面で重要となる異文化看護の理解について考察した．pp.10-21. 第2章先進国・経済先進国における看護の現状と課題　pp.30-36. 第4章リプロダクティブヘルスと母子保健．pp.62-77. 第6章日本における外国人看護師の現状と課題.pp.100-105. 第8章海外で看護師になる．pp.116-122.pp.125-126.p.128. 第9章海外で看護師として働く．pp.130-133 第10章海外の大学院で学ぶ.pp.150-151. 著者名　守本とも子，田中和奈他6名

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 2018年要点がわかる出題傾向がみえる老年看護学（看護師国家試験対策）	共著	平成29年10月	株式会社ピラールプレス B5判　全109頁	2018年の看護師国家試験対策本として，近年の国家試験問題の出題傾向に対応した要点の開設を行っている. 本人の担当箇所は，目標Ⅱ．さまざまな健康状態にある高齢者と家族の生活および健康を支える看護についての基本的な理解を問う．（全39頁） 著者名　吉村雅世，田中和奈，高橋寿奈
5.老年看護学	共著	平成30年11月発行予定	ヌーヴェルヒロカワ	高齢者に特徴的な疼痛症状とその評価方法，疼痛に対する看護，高齢者の睡眠障害とその看護についての解説を行っている. 本人担当箇所は，第７章老年期に特有な健康障害と看護 8.疼痛，9. 睡眠障害．（全11頁） 著者名　百瀬由美子，田中和奈他
6. 高齢者のための疼痛ケア	共著	平成30年3月	株式会社三恵社 B5判　全33頁	平成26～30年度科学研究費基盤Cの補助金を受けて行われた「高齢者入居施設における疼痛教育プログラムの開発」の研修会に使用する教育テキストの作成を行った. 本人担当部分は第1章と第4章の執筆と編集作業.第1章高齢者の痛みとその特徴，第4章非薬物的疼痛ケア．（全5頁）. 著者名　田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗，前田吉樹，高橋晶
（学術論文） 1. Social Support for the Elderly Living Independently in Japan and the role of Japanese Councils of Social Welfare. （日本の独居高齢者に対する社会福祉サービスと社会福祉協議会の役割） （査読付）	単著	平成20年11月	イギリス国立ポーツマス大学老人学修士課程修士論文（A4判　全44頁）	（目的）日本の社会福祉協議会は独居高齢者の社会福祉サービスの提供に重要な役割を担っている.しかし，独居高齢者のための福祉サービスに関する研究は現在までにあまり行われていない.そのため,社会福祉協議会が提供している独居高齢者が利用可能な福祉サービスについて明らかにすることを本研究の目的とした.（方法）全国の社会福祉協議会から無作為抽出した60ヶ所の社会福祉協議会を対象とし，社会福祉協議会が提供している独居高齢者が利用可能な福祉サービスについて郵送による質問紙調査を行った.（結果）32ヶ所の社会福祉協議会から回答が得られた.社会福祉協議会が提供している独居高齢者のための社会福祉サービスには地域差があり，利用できるサービスの内容や利用料金，利用できる頻度についても地域格差があることが明らかとなった.（課題）すべての独居高齢者が包括的な福祉サービスを受けられるようなシステム作りの検討が必要である.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 高齢者入居施設における高齢者の疼痛評価ツール - 文献レビューから考える高齢者の疼痛評価 - （査読付）	共著	平成22年3月	日本看護福祉学会誌 15（2），pp.137-147.	（目的）高齢者の生活の質改善のためには疼痛マネジメントは非常に重要である.しかし，高齢者の疼痛に関する研究は日本においては現在までにほとんど行われていない.欧米においては，様々な疼痛評価ツールが開発されており，高齢者の疼痛に関する研究も盛んに行われている.そのため，欧米における高齢者の疼痛マネジメントの実態を明らかにすることを本研究の目的とした.（方法），欧米において開発された，高齢者入居施設で使用可能な疼痛評価ツールの種類および欧米における疼痛マネジメントの現状把握を文献検討により行った.（結果）欧米では認知症高齢者に使用可能な疼痛評価ツールが数十種類存在している.しかし，臨床での有用性が高いと評価されている疼痛評価ツールの場合でも，疼痛評価項目の数が多すぎるため疼痛評価に時間がかかるなど，看護職の配置が少ない高齢者入居施設において使用するには課題は多いと考えられる.高齢者の疼痛評価を行う際には，個人的特性に見合った評価ツールを選択した上で，疼痛評価を行うことが重要であると考えられた.（考察）表情やしぐさなどを項目に加えた疼痛評価ツールを開発し，疼痛評価ツールの使用方法や疼痛マネジメントに関する事前研修を行うことが高齢者の疼痛マネジメントの質改善のためには重要である. 本人担当部分：文献検索および内容の検討を行い，筆頭著者として論文の執筆を行った. 共著者：田中和奈，　百瀬由美子
3. 介護老人保健施設入所者の疼痛に対する看護職の評価法の実態調査 （査読付）	共著	平成24年1月	日本老年医学会雑誌,49(1)，pp.99-106.	（目的）全国の介護老人保健施設に勤務する看護職による入所者に対しての疼痛評価の実施状況,疼痛評価に関する看護職の認識,疼痛に関する研修会についての実態を把握し課題を検討することを本研究の目的とした. （方法）全国の介護老人保健施設から無作為に抽出した500施設のうち,承諾の得られた60施設487名の看護職を対象に質問紙調査を実施した.質問項目は，実施頻度,疼痛評価ツール使用の有無,ツールの種類などであり,看護職の疼痛評価に関する認識については,疼痛評価に対する自信,困難感,さらに研修会について受講状況と受講の必要性についてなどを把握した.（結果）有効回答数は443名で,疼痛評価の実施頻度は,「行っていない」が最も多く196名（44.2%),「痛みの訴えがあったときのみ」183名（41.3%),「一日一回」20名（4.5%),「一日二回」14名（3.2%)という結果であった.また,74.7%の看護職は入所者の疼痛評価を適切に行う自信がないと回答しており,高齢者の疼痛に関する研修会受講者は44名（9.9%）と少数であった.（結論）疼痛評価について,実施していないという回答と訴えがあった時のみ実施の回答合計は8割以上に及んでおり,さらに疼痛評価を適切に行う自信のない看護職が7割以上いることが明らかとなった.認知機能低下などで自ら疼痛を訴えられない入所者が増加傾向にある状況において,看護職が自信を持って入所者の疼痛評価が行えるような働きかけが必要であることが示唆された. 本人担当部分：研究代表者として質問紙の作成およびデータ収集，データ分析，結果の考察などを行い，論文の取りまとめおよび執筆を行った. 共著者：田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 介護老人保健施設における疼痛評価ツール開発 （査読付）	単著	平成24年3月	愛知県立大学大学院看護学研究科博士学位論文 （A4判　全55頁）	（目的）日本の介護老人保健施設で生活する軽度認知症高齢者の疼痛の有無を看護職が観察することによって確認可能な疼痛評価ツールの開発および妥当性の検討を行うことを目的とした.（方法）本研究への協力承諾が得られた3箇所の介護老人保健施設に入所する鎮痛剤の使用や非薬学的療法の疼痛ケアを受けている，口頭で痛みの訴えが行える65歳以上のHDS-Rの評価が10点以上の高齢者12名に対して，疼痛評価ツールの試用を1週間から1ヶ月間行った. （結果）介護老人保健施設において疼痛評価項目チェックリストの試用を1週間から1ヶ月間，12名の入所者に対して実施した.調査を行った結果，入所者の訴えと看護職の観察項目による評価の関連では，入所者の疼痛の訴えと不穏状態，表情，発声反応，身体的反応，行動・動作の変化に関する看護職が評価した項目との間に関連があることが示唆された.入所者に対して2名の看護職が同時に行った疼痛評価について，疼痛評価項目毎に評定者間で一致した項目の割合を算出し，評定者間の一致率とした.その結果，90%以上の一致率を認めた項目は28項目中20項目にのぼった. （考察） 対象者本人の疼痛の訴えと評定者が評価した不穏状態，表情，発声反応，身体的反応，行動・動作の変化との間に関連があり，これらの疼痛評価項目の妥当性が示唆された （結論）日本では開発が行われていなかった日本の介護老人保健施設で働く看護職や老人専門看護師が必要であると感じている疼痛評価項目の設定がされたツールを開発し妥当性検討を行ったことは，高齢者入居施設で生活する高齢者の生活の質改善のために意義あることと考える.
5. 老年看護学臨地実習における学生の困難状況と対処行動 ―第一報　実習初期における困難状況の実態― （査読付）	共著	平成24年3月	生命健康科学研究所紀要，Vol.8，pp.91-105.	（目的）実習初期の看護学生が老年看護学臨地実習において抱く困難状況と，それに対する対処行動を明らかにすることを本研究の目的とした. （方法）保健看護学科3年次に在籍する学生で，平成23年10月～11月に老年看護学臨地実習を終了した学生42名を対象に自記式質問紙調査を実施し質的内容分析を行った. （結果）学生が困難と感じた内容は，【老年者とのコミュニケーション】，【老年者の状況に応じた看護援助】，【看護過程の展開】，【教員・臨地実習指導者との関わり】，【実習記録】，【老年者の特徴理解】，【実習における報告】の７カテゴリーが抽出された.今回は実習初期であったため，老年者の理解やコミュニケーションの他に，実習記録の書き方や看護過程の展開に伴うアセスメントに関する困難がみられたと考えられる.また，これら困難に対する学生の対処行動は，【指導者・看護師からの支援】，【老年者への対応の工夫】，【カンファレンス・学生間での話し合い】，【援助の効率化を考慮した対応】，【手技および知識の再確認】，【老年者への指導の検討】，【情報収集】の７カテゴリーであった. （考察）特に実習経験の少ない初期の学生に対して，老年者の理解や関係形成に必要なコミュニケーション方法，看護援助の学内での学習の強化を図るとともに，臨地実習では教員が，環境調整や看護モデルを見せながら，学習の意味付けを示していく指導が重要ということが示唆された. 本人担当部分：データ入力およびカテゴリー抽出作業を行った.共著者：福田峰子，安藤好枝，田中和奈，伊藤紀枝，梅田奈歩，粥川早苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.通所介護事業所における虚弱高齢者の口腔機能向上サービスに関するニーズと職員の認識（査読付）	共著	平成24年12月	愛知県立大学看護学部紀要,Vol.18，pp.63 - 69.	（目的）口腔機能向上サービスの該当者が多いと推定される通所介護事業所を利用している虚弱高齢者の口腔機能向上サービスに関するニーズと職員の認識を明らかにすることを目的とした．（方法）1044の通所介護事業所職員を対象に郵送による自記式質問紙調査を行った．（結果）272名から回答が得られた（回収率26.1%）．口腔機能向上サービスのニーズを有する利用者や通常の口腔ケアの実施は多いものの,口腔機能向上の算定はわずかであった.算定しない理由は,職員のケアに対する自信が低いことがあがっていた．（結論）口腔機能向上サービスの促進と成果を高めるには,職員への教育の充実を図る重要性が示唆された. 本人担当部分：研究協力者との調整業務，論文内容確認，英訳業務 共著者：百瀬由美子,藤野あゆみ,天木伸子,山根友枝,田中和奈,鎌倉やよい
7．老年看護学臨地実習における実習時期からみた学生の困難状況と対処行動（査読付）	共著	平成25年3月	生命健康科学研究所紀要,Vol.9，pp.84-101	（目的）老年看護学臨地実習において学生が抱く困難状況とその対処行動の実習時期別の変化を明らかにすることを目的とした．（方法）老年看護学実習を履修する看護学生を対象に，実習終了後に自記式質問紙調査を実施した．（結果）実習時期にかかわらず学生が困難を感じていたのは【老年者とのコミュニケーション】，【老年者の状況に応じた看護援助】，【看護過程の展開】，【実習記録】であった.その中でも，【老年者とのコミュニケーション】は実習時期に関わらず学生が最も困難に感じていた.実習初期では老年者の性格的特徴に関連したことでコミュニケーションに困難を感じており，中期と後期では難聴や言語障害などの影響，老年者の家族とのコミュニケーション，学生自身のコミュニケーション能力不足に関連した内容であった.時期別にみると実習初期では，困難に感じる内容が実習経験の少なさからくるものであり，中期・後期になるにつれて，対象にあわせた看護を行う上で生じる内容へと変化がみられた.実習での困難に対する学生の対処行動は，【臨地実習指導者・看護師からの支援】，【老年者への対応の工夫】がどの時期においても多かった.しかし，実習後期になると【実習困難に対する問題解決行動】が多くなっており，実習で遭遇する多様な困難状況に対して，自己解決する行動へと変容がみられた．（考察）学生にとって臨地実習は，看護の実践を学ぶ学習の機会であり，多様な困難に遭遇しながら成長する場でもある.よって，教員は個々の学習段階に応じた支援を適切に行う実践能力が求められる. 本人担当分：筆頭著者としてデータの分析およびカテゴリー抽出作業，グラフの作成，論文の執筆および取りまとめ作業を行った.共著者：田中和奈，福田峰子，安藤好枝,梅田奈歩，粥川早苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8. 通所サービスを利用しているよう介護高齢者の健康づくりのための対処行動	共著	平成27年3月	岐阜医療科学大学紀要第9号，pp.33-40.	本研究の目的は，通所サービス（デイケア・デイサービス）を利用している要介護高齢者が実施している健康づくりのための対処行動を明らかにすることである．通所サービスを利用している要介護高齢者9名に半構成的面接を行い，その結果を内容分析した．インタビューの途中，語りのきっかけとして骨ウェーブで骨強度を測定したが，測定前後でインタビュー内容に変化はなかった．ほとんどの対象者に転倒歴があり，その約半数は骨折の既往があった．分析の結果，【健康管理】【活動的な生活】【食事への配慮】【自分なりの生活】の4つのカテゴリーが得られた．語りのなかで『運動習慣』や『リハビリをうける』は，「歩行」に重点をおいており，「畑仕事」も活動の一部として認識されていた．対象者は骨粗鬆症予防，転倒予防，骨折予防につながる対処行動を実施していると捉えることができた．そのため，今後在宅で長く生活するために通所サービスなどを活用し，実施している対処行動を継続できる支援が必要である． 本人担当分：データ収集および結果の分析，カテゴリーの抽出作業を行った． 共著者：藤吉恵美，田中和奈，和田裕子，吉村雅世
9. End-of Life Care Priorities in a Japanese Group Home for Older People with Dementia.（日本のグループホームにおける終末期ケアの課題）	単著	平成27年3月	岐阜医療科学大学紀要，第9号,pp.81-87.	（目的）認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを本研究の目的とした．（方法）看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った．（結果）グループホームに勤務する介護職員へのインタビュー調査の結果，入居者の急変への対処方法について不安に思っている介護職員が多いことが明らかとなった．（結論）グループホームにおける終末期ケアの改善を図るためには，介護職員が研修会へ参加し終末期ケアの知識を向上し,入居者の急変に落ち着いて対応できる環境の整備が今後必要と考える．
10. 介護老人保健施設入所者に対する看護職による非薬物的疼痛ケア（査読付）	共著	平成27年3月	日本看護福祉学会誌，20（2）.pp.59-69.	介護老人保健施設入所者に対する看護職による非薬物的疼痛ケアの実態を明らかにすることを目的とした． 無作為抽出した全国500箇所の介護老人保健施設の看護職に対して郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した．非薬物的疼痛ケアの実態把握の調査内容として，「鎮痛剤が処方されていない入所者に疼痛が存在すると評価した際の対処方法」，「非薬物的疼痛ケアの内容」について調査を行った． 有効回答数は443件であった．鎮痛剤が処方されていない入所者に疼痛症状があった場合の対処方法として，非薬物的疼痛ケアを実施していたのは120名（27.1%）という結果であった．また，疼痛評価に自信がある群は有意に多く非薬物的疼痛ケアを実施していた． 本研究の結果，非薬物的疼痛ケアの実施を促すためには，看護職が自信をもって疼痛評価が行えるよう，高齢者の疼痛管理に関する教育が必要であることが示唆された． 本人担当分：研究代表者として，質問紙作成，データ分析，論文の執筆と取りまとめ作業を行った． 共著者：田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.Benefits of Studying other Countries' Welfare Systems, through a Comparison of German and Japanese Long-Term Care Insurance Systems （福祉政策の国際比較の利点：日本とドイツの介護保険制度の比較を通して）	単著	平成29年3月	奈良学園大学紀要第6集．（全１０頁）	日本とドイツの介護保険制度を比較することで社会福祉政策の国際比較の利点について明らかにすることを目的とし，文献検討を行った．その結果，同じような社会背景を持つ他国の福祉政策の考察を行い，そのまま他国の政策を導入するのではなく，自国の特徴に合わせた内容の福祉政策に修正を行ったうえで制度を導入することが，自国の福祉政策の改善には必要であることが示唆された．
12．地域在住高齢者を対象とした運動教室の効果検証 －遠隔フィットネスシステムを使用して－	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究．第5巻2018年2月．pp.53-57.	自宅で生活する65歳以上の高齢者10名に対して，特別養護老人ホーム1施設に遠隔フィットネスシステムを設置し，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室を週1回1ヶ月間実施した．運動指導1ヶ月後に対象者に対して，「運動教室に参加して体調に変化はあったかどうか」についての面接内容とする半構造化面接を実施した．面接内容は同意を得てICレコーダーに録音し逐語録を作成した． 　分析の結果，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室の効果として，52コード，19サブカテゴリー，10カテゴリーが抽出された． 　地域在住高齢者は，運動教室に参加することで身体機能や生活満足度，運動に対する意識の改善に効果を感じていた．また，日常の動作や食生活にも気を付けるようになるなどの変化もみられた．これらのことから，運動教室を高齢者に対して行うことは，遠隔指導であっても高齢者の身体機能の改善だけではなく，健康管理に対する意識およびQOL改善につながることが示唆された． 本人担当分　データ収集，データ分析，カテゴリーの抽出，論文執筆を担当した． 共著者：田中和奈，吉村雅世，東中須恵子，守本とも子
（その他） （研究報告書） 1．認知症高齢者グループホームにおける看護師による終末期ケアの課題と改善方法の検討	単著	平成22年5月	平成20年度～平成21年度科学研究費補助金（若手スタートアップ）研究成果報告書	平成20年度科学研究費補助金若手スタートアップ（研究課題番号：20890211）の助成を受けて，認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを目的とし，看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った． その結果，入居者の急変への対処方法について不安に思っている介護職員が多く，職員が研修会へ参加し終末期ケアの知識を向上し，夜間の職員の増員を行い，入居者の急変に落ち着いて対応できる環境の整備が必要であることが示唆された．
2．軽度認知症高齢者のための疼痛評価ツールの海外における汎用性の検討	共著	平成26年5月	平成23年度～平成25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書	平成23年度より科学研究費基盤Ｃ研究（課題番号：23593479）の助成を受けて，研究代表者として海外の高齢者に対しても使用可能な英訳版疼痛評価ツール開発のために，マレーシアの有料老人ホームおよび英国の有料老人ホームに入居する65歳以上の高齢者を対象に，日本の介護老人保健施設の入所者を対象に開発した疼痛評価ツールP-COP（Pain Checklist for Older People）の英訳版を用いて，疼痛ケア提供前後に疼痛評価を実施した． その結果，入居者本人の疼痛の訴えと評定者が評価した攻撃的状態，不穏状態，表情，発声反応，身体的反応，生理的反応，行動・動作の変化，顔色の変化との間に関連があり，これらの疼痛評価項目の妥当性が示唆された． 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめ，報告書の記載を行った． 共同研究者：百瀬由美子，田中和奈，研究協力者溝尾朗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 介護老人保健施設退所者の在宅療養支援に関する調査研究事業報告書	共著	平成27年3月	公益社団法人全国老人保健施設協会　調査研究事業報告書. （A4判　全63頁）	（研究背景と目的） 平成25年度に実施した調査研究事業から調査対象者を増やし，調査機関を退所後1ヶ月から退所後3ヶ月までに広げることにより，老健施設退所後の状態像変化を深く追跡調査するとともに，「健康維持・向上」に作用する環境要因に関する検討を行い，在宅復帰後も良好な居宅生活が維持できるように老健施設および居宅におけるケアマネジメントに反映させていくことを本研究の目的とする. （調査内容） 介護老人保健施設退所者の施設在所中から退所ご在宅生活を送るなかでの状態像の変化を把握するため「退所者生活機能調査」を計5回にわたり実施した. （結果） 在宅復帰する老健利用者は入所中に機能改善がみられるが，自宅に帰ると機能は少しずつ低下することが明らかとなった. 本人担当部分：疼痛に関する質問項目および調査用紙の作成，調査結果のまとめに関する助言を行った. 共著者：東憲太郎，大河内二郎，安藤繁，小川勝，折茂賢一郎，助川未枝保，鷲見よしみ，高椋清，田中和奈，他9名.
（依頼原稿） 1. 臨床老年看護　スペシャルレポート　イギリスにおける高齢者緩和ケア	単著	平成19年3月	臨床老年看護, Vol.14,No.2，pp.61-63, 日総研	認知症ケア理論であるPerson-Centred Careについての紹介を行った.また，イギリスの緩和ケアにおいて使用されている医療機器やLiverpool Care Pathwayについて紹介をし，英国国立病院の高齢者緩和ケア病棟において提供されている緩和ケアについての現状報告を行った.
2.海外医療事情⑦西オーストラリア州パース市の医療事情	単著	平成22年1月	ロングステイ財団季刊誌 LONG STAY 2010年冬号, pp.14-15.	オーストラリアにおける医療機関の紹介と医療事情および旅行者が体調管理面で注意しなければいけない日焼けや虫刺されの対応策についての報告を行った.
3. 海外医療事情⑳高山病の予防について	単著	平成25年4月	ロングステイ財団季刊誌 LONG STAY 2013年春号, pp.38-39.	ハイキングや登山時に高山病を予防するための注意点や対応策についての紹介を行った.
4.日本における国際看護ー異文化看護の理解ー	共著	平成27年6月	新宿区医師会会誌第55巻6，pp.15-18	日本における国際看護の現状と留意点について英国での対応策を例に用いて考察を行った．田中和奈，溝尾朗
5. 高齢者入居施設における終生期の疼痛管理	単著	平成29年3月	臨床老年看護，2017年3・4月号,pp.50-56，日総研.	高齢者入居施設の入居者を対象とした疼痛評価の視点や疼痛緩和方法についての紹介を行った.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（国内学会発表） 1．がんと非がん事例の在宅終末期経過時期別ニーズとアウトカム到達度　－第１報 疼痛症状のマネジメント－	－	平成20年12月	第28回日本看護科学学会学術集会,福岡：福岡国際会議場.	（目的）在宅療養する終末期訪問看護利用者の在宅療養開始期7日間から，状態が安定した小康期（開始8日後から臨死期前），臨死期（死に至る7日間）の経過時期別に，ニーズとアウトカム到達度の変化を明らかにすることを目的とし，第一報では，ペインマネジメントに焦点をあてた．（結果）郵送法による自記入式質問紙調査を実施.得られた回答はがん148例，非がん122例，有効回答はがん145例，非がん120例.全経過において，がんの40%以上に存在したニーズは疼痛の観察，疼痛増強時の対応，疼痛表現の指導，鎮痛薬の副作用の便秘であった.また，全経過にわたって，ケア実施が60%未満であったのは薬剤の変更・増量の検討であり，ケアアウトカムにおいても，疼痛観察やレスキュードーズの使用法は，アウトカム到達度の低い事例が臨死期まで多い傾向であった．（課題）利用者の変化に応じた薬剤の変更・調整が必要であることが示唆された. 本人担当部分：調査結果のまとめおよび演題抄録の作成を行った. 共同研究者：野村美香，島内節，薬袋淳子，大橋渉，田中和奈，長崎光枝，和田洋子
2．がんと非がん事例の在宅終末期経過時期別ニーズとアウトカム到達度　－第２報 疼痛以外の症状マネジメント－	－	平成20年12月	第28回日本看護科学学会学術集会，福岡，福岡国際会議場.	（目的）がんと非がん患者の在宅終末期経過時期別（在宅ケア開始期・小康期・臨死期）に，１報に続いて疼痛以外の症状についてニーズ内容，そのニーズの重要度と困難度，ケア実施度，アウトカム到達度を明らかとすることを本研究の目的とした．（方法）がんと非がん両群の相違点と類似点,必要なケアについて分析を行った．（結果）疼痛以外の症状の出現率は7個の中項目（呼吸困難，消化器症状，嚥下困難，発熱・感染，水分・栄養，スキントラブル，倦怠感）について，がんと非がんともに開始期<小康期<臨死期と次第に高くなっていた.ニーズ内容は（１）全期間を通してがんと非がんともに水分出納バランスと栄養・スキントラブルが多く81-94%に出現，がんは倦怠感が81-84%で非がんより高率（P<0.01）. （２）臨死期では両群ともに全7項目が急上昇し，呼吸困難はがん87%，非がん90%に達し，ニーズが多発していた.臨死期のニーズは水分と栄養，呼吸困難，スキントラブルが多かった.両群ともにニーズの経過パターンは臨死期に各ニーズが高率，かつ多様化していた．（課題）今後，両群のニーズの経過時期別変化に注目したケアが必要である. 共同研究者：島内節，野村美香，薬袋淳子，大橋渉，田中和奈，長崎光枝，和田洋子
3．認知症高齢者グループホームにおける看護師による終末期ケアの課題と改善方法の検討	－	平成21年4月	平成20年度科学研究費補助金若手スタートアップ研究実績報告書	（目的）認知症高齢者のためのグループホームにおける終末期ケア提供の課題を明らかとすることを本研究の目的とした．（方法）看取りを行った経験のあるグループホームに働く介護職員および医療連携により訪問看護を実施した訪問看護師に対して半構造的インタビュー調査を行った．（結果）グループホームに勤務する介護職員へのインタビュー調査の結果，入居者の急変への対処方法について不安に思っている介護職員が多いことが明らかとなった．（結論）グループホームにおける終末期ケアの改善を図るためには，介護職員が研修会へ参加し終末期ケアの知識を向上し,入居者の急変に落ち着いて対応できる環境の整備が今後必要と考える.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 介護老人保健施設における看護師による疼痛評価時の着目点	－	平成22年10月	日本公衆衛生雑誌，57（10），376，東京.	（目的）介護老人保健施設に勤務する看護師の疼痛評価時の着目点について明らかにすることを目的とした.（方法）無作為抽出した全国500箇所の介護老人保健施設に勤務する4,500名の看護師に対して郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した.（結果）高齢者の疼痛評価時の着目点について，欧米で開発された高齢者の疼痛評価ツールとして臨床での実用性が高いと評価されている疼痛評価ツールに共通する項目から，日本の高齢者に当てはまると考えられる疼痛評価項目25項目を選び，「重要でない」から「重要である」の5段階評定のリッカート尺度を用いて質問を設定した.調査協力の承諾が得られた60施設487名の看護師に質問紙が配布され442名より回答を得た.高齢者の疼痛評価実施時の着目点に関して無回答であった回収データは無効回答とし，有効回答数417を分析対象とした.因子分析の結果，固有値1以上の5因子が抽出された.「拒否的・攻撃的・不穏な状態」，「表情と発語反応」，「行動と動作の変化」，「身体反応」，「顔色の変化」の5因子23項目が観察項目として抽出され，内的整合性が確認された（Cronbach　α係数＝0.954）.また，抽出された5因子全てで内的整合性が確認された.（考察）因子分析の結果，抽出された5因子全てで内的整合性が確認された.以上のことから，介護老人保健施設における疼痛評価時の看護師の着目点が構造化されたと考える. 本人担当部分：研究代表者として質問紙の作成，データ解析，結果のまとめ，抄録作成，発表業務を担当した. 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
5. 介護老人保健施設における看護師による疼痛管理の実態	－	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会，札幌.	（目的）介護老人保健施設における疼痛評価の実態把握を目的として調査を行った.（方法）無作為に抽出した全国500箇所の介護老人保健施設に勤務する看護師に対して質問紙調査を実施し，調査協力の承諾が得られた60施設442名の看護職員より回答を得た.高齢者の疼痛評価実施時の着目点25項目に関して無回答であった回収データは無効回答とし，有効回答数417を分析対象とした.（結果）高齢者の疼痛評価ツールを使用することの必要性と高齢者の疼痛に関する研修受講の必要性についてピアソンの積率相関係数を算出したところ，かなり相関関係（0. 456）がみられた.高齢者の疼痛評価を行う自信に関する質問に対して，自信がないという回答が75.5%を占めており，これは自信があると回答した21.6%の約3.5倍という結果であった.疼痛評価の実施頻度については，「行っていない」が最も多く43.9%という結果であった.（考察）介護老人保健施設において定期的に疼痛評価を実施している施設は10%以下にとどまっており，高齢者の疼痛評価を行うことは難しいと感じていることが明らかとなった.介護老人保健施設における疼痛管理の質的改善のためには，短時間で定期的に疼痛評価を行うための疼痛評価ツールの導入と疼痛管理に関する研修会の実施が必要であると考える. 共同研究者：田中和奈，　百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 高齢者入居施設における軽度認知症高齢者のための疼痛評価ツール開発	－	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会, 東京	（目的）日本の介護老人保健施設で生活する軽度認知症高齢者の疼痛の有無を看護職が観察することによって確認可能な疼痛評価ツールの開発および妥当性の検討を行うことを目的とした. （方法）介護老人保健施設に入所する鎮痛剤の使用や非薬学的療法の疼痛ケアを受けている, 口頭で痛みの訴えが行える65歳以上の軽度認知症高齢者12名を対象に疼痛評価ツールの試用を行い, それらの施設に勤務する看護職員24名が疼痛評価とツールへの記載を実施した. 入所者本人の痛みの訴えであるVRSと疼痛評価ツールの各項目の強度との関連についてスピアマンの順位相関係数にて分析を実施した. また, 評定者間一致率については, 2名の評定者の評価が一致した項目数の割合を算出した. （結果）入所者の訴えと看護職の観察項目による評価の関連では, 入所者の疼痛の訴えと不穏状態, 表情, 発声反応, 身体的反応, 行動・動作の変化に関する看護職が評価した項目との間に弱いながらも関連が認められた. 入所者に対して2名の看護職が同時に行った疼痛評価について, 90%以上の一致率を認めた項目は28項目中20項目であった. （結論）対象者本人の疼痛の訴えと評定者が評価した不穏状態, 表情, 発声反応, 身体的反応, 行動・動作の変化との間に関連があり, これらの疼痛評価項目の妥当性が示唆されたが, ごく弱い相関にとどまっていた. そのため, VRS以外のツールを主観的尺度として用いることも今後検討する必要がある. 今後は対象者数を増やし, 疼痛評価項目の更なる精選が必要である.
7. 英国におけるコミュニティホスピタルの役割	－	平成25年11月	第28回日本国際保健医療学会学術大会，沖縄 p. 190.	国立のコミュニティホスピタルにおける看護師としての勤務経験，Rapid Response Teamとの同行研修の体験，有料老人ホームや医療機関の3回の視察結果，文献検討から，英国のコミュニティホスピタルの役割について検討を行った．英国では，地域の特性によってコミュニティホスピタルで提供されているサービスは異なるが，様々な専門家が住民が地域で生活できるように支援していた．また，近年急性期病院のケアの質の低下が問題となっており，コミュニティホスピタルが地域高齢者の医療の根幹を担っている．ＮＨＳの財政危機解決のためには，コミュニティホスピタルは必要不可欠であり，在宅復帰の支援という側面でもコミュニティホスピタルは重要な役割を担っている．
8. 英国におけるコミュニティケア	－	平成25年11月	第28回日本国際保健医療学会学術大会，沖縄 p. 190.	【目的】英国では，コミュニティケアが国営保健サービス（NHS: National Health Service）存続の鍵を握っていると近年考えられている．そのため，英国の医療・介護施設におけるケアおよび在宅ケアの実情と課題を検討することを本研究の目的とする． 【研究方法】Nursing Home, Residential Home, ホスピス，病院の4施設の視察と職員へのインタビューを実施した．視察内容およびインタビュー内容を研究発表として使用させていただくことを口頭で説明し，同意を得た．写真撮影と研究発表時の写真の使用についても承諾を得た． 【結果】英国のホスピスでは，24時間365日専門家のケアを自宅で受けることができる在宅ホスピスサービスをスタートするためのチャリティーイベントが開催されていた．また，Nursing Homeにおいても24時間体制で緩和ケアの専門家に助言を求めることができるホットラインが整備されており，施設の垣根を越えて専門家の支援を受けることができる体制が整っていた．在宅ケアにおいては，電動介護リフトなどの機器が無料で貸し出され，訪問介護の職員が介護機器を使用して移乗介助が行えるように整備されていた．しかしその反面，介護職員は低賃金のために複数の職業を兼務しなければ生活できない状況にあった． 【考察】日本とは異なり，英国の場合は介護施設や在宅でも24時間体制で専門家の支援を受けることができるため，住み慣れた環境で最期を迎えることが可能になると考えられた．その一方で，コミュニティーケアの質改善のためには介護職員の雇用条件の改善が必要であることが示唆された． 本人担当部分：研究代表者として海外施設の視察，結果のまとめ，発表業務を行った． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. マレーシアの高齢者施設における英訳版疼痛評価ツールの妥当性検討	－	平成25年12月	第33回日本看護科学学会学術集会，大阪	【目的】日本の介護老人保健施設の入所者を対象に本研究者が開発した疼痛評価ツールの英訳版を作成し試用することで，マレーシアにおける英訳版疼痛評価ツールの汎用性の検討を目的とした. 【方法】１）データ収集 マレーシアクアラルンプール市内の有料老人ホーム1施設に入居する鎮痛剤を使用している口頭で痛みの訴えができる65歳以上の高齢者20名を対象に，作成した英訳版疼痛評価ツールを試用した. ２）疼痛評価項目の内容 英訳版疼痛評価ツールは合計27項目で構成されたチェックリストであり，入居者本人の痛みの訴えについては,Verbal rating Scale(VRS)を用いて評価した. 【結果】 疼痛評価ツール試用対象者の属性は,女性15名,男性5名,平均年齢は79.6歳（SD＝6.3）であった. 疼痛評価ツールへの記載を実施した評定者の属性は女性2名であった.入居者の訴えと看護職の観察項目による評価の関連では,入居者の疼痛の訴えと攻撃的・不穏状態，行動・動作の変化に関する看護職が評価した項目との間に正の相関が認められ，表情と発声反応，身体的反応・生理的反応，顔色の変化に関する項目では弱いながらも正の相関が認められた. 【考察】 関連がごく弱い相関にとどまっていた観察項目もあったため,VRS以外のツールを主観的尺度として用いること，相関の弱い項目の削除について検討するなど更なる項目の精選を行う必要があると考える. 本人担当部分：研究代表者として質問紙作成，現地調査，調査結果の分析とまとめ，発表業務を担当した. 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
10.看護大学生における老年看護学実習前後の老年者とのコミュニケーション自己評価の変化と実習時の困難感	－	平成26年6月	第19回日本老年看護学会学術集会，名古屋	（目的）老年看護学実習の直前にロールプレイを取り入れたコミュニケーション技術演習を実施し，実習前後でのコミュニケーションに関する自己評価の変化と実習時の老年者とのコミュニケーションに関する困難感の出現について明らかにすることを目的とした. 【方法】Ａ大学老年看護学実習直前に行われたコミュニケーション技術演習に参加した学生127名を対象に自記式質問紙調査を実施した．演習では学生がペアになって老年者役，看護師役になり，看護場面を想定したロールプレイを行った．調査内容は基本属性に加え，上野が開発したコミュニケーション技術評価スケールを使用して，演習での自己のロールプレイ（以下：実習前自己評価）および実習中の受け持ち患者との関わり（以下：実習後自己評価）の計2回測定した．（結果）分析対象者は67名（回収率52.8%）であり，平均年齢は21.58±2.05歳であった．コミュニケーション自己評価得点の平均値は，実習前86.09±10.56点，実習後94.03±15.74点であり，実習前のロールプレイに関する自己評価得点に比べて実習後に行った受け持ち患者との関わりに関する自己評価得点のほうが有意に高くなっていた($p<0.01$)． （考察）実習前後の老年者とのコミュニケーションに関する自己評価得点の変化から，学生は実習前のロールプレイ時よりも実際の受け持ち患者との関わりのほうが自己のコミュニケーション技術に自信をもって実習に取り組んでいたことがわかった．現代の対人関係能力が低下しているといわれる看護学生に対しては，老年者とのコミュニケーションについての自信を高めるだけでなく，老年者特有の特徴をふまえたコミュニケーションの実践を可能にするための具体的なスキルの育成が必要であることが示唆された. 共同研究者：梅田奈歩，福田峰子，安藤好枝，百々望，田中和奈，粥川早苗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.介護老人保健施設における非薬学的疼痛ケア	－	平成26年6月	第19回日本老年看護学会学術集会，名古屋	（目的）高齢者入居施設における高齢者の疼痛評価に関する報告は日本国内でほとんど行われていない状況にある．そこで，本研究では，鎮痛剤が処方されていない介護老人保健施設入居者に対する非薬学的疼痛ケアの実態を明らかにすることを目的とした． （方法）無作為抽出した全国500箇所の介護老人保健施設に勤務する4,500名の看護師に対して郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した非薬学的疼痛ケアの実態把握の調査内容としては，「鎮痛剤が処方されていない入居者に疼痛が存在すると評価した際の対処方法」，「非薬学的疼痛ケアの内容」について調査を行った．444名（回収率91.2%）の看護職から回収したデータのうち，回答者の属性のみに記載のあった1名の回答を除いた443名を分析対象とした．（結果）対象者の属性としては，女性407名（91.9%），男性35名（7.9%），平均年齢は45.3歳（SD=10.85）であった．鎮痛剤が処方されていない入居者に疼痛症状があった場合の対処方法としては，「医師への連絡」という回答が283名（51.5%）と最も多く，次いで，「薬を使わない疼痛ケアの提供」という回答が120名（27.1%）という結果であった．（考察）介護老人保健施設に勤務する看護職の約3割は，鎮痛剤の処方がされていない疼痛を有する入居者に対して，薬を使わない疼痛ケアの提供を行っていることが明らかとなった．高齢者の場合，薬の副作用が出現しやすいという特徴があるため，鎮痛剤の使用だけに頼る疼痛ケアを行うのではなく，非薬学的疼痛ケアも活用した疼痛管理を行うことが重要であると考える． 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと発表資料の作成，発表業務を行った．． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
12. Validity of the Pain Assessment Tool, Based on Pain Symptom Changes, Pre- and Post-Pain Medication, in a Malaysian Nursing Home (マレーシアの高齢者入居施設における疼痛評価ツールの疼痛ケア前後の症状の変化による妥当性検討)	－	平成26年11月	The 34th Academic Conference of Japan Academy of Nursing Science, Nagoya 第34回日本看護科学学会，名古屋（英語口演発表）	開発した英訳版Pain Check List for Older People(P-COP）の海外における汎用性検討のため，マレーシアの有料老人ホーム1施設において口頭で痛みの訴えができる65歳以上の高齢者を対象に英訳版P-COPを用いて調査を実施した．疼痛ケア前後の疼痛症状の変化をwilcoxsonの符号順位和検定を用いて分析を行った．その結果，マレーシアにおけるP-COP試用対象者の属性は，女性15名，男性5名．疼痛評価場面数は200場面であった． 疼痛観察項目27項目中16項目において疼痛ケア後に有意に疼痛症状の改善がみられ，これらの項目の疼痛ケア前後の疼痛症状の変化を確認する観察項目としての妥当性が示唆された．今後は，残り11項目についての更なる妥当性検討が必要と考える． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. マレーシアおよび英国における高齢者疼痛評価ツールの汎用性検討	－	平成26年11月	第29回日本国際保健医療学会学術集会，東京	高齢者の生活の質改善のためには，的確な疼痛マネジメントが必要であることが考えられる．本研究では，日本の介護老人保健施設にて妥当性検証を実施した高齢者のための疼痛評価ツール（P-COP）英訳版の海外における汎用性検討を行うことを本研究の目的とした． マレーシアの有料老人ホーム1施設および英国の有料老人ホーム1施設に入居する口頭で痛みの訴えができる65歳以上の高齢者をP-COP試用の対象とした．入居者本人の痛みの訴えであるVRSと疼痛評価ツールの各項目の強度との関連についてSpearmanの順位相関係数にて分析を実施した．その結果，マレーシアにおけるP-COP試用対象者の属性は，女性15名，男性5名．疼痛評価場面数は200場面であった． 英国におけるP-COP試用対象者の属性は女性2名，疼痛評価場面は192場面であった． VRSと看護職による評価の関連では，攻撃的・不穏状態の4項目，行動・動作の変化3項目，表情と発声反応3項目，身体的反応・生理的反応3項目，顔色の変化2項目の15項目においてマレーシアと英国共に弱～強い関連が認められた．入居者本人の疼痛の訴えと27項目中15項目に関連が認められたため，これらの項目の妥当性が示唆された．しかし，残り12項目については，今後観察項目の精選を行う必要がある． 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと発表資料の作成，発表業務を行った．． 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子
14. 介護保険施設の看護職および介護職が認知症者ケアにおいて体験する困難のメタ統合（第一報）	－	平成28年6月	第29回日本看護福祉学会学術集会，奈良	（研究目的）本研究では介護保険施設の看護職および介護職が認知症ケアにおいて体験する困難の様相を幅広く把握するために，国内の質的研究の知見を統合し，認知症高齢者ケアにおける困難に焦点を当てたシミュレーション教育の基礎資料を得ることを目的とした． （研究方法）分析はPatersonらのメタ統合の手法を参考にカテゴリ，サブカテゴリ，生データを抽出した．次にサブカテゴリと生データをもとにして，内容が類似するものをグループに分けグループの内容を示すサブカテゴリ名をつけ，さらに類似したサブカテゴリをまとめてカテゴリ名をつけた． （結果）介護保険施設の看護職・介護職が認知症者ケアにおいて体験する困難として6つのカテゴリに統合された． （考察）介護保険施設の看護職・介護職は，認知症高齢者との関係構築，認知症高齢者の理解・対応に困難を感じるだけでなく，施設のケア体制や業務にも困難を抱いており，認知症ケアにおける困難は多様かつ多重に生じる実態が伺えた．そして，介護保険施設の看護職・介護職が自らの困難を，認知症高齢者が暮らしの場でどのような不自由を感じているのかという視点から捉え直すきっかけを作り，自身の認知症ケアに活かせるように支援することが重要であると考えた． 本人担当部分：施設班の研究分担者として文献検討を行い，共同研究者と共に分析を行った． 共同研究者：藤野あゆみ，山本さやか，田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15．介護保険施設の介護職および看護職が認知症高齢者へのケアにおいて体験する困難に対する対応(第二報)	－	平成28年6月	第29回日本看護福祉学会学術集会，奈良	（研究目的）本研究は介護保険施設の介護職および看護職が認知症高齢者へのケアで体験する困難に対する対応の様相を幅広く把握するために，国内の質的研究の知見を統合し，介護保険施設における認知症高齢者への対応困難を想定したシミュレーション教育の基礎資料を得ることを目的とした． （研究方法）該当した72文献から，一次論文選定基準に基づいて14件を選定した．一次論文の選定基準は，研究対象が介護保険施設で認知症高齢者をケアする介護職および看護職であること，認知症高齢者をケアする中で経験する対応が記述されていること，質的分析を用いた研究であること，結果の記述が目的に沿って明確に記されていることとした．内容が類似するものをグループに分けグループの内容を示すサブカテゴリ名をつけ，さらに類似したサブカテゴリをまとめてカテゴリ名をつけた． （結果）介護保険施設の介護職および看護職が認知症高齢者へのケアで体験する困難に対する対応方法は，8カテゴリに統合された． （考察）介護保険施設の介護職および看護職は認知症高齢者の行動を抑制するなどの【高齢者不在の介助者本位な対応】をしており，介護保険施設における認知症高齢者への対応には課題があることが示唆された．介護保険施設における認知症高齢者への対応を改善するためには，本研究結果を活用したシナリオを作成してシミュレーション教育を行い，介護職および看護職が自らの行為を振り返りながら，必要な態度・知識・技術を身につけられるように支援する必要があると考える． 本人担当部分：施設班の研究分担者として文献検討を行い，共同研究者と共に分析を行った． 共同研究者：田中和奈，山本さやか，藤野あゆみ，百瀬由美子
16．The Contents of the Pain Management Education Required by Nurses who Work in Residential Facilities for Older People (高齢者入居施設に勤務する看護職が求める疼痛管理教育の内容)	－	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会．東京	（目的）本研究は高齢者入居施設に勤務する看護職を対象とした疼痛教育プログラム開発の基礎資料を得るために，看護職が求める疼痛管理教育の内容について把握することを目的とした． （方法）介護老人保健施設1施設と特別養護老人ホームと認知症対応型共同生活介護を併設する1施設に勤務する看護職を対象に，半構造化面接を実施した．分析は意味内容の類似性に基づいて，老年看護の専門知識を有する研究者4名で意見の一致が見られるまで検討を重ね，カテゴリー化を行った． （結果）分析の結果，研修会で受講したい教育内容として，7カテゴリーが抽出された． （考察）高齢者入居施設では常勤医師がいない場合も多く，治療ではなく生活重視の施設のため，重度の疼痛を有する入居者がいる場合は対応に苦慮することが予測される．そのため，看護職が自信を持って入居者の疼痛管理が行えるように，高齢者の疼痛管理に関する知識の向上が必要であると考えられる．本研究の結果，高齢者入居施設における疼痛管理の質向上のためには，鎮痛剤の適切な使用方法や高齢者の特徴に応じた疼痛管理方法に関する教育，他施設での疼痛管理の成功事例の提示などが看護職に対して必要であることが示唆された． 本人担当部分：研究代表者としてインタビューの実施，データ分析，調査結果のまとめ，発表業務を行った． 共同研究者：田中和奈，百々望，高橋晶，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17.地域在住高齢者を対象とした遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室の効果検証		平成29年12月	第37回日本看護科学学会学術集会，仙台	A県内の特別養護老人ホーム1施設に遠隔フィットネスシステムを設置し，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室を週1回自宅で生活する65歳以上の高齢者10名に対して1ヶ月間実施した。 運動指導1ヶ月後に対象者に対して，①運動教室に参加して体調に変化はあったかどうか，②運動教室に参加したことによる日常生活の満足感への影響の有無，についての面接内容とする半構造化面接を実施した。面接内容は同意を得てICレコーダーに録音し逐語録を作成した。 分析は，Krippendorffの内容分析の手法を参考に，意味内容の類似性に基づいてカテゴリー化を行った。分析時は，看護の専門知識を有する研究者4名で意見の一致が見られるまで検討を重ねた。 分析の結果，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室の効果として，52コード，19サブカテゴリー，10カテゴリーが抽出された。 地域在住高齢者は，運動教室に参加することで身体機能や生活満足度，運動に対する意識の改善に効果を感じていた。また，日常の動作や食生活にも気を付けるようになるなどの変化もみられた。これらのことから，運動教室を高齢者に対して行うことは，遠隔指導であっても高齢者の身体機能の改善だけではなく，健康管理に対する意識およびQOL改善につながることが示唆された。 共同研究者：田中和奈，吉村雅世，東中須恵子，守本とも子
（海外学会発表） 1. Outcome Improvement Factors of Independence for the Elderly Requiring Basic Care Assistance. （在宅軽度要介護高齢者の自立度の改善率とその要因）	－	平成20年9月	Elderly Care Seminar, Seinajoki City Hall, Finland.	（目的）在宅軽度要介護高齢者の自立度の改善率とその要因を明らかにすることを本研究の目的とした.（方法）在宅軽度要介護高齢者の自立度について，2ヶ月2時点調査からアウトカム改善率とその要因を利用者背景，生活の仕方，サービスから分析し，国内地域比較および国際比較により，アウトカム改善に有効なケアについて検討した.（結果）日本では同居者が多く，視力・聴力はよい状態であった.スウエーデンとフィンランド間には利用者背景に相違はなかった.自立改善と維持はスウェーデンが最もよく，サービスのあり方が影響しているのではないかと考えられた.自立への意欲の上昇と維持は個別ケアの多いフィンランドが一番高く，次に日本，スウェーデンの順であった.家族の自立への協力度は同居率が高いことにより日本が一番高い結果であった.（課題）日本は個別ケアとしての看護・介護・リハビリテーションを増やし，同居家族が多い・視力・聴力が比較的よいことを活用した.フィンランドは個別ケアの部分を集団ケアに振り分ける，または集団ケアを追加する.スウェーデンにおける意欲を高めるケアを意図的な実施の検討が必要と考える. 本人担当部分：調査結果のまとめと英文翻訳業務，発表資料の作成を行った. 共同研究者：Setsu Shimanouchi, Junko Minai, Helli Kitinoja, Jaakko Kontturi, Lena Sahlqvist and Haruna Tanaka

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. Perspectives on Needs Assessment, Care Implementation and Outcomes Evaluation in End-of-Life Care at Home - Comparative Analysis Between Family Caregivers and Nurses -. （在宅で終末期ケアを受けた患者の家族介護者と訪問看護師間のニーズ評価）	-	平成21 年8月	The 4th International Conference on Community Health Nursing Research, Adelaide Convention Centre, Australia	(目的)在宅で終末期ケアを受けた患者の死別前7日間における家族介護者と訪問看護師間のニーズ評価，ケアの実践，成果評価に関する認識の違いについて明らかにすることを本研究の目的とした．(方法) 2007年2月に訪問看護ステーションに質問紙を郵送し，2006年に在宅で死亡したがん92事例と非がん93事例について，家族介護者と訪問看護を提供した訪問看護師に対して質問紙調査を実施した．(結果) がん事例の平均年齢は75歳，非がん事例の平均年齢は89歳であった.がん事例においては，訪問看護師と家族介護者ともに栄養，呼吸困難，排泄，発熱のニーズが一貫して高かった.がん事例のケアの実施に関しては，栄養と不眠に関してのケアの実施が高い結果であった.非がん事例の場合は栄養，呼吸困難，皮膚トラブルのニーズが一貫して高いことが明らかとなった. 本人担当部分：調査結果のまとめと英文翻訳業務，抄録の作成を行った. 共同研究者：Setsu Shimanouchi, Junko Minai and Haruna Tanaka
3. Problems and Needs of End-of-Life Care in a Japanese Group Home for People with Dementia. （日本のグループホームにおいて終末期ケアを提供する上での問題点）	-	平成23年3月	26th International Conference of Alzheimer’s Disease International, Toronto, Canada.	（目的）日本のグループホームにおいて終末期ケアを提供するうえでの問題点を明らかにすることを目的とした．(方法) 入居者の看取りを行った経験のあるグループホームに勤務する介護スタッフおよびその施設で終末期ケアを提供した訪問看護師に半構造的インタビュー調査を実施した．(結果) グループホームで終末期ケアを提供することの問題点として，看護職が勤務していないことや介護スタッフは終末期ケアの知識をもっていないことから終末期ケア提供に不安があると介護スタッフは感じていることが明らかとなった.また，多くのグループホームの経営者が訪問看護ステーションと契約を結ぶのを躊躇してしまうため，グループホームで終末期ケアを提供することを難しくしていると訪問看護師は考えていることが示唆された.終末期ケアを提供するためには，介護スタッフと家族との連携やスタッフの増員，終末期ケアに関する知識の向上などが必要であると介護スタッフは考えており，訪問看護師は医療従事者と介護スタッフ，家族との連携が終末期ケアを提供するためには必要と考えていることが明らかとなった．(結論) 終末期ケアに関する介護スタッフの知識向上および医療連携が日本のグループホームにおける終末期ケア提供のためには重要であることが示唆された.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. Changing Perceptions of Pain Assessment among Nurses in Japanese Long-term Care Facilities （日本の介護老人保健施設における入所者の疼痛管理についての看護職の認識の変化）	－	平成24年3月	27th International Conference of Alzheimer’s Disease International, ExCel London, London, UK.	（目的）軽度認知症高齢者を対象に開発した疼痛評価ツールを3箇所の介護老人保健施設において試用したことにより,入所者の疼痛管理についての看護職の認識の変化を明らかにすることを目的とした.（方法）疼痛評価ツール試用後に,3箇所の介護老人保健施設に勤務し,実際に疼痛評価ツールを使用して疼痛評価を実施した18名の看護職に対して,平成23年6月～7月にかけて半構造化グループインタビューを実施した.許可を得て録音したインタビュー内容から逐語録を作成し,コンテントアナリシスにより分析した.（結果）看護職の認識の変化については,「介護老人保健施設における疼痛ケア提供前後の疼痛評価の必要性」,「疼痛評価による入所者の疼痛部位と程度の理解度」,「日常の疼痛ケアを通しての入所者の痛みに対する反応の特徴理解と対応方法」,「認知症高齢者の痛みの認識に対する把握の困難感」の4つのカテゴリーに分類された.（結論）認知症高齢者を対象として開発した疼痛評価ツールを用いて,定期的に入所者の疼痛評価を実施することで,入所者の疼痛評価に対する看護職の関心が高まり,疼痛ケア前後の疼痛評価の必要性の再認識や入所者の痛みに対する反応の特徴の再認識,日常行ってきた疼痛ケアの適切さの再確認などにつながった. 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと英文翻訳業務，発表資料の作成，発表業務を行った．. 共同研究者：Haruna Tanaka，Yumiko Momose
5. Pain Assessment Tool Validation, Based on Pain Symptom Changes (Pre- and Post-Pain Medication) in Japanese Nursing Homes. （日本の介護老人保健施設における疼痛評価ツールの妥当性検討ー疼痛ケア前後の症状の変化からの考察ー）	－	平成27年4月	30th International Conference of Alzheimer’s Disease International, Perth Convention Centre, Perth, Australia.	日本の介護老人保健施設の入所高齢者を対象に開発した疼痛表チェックリスト（Pain Check List for Older People:P-COP）の疼痛評価項目の妥当性検討を行うことを本研究の目的とした．12名の介護老人保健施設入所者に対して疼痛ケア前後にP－COPを試用して疼痛評価を実施した．その結果，28項目中23項目が疼痛症状として観察され，そのうち12項目において疼痛ケア前後で有意な差がみられ，疼痛ケア前後の疼痛症状の変化を観察する項目としての妥当性が示唆された. 本人担当部分：研究代表者として調査結果のまとめと英文翻訳業務，発表資料の作成，発表業務を行った. 共同研究者：田中和奈，百瀬由美子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. Remote Fitness System Advantages with Exercise Classes for Community-dwelling Older People (地域在住高齢者の運動教室に遠隔フィットネスシステムを使用する利点)	—	平成29年4月	32nd International Conference of Alzheimer's Disease International, Kyoto, Japan	自宅で生活する地域在住高齢者を対象とした運動教室に遠隔フィットネスシステムを用いることの可能性を明らかにすることを本研究の目的とした． 奈良県内の特別養護老人ホーム1施設に遠隔フィットネスシステムを設置し，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室を週1回30分間自宅で生活する65歳以上の地域高齢者10名に対して1ヶ月間開催した．その結果，対象者の属性は女性9名，男性1名．平均年齢は81.5歳（SD=5.8）であった． 分析の結果，遠隔フィットネスシステムを使用した運動に参加して悪かったことについての訴えはなく，利点についての意見のみであった． 遠隔フィットネスシステムの利点として，32コード，8サブカテゴリー，4カテゴリーが抽出された．地域高齢者は運動内容を覚えていることができないため，自宅にて一人で運動を行うのは難しいと感じていたが，遠隔フィットネスシステムを使用すれば運動指導者の動きを実際に見ることができ，指導者からの指示をその場で受けながら運動を行えるため，真剣に運動に取り組むことができ，効果的な運動の実施につながっていると感じていたことが明らかとなった．これらのことから，遠隔フィットネスシステムを使用すれば，認知症など記憶障害がある高齢者に対しても効果的な運動指導が行える可能性が示唆された． 本人担当部分：研究代表者として研究計画書の作成，データ収集，調査結果の分析，発表資料の作成，発表業務を行った． 共同研究者：田中和奈，吉村雅世，吉村昌子，東中須恵子，守本とも子
（講演会） 1. いのちの現在，過去，未来	—	平成23年3月	いのちのアレグリア，埼玉県立大学，越谷市.	日本における在宅死数は欧米などの諸外国と比べて少ない傾向にある．こういった日本の在宅死の現状および今後の課題について，諸外国との比較を行った．また，日本における在宅死の事例紹介や英国のホスピスケアおよび家族支援の現状から死をどのようにとらえ，受け入れるべきかというテーマで埼玉県立大学看護学部の学生を対象に講演を実施した． 本人担当部分：英国のホスピスに関する資料作成と情報提供を行った． 共同研究者：宮子あずさ，田中和奈，溝尾朗
（研修会） 1. 在宅エンドオブライフケア基本レベル研修会	—	平成20年11月	在宅エンドオブライフケア基本レベル研修会，コンベンションホールＡＰ浜松町.	本人担当部分：在宅地域ケア研究センター主催の研修会のエンドオブライフケア研修会で実践例に関するグループワークの運営を担当した． 共同研究者：薬袋淳子，田中和奈，長崎光枝
2．軽度認知症の疼痛アセスメントとケア	—	平成24年1月	介護保険施設における看護職の包括的ストレスマネジメント研修会，愛知県立大学長久手キャンパス.	愛知県立大学看護学科老年看護学の百瀬由美子教授が科学研究費の助成を受けて実施した研究の一部として，介護保険施設に勤務する看護職を対象に，看護職のストレスを軽減することを目的に，看護職から学習したいと要望のあった認知症高齢者のための疼痛管理に関する研修を行った． 認知症高齢者の疼痛評価方法，海外で使用されている疼痛評価ツールの紹介，日本と欧米の高齢者入居施設における疼痛管理の状況についての講義を行った．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. Dementia Care in Japan 日本における認知症ケア	—	平成24年11月	英国国立病院Royal Free Hospital医師研修会	英国国立病院の大学教授および医師対象の研修会講師として招かれ，日本の認知症ケアについての講義を行った.講義内容に関するアンケート結果は，最高評価をつけていた医師が過半数を占めていた.
4.事例研究とは	—	平成27年6月	東海記念病院院内看護研究研修会	東海記念病院に勤務する看護職を対象に，事例研究についての概要についての講義を行った.
5. 読み手に伝わりやすい事例研究のまとめ方	—	平成27年9月	東海記念病院院内看護研究研修会	東海記念病院に勤務する看護職を対象に，事例研究に関する論文のまとめ方と抄録の作成方法に関する講義を行った.

教　育　研　究　業　績　書

平成　30　年　3　月　31　日

氏名　　松浦　純平

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
成人看護学	急性期看護、周手術期看護、術後せん妄、テキストマイニング

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
1）「ストーマ造設術を受ける患者の看護」講義・演習に模擬ストーマを装着させて患者体験を実施した。	平成21年5月～平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」のストーマ造設術を受ける患者の看護の講義を担当した。講義後の学生アンケートでは、ストーマの写真を初めて見て非常に勉強になった。講義内容が分かりやすくて良かったなどの感想が書かれていた。講義後の演習にて、学生へ模擬ストーマを装着させて半日過ごすことでストーマ造設患者の体験をさせた。演習後の評価として、ほぼ全員の学生からストーマ造設患者の心理状況がよく理解できたとの感想が聞かれた。
2）卒業研究にて1名の学生の卒業研究を指導した。	平成23年4月～平成24年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生1名の卒業研究を指導した。研究テーマは「臨床看護師が考えるレジリエンスについて」であった。
3）卒業研究にて4名の学生の卒業研究を指導した。	平成25年4月～平成26年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生４名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄に関する文献検討」、「術後の足浴実施のリラクセーション効果について」、「術後せん妄発症の要因と対策に関する文献検討」、「乳がん患者の手術を受ける意思決定に関する文献検討」であった。
4）講義内容の知識の定着を確認する目的にて、担当講義中に講義内容に合った看護師国家試験の過去問題を提示し解答させた。解答後、解説をした。	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。
5）看護過程の展開を学習するために成人期の術後患者の事例を作成してグループ演習を行った。	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。
6）生体シミュレーターモデル「シムマン」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
7）心肺蘇生法練習用人形モデルとAEDを使用して一次救命処置（BLS）の実際の演習を行った。	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。
8）術前呼吸訓練として「トリフロー」と「トライボール」を使用して体験する演習を行った。	平成25年10月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。

事項	年月日	概　　要
９）周手術期の講義中に、イメージがつきやすいように挿管時に使用する気管チューブ、喉頭鏡などの器具を実際に手に取り見せて説明した。	平成25年10月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の周手術期の講義の中で挿管時に使用する気管チューブ、スタイレット、喉頭鏡の実物を手に取り見せて説明した。学生からは実物を見ることができて挿管時のイメージが理解できたとの感想が聞かれた。
１０）卒業研究にて6名の学生の卒業研究を指導した。	平成26年4月～平成27年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生６名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄予防のための音楽療法の効果について」、「せん妄の発症と予防に関する文献検討」、「術後患者に対する音楽療法の効果について」、「足浴実施によるリラクセーション効果の検証」、「術後せん妄発症の要因に関する文献検討過去５年間の文献より」、「乳がん患者の治療方法決定に関する自己決定に関する文献検討」であった。
１１）卒業研究にて3名の学生の卒業研究を指導した。	平成27年4月～平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生３名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後の音楽療法の効果に関する文献検討」、「看護師の考える感情労働に関する現状と課題」、「看護系大学生の考える性教育に関する現状と課題」であった。
１２）生体シミュレーターモデル「フィジコ」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成28年6月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「ヘルスアセスメント」の講義後の演習にて生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
１３)術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを使用した術前呼吸訓練の演習を実施した。	平成28年12月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを演習にて実際に使用して術前呼吸訓練を実施した。学生からは実際に実施したことで難しさがよく理解できたとの感想が数多く聞かれた。
１４）一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。	平成28年12月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。演習後、学生からは講義で学んだだけでは大変さが分からなかったが、実際に演習で実施することで胸骨圧迫の深さや難しさが理解できたとの声が多く聞かれた。
１５）術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。	平成28年12月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。実施後、学生からは術後の患者の具体的な状況や心理が分かったやまた看護師がいかに安全・安楽に離床を進める必要があるか理解が深まったとの意見が多く聞かれた。
２　作成した教科書，教材		
１）成人看護学演習サブテキスト開発（ストーマサイトマーキング）	平成21年5月～平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」の講義後の演習にてストーマサイトマーキングの部位が分かるような資料を作成した。演習後、学生からはストーマ造設時の位置決めが分かりやすかったとの意見が聞かれた。
２）成人看護学知識確認資料	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。

事項	年月日	概　　要
3）看護過程アセスメントサブマニュアル（ゴードンの枠組み）開発	平成25年5月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。アセスメント実施時の分類のための資料を作成し活用した。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。
4）異常呼吸音および異常心音サブテキスト開発	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
5）一次救命処置（BLS）サブマニュアル資料開発	平成25年6月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。演習時に胸骨圧迫の部位、速さ、深さなどを書いた資料を見ながら演習に取り組んだ学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。
6）術前呼吸訓練サブマニュアル開発	平成25年10月～現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）近大姫路大学看護学部学生授業評価	平成27年2月	私が担当した「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」講義後の学生からの感想として、「とても理解しやすかった。国試に出やすいと先生が言うと集中して覚えようとします。」、「分かりやすかったです。」などの感想が多く記載されていた。
2）大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。
3）大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）三重大学医学部附属病院にて院内BLS（一次救命）講習を受けBLSインストラクターとして指導に関わった。	平成19年4月1日～平成21年3月31日	院内の一次救命処置の講習を受講し、BLSインストラクターとして他の看護師の指導に関わった。院内の急変時にも冷静に対応することができた。
2）三重大学医学部附属病院にて院内看護研究の代表者として他3名の看護師と看護研究に取り組んだ。	平成20年4月1日～平成21年3月31日	院内看護研究として、喉頭がん患者の喉頭摘出手術を受ける意思決定の過程に関する研究に取り組み院内看護研究発表会で発表した。

事項	年月日	概　　要
3）奈良県立医科大学医学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成21年9月～平成25年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
4）国立病院機構敦賀医療センター主催「2012年度院内看護研究発表会」へ招聘	平成23年12月	院内看護研究発表会にて総評を述べた。
5）2013年度福井大学医学部看護学科公開セミナー「質的研究と量的研究のコラボレーション」招聘講演	平成24年8月	福井大学医学部看護学科公開セミナーにて「質的研究と量的研究のコラボレーション」をテーマとしてテキストマイニング手法に関する講演を行った。
6）第6回Project AKI全国集会「テキストマイニングの紹介」招聘講演	平成25年1月	Project AKI全国集会にて「テキストマイニングの紹介」に関する講演を行った。
7）近大姫路大学看護学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成25年9月～平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
8）奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成28年9月～平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
5　その他		
1）奈良県立医科大学医学部看護学科助教として講義担当	平成21年4月～平成25年3月	「ヘルスアセスメント」「フィジカルアセスメント」「看護援助論Ⅰ」「看護援助論Ⅱ」「成人看護学実習Ⅰ（急性期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期）」「看護研究特論」「看護研究」
2）近大姫路大学看護学部看護学科専任講師として講義担当	平成25年4月～平成28年3月	「看護対象論Ⅰ」「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」「治療看護技術論」「看護展開実習Ⅰ（急性期）」「看護展開実習Ⅱ（慢性期）」「統合看護学実習」「看護課題ゼミ」「補完代替療法と看護」
3）奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師として講義担当	平成28年4月～平成29年3月	「ヘルスアセスメント」「成人看護学援助論Ⅰ」「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」
4）奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授として講義担当	平成29年4月～現在に至る	「ヘルスアセスメント」「成人看護学援助論Ⅰ」「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」「卒業研究Ⅱ」「統合看護学実習」

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師国家資格	平成16年4月	（第1272430号）
2）修士号（看護学） （四日市看護医療大学大学院第22号）	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程を修了した。「修士論文題名：術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究」
2　特許等		
1）該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）三重大学医学部附属病院主催の就職希望者向けの病院説明会にて、男性看護師としての院内での業務および活動を紹介した。	平成21年12月	三重大学医学部附属病院主催の就職希望者向けの病院説明会にて、男性看護師としての院内での業務および活動を紹介した。参加者から分かりやすく是非三重大学医学部附属病院で働きたいとの声が聞かれた。
4　その他		
1）助成団体名：ダイワハウス工業株式会社病室環境研究助成,	平成21年5月～平成22年3月	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。 研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 研究代表者氏名：松浦純平 研究題目：がん患者が求める『患者サロン』活用への支援の検討患者サロンに関する認識と活用の実際
2）助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成22年5月～平成25年3月	本研究の目的は看護学生の話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響を明らかにすることを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生のコミュニケーション技報はポジティブな内容は副交換神経に優位に働き、ネガティブな内容は交感神経に優位に働いていたことが明らかになった。 研究代表者氏名：上野栄一 研究題目：話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響
3）助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（若手研究B）	平成24年5月～平成27年3月	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである．本研究は，文献検討，面接調査，質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した． 研究代表者：松浦純平 研究題目：我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発

事項	年月日	概　　要
4）助成団体名：大阪ガスグループ福祉財団	平成25年5月～平成26年3月	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討
5）近大姫路大学臨地実習委員会委員	平成25年4月1日～平成26年3月31日	臨地実習委員会メンバーとして、実習病院との日程および受け入れ可能人数等の調整、実習病院の新規開拓などに取り組んだ。
6）近大姫路大学入試委員会委員	平成25年4月1日～平成27年3月31日	入試委員会メンバーとして、本学および地方会場（高知・豊岡・岡山・大阪）の入学試験の準備および試験監督として入試業務に携わった。またオープンキャンパスの企画、運営に取り組んだ。
7）近大姫路大学地域貢献活動委員会委員	平成25年4月1日～平成27年3月31日	地域貢献活動員会メンバーとして、年2回大学周囲の清掃美化に取り組んだ。また9月にエイズ予防キャンペーンを学生と共に企画運営しJR姫路駅前にて開催した。
8）近大姫路大学倫理審査委員会委員	平成25年4月1日～平成26年3月31日	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催された研究倫理審査に携わった。
9）助成団体名：三重大学新研究プロジェクト	平成27年10月～平成28年10月	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果,受傷早期にIgGを投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平. 研究題目：頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する研究
１０）奈良学園大学倫理審査委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催されている研究倫理審査に携わっている。
１１）奈良学園大学学生生活委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	生活委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議にて保護者会、3者面談等の計画、運営に携わっている。
１２）奈良学園大学FD委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	FD委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議に出席して、年2回開催のFD講演会の企画、運営等に携わっている。
１３）奈良学園大学スポーツ振興委員会委員	平成28年4月1日～現在に至る	スポーツ振興委員会メンバーとして、毎月1回開催されている委員会会議に出席して、スポーツ振興活動に関する協議に携わっている。
１４）助成団体名：岡三加藤文化振興財団.	平成28年4月～現在に至る	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果,受傷早期にIL-6を投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：外傷性嗅覚障害患者のQOL向上を目指した嗅神経の再生に関する基礎的研究

別記様式第４号（その２）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1.身体拘束の適切な考え方と看護記録	共著	平成23年2月	株式会社日総研出版（看護きろくと看護過程2・3月号）	ケアの根拠が見える記録を効率よく書けるようになることを目的とする。A4変型判　全104ページ編者：岸田良平共著者：一ノ山隆司，松浦純平，舟崎起代子，上野栄一，滝内香里，山本美千代，高野悦子．本人担当部門：p52-61を単著。認知症高齢者に対する適切な身体拘束、倫理に即した看護記録の記載方法について事例を通して検討した。身体拘束は必要な医療と患者の安全のためにやむを得ず行動制限を行う場合がある。その場合は倫理的配慮を行い家族の理解と協力を得て必要最低限に留めチームとして治療計画を再検討する必要性を解説した。
2.看護師が遭遇する倫理的ジレンマとは	共著	平成24年3月	株式会社日総研出版（主任＆中堅+こころサポート3・4月号）	管理・教育・業務の実践とスキルを強化することを目的とする。B5変型判　全120ページ編者：岸田良平,共著者：一ノ山隆司，舟崎起代子，松浦純平，上野栄一．本人担当部門：p48-52を単著。看護師が臨床で遭遇する倫理的ジレンマについて原因と対応について具体的な場面を想定して検討した。その結果、看護師が倫理問題に冷静に向き合う姿勢が大切であることを解説した。
3.看護のための『教育学』	共著	平成27年10月	株式会社あいり出版（看護・介護・福祉のための「教育学」第１巻）	患者教育指導において看護者に必要な視点を、心理学・教育学の成果を生かして主要な疾患についての概要と実際の事例を紹介した。B5判　全158ページ（看護・介護・福祉のための「教育学」第１巻）編者:守本とも子,共著者：松田智子,虎杖真智子,鎌田首治朗,松浦純平,中尾友美,武富由美子,山口曜子,佐々木千恵,新谷奈苗,東中須恵子,岡本響子．本人担当部門：第４章「糖尿病」p43-58を単著。生活習慣病（糖尿病）患者の主に薬物療法と運動療法を中心とした健康維持・増進・回復に向けた援助方法について解説した。具体的には、服薬自己管理に向けたアドヒアランス獲得を目的とした教育原理・教育心理を踏まえた患者の服薬指導実践の展開事例と在宅での薬物療法を継続できるように援助および薬物治療時の低血糖出現時や有害事象出現時の対処方法について、教育理論を用いて具体的な事例を2例提示して図・表を入れて解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.看護職・看護学生のために「痛みケア」	共著	平成29年3月	株式会社ピラールプレス	看護職と看護学生を対象に痛みについてのケアの概要と実際の事例を紹介した。B5判全175ページ 編著:守本とも子,共著者：池辺寧,沖本克子,梶村郁子,片山康予,小池恵理子,澤田京子,篠原百合子,新谷奈苗,高垣麻衣,立川茂樹,田中登美,棚橋千弥子,辻下守弘,西上智彦,前田吉樹,松浦純平,室津史子,守本とも子,横山美菜.本人担当部門：第15章「慢性疼痛のある患者の看護」p134-148を共著。
5.2018年要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学 上	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全139ページ 監修:守本とも子,編著：松浦純平,著：明神一浩.本人担当部門：p10-52,p104-127を単著。
6.2018年要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学 下	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全146ページ 監修:守本とも子,編著：松浦純平,著:大山末美,梶村郁子,田場真理.本人担当部門：p10-146を単編著。
7.2018年要点がわかる出題傾向がみえる精神看護学	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に精神看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全110ページ 監修:守本とも子,編者：松浦純平.本人担当部門：p8-110を単編者。
（学術論文）				
1.わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題　―文献検討を通して―（査読付）	共著	平成22年4月	日本看護学会論文集看護管理第40号. p264-266. 2010.	本研究の目的は、我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。その結果、178編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、研究の動向としては2004年を除き年間20編程度の研究がなされていた。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編であった。研究対象者は患者であるものが105編であった。筆頭研究者は臨床看護師が94件、看護系大学教員は17編、両者の共同研究が9編であった。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編、一般外科4編であった。せん妄発症要因について研究されたのは31編であった。せん妄評価尺度は日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケールが11編であった。本研究結果から予防に関する研究が少なかったため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上平悦子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.外科領域における術後せん妄発症予測要因 （査読付）	単著	平成23年11月	医学生物学155巻11号. P825-829. 2011.	経験豊富な看護師が直観的に感じる術後せん妄発症の前駆症状は何かを明らかにする目的で，2病院外科病棟に勤務する看護師20名へ半構成的面接を実施した．逐語録を分析し，カテゴリ化した．せん妄予測項目の名詞78個を分類した結果，【時間感覚】，【置かれた環境】，【対象者】，【認識】，【情意】，【対象物】，【表情】，【コミュニケーション】，【患者の反応】など12カテゴリが生成された．経験豊富な看護師は，表情，失見当識，看護師の説明に対する認識，反応等から術後せん妄発症予測し，前駆症状として捉えていた．これらの観察視点は，経験の浅い新人看護師が気付きにくい観察項目である．今後，この重要観察項目の共通理解を深めることで術後せん妄の早期発見・早期対応につながることが示唆された．
3.がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題 （査読付）	共著	平成24年2月	日本地域連携精神看護学研究誌第3巻p82-88. 2012.	本研究の目的は、Ａ県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである．研究対象はＡ県がん患者会会員400名．調査方法は，対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した．調査項目は，基本的属性，サロンの認識，サロン立地条件，サロン利用者，サロンに必要と考える医療従事者，サロンへの期待の6項目．分析方法は，PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った．結果、以下の3点が明らかとなった．1．地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は，非常に高い．しかし，実際にサロンを利用している人は少ない．2．サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた．3．サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一．
4.テキストマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について　―経験豊富な看護師へのインタビューの分析― （査読付）	共著	平成24年3月	日本看護学会論文集成人Ⅰ第42号p62-65．2012.	研究の目的は外科病棟に勤務する看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである．調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名である。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した．分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、せん妄発症アセスメント項目は「行動」「コミュニケーション」「行動対象」「表情」「睡眠」「訴え」など9カテゴリが生成された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，福田弘子，上野栄一，水野正延．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因の検討―内容分析，セブン・クロス（7×7）法の分析より― （査読付）	共著	平成24年3月	富山大学看護学会学会誌11巻1号p9-18．2012．	本研究の目的は，頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにすることである．対象は，A病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名．術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施，結果はKrippendorffの内容分析手法およびセブン・クロス法にて分析した．内容分析の結果から【性格特性】，【理解力不足】，【長期安静】，【高齢】，【不眠】，【男性】，【独居】の7つのカテゴリーが生成された．セブン・クロス法の結果から優先順位が高い順に【不眠】，【性格特性】，【高齢】，【長時間手術】，【術中出血量】，【眠剤の影響】，【術前不安】の 7つのカテゴリーが生成された．内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは【高齢】，【不眠】，【個人特性】の3カテゴリーであった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，上野栄一．
6.異なる血圧測定技術教育方法による技術習得状況の違い （査読付）	共著	平成25年3月	医学と生物学157巻3号p313-318．2013．	本研究は血圧測定の教育方法として、測定手技の手順を教授する方法と主に測定手技の根拠を教授する方法のどちらが血圧測定技術の習得状況によい影響をもたらすのかを検討した。結果、測定手技の根拠を教授した方が患者役に対して測定に伴う苦痛を減少させることや正しく測定できることが明らかになった。 （調査実施、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，一ノ山隆司，石井秀美，大川智恵子，菊地淳，有馬義貴，松浦純平，吉岡多美子．
7.患者情報から看護問題を抽出する際の脳活動に関する研究-近赤外分光法による看護学生の前頭葉賦活状況について- （査読付）	共著	平成25年4月	医学と生物学157巻4号p450-454．2013．	本研究は、患者情報から看護問題を抽出する際の前頭葉の賦活状況を、学年のことなる看護学生計2名を対象に比較検討したものである。患者情報を5枚のスライドで提示したあとに、看護問題を抽出する課題を与えた。前頭葉の賦活状況は近赤外分光法を用いて測定し、22か所で酸素化ヘモグロビン濃度により評価した。測定終了後には、それぞれのスライド提示時にどのようなことを考えたのかを質問紙で調査した。その結果、前頭葉の賦活状況には被験者間で差がみられ、これが看護問題を抽出する際の思考の違いであると示唆された。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司，石井秀美，大川智恵子，松浦純平，有馬義貴，吉岡多美子．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8.血圧測定時における前頭葉の賦活の様相―看護学生と看護師との比較検討― （査読付）	共著	平成25年5月	医学生物学157巻5号 p565-568．2013.	本研究は血圧測定時における測定者の前頭葉の賦活状況を、近赤外分光法を用いて看護学生と看護師とで比較検討した。その結果、前頭葉の21部分で賦活状況を比較したところ、両手技とも手技前に比べて看護学生は看護師の2倍の部位で有意に酸素化ヘモグロビン濃度が上昇していた。このことは血圧測定技術の習得度と前頭葉の賦活状況が反比例していることを示しており、初学者は前頭葉をより賦活化させて測定していることが明らかになった。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司，松浦純平，有馬義貴，石井秀美，大川智恵子，吉岡多美子.
9.看護師が実践している術後せん妄発症予防について―テキストマイニングを利用した分析― （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1372-1376．2013.	本研究は術後せん妄発症予防のために看護師が取り組んでいる看護実践を明らかにすることである。2施設の外科病棟に勤務する看護師20名を対象に半構成的面接調査を実施した。分析は形態素解析にて分析した。その結果，頻出名詞はせん妄，患者，説明などが多かった。説明に関するコロケーション解析の結果「見当識障害予防を意識した説明をすること」や「本人・家族へ術後はせん妄発症の可能性があることを説明する」などであった。「予防」に関する結果から「昼夜逆転予防を意識した早期離床の援助の実施。」などの文脈が抽出された。本研究結果から以下の4点が明らかになった。術前より患者本人へ術後の状況について説明を実施していた。術後はサーカディアンリズムを整えるために積極的な早期離床を行なっていた。見当識障害予防のため日時を伝えるなどを実施していた。術後疼痛緩和の援助を実施していた。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，吉岡一実
10.臨床看護師が実践している術後せん妄発症予防の取り組み （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1377-1381．2013.	本研究は、臨床看護師の術後せん妄発症予防に対する取り組みを明らかにすることである。テキストマイニング手法の共起関係ネットワーク分類の結果から、次の4点が明らかになった。1点目は、術後の生活リズムの再構築を意識した積極的な早期離床を実施していること。2点目は、体位変換に生じる身体的苦痛の除去に努めていること。3点目は、手術前には具体的な説明を実施していること。4点目は、環境整備の実施や術後疼痛の緩和に対する援助に取り組んでいることであった。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平，吉岡一実

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.在宅で精神障がい者と生活する家族の負担に関する研究 （査読付）	共著	平成25年6月	医学と生物学157巻6号 p1382-1386．2013.	本研究の目的は、在宅で精神障がい者と生活する家族の負担要因を明らかにし、今後の家族支援への示唆を得ることである。A県内の11の地域家族会に所属している精神障がい者と同居する家族236人の「日頃から気になること」への記述を分析データとした。データ分析は、内容分析の手法を参考に形態素解析、コロケーション解析を行った。結果、【病気に関する不安】、【家族自身の体調の心配】、【将来の生活に対する焦り】、【社会や周囲および身内からの理解不足に関する苛立ち】、【責任を持ってケアする重圧】、【同居することで生じる束縛感】、【地域の施設が整わないことへの不満感】の7つのカテゴリーを生成し、家族が精神障がい者のケアの担い手であっても、家族はケアの対象者である観点から地域連携の精神看護に反映させていく有効な知見が示唆された。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平
12.精神科臨床経験3年未満の看護師が抱く陰性感情の特徴 （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1387-1392．2013.	本研究は、精神科病棟に勤務する精神科臨床経験3年未満の看護師3人対象として、彼らが抱く陰性感情の特徴を把握することが目的である。半構成的面接法により陰性感情に関する調査を行った結果、陰性感情として8カテゴリー生成することができた。患者に対しては否定的な捉え方によって生じる【不安感】、患者から被害を受けるといった【恐怖心】、患者との対応における未熟さから生じる【困惑】、どこにもぶつけることができない感情から生じる【怒り】、患者に自分の思いが受け入れてもらえないことによる【苛立ち】、患者とのかかわりから生じていく落胆から引き起こされる【疲弊感】、患者の対応を他の看護師と比べることによって生じる【劣等感】、患者との関係性や対応を振り返ることから生じる【自責感】であった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，菊地淳，吉岡一実

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13.FACTORS RELATED TO THE USE OF HOME CARE SERVICES BY STROKE PATIENTS UNDER JAPAN'S LONGTERM CARE INSURANCE SYSTEM （日本における長期間の介護保険システム下の脳卒中患者による在宅ケアサービス使用要因） （査読付）	共著	平成26年12月	International Journal of Medical Research & Health Sciences 4 (1) p103-109. 2014.	脳卒中患者は、在宅ケア看護サービスを利用者数の中では最も多い。本研究の目的は、日本の介護保険システムの下で在宅ケア・サービスの使用状況との利用者の関係を決定するために脳卒中患者の鍵となる要因と主な介護者の関係を明らかにすることである。研究方法は東海と近畿地域で14の主題と彼らの介護者を対象とした。質問紙調査票が主な介護者のために使用した、データ分析方法は、一変量分析により分析した。結果、バルテルIndex (BI) 得点より高い脳機能障害が、長期の介護保険の使用率と関連があることが明らかになった。またBI得点低下と在宅ケア率は増加した。結論：脳卒中患者の2つの特徴が長期の介護保険の使用率に関連することが明らかになった。 （質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Kazuya Ikenishi,Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：0.18
14.術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究 （修士論文）	単著	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学専攻修士課程 p1-36.2015.A4版 総頁数36	本研究の目的は経験年数を問わず臨床看護師が簡便に使用できる術後せん妄スクリーニングツール開発に向けての予備的研究として術後せん妄発症前駆症状の構成因子を明らかにすることである．本研究は，調査Ⅰの文献検討，調査Ⅱの面接調査，調査Ⅲの質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．調査Ⅲは全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．PASW 18を使用した．因子分析の結果【妄想支配による精神的訴え】，【活動意欲の減退】，【意味のない行動】，【認識機能の低下】，【外見的興奮】，【理解力の違和感】，【恐怖・心配の訴え】，【失見当識】，【排尿に関する愁訴】，【睡眠覚醒サイクルの障害】10因子40項目を抽出した．本研究で明らかになった新しい知見は【外見的興奮】，【理解力の違和感】の2因子であった．
15.Early detection and treatment ： an examination of prodromal symtoms of post operative delirium in elderly patients （早期発見と処置：高齢患者の術後せん妄の前駆症状について） （査読付）	単著	平成27年4月	International Journal of Clinical and Biomedical Research. 1 (2) p1-6.2015.	研究目的は，臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケール開発のための基盤とすることである。対象は看護師300名とした。結果，看護師が術後せん妄前駆症状として考えている症状は「看護師へ遠慮して何も言わない」「自分で寝返りを打たない」であった。術後せん妄前駆症状を症状別に類似するカテゴリー別に分類した。その結果「行動」「混乱」「陰性症状」「睡眠」など6カテゴリーに分類された。 2015年度インパクトファクター：3.3

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16.Initial development of a screening tool for postoperative delirium prodrome （術後せん妄スクリーニングツールの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	International Journal of Current Advanced Research.4(7)p165-167.2015.	本研究の目的は、術後せん妄発症を早期に発見するためのアセスメントツールを開発することである。全国の国立大学医学部附属病院の看護師725名を対象に質問紙調査を実施した。結果、10因子38項目からなる術後せん妄アセスメントツールを開発した。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：5.438
17.The needs of post-operative delirium assessment tool for clinical nuese （臨床看護師の考える術後せん妄スクリーニングツールの必要性に関する研究） （査読付）	共著	平成27年6月	RA Journal of Applied Research.1(6)p219-226.2015.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールについてのニーズを明らかにすることである。 対象は全国の大学病院19病院の外科系病棟に勤務する看護師725人である。 アセスメントツールの必要性について「必要である」、「やや必要である」と回答した対象者の割合は全体の85.5%であった。このことからアセスメントツールの必要性について、非常に受容があることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：3.62
18.The Relationship Between Work-Life Balance And Nwi-R Score Among Unmarried Nurses Working For Less Than Two Years In Hospital. (病院の勤務年数2年以下の未婚看護師におけるワークライフバランスとNwi-R得点との関連) （査読付）	共著	平成27年7月	International Journal Of Medical Science And Clinical Invention.2(7)p1120-1125.2015.	近年、ワークライフバランスに関する研究が増加している。本研究の目的は経験年数が2年以下の看護師についてワークライフバランス（WLB）とNWI-R得点の関連を明らかにすることである。調査対象者は東海地区と関東地区の病院に勤務する看護師とした。収集したデータは年齢、性別、経験年数、ワークライフバランス、NWI-Rとした。回答者は117人だった。経験年数が１年未満の看護師は61人、1年以上2年以下は56人だった。WLBでは、満足と回答したのは37人、不満足は36人、どちらとも言えないは44人だった。クラスカルウォリス検定の結果、この3群間ではNWI-R得点に有意差を認めた(p=0.0013)。結果、育児や家事以外の私生活に関する時間を有効に活用できるように職場の改善が必要なことが示唆された。 （質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Kazuya Ikenishi,Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：3.301
19.テキストマイニングを用いたセラピストとクライエントの会話分析 （査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第3巻p87-94.2015.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面を会話分析にてカウンセラーの援助の特徴を明らかにして今後のうつ病患者へのカウンセリングに活用することである．カウンセラーが話した「思う」についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は10回中6回であった．ネガティブな発言内容は10回中1回であった．このカウンセラーのクライエントへの関わり方は意図的にクライエントの積極的な発語を引き出す重要な手法であるのではないかと推察する． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,川野雅資

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析 （査読付）	共著	平成28年5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻p67-74.2016.	本研究の目的はうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からセラピストの援助の特徴を明らかにすることである。対象はうつ病患者へのカウンセリングを実施したセラピストとクライエントの発語とした。分析はセラピストとクライエント別に記述統計，階層的クラスター分析，多次元尺度法，共起ネットワーク分類を行った。セラピストの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果，同調や促しの「うん」以外は，非常にバランスが取れた発語であったことが明らかになった。共起ネットワーク分類にて分析した結果，「調整」と「気分」と「楽観」の3つに関する話題に分類された。 クライエントの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果，A氏、先生に関する発言が多いことが明らかになった。　共起ネットワーク分類にて分析した結果，「A氏と先生との会話」と「雇用に関する将来の不安」と「休職したことの自責の念」の3つに関する話題に分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,川野雅資
21.スライディングシート導入後の現状と課題 －トラウマインフォームドケア（TIC）の観点より－ （査読付）	共著	平成28年9月	第1回臨床精神看護学研究会誌2016年.p77-79.2016.	本研究の目的は，TICの観点に基づき対象者と医療スタッフのそれぞれの立場から移送用スライディングシートの導入後の現状と課題は何かを明らかにすることである。対象は，X病棟に入院中の対象者5名と同病棟にて勤務する医療スタッフ5名。データ収集方法は研究者がスライディングシートの導入前と導入後の使用後の感想をそれぞれに直接聞き取り調査を実施した。対象者の肯定的意見は，「抱えられるよりは全然怖くないね。」，「安心感があるよ。」などの意見が聞かれた。否定的意見は「ゆっくりとしないと勢いよくすると滑り過ぎる時があるね。」との意見が聞かれた。医療スタッフの肯定的意見は「腰への負担が少なくなった。」，「僅かな力でも簡単にシートがよく滑るから使いやすい。」などであった。ノーリフトの基本理念は，対象者を抱えずに滑らせて移動する方法である。TICの基本的な考え方は，対象者にいかにトラウマ体験をさせないかである。スライディングシート導入後，対象者と医療スタッフからは肯定的意見が多く聞かれた。このことからスライディングシート導入による患者へ恐怖心を与えない看護の提供が出来たことで看護の質の向上など一定の効果はあったのではないかと考える。 （データ収集、データ分析、結果、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：西木一美，香田美帆，松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）				
「研究費助成報告書」				
1.がん患者が求める「患者サロン」活用への支援の検討　―「患者サロン」に関する認識と活用の実際―	共著	平成21年3月	平成21年度病室環境研究成果報告集奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄付講座．p17-23.2009.	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。 研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，瀬川睦子 全ページ104ページ
2.高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討	単著	平成25年5月	大阪ガスグループ福祉財団研究報告書26号.p111-116.2013.	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 全146ページ
3.我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発	単著	平成26年8月	日本学術振興会科学研究費助成事業若手B研究報告書.2014.	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである．本研究は，文献検討，面接調査，質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した． 全6ページ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「国際学会発表抄録」				
1.Examination of nurse's communication skills in role playing. （看護師のコミュニケーションスキル向上を目指したロールプレイングの効果の検証）	―	平成23年1月	The 3rd Korea-China-Japan Nursing Conference,p239.2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる示唆を得ることを目的とした。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名である。面接内容は同意が得られた場合のみICレコーダーにて録音し，逐語録を作成した。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、統合失調症患者との対話場面においての看護師が患者に対して話した発語項目の中から名詞のみを対象とした。その結果688個の構成要素を抽出した。コミュニケーション（120） 沈黙（114）相手（110）時間（74）などの6カテゴリが生成された．本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因として看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Ryuji Ichinoyama,Kiyoko Funasaki,Jumpei Matsuura
2.The characteristis of nursing literature on the family nursing during 15 years past. （過去15年間の世界における家族看護に関する研究の特徴）	―	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference,p243.2011.	本研究の目的は，世界における家族看護に関する研究の特徴を明らかにすることである．文献検索は，PubMedを用い，キーワードは「characteristis」「Family」「 Care」「Nursing」で検索した．遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした．対象は抽出された文献126件を分析対象とした．方法は126件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い，記述統計を実施した．結果,6個のカテゴリと26個の項目を導き出した．カテゴリは，それぞれ家族，ケア，関係など6種類であった．項目では，家族，患者，父親，高齢者,老人，母など26個であった．対象は，家族が一番多い結果であった．傾向は，分野別では，在宅ケア，高齢者などが多い結果であった．システム理論を発展させ更に家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護の視点から分析するとコミュニケーションについて伝達内容だけでなく家族の関係性も重要であることが明らかになった。また家族成員の変化が発生した場合は家族メンバー間で認知変化を注意して観察していく必要があると考える． （データ収集、データ分析、考察の一部執筆を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Jumpei Matsuura

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.Trend and problem of research on family nursing in the world from the review of the literature for past 15 years. （世界における家族看護に関する研究の現状と課題 過去15年間の文献検討）	—	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference,p251.2011.	本研究の目的は，世界における家族看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることで今後の家族看護に対する研究の方向性の示唆を得ることである．文献検索は，文献検索オンラインデータベースPubMedを用い，キーワードは「Family」,「 Care」，「Nursing」で検索した．遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした．対象は抽出された文献106件を分析対象とした．方法は106件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い，記述統計を実施した．結果,8個のカテゴリと33個の項目を導き出した．カテゴリは，それぞれ対象，関係，分野など8種類であった．項目では，家族，患者，親族，年配，子供新生児，老人，母，看病など33個であった．対象は，家族が一番多い結果であった．傾向は，新生児・子供から高齢者まで多岐に渡り幅広かった．分野別では，集中，救命が多い結果であった．種類では，看護，医療，介護，研究，教育の順で幅広い結果であった．家族看護学には，看護とシステム理論と家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護という考え方がある．このことから，変化が起こった場合には，家族間での知覚の変化を注意して観察していくことが必要ではないかと考える． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura,Eiichi Ueno
4.The caring concerns of the reducing the incidence of postoperative deliria in the field of head and neck. （ケアリングの視点に基づく外科病棟における術後せん妄発症率を減らすための方略）	—	平成24年3月	International Hirosima Conference on caring and Peace, p196.2012.	本研究は，外科病棟における術後せん妄発症予防のために病棟看護師が実践しているケアリングについてを明らかにすること．対象者は病院外科病棟に勤務する看護師の看護師7名について半構成的面接を実施した.分析方法は逐語録を文脈内容から意味のある内容を単一記録として区切り帰納的分類を実施してカテゴリ化を実施した.10個項目と41個のカテゴリを導き出した．項目は時間，コミュニケーションなどであった．カテゴリは現在，時間などであった.分析結果から術後せん妄発症予防に関して，看護師は，術後患者に対して「認知」，「睡眠」に関するケアを特に注意して実施している事が明らかになった.ケアリングの概念の中の「関わり」「交流」をベースとして「支持的態度」「コミュニケーション」「情報提供」「患者へ安楽の提供」に当てはまると推察する． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura,Eiichi Ueno

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.The desired nursing students' ability of communication from the caring standpoint. （ケアリングの見地から見た看護学生のコミュニケーション能力）	―	平成24年3月	International Hirosima Conference on caring and Peace, p263.2012.	本研究の目的はケアリングの視点から見た看護学生のコミュニケーション能力について明らかにすることである。対象A大学看護学部学生120名とした。段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて学年別に評価した実施した。ケアリングの視点としては相手への思いやりである。結果、相手が話すまで待つや相手が話すことを真剣に聞くなどが多項目よりも高い結果であった。これらの視点はケアリングの考えに基づくコミュニケーションであると推察する。今後はこの部分を更に伸ばすような指導を授業、演習、実習を通して行っていく必要性が示唆された。 （データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Jumpei Matsuura
6. The present conditions and problem about professionalism and the stress on the nurse in the world （世界における看護師のプロフェッショナリズムとストレスに関する現状と課題）	―	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、世界の看護師のプロフェッショナリズムとストレスに関する研究の現状と課題を明らかにすることである。PubMedを使用してキーワードは「professionalism」、「nursing」、「stress」とした。結果、抽出された17編の論文の中から内容を精査した結果15編の論文を対象にした。国別に分類した結果、USA 3編、Swedish 2編、Germany 2編、Australia 2編、Taiwan 2編、France1編、Canada1編、UK 1編、Spanish 1編であった。研究デザイン別は，質的研究6編、量的研究7編、報告1編、文献研究1編であった。研究目的別は、成人のがん病棟の患者と看護師間の相互作用のユーモアの使用について、プロ意識とチームワークの関係についてなどであった。研究対象者別分類は、臨床看護師10編と最多であった。研究フィールド別分類は、臨床8編で最多であった。日本では取り組みがなされていないかったため今後取り組む必要性が示唆された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno
7. The characteristicon the past paper concerns of mental health caused when a disaster strikes （災害発生時における精神衛生に関する文献研究）	―	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、災害発生時の精神衛生に関する動向と課題を明らかにすることである。対象はPubMedを使用した1973年から2015年の894論文である。 分析方法は内容分析である。ソフトはKH Coderを使用した。結果、ハリケーンのような多くの災害地震と津波について研究されていた。災害は、個人とコミュニティにおいて精神衛生で最も重要であり優先度が高い問題である。今後はプログラム開発など多くの種類の災害への適切な支えとなる方法を提供する必要性がある。 （テキストマイニングソフトを使用しての分析、考察の執筆、スライドの一部作成を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Nobuaki Maegawa, Jumpei Matsuura, Sanae Naruse

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「国内学会発表抄録」				
1.わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題　―文献検討を通して―	―	平成21年5月	第40回日本看護学会学術集会看護管理抄録集.p119.2009.	本研究の目的は我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。結果、31編の文献を対象とした。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編。研究対象者は患者105編。筆頭研究者は臨床看護師94編、看護系大学教員17編、共同研究9編。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編。せん妄発症要因については31編。せん妄評価尺度はニーチャム混乱・錯乱状態スケール11編。本研究結果から予防に関する研究が少なかったため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上平悦子
2.看護学生のコミュニケーション能力からみたカリキュラムの開発	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集.p49.2010.	本研究の目的は看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて、効果的な授業プログラムを開発することを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生の段階別コミュニケーション能力評価制度を用いた学生のコミュニケーション能力を測定した。結果、４学年が多くの項目で高得点を示したが2学年になるとコミュニケーション能力が低下する傾向であった。今後は看護学生のコミュニケーション能力を向上させるために各学年別に客観的指標を基に重点項目を教授することが大切である。そのためには各学年にコミュニケーションを教授する科目を効果的に配置するカリキュラムが必要である。 （データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一,明神一浩,松浦純平
3.術後せん妄発症要因と予防に関する文献検討　―過去5年間の国内文献より―	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集.p51.2010.	本研究の目的は文献検討から国内におけるせん妄発症要因と予防について明らかにすることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と術後と要因と予防とした。その結果、202編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、要因に関する論文は18編、予防に関する論文は10編であった。要因としては認知症、65歳以上などが多い結果であった。予防目的の取り組みとしてはビデオメッセージ、リアルオリエンテーションなどがあった。本研究から以下の2点が明らかになった。1点目は発症要因としては「消化器外科病棟」、「認知症」「65歳以上」が多い結果であった。予防については「環境の変化」「睡眠障害」など誘発因子への介入が発症予防に効果があることが分かった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.患者の暴力に対する看護師の予測マネージメントの研究	—	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集. p55. 2010.	本研究の目的は精神科病棟におけるベテラン看護師の危険予測について語りを振り返り臨床現場での実践に示唆を得ることを目的とした。研究方法はα県内の精神科病院に勤務する精神科臨床経験10年以上の看護師6名を対象とした。研究方法は半構成的面接法より得られたデータを質的帰納的に分析した。結果、患者の暴力に対する予測過程を抽出した。結果、「患者の行動パターンの把握」、「過去に起こった場面の想起」、「患者の話す内容の整合性」の3つのカテゴリーが生成された。今後は精神病患者の暴力を予測するための客観的評価についても更に量的・質的に検証するため必要がある。（逐語録作成、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平
5.高齢男性介護者の介護に対する自己の構え	—	平成22年7月	日本看護研究学会学術集会プログラム・抄録集. p113. 2010.	本研究の目的は高齢男性介護者の介護に関わる介護者の構えについて明らかにすることである。対象は高齢男性介護者の介護に関わる介護者4名を対象とした。対象者へ半構成的面接を実施した。結果、「喜び」「孝行」「負担」「責任」の4カテゴリが抽出された。今後は男性介護者の気持ちを大事にして関わっていく必要性が示唆された。（逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上平悦子，松浦純平，船瀬孝子，明神一浩，上野栄一
6.看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップするための方略	—	平成22年9月	第17回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集. p60. 2010.	本研究の目的は、看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップする要因を明らかにすることである。看護系大学α大学の看護学生１学年～４学年まで各学年70名、合計280名を対象に調査を実施した。方法は「看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度」を中心にそれぞれの技法の場面設定の質問紙を作成し5段階評定で、それぞれのコミュニケーション場面で、その時の感情について評価した。分析は対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった学年別のコミュニケーション技法の平均値は2.88±0.28であった(p＜0.0001)。得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供4.31 ±0.82、協同提言4.26±0.91であった。治療的技法の場面で非治療的技法の場面よりも快度は有意に高い結果であった。これらの結果を今後のコミュニケーションに活用していくことでスキルアップにつながることが示唆された。（データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一，松浦純平，一ノ山隆司

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題	—	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究学術集会会誌，p4.2010.	本研究の目的は、A県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである．研究対象はA県がん患者会会員400名．調査方法は，対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した．調査項目は，基本的属性，サロンの認識，サロン立地条件，サロン利用者，サロンに必要と考える医療従事者，サロンへの期待の6項目．分析方法は，PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った．結果、以下の3点が明らかとなった．1．地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は，非常に高い．しかし，実際にサロンを利用している人は少ない．2．サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた．3．サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一
8.福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動に対する実態調査	—	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集,p418.2011.	本研究の目的は福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動を明らかにすることである。対象はインターネットで研究参加に同意をした成人男女450名を対象とした。設問項目は食品産地を見て買うかどうか。福島第一原発事故の前後で食品産地を見てから購入するかどうか。結果、原発事故の前後では事故後が生産地を見てから買うようになった項目で有意差がみられた。このことは報道が消費行動に影響を与えている可能性が示唆された。 （データ入力、データ分析を担当した。） 共著者：御輿久美子，守田貴子，水野静枝，松浦純平，濱田美来，尾花尚弥，今村知明
9.看護師の就労継続をエンパワメントする因子についての研究	—	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集，p492.2011.	本研究の目的は、看護師の就労継続をエンパワメントする因子を明らかにすることである。調査対象はα・β県内の病院施設の看護師であり，研究参加への同意が得られた250名。記述データは自記式質問紙の自由記載項目とした。データ分析方法は文脈の意味内容を精読し，その内容の類似性に基づき分類し，カテゴリー化した。スーパーバイザーに指導を受けてカテゴリー化した。分析の結果【看護職としてのやりがい】【家族を支えるために必要な経済的資源】【看護職への誇り】【帰属意識の高さ】の4カテゴリリーが生成された。看護師不足である現状の中継続して就労している看護師が継続している要因は様々なであるが、患者家族からの感謝の気持ちの表明、家族の支援などが就労継続に影響している結果となった。今後、この結果を基に看護師の就労継続の可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析を担当した。） 共著者：加藤礼識，伊藤雪絵，水野静枝，松浦純平，御輿久美子，今村知明

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10.看護体制の違いによる職務満足の検討	—	平成23年1月	第42回日本看護学会看護管理抄録集,p57．2011.	本研究の目的は看護体制の違いが職務満足度の影響に関する研究について形態素解析を行うことにより職務満足に関する研究の動向を明らかにすることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル670件を分析対象とした。解析方法はベレルソンの内容分析法を使用した。結果、看護体制が10対1と7対1の看護体制では職務満足度に相違が見られた。今後は看護体制が職務満足度にどのように影響をしているのかを明らかにする必要性が示唆された。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平
11.統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルに関する研究	—	平成23年1月	第42回日本看護学会精神看護抄録集,p49．2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップに向けて示唆を得ることを目的に取り組んだ。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名。面接内容から逐語録を作成。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、統合失調症患者との対話場面においての発語項目に該当する名詞に着目し，718個の構成要素を抽出した。コミュニケーション行動（130）］［行動（123）］[対象（120）][陰性症状（76）]などの8カテゴリが生成された．形態素解析で最頻度名詞の『気遣い』25個に着目しコロケーション解析した結果，「活動量増加（19）」「体動増加（12）」などであった．本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因としてなど看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平
12.頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因に関する看護師の視点について	—	平成23年3月	第10回富山大学看護学会学術集会会誌 10（1），p30.2011.	本研究の目的は，頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにして，臨床での術後せん妄発症患者に対する看護実践への示唆を得ることである．対象は，A大学医学部附属病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名．術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施，結果内容分析手法およびセブンクロス法にて分析した．内容分析の結果から【性格特性】【理解力不足】【長期安静】【高齢】【不眠】【男性】【独居】の7つのカテゴリーが生成された．セブンクロス法の結果から，優先順位が高い順に【不眠】【性格特性】【高齢】【長時間手術】【術中出血量】【眠剤の影響】【術前不安】の 7つのカテゴリーが生成された．内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは，【高齢】【不眠】【個人特性】の3つのカテゴリーであった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，上野栄一+F59

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13.一般外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討　―経験豊富な看護師へのインタビューより―	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p178. 2011.	本研究の目的は一般外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に判断している術後せん妄の発症予測につながる患者の前駆症状を明らかにすることである．対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名とした．半構成的面接を実施した．逐語録を形態素解析分析し，抽出した名詞を類似性に基づき分類し，意味内容の共通性に基づきカテゴリ化した．類似性により分類した結果【表情】【認識】【患者の反応】【置かれた環境】【コミュニケーション】【時間感覚】【失見当識】【行動】，【対象者】【対象物】【情意】【直観】，【患者特性】【不安】【睡眠】の15のカテゴリが生成された．本研究結果から経験豊富な看護師の術後せん妄発症予測につながる前駆症状の観察視点としては，患者の眼に代表される表情，失見当識，看護師の説明に対する認識とその反応等から術後せん妄の発症を予測していた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，福田弘子，上野栄一.
14.内容分析による最近の診療報酬の特徴	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集， p227. 2011.	本研究では過去1年間の診療報酬に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の診療報酬の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、1236件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、120種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬（222）介護保健（192）DPC（68）などであった。これらのことから診療報酬についてDPC制度導入、診療報酬改正などを視野に入れて取り組みがなされていた。今後も診療報酬改定に注目して動向を注視していくことが重要であると考える。（逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，松浦純平，上平悦子.
15.認知症高齢者および家族の地域生活を阻害する困難要因	―	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集， p339. 2011.	本研究では介護保険適応施設の従事者が認知症高齢者およびその家族を地域で支えていく困難性をどのように捉えているのかを把握することを目的とした。対象は介護保険施設の従事者27人。記述データは自記式質問紙の自由記載項目。データ分析方法は内容の類似性に基づきカテゴリ化した。結果，【認知症に対する理解不足と偏見】【支えるために必要な経済的資源の欠如】【職種間の連携と情報不足】【行動心理症状の理解と対応困難】4カテゴリを抽出した。認知症高齢者に対して家族や地域住民，介護保険適応施設の従事者が，認知症の種類や中核症状・行動心理症状に関して理解不足が偏見を助長し，さらに理解不足が対応の困難性を高める原因になっており，職種間の連携にも影響を及ぼしていたことが明らかになった。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：京谷和哉，一ノ山隆司，舟崎起代子，松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16.データマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について　―経験豊富な看護師へのインタビューの分析―	―	平成23年8月	第42回日本看護学会学術集会成人Ⅰ抄録集,p60.2011.	本研究目的は外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである．調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した．分析方法は逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトはWinCha，KWIC Finderを使用した．結果、718個の構成要素を抽出。［行動］［コミュニケーション］［行動対象］［表情］［睡眠］［訴え］［時間］［幻覚］［認知］の9カテゴリが生成された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，福田弘子，上野栄一，水野正延.
17.看護理論にみるカウンセリング技法の特徴	―	平成23年9月	第18回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p48.2011.	本研究では、カウンセリング技術にはどのようなものがるかを明らかにし、さらにカウンセリング理論との関係について明らかにすることを目的とした。ナイチンゲールは、優れた看護師の能力として、患者にどのようなことを感じているか読み取れ、患者の顔に現れる変化についての意味を理解できると確信が持てる研究をすべきと明言している。ヘンダーソンは、完全で成熟した優れた看護師とは患者に同情を寄せ、かつ敏感に反応する能力、自分の情緒的な反応と技術的な対応を活用する機会をもつと述べている。 看護理論にはコミュニケーション技術、カウンセリング技術に関する独自の看護論が存在していた。それらは、治療的コミュニケーション技術をベースに傾聴、受容、共感的理解、自己決定へと看護過程を展開する中で展開していることが明らかとなった。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一,松浦純平，明神一浩.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18.看護学生のコミュニケーション技法と感情との関係	—	平成23年9月	第24回健康心理学会抄録集,p89.2011.	本研究の目的は看護学生の学年別コミュニケーションの技法がどのように感情に影響を与えているかについて明らかにする。対象は看護系大学α大学の看護学生１学年～４学年280名。方法は看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度を使用し技法の場面設定の質問紙を作成し５段階評定でコミュニケーション場面で、その時の感情（快―不快）について評価した。分析は、対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった１学年58名、２学年60名、３学年55名、４学年63であった。治療的技法の平均値は2.88±0.28、非治療的技法の平均値は2.5±9.43であった(p＜0.0001)。治療的技法で快得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供4.31 ±0.82、協同の提言4.26±0.91であった。平均治療的技法の得点と非治療的得点の学年別にみた比較を一元配置分散分析した結果、平均治療的技法（F=4.35；p<0.05）では平均治療的技法得点は１学年2.95±0.28 ２学年2.92±0.28３学年2.83±0.27４学年2.80±0.25であり１学年と４学年（p<0.05）１学年と３学年（p<0.1）２学年と４学年（p<0.1）との間に有意な差を認めた。（データ収集・入力、データ分析を担当した。） 共著者：上野栄一,松浦純平.
19.医療政策の中での看護の動向	—	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p29.2011.	本研究では過去1年間の医療政策の中で、看護の政策に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の医療政策の中の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、2291件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、225種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬（302）介護保健（292）インフルエンザ（222）などであった。看護に注目すると「看護教育」「外国人看護師」「人材養成」「訪問看護」などのカテゴリーが抽出された。これらのことから看護政策においては看護教育、カリキュラム改正、特定看護師に関するものが多くまた外国人看護師への支援策も具現化されていた。多くの施策が提示される中、今後看護教育、看護サービスを充実させるために看護施策の情報をいかに取り入れ教育施設、各病院での取り組みを考えることが重要であると考える。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，松浦純平，上平悦子，八塚美樹.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20.頭頸部外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討　―経験豊富な看護師へのインタビューより―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p34. 2011.	本研究の目的は、外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に感じている術後せん妄発生予測につながる前駆症状は何かを明らかにすることである。調査対象者は外科病棟に勤務する看護師7名を対象とした。看護師へ、外科領域における認知症を併発していない術後せん妄患者への関わりを想起してもらい，外科領域における術後せん妄発症予測についてのアセスメントをどのような視点で実施しているかについて，半構成的面接を実施し，逐語録を作成した。術後せん妄発症予測アセスメント項目に該当する名詞に着目した結果718個の構成要素を抽出した。意味内容の類似性に基づき分類した結果，9カテゴリーが生成された。結果から得られた観察ポイントは，経験豊富な看護師の長年の経験に基づく熟練の技に該当する部分だと考える。経験の少ない新人看護師が気付きにくい観察項目であると考えるため，この部分に注目し，共通理解を深めることでせん妄の早期発見・早期介入が可能となるため重要なポイントだと推察した。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，福田弘子.
21.過去10年間の職務満足の研究タイトルの分析による研究動向の検討	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p48. 2011.	本研究の目的は看護師の職務満足度に関する研究について形態素解析を行うことにより職務満足に関する研究の動向を明らかにし今後の研究に示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル895件を分析対象とした。解析方法は内容分析法を使用した。結果、新人看護師、中堅看護師、職員定着、キャリア、看護体制、自律性などが抽出された。看護体制が職務満足度にどのように影響をしているのかをみた研究が増加傾向である。新人看護師の離職予防について職場に愛着を持たせるような帰属意識も重要であることが本研究から示唆された。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，前川哲弥，森下憂一，松浦純平，上平悦子，上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22.わが国における術後せん妄発症予測に関する研究の動向　―過去27年間の文献検討より―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p57.2011.	研究目的は，看護分野におけるせん妄発症予測に関して患者ケアに示唆を得ることである．文献検索は，医学中央雑誌を用い，キーワードは「せん妄」，絞込み検索は「看護」，「原著論文」とした．遡及範囲：1983年～2010年の27年間とした.対象は12件の文献とした．分析方法はデータの示す傾向や性質を把握ため，12件の文献を各フィールド別，予測項目別に記述統計の手法で分析した．結果,予測項目のカテゴリ別分類では，「認知力障害」20件，「ルート類」19件，「環境の変化」15件，「患者属性」11件，「活動抑制」・「性格」・「薬剤」10件，「身体症状」・「周手術期」9件であった.看護師の術後せん妄発症予測項目には，同じことを何度も聞く，指示動作困難等，点滴刺入部，心電図電極を不必要に触る，緊急入院，個室への移動，70歳以上，身体拘束，几帳面な性格，麻薬・精神薬服用中，脱水，疼痛，5時間以上の手術等があり，術後せん妄発症予測を行っていることが明らかとなった．今後，上記の項目を重視して術後の患者のケアに活かしていく必要性が示唆された. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，福田弘子.
23.臨床看護師が考える術後せん妄発症予防に関する看護実践について ―KH Coderを利用した分析―	―	平成23年12月	第11回富山大学看護学会学術集会抄録集 11（1），p38．2011.	本研究目的は，外科病棟に勤務する看護師が術後せん妄発症予防のために取り組んでいる看護実践は何かを明らかにすることである．対象は病院外科病棟に勤務する看護師20名．調査方法は半構成的面接法を実施した．分析は記述統計，対応分析，階層的クラスター分析，共起ネットワーク分類を実施した．術後せん妄発症予防についての取り組みは「説明」「術前」「自分」「家族」などであった．階層的クラスター分析結果から，疼痛除去，十分な睡眠の確保，積極的離床に基づく生活リズムの再構築等など8つのクラスターに分類された．抽出名詞の出現パターンの類似性を線で結んだ共起ネットワーク分類の結果から，看護師は術前に患者家族へ十分な説明の実施，術後における十分な睡眠確保などの看護実践に取り組んでいた．本研究結果から看護師は術前の段階より患者家族へ術後の環境および状況の変化について十分な説明を実施し理解を促す様に努めていたことが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，京谷和哉，上平悦子，梅林かおり.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24.経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測要因の検討　―データマイニングを用いたインタビューの分析―	―	平成23年12月	第31回日本看護科学学会学術集会講演集 ,p393.2011.	本研究の目的は，外科病棟での臨床経験豊富な看護師が考える術後せん妄の発症予測につながる前駆症状とは何かを明らかにすることである．対象者は2病院の外科病棟に勤務する経験豊富な看護師21名である.調査者対象者へ認知症の併発がなく術後にせん妄を発症した患者を想起してもらい，術後せん妄発症予測に関するアセスメント内容について半構成的面接を実施し逐語録を作成した．分析方法は逐語録の言語すべてについて形態素解析分析を行い，記述統計および抽出した名詞について形態素間の共起関係を検証するため対応分析を実施した.術後せん妄発症前駆症状に関する発言を形態素解析した結果，総単語数33,447個より2,249個1,806種類±27.08（mean±SD）の名詞を抽出．結果，70歳以上の高齢であることを前提とした上で眼に代表される【表情】言語・非言語的コミュニケーションを含む【コミュニケーション】家族のことを気にする，家族への面会要求等の理由により【安静保持不能】尿意，術後創部痛があるが対処できていないことによる【不快感】ガーゼ・ルート・ドレーン類が気になる等の【術後処置に伴う影響】の5つのカテゴリが生成された. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，上野栄一
25.看護学生の授業における3e-Analyzer による学習効果	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p37.2012.	本研究の目的は新しい看護学生の授業における3eAnalyzerを用いての看護学生の授業における3eAnalyzerによる学習の効果を明らかにすることである。研究方法はα大学の授業で3eAnalyzerを用いて学生60名に調査を実施した。3eAnalyzerで答えることのできる質問を10項目設定した。分析方法はテキストマイニングによる単語解析、ことばのネットワーク分析、対応分析を実施した。結果、回収は49名、有効回答は44名であった。頻出単語は良い、楽しい、面白いなどの肯定的表現が上位を占めた。ことばのネットワークでは楽しい、良いという単語に参加できる、凄いといった単語と連動していた。対応分析では「楽しい、参加できる」と「良い、授業、刺激」が抽出された。 3eAnalyzerの使用した授業の感想について自由記載を分析したところすべてが肯定的な回答であった。3eAnalyzerの特徴である教員と学生が双方向でリアルタイムで回答表示でき学生へのフィードバックが即時にできることが学生の学習意欲を上げて高い肯定的評価を得た。 （データ収集・入力、データ分析を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平，上平悦子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26．テキストマイニングによる看護管理の研究の動向－過去 10年間の文献より－	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p47. 2012.	本研究の目的はテキストマイニングを用いて看護管に関する国内文献の研究タイトルの分析から看護管理に関する研究の動向と今後のの示唆を明らかにすることである. 調査対象は検索結果から抽出した368文献の研究タイトルとした. 分析方法は形態素解析，記述統計とコロケーション解析を行った. 結果, 368文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は4250語, 2226種類であった．高頻度に出現した単語に着目した結果，管理（22）管理者（18）看護部（10）新人看護師（6）研修（5）などが抽出された. 早期離職予防に関する研究が多い結果であった．管理の単語に注目し，管理の先行と後続文脈（前後文脈）を抽出するため，コロケーション解析した結果，新人看護師を対象にした研修の研究, 離職予防に関する研究が実施されていた．研修の前後文脈からはラダー制度や能力別研修などの文脈が得られた．本研究結果から今後，新人看護師の早期離職予防のための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された. （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平，上平悦子，安東則子，八塚美樹，神保浩子.
27. 過去10年間の医療機関における暴力に関する研究の動向	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p55. 2012.	本研究の目的は過去10年間におよぶ暴力に関する文献の特徴を明らかにして今後の暴力に対する看護への示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル1700件を分析対象とした。分析方法は内容分析法を使用した。結果、暴力に関する研究は1508タイトルであった。対象をクラスター解析結果から「暴力の実態」「暴力予防」「暴力場面」「暴力防止」「DV被害」「暴力認知」「暴力の危機介入」の7つのクラスターを抽出した。暴力の実態を明らかにした研究や事例を通じて暴力行為に至る過程やせん妄による暴力を認知できない患者による暴力が問題になっていることが明らかになった。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一, 松浦純平，上平悦子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28.テキストマイニングを用いた術後せん妄に関する研究論文タイトルの分析	—	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p57.2012.	本研究の目的は，我が国における術後せん妄に関する研究論文タイトルから研究の動向と課題を明らかにすることである。調査方法は医学中央雑誌を使用してキーワードは「術後せん妄」，絞り込みは看護と原著論文として，期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した129文献とした。分析方法は計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用した。記述統計，階層的クラスター解析，共起ネットワーク分類にて分析した。結果129本の論文タイトルを分析可能な意味をなす最小単位である形態素に解析した結果，総抽出語数は2,043語，420種類であった。そのうち抽出された名詞774個の中から高頻度に出現した名詞に着目した結果発症（44）要因（33）検討（30）予防（28）術前（16）分析（15）などであった。階層的クラスター解析の結果「関連分析」「リスク評価」，「実態調査」「予防効果の検討」の5個のクラスターに分類された。共起ネットワーク分類にて分析した結果，せん妄発症予防を重視した研究，患者の状態を日本語版NEECHAM混乱・錯乱スケールを用いて分析した研究に取り組んでいることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，植木健康，安東則子，八塚美樹，上野栄一.
29.臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールに関する分析	—	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集,p127.2012.	本研究の目的は,術後せん妄アセスメントツールに関するニーズについて明らかにすることである。対象者は全国の19病院の外科病棟勤務の看護師725人。看護経験年数別に5群に分け,アセスメントツールの必要性,使用希望,項目数,所要時間を一元配置分散分析にて分析した。ツールが必要と回答した割合は85.5%,使用希望割合は82.5%,全体のアセスメントツール項目平均数は10.4項目,経験年数20年以上の群が平均21項目であった。経験年数別のアセスメントツール必要性,使用希望,所要時間に関する5群間の多重比較では有意差がなく,項目数の群間比較において,経験年数20年以上の群が他4群の全てと比較して有意な差が生じた。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，石澤美保子,京谷和哉，一ノ山隆司，上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
30.テキストマイニングを用いた周手術期における皮膚トラブルに関する 研究の動向と課題－過去29年間の論文タイトルの分析－	―	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集,p141.2012.	本研究の目的はテキストマイニング手法を用いて我が国における周手術期における皮膚トラブルに関する研究の動向と課題を論文タイトルから明らかにすることである。調査方法はWeb版医学中央雑誌を使用。検索キーワードは「手術室」「手術体位」とした。調査期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した93編。分析方法は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した。93編の論文タイトルについて形態素解析を実施し記述統計，階層的クラスラー解析，共起ネットワーク分類を行った。形態素解析より総抽出語数1465語253種類を抽出した。抽出された名詞575語の名詞に関して記述統計の結果頻度順に手術（36）使用（24）体位（20）検討（13）などが抽出された。階層的クラスター分析より「発赤予防のための物品の工夫」「仰臥位時の皮膚調査」「褥瘡発生予防」「術中体位の工夫」「術中体位固定についての効果の検討」の5カテゴリーに分類された。周手術期看護において，褥瘡発生に代表される皮膚障害が問題視されている。本研究の分析結果から，術中同一体位による褥瘡発生予防に関して，物品を用いて様々な工夫を行い研究に取り組んでいた。 （文献収集、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：西山和成，松浦純平，上野栄一.
31.話し手の治療的コミュニケーション技法と非治療的コミュニケーション技法が聞き手の感情に与える影響―ＰＯＭＳを用いた調査から―	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p33.2012.	話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているかPOMSを用いて感情の変化を調べた。調査期間は平成23年10月。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問は半構成的面接を用いた。治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつ－落込み）、A-H（怒り－敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（$p<0.05$）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32.コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p51.2012.	本研究では、コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較をし、特徴を明らかにすることを目的とした。調査期間は平成23年８月。対象は看護系大学の学生10名に実施した。方法は聞き手が治療的技法を用いる群と非治療的技法を用いる群に分けて実施した。2人の間の相互交渉内容を分析した。会話の内容について逐語禄を作成後、両者の文字数をカウントして会話量とし、両者の会話量をMann-Whitney U-testにて分析した。治療的技法で話を聞いた聞き手は、非治療的技法を用いた聞き手よりも有意に高い発語量の変化を示した。また、非治療的技法では、話し手の治療的技法を用いた発話量に比べて少ない発話量の変化であった。話し手が治療的技法を用いた場合は、聞き手は、受容的な接し方に共感的理解が深まり、自分から話すモチベーションが高まったと考えられる。逆に話し手が非治療的技法を用いた場合は、聞き手は自分の意見を拒否されるため不快な感情が生じ話す気にはなれない気持になったと推察する。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一.
33.EBNに基づいた会話分析とは何か	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p52.2012.	本研究では、会話分析の方法について研究者らが用いている方法についてその特徴を明らかにすることを目的とした。会話分析の種類について、これまでの方法について、会話を分析するという視座にたち、その特徴を明らかにし、ＥＢＮに基づいた会話分析について示唆を得ることとした。テキストマイニングソフトを用いると、言葉とことばの関係性が一目瞭然にビジュアル化できる。たとえば「看護師はである」「看護師は優しい」といった会話例を分析すると次のようなスキ―マに表わすことができる。これは共起分析とも呼ばれ、言葉のネットワークとして図式化できるので会話を可視化することができるので会話の構造を調べるのに適していると考える。最近は、コンピュータを利用したテキストマイニングのソフトが開発されている。電子化テキストの最小構成単位としての 文字について、 文字連鎖の出現頻度、あるいは文字の次に生起する文字の確率が算出できる。 また、クラスター解析が可能となる。従来の質的研究と併用することにより信頼性のある精度の高い分析が可能になると期待される。 （文献収集、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34.話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系と感情に与える影響	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集,p206.2012.	本研究の目的は、話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているか自律神経測定装置を用いて感情の変化を明らかにすることである。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問票はPOMSで「気分の状態」を6尺度で測定治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつ－落込み）、A-H（怒り－敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（p<0.05）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ入力、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.
35.テキストマイニングによる術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述の分析	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集 p288.2012.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述内容をテキストマイニング手法から明らかにすることである。対象は全国の19病院の外科病棟に勤務する看護師725人。データ分析方法は記述内容を形態素解析，記述統計，コロケーション解析，クラスター分析，共起ネットワーク分類した。分析対象は、自由記述回答数51部。記述統計結果の頻出名詞は、せん妄、術後、アセスメントツール、使用、発見、対応、判断、必要、早期発見であった。アセスメントツールの前後文脈の意味内容を読み取る解析から「活用したい」「便利である」「リスク管理としても効果的」「術前から使用可能」などの文脈を得た。クラスター分析では「発症の早期発見」「予防」「臨床での活用」など5個のクラスターを抽出し共起ネットワーク分類から「予防効果」「リスクアセスメント」など7カテゴリーに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，上野栄一.
36.テキストマイニング分析について	—	平成25年1月	第6回Project AKI全国集会p2.2013.	大阪府内に勤務する臨床看護師を対象にした研修会にて新しい研究手法であるテキストマイニング法について事例に基づき説明した。具体的には、日本看護研究学会で口演発表したスライドを使用し具体的なポイントを示しながら実施した。結果、参加者から具体的な質問が出て本研究手法の興味の高さが明らかになった。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。） 著者：松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
37.スピリチュアルケアに関する研究の動向	―	平成25年1月	日本がん看護学会誌 27（1），p269.2013.	本研究の目的はテキストマイニングを用いてスピリチュアルケアに関する国内文献の研究タイトルの分析からスピリチュアルケアに関する研究の動向と今後の示唆を明らかにすることである.調査対象は検索結果から抽出した457文献の研究タイトルとした.分析方法は形態素解析，記述統計とコロケーション解析を行った.結果,457文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は4250語，2226種類であった．高頻度に出現した単語に着目した結果，スピリチュアルケア（42）看護（18）がん（10）ターミナル（6）看護（5）などが抽出された.スピリチュアルケアの精神面に関する研究が多い結果であった．スピリチュアルケアの単語に注目し，先行と後続文脈（前後文脈）を抽出するため，コロケーション解析した結果，スピリチュアルケアを対象にした研修の研究,スピリチュアルケアの実践に関する研究が実施されていた．本研究結果から今後，スピリチュアルケアのための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された. （逐語録作成、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，長光代，松浦純平.
38.テキストマイニングを用いたせん妄とメラトニンに関する研究の分析	―	平成25年8月	第39回日本看護研究学会学術集会抄録集,p267.2013.	本研究目的はせん妄とメラトニンに関する英語文献の研究タイトルの分析から研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである.PubMedを使用しDelirium,Melatoninのキーワードとした.対象は検索結果から抽出した42文献の研究タイトルである.分析方法は研究タイトルをKH Coderを使用し形態素解析,記述統計,コロケーション解析を行った．結果,せん妄とメラトニンに関する研究は，1969年の1件から2004年の2件で増加傾向であった.42文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は870語，226種類であった．高頻度に出現した単語はDelirium（22）Melatonin（18）Postoperative（10）Patients（10）Sleep（6）など.Melatoninの単語に注目しMelatoninの先行，および後続文脈を抽出するためコロケーション解析した結果術前，術後におけるメラトニン分泌量の研究，サーカディアンリズムとメラトニン分泌量に関する研究が実施されていた周手術期におけるMelatoninの使用についてサーカディアンリズムとMelatonin分泌についての研究やMelatoninの分泌を促すことで患者を落ち着かせることができたなどの文脈が得られた. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，吉岡一実.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39.NANDA-Ⅰ看護診断における「急性混乱」の変遷およびその特徴について	—	平成26年7月	第20回日本看護診断学会学術大会抄録集,p112-113.2014.	本研究の目的は、NANDA-Iの急性混乱の定義および診断指標・関連因子の各項目の記載内容を分析することでせん妄の早期発見につながる観察の視点やケアへの示唆を得ることである。対象はNANDA-Ⅰ看護診断名の急性混乱とした。対象期間は1997-1998から2012-2014までとし、年度区分別に定義・診断指標・関連因子の各項目についてまとめた。結果、急性混乱の定義の変遷は、1997-1998から2012-2014までの間に3回変更されていた。1回目は1997-1998の「障害のクラスターの突然の発生」から1999-2000には「障害がひとかたまりになった」へ変更された。2回目は2005-2006の「注意，認知，精神運動性活動，意識レベル，そして／または睡眠／覚醒周期の包括的で一過性の変化および障害がひとかたまりになった突然の発生」から2007-2008「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」へ変更された。3回目は2009-2011「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」から2012-2014「短時間に進行する，可逆的な障害が意識・注意・認知・知覚に突然発症した状態」へ変更された。本研究では、看護診断を使用する看護師が共通認識の元で使用しやすいように定期的に見直しされており年々完成度が高まっていることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一.
40.Text miningを用いたディスコース分析	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p118.2014.	テキストマイニング手法の紹介をした。本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語．方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された．関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた．カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった． （本研究の代表者として研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
41.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析	―	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p302.2014.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語．方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された．関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた．カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資，上野栄一.
42.テキストマイニングによる休職した看護師の復職に対する支援の実際	―	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p303.2014.	メンタルヘルス不調によって休職した病院看護師の復職支援に関する実際を明らかにすることを目的とした．研究対象はA圏内の200床以上の総合病院102施設の看護管理とした．データ収集方法は質問紙調査票の自由記載項目である「看護師のメンタルヘルス不調者の復職において，どのような援助を行っているのか」に記述された内容である．データ分析方法は記述内容をKH Codeを使用して，形態素解析後，共起関係ネットワーク分析を実施した．記載内容を形態素解析した結果，総抽出語数は3,168語，675種類に分類された．共起関係ネットワーク分析の結果，[復職，本人，プログラム，支援，業務，職場]，[看護，勤務，調整]，[体制，サポート，休職，姿勢、相談，面談]，[専門，面接，必要，メンタル，不調]の語句の結びつきなどが明らかになった。そして，「職場復職支援プログラム」，「面談・相談」，「勤務調整」，「専門職によるフォロー」の4因子に分類された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，大津聡美，遠藤加奈子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
43.メンタルヘルス不調によって休職した看護師への復職支援	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p328.2014.	本研究の目的はメンタルヘルス不調によって休職した看護師の復職に関して看護管理者がどのような援助を行なっているのかを明らかにすることである.研究対象は某地方の精神科病院を除く200床以上の総合病院350病院とし，全体的に看護職員のことを把握している看護部長および管理職とした．データ収集方法は質問紙調査票の一部の自由記載文であり，「看護職のメンタルヘルス不調による休職後の復職に関してどのような援助を実施しているのか」についてである．データ分析方法は回答が得られた102件の記述内容をKH Codeにて分析した．記述内容を形態素解析した結果，総抽出語数は3,168語，675種類に分類された．高頻度に出現した単語に着目し記述統計を実施した結果，頻出順に「復職」(27)，「サポート体制」(25)，「本人」(23)，「休職」(19)，「プログラム」(16)，「メンタルヘルス」(16)等が抽出された．階層的クラスター分析では，5つのクラスターに分類され，看護管理者の復職支援に対する傾向が明らかになった。 （逐語録作成、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平，大津聡美，遠藤加奈子.
44.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面におけるカウンセラーの会話分析	—	平成26年12月	第3回ディスコース分析研究会抄録集,p28.2014.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語。方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果カウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった．本研究の結果よりうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴として以下の2点が明らかになった。1点目はカウンセラーのカウンセリング時のコミュニケーション技法としては効果的な相槌を打っていた．2点目は意図的にクライエントへポジティブな発言を投げ掛けることで承認をしていた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一,川野雅資.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
45.看護政策に関わる研究の動向について	—	平成27年2月	第28回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,P21.2015.	本研究の目的は、過去の看護政策に関連する文献を分析し、その特徴を明らかにすることである。医学中央雑誌（Web版）にてキーワードとして看護政策も含む「医療政策」（1976～2014）（原著論文）とし検索した1030件の研究タイトルを対象とした。抽出された研究タイトル名を抽出し、テキストマイニングStudioにて、単語頻度分析、係り受け分析、共起分析、対応バブル分析をした。解析文章は、延べ単語数6593件であった。1)単語解析では、頻度順に、日本80、研究66、現状62、検討61と続いた。係り受け頻度解析では、頻度順に18年度-診療報酬改定12、診療報酬改定-影響7と続いた。共起分析では、影響と診療報酬、「介護政策」「医療」が「実証的検証」と連動していた。「医療政策」と「転機」、「日本」と「米国」、「日本食品標準成分表」などが連動していた。対応バブル分析では、「医療政策、診療報酬改定、食事栄養基準」と「取り組む」、「検討」、「展望」の４つに分類された。 （データ分析、考察、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，成瀬早苗，増田安代，松浦純平，内田真紀，山本勝也.
46.テキストマイニングを用いた看護診断に関する研究の分析	—	平成27年7月	第21回日本看護診断学会学術大会抄録集，p102-103.2015.	本研究目的は，国内における看護診断に関する研究についてどのような視点で取り組まれているのかを明らかにすることである。検索データベース医学中央雑誌Web版Ver.5を使用し，遡及期間は1976年以前から2015年とした。対象は看護論文，原著論文のみとした。検索キーワードは「看護診断」とした。検索結果から抽出した1,022文献の研究タイトルを対象とした。分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，出現パターンの類似性を解析する目的にて，階層的クラスター分析と共起関係ネットワーク分類を実施した。1,022文献の研究タイトルを形態素解析した結果，高頻度に出現した単語とし看護診断（792），看護（724），患者（280），などが抽出された。階層的クラスター分析の結果，「標準計画ケア」，「看護診断」，「実習における看護診断」，「アセスメントの診断パターン」，「実態調査」の5つのクラスターに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47.テキストマイニングによる「先制医療」の視点からみたせん妄発症予防の実際	—	平成27年8月	第41回日本看護研究学会学術集会抄録集,p239.2015.	本研究目的は，先制医療に基づいたせん妄に関する国内文献の研究タイトルを分析することで研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである.調査方法医学中央雑誌Web版Ver.5を使用し，原著論文を対象にした．キーワードは「先制医療」，「せん妄」とした．調査対象は検索結果から抽出した196文献の研究タイトル．分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，コロケーション解析，階層的クラスター分析，共起関係ネットワーク分類にて分析した．結果，196文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は3682語，648種類であった．記述統計の結果，高頻度に出現した単語として，予防（90），看護（86），検討（32），要因（27）などが抽出された．「ケア」と「取り組み」の単語に注目してコロケーション解析を行った結果，「ケア」については24編中9編が予防ケアに特化した関わりであった．「取り組み」については18編中10編が予防に関する取り組みであった．階層的クラスター分析の結果，6つのグループに分類された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者:松浦純平,足日和美,中上昌代,上野栄一.
48.テキストマイニングによる日本国内における災害時の透析看護に関する研究の動向と課題	—	平成28年11月	第35回 日本看護科学学会学術集会講演集,p521.2015.	本研究の目的は，先制医療に基づいた災害時の日本における透析看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることである．対象は75文献とした．75文献を計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，コロケーション解析，階層的クラスター分析，共起関係ネットワーク分類にて分析した．結果「透析患者の災害発生時の具体的対策」，「災害発生時の対策に関する意識調査」の2つのカテゴリーに分類された． （文献収集、テキストマイニングでの分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：足日和美,松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
49.世界における嗅覚障害看護の現状と展望　ーテキストマイニングによる定量的分析ー	―	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会プログラム集,p91.2016.	世界における嗅覚障害に関する看護論文の分析より本研究の目的は,嗅覚障害看護の現状と展望を明らかにすることである.対象は検索データベースPubMed。を使用し,キーワード検索はNursing, Olfactory Dysfunctionとした.調査対象は看護分野以外の論文11編を除いた25編とした.領域別分類では，老年15編，小児4編，母性3編，精神2編，成人1編であった。研究者の国別では，U.S.A 6編，JAPAN 4編，ITALY 3編，FRANCE 2編，AUSTRALIA 2編，CANADA 2編であった.テキストマイニングにて形態素解析の結果,総抽出語数1,449語，404種類,平均出現回数1.76回，標準偏差3.54であった.高頻度出現した単語は，Disease〈7〉，Older〈6〉，Parkinson〈6〉，Factors〈4〉などであった．疾患別ではパーキンソン病が5編と最多であった．語の関係性を可視化する共起関係ネットワーク分類の結果，Disease，Older，Factorsがキーワードとして抽出された．抽出語を類似した語句に分類したクラスター解析の結果，4クラスターに分類された．看護の視点での介入についてはケアリングの観点に基づく看護に関する研究が1編であった.このことから今後は，有効的かつ具体的な看護援助に関する研究に取り組む必要性がある． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一.

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　美甘　祥子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
母性看護	出生前診断，高年妊婦

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）母性看護学領域の講義	2017 年 4 月～ 現在	学生の学習意欲を向上させ，理解を深める目的で，視覚的教材や事例を活用し，学生の思考を刺激し，必要な知識や技術・態度が習得できるよう工夫している。
2）助産学領域の講義・演習	2017 年 4 月～ 現在	小グループ学習やロールプレイ演習を取り入れ，学生の主体的な学習を促している。技術演習では，実践を想定した具体的で詳細な事例を示し，知識面や技術面だけではなく，心理面のケアへの学習を促している。
2　作成した教科書，教材 1）生命倫理　教科書	2014 年	「学生と考える生命倫理」の一部を執筆した。
2）助産学実習　実習要項・評価基準・実習記録の作成	2013 年	学生の特徴を踏まえて，臨地実習で有効な学びができるよう実習要項と評価基準，実習記録を作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）厚生労働省看護研修研究センター　看護教員養成課程　修了	2006 年 3 月	
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1　学生と考える生命倫理	共著	2014 年 4 月	ナカニシヤ出版	第 2 部各論　いのちに関する倫理　4 生殖に関する倫理を担当した。 ◎金子章道，金内雅夫，河野由美，他 12 名．美甘祥子（pp34-46）
（学術論文） 1　妊婦と夫への出生前診断の認知度に関する調査	共著	2018 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究，5，pp27-34.	妊婦と夫の出生前診断の認知度と情報源を明らかにし，意思決定の際の援助への示唆を得ることを目的とし調査をおこなった。 ◎美甘祥子，中塚幹也

2　NIPT 受検時の心理カウンセリングに対する妊婦の意識調査	共著	2017 年 5 月	インターナショナル NursingCareResearch, 16（2），pp1-9.	NIPT を受検する際の心理カウンセリングの希望とその時期を明らかにし，必要な援助の示唆を得ることを目的に調査をおこなった。 ◎美甘祥子，中塚幹也
3　日本人妊婦における障がいを持つ子どもへの意識と非侵襲的出生前遺伝学的検査（NIPT）への意識との比較	共著	2016 年 7 月	母性衛生，57（2），pp 323-331.	NIPT への意識と障がいを持つ子どもへの意識との関連を検討することを目的に調査をおこなった。 ◎美甘祥子，中塚幹也
4　Knowledge and with regard to non-invasive testing among pregnant women	共著	2016 年 6 月	Acta Medica Okayama, 69(3), pp155-163.	NIPT に関してどのような知識や意識を持っているかを明らかにすることを目的に調査をおこなった。 ◎Mikamo S.，Nakatsuka M.
5　妊娠前の 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせに関する知識，価値観の実態　やせ体型群と普通体型群の比較	共著	2013 年 1 月	母性衛生，53（4），pp 522-529.	BMI18.5 未満の妊娠前の 20～30 歳代就労女性の食習慣と，やせに関する知識，食事および健康に関する価値観の実態を明らかにすることを目的に調査をおこなった。 ◎美甘祥子，町浦美智子，佐保美奈子
（その他） 1　妊婦と夫への出生前診断に関しての認知度と知識の実態調査	単著	2018 年 3 月	第 32 回日本助産学会学術集会（於：横浜）	一般の医療機関で妊婦健診を受けるローリスク妊婦と夫の出生前診断の認知度と情報源を明らかにし，出生前診断を受けるか否かの意思決定の際の援助への示唆を得ることを目的とし調査した。 ◎美甘祥子
2　妊婦の無痛分娩に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	2017 年 12 月	第 37 回日本看護科学学会（於：仙台）	ソーシャルメディア上で発言された内容を分析し，無痛分娩に関する妊婦の情報ニーズを明らかにすることを目的に分析をおこなった。 ◎美甘祥子，井田歩美
3　高年妊婦の出生前診断に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	2017 年 3 月	第 31 回日本助産学会学術集会（於：徳島）	高年妊婦が，ソーシャルメディアを利用して出生前診断に関して発言した内容を分析し，高年妊婦の出生前診断に関する関心やその内容を明らかにすることを目的に分析をおこなった。 ◎美甘祥子，井田歩美
4　母体血を用いた新しい出生前遺伝学的検査に対する妊婦の意識調査	共著	2013 年 10 月	第 54 回日本母性衛生学会学術集会（於：大宮）	妊婦が NIPT に関してどのような知識や考えを持っているかを明らかにし，必要な援助の示唆を得ることを目的に調査をおこなった。 ◎美甘祥子，片岡久美恵，中塚幹也
5　BMI やせの 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせと葉酸に関する知識，価値観の実態	共著	2011 年 10 月	第 13 回日本母性看護学会学術集会（於：宇都宮）	BMI やせの妊娠前 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせと葉酸に関する知識，食事に対する価値観，自身の健康や次世代の健康に関する価値観の実態を明らかにすることを目的に調査した。 ◎美甘祥子，町浦美智子

教　育　研　究　業　績　書

平成 30 年 3 月 31 日

氏名　　北島　洋子

研　究　分　野	研究内容のキーワード

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
1）グループディスカッション、ブレインストーミング、マインドマップを活用した思考過程の開発支援	平成 24 年 4 月～平成 24 年 7 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1 年次配当、30 時間 2 単位のうち 6 時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程は問題解決型思考を看護に応用したものであり、クリティカルシンキングを基盤としている。対象学生は 1 年次生であり、看護の初学者の思考回路を刺激し看護専門職としての考え方を開発する必要がある。まずブレインストーミングを活用し批判非難の無い環境で自由にテーマに関する意見を述べあう機会を提供した。これによりグループワークを通して今日のチーム医療に求められる協働する力の素地が培われた。また、与えられたテーマについてマインドマップを活用し思考を深める作業を行い、学生は自己の内面に気づくことができ充実した学びとなったとの声が聞かれた。
2）グループディスカッション、ディベートを活用した倫理的意思決定の思考過程の開発支援、および授業アンケート、フィードバックの活用	平成 24 年 10 月～平成 24 年 12 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4 年次配当、30 時間(1 単位)のうち 10 時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。看護倫理の学習を通して学生は看護専門職としての自己のあり方を考え、様々な倫理的意思決定の支援を行えるようになる必要がある。グループディスカッションやディベートはメンバーの多様な考えに触れ価値の多様性を学習する好機となり、多様性に触れることで自己への気づきも促進された。グループで倫理的意思決定のプロセスを緻密に踏み思考を深め、倫理原則に従った判断をする基礎を身につけることができた。毎時ごとの授業アンケート、フィードバックを活用し次回の講義に反映することで、学生の理解度を確認しながら授業を進め、学生のつまずいているところに戻った指導を行い、学生の理解を深めることができた。

事　　項	年月日	概　　要
3）PBL(Problem Based Learning)チュートリアルを活用した自己主導型学習の支援	平成 24 年6月～平成 24 年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「コミュニティヘルスケア実習」(1年次配当、1単位)は1年次生の初回の実習であり、学生が地域に赴きコミュニティで生活する人々の健康問題について考察する実習である。実習指導においては、情報収集、問題抽出、対応策の検討等を学生主体で行い、教員はチューターとしてアドバイスを行った。学生は高校でこのような学習を行ったことがなく、大学生らしい学習方法だとの感想を述べ、どの学生もいきいきと積極的に実習に取り組んだ。また、実習後の学習成果の発表会でも有意義な学びが多数報告された。
4）PBL(Problem Based Learning)チュートリアル、ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成 24 年5月～平成 24 年6月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「総合実習」(4年次配当4単位)は、4年次生のこれまでの学習を統合し将来の看護専門職としての活動につなげるという目的がある。したがって実践に近い形の実習となり、より一層学生の自律性が求められる。ポートフォリオを活用し日々自己の目標を明確にしたことにより、学生は目的的に学習を行い、最終的に自己の変化を実感することができた。実習開始前にアンドラゴジーに関する講義を組み込み本実習は自己主導型を標榜することを示した。学生の学習姿勢は4年生であっても受動的な学生がほとんどであったが、4週間の実習を終了するころには個人差はあるものの能動的な実習を行い学習成果をあげることが可能となった。PBLの活用により、クリティカルシンキング、問題解決型の思考を磨くことができた。
5）ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成 26 年7月～平成 29 年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の早期体験演習、1年次配当（1単位）において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生は初めて臨地に赴き医療の現場に触れるため、看護の学習者としての準備性を高め、主体的な学習態度を身につける必要がある。事前の学習課題としてマナー、コミュニケーション方法を学び、実習中はポートフォリオにより省察的姿勢を養うように工夫した。
6）反転授業を取り入れた看護技術演習の工夫	平成 26 年9月～平成 30 年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護技術演習Ⅰ、1年次配当60時間（2単位）のうち清潔の援助16時間を担当した。学生には穴埋め型のドリル形式の事前学習課題のプリントを配布し、テキストを参考に清潔の援助に関する基礎知識を習得した上で講義に臨むよう指導した。講義では事前に習得した基礎知識を活用しグループワークで演習計画書を作成し、実習室における技術演習の準備性を高めることを目指した。学生からは主体的に事前学習課題を行うことにより知識の記憶に効果的であったとの評価を得た。

事　　項	年月日	概　　要
7）ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成 26 年 7 月～平成 30 年 2 月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護学実習Ⅰ、1 年次配当（1 単位）において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生にとっては早期体験演習に続き 2 回めの臨地実習であるが、半年以上期間が開いているため、実習における主体的な学習姿勢を改めて意識付けることが必要となる。そこで、ポートフォリオを活用し自己の目標設定や目標達成を自己管理し、学生が自分の成長を確認しながら実習できるよう工夫した。
2　作成した教科書，教材		
1）講義用補助教材	平成 24 年 4 月～平成 24 年 7 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1 年次配当、30 時間 2 単位のうち 6 時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程の展開のための事例を複数例作成し、事例展開に活用した。また、事例展開のプロセスを詳細にパワーポイントで示し、学生の理解がスムーズになった。
2）講義用補助教材	平成 24 年 10 月～平成 25 年 3 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4 年次配当、30 時間(1 単位)のうち 11 時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。倫理的意思決定の練習のための事例を複数例作成した。事例の登場人物の背景や状況を詳細に加えることで、学生の状況理解が深まり、文脈を読み解く能力が高まった。
3）講義用補助教材	平成 26 年 4 月～	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護技術演習Ⅰ、1 年次配当（2 単位）、および基礎看護技術演習Ⅱ、2 年次配当（2 単位）における、エビデンスに基づく基礎看護技術と主体的学習態度の習得を目的とした事前学習課題の工夫と改善により、学生間のディスカッションの活発化、有意義な学びの共有が可能となった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）兵庫県立大学看護学部教員評価委員会による、平成 23 年度教員活動報告書、平成 23 年度の目標に対する成果・実績、平成 23 年度領域別評価表、平成 24 年度目標設定に基づく評価	平成 24 年 9 月 27 日	総合評価として、科目群の一部分担していること、他領域などへの支援も積極的にしていることを評価された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 1）兵庫県立大学看護学部における教育実績	平成 24 年 4 月～平成 24 年 7 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1 年次配当、30 時間 2 単位のうち 6 時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。
2）兵庫県立大学看護学部における教育実績	平成 24 年 10 月～平成 25 年 3 月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4 年次配当、30 時間(1 単位)のうち 11 時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。

事　　項	年月日	概　　要
3）奈良県立医科大学医学部看護学科における教育実績	平成 25 年 4 月～平成 25 年 9 月	基礎看護技術Ⅱ、基礎看護学実習、　基礎看護学実習Ⅱ、老年看護学実習を担当した。
4）千里金蘭大学看護学部看護学科における教育実績	平成 25 年 11 月	小児看護学実習を担当した。
5）大阪府立大学地域保健学域看護学類における教育実績	平成 25 年 10 月～平成 26 年 3 月	生活支援論、生活支援看護学実習を担当した。
6）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成 26 年 4 月～	早期体験演習、基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱ、基礎看護技術演習Ⅰ、基礎看護技術演習Ⅱ、基礎看護技術演習Ⅲを担当し、現在に至る。
7）藍野大学　大学院看護学研究科における教育実績	平成 29 年 10 月～	看護教育論を担当し、現在に至る。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許(第 597138 号)	昭和 62	
2）日本心理学会　認定心理士(第 17799 号)	平成 18	
3）日本選択理論心理学会　准選択理論心理士(第 23 号)	平成 18	
4）修士（看護学）	平成 21 年 3 月	大阪府立大学大学院　第６６号 修士論文題名「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と関連要因」
5）博士（看護学）	平成 28 年 9 月	大阪府立大学大学院　第３２号 博士論文題名「新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響」
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）兵庫県立大学看護学部　実習調整委員会	平成 22 年 4 月	実習調整委員として、学生の実習環境の調整、実習教育セミナーの企画運営にあたった。
2）兵庫県立大学看護学部　生涯学習委員会	平成 23 年 4 月	生涯学習委員として、社会貢献の一環として公開講座の企画運営にあたった。
3）兵庫県立大学看護学部　入試委員会	平成 24 年 4 月	入試委員として、入試関連データの入力業務等に携わった。
4）科学研究費助成金（基盤研究Ｃ）課題番号２５４６３３３３	平成 25 年 4 月	研究代表者として、研究題名「新人期看護師の社会人基礎力と関連要因の検討」科学研究費助成金を獲得し研究遂行し、現在に至る。

事項	年月日	概　　要
5）奈良学園大学　社会連携センター運営委員会	平成 26 年 4 月	社会連携センター運営委員として、社会連携推進の企画、運営に携わった(平成 28 年 3 月まで)。
6）奈良学園大学保健医療学部看護学科　実習部会	平成 26 年 4 月	実習部会の委員として、実習要綱作成、実習要項作成、その他実習関連業務に携わった(平成 28 年 3 月まで)。
7）奈良学園大学保健医療学部看護学科　教務部会	平成 26 年 9 月	教務部会の委員として、業務等に携わった(平成 28 年 3 月まで)。
8）奈良学園大学保健医療学部看護学科　学生部会	平成 28 年 4 月	学生部会の委員として、業務等に携わった(平成 29 年 3 月まで)。
9）奈良学園大学　人権教育研究推進委員会	平成 28 年 4 月	人権教育研究推進委員会の委員として、業務等に携わった(平成 30 年 3 月まで)。
10）奈良学園大学保健医療学部看護学科　実習部会	平成 29 年 4 月	学生部会の委員として、業務等に携わり、現在に至る。
11）奈良学園大学保健医療学部看護学科　学生生活部会	平成 30 年 4 月	学生部会の学年主担当（1 年生）として、業務等に携わり、現在に至る。
12）奈良学園大学　図書館運営委員会	平成 30 年 5 月	図書館運営委員会の委員として、業務等に携わり、現在に至る。
1）兵庫県立大学看護学部　実習調整委員会	平成 22 年 4 月	実習調整委員として、学生の実習環境の調整、実習教育セミナーの企画運営にあたった。
4　その他 1）論文の引用実績　学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 24 年	坂下玲子(2012).研究モデルの提案.看護研究,45(7),679-685.において引用。
2）論文の引用実績　学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 25 年	坂下玲子,北島洋子,西平倫子,宮芝智子,西谷美保,太尾元美(2013).中・大規模病院における看護研究に関する全国調査.日本看護科学学会誌,33(1),91-97.において引用。
3）論文の引用実績　学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 26 年	井上知美,中野宏恵,東知宏,池原弘展,坂下玲子,川崎優子,岡田彩子,山村文子,森舞子,太尾元美,谷田恵子,森本美智子,内布敦子(2014).看護研究における臨床看護師が抱える困難.兵庫県立大学看護学部紀要,,23-35.において引用。
4）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 27 年	糸嶺一郎,高山裕子,山本貴子,松浦利江子,鈴木英子(2015).新卒看護師の社会人基礎力に関する尺度の妥当性と信頼性の検討.日本保健福祉学会誌,22(1),23-32.において引用。
5）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 27 年	市原裕美子(2015).看護学生の実習前後における社会人基礎力の自己評価.八戸学院短期大学研究紀要,(41).39-49.において引用。
6）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係」の引用	平成 27 年	中村真理子,山﨑不二子,吉武美佐子,前田三枝子(2015).A 看護大学卒業生の看護技術および社会人基礎力修得の現状と課題.福岡女学院看護大学紀要,5,1-8.において引用。

事項	年月日	概　　要
7）論文の引用実績　学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 27 年	池原弘展, 永山博美, 井上知美, 中野宏恵, 山村文子, 森舞子, 東知宏, 森本美智子, 小西美和子, 谷田恵子, 岡田彩子, 川崎優子, 坂下 玲子, 内布敦子(2015). 臨床看護研究の質向上を目指したオーダーメイド型支援の評価. 兵庫県立看護大学紀要, 22, 107-116. において引用。
8）論文の引用実績　学術論文「学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題」の引用	平成 28 年	戸ヶ里泰典, 米倉佑貴, 井出訓(2016). 放送大学の保健・看護系の修士課程大学院生における統計解析の学習― 院生のニーズ調査と学習プログラムの構築の試み. 放送大学研究年報, 33, 11-25. において引用。
9）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 28 年	廣川佳子, 大嶋玲未, 宮崎弦太, 芳賀繁(2016). 大学生の社会人基礎力における因子不変性の検討. 立教大学心理学研究, 58, 1-11. において引用。
10）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 29 年	大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子(2017). 大学病院に勤務する看護師の社会人基礎力に関連する要因の分析. 21(2), 87-97. におい
11）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力及び自己教育力と自己調整学習方略との関係」の引用	平成 29 年	大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子(2017). 大学病院に勤務する看護師の社会人基礎力に関連する要因の分析. 21(2), 87-97. におい
12）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係」の引用	平成 29 年	大岡裕子, 吉永純子, 鈴木英子(2017). 大学病院に勤務する看護師の社会人基礎力に関連する要因の分析. 21(2), 87-97. において引用。
13）論文の引用実績　学術論文「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」の引用	平成 30 年	市原裕美子(2018). 看護学生の社会人基礎力の学年別自己評価と変化. 八戸学院大学紀要第, 56, 161-166. において引用。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 出題傾向がみえる「基礎看護学　2018 年度版」	共著	平成 29 年 10 月	ピラールプレス	北島洋子，丸上輝剛，瀬山由美子，澤田京子，平野加代子．中馬成子　編集，守本とも子　監修 Ｂ５版　全 160 頁　(3. 看護における基本技術 B. 学習支援、4. 基本的日常生活援助技術 F. 清潔と衣生活、5. 診療に伴う看護技術 A. 呼吸・循環・体温調節、C. 与薬、D. 輸液・輸血管理　約 24 頁)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
(学術論文) 1）看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 （修士論文）	単著	平成 22 年 3 月	大阪府立大学大学院	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人基礎力と関連要因との関係を明らかにし、現状を把握する目的で、看護系大学生 1043 名に質問紙調査を実施した。社会人基礎力の構成要素は共分散構造分析による確認的因子分析と多母集団分析により、3 分類 12能力要素から構成されるひとつのまとまりある概念であることが示された。社会人基礎力の関連要因は Spearman の相関係数、Mann-Whitney の U 検定、多重ロジスティック回帰分析による検討を行った。社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関関係にあった。社会人基礎力の 3 分類すべてに対し影響していたのは看護実践力の「自己の学習課題の解決に向けた取り組みをしている」と、日常生活経験の「授業時間以外に自己学習する」であった。 A4 判　全 68 頁
2）看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討 （査読付）	共著	平成 23 年 3 月	大阪府立大学紀要第 17(1)	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、属性による相違の検討を目的に看護系大学 8 施設の 1 年次と 4 年次の学生 1043 名を対象に、社会人基礎力を問う 36 項目の質問紙調査を実施した。社会人基礎力の構成要素は経済産業省の定義に基づく構造のまとまりある一つの概念であることが示された。学年別と性別の多母集団同時分析において、このモデル構成は学年および性別による母集団の相違に対応していることが示された。社会人基礎力合計得点は Mann-Whitney の U 検定において、社会人未経験者より経験者、1 年次生より 4 年次生、女子学生より男子学生が有意に高値を示した。看護学基礎教育における社会人基礎力の伸長の可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
3）学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題 （査読付）	共著	平成 24 年 3 月	兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要，19，1-15	臨床看護職による学会誌掲載論文の現状を把握し、EBP の推進に寄与できる看護研究の実践に向け課題を明らかにする目的で論文 1545 編の記述内容を検討した。質的研究のうち事例研究は Research Question が明確でない文献が多かった。実態調査・量的記述的研究のほとんどは標本の代表性に関する記述がなく、便宜的サンプリングが実施されていた。臨床看護職による研究は看護のエビデンスの構築に充分寄与していないことが示唆され、緻密な研究のプロセスを踏む必要があると考えられた。 本人担当部分：データ整理、論文執筆 共著者：北島洋子，西平倫子，西谷美保，太尾元美，宮芝智子，坂下玲子，
4)Critique 看護学生の看護の認識:4 学年群についての記述的研究	共著	平成 24 年　6 月	インターナショナルナーシングレビュー， 135(4),23-27	原文：Safadi RR，Saleh MY，Nassar OS，Amre HM，Froelicher ES(2011):Nursing students' perceptions of nursing: a descriptive study of four cohorts.Int Nurs Rev. ；58(4):420-7.上記論文のクリティークを実施し解説した。本研究のサンプリング方法や倫理的配慮、データ分析方法にいくつかの疑問点はあるが、本研究の結果は、学生の看護の認識の発達に応じたカリキュラムを設計する際の基礎的資料となり、個人特性により看護の認識が異なる傾向があることを念頭に置いて、個々の学生への学習支援のあり方を考える、という意味において本研究結果は有用と考えられた。本人担当部分：対象論文の分析、クリティークと論文の執筆を行った。共著者：北島洋子，坂下玲子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
5）看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 （査読付）	共著	平成 24 年 7 月	日本看護学教育学会誌，22(1)，1-12	看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係を明らかにする目的で、看護系大学 4 年次生に質問紙調査を実施し、看護学基礎教育において社会人基礎力は看護実践力と相互作用的な関係にあり、看護学基礎教育による伸長の可能性が示唆された。日常生活経験における多様な人々との関わり、相互作用的な教授－学習活動、授業外学習を取り入れた授業設計が社会人基礎力の伸長に効果的と考えられた。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
6）臨床から発表される論文の検討	単著	平成 24 年 12 月	看護研究，45(7)，649-658,医学書院	臨床において看護職によって行なわれている看護研究は看護学の知の創造に結びついているのか、またどのようにすれば知の創造に結びつけていけるのかをテーマに、臨床の看護職が学会誌に投稿し掲載されている論文から臨床における看護研究の現状を明らかにし、課題を分析した。さらに臨床から発表される論文が一層価値あるものとなるために、臨床の看護研究に比較的多く見られる課題をとりあげ、ケースごとに研究方法や取り組み方に関する改善のヒントを示し、新たな知の創造に向けた臨床の看護研究の具体的なあり方について考察した。
7）看護系大学生の社会人基礎力及び自己教育力と自己調整学習方略との関係（査読付）	単著	平成 25 年　2 月	医学と生物学，157(2),222-228	看護系大学生の社会人基礎力と自己教育力に影響する自己調整学習方略を明らかにし、看護学基礎教育への示唆を得ることを目的に、質問紙調査を実施した。学生の社会人基礎力と自己教育力は、自己調整学習方略を多く使用するほど高くなり、特にモニタリング方略の使用は効果的と考えられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8）中・大規模病院における看護研究に関する全国調査（査読付）	共著	平成 25 年　3 月	看護科学会誌，33(1)，91-97	臨床の看護職に適した看護研究のあり方を検討するため、臨床の看護研究の現状を明らかにする目的で質問紙調査を実施し、データ分析や研究法の知識・技術に関する臨床のニーズに対し、組織外のリソースを活用した研究支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：データの整理、分析、論文とりまとめを行った。 共著者：坂下玲子，北島洋子，宮芝智子，西平倫子，西谷美保，太尾元美
9）新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響（博士論文）	単著	平成 28 年　9 月	大阪府立大学大学院	新人看護師の職場適応尺度を開発し、社会人基礎力が職場適応に与える影響について明らかにすることを目的に、①新人看護師の職場適応の質的帰納的研究により半構成的面接法を用いてデータを収集しアイテムプールを作成した。②新人看護師の職場適応尺度項目の表面妥当性・内容妥当性の検討実施し、尺度項目を洗練した。③新人看護師の職場適応尺度項目の内容妥当性指数を用いた検討を実施し、職場適応行動 82 項目と職場適応状態 51 項目を内容妥当性を有する項目として採択した。④新人看護師の職場適応尺度の信頼性・妥当性の検討実施し、職場適応行動尺度は 5 因子 34 項目、職場適応状態尺度は 4 因子 26 項目が抽出され、信頼性と妥当性が確認された。⑤社会人基礎力尺度の新人看護師への適用可能性の検証を実施し、社会人基礎力尺度は新人看護師への適用可能と考えられた。⑥新人看護師の社会人基礎力が職場適応に与える影響の検討を実施し、共分散構造分析により社会人基礎力から職場適応への影響を確認しモデル適合度は良好であった。社会人基礎力は職場適応に影響を与えることが確認され、新人看護師の円滑なトランジションに資する能力のひとつとして、社会人基礎力を伸長させることは効果的であることが示唆された。A4 版　全 244 頁。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
10）アクティブ・ラーニングの手法による思考力・判断力の高め方	単著	平成 29 年 4 月	看護人材育成，14(1)，70-5	アクティブ・ラーニングの手法による思考力・判断力の高め方について、(1) 看護学生を取り巻く環境と生活体験 、基礎力の変化・現場、臨床でのニーズとの解離 (2) アクティブ・ラーニングの主な目的と効果・主体的な学修態度の育成・クリティカルな思考力・思考力・思考力・判断力の育成 (3) 学生の問題発見 （自己の課題 ）と目標設定の明確化を支援するプロセス・ラウンドロビン等を活用した実際の授業構成と支援例 (4) アクティブ・ラーニングの注意点の 4 つの視点から実例を交えた解説を記述した。
11）新人看護師の社会人基礎力と関連要因の検討	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要,7,35-44	社会人基礎力尺度の新人看護師への適用可能性を検証し、新人看護師の社会人基礎力に関連する要因を明らかにする事を目的に、新人看護師 473 名に質問紙調査を実施し、回収率 32.6%、分析対象 131 名。社会人基礎力と看護実践力は有意な相関関係にあり、多重ロジスティック回帰分析により新人看護師の社会人基礎力は学生時代の日常生活経験の影響を受けていた。社会人基礎力尺度はアセスメント指標として使用するにあたり、看護系大学生にも新人看護師にも適用可能と考える。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学会発表） 1）看護系大学生の社会人基礎力の構成要素	ー	平成 22 年 8 月	第 20 回日本看護学教育学会学術集会（大阪）	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人経験の有無、学年、性別による社会人基礎力の相違についての検討を目的に、質問紙調査を実施し、看護系大学生の社会人基礎力は、企業の管理者と若手就労者による実践的知見に裏付けられたモデル構成と良好な適合度により、まとまりのあるひとつの概念であり、社会人基礎力は就労経験や学年の進行に伴い伸長すると考えられた。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
2）看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係	ー	平成 22 年 8 月	第 36 回日本看護研究学会学術集会（岡山）	看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係を明らかにする目的で、質問紙調査を実施し、社会人基礎力と看護実践力は相互作用的な関係で伸長し、看護学基礎教育において看護学を学習していくことは、同時に社会人基礎力を身につけていくことにも寄与していると考えられた。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
3）院内看護研究の実施状況に関する全国実態調査	ー	平成 22 年 12 月	第 30 回日本看護科学学会学術集会（北海道）	100 床以上の病院の看護部が行っている看護研究の実態を明らかにする目的で質問紙調査を実施した。臨床看護職による研究は学問領域で考えられている新しい看護知識の提示をめざした研究とは異なり、教育の側面が強いことが明らかになった。今後臨床で看護研究という言葉で表現されている活動の目的や内容をさらに明確にし、臨床看護職が取り組む看護研究の意義について検討する必要があることが考えられた。 本人担当部分：データ整理 共著者：坂下玲子，宮芝智子，高谷嘉枝，北島洋子，若村智子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
4）看護系大学生の社会人基礎力と日常生活経験の関係	ー	平成 23 年 3 月	第 21 回日本医学看護学教育学会学術学会（出雲）	看護系大学生の社会人基礎力に関連する日常生活経験を明らかにする目的で質問紙調査を行い、看護系大学生の社会人基礎力の育成にあたり、ロールプレイやディスカッション、グループワークを組み込んだ教授－学習活動、課外学習を取り入れたインストラクショナル・デザイン等が効果的であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子、星和美
5）新人看護師の職場適応行動	ー	平成 26 年 12 月	第 34 回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	新人看護師の職場適応について、適応行動の側面から質的帰納的に明らかにする目的で半構成的面接法によりインタビューを実施し、質的記帰納的に分析した。Piaget の説明する適応と同様に、新人看護師は、新規参入した職場において新たな行為や思考を取り入れたり、自己のそれまでの考え方を変容させたりして職場に適応する行動をとっていることが明らかになった。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。
6）高齢者のための認知機能低下予防教室「脳いきいき教室」への継続参加の評価	ー	平成 26 年 12 月	第 34 回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	認知機能低下予防教室への継続参加による認知機能への効果を明らかにする目的で 65 歳以上の認知症がなく自力歩行が可能な高齢者 164 名 MMSE とファイブ・コグを用いた調査を実施し、８年間の取り組みである「脳いきいき教室」への継続参加による認知機能の評価を行なった。継続参加の効果が示されたことは、高齢者の認知機能が訓練により維持・改善できる可能性が示唆された。 本人担当部分：教育プログラムの実施、データ収集、データ整理 共著者：中村裕美子、深山華織、北島洋子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
7）新人看護師の認識する職場適応状態	ー	平成 27 年 3 月	第 25 回日本医学看護学教育学会学術学会（出雲）	新人看護師の職場適応状態について質的帰納的に明らかにする目的で、2 年目の看護師 16 名を対象に半構成的にインタビューを実施し質的帰納的に分析した。本調査の結果は新人看護師自身の認識によるものであり、新人看護師の職場適応の自己評価尺度として活用可能なデータと考えられる。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
8）新人看護師における社会人基礎力の関連要因の検討	ー	平成 27 年 8 月	日本看護研究学会第 41 回学術集会	新人看護師における社会人基礎力の関連要因を明らかにすることを目的とし質問紙調査を実施し、社会人基礎力尺度は内的整合性が認められ、新人看護師を対象としても信頼性のある尺度と考えられた。社会人基礎力は看護実践力と相互作用的に伸長していく。学生時代の日常生活経験は新人看護師の社会人基礎力に影響を与え、職場で多様な人々と協働する上で必要な力を養うには、学生時代に色々な経験を積み、主体的に学習することが大切であることが示された。 科学研究費助成事業（研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
9) Assessing content validity of the workplace adaptation scale for new graduate nurses. (新人看護師の職場適応尺度の内容妥当性の検討)	ー	平成 28 年 3 月	19th East Asian Forum of Nursing Scholars.	新卒看護師の職場適応尺度項目の項目妥当性を評価する目的で看護教育研究者を対象に郵送法による質問紙調査を実施し I-CVI を分析した。全体で 19 項目の妥当性が低いと判断されたため質問項目から削除した。最終的に看護師の職場適応尺度は、職場適応行動は 82 項目、職場適応状態は 51 項目に構成された。今後は尺度の十分な信頼性と有効性を確保するために、尺度項目をさらに精錬させていく必用がある。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表
10) 新人看護師の職場適応行動尺度の信頼性・妥当性の検討.	ー	平成 28 年 8 月	日本看護研究学会第 42 回学術集会（筑波）	新人看護師の職場適応行動をアセスメントする「職場適応行動尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を確認するため、質問紙調査を実施した。新人看護師の職場適応行動尺度は、内的一貫性、基準関連妥当性、安定性が確認され、職場適応行動尺度は新人看護師の職場適応行動を測定するにあたり有用性のある尺度と考えられた。 科学研究費助成事業（研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11）新人看護師の職場適応状態尺度の信頼性・妥当性の検討.	ー	平成 28 年 8 月	日本看護学教育学会第 26 回学術集会（東京）	新人看護師の職場適応状態をアセスメントする「職場適応状態尺度」を作成し、その信頼性と妥当性を検討する目的で質問紙調査を実施した。職場適応状態尺度の 4 因子 26 項目は内的一貫性および安定性を有することが確認された。職場適応状態尺度と職務満足測定尺度の相関係数から、職場適応状態尺度の基準関連妥当性が確認された。職場適応状態尺度は新人看護師の職場適応の状態を測定するにあたって活用可能であり有用な尺度が作成された。 科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
12）The Effects of New Nurses’ Fundamental Competencies for Working Persons on Workplace Adaptation（社会人基礎力が職場適応に与える影響）	ー	平成 29 年 3 月	20th East Asian Forum of Nursing Scholars.	新人看護師の職場適応に及ぼす社会人基礎力の影響を明らかにすることを目的に、1,964 人の新人看護師に質問紙調査を実施した。調査票は社会人基礎力尺度、職場適応行動尺度、職場適応状態尺度、およびから構成された。613 名を分析対象とし、本研究の概念枠組に基づく多重指標モデルを作成し共分散構造分析を実施した。社会人基礎力の職場適応へのパス係数は 0.77 であり、決定係数は 0.59 であった。モデルの適合度指数は、GFI = 0.990、AGFI = 0.962、CFI = 0.993、および RMSEA = 0.070 であった。社会人基礎力が職場適応に影響することが確認された。 科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
13）看護過程演習における社会人基礎力の変化と学習効果	一	平成 30 年 3 月	日本医学看護学教育学会（広島）	演習用電子カルテを活用した看護課程演習における、グループワークの活用による社会人基礎力の変化と看護過程の教育効果を明らかにすることを目的に、質問紙調査を実施した。第 1 回と第 2 回の照合が可能であった 12 名を分析対象とし、社会人基礎力は第 1 回(中央値 135.5)と第 2 回(中央値 154.0)の間に有意差があることが示され、社会人基礎力と看護過程の理解の相関係数は第 1 回 0.82、第 2 回 0.87 を示し有意な正の相関を認めた。看護過程演習の前後比較において社会人基礎力が伸長されることが明らかとなり、社会人基礎力を伸長させることにより看護過程の理解も促進されることが推察された。 本人担当部分：調査票作成、調査実施、学会発表 共著者：北島洋子、丸上輝剛、瀬山由美子、中馬成子
（その他） 1）看護学の発展に寄与する臨床実践者が取り組む研究モデルの創造	共著	平成 23 年 3 月	21 年度～平成 22 年度科学研究費助成金（挑戦的萌芽）報告書、課題番号２１６５９５０１、課題名「看護学の発展に寄与する臨床実践者が取り組む研究モデルの創造」	実践看護報告、事例介入研究、研究者と連携した多施設共同研究、研究者と連携した Practice-Based Evidence の構築が研究モデルとして提案され、充分な文献検討の必要性、人的資源の確保、臨床での研究支援体制の検討が有意義な研究を展開するために必要であると示された。 本人担当部分：データ整理、文献の整理 共著者：坂下玲子，高谷嘉枝，若村智子，宮芝智子，西平倫子，宇多絵里香，北島洋子，大塚久美子，川口真理子，木村由佳里西，谷美保，

教　育　研　究　業　績　書

平成 30年　 3月 31日

氏名　　井上葉子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	公衆衛生看護学、生活援助、難病

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
基礎看護技術演習Ⅰ　関西学研医療福祉学院 （専任教員）	平成23年4月～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅰ」（1年次配当、1単位、40人クラス）において実践した。看護技術は人間関係の成立が第１要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および日常生活援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
看護研究指導　関西学研医療福祉学院看護学科 （専任教員）	平成23年4月～ 平成24年8月	探求心をもって研究に取り組み自己研鑽に努めることは専門職業人として必要なことである。このことをふまえ、学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科３年生が取り組んだ、実習で担当した患者についてのケーススタディの指導を担当した。学生は研究目的・方法の設定、データの収集・分析の一連の過程を体験し、研究的態度および論理的思考についての学習を深めることができた。
基礎看護技術演習Ⅱ　関西学研医療福祉学院 （専任教員）	平成23年4月～ 平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅱ」（1年次配当、1単位、40人クラス）において実践した。看護技術は人間関係の成立が第１要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および診療の補助に関する援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
在宅看護論実習　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4月～ 平成26年3月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を行った。
地域看護学Ⅴ　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4月～ 平成26年3月	科目責任者である教授とともに、地域診断演習時の指導、地区踏査の指導を行った。
地域看護学実習　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4月～ 平成26年3月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。
在宅看護概論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論演習　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。
家族看護論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として全てを担当した。

事項	年月日	概要
基礎看護学実習Ⅰ　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～ 平成27年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
基礎看護学実習Ⅱ　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～ 平成27年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。また看護過程については、苦手意識を克服できるよう個々の学習進度を理解した上で指導するように配慮した。
在宅看護論実習　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4月～ 平成27年3月	科目責任者として実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を行った。実習においては、小児から高齢者を対象とする在宅看護を行う中で、対象の年齢や疾患、障害による身体の変化、対象をとりまく環境、社会資源の活用、他職種との連携における看護職の役割について同時に考えられるように指導を行った。対象の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、対象と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患児の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
地域看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤助教）	平成27年10月 ～平成28年3月	科目責任者である非常勤講師と助教1人とともに講義を進めた。井上は3コマを担当し、地域保健活動計画における保健師の役割、地域保健活動の目標と計画の策定、在宅看護のためのシステム・ケアマネジメント、人材管理、健康危機時の管理の内容について教授した。
公衆衛生看護学概論　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、地域保健活動計画における保健師の役割、地域保健活動の目標と計画の策定、在宅看護のためのシステム・ケアマネジメント、人材管理、健康危機時の管理の内容について教授した。
公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は1コマを担当し、職業性疾病の原因と予防・看護（アスベスト、振動障害、感音性難聴、VDT症候群）について講義した。
公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である非常勤講師と教授と講師とともに講義を担当した。井上は1コマを担当し、学校環境衛生について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は3コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4月～ 平成28年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。

事項	年月日	概要
基礎看護学実習Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年9月～ 平成28年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
小児看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年9月～ 平成28年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、重症心身障害児を対象とする看護を行う中で、障害による身体の変化と成長発達の順序性、他者との愛着形成、遊びの意義と必要性について同時に考えられるように指導を行った。また、障がい児をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。患児の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患児と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患児の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
老年看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年9月～ 平成28年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、高齢者を対象とする看護を行う中で、加齢による身体の変化と家族関係と社会的な役割の変化、介護保険制度、福祉サービル利用について同時に考えられるように指導を行った。また、高齢者をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。また人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、高齢者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
成人看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年1月～ 平成29年2月	単位認定者の講師とともに実習指導を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
統合看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4月～ 平成29年6月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、急性期にある複数の患者に対して、援助の優先順位を考え、病棟のケア計画に則った援助計画を立案し、チームの一員として援助を行うよう留意して指導を行った。また、師長やチームリーダー、メンバーのシャドーイングを通して、リーダーシップ、メンバーシップと看護管理の実際を学ぶとともに専門外来の見学を通して他職種との連携の実際と医療チームにおける看護の役割を学ばせた。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4月～ 平成29年10月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。2名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。

事項	年月日	概要
成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年10月～平成30年3月	科目責任者である准教授とともに、看護過程演習の指導を担当した。
成人看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4月～平成30年3月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、来年度の実習調整を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
2　作成した教科書，教材		
住まい学習のデジタル教材「おかあさん　お家の中でもご用心！！―赤ちゃんとの暮らしの中に潜む危険―」	平成23年1月	保健指導の教材の見本として、乳幼児の家庭内での窒息、転落、熱傷、誤飲などの事故防止を保護者に啓発するための教材として、絵本のデジタル教材を作成した。
平成23年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項	平成23年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（２年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
平成23年度基礎看護学実習Ⅱ実習要項	平成23年10月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅱ」（２年次配当）で学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
平成24年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項	平成24年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（２年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
在宅看護論実習の手引き	平成25年8月	宝塚大学看護学部の「在宅看護論実習」（３年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
在宅看護論実習の手引き	平成26年4月	白鳳女子短期大学看護学専攻「在宅看護論実習」（3年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護実習Ⅰ（急性期・周手術期）実習記録用紙ガイドライン	平成29年4月	成人看護学Ⅰ（急性期・周手術期）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護学のデジタル教材：「一次救命（病室編）」、「一次救命（廊下編）」、「段階的離床」	平成29年11月	成人看護学の学内演習・臨地実習時のイメージがつくように、心肺蘇生法、AEDの使用方法、緊急時の協力要請、手術後の段階的離床についてのデジタル教材を作成した。

事項	年月日	概要
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
白鳳女子短期大学FD委員会	平成26年4月～ 平成27年3月	講義最終回において大学が作成した授業アンケートを実施したところ、話の分かりやすさ、授業の内容のわかりやすさ、板書や資料のみやすさ等すべてにおいてわかりやすかったという結果であった。単独での講義実施だったため、自信につながった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
シリンクス株式会社　研究補助員 （非常勤看護師）	平成20年4月～ 平成20年5月	国際電気通信基礎技術研究所において行われていた看護師の業務に関する調査研究のデータ収集・分析作業に従事した。
奈良県　医療政策部　保健予防課　母子・保健対策係　石綿ばく露健康リスク調査担当 （非常勤保健師）	平成24年10月 ～平成25年6月	環境省からの委託で行っている奈良県内の住民に対する石綿ばく露健康リスク調査担当の非常勤保健師として従事し、問診から結果通知、データ管理などの一連の業務を担った。問診では生後から現在までの数十年におよぶ住環境、生活状況、石綿ばく露の状況を本人より聴き取る必要がある。そのため、年代ごとの写真やイラストを用いた媒体を作成し過去の状況を思い起こせるように工夫をし問診を行った。また石綿の製品、石綿ばく露の危険がある状況について写真やイラストを用いた媒体を作成し石綿ばく露健康リスク調査の意義や目的について住民の方に理解していただけるように努めた。
奈良県難病相談支援センター　難病専門相談員 （非常勤保健師）	平成27年4月～ 平成28年3月	奈良県難病相談支援センターの難病相談専門員として、難病患者・家族等の療養生活上の相談業務に従事した。特に、難病患者の就労支援のための相談体制づくりとして、就労相談票の作成、相談内容のデータベースのフォーマット作成、ハローワークの難病患者就職サポーターとの定期的な打ち合わせを行った。また、難病専門医による医療相談の実施、難病患者患者会活動への支援、難病に関する講演会の企画や準備、難病相談支援センターの広報誌の作成にも関わった。さらに、全国難病センター研究会に出席し、奈良県難病相談センターの現状を伝えると共に、他府県の先進的な取り組みについて情報収集し、担当者同士のつながりを作ることに努めた。
奈良県看護協会　平成29年度保健指導ミーティング　ファシリテーター	平成30年2月	日本看護協会による平成29年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、奈良県看護協会保健師職能委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当した。また当日はファシリテーターとして、保健指導ミーティング（事例検討会）参加者の新人保健師の意見が活発にでるように雰囲気作りやきっかけ作りに努め、とても勉強になったとの参加者の感想が聞かれた。
5　その他 なし		

事項	年月日	概要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）看護師免許	平成4年5月13日	
2）養護教諭一種免許	平成6年3月31日	
3）保健師免許	平成6年5月19日	
4）第一種衛生管理者免許	平成6年8月10日	
5）受胎調節実地指導員免許取得	平成8年2月24日	
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
シリンクス株式会社　研究補助員 （非常勤看護師）	平成20年4月～ 平成20年5月	国際電気通信基礎技術研究所において行われていた看護師の業務に関する調査研究のデータ収集・分析作業に従事した。
奈良県　医療政策部　保健予防課　母子・保健対策係　石綿ばく露健康リスク調査担当 （非常勤保健師）	平成24年10月 ～平成25年6月	環境省からの委託で行っている奈良県内の住民に対する石綿ばく露健康リスク調査担当の非常勤保健師として従事し、問診から結果通知、データ管理などの一連の業務を担った。問診では生後から現在までの数十年におよぶ住環境、生活状況、石綿ばく露の状況を本人より聴き取る必要がある。そのため、年代ごとの写真やイラストを用いた媒体を作成し過去の状況を思い起こせるように工夫をし問診を行った。また石綿の製品、石綿ばく露の危険がある状況について写真やイラストを用いた媒体を作成し石綿ばく露健康リスク調査の意義や目的について住民の方に理解していただけるように努めた。
奈良県難病相談支援センター　難病専門相談員 （非常勤保健師）	平成27年4月～ 平成28年3月	奈良県難病相談支援センターの難病相談専門員として、難病患者・家族等の療養生活上の相談業務に従事した。特に、難病患者の就労支援のための相談体制づくりとして、就労相談票の作成、相談内容のデータベースのフォーマット作成、ハローワークの難病患者就職サポーターとの定期的な打ち合わせを行った。また、難病専門医による医療相談の実施、難病患者患者会活動への支援、難病に関する講演会の企画や準備、難病相談支援センターの広報誌の作成にも関わった。さらに、全国難病センター研究会に出席し、奈良県難病相談センターの現状を伝えると共に、他府県の先進的な取り組みについて情報収集し、担当者同士のつながりを作ることに努めた。
奈良県庁	平成27年5月	情報セキュリティ研修　受講
一般社団法人日本家族計画協会	平成27年12月	第17回自己効力感（セルフエフィカシー）を高め主体的な行動変容を支える健康教育セミナー　受講
全国保健師教育機関協議会	平成28年8月	第31回全国保健師教育機関協議会夏季教員研修会受講
全国保健師教育機関協議会	平成28年10月	第5回全国保健師教育機関協議会秋季教員研修会受講
全国保健師教育機関協議会	平成28年10月	平成全国保健師教育機関協議会東海・北陸・近畿ブロック研修会受講
奈良県保健師ネットワーク会議	平成28年11月	平成28年度第4回なんとかせんと保健師ぢから（保健師ネットワーク会議）：講演「地域ケアからみる保健師の役割」、パネルディスカッション「災害支援における保健師の役割～熊本地震の経験を通して～」参加

事項	年月日	概要
日本保健師連絡協議会	平成29年3月	平成28年度活動報告・集会：報告「母子保健における虐待予防の基軸～寄り添う支援としての健康診査～」への参加
奈良県看護協会	平成30年9月	保健師職能委員会が主催する研修会の企画運営にも携わり、9月30日の研修会「妊産婦のメンタルケアの重要性～チームでの育児支援～」の開催準備や対応を他の委員と共に担当した。
日本看護協会・奈良県看護協会・奈良県	平成30年2月	日本看護協会による平成29年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、奈良県看護協会保健師職能委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当した。また当日はファシリテーターとして、保健指導ミーティング（事例検討会）を務めた。
4　その他 特記事項なし		

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 2018年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる在宅看護論	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験科目の「在宅看護論」について、看護師国家試験出題基準の中項目に基づいた要点編と過去問題編 の２部構成とし、過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 担当部分：目標Ⅰ 在宅における安全と健康危機管理p22-p24、目標Ⅱ4在宅療養生活を支える看護（食事・栄養、排泄、清潔、移動）p35-p37、目標Ⅲ6在宅療養において特徴的な疾病がある療養者への看護（小児、難病）p42,p45、7在宅における医療管理を必要とする人と看護（膀胱留置カテーテル、褥瘡管理)p48,p51-p52 守本とも子監修、安藤邑惠編著、川口ちづる、井上葉子
（学術論文） １.生活経験からみた看護専門学校学生の看護技術力に関する研究	共著	平成26年３月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 ３年課程の看護専門学校４校の１年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、生活経験の自己評価結果と１年で学習する４つの基礎看護技術の実技調査結果との対応関係を検討した。第51巻，P.33～P.41
２．在宅看護論における生活経験の重要性を再認識するための授業実践 ―ワークショップを用いた教育プログラムの検討―	単著	平成27年２月	白鳳女子短期大学研究紀要	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象に、生活経験を再認識するための講義とワークショップを組み合わせた授業実践を行い、学生の認識の変化と教育的効果について検討した。第９巻，.47～P.54
３．避難生活体験とポスターセッションを取り入れた学内演習の実践と評価　　―生活環境を主体的に理解することを目指した在宅看護論の授業展開―	共著	平成28年１月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：関谷まり・井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことによる共同学習の効果と課題を検討した。第53巻，P.57～P.67
４．訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について ―実習目標の到達度の比較からの分析―（査読付）	共著	平成28年４月	第46回日本看護学会論文集 看護教育	著者名：西村和子・田村和子・井上葉子・松村あゆみ・北畠昭弥・北出千春 ３年課程の看護専門学校３年生36名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。 P.23～P.26
５．在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第1報】 ―授業振り返りシートの分析から―（査読付）	共著	平成30年2月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」について、授業振り返りシートの記載内容を分析し難病患者の就労支援の内容を看護基礎教育に組み入れたことによる学習の効果を検討した。論文集　P.3～P.6 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：西村和子・井上葉子・松村あゆみ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
６．在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第2報】―クローン病の事例を用いたワークシートの分析から― （査読付）	共著	平成30年2月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	看護専門学校2年生の学生を対象に在宅看護論の授業で『職業生活を支援する看護』のモデル授業での難病患者のクローン病患者の事例ワークシートの分析から学生が難病患者の生活について就労を含めた視点で理解することについての学習効果について検討した。 論文集　P.7～P.10 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：松村あゆみ・井上葉子・西村和子
７．臨地実習における看護学生のストレスと レジリエンスについての実態（査読付）	共著	平成30年2月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	看護専門学校学生２年生を対象に時期の異なる 2つの臨地実習前後で調査した、気分プロ フィール検査（POMS2）とストレス自己統制評定尺度（SSI）の2つの調査結果を基に、学生個別のストレス反応とレジリエンスの状態の変化を把握し、学生個々への適切な介入方法 の必要性について検討した。 論文集　P.75～P.78 担当部分：分析、論文の作成、論文投稿指導に関わった。 共著者：山﨑陸世・平山亜矢子・井上葉子・丸田裕子・髙原 恵・ 後藤 恵・岡田和江・ 葦原佐衣・加納由紀子
８．在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第3報】―闘病記の感想文の分析から―	共著	平成30年３月	奈良学園大学紀要第８集	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」の課題としての、難病患者による就労についての闘病記を読んでの感想文の分析から教材として闘病記を用いたことによる学習の効果を検討した。 P.13～P.19 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて行った。 共著者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・駒井由美子・大谷未来
（その他） １.看護専門学校学生の生活経験からみた看護技術力に関する研究 ―療養上の世話に関する看護技術に着目して― （修士論文）	単著	平成25年１月	大阪教育大学大学院	３年課程の看護専門学校４校の１年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施しその傾向をまとめた。また、看護専門学校１校の１年生を対象に４つの基礎看護技術の習得状況と生活経験の程度についての関係性を検討した。さらに、３年課程の看護専門学校１年生を対象に、生活経験を補完するためのワークショップを用いた授業を試行し、その教育効果についても論じた。 A4判　全102貢
（学会発表） １.地域看護学実習における学生の看護の視点の広がりに関する検討 ―在宅療養者の社会資源活用に関する学びを分析して―	－	平成19年8月	第38回日本看護学会―看護教育― （於　千葉県千葉市）	4年制の統合カリキュラムの専門学校の3年次に行われる在宅看護実習での学生29名の記録を分析することにより、看護の視点を地域レベルで捉えるという実習の教育効果を検討した。 抄録集　P.46

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2.看護学生の生活経験と看護技術力の対応関係	－	平成24年9月	第43回日本看護学会―看護教育―（於　岩手県盛岡市）	３年課程の看護専門学校４校の１年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、１年で学習する４つの基礎看護技術の習得状況との関係性を検討した。 共同発表者：碓田智子・井上葉子 抄録集　P. 36
3.基礎看護学実習におけるフィジカルアセスメント技術の活用の実態	－	平成24年9月	第43回日本看護学会―看護教育―（於　岩手県盛岡市）	３年課程の看護専門学校４校の学生196名を対象に基礎看護学実習でのフィジカルアセスメント技術に関する質問紙調査を実施し、講義と実習との連動を強化した教育プログラムのあり方について検討した。 共同発表者：山﨑陸世・中川利子・田畑典子・中嶌雅子・丸野由美・村川まゆみ・井上葉子 抄録集　P. 85
4.看護学生による災害看護演習の評価に関する考察　―避難生活の看護活動を考える演習について―	－	平成27年8月	第17回日本災害看護学会（於　宮城県仙台市）	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論における避難生活体験を題材とした演習の方法と学習効果についてを検討した。 共同発表者：関谷まり・井上葉子 抄録集　P. 160
5.ポスターセッションを活用した在宅看護論演習の学習展開―「避難生活支援演習」の実践事例―	－	平成27年8月	第46回日本看護学会―看護教育―（於　奈良県）	短期大学看護学専攻学生２年生122名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことの効果と課題を検討した。 共同発表者：関谷まり・井上葉子 抄録集　P. 107
6.訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について―実習目標の到達度の比較からの分析―	－	平成27年8月	第47回日本看護学会―看護教育―（於　奈良県）	３年課程の看護専門学校３年生36名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・田村和子・北畠昭弥・北出千春・井上葉子 抄録集　P. 85
7．看護基礎教育における難病患者の就労支援に関する教員の認識	－	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会総会（於　大阪府）	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての認識を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子　松村あゆみ　内田勇人 抄録集　P. 539
8.看護基礎教育における難病看護に関する教育の実態	－	平成28年12月	第37回奈良県公衆衛生学会（於　奈良県）	看護専門学校教員129名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての教育の実情を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・早味妙・駒井由美子・井上葉子 抄録集　P. 7
9．在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第1報】―学生による授業振り返りシートの分析から―	－	平成29年8月	第48回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	３年課程看護専門学校学生２年生77名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について、授業後の学生による「授業振り返りシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・井上葉子 抄録集　P. 148

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10．在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第2報】―事例ワークシートからみた学習内容の分析―	－	平成29年8月	第48回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	３年課程看護専門学校学生２年生77名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について授業内で用いた教材「事例ワークシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・井上葉子 抄録集　P.149
11.臨地実習における看護学生のストレスとレジリエンスについての実態	－	平成29年8月	第48回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	３年課程看護専門学校学生２年生42名を対象に時期の異なる２つの臨地実習の実習前後で、学生のストレス反応とレジリエンスの状態を調査し、その結果からストレス反応とレジリエンスには個別性があり学生の特性を理解した支援の必要性を示した。 共同発表者：山﨑陸世・平山亜矢子・丸田裕子・高原恵・佐藤則子・定政美香・井上葉子 抄録集　P.114
（学会等への貢献 ） 日本サーモロジー学会学術集会　第33回大会	実行委員			平成28年6月　奈良市で行われた第33回学術集会の実行委員を担った。
第33回日本保健医療行動科学学会学術集会	実行委員			平成30年6月　沖縄県那覇市で行われる第33回学術集会の実行委員と体験ワークショップの講師を担っている。
（公的貢献 ）				
奈良県看護協会　ナースセンター事業推進委員		平成28年4月～平成29年3月		奈良県看護協会ナースセンター推進委員として看護職の復職支援、看護学校ガイダンス、看護職のPR活動に従事した。
奈良県看護協会　保健師職能委員		平成28年4月～現在に至る		奈良県看護協会保健師職能委員として研修会の企画、保健師職のネットワーク作りに活動している。
生駒市立生駒北小中学校育友会　副会長		平成29年4月～現在に至る		生駒市内にある小中一貫校の小学部のPTA役員として活動している
生駒市PTA協議会　理事		平成29年4月～現在に至る		理事として生駒市内の教育について他の理事や役員とともに話し合い、よりよい教育を目指し活動している。

教　育　研　究　業　績　書

平成　30 年　3 月　31 日

氏名　高橋　寿奈

研究分野	研究内容のキーワード
教育学　高齢者の偏見について	看護教育学　基礎看護学　老年看護学　エイジズム

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）講義と演習授業 「基礎看護概論」「基礎看護方法論Ⅰ」 「基礎看護方法論Ⅱ」「基礎看護方法論Ⅳ」 「基礎看護方法論Ⅴ」	平成26年5月～ 平成29年3月	白鳳短期大学の非常勤講師として「基礎看護学概論」の授業の一部を担当した。主に看護の変遷として日本の看護や関係法規の歴史変遷、世界の看護の歴史についての授業とテスト作成をした。 「基礎看護方法論Ⅰ」の授業を担当した。主に、活動と休息、感染予防、滅菌物品の無菌操作、食と排泄、移動と移乗、効率的な動き、の講義を行い、看護の患者が健康に向かうための基本的な考え方や、患者に対する基本的な技術についての講義と、実技演習授業の実施を行った。またそれらについてテスト作成を行った。「基礎看護学方法論Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ」の演習授業全般について実施し、フィジカアセスメント、看護イグザミネーション技術、点滴、投薬、採血、排泄管理包帯法、ポジショニング、創傷管理、罨法の技術について指導と実技テスト教官を行った。
2）学内研究発表会指導	平成28年2月	白鳳短期大学の基礎実習Ⅱでの実習指導教員として担当学生の学内研究発表の指導を行った. 主に、日常生活援助での関わり方による対象高齢者の言動の変化についての気付きについて指導し、学内発表させた。
3）演習授業	平成29年4月～	奈良学園大学保健医療学部看護学科老年看護学の学内授業、演習授業のサポートを行っている。
2　作成した教科書，教材		
なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
なし		
4実務の経験を有する者についての特記事項		
1）実習指導（学外）	平成26年5月～ 平成29年3月	白鳳短期大学非常勤講師として「基礎看護実習学Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」「成人看護学1」「成人看護学Ⅱ」「統合看護学」「精神看護学」「老年看護学」の実習指導を行った。それぞれ要項説明と実習引率指導、実習評価を行った。地域医療機能推進機構大和郡山病院 奈良ッ県立医科大学附属病院、京都山城総合医療センター、浅香山病院、八尾市立病院、平成記念病院などで指導にあたった。
5　その他		
なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許　第684127号	平成2年5月	看護師免許取得から、看護専任教員を目指すまでほぼ休職なく看護師として就労している。
2）次世代教育学学士・厚生労働省専任教員養成課程修了	平成27年3月	大学の学部コースが専任教員養成課程も兼ねており、合わせて取得した。
2　特許等		
1）なし		
3実務の経験を有する者についての特記事項		
1）四天王寺病院・東大阪病院　臨地実習指導者 大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会修了	平成10年5月～ 平成23年9月	2つの病院にわたって、臨地実習指導を行った。 平成19年頃から2年間は、学生の実習指導とともに、新人の臨地実習指導者の指導を行った。 平成22年8月に実習指導講習会（長期）も修了した。
4　その他		

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
2018年看護師国家試験対策出題傾向が見える老年看護学	共著	平成29年10月	ピラールプレス社	全109ページ　主に急性期看護、社会参加、セクシャリティについて執筆した。また合わせて国家試験問題より老年看護学分野についての問題抽出（ｐ72～109）を行った。執筆は、高齢者の周手術期についての特徴、社会参加の動向、セクシャリティについての傾向についてを行った。 監修：守本とも子. 吉村雅世 共著：吉村雅世，田中和奈，高橋寿奈 本人担当部分：P25～33 要点編の高齢者の生活を支える看護の「性（セクシャリティ）」「社会参加」さまざまな健康状態や受療状況に応じた高齢者の看護の「急性期の高齢者への看護」 問題抽出（ｐ72～109）
（学術論文）				
1. 高齢者の健康状態の多様性を理解するための看護教育に関する研究	単著	平成29年3月	大阪教育大学大学院教育学研究科 修士論文要旨集　第17号 平成29年3月	老年看護学での教授における看護学生へのｴｲｼﾞｽﾞﾑの影響ついて調査した。高齢者の特徴について学ぶうちにｴｲｼﾞｽﾞﾑが発生し、それらを改善するための課題を実施しエイジズムの是正の程度とについて、考察した。 全ｐ159　掲載Ｐ135
2. 受け持ち患者とのコミュニケーションにおける看護学生の自己評価老年看護学実習でのアンケート調査よりー	共著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 2017.9　P121～126	ゆとり世代のが看護学生が老年看護学実習で受け持ち患者とのコミュニケーションについての自己評価と実際をアンケート調査を行いゆとり世代のコミュニケーションの特徴や、実際との乖離状態について明らかにした。 共著：高橋寿奈，瀬山由美子 本人担当部分：研究計画、調査、分析、本文全編執筆

教　育　研　究　業　績　書

平成　30年　　3月　　31日

氏名　　田場　真理

研究分野	研究内容のキーワード
臨床看護学(透析看護)	血液透析　終末期　抑うつ　意思決定

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1)「基礎看護技術Ⅱ・Ⅲ」における実践	平成25年4月～ 平成27年3月	関西学研医療福祉学院看護専任教員として、基礎看護技術Ⅱ・Ⅲ（栄養、排泄、活動・休息、創傷、BLS・ALS、エンゼルケア等）についての講義・演習を担当した。
2)「小児看護学援助論」における実践	平成26年9月～ 平成27年3月	関西学研医療福祉学院看護専任教員として、小児看護学援助論についての講義（全15回30時間）・演習（全7回14時間）を担当した。
3)「小児看護学概論・小児看護学援助論」における実践	平成27年4月～ 現在に至る	奈良学園大学助手として、講義・演習の補助としての指導を行った。
4)「基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」における実践	平成29年4月～ 現在に至る	奈良学園大学助手として、主に技術演習の指導を行った。
5)「基礎・成人・老年・小児・統合看護学実習」指導における実践	平成25年4月～ 現在に至る	関西学研医療福祉学院看護専任教員として、基礎・成人・老年・小児・統合看護学実習指導を行った。奈良学園大学助手として、小児・老年・基礎・統合看護学実習の指導に携わっている。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1)認定・日本重症心身障害看護師研修会　看護研究アシスタント講師	平成29年7月～ 現在に至る	近畿地区日本重症心身障害心身障害福祉協会の依頼により認定研修の看護研究アシスタント講師を行っている。
2)奈良県腎不全看護学会 世話人	平成30年4月～ 現在に至る	
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許 看護師免許（第1396705号）	平成19年4月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他 1)奈良県腎友会女性部会での講演	平成28年6月	腎臓病患者会であるNPO法人奈良県腎友会より依頼があり、終末期の維持透析と事前指示書に関する講演を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1.2018年看護師国家試験対策　要点がわかる　出題傾向がみえる小児看護学	共著	平成29年11月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「小児看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、芝田ゆかり、田場真理、瀬山由美子（編著） 本人担当部分：目標Ⅰ「子どもと家族を取り巻く環境」「子どもの成長・発達」「小児各期における健康増進のための子どもと家族への看護」の部分の執筆を担当した。
2.2018年看護師国家試験対策　要点がわかる　出題傾向がみえる成人看護学（下）	共著	平成29年11月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「成人看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平（編著）、大山末美、梶村郁子、田場真理（著） 本人担当部分：「内部環境調節機能障害のある患者の看護」「排尿機能障害のある患者の看護」の部分の執筆を担当した。
（学術論文） 1.終末期透析についての意識と実態調査報告書 □	共著	平成28年3月	NPO法人奈良県腎友会発行雑誌ばんび春号.3-12,2016	外来透析患者とその家族を対象に、終末期透析についての意識と実態を調査した。その結果、意思決定能力のあるうちに、自身の終末期医療について書面で提示 しておきたいと考える患者が約半数、そうしてもらいたいと考える家族は半数いることがわかった。しかしながら、医療者とそういった話し合いの場は、ほとんどもたれていない現状が明らかとなった。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
2.認知症高齢者を介護する娘介護者の体験ー介護生活の中で体験する困難と、介護生活の支えとなるものー（論文）	共著	平成28年9月	奈良学園大学紀要 5：67-79,2016.	認知症高齢者である親の介護経験を有する娘介護者を対象に、介護の中で体験する困難と介護生活の支えとなっているものについて半構成的面接を行った。その結果、娘介護者が体験する困難として《親の現状を受け止める難しさ》など７つのカテゴリーが、介護生活を続ける中で支えになるものとして《変わってゆく親を共有できる存在》など４つのカテゴリーが見いだされた。 共著者：上山智恵子、田場真理、守本とも子 本人担当部分：半構成的面接によるデータ収集および、コーディング、カテゴリー化を行った。
3.外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子の検討　（研究と報告）	単著	平成29年2月	日本医療福祉情報行動学研究 4:25-30,2017.	外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子について、薬物に関する知識や理解度のほか、視力障害や指先の動きなど身体的側面の影響、ストレスなど心理・精神的側面の影響、そして薬物管理に関する家族のサポート状況など社会的側面の影響など軽11項目について検討した。その結果、服薬コンプライアンス不良に至る因子としては、患者の服薬に対する意識の低さが最も影響することが明らかとなった。
4.透析患者の抑うつにソーシャルサポートが与える影響と支援の在り方―医師、看護師、ピアサポートに関する考察―（修士論文）	単著	平成29年3月	放送大学大学院修士論文	透析患者の抑うつに対する効果的な援助について示唆を得るため、ソーシャルサポートとしての医師・看護師・（患者仲間）ピアの援助について検討した。その結果、透析患者の抑うつを軽減させるために効果がある援助とは、身体症状を改善させるための看護師からの保健情報の提供であることが明らかとなった。
（その他） 1.透析室における患者満足度調査～患者の声から現状の問題点と課題について考える～	ー	平成24年2月	奈良県医師会透析部会（奈良県医師会透析部会誌 18:1,92.）	外来透析患者に対し、既存の透析患者用満足度尺度を用いて看護師に対する満足度を測定した。その結果、態度に関する満足度は高かったが、患者自身が疼痛を伴う穿刺技術に関する満足度は低いものであることが明らかとなった。 共同発表者：田場真理、米澤麻理、森村美保 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った

教　育　研　究　業　績　書

平成30年3月31日

氏名　前田 吉樹

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
人間医工学　境界医学　脳科学	疼痛　恐怖条件付け　リハビリテーション

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1)実験形式の授業とレポートの提出・添削	平成22年4月 ～現在に至る	ハーベスト医療福祉専門学校　理学療法学科 「生理学実習」 血圧・スパイロメータ・筋電図・心電図・コキガス分析装置・感覚検査・バイオフィードバック・誘発電位などを用いた実験の指導と、実験レポートの作成法を指導。1グループ4-5名のグループに分かれ実験し、その内容をレポートとして提出させた。レポートについては個別に添削をおこない、授業中盤で実例を交えながらレポート作成時の注意点を再度説明した。
2)プレゼンテーションの導入、小テスト形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「内部障害学Ⅱ」 内臓疾患、内分泌・代謝疾患の講義を担当。該当する箇所について定期試験を作成・実施した。テスト対策として国家試験の問題を改変して小テストを作成・実施し、理解力向上の一助とした。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「理学療法総合演習」 国家試験対策として、「内分泌・代謝疾患」、「バイオメカニクス」「統計学・研究法」の分野に対し講義を実施。小テスト形式で添削をおこない回答力の向上を図った。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　教養科目「現実をみるG」 他学部の学生を対象とした、健康科学関連の教養科目を担当。「痛みを知り痛みと向き合う」「女性が抱える痛みについて」「リハビリテーションの実際（脳卒中）」の3回を担当し、講義をおこなった。授業の終わりには理解確認のための小テストをこない、成績評価の一部とした。
3)プレゼンテーションの導入、小テスト形式、実践・体験型学習・実技試験	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「筋骨格理学療法学Ⅰ」 「下肢の骨折（1）」、「脊椎疾患（1）」を担当。疾患の基礎知識の復讐として講義を行った後、実技形式でストレッチ・筋力増強運動の手技や各種治療機器の使用方法について説明、学生どうしで模倣・練習させ、適宜個別指導によって指導した。その次の授業では小テストをおこない、理解力向上の一助とした。定期考査では筆記試験の他、実技試験も実施した。

事項	年月日	概　　要
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動機能障害診断学Ⅰ」 整形外科学的検査手技についての説明と、実技指導をおこなった。模擬患者を想定し、どのような検査が適当かを考えさせるグループワークもおこなった。定期考査として実技試験をおこなった。
4）模擬患者を用いた実習、ビデオ撮影による振り返り、実践・体験型学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「理学療法計画論」 「中枢疾患に対する理学療法評価」の実習を担当。1グループ3名で模擬患者の理学療法評価をおこない、症例レポートを作成させる。レポートは個別で添削をおこなう。その後発表レジュメを作成させ、5～6名のグループで症例発表をさせる。最後に、模擬患者評価の模様をビデオ撮影したものを編集し、患者に対応する上での危険な場面、失礼に値する行動がなかったかを指摘、講義を行った。
5）実験形式、マニュアルによる自己学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動学演習」 「筋力と関節角度や角速度の関係」に関する実習項目を担当した。バイオデックスを用いた筋力の測定実習に対してレポートを作成させた。実習は機器の使用方法を記載したマニュアルを読ませることで、学生自身で問題を解決させながら進めるよう実施した。レポートはグループにつき１つを提出するようにし、添削もグループ単位でおこなった。実習の終わりには、実験した内容についての発表会を行わせた。
6)動物を用いた実験、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「人体の生理機能演習Ⅱ」（補助） ウシガエルを用いた動物実験で、機器の使用法や結果の解釈の仕方などを学生に指導した。実験は1グループ５～６名でおこない、事前学習によって実験の結果予測したものを発表させ、入念に実験方法を学習させてから解剖を行わせた。
7)ゼミ活動	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」 1年次学生を対象としたゼミで、勉強の仕方やプレゼンテーションのまとめ方など、学生の基礎スキル向上を目的とした指導をおこなった。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「卒業研究」 配属された学生（3年・4年次生）に対して、研究計画の立て方や、データを解釈し論文にまとめるまでの過程を指導。ゼミ内での論文抄読や予備実験、実験スケジュールの作成など行わせた。指導した卒論テーマは「運動誘発性鎮痛と身体感覚不一致感の関連についての研究」、「4肢位のマンスリービクス実施による月経随伴症状軽減効果の違いについての研究」であった。
２　作成した教科書，教材 なし		

3　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 「勉強会・研修会」		
1) Human brain mechanisms of muscle pain: Combining fMRI study and Psychophysics （筋痛に対するヒトの脳内機構：ｆMRI研究と心理物理学を組み合わせた研究）	平成23年2月	大阪大学グローバルCOEプログラム「認知脳理解に基づく機械工学創成」第29回創成塾
2)「痛みの研究とリハビリテーション：ヒトの痛みをどう捉え、検証するか」	平成24年11月	兵庫県理学療法士協会 中播磨・西播磨ブロック合同研修会
3)「高齢者の慢性疼痛管理」	平成29年12月	奈良学園大学公開講座 登美ヶ丘カレッジ 「最新の痛みのリハビリテーション　～痛みの病態に応じたケアを考える～」
4)「臨床実習指導と臨床研究指導」	平成21年4月 ～平成25年1月	石川病院の理学療法士として、理学療法士養成校からの実習生を受け入れ、臨床実習教育に従事した。主に神戸大学、吉備国際大学、大阪リハビリテーション学院の実習生を指導した.また、研究面では院内理学療法士の研究・症例発表において指導をおこない、若手スタッフの研究発表の奨励に努めた。
5　その他 大阪大学 グローバルCOEプログラム 「認知脳理解に基づく機械工学創成」　リサーチ・アシスタント	平成22年4月 ～平成26年3月	大阪大学の実施するGCOEプログラムで、医学・工学・人間科学の学生・研究者が集まり、学際的な融合研究の創成を目指すプログラムでRAとなり、セミナーやシンポジウムで討論や発表をおこなった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 理学療法士免許取得	平成16年4月	登録番号:第48466
修士号（医科学）	平成21年3月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程　第439号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者につ 石川病院　理学療法士	平成16年3月 ～平成25年1月	回復期リハビリテーション病棟、一般病棟、療養病棟、外来部門の患者に対して理学療法を実施。術後含めた骨関節疾患、および脳血疾患や神経難病含めた症例を一日につき6～10名ほど担当。また、院内委員会や部門内係の業務も実施。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部5章～８章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5版・全180頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘， 前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分： 「第7章　痛みの心理と情動」 P48－P57を単著 痛みに深く関わる「心理」として不安・抑うつ，「情動」として社会的痛み，痛みの恐怖について解説。非侵襲的脳機能計測の発達により，目に見えない心を情動として観察し，その働きを推察することが少しずつ可能になってきている。情動から心理への因果関係や，それらのベースとなる共通の神経機構を理解することは，痛みの心理的・情動的側面を分析するうえでの一助となる。
2）高齢者のための疼痛ケア	共著	平成30年3月	三恵社	科学研究費助成事業「高齢者入居施設における疼痛管理教育プログラムの開発」の一環として、高齢者入居施設に勤務する看護職対象の疼痛管理教育テキストを作成した。「高齢者入居施設に勤務する看護職が受講したいと考えている教育内容」のアンケートに基づき、内容を構成した。 B5版・全33頁 編者：田中和奈 共著者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗，前田吉樹，高橋晶 本人担当部分： 「第１章 高齢者の痛みとその特徴」 P2-P10を共著 痛みの定義や種類の説明、さらには高齢者の抱える疼痛の問題点について概説した。 共著者：田中和奈，百瀬由美子，高橋晶，前田吉樹 「第３章　理学療法的観点からの疼痛管理」 P25-27を単著 理学療法士の立場から、高齢者の痛みのマネジメントに重要な点と、効果的な運動療法の実施方法を中心に解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1）立位リーチ動作反復による学習の汎化について：三次元動作解析器を用いた検討 （修士論文） （査読付）	共著	平成21年1月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程	臨床上頻繁に用いられるファンクショナルリーチテストにおいて、リーチ動作練習の反復によって動作の汎化がおこるかどうかを三次元動作解析装置を用いて検証した。中枢におけるリーチ動作の運動プログラムは、手の前後方向の速度がピークに達したときに終了するとされているが、リーチ動作練習は手のピーク速度がより早期に出現するようにファンクショナルリーチ動作に対して汎化した。 （A4 12ページ） 共著者：◎前田吉樹，安藤啓司 担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文の執筆
2）低侵襲腰椎後方椎体間固定術後1年の能力障害を予測する術前および術後早期の心理的要因の検討 （査読付）	共著	平成29年9月	日本運動器疼痛学会誌 No.9(2)，2017 pp308-313	腰椎後方椎体間固定術は脊柱管狭窄症や腰椎すべり症に対して有効である一方、改善の乏しい症例も報告されている。そこで術前・術後の破局的思考・運動恐怖とが術後の能力障害に与える影響を検証した。結果、術前ではなく術後早期の運動恐怖が術後の長期的な能力障害に影響を及ぼすことが明らかとなった。 共著者：◎田村典子，西上智彦，前田吉樹，加賀威浩，和田治，田所浩 担当部分：論文の執筆、データの解析
3）局所皮下麻酔と圧刺激による筋の痛みの心理物理学 （査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5，2018 pp19-25	麻酔薬の皮下注により皮膚の痛みを除去し、筋のみに持続的な機械的痛み刺激を与える方法を用いて、被験者の主観的な痛みの強さと刺激圧と関係性を回帰モデルにあてはめた。健常成人13名を対象とし全員に「麻酔なし」と「麻酔あり」条件で、デジタル圧痛計による圧刺激を与え、痛みの強さをNRSで報告させた。結果、麻酔の有無にかかわらず線形モデルよりも非線形モデルの方が決定係数が高くなった。先行研究では熱刺激による皮膚の痛みの回帰モデルがべき関数で表されることが報告されているが、圧刺激による筋の痛みも同様に回帰できることを示している。 共著者：◎前田吉樹，大城宜哲，小山哲男，植松弘進，柴田政彦 担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) Verbal instruction can induce extinction of fear of movement-related pain （教示は運動への痛み関連恐怖の消去を促す） （査読付） （博士論文）	共著	平成30年4月	The Journal of Pain, Epub ahead of print	「動かしたら痛い」という患者の恐怖（運動恐怖）が形成される過程と、その治療に繋がる心理過程を実験的に検証した基礎研究。運動時に痛み刺激が提示される過程を繰り返すことによって運動恐怖を形成し（恐怖条件付け）、その後の条件付けの消去の手続き（痛み刺激が伴わない運動の反復）によって運動恐怖が消失するかを検証した。さらに患者を安心させる声かけのように「動かしても痛み刺激がこない」という教示が条件付けの消去に影響するかを併せて検証した。結果、教示を与えて消去の手続きをおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、教示を与えなかった群は皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までと、自身の研究テーマである「運動と痛みの恐怖条件付け」の集大成として発表した。 （共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yuji Fujino, Masahiko Shibata） 担当部分: 研究計画、データ測定・解析、論文の執筆
（その他） 「総説」				
1) 痛みの恐怖条件付け （筆頭著者）	共著	平成26年11月	Monthly Book Medical Rehabilitation No. 177 （11月号）pp25～30	痛みの慢性化には、「動かすと痛い」という一種の恐怖条件付けが重要な基礎として機能する。この考え方を支持する臨床研究、基礎研究を紹介しながら、恐怖を中心とした痛みの認知面の変化に基づき、痛みの慢性化の病態とその治療の考え方を概説している。 共著者：前田吉樹, 柴田政彦 担当部分：全体の構成、本文執筆
2) 慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成26年12月	理学療法学 No. 41(8) pp699～705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 共著者：柴田政彦, 山田恵子, 前田吉樹, 安達友紀, 西上智彦, 寒重之 担当部分：全体の構成、本文執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」 国際学会				
1) Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証）	—	平成26年10月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Buenos Aires. 2014.10.6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 共同発表者：◎Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 担当部分：研究計画、研究総括 ポスター発表
2) Psychologigal characteristics related to the acquisition and extention of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	—	平成28年9月	16th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Yokohama, 2016.9.26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：◎Takatoshi Masaki, Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 担当部分：研究計画、データ測定 ポスター発表
国内学会				
1) 道順イメージングにおける脳賦活部位 fMRIによる検討	—	平成22年3月	第11回 兵庫県リハビリテーションケア研究大会 （兵庫県）	右頭頂葉の障害は地誌見当識障害の責任病巣とされているが、実際に道順をイメージしたときに活動するのかは明らかでない。本研究では、健常成人によく知っている場所から別の場所への道順をイメージさせ、その際の脳活動をfMRIを用いて調べた。結果、道順イメージ中は右の頭頂下小葉や頭頂-後頭連合野の活動を示し、道順の想起に右頭頂葉が関与するという仮説を支持した。 共同発表者：◎間嶋亜由美,三角幸子，馬瀬麗子，徳沢勝也,前田吉樹，柳田真希,大城宜哲 担当部分：データ収集，データ解析 （口述発表）
2) 動的な痛みと静的な痛みの脳機能画像:二次体性感覚野の機能分布について	—	平成22年7月	日本ペインクリニック学会 第44回大会 （京都府）	動く痛みと動かない痛みの脳内処理機構をfMRIを用いて実験的に検証した。トゲのついたローラーで足を刺激したときと、トゲのついたプレートで刺激したときの脳活動を比較すると、同じ痛みの強度でも前者の方が広範な活動を示した。特に、二次体性感覚野はローラー刺激のみ下内側部の活動を認め、当部位の機能分布を反映していると考えられた。 共同発表者：◎前田吉樹，岩倉健夫，大城宜哲，柴田政彦 担当部分：データ解析，抄録執筆 （ポスター発表）
3) 左右逆転めがねとfMRIで幻視を視る	—	平成22年7月	日本ペインクリニック学会 第44回大会 （京都府）	左右の世界が逆転して見える「逆転めがね」を幻視痛患者にかけ、幻視を動かさせたときの脳活動を検証した。幻視を動かしたときに対応する運動野に信号変化がみられ、同側の頭頂野にも強い信号がみられた。後に後根進入部遮断術によって幻視痛が改善したあとは、頭頂野の信号変化は消失していた。頭頂葉が幻視痛の機序に何らかの役割をもつ可能性が示唆された。 共同発表者：◎大城宜哲,宮内哲，前田吉樹，柴田政彦 担当部分:資料収集 （ポスター発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）局所皮下麻酔と持続的な圧刺激によって誘発される筋の痛みの心理物理学	—	平成23年7月	第33回日本疼痛学会（愛媛県）	機械的な圧刺激で生じる筋の痛みは、皮膚の痛みとの区別が困難である。そこで麻酔薬の皮下注入によって筋だけに圧刺激を与える方法を用いて、与える圧と筋の痛みの強さの関係を心理物理学的手法でモデル化した。結果、皮膚の麻酔の有無に関わらず、圧と痛みの強さの関係は線形回帰できることがわかった。 共同発表者：◎前田吉樹，植松弘進，大城宜哲，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
5）慢性期失語症患者の訓練経過 当院外来失語症患者を対象に	—	平成24月3月	第13回兵庫県リハビリテーションケア研究大会（兵庫県）	発症から半年以上経過した脳卒中後の失語症患者を対象に、外来言語療法の訓練効果について検討した。SLTAの「聞く」項目と「話す」項目に分けて解析した平均1年程度の通院の結果、いずれの項目も有意に増加し、慢性期における言語訓練の必要性を支持する結果となった。 共同発表者：◎溝口仁，金山ひとみ,前田吉樹 担当部分：データ解析，抄録執筆 （口述発表）
6）当院回復期病棟における摂食嚥下障害患者の動向	—	平成24年8月	第17・18回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会（北海道）	摂食嚥下機能が自宅復帰率に与える影響を検証した。FIMと食形態を独立変数とした名義ロジスティック回帰の結果、食形態は有意な変数として採択されなかった。これは摂食嚥下機能が低いまま自宅退院している患者が少なからず存在することを示唆しており、今後は外来や訪問におけるフォローアップを積極的におこなう必要がある。 共同発表者：◎前田佳恵，徳沢勝也，前田吉樹担当部分：データ解析，抄録執筆 （ポスター発表）
7）Conditioning of fear to voluntary movement paired with painful heat stimulus: Experimental verification of fear avoidance model using skin potential response 運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証	—	平成24年11月	第42回日本臨床神経生理学会学術大会（東京都）	運動と痛みの恐怖が結びつく「条件付け」を心理実験の手続きを用いて再現した。手関節の運動をおこなうと痛み刺激が提示されるシステムを構築し、運動に結びつけられた恐怖を皮膚電気活動によって評価した。結果、痛み刺激を伴わない運動でも、痛み刺激がある場合と同程度の皮膚電気活動を認め、運動に痛みの恐怖が条件付けられることを示した。 共同発表者：◎前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （ポスター発表）
8）皮膚電位反応を用いた運動と痛みの恐怖条件付けとその消去の検証	—	平成25年12月	第6回日本運動器疼痛学会（兵庫県）	恐怖条件付けによって結びついた運動と痛みの恐怖を、条件付けの消去によって軽減できるかを実験的に検証した。消去の手続きによって運動に痛み刺激が伴わないことを学習すると、恐怖を反映して出現する皮膚電気活動が減少することを示した。しかし全体としては最後まで皮膚電気活動が出現し続ける傾向にあり、運動に結びついた痛みの恐怖が容易には取り去ることができないことを示唆した。 共同発表者：◎前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，圓尾知之，齋藤洋一，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9）教示は運動に伴う痛みの恐怖条件付けの消去に強く影響する	—	平成26年6月	第36回日本疼痛学会（大阪府）	患者を安心させる教示の有効性が条件付けの消去に基づくものかを検証するために、「運動に結びついた痛みの恐怖」の消去に「動かしても刺激がこない」という教示が影響するかを実験的に検証した。結果、教示と経験による消去をおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、経験だけで消去をおこなった群は最後まで皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。 共同発表者：◎前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，中江文，Ben Seymour，柏岡秀紀，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
10）運動への恐怖条件付けに関連する心理尺度	—	平成27年11月	第8回 日本運動器疼痛学会（愛知県）	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：◎柾木隆寿,前田吉樹，寒重之，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定 （口述発表）
11）肩甲下筋テスト時の肩関節周囲筋の筋活動の検討	—	平成28年11月	第56回 近畿理学療法学術大会（和歌山県）	肩甲下筋のテストであるLift off testとしてBelly press testとBelly off signが挙げられる。これら二つのテストの肩関節周囲筋の筋活動の違いを筋電図を用いて明らかにすることを目的とした。結果、BPはBOに比べ大胸筋、大円筋の働きが抑えられ肩甲下筋、三角筋の働きが大きくなることがわかった。 共同発表者：◎吉村拓実、春名匡史、立花 孝、土山耕南、西川 仁史、前田吉樹 担当部分：研究計画、準備 （口述発表）
依頼原稿				
1）「プラセボ効果とはどのようなものですか？」	—	平成26年10月	Locomotive Pain Frontier vol. 3 (2) pp42～43	プラセボ効果は、医学研究、とりわけ試薬の研究において本来の治療効果とは異なる「取り去るべき」ものとして捉えられてきた。しかしながら、近年痛みの臨床においてはプラセボ効果も治療の一つとして取り入れようという流れがある。それらプラセボ効果に関する認識の変遷を、具体的な研究報告とともに解説した。 （2頁） （分担執筆者：前田吉樹,柴田政彦）
研究助成金				
1）日本損害保険協会　交通事故医療特定課題研究助成		平成23年～平成25年	日本損害保険協会	研究題名：③新しい運動療法の開発： 脳機能画像を応用し、外傷後の「痛みの慢性化」に対して有効な運動療法を開発する 【平成23年度～25年度】 研究助成金：5,000千円 共同研究者：柴田政彦，寒重行，前田吉樹，大城宜哲，中江文
2）奈良学園大学保健医療学部共同研究費		平成29年度	奈良学園大学	研究題名：痛みと運動知覚の恐怖条件付け研究 【平成29年度採択課題】 研究助成金：500千円 共同研究者：前田吉樹，辻下守弘，守本とも子